魔法少女リリカルなのは外典　- 幻影の進む路 -

綾薙瑞樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは外典　－幻影の進む路－

【Ｎコード】
Ｎ０４３６Ｏ

【作者名】
綾薙瑞樹

【あらすじ】
カミサマに頼まれてちょっと異世界にイレギュラーを倒す為にとある世界に飛ばされた。
神の力を手に入れてイレギュラーを倒すのだ。そして幻影は行く路を示していく。
１１／２０内部騒乱編開始。原作ブレイクしました？

プロローグ

「ここ、どこだよ」

そう、俺は確か寝ていたはずだ。自分の部屋で遅い時間に眠りについた、はずだ。

「あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は寝ていたと思ったら、いつの間にか変な真っ白い世界にいた』

。

な…何を言っているのかわからねーと思うが、（ｒｙ

だけど今いるのは真っ白い世界。上も下も横も真っ白。自分が立ってる場所すらちゃんと把握できてない現状。

無音の世界。通常なら気が狂いそうなくらいだが何のことは無い。

『あ、目覚めた？おーい。起きた？』

あぁそうか。これは夢だ。んじゃぁ、なんてことはないな。

『無視！？シカトっすか？！』

なんだ・・・さっきから空耳が。耳をほじったり叩いてみたりしてみる。

『いや違うから！此処だよ此処！』

良く目を凝らして見ると目の前の白い世界に歪みが走る。

『やっと僕を見つけてくれたね。やぁ、はじめまして。』

「・・・誰だ？」

『誰だ、ってのはまたご挨拶だね。僕は君たちの世界で言うところの神に当たる存在だよ。』

――――――なんだって？今なんていったんだこいつ。
え？なに？夢の中で更に夢を見てるのか。器用だなぁ俺ってば。

『違うからね。ここは僕の世界。ちょっと困った事があって君を呼んだんだ。僕に近い周波数を持つ君を。』
「なるほど。電波か。でも俺そっちの補完は出来てないんだよ。」
『いきなりで頭が理解できてないのはわかるけど、もうちょっと前向きに理解してほしいな？』

歪みが一層に揺れ動く。やがて其処には子供くらいの背丈の男の子が現れる。
身長差があるので視線を下に下ろす。

『これで理解できるかな？改めてこんにちは。君に頼みたいことがあって呼んだんだ』
「・・・・・手短に頼む。」

もう俺の頭は少しばかり混乱してきた。パニック妖精も真っ青だ。
まぁ・・・・話を聞こう。状況打破にはまず情報戦だ。

『うん。実は困ったことが起きてね。君に助けてもらいたい。具体的に言うと一回死んで別の世界で生まれ変わってほしいんだ。』

は？今何てった？一回死ぬって。俺まだ成人式いってないんだぜ？

『その際に君には好きな力を与えてあげる。そうじゃないときっと苦労するよ。頭に描いたものをそのまま力にしてあげる。』

「力？」
『そう。とある世界に行って、イレギュラー掃除。どうだい、面白そうだろう？』
え？なにいってんｄ（ｒｙ
つまりはあれか。最近よくある介入ってやつか。（ありません）
まぁ・・・のんびりだらだらと人生続けるよりは面白そうか。でもどこの世界にいくんだろ。
「なぁ、まずどの世界に行くのか教えてくれ。でないとその力ってやつも持ち腐れになりかねん。最悪必要ない力になるかもしれないし。」
『あぁ、そうだったね。折角あげた力もその世界じゃ弱いなんてこともあるだろうから。
いってもらうのはリリカルなのはの世界だよ。』
「え？マジデ？」
思わず声が出た。何いってんのこの子供とか思ったけどまぁ、夢の中だし話を合わせよう。
『あ、頭に思い描けば僕が出来るかどうか判断してあげるよ。大抵のものは持っていけるけど。』
「んじゃぁ・・・そうだな。」
俺は頭の中で色々なアニメやら漫画の能力を頭に思い浮かべる。どうせ夢なんだから、とかなりとんでもないものも詰め込む。
こういうとき自分の知識が役に立つとは思いもよらないよなぁ。
みんなも知識は大切にね♪
結構使っていたいのあるなぁ。あれとあれとそれとこれと――――――

『身体能力とかはアッチの世界で最高ランクになってるけど、運はないから。』
「なんでさ？！」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・気分？』

おぉい。大丈夫か、このカミサマ。

『まぁ、能力はおｋだね。デバイスはどうする？一応必要だろうから準備してあげるよ。魔改造だけど。』
「何個でもいいのか？」
『いいよー。面白そうならなんでもおｋだ。』

いきなりフランクになったな。そうだな・・・じゃぁちょっと前に思いついたのを。
うん、これ卑怯だな。なんだこれ。原作破壊できるレベルじゃね？

『じゃぁ、設定したよ。でもデバイス４つって持ち過ぎだと僕でも思う。』
「うっせ。色々必要になりそうだしな。ほかのも可能なんだろ？」
『まぁね。僕に不可能は無いから。普段は【後ろ】にでも仕舞っておいていいだろうね』
「おｋ。」
『あとは見た目だけど僕の好みに変えさせてもらったよ。そのくらいいいよね。答えは聞いてない。』

口調うつっちまった。まぁいいけど――――――って今なんか聞き捨てなら無いこと口走った！？

『それじゃぁ、いってらっしゃい。あ、一応僕とはテレパシーみた

いなので繋がってるから。
　チャンネルを頭でイメージすればいつでも会話できるよ。遠慮して声をかけてね？』

そう言うとカミサマは自分の話が終われば右腕を横に払う。
すると俺の足元がずるりと波紋を作り――――一気に飲み込まれた。
なんか泥遊びしてる感覚に落ちながら俺は意識を手放した――――
――――

第一話　転生

気がつくと俺は芝生の上に寝ていた。
体中が痛いのは地面に直接寝転んでいたからか。
上半身だけを起き上がらせて頭を振る。すると抜けた芝生が頭から落ちた。

「いてぇ・・・・てか何処だ此処」

なんかさっきも言った様な気もするけどキニシナイ。
それが俺クオリティ。
まぁまずは今がいつなのかとあとは場所の確認か。
辺りを見渡してみればどうやら公園のようだ。まずは場所確認終了。
リリカルの世界って事は海鳴市だろうからそのどこかの公園だろう。
じゃぁあとは時間だ。どっかに新聞でも落ちてないか・・・・・・な？
そこで俺はある違和感を覚えた。なんか視線が低い・・・・・
そう思って自分の手を見ればやけに小さい。あれ？こんなに俺小さかったっけ？
良く見れば服も違う。

『やぁ。無事にいけたようだね。お疲れさん』
「神か。どうなってんだこれ。」
『うん。やっぱりそのままだと面白くないからさ。ちっちゃくなっちゃった（てへ♪）』

ちょっと待てえええええええええええええ！！？？？！？？
せめて最初に一言言えよ！言えＹＯ！

『まぁいいじゃん。そのほうがすんなり出会えるよ。怪しまれないし。なんなら捕まりたいの？マゾなの？死ぬの？』
「いや違うから！」
『ならいいんじゃない？あぁそうそう。時間だけど原作で言うＡ，Ｓの直前にしておいたよ』

フォローになってねぇ・・・しかしＡ，Ｓの直前ねぇ。
んじゃ、図書館にいったらあの子に会えるかな。まず俺が逢いたいし。
魔王とその嫁は特定の場所がわかるから後でもいいし。

『うんうん。やる気になってくれたみたいで何より。まぁ何も気にしないで動いちゃってくれて構わないからね。
好きに動いていいから。そのほうが楽しめそう。』
「俺はあんたの玩具かなにかか」
『そ♪』

うぉ、肯定したよ、このカミサマめ。まぁ、ここでじっとしてるのもなんだし動くか。

「んじゃ、勝手にやらせてもらうぞ。力のほうは大丈夫なんだな？」
『もち。人のいない場所で確認はしといた方が良いかも知れないけどね』
「わぁった」

それから俺はテレパシーを切った。
直前、なら。少しは時間がありそうだ。力の確認でもしてみるか。
行き当たりばったりで使うと後が怖いしな。ちゃんと制御できるならしないと、だし。
あれ、意外と俺ってちゃんと物事考えてる？

あとはちゃんと自分の姿も確認しないと。『前』のままで小さいままとか嫌すぐる。
どこか鏡のある場所まで、っと俺は移動する。

「・・・・・・うわぁ」

思わず俺は口から声が出てた。
だってそうだろ。鏡に映った俺の顔は某反逆の皇子の顔だった。
前髪が一箇所だけ白いのはなぜだかわからなかった。

「狙ってるだろ。」

呆れ声が漏れる。これで成長したらアレだぜ？
いや、不満はないよ！？寧ろいいのか？って聞いちゃうよ！
見た目と口調がなんか俺のイメージに合わないけどそれは慣れるだろ。
矯正するならするで後からでもいいし。
とりあえず、誰もいなくなる夜まで待つか。流石に誰かに見られたらやばいだろうし。
適当に街中ぶらついて夜遅くになったら公園に戻るか。

――――――――――――――――――――――――――――――――

夜だ。俺は町の中を歩いて道を覚えながらコンビニでおにぎりを買

いつつ腹を満たした。
そして今は公園の中央らへんにいる。
もちろん阻害認識の結界は起動済みだぜ？邪魔されるの嫌だもん。

「さて。いいかな」

俺は背後に手を伸ばすと空間の中に手を入れる。
ドプンッ、と音を鳴らして取り出されたのは一本の剣。

「まずはこれか。もらったデバイスのうちのひとつ。」

そう、欲が出て俺は４つのデバイスをもらった。コレはそのうちのひとつ。

「デバイス起動。マスター認証開始」

剣を目の前に浮かせ、俺はコードを紡ぐ。

「了解。デバイス起動。デバイス名「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」起動開始。次いでマスター認証開始します」

目の前で起動する約束された勝利の剣（エクスカリバー）が声を紡ぐ。

「マスター名、城戸綾人（きどあやと）」

「――――――認証不可。その固体名では登録できませんでした。この世界での名前が必要になります。再度マスター認証を」

なに？俺の名前が通らない？なぜだ！？
て、この世界の名前だと？一々考えるのめどいなぁ・・・・

「ん――――――じゃぁ、マスター名、ミラージュ＝ヴィジョン」
「マスター名ミラージュ＝ヴィジョン、登録完了。問おう――――――貴方が私のマスターか」
おぉ！なんかすごい嬉しい！
しかし、痛い。なんか心が痛い。うん。がんばって考えたのに。
「ここに契約は完了した。ユニゾンデバイスセイバー。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある」
「あぁ。よろしく頼む」
横向きにされた約束された勝利の剣（エクスカリバー）の上にホログラムでＳＤセイバーが表示された。
なんか感動した。
このまま約束された勝利の剣（エクスカリバー）を使っても闘えるけど・・・
「マスターとのユニゾン時における適合率は１００％でいけます。他の３つ共、です」
「了解だ。それとマスターってのはよしてくれ・・・・・・ミラでいい。そう呼んでくれ」
「了解した。ではミラ、と。あぁ、この名は呼びやすい」
暫く俺はセイバーとの剣術訓練と称して剣の特訓をした。

第一話　転生（後書き）

一日連投。
転生後の場所確認と容姿確認。
それとデバイスの一つを情報公開です。

誤字脱字などありましたらご報告ください。

第二話　ファーストコンタクト前編

さて、今俺は図書館の前にいる。
時間にして大体夕方。学校も終わる頃。
まぁ、目的の少女――はやて――は学校行ってないけどな！
図書館の中で待ち伏せだ。適当な本を手にしながら読みつつ時間を潰す。
時折感じる視線が痛い。確かに私服で歩くような時間じゃない時からいるけどさ。

と、時間潰ししてる間に本棚の向こうから車椅子の音が静かに聞こえる。
少し本の間から覗いてみると案の定。はやてだ。届かない本の棚に手を伸ばそうとしてる。
向こうの棚から視線を感じたけどいいや、手伝いにいくか。

「ん～～・・・」
「「これ（ですか）？」」

そう言いながら俺は一冊の本をとろうとすると隣から手が伸びてきた。
紺色の髪の少女・・・すずかだ。
同じ装丁の本をとり、はやてに見せる。

「はい。ありがとうございます」

笑顔でお礼を言うはやて。やべぇ、可愛い。
立ち話もなんだし、って事で席に移動しようということになった。

移動すれば俺たちは自己紹介を始める。

「そっかぁ。同い年なんだぁ」
「うん。時々ここで見かけてたんよ。あぁ、同い年くらいの子や、って」
「実は私も。えと、私。月村すずか」
「おれは城戸綾人」

すずかが自己紹介したのでついでに俺も自己紹介。

「すずかちゃん。綾人くん。八神はやていいます。ひらがなではやて。変な名前やろ」
「そんなことないよ。綺麗な名前だとおもう」
「あぁ、俺もそう思うよ」
「ありがとう」

三人で笑顔を向ける。静かで平和な日々だ。とりあえずこれで知り合いになれた。
あとは守護騎士たちか。大人しく話聞いてくれ・・・・・ないよな、きっと。
なんて考えているとすずかがはやてと一旦離れた。
・・・今は知り合うくらいでいい。下手に刺激したら大変だ。特に守護騎士。
あれ?俺守護騎士にも出会わないといけないのに何か危機感が。

少しして図書館の廊下を歩いてたらはやてと・・・あれはシャマルとその先にいるのはシグナムか。
駐車場で待ち合わせしてたらしく、合流すれば三人で通りのほうへと歩いていった。向こうは俺に気付かなかったようだ。
どうやらすずかとは離れたようだな。あっちはあっちで・・・な

のはたちと合流するのか？
さて・・・このまま行けばなのは襲撃が今夜辺りか。ちょっと顔出
してみるかな？

――――――――――――――――――――――――

―――――

綾人Ｓｉｄｅ

えー、此方城戸綾人です。
只今眼下にて魔王がいます。
ヴィータの誘導弾とディートリヒ・シュラークに挟まれとります。
まだ手は出しませんよ。ヴィータに手を出す気も無いし、なのフェ
イにも手を出す気はありません。
じゃぁなんで居るんだよ。とかツッコミはスルーします！まぁ、い
ざとなったら出すけど。
おぉ、派手な音出して吹っ飛んでるなぁ。ハリウッド顔負けじゃん。
阻害認識魔法かけてるから一応気づかれる事無いけど少し離れてい
ようか。
と、フェイトが出てきた。てことはどっかにアルフもいるな。

「へぇ。やるなぁ。スピードで翻弄してら」

右手で約束された勝利の剣（エクスカリバー）をだらん、と持ちながら戦闘を見てる。
風王結界（インビジブル・エア）で刀身を隠してある。

ＳＤセイバーは俺の左肩に居る。
バリアジャケットに着替えた俺はいつでも動けるように準備万端だ。
ちなみに某黒の騎士団のゼロの姿だ。仮面もつけてる。ただ、問題は身長がそのままだということ。

「中々の速度です。しかも迷いが無い」
「あぁ。ヴィータも多少は苦戦してるようだな」

もうちょっと経ったら手を出すか。って言ってる傍からバインドかかってんじゃんか。

「んじゃ、いくか。頼むぜ、セイバー」
「任されました。この剣にかけて勝利を」

頼もしいね。命を預けるにゃ充分すぎる。セイバーは約束された勝利（エクスカリバー）の剣の中へと消える。
ほぼ音速に近い速度で落下する俺。ヴィータの目の前まで降下。

「これで終わりだね・・・名前と出身世界。目的を教えてもらうよ・・・っ！？」
「ぐ、ぐぅぅぅぅ――――――っ！？」
「なんかやばいよ――――――フェイト！」

「俺も混ぜてもらおうか！」

俺、参上。あ、遠くでシグナムがとまってる。下にはザフィーラか。
うん、俺ってば邪魔者扱いだね。

「だ、誰！？」
「だが断る！」

フェイトがバルディッシュを向けてくる。それに対して俺は声をだして対応する。

「邪魔だったかな？」

振り向かずにヴィータに声をかける。

「誰だ手前ぇ！」

「やれやれ。助けてやったのにそれかよ・・・まぁ、あっちのはお前の仲間だろ。早くいけ」

意識はずっとフェイトに向けながら、ヴィータにかかったバインドを魔力で力任せにはずす。

「――――礼はいわねー。お前も邪魔すっとぶっとばすかんな！」

おぉ、こえー。ってシグナムのほうに行っちまったよ。まぁ、こっちはこっちでやるっきゃねぇか。

さて、きっと管理局が見てるな。さっさと終わらせて帰ろうぜ。

「退く気は――――あるか？管理局の嘱託」

「ありません・・・寧ろ、投降を希望します！」

やれやれ、そういやこの子もバトルジャンキーだっけ。

「仕方無い・・・我が名はゼロ！お相手しよう、管理局の嘱託魔導師よ！」

俺は声高々に名乗りを上げた。この結界の中に響き渡れと。

ヴィータSide

くっそー。いい所だったのに邪魔がはいっちまった。
しかもはやてに作ってもらった大事な帽子も傷つけられて。
あいつはぜってーぶっとばす。アイゼンとなら何だってぶっ壊すんだ！

「どうした、ヴィータ。油断でもしたか？」
「シグナムごめん。ちょっと油断した。これから逆転するところだったんだけどよ」
「そうか、それじは邪魔したな。すまない。だがあんまり無茶はするな。それと落し物だ」

シグナムが帽子を拾って傷を治してくれた。

「しかし、やつは何者だ。管理局の相手をしてるなら敵対戦力だろうが・・・・」
「んなこと知るかよ！邪魔するんならあいつも潰すだけだ！今までだってそうしてきたろーが！」

「我が名はゼロ！お相手しよう、管理局の嘱託魔導師よ！」

っと、なんだあいつ。名乗ったっぽいけど・・・・管理局に敵対すんのか。

「シグナム。あいつを囮に使ってリンカーコアぬけねーかな」
「そううまくいけばいいがな・・・シャマルが近くに居る。隙があれば出来るように念話で伝えておこう」

おっし。んじゃ、あのゼロとかいうやつもろともぶっ潰しちまうぜ。
ザフィーラはさっきからあっちの使い魔と闘い合ってる。
あたしとシグナムとであっちの魔導師とゼロってヤツを相手にするしかないか。
2対2。戦力的には充分。タイマンで負けるようなベルカの騎士はいねーってことを教えてやる！
・・・あれ？闇の書がねぇ。どこいったんだ、こんなときにっ！

フェイトＳｉｄｅ

「我が名はゼロ！お相手しよう、管理局の嘱託魔導師よ！」

目の前で仮面の人が名乗りました。右手に何か持ってる感じ。
不可視のデバイス、なのかな。どんなデバイスかがわからないのがちょっと怖い。
でもバルディッシュだって負けてないから！

「嘱託魔導師、フェイト＝テスタロッサ。参ります！」

私も仮面の人・・・ゼロさんに応えるように名乗りました。
後ろにはなのはがいる。大事な友達が傷ついてる。絶対に護るんだ！

「こないのか？それともこっちからいこうか？」
「ご心配なく！打ちぬけ――――――ＦＩＲＥ！！」

フォトンランサー起動。一気に弾き撃ちだします。
フォトンランサーは直線を走りながらゼロさんに向かっていきます。

「ほう・・・中々の魔力だ。だが――――――」

ゼロさんにフォトンランサーが直撃しました。爆風と煙で姿が見えなくなりましたが私はまだ警戒を続けています。
やがて煙が晴れていき、ゼロさんの姿がうっすらと見えてきました。
動きを封じれれば投降できればいいんです。が――――――私の思いは崩されました。

「どうした。それで全力か？今度は――――――此方からいくぞ！」

ゼロさんが一気に飛んできました。私よりはや――――――っ！？
咄嗟に前にバルディッシュで防御に回ります。

ガギィィンッ！

甲高い金属音と一緒にバルディッシュとゼロさんのデバイスが交差しました。
明らかに何かの武器の形状の類、としか判らない。
なんて重い。いくら空中だからってじりじりと押されていくっ・・・
・

「じっとしとけ。そうすりゃせいぜい軽傷ですませてやろう」
「負けません！」

私たちの作戦に気づかれないように私に意識を向けさせておかないと・・・・

ユーノとなのはを襲った子と闘ってる。

そのうしろに剣士が控えてる。アルフは――――――男の人の相手してくれてる。

私の役目は前線で戦うこと！退くことは・・・・・出来ない！！

「この一撃を抑えきるとは中々の技量・・・だが上を知れ」

ぐ、とゼロさんが押してきました。バルディッシュが少しずつですが傷ついていく。

「う、あぁっ！？」

ドガァァァンッ！！！！！

抑えきれずに私は吹き飛ばされてビルにぶつかってしまいました。

すぐ上にゼロさんが降りてきました。

「それ以上抵抗するなよ。するのなら覚悟を決めて掛かってくるのだな」

「だれがっ！」

ふらふらになりながらも私は立ち上がる。

「いい気迫だ。いいだろう。今一度つきあってやる。私はゼロ。そしてこいつはセイバー」

「よろしく、小さなメイガス」

ゼロさんの右手からホログラムで小さい子が現れるのが見えた。

金髪で青い服。銀の甲冑を着た、騎士。

「ミッドチルダ魔導師。時空管理局嘱託、フェイト＝テスタロッサ。この子はバルディッシュ」

私はバルディッシュを構えながらゼロさんと同じ高さまであわせます。

「いい名だ。だが――――――まだ高みを知らぬ幼き力よ。身の程を教えてやると同時に絶対不破の敗北を知れ」

ゾクリ、私の背筋に悪寒が走りました。確かに私の力は及ばないかもしれない。けど、一撃なら！

一撃だけでも届くなら、届けたい。あの日、私の友達が私にしてくれたように。

勝てなくても・・・・・ううん。勝つって信じてなきゃ勝てないんだって。

教えてくれたから。だから・・・護るよ。どんなになっても。

綾人Ｓｉｄｅ

む・・・気迫が変わったか。覚悟を決めたようだな。

てか、俺最初に手を出す気なかったんだけどなぁ。

なんでか思いっきり介入してるし。

まぁ、なのはがＳＬＢ打つ前に片付けたいな。結界とか壊される前に。

ま。撃っても対処は考えてあるんだよね。その為にあの魔眼をもらったわけだし。

「ほら、がんばれ。そんなへなちょこ当たる気にもならないぞ！」

バルディッシュを掲げながら掛かってくるフェイト。
必死な顔でなのはを護ろうとしてるけど、今はまだなのはに手を出す気は無いよ。
約束された勝利の剣（エクスカリバー）で一合、五合、十合と互いのデバイスを合わせる。
その度に衝撃が周囲に走りぬける。よくみたらボロボロじゃないか、バルディッシュ。
それでも構わないとか壊れちゃうぞ。

「ほら、ちゃんと腰を入れろ。相棒がボロボロだぞ。しっかり打ち込んで来い！」
「くぅ、このっ！」

横薙ぎにすれば腹で受け、斬りかかれば負けずに斬り結び、突けば払われる。
と繰り返して段々なのはの位置から離されていく。
・・・・あれ？上手いことやられてんじゃね？

「いいぞ。だがまだ甘い」
「っ！？」

ぎゅるんっ！と円を描いて切払う。防御しても押し込んじゃうぞ。
案の定、フェイトはバルディッシュで防御したけど押されて吹き飛んでった。
他は・・・下ではアルフとザフィーラが戦ってるなぁ。あっちじ

ゃユーノとヴィータが闘ってる。
シグナムはヴィータの戦闘を見ながらこっちの戦闘も見てる。
隙あれば俺も巻き込んで闘う気か。
とりあえず――――

「フェイト。おまえさぁ、スピード型なんだから行動力で撹乱がデフォだろ。
敵を翻弄させながら一撃を放つってほうがいいんじゃないか？」

吹き飛んだ先、フェイトがいる場所に向かって説明する。
なにか言いたそうだったがこれでフェイトへの介入は終了。
あとはなのはの動きを見ながら状況を収めていくか。

第二話　ファーストコンタクト前編（後書き）

作「という感じであとがきです。今回はこういう手法にしてみました」

綾「・・・・・・・まぁいいけどさ」

作「で、三人娘とのファーストコンタクトです。こんなに長くなるとは思いませんでした。しかも前編。」

綾「なぁ。なんか日常のほうがおまけみたいに短いんだが？」

作「ん？まぁ、戦闘シーンがこんなに長くなるとは書き始めも思わなかったさ」

綾「だろうなぁ」

作「とまれ、まだ続きます。もう少しお付き合いください」

綾「俺の大☆活☆躍がみれるわけだな」

作「どうなるかは知りません！乞うご期待！」

第三話　ファーストコンタクト後編

綾人Ｓｉｄｅ

さて、フェイトはもうこっちにこなさそうだな。さっきから警戒しながら距離を取ってる。
向こうから仕掛ける気はなさそうだ。今はそれでいい。
なのはを護るような距離。気迫は中々に篭められている。
それとさっきからシグナムがこっち見てる。視線がとっても痛い。
俺はシグナムの近くまで向かう。

「手を出すほどのものでもなかった、かな？」
「馴れ馴れしく口を叩くな。貴様のことが判らぬ以上、邪魔をするなら容赦はせん」

おぉ・・・・レヴァンティンに薬莢かましてやる気だよ！？

「まずは話し合いというものを持て。それから敵対するなり決めろ。それだとずっと敵を作っていくだけだぞ。主はそれを望んでいるのか？」
「・・・・貴様には関係ない」

訝しげに俺を睨んでる。やれやれ、堅物は健在か。原作通りだな・・・どうするか。
出来るならこの事件は穏便にいかせたいんだけど。
まぁ、管理局に組するくらいならこっちを選ぶよな。

「とりあえず此処を出る事を薦める。リンカーコアは抜いたか？それなら結界をでてから話し合いの場を希望する」

「――――――――――」

あれ。黙っちゃったよ。しょうがない。もうちょっと言ってみるか。

「信用はなさそうだな。だが早くしないとあっちの白い魔導師が結界をぶち抜くぞ」

「！！？」

くい、となのはを指差せば既にレイジングハートと一緒に全力全開モードに入りつつあった。

桃色の魔力光を放ちながら魔法陣に周囲の魔力が集まっていくのがわかる。

あれが――――――噂に名高い「星の輝き満ちる殲滅光（スターライトブレイカー）」。

あれに気づかないってのもどうかと思うぞ、俺は。

「アレのリンカーコアを抜いておけ。３０ページくらいは埋まるだろう」

「貴様――――――何者だ。どこまで知ってる」

「さて？知ってることは知ってるし知らないことは知らないな。ほら、時間はないぞ。じきに管理局も到着する」

「仮面を外さない、素顔をさらけ出せないヤツは信用ならない。下手に動いたら・・・斬る」

仮面被ってこんな事いってるとなんか猫姉妹みたいだ。激しく落ち込む。

でもシグナムは俺を警戒しながら念話を開始したみたいだ。だとすると相手はシャマルか。

どっちからも警戒されまくり。俺の居場所がないなー。

さてと。その間はどうするかな。

（ミラ。過剰な魔力が収束しています。が、貴方の能力でなら問題はありません）
（と、セイバーか・・・・俺、本当は手を出す予定じゃ無かったよな？）
（それはミラの運のなさに起因するかと。どうしますか？約束（エクス）された勝利の剣（カリバー）で対抗するも良し。
違う力を使うも良し。お任せします）
（あぁ。いくつか候補はある・・・・あれ、やってみるか）

俺は視界のスイッチをチェンジする。意識的に視界に入り込むのは死の色。
蒼と緑の深い色が瞳に篭る。お、シャマルが動いたか。ＳＬＢのカウントが乱れたぞ。
リンカーコアを抜きにいったな。それでも打ち抜こうとするあたり無茶しぃだなぁ。
撃つなら撃つで対処しないといけないか。
いや、結界を壊すなら壊すで壊してくれたほうが後が面倒じゃないからいいのか？
なのはだけじゃなくてフェイトからも取れればいいんだが・・・・
今は時期じゃない。
なら、別に撃たれてもいいか。ヴォルケンリッター逃がす手助けくらいはしてやるか。

「スターライト・・・・・・ブレイカー！！！！！」

と、撃ちやがったな魔王の砲撃。余波を食らわないくらいまで俺は離れる。
ヴォルケンズはなのはを止めようとしたけどフェイトたちに邪魔されてる。
ＳＬＢが撃たれた事によって結界が破壊された。てか、すげぇなあ

の砲撃。撃つ方も撃つ方だけど。
しかしこれで管理局に見つかるな。いいんだけどね。
お、三人とも高速移動で退却したな。俺も逃げないといけないかな。
少し上に視線を向ける。まだ魔眼は起動させたままだ。この眼が管理局が把握できるとは到底思えない。
ので、そのままでいる。フェイトたちはなのはのところにいるので俺まで気が回ってないようだ。
俺は口角をあげ笑みを浮かべる。仮面が邪魔で外に見えないけどな！
んじゃ、ま、あんまり長居しても危険だしな。とっとと消えますか。

「さらばだ。管理局の諸君」

俺はそういい残して背後にスキマを作り出し――――――吸い込まれるようにしてその場から消えた。

クロノＳｉｄｅ

結界が破壊されると共にアースラの探知映像が映し出された。
数名の魔導師と思われる者。これが今回の重要参考人だろう。
なのはが倒れていて・・・フェイトが傍らにいる。ユーノとアルフも一緒か。

「エイミィ、サーチャーは？」
「今やってるよ！逃げた四人は頑張って追うけど・・・・一人逃げないね？」

に居るエイミィがコンソールを叩きながら映像を見てる。

「なんだろうねクロノくん。あの仮面の人・・・・子？なのはちゃんたちと同じくらいの背丈だけど」
「わからない。でもあの場にいた以上は何かしら知ってるはずだ。出来れば話を聞きたい」
「うん。そうだね・・・・・・って、なにあれ！」

映像には背後のスキマに吸い込まれていく件の存在。
聞こえてきたのはただ一言。こちらが管理局だと知っての言葉。

「・・・どうおもう？」
「なんともいえない。ただ――――見たことがない魔法だ。彼も魔導師なのかがわからないけど・・・・
詳細を調べたい。お願いしていいか？」
「うん。わかったよ――――ごめん、しくじった・・・・クロノくん。あの四人のサーチャーは逃げられた」

仕方ない。僕はそう感じてしまった。映像の一つに映る一つに釘付けになってしまったのだから・・・・

「ロストロギア・・・闇の書」

ゴクリ。唾を飲む音がやけに頭に響く。嫌な予感しかしない。
かあさ・・・リンディ提督が指示をだすのを黙って聞いてるしかできなかった・・・・

綾人Ｓｉｄｅ

ふぅ。スキマから出ると其処は異世界でした♪
じゃない。さっきの戦闘場所から少し離れたビルの上に出た。
管理局、絶対俺に気づいたよなぁ。次からマークされるね！

「ミラ。近くの建物の上に先ほどの魔導師の魔力を探知しました。
いま視界とリンクさせます」
「ＯＫだ、セイバー。よろしく頼む」

魔眼を起動させたままだが、有視界にインポースされるのは魔力探知のスクリーン。
ちょっとだけ離れた場所だけど確かに魔力を持つのが固まってる。

「挨拶くらいはしておいたほうがよさそうだな。これからのためにも」
「やはり本格的に介入なさるので？」
「あぁ。はやてを悲しませるわけにもいかないだろ？それにどこでイレギュラーが出るか判らないし」
「おや・・・覚えておられたのですね」
「・・・なんか対応厳しくない？」
「気のせいですよ。さ、どうしますか？」
「あぁ、いくさ。ついてこい、セイバー」

セイバーをホログラム化から現界させて傍らへ。
右手を前に突き出し、引っ掛けるようにして空間を開く。
暗闇に瞳が蠢く空間。その中に二人で入り込む。

空間を切り裂き離れた場所に現れる。
目の前にはさっきまで戦闘していた三人と、もう一人いた。
急に空間を裂いて現れたモンだから目が皿のように見開いてる。

「先程ぶりか。無事逃げおおせたようで何より」

俺は静かに声を出せば、すぐ隣にセイバーが陣取る。
此方からの警戒の意味もあるし、なにより手札を見せておけばある程度は気も許してくれるだろうという考えだ。

「礼は言わない。いくら手伝ってもらったからとはいえ、貴様は信用ならんのでな」
「それで構わない。此方が好きでやったことだ」
「あたしはぜってー認めねー。素顔をだせねーやつとは話し合いなんかねー」

急にヴィータが割って入ってきた。
そんなにこの仮面だめか？結構気に入ってたのに。

「仕方が無いな。なら――――」

俺は一つため息をついてから仮面を外した。

「これでいいか？」
「「「・・・・・・・」」」

あれ？ザフィーラ以外黙っちゃったよ。なんだよ、折角ゼロ仮面はずしたのに。

「おい・・・どうした」

「あっ・・・あぁ。なんでもない／／／」
「えっ、えぇ・・・なんでもないです／／／」
「なっ、なんでもねぇーよ！／／／」
「そうか？ならいいが・・・・」

隣でセイバーが溜息ついてる。なんなんだよ。
少しの間があったあと、ヴォルケンズが目配せをしてからシグナムが一歩前に出る。
会話の代表としてなのだろう、此方もセイバーを下げて対峙する。

「で・・・貴様はいったい何者だ。目的は何だ」
「俺か。俺はミラージュ。そう呼んでくれ。どうやらその名前以外は使えなさそうなんでな」
「ではゼロと名乗ったのは？」
「管理局に名前をさらせと？それこそ酔狂だ」

ふん、と鼻を鳴らす。名前に限ってはセイバーとの認証のときに使えないといわれたから。
自分で考えておいて痛いけどね。仕方が無いんだこればっかりは。

「どちらで呼べばいい」
「ミラージュでいい。それがこの世界での名前になったからな」
「良く意味がわからんが・・・・・・では・・・ミラージュ。目的を言え。我等に害なすならば屠らねばならん」

殺気と闘気が入り混じった気配が包み込むが俺はソレを真正面から受け止める。
ここまでさせるとははやて、愛されてるな。

「言っただろう。お前たちの主を助けたいと。今のままでは救えん

ぞ」
「何を馬鹿な！」
「いいだろう、それなら真実を教えてやる。闇の書と呼ばれる夜天の書の真実を――――――」
俺は知ってることを全て話し出した。
過去、夜天の書と呼ばれてたこと。
はやてが主だと言う事を知ってること。
そのはやての体の不調の原因。
全て話せば場に沈黙が重く圧し掛かる。
「これが真実だ。お前たちのやり方でははやては救えない。寧ろ完成させてしまえば悪化をたどる一方だ」
「なら・・・どうすればいいというのだ！」
「そのために俺が居るんだよ。俺ならその改変されたプログラムをお前たちに影響なく修理することが出来る、はずだ」
「はずだ、って確かじゃねーのかよ」
途中でヴィータが入る。
「あぁ。何せまだやったことが無いことだ。予想値は高いのだがな。如何せん前例が無いものでね」
頭の中にいくつかの対処法は8割程度出来上がってる。あとは幾つかのピースをはめれば出来上がる。
それはこいつらが協力してくれれば、だが。
「本当に・・・主は無事に生きていけるのだな？」
「何度もそう言っている。俺には出来ないことはない」

静かに。夜の静寂に飲み込まれる声。四人ともが考え込んでしまった。
念話で会話してるみたいで少ししてシグナムが口を開いた。

「お前の力を借りる。いや、貸してほしい。それが我らの総意だ」
「確かに聞いた。なら、これからは俺の言うことを聞いてもらう事が多々あるとおもうがいいか？」
「それが主の為ならば」

よし。ヴォルケンズの協力を得た。信用、信頼、どちらもまだ希薄だけど、それでも前に進んだのは大きい。
これで少しは進めるな。はやてにも堂々と逢いに行けるぞ。
管理局のほうは暫く動けないだろうし、こっちはこっちで色々と動き始めるとするか。

第三話　ファーストコンタクト後編（後書き）

思ったより遅れてしまいましたが、第三話です。

書き始めの予定では綾人が暴れるはずだったのですが、こうなっちゃいました。

出来るだけ原作に沿っていくか、オリジナルでいくか迷うところです。

多少日が開くかもしれません。もしかしたらすぐかもしれません。

が、期待せずにお待ちください。

誤字脱字などありましたらご報告くださると嬉しい限りです。

第四話　特訓

さて。今俺は地球から離れて管理外世界にいる。
普通に地球で訓練となると魔力探査でばれる恐れがある。
なので遠めの管理外の世界を見つけて後ろのスキマを通って力の使い方などの訓練にきたわけだ。
少し小高い丘の上。見下ろせば崖。背後には森。
そして目の前には紅の槍と夫婦剣。それぞれにホログラムがついてる。

「さて、ではアーチャーにランサー。デバイス認証を順に行う。まずはランサーからだ」

紅の槍に魔力が通る。魔術回路から流れていく魔素が感じ取れた。

「了解だ、デバイス起動。デバイス名「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルグ）」起動開始。次いでマスター認証だ」
「マスター名、ミラージュ＝ヴィジョン」
「マスター名登録完了だ。我が槍に突き進めぬ道は無し。ユニゾンデバイスランサー。宜しく頼むぜ相棒」
「あぁ。宜しく頼む」

まずは刺し穿つ死棘（ゲイボルグ）の槍と契約を結ぶ。
デフォルメされたランサーがにやりと笑った。

「次はアーチャーだな」
「む、心得た」

俺は視線を夫婦剣――干将・莫耶――に視線を向けなおす。

今度は干将・莫耶に魔素を流す。

「デバイス起動。デバイス名干将(かんしょう)・莫耶(ばくや)起動開始。次いでマスター認証だぞ」

「マスター名ミラージュ＝ヴィジョン」

「マスター名登録完了した。我が弓は空を突き刺し決して外れる事無し。ユニゾンデバイスアーチャーだ。宜しく頼むマスター」

ランサーが近くに居るからか、皮肉に言い換える。

もちろんランサーはいい気はしていない。

これで三体のサーヴァントと契約を交わしたことになった。

もう一人は――――――まだ契約はしない。切り札たるなら見えず聞こえず触れず敵わずを貫くべきだと言ってアイツは消えた。

しかし戦力としては充分過ぎるほどに整っている。

あとは使い方を把握することだ。所持してるだけで使い方を知らないようでは意味が無い。

「セイバー。どうだ。客が来るまでの間の相手がいるようだ」

「はい。此方からも確認しました。どうやらこの世界の生物のようですが・・・」

「非殺傷設定。手加減しつつ訓練か・・・」

早速管理外世界にいってみれば、転移してきた崖の下に赤龍と青龍の群れ。まだ此方には気づいていない。

龍族が目の前にいる。しかも群れで。これを相手にするには中々に骨のある訓練になりそうだ。

「さて、セイバーは後で力を貸してくれ。ここ数日ありがとう」

「いえ、どういたしまして。ミラもここ数日で私の剣術を学び、本

当に強くなった。私はとても嬉しい」
「師匠がいいからだろう。俺は本当にいいカードを当てた」
「ふふ。お世辞ですか。でも嬉しいものですね」

目の前のセイバーが笑う。

「ミラ。他の三つのデバイス、ですが。この際使い慣れておくのがいいでしょう」
「ん、あぁ。そうだな。では、今回はサポートに回ってくれるか」
「はい。如何様にも指示を」
「周囲索敵演算開始。同時に結界陣展開」
「了解。その間はミラの援護ができません。演算能力が著しく消耗されるため約束された勝利の剣（エクスカリバー）は起動できなくなります。大丈夫ですか？」
「誰に言ってる。その為の訓練だろ？」

俺は口角を上げ笑う。セイバーはホログラム化して約束された勝利（エクスカリ）の剣（バー）に収納された。
流石にフ全てのデバイスをフル活動させるにはまだ難題がありそうだ。
なら、凡庸的に使用可能なあいつをまず呼ぼう。

「告げる（アンファング）。来い、干将・莫耶（かんしょう・ばくや）」

両手にイメージされる幻想。中華系大系を組む夫婦剣、干将・莫耶（かんしょう・ばくや）。
俺の二つ目のユニゾンデバイス。干将・莫耶（かんしょう・ばくや）が両手に投影されれば目の前に赤い服の騎士が現れる。
セイバーと同じ、ホログラム。

「ふむ。私を呼んだな、マスター。ふふ、やはり他の三人よりも私

の力が必要のようだな」
「あぁ、アーチャー。暫く頼むよ」
「承知した。では、どうする？このままいくか？それともユニゾンとやらを試すか？」
む、このまま干将・莫耶を使って倒すのもいいが、ユニゾンも試してみたいな。
「ではユニゾンしてみよう。その後の能力変化なども知り得たい」
「承知した」
にやりとアーチャーが笑う。同じ姿勢で向き合う。そして――――
静かに意識を繋げ
魔術回路を繋げ
感覚を共有し
記憶を共有し
「「ユニゾン・イン！」」
瞼をあけると視界が高くなっていた。見下ろすと其処には赤い服を

着た体躯。
両手には夫婦剣。体中にみなぎる魔力素。
「成功、か？」
『あぁ、順調に成功だ。ユニゾン率は９８％。神経回路に微量のずれが生じるが文句は無いだろう』
どうやら俺の姿はアーチャーになってるようだ。ユニゾンすると身体的な変化が起きるようだが、ほかの三人ともこうなるのか？
『恐らくなるだろうな。あぁ、言い忘れたがマスター。頭の中で思ってることは筒抜けだから気をつけるといい』
ククク、と馬鹿にしたような笑いが聞こえる。
あぁ、ユニゾンすると言うことは思考回路まで共有するのか。だったら下手なことは言えないし思えないな。
『で、だ。どうするのだ。あの龍相手にするのではないか？時間は有限だ。いや、マスターは無限の時間を有していたな』
「いや、確かに有限だよ。今はな。
此処と地球の時間が一緒というわけでもないだろうが夜天の書が覚醒する前に何とかしないといけないのは確かだか「ＧＵＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！」っと」
会話をしていると龍の群れの若そうな一匹が此方に気づいた。
龍の咆哮。空気を切り裂き振動し周囲を震えあげる。
どうやら邪魔者として認知されたようだ。

「いいだろう、来いや龍。この力、幻想種相手にどこまでやれるか試してくれる」
『私としては遅れを取らぬ位には戦ってほしいものだがね』
「皮肉るなよ、アーチャー。お前の能力、全てＯＫでいいんだよな？」
『無論だ』

最終確認完了。ならまずは干将（こいつ）・莫耶でやれるところまで！
ドズン、ドズンと大地を揺らして一匹が此方へとやってくる。
俺はそれを視界に留めながら両手の剣を強く握る。
ぶふぅ。口の中でブレスが溜まる。口端から漏れる熱と炎。そして炎粉。
火属性。流石に赤龍とだけある。見た目をそのままにした属性とは。
――――敵に弱点を教えてるようなものだ。

近づいてきた龍はアーチャーよりも高い。当然だ。
大体三倍程度の大きさ。密度も高そうだ。
ただ斬りつけるのも体格差できつそうだがやってやれないことはない。
しかしこれは・・・まるでモン○ンだな。

「ふっ！はっ！せぇぇいっ！」

吐息。吸息。リズムに合わせて足の腱を切断。
まずは切れ味の確認。それと体の動きの確認。
特に身体能力に関してはどこまで動けるのかが問題になってくる。
幻想した動きが出来ないようであるならば問題だ。

『イメージした動きはそのまま繋がる。今のマスターの身体能力は恐らくこの世界を・・・管理局の治める世界と管理外世界か？その概念上でも3人とおるまいよ』

「ずいぶん高く評価してくれるな、アーチャー。その確認作業だ。干将・莫耶の確認と合わせてるから最低限の魔力での運用だしな。

魔力を載せればこの程度の相手、大したことないだろう？」

『当然。マスターよ。我が力を振るう時は「常に最強の己を倒すイメージを。だろ？」・・・・む』

アーチャーならそういうだろう言葉を続けて思い浮かべる。

案の定アーチャーは決め台詞を取られた感になり、むすっとした声を漏らした。

幾度か切り込んでいたら腱がやたら物々しい重い音を立てて切れた。

此方には刃毀れは無い。龍はバランスを崩して横に倒れる。

『好機だぞマスター』

「わかってる！」

だらん、と持ち構えていた干将・莫耶を俺は投げつける。ブーメランのように回転し、空を翔る。

更に手には投影した干将・莫耶。そしてそれも更に投げた。

同じ行動を何度も行い、夫婦剣は惹かれ導かれる。幾重にも飛び交う剣は分厚い龍の皮膚を容易く切り刻む。

幾度か斬れば剣は割れて崩れた。

「アーチャー」

『魔力濃度が低いな。もう少し錬度をあげておけ』

ユニゾンしたアーチャーから激励叱咤が飛ぶ。

魔術回路をもう少し本数を上げて開く。ちなみに俺の魔術回路の数

は６５５３５本だ！
赤龍は痙攣を起こしながら、その動きを、鳴動を止めた。

『まぁ、経験値が低いのは否めないが、まぁまぁ及第点だ』
「辛らつだな。だが助かったことには違いないしな」

龍がおきてこないことを確認すると俺とアーチャーはユニゾンを解いた。
一匹が倒れた事に気が立ったのか、複数の龍が突進してくる。
本当はランサーともユニゾンしたいが複数同時相手には俺が対処しきれなそうなのでまだ後日ということで諦めてもらった。
すまないランサー、お前の陽の目はもう少しあとだ。
俺はランサーに説明をして納得してもらい、迫りくる龍の群れを回避し、ゲートを使って地球へと帰還する。
戻った時には既にあんな事が起きているとは思わずに――――――

第四話　特訓（後書き）

前作との間に時間がかかりました。
オリジナル展開マジ地獄。いやまぁ楽しかったんですけどね。
ランサーには悪いことをしました。今度、ね。今度！

総合ＰＶ１０００を突破してました。
皆様どうもありがとうございます。
頑張っていきますのでコレからも宜しくお願いします。

第五話　空牙

俺が管理外世界から海鳴市に戻ってくると足元で結界が張られていた。
しかも、ヴィータとザフィーラが管理局員に囲まれていた。
どうやら武装局員というヤツか。
さて、どうするか。ゆっくりしてると執務官まで出てくるだろうな。
ここで出てくるのといえば・・・・クロノか。
溜息混じりに頭の中で戦略を練る。
とはいっても俺が出るだけで戦局は左右されるんだろうけど。

「まぁ、協力するといった以上見逃せないよな」

俺はまた溜息をついてから結界の中へと入り込む為にスキマを通って入り込んだ。
武装隊は円陣を組みながらヴィータとザフィーラを囲んでいる。
その上にクロノ。もうきてたのかこいつ。なんというすばやいやつ。

「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！！」

クロノがＳ２Ｕに問いかけて魔法を放つ。幾つもの剣の魔素が乱れ墜ちる。
ザフィーラがそれを防御結界で防ぐが結構きつそうだ。
ヴィータが心配してる。
まだ俺は手を出さない。気配を極力殺し、手を出す場面を見極める。
ゆっくりと戦況をみればヴォルケンズのほうが芳しくない。
何よりも多勢に無勢。相変わらずの殲滅戦だな。仕方ない、次に動きがあれば・・・・・？
少し離れた場所に転送反応を感じる。其処には桃色の魔力と金色の

魔力を従えた魔導師の姿。

「なのは・・・フェイトか。そうか――――――セイバー」

俺は約束された勝利の剣(エクスカリバー)を右手に持ち、風王結界(インビジブル・エア)を発動させる。

どうやら管理局の技術でデバイス――レイジングハートとバルディッシュ――を治したのだろう。

そしてそのまますぐに戦陣投下か。

・・・・・本当に多勢に無勢だな。そろそろいくか。

一気に降下。姿を見せれば両陣営に驚きの声が上がる。

「おまっ、てめ「(静かにしろ。話を合わせろ)」・・・ちっ」

ヴィータが声をあげようとしたのを念話で抑える。

「(今この状況でどうにかできる手はあるとでもいうのか?)」

「(勿論だ。その為に来たのだからな。二人とも今回は私に話を合わせてもらおう)」

「(それで状況打破できるのなら、な・・・・)」

よし、これで二人が話を合わせてくれれば何とかなりそうだ。

「(不本意だろうが二人とも、俺をマスターとして接しろ。俺がマスターだと勘違いさせるんだ)」

「(なっ!?てめーマスターになるつもりかよ!)」

「(話は最後まで聞け。はやてがマスターとして見つかるよりは俺がマスターとして管理局に目をつけられたほうが都合がいいんだ)」

ジロ目でヴィータが俺を見てる。納得してはいないようだが渋々了解してくれた。
ザフィーラはまだ多少は理解してくれたようだ。

「お前ら、俺の命令は待機といったはずだが――――」
「すみません。油断をしておりました」

ザフィーラが話を合わせてくれた。此方としてはそのほうが助かる。

「まぁ仕方ない。こうなってしまった以上は、な」

じろ、と俺は管理局員たちを見遣る。武装隊はそれだけで身動ぎする。
睨んだだけで怯むとかどんだけ鍛えられてないんだ。

「さて、管理局の諸君。我々は此処から帰りたい訳だが・・・・通してはくれないかな？」
「断る！第一級危険指定ロストロギア・・・闇の書。君はその関連者か！？」
「どうだろうな。知りたければ調べてみろよ、ご自慢の技術でな」
「くっ！」

クロノが返答したので俺は会話を始める。その間に念話でなのはとフェイトのほうをヴィータたちに警戒させている。
意識はクロノに向けつつなのはたちを見ればバリアジャケットを着るところだった。
どうやらデバイスを強化してきたようだが・・・・あれは、カートリッジシステムか。
ヴィータやシグナムに負けたからって相手の利点を吸収するって考えは・・・あのデバイスたちらしいな。

「大人しく抵抗せずに投降しろ。でないと「でないと容赦はしない、か？管理局らしいな」なっ？！」」

話の途中で割り込めば開いた口が塞がらないでいる。

「お前たちはあっちの相手をしていろ。私はこの黒いヤツを抑えておく」

「「了解」」

渋々なヴィータとノリノリなザフィーラがなのはとフェイトのほうに向かっていった。

俺はクロノと対峙したまま動かない。

と・・・結界を誰か抜けてきたか。まぁあっちは任せておこう。

「闇の書は危険なものだ。管理局が管理して安全に封印するべきだ！」

「それは管理局の勝手な言い分だな。自分らが正義だとでも言いたいのか？だとしたら大した欺瞞だ」

「なにをっ！」

「お前たちは正義だというが、その相手も正義を振るうのだよ。いつの世も正義と正義がぶつかりあい、互いに相手が悪だという！」

俺は大仰なポーズをとりながら演説する。余裕があるのはクロノ如きに俺が後れを取るわけがない。

右腕は約束された勝利の剣を持ってるため、そんなには振れないが。

「話し合いは無駄だ。私達はお前達の言う事等わかるつもりはない」

ヴィータたちも戦闘をはじめたようだ。結界中を縦横無尽に動き回

る。

「この結界からは出られない！」
「なら俺やあいつはどうやって中に入ったのだろうな？自慢の結界も形無しじゃないのか？」

くくっ、と肩を揺らして仮面の下で嗤う。
どうやらさっき結界に入ってきたのはシグナムのようだ。
親指でクイ、と指してからクロノと向き合う。

「抵抗するならっ――――――実力でっ！！」
「お前程度の力で私を抑えられると思うなよ、小僧！」

いや、今は俺も見た目は小僧だけどさ。
クロノがＳ２Ｕを構える。

「スティンガースナイプ！！」

Ｓ２Ｕから幾重もの魔法が飛んでくる。まるで鞭のように襲い掛かってくる。
一つ一つが意志を持っているように蠢き、動き回る。

「ほう・・・中々な魔法だな――――――だがっ！！」

俺は約束された勝利の剣で一つ一つ打ち落とす。見えない何かで打ち落とされるという未曾有の恐怖。
徐々にクロノの顔に疲弊と焦りが募る。

「貴様！それが・・・その不可視のがデバイスか！？」
「さてな。剣かもしれないし槍かもしれない。斧かもしれないし、

もしかしたら弓かもしれないぞ？」

風王結界によって不可視になった約束された勝利の剣は魔力を纏って右手にある。
クロノはスティンガースナイプを消す。

「あまりつきあってる時間もない。何より我が力をお前達に見せる気も無い。だから――「スティンガーブレイド！フルエクスキューション！！」――――っ！！」

クロノの周りに無数の青白い光を放つ魔力の剣が生成される。
先程ヴィータ達を襲った魔法の強化版か。
話の途中でも一気にそれを打ち落としてきた。

「ちっ・・・熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！！」

左手を前に、いや、上に向ければ左手を中心として花弁が7枚生成された。
それはとても頑丈でクロノの魔法を受け付けない。
スティンガーブレイドを全部受けきって、熾天覆う七つの円環を消す。

「なんだ、今のは・・・全部防いだだと？！」
「教えぬよ。貴様などに」

クロノは疲弊して動くのもつらそうだ。表情によく出てる。顔に出すのはまだまだ甘いな、クロノ。
黒い残光を残してその場から後方へと少し離れた。戦闘範囲から外れた俺は他の戦闘を視界に留め。

「追ってきたら今度は容赦はしない。この結界内に居る管理局員全員を打ち落とす」

声に殺気をこめて言い放つ。いや、フルボッコしてもいいんだけどね。

「ぐ・・・」とか声を漏らして躊躇してるクロノを尻目に俺はここにいるもう一人の下へと向かう。

シャマルが闇の書・・・夜天の書を持ってきてるはずだ。

「（シャマル。近くに来てるか？話は聞いたか？）」

「（あ、はい。仮初めですが、貴方をマスターとして管理局に偽る、ですよね）」

「（上出来だ。あの三人は大丈夫そうだし、そっちにいく。座標を教えてくれ）」

念話を閉じればすぐに座標軸をオープンチャンネルで送ってきた。

秘匿チャンネルもあるが、そういうのも教えてないから仕方がない。

送られてきた座標に向かい俺はビルを飛び越えていく。

幾つかビルを飛び越えればシャマルの姿を捉えた。その近くに白い男も同時に捕らえた。

白い仮面の男。シャマルを狙ってるのか？

「（シャマル！上に敵だ！警戒しろ！）」

「（え？あ、ふぇぇぇ！？？！？）」

大声で念話で呼びかけるとおろおろと声が慌てふためくシャマル。

すぐに仮面の男（ＮＯＴ俺）に気づく。

「――――え。ま　ぐに集め　いい」

「――――え？」

会話が途切れ途切れだが聞こえてきた。シャマルが闇の書を開こうとする。

「この馬鹿が！使うんじゃない！」

思わず俺は叫んでいた。そこで仮面の男に気付かれた。
シャマルを挟んで対峙する。

「何者だ」
「闇の書のマスター」
「いや、お前は違う」

短い会話が淡々と続く。こいつ・・・・

「闇の書を使ってこの結界を壊して逃げろ」

仮面の男は言う。

「結界は私が壊す。それを使うんじゃない」

俺は言う。

「えっと・・・どうすれば・・・」

シャマルがキョロ、と俺と白い仮面の男を見る。

「あいつを悲しませたくないのなら私に従え！」

俺は気付かないうちに声を上げていた。

その声にビクッ！と肩を震わせてからシャマルは仮面の男と距離を取り、此方へと来た。

「残念だな、仮面の者よ。部外者には消えてもらおうか。」
「そうだな。だが、部外者はお前のほうだ、仮面の者よ」

白い仮面の男はそういって姿を消した。いや、移動したのだ。
シャマルは何が起きたのか理解するのに時間をとってるようだ。
だが、俺は奴の姿を把握していた。視線はずっとあいつを捕らえている。

「セイバー。モードリリースだ。『俺』だけでいい」

右手から約束された勝利の剣が消える。同時に左腕を顔の高さに上げて防御する。
直後、白仮面の蹴りが飛んできていた。

「今のを・・・防ぐか」
「残念だが、お前の動きは全て見えてるんでね」

左腕を振って蹴り足を飛ばす。白仮面は何度か後方に蹈鞴を踏んで下がる。

「いいだろう・・・見せてやる。体術すらお前を遥か高みにて凌駕していることを」

ゴキリ、右五指が鳴る。そうだ。こいつを体術の訓練相手にしよう。
どこまで出来るか試したい。
無造作に右腕を下から上へ振る。軌道上に真空の刃が現れ、周囲の床を瓦礫と化して突き進む。

「なっ――――――」

声にならない驚き。通常体を遥か凌駕した技。
巨大な真空が白仮面に襲い掛かるも、ステップで回避する、が。余波は服を切り裂いた。

「あれを避けるか。まぁ、手加減してるんだから当然か」

あれだけの真空の刃を見せ付けられて手加減と言われたら白仮面は激昂せざるを得ない。

「貴様ぁ！！」

俺は白仮面の突進を難なくかわす。まるで闘牛士（マタドール）のように。
幾度と向かってくるが、触れる事すら適わない。
明らかな彼我差に離れた場所で見てるシャマルですらそれが見て判った。

「ほら、どうした。私を倒すのではないのかね？それとも先程のは口だけか？」
「くっ！嘗めるな！」

胸を狙う拳をフットブロックでいなし、残った足で回転蹴りを放つ。
同時行動により白仮面の回避をキャンセルさせて直撃させると地面を這うように滑ってのた打ち回る。
追撃の為に俺は軽く跳躍してから、右足を捻りながら蹴り抜く。

「ぐはっ！？」

仮面がなかったら吐血しているであろう、おかしな声が出た。
それでも俺は構わずに追撃。

追撃追撃追撃追撃。白仮面はボロボロだ。

「さぁ、そろそろいいか？結界を壊さないといけないのでな。手短にすませる。さらばだ、白き仮面よ」

ゴキリ。五指が鳴る。グ！と握られた拳、指。其処には衝撃波と真空を伴わせる。

ゆっくりと開かれれば指全てに真空が纏わりつき――――

とん。

ゆるく。白仮面の胸に触れる指。

刹那――――――――――――――――

ドォォォォォン！！！！！！！！！！！！！！！！！！

凄まじい爆音と共に真空が体を突きぬける。
突き抜ける真空は衝撃波と化し、空を翔る。
止まる事をを知らぬ勢いは空を切り裂き牙跡を残す。
真空の衝撃は結界に衝突すればいとも簡単に破壊し、雲を裂く。

「・・・・まるで牙跡だ」

誰かが言ったこの言葉は、管理局のデータベースに不本意ながら残ってしまった。
以降、この戦闘記録は『空牙』と名づけられたのは余談である。
そしてその牙でもって結界が破れれば――――

「（今だ、散れ！）」

念話でヴォルケンズに合図する。すると牙跡をみた全員が呆けてる

間に戦況離脱を成し遂げた。

「では私も行くか。管理局諸君、実に楽しい時間を過ごせた。礼を言う」

局員へと視線を向け。クロノへと向け。白仮面へと向け。

俺は背後のスキマを開き、その場を後にした。

第五話　空牙（後書き）

作「はい。スーパークロノフルボッコタイムでかいてたのに猫フルボッコでした。」

綾「なんでさ」

作「いや、進めてたら尺がすくなくて増やそうとしたら其処が猫姉妹でね？（´・ω・`）」

綾「いや、そんな顔してもだめだろ」

作「だめかな？」

綾「駄目だよ☆ミ」

作「まぁ、それはそれでおいといて。体術も結構やれることを表現してみました」

綾「なんかこれ・・・あれだよな」

作「あれです。わかった人はまにあっく」

綾「当たった人には？」

作「特にありません！心の中で賛辞をあげる！」

綾「いらね・・・」

作「ともあれ、かき方が毎回変わってる感じが否めませんががんばります！」

綾「締めたか」

第六話　セカンドコンタクト

移動した俺は今、ヴォルケンズと一緒にいる。
さっきまで戦闘をしてた結界から約３ｋｍほど離れた場所だ。
ヴォルケンズと離れて一人立つ。今は仮面を外し、小脇に抱えてる。

「結界を壊したあれはなんだ？」

シグナムがまず開口一番に聞いてきた。
ヴィータもシャマルもザフィーラも。同じ考えだったらしい。三人一様にコクコク頷いてる。

「あれは異世界にある格闘術の一つだ。指全てに真空を纏わせてそれを放つ技。名を空牙」
「空牙・・・・」
「だが、あれは手加減した上に未完成版だ。本来のものじゃない」
「あれで未完成だと？管理局の結界を壊したくせにか」
「俺はまだ本気を出した事はない」

沈痛な面持ち。目の前で空すら切り裂いたあの威力で未完成、しかも手加減と来たのだから。

「人体を極限に鍛えれば出来る技さ。大した事は無い」
「それは・・・俺にも使えるか？」

割って入るザフィーラ。

「出来る、と思うが。どうした？」
「その技、教授願いたい」

ザフィーラの突然の申し込みに俺を含む全員が驚きの顔を出した。

「本気か、ザフィーラ」

「あぁ。あの技があれば主を護れる」

本気の目。いや、獣の目か。守護獣と呼ばれるだけのことはある、か。

少し、見せすぎたか。軽はずみな事は控えよう。そう思った。

「あれは偏に奥義とも取れる技だ。早々と教えられるものでも無いし、順序もある」

抑揚の無い声。はぁ、と溜息混じり。

「教えては、くれまいか。その為なら矜持などといってはいられんからな」

「まぁ・・・・構わないが」

ザフィーラの強い推しに俺は渋々な態度を態と見せて承諾した。

ザフィーラ・・・・地獄へようこそ。

「しかし、お前のさっきの口調はなんだ。あれが地か？」

「いや、あれは演技だ。地を見せたら一気に付込まれそうだからな。少しばかり」

「演技にみえなかったぞ。なんかすげーむかついた感じだった」

シグナムとヴィータが否定を口にする。

そんなにおかしかったか？

「いや、なんかすげーいらついた」
「同じく」
「私はそれほどでもなかったですけど」
「俺はなんとも感じなかったが」

四者四様。それぞれの意思を口にしてる。まぁいいさ、ばれない為だし。

「まぁ、その演技のおかげであっちも今は混乱してるだろうな。お前ら守護騎士に指示を出した以上、俺がマスターか、それに順ずる存在だということは調べるだろう」
「本当に主はやてには危険は及ばないのだろうな？」
「そのために動いてるわけだからな。いい加減俺を信じろ、シグナム」
「判ってはいるのだがな・・・・」
「あたしはまだ反対だかんな。おめーは信じねぇ！」

むぅ、と唸り腕を組み思考モードへと入るシグナム。
まだ何か思うところがあるのか。
ヴィータにいたってはまだむすっと睨みつけてきてる。

「どう思う、シャマル。俺ってそんなに信用ないのか？」
「まぁ・・・そう、ですね」

くっ！？否定どころか肯定されただと！？くわぁん、と頭に何かを食らったような衝撃が走ったのは幻覚だろうか。
ふらつく俺を尻目にシャマルが話しかけてきた。

「で、ですね・・・えっと。ミラージュさん？でいいんですよね」
「あ・・・・あぁ。構わない」

「この先、、どうしようかと考えてますが・・・貴方も参加する方向でいいんですか？」
「あぁ、そういう事か。これからは俺も戦力に入れて考えてはくれないか？管理局が介入すればそっちの相手は俺がするし
第一、官制人格が出てこないことには何も始まらない」
「わかりました。では貴方の意見通り、管理局が来たら貴方を仮初めながらマスターと認識して接します。それでよろしいのですね？」
「あぁ。さっきもいったがはやてに危害が及ばないようにしたいからな。ここはお前たちとも利害は一致してるはずだ」

それに、今はあんまり不安要素増やしたくないし。
あまり重要でないことは今は言わないでおく。あとで補填すればいいのだし。

「じゃぁ、そういうことでいいな。あぁ、少ししたらはやてに逢いにいくぞ、てかきっとそうなる」
「なんでだよ！？」
「お前ら忘れてるだろうけどもう一回先に出会ってたりする」

そう、既に図書館で顔見知り程度だが顔を合わせてるのだから。
特にシャマルとシグナムはそのとき居たのに忘れてたようだ。
思い出した顔が妙に面白い。
と、そろそろ夜も遅いか。俺はマントを翻して背中を向ける。

「そろそろ戻る。お前たちもはやてを一人にさせるな、動くときは必ず誰か残せ。
それと何かあれば念話を通してくれ。いつでも繋がるようにオープンにはしておく」
「あぁ。そうする」

短く返答が帰ってきた。俺は手をヒラ、と返して応える。

「あぁ、ザフィーラ。時間があれば稽古つけてやるよ」

「承知した」

頭を下げる気配が後方で感じ取れた。そして俺はスキマを広げて中へと入り込む――――――

――――――――――――――――――――――――――――――――

ヴィータＳｉｄｅ

不思議な奴だ。あいつの使う魔法がぜんぜんわかんねぇ。

何よりもはやてのためとかいうのがよくわかんねぇよ。

なんであいつがはやてのために動くんだ。あたしたちがいるんだから必要ねーよ！

「シャマル！なんであいつの言うことをきいてんだよ！」

「しょうがないでしょう。実際私達は何度も助けられてるのよ、彼に」

「あたしたちだけでも充分やれんだ！あんなやつ必要ねぇーよ！」

あたしはこの苛立ちの向かう先を探しながら地面を何度も踏み蹴った。

これが俗に言う地団太なのかな、とか頭で考える辺り、まだあたしは冷静だ。うん、冷静だ。

「はやてはあたしたちで護るんだ。誰の力も必要ない。あたしたちだけでやるんだ」
「ヴィータ・・・・」
「んだよ、シグナム。シグナムもあいつの肩持つのかよ」
「そうではない。考えを変えてみろ。あいつの力は脅威だ。なら、逆に此方が利用すればいい」

シグナム、そういう考えかよ。確かに敵に回ったら大変だろうけど、味方に引き込んでも薬になるかどうかわかんねぇのに。
寧ろ毒だ。あいつはあたしは好かねー。でも利用するのは賛成だ。
今度出会ったら思いっきり利用してやる。

「先に帰る。はやてが心配する」
「あぁ・・我らはもう少し話をしてから戻る。主はやてには「わぁってる。うまくいっとく」あぁ」

あたしはシグナムに言ってから一人、はやてのまつ、我が家へと戻る。
あの暖かい家へ。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

綾人ｓｉｄｅ

ヴォルケンズと別れた俺はこの海鳴市に最初にきた公園にきていた。
誰もいない夜の公園だ。流石に吹き抜ける風がそろそろ寒くなってきた。

「今日は此処で野宿か。安いホテルがあればいいけど、もう無理だろうな」

さて、次はどうするか。色々と考えながらごろん、とベンチに寝転がり時間が過ぎるのを待つ。
まずは名前を統一させよう。城戸綾人であり、ゼロであり、ミラージュ＝ヴィジョン。
3つの名前は少しばかり混乱を招く。さっきのヴォルケンズもそうだ。

「地球での名前が城戸綾人であり、管理局に敵対する謎の人物はゼロ。そしてはやてを助けたいと思う俺は・・・ミラージュ、でいいのか？」
「なんだ、マスター。その程度のことで悩んでるのか？」
「アーチャーか。いやな、確固たる自身がなければ意志虚弱にならないかと俺は心配でね」

苦笑いする俺にアーチャーは皮肉な笑みを浮かべて、

「何も臆することはない。マスターはそこにいる個人だ。他の誰でもなかろう。それとも多重人格でもおきたか？」
「まさか。それこそまさか、だ。俺は俺だから俺で居られる。哲学っぽいけどな」
「構わんだろう。哲学思想は好きではないが、哲学自体は好意を持てる。まぁ・・・理想を高く決め付けることはない、ということ

だよ」
「それは自分の経験則か？」
ちら、とアーチャーを見れば表情は伺えなかった。
「マスター。せめてきちんと食事は摂れ。その肉体は成長期なのだから・・・・」
アーチャーがぶつくさと小言に切り替えた。どうやら話は終わり、と区切ってきたようだ。
「あぁ、わかったよアーチャー。明日からちゃんと摂る。お前の腕の見せ所だろうしな」
「どうだか？それならそれで場所が必要だろう。公園では腕も揮えんよ」
くつり、と笑う赤い騎士。背中を向けて霊体化すればもう見えず。
黒い少年は消えた先を見据え。
「最悪のパターンは覆さないと、な。それにはどうするか・・・・」
幾つかの戦略が頭を過ぎる。
今更管理局に手を貸してもらうことなど出来ないし、そんな気も無い。でも、どうしようもない時になったら力だけ借りよう。
あとは・・・あいつらか。顔を曝してない分、どう転ぶかわからないが・・・・
なのはとフェイト。あの二人の力も必要に鳴るかもしれないし、搦め手は組んでおいたほうがいいかもしれないな。
まずは遭遇、と。その方法だな。
・・・・正体をばらすと管理局に筒抜けになってしまうだろうし・

・・どうするか。
夜を通してずっと考えて、朝日が昇ってもいい方法は思いつかなかった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

朝だ。体中の痛みが襲ってきて俺は目を覚ました。
どうやらベンチで寝てたから体が固まったらしい。
コキコキと首を鳴らして伸びをする。いい天気だ。
近くの水のみ場で顔を洗い、簡単に準備しておいた服に着替える。
今日はどうしようか。朝の空を見上げながら考える。

「とりあえず翠屋にいくか。それから考えよう」

結局いい案は浮かばなかった。寧ろ事態悪化の方向に行き過ぎた。
翠屋ならたぶんフェイトもいるだろう。向こうとも接触しておかないと。
もう少し陽が出たらいくことにしよう、そう決めた。

「翠屋といえば」
「ん、セイバー。おはよう」

振り返ればセイバーがいた。今は鎧姿ではなく、私服姿で違和感もない。

「ミラ、翠屋のシュークリームとケーキセットが美味しいみたいですよ」
「・・・・どっから得た、その情報」

「これです、これ！」

ばばんっ！とか効果音が起きそうなくらいに両手で広げられた手には広告が一枚。
なんでも一週間限定セールだそうだ。
この暴食王め、絶対食べたいオーラが出てるぞ。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

二人して見詰め合う。期待の眼差しのセイバーと半眼で見るだけの俺。

「はぁ。仕方ない。じゃぁついでに買ってくるから大人しく待ってろ」
「はい！感謝します！」

セイバーの根に負けて買ってくることを承諾する。
デバイスになったとはいえサーヴァント。腹ペコ王は健在だった。
その後セイバーから数のおねだりがきたがそれの交渉に数時間を要したのは言うまでもない。

―――――――――

昼が過ぎてから俺は翠屋の前までやってきた。
セイバーに頼まれたのはシュークリーム５０個とショートケーキ２０個。
・・・金が足りるのか怖いところだ。

今度、金策を練っておこう。
さて、店に入って買い物を済まそう。・・・・・同時に用事を済ませて、だ。
さっそくレジにたってるなのは。その近くにフェイトたちが居る。
・・・あれはアリサか。すずかもいる。それはわかるが・・・・
なんでその中にクロノまでいるんだろうな！
なんか・・・違和感があるな。女の子の中に男が一人とは。いや、テーブルの上にアルフもいるな。
まぁいいや。俺は買い物を済ます。なのはが対応してくれてる。こうしてみると魔導師姿なんか予想も出来ないよなぁ。
からかいたくなるのはなんでだろう。

「あ、綾人君」

すずかにみつかった。まぁ何もしないで普通に買い物してるわけだし、そりゃ当然か。

「あぁ、すずか。久しぶりだね。図書館以来？」

俺は普通を装ってすずかに挨拶する。て、後ろのアリサが思いっきり睨みつけてるんだが。

「すずか、知り合い？」
「あ、うん。前に図書館で知り合ったの」

はやてとであった時のことだ。

「はじめまして。城戸綾人っていいます。よろしく」

軽く首をかしげてにこ、と笑う。

「「「「・・・・・・／／／／」」」」

みんなして顔が赤くなった。なんでだ。
まぁともあれ顔見せが終わり、帰ろうとしたところで、

「綾人君もこっちきておしゃべりしよ？」

見事なすずかのインターセプト。そして周囲の圧力による拒否不可能な雰囲気。
後ろの人から無言の圧力がすごいんですけど。

「拒否権は・・・ないんだろうね」

仕方なくグループに近づき、空いてる席に座る。すずかの隣、クロノの隣。なんでさ。
よくみればクロノは少し怪我してるのが見える。俺がやったんだけどな。
順番に挨拶と自己紹介をして、軽めのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ。いや、おしゃべり。
よく会話が続くものだ。俺はたまに会話に乗っていけずに黙ってしまったりするたびにアリサに突っ込まれる。

「あんた、もうちょっと喋りなさいよ」
「無茶言うな。こっちは情報処理に忙しい」
「なによそれ」

ぎゃーすかと騒ぐアリサを適当にあしらう。いいコンビだね、とかフェイトが言って来たのでげんなり優しく断った。
そっちもなのフェイとかコンビ名あるだろ、とか言いかけたけどや

めた。
とりとめもない会話をしながら、なのは、フェイト、クロノ、ユーノ、アルフは念話してる。
恐らく「闇の書事件」のことだろうな。みんなご苦労様だ。
割り込むことも出来るけどどうしよう。大人しくしとこうか。
管理局とのコネを作るのも大変だ。

「で、綾人君はどこに住んでるの？」
「ん？どこだろうな・・・・昨夜は公園で寝たけど」

いきなりの話題振りに少し考えつつ応える。そういえばまだ体が痛い。コキコキと首を振れば鳴るくらいだ。

「「だめだよ、そんなの！」」

声を荒げたのはなのはとすずか。同時にテーブルをバン！と叩いてたちあがる。
出遅れた感じで顔が真っ赤なアリサ。プライドからか引っ込んだ。

「おうち、ないの？」
「可愛そうな子みたいな目で見ないでくれ。ホテルなりいけば何とかなる」
「子供でもホテルは泊まれるのか？」

クロノが入ってきた。何このＫＹ。

「まぁ、何とかなりますよ。一人じゃないですし。ちゃんと大きい人もいますし」
「その人が君の保護者か？保護者に対する説明のしかたじゃないと思うけど・・・まぁいい」

それから金銭的なこととか聞かれたけど、そこらへんも大丈夫と言い切った。
まぁ、あいつがいるから大丈夫だろう。世界状況を見ながら売れば。

「なら僕の家に来ればいい。多少広いから一人二人増えたくらいはなんとかなるだろう」

おいおい、本気かクロノ。お前の家は今回の事件の最前線だろう。
一般人呼び込んでいいのか？
阻害認識でもかけて見えなくするんだろうけど無用心だ。だけど管理局の動きが見えるのはラッキーかもしれない。
横でフェイトが「大丈夫なの？」とか言ってるけど。

「じゃぁ、お願いしてもいいですか？」
「わかった。あとで家に伝えておくよ。君のほうも連れの保護者さんにちゃんと説明してくるんだ」

獅子身中の虫、とはこのことだな。得た情報はヴォルケンズに回そう。そうすれば動きやすくもなる。
こっちのことがばれればすぐに撤退すればいいし、問題はない。
それでこの話は終わりになった。

「じゃぁ、すずか。今度そのはやてって子。紹介してよね？」
「うん。きっと楽しみにしてくれるよ」

はやての紹介をする約束をする面々。
どうやら話もお開きのようだ。各々が立ち上がる。

「君はどうする？あー・・・城戸君」

「綾人で良いですよ。えっと・・・クロノさん」

苗字を呼ばれたので名前で、と訂正させた。俺は保護者に伝達しないとってことで翠屋を出る。

クロノの家の地図はもらった。いつでも来て良いってことなので近いうちに遊びに行くことにする。

さて、セイバーが待ってるから急いで戻ろうか。

そういえばセイバーの顔は割れてるな。となると保護者役はアーチャーかランサーか。

そこらへんは帰ってから話し合うか。ヴォルケンズにも報告だな。

あとではやての家に行くか。

夕方。買い物帰りのシャマルに出会う。

「・・・ばばｋ「それ以上言ったら臓物(ハラワタ)をぶちまけます♪」・・・・・む」

言い掛けていた言葉を飲み込み黙る。

「一日経ってこっちは色々進展したぞ。はやての具合とかはどうだ？」

「そうですね・・・特に変な事はないんですけど、シグナムが・・・」

シャマル、そこで言い澱むのはどうかと思うのでちゃんと言ってください。気になりすぎる。

「貴方と戦ってみたいってずっと朝から。変わりにヴィータが今、コア探しに出てますけど」
「・・・バトルジャンキーめ」

ぽつりと言うとコクコク頷いて理解を求めてきた。

「あと、ザフィーラも貴方に会いたがってますね」
「あぁ、修行つけるって言ったからか・・・今から行っていいか？」
「ちょっと待ってくださいね・・・・・・・・・・・・はい。いいそうです」

いいのかよ。簡単にそれでいいのかよ。なんか昼といい流されてね？シャマルに連れられはやての家へ。

「しかし・・・どうやってはやての家にあがる？今更ながらに理由が無い」
「そこはなんとかなりますよ。だってはやてちゃんですから」

それでいいのか、はやて至上主義！
俺は幾つかの言い訳と理由を頭に過ぎらせながら荷物をわけてシャマルと一緒にはやての家へと向かう。
向かう家のほうから見慣れた姿が見える。シグナムだ。

「遅いから迎えに来た。荷物を・・・・お前」

シグナムが俺を見ると闘気と殺気を放ってきた。一般の通り道でな

にやってんの。

「一般の通り道でやることじゃないな。シャマルから話は聞いてるが・・・俺はいつでもいいぞ」

「なら今。管理局も手をだしてない世界がある。そこでやろう」

「ＯＫだ」

かくして俺ははやての家に行く前に一暴れすることになった・・・・念話でセイバーを呼んでおく。約束された勝利の剣を全て遠き理想郷に収めてからシグナムと転移した。

第七話　白き姫騎士

転移した先は荒野の続く世界だった。
人の住める環境にない世界。管理局が管理する事を諦めた世界。

「ここでなら管理局に見つかる事もあるまい」
「ずいぶん便利な世界を見つけたな」
「リンカーコアを探してる途中で発見した」

幾許か距離を取り、シグナムと俺は離れて向かい合い立っている。
シグナムは既に騎士甲冑に変化させ、右手には己の相棒、レヴァンティン。
俺も約束された勝利の剣を風王結界を起動させて持っている。
その後ろにセイバーが立っている。

「一対一だ。其処の剣士の手出しは敗北と同義にするぞ」
「セイバーに手は出させないが、彼女はデバイスだ。その位は許せよ」
「・・・・デバイス、だと？」
「そうだよ。ユニゾンデバイス。お前ら夜天の書もそうだろ」

シグナムは少し考えてる節を見せてから、「しょうがない」と許可してくれた。

「じゃぁセイバー。ユニゾンだ」
「はい」

以前、アーチャーとしたように

静かに意識を繋げ
魔術回路を繋げ
感覚を共有し
記憶を共有し

「「ユニゾン・イン！」」

一瞬だが体から光を放ち、収まれば。そこには金髪碧眼、甲冑を着込んだ白き姫騎士が立っていた。所謂セイバー・リリィモード。

「ユニゾン成功。ユニゾン率１００％。何の問題も無し。さぁ、挑戦に応じよう」

体中に漲る力。魔力。精神力。強き意志の籠もる眼差しがシグナムを捕らえる。

「それがお前の力、か」
「これが私の力、です。この剣にかけて勝利を」

目の前で約束された勝利の剣を十字に見立てて構え瞼を閉じて祈る。右手に持つは星の奇跡が産み出した聖剣。風の加護によりその姿は可視出来ない。

「（セイバー。この闘いはお前に任せる。騎士王たるお前の力、騎

士と名乗るあいつに教えてやってくれ）」
「（それが貴方の命令ならば）」
「（いや、これはお願いだ。シグナムにはもっと高みへと昇ってもらわないと後で苦労する）」
「（そうですか・・・・わかりました。この剣は貴方の剣。確と承る）」

この闘いはセイバーに一存する。騎士には騎士の闘いがあるだろう。
何か得られるものがあるかもしれない。
意識をセイバーに任せ、俺は補助へと回る。とはいえ、出来る事等あまりにも皆無なのだが。

「貴公の力が期待以上であればこの剣、見えましょう」
「くっ、いってくれる！」

シグナムが疾駆。魔力でブーストしてる分、素早いが私の目にははっきりとその姿を捕らえて離さない。
レヴァンティンを掲げて切り伏せに来るが、私は片手でレヴァンティンを受けきり、弾く。
シグナムもその勢いを殺さずに回転させて次の攻撃に移ってた。

「せえええやぁっ！！」

怒号一発。私が弾いた勢いに載せて横薙ぎですか。腕を畳み約束された勝利の剣を脇に締めてこれも受けきった。

「中々良い一撃です。ですが、私の撃を利用しなければ良い点を差し上げたでしょう」
「元よりその様なつもりも無いが、な！」

初弾・次弾装填。カートリッジシステムが起動した。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

途端シグナムの魔力が膨れ上がる。だが――――

「なるほど。中々便利なシステムのようですが・・・・それでも」

今度は私から攻め入る。一歩でお互いの間合いまで入り込んでいく。
私の体躯はシグナムよりも若干低い為か下からの斬り上げを放つ。
シグナムもカートリッジで上がった魔力分、レヴァンティンで受けきる。
その受け斬った剣、体ごと。私は振りぬいて彼女を吹き飛ばした。

「ほう・・・あれを防ぎますか。かなり死角からの攻撃でしたが」
「今の斬撃、肝が冷えた。あぁ、少々驚いたが・・・・あれくらいでならまだなんとかなる」

私の一撃を受けてそれですか。おっと。自分でも目が見開くほどの表情だったと判るほどです。自重しましょう。
幾合と切り結ぶ。ぶつかる金属音。徐々に私が押し込み、彼女は少しずつ後退せざるを得なくなっている。

「ほら下がってきてますよ。それとも得意の空にあがりますか？」
「くっ・・・・まだぁっ！！！」

私の斬撃を受けながらもまだなんとかしようとしてるあたり、矜持が見られます。主への忠誠心でしょうか。
それでも段々と受けきれなくなり甲冑を斬って行く。

「どうしました？まだ純粋に剣術しか使っていないというのに」
「――――――っ！！？」
「この剣に魔力を籠めて貴女に斬り込めばそれだけで吹き飛びますよ？」

試しに一回だけ。魔力を少しだけ籠めて切り結ぶ。それだけで衝撃が走り抜けて荒野を駆ける。
衝撃波に飛ばされなかった分、よしとしましょう。

「だが・・・まだ私にも見せてない技もある！」
「それは重畳。出し惜しみしてるとその暇も無く敗北を与えますよ？」

シグナムとレヴァンティンはその言葉に反応してかカートリッジを3発打ち込んだ。

「レヴァンティン！」

長剣が合図と共に連結刃へと変化。長く、長く、鞭の様にその姿を変える。まるで千変万化。
シュランゲフォルム。
幾つも繋がる刃の群れが襲い来るも、その全てを認識し、理解し、回避する。
スキル・直感が今、全力発揮する。
寸前のところで見切り、回避するのはまるで舞踏をする貴婦人のよう。

「それは既に予想済みだ！」

一発のカートリッジによって魔力が増大。連結された刃は途端に離

れて宙を舞う。
一瞬ピタ、と止まり、私に向かってくる。
「裏技だ。同じ相手に二度は利かぬがな」
解き放たれた刃の群れが鳥の群れのように襲う。なるほどこれは面白い。
幾度かの斬撃によりスカートが、腕の裾が、リボンが斬れる。
「中々の錬度。感服しました――――――」
襲い来る刃の群れの中、私は立ち続ける。
魔力が篭められている以上、この攻撃は対魔力で対処可能だ。そう結論づいた。
案の定、対魔力によって深い傷はない。というか服が斬れただけで肉体には何の問題はない。
「残念だ、騎士よ。貴公の魔力では私には届かないようだ」
「なら届くまで斬り続けるのみ！」
飛空連結刃を一旦戻してまた長刀へとモードチェンジ。右頭上で両手でレヴァンティンを持つ。
「ヴォルケンリッターの将、古代ベルカの騎士シグナム。推して参る！」
「今、この場になって名乗り上げとは。いいでしょう、騎士と名乗るのであれば容赦なくその力、選定するのみ！
我が名はセイバー。円卓の騎士王たる我が剣を――――――お見せしよう」

約束された勝利の剣から風王結界を解除する。不可視の剣が今、此処に。存在せしめる。

「貴公のその誇りに敬意を称し、我が剣を見せよう。これこそが星が創りし奇跡の業！」

可視状態になった約束された勝利の剣は神々しく陽光を反射する。

「それ、が・・・・お前の剣か」

「如何にも。我が剣だ」

誇らしげ。お互いに譲れぬのは騎士の性か。会話を語るなかれ。語るのは剣でいい。

それで充分分かり合えるのだ、私達は。

「なら私の一撃を受けてはくれないか」

「いいでしょう。その一撃、受けましょう」

魔力が充填されていくのが見える。なるほど、これはいい騎士だ。生前もし出会うことがあれば円卓の騎士は増えていただろう。そう思わされる。

「さぁ、来るがいいシグナム」

「あぁ、往くぞセイバー」

構えるシグナム。それに対して私は両手で約束された勝利の剣を持って構える。

レヴァンティンの刀身に炎が宿る。なるほど、あれがこの世界で言う魔力変換気質。

「紫電――――――――――――一閃！！！」

炎を纏ったレヴァンティンが猛々しく燃え盛り、向かい来る。今までにない魔力の奔流と火炎。

これは――――――対魔力でなどと言える程度の攻撃ではない。

私は今回始めて防御する。それほどの一撃。誇りを載せた力強き牙だ。

だが、それすら後ろに下がらせることはなく。一閃を受けきった。

「いい一撃でした。まさか私が防御に徹するとは」

「いまのはかなり今までで最高と自負できるほどの、だったのだがな・・・・」

「私でなければ今の一撃、きっと勝利できたでしょうが――――――」

静かに。強い声が響く。右手に持つ約束された勝利の剣を強く握る。

魔力も篭めて先の一撃に応えるかのように。

「私の二つ名はブリテンの赤き竜。体格こそ貴君に劣るが魔力の猛りで劣ることはない」

強く、言い放つ。同時に篭められた魔力は既に臨界寸前。

星の輝きは今、神々しく集い――――――

――――――撃ち放たれた。

地球に戻った俺とシグナムはシャマルと一緒に八神家の近くまで来ていた。
俺が一番荷物を持ってる。シャマル曰く

「男の子なら荷物持ってくださいね♪」

だそうだ。確かに大した事は無いが、なんか荷物もつに体良くされている様な気がする。
俺の右肩にはＳＤセイバーが乗っている。
ちらちらとシグナムが視線を向けているのを知らん振りだ。

「シグナム、結局どっちが勝ったの？」

なんてシャマルが言い出す。むす、とした顔でぷい、と顔を背けるシグナム。無言のプレッシャー。

「もうっ、シグナムったら。それじゃぁ言ってるのと同じじゃない」

シャマルがぷくーっと頬を膨らませるけど、年考えてくださいマジで。

「まぁ、その話は後で。今は、ほら」

俺ははやての家を先に見つけて指をさす。
三人で家に入ればヴィータとザフィーラが出迎えた。
ヴィータは明らかにあからさまないやな顔で、ザフィーラは・・・・
狼形態か。

「遅かったな」
「すまん、少しばかり熱が入った」
謝ったのはシグナム。荷物を玄関に置いて家に上がる。
「来い。お前はこっちだ」
シグナムに促されて俺も家に上がる。シャマルがスリッパを出してくれた。いいお母さんだなぁ。
「違いますよ!?」
「心を読むな!?」
だから・・・その膨れっ面はどうかと思うんだよ?
「あぁ、ザフィーラ。後で稽古つけてやる。準備しとけ」
「心得た」
短く返答してザフィーラがリビングへと戻る。俺はそれを見届けてから
「シグナム、重要なことじゃないなら後でもいいか?」
「・・・いいだろう。だが逃げるなよ?」
誰が逃げるか。
リビングに入れば、そこにはヴィータとはやてが台所にいた。ヴィータも邪魔にならないように少し引いてる。
「シャマルー。それとこれは冷蔵庫にいれといてなー?あとこれは準備するからちょぉ、まってて」

シャマルがはやての指示の下動く。シグナム曰く「調理さえしなければ・・・なんとかなる」らしい。
はやてはまだこっちに気付いてない。

「あ、シグナム。帰ってたんやね。外はもう寒いやろー？もうちょっとまっててな？」
物音で把握するあたり、既に家族として深い位置にいるのだろう。
あれ？全員俺がいるの言ってないのか？はやてもまだ俺に気付いてない。
どうする。

「あー・・・こんばんわ、はやて」
「え？あ、ちょ！？綾人くん？！」

料理してるその背中に声をかけて挨拶。なんかすごくびっくりしてる。そりゃそうか、一回遭っただけの顔なじみが自宅にいるんだから。

「なんでおるんやあああ！？」
「シグナムと途中であって、シャマルに拉致られた。以上」

なんて簡略化された説明。駄菓子菓子、否、だがしかし。言い得て妙。

「以前、私とも知り合いになりまして。しかも主はやてとお知り合いということでしたから。夕飯に誘ったのですが、連絡はシャマルに任せました。申し訳ありません」
「あー、シャマルならしゃーないな」
「シグナムが私を売った！？そしてなにげにはやてちゃんひどい！

深々とお詫びの礼をする。上司に売られたシャマルよ、永遠に。

「まぁえぇか。綾人君、鍋にするんやけどもうちょいまってなぁ」

「あぁ。楽しみに待つとするよ」

そういうとはやてはまた台所に戻っていった。リビングで一人所在無さ下にいると、シグナムとヴィータが呼んでる。

「・・・なんだ？」

「こっちへこい。話があるとさっきもいったろう」

小声で会話。どうやらはやてに聞かれたくはないようだ。

ふぅ、と小さく息を吐いてから。部屋を移動する。

「お前の力を全て教えろ」

恐らくシグナムに宛がわれた部屋だろう。其処に入るなり開口一番、だ。

なるほど、さっきのが気に食わないということか。

「全てといってもなぁ・・・そのうち教えるじゃだめか？」

「それだとあたしたちが信用できねーんだよ。シグナムとタイマンで勝つとか信じねー」

ヴィータ・・・少しは優しくいってやれ。シグナムが言葉の剣で斬られまくって蹲ってる。

「全部ってもなぁ・・・結構あるから大変だぞ」
「特殊技能(レアスキル)か」
「少し違う。が、まぁそうだな。ロストロギアみたいなものだ。ゆっくり教えてやるよ」

手をヒラリと返して。部屋を出た。
その後、とりとめもない会話をしながらごちそうになった。今度すずかの家に行くときも一緒に来てほしいとか言われたが、返事は保留にしてもらった。
あそこは・・・少し考えないといけない場所だしな。
ヴォルケンズには今度次元を渡った時にでも、ということで納得してもらった。
ザフィーラと少し体術の訓練。中々いい筋だ。すぐに基本技は幾つか体得した。

食事中、セイバーがホログラムでてきそうなのを抑えるのにも必死だったのは言うまでもない。

第八話　鉄騎（前書き）

遅くなりました。オリジナル戦闘マジ勘弁。
こんなに時間掛かってしまってすいません。

第八話　鉄騎

はやてと食事をした後、まったりとリビングでおしゃべりタイムになるかと思ったら、ヴィータに呼ばれた。

「おい、はやてが優しいからってあんま調子にのんじゃねーぞ」
「わかってるよ」

俺は短く返事して戻ろうとしたが。

「さっきの約束。忘れんなよ。てか、もういっそ今からいくぞ」
「え、ちょ、まっ?!」

グイ、と引っ張るヴィータ。リビングまで引っ張られると、

「はやて、ちょっとこいつ借りるよ。面白い話聞かせてくれるって言うから」
「ほぉか?ならいってらっしゃい」

ヴィータを見送るはやて。ヴィータに引きずられる俺。

・・・なんか違わね?

そのまま連れてかれるのはヴィータの部屋。さっきはシグナムの部屋で今度はヴィータの部屋か。

「じゃぁ、転移すっぞ。向こうで色々聞かせてもらうぞ」
「あー・・・さっきの能力みせろってやつか。早すぎだろ、さっきの話で」
「うるせー!さっさといくぞ!」

苛々とした表情でヴィータが転移する。遅れて俺もそれを追う形になった。

――――――――――――――――

転移した先は無人世界のようだ。

「ここでなら多少暴れても管理局が管理してる世界ではないので見つかる事もない」

「・・・・なんでお前らがここにいる」

「どうした？私がいるのが不満か？」

「どうしちゃったんでしょうか。具合、悪くなっちゃいました？」

「先程の訓練で少し考えたことがあって報告にきた」

いや、ヴォルケンズ全員揃っちゃってるね。

「おまえら、はやての守護、警備はどうした」

「結界ならまた何層か張り替えておきましたし。大丈夫です、きっと」

というのはシャマル談。しかしまぁ、あれで結界ねぇ。

さっき俺が見たとき、薄っぺらかったから今度行った時にでも張り替えとくか。

「はぁ・・・・で、俺の能力が見たいんだよな？」

「あぁ。出来る限り全力で、だ」

「それに於いては少し制限がある。全力を出す前にこの世界が飛ぶ

ぞ」
「・・・どういうことだ、それは」
俺は説明を開始する。今までに全力を出さないで戦闘してきた。
ので、ある程度抑えた力で、ということになった。
「じゃぁ、まずはデバイスの紹介をしよう」
デバイスたる宝具、約束された勝利の剣・刺し穿つ死棘の槍・干将・莫耶を呼び出す。
それぞれにホログラムが現れるが、今回はＳＤではなく、リアル頭身。
「お呼びですか、ミラ」
「なんだよ、戦闘か？」
「ふん。いつも呼ぶ時は唐突なのだな、マスター」
セイバー、ランサー、アーチャーが言う。
「悪いな。霊化を解いてくれ」
ホログラムから実体化する英霊達。
「俺のデバイス。ユニゾンデバイスだ。お前ら夜天の書の管制プログラムもそうだろ。
セイバーは見たことあるだろうけど、力のほうはシグナムはセイバーのことは知ってるよな」
「あぁ・・・」
あ、苦渋っぷりの顔してる。セイバーをずっと見つめてるぞ。

「あとは・・・もう一つあるけどそれは秘密。切り札は最後まで取っておくのがいい」
「まて。ユニゾンデバイスをそんなに持ってるのか？」
「あぁ、全部で４つだ」

そこまでいうと、ふと脳裏にあることが浮かんだ。

「ただ見せるだけじゃつまらないな。誰か模擬戦やらないか？」
「じゃぁあたしだ。文句はいわせねーぞ」

一歩前に出て名乗り出たのはヴィータ。既に騎士甲冑を着込んでる。

「アイゼン、準備はいいな？」

無言のままアイゼンがカートリッジを吐き出す。やる気は充分のようだ。

「デバイスは今回使わない。後、全力で来るといい。俺のことが知りたいというならば！」
「　上　等　　！！！」
「では、確認だ。どちらかが倒れたら負け。魔力が切れても負けだ。いいな？」
「了解」「了解だ」

シグナムの確認の後、ヴィータと俺が応える。
同時にヴィータが離れる。俺はその場に立ったままだ。
グラーフアイゼンを構えて空へとあがる。足元にはベルカの三角魔法陣。
俺はまだ地上で何も持たずにヴィータを見ていた。

「・・・やる気あんのか、てめぇ」
「そう慌てるな。いまからやる」

そう言って背後へと手を伸ばせばどぷんっ、と音が鳴って空間に手を入れる。
其処から取り出されたのは一つの剣。
ただただでかい刀身に鍔もない剣・・・否、刃。幅広の剣は大きく、そして雄雄しい。

「なんだぁ、その剣」
「まぁ気にするな。やるならさくさくやろうじゃないか」
「けっ。ぶっ叩いてへし折ってやんよ！」

ヴィータが空から急速降下で迫る。

「――――ラケーテンッ！！！」

アイゼンがノズルを噴射して旋回する。勢いに載せて本当に言葉の通りにぶっ叩きに来た。
剣の腹を見せて俺は防御に転じる。少ししてガガアァァァァァン！！！と鉄同士のぶつかり合う音が響く。
勢いにのせたアイゼンをその場で動かずに受け止める。

「なっ・・・アイゼンの一撃だぞ！？一歩も後ろに下がらせられないなんて！」
「いや、中々の一撃だよ、ヴィータ」

剣を振り、ヴィータを跳ね除ける。

「少し。この剣の力を見せよう」
正面に剣を。水平に構え――――――
「真空の剣――――――メル・フォース」

side out

ヴィータside

「真空の剣――――――メル・フォース」
「う、おぉっ!?」

剣の名を口にした途端、剣の形状が変化。突風が吹き荒れてきてあたしへと襲う。
いきなりの事に堪える事も出来ずに撥ねる様に後ろに吹っ飛んだ。
魔法陣を足元に作り出して空中でブレーキをかけて止まる。
すぐさま地面にいた綾人を刺すように睨む。
だがそこにはもう誰もいない。いるのは見極めとして見守る三人の仲間だけ。

「くっ、どこだ!どこにきえたんだあいつ!」
「俺を探してるのか?」

あたしのすぐ背後から声がする。ゾクッ、と背筋に冷たいものが走る。ふりむきざまにアイゼンを振り抜くが、手応えはなかった。
遥か後方でまた違う剣を持っていたのが把握できた。

「音速の剣――――――シルファリオン」

キュ――――――ドンッ！音速の壁をやすやすと生身で乗り越える。おいおい、無茶すぎだろ。生身で音速越えとか。一瞬で懐まで入られた。あいつの視線が刺してくる。冷たい、瞳だ。

「殺傷設定はしてないから安心しろ」

ぽつりと呟く声が全方位から聞こえる。幾度となく斬りつけてくる剣戟は凄く軽くてまるで竹光かなんかで切られてる感じがした。

・・・・これが手加減か？

「・・・・流石に此処まで速度を上げると一撃が軽すぎるな」

残像を残しながらあたしを斬るあいつ。ほぼ全面。全天を覆うようにあたしを斬り続ける。

オートプロテクションすら間に合わないのか。どれだけ速いんだよ、っての！

「嘗めんな、ガキッ！」

全天全てに見えるなら。その全てをアイゼンでぶっ叩く！

「アイゼン！もう一回だ！」

あたしの合図でアイゼンにカートリッジをリロードする。ガォン、と強い音。一気に魔力を増加させる。

「見えなくったってなぁ・・・・全部当てちまえばいいだろうが！」

ブーストを掛けて一気に全方位に向けて旋回。
残像全てをぶち抜く。けど、全部手応えがない。そう、全部。
打ち抜いた残像はその場で消えていく。全部。
あれで当たるかと思ったのにあたしはあいつがどこに居るのか一瞬見失っちまった。
周りを見ながら目だけで探す。居ない。
周りを気配があるか探す。居ない。

「ヴィータ！上だ！！」

不意にザフィーラの声がした。瞬間、見上げるとあの剣を振り上げてるあいつがいやがった。

「重力の剣――――――グラビティ・コア」

掲げた剣が変化する。高速急降下して迫ってくる。
アイゼンを盾にして、さらにプロテクションを張る。
あたしのプロテクションは守護騎士の中でも『盾』ザフィーラと双璧を成すくらいだ。そう簡単に越えられてたまるかっての！

「ガードしたか。だが――――――甘い」

プロテクションと接触するとズンッ、と重い衝撃が圧し掛かる。その場から押し出されるように下がり、一緒に落ちていく。
一瞬にして地面に落とされる。クレーターが幾重にも発生し、地面を穿つ。

「が、はっ？！」

思わず口から喀血しちまった。ごめん、シャマル。あとで治療おねがい。
顔を顰めてるのがわかるくらいに表情が変わってるのが判る。
霞んだ目で近くに立つあいつをにらむとまた違う剣を持ってた。

「封印の剣――――ルーン・セイブ」

ザスッ。

きっとこんな音がしただろう。あたしの腹にソレは突き刺さる。そこであたしは意識を手放した――――

ヴィータｓｉｄｅ　ｏｆｆ

綾人ｓｉｄｅ

クレーターの中でヴィータに突き刺したルーン・セイブを抜くと傍らに寝る鉄騎に、

「まだお前も強くなれる。この敗北を噛み締めて更なる高みへ行け」

返事など求めては居ない。そう言い残してヴィータから離れる。
クレーターを昇りきるとシグナム・シャマル・ザフィーラが待っていた。

「シャマル。あとの治療は任せた。魔力だけを斬ってるから疲労感は暫く続くけどな」
「・・・・活動に支障はないんでしょうか」
「ない」

短く返答してシャマルがヴィータの元へと駆け下りていく。

「最後の剣はなんだ。というか、途中形状が色々変わってたが」
「これは幾つもの力を持つ剣だ。最後のはヴィータの魔力を斬った、とでも言えばいいかな」

今度はシグナムが俺を睨む。正直にらまれっぱなしなんですが。
だがこれで力の一部は見せた筈だ。納得はしないにしろ、理解はしてほしいものだが。

「何れまたお前に挑む」
「あぁ。待っている」

会話が終われればシグナムもヴィータの所へと。

「俺は何も言わない。こういった力の関係は今までにもあったからな」

ザフィーラが擦れ違い様にフォローをしていく。シグナムに遅れてヴィータの所へ。
一人荒野に立ち、模擬戦を頭の中で反芻する。

手加減とはいえ、動きがまだ甘い。剣術に関してはまだセイバーの特訓を受けなければなるまい、と思考する。

「純粋に剣の能力だけでゴリ押しか。もっと上の存在には効かない。――――――そう、イレギュラーがどの程度なのかもわからない以上、戦力は底上げしておかないと、な」

戦略知略奸略。頭を過ぎるのは様々な計略。
之から先に起こりうる事を考え――――――

「管理局は嫌いだが、あの情報収集はほしいな・・・クロノにカマ掛けてみるか」

暫くしてヴィータが立ち上がり、無事を確認すれば守護騎士たちより一足先に地球へと帰還する。

第九話　疑惑（前書き）

連続投稿。
詰まることなくさくさく進めば早いんですけどね。
しかも短いんですよ、今回。

第九話　疑惑

綾人Ｓｉｄｅ

地球に帰ってきた俺はクロノの住むというマンションへと向かっていた。
クロノの家は意外と近かった。
渡された地図に沿って探せば大きなマンションだとすぐにわかった。
お人よしなＫＹ執務官。まさかこの俺を引き入れるとは。
玄関前まできてチャイムを鳴らす。するとすぐに扉を開ける女性。

「あ、君だねクロノくんが言ってたえっと・・・城戸綾人君」
「はい。暫くの間ですがご厄介になりにきました。城戸綾人です」

ペコ、と俺は頭を下げて挨拶をする。

「あ、私はエイミィっていいます。よろしくね、綾人君」

自己紹介を終えて中へと促されるままに上がり、リビングへ。
ここに誘ったクロノとフェイト。なのはもいた。

「あ、二人もいたんだ」
「あぁ、フェイトはここに住んでるから」

あぁ、なるほど、と。納得。ん?クロノの家で来たのにフェイトも住んでるのか。まぁ知ってるけど一応言ってみるか。

「・・・同棲か」
「違う!同居だ!!」

クロノが大声で反逆した。くくっ、こういう真面目な奴をからかうのは面白いな。

「ったく・・・一応こっち側の家人には説明しておいたから。空いてる部屋は好きに使ってもらって構わない」

「助かります。連れは後で合流すると言ってました。後日挨拶にも来るでしょう」

「了解だ」

普段の会話なんだが・・・硬いな、クロノ！

仕事上の会話みたいになってるぞ。見掛けが幼い分、ギャップが出る。

「宜しくお願いします」

短いけど、この場にいる全員に挨拶をして。あとはクロノの母さんが仕事でまだ帰ってきてないというので暫く談笑した。

1時間くらい話してると、全員の表情が一変した。

「綾人。悪いがちょっと僕は買い物に出てくる。エイミィ、後頼む」

「うん、わかったよ。フェイトちゃん、なのはちゃん、荷物持ちお願いできる？」

「「はい」」

「力仕事なら俺が「いや、ゆっくりしててくれ。すぐ戻ってくるから」・・・そうか」

クロノがまずリビングを出て行く。その後をフェイトとなのはが追いかけるように。

ナニカ動きでもあったか。シグナムやヴィータが動いたか。でもあ

の模擬戦の後だしヴィータは待機になってるかもな。
あとで念話を送ってみるか。

暫くしてクロノとフェイトが戻ってきた。多少の怪我が見えたが「途中でこけた」としか説明しなかった。
なのははそのまま家に戻ったそうだ。どこかで小競り合いでもしたか。

その日は静かに終わった。
が、次の日起きたらリンディさんがいて、学校いってないことを知っていて。
既に手続きを終えていたという。フェイトのときの延長上らしく、すぐに終わったらしい。

「フェイトさんと一緒に明日から学校にいけるわよ」

とかいうし。

「先に転入したフェイトと同じクラスになれるといいな」
「いやまさかそんな偶然は」
「・・・・・ふふっ」

リンディさん、なんですかその不敵な笑みは。其処まで管理外世界なのに管理局は介入できるのか！？
後日、学校ではその目論見通りになってしまったのはいうまでもない。

クロノＳｉｄｅ

夜になって緊急アラートか。こうも頻繁に動かれると大変だな。
しかし、彼女らの目的は・・・・それとあの仮面の男が数人か。白が二人と黒の仮面。
あれの正体も探らなければならない。やる事は山積みだ。

「・・・・世界は変わらず慌ただしくも危険に満ちている」

ロストロギアが跋扈するこの世界で。管理局が管理しきらないといけないんだ。
あとでエイミィに画像解析とデータ分析だな。
特に黒い仮面の男はよくわからなすぎる。あいつだけ魔法陣が起動しなかった。
いや、その前にあいつのは魔法なのかすら疑問の域を出ない。
だからこそ分析して対処法を見つけ出す。

「後手に回りすぎだ。なんとかしなければ」

はぁ、と吐く溜息は重かった。こんなに息って重かったのか。
いや、そう思うだけ、思ってるだけかもしれないな。

「せめてどちらかの情報があればいいんだけど」

確定されない要素は沢山。不安要素はごっそりと。
目の前にディスプレイが表示されると其処にはエイミィの顔。

「エイミィ。仮面の奴らの情報の合間でいい。一応だが綾人をスキャンしといてくれ。有能無能くらいは調査しても構わないだろうか

ら」
「どうしてそういうことを考えたかは後で聞くね。了解。すぐやっちゃうね」
「悪い」

あとでなのはのところのシュークリームでも買っていこう。
転送ポートは既に準備済み。数あるうちの一つが既に起動準備段階に入っていた。

「クロノ執務官、お疲れ様です。転送準備出来てます」
「あぁ、ありがとう。いってくる」

サポーターに促されてポートに入る。行き先は管理外世界か。杞憂ならいいんだけど。
そうして僕は次元を渡る。

――――――――――――――――――――――――

綾人Ｓｉｄｅ

朝になって学校に登校。真新しい白い制服がまぶしく見える。
校長先生に挨拶。次に担任になる先生に挨拶。今は教室の扉の前で名を呼ばれるまで待機状態だ。
まさかまた小学校に通う羽目になるとは思わなかったな。
これもリンディ＝ハラオウンの手腕の良さか。偽装の書類を作って街中に紛れ込んで、更に学校に行く書類だのを作るとは。

「じゃぁ、そろそろ入ってきて」

と、呼ばれた。ガラ、と扉を開けて中に入るとわぁっ！と声が上がる。

「じゃぁ自己紹介してもらおうかな？」
「とある事情で転入してきました、城戸綾人です。よろしく」

軽く頭を下げて会釈する。席を促されれば窓際一番後ろ。
・・・・なのはとフェイトとアリサとすずかがいる。
ここまで介入してくるのか管理局！・・・・恐るべし。今度ちょっと見かたを変えよう。うん。
ＨＲが終われば一気に俺の周りに人だかりが出来はじめる。
転入生独特の行事、質問攻め。
難なくこれをこなしていると途中からなのフェイアリすずが加わってきた。

「なによ、あんた。まさか同じクラスになるなんて」
「にゃはは、わたしはうれしいかなー。友達増えるし」
「うん・・わたしも嬉しい、かな」
「そうだね。あんまりおしゃべりできなかったし」

４人のこの言葉で教室の空気が一変した。
負のオーラ満載。クラスメート男子からの嫉妬の眼差し。女子からの嫉妬の眼差し。
あれ？どっちも嫉妬されてね？
そんな中予鈴が響く。なんとか質問タイムは終わったが、それでも嫉妬の視線は一日中消えず仕舞いだった。

―――――――――――――――

エイミィｓｉｄｅ

アースラに戻った私はクロノ君に言われたとおりに闇の書の解析と分析。
あと、白と黒の仮面の存在の調査をしています。

「うーん。難しいねぇ。白い仮面のほうはなんとかなりそうだけど・・・
こっちの黒い仮面のほうはかな～り大変だよ、クロノくん」

メインディスプレイに映る画面は幾つか開いては閉じられて。
キーボード操作しながら目は全ての画像をチェックしているんですよ。

「それに・・・綾人君を疑う、ってのもねぇ。こういう時期と状況だからって気持ちはわかるけど」

ディスプレイに小さく映し出される綾人の姿。
スキャンやらとこの戦艦で持てる技術を駆使している。
時折、その画像がこちらを見てる、のにすぐ気付きました。

「え・・・うそ。こっちに気付いてる？」

まさか、ね。偶然だと思いながら作業します。

「・・・・・なんで！」

綾人君のディスプレイ、完全にこっち見てるよ!?

「いやそんなまさか、ね・・・・!?」

ずっと監視、調査していた画面から「分析完了」の文字が表示されたのでメインに持ってくる。

「・・・・嘘。だって。そんな・・・」

綾人君がリンカーコアを持ってるのは最初の時点で気付いていた、けど。
ゼロと名乗った黒い仮面と魔力反応がほぼ完全と言って良い位に一緒だなんて。

「同調率９９．３％・・・もう同一人物だね。クロノくん・・・・これはやばいよ」

ディスプレイに映る綾人君とゼロの画像を照らし合わせながら私は驚愕していた――――

第十話　邂逅

クロノｓｉｄｅ

地球の海鳴市に借りたマンションの一室。
隣にエイミィがソファに座ってて、モニターを幾つも展開させてる。

「で、クロノ君がいってた綾人君なんだけど。アタリだね」
「・・・・やっぱり」

もう溜息しか出てこないな。

「同調率も９９．３％。もう同一人物でしかないよ。綾人君と・・・・この黒い仮面。ゼロ」

エイミィが出した結論は同一人物。魔力反応も同じなんて出来すぎている。

「だとしたら、僕はとんでもないのを家に上げてしまってたな・・・」
「それはしょうがないよ。だってわからなかったんだから」

エイミィのフォローがチクリと痛む。それでも僕の過失。僕の失敗。
僕の失態。
ならどうすればいいんだ。いや、答えは簡単だ。でもそれをするには――――――

「迷うなら、さ。やらないで後悔するよりやって後悔した方がいいとおもうよ？」

ずっと悩む僕の顔を覗き込むようにエイミィが心配そうな顔で見ていた。
眉間に皺が寄ってたのか顔が固まってる。よく解してから、

「エイミィ。ちょっと仕掛けてみる。サーチャーを飛ばして彼の居場所を教えてくれ」
「了解。でももうサーチャーは飛ばしてあるからすぐにでもどこにいるかわかるよ」

なんとも頼りになる相棒だろうか。僕の考えの先を言って手を打ってくれている。

「でも気をつけてね?彼、サーチャーとかそういうの気付いてるみたいだし」

エイミィから見せられたのは凡そ見られる筈のないサーチャー全てに対して視線を向けている画像一覧。
そんなばかな、と思ったけどその画像のうちの一つからは明らかに敵対心を持った視線を向けていた。
そう、殺気を潜ませて。

「・・・善処する。いざとなったらフェイトとなのはを呼べるようにしておいて」
「了解、だよ」

そうならないようにしたい、ね。
何よりもあの結界を破った魔法・・・・いや、違う。魔力は感じられなかった。
純粋に体術というわけか?それで結界を破るとかどんだけ無茶苦茶

なんだ、彼は。
今もサーチャーを睨むように見続けている彼に会うために。此方から出向こう。
まずは話をしてそれから決める。余裕？そんなのないさ。話を聞いてからでも遅くはない。
闇の書の守護騎士達は聞く耳を持ってくれないのならその関わりを持っているであろうという可能性を信じて。
今はそれを最優先だ。

「じゃぁ、行って来る」
「うん。きをつけて」

エイミィに見送られ、僕は綾人の待つ場所に向かう。

綾人ｓｉｄｅ

さっきからサーチャーが煩く飛んでいる。
全部で・・・１８基か。その全てが俺を捕らえている。ふん・・・
管理局が俺を疑いだしたな。
優秀なのか愚鈍なのか判ったものじゃない。
まぁ、俺の正体でも気付いたのだろう。
じゃぁ待っててやるか。向こうにも話はしないといけないしな、きっと。
何よりも向こうも話がありそうだ。ちゃんとした話し合いになればいいんだがな。
路側帯のガードレールに座り、待つ。喧騒が耳につく。まだか、ま

だか、とその時を待つ。
少ししたら見慣れた顔が近づいてくる。ゆっくりと。

「ずいぶん遅いな。サーチャーを飛ばしてるからすぐ来るかと思ったが」
「これでも一般人には秘匿で動かなきゃいけないんだ。そうほいほいとは魔法は使えない」

俺はふん、と鼻を鳴らして、口調を戻す。

「で？どうしたんです？こんなところまで。態々」

肩を竦めて見せてもクロノの表情は変わらない。どうやら決めたようだ。

「君は・・・ゼロなのか？」
「さて？どうだろうな。管理局の執務官殿？」

その一言で場の空気が変わった。明らかに向こうは知られている、という一歩リードされた感覚に。
俺は躊躇しない。更に畳み掛ける。クロノにターンは渡さない。
一瞬にして俺はバリアジャケットに着替える。黒衣のマントを着た仮面に。ゼロに。

「更に言うなら、こういうのはどうだ？前・闇の書の主に父親を殺された息子」

まるで呟くように次々と言葉を紡ぐ。
口元が笑っている。三日月のように笑ってるのが判るぞ。

「貴様っ・・・何処まで！卑怯者め！！」
「何処まで、というなら全て、と応えよう。実に残念だが君にアドバンテージはないと思え」

くくくっ。口論で俺に勝つつもりか？
まぁいい。その勝とうとしてる気すら俺は殺ぐだけよ。
右腕を水平に横に向け、意識を集中する。周囲に隔絶された結界を張る。

「っ！？結界か！」
「ほう、よくすぐ気付いたな。そこは優秀だと褒めよう」

肩を揺らしながら俺は笑う。腕を組み、顎に手を当ててくつくつと。
激昂したか、クロノ。お前では俺には勝てないんだよ。

「さて、この結界だが、君では破れない。更に言えば完全に外とは隔絶された」

周囲約４ｋｍ。海鳴がすっぽり入るかもしれないくらいに結界を広げた。

「ちなみにこの結界は１００層ばかり組ませていただいた。出たければ私を倒すのだな？
　少し教えてやれば一番外側が物理障壁。一番内側が精神障壁だ。
３０秒でプロテクトを解除しないと更に増えるぞ」

絶望的な中に希望を与える。拷問におけるならいい手段だろうが今は違う。

「これで外との連絡も不可能。サーチャーも働かない。やっと話が

出来るというものだな」
「君と・・・お前と話すことなど」
「ふむ・・・この事件の本質を話そうと思ったのだがな。これは残念だ。何も知らずに振り回されて終わるといい」
「・・・・・なにが目的だ」

ほう。意外と冷静だな。いや、我慢してるだけに過ぎないか、あの顔。ずっと俺を睨んだままだ。
ポケットに手を入れたままだが、恐らくデバイスでも待機状態にして持ってるだろう。

「さて。では話し合いには同意と見ていいのかね？」
「不本意ながら、な。聞いた後にどうするか決める」
「ふふ。いい答え方だ。では単刀直入に大まかに言おう。我等に手を出すな」
「・・・・なに？」
「我等は大局を見て動いている・・・条件さえ其方が飲めば一切のリンカーコア収集を止めよう」
「・・・・見返りは？」
「この事件の終結」

クロノは少しずつ考えながら返答する。だがここで譲歩などして相手に優位な立場は作らせない。
会話しながらも俺は遠方で視ているアーチャーにいつでも迎撃できるようにスタンバイさせてある。
当方迎撃準備あり、だ。

「条件さえ飲めばこの事件を終わらせるといってるのだ。破格の取引だと思うがね」
「その話を信じられるだけの信憑性が君にはない」

「手厳しいな、管理局の執務官というのは――――――ではどうしたらいいかね？」
「・・・・お前の力は危なすぎる。我々が調査して、危険なら・・・・それを管理しなければならない」
ふむ。俺の能力を調べて危険性があれば保護という名目で監禁、という事を言っているようだが。
まずははやてたちをどうにかするのが先か。俺が捕まってもどうにかなるし・・・・いや、だめか。
今はまだ何もないが、何れ本当の敵が出てきた場合対処できるようにならなければならないし・・・
「ソレに対しては交換条件だ。俺の調査は構わないが、管理する云々の前に管理局へと入れさせてもらおうか」
俺の提示に対してクロノが驚いた顔をしてきた。仮面を取り、素顔を晒す。城戸綾人として・・・否、ミラージュ＝ヴィジョンとして。
「まず、此方からの条件は今後一切の守護騎士たちの邪魔はしないこと。主の邪魔をしないこと。
あと、リンカーコアを蒐集するのは知ってるだろう。そちらで準備しろ。それと――――――」
他にも幾つかの条件を挙げていく。その中でもクロノが反応したのは、
「ギル＝グレアムにあわせろ。クロノ＝ハラオウン」
だった。

「彼は闇の書の永久的な封印をしようとしている。お前の父親もそれに関わって――――死んだ」

強い意志を孕む視線でもってクロノを射抜く。そこに嘘はない。だが、それを信じられるのか。最初は敵対し闘い、今尚条件を突き出してきた、この幼子に。

それでも今は信じられないといけない。時間はない。

「わかった・・・出来る限りのことはする。それでも僕が何処まで出来るかはわからない、けど」

「寛大な決断、痛み入るよ。クロノ＝ハラオウン」

仮面を帽子代わりにして恭しく礼。

「しかしなんだ・・・こうしてみると君のほうが年下なのに年上のように感じるのは」

「禁則事項だ、クロノ＝ハラオウン。それに関しては何もいえないが・・・・」

「・・・わかった・・・一つだけ教えてくれ。君は闇の書の主なのか？」

そこか。ずっと引っかかっていたのは。やはり最初の頃に守護騎士と行動したのが今になって実ったか。

「それは管理局の総意か？」

「一応は」

「誰にも言わないのなら、な――――」

「約束しよう」

少し、考える。どこまで情報を出してやろうか、と。

しかし、この事件が終わった後に管理局に入ったほうが後々に優位に立てる。
人材や、場所。その他色々と。
その為にわざわざクロノを誘い込んで話し合いをしているのだ。出来なければ困る。

「違う、とだけ言ってやる。誰かはお前にも伏せておく・・・・今の主は闘う事を善しとしない人だと言う事は言っておく」
「・・・そうか」

それだけ聞ければ満足したのか、何も言わなくなった。
バリアジャケットを解除して私服に戻る。

「では結界を解くぞ。俺とお前は何もなかった。何も起きなかった。いいな？」
「あぁ。わかってる」
「それと、今までと同様にお前の家にも行く。管理局の俺のデータはあとでくれてやるからなんとかしろ」

クロノが慌てて言い返そうとしてる所で結界を解除する。隔絶された世界は通常通りに戻され、人々の喧騒が広がる。
途端、上空に魔力気配を感じて見上げる。其処にいたのは――――――白い仮面をつけた男だった。

――

白い仮面は腕を振ると、また結界を張って来た。俺の結界とは違う結界。

「何か用か？こっちは忙しい身なんで早々と立ち去ってくれると助かるんだが」
「・・・・貴様は危険と判断した。故に此処で貴様を消すことにした」
「・・・・俺を消す？ハハッ、ハハハハハハハハハ。面白いことを言う駄猫だな。貴様の正体など既に知れているというのに！」
「――――――やはり貴様は生かしておいてはいけない存在だ」

確かにお前らから視れば俺はイレギュラーだろうけどな。
こっちもイラギュラーの為に色々動かなきゃならないんだよ。ちゃんと考えてるんだぞ。

「理解しえぬ結界を張るから見ていたが・・・解いた瞬間が隙だらけだ」
「そうか。俺は隙だらけか。ハハハハッ。面白いことを言うな、ハハハハハッ」

もはやこっちが仮面をつける意味がない。恐らく筒抜けだろう。

「クロノ。さっきのは撤回だ。恐らく俺の素顔は管理局に回るだろう。それと同時に俺と一緒に居たお前にも何かがあるはずだ」
「っ・・・まさかそんな」
「組織ってのはそういうものなんだよ。誰かが言えばソレが一気に広がる」
「だからって・・・君を放っては置けない。何よりも・・・今の君は――――――」

そこまで言わせてしまったが、クロノの口を閉じさせる。この会話まで録音されてたら逃げようがない。

「（クロノ。今から一芝居うて）」
「（なに？この状況から逃げられるというのか？）」
「（くくくっ、無論だ。俺はゼロ！知略計略奸略なんでもこいだ！）」

念話が終わると同時に俺はクロノを蹴飛ばす。

「「なにっ？！」」

驚いたのはクロノと白仮面。同時に同じ言葉なんて息ぴったりだな。
更に身を翻して空間を開き、スキマを作る。

「っ――――――逃げるか」
「否。撤退もまた戦略の一つ。また遭おう」

そのまま言い捨てるようにスキマの中へと入っていく。白仮面が追いかけてこようとしたのが見えたが、もうスキマは閉じられた。
そして俺はスキマの中で更にスキマを開ける。そこには白仮面の背中が見える。

――――――そう。

俺はスキマを通じて白仮面の背後に回りこんだ。こういう使い方も出来るのは実に嬉しい能力だ。
気配を閉じたままスキマを閉じて。右拳に瞬間的に魔力を籠めてその背中に打ち込む。
白仮面はなにが起きたかもわからないまま背中に直撃を食らって地面へと墜ちた。
近くでクロノがポカンと見てる。そりゃそうか。

「残念だったな。本当に撤退したと思ったか？裏をかくのは策士として常套手段だぞ」

その場で浮遊しながら男が墜ちた地面を見る。地面には小さな歪なクレーター。

咄嗟にプロテクションでダメージを軽減させたのか、ゆっくりとだが立ち上がる。

「ほう。まだ立つか。しぶとさだけは一人前だな」

「与えられた任務は確実に遂行する」

「任務任務と煩い奴だ。本来なら貴様のような駄動物を相手にするのもおこがましいと知れ」

イラッとした声の中、俺は怒気を孕ませた声で男を見る。

幾度かの殺気。籠めたるは幾十にも及ぶ様々な殺され方をイメージして相手の脳に送り込む。

「・・・・・・・っ！？」

仮面ではなく、素顔でなら。その顔が歪み、冷や汗をたらしているのが見えただろう。

それでも動こうとするのは忠義か、それとも――――――

「退くなら追わずにいてやる。その内会いに行くが。覚悟はしておくんだな。

お前らの主にも言っておけ。あの本と主はお前の好きにはさせないとな」

それだけ言うと、指をパチンと鳴らして結界を破壊する。

「この程度の結界、俺が壊せないとでも思ったか、馬鹿め」

ふん、と一瞥してからクロノのもとへいく。

「さて、帰ろうか」

ちら、とクロノを見れば半眼で俺を見ていた。

なんだというんだ。

「アイツのことならその内わかる。今はもっと重要なことがある。そうだろ？」

「そうか・・・お前は・・・君は何でも知っていそうだな」

「あぁ・・・この事件の行く末もな」

それは興味深いね、等と言いながら通りを歩いていく。仮面の男など既に認識の外だ。

勝手に戻るなり襲い掛かるなりするがいい。まぁそのときは容赦はしないがな。

「あっちにも話をしないといけない。それと、なのはとフェイトには言わないでくれよ？」

「あぁ・・・本当に君は貧乏くじを引くな」

「運はない。そう神様に決められたんでね」

クス、と薄く笑ってから足取りはクロノのマンションではない、他の場所へと向けられていた。

対するクロノは俺とは逆に歩き出す。自分が住むマンションへと。

白仮面は暫く動けずにいたようだ。追いかける気配もなかった。

転移魔法を使ったのか、数分後にはその場から消えるようにいなく

なっていた。

第十一話　夜

クロノと分かれた俺ははやての家の近くまで来ていた。
本題は守護騎士たちとの会話。
管理局との共闘。十中八九恐らくは受け入れてはもらえないだろう。
それでも彼女達と共闘を選んだ以上、話はしておかなければ、と思い向かう。
はやての家の近くまで来ると、大きな車が追い越していく。
そしてはやての家まで行くと、玄関口ではやてがすずかと挨拶してる。

「あれは・・・すずかか。はやての家に遊びにきてたのか」

かなり遠め。約６０Ｍほどはなれた場所にいる二人を視認。さっき追い越した車が止まってる。
少し足を止め、観察。
――――なにをしてるんだ、俺は。
この時間にうろついてるのが見つかれば不審に思うだろうし、何よりクラスメイトになったり、一度遊びにあがった男がいるのを見られればなにを言われるかわかったもんじゃない。
暫く見続けていると、車に乗ったすずかを見送るようにはやてが手を振っているのが見えた。その隣にシャマル。
って、車がこっちに来るな。思いっきり隠れる場所なんかない。
そして案の定。車内のすずかと眼が合った。
止まる車。降りるすずか。逃げられない俺。どうする？

「綾人君、こんな時間にこんな場所でどうしたの？」

すずかが心配そうな顔で俺を見る。やめろ、そんな眼で俺を見るん

じゃないっ！

「なんでもない。少し散歩して「嘘だよね？」・・・むぅ」

簡単にバレたぞ。そんなに今のは目敏かったか？

「ちょっと、乗って」

ぐい、と腕をつかんで引っ張るすずか。車に乗せられ、走り出す。
ずいぶん大きい車ですね。ハイ、リムジンです。隣にすずかが座ってますよ。

「すぐ着くから」

なんか凄みを掛けた顔で俺を見てくる。俺何かした？
すずかとの接点は・・・まだない筈。
あるとすれば・・・・あの能力か。

「お話も。そこでしよ？」

にっこり笑う。はやての家が遠ざかっていく。とりあえず念話しとくか。

「（シャマル、俺だ）」
「（あ、はい。わかります。どうしたんですか？）」
「（お前達に話しておくべき事が出来たんで向かってたんだが今日は無理そうなんで後日時間を作ってくれ）」
「（はい。はやてちゃんには――――）」
「（隠しといてくれ。折を見て俺から話す）」

念話終了。あとでまた行こう。今危惧するべきは隣に座る存在への対処だ。
まさかあの能力に気付いているのか・・・・

「・・・なぁ、すずか？」
「行き先は私のお家だよ？」

にっこり返してきた。いや、行き場所じゃなくてですね？

「だって心配だよ。クラスメイトが夜中にうろついてるなんて」
「いや・・・俺、散歩・・・」
「だから連れ帰るよ。まずはその汚れた服をどうにかしないと」

・・・拒否権はなさそうだ。なので、もう俺は流れに任せることにした。
こういうとき無駄に抗うと駄目だ。寧ろ逆に嵌り続ける。

「綾人君、は・・・・ううん。家についてから話そ？」
「はぁ・・・わかった。理由も言ってはくれなそうだし。でもちゃんと教えてくれよ？」
「それは・・・綾人君もだね」

・・・気付いてるのか、この子は。いや、だとしても『どっち』をだ？
それもすずかの家に着けば判るのか？しかし、何が出るやら身構えてはおこう。

車はやがて大きな館の門を潜り、敷地の中へと入った。
門扉を抜けると車が止まる。

「綾人君はここから歩いてきてね。待ってるから！」

とか言われて俺は車から追い出された。否。突き飛ばされた。
途端、扉は閉まり走り去る。
・・・・・・・え？なにこのプレイ。
近くにスピーカーが生えてきた。スピーカーって生えるんだぁ。

「とりあえず、家まで来てください」

スピーカーからすずかの声が聞こえてきた。まぁ、いいけど。こういう遣り方ならこっちもそれなりに相手しようか。
手を組んで引き抜くと両手に干将・莫耶を投影。まぁ、今回はポーズとしてだ。流石にこの世界で見られたらやばいだろうし。
剣はすぐにずしりと。重量が手に掛かる。だらん、と下げた両手、剣先は外に開く。

「俺に仕掛けたこと、後悔させてやろうか・・・」

本気、は出せない。とはいえ、管理局のサーチャー程じゃないが監視カメラが沢山あるな。メインとカモフラージュと・・・・。
どういうつもりかは知らないが、やってやろうじゃないか？

「さて・・・どうするか」

突撃するポイントを見極める。安全なラインと危険なライン。二つを見遣る。

安全なラインで進むよりも、あちら側が望んでる物を提供するのも癪だが・・・・・
此処で退くのも気分が悪いよな。

「（ハッ、いいねぇマスター。出来りゃ変わってほしいくらいだ）」
「（ランサー・・・今から出てくるとそれだけで面倒になる。聖杯戦争のときとは違うんだぞ）」
「（わかってら。そのかわりせいぜい暴れてくれよ。こっから見てるから）」

ランサーが念話で話しかけてきた。暴れたいのかこいつ。

「（まったく野蛮ですね。それでも三騎士と称えられた槍の英霊ですか）」
「（セイバー、お前さんにゃわからんだろうがな。男ってのは戦いたい時ってのがあるんだよ）」
「（それが今というわけか？相変わらず芸がない）」
「（手前ぇアーチャー！今回マスターがお前の武器を選んだからって調子に乗るなよ！）」
「（・・・もう黙れ。お前ら）」

はぁ、と溜息一つ。頭の中で喧嘩しそうだったので押さえ込む。

「（すぐにお前たちの力は借りることになる。今ではない、近いうちにだ。それまで休んでいてくれよ）」

なんとか宥めるとセイバーとアーチャーは納得してくれた。ランサーはその際に一番槍を約束した上で納得してくれた。

「んじゃ、いい加減痺れを切らしそうだから――――――いくか！」

漸。ある歩法により初速から最高速で低姿勢のままに疾駆する。気配は感じていた。無機質ながら敵意のある気配。
そこを態と狙って突き進む。
地面からパカッ、と蓋が開くようにしてマシンガンやらが飛び出す
飛び出す。質量兵器・・・この世界でなら当たり前か。
俺が元々いた世界でもそうだったし。
向かい来る弾丸を次々と落として突き進む。その速度は止まる事は無い。
屋敷の玄関まで約１００M。たどり着けるかどうか、というよりはタイムアタックで楽しむ顔になりつつあった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

月村Ｓｉｄｅ

メインモニタリングルームでディスプレイに映る少年を見ているのは複数の男女。
真ん中の椅子に座っている女性の隣に立つ男と、その反対側にたつ少女。
その後ろに二人のメイド。
映し出された少年が機関銃の雨をものともせずに切結んで突き進む姿は全員に驚愕を与えていた。
「凄いな・・・何よりも斬る事に迷いが無い。それと、太刀筋が鍛えられすぎてる」
「恭也君でもあの子は凄いって見えちゃうのね」

「剣術に限ってはあの年代ではまず不可能だと思うんだけどな。俺もまだ甘かったのかもしれない」

真剣な眼差しで少年を見続ける恭也。

「おねえちゃん、危険なことはしないって言ったのに」

「ごめんね、すずか。どうしてもあの子のこと、知りたいの。『月村』として――――」

少し困ったような申し訳なさそうな笑顔をすずかに見せる忍。

二人のメイドのうち、一人に対して何か指示を出す。そうするとメイドは踵を返して部屋を出て行った。

「俺も出よう。あの戦い方、興味が湧いた」

「はい。気をつけて」

恭也も続いて踵を返す。すずかが振り向いた先に見えるその背中は今までの優しい姉の恋人という雰囲気から闘う者の背中へと変わっていた。

忍もそれを感じ取ったのか。信じる者への気遣いか。静かに声を掛けて見送った。

第十二話　吸血騎

幾度と無く襲い来る銃弾を切り落としながら進んでたらもうすぐ玄関かというところまで近づいていた。
徐々に銃弾の勢いも減り、玄関の手前までたどり着いた。玄関前まで着けば銃弾の雨も止んでいた。
背後には銃器の無残な残骸の山が積もりに積もっている。

「やっとか。存外呆気無いものだな」

ふぅ、と息をついて干将・莫耶をぶらりと下げて、猫背になりつつあった姿勢はゆっくりと起こしていく。
すると少しだけ玄関が開き、少年・・・青年が姿を現す。
その姿は何処か武士・・・いや、忍者の類のソレ。纏う気は既に臨戦態勢に入っている。

「・・・此処から先へ行きたければ俺を倒してみろ」
「ほう。多少はやれるのが出てきたか。いいだろう、その身に刻んで溺死しろ」

青年もまた、同じように両手に小太刀を持って似たような体勢を取っていた。
ただ、右手に持つのは長剣だったくらいの不協和音。

「御神流、高町恭也・・・いや、不破恭也。参る！」
「フハハハハ、あの御神か。いいだろう、来い。剣戟の極致、此処に見せてやろう！」

興が乗った。多少は楽しめそうだ。しかし、高町と名乗ったか。だ

が、不破か。だとしたらなのはの親族か？

「（アーチャー。経験共有。戦闘術を体躯に合わせて随時俺に流してくれ）」

「（了解した）」

短い返答。瞬時に脳裏に戦術が頭に入り込む。髪が黒髪だったのが一部だけ白髪へと変貌する。

ユニゾン。アーチャーが生前および聖杯戦争において培った戦闘技術と知識は今、俺と共有された。

あちらから・・・恭也から動き出し、俺はそれを待ち構える。間合いに入った刹那、二本の剣がランダムで襲い掛かってきた。

一合、二合、三合。剣と刀が合わさる。鉄と鉄が合わさる甲高い音は空に響く。響く。響く。

交差する剣と刀。刃毀れもおきそうなくらいに火花が散る。

「む・・・アイツほどではないが中々の太刀筋。期待してもいいかな？」

「御神の流技に期待に添えられるようなものは持っては――――――いない！！」

吼える青年。受けに回る俺。だが、一歩、また一歩と俺は進んでいく。恭也は仕掛けているのに後ろへと下げられていく。

徐々に俺が推していく。それは素人目からでも明らか。相手の刃から決意の強い意思が刀から伝わる。

まさに剣で語る、ということだ。

「ほらほらどうした。威勢がいいのは最初だけか？」

「どうかな。これからって事もある」

「なら見せてもらおう、かっ！」

幾度と重ね合わせた剣戟。火花が散り、冷たくも重厚な鉄の音が庭に響く。
お互いに力を籠めた一撃によって衝撃を輪に載せてはじけるように離れた。
お互い同じ距離。地面を滑る足跡がその一撃の重さを量る。

「まさか押されるなんてね・・・流石は御神の剣士、といったところかな？」
「いやいや。俺なんかまだまだ。もっと強い人を知ってる」
「なら――――もうお前に興味もなくなる」

刹那、一足飛びに距離を縮める。剣術の極意の一つ、縮地。すぐ隣に移動した俺はぐ、と拳を握り恭也の顎を突き上げる。
パァンッ！と恭也の頭が弾ける。後ろに仰け反りながらも小太刀を振り置き土産を置いていった。
袖を切り、微かに腕に鮮血の印を残していく。袖の陰に隠れて見えないが、確かに其処に傷ができた。はずだった。
うっすらと血を残して傷は癒えて行く。その速度は異常。それがこの血に宿る不退転の能力。世界が封印するモノ。

――――真祖の吸血騎――――

「ふむ・・・起動に0．3秒。多少のロスがあるか。だが問題ない誤差だ」

瞳は反転していた。赤目の黒い瞳が爛々と輝いている。斬られた腕

の傷を袖の合間から見ては掌を開いたり閉じたり。
既に傷はない。自己再生能力は万全、と。

「おめでとう。君は人ならざる者への初太刀を与えた者として後世まで語ろう」
「有難いお言葉有難う。だが、それは遠慮させてもらおう――――――かっ！！」

恭也が刃を刺突の構えを取りながら一気に駆ける。負けじと縮地である。
瞬間。恭也の身が眼前にあった。柄尻を押さえ、心臓を刺しにくる。
俺は回避しない。否、意識が其処に向いて居なかったのだ。ずぶり、と剣が肉体に入り込む。骨の隙間を抜いて背中から飛び出る。
恐らく、此れをモニタリングしている先では悲鳴すら聞こえるだろう。
俺は其処でやっと痛みを感じて意識を向けた。胸に生える刃。ソレに伝い垂れる紅い雫。

「・・・・・あ？」

小さい声が漏れる。ギロ、と眼下の存在を視界に留めると口角が上がり笑みが浮かぶ。
その顔は、表情は月の陰になって見えはしない。ふ、と恭也が顔を上げると其処には月影に照らされる身と、影の中でもさらに光り輝く両の眼。
ぞくり、と。恭也の背筋に戦慄が走る。ここに居たら危険だ、と本能が告げる。
が、動けない。まるで逆に心臓を？まれたかのように体が動かないでいる。
一体どれだけの時間がすぎたのか、咄嗟に手を離す。刹那、今まで

いた場所に不意に死角からの爪での引っ掻きが来た。
その爪の軌道上に４本の真空が生まれるもすぐに周囲の空気を吸い込んで掻き消えた。

「ふむ・・・これは中々痛覚が残るな。不死とはいえこれでは役にたたなそうだ」

言いつつ俺は刺された剣を引き抜く。引き抜き終わると傷口からぷしゃっ、と血が吹き出た。
ボゴボゴと血が泡を吹いて傷口を修復する。

「化け物、め」
「その化け物がお前のほうにもいるみたいではないのか？御神の剣士はいつから化け物を守護するようになったのだか」
「忍はっ・・・化け物じゃない！」
「そうだ。同じように俺も化け物じゃない。ただ、人を超えただけ。いや・・・超えさせられた、か？」

抜いた剣についた血を振り払い地面に血痕を残す。ゆったりと腕を振り、恭也へと剣を放り投げた。
上手い具合にキャッチした恭也はまだやる気のようだ。押されたとはいえ向こうは無傷。此方が受けた傷は癒えたが二撃喰らっている。だが相手が誰であろうとそれは生身の人間。人生のどのくらいを生きてきたのか。
それに比べて此方は人生を終了し、『　』と契約し更なる生を得て更なる研磨を得た者の知。
之に勝る物は同等のモノ。単一を極めし英なる雄。しかして俺はそれを凌駕する。それは単一個ではなく、全。
圧倒的な剣の差を見せ付ける。強く早くしなやかに。
相手の表情が変化していくのがわかる。体格など無視して俺はそれ

を更に凌駕する。
幾度と無く剣戟を合わせる。そういえば剣士とばかりやってるな。
ヴィータともやったけど。あとは猫姉妹か。
多少とはいえ、英霊の力の前では人は超えられないのか？アレ？俺卑怯？

「くっ・・・まさか此処まで押されるなんてな・・・・・少しマジでいく」

刀を持ち替え、本気の構え、か。恭也の気質が変化する。

「――――――っ」

気質が変化するのがわかる。肌で感じる。ビリビリと。空気が変質化する。眼に視えるほどの殺気。闘気。

「空気が変わったか。早速だがそれで終えるか？」
「あぁ。お前のような子供に使うのは多少引けるけどな。それでもこの技を引き出したお前は誇っていい」

よほど自信のある技なのだろう。

「ならそれを受けきってその後に反撃をすると宣言しよう」

恭也は無表情のままに刀を返す。瞬間疾駆か。初速でトップスピードに乗ったな。体術・・・足運びは自信ありか。
一瞬だけ姿を見失うも、鷹の目からは逃れられない。ぼんやりとだが、姿を捉える。
しかし、英霊の眼を持ってしてもぼんやりとしか見えないくらいとは。

見失った一瞬で背後に回られる。そのまま首を薙ぐ刀が当たる寸前。
俺は一気に加速した。

「――――――なっ！？」

恭也の声が発せられたと同時、その見も現視された。変わりに俺の姿は今超加速による歩法によって気配すら置いていく。
姿も音も。気配すらない。眼や耳、心ですら捉えられない技。
恭也は周囲に細心の注意を払いながら神経を研ぎ澄ませる。見えない場所からの一撃。そう読んだ。
眼球が目まぐるしく動く。呼吸が鋭く尖って行く。瞬間、攻撃の気配が、否、其処に気配はない。
まるで幻のように其処に現れた。迫る一刃。全方位攻撃。８方向からの同時斬撃。

「まさかっ・・・・こんなっ！！」

決死の一刃。そう読んでいたからこそ、目の前の一撃は防御できた。
だが、他の7方向からの攻撃には対処は出来なかった。
やられる、と思ったのか、恭也の身はわずかながら硬直した。死を覚悟したのか動きが緩慢・・・いや、完全に止まった。
刃はそれぞれ急所を狙い、１ｍｍにも満たぬ距離で静止した。

「・・・終わりだ。御神の剣士」
「あぁ・・・・俺の負けだ」

俺は剣を引いて恭也から離れる。恭也はその場で座り込んで大きく息をついた。

「いや、まいった。特に最後のは凄いね。同時に見えたくらいだ」

「あれは同時に見えたわけじゃない。同時に打ち込んだんだ。」
「同時に？」
恭也が聞き返してきた。剣士として、闘う者として。
「多重次元屈折現象（キシュア・ゼルレッチ）という事象の一つだ。本来は一度に3撃を繰り出すが、同時八撃は俺のオリジナル」
「・・・それがどれだけ凄いことか、君はわかってるか？」
「勿論だよ、御神の剣士」
俺は手を差し出し恭也もまた手を出して。引っ張りあげて立たせる。
「すずかから名前は聞いてるよ。城戸綾人、くん。すまないが君を試させてもらった」
「何のために、と聞くのも野暮ですね、それだと」
「なにぶん、色々とあってね。理解が早くて助かるよ。さ、中へ」
促され、玄関を抜けると広いホール。其処を更に抜けて、恭也に連れられていったのは一つの部屋。
そこにすずかがいた。その隣の椅子に座ってる女性と一緒に笑顔を向けて。
「ごめんね、綾人くん。どうしても確認したかったんだって」
「・・・説明はちゃんとしてもらえるんなら」
「交換条件。此方も言うなら、貴方のことも教えてほしいのよ。その血の力を」
こいつら・・・・
「さて・・・何のことやら」

「そこでそうやって逸らすのは肯定してるのと一緒よ？真祖の力を持ってる事を言いたくないのは判るけど」

ぎろ、と鋭い視線を送る。殺気さえ孕む視線は部屋の中にいる生命あるものへと向けられる。

恭也は顔を顰めてそれに対処できる、が。鈴鹿とその隣の女性には少々きつかったか。顔色が悪くなっていくのがよくわかった。

しかし、真祖後からを見破るとは・・・この能力はまだ開眼させてなかったはずだが。

「まず名乗れ。話はそれからだ。こっちの事を知っておいて、俺はあんたらを知らないままだ」

殺気を抑えて会話ができるように場の空気を変化させる。

「失礼しました・・・私は月村の当主、月村忍と申します」

忍、と名乗った女性は椅子から立ち上がり、礼をする。

「俺の事はしってるようだから必要ないよな」

「えぇ。すずかから聞いておりますから。かっこいいひとだと」

「おっ、おねえちゃん！？」

クス、と笑みを浮かべながらとんでもないことをいったな、この人。すずかを見ると顔を紅くして視線を逸らしてる。なんだろうな、この疎外感。

「・・・・で？」

「はい、では本題に。貴方の血の力についてです」

「・・・・説明してもらおう」

「月村は通常のソレとは違い、ある特殊な力を有しております。今はもう血も薄らいでしまいましたが」

忍が語りだす。腕を組んで壁に寄りかかる俺。やる気も無いから半眼で見てるだけだ。

「そのある特殊な力というのは吸血鬼・・・・ヴァンパイアなんです。

そして、貴方にも同じような力を感じ取った。若しやと思い、すずかに連れてきてもらいました」

「自ら不死の軍団に所属していることを曝すとは。潔いというか無謀というか無知というか。

ソレによって己が不利になることも考慮しての事か？」

「はい。貴方は信頼しても良い、との判断を。私が下しました」

つまらない顔で俺は話を聞く。

「で。どうするというのだ」

「この地で荒ぶるのならそれを押さえ込もうかと。逆に何もしないでいただけるのなら・・・どうでしょうか」

つまり、暴れるなら介入。静かにしてるなら黙認、ということか。

「見返りは？」

「すずかをつけましょう。まだ幼いながらその身の力は充分ですから」

すずかを見ると顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。なるほど、より強い力を手に入れたいということか。

俺の眷属としてすずかを差し出すとは。この女・・・・・

「・・・まぁいいだろう。すずかを使うのが多少イラついたけど」
「寛大な処置、痛み入りますわ」
恭しく礼をする忍。俺は心底つまらなそうな顔をして会話をいつ終わらせようと考えていた。
「そこの剣士・・・御神の剣士。不破、といったか。高町なのはとはどういう関係か」
ふと恭也に視線を向ける。
「ん？なのはは俺の妹だ」
「・・・・・不破、は御神の分家の名か。どちらも名を持ってる、と」
「そういうことになる。有事には不破の名を持って当たる」
なるほど、と小さく呟き。
「話は終わったか。なら俺は帰る」
踵を返して俺は部屋を出ようとする、と。
「今日はもう遅いですから。部屋を用意します。ゆっくりしていってください」
「いや・・・悪いが「泊まってってくださいね」・・・・・了解した」
・・・・・なんだこの圧迫感。そして俺は客室一つを借りることになった。
後日、眷属の儀式をすずかとすることを約束して。

追記。恭也とはまた再戦の約束をした。その時にはもっと強い人も連れてくる、とも。

閑話　主人公紹介

城戸綾人

リンカーコア銘：ミラージュ＝ヴィジョン（略名：ミラ）
年齢：９歳（初登場時）
容姿：少し長い黒髪。前髪は魔力変換の際に一部だけ白く変化した。
そこ以外はルルーシュ＝ヴィ＝ブリタニア。
身長：１４４ｃｍ。（９歳時点）→１８０ｃｍ（１７歳時点）
魔力光：漆黒。

バリアジャケット：黒い外套と黒い楕円形の仮面。黒のボディスーツ。所謂ゼロ。仮面なしも任意で可能。

筋力：ＳＳＳ
耐久：ＥＸＳ
敏捷ＳＳＳ
魔力：ＥＸＳ
幸運：Ｂ
宝具：ＥＸ
対魔力：ＥＸ
魔術回路：６５５３５本

デバイス

神剣・神威
神の威を「カ」る者が持つという神剣。半有機生命でもある。

サーヴァントユニゾンデバイスが手元に無い場合、メインとなるデバイスとして扱う。
現在は右手首のブレスレットで待機状態にしている。

約束された勝利の剣
言わずと知れた伝説の聖剣。ＡＩにはアーサー王。ユニゾンデバイス。
完全ユニゾンの際にはセイバーそのままの姿へと変わる。幾つかモードがあり、モードリリィはその一つ。

干将・莫耶
中国製の黒白の夫婦剣。ＡＩはエミヤ。ユニゾンデバイス。
完全ユニゾンの際には紅き弓騎士へと変貌する。

刺し穿つ死棘の槍
既に刺したという因果の逆転を起こす紅の槍。ＡＩはクー・フー・リン。ユニゾンデバイス。
完全ユニゾンは今だ不明。出番があまりないのが少し可哀想である。

天地乖離す開闢の星
嘗て天地を別け創造したという乖離剣。ＡＩはギルガメッシュ。

保有スキル（現在発覚されているもの）

スキマ
任意の空間を切り裂き、スキマを作り出す程度の能力。空間移動等

に用いられる。
移動だけでもなく中の空間で寛ぐ事も可能。現在リィンフォースが在住している。
使い魔であるサーヴァントも此処に出入りが可能になっている。

投影
自身が思い描いた幻想を形にする右極の魔術。

テン・コマンドメンツ
所持者の意思によって１０の顔を持つ剣。
だが、レイヴェルトとしての能力は無いので９つの属性しか扱えない。

王の財宝
所持した財全てを其処に保管する能力。いつでもどこでも取り出し可能。

真祖の吸血騎
吸血鬼の上位。自己再生能力はほぼ瞬間的に行われる。陽光は既に克服済み。

クルダ流交殺法
伝説の傭兵王国に伝わる秘伝の格闘技。

直死の魔眼
死を理解した上で根源へと至ると得られるというバロールの魔眼。
死が線と点で見えるようになり、有機物無機物全てに綻びを見つけることが出来るという。

第十三話　起動

すずかとの眷属契約も無事終わり、月村とのパイプができた。
多少、すずかに驚かされた所はあったが、概ね問題はなく終了した。

実はまだヴォルケンリッターへの対談は実行されていなかったりする。
はやての容態がちょっと悪くなったりで実行出来ず仕舞いなのだ。
あれからはやてとも逢っていない。
シャマルがいうには蒐集も止まっているらしく、管理局もあわただしくは動いては居ないのが現状である。
まぁ、セイバーとランサーを行かせてるし、何かあるとは思えない。
アーチャーは綾人の守護で霊体化してずっと傍にいる。
その間に綾人はクロノと相談して臨時手伝いという形でクロノの補佐になっている。
クロノは相変わらず書類とにらめっこだ。そんなクロノを見て綾人は鼻で笑う。

「今笑ったろ！」
「笑ってない。嘲ったんだ」
「同じだ！」
「違うぞ？貶してるんだ」
「余計性質が悪いよな！？それ！」

とまぁ綾人もクロノ弄りも慣れたものになり。「慣れるなよ！」ん？
まぁともあれそんな毎日が続いている。

「クロノ、そろそろ学校の時間だから」
「あぁ、わかった。また帰ってきたら」

あぁ、と返事してから綾人は着替えに部屋へと向かった。
着慣れた白い制服。聖祥の制服に着替えて鞄を手に。部屋を出るとフェイトがいた。

「おはようフェイト。遅刻するよ」

部屋から出てきたフェイトはまだパジャマだった。いくら綾人がはやめに登校するからとはいえ、そろそろ準備いてないと危険な時間だ。

「あ、もうそんな時間？すぐ準備するね」

バタン、とまた部屋に入ってしまうフェイト。

「先、行くぞ？」
「あ、まって。すぐ終わるからっ！」

フェイトの部屋の扉の前で待つ。少ししたらフェイトが出てきた。
同時に玄関から呼び鈴がなる。

「あ、なのはだ」

呼び鈴だけで感知できるなんて。この二人・・・・念話ですね。はい、すいません。
フェイトが綾人の腕を引っ張って玄関へ。途中エイミィに挨拶して。
リンディの弁当はフェイトだけ受け取った。
綾人は自分で作ったのを持っていく。いや、正確にはアーチャーのお手製だ。

「「いってらっしゃい」」

エイミィとリンディに見送られて。玄関前で待ってたなのはと合流。登校する。

途中、アリサとすずかと合流して5人で学校へ。他愛無い会話をしながら毎日を過ごす。

「そうえいばあの子。すずかが前に言ってた子」

切り出したのはアリサだった。恐らくはやてのことだろう。まだ直接逢ってはいないらしい。

「まだ逢うの難しいのかな」

「んー・・・今度聞いてみるね。そうだね、少し考えてみよう」

フェイトとすずかが話し合っている。

「うん。まとまったら言うね。それまでは・・・秘密♪」

すずかが口に指を当ててる。そのまま学校に着いたなのは達は授業を受け続ける。

そんな毎日が。ずっと続くと思ってた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

―――――

綾人Ｓｉｄｅ

クリスマスイヴに一人でいるのはなんともむなしいなぁ、とか。

まぁ、小学生でそんなパーティだのがあるわけでもなし。
そんなこんなで一人で駅前にいたりする。なのは達ははやてのお見舞いにいったらしい。
結局俺は誘われなかった。
・・・・・・・・・・・・・・いいんだけど。いいんだけど！

「（ミラ！ミラ！聞こえますか！）」
「（ん、なんだセイバー）」
「（・・・・夜天の書の管制プログラムが現れました）」
「（――――――っ！？）」

セイバーと念話をしていると結界に包まれていくのを確認した。海鳴市全体を包む程の巨大な結界。

「（何故今まで気付かなかった！というよりも何故事後にまわるんだ・・・・・っ！）」
「（申し訳ありません。湖の騎士の通信妨害と結界で連絡ができませんで・・・・）」
「（っ・・・・わかった。そっちに向かう。状況説明はその間に）」
「（了解しました）」

まさか既に起動しているとは。どうしてこうなった！何故だ！蒐集は止まっていたんじゃなかったのか？
――――状況は止まらない、か。対処方法もいくつか考えてある。
それを実行するのみ、だ。

「アーチャー。向こうに着いたら即戦闘開始だ」
「ふむ。若干の最悪のシナリオか。いいだろう」

霊体化してたアーチャーに声をかける。中心点は――――――あそこ

だ！
結界の中で幾つかの気配っが固まってる。セイバーとランサーもそこにいるようだ。
が、戦闘はまだ起きてはいない。それも気配で把握できた。
ビルからビルへと飛び跳ねるように移動する。
近づくに連れて強い意志が肌に刺さる。これは、これが、夜天の、闇の書の意志、か。
いまのうちにバリアジャケットに着替えておく。

「マスター。どうやらあれはもう取り返しがつかなくなってきてしまっているぞ」
「わかってる――――――それでも俺は彼女を助けたい」

助けたい。最初は違ったんだけどな。今はもうその気持ちで一杯だ。
此れから起きることをなまじ知ってるからこそ、か。
できれば全員を助けていければ・・・・ってこの感覚はなんだ。
――――――とりあえず救えるものは全て救う。それでいい。

「マスター、私は単独行動を取らせてもらいたい」
「ん。何か思うところがあるんだな。いいだろう、許可する」
「すまないな」

アーチャーが離れる。中心点までもう少し。気配が少なすぎる・・・・状況が見えなすぎる。
静かにビルの上に降り立ち。幾つかの見知った顔とで。

「なん、だ・・・・・これは」

この場の現状に思わず声が出た。守護騎士達の服が落ちている。はやてがいる。

なのはとフェイトはどこだ・・・・って、結界に閉じ込められてるのか。
そして――――白い仮面。

「（クロノ。状況はわかっているか）」
「（あぁ、たぶん君よりかは理解してる）」
「（なら今から特攻だ。白い仮面へのフォロー頼む）」
「（了解だ）」

クロノと念話を短く済ませ、戦闘準備。そういえばセイバーたちが居ないな。

「（セイバー？いまどこだ）」
「（ミラですか。今別の空間に飛ばされてしまって帰還中です。ランサーも一緒です）」
「（・・・そうか。無事ならいいんだ――――頼む）」

セイバーとランサーの無事を速攻で確認した瞬間、はやてから膨大な魔力があふれ出る。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ！！！！！」

泣け叫びながら絶望に打ちひしがれる。同時に夜天の書が完全起動を開始する。
同時になのはとフェイトの結界も破られる。
膨大な魔力の奔流の中ではやてが変化していく。濃い茶髪は銀色の長い髪に。
文様を体に刻み、漆黒の翼を振り、悲しみを憂う瞳はただ冷たく。
右手を頭上に差し出せばそこには黒い闇の魔力の塊が生成された。

「主の願いを――――――そのままに」

呟く管制プログラム。その眼には流れる涙が溢れていた。

「なのは！フェイト！一旦下がれ！」

「「えっ！？」」

いきなり名前を呼ばれた二人は一瞬だけ気が逸れたがすぐに防御魔法を使っていた。刹那、闇の塊が二人を襲う。

遠くで白仮面がそれを見てる。気配でわかる。だがいまは相手にする必要はない。あっちの相手はクロノとあいつに任せる。

今俺がするべきは――――――三人を救うことだ。

第十三話　起動（後書き）

かなり間が開いてしまったのできりのいい場所でぶった切り投稿です。

続きはなるべく早くあげたいものです。

第十四話　闇の書

「なのは！フェイト！一旦下がれ！」

名前を呼んだ。此れ以上ないくらいに大声で。何でだろう。
管制プログラムが魔法を使ってきたのが一瞬でも見えたので。
それが二人を包むように放たれていくのが見えたわけで。
その一瞬で闇の魔法はなのはとフェイトを包んでいった。

「く――――――っ！」

ギチ、と歯噛みする。まさかやられた？とさえ思ってしまった。
が、デバイスが。レイジングハートとバルディッシュが起動して盾を張っていたのに気付いたのはその一瞬の後だった。

「なのは！フェイト！」

俺はもう一度名前を呼んだ。闇から抜けた二人は無事、か。フェイトが高速移動で範囲外に逃げたようだ。
・・・俺の傍にははやてが変化した完成プログラム唯一人。

「闇の書・・・いや。夜天の書よ。闇と破壊の権化、か」
「私は・・・主のため。守護騎士たちのため」
「そうか・・・なら、私も破壊してみろよ――――――俺はお前になんか負けやしないぞ」

もう会話は無理と判断。自分の思いを貫く為に行使する存在になったか。
能力解放。魔眼発動。神の威を代る剣を右手に俺は戦闘態勢に入る。

「お前が何と言おうとな！はやては助ける！」
「「そうだよ！」」
いつのまにか後ろにきていたなのはとフェイト。
「友達を助けるのは、当たり前なの！」
「誰も悲しい思いは・・・させない！」
「おまえら・・・いいのか？」
意識だけを向ける。視線は管制プログラムに向けたままだ。
「だって。もう知り合えたもん。友達だもん。お話できるならちゃんとしたい」
「うん。私も、そう」
「だから・・・貴方も力を貸して。はやてちゃんを助けたいの！」
強い信念は心に宿ったか。いや、既にか。胸に宿るのは負けない不屈の心、なんてな。
「・・・・・なのは。フェイト。俺も、はやてを助けたいんだよ」
仮面に手をあて。後頭部からスライドしていき、外す。
素顔を晒し、二人に向かう。
「うそ・・・あやと、くん？」
「そうか・・・きみだったん、だね」
「・・・いくぞ。はやてを助ける。話ならあとで充分してやる」
「うんっ、うんっ！」

俺たち三人は向きなおし、管制プログラムへと構える。

「（アーチャー。援護）」

アーチャーに念話を飛ばしてタイミングをずらさせる。
刹那、螺旋の刃が後方から俺達を縫うように高速で突き進んできた。
風を追い抜き、空気を切り裂き、ただ一直線に。

「　　盾　　」

ぽつりと呟く。前面に魔法陣を形成して螺旋剣を止める。
衝撃波が起こり、爆発。爆煙が吹き荒ぶ。

「今！」

俺の掛け声でなのはとフェイトが一緒に弾けるように移動した。
フェイトが上になのはが下に。位置を確認したらすぐさまアクション。

「「ファイア！シュート！」」

同時砲撃。それでも管制プログラムは動かない。両手を広げてシールドを展開した。
ダブル砲撃をものともせずに受け止める。

「穿て・・・ブラッディダガー」
「だがそれは無駄に終わるぞ！」

周囲に赤黒い短剣が生成される。だが瞬動で俺は管制プログラムの懐まで入り込んでいた。

魔眼でそれら全てを叩き落し斬る。短剣は全てその場で「死」んでいく。

「おまえは・・・邪魔をするな」

「はやてを返してくれれば大人しくしててやるさ」

返す刀で管制プログラムに斬りかかるが、後ろに飛んで回避された。

「咎人たちよ。滅びの光を――――」

魔法陣に桃色の光が集まっていく。魔力も膨れ上がっていく。

「――――星よ集え。全てを打ち抜く光となれ――――貫け、閃光」

「「「っ!?」」」

俺となのは、フェイトは眼を見開いた。まさかスターライトブレイカー、だと？

しかもあの魔力収集率はなのはの比じゃない。

「散れっ！」

俺は合図をしてなのはとフェイトを後方へと下がらせる。盾になるように二人の直線状に割り入りながらだ。

発射シークエンス、カウントダウンが始まる。つまりはゼロまでは安全が保障された、というわけだ。

俺はスキマを遣ってなのはたちの所へと移動する。

――

既になのは達は地上に降りていた。俺はその後方に現れる。

「フェイト！なのは！」

声をかけると二人はキョロ、と周囲に注意を向けていた。
その先にある気配を探す。二人は二人を探してた。

「あのー！すみませぇん！危ないですからそこでじっとしってくださーい！」

「・・・ぇ？」

「今の声って・・・」

なのはが二人を見つけた。って、あれすずかとアリサじゃないか。
アリサは俺たち三人を見てよくわかってない顔だ。
逆にすずかは・・・すぐに理解した顔でこっちを見て小さく頷いた。

「エイミィ！転送！」

「わかってる！ちょっとまってて！」

俺はエイミィに転送をするように指示を出す。

「スターライト・・・ブレイカー・・・」

管制プログラムの右手が魔法陣を叩く。同時に桃色の魔力光が撃ち放たれ・・・放射された。一度はまっすぐに。そしてドーム状に拡がっていく。

「二人とも！そこでじっとして！」

アリサとすずかにフェイトが結界を張る。なのはもレイジングハートに指示を出してプロテクションを起動させた。
光の奔流が包んでいく。俺も神剣を持って対処する。

「なのは、フェイト。二人を護れよ！」
「「えっ！？」」

俺は数歩前に出て、最前線へ。驚く二人を尻目に立ち塞がる。
今だ魔眼は発動したままだ。「死」の線は見える。見えて、いる。
スターライトブレイカーの死の線は見えている。あとはそれを斬るのみだが――――
俺は最後尾のアリさとすずかの場所までさがる。

「アリサ、すずか。ここで待ってろ。終わったら話す」
「・・・・本当？」
「あぁ。俺は冗談は言わない」
「・・・・わかった」

アリサが渋々納得してくれた。

「すずか。アリサを護ってやってくれ」
「・・・うん」

薄く、でも強く笑みを浮かべて。すずかと短く会話。
視線が絡む。すずかからの強い視線。

「・・・・まかせた」

それだけ。そう、それだけだ。今は長い言葉なんかいらない。信じた言葉だけあればいい。
俺は背中を向けて。向かってくる光に眼を細め。前へと進む。

「フェイト。なのは。ここは任せる。俺は――――――あいつを止めるから」

ザッ、ザッ、と歩を進めてなのは、フェイトと超えていく。眼前に迫る光の前で。
俺はスキマを抜けていく。

――

スターライトブレイカーの極光はドーム状に結界を蹂躙する。
今までいた場所まで包まれていく。
良くじっとみればプロテクションで防御しているのがわかった。

「（アーチャー。セイバーとランサーの反応がない。感知できるか？）」
「（やってはいるがどうも反応が薄いのが困るな。あぁ、実はさっきから感知はできていて語り掛けてはいるのだが）」
「（・・・・早く言えよ！？）」

くそ、そうだよこいつこういう性格だよ！念話でくつくつ笑ってん

じゃねぇよ！チクショウ！
ともあれ、サーヴァントの協力は仰げない。アーチャー、は。メインで張ってはくれないしな。

「（アーチャー。隙を見てもう一回援護）」
「（了解した）」

スキマを縫って管制プログラムの背後に。闘気と殺気を篭めて影をスキマにしてぬるり、と姿を現す。

「よう。さっきぶりだな」
「　　っ　　」

さほど表情も変わらないままに振り向いてきた。まだスターライトブレイカーの魔法陣は残ってるな。
徐々に光も止まり、荒ぶる空間は落ち着きを見せ始める。

「さぁ、はじめようか。はやて救出の舞台だ」
「　主は　　もう　　我が内にある　　」
「それを！引き剥がしてやるさ。私に――――――俺に！」

「　　不可能なんかない！！！
　　」
その言葉が合図。アーチャーからの援護射撃がマントを抜いていく
死角射撃となる。
細く細く鋭利にされた螺旋剣が管制プログラムの漆黒の羽根を一つ
穿っていく。
「　　く　　っ　　」
小さく呻いて後方へと距離を取る。俺はそれを許さない。あいつよ
りも早い歩術で一気に詰め寄る。
ブラッディダガーを全方位に射出しながら俺の追撃を許さない。で
も俺はその全てを打ち落とした。と思った。
幾つか斬り残しが出来た。流石に神剣ほどの長さでは小回りが利か
ない。懐に入ってしまうと対処が難しい。
長剣のデメリットは此処にある。そう感じながらもブラッディダガ
ーが俺の体を切り裂く。

「くっ・・・」

今度は俺が小さく呻いた。それでも傷はすぐに塞がって癒えていく。
とはいっても痛みはあるものだ。
斬られれば痛いし、打たれれば痛い。突かれれば痛いし。痛覚は生きている証、なんて誰かが言ってたな。

「お前の中に取り込んだはやてを返せば手荒なことはしたくは――
――なかったよ」

魔眼が発動する。死を理解し、根源へと至る死の魔眼。

「最悪、お前を殺してはやてを取り出す」
「主　は　夢幻の世界に。　覚める事の無い
永遠の夢の世界　だ　」

現実から逃げたか。目の前で守護騎士を消されたのを見れば当然か・・・
だからってここまでしていいってわけじゃない。

「ふぅ・・・やれやれ。どうやらお仕置きが必要のようだ。夢は覚めるものなんだよ。永遠はない」

はっきりとした俺の言葉が刺さる。プログラム、は。無表情のまま俺を見ている。

「主は　この世界　をいらないと　仰った。　それならこの世界など　」

「　　なくなればいい　　」

「んな駄々っ子みたいな言い訳聞く耳持つ気もないわ！塞ぎ込んだ引きこもりめ！」

互いに魔力が肥大していく。魔力が触れ合えばスパークを起こして衝撃波が誕生した。

魔力の奔流は逃げる場所を見出せずに停滞しながら――――――――――

――――――――――――――――――――弾けて上空へと駆け上る。

魔力の奔流は渦を巻いて上空へと駆け上り、消滅した。

結界はかろうじてまだ起動している。

俺と「あいつ」はまだ空中で立っている。立っているなら。まだやれる。

俺が立ち続けているのなら。戦いを続けているのなら。敗北は無いのだから。

何より、あいつらが後ろにいるんだ。なら、俺はソレを全て護ろう。

おまえも！

「闇の書の管制プログラム！いや、夜天の書。お前に救いの手を差し伸べる！」

第十五話　諦めない心（前書き）

遅くなりました。仕事って大事ですね。すいません。

第十五話　諦めない心

はやてＳｉｄｅ

闇の中。

ひとり？

ううん、ちがう。

傍に誰かがいる。暖かい気配。

目の前に映るのは外の世界。

閉ざしてしまったわたしの世界。

その外で。

友達になりたいと思ってた人が。人たちが。

そして――――

「　　主　　」
「っえ・・・きゃ、わっ！？」

ふと、後ろから声がした。びっくりして声が上ずってもうた。
後ろを向いたら銀髪のべっぴんさんが立っとる。

「落ち着いてください　　ここはあなたの世界ですから　　」

う・・・なんや、この敗北感。
でもこの映像・・・なんや。なのはちゃんにフェイトちゃん。綾人くんまでうつっとる。

「あれは　　今私が見ている視界　　今起きている現状です　　」

不思議な力で飛んだり撃ったりしとる・・・あれが魔法の力なんやろか。
あかん、みんなが傷ついてまう・・・それは嫌やなぁ。

「なぁ、なんとかならへんのかなぁ？」
「　　そう、ですね　　」

なんや困った顔をしとる。視線が泳いどるんも見える。私、意外と冷静やなぁ・・・
シグナムが。シャマルが。ヴィータが。ザフィーラが。
　　皆消えてもぉたのに。
外の世界では綾人君が剣をもって闘ってる。

だれと？

なんで？

「あかん！あかんわ！なして綾人くんが闘っとんねん！」

「　主が　見限ったこの世界を闇　に　染める　ために。

その行動の　制限を受けています」

「つまり？」

「あの少年　が私の行動を　止めているのです」

この子の動きを綾人くんがとめてる、っちゅーわけか。それになのはちゃんもフェイトちゃんも。

て、なんやでかい力があふれとる――――――これが魔法の力なんか。

――――――――――――――――――――

――――――

なのはＳｉｄｅ

綾人君が任せていっちゃった闇の書さんのスターライトブレイカーをなんとか防ぎきって、エイミィさんにアリサちゃんとすずかちゃんを転送してもらった。

魔力光が消えてから、闇の書さんが居るところでは既に戦闘が再開されてるし。

すごい・・・・綾人君が此処まで凄いなんて知らなかった。

隣のフェイトちゃんも驚いてる。

「すごい、ね・・・」
「うん・・・綾人があんなに闘う人だなんて知らなかったよ」

フェイトちゃんが賛同してくれた。本当に学校で普通に接してたあの綾人君なの？って思っちゃう。
あんなに長い剣を振り回してるのに軸がぶれてない。お兄ちゃんやお姉ちゃんの修行をたまにみるからそこらへんわかちゃう。
でもあれデバイスなのかな。それにしては魔力を感じない・・・他の何か・・・なんだろう。よくわかんない。
魔力は凄く大きく感じる。
でもなんだろう。よくわからない。

「綾人君の援護しよう、フェイトちゃん！」
「うん、一人で戦わせてたら危ないよ」

フェイトちゃんもやる気だ。私も準備。レイジングハート、いけるよね？左手のレイジングハートが応えてくれる。
フェイトちゃんもバルディッシュが応えてる。やる気は充分、魔力も全開。

「よし、それじゃぁ全力全壊やっちゃうの！」

ぐ、と力を溜めて空を飛ぶ。高火力重武装の私が先に飛んでも高機動型のフェイトちゃんがすぐに隣についた。

「なのは・・・まずは私が隙を作るから」

フェイトちゃんが攻撃態勢に入りながら呟いてった。
私を追い抜いて金色の魔力光の尾を引いて闇の書さんへと向かっていく。

速いなぁ。でもそれがフェイトちゃんのトクベツだし。私は私でトクベツをやるだけ。

ねぇレイジングハート。力を貸して。ずっと練習してたアレを使うのかどうかはまだわからないけど――――――

――――――――――やれることはきっちりやっておきたいから！

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――

フェイトＳｉｄｅ

なのはから離れた私は一気に闇の書まで近づいた。綾人が闘って足を止めてくれてるのが幸いしたね。

「綾人！手伝うよ！！」

綾人と闇の書が切結んでる中、上空から滑空してバルディッシュをザンバーフォームに変えて切りかかる。

ザシュ！と抵抗なく翼の一つが斬れた。

「いける！なら！」

手応えは在った。このままいければ・・・・・でもこの人を傷つけたら・・・はやてはどうなるのかな？

はやてが戻ってきたら同じように傷ついて・・・・ううん、今は考えちゃだめだ。やれることをやるだけ。

なのはから教わった、教えてもらったのは絶対諦めないこと。
すぐにおいつくって、そういってたから。私も諦めない！

「フェイト、お前がメインで仕掛けろ。俺はフォローに回る」
「うん、わかったよ」

少し遠くから綾人が声をかけてきた。私は視線を向けずに応える。

「　　邪魔が　　はいったか」
「あなたの動きを止められるなら――――――いくらでも邪魔をする！」

バルディッシュを持ち替えて対峙。綾人が後方で構えるのが気配でわかった。だから――――――思いっきりいく！

「バルディッシュ！バリアジャケットパージ！」

一気に魔力を膨れ上げさせてフィールドを作り上げる。外殻を外し、速度重視の姿へと変身。
絶対はやてを助ける！って気持ちなら、きっと守護騎士の皆と同じ。
シグナムと同じ。頑張れる。

「フェイトちゃん！綾人君！」

なのはの声だ。
あぁ、これでもっと頑張れるよ。大切な人が後ろに居てくれるなら私はきっと頑張れるから。

「貴女を・・・・止めます」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

綾人Ｓｉｄｅ

なのはとフェイト。そしてはやて、か。夜天の書のプログラムがどこまで肉薄してくるかはまだわからない、な。

「なのは。フェイト。はやてを戻すために俺はやるべき事がある。二人で・・・・やれるな？」

「うん。それ、はやてちゃんのためになるんだよね？」

「理由は・・・きっと聞いてもだめだろうね。なら速やか且つ迅速にお願いするよ」

「ソレは・・・秘密だ」

背面にスキマを作り出し、戦局を一旦離脱する。

「（アーチャー。セイバーたちを迎えにいく。座標を）」

「（了解した。もう近くまで来ているぞ。私も行こう）」

この世界でいう次元世界に飛ばされたらしいセイバーとランサーを迎えに行く。スキマを遣えば結界も通り抜けられるのは聊か反則気味でもあるなぁ。

これから先に起きる事象ではサーヴァントの力は必要になる。早めに呼んでおかなければならない。

あぁ、二人の魔力を感知した。なんだもう近くまで来てるじゃないか。

「だから近くまで来ているといっただろう。我がマスターも意外とおっちょこちょいなんだな？」

「アーチャー。お前あとで覚えてろよ？」

すんげぇニコニコ笑顔でアーチャーに乱暴に言い放つ。

このやろう、後で色々やってやる。

よし。戦力確保はすぐにできそうだ。すぐにでも戻ってなのはとフェイトの援護に回らないと。フォローするって言ったしな。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

なのはＳｉｄｅ

「はやてちゃん！闇の書さん！止まってください！」

「お前たちも　　我をその名で呼ぶのだな　　」

静かな声が静かに響く。なんて綺麗で澄んだ声なんだろう。

「それでも私は主の願いを叶えるだけだ」

「願いを・・・叶えるだけ？」

闇の書・・・綾人君から聞いた夜天の書を開き操りながら、魔力を流動する。

奔流となる魔力は実体化し、植物の蔦のように伸びて私とフェイトちゃんに絡み付いて動きを封じてきた。
動きを封じられてプロテクションも間に合わない。

「そんな願いを叶えて・・・はやてちゃんは本当に喜ぶの!?嬉しがるの!?
心を閉ざして何も考えずに主の考えを叶えるだけで――――それだけでいいの!?」
「我は魔導書――――ただの道具だ」

縛られても私は諦めない。ジッとあの綺麗な人を見続けながら叫ぶ。
声が届くまで。
ツゥ、と一筋の涙が頬を伝う。それを私は見逃さない。

「だけど言葉があるでしょ!心があるでしょ!そんなのおかしいよ!
本当に心がないなら――――

――――

泣いたりなんかおかしいよ!」

私の声を合図にフェイトちゃんの魔力が増大する。

「バリアジャケットパージ!」

叫び声一閃。魔力を膨れ上げさせて蔦を消し飛ばす。爆風と爆煙が周囲を包む。

「悲しみなどない？・・・・・そんな言葉そんな悲しい顔で言って・・・誰が信じるもんか！」

「武装を解いて！お願い！」

フェイトちゃんと私の声を届けさせる。願いは――――光に乗せて。

でも。それでも。

刹那。

地震が起きたかのように地面が揺れて道路から火柱が立ち始める。

空気もそれに呼応して震えだす。

「早いな。もう崩壊が始まったか。もうすぐ私も終わる。暴走すればこの世界も終わる。

その前に・・・主の望みを叶えたい」

立ち上る火柱の中、闇の書さんが魔力集中を開始する。

私とフェイトちゃんの周りに。

手をかざすと、ブラッディダガーを精製した。

「　闇に　沈め　」

ブラッディダガーが加速集束して爆煙を巻き起こす。

フェイトちゃんがいち早く爆風の中から復帰して爆煙の中から姿を現す。私を抱いて。

「この――――駄々っ子！」

フェイトちゃんがバルディッシュを構えなおす。両手首、両足首から魔力の羽を生成して速度重視型へと変化する。

「言うことを――――聞いて！！！」

一気に加速。闇の書さんに向かっていく。

「フェイトちゃん！」

「お前も　我が内で眠るといい」

バルディッシュの一撃をシールドで防御。弾き飛ばす。

叫ぶ声は・・・・届かない。フェイトちゃんが金色の光に包まれて

消えた。

第十六話　祝福の風

なのはＳｉｄｅ

・・・どうしよう。フェイトちゃんが取り込まれた。
目の前には闇の書さんが降りてきてる。

「フェイトちゃんのバイタルは健在してるよ。まだ大丈夫！助ける方法は今検討中！！」

エイミィさんから通信がくる。まだ？まだってなに？大丈夫って。そんなの決まってる。だってフェイトちゃんだよ？

「我が主もあの子も・・・覚める事ない眠りのうちに。終わりなき夢を見る、。生と死のハザマの夢。ソレは永遠だ」
「永遠なんて、ないよ――――――皆変わってく。変わっていかなきゃいけないんだ。わたしも――――――あなたも！」

レイジングハートを構えて先端を向ける。迎撃体勢は充分に。不屈の心は我が内に。負けない。負けられない！
でもここでやると市街地に被害がでちゃう。唯でさえかなりの被害があるのに・・・

「なのはちゃん、フィールドを海に変えて！それならなんとかなる！」

エイミィさんからの再度通信だ。市街地の被害が此れ以上でないように・・・海に出ろって。
後ろを見せたら危険だ。当然だよ。重装甲の私じゃフェイトちゃん

みたいに早くは動けないから。
それでも！やらなきゃだめなんだ！
フライヤーフィンを限界まで高速機動に。闇の書さんを連れて行ければそれで・・・誘導できればそれでいい。
ビルを抜け、蔦を抜け、ほぼ一直線に海へと出る。すぐ後ろに闇の書さんがついてきた。
ふ、と。視線と意識を向けた瞬間、だった。気が抜けてしまった私は。
闇の書さんの一撃を垣間見た。振り下ろされる右の拳。

当たる！

その瞬間、咄嗟に私の体は無意識に動いていた。右手を突き出してラウンドシールドを張る。
衝撃とスパークが巻き起こる。魔素が周囲に散らばっていく。
いける？とか思っちゃったけどガードブレイク効果があるのかラウンドシールドが一気に割れて弾けた。
衝撃が突き抜ける。踏ん張ることも出来ないでそのまま私は海へと落ちた。

「あぁ・・・なんだろう。少し前にもこんなことあったっけ」

海に落ちた私は深い闇に落ちながら。そんなことを考えてた。
デジャヴ？ううん、あれは確かフェイトちゃんとの模擬戦・・・友達になったあの時の。

「ここで諦めるの？・・・・・ううん、まだ諦めてない。だってまだ遣り残してる。フェイトちゃんもはやてちゃんも助けられてない」

瞳に強い意志が宿る。燃えるような猛る想いが。不屈の闘志が。ま

だ体を動かせって叫んでる。

「だから・・・まだ。闇の書さんともちゃんとお話できてない！」

魔力が爆発する。桃色の閃光を纏って海面へと向かい――――海上へと躍り出た。

「リンディさん、エイミィさん。戦闘位置を海へと移しました。市街地の火災、お願いします。

それから闇の書さんは駄々っ子ですが話しは通じそうです。もう少しやらえてください！」

肩で息をしてる。こんなに疲労が溜まるなんて、ね。魔力と体力は比例するんだね。って、今考えるべきじゃない。

「マガジンはあと三本。カートリッジは１８発。スターライトブレイカー、打てるチャンスはあるかな？」

ガチャ、とマガジンを左手で持つ。視線を向けながらレイジングハートに話しかけた。

「手段はあります。コールミー、エクセリオンモード」

「だめだよ！？あれは本体を補強するまで使っちゃだめだって！私がコントロールに失敗したら壊れちゃうんだよ！？」

「――――コールミー。コールミー、マイマスター」

・・・レイジングハートは私を信じてくれてる。迷ってるのは私。決意はまだはっきりと決まってなかったみたい。

「だめだね。こういうときどうしても弱い考えがでちゃった」

「弱い考えと真逆のことをすればいいのです。自らの弱い意志に反

逆を」
「――――うん」

ぐ、とレイジングハートを握る。腹を決めた、っていうのがいいのかな。きっとお兄ちゃんやお姉ちゃんもこういう考えのときがあるんだろうな。

「お前も・・・もう眠れ」
「いつかは眠るよ。でもそれは今じゃない。はやてちゃんもフェイトちゃんも助けるよ。それからあなたも――――」

ガシュン！カートリッジを排出。魔力が跳ね上がる。決意も決めた。やるべきは皆を助けること。それだけ。それだけなんだ！

「レイジングハート、エクセリオンモード、ドライブ！」
「イグニッション！」

レイジングハートの形状を変化。エクセリオンモードへと以降する。より一層のモード変化へ。
闇の書さんもそれに応えるように周囲に金色の光を幾つも召還した。それでも。それでも。突き通すの。きっと、望めば叶うから！
フライヤーフィンでの高速機動は不利だけど。やれないことはない、から。
無駄な動きを徹底排除して簡素に簡略化して。削った動きは最適化させて。
闇の書さんよりも多く手数を出せばなんとかなるはず！
海上での高速戦闘、まだ上手って程じゃないけど。みんなが見ててくれてる。その想いがある限り、私は折れないから。
幾度か桃色の閃光と闇色の閃光がぶつかり合っていく。幾度かの接触をしていくと、私は圧力に負けてしまって後ろに吹っ飛ばされち

やった。

「きゃぁっ！？」

それでも体勢を整えてレイジングハートを構えて。

「一つ覚えの砲撃など――――――通るとでも思っているのか？」

「通す――――――レイジングハートが力をくれる。命と心をかけて応えてくれてる。泣いてる子を救ってあげてって！」

レイジングハートの先端から桃色の翼が生える。魔力余波をリロードで排出。

足元に魔法陣が展開。

「A．C．S、スタンバイ」

「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム！エクセリオンバスターA．C．Sドライブ！！」

ストライクフレームの先端から光の針を生成。更なる鋭さを得る。

フレームの翼が一際巨大になる。合図と一閃、私の体が突き進んでいく。目標は――――――闇の書さん！！

「いっ・・・・・けえええええええええええええ！！！！！！！！」

気合一合。闇の書さんもシールドを張って防御に出た。

激しいぶつかり合いに火花がはじける。大気が震える。

「届いて！――――――ブレイク！シュウウウウウウウト！！！！！！」

フレームの先端がシールドバリアをぬいていく。直撃寸前に魔力爆発を起こす。

爆発した場所から後方に下がった私はズタボロに汚れちゃった。肩で息をして左肩を抑える。
レイジングハートも魔力余波を排出してる。
「ほぼ0距離。バリアーを抜いてのエクセリオンバスター直撃・・・これでだめなら・・・」
「マスター」
レイジングハートが注意を呼びかけた。それに反応して私は空を仰ぐ。
そこには――――――視線を見下ろす闇の書さんがいた。
「まだ、もうちょっと頑張らないと、だね」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

フェイトＳｉｄｅ

時間は少し遡る。
闇の書に取り込まれた私はもぞ、と体を起こしてベッドの上で目が覚めた。
なんだか不思議な、懐かしい感じ。なんだろう・・・隣で寝てる金髪の・・・え、これ、は・・・まさか。
まだ頭が働いてないのか理解するのが遅くなってるのかな。

「ここは・・・」

なんて考えてたらドアをノックする音がした。

「フェイト、アリシア、アルフ。朝ですよ」

この声――――――まさか。そんな。

「んー・・・おはよう、フェイト」

ノック音と声に隣で寝ていた少女が目を覚ます。
同時にドアを開けて中に入ってきたのは・・・・・リニス。

「おはようございます。また夜更かしさんですか？」
「ちょっとだけだよぉ？」

リニスとアリシア、が。会話してる。たぶん、あってる。のかな・・・もうわからない。

「リニス・・・アリシア？」

視線を向けながら名前を呼んだ。

「ふぅ、前言撤回します。今日はフェイトもねぼすけさんみたいですね」

リニスがクス、と少し笑ってから手をポン、と叩く。

「さ、食堂にいきましょう。プレシアが待ってますよ」

ドクン。ビクッ。リニスが口にした名前に身が縮こまるのが自分でもわかった。たぶん・・・・リニスは気付いただろう。
それでも顔に出さないのは優しさから、かな。
私はすぐに表情を戻す。心配かけないように――――――
――――――食堂にいくと既に一人席に座ってた。アリシアとアルフが先に走っていく。
ゆっくりとリニスも歩いていく。
「プレシア、大変ですよ。今日は雪か嵐になるかもしれません」
「・・・・？」
プレシア・・・母さんは何のことかわかってないような顔でリニスを見てる。
「ほら、フェイト」
リニスの視線の促しに近くの柱に隠れてる私に視線が集まる。
「フェイト、どうしたの？」
「どうも、何か怖い夢でもみたらしくて。今も夢の中だと思ってるみたいですよ？」
「フェイト、勉強のしすぎとか？」
「ありえる」
「フェイト、いらっしゃい？」
母さんが呼ぶ。どうしていいのかわからないで私は・・・ゆっくり

と近づいた。

「怖い夢でもみたのね・・・でももう大丈夫よ?みんな傍にいるのだから」

母さんが手を伸ばす。私の頬に触れようとする。

「まぁ、朝食を食べ終わる頃には。悪い夢も覚めるでしょう」

リニスが纏めに入る。リニスに促されて椅子に座り席に着く。

食事中、ちら、と母さんを見るとにこ、と微笑みかけてくれる。

・・・これ、は。夢だ。

だってみんな・・・・

・・・・・・誰ももういないんだ。

それでもこの時間は。私がずっと望んで欲しかった時間だ。

庭の一角にある大きな木の下で。アリシアと一緒に読書していた。

「あれぇ・・・雨になりそうだね。フェイト、かえろ?」

「ごめん、アリシア・・・私はもうちょっとここに居る」

「そうなの?じゃぁわたしもっ。　あっまやっどり♪　」

ちょこん、と私の隣に座るアリシア。

しとしとと雨が降り出す。膝を抱えてずっと雨を見続けてる。

「ねぇ、アリシア。これは夢、なんだよね？」
「私とあなたは同じ世界には居ない。あなたが生きてたら私は生まれなかった」
「そう、だね」
「かあさんも、私にあんなに優しくは――――――」
「優しい人だったんだよ。優しかったから壊れちゃったんだ。死んじゃった私を生き返らせるために」
「うん・・・」

静かに雨の音が耳に入ってくる。アリシアの声が雨を遮らせてはっきりと聞こえてくる。

「ねぇ、フェイト。夢でもいいじゃない。ここにいよ？ずっといっしょに。私、ここでなら生きていられる。
フェイトのお姉さんでいられる。母さんと、アルフとリニスと皆一緒にいられる。
フェイトが欲しかった幸せ、みんなここにあるんだよ」

悩む。迷う。惑う。人は幸せを感じてしまうと出ることが難しいな・・・

「ごめんね、アリシア。でももういかなくちゃ」

アリシアと向き合う。
差し出されたアリシアの手には・・・金色の三角形のデバイス。
相棒。バルディッシュが。
バルディッシュを受け取るとぎゅ、とアリシアが抱いてくれる。私よりも小さい体なのに。お姉さんとして。

「ありがとう・・・ごめんね、アリシア」
「いいよ、私はフェイトのお姉さんだもん。待ってるんでしょ？優しくて強い子たちが」
涙ぐむ声で答えて頷く。満足げなアリシアの顔は見えない。見せてくれない。
「じゃぁ、いってらっしゃい、フェイト」
優しくて強い声。私と同じ金色の魔力が包み・・・・・まるで私の中に帰るように、消える。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

はやてＳｉｄｅ

更に時間は遡る。

「こんなんあかん。わたし、こんなん望んでない。貴方もおなじはずや。ちゃうんか？」
「私の心は騎士たちの感情と深くリンクしています。だから騎士たちと同じように貴女を愛しく思ってます。
だからこそ、貴方を殺してしまう自分自身が許せない。自分ではどうにも出来ない暴走を、貴方を侵食してしまうことも。
貴方を食らい尽くしてしまうことも。止められない」
紅い瞳が申し訳なさそうに下を向く。それならもっとどうにかせんとあかんやろ。

「覚醒のときに、今までのこと少しはわかったよ。望むように生きられへん生き方。私にもわかる。
シグナムたちと同じや。ずっとさびしい思い、悲しい気持ちしてきた。そやけど、忘れたらあかん」

右手を差し出して、顔に触れる。

「貴方のマスターは今は私や。マスターの言うことはちゃんときかなあかんよ」

車椅子の下にベルカ式魔法陣が現れる。手を伸ばせば車椅子から立ち上がるようになって、支えてもらう。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか言わせへん。わたしがさせへん。私は管理者や。私にはソレができる」
「無理です・・・今も管理局の魔導師が闘っていますが・・・自動管理プログラムが止まりません」
「――――――とまって」

凛とした静かな声。プログラムを停止する――――――――――

――――――――――――――――――――

「外の方、管理局の方！そこの子の保護者、八神はやてです！」
「はやてちゃん！？」

闇の書から念話が飛ぶ。なのはがそれをキャッチ。思わず名前を呼んだ。

「え、なのはちゃん!?ほんまに!?」

「うん、なのはだよ。いろいろあって闇の書さんと戦ってるの」

驚いた声のはやて。

「ごめんなのはちゃん。なんとかその子とめてあげてくれる?魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど・・・
その子がそうしてると管理者権限が使えへんのよいま、そっちに出てるのは自動行動のプログラムだけやから」

念話はアルフとユーのにも届いていたらしい。ユーのからの念話がなのはにも届く。

「(闇の書完成後に管理者が目覚めてる・・・それなら)なのは!わかりやすく伝えるよ。今から言うことをなのはができればはやてちゃんもフェイトも外に出られる!」

ユーノが知識を張り巡らせる。

「どんな方法でもいい。、目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして!全力全開、手加減なしで!」

「さっすがユーノくん!わっかりやすい!」

「まったくです」

レイジングハートも呼応してバトンマテリアルして構える。

「エクセリオンバスター、バレル展開！中距離砲撃モード！」

ストライクフレームの翼がより一層の羽ばたきを魅せる。
バレルを放出して自動行動プログラムをバインドに成功させる。

「夜天の主の名において、汝に新たな名前を送る。強く支えるもの、幸福を生む風。祝福のエール・・・・リィンフォース」

「バルディッシュ、此処から出るよ。ザンバーフォーム、いける？」
「Ｙｅｓ，Ｓｉｒ」
「良い子だ」

ふわ、と笑み。全てを信頼できる相棒を手に、モードチェンジ。同時にバリアジャケット展開。
左にバルディッシュを構えて、ザンバーフォームへと変化させる。
魔力刃を産み出し、刀身と成す。
足元に魔法陣を形成し、魔力を高める。

「――――――疾風迅雷」

「エクセリオンバスター、フォースバースト！」

フレームに環状魔法陣を形成。魔力の塊を先端に集めていく。

「ブレイクシューーーーット！！！！」

バルディッシュザンバーを横に振り、振りかざす。

「ライオットザンバー！！！！」

なのはの集束砲が自動行動プログラムへと放たれる。

魔力爆発を起こして周囲に衝撃波を飛ばしていく。桃色の光と、天を突き刺す金色の光の柱。

アルフがふ、と空を見上げると其処には臨戦態勢のフェイトがスタンバイ済みで居た。

「管理者権限が使用可能になりました。さぁ、主――――――

ですが、防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力はじき暴れだします」

「そやな・・・ま、なんとかしよ――――――いこか、リィンフォース」

胸に抱くのは嘗て呪われし魔導書とまで言われた古き遺産。今此処に完全に管理者として夜天の主が目覚めた。

第十七話　夢の終わり

海の真ん中で破壊の澱みが蠢いている。黒い闇。
その空の上でひときわ大きく光を放ち、光の筋が柱となって海と天を裂く。
それぞれ四方に。高い魔力が四つ。紫。銀。翠。紅。
闇の書・・・否、覚醒せし夜天の書に捕らわれた守護騎士の姿。
ベルカ式の三角形の魔法陣が浮かびあがる。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」
「主ある限り、我らの魂尽きる事無し」
「此の身に命ある限り、我等は御身の中にある」
「我らが主、夜天の王――――八神はやての名の下に」

「リィンフォース。私の杖と甲冑を」
「はい」

優しき声が耳に囁く。騎士甲冑、バリアジャケットとシュベルツクロイツが召還され、杖を握ると光の球体は弾けて消えて。
その中より最後の夜天の王が姿を現す。

「はやてちゃん！」

なのはが名前を呼んだ。笑顔でそれに答えるはやて。

「夜天の光よ、我が手に集え、祝福の風、リィンフォース・・・・
セットアップ！！」

杖を高らかに掲げ、生まれて始めてのユニゾンをする。

髪の色が変化し、茶色から灰色へと染まっていく。

「はやて・・・」
「すみません・・・」
「あの・・・はやてちゃん。わたしたち・・・」
「えぇよ。リィンフォースが教えてくれた。そやけどあとや。今は・・・お帰り、みんな」
「ぅ・・・・ぅわぁあああああ、はやて、はやて、はやてぇ！！」
ヴィータがはやてに抱きつく。回りのことなど気にすることもなく、声を上げて泣いた。
そこになのはとフェイトが近づいてきた。
「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんなぁ。うちのこたちが迷惑かけて」
「ううん、大丈夫だよ。だって、今、こうしていられるから。」
なのはの言葉にフェイトも頷いた。
「すまないな。水を差してしまうんだが・・・・時空管理局執務官、クロノ＝ハラオウンだ「そして俺、参上」・・・・全くキミは」
クロノの背後からいきなり綾人が現れる。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――

綾人Ｓｉｄｅ

クロノの背後からひょっこりスキマを縫って顔をだす。

「状況は最悪、のようだな」

俺がスキマから出てくると、セイバー、ランサー、アーチャーがスキマから出てきた。

空に浮いてる感覚というのはどうも慣れないらしく、戸惑った顔を三人ともしている。

「まったく・・・迎えに行ってる間に状況がとんとん拍子だな」

はぁ、と溜息をついて肩を大きく上下させる。

「ランサーのドジに引っかかってしまいました・・・屈辱です」

「おいまて、セイバー!?俺のせいにする気かよ!」

「他に何があるというのです。私があんな間抜けな策にひっかかるとでも?それこそシロウの料理が食べれない以上に屈辱です」

「ほっほぅ・・・おもしれぇ、表ぇでろ!その心臓、貰い受けるぞ、セイバー!」

「ハッ!図星だからって大人気ないですね!いいでしょう、受けてたちます!」

「待て、お前ら。事態を引っ掻き回すな」

セイバーとランサーが一触即発になりかけていたのを制する。後ろでアーチャーが笑ってる。

「止めなかったアーチャーもあとでお仕置きな?」

「何故だ!?」

ショッキングな表情してやがる。

「まぁ・・・ついて来れないのが大半みたいだからな。そろそろ自重しよう」

ゴホン、と咳払いを一つ。

「状況は・・・まぁ見れば判るか。はやて、目覚めたんだな」

眼下の闇と、はやて。守護騎士たちを見て。

「ん・・・綾人くんもごめんなぁ。うちの子が「ストップ」うぇ？」

「過ぎたことを悔やむのはいいが、今は時間がない。クロノ、お前のほうに手はあるか？」

クロノのほうに向き直り、意見を促す。

「いや、此方からは全くといっていいくらいに手がない。だからこそ聞きたい・・・あの防衛プログラムはあと数分で暴走する。

此方のプランは二つだけ。一つ、極めて強力な氷結魔法で動きを止める。

二つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシェルで消滅させる。

何か他にいい手はないか？夜天の主と・・・その守護騎士たちに聞きたい」

「えっと、最初のはたぶん無理かと。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですし」

「凍結させてもコアがある限り再生機能は止まらん」

「アルカンシェルも駄目！こんなとこで打ったらはやての家まで吹

っ飛んじゃうじゃんか！」
「すまんな。我らも暴走に立ち会ったことは数えるほどしかないのだ」

シャマル、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの順で却下論を繰り出す。

「・・・何か、ないか？」
「すまない。あまり役に立てそうにない・・・」

俺は黙って聞いている。要はコアだけを消滅させればいいんなら・・・
だが俺は口を挟まない。

「あーもう！ごちゃごちゃ鬱陶しいなぁ！ズバッとできないの？」

アルフが痺れを切らして声を荒げる。

「ズバッとぶっ飛ばす・・・」
「此処で打ったら被害が大きいから撃てへん・・・」
「でもここじゃなければ」

「クロノくん！アルカンシェルってどこでも撃てるの！？」
「どこでもって・・・たとえば？」
「今、アースラの居る場所」
「軌道上、宇宙空間で！」

「管理局のテクノロジー、嘗めてもらっちゃぁ困りますな！撃てますよぉ。宇宙だろうが！どこだろうが！」
「おい、まさか君ら！」

ふん。頭を使ったな。確かに何もない宇宙空間でなら被害も最小だろう・・・。

「アルカンシェルで被害が出るのが嫌なら俺たちがやろう」

ふと、話に入り込む。

「綾人？何を言って・・・」
「理解できなかったか？お前たちは最後に起こることを見なかった事にすれば全てが終わる。それで終わりだ」

首をゴキリと鳴らして準備を開始する。

「要はあれのコアを取り出して安全な区域まで飛ばして消滅させればいいのだろう？」
「簡単にいうが、これはそんな簡単なことじゃないぞ！」
「俺たちなら出来る」

クロノの言葉にはっきりと言い放つ。暴走限界まで時間が無い。やるならやるしかないんだ。

「クロノ。決断しろ。やるかやれないかじゃない。やるんだよ！」
「・・・・実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだが。まぁ、やってみる価値はある」
「まずはサーヴァントがあれの気を引く」

「防衛プログラムは魔力と物理の複合六層式。まずはそれを破る」
「バリアを抜けたら本体に向けて私達の一斉攻撃でコアを露出」
「そしたらユーノ君たちの強制転移魔法で軌道上に転送！」
「転送後は俺が動く。で終わり」

さて、準備か。暴走手前からやらないと間に合わないだろうが・・・

・

「シャマル、なのはとフェイトの傷を治してやってくれ」
「あ、はい。クラールヴィント、本領発揮よ？」

シャマルが治療魔法でなのはとフェイトの傷を治す。
サポートに回るザフィーラ、アルフ、ユーノが準備しだす。

「ランサー、一番槍いっとくか？」
「お、話がわかるマスターで嬉しいねぇ。んじゃ、さくっといってくるか！」
「なら全力で戦えるようにしてやるからちょっと待ってろ」

俺の体に刻まれた令呪にアクセスする。セイバー、ランサー、アーチャーの令呪に俺は命令を下す。

「セイバー、ランサー、アーチャーに告ぐ。マスターたる我が魔力を存分に使い、全力を以ってアレを朽ち倒せ」
「「了解した！」」

サーヴァント三人が同時に呼応した。令呪の縛りにより、サーヴァントの力が全開で全力をだせる状態にする。
ランサーが刺し穿つ死棘の槍を振り回して景気良く突っ走る。

海から触手が幾つも伸びてきて行く手を阻む。それをランサーが抜けていくのをサポート班が魔力の鎖で援護する。

「へへっ、こりゃ楽だね、っと！」

魔力が篭められた槍は一撃の下に触手を撃ち破いていく。

「お前の心臓が何処にあるかなんざしらねぇ。けどな、他にも使い道はあるんだ、ぜ！」

バックステップと共に槍を後方に思いっきり引き伸ばす。

「我がクラス、ランサーの名において！お前を穿つ！！我が槍突き（ゲイ・ボルグ）穿つ死翔の槍で！！！」

限界まで引き伸ばされた体は槍を発射するのに充分なくらいに魔力が篭められていた。

嘗て光の御子が生涯持ち続けた真紅の呪槍。

狙うのは心臓ではないが。防御プログラムの急所を貫いていく。

「むぅ、ランサーめ。楽しそうですね」

セイバーがうずうずしている。

「じゃぁ、次はセイバーだ。全力での宝具使用を許可する。俺の魔力持っていけ」

「言わずもがな、です」

不可視の剣、風王結界を解いたエクスカリバーが右手に握られてい

る。
既に魔力が篭められており、一振りだけでも充分に塵芥が消滅しそうなくらいだ。

「我がクラスはセイバー。最優のサーヴァント。我が剣エクスカリバーにてお相手する」

眼前で十字のように剣を抱いてからランサーの後を追うように暴走プログラムへと向かっていく。

「サポート班、セイバーのサポートはいらないからな。なまじ中途半端な魔力攻撃はアイツには効かん」

対魔力障壁があるから、と説明しておく。此の世界で何処までの魔力攻撃が通じないのかは要調査だ。
と、がっつりあいつら俺の魔力を持っていくな。

「アーチャー。お前も行ってくれ」
「心得た。ところでマスター」
「――――ん？」

了承の言葉のあとにおれに質問の言葉を向けてきた。

「魔導師たちが考えたプロセスの通りに行うが――――別に――――アレを倒してしまってもいいのだろう？」

背中でアーチャーは語る。つまりはそれだけの彼我差を見出したか。
ランサーとセイバーの攻撃を見ながらアーチャーはプログラムの頭上へと躍り出る。

「我がクラスはアーチャー。狙った獲物は千発千中。我が剣戟の極致、得と見よ！」

アーチャーの背後に倉庫が出現。投影魔術の最高峰。

「ソードバレル展開。フルオープン！」

空中を隙間なく埋め尽くす剣の空。全方向から一挙に剣の雨が降り荒れる。

ランサーとセイバーは剣雨の中を回避しながらも己の攻撃を寸分間違えずに撃ち放っていく。

「刺し穿つ死棘の槍！」

「約束された勝利の剣！」

「偽・螺旋剣！」

サーヴァントが同時に宝具を展開する。その攻撃に複合バリアが二層破壊された。

管理局の魔導師達は奇跡をみているのか。

たった三人の英傑が闘っているのをじ、と見ている。

「う、そ・・・・凄い」

「まさかこれほどとは・・・」

驚愕の声と表情を隠せない。まさにその通りだ。常識を逸脱した攻撃と魔力に皆驚嘆している。

「ほら、次はお前たちだ。障壁が治されないうちにいけよ？」

綾人がなのはたちを促してから上空へとあがっていく。

「・・・そ、そやね。やるべきことは今やるんや」

「そうです、主。今こそ、過去の楔を解き放ちましょう」

シグナムが返事した。

「夜天の魔導書、呪われたやいの所と呼ばれたプログラム、闇の書の、闇」

「ちゃんとあわせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

なのはとヴィータが息を合わせる。

「鉄槌の騎士ヴィータと！鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

「ギガントフォルム！」

アイゼンがカートリッジを排出して魔力を高める。巨大化形態へと変化していき、思いっきり振り上げる。

「轟天爆砕！ギガントクラアアアアアッシュ！！！」

一気に振り下ろせば物理障壁を破壊する。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン。いきます！！」
「ロードカートリッジ」
エクセリオンを回して、構える。狙いは中心。
「エクセリオン、バスター！！！！！」
集束された魔力がバレルを放射。そこから四筋の魔力光が撃ち放たれる。魔力障壁がはじけて破壊された。
「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃の連結縄に続くもう一つの姿」
「ボーゲンフォルム！」
剣と鞘が合わさり、弓矢へと変化した。ベルカ魔法陣が現れ、足元から背後へと余剰な魔力が炎へ変換されて排出していく。
「駆けよ、隼！」
一点集中。まさにその言葉があうように、解き放たれる矢。貫くのは簡単だった。
物理障壁はその一点を中心に崩れ落ちる。
「フェイト＝テスタロッサ。バルディッシュ・ザンバー。いきます！！」
ザンバーを降りぬき、天高く掲げる。天候操作魔法で雷を呼び出し、魔力刃へと降ろす。

「打ち抜け、雷刃！」

振り下ろす巨大な刃は障壁を突き破り本体を斬り砕く。
反撃しようとプログラムが触手を使って砲撃を開始する。狙いはフェイト。
それにザフィーラが一早く反応した。

「盾の守護獣ザフィーラ。砲撃など、撃たせん！！」

鋼の楔を打ち込み、触手の砲撃を停止させる。

「彼方より来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！」

一際巨大な魔法陣を空に描く。その周囲に魔力の塊六つ。

「石化の槍、ミストルティン！」

翳した杖を振り下ろせば、周囲の魔力光から一気に伸びていく。刺し貫く光はプログラム本体を石化させて崩壊させる。
だが、無限再生能力は健在で更なる自己進化を遂げていく。

「うわ、グロ！」
「やっぱり、並みの攻撃じゃ通じない！ダメージを入れた傍から再生されちゃう！」
「だが攻撃は通ってる。プラン変更はなしだ！いくぞ、デュランダル！」
「ＯＫ、ボス」
「悠久なる凍土、凍て付く棺の地にて、永遠の眠りを与えよ」

詠唱完了。魔法陣形成と共にプログラムを中心とした海が凍ってい

く。

「凍て付け！」
「エターナルコフィン」

デュランダルを翳すと一気に凍結が早まる。全体を氷結させると本体の先端などが崩れて落ちた。
だが、それも氷面だけしか凍っていなかったらしく、自己再生は止まらない。

「いくよ、フェイトちゃん。はやてちゃん」

それを見たなのはが声をかける。大事な友達二人に。

「スターライトブレイカー」

レイジングハートが周囲の魔力をかき集める。まるで桃色の流星の如く。

「全力全開！スターライトォ！」

眼前に身の丈以上の魔法陣を作り出して、振りかざす。

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

魔力変換により電光がスパークとなり刃に落ちる。巨大だった刃はさらにその大きさを増す。

「ごめんな・。・・おやすみな――――――響け、終焉の笛。ラグナロク――――――」

「「「ブレイカー！！」」」

なのは、フェイト、はやてのトリプルブレイカーが炸裂する。自己再生よりも早く、破壊が早まり、コアが露出した。

「本体コア・・・・発見。つかまえ、たっ！」

「長距離転送！」

「目標軌道上！」

「「「転送！！！」」」

強制転移魔法でコアが転送されてくる。既に綾人は準備が完了して待っていた。

右手には円筒の剣を携えて。

「リンディ提督。これから起こることをキロクしないで欲しい。此方からのたった一つだけの願いだ。聞き入れてもらえないかな」
「何故、と聞いてもいいかしら？」
「これから使う力は決して其方としてはよくない物だ。だからこそ、内密にして貰いたい。これから起こる事象も」
事実リンディは迷っていた。それだけ隠さなければいけないほどの力を有しているのか、と。
「・・・わかりました。記録はいたしません。ですが、その力の説明はあとでしてくださいね？」
「・・・了解した」
短く返答をして会話を終わらせる。
「聞いたか？出番だぞ、王よ」
「やっと我の出番か。いい加減待ちくたびれたぞ」
「そう言うな。最後の出番が一番おいしいんだ」
「ふん。いいだろう。この茶番もいい加減飽きた。我の手で終わらせてやろう」
綾人から少し離れた対面。同じように円筒の剣を持っている金髪金色の鎧の男。
紅眼を持ちて笑みを浮かべる姿はまさしく、王たる資質か。
「元々ある真作は一本だけだったのが。こうして二本ある。というのは中々ないぞ。なぁ――――」
「ふん。我が認めたもう一振りのオリジナル。原点よ。我に押し負けぬように精々踏ん張るが良いぞ」

互いに魔力を高めていく。ソレは既に管理局が検索できる数値をはるかに凌駕した。
アースラのクルーだけでなく、地上で今まで闘っていた魔導師ですら、上空の魔力の高なりに疲弊した顔でも驚きの表情は隠せないでいた。

「「さぁ、始めよう。この宴を締めくくる終末を」」

二人の声が重なる。円筒の剣が回転を始める。三つの円筒が交互に順逆順に回転していく。
魔力を吸い込み、後方へと排出していく。

「さぁ、これが世界を創り出した力だ――――――」

「「　　天地乖離す（エヌマ）　　」」

一層回転が早まる。空間が、宇宙が捩れる。管理局の言葉で言うなら次元震。それも大規模だ。

「「　　開闢の星（エリシュ）　　」」

ソレは世界を創り抱いた力。眼前へと放てばその力は丁度転送されてきたコアへと衝突する。
しかも前方と後方からという挟み撃ち。回避など許さない。許されない。
次元を切り裂き異次元を作り出し、アクセスする。圧倒的な圧力を持つ世界へとコアを転移させて――――――消滅させた。

「コア、消滅確認」

アースラクルーの声が高らかに報告の言葉があがる。

「というわけで、現場の皆、おつかれさま。無事、終了しました！」

エイミィが通信で地上の皆に報告する。
同時にスキマから綾人と金髪の男が現れる。

「あ、綾人君。おつかれ、って・・・その人は？」
「あぁ、俺の最後のデバイスの一人。ギルだ」
「王たる我の前で呆けるのは今だけは許してやろう雑種ども。我は尊大だからなハッハッハッハ」

二人して同じ武器を持ったままで。ギルは胸を張って高らかに笑い飛ばす。
サーヴァントの三人も武器は持ったままだが、明らかにその二本だけは異質。
まだ余剰魔力が残っているようで円筒の合間から煙を上げている。

「上で起きたのは記録はされない。心しておいてくれ。だけど、君たちが口が軽くないのなら口伝くらいならいいだろう」

綾人が全員に視線を向けて口にするのは今上空で起きたことの説明。
といっても本当に簡略化されたことだけ。
大規模次元震を起こしておいて記録されないということは・・・
まぁ、綾人なら、と皆納得した。させられてしまった。
少しでも反論しようものなら金髪・・・ギルの圧倒的な王気で黙ってしまったからだ。

「まぁ・・・そこらへんはあとでもいいだろう」

綾人がそう言ってしまったので誰も質問する隙がなくなってしまった。

「はやて！はやてぇ！」

一息、着く前にヴィータの声があたりに響く。ふ、と見るとシグナムに抱えられて気を失っているはやてが居た。

守護騎士全員がはやてのまわりに集まって心配そうな顔でいた。

第十八話　離別

八神家Ｓｉｄｅ

管制プログラムの暴走を停止させ、次元の狭間へと追いやった後、はやてが倒れた。
すぐさまアースラのメディカルルームへと搬送され、治療を受ける。
守護騎士達はずっと離れずに付き添った。

「リンカーコアの破損は深くまで至っている・・・防御プログラムも停止はしたが、歪んだ基礎構造はそのままだ」
「やはり、か・・・」
「修復は出来ないの？」
「無理だ・・・管制プログラムの私の中にも夜天の書本体の姿が見つからない」
「元の姿が判らなければ戻ることも出来ない、か」
「そういう、ことだ」
「主はやては・・・大丈夫なのか？」
「なに、問題はない。私からの侵蝕もリンクも切れている。不自由だった足もそのうち治るだろう」

静かな会話。守護騎士のみの空間で静かに正式に主となった少女の寝顔を見ている。

「なら・・・いいな」
「そうね・・・それなら・・・」

「いや・・・お前たちは消えない。往くのは――――――私だけだ」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アースラ内Ｓｉｄｅ

アースラのメインラウンジ。そこにクロノ、ユーノ、なのは、フェイト、アルフがいる。

「夜天の書の破壊？」
「どうして！？防御プログラムはもう破壊したはずじゃ！？」
「闇の書・・・夜天の書の管制プログラムの進言だ」
「管制プログラムって・・・なのは達が戦ってた？」

なのはとフェイト、アルフの応対にクロノとユーノが応える形だ。

「防御プログラムは無事破壊できたけど夜天の書本体がプログラムを書き換えちゃうんだ」
「そうなるとはやてちゃんにまた侵蝕するかもするかもしれないということで夜天の書が存在する限り危険は消えないんだ」
「だから闇の書は防御プログラムが消えている今のうちに自らを破壊するように申し出た」
「じゃぁ、シグナムたちも」
「いや、私達は残る」

ふ、と。横から凛とした声が入り込んだ。シグナムだ。隣にシャマ

ル、ザフィーラ。

「防御プログラムと共に、われわれ守護騎士プログラムも本体から解放したそうだ」

「それで、なのはちゃんたちに・・・お願いがあるって」

「おねがい・・・？」

シャマルからの言い伝になのはが聞き返した。

「・・・詳しくはあの子から聞いてくれる？」

「あ・・・はい」

コク、となのはとフェイトが頷いた。

綾人Ｓｉｄｅ

アースラ内の部屋の一つに俺たちは集まっていた。サーヴァントは皆私服に着替えている。

セイバーは黒服。ランサーはアロハシャツにボトムス。ギルに至っては

アーチャーは普段のまま赤原礼装のままだ。

「で？」

俺の背後に立つランサーが聞いてくる。

「なんだ？ランサー」

俺は聞き返す。バリアジャケット、ではないが、同じ服装を作ってもらった。ゼロスーツ私服Ｖｅｒだ。仮面は今はない。セイバーもアーチャーも何も言わないが、皆同じ意見らしい。

「我も問うぞ、マスター。そこの狗はこれからどうするのか、と聞いている。これは我らの総意と受け取れ」

「これからったって・・・そうだな」

ギルに言われて俺は腕を組んで考えるフリをする。が、それも見抜かれているのかすぐにバレた。

「はやてのことなら考えてる。夜天の書・・・リィンフォースの切り離しをするわけだが、アーチャー」

視線をアーチャーに向ける。同じように腕を組んで目を瞑っていたアーチャーがちら、と向いた。

「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）でリンクを一旦切り離そうと思うのだが」

「まぁ、それに対しては妥当な線ではあるな。アレは確かに今回の状況にはうってつけの宝具だろう」

むす、とした顔だ。納得はしていないが手はある、といった感じだな。

「それもそうですが・・・私的にはなぜこの男がいるのか、ということです」

「む、セイバー。我を意識するあまりに冷たい態度を取るとは。そういうのをツンデレというのだ。我は学習したぞ」

「違います、金ピカ大王。鎧を転売してから散り死になさい」

ふふん、と勝ち誇った顔でセイバーに笑みを向ける。が、セイバーは無表情で冷たくあしらう。

「あぁ・・・最初にデバイスをもらうって時に切り札として取っといたんだ。奥の手は見せないのが俺の流儀でね」

「しかし、我々にくらいは言っても良かったでしょう」

「それはすまないと思ってるよ。だけど考えてみてくれ。ギルが出てきたら余計にバランスが狂うのは眼に見える」

俺の一言にセイバー、アーチャー、ランサーが一斉に頷いた。ギルは納得いってないようだが仕方がない。

「で、これからだが」

多少会話がずれてきたので軌道修正に入る。

「リィンフォースを切り離す。そのあとはリィンフォースに任せる。で、俺たちは――――――」

破戒すべき全ての符でリィンフォースを夜天の書と切り離してからあとは書とプログラムの修正に入る。

その後の俺たちの身の振り分けについて話をする。

「――――――なるほどな。それならいいだろう」

「しかし・・今以上の戦力補強は必要には感じませんが・・・」

「セイバー。何時如何なる時も油断しないでおくのも必要だ。特に此の世界では我々は世界とのリンクがない。

実際、マスターとの魔力のリンクが唯一とも言える・・・サーヴァント４体を同時に現存させている魔力は驚きに値するがね」
「我を従わせるのならそのくらいでなくては困るな。無論、我が妻と狗と贋作者とおまけがついてきてはいるが」
「「「「お前、少し黙れ」」」」
ギル以外全員が口を揃えた。ともあれ、これからの行動については全員が了解したと見ていいだろう。
何よりも・・・先が見えているものほど空しいものもないけどな。

―――――――――――――――――――

――――――――――

なのはSide

闇の書さん・・・・ううん、リィンフォースさんが言うには、このまま居たらはやてちゃんをまた傷つけるかもしれないということ。それと、また防御プログラムの暴走があるかもしれないということ。いろいろな話をしてもらった。
寂しい、けど。どうしようもないのかな。手があるなら、助けたいよ。
「優しいな・・・お前は。あの時も私を助けると、ずっと言っていた、小さな勇気持つ者」
「私はただ、助けられるなら皆を助けたい。そう思ってただけです・・・今も」
クス、と優しい笑みを向けてくれる。隣のフェイトちゃんも考えてるのかな。難しい顔してる。

「私が往くにあたり・・・お前達だからこそ、頼みたい。私が空に還る手伝いを、してほしいんだ」

「でも・・・リィンフォース」

「お前たちも・・・その名で私を呼んでくれるのだな」

愛しい主から戴いた名前だ、と。言っていた。はやてちゃんが名づけた、闇の書という呪いから解き放った名前。

「・・・約束、して。その名前の通りに。みんなに祝福の風を吹かせて」

「そうだよ・・・もう呪われた魔導書なんて言われなくていいんだから・・・」

リィンフォースさんが目を瞑って優しく微笑む。

「あぁ・・・約束しよう。祝福の風は皆に吹く。主にも、守護騎士にも・・・お前たちにも」

それは約束。契約にも似た約束を交わした。

はやてちゃんに伝えるのは堪えるから、と。内緒にしほしいとも。

・・・あとで怒られちゃうね・・・・・・もしかしたら嫌われちゃうかも。それは嫌だなぁ。

何か手はないのかなぁ・・・・考えちゃう、ね。ねぇ、レイジングハート・・・私どうしたらいいのかな・・・。

「・・・・・・。」

レイジングハートは何も言ってはくれなかった。

まるで自分で答えを出して、って言ってるみたいに光るだけで。

「場所を変えようか。ここでは無粋すぎるな――――」

「じゃぁ転送するよ・・・」

ユーノ君が転送魔法を起動させてる。

――

――――――――――――――――

海鳴の公園の高台。そこに私とフェイトちゃん。シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん、ザフィーラさん。

そして、リィンフォースさんがいる。

「さぁ・・・はじめよう。闇の書の終焉だ・・・」

リィンフォースさんの足元にベルカ魔法陣が形成された。銀色の、優しい光がとっても綺麗。

「お前たちのお陰で、主はやての声を聞くことが出来た。主はやてを喰い殺さずにすみ、騎士たちも生かすことがすんだ。

感謝している・・・だから最後はお前たちに閉じて欲しい」

「はやてちゃんと・・・お別れしなくて本当にいいんですか？」

「主はやてを悲しませたくはないんだ・・・いずれ、お前たちもわかる。

海より深く愛してその幸福を護りたいと思うものと出会えることが出来ればな・・・」

視線が空を仰ぐ。降る雪は銀色に世界を染めていく。

まるで悲しみの色を染めて消していくみたい。
開始の合図、というか。私はレイジングハートを。
フェイトちゃんはバルディッシュを。
前に構えるとリィンフォースさんの魔法陣と私達の魔法陣とがリンクする。
さぁ・・・終わりの始まり。悲しい物語を閉じよう・・・

「リィンフォース！みんな！」

意識をつなげようとした所に声が、聞こえた。
これは――――はやてちゃんの声、だ。
遠くの坂から車椅子で近づくはやてちゃん・・・動けない。今は。
ヴィータちゃんが近づこうとするのをリィンフォースさんが制止した。

「あかん、やめて！リィンフォースやめてぇ！破壊なんかせんでええ。私がちゃんと抑える！
こんなことせんでええ！」
「・・・主はやて。いいのです。長いこと生きてきましたが・・・最後の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を戴きました。
騎士たちも貴女の傍に居ます。ですから私は――――笑って往けます」
「マスターは私や！勝手なことさせへん！」
「主の危険を祓い、主を護るのが魔導の器の勤め。貴女を守るための最も優れたやり方を・・・私に選ばせてください」
「せやけどっ・・・」

目じりに涙が溜まっていくのが見える・・・こういう時、何も出来ないのが辛いよ。傍に居て抱きしめてあげたいけど・・・
それは私の役目じゃない。リィンフォースさんが。守護騎士の皆が。

その役目なのに我慢してる。

「私は世界で一番幸福な魔導書になれました。あなたを守る魔導書として転送されたのは運命だったのでしょう・・・
ですが、私が消えて小さな無力なかけらへと変わります。もしよければ、私の名はそのかけらではなく・・・
あなたが手にするであろう、新たな魔導の器に送っていただけますか？祝福の風リィンフォース。
私の魂はきっと・・その器に宿ります」
「リィンフォース・・・」

主従の会話が終わればリィンフォースさんが魔法陣の中心へと歩いていく。
はやてちゃんは・・・ただそれを見てるだけしか出来ない。私も、フェイトちゃんも、シグナムさんも、ヴィータちゃんも、シャマルさんも、ザフィーラさんも。

「主はやて・・守護騎士たち・・・そして小さな勇者たち・・・それと・・・あの少年たち。
ありがとう・・・そして・・・・・さようなら・・・・・」

綺羅、と。魔導の光を散りばめながらリィンフォースさんが空へと還って行く。
全身が消えたとき、空から降ってきたのは・・・剣十字のペンダント。が、はやてちゃんの目の前へと降り落ちた。

「はやてぇ！」
「はやてちゃん」

ヴィータちゃんとレイジングハートを戻した私がはやてちゃんの下

へと駆け寄る。
悲しみの心をすぐに溶かすのは無理だけど・・・手伝いたい。みんなで。

第十九話　取引

綾人Ｓｉｄｅ

なのはとフェイトの手伝いによりリィンフォースが空に還る。
光が空へと上がっていくのを確認して――――その光をスキマへと誘う。
スキマの中には俺とサーヴァントがいる。光の収束体を囲むように立つ。
やがて、光はリィンフォースの姿を取り戻す。

「よう。起きたか？」
「・・・・ここは・・・・お前達、何故此処に」

ゆっくりと瞼を開けたリィンフォースに問いかけるとキョロ、と周囲を見渡す。
現状の把握に忙しく視線を動かす。

「ここは俺の力の一つの異空間、とでも思ってくれ。向こうとは干渉されない違う場所だ」
「次元世界、か？」
「管理局の定める次元世界などの枠ではない、自ら作り上げた異質な空間世界、と思ってくれ」

簡単な場所の説明をしてから自己紹介をした。
サーヴァントについては防御プログラム相手に名乗っていたので覚えていたらしい。
が、ギルと俺に限っては名乗ってなかったのを思い出した。

「名乗ることもせずに全力で叩き潰すか。それも手だが、ナンセンスだな」
「言ってろ。どうせあんな場所じゃ誰にも聞こえない」
大気圏上で声を出したところで誰にも聞こえない。なら見せ付けるのみだと判断したわけだし。
「で。リィンフォース、でいいか？」
「あぁ。それが主はやてより戴いた名前だからな」
リィンフォースがコクリと頷いた。
「このまま消えていくのがお前の望みか？」
「私が消えなければまた主はやてに負担と迷惑をかけてしまうだろう。それなら私は消えたほうがいい」
頑なな意見だ。まぁ、だからこそあの二人に手伝ってもらって空に還ろうとしたんだろうけど。
「このまま存命していられる方法が一つある。聞くか？」
「――――聞こう」
俺から一つの提案を差し出す。すると暫くの沈黙の後、紡ぐ。
「夜天の書とのリンクを一旦斬る。そうすればプログラムの暴走は起きない」
「簡単にいう・・・それが出来るなら最初からやっている」
「俺たちなら出来る、と言いたいのだがね。そこまで他人を信じないのは戴けない」

リィンフォースがまた黙る。どうやら長考モードに入ったようだ。
アーチャーに頼んであるが・・・アレの原典はギルも持っているんだろうか。

「アーチャー。一応準備はしておいてくれ」
「了解した。というか既に準備は終わってる」

アーチャーの右手には破戒すべき全ての符が握られていた。仕事速くて助かるよ。
あとはリィンフォースの返答次第だが・・・さて、どうしたものか。

「・・・本当に・・・主はやてには迷惑がかからないのだな？」
「くどいな。そう言ってる。その後のアフターケアも考えてある」

顎に手を当てまた考え出す。というよりも表情からして既に決まっているようだが。
あとは覚悟とそれを押す決意か。
ちょっと押してみるか。

「あー・・・リィンフォース。これをするともうはやてとは繋がることはないぞ。それでもいいか？」
「む・・・」

俺とリィンフォースのやり取りにサーヴァントが飽きてきたみたいだ。
ランサーが欠伸してる。
セイバーはただじっと見てるだけだ。
アーチャーは右手の破戒すべき全ての符をいつ遣うのかと待っている。
ギルに至っては・・・王の財宝で出したり仕舞ったりしている・・

・暇すぎてる。

「アフターケアといったが・・・具体的にどういうものなのだ？わからないうちには承服しかねる」
「まぁ当然といえば当然だな。はやてから一度切り離したリンクを今度は俺につなげる。
　そうすれば俺の魔力を喰い続けて維持はできるだろう。俺も正式なユニゾンデバイスが欲しいしな」
「・・・理解しかねる部分があった。此の者達はユニゾンデバイスではないのか？」
「ちょっと違う。確かにユニゾンデバイスの部類だが、こいつらは完全に個の存在だ。
　まぁ俺から見ればお前も個の存在なんだけどな」

リィンフォースの問い掛けに答えていく。言葉で誘導しているように見えるのは何故だろう。

「・・・本当に主はやてに迷惑が掛からないのなら・・・お願いしたい。
　私はあの穢れ無き魂を此れ以上傷つけたくない」
「あぁ、その為にこうして準備しておいた。アーチャー」

視線を流す。その先にはアーチャー。
何も無い空間を歩きリィンフォースに近づく。

「さて、これから私はコレで君を刺すのだが」

いきなり不穏な言葉だな、おい。

「怖がらなくていい。痛くは無いし、すぐに終わる。ただ、繋がり

を消すというのは――――――辛い事だ。
その覚悟を背負った、ということで先の質問は受けても構わないか？」
「あぁ。それで頼む――――――」
グ、と。唇を噛み締める。これから襲い来る傷みに対してなのだろう。
アーチャーがリィンフォースの胸に破戒すべき全ての符を刺し宛がう。
ピィンッ！と甲高い音が鳴り響く。アーチャーは満足げに破戒すべき全ての符を差し引いた。
「さて、コレで終わりだ。痛みは無かっただろう？」
「・・・・・おわ、り？」
リィンフォースはまだ信じていないような顔をしている。
刺された箇所を掌で摩りながら、少し惚けていた。
「ほんとう、に・・・主はやてとのリンクがきれ、た・・・・一体どういう魔法なんだ」
「魔法というか、事象の反転だ。その名の通り全ての制約を無かった事に出来る宝具。
それが破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）」
アーチャーの説明を聞きながらほろほろとリィンフォースの目尻にうっすらと雫が見えた。
無意識下でも本能でも。それを把握したのだろう。
――――――はやてとのリンクが切れたことに。
「リィンフォース。今お前は誰とも契約を交わしてない空白の状態

だ。そして、あやふやでもある。
寄り代がない分、魔力の供給がないのだから、実体を保っていられるかどうかは判らない」

サーヴァントのように霊体等であるならその意見もあるだろう。
だが、デバイスはどうなんだろうか。
一度は消滅を望み、天へと還る事を望んだモノ。そして今それを拒み、現存を望む。

「これからはキミの自由だ。好きに生きるが良い」
「しかし・・・どうすればいいのかわからん。さっきも言ったが空白の状態ではいつ消えるかも判らん」

リィンフォースが困った顔をして進言してきた。確かにこのまま放置は良くない。
なら、当初に考えてたプランを実行だ。

「提案として一つ。仮初めだが俺と契約しておくか？好きなだけ魔力は持っていっても構わないし」
「いや、しかし・・それは・・・・・」
「すぐに答えを出せというわけじゃない。少しの時間くらい余裕はあるだろう。
暫くは此処にいるといい。誰にも検知されることも無い」
「しかしそれではお前に利益が無い」
「ならその内お前の力を借りる。それでいいか？」

ぐるぅり、と背中を見せてからスキマを開く。いうなれば出口。

「此処から話しかければ俺に届く。いつでもいいから答えを聞かせてくれ」

肩越しに視線をやって、手をヒラ、と振る。
するとリィンフォースも手をヒラと返してくれた。

「さ、いくぞ。まだやることは残ってるしな」

サーヴァントを連れてこの世界から出る。ぞろぞろと俺たち5人はリィンフォースを残して外の世界へと向かっていく。

スキマから出ると其処はアースラに宛がわれた部屋の中だった。

「しかし、うまくいくかねぇ」
「巧く行って貰わなければ困る」
「そりゃそうだけどよ」

部屋に戻るなり壁に寄りかかるランサーが悪態をつく。

「私は役目が終わったから好きにさせてもらおう」

アーチャーは部屋の中のキッチンへと移動した。

「私は少し部屋から出ます。英雄王と一緒というのがどうも生理的に駄目です」

セイバーはそういい残して部屋を出て行った。
当のギルは、

「ふはは、セイバーめ。我と顔を合わせるのが恥ずかしいのか照れおって。
いいだろう、妻の自由くらいはくれてやるのが夫の務めというもの。好きなだけ行くが良い」

高笑いしながらセイバーを見送るギル。

「・・・やることは残ってる。あの防御プログラムの暴走コアを止めた一撃の説明を求められている」
「ふん。天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）が二発同時に打ち込まれることなど想定無いこと。
我と違い、凡人雑種どもからは理解の枠を超えているわけだしな」

だからこそ説明が必要なんだと言い聞かせるがこのサーヴァント達はする気が無いのか各々の行動を取り始める。

「「「お前が行け」」」

くっ、なんだ。俺のほうが立場上だろう、とか思っても駄目なのか？
仕方ない・・・リンディに説明しに行くのは一人で行くか・・・
俺はサーヴァントたちを残して部屋を出る。向かうのはリンディが待っているメインブリッジへ。

第二十話　交渉

綾人Ｓｉｄｅ

メインブリッジにいくとリンディとクロノがいた。
俺の姿が見えると二人が同時に振り向いた。

「あら。やっと来てくれたのね。待ってたのよ」

リンディが此方に気付くとパン、と手を鳴らして笑顔を向けて一歩進んでくる。

「一応ながら約束はしてたからな。来ないと話も進まない」

フン、と鼻を鳴らして半眼のまま見据える。やる気は無い。本来なら話すこともないのだが。
そう、一応なのだ。向こうが約束を違えないならば此方もソレに応じなければ。

「あの最後の一撃に対しての補足、というか説明をする代わりにデータに残すことはしない。
それが約束だったな」
「えぇ。少しだけ改竄して最後はアルカンシェルで異次元へと消滅させた、としたわ。
これがそのデータね。確認する？」

当然だ。と俺は応え、そのデータを見る。穴が無いかどうかのチェックも続ける。

「これが史実になるわけだな」
「そうね。本当は勿体無いけど・・・あの力を個人で有してたら恐らく実験体になるかもしれない」
「モルモットか。もしそうなるというなら管理局は消滅するからそのつもりでいるがいい」
「おい！口の利き方をもう少し考えて喋れ！」
「黙れ、クロノ。多少はお前に対しても免除した感情を持ってはいたが、今はそれを度外視した問題だ。
本来、一執務官であるお前が入ってくる話題ではないんだぞ」
「クッ・・・」

唇を噛み、悔しさを堪えるクロノ。多少は地上で生活したとはいえ、今はコトがコトなのだ。

「・・・データは確認した。問題ない」
「そう、よかったわ。此方は言う通りにしたのだから、今度は其方の番ね？」
「・・・・場所を変えたい」

俺の意見はすんなり通り、リンディの案内で個室へと移動された。

リンディＳｉｄｅ

闇の書のデータ案件と後始末。そしてなのはさん達の今後の身の振りなど。
やるべきことは沢山。クロノにサポートしてもらいつつエイミィがバックアップ。

うん、終わらない！特にあれね。暴走プログラムを消滅させちゃったアレが原因よね。
勢いで約束しちゃったけど・・・あれは危険な力だというのはすぐにわかる。
肌が、勘が、本能が。
あれは危険だと警鐘を鳴らしてたんだものねぇ。
上の中程度の次元震とか個人の力でどんだけーってやつね。
あと、そのトイにいたあの金髪のイケメンくんも紹介してもらいましょう。
と、業務に負われているとメインブリッジのドアが静かに開くのに気付く。
そこにたっていたのは今話題にしている彼・・・城戸綾人君。

「あら、やっと来てくれたのね。待ってたのよ」

私は手を叩いて彼を歓迎する。そぶりを見せる。こちらが下手に出てはいけない。
これから起きるのは交渉なのだから。
あの力は危険なんです。何度も言うけど。
私達管理局が監視して管理して危険ではないようにしなければ。特にこんな小さい子なら力の暴発等も考えられる。

「クロノ、エイミィ。あとお願いね？」

執務官と補佐に少し場を頼んで。私は彼の提示で場所を変えて交渉に当たる。
出来る限り穏便に。そして手元に置いて彼を見続けなければ。
安全な道を歩めるように。

――――――――――――――――――――――――

綾人Ｓｉｄｅ

其処は個室とはいえかなりの広い空間だった。
個室といえば聞こえは悪いが少し大きいリビングほどはある。
「ここは私のプライベートルームよ。誰も来ないから安心して」
「それは裏を返せば何をしようが誰も来ないという事と取っていいいかな？」
俺はこの女性に対してどうも猜疑心が拭えずにいる。
何かしら裏を考えてるようなのは――――――多少なりとも知っている。
いや・・・知っている、のか？記憶の混乱が見られる。後で自己検査するべきかな。
「まぁ、横に逸れることはどうでもいい。さっさと本題に入ろうか、リンディ＝ハラオウン」
俺は入り口の付近に立ったまま腕を組み口を開く。
対してリンディはその中央に位置するソファに座り、お茶を注ぐ。
それを見て俺は訝しんだ。それを・・・見てはいけなかった。
お茶に――――――砂糖をドボドボと入れている様を！
「くっ・・・・・貴様、何を考えている！？茶に砂糖などっ・・・・・」
「あら・・・・美味しいのに。残念」

表情が固まる。左の瞼がぴくぴくと痙攣しているのが自分でもよくわかった。
リンディはとても残念そうに砂糖を入れる手を止めた。

そして飲んだ。

美味そうに。

「・・・・・・本題に入らせてもらおう。といっても俺からは特に言うことは別段ないのだがな」
「あらあら。約束は約束でしょう?教えてくれるだけでもいいのではなくって?」

とりあえず俺は話を進ませる。でなければ此れ以上の地獄を見せ付けられるに違いないと本能が把握した。
憮然。むすっとした表情が現れる。意識は切り替える。

「凡そ。お前たちの常識としては相容れぬモノだ。恐らく管理局側としては俺を・・いや、あの剣を放置することは出来なくなる」

リンディのずっと崩れない笑みに対して俺は少しずつ口を開いていく。
魔法、魔術として。危険な部分はうまく隠して。

「あれは嘗て存在した古代文明の王が世界を創り上げたという力。その傍らにて共にした一本の剣」

メソポタミア文明など説明しても恐らくわからないだろう。それな

ら全てを晒す必要は無い。
所持者・能力・その他諸々。当たり障りの無い部分を説明していく。

「・・・・大体事情は飲み込めたわ。でも・・それだけの大きな力はロストロギアとして認定されます」
「ロストロギアか。そうならどうする。はやての時の様に俺ごと封印でもするか？」

俺の問い掛けにリンディは首を横に振った。

「いいえ。恐らく貴方には適わないでしょう。アルカンシェルよりも強大な力を振るったのを目の当たりにしたのですし。
ですから――――そうですね。暫く私の見える場所にいてもらえます？えぇ、そうしましょう。それがいいわ」

笑顔で手をポン、と合わせて一人で話を解決させてしまった。
要は監視下に入れと言ってるようなものだ。そんな事誰が許容するか。

「生憎と間に合っている。俺のことは放っておいてくれ。でないと――――」
「でないと・・・・？」

「管理局が消滅しても俺は知らんぞ？」

リンディＳｉｄｅ

ブリッジから出た私と綾人君は少し歩いてからリクライニングスペースへと移動した。
ここは多少広いくつろぎのスペースとしてクルー達にも解放している空間。
とはいえ、最近はほとんどプライベートルームとして主に私が遣ってるわけなんですけど、ね。

「ここは私のプライベートルームよ。誰も来ないから安心して」
「それは裏を返せば何をしようが誰も来ないという事と取っていいかな？」

あら、手厳しい。警戒のレベルが半端ないわね。自然な動きで周囲を見渡してる。
恐らく監視システムの確認かしら。そうそうとバレルのも問題ですけどね。過去に実例があるものですし。

「――――――さっさと本題に入れ、リンディ＝ハラオウン」

うん。厳しいわー。そんなにおばさんとは会話したくないのかしら。
これでも管理局の中ではお綺麗ですねーって言われるのに。
今度レティにいい化粧品お勧めしてもらおう。はっ、いけない。話が逸れちゃう。ここは一つお茶を飲みましょう。
最近はエイミィに淹れて貰ってたけど自分で淹れるのもまたいいものよねぇ。
この第９７管理外世界に来てから覚えたこのリョクチャなる飲み物は実に美味しいものです。
リンディ印四つ星ですよ。
お茶を淹れてからいつものようにお砂糖を～♪

一つ二つ三つ四つ。このくらいかなーっていれていくと綾人君がドン引き顔で見てるのに気付きました。え?何かあった?

くっ・・・・貴様、何を考えている!?茶に砂糖などっ・・・・」

「あら・・・美味しいのに。残念」

お砂糖を入れ終わったらクピと一口。ん、美味しい♪

我ながら中々の珠玉の一品を生んでしまったかもしれない。今度レティに教えてあげよう。

綾人君はこちらを見て表情が固まるほどにドン引きしてます。美味しいのになぁ。

「・・・・・・本題に入らせてもらおう。といっても俺からは特に言うことは別段ないのだがな」

「あらあら。約束は約束でしょう?教えてくれるだけでもいいのではなくって?」

湯飲みを置いてから早速交渉へ。出来る限り話は聞いておきたい。

あの力の事も知っておきたい。

そうすれば対処も出来る、はず。

此方が下手に出ないように気丈に笑みを浮かべて対応する。

綾人君が説明するのはとある古代王国の王が持っていたというもの・・・エルハザードに似ている状況ね。

しかも王という。過去、数々の王がいたけどそんな記録は残っていない。

管理局が把握できてない記録?それとも無限書庫のまだ解明されてないところにあるデータなのかしら。

ともあれ、多少の情報は得られたのかも。

でも聞くとかなりアレね。彼は生体ロストロギアに認定されてもおかしくない。

保護、できればいいけど彼の意思がそれを邪魔している。
ロストロギアのことを説明したら彼は首を横に振る。

「ロストロギアか。そうならどうする。はやての時の様に俺ごと封印でもするか？」
「いいえ。恐らく貴方には適わないでしょう。アルカンシェルよりも強大な力を振るったのを目の当たりにしたのですし。
ですから――――――そうですね。暫く私の見える場所にいてもらえます？えぇ、そうしましょう。それがいいわ」

ふと、自然な流れで保護を名目に傍における状況を作ってしまいましょう。
ということで口に漏れる言葉に彼は

「生憎と間に合っている。俺のことは放っておいてくれ。でないと――――――」
「でないと・・・・？」

「管理局が消滅しても俺は知らんぞ？」

私は心底、その言葉に恐怖を覚え、背筋に戦慄が走るのを感じた。

綾人Ｓｉｄｅ

静かに『決定事項』を口にした。

恐ろしく静かに。
恐ろしく優しく。

その冷たい言葉にリンディは背筋に悪寒が走ったのを隠せないでいた。
俺はその仕草を見逃さない。

「まぁ――――――今のまま放置してくれていると俺は助かるよ。黙認していればいい」
「うーん・・・まぁしかたがないわね」

心底残念そうな表情で俺を見てくるが俺の意思は変わらない。
だがコレで約束は完了した。憂いは絶った。あとは好きに生きていく。
さて、これからどうするか、と考え出した瞬間、ピピピ、と電子音が部屋に響く。

「――――――あら。緊急通信みたい。ちょっとまってね」

リンディが端末のある壁へと向かい、ブリッジと会話している。
俺も俺でもう話も済んだのだから出て行ってもいいのだけど何故か動かずにいた。

「そう――――――わかったわ。クロノと一緒に――――――えぇ、そうね」

途切れ途切れの声が聞こえる。何かあったか?だが、俺には関係な

い、か。

「えぇ。彼も一緒に。伝えてはみるわ」

リンディが通信を終えて戻ってきた。

「あのね、綾人君。申し訳ないんだけど、ちょぉっとお話聞いてくれないかな？」

「なんだその管理局の白い悪魔のような切り出し方は。あと似合わない。８点」

「ひどい！？それとその点数なに！？」

「知るか。ちなみに１００点中の８点だから善処しろ」

うわぁん、と泣いてるが、歳にあわないだろ。クロノがいるわけだし。そういうのは低年齢がやるからいいわけだ。

「――――で、なんだ」

「結局聞いてくれるんじゃない」

クスン、と泣き真似。

「闇の書の残滓の欠片が――――――確認されたの」

眉がピク、と動く。リィンフォースが管理者から離れたのに何か問題が繋がりそうだな。

あとで聞いておくか。

「詳しく――――――状況を説明しろ」

どうやら俺はこの案件に関わってしまったようだ。

第二十一話　開戦

綾人Ｓｉｄｅ

リンディとの対談、交渉は緊急通信により途中で頓挫した。
まだ続くのか？これ・・・。まぁ、どうでもいい。
今のうちに、と思ったが、どうやらあっちに関しては急な展開らしい。

「話を、聞こうか」

俺に関わるような言い回しをしてきたので気になって仕方が無い。
リンディも真面目な顔で俺に向かい合う。

「闇の書・・・いいえ、夜天の書の闇の残滓の欠片が海鳴市で幾箇所かで確認されました。
それに伴い・・・・・・・・・」

言い澱むリンディ。何か言いづらそうな表情を浮かべたのが見えた。

「なのはさん達やクロノのコピー・・・といったほうがいいのかしら。
あの事件に直接関わった人物の姿を確認した、と」

夜天の書の残滓か。まぁあれだけ暴走したのだからその残滓くらいは残っている、のか。
しかしコピーね・・・クローンとでも呼べばいいか。

「それと・・・問題が一つ」

神妙な面持ち。それが一番の大問題らしい。

「貴方のコピー・・・クローンも確認されているわ」

「そう、か」

「誰も手に負えない。というよりも、アレを見た後で貴方の相手をしたくないというのがクルーの総意よ」

「大丈夫だ、問題ない。俺のコピーは俺がやる」

あとのクローンはクロノに全部押し付けろと言ってやり、俺は部屋を後にする。

恐らく大丈夫だろう。いざとなったらあの三人がなんとかする。

それに４人の信頼できるヤツが傍にいるんだから安全安心だろう。

問題なのは俺のクローンか。

制限無く能力使ったらあいつらじゃ手に負えないだろうしな。

それに此処が恐らく一番越えるべき壁の部分。

なら、思い描くアレを試すのもいいかもしれない。

早速俺は宛がわれた部屋へと戻る。統率感の無い、それでいて頼れるあいつらの力を揮わせる為に。

リンディＳｉｄｅ

綾人君との交渉は恐らく半々。成功半分失敗半分。

でもそれでも前へと進んでいる。エイミィからの緊急通信では闇の書の闇の残滓の欠片が結界を作っているとの事。

早速クロノに向かうように指示を出す。そして。

総指揮はまだ私にある。それならここでまごまごしている余裕は無い。

足早に部屋を出て靴音を鳴らしてメインブリッジへ。

「状況は？」
「クロノ君が現状を把握に行きました。現地の嘱託魔導師とも接触済みです」

オペレーターから報告を受けて定位置・・・艦長席に座る。
ディスプレイには幾つかのモニタが映し出されて現地の状況をモニタリングしている。
その幾つかには見知った顔、我が息子であるクロノ＝ハラオウンやなのはさんフェイトさん。そしてはやてさん。
はやてさんに至っては従者の４人が追随しているのが見えた。
この戦力ならなんとかなるだろう。何しろ、Ａ級ロストロギア事件を無事に収めた面々なのだから。
だがしかし。不安要素があるのは拭えない。あの少年のクローン（？）が確認されたというのだし。
もし、あの力を揮われたらきっと此方は尋常ではない被害が出るだろう。
出来れば少年にも手伝ってもらいたいが・・・交渉は難しそうだ、と判断。
手伝ってくれないかな、彼。

「クロノ執務官がコピーと接触！」
「メインに映して」

オペーレーターの報告にクロノのウィンドウをメインに出させる。
そこに映っていたのはクロノと――――――クロノだった。

クロノｓｉｄｅ
時は少し戻る。

母さん・・・じゃない。艦長が綾人とメインブリッジを出て行ってから少しして。
突然アラートが鳴り響いて警戒レベルが上昇した。艦長はまだ戻ってこない。なら僕は執務官として動く。
状況を随時流すように連絡しつつ転送ルームへと急いだ。
グレアム提督から預かったデュランダルは今調整に出している。
手元にあるのはＳ２Ｕ。昔からの僕の相棒だ。
転送を待ちながら通信。すぐに現地の魔導師と連絡を取る。高町なのは。フェイト＝テスタロッサ。そして八神はやて。

「クロノだ。みんな無事か？」
『あ、クロノ君！一体何が起きてるのかな？！』

白いバリアジャケットに身を包み、桃色の魔力光を放ちながら飛翔するなのは。
どうやら既に戦闘に入っているようだ。

『ヴィータちゃんの偽者？が襲ってきたんだけど・・・私のこと知らないっていうからちょっと。
　これは後でお話かなーって思ってたんだけど消えちゃった。ねぇ、ヴィータちゃん？』
『ちょっとまて！そこで私に振るんじゃねーよ！？』

むぅ。割り込み通信か。なのはもきょとんとした顔で遠距離砲撃の準備をするんじゃない。

「フェイト。そちらはどうだ？」
『うん。なんともないよ。ただ・・・・今目の前にザフィーラさんがいるくらいで』

フェイトのほうはそういうことか。じゃぁ――――――

『私のほうはまだ誰とも逢うてへんよー』

先に通信してきたか。ともあれ、戦局は見えた。はやてとの通信が終わって、僕は海鳴の空に降りる。

「三人とも油断はしないように。危なくなったら退ってもいい」

『『『了解』』』

今はまだ簡単な指示でいい。三人に指示を出しておく。

守護騎士にははやてから指示が出るだろうし僕が口出しする領分ではない。

闇の気配が結界を成してるなら僕はその調査に向かうだけ。

状況も把握できれば一番いいけどさ。

『クロノくん！海鳴市全体を結界で覆ったよ。思う存分調査しちゃって！』

「エイミィか！僕はいいから他の面子のフォローに回ってくれ！」

『アイサー！了解！！』

メイン回線で通信が入る。エイミィが結界を張り終えた報告をする。

これで多少は被害も減る・・・いや、被害は出しちゃいけないんだ。

黒く渦巻く異質な結界を感知しようと探査魔法を使う。

闇の書・・・いや、夜天の書に切り替わったんだっけか。その残滓の気配を感じ取る。

全部で――――――４箇所。

一番近い場所はここからそう遠くは無い。

此方の戦力のほうが多いのだから潰して行けばいいだけ。

「よし、往こうか」
「でもさせない」

一瞬だけドキッとした。まるで心臓を鷲掴みにされたようなそんな感覚。
後ろから聞こえたのは今まで生きてきた中で一番聞きなれた声。
有り得ない可能性が頭を過ぎりながら――――
僕は後ろを向いた。

そこに　　鏡があるように　　僕がいた。

綾人Ｓｉｄｅ

宛がわれた部屋でモニターに映した画像を見てるのは人影三つ。
モニターはアースラのメインディスプレイをハッキングして繋げている。

「夜天の書の闇の残滓の欠片、か」

俺はぽつ、と呟く。部屋の中央で腕を組み、険しい目でソレを見る。

「どうすんだよ、マスター」

壁に寄りかかってたランサーが聞いてくる。

「今はまだ出るべきではない。俺のコピーが出てきたら対処するまでだ」

「まぁ、今回は俺たちの出番はなさそうだし？好きにさせてもらうぜ？」

「いや・・・皆の力を借りる。いや、貸してくれ」

その言葉にランサーがひゅぅ、と口を鳴らす。

「どういう風の吹き回しだ？マスターともあろうやつがよ」

「保険だよ。恐らく俺のコピーなら制限なく能力を使う可能性がある。

なら俺はその対処をしなければならない。あの闘いの中でまだ試していない方法で」

「そいつぁ、一体・・・」

考えてることは多々ある。その可能性も考慮してある。それにはまずアイツの力も必要だ。

「少し潜る。ランサーも来るか？セイバーもアーチャーも、ギルも来る。きっと」

「ハ！其処まで言っといて行かないんじゃ男が廃るってもんだぜ、マスター！」

くつり、狂犬の笑みを浮かべるランサー。そこにはバトルマニアとしての貌が浮かんでいた。

「あぁ、行こうか。これは俺たちでしか出来ないことだ」

俺は背後に亀裂を入れるとランサーと共に中へと入った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

スキマを抜ければ其処に全員揃っていた。

「もう来てたか」

俺の後ろについてきたランサーと。
既に臨戦態勢になっている鎧姿のセイバー。
背中を見せて腕を組んでるアーチャー。
私服のままでアーチャーに背中を見せ付けているギル。
そして――――リィンフォース。

「さて、状況は理解しているかな」
「えぇ、存分に」

返答を返してきたのはセイバーだった。俺たちの頭上にはモニタリングされたディスプレイが浮かんでいる。

「さて。リィンフォース。説明を」
「ん。　あぁ　」

話を振られて気付いたように視線を向けてきた。

「アレは恐らく闇の書と呼ばれていたときの魔導プログラムだと思う。
簡単に言えば陰湿な気が溜まって溢れて来たのだろう」
本当には簡単に説明してるな。だがそれでいい。
「対処としては打ち負かす。そのくらいか。以上だ」
本当に簡単な説明で終わらせたな。まぁいいんだけどさ。
「俺のコピーも確認したそうだ。コピーについての戦力はわかるか？」
「あぁ、ソレに対しての対処は把握している。蒐集期間のうちで出会った戦力をそのままそっくりコピーしてくる」
「であった戦力ね・・・それは収集中に見せてない力も含まれるか？」
「あぁ、含まれる」
む。何気に危険な事が判明したぞ。つまりは俺の能力をそのまま使えるということだ。
「ふん。有象無象の小虫など我が力の前に平伏すだけよ」
「――――ギルガメッシュ」
俺は視線をリィンフォースからギルガメッシュへと。軽く頭を掻いてから軽く溜息をついて。
「事はそんなに簡単じゃないんだ。この世界の魔導師など俺たちの力の前じゃ通用しないんだぞ」
「ふん。その程度で敗残するのであれば我が手を出すまでもないだ

ろう」
「ＫＹで心の狭い英雄王の言う事は耳も貸しません。つまりマスター。
　貴方は彼女たちを助けたい、と見てよろしいか？」
ギルの会話に割って入るセイバー。そんなに嫌いか。明らかにむすっとした顔でギルを見てる。
当のギルはセイバーに見られて悦な表情だ。
「む、セイバーよ。いくら妻のお前でも夫に対しての言い方を考えよ」
「誰が妻ですか。一度大聖杯に懇願してきなさい。頭の治療を」
実に手厳しい。アーチャーとランサーが笑いを堪えている。肩が震えてるぞ二人とも。
「夫婦漫才はそのくらいにしておけ。俺のコピーが出てきたら全員の力を借りることになるんだ。
　あまり派手に消費してないでくれよ？」
なんとか王二人を宥めてから〆の言葉を口にする。俺、纏められるかな。心配になってきた。
「あぁ、それと。リィンフォースには悪いがお前にも手伝ってもらう」
「　　む　　私でないと駄目か？　」
「あぁ。ユニゾンデバイスの管理者権限を持ってたお前にだからこそ頼みたいことがある」
「　　わ、かった　　」

静かに首を縦に振り、肯定を見せる。

「契約する前にお試し期間というやつだ。俺に――――――ついてきてくれ」

リィンフォースに右手を差し出す。真正面から想いを受け止める、強い瞳でじ、と見据える。
少し、俯きつつもリィンフォースは俺の手を取った。

「よろしく・・・たのむ」

その小さき声は聞こえたか聞こえなかったか。不安になったのか少しだけ俯いた顔を上げる。
この空間にいた5人は笑みを以ってソレに答えていた。

第二十二話　棘雨

なのはＳｉｄｅ

なんだかうっかり私のことを忘れていたヴィータちゃんとお話した。

コレ以上無い位にきちんときっかり覚えてもらったのに消えちゃうなんて。

何か悪いものでも食べた？

「ん。でも。昨日の私よりも今日の私のほうがきっと強いから」

強敵（ライバル）の犠牲はずっと私の胸の中で輝いてるからね、ヴィータちゃん！

「おい！勝手に殺すな！？」

空を仰いで拳をぐっ、と握って涙が零れた時、後ろからヴィータちゃんの声が聞こえた。

グラーフアイゼンを肩に乗せて半眼、眉がピクピク動いてる。あれ？なんだか怒ってる？

「あれ？ヴィータちゃん？どうしたの、私の心の中から出てきちゃ駄目だよ」

「だから勝手に殺すなよ！？第一その回想なんだ！？」

「やだなぁ。そんなことない、なの♪」

きゃるん☆ミと大変良い笑顔です。スマイリーなのはとでも改名しようか「やめとけ」心を読まないでよ！？

「ともあれ、ヴィータちゃんは無事？」

「あぁ。こっちは――――――シグナムがでてきたけどな」

うーん。エイミィさんからの通信だと夜天の書事件に関わった人のコピーが出回ってるらしいんだけど。
それはヴィータちゃんも通信で聞いたらしい。ほかの守護騎士の皆さんも。
フェイトちゃんとは今は連絡がとれてないのは多分・・・今真っ最中なんだろうと思う。

「でも闇の欠片かぁ。ヴィータちゃん心当たりある？」
「いや・・・実はあんまり覚えてねーんだ。こんなときに管制人格・・・あぁ、リィンフォースがいてくれたら多少はわかるんだろうケド」
「でもリィンフォースさんは・・・」

もういない。私とフェイトちゃんで空に還したから・・・・・はやてちゃんの目の前で。
この罪はきっと消えない。だからはやてちゃんに出来る限り協力したい。手伝いたい。・・・償いたい。
これから先に何かしたいっていうなら全力で力になりたい。そして目の前の騎士も。私は護りたいとおもう。

「エイミィさんから結界が幾つかあるって言ってたから其処に行ってみよう。何かあるかもしれない」
「だな。とっとと終わらせてはやてたちと合流するんだ」

私は足元に桃色の翼を翻させて。ヴィータちゃんはベルカ魔法陣に魔力を篭めて。
一番近い場所にある結界へと向かう。

フェイトＳｉｄｅ

少し時間が戻って。

アルフと買い物に出かけてたらアースラから緊急通信が入った。大変なことが起きてるらしい。

私はすぐに人目のつかない所でバリアジャケットに着替えて上空へと上がる。

流石にクロノに人目を気にしないで動くのはどうか、と言われたばかりなんです。

「アルフ。先に帰ってて」

「う～～・・・あんまり無茶しないでおくれよぅ？」

念話でアルフに家に戻っててもらうように。上空に上がったら再度通信がきた。なのはだ。

「フェイトちゃん！やっと繋がった・・・そっちはどう？」

「ん、と。これから動くところ。なのはは無事？」

「うん。ヴィータちゃんと今一緒。こっちから一番近くの結界に向かってるよ」

なのはからデータ通信が送られてくる。海鳴市の地図と結界の場所。そして今向かってる場所と現状位置。

「はやてちゃんも上がってきてるっていうから後方指示をお願いしようと思ったんだけど・・・

はやてちゃんのほうもまだ繋がらないの。フェイトちゃんからもお願い！」

「うん。わかった。なのはも無茶しないで」

「フェイトちゃんもね！あ、あとそっちにシグナムさんが向かった

みたい」

フォローの通信が終わったら私は気を引き締める。少しでも戦場で気を抜いたら駄目だ。

それはリニスからも教わってたはずなのに。あの人に指摘されたのに。

そういえばあんまりアレから会話がない。っていうか、逢えてないのか。

ふと思い出したらなんか胸の辺りがチクリ、と痛んだ。なんだろう・・・。

でも今は気にしちゃだめだ。また後れを取ってしまう。

シグナムが来るって言ってたから。合流するまでここで待機していよう。

なのはの地図で確認した一番近い結界の方角を確認しながら。

はやてＳｉｄｅ

時は遡る。

「あかん、出遅れとる」

「まぁまぁはやてちゃん。やっと浮遊が出来るようになったのに急いでも危険です」

シャマルが後ろから声掛けてくる。

ようやっと魔力の出力とか抑え方とかでぎょーさんいっぱいいっぱいやのに。

あれから時間があるときはシャマルに魔法の運用とかを見てもらっとる。

今日も自分ちの上で魔力運用の練習をしとったアースラから通信が入ってきた。

「あー、シャマル？」
「はい。アースラから緊急通信ですね」
シャマルが通信に出る。相手しとるのはエイミィさん、やったかな。
色々お世話になったから挨拶にはいきたいんやけどなぁ。
ほとんど管理局のほうに事件の概要やーとかでいけへんからなんとかせーへんと。
「はやてちゃん、大変！夜天の書の残滓がっ・・・あぁ、どうしましょうどうしましょうっ」
「落ち着き、シャマル！どないしたん」
通信を終えるとシャマルが慌てだしたので宥める。
「夜天の書の闇の魔力の残滓がまだ海鳴市に残ってたみたいなんです。
それで、その魔力が結界を張っていくつかにばらけてるって・・・」
全然落ち着かないシャマルの傍まで行って、頭を抱えるように抱き寄せる。
そうすると少ししてから落ち着きを取り戻しながら説明してくれた。
どうやら夜天の書の魔力がこの前の事件で漏れてもーたらしい。
それでその魔力が今になって目視できるくらいになって。
結界を張ってもーた、と。
「ほなら、これは私らがやらなあかんやろ。なぁシャマル？」
「そうですね。そうですよね。もうっ・・・私ってば」

頭に手を当ててぽむぽむと。シャマルはそれだけで笑顔になる。
私はこの笑顔も守っていかなあかん。シグナムも。ヴィータも。ザフィーラも。
大事な家族の笑顔を。

「ん。まずは状況を確認しにいこか」
「はい。お供します」

すっかり元気になったシャマルと一緒にまずは状況の把握をしにいこう。
それからなのはちゃんたちと合流して。
やることが沢山できた。この胸に宿る不屈の想い。きっとわかってくれるやろ。

クロノＳｉｄｅ
そして時は戻りだす。
現場の魔導師三人と連絡を取り合いながら一番クサいと思われる結界へと近づく。
すると、そこには――――僕がいた。

「キミはダレだ。僕と同じ姿をして、幻術かナニカか？」
「そういう君こそ。何のつもりだ？」

同時にＳ２Ｕを構えて臨戦態勢だ。一瞬でピリ、と重く張り詰めた空気が漂う。
恐らくなのはの報告にあった闇の書が集めた残滓。
そして目の前の僕はその蒐集されたデータのコピー。

「闇の書は危険なんだ。邪魔すればその幻術を破ってでも押し通るが・・・」

S2うを僕に向ける。今、こいつは闇の書といった。確定だ。
相対した「僕」は夜天の書事件で関わった時の「僕」だ。

「君にとっては残念ながら・・闇の書はもうない。そしてその力の残滓となった君には、消えてもらうしかない」
「――――――ははっ!そんなウソにはだまされないぞ!僕は・・・・あの本を認めない!
父さんを奪ったアレを許さない!」

・・・そうか。「僕」はあんな気持ちで動いていたのか。
目の前にしてそれが醜く見える。客観的に捉えてこそ、本質が見えた。
憎しみに囚われた憎悪の瞳。表情。傍から見ればなんて愚かで、醜い。

「闇の書は夜天の書として変換され、今は安全な主の下、保護されている。
君が背負うものは、もう僕にはない、けど――――――」

いや、きっと完全に無いとは言い切れない。胸の中にまだあるくすぶった感情はきっと死ぬまで持っていくのだ。

「――――――だからこそ。闇の書としての力は全て此処で終わらせる!」

S2Uを横に薙ぐ。それだけで反応してくれる僕の相棒。

「スティンガーレイ！」

眼前から高速の光弾を生成して一気に放つ。あっちの僕もレビテーションで回避する。

だけど。そのくらいは予定済み。想定内だ！

「スティンガーレイ！」

同じ魔法を僕は放つ。だが今回はちょっと違う。

幾つもの光弾を束にして目の前で集束する。なのはの集束砲を見て考えてた魔法だ。

足よりも太くなった光弾を「僕」めがけて放射する。

・・・なんか変な気分だ。

大体からして同じような思考ルーチンを持つ間柄だし。プロテクションで魔法陣を作り出して防御した。

それも想定内だよチクショウ！

「チッ・・・よくもやる、けど！」

「僕」がＳ２Ｕを振り抜いて上空に掲げる。その空を覆うのは――

――スティンガーブレイド。

しかもその数は僕の限界予想数値だ。

「・・・本気（マジ）か」

「――――ボクが君だというならなぜボクの邪魔をする？ボクは闇の書を許さない。それは君も同じじゃないのか？」

「違う！僕は・・・！」

冷や汗がたらりと額を伝う。ポイントを見抜きつつ対処のプロテク

ション魔法陣を形成する。
頭上に魔法陣を盾にして掲げてスティンガーブレイドを防ぐ。幾つもの衝撃が襲ってくる度にじりじりと押されていく。

「このまま塵になれ！ボクの偽者！そしてボクが本物だ！」
「くっ・・・このままだとヤバ、い！？」

まさにジリ貧。終わることの無い位長い間防御し続けているとやっとブレイドの雨が止む。

「このまま終わらせてあげるよ。幻の君は此処で終わるんだ」

その間に「僕」が移動していたのか、目線の高さにまで移動していた。そこは――――
盾を掻き消してその瞬間を僕は見逃さない。その場所はさっき罠を仕掛けておいたのだから。

「掛かったな。ディレイドバインド！」
「しまっ・・・！？」

僕の一声でＳ２Ｕがディレイドバインドを発動させる。「僕」の足元に魔法陣が形成され、光のバインドが伸びる。
僕の持つ拘束魔法でもかなり上位にあるくらい硬いヤツだ。そうそう抜けられないはず！
身動き取れない「僕」に対して僕は決め手の無いことに気付いた。
そう、デュランダルは調整に出している。つまり、あの時のように大技が使えない。
・・・・なら、今ある魔法でやるだけだ。

「Ｓ２Ｕ。スティンガーブレイドフルエクスキューションシフト！

！！」
「ＯＫ」

Ｓ２Ｕに魔力が籠められていく。そしてさっきの「僕」が使ったスティンガーブレイドを遥かに凌ぐ程の魔力の刃が全天を覆った。

「さよなら、僕。そして――――――終わりだ」

スティンガーブレイドの雨の中で「僕」が消滅していく。
どんな理由だろうと自分と同じ姿をしている者を倒すのは精神的によろしくない。なんだかやるせないな。
でも・・・あの時の自分と向かい合って戦って勝利した。ってことは。
あのときよりは成長したのかな。なんて思う。Ｓ２Ｕを待機状態にして通信を開く。

「此方クロノ。幻影を一つ打破した。作戦継続する」

アースラに報告をしてから僕はまた結界に近づきに飛び出した。

？？？Ｓｉｄｅ

闇の欠片の結界の中。充満した魔力の本流の中で蠢く影。

「いくつか闇が消えたようだぞ」
「みたいですね。確認しました」
「塵芥め。有象無象が騒がしいわ」
「しかし、このままではジリ貧というやつです。王」

「なら、此方からアクションを起こすまでよ。闇の欠片を探し出す」
「それでしたら――――私が「僕がいくよ！あの子にも会いたい！」・・・だそうです」
「ふん。なら貴様が行くがいい。精々頑張れよ」
「うん、あの子にも勝ってそして僕は飛ぶ！」

そんな会話の後、影の一つが消えた。

第二十三話　雷刃

雷刃Ｓｉｄｅ

闇の結界の前で僕は聳え立つ！うん。このポーズかっこいい。
ずっと練習してたポーズをやれて満足した！

「やっと来るんだ。闇の欠片をもってるコ達が・・・そしてソレを手に入れれば・・・」

僕はやっと飛び立てる。今よりもっと上へ。明るいあの光の所まで。
そのためなら僕はあの符たちのためだっていいさ。やってみせるさ。
やってやるさ。
魔力反応が幾つか感じる。このくらい僕にとっちゃ朝飯前のコンコンチキなんだ。
王様に褒めてもらったり、「理」に頭撫でてもらったり。がんばるぞー！

「と、こっちに近づいてくる魔力反応があるなぁ。ちょっとあそぼっかな」

魔力探知をしていたらこっちに近づく魔力反応をキャッチしたよ。

「あの子達の力、闇の欠片になるのかなー。まぁ、手に入れたら王様も喜んでくれるよねっ」

僕はこの場所で。彼女達を待つことにした。わくわくどきどき。この感情は止められない。
どんな強いやつがいるのかな。すごく楽しみだよ！

はやてＳｉｄｅ

シャマルと状況整理に励んどったらなんやねんこの状況。

「夜天の書の闇の部分の力の残滓が残ってて、ソレが今暴れとる、と・・・」

「はい。大まかに言えばそのような感じですね」

夜天の書の守護騎士、湖の騎士であるシャマルも大体の事しかわかってないよう。

「ごめんなさい、はやてちゃん・・・闇の書・・・ううん、夜天の書は管制人格が送られちゃったから私達にはあんまり情報が入ってこないの」

「えぇよ。おつかれさんや。そこはしゃーないとおもうしかあらへんわ」

頭を下げるシャマルに私は手をパタパタ振って上げさせるように促す。

リィンフォースと切り離してもうたからこうなったん?それも調べなあかんな。

「シャマル、ちょぉ悪いけど手ぇ、貸してな?」

「はい、喜んで！」

満面の笑みで返す従者。この笑みを私は守らなあかん。他にも真っ直ぐ自分の意思を持つのや、甘えん坊や、雄々しく包んで護ってく

れるのやら。
他にも友達を護りたい。友達と一緒に。この思いはきっとずっと誰にも壊されない。
だから――――見ててな、リィンフォース。
アースラからやクロノくん。なのはちゃんフェイトちゃんの情報がデバイスに、シュベルトクロイツに流れてくる。

「クロノ君は自分のコピーと戦ったんやね。それと闇の結界、か。それを探して壊せばええんやね」
「はい、それでいいかと。ただ、クロノ執務官のほうでもあった、コピーには気をつけてください」

ん。ならさっさとその結界を探してしまおう。コピーのほうはその場でなんとかしよう。
出来れば自分のコピーとは逢いたくないけど。

「！――――クラールヴィントに反応・・・これは・・・！？」
「どないしたん？」

シャマルがクラールヴィントで索敵してると驚いた表情でこっちを見た。
なので飛ぶのをやめ、その場に停止。浮遊する。

「結界の前に人型反応・・・これは・・・・・・フェイトちゃんに似ている？」

索敵データを照らし合わせるシャマルを横目に私はシュベルトクロイツを構える。

「もうフェイトちゃんが到着しとるのかもしれへん。若しくは――

――――そのコピー。
ふん・・・了解や。シャマルも気を引き締めてな」
「はやてちゃんもまだ魔法初心者なんですから無茶しないでくださいね？」
う。確り釘刺しよってからに。もう大丈夫やっちゅーねん。
でもあんまり過信するのはいけんね。忠告は確りと胸に仕舞っとくわ、シャマル。

「さて、さっさと事件を終わらせてご飯にせぇへんとな。皆が待っとる」
「ですね。今日はお手伝いしますよ！」
「いや、えぇ！シャマルは居てくれるだけで私の癒しやから！料理には手をださんといて！」

シャマル、お願いやから料理は私がやるから手ぇださんといて・・・と、おしゃべりもここまでや。段々視認できるくらいに闇の結界が見えてきた。
明らかに異質。でもどこか懐かしい感覚に陥る。やっぱり闇の書の、夜天の書の力なんやろね。
その前に・・・人影が見える。誰や・・・なんや見たことある感じ。

「其処の人！関係者さんですかー？！」

近づきながら私は声を掛けて見ることにした。段々近づいていくとやっぱり見たことのあるシルエットだった。

「あれは・・・フェイトちゃん、かしら」
「いや、ちゃう。あれはフェイトちゃんやない。まぁ――――――聞

いてみたらわかる」

シャマルがまだ遠くのシルエットにアタリをつけるけど、私は感じ取っていた。アレはフェイトやんとちゃうって。
徐々に近づいていって、一定の距離を保って私達は止まる。空中で静止して向かい合うように。

「ん？何だ君は。何か用？僕は今忙しいんだ」
「そやね。自己紹介したらそっちもしてくれるんやったらしてもええよ」
「ふふん。僕の名前が聞きたいって？いいよ、教えてあげるさ、僕は雷刃！雷刃の襲撃者！とってもツヨイんだぞ！」
「ほぉか。で、ここでなにしとるん？」
「何って・・・闇の欠片を探し出してそれを・・・どうするんだっけかな。まぁいいや、僕と闘え！」

あかん。巧い位にこっちの靴車に乗りよった。まだこっちは名乗っておらんし。
なんか、見た目はフェイトちゃんなにゃけど、髪の毛が青いしなんかオーラがないし・・・どぉしたろぉか。
でも内包された魔力はとんでもないな。
手は抜けへん。こっちゃまだ魔力運用も何もビギナーやねんぞ！
砲撃とかマジありえへんわ！リィンフォースの手助けでラグナロクうっとったのに！

「まぁえぇやろ・・・やったるわ」
「はやてちゃん！？」

シュベルトクロイツをぶぉん！と横に振りぬいて余剰魔力を振り払う。キラ、と光って周囲に消えた。

「さてやろうやないか、フェイトちゃんもどき・・・・いや、雷刃の襲撃者、やったか？」
「ふぇいと？だれそれ。まー別に誰でもいっけど！」

向こうもデバイスを構える。バルディッシュみたいな形状や。案の定、サイズフォームやと？パクリやんけ、それじゃ。
はぁ・・・もっとこう・・オリジナリティをやなぁ・・

「しゃーない。シャマルさがっとって。危なくなったら援護して」
「気をつけてくださいね！」

シャマルが下がってくれた。こういうのは主思いのえぇ子やね。料理も手伝いくらいはさせても「本当ですね！」・・・・お。
心、読んじゃあかんわ。

「いくよ！」

デバイスを振って向かってくる。蒼い光の筋を残して瞬電宜しく突っ込んできた。

「バルニフィカス！」

名前を呼ばれたデバイスが反応して魔導石が光を放つ。
魔力が先端に集まっていく。魔力の流動が見える。

「光（こー）・翼（よく）・斬（ざーん）！」

ぶんっ！とデバイスを振ればそこから電撃属性の誘導追尾刃が生成された。あれくらったら一溜まりもないんちゃうか？

軸をずらして回避しよったら案の定追尾やね！わかってました！

「いって！バルムンク！」

シュベルトクロイツを一回転振り回して溜めてからの放射弾を放つ。
意思的に軌道を変化させながら光翼斬と相打ち狙いや。
なのはちゃんのアクセルシューター程やないけど使い勝手は最強流や。
相殺していく魔力。弾と刃。爆散して巻き起こる爆煙。更にそれを抜いてフェイトちゃんもどきに向かっていくバルムンク。
飛来する魔力弾はフェイトちゃんもどきに当たり、爆発する。更に爆煙がのぼった。

「やった！やりましたよ、はやてちゃん！」

「まだ気を抜いたらあかん！」

雷刃Ｓｉｄｅ

向かってきたのは夜天の主か。でも僕の敵じゃないね！

「ん？何だ君は。何か用？僕は今忙しいんだ」

「そやね。自己紹介したらそっちもしてくれるんやったらしてもええよ」

ん？じゃぁ僕からしてあげよう。なんていっても優しいからね！力もあって優しい！それが僕だ！

「ふふん。僕の名前が聞きたいって？いいよ、教えてあげるさ、僕は雷刃！雷刃の襲撃者！とってもツヨイんだぞ！」

「ほぉか。で、ここでなにしとるん？」
「何って・・・闇の欠片を探し出してそれを・・・どうするんだっけかな。まぁいいや、僕と闘え！」

僕が名乗れば向こうが理由を聞いてきたから応えてあげたよ。でも詳しいことはわかんないからとりあえず闘おう！ってことにした。僕が勝てばいいんだしー。王様も許してくれるよ、絶対。うん、そうだ！
なんか向こうが含み笑みしてるんだけど。そういうの嫌われるんだ。ちょっとお仕置きだね！

「バルニフィカス！」

僕はデバイスに語り掛ける。バルニフィカス。僕の相棒だ。
バルニフィカスをサイズフォームに変化させてから魔力を篭める。
魔法石が反応して呼応する。
この力こそが僕の力！

「光（こー）・翼（よく）・斬（ざーん）！」

勢いよく思いっきりバルニフィカスを振ると、魔力刃を生成していく。まずは様子見でいっきに片付けちゃうぞ。
て、向こうも魔力弾準備してる！そんなの僕とバルニフィカスにゃ効かないよ！
光翼斬と魔力弾・・・なんかバルムンクっていうみたい。王様と似た感じの魔法だなぁ。
お互いの魔力がぶつかって爆発しちゃった。もうもうと煙をあげてる。あの子が見えなくなっちゃった。
煙の中から幾つか魔力弾が抜けてきた！

「バルニィ！」

咄嗟に名前を呼んでプロテクションを形成して防ぐ。僕のプロテクションは固いんだ！

プロテクションと魔力弾がぶつかった瞬間、また爆煙が吹き上がる。

僕の周りはもう何も見えない。とりあえず魔力を溜めておこう。準備万端！「理」にも言われたしね！

煙が晴れていく。周りがどんどん見えるようになっていく。

煙の向こうにまだ、あの子がいた。

「　――――――――――中々やるね。今のはちょっとびっくりしたよ！」

僕はまだ、やれる。僕の力はまだ負けてない！

はやてＳｉｄｅ

それをみて

シャマルが嬉しそうに声を上げるのを制する。まだ姿を確認できんうちは気を抜く事は出来ひん。

もうもうと煙が立ち上る中、魔力の奔流を感じた。あかん。これは

――――――

「　　――――――――――中々やるね。今のはちょっとびっくりしたよ！」

煙の中から声がする。まだ、あいつはやる気や。どのくらいのダメージ？まだそこにおるんか？色んな疑問が飛び交う。
やがて風が吹いて煙を運んでいく。そこにいるのはプロテクションを張って無事な姿。
なんや、多少のダメージも通ってないんかい。なんて一瞬思ったら二箇所ほど貫通してダメージがとおっとった。
私はソレを見逃さない。畳み掛ける！

「まだ私のターン！いっけぇ、ブリューナク、バルムンク！」

横に前にと移動を重ねながら拡散弾と放射弾を重ねて放っていく。
全天包む程の魔力の雨や。これでどぉや！

「まだ！まだだ！僕はまだ終わらない止まらない！この力で――――」

プロテクションを張ったままでもどきが魔素を集めていく。大きいのくるか？
それでも！私は負けへん。負けられへんのや！
砲撃と斬撃の魔力弾を幾つも形成しはそれを放ち、牽制しながら。
それを潰しながら。

「響け終焉の笛！」
「雷神滅殺！」

タイミングを見計らってお互いに〆の魔法を準備しだす。向こうも魔力の高鳴りが凄い。
私はベルカの魔法陣を。あの子はミッドの魔法陣を。
魔法を、魔力を、思いの丈を。一気に篭めていく。

「シャマル！サポートお願いや！」
「はい！お任せあれ、です！」

後方待機してもらとるシャマルにサポートと、事後の援護を頼む。

「あ、ずっこいぞ！僕一人なのに！」
「アホか！これも私の力や！一人やったら私なんか何も出来ひんわ！」

サポートに気付いたのか、あの子がわめきたててきた。
こちとらまだ一人じゃ何も出来ひんわ！

「ブレイカー！！！！」
「きょっ、っこー、ざーーーーん！！！！」

私のラグナロクと。あの子の魔法が。同時に放たれる。
私は砲撃、あの子は斬撃。つくづくフェイトちゃんと似とる。
丁度真ん中で拮抗するようにぶつかり合う魔力の奔流。サポート付きとはいえ、それでもほぼ同時の威力なんて。
燻る魔力。行き場を無くした奔流が衝撃波を伴いながら空に上がっていく。
衝撃波が空に上っていくのを視界に入れながら、私は更に魔力を篭める。今、此処で尽きてもえぇくらいに。

「あの日灯ったこの力！あの時貰ったこの力！負けるわけにゃいかんやろぉ！」

私は一気に押し上げる。シュベルトクロイツを持つ手がミシミシ、と悲鳴を上げる。

今の私の魔力限界を超えていきそうな痛み。それでもきっと・・・あの二人なら。やり遂げるやろ。それなら私も負けてはいられへんわ！

そして徐々に押し込んでいく。向こうも多少は焦りの顔が見えてきとる。あと一押しや。

「くっ・・・なら僕はこの力で・・・この力で僕は飛ぶ！」

向こうも魔力を篭めてくる。あとは我慢しあいや。

「嘗めたらあかん・・こちとら車椅子でずっと生きてきたんや！この程度の我慢なんともあらへんわ！！！」

体力も魔力も今は限界。それならあとは精神力でカバーするのみ！向こうも押してこようがそれを上回ればええだけや。

押し込む。

押し込む。

押し込む。

「ぬ、おおおおおお！！！！！！！！」

魔力の圧力で負けそうや。けどこのくらいで負けたらあかん。なのはちゃんフェイトちゃんに顔向けも出来ひん。

シュベルトクロイツまでが悲鳴を上げてる。もうちょっと持ってな。

ラグナロクが極光斬を押し込んでいく。あと少し――――――あと少

し。

「う、うわあああああああ！！！！！！！！」

徐に。魔力を押し込んで遂にあの子へと届く。私のラグナロクと極光斬の魔力が一緒になって襲い掛かってる。

光に飲み込まれてその姿が包まれていく。それを見届けてから一気に疲労感が押し寄せてきた。

「ふっ・・・はぁっはぁっはぁっ――――――」

気付くとシャマルが優しい笑みを浮かべて後ろで支えてくれとった。

「お疲れ様です、はやてちゃん」

「ん・・・なんとか勝てたで、見ててくれた？」

「はい。ちゃんと」

魔力の光は闇の結界も一緒に破壊してたようで、バシバシと音を立ててパリンと割れた。

そしてそこにはボロボロになったあの子がいた。

「くっそー！くやしい！くやしいぞ！」

空中で地団駄ってどんだけ器用やねん。

「えっと・・雷刃、やったっけ。夜天の書の闇の力の残滓の欠片かなんかやろ」

「うん」

簡単に肯定しよった。ホンマに押し通したら何でも喋りそうやな。

「まぁ、なんや。事態と状況次第ではなんとかしたる。再戦もＯＫや」
「ホント?!」
「その代わり条件がある。この事件の事を教えてくれへん?私にはそれが必要かつ当然に知りうる権利がある。
夜天の書の最後の主として」
「うーん。本とは王様に誰にも喋ったら駄目って言われてるけど・・・」
少し考えた挙句、悩んでる。かなり長いな・・・
「うーん。面白そうならいいよっ!」
「ん」
コク、と頷いてから私は状況とを聞きだす。重要なことは先に聞き出してからアースラに呼びかけて保護してもらうことにした。
詳しいことを聴いてから、武装隊の人に預ける。
「難しいことになりそうやね・・・」
「はい・・・闇の書の時代の力が暴走してるわけですし、ね・・・」
「はよ、終わらせんと。これは夜天の主としてやらなあかんよね」
そう。これが私が魔法に関わって。そして夜天の書の最後の主として。最初の仕事。
きっちりしっかり。やっていこう。

第二十四話　星光

星光Ｓｉｄｅ

外にでた雷刃の気配が変化しましたね・・・大丈夫でしょうか。
あの子は突発的に物事を考える節があるのでとても心配です。
ですが、雷刃が墜ちたというなら次は私の出番のようです。
王と二人でスクリーンでの見ていた結果、出張るしかないようですし。

「王よ、私も行かねばならぬようです」
「ふん、そうか。雷刃の二の舞にはならぬように塵芥を蹴散らし欠片を接収せよ」
「御意」

私、星光の殲滅者という名も真実の名ではありませんが。
それでも闇の欠片を手にし、その名に恥じぬ動きを見せましょう。
雷刃がいない今、私が王を支えねば。その王もずっと余裕を持っておられる様子。腕を組んで余裕の笑みです。
闇の結界から出て外界へと。さっそく此方に向かってきている魔力反応が一つ、ですか。
まったく忙しいですね。少しは余裕というものをですね・・・おや？意外と速いですね。
金色の閃光よろしく光の尾を引いてその魔導師は私の前に現れました。

「・・・貴女は？」
「・・・時空管理局所属嘱託魔導師、フェイト＝テスタロッサ・・・お話、聞かせてもらうよ」

黒の薄いバリアジャケットにあのデバイスは・・・そうですか、雷刃のモデルですね。
となれば雷刃よりも賢く闘うのでしょう。

「私は星光の殲滅者。いざ、星の光に抱かれて滅しなさい」

デバイス、ルシフェリオンを斜に構え。雷刃モデル・・・フェイトですか。あちらも構えましたね。
空域魔導戦闘型のようですし。出来うる限りお相手しましょう。

フェイトＳｉｄｅ
あの結界の近くまで着たら人影が見えた。あのシルエットは・・・・なのは？
でもなんか違う。雰囲気とか、なんていうのかな・・・・とにかく、感覚が違う。
近づけば明らかに違う。でも似てる・・・なんだろうこの感じ。
とにかく、話は聞かないと。

「――――貴方は？」
「・・・時空管局所属嘱託魔導師、フェイト＝テスタロッサ・・・・お話、聞かせてもらうよ」

まずは話を聞いてから。何か、きっと、あるはずだから。
でもなんだか・・・なんだろう。やりにくく感じるのは。
なのはによく似た姿。でもちょっと違う。バリアジャケットも黒い。
魔力光も赤紫に近い感じ。

「バルディッシュ・・・行こう」

愛機に騙りかけ、魔力を通す。バルディッシュが優しく呼応してくれる。

「私は星光の殲滅者。いざ、星の光に抱かれて滅しなさい」

向こうが名乗りをあげてきた。星光の殲滅者・・・まるでスターライトブレイカーの事だね。

「それが本名、なのかな？」

「えぇ。他に名などありません」

「そっか・・・・・・でも滅することはない。勝って・・・君も無事に保護して帰るんだ！」

初速からトップスピード。遠慮はない。だからまずは全力でいくよ！バルディッシュをサイズフォームに展開。すぐ後方まで一気に駆け抜ける。

雷電よろしく先行放電（ストリーマー）を残していく。あの子もこれは見えないはず。まずは一撃、振り被っての斬撃！これで終われば楽すぎる、けど。あの子、こっちも見ないでデバイスを引っ掛けてバルディッシュを止めた！

その刹那、高速移動で距離を取りにいったのを私は逃さない。周囲にフォトンランサーを幾つか生成させながらその後を追う。ループを繰り返して時折ぶつかり合いながら螺旋を描いて空に上がっていく。

その間にも幾合か切結びあいながらだ。この子は――――強い。フォトンランサーは何度か射出してるけど。やっぱりなのはに似て装甲が硬い。というか防御展開が速いんだ。

空に出た私達は距離をとって再び相対する。

「なんだろう・・・この気持ち。わくわくしてる」

「知らない感情が私の中で溢れてます。なんでしょう、この・・・胸の中のモヤモヤは」
「それは心、だよ。私も最近、気付かされたんだ」
お互いにバルディッシュと、レイジングハートに似たデバイスを構える。

「私の相棒、バルディっシュ・・・貴方は？」
「――――ルシフェリオン。それが私のデバイスの名です」
返してくれた。話は通じる。闇の書だった時の管制人格みたいに駄々っ子じゃないみたいだね。
ルシフェリオン、か。向こうからまだ攻撃がないのもちょっと不気味だ。
まだお互いに手の内は晒してない。なら一気に崩すまで。

星光Ｓｉｄｅ
幾らか高速戦闘の後に天空まで出てきてしまったようです。それでもまだ管理局の結界の中ですが・・・
それになんでしょうか。あのフェイト、という魔導師と幾らかやりあっていると胸の奥が熱く感じる。
フェイトが言うにはコレが心だと。闇の書に生み出されて欠片を集めるのが役目たるマテリアル。
その私に心など。

「私の相棒、バルディッシュ・・・貴方は？」
「――――ルシフェリオン。それが私のデバイスの名です」
デバイスの名乗りなど、本来無駄でしかないはずなのに。なぜか釣

られて私のデバイスの名も名乗ってしまいました。
それに呼応してお互いのデバイスも呼応しました。
しかし高速移動中に誘導弾を射出してくるとはやりますね。あのような闘い方もあるとは。
また私の知識に備蓄されました。ごちそうさまです。

「――――――パイロシューター」

ルシフェリオンを振るえば周囲に１２発の誘導弾。私の前に浮遊させておきますよ。
まだ打ち出しはしません。目的は違いますが警戒の印とでもしましょうか。
理詰め、いくらか手を考えては見るものの危険性が高いのが多少気になりますね。
やれやれ、こういうのはあまり得意ではありませんが・・・・
私はルシフェリオンを前に突き出すようにして構え。
まず四発を発射させつつ周囲に纏わせながら一緒に突撃。先に射出した魔力弾を追い抜かないように速度を調節しながら。
４発全てが違う速度、違う動きをさせながらフェイトへと向かわせる。
空を翔る魔力弾４つ。そして己。特攻思考になるのは何故でしょうね。多少ノイズが確認されますけど。
一気に距離を縮めてルシフェリオンを振り構えて。魔力を溜めておきます。えぇ、遅延魔法です。
今持てるかなり上位の魔法を仕掛けておきます。
フェイトも加速して距離を取りつつ迎撃にまわりましたか。
ですがその程度では私の魔弾は落ちませんよ。向かってくる魔力弾に対して私の周囲にある弾で迎撃に回します。

「なかなかやりますね・・・ですが、それもこれでっ！パイロシュ

ーター・ファランクス！」

周囲に浮かばせていた魔力弾を一気に放射し逃げ道を消し去ります。
フェイトを中心にして魔力弾が包み込むようにして――――一斉に爆砕しました。

――――撃墜です。

フェイトＳｉｄｅ

星光、って名乗ったあの子が魔力弾を装備しつつ突撃してきた。
ここらへんはなのはに似たイメージだね。でも対処は違う。千変万化で状況は変わっていくから。
バルディッシュをサイズフォームにして迎撃を待つ。
まず４発が向かってくる。しかも微妙に一発ずつコースと速度が違う。
残りを周りに浮かべてる。恐らく遅延型に変化させたんだろう。

「バルディッシュ、危なくなったらバリアジャケットパージ」
「ＹＥＳ、Ｓｉｒ」

ヴンッ、と核が光って返答してくれる。射出した魔力弾の後ろから一気に速度を上げてくる。
それでも速度限界域はまだ私の中にはいない。それなら対処も出来る！

「フォトンランサー！」

魔力の刃を生成して周囲に。向かってくる魔力弾に向かって発射する。
同時に後ろに下がりながら速度を上げて距離を取る。勿論、フォトンランサーを何度か撃って。
幾つか打ち落としながらもまだ残ってる。なのはのアクセルシューターみたいな感じだな。
てことはある程度の持続性で動かせる、って考えて間違いないね。

「なかなかやりますね・・・ですが、それもこれでっ！パイロシューター・ファランクス！」

後ろから聞こえた声に振り返ると其処には更に増えた魔弾が生成されていた。
一気に私の周りに集まって包み込まれて――――――一斉に向かってきて爆発した。

星光Ｓｉｄｅ
パイロシューターファランクス。今もてる中ではほぼ万能の魔法です。
物理的に全方位を包み込んでの爆散。これで回避できるのはいない筈です。
ふふふ、ちょっとは自慢の魔法ですから。滅殺☆ミです！
もうもうと目の前で爆煙が立ち上ってます。流石にあの直撃では無事ではすまないでしょう。
とはいえ、撃墜なら下に落ちたと思うのですが落ちてませんね。

「やりました、か？」

まだ晴れない煙に私は顔を顰めながら目を凝らす。
もうもうと立ち上がる煙を見てると流石にもう終わったかな、と思う。
やがて煙が消えていく。そこには何もなかった。

「塵まで消えましたか。所詮はそれま――――――っ！」

消えた煙には何もなかった。私は全てをかき消したのか、と思ってしまった。
そう、それが間違い。フェイトは――――――彼女は――――――

「不安なのは変わらない。一人ぼっちが怖い夜もある――――――」

――――頭上、遥か上空。そこに彼女はいた。
雄々しくも巨大な剣を持ち、陽の光を跳ね返すほどに輝いた魔力を纏って。

「それでも――――――迷っても悩んでも――――――」

雷電。雷が降り注ぐ。あのデバイスの剣に降り落ち、放電現象が起きてます。
私はそれに怖気つくことはありません。幾度と無くこういう場面は想定済みで体験済みです。

体験済み・・・？

いいえ、今は目の前に集中せねば。

「ルシフェリオンッ！フルブレイク！」

私がルシフェリオンに魔力を通させると、呼応するように宝石核が反応した。

「集え、明星(あかぼし)！」

ルシフェリオンの先端をフェイトに向ける。向こうが放つのよりも先にチャージを終了させましょう！

「全てを焼き消す焔となれ！」

魔力充填完了まであと――――――3――――――2――――――1――――

フェイトＳｉｄｅ

爆煙に紛れて私は一気に上空に抜けて出た。まだあの子は私があの煙の中だと思い込んでる。

ちょっと卑怯だけど。それでも今はっ・・・！

「バルディッシュ。いくよ――――――」

「ＹＥＳ，Ｓｉｒ」

バルディッシュをザンバーフォームに変更して空に掲げる。天候すら支配して刀身に私の魔力の電撃と。降り注ぐ雷を落とす。

「これが私のもてる最高の力っ！」

ガシィンッ！バルディッシュが全弾排莢して更に魔力が高鳴る。高

ぶる。
煙が晴れた。私を探してるのが判る。そして――――見つけた。
彼女が見上げた先に私がいる。

「不安なのは変わらない。一人ぼっちが怖い時もある――――」

煙が完全に消え去り、あの子もデバイスを・・・ルシフェリオンを掲げてきた。

「それでも――――迷っても悩んでも――――」

『きっと、助けてくれる友達がいるんだよ。』

それは声に出なかったけど。きっと届いてると信じてる。
思いの強さは無限大。きっと貴方に届くよね。
あの子の魔力もチャージが終わる。私とほぼ同時かな。
それでも――――なのはに良く似たあの子の事を私はきっとほっとけないから。
なのはに教えてもらった一つの事をしよう。あの子に伝わるように。

「全力全開！雷光一閃！！」

私のチャージが終了した。あの子のチャージもきっと同じように終わったろう。

「プラズマザンバー――――」
「集え、明星（あかぼし）！全てを焼き消す焔となれ！」

ほぼ同時に魔法を打ち出すシークエンス。そして同時に放たれた。

「プラズマザンバー――――――ブレイカー！！！！」
「ルシフェリオン――――――ブレイカー！！！！」

一瞬にして集束砲(ブレイカー)同士がぶつかり合う。激突点を中心に魔力の奔流がうねりを上げる。
金色と薄紫と。魔力のうねりが衝撃波を産み出して周囲に散らばっていく。
恐らくアースラが張ってくれた結界が無かったら被害は甚大だっただろう。

「このっ・・・・」
「負けられない。話を聞かせてもらうまでは！」

丁度真ん中で燻る魔力の塊。それは逃げる事の出来ない力。
カートリッジで威力を上げたのに、同じように拮抗するなんて。

「君は・・・一人なのかい？それとも誰か友達はいる？」
「・・・友達などいません。居るのは馬鹿でも気が向く同僚と、我侭ですが放っておけない上司がいます」
「そっか。一人じゃないんだね。よかった――――」

友達じゃないっていったのはちょっと気にかかったけど、今は。そう、今はそれは後回し。

「一人じゃないのは私も一緒だ。それを気付かせてくれた友達がいる。
何事にも全力で取り組む尊敬する――――友達が！
悲しみを背負ってもそれを糧に前に進もうとする友達が！」

魔力の燻りが揺らぐ。私のほうが少し押していく。

あの子の――――――星光の力が気持ちが揺らいだかな。

「私は負けられない！今の私の全力全開！」

更に私は気持ちすら押し込む。強く！強く！強く！
ブレイカーが押し込まれていく。私の思いを載せていくように。

「きっと、わかるよ。大切な人が出来たら。そう・・・私となのはと出会えたように」

「う、うぅ、うわあああああああああああ！！！！！！！！」

叫びながら一気に奔流に飲み込まれていく星光。直撃と同時に爆発を引き起こす。

「――――――っ！やばい！」

直撃された星光が力なく落ちていくのが爆発した時に起きた爆煙の隅に見えた。
残った僅かな魔力を移動に使って一気に星光に近づく。どうやら気を失ってるみたいだ。

「間に合えっ！」

手を伸ばす。まだ届かない。気が逸る。まだ届かない。
もがく様に。まだ届かない。気が焦る。もうちょっとだ。
海面スレスレまで行ったところで、星光の足首をつかめた。そのまま引き寄せて向きを変えて抱き寄せる。

「危ない、所だった」

とは言え、私がやったことだけど。今は気を失ってるこの子を今は保護しなければ。

「アースラ、聞こえますか？フェイトです。至急転送をお願いします――――」

気がつくまでは。傍にいよう。
それで話が出来ればいいな。

ゆっくりでも。ちゃんと、まっすぐ向かい合って。
あ、ちなみに転送のフォローできてくれたのはザフィーラさんでした。

第二十五話　闇統べる王

闇統べる王Ｓｉｄｅ

「雷刃に続き星光まで墜ちたか――――――」

まさか此処までの力を有しているとはな。中々にやってくれる。闇の欠片を探す障害どもめ。
だが、完成人格がいないのには多少ともアドバンテージは此方にある。
下らぬ。実に下らぬ。我が配下共も役立たずどもよ。こうなれば我自らが出向くしかあるまい。
管理局の塵芥共め、眼にモノ見せてくれるわ。

「我が直々に出向くこと、光栄と知れ」

背中の翼をはためかせて調子を見る。

「うむ。大丈夫だ。問題ない」

パタパタと翼を動かす。すこぶる調子が良い。近年稀に見るほどの好調子である。
これで敗北などしてみろ。奴らに合わせる顔がないわ。
我は最初から手加減などしない。慢心も無いわ。最初からクライマックス、である。

「来い、エルニシアクロイツ」

剣十字杖のデバイスを起動させ、片手に闇の書を持つ。

此度こそは。我らが想念を遂げる。

「さぁ、行くぞ。塵芥共に終焉を見せ付けてくれるわ」

ゆる、と。我は闇の結界から抜け出るように外界へと身を踊りだす。

なのはＳｉｄｅ

ヴィータちゃんと別れた私は今、一番近い場所にある結界に向かってる。

「ん、そっか。フェイトちゃんもはやてちゃんも勝ったんだ」

クロノくんからの報告で戦局を把握する。戦局全てを把握するのは難しいけど勉強しなきゃいけないね。

フェイトちゃんのコピー・・・雷刃とはやてちゃん。

私のコピー・・・星光とフェイトちゃん。

雷刃って子ははやてちゃんが今、連れてるみたい。

星光って子はフェイトちゃんが撃墜して、今はアースラに保護。

となるとあとははやてちゃんのコピーが出てきてもおかしくないね。

クロノ君のコピーは黒野君が倒したって言うし。

「レイジングハート。また力を貸してね」

「ＡＬＬ　Ｌｉｇｈｔ」

左手にある私の相棒であり、魔法の師匠。ユーノくんから受け継いだ魔導師の杖。

諦めないって気持ちは誰にも負けない。

結界の前、約５０Ｍほど手前で私は立ち止まる。
「あれ、だね。レイジングハート、まず様子見で一撃入れよう」
「よい判断です。ディバインバスタースタンバイ」
「え？様子見でそれ撃つの？」
「大丈夫です。問題ありません」
レイジングハートがピコーン、と反応してくる。なんか色々と問題ありそうだな、とか思ったけど今は考えないことにした。
レイジングハートを構えて闇の結界に向ける。魔力を高めて集中。カートリッジはまだ使わない。何かあった時用にまだ取っておく。
「ディバインバスターチャージ完了。いつでも」
「よっし、ディバイィィィィィン――――――――――――バスターーーー！！！！！」
オープニングショットを放射する。桃色の魔力光が一直線に向かっていく。
直撃した、と思った寸前。その射線上に人影が現れた。
「っ！？」
咄嗟に危険を察知してバスターを消そうとしたけどもう遅い。
飲み込まれる、と思ったらその刹那に激しい激突音がした。
激突音と一緒に蒼劇はが飛び散る。同時に巨大な魔法陣。
あれは――――――プロテクションだ。つまり、魔導師がそこにいる。
徐々にバスターが掻き消えていく。弾かれた魔力残滓は周囲に散らばっていく。
やがてバスターは消滅。すべての光が消えていく。
其処にいたのは一人の少女。

「ふん。うぬは侘び寂びというものを理解しておらぬのか」
憮然。そこに立つのははやてちゃんによく似た姿だった。

闇統べる王Ｓｉｄｅ
結界から出るとそこは光り輝く魔法が我に一直線に向かってきている最中であった。

「クロイツ！フルプロテクション！！」

右手を差し出してプロテクションを築く。ベルカ魔法陣が形成されてバスターを押し止める。
中心の大きな魔法陣の脇に小さな魔法陣が幾つか回転しながら防護する。
そして押し止められた魔力光は徐々にその力を輝きを消していく。

「ふん。うぬは侘び寂びというものを理解しておらぬのか」

むす、っとしてるのはよくわかる。表情筋がそうだと主張しておるわ。
あれは確か星光のモデルになったヤツじゃな。なんとも真っ直ぐな顔をしておるわ。

「貴方は・・・闇の欠片さん？」
「思いついたことを口にするのは止せ、塵芥め。我はマテリアルの王。闇統べる王であるぞ」

エルニシアクロイツを振り下ろし尊厳ある態度で持って対処する。

王とはそういうものだ。

「うぬは管理局の者だな。ここに何をしにきおった」

「闇の欠片って、危ないんだよ。今すぐこんな事は辞めて！お願い！」

「辞めろといって辞める馬鹿が何処に折るか、この莫迦め！」

先手必勝。いや、向こうが先に手を出しておったな。ならばこれは報復の一撃である。

「永劫の闇に沈むがよい」

エルニシアクロイツが魔力を溜める。

「エルニシアダガー！ファントムシフト！」

魔力で生成された拡散弾を作り出して前方に配置する。その数実に３０。

我が魔力を以って駆逐してくれる！

クロイツを横に薙ぐ。それだけでまず１０のダガーが射出される。

軌道はランダム。

「っ！・・この・・・・・言う事聞かない子はお仕置きだよ！アクセルシューター！」

向こうも魔力の拡散弾を生成して撃ちおったか。

此方が１０。向こうも１０。中心点でぶつかり合い相殺する。

ほう・・・此方の魔力濃度とほぼ同等か。面白い。

先程のバスターで今くらいの数を打ち出せるならば我を凌駕しようにもまだ其処までの経験が無いようだな。

ならばその知識を得る前につぶさせてもらおうか。

「うぬの成長を見届ける気も毛頭ない。疾く消えよ」

魔力を集中して魔力を高める。エルニシアクロイツが呼応して光りだす。

「アロンダイト」

一言魔法の名を口にするとそこに現れたるは眼前の三角形のベルカ魔法陣。

魔法陣が出現して数瞬にしてチャージは完了する。

「放(て)ぇ」

口角が上がるのがわかる。我は今、酷く嗤っているのだろう。

きっと月をバックにしたら逆光で光っているくらい。なんとも良い。

我の持つ砲撃魔法である。砲撃魔導師の究極のあり方である、固定砲台の粋。

これで終わりよ！

なのはＳｉｄｅ

ディバインバスターを相殺・・・防御した子。はやてちゃんによく似た子。

きっと他の所でも出てきたはやてちゃんのコピー体。

プロテクションでバスターを防御して掻き消した力は凄いなぁ。

・・・なんていってる場合じゃないね。

「ふん。うぬは侘び寂びというものを理解しておらぬのか」

あ、なんか怒ってる。様子見のワンショットで怒っちゃった。

「貴方は・・・・闇の欠片さん？」

「思いついたことを口にするのは止せ、塵芥め。我はマテリアルの王。闇統べる王であるぞ」

闇統べる王・・・夜天の書の主のコピーらしい言葉だね。確信した。態度が尊大。憮然として偉そうだ。流石王様、って感じ。

「うぬは管理局の者だな。ここに何をしにきおった」

「闇の欠片って、危ないんだよ。今すぐこんな事は辞めて！お願い！」

「辞めろといって辞める馬鹿が何処におるか、この莫迦が！！」

う・・・確かにそうかも。って、もう次のアクションに移ってる！？

「永劫の闇に沈むがよい。エルニシアダガー！ファントムシフト！」

デバイスに魔力が溜まっていくのがわかる。これは危険だ。闇統べる王・・・だっけ。名前長いな。

あの子の周りに黒いダガーが３０個くらい創造された。うん、あれはやばいね。

しかも・・・・１０個？くらいが飛んできた。

「っ！・・・この・・・・・言う事聞かない子はお仕置きだよ！アクセルシューター！」

すぐさまアクセルシューターを放つけど１０個しか出ない。

魔力の練りも準備もなかったし、カートリッジでの増加も出来なか

った。
生成してすぐに向かわせて迎撃。向こうのダガーの軌道が読めないけどなんとか全部打ち落とした。

「だがうぬの成長を見届ける気も毛頭ない。疾く消えよ」

・・・一瞬何を言ってるのか理解が出来なかった。
だけど、何をしようとしてるのかは理解できた。
異常な魔力が集束してる。恐らく砲撃魔法。それならこっちだって負けるわけには行かないんだから！

「レイジングハート！モードエクセリオンッ！！！」
「ＡＬＬ　Ｌｉｇｈｔ．　ｓｔａｎｄｂａｙ　ｌｅａｄｙ．」

レイジングハートをエクセリオンモードへ。

「アロンダイト」

かすかに声が聞こえた。視界に留めるとそこには魔法陣を形成して発射シークエンスに入ってる姿が見えた。
それでも私はギリギリまで諦めない。

「不屈の心はこの胸に。リリカルマジカル！」

レイジングハートに魔力を通す。お願いレイジングハート。もうちょっとだけ。私に力を！

「エクセリオンッ、バスター！！！」

向こうの砲撃魔法が直撃寸前にエクセリオンバスターが発動した。

本当に目の前でぶつかり合い鬩(せめ)ぎあう。

「負けない！負けられない！お話聞かせてもらうまでは！」

押し込む魔法。目の前で放電をするようにスパークを繰り返す魔法が怖くて怖くて恐怖に顔が引き攣る。

それでもこの胸に秘めた想いは。あの日胸に灯った不屈の炎は。

負けない気持ちを増幅させてくれる。

頼れる相棒(レイジングハート)も傍にいる。これで何が怖かろうか。

エクセリオンバスターがぐんぐんと押し込んでいく。徐々に押し出していく。

「くっ！？まさか我の砲撃魔法が押されるとは！」

焦りの声が聞こえる。でも其処で停止した。鬩ぎあう魔力は行き所をなくしたかのように上空へと昇っていき、爆散して消滅した。

「エクセリオンバスターがっ・・・・」

「この阿呆が！魔力を散らしおって！」

バスターを無理矢理かき消されて私は肩で大きく息をする。魔力消費は精神的にも体力的にも消費が激しい。

それは向こうも同じだった。汗をたらしながら悔しそうな顔で大きく息をしてる。

にしても・・いまあの子はなんて言ったろう。

魔力を・・・散らす？

魔力は・・・・・散ったんだ。

つまり・・・・・・・散布は終了した。

あとは――――タイミング。

スターライトブレイカーの準備は整った。

「ＯＫ．ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．」

レイジングハートが反応してくれる。
あとはタイミングを見て。隙を見て。

闇統べる王Ｓｉｄｅ
くっ、まさか我の砲撃を押し返すとはっ・・・あの魔導師、侮れぬ！
直撃を避ける為に魔力を上空に逃がす様に仕掛けたが、あれはいけなかった。
余計な魔力を消費そて疲労が溜まる。呼吸も疎らに絶え絶えだ。

「この阿呆が！魔力を散らしおって！」

上空に昇っていった魔力は周囲に魔力の塵となって降っていた。
よもやここまで我に喰い付くとは思いもせなんだぞ、人間が！
闇のマテリアルの王である我が！闇の書の闇の欠片たる我が！
よもや人間の！魔導師に！痛手を負うとは！

「最早一片の余裕も無し。全力を以って撃ち滅ぼそう、塵芥め！！」

エルニシアクロイツ。もう構うものか。
我が魔力すべて喰らうが良い。そしてあの痴れ者に眼にモノ見せてくれるわ！

「絶望に足掻け、塵芥っ！！！！！」

エルニシアクロイツを頭上に掲げて全魔力を集中する。
足元には巨大なベルカ魔法陣。

「永劫の闇となり散れ！エクスカリバー！！」

周囲に四本の魔力の槍が生成。それがあの痴れ者魔導師に向かっていく。

狙いはその周囲４方角。楔として打ち込む――――――――――っ！？

「集まれ、星の光！」

魔導師の声が響いた。同時に周囲の桃色の魔力素が流星のように集まっていくっ！？

「さぁせるかっ！」

こっちは既に楔は撃たれたのだ。あとはメインの集束砲を打ち込むのみだっ！

「スターライトォー――――」

「我が闇は永遠ぞ！散れっ！！」

「ブレイカー！！！！！！！！！！！」

一瞬早く我のエクスカリバーが発動した。一瞬遅れてヤツの集束砲が牙を剥く。

発動後の速度は我のほうが遅いのか、あの集束砲とで激突した地点はやや我のほう。

先程のバスターと同じように押し殺してくれる！

「負けられぬ！我らが悲願・・・闇の書たる闇を今一度っ・・・」

「そうだね・・負けられない。それは私も同じだよ。だから――

――負けたら言うことを聞く。どう？」

集束砲同士がぶつかり合いスパークを引き起こして甲高く衝突する。

あの塵芥・・・我に提案などしおって。

そんなもの――――――そんなもの――――――

「そんなもの、我が勝つに決まっておろう、いくぞ、下郎！勝って取り込んでくれる！」

「私も負けない！私のことを待ってる人がいるんだから！」

あ奴も既に全魔力を使いきってるはずなのに・・これが精神的な力なのか。

なのはＳｉｄｅ

そうだよ。だから――――――負けられない。

みんなが待ってるから。傷ついて倒れた人たちの変わりに歩いていくって決めたときから。

私がやらなくちゃ。皆がいるから頑張れる！

ごめんねレイジングハート――――――もうすこしだけ。無茶するけど、頑張って。

あのことお話、もうすぐ出来そうだから。

ううん。もしかしたら、もうしてるのかな。

そうだよ。人は何時だって。一人じゃないから頑張れるんだ！

闇統べる王Ｓｉｄｅ

負けた方が言いなりになるとは我ながら何を言ってるのか。

だが、我は王なるぞ。王は負けぬ。負けられぬ！

「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」
「あああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

お互いに叫ぶほど。全身全霊全力全開。衝撃波が生まれ、周囲に飛び散っていく。最早此処に手加減など無し。
全力を出す等我が意識の中でも多々在ったかどうか。
全力でぶつかってくるあの白き魔導師。塵芥かと思ったが、その実猛き将のようである。
あのような配下がいれば我もまた――――――

「――――――　・・・っ！？　」

考え事で気が抜けたのか、集束砲は一気に我に向かってくる。我がエクスカリバーと共に。
あぁ、だが。闇の欠片を収集するのは此度では無理であったか。
諦めなどできるはずがない。出来うるはずがないのだ。本来なら。
だがしかし。此処で墜ちるのもまた善しと思う。
我は全力をだした。其れが如何な理由であろうと。
そして相手となったあの魔導師もまた全力を出して我にぶつかってきた。
此処に不満などあろうか。
あるとすればそれはこの先に続く闇の欠片の存在を見つけられなかった事。
それは・・・雷刃と星光に任せよう。王は斯くも配下を見捨てはせぬ。
雷刃はあの性格だからな。きっと気付かぬかも知れぬが。
星光は・・・きっと我が意志を汲んでくれるであろう。
先に行く我を許すが良い。

「あとは任せたぞ――――――　雷刃　星光　」

ふ、と我は瞳を閉じる。魔力の奔流が向かってくる。我は避ける事は無い。
真正面から集束砲を受け、そして――――――

――――――撃墜。

我はそのまま上空高くから海上へと墜ちていった。

なのはＳｉｄｅ

「はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・・」

息が上がる。全力を振り絞ったスターライトブレイカー＋だった。
これで耐えられたらもう終わりだった。
最後、あの子が呟いたのはかすかにしか聞こえなかった。
それでも、想いは強かった。
押し込んだ集束砲が直撃した後、私は動けなくなってしまい、助けることが出来なかった。

「・・・助けられなかったよ・・・」

「――――――――――――――」

涙が溢れて止まらない。自分でやっておいてだけど、助けられるなら助けたかった。
レイジングハートは何も言わないでくれた。きっと私の心を判ってくれたと思うから。

ギルＳｉｄｅ

なのはと闇統べる王が闘った空の下。誰にも気付かれぬようにこそりと其処にいた。

「貴様も王なら王としての責務を放棄するな。我が王たる何かを教授するまで」

金色の鎧に包み、髪を逆立てた姿で海上に立つ。
抱き抱えているのはたった今撃墜された少女の体躯一つ。

「我がマスターには我から伝えよう。貴様の覇道を貫くのを我も見てみたくなった」

ゆら、とまるで蜃気楼のように揺らめくとそこには気配すら消してその姿すら消した。

第二十六話　王と王。そして――――

ギルＳｉｄｅ

とりあえず思いつきで出てしまった。
あのマスターは控えろと言っていたが我が治まるわけもなし。
あふれ出る王気（オーラ）は抑え切れぬのだ。
ゆえに出た。後悔など無い。
第一我を抑えようなど愚の骨頂というものだ。
それこそセイバーと添い遂げるくらいしてもらわねば。
よし、あとで進言するか。
ともあれ今はこの小娘を連れてこの空間に戻ってきたわけだが。
マスターと契約している限りは出入りが自由というのも中々便利だな。
我の王の財宝（ゲートオブバビロン）と遜色無い程に利便性が高い。
・・・ほしいな。
――――――――――まぁ。何れ戴く事にしよう。世の財は全て我の物であるからな。

「ほれ。起きろ小娘」

我は連れてきた小娘を適当にそこらへんに放り投げる。
足を？んでいたからか意外と重心が外側だったのか。簡単に放る事が出来た。
これもサーヴァントとして英霊として。魔力を膂力に使ってる部分もある。
まぁ！我くらいになれば。この様な些事は魔力などなくてもできるのだが！
放り投げられた小娘はそこ等へんに投げ捨てられ体躯を踊らす。

「――――ふん。意識もないか。其れほどまでにあの一撃が効いたか」

先の戦闘において真正面から喰らったあの砲撃魔法。
こ奴は配下を思いながら身を投げた。
尊ぶべき魂を持つ。王たる資質は大いにある。
だがまだ幼い。幼すぎる。
ならば。我が王たる何かを叩き込み教授すべきである。
王たる王、この我ギルガメッシュが。直々に！手を施してくれる。
起きる気配はない。
ならば――――

――――起きるまで待つのみ。
我に時間は関係ないのだからな。

なのはＳｉｄｅ

目の前にあった闇の結界はあの子を倒すことで破ることが出来た。
でも・・・この手で撃った魔法であの子は墜ちた。
出来るなら。こういう結果じゃないほうがよかったな。

「なのは。聞こえるか？クロノだ」

クロノから通信が入った。目の前にウィンドウがでて顔が出る。近い。

「クロノ君、顔近いよ」

「あ、うん・・・ごめん」

ゴホン、と照れながら一つ咳払い。すぐにいつも通りになって、

「そっちも終わったようだな。ご苦労様」

「ううん、そんなこと無いよ。クロノくんも。フェイトちゃんやはやてちゃんは？」

「フェイトはアースラに戻ってきてる。闘ってた子を連れてきてて今救護室だ。

はやてはまだそっちで周辺を見て回ってる」

そっか。二人とも勝った、っていうことだね。じゃぁ、これで終わり・・・？

「とはいえまだ終了ってわけじゃない。はやてにも言うけど周囲に気をつけながら一旦帰還してくれ」

了解、と返して通信を終える。そっか、まだ終わりじゃないんだ。

他にも私やフェイトちゃんにそっくりな子がいるらしい。

どうやらその子達に話を聞くそうだ。

色々な事を考えてると足元に転送魔法陣が敷かれた。アースラへの転送が始まる。

一瞬目の前がフラッシュアウトして真っ白になる。

どうもまだ私はコレに慣れない。ギュ、と眼を閉じて恐る恐る開けるとそこは既にアースラの転送ルームだった。

そこにははやてちゃんとフェイトちゃんが待っててくれた。

「なのは。大丈夫だった？」

心配そうにフェイトちゃんが話しかけてくれる。私は疲れを見せな

いように笑顔で其れに答える。

「にゃはは、うん。大丈夫だよ。フェイトちゃん、はやてちゃんは？」

「私は大丈夫。ちょっと魔力使いきっちゃったから後で休憩になるけど」

「私はシャマルが癒しの魔法使ぉてくれたから体力的には大丈夫やけど魔力がスッカラカンや」

フェイトちゃんは少し疲れた顔をしてた。はやてちゃんは大丈夫ってポーズしてるけど芯が披露してそう。

「――――なのはちゃん、無茶せんといてね？」

ふとはやてちゃんが呟く。その言葉にフェイトちゃんが心配顔で覗き込む。

「なのはは・・・無茶する時してる時って隠しちゃうから・・・よく見てないと判らないけど。

でも今はわかるよ。なのはも休んで・・・・」

あぁ、やばい。見抜かれた。本当にこの二人には適わない。隠してもすぐにばれちゃう。

私はそんな優しい親友に向けて満面の笑みを向ける。

「うん。大丈夫。無茶したときは二人がこうして止めてくれるから。

だから私は飛べるんだよ。これからもおねがいします」

って。ペコと頭を下げてお礼を言った。

そんな私に二人は微笑みかけてくれる。

「よっしゃ！ほんじゃぼちぼちブリーフィングルームや。クロノくんとリンディさんがまっとるよ」

はやてちゃんがフェイトちゃんと私の腕を組んで歩き出す。
この事件でのこれからについて話すそうだ。
三人でブリーフィングルームに向かいながらユーノくんとアルフさんとも合流した。
ブリーフィングルームの前にはシグナムさん、ヴィータちゃん、ザフィーラさんが待っていた。

「はやて！無事だった？！」

ヴィータちゃんがこっちに向かって走ってきた。というよりもはやてちゃんに向かって。

「ヴィータ、心配かけてごめんなぁ。私は無事や。シャマルもおったし」

そのシャマルさんは治療室にいるとのこと。
星光、さんでいいのかな。私によく似た子。色が違うとはいえ姿も、魔法も。
その子の治療に付きっきりらしい。

「とりあえずはいろか」

はやてちゃんの提案が飲まれ、私達はブリーフィングルームに入った。

リンディSide

私が今いるのはブリーフィングルーム。何時もの部屋ではなく、純和風に凝ってみました。
そして三人のエースとその仲間達が来るのをお茶を淹れて待ってます。
ちょっと遠いけど、ウジというところのマッチャがとても美味しくて。
ちょっと苦いのでちょっとだけお砂糖を入れたら不思議にとっても美味しい♪
これは皆に振舞わないと、と息巻いているとクロノがあからさまに嫌そうな顔をしてるのが眼に見えました。

「かあさ・・・艦長。僕は何も言わずにいたけど・・・・・・」
「ぅん？なにかしら、クロノ」

ズズ、とお茶を飲んでから一息つく。あぁ、お茶が美味しい。

「その飲み物の飲み方は違うと思う・・・」

え？でもだっておいしいのよ？

「其れは多分母さんだけだ」

ジト眼で息子ににらまれちゃった。うーん・・・おいしいのになぁ。
なんて話し込んでると扉が開いて待ち人がずらりと入ってきた。

「おかえりなさい。怪我がなくてなによりだわ」

湯飲みを置いてから手をポン、と叩き。無事に帰ってきた小さなエースの帰還に嬉しさのあまり表情が緩んだ。
・・・・入ってくるなり、皆が一歩引いたのはなぜかしら・・・？

「さて、それでは。早速ですが情報を共有しちゃいましょう」

手をポンとあわせるとエイミィがタイミングよくウィンドウを開いてくれる。
ウィンドウにはクロノやなのはさん、フェイトさん、はやてさん達の戦闘ログ映像が流れ出す。

「闇の書の・・・いえ夜天の書の闇の力の闇。その力が漏れ出して今回の事件は起こったと見ています。
それによって、闇の結界が海鳴市上空に出現。各個撃破」

今までの流れを口にしながら色々なウィンドウが次々と大きくなったり小さくなったり。

「そしてはやてさんが闘った雷刃の襲撃者と名乗る子が今は保護中。
フェイトさんが闘った星光の殲滅者はメディカルルームで治療中。
なのはさんが闘った闇統べる王は――――――撃墜、と」

順次、映像を変えてその説明をしていく。
みんなが映像に釘付けになりつつも私は咳払いを一つして話題を先に進める。

「これにあとはもう一つ、イレギュラーとなる存在が一つ。
まだ姿を確認してないけど、恐らく城戸綾人君のクローン・・・
コピーにあたる存在がいるということ」

彼のコピーに対しては魔力感知だけしかできておらず、その姿まではまだ確認できてないことも伝えました。

「あの、その・・・綾人君のコピーも倒さないといけないんですか・・・？」

なのはさんが進言してきた。その手は少しだけ震えてた。
隣のフェイトさんがそれに気付いてあげた手を逆の手を握ってる。
いいわねぇ、青春。私も青春しなおしたいわ。

「それなんだけど・・・彼に少し釘を刺されてるのよ。
『俺のコピーが出たら手を出すな。俺がやる』って」

彼との交渉中に言われた事を小さなエースたちに伝える。
少しざわついた後、フェイトさんが口を開く。

「あの・・・私達も手伝いに行ったほうがいいんじゃ・・・？」
「そうしたいのは山々なんだけどね・・・あの暴走プログラムに打ち込んだ一撃が普通に使えるのではないか、って思うとその指示は出来ないのよ。
私達の中でもあの力と相対するのは――――――酷い話、向かい合いたくない、っていうのがクルーの総意よ」

そう。恐らく相手はなりふり構わずに力を揮うだろう。
その時、まだ発達途上のこの子達を危険な目に遭わせるわけには行かない。

「今はほごした雷刃さんと治療中の星光さんから話を聞いてからになりそうね」

あとは、彼にも協力を仰いでおかなければ。
やることはまだ沢山。出来ればもう中盤くらい入り込んでることを願うのみね。

闇統べる王Ｓｉｄｅ

我が目覚めたのは暗く、だが暖かい場所だった。

「ここは・・・どこだ」

床も天井もない。だが、床の感触はある。透明なだけ。空を飛ぶ空戦型であれば恐怖などないが。
だが見知らぬ場所だ。遠くには何やら光る点・・・星か？

「起きたか、小娘」

いきなり掛けられた声に我はビクッ！と肩を竦めて声のした方――――背後を振り向く。
そこには金髪紅眼黒服で偉そうに踏ん反り返って煌びやかな椅子に座る男がいた。

「うぬは誰ぞ。我を闇統べる王と知っての狼藉か！この・・・塵芥め！」
「ははははは！いいぞ、小娘。王の中の王たる我の前で王と名乗るとは。その無知な部分もまた致し方無し。
我は心が広いからな。その語尾の侮蔑の言葉も今は水に流して許してやろう」

なんたる憮然。だが、王がもつ王気は確かなものだ。

「その王の中の王が我に何か用か・・・」

「いやなに。中々賢しくも吼えていたのを聞いていてな。気が向いただけのことよ」

椅子に座ったままで男は我を見下す。

「それになにより。配下を想ってか?最後、貴様手を引いたろう」

ビクッ。我の体が、肩が撥ねるのが判った。何故この男は気付いたのだ。あの一瞬を。

「貴様の配下の一人は治療を受けている。もう一人はほぼ鹵獲であろうか。

まぁ体の良い捕虜であろう」

のうのうと口を進める男。我はそれを黙って睨み続ける。

「貴様は何を望む?」

ふ、と。男がそんなことを口にしたのだ。

「我は・・・闇の力を。闇の欠片を集め、世界を闇に包むのだ」

「そうか。その後はどうする」

「っ・・・・」

そう、我は此処で黙ってしまう。結果論、なのか工程は我らの中にあったが、その結果どうするかが我らには抜けていた。

だが行動せずにはいられなかった。何故ならそのように動かねばならなかったからだ。
・・・ならなかった？
何故だ。どこで我はそうしなければいけないと想っていた？

「成すべき事のみを前提に結果を成し遂げた後のことを考えておらんとは。
　愚の骨頂よ。恥と知れ」

何と言う侮蔑。このような言葉を投げられたのは初めてかも知れぬ。
だがしかし、確かにこの男の言うことも一理ある、と頭を過ぎる。

「我が・・いや、ナニカするのは我のマスターだが。貴様等を何とかするであろうよ。
　疾く縋るが良い。何かしら道は出来上がるであろう！」

尊大に雄々しく。椅子から立ち上がった男は大きく笑い飛ばした。

「あの男は小体躯ながら内包した魔力は鬼畜。何かしら知恵もあろう。
　今は此処で待機しているがいい」

紅い目が我を貫く。我はその目に――――――その名の通りに撃ち貫かれたのだ。

ギルＳｉｄｅ

ふん。これでよかろう。勝手に連れてきたのは悪かったがな。
あのリィンフォースとかいうデバイスが言うには魔力が切れれば消

滅するという。
あのような気概の者を見るのも久しい。
我もまた、さまざまな王と出会ってきたが、彼の征服王くらいには楽しませてもらいたいものだ。

「マスターには我から伝えておこう。何、ここには貴様と同じようなのがいるからな。
退屈はせんだろう」

あとでマスターと引き合わせれば何かするであろう。
そこまでは我が手を出す領分ではない。疾く、示して見せよ。汝の進む先を。
我が前に見せるが良い！ハァッハハハハハハハ！！！！！

??Side

「・・・つまらん世界だな。ここは」

私は一人、呟く。緑の長い髪が風に靡いて鬱陶しい。
ビルの屋上の角に座り、下を見続ける。

「まぁ、折角来たんだ。楽しませてもらおうか。城戸綾人――――――いや、ミラージュ＝ヴィジョン？」

私は口角が上がるのを感じた。恐らく私は楽しんでいる。この状況を。
ならば精一杯私を楽しませろ。

そして一陣の風が吹いた時。その姿は霧の様に消えていた。

第二十七話　閑話休題（前書き）

今回短いです。
そういえば、書き始めて半年経ちました。

第二十七話　閑話休題

綾人Ｓｉｄｅ

「いいのですか、マスター。ギルガメッシュを好きにして」
「あいつの勝手癖は今に始まった事じゃないだろ。単独スキルが高いのも考え物だが」

アースラに宛がわれた一室。俺とセイバー、アーチャーとランサー。全員がいた。
リィンフォースからはまだ連絡が無い。あいつはスキマに残ってる。出てくればその魔力で感知されてしまうのがオチだ。
そのスキマでギルが好きにやってるとなるとリィンフォースも感づいてるだろうな。
逆にギルのほうも気付いてるだろう。

「アイツには後で話をしておくさ。それよりも今はあのマテリアル構造体の事だ」
「ふむ、ではマスターはあれをどうするつもりだ？」
「消えなければいけない命など無い。アーチャー、お前の意思に反するが俺は全てに手を伸ばそうと思う」

ソファに座ってたアーチャーはフン、と鼻を鳴らす、が。

「いいだろう、その理想を抱いて進むのなら見せてくれ。私が抱いて突き進んで無理だった事をマスターが見せてくれ。
それが私の選んだ道と違えどもその先が私の見た先と同じと思わせてくれるのなら、な」

ク ク 、 と 笑 い な が ら 肯 定 し て く れ た 。

「 俺 は 闘 え り ゃ な ん だ っ て い い ぜ 。 あ ん た が 往 く 道 に ゃ 闘 争 が あ る し な 」

何 時 も の 場 所 、 壁 に 寄 り か か っ て た ラ ン サ ー が 言 う 。 も う そ の 壁 お 前 専 用 だ な 。

「 セ イ バ ー は ど う す る 」

「 私 は 常 に マ ス タ ー と あ る べ き だ と 思 い ま す し 。 そ れ が マ ス タ ー の 進 む 道 な ら 共 に 歩 む べ き で す 」

「 苦 労 を か け る な ・ ・ ・ お 前 に と っ て は 真 の マ ス タ ー で は な い と い う の に 」

「 い え 。 そ れ も ま た 聖 杯 の 導 き で し ょ う 」

セ イ バ ー は つ い て き て く れ る か 。 ア ー チ ャ ー 、 ラ ン サ ー も き て く れ る と い う 。

な ら ば い く か 。 戦 場 へ 。

「 あ の マ テ リ ア ル 構 造 体 も 取 り 込 め れ ば い い の だ が ・ ・ ・ リ ィ ン フ ォ ー ス に き い て み る か 」

ま ず 、 あ の 闇 の 欠 片 た ち 。 マ テ リ ア ル を 戦 力 と し て 加 え た い 。 な の は た ち と 同 等 の 魔 力 を 持 っ て い る な ら 充 分 な 戦 力 に な り う る 。

「 よ し 。 我 々 は 何 時 も 通 り に 」

「 「 「 イ エ ス ユ ア マ ジ ェ ス テ ィ 」 」 」

伝 説 の 三 騎 士 は 深 々 と 頭 を 下 げ て 礼 を 尽 く す 。 俺 の 指 示 に 従 っ て く れ る サ ー ヴ ァ ン ト 達 。

いくら使い魔とはいえ、俺はこいつらに何をしてやれるのかな。
今は出方を待つだけ。煮え切らない。

フェイトＳｉｄｅ

リンディさんから事件のあらましを聞きながら私は気持ちが迷っていた。
私が手を掛けてしまったあの子はまだ目覚めない。
だからといって、自分が落としておきながらお見舞いにいけるほど気が強くない。

二律背反（アンビバレンツ）。

ぐるぐると頭の中でまとまらない考えが渦巻く。
どうすればいいんだろう。どうしたらいいんだろう。
こんなとき、なのはなら。はやてなら。綾人、なら。
色々考えてると会議は終わってたようではやてが私の肩に手を置いていた。

「フェイトちゃん、疲れとる？だいじょうぶ？」
「あ・・・うん。だいじょうぶ。ちょっと考え事してたから」

わたた、と手を振ってなんとも無いふりをしてみせる。
それでもはやてとその隣にいるなのはには筒抜けだったようで、

「でもフェイトちゃん。ちょっとは休まなきゃ。倒れちゃうよ。
それに私達、魔力がほとんど無いから回復するまで休憩なんだって。

地上に降りておうちに戻ってもいいっていわれちゃった」

なのはがこれからの事を簡潔に教えてくれた。
正直、頭に入ってなかった会話を伝えてくれたのは有難かった。

「うん。じゃぁ、戻ろう・・・リンディさんは？」
「メインブリッジに戻る言ぅてたよ」
「ありがと、はやて。少し待ってて。リンディさんとちょっとだけ話があるから」

そう言って私は立ち上がる。リンディさんと話があるから。
ブリーフィングルームを出てメインブリッジへと向かう。
途中クルーの人に擦れ違いながら会釈をして。
メインブリッジの扉を開けると其処にはオペレーターのエイミィさんと話し合っているリンディさんがいた。
ドアが開く音で二人は私に気付いた。

「あら、フェイトさん。どうかした？」

優しい声で話しかけてきてくれた。
私は少しモジモジとしながら、話を切り出す。そう、以前から言われてたあのことに。

「あの・・この前の話のことで・・・」
「うん」

リンディさんが近づいて、私の目の前に。

「あの・・私・・・できるだけ、善処して考えますから・・・あの・・」

巧く言葉に出来ない。もどかしい自分が嫌になりそう。

「無理しなくてもいいのよ？時間はまだあるのだから」

「いえ・・・おねがい・・・します・・」

ぽつ、と。呟くくらいしか声が出なかった。聞こえてないかもしれない。

でももう一度いえるくらいの勇気が振り絞れない。どうしよう。

ふ、となのはをはやての顔が浮かぶ。二人の笑顔だ。

まるで頑張れって。背中を押してくれるよう。

だから。頑張る。頑張ってもう一度言おうとした瞬間、

「フェイトさん・・・最初はまだぎこちないかもしれない。でも、貴方はもう私にとって大事な家族。

そう接してきたわ。クロノも同じ。だから、何も遠慮はしなくていいのよ？」

そう、優しい声で先制された。嬉しい卑怯。

やばい、こっちから言おうとしてたことだけしか考えてなかったから逆に対処が出来ない。

涙腺が緩む。視界が滲む。

私は只、その場で声を殺して泣いていた。

リンディさんは暫く私を抱きしめていてくれた。

なのはＳｉｄｅ

ブリーフィングルームでフェイトちゃんを送ったあと、これからのことを考える。

ちなみにレイジングハートは私に多重思考訓練をしてくれてる。魔力ウェイトは今は外してる。

「魔力が戻るまで休憩かぁ。ヒマになっちゃったね、レイジングハート？」

「ご自愛ください、マスター。しかしトレーニングはいつでも出来ます。

何時如何なる時も私はお手伝いしますから」

最近、訓練の密度が濃くなってる気がするよ。気のせいかな、レイジングハート？

ピコン、とレイジングハートが光って反応する。

隣のテーブルでははやてちゃんと守護騎士さんが会話してる。

「でも、あともう一手かぁ。綾人君、どこにいるのかな」

此処最近顔を見てない。先だっての事件でその正体を知りえた友達は同じ力を持つ人でした。

どうしてるのかな。私はふと言葉が漏れてたのに気づかなかった。

はやてＳｉｄｅ

家に戻っても今はすることが無い。ので、暫くはアースラに残ることを選んだ。

「ほな、みんなも休んでな？」

「はい」

「おう」
「心得た」

シャマル以外全員揃っとる。メディカルルームからまだシャマルは戻ってきてない。
それだけあの子の治療に時間がかかってるようや。
邪魔したらあかん。せやから私は此処で待つ。何かあれば念話で言うてくるやろうし。
じっとしてるのは別に苦ではない。車椅子の生活を考えればたいした事はあらへん。
それはきっと無効もそうなんやろう。出方を見計らってるのかも、と思うと迂闊に動くことも出来ひんわ。
実際この後の動きの鍵を握るのはあの人・・・綾人くんだけやろ。
・・・それでも。本当なら。この事件は私の子がしかけてもうた事件。
前の闇の書事件でも迷惑と掛けた以上、私の手でなんとかしたい。
それは守護騎士のみんなもわかってくれてるようで。

「あかんなぁ・・・こんなとき、どないせぇちゅうねん・・・」

ぽつり、弱音が漏れてもぉた。皆に聞かれへんかったやろか。
キョロ、と視線で見渡す。シグナムもヴィータもザフィーラも。気にしてへんみたい。
でもそれって聞こえてたっちゅー事やろ。
なのはちゃんは隣のテーブルでレイジングハートと会話中や。
そこまで声が聞こえたかどうかはちょっち微妙。
今は兎に角、打つ手がなさ過ぎる。ジリ貧になりつつも手を考えなあかんね。

「あとでシャマルに逢いにいこか」

私の愛する守護騎士にそう伝えて。嫌な考えは頭を振ってかき消した。

今度こそ。ハッピーエンドに終わらせたるねん。きっと――――

第二十八話　魔女と魔女

クロノＳｉｄｅ

前線警戒をリンディ提督から指示が出て、現在海鳴市上空を警邏中だ。
闇の結界が張られていた４箇所は今は静かになっている。その事象すらなかったくらいに落ち着いている。
いや、空気が澄んでいる、とでも言ったほうがいいのか。
出立前に間に合った調律済みのデュランダルを手に僕は飛ぶ。

「闇の結界が澱んだモノをすべて吸収してたのを壊したから、か？
　兎に角これは報告しないといけないな・・・」

上空の警邏を一通り終わらせれば今度は地上へ。
今回地上は特に被害があったわけではないが万が一ということもある。
用意周到、しておいて損はない。地上、海岸線に降り立ち認識阻害魔法を解く。
バリアジャケットを脱げば服も現地のファッションに基づいて着込んだ。
・・・エイミィが煩いから下手に出来ない。うーん・・・此処らへんは弱いなぁ、僕。
くしゃ、と前髪を指で梳いて歩き出す。空を飛んでいるときはあまり気付かないが海風が気持ち良い。
前にも来た海岸線を歩いて街の方に出る。
商店街を歩いて抜けて、広い通りへ。ここらへんは確か翠屋があったな。確かあっちだ。
僕は首だけ翠屋の方角に向けて考える。

だけど今は寄っている余裕が無い。残念だが警邏が終わったら顔を出そう。
エイミィがショートケーキに嵌ってるようだし。
路側帯を歩きながら魔力感知は怠らない。視線でも怪しいのを探す。

「出来ればこのまま何も無いで終わってほしいもんだな・・・」

15分ほど歩いたところでフゥ、と一息。そう、その一瞬が僕の気が抜けた一瞬だった。

「――――――」

っ

!?

」

その一瞬にして僕とその周囲を包み込む、ミルクのように甘く濃厚な魔力。
ソレが本当に僅かな瞬間に展開して包囲した。
そして僕は感じた。何とも言えぬ気が僕に向かって一直線に刺し込んで来ているのを。
刺して来るのは背中から。振り向くのと同時に僕はデュランダルを起動する。
同時にバリアジャケットも展開する。

「ほう。流石に棒立ちというほどではないか。小僧の癖に中々経験はあるようだな?」

ぞわり。

背筋に悪寒が走る。

あれは駄目だ。

危険だ。

純粋な気だけで圧倒するべく圧倒的な威圧感。それを――――――声の主は放っているのだ。

姿すらまだ見せない何者かが。

「姿くらい見せてもいいんじゃないか？それとも――――――」

「まぁいいさ。姿くらいみせてやってもいいが、欲情するなよ？童貞ボーヤ」

声からして恐らく女性・・・いや、この語り口調は間違いないだろう。

僕の推理は脳裏を駆け抜ける。

電灯の灯りすら届かない通りの先。その闇の中からソレは現れる。

体のラインに合った白い服・・・いや、あれは拘束服か。それに長い緑の髪の毛。

切れ長の瞳が僕を捉えた。

「・・・君は・・・何者だ」

デュランダルを持つ手が震える。精一杯の恐怖に戦う勇気を僕は振り絞る。

「こんなところでデバイスを出すとは結界を張らずにお前は馬鹿か？それとも只のバカか・・・」

デュランダルを見てハァ、と重い溜息を漏らす。

「エイミィ、結界！」

「もうちょっと――――――はい！」

直接通信でエイミィ・・・アースラに結界を張る様に進言。すぐさま結界が周囲に張られた。

それまで向こうは何もせずに待っていた。

「私を知りたければ精々足掻け小僧。でないとほら――――――死ぬぞ」

？？Ｓｉｄｅ

「私を知りたければ精々足掻け小僧。でないとほら――――――死ぬぞ」

くくっ、面白い反応をする小僧だ。こういう奴はとても好感が持てる。

実に弄って楽しい。あぁ、久しぶりだな、こういうのも。これもあいつがいなくなってからはあんまりなかった。

もうちょっと遊ばせて貰おう。私は少し視線に『力』を篭める。

それだけで大気が震える。む、これは中々威力が高いな。

あの力と同じような感覚だ。これはまた・・・面白い！

「――――――っく！？」

突風にも似た衝撃波が突き抜ける。小僧を取り巻き、真空刃を作り出して服を切り裂く。
が、どうやら思ったよりは切り裂く事は出来なかった。
どうやら魔力で防護服を作っているようだ。中々用意周到じゃないか。
実に楽しい反応ばかり見せてくれるな。こう・・・うずうずする。
これは笑みも浮かぶというものだ。

「ほら、どうするんだ？私を組み解いて押し倒すのではないのか？」
「そんなことするかっ！」

む。断られたか。仕方ない。だが、このままでは面白くないな。
私は優しいからな。こっちの情報を多少流してやろう。

「私が何でもいいから負けを認めたら言うことを聞いてやるよ、童貞。
差し詰め私の正体と言った所か？」

口角が上がる。実に判りやすい餌だ。これに乗るほうも乗るほうだろうが。

「・・・それは本当だな？それと僕は童貞じゃない。」
「ほう。可愛い顔してやることはやってるのか。この変態め・・・・・
・あぁ。私は嘘はつかないよ」
「くっ・・・名前くらいは教えて欲しいものだけど・・・？」

あぁ、名乗ってなかったか。まぁそれ位はサービスにしてやろう。

「私の名か――――――――――――C．C．と呼べ」

クロノSide

「私の名か――――――――――C.C.と呼べ」

静かに女性が名を告げる。C.C.・・・・コードネームか？

「それはコードネームか何かか？」

「サービスは終了だ。これから先は有料だぞ」

「サービス精神は過大に欲しいところだけどね」

口汚いな・・・仕方ない。彼女の要求を呑むしか今はなさそうだ。

『エイミィ。データは取れてるか？』

『もっちのろん！随時データ更新してデュランダルに送るよ！』

念話でアースラに連絡する。

『最悪、このデータをベースに戦略を立てられる。そうすれば――――対応策も見つかるだろう』

『クロノくん・・・大丈夫、クロノ君が変態でも皆はついて”いって”あげるよ！』

ちょっとまて！僕は変態じゃない！ていうかエイミィ！？視線を外さないで！？

なんで涙を拭いてるんだ！こんなのフェイトたちに見せられないＹＯ！

「くっ・・・どうしてこうなった！」

「お前が変態なのはどうしようもない事実らしいぞ？」
「違う！」

女性・・・C．C．がクスリと笑う。
なんか馬鹿にされてる感じだが・・・今はそんな雰囲気じゃない。

「君から話を聞くには・・・骨が折れそうだよ」

デュランダルを構えるとC．C．は僕を見続けてる。まるで値定めでもしてるかのように。

「それがお前の杖、か。見たところ氷結系のようだな」
「っ！？」

見抜かれた。さっきからだしてたけどそれこそ内面までなんて一瞬で。
通常、魔力変換資質として氷結系が現れない昨今、氷結系の魔法自体が既に希少（レア）。
それで先の事件・・・闇の書事件では有効活用されたわけだけど。

「君を重要参考人として保護する・・・聞かない場合は実力行使もありえる」
「それは執務官として、か？面白いことを言う」

仕事は仕事。恐らくこいつは何かを知っている。
なら聞き出すしかないだろう！

『エイミィ。フェイトたちには言うな。ここは僕がやる！』
『クロノくん！？』

念話通信を強制的に送って強制的にカット。ちんたら喋ってる余裕は――――なさそうだ。

「時空管理局執務官、クロノ＝ハラオウン――――」

名乗りを上げる。特に深い意味は無いけどやる気は出る。
本気でやらないと負けるのは眼に見えてる。なら最初から飛ばすだけだ！

「デュランダル！」
「ＯＫ、ＢＯＳＳ――――ＩｃｅＥｄｄｇｅ」

目の前に氷のパイク・・・針が精製される。その数１０余り。
それを出し惜しみもなく一気に射出する。ほぼ前方、その全方位から。

「ほう・・・」

顔色一つ変えないＣ・Ｃに僕は更に追い討ちを掛ける。遅延魔法（ディレイスペル）は嫌いじゃない！

「アイスバインド」

デュランダルが魔法をつなげる。氷結系バインドスペル。氷の蔦がＣ・Ｃの体に絡みつく。

「これは・・・・・」

氷の蔦に触れた服が凍っていく。次いで大気すらうっすらと温度を下げた。

「こういうプレイが好きなのか？小僧の癖に・・・・特殊な趣味を持つと苦労するな」
「なっ・・・なにをいっている！」
くそ！わかっててもこういう類の挑発は苦手だ。
顔が真っ赤になるのがわかる。純情を弄ばれるのも問題だ、が！
「話をし終わるまでつきあってもらう！」
「焦るな童貞。だからお前はそう・・・」
深い溜息を出される。そんなに僕ってだめなのか？
『大丈夫だよ！そんなクロノ君でも私はついていくよ！』
強制通信が来た・・・と思ったらすぐに切れた。ていうかエイミィ仕事してくれ。
などと気が抜けた所にC．C．からの攻撃が入る。氷の礫だ。
バインドは掛かったまま。だが、左人差し指が僕に向いていた。
ただ、それだけで魔法が発動していた。
「デバイスもなしにっ・・・ありえない！しかも氷結系魔法だなんてっ・・・」
「デバイス・・・その杖か？そんなもの必要ないだろ。あぁ、お前の近くにもそういう奴がいるだろう？」
無表情のままにつまらなそうに言い放つ。
・・・・あいつの・・・綾人と同種。若しくは知り合い。
「・・・やはり行き着くか。そしてやはり知己だったか」

「っ！？」

心を読まれた！？いや、それよりも綾人のことがばれた。
なんとなくだがそれは危険なことだと思ったから考えないようにしていたのに。

「どうするつもりだ・・・・？」
「どうもしないさただ私は奴に用がある。それだけだよ小僧」
「僕にはクロノ＝ハラオウンっていう名前があるんだけど・・・」
「あぁ、わかったよ。小僧」

判ってない。というか、とことん挑発してくるな。
お陰で僕の頭にも血が上りっぱなしだ。

「今此処で敗北するか、それとも尻尾を巻いて逃げてあいつを呼ぶか・・・選ばせてやるよ」
「どっちも断る！」

バインドはまだ効いている。アドバンテージは僕が有利に働いてるはずだ。

「やれやれ・・・仕方ないな。キャスター」

キャスター・・・？唱（キャスター）えし者？
彼女はなにをしようとしているんだ・・・・思考が高速に動く。刹那、僕の背後から魔力の針が飛来してくる。
それをデュランダルが高速詠唱でプロテクションを展開する。

「あら・・・今ので終わりと思ったのだけど。甘かったかしら」

肩越しに後ろを向くとゆら、と闇の中から紫のローブを着込んだシルエットが浮かび上がる。

「油断でもしたのかしら、マスター。酷い格好ですこと」

「言うな。これでも楽しんでるんだ」

僕を挟んで日常会話でもするかのように喋りだす二人。

キャスターＳｉｄｅ

マスターに呼ばれた私はやっと姿を見せる。出来る限り姿は隠しておきたかったのですけどね。

「油断でもしたのかしら、マスター。酷い格好ですこと」

「言うな。これでも楽しんでるんだ」

見れば氷の蔦に巻きつかれてる我がマスターがいる。

・・・・・巻きつき方が甘いわ。私ならもっとこう・・・・

「・・・・・・キャスター」

はっ。つい妄想に耽ってしまったわ。

ともあれ、現況は牽制。私がいることで危険視を促す、と。

「さぁ・・・・坊や。神代の力を見て散りなさい」

我が身に篭められるのは嘗て稀代の魔女と言われた我が魔力。

神代に生きた我が知恵は我がマスターと共にあるのだから。
マスターの進む道が我が道。さぁ、往きましょう。

第二十九話　闇　咲きて

綾人Ｓｉｄｅ

ほぼ自室と化したアースラの部屋。
そこでブリッジにハッキングしてウィンドウをつなげてみている。
今はクロノの無様な姿が映っているが・・・

「なんだ・・・これは」

クロノと相対している二人の女。会話も拾えるので何を喋ってるのかも筒抜けだ。
驚愕さえ覚える。何故この女は俺を知ってる。いや、あの力は俺と同様の力だ。
更にあれはキャスターじゃないか。何故だ・・・・

「・・・早急に問いただす必要があるな。
セイバー、アーチャーは待機。ランサー、霊体化してついてきてくれ」
「ん、あいよ」

踵を返して俺は部屋を出る。恐らく今の俺は表情さえ無いものの、怒りに満ち溢れているだろう。
あの『神』と名乗った存在はこう言っていた。
『イレギュラーを倒せ』と。
ならあれがイレギュラーというわけなんだろうが・・・如何せん見ただけでは同じ力。対等の力。
勝敗、は――――やらなければわからない。今回はどうやら本気で掛からないといけないようだ。

「まず、雷刃に話を聞く。その後にギルの所にいる闇の王にも聞く」
「焦んなよマスター。少なくとも向こうのサーヴァントじゃ此処の魔導師じゃ壁の役にも立たねぇ。
特にキャスターあたりと出くわしたらアウトと思えよ？」
「わかってる！」

声を荒げて苛立ちを募らせる。

「いや・・すまない。お前たちのせいじゃないのにな・・・」
「いいっての。まぁ、あいつらの相手は俺たちだ。で、あの緑のネーちゃんはマスター、アンタの役目だぜ」
「・・・・あぁ」

あれは俺の昔の記憶が確かならあいつだ。俺の姿がこうなってるのも、あいつが此処にいるのもすべてお前の仕組んだことなのか、神め。
だとしたらこれはとんでもなく茶番劇だ。何の意味があっての悪戯か問い詰めてやる。
まずはあの女――――C．C．だ。
このタイミングで姿を現すということはあいつらマテリアルと何かしら関係がある筈だ。
それをまずマテリアルに問い詰める。
雷刃ははやてが保護したはず。星光はフェイトが落として治療室か。
ならまずは雷刃に会いに行く。かすかな魔力反応を探しながら俺はアースラの中を動き出す。

雷刃

「うわー。すごい広いぞー」

王様に似たあいつが連れてきた此処は面白い！
色々見たことないのが一杯ある。ボタンとか押したくてうずうずしてくる。
何人かに止めろって言われたからしょうがないから止めてやった。
僕はほら。人より強いから言うことを聞いてやるんだ。
ずーーーーっと長い廊下を歩いてると前から黒い服を着た子供が歩いてきた。
・・・・なんか怖い顔してるんだけど。

「おまえかおこわいぞ。でもそのマントはかっこいい」
「・・・・雷刃、か。力のマテリアル」
「うんっ、そーだぞ。強いんだからな。おまえなんか一撃だ！♪」

ズバッ！とポーズして右拳を向けた。僕の右拳は強いんだ。

「あぁ、それは大変だな・・・で少し聞きたいことがあるんだがいいか？」
「ふふーん。僕の強さがわかったようだな！いいよ、なんでも！」

僕が強いことを認めたこいつはなんか変な感じがする。なんかこう・・・なんだろう。

「こいつを知っているか？」

子供がモニタウィンドウを開いて僕に見せたのは一人の髪の長い女の人。
なんだろう・・・この人もナンか判らないけど気になる。なんだか

なぁー。

「うーん・・・・よくわからない！」

きっぱり判らないことは判らないというのが僕だ！
だってわからないんだもん。思い出せないんだもん。
・・・・思い出せないってなんだ？
気になるのってなんでなんだ？

「この人、なに？」
「いや・・・知らないならいい。邪魔したな。あぁ、このまま真っ直ぐいくと遊んでもらえるみたいだぞ」
「マジデ！？すぐいってくる！」

僕はこの子供に質問した。けどなんかはぐらかされたんだけど。
ていうか、僕と遊んでくれるのがいるってマジ？それじゃぁ僕はこれからそこにいって遊んであげるよ！
そして僕は闇の欠片を探すん、だ？
あれ？なんだろう・・・・本当になんだろう。

「うーん・・・・なんか凄く大切なこと忘れてる気がする・・・・なんだったかなー」

首を傾げて記憶を探すけどわかんない。まぁ、そのうち思いだすだろー。

闇統べる王Ｓｉｄｅ

我はこの「スキマ」という空間にほぼ幽閉とも言える状態にいた。
何をするでもない、否、何が出来るでもないこの空間で。
雷刃はどうしてるであろうか。落とされた星光は無事でいるのか。
配下の二人の事が木になって頭から離れぬ。
天上に天下に星の光。天も次元も無いこの空間に連れてこられた。
連れてきた本人は何処かへ消え失せおった。
変わりに――――――何故だ。何故コヤツがおるのか。
長い銀髪に黒き服装。紅い瞳を持つ女。

「何故管制人格が此処におるのか・・・説明せよ」
「話せば長くなるのだが――――――」
「簡潔に」

管制人格め、溜息をついて己の状況を喋りだした。

「なるほど――――――消える直前に此処に、のぅ」
「えぇ。今はその答えを導き出す為に此処でお世話に」
「ふん。嘗ての闇の書の意思が日和っておるわ。それほどまでに子烏と離れるのが嫌か」

いつのまにか我はヤツよりも高めにプカプカ浮いていた。これはコレで面白い。
子烏の事を口にしおったらなんぞ照れだしおった。わけが判らん。

「で、うぬはこれからどうするつもりでおるのか」
「・・・どうしましょうかね。外の事は大体把握してはいるが・・・」

などと他愛も無い会話をしておったら空間が歪み始めた。
管制人格はさも慣れた様に気にもしておらぬので我も気にしない事に留めた。

「なんだ。揃ってるな」

聞こえたのは男の声。あの金髪の男ではなかった。

「リィンフォース。すまないが返答を待つ前に手を貸してほしい状況だ」
「というと・・・」
「お前のユニゾンの力。そして管制人格だったときの能力」

ほう・・・この男。中々キれるようじゃの。
多少興味も出てきたわ。
それにしても――――――何かしら懐かしい感情があふれるのは何故だ。

綾人Ｓｉｄｅ

スキマに入るとリィンフォースとマテリアルの王がくっちゃべってた。
リィンフォースには用件を手短に伝える。
その間俺はマテリアルの視線をずっと浴びていたわけだが。

「・・・何か用か？」

いい加減視線が痛くなってきたので声を掛ける。
半眼でじ、っとずっと見つめられるとどうも心が痛くなった。

「主でも心が痛くなるのか」
「心を読むな！」

リィンフォースめ・・・・あとで覚えてろ。

「で、だ。あー。お前」

マテリアルを指差す。途端に表情が険しくなった。まぁ当然か。

「お前とこいつの関係はなんだ？」

ウィンドウスクリーンにライブタイムでの映像を見せる。
正に今クロノフルボッコタイム中乙。

「む・・・こやつは」

反応したな。確定までもう少しか。恐らくこいつらは繋がってる。

「魔力回路が繋がってるな。お前の魔力供給はあいつからだろう」

主従というわけではないだろうが、魔力回路のパスは繋がってるのは既に知ってたりする。
ギルがこっそりそこ等へんは調べていたのだ。何気によくやってくれたよ、ヤツは。

「ふん。だからどうしたというのだ。確かに我の魔力はその緑の女から徴収しておる。

だがそれ以上のことなど知らぬ。気付いたらそうなっていた。というわけだしな」

・・・つまりマテリアルが目覚める前に既にアクセスしてパスをつなげたという事か。

そんな強硬手段が出来るような奴がこの世界にいるというのか・・・

・

それならばさっさと手を回さねばならない。遊んでいる余裕も今は少ない。

餌で釣れるなら一番やりやすいのだがな。変な矜持をもってる可能性もある・・・

「どうしたのだ・・・ずっと黙って」

ずっと考え事をして黙っていたのが気になったようでリィンフォースが声を掛けてきた。

俺の左に立ち、顔を覗いてきた。

「いや・・・なんでもない。それより――――――」

リィンフォースSide

何か考え事をしているのだろうか。口元に手を当ててずっと黙ったままだ。

「どうしたのだ・・・ずっと黙って」

ふ、と顔を覗きこみに行く。すると吃驚したように肩を震わせてから何事も無かったかの様に振舞ってる。

「いや・・・なんでもない。それより――――
少し手伝ってくれ。お前の力が必要なんだ」

先刻も言っていた言葉を再度投げかけてくる。どうやら何か考えがあるのだろうが・・・
私は夜天の書から切り離された身。あの優しい主に会うのはどうにも身が引けてしまう。
離別を宣告して直ぐに出会ってしまうのも少し問題が・・・

「・・・はやてのことを思ってるのか？」

見透かされたかのように夜天の主の名前を出されてしまって表情が変化するのが自分でも判った。

「い、いえ。そのようなことは――――」
「はやてに逢いづらいならよく説顔を合わせないようにする。約束しよう。
ユニゾンいて出て行けばいい。ユニゾンした後の姿を見られても大丈夫なようにする」
「しかし・・・それでｍ「大丈夫だ」・・・うぐぅ」

なんか押し切られた感じがします。

「なんぞ。うぬは管制人格であろう。恐らくその男の考えてることは我でも理解したぞ」

いたのですか、マテリアルの王。折角の二人の会話に入ってくるなんて。

「凡そ、我を此処に連れてきたあの金色のヤツはうぬのデバイスであろうよ。
ならば――――――貴様が管制人格を欲しがるのは眼に見えた」

ふふん、と優越感に浸り笑みを浮かべるマテリアル王。

「しかしマテリアルの王よ。私は――――――」
「別にそいつが言ってるように力だけが欲しいわけじゃない。
近いうちにあいつらはユニゾンデバイスではなくなる。そのときに俺を助けてくれる存在が必要なんだ。
俺と――――――共に来てくれ。リィンフォース」

割り込まれたマテ王に反論しようとしたら更に割り込まれた・・・
何この状況。
おろおろとしながらも二人を交互に見つつ考える。考える。

「悪いが時間がかかってしまうとクロノが危ない。あんなでも一応借りはあるのでね」

う・・・それは私が速く返答しろといっているのですね。

「・・・まだ完全に納得と理解はしておりませんが。
私の力を欲するならば貸しましょう。ですがその・・・主はやてには」
「あぁ。判ってる。バレないようにする。任せろ」

小さく、その言葉に私は首を縦に振る。主はやては優しい方。
きっと私がまだ存在しているとわかればまた泣いてしまうでしょう。
私のせいでまた泣いてしまうのは戴けません。ならば、この身隠していかねば。

「すまんな。最初に時間を与えておきながら決断を急がせた」
「いえ。コレもまた私の行く路なのでしょう」
迷いはまだありはするものの。恐らくこの人は。この少年は。コレを見越して私を生き延びさせたのだろうか。
だとすればこの少年は何処まで先を見ているのか――――
私は少しその先を見てみたくなった。私が消え去るはずだったこの世界で。
裏に沈もうとも私はこの先の世界を見続けていく。

なのはＳｉｄｅ

今、フェイトちゃんとはやてちゃんとでメインブリッジにお邪魔してます。
やっぱりこの事件のことが気になって町に下りることが出来ませんでした。
すると、ブリッジの雰囲気がいつもと違っていてピリピリしてました。

「えっと・・・・」

入り口で迷ってるとリンディさんがこっちに気付いてくれた、けど・・・
なんだか余裕がなさそうな表情です。

「あぁ・・・なのはさんフェイトさんはやてさん。ごめんなさいね、

今ちょっと」

すぐにリンディさんがメインウィンドウに視線を向けると其処にはクロノくんが。
二人の女性と闘ってた。

「リンディさん！これ・・・！」

隣のフェイトちゃんが声をあげた。やっぱり気になるよね。

「クロノに警邏を頼んで降りてもらってたの。そおで出会っちゃったのよね・・・・」

恐らく黒幕。なんといっても計り知れない魔力ランク。数値は出ない。計測不能。

「あの緑色の髪の毛の女性なんだけど、もう一人のローブの人を召還したのよね。
召喚士？にしては魔力が・・・ううん・・・でも・・・」

リンディさんがブツブツと思考モードに入ってしまった。私達はリンディさんの近くまでいってメインウィンドウを見る。
苦戦してるクロノくん。

「うーん。巧く回避はしてるんだけどジリ貧かなぁ。上手い感じに回避ルートを潰されてる」

よく見れば相手は二人掛かりを利用して互いに死角を埋めながら戦闘を展開している。
あぁいう闘い方もあるんだ。不謹慎だけど勉強になる。私はこの戦

いをずっと見続けた。

「リンディさん、私達はいいかなくてもいいんですか？」
「そや。クロノくん助けにいかんと」

フェイトちゃんはやてちゃんが救助の申請をする。私は何も言わなかったけど同じ意見だ。
視線だけでその意思を継げる。

「今回は駄目です。あなたたちはまだ魔力も回復して無いのに」
「「「でも！」」」

リンディさんの制止に私達三人の声が重なる。
確かに今の私達は魔力がまだ回復しきってないけど。でも助けに行きたい。でないと・・・でないと・・・

「まぁお待ちなさい。ちゃんと手は打ってあります」

フフン、と得意げな顔のリンディさん。何か仕組んだんですか。

「ちゃんとあの相手が出来る人に声を掛けました。だから今はクロノが戻ってくるまであなたたちは待機です」
「それって・・・誰ですか？」

フェイトちゃんも今にも飛び出しそうな顔してる。やっぱり心配だよね。
ねぇレイジングハート。もしものときは・・・宜しくね。
はやてちゃんも念話で守護騎士のみんなと連絡取り終えてるみたい。
あとはタイミング。三人でアイコンタクトをしてから出ようと思った矢先にリンディさんが口を開いた。

「綾人くんなら。きっとこの状況を打破してくれると。私は信じてますから」

第三十話　おわりのはじまり

綾人Ｓｉｄｅ

どっかで呼ばれた気がしたが無視することにした。

「さて。いい加減クロノを助けにいってやるか・・・」

首をゴキ、と鳴らしてからスキマを使って転移する。
転移魔法とは違うので残留魔力もない。なにより魔力検知にも引っかからない。
既にリィンフォースとはユニゾンしている。
ユニゾン後の容姿変化についてははやてにばれないようにと言う事で強制的に変化を無くした。

「ユニゾンは成功しましたが・・・このままでは私は特にすることもないのでは・・・？」

「いや、意味はある。一応ながらだがな。まぁ、保険、だ」

リィンフォースにもまだ真意は伝えてない。

「そのときになったら負担を掛けてしまうかもしれないが宜しく頼むよ」

「了解、はしました」

等と会話してるうちにクロノたちが戦闘してる近くまできた。
恐らくアースラでも俺を確認してるだろう。
さて、あとは結界の中にどうやって入り込むかだが。

「流石に壊すわけにもいかないか」
「それでは本末転倒ですね」
「なら仕方ない。溶かして入ろう」

結界の壁まで近づき、俺は手を翳す。触れるのは結界の壁。
触れれば鏡面のように。水面のように。波紋が揺れる。
トプンッ。という音がしそうなくらいに結界を柔和して中へと入る。
今頃アースラでは驚いてるだろうな。

「結界を結界でなくしてる時点で既にどうかと思います」

リィンフォースめ、逐一ツッコミありがとう。あとで何かくれてやる。拳的な。

「と遊んでる場合じゃないな。リィンフォース、どっちかわかるか？」

魔力感知を任せてる間に戦闘準備。『神威』を呼び出しておく。
・・・・・・・・・・。

『セイバー。アーチャー。ランサー。聞こえるか？」
『はい、よく聞こえてますよ』『須らく』『おうよ』
『俺の合図でこっちに呼び出す。準備しててくれ』

手札は準備しておくに越したことは無い。出来るなら使わないようにしたい、が・・・・
相手にキャスターがいるのも気になる。なら同じサーヴァント同士で戦わせたほうがいいだろう。
その間に俺はＣ・Ｃと相対する。それが今回の作戦の大雑把なところだ。

『キャスターは我がいこう。五次の際の繰り返しだ』
『ギル・・・マテリアルのほうは良いのか？』
『大丈夫だ、問題ない』

ならキャスターのほうは良いか。あとの問題は他のサーヴァントを呼べるのかどうかだ。

『それに対しても我々がなんとか対処します。マスターは目の前だけを見ていていただければ』
『ん。頼むよセイバー』

もし呼べるとしたらアサシン、バーサーカー、ライダーか。
バーサーカーにアーチャーを。
ライダーにセイバーを。
アサシンにランサーを。
もし出れば、だけどな。と考えてる間に戦闘音が聞こえる。どうやらリィンフォースに誘導されて近くまで来たようだ。

「やってるな」

まるで何もなかったかのように戦闘場所に出た。

「あら・・・こんなところに紛れて来るなんて。困ったボーヤね」
「キャスター。そいつが目標だ」
「あぁ、探し人ね。こんばんわ。幻影の導き手さん？」

クロノへの魔法攻撃を一旦止めて俺を見遣り話しかけてくるキャスター。
それと俺を認識して半眼で睨むC．C．。

クロノはやっと攻撃が収まった事で膝をついて肩で息をしている。

「あぁ。俺もお前に会いたかったよ。俺を狙う目的も含めてな。
それとキャスターの召還についてもだ」

「知りたければ私に勝てばいい。そうだろう？」

無表情。これは真意が読みにくいな。キャスターに限ってはローブで顔が見えない。

「二対一か」

「怖いか？」

「まさか」

挑発かよ。見えないけどこっちも二人なんだけどな。てか、クロノ無視かよ。

「クロノ。動けるか？」

「あぁ、そいつもいたな。まだいたのか」

「あら。まだいたの？もう帰って良いわよ？」

・・・なんというクロノ。お前のスーパータイムは今終わった。
清らかに成仏してくれ。

「まだ死んでないっ！・・・・痛っ・・」

莫迦め、大声を出すからだ。

「エイミィ。聞こえるか？」

『はいはーい。聞こえるよ。クロノくんの収容始めますよー』

「宜しく頼む。それとそこになのはたちはいるか？」

『うん。皆見てるよ』
「絶対に手を出させるな。なのは、フェイト、はやて。聞こえるか？これはもうお前たちの力を超えた問題だ。
今は其処で見ててくれ。そして・・・俺の勝利を信じててくれ」
言うだけ言って通信を切る。その間にクロノは転移されたようだ。
治療室コース一直線だな、きっと。

「さて。どうする？一人、とはいえお前には見えてるんだろう？C・C」
「まだ名乗っては無かったはずだけどな。どうせピーピングでもしてたんだろう。ミラージュ＝ヴィジョン」
「まぁ、そういう事だ。で、キャスターも混じるか？」
「貴方達の間に入ろうと思うほど野暮ではなくってよ？」
クス、と笑ってキャスターが一歩引いた。どうやら手を出す気は無いらしい。
という体でやるんだろうな。だってキャスターだし。

「一応、手を出すなとマスターに言われてますから手を出すことはないわよ」
「へぇ。ちゃんと躾けてるんだな」
まぁ、手を出したら手はあるし。そのときは頼んだぜ、ギル。
念話で少し飛ばす。自分のサーヴァントは信じているからな。

「・・・・・・・・・・・・・・・」
返事が無い。おいおい、ここでやっぱ無理とか言うなよ？

『ちょっと待て。今忙しい』

念話が飛んできた。今になってそれか！

『キャスターの相手は任せたといっただろう。何してる』

『なに、今王としての教授をしてやってるところだ』

マテリアルに教授中か。今やるべくこと、か？まぁいい。

『出番になったら声掛ける。適度にな』

『承知した』

「・・・さて。待たせたな」

「いや。なに。すっぽかされた感は否めないがな。そっちのサーヴァントの会話は終わったか？」

「・・・・・・」

こいつ・・・念話を盗聴してた？幾重にも重ねた俺の妨害魔法（ジャミング）を抜けたのか？

「知りたかったら私を倒してみろ。強いんだろ？何せお前は神ｓ「喋るな！！」・・・・」

こいつ・・・何処まで知ってる？俺のことを何処まで気付いてる？あの空間での出来事を知ってるのか？この力も知ってるのか？そういえばあいつは何故キャスターを呼べた？あいつも俺と同じような力を持ってるとでも言うのか？

だとしたら・・・本当にあいつらでは勝てない。

「サーヴァントにはサーヴァント同士で闘ってもらう。お前の相手

は俺がする」
「あぁ、それで構わない。私の目的はお前なのだからな」

キャスターに下がるように指示を出すC．C．。
いざとなったら相対するメンバーを変更する必要もあるか・・・・？

「私の事が気になるようだが・・・生半可に気を抜くと殺すぞ。吸血騎」
「そこまで知ってるなら不死殺しの方法も持ってるのだろうな・・・・俺が勝ったら教えてもらおう」
「そういうことだな――――キャスター、あとは頼む」
「えぇ。承知しましたわではそちらのサーヴァント。霊体化してアストラル界で逢いましょうか」

キャスター霊体化。完全に気配も消える。アストラルワールドに移動したようだ。
これで今この場にいるのは二人っきり。

「さて、やろうか。私はこの時をずっと待ってたよ」
「あぁ。はじめよう。そして教えてもらおう。お前が何者かを」

二人の間に闘気と殺気が入り乱れる。大きめに張った結界はその中で闘気と殺気が渦巻いていくのがアースラからも見えたという。

第三十一話　槍兵と暗殺者

ランサーＳｉｄｅ

アストラル界に移動したぜ。マスターがやる気になったらしいからな。

まぁ俺は闘えりゃそれでいいんだ、これがな。

で、早速俺の相手が目の前にいやがるんだな。これがな。

「まさかお前とやることになるたぁな――――――アサシン」

「ふむ。これはこれは。こういう組み合わせで来るとは思わなんだな」

青地の和装。やけに長ぇ直刀。俺の槍とどっこいの長さな感じだ。

今は眼を閉じて涼しい顔して立ってやがる。

とはいえ・・・こいつ、こんな雰囲気だったか？まぁいい。今は詮索よりも――――――

「ハッ。それでも俺たちは呼ばれて飛び出て闘うっきゃねぇんだ。つまり――――――」

「――――――つまり、引き際は存在しない、ということでござろう？」

「当然だ！」

俺は愛槍を手に腰を低く落として構える。一刺必中の構え。こいつでいく！

魔力を篭めたたったの一歩が。疾駆となる。風すら置いてけ堀に距離を縮める。

一気に間合いまで入り込む。俺の槍なら刀の間合いよりも遠い！

「セリャア！！オラオラオラオラオラ！！！！」

一瞬千撃。まさにそう例える位の連撃を突き刺していく。

「ほう。これは流石に速度ならサーヴァントの中でも郡を抜くとも言われるほどの三騎士の実力だ」

アサシンめ、余裕ぶりやがって説明挟むなんざふざけてくれんじゃねぇかよ！

とおもったが確かにその言葉を現実にさせるだけの腕を見せ付けてきやがった。

俺の槍を真正面からあの長い刀で全て打ち落としにきやがった。

「このやろう・・・やるじゃねぇーか！」

俺は確かに口の端が釣りあがるのに確信した。

アサシンＳｉｄｅ

いやはや流石に速度重視のサーヴァントよ。ここまで流麗かつ重厚な攻めなど彼のセイバーとの相対を思い出す。

一撃全てに隙が無い。ならば拙者はそれを全て叩き落すまでよ。

燕が鷹に変わった。それだけの事。

「このやろう・・・やるじゃねぇーか！」

ランサーが笑う。あぁ、この猛者は闘いを楽しんでいる。

だが隙など見せようものならこの猛犬に首ごと掻っ切られること必至。
ならばその爪その牙全てを折って駆逐しようぞ。

「ふ・・・雅がないこの場で戦うのもどうかとおもっておったが。いやいや中々に楽しめそうだ。なぁ、ランサー」
「へっ。貴様の道楽に付き合うほどヒマじゃねーんでな。さっさと終わらせてもらうぜ！

ランサーの速度があがる。いや。これは参った。拙者の速度を上回っていくではないか。
だがここで退く訳にも行かぬのが必定。ならばこそ我が速度も上げていくのみ。

「さて、貴殿の速度と拙者の速度。どちらが上でどちらが先に落ちるのであろうな？」
「俺とスピード勝負する気か！上等だついてこいよ！」
「無論」

互いに槍と刀が閃光のように筋を走らせていく。確かに彼の騎士は最速と謳われた英雄。
幻の我が剣がどこまで届くのか見たいものもある。
それに・・・卑怯というなかれ、我が方もまたランサーに太刀打ちできるほどの手を持ってきたのだ。

「流石に最速の騎士。聞こえし武勇は確かなものだ」
「ハッ。確かに俺についてくるたぁ対したもんだ――――――」

ふむ。多少なりとも押されつつあるか。これは中々に楽しめそうだ。

「元々サーヴァント同士の闘い等一瞬で決まることもある。だが、今はどうかな？」

あの魔女より承ったこの魔力にて。お相手いたそう。最速の槍の騎士よ。

ランサーＳｉｄｅ

この野郎。俺が最速の騎士と知っておいてスピード勝負たぁいい度胸だ！

だったら最速の名に恥じぬ一槍を見せてやろうじゃねぇか！

いくらかの撃で徐々に俺のほうが押して行く。槍と直刀じゃ一撃を回す速度が違うってモンだ。

俺の参撃にアサシンの一撃。そのくらいの速度の違いが如実に出てきた。

このまま押し込んでやるっての。

「・・・元々サーヴァント同士の闘い等一瞬で決まることもある。だが、今はどうかな？」

・・・何言ってんだこの野郎。俺が押してるってのに何処か余裕ぶった笑みすら浮かべてやがって！

「その涼しい笑み、消してやるよ！」

「出来るのならば」

突きだけでなく、払いや薙ぎも付け加えてアサシンを追い詰める。

とはいってもこの空間じゃ壁やらなんざねぇんだけどな。後ろに下

がろうものならいくらでもできるが・・・
アサシンは俺と対等に向き合って一歩も退きゃしねぇ。
・・・アサシン、とはいえ、こいつこんな闘い方してたか・・・？
て・・・こいつ魔力量が半端ねぇ！なんでこんなに膨れ上がる！？
第五次聖杯戦争のときの比じゃねぇ。
一際高い音を放って俺の薙ぎとアサシンの薙ぎが交差して交錯する。

「・・・手前ぇのマスターの魔力か」
「貴殿こそマスターからの魔力を貰っているだろう？少年ながらとおもったがマスターの話を聞けばなるほどと納得さえ出来た」
「へっ・・・確かにな。お前のように『受肉化』されてない分魔力に頼らないと駄目な部分もある」
「！・・・・いつから・・・と聞くのも無粋か」

最初から感じていた危惧は当たった。やはりアサシンは・・・いや、こうなると他のサーヴァントも受肉化してるな。

「おい。もう一つだ。お前ら全員受肉化してるのか？」
「それは応えられぬ。如何しても知りたいというのならば拙者を倒していくがいい」
「そりゃそう――――だ！」

交錯した互いの武器。俺はやりに力を篭めて一気に振り払う。
するとアサシンが後ろに後ずさっていく。俺はそれを逃さずに追いかける。

「貰った！」
「させんよ！」

全力での一突き。これいつは今までででもベスト5に入るほどの会心。

こいつは殺(と)れる！
今までで一番の大きい音。一瞬で閃光と火花と衝撃が突き抜けていく。
一瞬の閃光が消え去るとそこには俺の槍の先端とアサシンの刀の先端がお互いの突きで燻りあっていた。

「「・・・・・・っ」」

ギリギリと均衡を保つ武器。だが其処に力の優劣などない。
お互いの魔力の差がこの先を決める。

アサシンＳｉｄｅ

ほう。これは重畳。まさか魔力合戦と相成るとは思わなんだ。
だがこの状況も中々に雅。副うそう無い「しちゅえーしょん」である。
余程の戦力差がなければこのような芸当とても出来るやも無し。
だが、如何せん矢張りと言うか。差は出てしまうか。じりじりと我物が刀干し竿が押していく。
彼の槍はあの伝説の呪われし紅槍というのも知っている。
情報が無ければ勝てる戦も勝てぬからな。

「ふむ・・・だがこのまま決してしまうのは惜しいな。なぁ、ランサーよ」
「っ・・・うぉっと！」

拙者が一歩踏み出してランサーを押し出す。蹈鞴を踏んで後ずさる。
さて、そろそろ頃合か。約定は足止め。そして――――――更なる先への道標よ。

「さて。そろそろ終わらせようか」

物干し竿を引き戻しながらランサーに背を向ける。

「それは・・・へへ、一撃必殺ってか。いや、手前ぇは三撃か」

「ほう。これを知るか。僥倖だ」

どうやら知識は得てきたようだ。我が燕返しを知るとは。大聖杯からの知識ではないし・・・

確か向こうはセイバーとアーチャーがいた筈。ならばその入れ知恵であろう。

しかし其れ如きで拙者が退く訳も無く。

「燕ではなく、鷹を相手にするわけだが。ご覧召されよ」

一際魔力が昂ぶっていく。あぁ、これは。今までで恐らく最高の剣になることだろう。

「我が一刃。とくと見よ。そして散れ！」

直刀が弧を描く。一瞬三撃。次元屈折化現象（キシュア・ゼルレッチ）を用いた同時三撃。

一刃を回避しても更にその回避先を消し去る二撃、三撃目が襲い掛かる。

さぁ、貴殿の力を見せてくれ――――――――――――

ランサーＳｉｄｅ

くっ、魔力の放出がでかすぎる！しかも確かこいつは次元屈折化現象（キシュア・ゼルレ）の使い手（ツチ）。セイバーに聞いておいてよかったぜ。

とはいえ防ぐ手なんざセイバーの幸運くらいだろうし・・・俺に手はねぇ。

・・・・・ハッ！面白ぇ！どうせ避けれねぇなら真正面から切り崩すだけだろ！

一撃目！こいつは見えた。愛槍でこいつを弾く。

同時に出た二撃目！目で追う。恐怖なんぞ切り捨てた。弾いた勢いで体を流して致命傷を避ける。

三撃目。逃げ場所など無いくらいに覆い被せてきやがった！

こいつぁ回避できねぇ――――――――――だったら！

「避けれねぇならこの首くれてやんよ！」

避けれないなら避けなきゃいい。だったらこの首ごとくれてやるぜ！

ただしこの首早々安かねーから覚悟しやがれ！

咄嗟。そう咄嗟だった。俺の体は勝手に反応した。覚悟を決めた三撃目に。

俺の腕は勝手に動いていた。その三撃目を。一瞬で同時に向かってくるそのうちの一つを。

俺の槍が三撃目を弾き返す。

「っ！？」

アサシンめ。流石に涼しい顔が変わったな。

つか俺も驚いてんだが。つかなんだこの魔力の奔流。俺の体の中で渦巻いてら。

「・・・んだぁ！？この魔力・・・・マスターから流れてきてるのか！？」

俺の中に篭められた魔力が高ぶる。昂ぶる。
腕からゲイボルグに魔力が伝っていく。アサシンの刀・・・宝具に昇華する程の技を弾いた。
次元屈折化現象をたった一撃で弾きかき消すなんてこと通常は出来ない、はずだ。
そう、通常なら。

「どういうこった・・・この魔力の昂ぶりは・・・」
「ほう・・・昇華したか、ランサー」

どうやらアサシンはこの状況を理解しているようだ。

「あぁ・・・どういう原理か知らねぇが魔力の運用が鍵だったようだな。お前も知ってたな」
「無論だ。お主を其処まで昇華させるのが今回の拙者の役割でな」
「そうかよ・・・・」
「『座』からの魔力を我がマスターが抉じ開けたのだ。我ら英霊全てのな」
「つまり――――――お前らも俺らも、か」
「相違無い」

ちっ。何もかも知ってるような口振りだぜ。実際知ってるんだろうけどな。

「で、此処から先はわかってんのか？」
「それも無論。故に――――――やるがいい。その力の運用、拙者で試すがいい」

アサシンが刀を構える。背を向け刀を水平にする。さっきの技か。

「第二魔法・・・次元屈折たぁえげつねぇな」
「我が剣戟の極致だ。宝具を持たぬ故、宝具の域まで昇華した」
へっ。面白ぇ。宝具まで高めた業を見せ付けられるのなんざ久しぶりだ。
「ならこっちもそれ相応で相手しねぇといけねよな！」
俺の相棒、ゲイボルグに魔力を篭める。全て持っていけ。この一撃で決める！
「我が宝具にて。相手するぜ。突き穿つ死翔の槍！」
真名解放。呪われし宿命の因果を歪める槍。我が生涯にて命を預けた愛槍。
「いくぜ！この一撃で全てを終わらせる！」
ズンッ！と大きく俺は跳躍する。伝説を体現する宝具を手に体を弓なりに引き絞る。
さぁ――――――終幕だ。
アサシンＳｉｄｅ
魔力解放と真名解放。これは聊か危機でも在る。

何より我が身に魔力の対抗策などありはしないのだから。
だが此処で退く訳にもいかぬ。媚びぬ訳にも行かぬ。省みる事も行かぬ。

「来い、ランサー！その全て受け止めて見せよう！」

戯れにて燕を斬ろうと鍛え上げたこの技は。一瞬にして次元を超越して三撃を同時に放つという域まで達した。
それでも拙者は此処で止まらずに更に上を求めた。一つを極めればそれを打ち抜くべく更に修練を課した。
元よりこの身は幻想を抱いた身なれば。更なる上を求める為に絶対強者と相対するのが我が誉れ。

「負けられぬよなランサー！お主もそうであろう！！」
「おうよ！負けるのはもうたくさんだからなぁ！！！」

ランサーがゲイボルグを打ち放つ。それによって衝撃がランサーの背後から打ち出された。
背後の衝撃によってゲイボルグが加速して拙者に向かってくる。まるでそれは紅き点。紅の星。
ランサーの紅き槍が眼前に迫る。回避など無い。それは相手の誇りを汚す。
ならばこの身真正面より受け止めそれを駆逐するのみよ！
ゲイボルグが着弾するよりも先に我が刀（物干し竿）で撃ち落す。
瞬閃。弧を描く剣閃が槍を腹から斬りつける。
これで撃ち落せるなら僥倖。そうもいかぬのが宝具たる存在感よ。
斬撃を打ち込もうと勢いの止まることの無い「ソレ」は見事に我が足元へと着弾した。
膨大な魔力の奔流と衝撃波。そ一つ一つが凄まじい威力を誇示していた。

対人宝具である刺す宝具と、対軍宝具である投擲の宝具。恐らくとめられるのはアーチャーのあの宝具くらいであろうか。
拙者には最早成す術も無い。この宝具に立ち向かう術が無いのが悔やまれる。
だが――――――これもまた我が役割。全身全霊で打ち合えた喜びを胸に消えていこう。
大聖杯たるあの者のもとへといくのみ。何も不安などあるものか。
我が身を衝撃波が裂いていく。魔力の結合など簡単に崩れ朽ちていく。
あぁ、己は役割を完遂できたであろうか。
あのマスターならばあの座に帰るのはちと惜しいな・・・。

「ランサーよ。一つ忠告だ――――――」
「――――――聞いておくぜ」
「コレより先、必ず何か途轍もなく大惨事が起きるであろう。コレは予想だが」

ゲイボルグの余波が消えていく。巻き上げた魔力の流れと共に我が体も光の粒子のように足元から消えていく。
だが、伝えられた。今はそれでいい。多くは望まぬ。さぁ――――――還ろう。

ランサーＳｉｄｅ

ゲイボルグによって齎された衝撃波が抜けていく。アルトラル界とはいえ世界にダメージが残っているのが見て取れた。

「ちっ・・・軋んできやがった」

周囲の空間が壊れ始めてる。どうやら魔力がでかすぎて対処出来なくなってきてるようだ。
やがて衝撃波が徐々に収まっていくとアサシンの姿が見えた。
俺の刺し穿つ死棘の槍に真っ向から打ち合いに来るとは・・・トンだ莫迦かそれとも策士か。
まぁそれも今じゃ魔力の固まりになりつつある。
どうやら聖杯に取り込まれるのは今回も一緒か。下手すりゃ俺があぁなってたかもしれない。
ギリギリを闘った。ちっと好かねぇが闘い自体には満足がいった。

「ランサーよ。一つ忠告だ――――――」
「――――――聞いておくぜ」
「コレより先、必ず何か途轍もなく大惨事が起きるであろう。コレは予想だが」

予想？予言かと思うくらいに具体的だな。まぁ聞いておくとしよう。
・・・覚えていられたらな。
徐々に刺し穿つ死棘の槍の余波さえ消滅していく。アサシンもそれについていくように消えていった。

「あばよ、極東のソードマスター。出来るなら何も後腐れなくやりあいたかったぜ」

アサシンが完全に消える直前。俺は別れの言葉を口にした。ちっ、似合わねぇっての。
そして全てが掻き消える。其処には何も無い空間に俺だけが残った。

「あー・・・他の連中はどうしてっかな。とりあえずここ出るか」

他の三人・・・セイバー、アーチャー、ギルのことも多少は気になった。そう、多少は。
ただ、相手が相手だしな。今は一応仲間ってことだし。
とりあえず此処を出て合流なりしておくか。

「その前にゲイボルグ回収、っと」

アサシンが消えた場所に突き刺さる紅い槍。ゲイボルグを手にして回収する。
幾度となく助けられたこの槍と共に――――――俺は何処までいけるのか。

「しみったれてんな・・・こんな考えが出ちまうなんざ」

頭をガシガシ掻いて俺はこの空間を出る為に霊体化して移動した。

第三十一話　槍兵と暗殺者（後書き）

間が開きました。
モンハンとスパロボ同時進行とか何やってんでしょうね。
スパロボは二週目の後半に入りつつあります。

第三十二話　弓兵と狂戦士

アーチャーＳｉｄｅ

マテリアル界。霊体化した姿でのみ来れる世界か。
我々サーヴァントにとって一番適した世界だな。

「なぁ――――――そう思うだろ。バーサーカー」

私の目の前には鋼の巨躯を持つ英雄がいた。雄々しくも威圧する姿は正に正規の英雄だ。
嘗ての自分の異母姉である彼のマスターの居城で相対し、死戦を繰り広げた間柄。
そういえばあれ以来の顔合わせになる。
英霊の座で顔を合わせたかも知れないが、如何せん座に居る時の記憶は封じられている。
第五次聖杯戦争で顔を合わせた面子が今、この時代、この世界に集まっている。なんという特異点なのだろうか。
どうせ返答などないのは理解しているのだがどうしても話しかけてしまう。

「――――――ふっ。注して問題は無かろう。未来の反英雄よ」
「っ！？」

喋った！？狂化して理性を消されてるはずのあのバーサーカーが！

「――――――なぜだ！？」
「今代のマスターの所業よ。お陰で狂化しておきながらにして理性を保つという離れ業を成し遂げた」

思わず声に出てた。なんという事だ。何処まで上回る気だ。この半神英雄め。

「さて――――わかっているか？反英雄。己の成すべき事を」
「無論だ。だからこそ此処いいる。お前の前に立っている。私は敗北をする為に今、此処に存在しているわけではないぞ」
「その意気や良し。ならば我ら(殺し合い)に出来得る事をしよう」

バーサーカーが決定的な言葉を投げつける。殺し合い。其れが我々に課せられた世界からの意思。
聖杯を得る為の儀式。
だが、今此処に聖杯は無い。ならば何故闘うのか。

「ふっ。愚問が頭を過ぎるのも問題だな。我らが闘うのに理由などいるか？答えは否。ただ、存在せしめる為に闘い、勝利するのだ！」
「ふふっ。いい事を言う。さぁ来い、反英雄。神代の力を見せよう！」

斧剣を振り回し、肩に担ぐ。それだけで風圧が起こり視界を狭めさせる。
まったく、いい加減な絶対的力だな。

「しかし狂化と理性が一緒にあるとはな・・・それこそどうにかなってしまうんじゃないのかね」
「大丈夫だ。問題ない」
「半神のお前が言ったらしゃれにならんわ」

・・・思わず突っ込んでしまった。思わず向こうのペースになりつつあるな・・・自重しろ、俺。

干将・莫耶を両手に持ち、何時もの腕を下げた構え。剣先は上に向けている。直ぐにでも動かせるようにだ。
たった一瞬の気の緩みが恐らく生死を分ける。そんな相手を前にして私は思わず口角が上がるのが感じ取れた。

「ふふ・・・バーサーカーよ。今の私はこの状況をとても楽しんでいるようだ」
「そうか――――実は私も楽しんでいる。さぁ――――――なしえなかった決着をつけよう」
「　　あぁ！　　」

私はヤツよりも先に、速く、地面を蹴り、走った。

バーサカーＳｉｄｅ

あの優しいマスターの居城で幾度となく剣を合わせ闘った半英雄が目の前に立っている。
当時は狂化されて意識を封じ込められてはいたが意識の奥底では理解していた。

――――――このモノ者は異形だ、と――――――

この反英雄の歴史を辿っても何もわからない事だらけだったと優しいマスターは言っていた。
それもそうだ。あの聖杯戦争を生き延びたマスターが世界を契約をして守護者となったのだ。
当時の情報では無い筈だ。まだ存在していない英雄のことなど。
そしてその守護者は我が前に立ち、己のマスターを助けんが為に盾となり私と戦い、そして誇り高く散った。

そう、散ったのだ。だが今この前に立つ英雄はその時の雰囲気を持ち得ていない。
寧ろ、「答えを見つけた」顔を持つ。
いいだろう。その答えを私にも教えてもらおう。教授料は少々高くなるがな！

さぁ、来るがいい！お前の全てを此処で見せろ。でないとこの世界でお前は敗北し、大聖杯に取り込まれてしまうのだ。

「ふふ・・・バーサーカーよ。今の私はこの状況をとても楽しんでいるようだ」
「そうか――――実は私も楽しんでいる。さぁ――――なしえなかった決着をつけよう」
「　　あぁ！　　」

アーチャーが一気に距離を詰め寄ってくる。それに対して肩に担いだ斧剣をてこの原理を応用して一気に地面へと叩き落す。
斧剣を叩き付けた地面は派手に割れ、衝撃波を走らせる。向かう先は勿論アーチャーへだ。

「ふんっ、こんなもの！」

アーチャーが衝撃波の走る地面の上を跳躍する。思えば其処に剣の片割れがなかった。
黒い片割れが其処には無い。跳躍のときに投げたようだ。ならばこのアーチャーのことだ。きっと策を講じているはず。あの時の様に！

「甘いわ！同じものは二度と通じん！」

黒い剣を見定め、場所を特定。風斬り音が居場所を告げる。甘いな、アーチャーよ。きっとお前のことだ。まだ策を隠しているのだろう！初めて会った時の様に！

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）！」

アーチャーの掛け声で私に向かってきていた黒い剣が直撃寸前で爆発する。

「ふっ・・・そのふざけた幻想をぶち壊す。といったところだ」

爆発に乗じて、体勢を崩した私に白い剣を持ったアーチャーが迫る。我が斧剣はまだ地面に叩き付けたままだ。

引き抜いて迎撃しようにも向こうのが速い。だが――――――何を恐れることがある。

我が宝具『十二の試練（ゴッドハンド）』は防御力無視、生命蘇生の重ねがけ。この命、くれてやろうぞ！！

「嘗めるな弓兵！その程度の剣戟で私を超越しようというか！」

「超えるさ狂戦士！私は行かねば成らぬ。戻るべき場所がある為に！」

「ならばその意志貫いて見せろ！我が前に其れを見せろ！」

白き剣が私の肩を裂く。その程度で我が命が減る事は無い。まだ浅いぞアーチャー！

そうら！我が筋肉で以って弾き返してくれる！

「くっ！？弾いてくるとは――――――」

「そら、忘れ物だ！」

アーチャーが空中へと後退する。私は其れを逃さずに斧剣で追撃に回る。リーチは充分。アーチャーの胴を薙ぐ！
鉄と岩がぶつかり合う衝撃と音。鈍い金属音が響く。斧剣は傷などつかなかったがアーチャーの夫婦剣はヒビが入っていた。
が、それを地面に捨ててまた同じ剣を創生した。

「――――成るほど。それがお前の魔術か。練成・・・いや錬鉄か」
「流石だな。こういう知識も持ちえるとは」
「我が真名はヘラクレス。聖杯戦争にはキャスター以外のランクにも入るほどの資質だということ忘れたわけではあるまい」

つまりは。知識がなければ勝てぬ。それこそ純粋なキャスター候補の魔術師には到底叶わぬが。
あぁ、そういえば。今代のキャスターは顔こそ合わせなかったにしろ同じ神代に生きた者だったな。

「さぁ、続けよう。まだ手は在るのだろう？」
「無論だ。俺の力の８割を見せよう」
「全部じゃないのか？」
「まさか。仮にも元は魔術師だ。いや、魔術使いか。それが全てを見せるとでも思ったか？」
「確かにそうだ――――」

私はくつり、と笑みを浮かべていた。何が可笑しいと言う訳でもないがアーチャーの言い回しが妙に嵌ったようだ。

「では――――」
「あぁ――――」

ほぼ同時。お互いが距離を一瞬にして詰めるのは脚力の魔力を通したからだ。斧剣と夫婦剣が交差する。衝撃と火花が散る。
だが。これでも英雄と呼ばれた存在。両手で持つ夫婦剣とｋ盾で振るう斧剣では明らかな力の差が見える。

「私がまだ片手でこいつを振るっている意味がわかるか？」
「・・・ご教授願おうか」
「ふっ・・殊勝だな・・・・・・・・・・・・まだ両手を使うほどではない、ということだ！！」

一気に斧剣を振り薙ぎ、アーチャーを吹き飛ばす。地面についた脚が軌道を描くように跡を残す。

・・・この空間は意外と「りありてぃ」である。

アーチャーＳｉｄｅ

干将・莫耶でなんとかあの斧剣は防ぎきれるがその跡の搦め手が少なすぎる！いや・・・あれをつかえばいいのだろうが・・・
今使っても恐らく見極められてしまう。ならば使い所を見定めるまでよ。
とはいえ干将・莫耶だけで何処まで出来るか・・・下手をすれば以前の二の舞だな。

「さて。色々と手を尽くそう」

干将・莫耶をブーメランのように放り投げる。思いっきり回転しな

がらバーサーカーの周囲を飛び回る。
次だ。干将・莫耶を投影開始。再度投げつける。今度は違う軌道で。
これで四本。
更に投影。干将・莫耶。投げる。投影。投げる。投影。投げる。これで十本。
流石に魔力が尽きる・・・と思ったが、あのマスターの事だ。引っ張れるだけ魔力を引っ張ってやろう。

「さて。バーサーカーよ。これでまだ終わらんのだよ『赤原を行け、緋の猟犬！』」

ステップ移動しつつ距離を詰めて取って。１秒と同じ場所にはいない。右に左にと動き回る。
今は干将・莫耶の十本が飛び回っている。更に私のお気に入りの一つを投影する。
紅き猟犬。嘗ての古代イングランドの英雄ベーオウルフが所持していた剣。
それを弓に番い、射出する。動き回っていようが弓兵のクラスである以上、弓の使いには絶対の自信がある。
これができぬなら弓兵と名乗る事も出来まい。
射出した赤原猟犬（フルンディング）は干将・莫耶よりも速い速度でバーサーカーの眉間へと向かう。

「――――――ぬぅっ！！！」

ちっ。眉間とわかった瞬間に首を傾げてコメカミを擦らしていなしたか。
だが赤原猟犬は止まらない。獲物を狩り続ける猟犬の如く、獲物であるバーサーカーを狙い続けるのだ。

「クッ・・・中々やりおるが――――――」

今まで防戦、回避のみだったバーサーカーが動き出す。だが回避は忘れてはいない。

最初はちっぽけなものだった。だから七日、私も最初は気付かなかった。

バーサーカーの中であんなに魔力が溜め込まれているという事を――――――

「貴様・・・その魔力」

「あぁ。じっと耐えて育てたのだ。そしてあの時とは違う終末をお前に見せよう」

あの聖杯戦争では私は敗北した。だが、私は・・・俺は！あのときを繰り返しはしない！

バーサーカーが魔力を放出する。十本あった干将・莫耶も魔力の放出で7本折れた。

無事な剣はまだ周囲を飛んでいる。だがその残りの三本でさえ輝が入っている。

赤原猟犬も範囲外だったようで無事に飛来している。

「くっ・・・なんという膨大な魔力だ。通常の魔力の桁が違うぞ！」

「当然だ。今私がしたのは魔力の強（狂）化。何も身体的に狂うだけが狂化ではない」

・・・なるほど。狂化の方向性の因果を歪ませたわけか。まったく色々とやってくれる。

しかし・・・何故だ。先刻から感じるこの違和感は。

何か靄がかかったような不思議な気分になる。違和感が拭えない。

バーサーカーＳｉｄｅ

今代のマスターは中々に豪気だ。まさかここまで魔力を分け与えてくるとは思わなかった。
ただ魔力を放出しただけでアーチャーの宝具が破壊されるとは。
だが叩き落せなかったのが数本残っているのは仕方なし。
もう少しだ。もう少しで我が役割も終える事ができる。終わるまでは。この夢幻の幻想を続けよう。

「さぁ、アーチャーよ。嘗てのシーンの再現といこうか」
「そのお誘いには残念だが丁重に断らせてもらおう。それにまだ私のターンだ！」

アーチャーめ。まだやるというか。いや――――――あの目は何か感づいているようだな。
それならば誘導してやる。さぁこの戦いの真実に気づけ。

「投影開始――――――剣軍師団（ソードバレル）、総充填（フルオープン）！」

アーチャーの背後に宝具級の剣軍が投影されていく。
あれはあの英雄王の宝具によく似ている。以前の戦いでは見なかったが――――――

「それがお前の全力か」
「そうだ。俺の持つ８割での全力だ」

全力。そう聞いた私は口角が上がっていくのを感じた。
私は今楽しんでいるのだ。そう、この戦いを。

ならば最後まで楽しむまでよな。なぁ、アーチャー。

「ならば此方も其れ相応の者で相手せねばならぬ」

我が武器は一つだけではない。この斧剣もまた己の持つ武器の一つでしかない。

だが、宝具にまで高められたこの武器は。弓兵たるお前を凌ぐ！

「出よ。射殺す百頭（ナインライブズ）」

斧剣は既に手には無い。あるのは一つの弓矢。対幻想種相手の宝具だが今の私が使えば――――――

否！

サーヴァントであるならそれはれっきとした幻想種。ならばこの宝具は最強たる。

「さぁ――――――その壊れた幻想を打ち崩そう」

先程アーチャーが言った言葉を私も返す。形状無きこの弓矢はその一投で百頭を射殺したという曰く付き。

さぁ、どうする弓兵。

アーチャーＳｉｄｅ

バーサーカーめ。まさかあの宝具を使うとは。

サーヴァントとはいえ幻想に生きる種だ。それの対応策を持っているのはわかっていたが・・・

くっ、あの魔力で放てばどうなるかなど眼に見えているではないか！

だが・・・私とて黙ってやられるわけにはいかんのだ。いかないのだ！

「バーサーカー。私に、弓兵に弓で勝とうというのか。だとしたらそれは愚策もいいところだぞ」

「ふふ。自慢の一芸ができるのはお前だけではないということだ」

くっ・・・この彼我差を払拭出来る手立てがあるにはあるが・・・

今、其れをやるだけの賭けが出来ない。

いや・・・こうして今もバーサーカーに狙われているならやらないよりもましだ。

「・・・いいだろうバーサーカー。なら見せてやる。俺の持つ裏の切り札を」

この世界に移動してきてずっと考えてきたものがある。あれが出来うるのなら。

きっと活路があるはずだ。まずは飛来している干将・莫耶と赤原猟犬を解除させて魔力に戻す。

次に偽・螺旋剣？を投影。弓に番う。

「さて。バーサーカー。この一撃は私もまだ想像が出来てない。恐らくお前の射殺す百頭を軽く超えてしまうかもしれないぞ？」

「ふふっ、ふはははは！！面白い。やってみるがいい！」

バーサーカーが笑う。お互いに射線が交錯する。だが此方の準備はまだ終わらない！

この違和感の謎を知ってるならそれを教えてもらうまでは！

「　　――――我が骨子は捩れ狂う――――――　　」

背後に投影している剣軍全てを捩れ狂わせる。異形の矢が今、完成した。

「さぁ、行こうか。ヘラクレス」

「あぁ、行こうか。エミヤシロウ」

其れは同時に訪れた。番った矢が同時に放たれた。

射殺す百頭の矢が直進する。

偽・螺旋剣？も射出される。

同時に剣軍の捩れた矢が魔力光となり、偽・螺旋剣？に螺旋を描いて取り込んでいく。

「射殺す百頭（ナインライブズ）！！！！！」

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）？！！！！！」

バーサーカーの狂化された魔力を篭められた矢と。

私の供給され続ける全魔力を篭めた捩れた骨子と。

丁度中央で先端が触れ合い――――――逃げることなく全魔力が爆散して空間が光に飲まれた――――――

???Ｓｉｄｅ

光が収まった時には空間に存在する二人の英雄が仰向けになって倒れていた。
お互いにダメージが多いのか動く事は無い。
だがお互いがすっきりとした顔でいた。

「いつから気付いていた？」
「最初は気付かなかった。だが徐々に疑惑が確信に代わっていった」

動かずとも。

「聖杯戦争に参加していたころのままでは生き延びれない、とでもいうのだろう？誰の差し金かは聞かないけどな」
「ふふっ。そこまでたどり着いていたか。なぁ、アーチャーよ。最後のあの宝具は使わぬほうがいい」
「だろうな――――了解した。神代の英雄よ」
「あぁ。これで私も安心できる・・・・・マスターを大切にしろよ？」

アーチャーはクス、と笑うのみで応える事はなかった。
バーサーカーもその返答を松木も無かったのか。光の粒子となりながら消えていく。

「さらばだ。バーサーカー。お前と二度闘えた事、誇りに思う」
「ふふ・・・十二の試練すら発動出来ぬ中でこの役割はちときつかったわ・・・何れ貸しを返しに貰いにいく」
「ふ・・・了解だ」

力なく、でも。手を上げて応えるアーチャー。
そしてそれを見届けるようにバーサーカーが消えていった。

「行ったか・・・全くたいした英雄だ・・・・」

自分とは違う。と呟きながらゆら、と立ち上がる。

「さて・・・ほかはどうなってるやら。まったく。休む暇も無い」

ふらふらとした足取りで空間を歩く。その空間も直に消えるか。

「・・・回復しないと、な・・・まったく。フォローする身にもなれ」

ブゥゥン。霊体化したアーチャーは空間から消え――――――

――――――――――――一切が消え去った。

第三十三話　魔術師と王

ギルＳｉｄｅ

我のような高貴な者がこんな閉塞空間に押し込められようとは。
星空を切り取ったかのような空間。足元は土。遠くには青と緑と白の、光る星がある。
ふっ。このような趣向もまた楽しめそうだ。
駄菓子菓子。否、だがしかし。これもまた一興。多少は楽しみがなければつまらん。
我を崇めるかのように下方にて見上げているそこの我の前で見上げるフードを被った道化師が踊り狂う様を見て酒を傾けるのもまた。

「くくくっ。だがこんな余興に我がつきあうとは。余程ヒマなのだな」
「好い加減な無駄口は万死に値するわ・・・・ギルガメッシュ」
「ほう。喋れたのか道化師。いやこれは中々な余興であるぞ」

我の尊大さが判ったのかこの小物め。本来ならば王たる我に声をかけることも不可能だというのに。

「まぁいい。今の我は聊かにして機嫌が良い。多少の声を漏らすことを許そう」
「・・・あら。私は貴方を終ぞ消滅させる事もできるのに。あの時のような不意打ちはしないのかしら？」
「黙れ雑種。多少の慈悲を掛けてやったと思えばその口振りか。冗談も過ぎるぞ」

我の紅い瞳が睨む。多少の神気を篭めてやる。ほう、たじろいでお

るわ。
いくら神代を生きた裏切りの魔女であろうともその身はヒトであったもの。
我が半身(神)で以ってそれを今一度調教してやろう。

「お前達の企みは我にはお見通しである。ほれ、疾く掛かってくるがいい。それとも口論戦が望みか？我はどちらでもかまわんぞ」
「何を知ってるというのか教えてもらいたいわね。貴方が消える前に」
「我はこのシステムを理解しているのだ。貴様を消す前に説いてやろうか？この塵芥め」

ふむ。あのマテリアルの王が使っていた言葉はしっくりくるな。また使おう。
だが、今回のこの事件・・・か？まぁどうでもいいが。この動きは何かしらあると踏んでいたがなるほど。

「我々を更なる高みに押し上げる為の行動、か。嘗ての聖杯戦争の面子をそろえてまでご苦労だな。
しかしそこまでの徒労も我の前では只の無駄足だったという事だ！ハァッハッハッハ！！
更に言うなら、貴様の宝具で我を刺そうとも此処まで辿り着かせはしないがな！」

そう。此処に来る前にマテリアルの王に聞いていた。
闇のマテリアルの魔力の大本はあの緑色の髪をした魔女だ、と。
名をC．C．。不老不死の魔女。この話を聞いたときには多少だが興味が湧いた。

「目の前の腐った林檎と戯れる時間も惜しいのだがな・・・」

「聞こえてますわよ・・・この腐れ王」

む。声に出てたか。ま、実際事実なのだから構わぬだろう。絶対的力を振るうのもいいが腹の探り合いもいい。今のマスターに中てられたか？

「さて。では我の質問に疾く応えよ。まずは貴様達の目的だ」

「それを言うと思って？第一そんなに口を割るとは思えないのだけど？」

「ふはは、よく吼えるな、この売女め。そんなに幽かな時間しか共にいなかった男を想うか」

「っ！・・・貴方には関係ないことよ」

「カマをかけたつもりが大当たりか。だが、的は得た。それが貴様の目的か。裏切りの魔女も堕ちたものだな」

ふん。嘗て言峰から聞いていた事が大当たりだ。まぁ、情報を集めたのはあの駄犬だが。

しかしこれでまた手は見えた。我々を更なる力を与えておく、という事か。

うちのマスターを同じよな事を考える。方法は違えどもな。

「面白い。それで、我にはどうするのだ？他のセイバーや駄犬、贋作者（フェイカー）共々我を試す算段でもしていたか？」

「・・・貴方に限っては例外なのよ。ただの時間稼ぎになれば、というマスターの考え」

・・・なるほど。我の場合、既に極まったから底上げできぬというわけか。

それならセイバーや駄犬どもの底上げのほうが頷ける。

「我を時間稼ぎといったな。その目的は?死ぬ前に語れ」
「・・・マスターくらいしか貴方の相手など出来ないからでしょうね。私達正規のサーヴァントでは貴方の相手など務まるわけがないじゃない」

だがそれでも問題はある。実はこの空間、さっきからこっそりと抜けようとしているのだが出来そうに無い。
あの売女は我の動きに気付いていないようだが。

「では最後だ。此処から出る条件はなんだ?」
「・・・私の意志か、能力の底上げが完成したときに」

つまり。どっちみちやるしかないという事か。それなら致し方ない。

「一つ言っておく。我は負けるのが嫌いだ。だから死ね」
「なんとも簡単で簡略で下らない答え――――――いいでしょう。お相手しますわ、英雄王」
「ハッ!神代の魔女の力、我が前に見せて――――――平伏せ、愚民!!!」

『王の財宝』の扉を開ける。背後には我が財が軒並み揃えられていく。

曰く。その身は尊大。
曰く。その力は絶大。
曰く。その動きは優雅。
曰く――――――出会えば絶望的。

この世の全ての言葉が其処にあるかのように。神々しくも我は立つ。

さぁ。始めよう。殺戮の宴の始まりだ。

キャスターＳｉｄｅ

まったく。因縁の相手とでもいうのかしら。まさか私の相手が英雄王だなんて。
でも、私もまだ叶えたい願望があったなんて、ね・・・・
出来得る事ならもう一度の人に逢いたい・・・・宗一郎様。
――――しかし、今は私情を挟んではいられない相手。
彼の古代バビロニア帝国の王。英雄の王ギルガメッシュ。
そして・・・第五次聖杯戦争で私を討った８人目のイレギュラーサーヴァント。
いい縁ではない。因縁と呼ぶに相応しい。
私の与えられた役割は彼をこの空間の閉じ込め、時間を稼ぐ事。
最早コレ以上の底上げを期待できない固体である為、他のサーヴァントのように闘う理由は本来無いのだけど。
・・・戦闘意欲が高すぎるわね、彼。
出来ればアサシンが居て欲しかったけれど、彼はランサーのほうで役を演じている。
なら・・・私はここで道化を演じる。護るべき思いは今この胸には無い。
ならば、今代のマスターに義理を立てておこう。

「さぁ、イレギュラー。存分に思い知らせてあげましょう――――」

さぁ。観客の居ない演目の始まり。全てはこのために。
ローブは私の言葉と共に準備が終わる。その裏にはびっしりと描かれた神代文字がある。
不意打ち奇襲さえなければ私は勝てる。策を有して最低限の労力で勝ち(価値)を得る。

「私の高速神言は剣士の剣閃よりも速い。貴方が投擲するよりも速く私の魔術は完成する」
「面白い。ならば速度勝負といこうか」

まるで崖のような上方で見下ろしてくるギルガメッシュ。
見てなさい。今すぐ其処から引き摺り下ろしてやるから。
はじめから全力。此処でならあの管理局の目からは見えない。
私の魔術も大いに使えるというもの。

「紫光弾(ユピテルロッド)！」

牽制も兼ねてまずは魔力弾五連。当然これが決まるとも思ってはいない。
案の定武器を飛ばして魔力弾を相殺させていく。判りきった結末ね。
幾度か角度を高さを速度を変えて撃ち出して行く。タイミングとリズムは狂わせる。
その都度一定の距離の場所で悉く潰されていく。こっちの自身がなくなっていきそうだわ。
飛行魔術を唱えて空へと上がる。ローブは翼のように広がる。
恐らく、この相手にとって面積を広げるのは自殺行為であろう。だがギルガメッシュはあくまでも向かってくる魔力弾だけを打ち落とす。
・・・余裕のつもりかしら。だとしたらとんでもなく嫌なやつね。
でも此方とて魔力の供給がほぼ永久的に送られて来る以上は更なる

攻撃パターンもできると言うわけなのよね。
いきなりだけど。一気にいかないとこっちが潰れそうなので畳みかける。

「コキュリオン！」

上空に上がってギルガメッシュと目線の高さが同じになる。ぐるぐると周囲を回りながら魔力弾を打ちながら、同時進行させていた詠唱を終わらせる。
私の持つ最大の魔術のうちの一つ。魔力を篭めた指先が魔法陣を描く。
最大の魔術、ではあるがその出掛かりと弾速は非常に遅い。これすら私は捨て駒として使う。
案の定コキュリオンは紫光弾よりも遅く進んでいく。それでも普通に考えれば弾速は速いほうなのだけど。
ギルガメッシュも紫光弾に慣れてたせいか大きめの魔力弾に目を見開いてる。

「これはどう？列閃（エレ・ヘカテ）！」

まだ空間上に魔力弾が幾つも飛び出している所に魔力レーザー・・・・もう少しいい表現の仕方ないのかしら。
ぐ、と溜め込んで紫光弾を相殺しているタイミングでレーザー射出。タイミングこそばっちり。まさしく隙を被せたという感じ。コキュリオンすらそのタイミングに合わさって突撃していく。
此処までの連続魔術使用も、通常なら魔力が枯渇するのだけれど、今は魔力が桁外れに湧いて出てくる。
それこそ使い放題なくらいに。私はこれ見よがしに魔術を使っていく。
そこでやっとギルガメッシュも動き出した。列閃の方を向いて一振

りの槍を取り出して――――――薙いでかき消した。

ギルＳｉｄｅ

ちまちまと魔力弾を撃ちだしおって。煩い蚊トンボだ。王の財宝から幾らか打ち出して相殺していく。
我の手を煩わす事も無い。適度に相手をして飽いたら殺す。

「だが、これもただのゲームに過ぎんな。段々面倒になってきた」

まるでマスターがやっていたゲームでこういうのがあったな。確か弾幕ゲーとかいうやつだ。
徐々に押し込んでやってもいいが、如何せんキャスターめ。やる気を出してきたな。

「コキュリオン！」

ほう。魔力が膨れ上がったな。それなりに高大な魔術を使うか。
我は少しだけ興味が出た。いかなる魔術を使うのか。
キャスター（売女）が魔力の籠もった指先で魔法陣を描いていく。これは楽しめそうだな。
しかし其処に現れたのは弾速の遅いでかい魔力弾なだけ。なるほど1、これでタイミングでもずらそうというのか。
小狡い。実に小賢しい。狡猾という言葉が良く似合うぞ売女（キャスター）！ふはははははは！！！！！

「多少は我を楽しませてくれなければ我と踊る資格等無い。疾く消えよ」

王の財宝からの射出音で我が声など掻き消えているがそれはもうどうでもいい。
これから起こす雌豚（キャスター）がどの様に我を楽しませてくれるのか。それが今の課題。出来なければ消えろ。
ふむ。我と同じ高さにまで飛んで更なる弾幕か。ワンパターンもこう続けられると飽きてくる。
さて、そろそろその醜い魔力の大玉を消してやろう――――ん？
まだ更に魔術を使うか。ここまで連続で打ち出すとは中々やるな。
そこは評価してやろう。
キャスター（女狐）の指先から魔力で編んだレーザーが打ち出される。
これはマスターのあの体術技に良く似ている。あれの魔力版、とでも言うべきか。
どれ、少しビビらすか。
財宝の中から第四次聖杯戦争にて相対した槍の騎士が使っていた武具の原点。魔力消滅の武具を取り出す。
振り向き様に向かってくる魔力全てを薙ぐようにして――――掻き消した。

「ほら、どうしたキャスター（女狐）。コレで終わりか？お前の時間稼ぎなど蝉の一生にも満たぬ。もう一度やり直すか、此処で死ね」

正直飽いた。そろそろセイバーの顔が見たくて仕方がない。セイバーの笑顔に迎えられたい。
となればこのキャスター（熟女）を一刻も早く打ち倒すのみだ。

「我の前に立った以上、引き下がれぬと知れ。そして伝えるがいい。我は無敵であったとな！」

くく、くははははは！！！！

笑いが止まらぬ。自分の愚かさに反吐が出るわ。
このような戯言に付き合ってしまった己が嘆かわしい。
さぁ――――――このふざけた宴もそろそろフィナーレだ。

「行くぞ――――――エア」

乖離法典（エア）。我が相棒の剣を背後より取り出す。
キャスターよ。魔術師の英霊よ。裏切りの魔女よ。
貴様の敗因は我が前に立った事。それに尽きる。
我が魔力が高まる。高ぶる。昂ぶる。乖離剣（エア）に魔力が籠められていく。
刀身たる3つの筒が回転しだす。その回転率実に第五次のときの約3倍。
余剰魔力が筒のスキマより煙となって噴出されていく。あぁ・・・
これは恐らく生涯でトップクラスの一撃になりえる。そう感じ取った。

「さぁ、キャスター。念仏は唱えたか？終わったならとっとと座に帰るがいい！！！」

乖離剣を突き出す。同時に魔力の流れが一気に止め処なく溢れ出ていく。

「天地乖離す開闢の星！！！！」

世界を作り出した力が今。ここに放たれた――――――――――

？？？ｓｉｄｅ

世界は暗転していた。
天地乖離す開闢の星の影響でギルガメッシュたちの居た空間は吹き飛んでしまった。

「ふむ。流石にこれはやりすぎたか？こんな様では伝える者が居ない故、ダレも信じそうには無いな」

足場も既に無い。空中に浮くようにその場に立つギルガメッシュ。

「キャスターの反応もない。座に帰ったか、それとも聖杯の基になったか。欲した聖杯の基になったのなら本望だろう」

くく、くっはははははは。
何も無い空間に笑い声が響く。

「・・・・さて。そろそろ戻るか。我の推測では何処か近くで次元のスキマが出来てるはずだ」

キョロ、と周囲を見渡して、目的を見つけたのか、口角を上げて笑み。
其処へと移動し――――――この空間から消える。

閉じられた空間はダレもナニも存在していない。やがて近い将来には縮小して人知れずこの世界は消滅するだろう。

第三十四話　騎士と騎乗兵（前書き）

ＰＶ１００００
ユニーク１００００
超えてました。ありがとうございます。
これからもがんばりますので宜しくお願いします。

第三十四話　騎士と騎乗兵

セイバーＳｉｄｅ

マスターよりの召還によりアースラから戦いの場へと移動しました。
ここは・・・何も無い。いや、あるとすれば見慣れた戦場跡。
荒廃した台地がただただ広がっている。人の気配などするわけも無く、其処には只静寂が在った。

「ここが私達の戦場、というわけですか」

一瞬にして察知した。敵がいる。サーヴァントが。
どのクラスかはわからない。他に召還されたアーチャーたちは無事でしょうか。約一名を除いて。
そしてここが私達の戦う場所なのだ。サーヴァント同士が出会えば闘う事は必至。
第五次の際の出来事は異例中の異例だったのだ。
だからこそ。だからこそなのだ。あの世界が。冬木の地がなんとも暖かくも離れにくくなってしまったのは。
しかし闘うからには必勝の構え。常勝無敗のこの剣に誓って必ず勝利を得ましょう。

「・・・・・」

静寂。戦場には似合わないくらいに静寂が周囲を包み込んでいる。
異常な空間。異常な空気。異常な雰囲気。異常な場面。
それこそ言葉がいくら在っても足りないくらいに今の状況を形容できる。

「鬼が出るか蛇が出るか・・・・」

風王結界をした剣を両手で持ちながら全方向に神経を研ぎ澄ませる。
どの方向から来ようと今なら打ち落とせる。

「・・・・・・・・・・・・」

どれだけの時が過ぎたかわからない。ただ、じっと待っていた。
暫くしてから静かな気配が感じ取れた。いや、そこだけぽっかりと穴が開いたように何も気配がない。
自然の気配も空気の流れの気配も何もない。其処にいる。『ナニ』かが其処にいる。
今はまだ其れが何かと確認を取れるほどの距離ではない。それでもじりじりと近づいてきてるのがわかった。
シャラン――――――鉄の擦れる音が響く。
懐かしくも聞きたくはなかった音が私の耳が感知した。
その場所を視界に留めながらもこっちからも近づいていく。間合いをつめる。
どのサーヴァントなのかはまだ確定できない。迂闊に飛び込めば此方が痛い目を見る。
だが、ずっと受け手に回るのもどうだろうか。見極めも重要だ。

「ずっと隠れてるつもりですか。姿を見せたらどうです？」

姿を見せない相手に私は声を掛けてみる。これで出てくるならいいですが出てこないなら・・・案の定出てきませんか。
まぁ、まともに向かってくるようなのは三騎士以外ですとアサシンくらいですか。
残りの・・・キャスター、バーサーカー、アサシン、ライダーで言えば。

キャスターなら策謀を張り巡らせて向かってくるでしょう。
バーサーカーは狂化が掛かっているでしょうし真っ向から特攻精神。
アサシンもあれはあれで極東のサムライマスターらしく、真正面勝負にくるでしょう。何よりも私とであれば尚更。
残りは・・・・・

「ライダー、ですか」

剣を構えたまま、気配のするほうへを問いかけてみる。
私の推理が当たっていればライダーのはずです。迂闊に先走ってクラス名を言ってしまいましたが。
出来れば当たってほしいなぁ・・・・ぐす。
嘗て共闘・・・いえ、共存ですか。衛宮邸で過ごしたサーヴァント。
反英雄と呼ばれた――――メデューサ。

「・・・・・・・・」

沈黙を続けたまま、気配のするほうがのそ、と動く。どうやら姿を見せるようだ。

「鬼か蛇かと思いましたが、蛇でしたか」

この言葉にライダーがピク、と僅かに動く。どうやら聞こえていたようだ。だがそれも作戦の一つですとも。
チェーンダガーがチャラ、と鳴る。意志を伝達しているようだ。周囲の警戒を強める。

「聞こえてしまいましたかライダー。ですが・・・こうなってしまった以上は私達はやりあわなければならない運命なのです」
「えぇ、セイバー。それが私達の総意でありマスターの意向なので

す。ですから今すぐ――――――私に殺されてください」

会話はとても普通に通常に日常の会話を擦るかのように穏やかに。
しかしてその実、腹の探りあい。既にお互いの間合いの中。

「では参りましょうか」
「えぇ。いつでも」

クス、と二人して笑む。それがお互いの開始の合図。一気に踏み込む二人。速度は充分。速度域も同じ。
お互いが交錯するのも時間など掛からなかった。ライダーのダガーと私の剣が交差する。
ギャリィィィ！！！！と激しい火花を散らしながらも力を篭める。
地面がお互いの存在質量にクレーターが出来、凹んでいく。それでも一歩も譲らぬ。譲れぬ。
ここで下がればそこを付込んでくる。其れを知ってるから。

ライダーＳｉｄｅ

霊界、とでもいいましょうか。此処はなんとも死臭の漂う場所ですね。
嘗て戦場のあった場所とでもいいますか。
・・・何も無い場所よりは趣がありますが・・・・これは昔を思い出してしまう。
妖魔、魔獣と呼ばれて戦場を創り上げた私が言うのもなんですが・・・。

「・・・・来ましたか」

私の相手となるサーヴァント。マスターより聞かされたのはその相手がセイバーであるということ。

因縁の相手とも呼べる相手に私は鼓動が高鳴る。

・・・・永遠の四日間では共に共存していたのはマスターである桜の願い。

桜が幸せになれるのなら、と。共に歩んではいましたが・・・・今はいけない。

血を欲す。それを抑える役割が今は居ないせいか無性にたまらない。

私は獲物を見定める獣のように低身で気配を殺す。

そしてセイバーの姿を視認。じりじりと私は地を這いながら距離を詰めていく。ゆっくりと。確実に。そして品定めをしながら。

あの冬樹の地から去った後のことはわからない。だからこそ今のうちに見定める必要があるのだ

戦力差があるのか。手は増えているのか。

今までの知ってるセイバーであれば。なんとかなるでしょう。

更に今はマスターからの強力な魔力供給もある。桜よりもこの力が強いのは驚きましたが。

おかげで私の今の魔力はかなりのもの。セイバーに負ける要素が見当たらない。

・・・・どうやら完全に気配を消していたのが仇となったようですね。気配を見抜かれるとは。

確かに其処だけ気配がないというのは不自然でしたか。今後の課題ですね。

「ずっと隠れてるつもりですか。姿を見せたらどうです?」

彼の騎士王なら堂々と向かって来いということでしょうが私はそんな騎士道やブシドーは持ち合わせてないんですけどね。

ですがまだ様子見の状況。まだ姿を出すのは早い。

「ライダー・・・ですか」

「・・・・・・・」

私を認識した？いえ、恐らく消去法で私だと考え付いたのでしょう。あちらには三騎士と英雄王がいますし。あとのバーサーカー、キャスター、アサシンと、私ライダーならば、と。どういう経緯でそういう考えに至ったかはあとで問い詰めましょう。フフフ、私って根深いんです。正体が正体ですし。まぁそろそろ姿を見せましょう。あんまり引っ張ると可哀想ですし。なんか少し泣いてるっぽいけど。

「・・・・・・・・」

ゆら、と体を起こす。私と視認できればセイバーはそれこそ考えが当たったのが嬉しかったかのように笑顔です。癒されますね。今は敵ですけど。

「鬼か蛇かと思いましたが、蛇でしたか」

ピク、とその言葉にチェーンダガーを持つ指が動く。お陰で鎖が擦れて音が鳴ってしまった。

これで私が今の言葉で心の変化が起きていると見られてしまう。

「聞こえてしまいましたかライダー。ですが・・・こうなってしまった以上は私達はやりあわなければならない運命なのです」

「・・・えぇ、セイバー。それが私達の総意でありマスターの意向なのです。ですから今すぐ――――私に殺されてください」

どうやら触れてはいけないものだったと思ったようですね。別にいいんですけどね、桜以外にどう思われようと。口にしなければ。

さて。どう料理しましょうか。凡その流れは聞いては居ますが手元が狂って仕舞うかもしれません。

しかしどうしましょうか。姿を見せたはいいですが。魔眼は封じているのでいきなり使う事も出来ませんし。

でも。でもですよ。私を蛇というならあなたは優しく殺してあげましょう――――この手で。ゆっくりと嬲りながら・・・うふふふふ。

静かに。穏やかに。腹の底を見られぬようにこっそりと穏便に。まるで通常会話をするが如く。

「では参りましょうか」

「えぇ。いつでも」

クス、と私が笑むとセイバーも笑みを見せる。あぁ、貴方は戦闘狂（バトルマニア）でしょうけど私は違います。

捕食者として貴方を見ているのに気付かないのが悪いんですよセイバー？

などと考えつつも前傾姿勢になって構える。同時にセイバーも構えて、ほぼ同時に駆け出した。

速度は同等。ならば互いの武器が触れ合うのに時間など微塵も掛からなかった。

鉄と鉄の擦れる音と火花、衝撃が抜けていく。逃げ場所の無い衝撃波は地面を穿ってクレーターを作り出す。

コレほどまでに力をつけてきましたか。あぁ、貴方もマスターからの魔力供給が多大でしたっけ。

ダガーとソード。顔と顔が触れ合うくらいに近づき押し込もうとする。技など此処にはいらない。あるのは力のみだ。

相手が竜の化身というなら私は「女王」メドゥーサ。この力は神代

よりも遥か高みに到達した力。
さぁ、力比べと行きましょうか。

セイバーＳｉｄｅ

初撃は防がれてしまった。まだ踏み込みが甘かったか？それとも剣の振りが足りなかったか？
私に不備があったのか？それとも――――――相手がそれを抑え防いだのか？
色々な考えが私の頭を駆け巡る。一瞬にして思考が高速で動き出すが今は目の前の「敵」だ。
ずっと戦い続けた相手は互いに手の内を知るような。そんな間柄になってしまった。
あの冬木の地は牙を抜くのに充分なくらいに安穏を与え続けたのだ。
聖杯戦争の場を提供していたにも関わらず、だ。
だが今はその？がれた牙を有して振るっている。振るわれている。
この力を使い尽くせと全細胞が吼えている。
私の中に眠る竜が暴れる。もっと解き放てと。喰らえと。背筋に力が走る。この力を爆発させればどんなに気持ちの良い事だろうか。
だがそれはできない。いや、させてはくれないだろう。目の前の強敵はそんな隙を与えてはくれないだろうから。
それならば今できることをやるだけ。私に出来る事、私にしか出来ない事。
剣を振る。剣を薙ぐ。剣を突く。剣を払う。ずっと剣を振ってきた私の体に染み付いた無意識下での行動（攻撃）。
それを同じように、しかも短いダガーで防いでいく目の前の女性に私は驚きを隠せない。

「どうしました？剣筋が鈍ってきましたよ？」
「くっ！」

苦戦している。まさか真正面からこのサーヴァントが。この英雄が。打ち合おうなんて思わなかったからだ。
私は己の浅慮を噛み締めながら剣速をあげていく。我が剣は風を纏う。打ち出す瞬間にその風の爆発力で更なる速度を得ていく。
・・・・が。それでも彼女はその検速追いついてくる。いや、ほぼ私よりも速いのだ。
自分で言うのもなんだが神速と言っても良い。その剣速を見破るなど速度に余程の自信がなければやれる芸当ではない。

「私がなぜ「セイバー」の剣を抑えていられるか、わかりますか・・？」
「さぁ。何故でしょうね。その封じた魔眼で見ているでもないのに」

どうしても一線を越えられない為か、苛立ちの声で言ってしまった。
あぁ、彼女はきっと気にするだろう。

「ライダーのクラスはランサーと同等に速度重視のクラス。そのサーヴァントたる私に速度で勝てる道理があると？」
「・・・ふふ。貴方は実に強い。あの第五次戦争で闘ったときよりも、永遠の四日間のときよりも」
「・・・・お褒めに預かり光栄、ですわ？」

厭味には厭味で返される。其れは当然だ。しかし、速度で上回るような相手など最近はなかったですからね。
血がうずきます。己よりも強い者が目の前にいる。もっと戦いたい、と。

「本当に貴方は・・・・楽しませてくれる！」

魔力を足に溜めて疾駆する。初歩から魔力を爆散させて加速する。
初撃の比ではない。
ギィン！剣とダガーの激しい衝突音が響く。幾度となく交差する互いの武器。その回数だけ衝撃波が世界を走り抜けていく。
戦闘により鍛え上げられた私の剣技と、まるで舞っているような動きでダガーを振るうライダー。線と曲。まさにそれ。

「フッ・・・はは！どうしましたセイバー。貴方の力はライダーのクラスに抑えられるほどに弱かったのですね！」
「戯言を――――――言うな！」

なんという安い挑発。しかしそれに乗る私も私です。つい魔力を爆散して放出してしましました。
足元の砂利や瓦礫を吹き飛ばす。

「なるほど。魔力は目を見張るものがありますね。あの日から鍛錬はしていたようですが――――――
マスターからの供給によるものも否めませんね？」

・・・図星だ。確かにあのマスタからの魔力供給は無尽蔵に送られてくる。
それも使ったら使った分だけきっちりと即座に。お陰で今は魔力の枯渇があり得ないんですが・・・。

「幾度と斬り結んでもきっと状況は変わりませんよ」
「でしょうね・・・・」

あぁ・・・宝具を使うしかないのですかね。仕方ありません――――

――風王結界を解いて選定の剣、カリバーンを視認化させる。

「カリバーン・・・・勝利すべき黄金の剣、ですか。さて、貴方はその剣をきちんとその名の通りに使えますか？」

ライダーの挑発が続く。ライダーは前傾姿勢のままで向かってくる。さっきの私よりも速いっ！？

一瞬にして懐まで入られた。迂闊だった。此処まで入られるとは思ってなかった。

迎撃しようにも既に時間速度域が違うのかライダーのダガーが私の頭に向かって下から伸びてくる。

回避など出来よう筈も無い――――――通常ならば！

「――――――――――っ！！！！！」

全魔力を回避に集中。その一瞬の先端を見極めて直撃を回避する、が。回避はした、が。

無理矢理の魔力運用に魔力回路が焼き切れそうな感覚。更に左頬に額に掛けて一直線に伸びる傷が走る。

遅れて鮮血が飛び散る。

その鮮血がライダーの顔に、体に、浴びせられていく。濃紺の彼女の服が深い紅に染まっていく。

蹈鞴を踏みながら数歩下がる。左目にも流れる血が入り視界を狭める。

拭く事はできない。そうしたら彼女はその隙を突いてくる。

「ふふ・・・美味しいですね、貴方の血は。高貴な者として実にいい」

顔についた血を舐め取り、それを口に含む。鮮血に濡れた身は『艶』

。

「ライダー・・・貴方はっ・・・・・・！」
「そうやって直ぐに激昂するのも貴方の悪い癖ですセイバー。それにまだお互い手を出し惜しむ必要は無いと思いますよ？」
ジャラン、と。ライダーのダガーに繋がる鎖が鳴り響く。これは――――

ライダーＳｉｄｅ

「ライダー・・・貴方はっ・・・・・・！」
「そうやって直ぐに激昂するのも貴方の悪い癖ですセイバー。それにまだお互い手を出し惜しむ必要は無いと思いますよ？」

会話しながらも私は隙を伺っていた。セイバーに対してこのような挑発は効かないと思っていたのですが・・・意外と効きましたね。私のダガーのチェーンは魔力に応じて伸びるようになっている。今なら世界の果てまで届きそうな気分です。
そのチェーンを、先端が首を擡げながら、さながら蛇の如くセイバーの背後に移動させました。
音が鳴るのは手元のほう。注意力を此方に向けながら、その実は背後からです。
ゆっくりと・・・のったりとセイバーの背丈よりも高く先端を持ち上げ――――――――――――一気に喰らう！

「っ！？」

セイバーが驚きの声を発しながらも背後の鎖に反応するのを見て私

は「ほぅ」と声を上げる。
不意打ち奇襲でしたがこれに反応するとは流石直感スキルが高いだけありますね。
ジャランッ、と鎖を引きながらうねうねと動かしながら手元へ。足元で蛇のように鎖が踊る。

「不意打ちとは・・・」
「おや、これはこれは。私がまともに戦うと思ったのですか？だとしたらそれは――――――大きな間違いですよ」

今度はダガーのほうを真正面から投擲する。勿論防がれる事は百も承知。ギィンッ、と剣で払うように叩き伏せましたか。
今の私はきっとセイバーには無手に見えるでしょう。案の定向かってきましたし。
ですがそのダガーはまだ生きている。地面に叩き伏せられたダガーは地面に弾かれるようにして跳弾してセイバーへ。
これもまた背後から向かっていきます。セイバーはまだこれに気付いてない。気付いたところで方向転換しようと追いかけますよ。
しかしセイバーの突進と鎖の追う速度が一緒ではイタチゴッコですね。仕方ありません。セイバーを足止めしましょう。
此方からも迎撃の疾駆でセイバーを止めに掛かります。目の前にいる私に注意を向ければ鎖も見抜かれないでしょう。
既に何度目になるのやらというくらいの邂逅。ただ、私は無手なのでセイバーの剣を防ぐ手がありませんでした。

「ハァァァァァ！！！！」

振り上げ様に叫ぶセイバー。ですが、この程度の危機など数え切れないくらいに乗り越えてきた。
ここで退く様では座になど居ませんよ！

「セイバー！！！」
「ライダー！！！」
互いに名を呼ぶ。いや、叫びだった。私は避ける事はなく、魔眼の封印を解いた――――――

セイバーＳｉｄｅ

武器も持たずにライダーが特攻してきました。成す術無しと悟っての愚行、ではないはずです。何か手を持っているに違いない。
カリバーンを振り上げ、その無防備な体へと一刃を降ろす。気合一閃。
しかし、そこにいたのは諦めた者ではなかった。その雰囲気が醸し出していたのはまだ飽きらめていない者の気迫。
強くあろうとする者、願いを持つ者の姿が其処にあった。

「っ・・・・・！？」

振り下ろし様、ライダーが魔眼抑制の為につけていた眼帯を外す。
其処には今まで押さえつけられていた魔眼――――――自己封印・暗黒神殿（ブレーカー・ゴルゴーン）が発動する。
その瞳は私を捉えて離さない。私もまた、その瞳を魅入ってしまった。
一瞬、とはい私は彼女の魔眼で動きを封じられた。石化する魔眼・・・ゴルゴーンも今の対魔力スキルでも一瞬は体を奪われてしまった。

その一瞬が命取りだったのは後になってから気づく。そう、背後からライダーのダガーが。さっき叩き伏せたはずのダガーが迫っていたのだ。
私は目先の相手しか目に入っていなかったようで其れを気づくことができなかった。不運。いえ、自業自得。
ライダーの脳天直前で剣が止まる。ライダーも其れを読んでか動かずにじっとしていた。瞬きすらせず。
更に背中からの攻撃に瞬間硬直した私の背中に突き刺さる。

「――――――――――っ痛っっっ・・・・」

ぎり、と歯噛みして痛みに耐える。瞬間硬直で魔力運用も上手くできない。
痛みは激痛になり体中を駆け巡った。硬直は直ぐに解けたがそのまま振り下ろすには勢いも力もない。
ライダーに手で払われ簡単に地面へと墜ちた。

「ライダー・・・貴方はっ！」
「使える力は全て使いますよ。戦術も戦略も地理も状況も天候も」

ゆっくりと立ち上がるライダー。その足元に跪く私。剣を支えにして体を支える。

「その程度ですかセイバー。これなら――――――冬木で戦ったときのほうが貴方は強かった」

ライダーから信じられない言葉が発せられた。私が、弱くなったと？
あの時は魔力も不十分だった。だが、今は魔力も最大限・・・いや、上限無効で運用できるくらいになったはず。
それが・・・弱い、と？

私が・・・・・・

「私は宝具を使いました。まぁ、ギリギリの状況でしたが。貴方はどうです?宝具を使わずに勝とうなどと思っていましたか?」

ライダーの言葉が重く圧し掛かる。確かに私は以前の戦いのことを考えながら闘っていたかもしれない。

前回勝てたのだから、と。

・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・これでは。これでは慢心したあの英雄王のようではないか。

心の中では違うと思っても実際にはそうだったのかもしれない。

あぁ・・・私は貴方を見誤っていた。

ゆっくり、と。剣を支えにして立ち上がる。

「申し訳ありませんライダー・・・少し・・・いえ、かなり私は甘かった。謝礼の代わりと言ってはなんだが私の全力を受け取ってはもらえないか」

「勿論ですセイバー。私はそのための役割を与えられてきているのですから――――全力で掛かってきなさい」

身長の差もあってかライダーは私を見下ろすような感じで私を見ている。

あぁ・・・すいませんライダー。私は貴方の誇りを蔑ろにした。

「我が宝具・・・其れは剣だけに非ず。我が名はアーサー。アーサー・ペンドラゴン！円卓の騎士王なるぞ！」

まだ一度も使ったことの無い宝具。どれだけ魔力を消費するのかすらまだわからないこの宝具を。

今、使う！

ライダーＳｉｄｅ

セイバーの魔力が膨れ上がっていく。彼女は宝具といった以上、此方も宝具で返そう。

私もまた魔力を上げていく。騎兵の手綱（ベルレフォーン）を発動させる程に。

「さぁ・・・セイバー。その宝具を見せてみなさい。そして――――逝きなさい」

「えぇライダー。これが私の宝具。名を――――――」

？？？Ｓｉｄｅ

「『騎兵の手綱（ベルレフォーン）！！！！！』

「『円卓の騎士団（ナイト・オブ・ラウンズ）』！！！！！」

二人の宝具が激突する。二人のサーヴァントの中央点から光が生まれ、拡散されていく。
眩い光が周囲に広がり、二人を包んでいく。

光は徐々に消えていく。
其処にいるのは満身創痍で立つ銀色の騎士と。
その騎士の足元に倒れる紫紺の髪の騎兵がいた。

「見事、です・・・・セイバー」
「いえ・・・貴方こそ。再び合間見えた事、誇りに思う」
「これで私の役割も終わり・・・貴方達に更なる力を、というマスターの願いはこれで果たされた・・・」

光の結晶がライダーを包み込んでいく。うっすらとその身を結晶に移すように光になっていく。

「ライダー・・・貴方は」

そこでセイバーは首をふる、と振って

「いえ・・・なんでもありません。また座で逢いましょう。猛き誇りを持つ英雄よ」

「ふ・・・また逢いましょう。今度は平和な中で――――――」

スゥ――――――と。ライダーの姿は完全に消滅した。

「・・・・・・・・・・」

ライダーが消えた後もセイバーはその場をじ、と見つめて。決心した目を持ちて。更なる戦場を往く。

「ライダー。いつか私も座に戻ったときには叱咤してほしい。貴方の言葉が私を奮い立たせたのだ」

戦場を背を向けて。傷だらけの騎士は歩む。今代のマスターのもとへ。

第三十四話　騎士と騎乗兵（後書き）

間が開きました。スパロボマジやばい。

今４週目開始しました。発売から二週間ですか。アホすぎますね。

第三十五話　闇、散りて

綾人Ｓｉｄｅ

「さて、やろうか。私はこの時をずっと待ってたよ」
「あぁ。はじめよう。そして教えてもらおう。お前が何者かを」

闘気と殺気が交じり合う。管理局が張った結界の中で男女が向かい合う。
俺と・・・Ｃ．Ｃ．。
その目には覚悟を決めた目。何があっても信念を曲げない固い意志の宿る瞳だ。
サーヴァントが移動してから数分にも満たない時間。ここを中心点として闘気と殺気が渦を巻く。

「俺が勝ったら全てを話してもらう」
「私が勝ったらお前は元に戻れ」

元に、だと？・・・こいつ。まさか。俺と同じ転生者か。だとすれば今までの流れも納得がいく。

「お前まさかてんｓ「黙れ。この世界の奴らに聞かれたいのか？自分の素性を――――」・・・む」
「私に負けるくらいだ。あいつの言っていた「頼まれごと」とやらも終了だろうな？」

いやまて。邪推もいいところだ。そんなわけがない。だとしたらこいつがイレギュラーになるんじゃないのか？
イレギュラー退治を頼んでおいてその実こんな展開に持ってくると

は。神の悪戯とでもいうのか？

「・・・お前が勝てばなんでも言う事を聞いてやるよ。恐らく今考えてる事の答えもその中にある」

「良し。判った――――ならヤろうか」

右手に神威を取り出して一振り。魔力伝達は調子良い。全ての魔力回路がフルに通っている。

いつでもいける。

「ほう。神威か――――」

C．C．が神威を見て一言呟く。

「神の威を代る者・・・神威か。お前はどっちになりたい？」

「言葉遊びには付き合わん。さっさと終わらせて話を聞く」

くつり、C．C．が含み笑む。右手には俺と同じ――――神剣・神威。

「――――っな」

俺はもう一本の神威を見て驚愕した。何故・・・そこにもある。いや・・・『オリジナル』も確か二本だった。

「お前その剣――――」

「フフン、いいだろう？お前と同じ神剣・神威。しかもデバイス扱いだ。何せ私も・・・神の威を狩る者だからな」

やっぱり神威がもう一本だと！？く・・・だが！それでも俺が取る

行動は只一つ。こいつに勝てばいいのだ。

「くくっ、くはははははは！いいだろう、C・C・！お前もまた神の御使いというならその力で俺を屠るが良い！出来るのならな！」

恐らくこいつはこの世界でもありえないくらいに俺と同じチート能力者。なら転生者である可能性も高い。

それなら全力でやるしかない・・・全てを見せてでも。

明らかに危険な賭けだ。正直アースラが見ている。ライブ映像で本局になど流されたら何も手が出せなくなる。

そうすれば生体ロストロギア扱いで終身封印指定だな。ロストロギアのカテゴリ自体に謎を投げかけたいが。

その手も俺が無事であれば、の話だ。俺が生きている以上は生半可な戦力じゃ適うべくも無い。

だが・・・ここで敗北して管理局に突き出されれば――――事態は一変する。

俺を打ち負かすくらいだ。恐らく俺を取り押さえている事も可能だろう。

セイバー達が助けてくれるか？いや、そこまでサーヴァントに頼るのもダメだ。

何せ相手もサーヴァントがいる。しかもあのキャスターも一緒だ。

破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）で主従関係を消されたら終わりだ・・・どうする。手を考えろ。

「安心しろ。とって食べやしないさ。寧ろ食べるならピザがほしいがな」

「その言葉による安全性が見られないな。却下する」

「別にどうでもいいさ。そんな事は些細なことだ、ピザ以外は。ほら。ヤるんだろ？相手してやるから来ないのか？童貞ボーヤ」

何処まで挑発する気だこの女。だがその意見は賛成だ。何時までもだらだらと喋ってる暇など無いんだからな！
神威を正中に構える。Ｃ．Ｃ．は横薙ぎの構えか。こうなるとテン・コマンドメンツでもよかったかと思えてならない。

「さぁ、やろうか」
「あぁ。始めよう」

その言葉を合図に。俺たちは動き出した。

アースラＳｉｄｅ

メインウィンドウに映し出されている綾人ともう一人の女性をアースラスタッフは見続けていた。

「っ！？・・・セイバーさんたちの魔力反応がアースラ内から消失しました！」

エイミィの探索から逃れたサーヴァントはこうして移動した。アストラル界へと。
だが、そのエイミィもその隣にいるクロノも。
サーヴァント消失の報告を受けた艦長席に座っているリンディも。
その近くで固まってメインウィンドウを見つめているなのは、フェイト、はやても。
はやての後ろに控える守護騎士ヴォルケンリッターの面々も。
その実何も言えないで居た。映し出されているのは映像である。
だが、その映像からでも伝わってくる闘気と――――――殺気。
戦場を幾つも幾星霜と渡り歩いてきたヴォルケンリッターでさえそ

の殺気に声が出ない。

「・・・・・・・」

沈黙だけがメインブリッジに訪れる。だが、誰も其れから目を離せないでいた。

そしてただ恐怖を感じる事しかできない者と。

その恐怖を打ち勝つ勇気を心に持つ者と。

恐怖に立ち向かう強い心を持つ者と。

恐怖を捻じ伏せて立ち上がる強固な意志を持つ者と。

未来のエースたちは恐怖を払いのける術を知ってる。今目の前で起きている事を受け止める事が出来ている。

その瞳はまっすぐに。

フェイトＳｉｄｅ

本当なら今すぐ飛び出して助けに行きたい。手を貸したい。傍で一緒に戦えたら、と今でも思う。

こんな気持ちになったのは何時からだろう？なんでだろう？

始まりなんてわからない。気付いたらあの人が気になっていた。

いつの間にか視線があの人を追っていた。最初は敵だった。一度は撃墜もされた。

それでもその前に忠告？もしてくれていた。間違った戦い方をして

いた私を正してくれたりもした。
それに。いつの間にか共闘していて。凄い力を私達に見せた。

「綾人・・・・」

心配になってしまってぽつり、と。知らずに声が漏れていました。
沈黙のブリッジにはかなり声が通った事に吃驚してしまいました・・・

視線が集まる・・・恥ずかしくって顔から火が出そう。おろおろしながら隣に居たなのはのほうを向くとニコ、と笑ってる。

「うん。フェイトちゃん。同じ気持ちなんだ。私も、はやてちゃんも。今すぐ行きたい。手助けしたいよ」
「う、うん・・・」

私の心を理解してくれた。ぱぁ、と潤んだ瞳で笑顔を作って。コクリと頷いてからなのはの袖をギュ、とつかむ。

「でも・・・でもね、フェイトちゃん。私達はあそこに行っちゃだめなんだ。
綾人君が来ちゃダメって言ってたから。だから私達は行ってはダメ」

なのはが言う。それ以上に何かを含みながら。

「それにな。魔力がまだ回復仕切っとらん私達が行っても役にはたたへん・・・悔しいけどな。
せやから・・・私達に出来ることをするんや」

はやても。強い意志が瞳にあるのが見える。なら。私はナニをすれ

ばいいのかな。
二人ともやるべきことを見つけてる。私も見つけなきゃ・・・みんなと一緒に進んで生きたいから。

はやてＳｉｄｅ

マテリアルと闘った私達は魔力をギリギリまで消費してやっと勝利を得た。
クロノくんも今でこそ指揮を取って立っとるけど自分のクローン？と闘ってやっぱり内面はボロボロや。
フェイトちゃんも。なのはちゃんも。何も出来る事がないんか・・・何もっ・・・・。

「・・・・・」

守護騎士のみんなも手伝ってくれた。シャマルが此処におるっちゅーことはあのマテリアルの子も無事なんやね。
何も言うてけぇへんってことはまだ容態は安定しとらんようやし、シャマルが話しかけてくるまでは様子見にしとこか。

「綾人・・・・」

フェイトちゃんがぽつ、と綾人くんの名前をつぶやいとる・・・無意識下やと！？
静寂のブリッジにフェイトちゃんの声（しかも名前）が響いたもんやからみんなが一斉に振り向きよる。
当のフェイトちゃんはそれにやっと気付いたんか、は。とした顔で顔真っ赤にしてなのはちゃんの袖にしがみついた。

この場合私は口を出さん。なのはちゃんが優しくフェイトちゃんを落ち着かせる。

「それにな。魔力がまだ回復仕切っとらん私達が行っても役にはたたへん・・・悔しいけどな。
せやから・・・私達に出来ることをするんや」

落ち着いた二人に私も乗る事にした。落ちついたんなら平気やろ。
今はただ、見てることしかできひん。代わりに誰かがいけたらええんやけどな・・・
いやでも。メインウィンドウに映っとるあの闘いの中に飛び込む勇気は私にはあらへんわー。
魔力を体に纏わせて身体能力だけでなんであんなに闘えるねん！

闇統べる王Ｓｉｄｅ

あの金ピカに連れてかれた空間から我は外に出ている。なにやら戦艦のようだな。恐らく管理局の所属であろう。
ともあれうろつこう。話によると星光も雷刃もここにいるようだしな。
まずは合流してコレからを決めよう。
それに・・・我らの魔力を供給しているはずのあいつの魔力反応も近い。どう動くべきかを星光のアドバイスを伺う。
・・・あやつら何処に行っておるのだ。我の場所に集まるのが常であろう。
仕方ないので長い廊下を歩く。まず言えるのは此処がどこであるのかまったくわからんということだ。

何人かと擦れ違ったが何も問われる事もない。ふむ。我の高貴な王気で近づけぬようだ。ショミンというのは辛いな。
そういえばバリアジャケットを着たままなのだが誰も何も言わないあたりどうなのだ？
そのままでいる我も我だが。まぁなんとかなるであろう。まぁ、こうも広いのだ。そうそうと出会う訳も無いのは理解しておる。
そう、あんな水色の髪の毛をしたボケナスな顔のやつになどそうそう擦れ違う筈も・・・・・まて。

「まて、雷刃。貴様今まで何処にいた」
「え？あ、王様だ！どうしたのこんなところで！」
「其れは我が聞いておるのだ！」

まさかこうも擦れ違うとは思いもよらなかったわ。しかもバカみたいな顔で走りおって・・・・。
首根っこを捕まえて雷刃を捕獲する。まるで借りてきた猫だのぅ。

「貴様が此処にいるなら星光はどこだ？知らぬのか？」
「んー。魔力反応はあるけどどこだかはわからないなー」
「貴様の魔力探知には期待しておらん」

とりあえず雷刃をずるずると引きずりながら星光を探そう。こいつが居たならどこかにおるだろう。

「そういえば雷刃。その服装はどうした？」
「ん？これ？王様に似た子から貰ったんだよ」

我に似た・・・となると子烏か。何処にいるかは後で言いとして。
まずは星光である。
私服の雷刃とバリアジャケットの我か。うむ、シュールではあるな。

あとで服を調達しよう。
中をうろついていると星光の魔力気配を感知する。我々三人はマテリアルという存在故に繋がっているのだ。

「雷刃。星光が近くにおる。いくぞ」
「ん、星光に逢うー！」

雷刃は引き摺られながらオー！と両手を挙げている。えぇい、動いたら引き摺れぬでは無いか！
あまりにも邪魔になったのでポイ捨てる。あとは一人で歩け。
雷刃をその場に捨て置いて星光の気配を辿る。
ふむ。あの部屋からのようだな。星光の気配はするが動いてる気配まではないようだ。
星光は我の従者である。故にノックなど不要。いきなり扉を開ける。

「星光、ここにおるのか？入るぞ」

暗い部屋の中に向かって語り掛ける。無論我は堂々と中に入る。
一歩。中に入れば暗い。電灯もついてない。だが其処にいるのは紛れも無い事実。

「・・・星光。寝ておるのか？」
「　　――――――ぁ。　　」

微かな寝息が聞こえていた。うっすらと声を掛けてみると星光は返事をするように寝息をやめて起きた。

「おはようございます、王よ。朝餉の時間ですか？」
「呆けるな。今がどういう状況であるか理解しておるだろう」

我は星光の渾身のボケを潰してやる。今はそれどころではないわ。

「いくぞ。立てるか？」

「あぁ、はい。大丈夫です。問題ありません」

医療ベッドから起き上がる星光。だがその動きに精細さは無い。

雷刃に指示して星光に肩を貸させる。これでやっとまともに動けるだろう。

というか。こやつも私服か。これでは我がイタイ子になってしまうではないか。

「おーさまもきがえようよ！おーさましか着れない様な服に！」

「雷刃、貴様は我に裸になれと言うのか。知っておるぞ、王にしか見えぬという服を売りつけた洋服屋の話を」

ジロ、と半眼で雷刃を睨むが雷刃はそんなのお構い無しにはしゃいでいる。此処が何処だか理解しておらぬな。

「星光。やれるな？」

「先程も言いましたように。問題ありません。許容範囲内です。魔力値も通常時の薬８０％まで回復しております。

この回復力もどうやら供給されている魔力のお陰かと」

ふむ。だがその肝心の供給主が何処におるのかわからん。

まぁ、逢うたところで何をするでもないが。

「おーさま、これからどーすんの？」

「ふむ。とりあえずまた闇の欠片を探しにいくか」

「当ては無いですが今の私達になら妥当な案かと」

ふむ・・・基よりその為に生まれたのだからそれしかあるまい。なら初志貫徹、やらねばならぬ。

「よし――――――いくぞ、星光、雷刃！今度こそ我らが悲願を叶える時ぞ！」
「はい」
「おー！」

ふふん、我には頼もしい部下よな。さぁ行こう。我らの願いを・・・闇の力を解き放つ為に。

「ちょとおおっとまちぃ！！」

む？折角決まったところで邪魔が入るとは。振り返り部屋の入り口を見ると其処には狸・・・・・もとい、子烏がいた。オプションをつけて。

はやてＳｉｄｅ

シャマルが張っていた医療室の結界に誰かが侵入したと報告してきた。
一応の警戒も含めてわたしとシャマル。それとシグナムについてきてもらうことにして確認しにいく。
リンディさんはすぐに許可してくれた。
・・・ただずっとあそこで見てるだけなんは性にあわん。
まぁ、車椅子に座っとるだけなんやけど。

「あそこです、はやてちゃん・・・・って、ドアが開いてる？」

「下がれ、シャマル。私が先に哨戒する」
「シグナム、気ぃつけてな」
「ありがとうございます、主はやて」

あいてる扉に向かってシグナムが突っ切る。シャマルは安全運転で車椅子を押して走らせる。
まず、シグナムが。その後直ぐにシャマルと私が到着する。
部屋の中は暗かったけど底から聞こえるのは三人？くらいの声。

「よし――――――いくぞ、星光、雷刃！今度こそ我らが悲願を叶える時ぞ！」
「はい」
「おー！」

て、なんや！？この声・・・・マテリアルたちか！

「ちょとおおっとまちぃ！！」

ここで逃がしてもうたら私はきっと後悔してしまう。夜天の書から生まれたマテリアル。闇に沈んだ力を集める為に作り出された存在。そのマスターの私には彼女らを止める権利、権限はあるはずや。

「ちょぉまちぃ。あんたら何処行く気や」
「ふん。子烏め。我らが何処に行こうと貴様には関係なかろう。だが敢えて言うならば――――――外だ」

アホか！つかアフォか！そんなこと出来るわけ無いやろ。

「あかんわ！それにまだそっちの・・・なのはちゃんもどきはまだ安静にしとかなあかんやろ」

「大丈夫です。問題ありません。通常の８０％で運行中です」
「そうだぞー。それでもつよいんだぞ！」

私の問い掛けになのはちゃんもどきとフェイトちゃんもどきが応えた。え、ナニその電車みたいなん。

「と、とにかく。あかん。あかんわ。あかんよー。どうしてもっちゅーんならちょぉまっとれ」

今にも暴れだしそうなマテリアルたちを宥めてからブリッジにいるリンディさんに連絡をとる。

「あ、リンディさんですか。はやてです。ちょぉ、すいません、用件が・・・」

連絡している間にシグナムとシャマルに警戒してもらう。
そして少しのやり取りの後。

「うっしゃ。んじゃぁ、あんたらちょぉついてきて。話はそれからや」
「ふん。我を連れて行きたければ其れ相応の誠意を見せよ」
「そうだー、みせろー！」
「雷刃、少し落ち着きなさい」

・・・なんやろう。この感覚。園児を連れて行く保母さんみたいや。
ともあれ、ブリッジに連れて行くから、と説明して三人を連れて行く。
その間にもギャーギャーと騒ぐのでシャマルのフォークで黙らせた。

リンディＳｉｄｅ

こんにちは。久しぶりの出番です。メタとか言わないでください。
はやてさんが医療室に向かってから少しして通信が入りました。

「なのはさん、フェイトさん。はやてさんがこれからあなたたちが闘ったマテリアルって呼ばれる子を連れてくるって言ってるわ」

一瞬、え、って顔になったけど二人はすぐに真っ直ぐな瞳で向きなおして力強く頷いた。

「クロノ。エイミィ。其方はお願いね」
「はい艦長」
「了解です」

ともあれ、あんまり口出ししないほうが良さそうね。エース候補の三人に任せようかしら。

綾人Ｓｉｄｅ

くっ、攻めきれない。どう攻めようと必ずその裏を取ってくる。俺を更に超えている・・・だと！？

「どうした、信じられないような顔だな。今の状況を認識できないか？」
「黙れ魔女め！」

くそ、こういうときに限って実質のスペックの差が出てくるのか？
要は能力におぼれていたと！

「・・・俺は勝つ。絶対にだ！」

神威を振り薙ぎ、防御したC．C．を遠ざける。左手を前に出して
魔法陣形成。真円の魔法陣――――ミッド式だ。
漆黒の魔力光を放ちながら魔力が高まる。

「ほう、集束魔法（ブレイカー）か。面白い」

遠めになったC．C．が集まる魔力に感嘆の声を上げる。みてろよ、
その余裕の笑みを消してやる。
周囲にある魔力素を全て集める。今まで散った魔力や結界に使って
る魔力素までごっそり全部だ。

「・・・セイバー達との魔力リンクも一瞬だけカット。全てをここへ」

魔術回路のリンクすらカットする。これで全魔力をこれにまわせる。
いくら俺と同格だろうとこれならどうだ。あいつだってサーヴァン
トと繋がっている。
さらにはマテリアルとだって！
それなら連結の少ない俺のほうが魔力数値は高いはずだ。

「喰らえ魔女。俺の全てを叩き込む」
「いいだろう。ならお前の全力とやらを見せてみろ」

C．C．は立ったままだ。避けるそぶりも無い。死ぬ気か？

「この・・・莫迦が！」

俺は集束魔法を撃ちだした。名前などまだない。適当に集めた魔力を砲撃しただけだ。

だがその威力はスターライトブレイカーを大きく超えるものだった。

いうなれば宝具級。それだけで次元震が起きるほどに。

しかし実際には次元震は起きなかった。直進する集束魔法。避けないC．C．。俺は勝利を確信して笑みを浮かべる。

「くくっ、終わりだ、C．C．！」

一気に俺は魔法を押し出す。勝利は目前。それなら自然に笑みも出るというものだ。

・・・そういえばこんなに表情に出たのは初めてだ。

あとは直撃したあとの次元震を抑えればいいだけ。そのくらいの魔力は残しておかなければ。

そう、考えていた。後片付けまで。

しかし。

しかし・・・魔法は直撃したままで何も起きなかった。

C．C．Ｓｉｄｅ

まったく。詰めが甘いな。これでいいのか？イレギュラーとしてはまだ満足な結果ではないのに。

集束魔法を打ち出すとは思ってもみなかったがまだ甘い。練りが甘

い。速度が甘い。質量が甘い。
確かにこの程度ならこの世界でも通用するだろうが同じような相手には利かない。それを身をもって教え込む為に私は来たのだ。

「・・・・莫迦が」

ポツリと呟く。髪の毛が風に煽られて舞い踊る。右手に神威を持っている為、左手を前に差し出して防護盾を作り出す。
集束魔法と盾が触れ合った瞬間に衝撃が腕を駆け抜ける。それでも私は破壊などされないように身体強化をしておく。
本当に莫迦だよお前は。まだお前は得た事の無いものを与える為に来たんだ。
だから――――――今はそれを味わってくれ。私を悪というならそれでもいい。憎め、小僧。
これは返すよ。お前はまだ敗北を知らないから。きっと味わう事がなかっただろうから。
グ、と集束魔法を押し返す。徐々に魔法は押し返されていき、ついにはその進むべきベクトルを反転させて。
使用者へと向かっていく。

「今のお前じゃ私には勝てないよ。出直して来い」

綾人Ｓｉｄｅ

まさか。まさかまさかまさかまさか！
俺の全力だぞ！それが何故だ！目の前で起きてる事は現実なのか！？幻影ではないのか！？
俺の全力の集束砲が押し返されている。なぜだ！

「くっ・・・・この！」

殆ど全てと言ってもいいくらいに使い果たした魔力は散らばった魔力共々今目の前で集束されている。

周囲にこれを返せるだけの魔力素もない。あとは――――自滅を待つだけだ。

そんな莫迦な！ありえない！くそっ、くそーーーっ！！！

などと思ってるうちに集束砲が目の前に迫る。防御・・・・も既に間に合わない。熾天覆う七つの円環をだす余裕も無い。

一瞬の明滅。眼前の集束砲が――――――――――

――――直撃した。

闇統べる王Ｓｉｄｅ

我らがアースラのブリッジに入るなり、目の前の巨大なウィンドウに映し出されていたのはまさに最終場面だった。

「莫迦め――――――」

我はぽつ、と呟いていた。爆風と爆発で跪くようにして敗北する男のを姿をみながら。

第三十六話　鼓動

闇統べる王Ｓｉｄｅ

ふん。あの愚か者は何なのだ。出鱈目に構築された集束砲を放つだけで勝てるはずもなかろう。

「莫迦め――――」

我は無意識に呟いていた。あの魔法は確かに凄まじいものがあるだろう。

だがそれもまだ甘い。能力をただ垂れ流しているだけに過ぎん。

そのくらいは我でなくとも此処にいる全員が理解しておるだろう。

あぁ、子烏に続いて他の・・・星光と雷刃のオリジナルもおるのか。

あっちの黒いのもオリジナルだな。

「で、だ。我を此処に呼んだのは誰ぞ。何の用か」

「・・・君は・・・・マテリアルの王だそうだね」

「如何にも。だが下賤の者よ。王たる我に話しかけるその行いを悔いて死ね」

黒いのが此方に向いて声を変えてきた。ショミンが我に話しかけるなど６００年速いわ。

「・・・まぁいいさ。僕は最近心が広くなったから」

青筋立てて言う言葉ではないな。だがこの反応は面白い。もうちょっとからかってやろう。

「あの女性に見覚えとかは・・・ないかな？」
「ん？どれだ？最近目が遠くてなぁ？」

くくっ、青筋が増えてきおった。ブチギレ寸前か？

「王よ、遊ぶのはあとで宜しいかと」
「ふむ。星光が言うなら仕方がない。其は我らの魔力の供給源よ。まぁ他にも魔力を流しておったらしいが」

管理局か。あまり好かぬ連中だが多少の情報リークくらいは許してやろう。

「まぁ最も。既に魔力回路のパスは途切れておる。何処に行かれようと判らぬし、知った事ではない」
「そう、か・・・・探索はきついな」

黒いの・・・名をクロノと名乗ったので我もまた名乗る。雷刃、星光も。
その序に子烏共も名乗ってきた。なんだこの馴れ合いは・・・うざったい。
高町なのは、か。我と闘い、撃墜させた魔導師・・・。
何故闘うのか、という問いに闇の欠片を集める為。闇の書の復活。
混沌の古代の復活と言ったら何やら俯いたままになった。
・・・どうでも良いが雷刃よ。貴様は適応しすぎだ。そのおかしな飲み物を平然と飲むんじゃない。

Ｃ．Ｃ．Ｓｉｄｅ

ミラージュを打ち落としたあと、私は暫くその場にに立っていた。
管理局が張った結界が解け、魔導師達が集まってくる。
ミラージュの救出と、私の捕縛か。警戒しながら距離をとってはいるが其れではダメだ。その距離では私の手が届く。

「私に構っている暇があったらその小僧を速く連れて行け。私は消えるから」

神威を消した右手でヒラ、と振り。ミラージュに背を向けてその場を去る。

綾人Ｓｉｄｅ

負けた。
それだけが頭に残っていた。魔力も全部使い果たした。
疲れた。

もう何も考えられない。暫く寝る。

なのはＳｉｄｅ

綾人君が負けた。ずっと見ていたのにそれは信じられなかった。
始めてあったときから私達の誰よりも強かった綾人君が。リィンフォースさんが出てきたときに一緒に闘ってくれた綾人君が。
暴走プログラムに立ち向かったときも、あの金色の人と一撃で倒した綾人君が。

目の前で負けた。私は呆けたままモニタウィンドウを見続けながら、聞こえた声に振り向いた。
其処にはさっき私と闘ったマテリアルの王さん。

「莫迦が――――」

そう呟いていたのはブリッジに聞こえた。なんかむすっとしてる？
そんな顔してた。
クロノくんがそっち・・・はやてちゃんのところに行きながら質問してる。私はモニタに映る搬送してる綾人くんを見続けるしか出来なかった。
自分じゃない誰かが墜ちるのがこんなにも怖いなんて。

「・・・・っ！」
「――――なのは？！」

いてもたっても居られなくなって私は走り出した。
向かう先は搬送される綾人君のいる場所へ。
フェイトちゃんが私の名前を呼んで一瞬振り向いたけど。少し泣いてるのが見られちゃったけど。
一緒に走りだした。

闇統べる王Ｓｉｄｅ

ふん。若いな、小娘どもめ。走り出す高町なのはとフェイト＝テスタロッサを見送る事はせずに目の前のクロノと向かい合っている。
星光はその直ぐ後ろ。子烏はちょっとだけ離れた。その後ろに守護騎士。ふん、金魚の糞か。

「我もまた知り得ている情報は少ない。だが知っている事は離そう。
そして此方の質問にも答えてもらう」
「・・・・・いいだろう。情報の共有だ」

管理局の持ちえる情報と我らの情報をあわせる。その中に闇の欠片
の情報があれば重畳。
なければ無いでまた探すのみよ。

セイバーＳｉｄｅ
アストラル界よりアースラの部屋に戻ってきました。どうやら私が
最後のようで、アーチャー、ランサー、ギルガメッシュが既に部屋
でくつろいでいた。

「おや。私が最後でしたか」
「いや、ほぼ同時だ。タイミング的にお前が最後になっただけで」
「そうですか」

今回、アーチャーが珍しく私に話しかける。
この世界に来てからあまりアーチャーとは話し合ってはいませんで
したね。

「しかしなんだな。あいつら俺たちを更に底上げしようとしてやが
ったけど何が目的だったのか今一だぜ」
「ふん。疾くあんなものは撃滅するに限る。ところでセイバーよ、
怪我はなかったか？」
「私達が力をつけねばならないほどに強大な敵が現れる、とでもい
うのでしょうかね」

ランサーの問いに答える。合間に何か喋ってきたけどきにしません。

「して、マスターは？」

大事な事なのでこれは聞いておかねば。勿論勝利したはずです。何せ我らのマスターですから。

「・・・・撃墜された。今、メディカルルームで治療に入ったばかりだ」

「・・・・・・・・・は？」

え？あー・・・・よく聞こえませんでした。

「・・もう一回お願いします、ランサー。今、なんと？」

「あっちのマスターにやられちまったよ。どうやら相手も同じ状況のヤツだったらしい。しかもマスターよりも能力が上みたいだ」

「・・・・まさか！」

そんな言葉を望んでるのではないのですよ！あのマスターが撃墜などっ！

「しかしだ、セイバー。これは紛れも無い事実だ。きちんと把握せよ」

「ギルガメッシュ！」

「我とて知ったのは今さっきだ。対処も出来ぬ」

「くっ・・・・」

「治療室に向かうが・・・・行くかね？」

アーチャーが場の空気をかき消すように提案を出してきました。

「当然です！」
「あぁ、あったりまえだな」
「ふん。ヘボいマスターの顔を見るのも一興か」

三者三様。返答は違えどマスターの心配はしているはずです・・・・
はずです。
部屋の扉を開けて私達は治療室へと向かう。

なのはＳｉｄｅ

治療室前。前にフェイトちゃんが。そして私がお世話になった場所。
擦れ違ったスタッフさんに聞いたらここだって教えてくれた。
扉に手を伸ばしてノックをしようとする、けど。躊躇して手が動かない。寧ろ、震えてる。

「なのは。行こう。この先に綾人がいるんだ」
「・・・・うんっ」

フェイトちゃんが背中を押してくれた。ありがとう。
きっと私一人ならずっと扉の前で立ち止まってた。

（コンコンッ）

震える手でノックする。すると、少ししてから扉が開いた。

「あ・・あの！」

ノックの手が震えると思ったら声まで震えてた。これはやばい。落ち着け、高町なのは。
すこしだけ深く深呼吸。2階ほどしてからフェイトちゃんの顔を見てから中へと入った。
中に入ると白衣のおじいさんが座ってモニタとにらめっこしてたのをこっちに向いてくれた。

「おや・・・確か嘱託の子だね」
「はい。高町なのはです！」
「フェイト＝テスタロッサです！」
「おやおや、元気がいいね。だけどここではちょっと静かにね。
眼鏡を掛けなおしてほぅほぅ、と笑顔を見せてくれた。

「あのっ・・・綾人君は・・・」
「あの少年ならそこで寝とるよ。ただし安静にじゃがね」
おじいさんが指したほうにカーテンで遮られたベッドがあった。

「あのっ、お見舞いいいですか！？」
「あぁ、でも静かにね？」

おじいさんの許可を貰ってフェイトちゃんとベッドのほうへ。
すると遅れて扉が開く音がして、中に入ってくる気配。
振り返ると、セイバーさんたちがいた。

「邪魔をします。城戸綾人は此方に？」
「うむ。君たちは・・・彼の使い魔か。あっちのお嬢さんの所に居るよ」

おじいさんが私たちのほう・・・正確にはベッドを指した。

「おや、これはナノハではないですか」

セイバーさんが私達に気付いて声をかけてきたので会釈で返します。

「お二人もマスターに？」

「はい。その・・・」

「私達、綾人の戦いをずっと見てて。いてもたってもいられなくなって」

「そうですか・・・いい友が出来たようです」

セイバーさんたちが近づいてきたので一歩退こうと思ったんだけど、一緒にっていってくれて、カーテンをあけた。

ベッドには眠っている綾人君。

「マスター・・・魔力が枯渇している。魔力回路すら焼ききれて・・・」

「限界を超えての魔力使用だったのだろう。こればかりは直ぐに治るようなものではないな」

「・・・私達が魔力を取ってしまったからですか」

「いや、どっち道こうなってはいただろう。マスターはまだ敗北を知らなかったからな」

アーチャーさんがセイバーさんと会話してる間、私達は綾人君の手を握る。暖かい。

後ろの会話がふ、と消えていた。アーチャーさんがおじいさんのほうに言って話を聞いてる。

あとはランサーさんとギルさんがずっと無言で綾人君を見てる。

「ナノハ。フェイト。あとを頼みます。傍にいてあげてください」
セイバーさんの声は優しい。声を掛けられれば力強く頷く。
「アーチャー、ランサー、ギルガメッシュ」
セイバーさんが皆の名前を呼ぶ。
「では。私達は私達でするべき事をします。貴方たちも。ただし、無茶はダメです」
釘を刺されました。そんなに無茶する事無いと思うんだけど・・・。
「なのはは無茶しすぎだから。セイバーさんも心配なんだよ」
う・・・フェイトちゃんまでぇ。
いいもん。私は私で頑張るから！
「では私達はコレで」
セイバーさんたちが治療室から出て行く。最後にアーチャーさんが出て行く。
「・・・あの人たちはやれる事がある。だから此処にいるよりも手があるならそれをする人なんだよ」
「・・・うん――――――――――ねぇフェイトちゃん」
セイバーさんたちはやれる事があるから其れをしにいくんだ。
だったら私達は――――――

「――――私達にも出来る事、何かないかな」

闇統べる王Ｓｉｄｅ

クロノ＝ハラオウンには情報をくれてやった。今までの闇の書関連の真実と共に。
それと管理局の情報も得た。現状のこの艦の状況も。
ともあれ、件の少年とやらに会いに行こうか。あの蛮行に及んだ理由も知りたいしの。
クロノに教わった場所・・・治療室へと我々で向かう。
もうすぐ到着というところで途中で異質な団体に出会う。いや、そのうちの一人は見知ったヤツだ。

「ほう。異なところで出会うな。マテリアルの王」
「ふん。我の前に出るとはな、英雄王」

我を攫った張本人。だがその内包した力は確かなものだ。

「お前たちも来い。話がある」

ついさっきまで私に見せていた慢心の顔はない。其処にあるのは戦士としての顔だった。
ふん・・・よかろう。面白そうだ。何をしでかすのか見届けてくれるわ。

「よかろう。お前たちが何をするのか興味もでた」

何よりも。我はこの英雄王に多少なりとも惹かれておるかもしれぬ。

「では・・・行きましょう」

空間を裂くようにガパァ、と開く。其処は既に異次元ともいえる、我が最初に連れて行かれた場所であった。

向こうが入ってしまったので我らもまた其れに続いて中へと入り込んだ。

ギルガメッシュＳｉｄｅ

スキマに移動したぞ。マスターのあいつが生きてて我々が魔力供給されている状態であればサーヴァントなら誰でも出入り可能になったのだ。

リィンフォースといったか。あやつの事もあるしな。

さて、そして今此処には我々サーヴァントの我。セイバー。贋作者（フェイカー）。駄犬（ランサー）。

マテリアルの王。理。力。リィンフォース。

そして――――マスターのミラージュ。

「・・・貴様、死んだはずでは」

「まだ死んでない。まだ死んでない。肉体にダメージが地ｋス益されてるから思念体飛ばしてきただけだ」

いやいやいやいや、って手を動かしてもつまらんぞ。

「ふん。思念体になってまで此処に来るとは。何か用か？」

「無様な姿を晒したからな。本当なら隠れていたかったよ」

「敗北の味を噛み締めたか。なら疾く体を休めて心に傷を負え。貴

様はまだやる気なのだろう？」
「当然だ。だからこそ此処にいる」
ふん。当然だ。でなければ我のマスターなど名乗らせたりせぬわ。
「で、贋作者。貴様が音頭を取るか？」
「ふむ。ではそうしようか。マスターの前で聊か緊張してはいるが。なに、狙いの違う事もいうかもしれないがそれはご愛嬌だな」
クツリ、と贋作者が笑う。ふん。相変わらずの厭味なヤツだ。
我が手を貸すのはここまでだ。あとはお前らでやるがいい。

アーチャーＳｉｄｅ

さて。そうは言ったがどうするか。
「マスター。手はあるのか？」
簡単に。しかし的確な質問内容だと自負する。
「あぁ。手はある。だがそれには・・・お前達全員の力が必要だ」
「ふむ。詳しく」
「俺一人じゃ勝てなかった。悔しいがな。だから力を貸してほしい・・・・頼む」
マスターが頭を下げている。セイバー、ランサーと目配せをしてみる。
二人とも笑みを浮かべて肯定の証を見せる。ギルガメッシュは・・・

・まぁいいだろう。
恐らくそのつもりだろうしな。

「其方の・・・・マテリアルか。お前たちはどうする？まだ向こうのマスターとのリンクは切れていないのだろう？」
「我らは自立的に動く事ができる。それこそ別段魔力供給のリンクなどなくても生きてもいける。
ただ、使いきった場合は消滅するのが常であるがな」

彼女らの王たる少女が説明してくる。
なるほど。つまりはリンクは切れてもすぐには消えないということか。

「では。交換条件だ。お前たちの力をあのヘボマスターに貸してくれ。そうすればマスターは勝てると言ってるのだ。
なら、その勝利のあとにあのヘボマスターと魔力リンクを繋げればいい。どうだ？」
「ふん。よかろう。我もまたこの男の行く末が気になるところでもある」

これでマテリアルの手も借りれる。今のマスターにとっては魔力量の増大がネックだ。
それに・・・戦闘経験もつませなければならない。課題は盛り沢山だ。
少し言っておくか。

「マスター。魔力をいくら増大させてもマスターの戦闘経験が絶対的に足りない。
あちらの「敵」どうやら戦闘危険が豊富のようだしな」
「あぁ。それは俺も考えていた。だから――――――それもお前たち

の力を借りたい。俺を鍛えてくれ」

ふむ。向上心は壊れていなかったか。それは重畳だ。

「では私から言うことはない。あとはマスターがやってくれ」

綾人Ｓｉｄｅ

ずっと頭の中で考えていた構想がある。だがこれは自分の体に負担をかけるばかりか、周りにまで影響が出る。

だからこそ手が出せなかった。だが既になりふり構っていられない。

「じゃぁ俺の考えを言う。聞いた後に嫌なら嫌と言っても構わない」

俺の言葉にこの場にいる全員が俺を見てくる。マテリアル達でさえ。

「何度も聞くが・・・いいんだな？」

「ふん。我らの願いを叶えられるならこの命を永らえるには最適の方法だ。我は一向に構わん」

「王がそういうのでしたらそれに従うだけです」

「僕は闘えるならドーデも大丈夫だっ！」

やれやれ・・・全く。貧乏くじかもしれないのになぁ？

「じゃぁ、俺の案は一つだ。ユニゾンをする。ただし――――」

これに繋がる言葉を口にすると周囲の雰囲気が重く変わる。

「それだとマスターだけではない。リィンフォースにまで負担が掛かる」
「いえ、私は統括管制するのみになります。能力などは各個の力によるものになりますので皆が独自に制約する必要が出ますね」
「なるほど。要は力の振り方は自己負担ってか」
皆独自に理解してくれたようだ。あとの問題は――――
「あとは。マスターが起きればいいだけです。どうでしょうか？」
セイバーの言うとおりだ。そこはなんとかするしかない。まず第一の大前提だな。
俺の肉体は著しくダメージを受けている。思念体を飛ばしてもこの空間にだけしか出て来れないなら意味が無い。
「セイバー。全て遠き理想郷はもってるのか？」
「いえ・・・あれは今の私では持ち合わせておりません・・・申し訳ない」
「いや、いいさ。それまでにくと高望みだ。ならアーチャー――――」
「ランクがかなり下がってもいいなら投影できない事もない。出来るかどうかの確立は半分だぞ」
「それでもいい。やるかやらないかじゃない――――――」
「「「「「やるんだよ！」」」」」
俺とサーヴァントの声が重なる。まったくこいつら合わせやがって。よく判ってなかったリィンフォースとマテリアル達はポカン、と見ていた。

さぁ、色々とやることが出来た。まずは起きよう。

「じゃぁ、アーチャー。あっちで頼む。俺は戻ってるよ。みんなは此処で待機」
「了解した」

アーチャーの返答を聞いてから俺は思念体を消して肉体へと戻った。

アーチャーＳｉｄｅ

全て遠き理想郷を投影か。随分と無茶を言ってくれる。

「アーチャー」
「セイバーか」

皆、待機ということで寛ぎ始める中、セイバーが話しかけてきた。全て遠き理想郷についてか。やはり気になるのだろうな。まぁ当然か。

「お前の思うような投影はできん。それだけは言っておく。今の私ではアレの完全投影はまだ不可能に近い」
「・・・今。まだ、と言いましたね。なら時間を詰めば可能、と」
「さてな。お前がどう取ろうと構わないが私がお前の為に動くとは限らんよ？」

クッ。セイバーめ。その見上げた瞳をなんとかしろ。

「贋作者！貴様我のセイバーを口説くとは笑止千万！其処に直れ、今すぐ殺す！」
「莫迦が！これの何処が口説いているというのだ！こんなちんちくりん相手に！」
「アーチャー！貴様言ってはいけない言葉を発したな！」
「セイバーもそのくらいでキレてるんじゃない！」
「いいえ、言わせて貰いましょう！私は好き好んでこの体型になってるわけではないのです！」
「我は今のままのセイバーも愛でて見せよう！」
「「黙れカス」」
「ぐはっ・・・・・」

ギルガメッシュが討たれた。巨悪はこれで沈んだ。さらばギルガメッシュ。

「ともあれ・・・セイバー。私は衛宮士郎の可能性の一つの存在だ。それに・・・あいつは君に渡したのだろう？」
「アレは・・・・こちら側に持ってくる事ができませんでした。恐らく、まだ私自身のレベルが足りないからだと思います」
「ならそれまで諦めろ。強大な力を持つ事がどういうことか。お前なら知らぬわけではあるまい。お前にとってどういうものかは理解してはいる・・・」

自分の持ち物、しかも伝説にあるように手放してしまっている事に不安があるのだろう。
だが、所詮投影は投影だ。本物には成り得ない。

「戻ったらまた話をしよう。今は与えられた仕事をこなすのみだ」
「わかりました・・・絶対ですよ？」
「あぁ。わかったわかった」

セイバーと約束を交わして。私は空間を後にする。

―――――――――――――――――――――――――――――――

空間から出た私は再度、治療室へと向かう。
あれから数分も経っていなかったせいか、いまだに小さき魔導師二人がマスターの傍にいた。

「あ・・・アーチャーさん」

金髪の娘・・・フェイトが私の気配を感じって此方を向いたので軽く手を上げて応える。

「マスターを起こすので離れててくれないか？」

「「え？」」

とりあえず、了解を得てからにしてみるか、と思って二人の後ろに陣取る。勿論、任せてくれるなら離れられるように空間を空けてだ。

「綾人君を無理矢理起こすんですか？」

「まさか。マスターは精神的には起きている。肉体と魔力のダメージが異常に高いだけでな。
だから、それを治療する」

「治療魔法は効かなかったと聞きましたけど・・・」

ある程度の情報は得ているようだな。だがそれは間違いであり、正解。

「恐らく其れはリンカーコアと呼ばれるものの修繕などによる回復・治療を指すのだろう。
残念ながらその方法ではマスターは起きないんだ。
何にでもやり方というのがある。施されたのがダメだったというわけではない。方法が違ったというだけだ」

リンカーコアのないマスターに修繕しようと無いものを治す事などできないからな。

「さぁ、これから少し集中しないといけない。任せてもらえるかな」
「「・・・わかりました」」
「聞き分けのいい子だ。将来いい大人になるな」

クス、と小さき魔導師に笑みを向ける。

「さて、始めるか・・・あれだけの宝具の練成など久しぶりだ」

右手をマスターの体の上へ差し出して意識を集中する。

Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.

一小節を紡ぐ。魔力回路に撃鉄を打ち込む。ガチリ、ガチンガチン。
創造するのは歴史。過程。想い。やがてうっすらと神々しく黄金の

輝きを放つ『鞘』が生まれた。
明らかな反動が見て取れる。右腕がビキビキと響く。それだけで衝撃が腕を走り抜けていくようだ。
流石に・・・まだ無茶しいだったか。
だがやらねば。やってやれないことなど無い。
後ろで魔導師が見続けている。心配するな。必ず成功させて見せよう。
ほら、マスター。こんなにも想ってくれるのがいるのだ。とっとと目覚めろ。

ブゥゥゥゥゥン

光が消えていく。どうやら成功したようだ。光はマスターに吸収されていくように。
全て遠き理想郷はまるで硝子の様にパリン、と割れて消えた。

「――――――フゥ」

肩の力を抜き、溜息一つ。これだけでも破格の仕事だぞマスターめ。

「起きろマスター。魔力の貯蔵は完全のはずだ」

マスターに問いかける。私の問い掛けにマスターが目覚める。

「ん・・・サンキュアーチャー。助かった」

マスターは普通に寝起きのように起き上がりベッドから立つ。

「異常は？」
「ないな。さすが全て遠き理想郷だ。ランクが落ちても体力魔力が

回復してるならそれでいい」
「そうか。だが理解している通り、怪我は治っていない。無茶はするなよ？」
「あぁ判ってる」

私が深く言っても仕方が無い。このマスターは意地が悪いからな。
きっと怪我を推してでも行くだろう。
案の定、そのようだし。

「なら私も待機に入る」
「あぁ。後でな」

霊体化してスキマへ。時が来るまで待機に入る。

綾人Ｓｉｄｅ

アーチャーめ。ランクが落ちても流石は宝具だな。きっちり仕事してくれやがった。
怪我、はまぁ仕方ない。体力も魔力も回復した。魔力回路までは回復し切れなかったか。
でもやるしかない。

「なのは。フェイト」
「あ、うんっ」
「な、なにかなっ？ていうか、大丈夫なの！？」

心配そうに俺を見る二人。

「心配かけたな。もう大丈夫だ。はやてたちにも伝えておいてくれ。これからリベンジしてくるって」
「そうだよ、心配したよ！だって負けちゃうなんて・・・」
「そっか。でも大丈夫だ。もう俺は負けないから」

そう。この苦い敗北の味を噛み締める事ができたから。
この味を忘れないうちは俺は負けない。負けられない。

「良くみとけよ？たとえ相手が神でも――――――そののど笛噛み切ってやるさ」

右手に神威を呼び出す。同時にバリアジャケットを展開。
前回は生身で闘ってしまったから。もう油断も何もない。

「そう、だな・・・頼みがあるんだけど聞いてくれるかな」
「頼み？なに、かな？」
「背中を、押してくれ。もし俺が――――――また負けそうになったら。前に踏み出せる勇気をくれ」

マントを翻して目の前にスキマを広げる。

「じゃぁ、行って来る」

なのはとフェイトの答えを聞かないまま、俺はスキマの中に身を投げた。

第三十七話　フィナーレ（前書き）

今までで最長になりました。
メモ帳で２５ｋｂとか何やってんの。

第三十七話　フィナーレ

綾人Ｓｉｄｅ

スキマに入った俺を待っていたのはセイバー、アーチャー、ランサー、ギルガメッシュ。
リィンフォース、闇統べる王、雷刃の襲撃者、星光の殲滅者。

「アーチャー、未来より来た錬鉄因果の英雄。ありがとうな。助かった」
「何、私は己のすべき事をしただけに過ぎない。それよりもマスターが此れからするべき事の為なら、だな」

「セイバー。円卓の騎士王。御身の力を貸して欲しい」
「我がマスターの頼みとあらば全力にてこの力をお貸しいたしましょう」

「ランサー。赤枝の騎士。貴殿の勇気を貸してくれ」
「カッ！そんな堅っ苦しいのは無しだ。それに俺もマスターが何処まで行くのかみてみてぇのさ」

「ギルガメッシュ。最古の英雄王。貴殿の財の一部を貸し与えたもう」
「うむ。我が許可してやろう。一部と言わず好きなだけ持っていくが良いぞ！」

「リィンフォース。元夜天の統括者。お前の力が必要だ」
「はい。喜んで我が力揮いましょう。新しき居場所を与えてくれた主」

「マテリアルの王。闇統べる王よ。貴公の進む道を照らそう」
「塵芥、とはいかぬとも主は我に何を望むか？それを見届ける為に我は行くのだ。勘違いするなよ？」

「力のマテリアル。雷刃の襲撃者。君の望む闘いを」
「僕に掛かればちょちょいのちょいだ。君となら僕は飛べる！」

「理のマテリアル。星光の殲滅者。その星をも砕く力、堕天使の剣を我が前に」
「はい。御身がままに我が力を放ちましょう。」

目の前に揃った面々は其々に。
俺に力を貸してくれる。

「さぁ、行こうか。この舞台の幕引きへ！」

バリアジャケットのマントを翻して。俺は進む。前は見ない。今までの俺は俺しか見ていなかったが為に敗北した。
だが今は。そう今は。背中を預けられる仲間がいる。サーヴァントはもとより俺への礼と忠義。闘争本能。
リィンフォースたち夜天の者たちはその生まれから、この舞台劇の終幕を選ぶ。
なら俺はその手を貸すだけ。いや、借りるのだ。
一人じゃない。こんなにも共に歩む者がいる。孤独ではないのだ。

「――――――いくぞ」

俺は一言だけ呟くと全員戦闘モードへと入る。
甲冑を着込み、闘争本能をむき出しにし、自らの業を技として。

あの魔女を倒す。今はそれだけできればいい。
右腕を振り、スキマに空間のひずみを作る。その先に見えるのは町並み。
光差すその先に俺は一歩踏み出して――――町の中へと現れる。
周囲に人はいない。どうやら魔女が先に人払いをしていたようだ、が――――

「エイミィ、周囲に結界展開だ！一番硬いのを頼む」
「え？！あ、綾人君！？まだ治療で寝てたんじゃ！？」
「大丈夫だ、問題ない。一番硬い結界を周囲半径１０ｋｍで展開する」

エイミィの驚く声が音声オンリーの通信から聞こえる。そのあとの落ち着いた黒のの声が結界の展開を伝えてくれた。
きちんと結界を張るあたり優秀だ。情に流される前に仕事をこなす。流石のコンビだな。

「アースラに通達する。これより全力をだしてこの事件の黒幕を打ち倒す」
「了解した。気をつけろ。あの魔導師は近くにいる」
「あぁ。了解だクロノ。タイタニック号に乗ったつもりでいろ」
「それは危険じゃないか？！」

なぜタイタニックが危ないと知ってるんだこいつは。あとで小一時間ほど問い詰めよう。

「あれからそんなに時間も経ってないのにもう復活か。節操無いな」

前面から声がする。ついさっきまで聞いていた声。Ｃ．Ｃ．だ。
まだ姿は見えない。だが前方にいるのは間違いない。気配がそう告

げている。既に戦闘態勢だと。
空気がピリピリと鋭く突き刺さる。ク、ハッ。今度は負けないぜ。
あぁ、負けられるものか。

『リィンフォース。ユニゾンだ』
『了解。『ユニゾン・イン！』』

リィンフォースとのユニゾン。黒いバリアジャケットが白く染まっていく。仮面すら。
黒から白へと反転したバリアジャケット。右手には神威。
恐らく、あっちも神威を持っているだろう。さっきもそうだったからな。

「さぁ魔女よ。この部隊の幕引きと行こうか」
「いいだろう。さっきのように無様な姿を晒すのは止めてくれるのならな」

軽い足取り、足音。姿を現すのはまるで騎士のような姿のC．C．。
やはりその右手には神威が握られている。

「神威、か」
「あぁ、これは実にしっくり来る。手に馴染む」

神の名を代る者ならそれも当然だ。恐らくあいつも神によってこの世界に降り立った転生者。
俺と同等の知識と、俺以上の力を持つ女。

「ユニゾンか。一人では勝てないから力を借りるか」
「あぁ。俺は一人ではないからな。力を貸してくれたんだ。こんな――――――俺なんかの為にな！」

C．C．との距離はそんなに離れていない。俺は一気に踏み込む。
魔力運用はリィンフォースに任せている。的確な魔力濃度を足から出してブーストさせて踏み込みを強化させていく。
踏み込み一直線。地面が裂かれる。アスファルトが捲り上がり異質な世界を作り出す。

「ふん。多少は力の使い方を学んだようだが――――」

俺の踏み込みの斬撃にC．C．は避ける動作もしないで真正面から俺の一撃を片手で受け止める。
神威が交錯する。鉄同士の鈍い音が弾き響く。一瞬の火花スパーク。

「その細腕の何処にそんな力があるんだか、なっ！」
「お前は知らないだろうが私の中にはバーサーカーがいる。だったら自身に狂化も掛けられるんだよ」

そうか。サーヴァントを取り込んでそのスキルを使いこなすというわけか。その発想はなかった。

「サーヴァントを取り込んだ・・・ならお前は――――」
「あぁ、お前の思うとおりさ。私が大聖杯の変わりだ。だからこそあいつらは私の中にいる。暴走せずにな」

C．C．の左手に魔力が集まる。

「白枢（ペルセフォネ）」

左手のモーションは遅く振られたが互いに交差した状態では回避が難しい。だがその咄嗟に――――

「セイバー！」
『ユニゾン・イン！』
一瞬にして姿を白い『ゼロ』から『青銀の騎士』へと変わる。

セイバーＳｉｄｅ

ユニゾンが成功しました。マスターの肉体を変換して『私』になる。
「　　その魔術はキャスターですね」
瞬間にして魔術を理解する。マスターの知識と聖杯戦争時の知識が合わさっている。
魔術無効化能力によってＡ以下の魔術は無効化する。が、無効化できたのは封印だけでダメージは流せなかった。

「く・・・流石は使い手が違えばそのスキルレベルも変わるということですか・・・」

狂化したとはいえバーサーカーの力なら。私も打ち合えるというもの！
彼の女性・・・Ｃ．Ｃ．といいましたか。剣閃は私と同等。更にバーサーカーの力ですか。
中々に楽しめそうですが今はそのような事も言ってはいられません。

「暫く打ち合っていたい位に楽しめそうですが――――――今は勝利を得させていただきましょう」

「お前一人じゃ私には勝てないよ。アルトリア」

っ・・・私の真名を。あぁ、大聖杯というならそれも理解できますね。

ですが私はセイバー。最優、剣の英霊。剣の扱いで負けるわけには行かないのです！

「一人ではありません」

「そうだ。俺たちは一人ではない！」

私にマスターが重なる。あぁ、このユニゾンはなんとも心地良い。魔力を載せて一合、また一合と打ち合う。たとえ相手が神の創りし剣だとしても星の力で組み上げたこの聖剣が負けるはずも無い！

「聖剣か。選定されし剣カリバーンが折れて『ＥＸ・カリバーン』からエクスカリバーとなった、だったか？」

「さぁ、どうでしょうね。確かめてみたら如何です？」

「ならそうしよう」

剣閃、速度、太刀筋。全てにおいて英霊と化した私と同じ域とは。だが負けられぬ。これでダメならまだ更に加速すればいい。力をつければいい。知識をつければいい。

「アーチャー！ランサー！」

「待ちわびたぞ」

「おうよ！」

『『ユニゾン・イン！』』

更なる速度を。更なる力を知識を。セイバーを素体としてアーチャ

ーとランサーが体にダブる。
剣閃は更に速度を上げていく。私の速度にランサーの速度が上乗せされ、一振りする毎に音速を超えていく。
剣を振る度に音速の壁を突破する。

「セイバーとのユニゾンだけでなく・・・更にユニゾンするとはな」
「これが俺の考えうる最高のユニゾン。デュアルユニゾンだ。今度の俺は・・・・ちょっとだけ強くなったぞ」
「面白い手を考える。実に斜め上だよ」

うっすらとC．C．が笑う。

「勝つのは俺だ。そして話して貰うぞ、お前との関係を！」
「勝てたら教えてやると何度も言ったろう」

マスターはそこをずっと気になっているようです。あの女性が何者なのか。
凡そ私達も大体の勘はつけてはいるのですが確証までは至っておらずなので是非とも知りたいところです。
私をベースにしているのもマスターの考え。基本性能が高い分私をベースにしたほうがいいらしいとの事。
つまりここからブーストしていくということです。

「貴方には残念でしょうが私がお相手いたします」
「最優のサーヴァントセイバーか。お前は私を満足させてくれるのか？」
「それは私一人の力ではない。我らの力でお相手しよう」

今、聖剣には風王結界はつけていない。
会話をしつつも約束された勝利の剣を剥き出しに打ち合う。

「ランサー、もっと速度を！アーチャーは随時経験則を私に！」
アーチャーの戦闘経験を軸にして私の直感を載せてランサーの速度で攻撃する。
「ほう。中々やるようになったな。そろそろきついか？」
「当然です。出来るならここで終わらせる！」
「できるのなら、な！」
C．C．の攻撃が私を押し込む。此処までパワーアップしているのに更に上を行くというのですかっ・・・。
「くっ・・・リィンフォース。調整を！」
『了解した。出力のほうは任せろ。だから好きにやって構わん』
「ふっ。恐れ入る」
どれだけ力を振るおうとリィンフォースが管制して力の出力を調整してくれるなら。
私はその限界まで振るい続けるだけだ。

アースラＳｉｄｅ

メインブリッジのウィンドウモニタには一つの戦いが映し出されている。
青銀の騎士が緑色の髪の魔女と闘っている光景。
その戦いにブリッジクルー全員が目を見開いて見入っていた。
例えるなら舞。まるで踊っているかのような剣舞。

「す、ごいな・・・」

クロノがポツリと呟く。他の誰も口には出さないがそれは確かに全員が魅入る程の美しさがあった。
重厚で流麗。華麗にして荘厳。

「・・・・う、わぁ・・・・」
「・・・・すごい・・・・」
「あかんわー・・・あれはあかんわー」

三人娘が口を揃えて呟きながら見てる。
騎士がみどりの魔女と闘っているとはやてが異様を感じ取る。

「なんや・・・あのユニゾン、なんかおかしないか？」
「どういうことだ、はやて」
「普通ユニゾンって一人だけや。夜天の書が教えてくれた。でもあれは・・・」

そう、あれは何かがおかしい。
同じユニゾンデバイスを所持「していた」はやてなら感づくはず。
あれはおかしい。

「アーチャー！ランサー！」
「待ちわびたぞ」
「おうよ！」

『『ユニゾン・イン！』』

なんとも言えない事が目の前で起きた。更にユニゾンをしたのだ。

「なんでや！？そんな無茶しよるん！？」

通常なら。一人のマスターに一つのデバイス。それでなくともユニゾンデバイス４つ持ってるとか既に異質だったのに。
今、更にそのユニゾンデバイスを重ね掛けしてる。
精神的にも負担が掛かるし何よりも肉体にだって負担が大きく掛かるはずだ。

「しかし・・・僕から見てもあれはかなりの手だ。治療班を準備しておく」

今、いくにもきっと言った所で何も出来ない。寧ろ邪魔意なるだけだ。それは良くわかっているつもりだ。
だが、今にも飛び出していきそうななのは・フェイト・はやてを抑える役も担っている以上、クロノも動く事が出来ない。

「君たちも。今行っても綾人の邪魔になる。それは理解してくれ」
「「「・・・・・・・・・」」」

三人もわかってはいるのだ。頭では。だが、体が。心が。今すぐ行きたいと体がうずいている。
助けたい。
でもそれは敵わない。あのやり取りの中に入り込んだとしても自分は動けるのだろうか、と。

「ともあれ、僕らは信じるしかない。彼の・・・彼らの勝利を」

モニタに映る姿をただ見続けるしか出来ない。なんとももどかしいと思ってしまうが。

「（そうだ。こんなにも君の帰還を待っているんだ。だから――――
――無傷とは言わないが必ず帰って来い）」

綾人Ｓｉｄｅ

俺の体を素体にしてセイバーを呼び出してユニゾン。姿はセイバーのままでランサーとアーチャーの戦闘経験を上乗せしてリィンフォースに管制させている。
それでもＣ．Ｃ．は。この魔女は！同等の力を有するというのか！

「ははっ！ミラージュよ。お前がサーヴァントを連れているように私は大聖杯の力でもう半分のサーヴァントの力を有しているのだぞ。
それならこういうことも――――――可能だ」

Ｃ．Ｃ．が交差させた剣を押し込んで後ろに数歩程の距離を取る。
頭の高さ右後方へ引き気味に神威を引き下げる。
あれは――――――アサシンの、か！

「燕――――――返し」

一瞬九撃。因果を歪めた同時九閃。オリジナルの三倍か。

「セイバー！」

セイバーの直感が発動するが同時九撃など防ぐ手立てはない・・・
はずだった。

「ふん。甘いぞセイバー。私が此処にいる以上はな」
「そうだぜ。俺もいるんだからな！」

アーチャーの声が頭に響く。セイバーの手には右手に約束された勝利の剣。左手に勝利すべき黄金の剣。
一本でダメなら二本で。二刀はアーチャーの得意分野。長さは違えど同じ剣。なら何を恐れる事があるか。
更にランサーの加速でその二刀を捌く。それをリィンフォースが統括していく。
リィンフォースの負担が大きくなりつつある。長引けば危険だ。
普段の剣の長さで慣れていたせいか、セイバーの体が流れる。だがそれすらアーチャーの経験則で修正されていく。
同時九撃もランサーの速度で無理矢理に因果を弄る。
だがそれでも打ち落としたのは五撃まで。残りの四撃は回避も出来ずに直撃に近かった。
振り払った剣の柄尻が丁度一撃に触れて軌道を逸らした。それを機に残りの三撃の直撃がずれた。

「くっ・・・流石にきついですね。あれはアサシンの技ですか」
「多重次元屈折現象。いやこれは中々使い勝手がいいな」

神威を降ろして自然体で立つC．C．。

「だがそろそろ飽きてきたぞ。もう手はないか？」
「いや、まだだ！」

手はある。それこそここで終わらせてたまるか。

「マテリアル！」

俺の声で三つの人影と気配が現れる。

「待ちくたびれたぞ、この塵芥め」
「全くです。出番が無いのかと思ってました」
「あはははは！僕はこの力で飛ぶ！」

俺『達』の前に現れたマテリアル三人。

「貴方たちの力も必要です。お願いします」

セイバーが凛と立ちながらマテリアルに向かう。
今までが近接であるならこれからは遠隔戦闘。ベースをセイバーから俺に変更させる。

「セイバー、ご苦労様だ。だがまだ頼む」
「はい。裏方に回ろうとも私は私の成すべき事を」

白いゼロに変わりながらもセイバーは裏側に回ってもらう。
ダンッ、ダンダンッ！後ろに数歩飛びながら下がる。
C．C．との距離を取りながら、一緒についてきたマテリアルたちを見遣り。

「いくぞ。ユニゾン・イン！」

『『『ユニゾン・イン』』』

マテリアル三人とのユニゾンを開始する。俺の体と重なるように闇統べる王、星光、雷刃がユニゾンしていく。
姿こそ変わらないが神威からエルシニアクロイツへと変わった。

「デバイスが変わったか。これは闇統べる王のだな」
『うむ、我のデバイスをメインで能力を雷刃と星光のものをプラスさせておる。
うぬが道が我らと同じ道であるなら我らも共に行っても致し方なかろう」
「はは、そうだといいがな」

ユニゾン空間（？）には今、リィンフォースを筆頭にセイバー、ランサー、アーチャー、闇統べる王、雷刃、星光がいる。

「リィンフォース。もう少しだけ頑張ってくれ」
「はい。ですがあまり長時間は消耗が激しすぎます。出来れば短時間での決着が望ましい」
「あぁ、了解だ」

これだけのユニゾンをこなしてるんだ。リィンフォースへの負担も大きすぎるか。
何よりも肉体への負担もでかすぎる。
いまはまだ負担を表に出してない分、終わったあとのフィードバックが途轍もなさそうだ。
C・C・は動かない。いや、此方の動きを見ているのか。だが動かないなら今のうちにやらせてもらう！

「雷刃セットアップ。エルシニアクロイツにデータロード」
「バルニフィカス、エルシニアクロイツにデータロード」

雷刃のデバイスであるバルニフィカスのデータをクロイツにローディングする。
とはいってもリィンフォースの統制の中での事だ。

リィンフォースがソフト面。俺がハード面。今はそうやって役割を決めている。
体のダメージ等は蓄積はされはしているがあとに廻す。

「あいつ・・・空戦はできないの、か？」

一向にC．C．が空に上がってこない。ただ、こちらを見続けているだけ。
飛べない、というなら僥倖。今のうちに一気にダメージを与えるだけだ！

「いくぞ、闇・雷刃！」

エルシニアクロイツが電光を帯びる。ただしただの電光ではない。
闇色の電光。黒き雷電。
天候を操作するでもなく、デバイスが既に電撃を帯びている。
帯状放電を起こしながら周囲に撒き散らしていく。

「やりすぎても大丈夫だ。管理局が・・・クロノがあとは何とかする」

ポツリと呟いた言葉はアースラには届いていた。覗き見をしてるようなアースラブリッジではどんな会話すら拾えるほどの超高濃度の音声マイクを常備している。
クロノがきっと叫んでいるだろうが後片付けくらいはしてもらおう。

「雷刃の襲撃者と電光の襲撃斧、バルニフィカス！」

雷刃が高く口上を述べる。黒い電光が空を駆け抜ける。

「黒い電撃か」

C．C．の声は届かない。だが何か言ってるのは唇の動きでわかった。

C．C．Side

空を見上げると黒い電撃が走り抜けている。
これはきっと貴重な光景だ。自然であるなら有得ない光景だから。

「ふふ・・・まったく。ユニゾンの重ね掛けとはな。たいしたタマだよ、お前は・・・」

常に同等の力を振るってはいたがそれも近接の話。空も飛べるがまだその時ではない。
とはいえいくら大聖杯の力でサーヴァントの力を引き出そうとあっちの力のほうが底力でいえば上だ。
それでいて私に押し勝てないというのはまだ力を使いきれてない証拠だ。
それを教えてやらねばならない。其れが私の使命でもあるわけだしな。
奴のデバイスに力が溜まっていく。電光と魔力が集束していく。
ふむ・・・集束砲か。実に実直で簡略。それでいて効率的。

「だが、それを喰らうわけにもいかないな」

回避の為に身構える。防御の盾が皆無な私では直撃されたら終わりだ。

だからこそ回避能力を高めてある。直接的な打撃系統の攻撃であればそれを打ち落とせるが。
砲撃となると少しだけ話が変わる。
純然たる砲撃であればそれを返す事もできない。
前回のミラージュの砲撃は出鱈目な砲撃だったからこそ返せたのだ。
今此処で純然砲撃がくるなら回避に専念しないと危険だ。
のんびりと言ってる余裕もないな。あっちもあっちで集束が終わる頃だ。

「さて、そろそろ行こうか。キャスター――――――」

ふわ、り。私は空に浮く。地上よりも空のほうが被害もなくてお前たちにはいいんだろう？
なら私はそれにのってやるよ。サーヴァントの力を持ちながら砲撃勝負を選ぶなら、な。

「　　神官（マキア）魔術式　　灰の花嫁（ヘカティック・グライアー）　　」

大魔導の準備を開始。あっちが砲撃の準備に入るがこっちは高速神言だ。後出しじゃんけんで勝利するようなものだ。
卑怯などと言うよりも勝てば官軍というだろう。

「灰すら残さずに――――――」
「闇・雷刃――――――」

ミラージュの準備と、私の高速神言が同時に終了する。
私の背後には無数のミッド式魔法陣。ミラージュの眼前には一つのミッド式魔法陣。
キャスターのサーヴァント・メディアの宝具級神代魔術。集束砲撃と対を成すならこれが一番の策だと思うだけだ。

一直線に放たれるミラージュの砲撃。
幾重もの魔法陣から放たれて目の前で集約して放たれる私の神代魔術。

「砲撃魔法と神代魔術のぶつけあいか。どっちが勝つのかな」
「俺が勝つ！」
「勝つ事しか頭に無いお前には負ける気がしないよ」

あくまでも勝利に拘り続けるならお前は其れまでの男だったというだけだ。
その先にあるものを見る事ができるなら・・・私が仕掛けた意味も出来る。
・・・まぁ、出来なきゃ困るんだがな。
魔法と魔術は燻りながら中央で衝撃を放ちながら留まっている。

「あのまま拡散したらフィードバックが凄そうだな・・・」

目の前でぶつかり合っている魔力が周囲に撒き散ればそれだけでも市街に被害は出る。
とはいえ結界を張ってあるなら問題ないか？

綾人Ｓｉｄｅ

まさか。まさかまさかまさか。
こんな手で来るとは！
あれはキャスターの魔術か！神代神言で来るとはな。ふん、恐れ入るよ、そこまでの魔力をまだ隠していたとはな！
俺の砲撃魔法を真正面から受け止める魔術が存在・・・いや、使い手がいるとなると管理局にとってはきっと頭痛の為になりかねない

な。まぁ、別にいいが。精々悩めクロノ。
だが、これで終わりと思うなよ。

「星光！」
「はい。星光の殲滅者とルシフェリオンが更にいきます」

ヴゥン、と俺と姿がブレる。現状でエルシニアクロイツにバルニフィカスがデータとして乗っかっている。
そこに更に星光がルシフェリオンがデータロードする。

「・・・・くっ。流石に肉体にダメージが帰ってくるか」
「主。時間が迫ってます。出来る限りの短時間決戦を」
「わかっている！」

焦りからかリィンフォースを怒鳴りつけてしまった。リィンフォースもこれには驚いた顔を見せた。

「いや・・すまない。気にしないでくれ」
「いえ、焦るのは判ります。ですが今は――――――」

リィンフォースの声が遠くなる。いや、掠れていく。
魔力運用と統制へ意識を集中しはじめたようだ。
それだけ灰の花嫁の威力が高いということか。俺も意識を集中してデバイスから魔力を通して砲撃に繋げていく。

「弾けたら回避。セイバー、そのときは直感で避ける方向を頼む」
「了解した」

セイバーに回避を頼む。その時には肉体の制御を頼んで無茶でも回避しないときっと後に響く。

中央でぶつかり合っている魔力が収縮していく。爆散の一歩手前の状況だ。

「――――一気に来るぞ！」

俺が声を上げると同時に魔力が爆縮して弾け飛ぶ。まるで小さな宇宙爆発のような勢いと余韻を残す。

衝撃波が球状に広がっていく。これは――――回避しようが無い！

「セイバー！」
「やってみます！」

セイバーに意識を向けると返答が帰ってきた、が・・・避ける場所など何処にも無い。
だがセイバーに体を預けると避けずにその場に立つまま動かずにいた。
いや、構えていた。

「エクス――――カリバー！！！！！」

約束された勝利の剣で衝撃を切り裂く。星降る輝きが剣から撃ち出されて衝撃に包まれた世界を斬る。
今いる場所から目の前の衝撃波が切り開かれていく。まるでモーゼの十戒のように。
斬り開かれた先の空間にはダメージを色濃く残したＣ．Ｃ．の姿。

「セイバー、ありがとう」
「いいえ。これくらい」

また姿をゼロに戻す。肉体的にはダメージは見られないが精神的・・・内面的なダメージがある。
無茶なユニゾン過多によるものと、強制的な肉体の変化。
顔には出さないが疲労の色は隠せないでいる。

「どうやらまだ、のようだな・・・・」
「あぁ。まだ生きていられる。こうやって――――――な」

ゆら、と揺らぐC．C．の体。だが魔法陣で足場を作るとそこに立つ。だがフラフラだ。

「フラフラじゃないか。それでもまやるのか」
「ハハッ。まだやるさ。それが私の役割だからな。お前がまだ得てない物を得る為なら――――――」
「――――――っな！？何を言ってるんだお前は！」
「だが、実際はどうだ。お前はそれを得ようとしなかった。今はどうだか判らないが――――――」
「何を言っているんだ！俺の話を聞け！」

あいつめ！この魔女め！自己完結で話を進めるんじゃない！

「・・・・俺が勝てば全てを話す、と。そう言ったな」
「・・・・あぁ。言ったな、そういえば」
「ならそこで語ってもらう！今此処で聞くことはもうない」

そう、全ては終わってから直接聞く。それが一番面倒が無くて良い。
だったら！この力の終極を見せる！

「C．C．！次の一撃で終わらせる！」
「いいだろう。私も次の一撃を最後にしよう」

互いに今もてる力を注ぎに掛かる。アースラが張ってくれた結界もさっきの衝撃波でぼろぼろだ。細かい所に皹が入っていたりする。結界の限度からしても次が最後。これで気まあ無ければあとはもう終わりだ。
だったら。今持てる考えられる一撃を叩き込むだけだ。

「リィンフォース。アレをやるぞ」
「了解。終極シークエンス発動」

C．C．Ｓｉｄｅ

最後の一撃か。あいつめ、先を見たか？
だがそろそろ決め手に欠けていたところだ。終わりにするなら終わらせよう。
灰の花嫁に騎英の手綱を載せるか・・・そのくらいしか手はないな。あっちはあっちできっと・・・ふん。いいだろう。こういうのも悪くは無いさ。

「魔力収縮。モード『灰（アッシュ）』」

再度、魔法陣を形成して周囲に出現させる。その数３０。
さぁ、これからが始まりだ。

綾人Ｓｉｄｅ

リィンフォースには伝えておいた最終の手札。

「皆の力を貸してくれ――――」

右手の聖剣をエルシニアクロイツで魔法結晶体へと変幻させる。コードエクスカリバー二重起動。

魔力変換：電撃付与。コードバルニフィカス起動。

因果歪曲：コード刺し穿つ死棘の槍起動。

幻弓に番う：コード錬鉄起動。

魔素集束：コードルシフェリオン起動。

足元にミッド式魔法陣形成。周囲に散らばった魔力が集まる。集束砲の応用で直接集めるのではなく、一度体内に収める。

「出番だ――――英雄王」

「ふん。やっと我の出番か。疾く我が力を披露しよう」

『ユニゾン・イン！』

王の財宝（ゲートオブバビロン）起動確認。

全ての原点を軍勢に展開。

「アーチャー。射出は任せる」

「心得た。任せてもらおう」

俺とアーチャーの幻影が重なる。

ギュルルルルルルリンッ！魔法結晶体となった聖剣が螺旋を作り出していく。

螺旋剣創生。魔素注入。

魔素起点、原点、終点回転開始。コード天地乖離す開闢の星起動。

螺旋剣となった結晶体に集束で集めた魔力を注ぎ込んでいく。
注ぎ込まれた魔力が先端、中央、根元で順、逆、順で回転していく。
「我が財、好きなだけもって行くが良い！」
王の財宝から打ち出されるのは全てが神話の原点になった神造宝具たち。
それらが魔力の筋として打ち出されて結晶体に螺旋に纏っていく。
「ふむ。偽・螺旋剣？といったところか」
アーチャーの声が聞こえる。
『準備完了まであと・・・・3・・・・2・・・・・1・・・・0。準備完了。発射シークエンス開始します。
アーチャー、射出準備開始』
「心得た」
アーチャーが螺旋剣を引き絞る。限界まで引かれた弓矢はキリキリと鳴きながら――――――
――――――――――――――――――――――撃ち放たれた。

???Ｓｉｄｅ

灰の花嫁と騎英の手綱をあわせた魔力砲と。
全てのユニゾンを遭わせた終極の魔力が。

同時に撃ち放たれた。

ミッド式魔法陣から打ち出された魔法は回転しながら３０全てが纏まって行く。
より回転は速くなり先端が鋭くなっていく。

弓から放たれた魔法は全てを突き抜けるほどに鋭く突き進む。

互いに存在を許させない魔法は突き進む先の相手を駆逐しようとする。
放たれた『弾丸』は一直線に己を誇示していく。
互いの先端が触れた瞬間に衝突音が音速を超える。次いで衝撃の波。
だがこれを撃ったお互いは動じない。堪えているわけではない。互いに意地でもあった。

「C．C．！お前に勝つ！」

「小僧がここまでやるとは思いも寄らなかったよ。私に勝ちたいと思わせたのは――――――実に久しぶりだよ」

互いに差し出した手が圧力を感じて押されていく。肘が折れる。抑えきれない程の魔力圧。

それでも。一歩も譲らない。

「俺は・・・・まだ先に進む。俺は孤独じゃない――――――待ってる人がいるんだ！」

「っ――――――！！！！」

綾人が押されかけてた手を、腕を伸ばす。

燻る魔法はそれに応じて押し込んでいく。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

それは8人の叫びにもなっていた。

ビキビキと体が鳴る。此処に来てダメージのフィードバック。

体に裂傷が走り刻まれていくがそれすら今は気にしない。気にも出

来ない。
今は眼前の相手を倒す事のみ。そしてその後に帰ること。それだけだ。

「答えは得た様だな――――――孤独じゃない答えを」

迫り来る魔法の光に包まれながらC．C．は誰にも聞こえる事の無い呟きをもらした。
その顔には満足げな表情を浮かべ――――――

「此処に連れてきた神の言う通りに奴に仕掛けて此処までやってやったぞ。満足か、神よ――――――ラ――――――ロク」

魔法の光はC．C．ごと周囲を包み、光り輝いた。
音も何もない。大きすぎる音はそれすらなくしてしまうのか。
半円ドーム状の魔法が地上を埋める。

「ハァッ・・・ハァッ・・・」

大きく肩で息をしながら綾人は現状を見る。
魔法の着弾点の地上は荒れ果てた。廃墟すらそこにはない。
その荒れ果てた大地に横たわる魔女――――――C．C．。

「やっ・・・・た？」

倒した。C．C．はピクリとも動かない。
その事実を見届けると綾人は満足したのか力なく空中からふらりと落下した。

アースラでを見続けていたクロノは直ぐに壊れかけてた結界を解除して直ぐに治療班を向かわせた。
結界を解除した後の街の状況の確認をしつつ綾人とC．C．の二人を保護してアースラへと呼び込んだ。

第三十八話　終結

アースラＳｉｄｅ

勝利した綾人を救助する為、クロノは直ちに救護班を向かわせた。
結界は既に破壊されており、戦闘を繰り広げた二人を確認する事は現地民ですら容易と言えよう。
故に即断即決。即行動。戦闘痕は凄まじいものがあり、結界により異相空間にしていたにも関わらず、被害が出ているほどだ。
戦闘の爪痕が如何なモノかが見て取れ、救護班に一末の不安を与えた。
直ちに戦闘を行っていた二名を保護して、アースラへと転送した。
残った人員は地上の崩壊部分の修正に残った。

「しかし・・・改めて凄まじいな」

クロノが先の戦闘のデータを見ながら呟いた。
その脇に待機するクロノの補佐官であるエイミィも何度見ても驚きを隠せない顔でデータの収集に勤しんでいる。

「いやぁ・・・今主流になってるミッド式から考えるとユニゾンっていうのがまず今はもう廃れたベルカ式。しかも古代の。
そんな魔法体系の中であんなユニゾンをしてるのなんか類を見ないねぇ」

エイミィのコンソールを叩く音が静かに響く。
現在管理世界で主流になっているのは遠隔、砲撃を主体としたミッ

ドチルダ式と呼ばれるもの。
それに対して同じほどに主体であったがその気難しさからか廃れていってしまったベルカ式。
ベルカ式が闊歩していたのも既に歴史の中なので今は古代ベルカ式と呼ばれる事もある――――
その中でも郡を抜いて性能を誇示していたのがユニゾンと呼ばれる技法。
デバイスと一体化して力や性能を底上げするという方式があった。
だがそれも研究途中でベルカ式と共に廃れていってしまった。

そして――――城戸綾人が有したデバイスがユニゾンデバイス。
更に先の戦闘では古代文献では不可能ともまで言われた複数同時ユニゾン。
謎は尽きない。何故彼が。まだ幼い容姿の彼がそんなものを持て得ているのか。
だが今は机上の空論になってしまうだけ。彼の目覚めまで待つしかない。
もしそれがロストロギアであるならば・・・あのユニゾンデバイスたちを封印指定しなければならないのか。

「流石にまだ起きないか・・・」
「救護班が転送してまだ一時間も経ってないよ。まぁ・・・さっきは異常に早すぎたんだよ」

サブモニタには救護室で治療を開始した綾人の姿が映し出されている。
一度目の撃墜から数十分で魔力と体力の回復が見えた。いや、強制的に回復していた感が見えた。
そして今回の連続の撃墜・・・いや、正確には撃墜ではないのだが。

「綾人のほうはゆっくりしてもらおう。問題はもう一人だ」
「えっと・・・C．C．って呼ばれてた子だね」
子、と言っても実際にはエイミィと変わらずか少し上くらいに見える。
上司の親である最上司・・・艦長であるリンディ＝ハラオウンと同じ緑色の髪の毛の女性。
今は個室でサーヴァント達に話があるからと隔離されているらしい。
確証がないのは確認が出来ないからで此方としては明確に見えたほうがいいんだけどなぁ、とか呟いたものだ。
「それは仕方ない。あっちはあっちに任せて僕たちは僕達の出来ることをしておこう」
「だね」
モニタウィンドウに映る映像を見ながら解析とデータ収集に更けるメインブリッジ――――
セイバーＳｉｄｅ
マスターがアースラから宛がわれた部屋に今、私達は居ます。
私達サーヴァントとマテリアルたち。そしてC．C．。
私達は立っているというのにC．C．はソファに座って寛いでいます。ぐぬぬ。
ちら、と他のサーヴァント達に目配せをして私が代表することになりました。

「さて。何か言うことがあれば聞こう」
「何を言うかと思えば。私からは特にはない。そっちから質問すればいいだろう」

あぁ、それもそうだ。向こうが何も言わないなら此方から聞けばいいだけの事でした。
それならば、と前々から感じていた事を幾つか頭の中にピックアップする。最重要からたいした事のないものまで。

「・・・質問は幾つまでがいいでしょうか」
「時間はいくらでもあるだろ。好きにしろ」
「では」

そう言われればピックアップした質問の幾つかを頭に残す。
周りもそのようだ。だが何人かはまだ考えている最中のよう。

「まずは私から質問です。いきなり核心をつく事になりますが――貴方は何者ですか？」
「はっ。いいなその質問。この質問攻めになる中で一番の質問だ」
「御託はいいですからとっとと答えてください」
「あぁ、そうだな。じゃぁ応えよう。私はアイツだ。そしてアイツは私だ」
「言葉遊びに付き合うつもりはっ・・・」
「いや、これは言い得て正解なんだ、セイバー。今も言ったように私と奴はその言葉通りに一身同体なんだよ」

どういう、事だ。まさか一線をｋ「セイバー。戻って来い」・・・・・むぅ。アーチャーめ。
仕方ないので気を取り直す。咳払いを一つして平然を装う。

「――――どういう意味か、説明願いたい」
「説明も何も。言葉通りだといったただろう？それとも未通女には理解できないか？あぁ、お前は男として育ったのだったな。それは悪かったよ」
C．C．がクスクスと笑いながら私を莫迦にする！
「セイバーの質問に便乗するが、一身同体というのは何故だ？少なくとも我々四人はある特別な状況で召還されているわけだ。そういうお前なら理解できるだろう？」
「アーチャーか。まぁ、お前たちのことは聞いていたよ。だから私が大聖杯であることも教えたんだからな。あいつらと闘ってお前たちは前に進む事ができたようだし、それはいいんじゃないか？」
「――――――答えになってない・・・」
のらりくらりと質問を流されてる気がする。答えたくないのか、遊んでるのか・・・
「遊んでるに決まってるだろう」
「心を読まないでほしい！？」
くっ・・・遊ばれてる。
「まぁいいだろう？どうせアイツは後一ヶ月は起きない。なら少しくらいは遊ばせてくれたっていいだろう」
「なん・・・だと？」
今なんと言った。

「あと一ヶ月だと？」
「あぁ。後一ヶ月は起きない。体力や魔力は回復しても精神までは回復できない。これぱかりは自然治癒だ」
「いや、しかし・・・・」
「あれだけの魔力やらを使ったんだ。廃人にならなかっただけでも儲けモノだな。まぁ、その時には私が主人格になるんだろうが」
「貴方は何を言っているんだ！」

私はつい怒りで魔力を弾けさせる。それでもC．C．はなんともない涼しい顔でいる。
好い加減ちゃんと答えてもらわないと私の頭がヒートしそうです。

「だから何度も言うが。私と奴は同じ存在なんだよ。表裏一体？まぁ、そういうやつだ」
「なるほど。同時存在という奴だな。あぁ、セイバー。考えるのは私達でやるからお前はそこで堂々としててくれ」
「なんだかアーチャーの私に対する扱いが酷いです！」
「気のせいだよ、セイバー」

むぅ。なんだか袖にされてますが。ともあれ、C．C．を更に小一時間ほど問い詰めます。

「して・・・貴方がマスターと同じ存在というのは納得はいきませんが理解はしました。
では次の質問です。大聖杯といいましたが・・・」
「文字通り私に大聖杯がある。だからお前達以外のサーヴァントを呼び出したんだ。第五次聖杯戦争の面子が此処にいるから相対するのは丁度いいだろう？」
「いやいや、そうでなくてですね？」

「いいセイバー。私が聞くからお前はあっちで大福食べててくれ」
・・・・アーチャーが指さしたほうにはイチゴ大福が置かれてました。ふむ。いいでしょう。
「――――今回だけですよ？」
この場はアーチャーに譲りましょう。私は仕方なくイチゴ大福へと向かいます。

アーチャーＳｉｄｅ

「さて。話が進まんので私が変わりに聞こう」
「あぁ、構わないよ。大聖杯の話だろう？」
「あぁ。君はそれを何処で手に入れたのかが知りたい」
「それは簡単だ。私も逢ったんだよ。あの白い空間で」
「――――それ、は・・・・・」
あぁ。それだけで理解した。成る程、確かにそれなら全てが繋がる。つまり、あの存在とであったわけだ。
そしてマテリアルたちが置いてけ堀だ。あとで説明してやろう。
「まぁ、私の場合は奴とは違うがな。大本の魂の部分は違う。だが根幹は一緒という訳だ。
大聖杯はそのときに教えてもらったがこの力は凄いな。暴走しないようにはしてもらったが」

それはそうだ。何の見返りもなしにアレを持ち得ていられる等考えられん。
大聖杯だったイリヤと桜に申し訳が立たない。

「今も私の中にはキャスター、バーサーカー、アサシン、ライダーがいる。大聖杯の暴走をなくして英霊の召還を可能にしたわけだ」
「それがお前に与えられた力、というわけか」
「そうなるな」

C．C．は座ったソファに凭れ掛かりながら足を組みかえる。

「で？あとは？」
「大聖杯に還った四人はもう現界はしないのか？」
「いや、しようと思えばできるが、魔力を使う。そう何度もポンポンとは出来ない」
「そうか」

まぁ、それで更に召還が何度も可能というなら反則を超えているが。だが魔力があれば出来る、とも言っていた。今は枯渇に近いくらいまで減少しているそうだが。

「ふぅ。で、あとは？」
「いや、特にはない。大体把握はしたからな。お前の事さえわかればあとはいい。マスターも一ヵ月後には目覚めるんだろう？」
「あぁ。それは間違いない。お前達の無理矢理なユニゾンで精神が来してるだけだからな」
「了解した」

私が聞きたい事は聞いた。

「他にいるか？」

周りを見渡す。が、其処に次の質問をするのはいなかった。
若干話を聞いてない王様二人がいるがまぁ、よしとする。

「セイバー。イチゴ大福だけでなくこっちの鯛焼きもどうだ？」
「む、ギルガメッシュ。貴方は何が目的なのです！」

あ、殴られた。

「あぁ、Ｃ．Ｃ．。君の処遇はこのアースラの艦長から決定される。じきに呼ばれるだろう」
「あぁ、了解だよ。アーチャー」

足を組んだまま手をヒラヒラと振って答えるＣ．Ｃ．。
まぁ、情報はある程度持ち得てきた。一度報告に行くか。

そしてＣ．Ｃ．がリンディから呼ばれるのに時間はそう掛からなかった。

星光Ｓｉｄｅ

元マスターが座っているその傍らに王と雷刃とで立っています。
会話はしませんが居ます。存在感が薄いので仕方ありませんけどね。
なので質問は？と振られても私達からは何もないのですよね。
強いて言えば何故私達だったのか、という事。マテリアルとしてこ

の世界に生まれたその訳が知りたい。
ですが今は沈黙の時。雌伏の時です。
雷刃が暇を持て余しているので少し相手をしております。王に措かれましては話を聞くに留めているようです。
私と雷刃で邪魔にならないように角のスペースで遊具コーナーを作って遊んでおきましょう。
・・・こうして遊んでいても話の主体は掴んでいるのが「理」のマテリアルの真骨頂です。
後であの紅い人と情報交換いたしましょう。

リンディSide
綾人君が治療に入り、C．C．さん？が今尋問の為にセイバーさんたちと話をしている。
それが終われば報告がくるので自室で待機です。
ブリッジの方は自慢の部下たちが頑張っているので、今は小休止ということでほんのちょっとだけ休憩中。
夜天の書事件からずっと休む暇もなかったので、手が空いたクルーは順番に休憩を取るように指示を出しておきました。
お茶を飲みながら今までの事、これからの事を考える。
なのはさんたちのご家族への挨拶もある。夜天の書事件で巻き込んでしまったというなのはさんのお友達への対処。
やる事は尽きる事がない。色々な事が頭を巡る。

「艦長。此処にいると聞いたが」

あら。扉の向こうからえっと・・・確かアーチャーさん。

「はい。どうぞ」

私は中へ、と促す。すると扉は音もなく開き、其処には赤い服装の男性が立っていた。

「あぁ、休んでいたか。すまないな、報告にきたのだが時間をずらしたほうがよかったかね？」

「いえ、大丈夫ですよ。さ、どうぞ」

二回目の招きにアーチャーさんは部屋へと入る。席まで促したのだけど入り口付近で止まり、「ここでいい」と。

「で。報告は書面がいいかね？それとも口頭が言いかね？」

「出来れば両方で欲しいところですけどね。今は口頭でお願いします」

「了解した。なら後で書面とデータで作成しておこう。あぁ、その前に君達の言語をまず理解しないといけないがな」

くく、と含み笑みを浮かべるアーチャーさん。なんだか腹黒いわ。

「そんなことはない。さっさと始めよう」

なんというか。この世界の人は読心術を習得してるのが多いわ。

ともあれ、言語体系が違う以上、習得は大変ですけどね。此方もこの管理外世界の文字を勉強しないといけないし。お互い様。

「此方で纏めたものだから其方の欲しい情報全部があるわけではない、というのは先に言っておく」

「えぇ、それは大丈夫です。足りない分はまた後で追加してもらい

ますし」
「抜け目ないな」
アーチャーさんが肩を竦める。私はそれにクス、と笑み。
「では報告を開始する」

ランサーＳｉｄｅ

セイバーとギルガメッシュは大福だのこれは譲れないだの言ってる。
アーチャーはここの責任者に報告に行った。
こっち側のサーヴァントは全員何かしらしている。俺は壁に寄りかかったまま愛槍を抱いて眼を瞑ったままだ。
闘う事を主流にしてきた俺にこの平穏はなんとも、だな。まぁ・・・釣りだのバイトだので時間を有効に活用していられるならいいんだけどよ。
マテリアル、だったか。嬢ちゃんらは・・・遊んでるな。しゃぁねぇか。まだ（見た目は）子供だしな。
しかし、あそこまで魔力を放出しておいて俺らは無事ってのもすげぇよな。
それだけあのリィンフォースの姉さんの統制が上手かったってことかね。
リィンフォースの姉さんは表に出るのを極端に嫌がる。まぁ・・・・元の契約主がいるんじゃ逢い辛いか。
そこん所どうするんだろうかね。うちのマスターは。マテリアルとも。

「ん?そういやえーっと・・・C.C.?」
「ん?なんだ駄犬。躾けて欲しいのか?」
「ちげぇよ!なんでそうなんだよ!?」

開口一番毒舌ですか!なんか嫌な過去を思い出すぜ・・・ん?俺が額に脂汗・・・だと?

「あんた、ここにずっといるつもりか?」
「そうだな・・・暇だし、暫くは居るつもりだよ。なんだ?寂しいとでも思ったのか?」
「んなわけねーだろ。うちのマスターが、あのマテリアル嬢ちゃんらのパス回路をあんたから切っちまったからな。其処ん所どうすんだろうなって思っただけだ」
「ん?それは問題ないだろ。それでもミラージュに繋がってるならアイツから魔力を貰えばいい。寝てるとはいえ、生きてるんだしな」
「えげつネェな・・・んじゃぁ、あんたはもう一度つなげる気はないってわけか」
「もう一回つなげる必要性がない。今のままでいいだろ。アイツもそれを望んでのことだろうし」

なるほど。しかし・・・こいつもマスターをミラージュって呼ぶんだな。
マスターで城戸綾人でミラージュ=ヴィジョンでゼロで。ナンなんだろうな、あのマスターは。

「あいつはあいつさ。他の誰でもないさ」
「・・・まるで判ってるような言い方だな、姉さん」
「当然だ。私はC.C.だからな」

いや、よくわからねぇよ。ともあれ一ヵ月後に起きるっていうなら

それでいいさ。起きなければ殺すだけだ。俺の槍で。
C．C．は知ってか知らずかソファに座ったまま会話を閉じた。口元に薄い笑みを浮かべて――――。

アーチャーSide

「以上がC．C．に関するデータ報告だ」
C．C．の情報を纏めた報告をリンディ艦長へと提示する。
「ありがとう。ではこの情報でC．C．さんの処遇を決めたいと思います」
「あぁ。出来る限り誰も傷つかない方法を求めるよ」
「えぇ。出来る限り」
ならばもう此処に用はない。
「では私は戻る」
「はい、ありがとうございます。それと――――一つだけお願いがあるのですけど」
「ふむ、なんだ？」
随分と勿体振るな。扉に向かう一歩を止めて振り返る。

「皆さんも嘱託魔導師に、なってみません？」
「――――――驚いたな。まさかそういう誘いとは・・・」
嘱託魔導師・・・確かあの三人のうち、ナノハとフェイト、だったか。それだと名乗っていたはずだ。
「しかし私達はまだ其方の世界のあり方などを理解していない。何よりも、実際まだ貴方達を信用しているわけではない」
「・・・うーん。手厳しいですね。ですが力をお貸し頂ければ、と思っています。人手が足りないのは何時もですから・・・」
「それならうちのマスターを誘えばいい。私達はマスターの意思により動くだけだ」
「・・・判りました。では、このお話はコレで」
「あぁ。よい返答でなくてすまないな」
リンディが首を横に振る。それだけを確認すればもう振り返らずに扉を抜けて部屋を出た。

なのはＳｉｄｅ

黒幕（？）のＣ．Ｃ．さん・・・ってお姉さんが投降っていうか、アースラに保護されたという事で事件は一先ずの終結を迎えました。
でも、全力を出しすぎた綾人君はまだ起きません。
この事件については、もう私達には手が出せない部分が多くなって

きたって事で、クロノ君に後をお願いして私とフェイトちゃん、はやてちゃんで地上に降りていました。
もう昼過ぎ。もうすぐ夕方になりそうな時間。

「しっかし・・・綾人くんには毎回驚かされるわ。あんな手を持ってたやなんてなぁ」
「うん。でも、魔力を使い果たしちゃったから・・・回復するまではアースラの治療スタッフがずっと診てるんだって」
「心配だよね。私達地上に降りてきちゃったけど。でも私達に出来ることがあればしますってクロノ君にも言ってきたし。大丈夫だよ」

三者三様、やはり心に引っかかる。何気ない会話をしてても特にはやてちゃんの顔色が悪い。
はやてちゃんが私達の中では一番綾人君との付き合いが長い。特に今はシグナムさんやヴィータちゃんがアースラに残ってる為か不安もあるみたい。
今は私とフェイトちゃんで元気付けなきゃ！

「はやてちゃん。綾人君が戻ってきたら寝てる間に楽しい事一杯してたんだ！って。寝てるの勿体無かったって思えるくらいにお話いっぱいしよう！」

ぐ、と両手を握って力を篭めて力説する。ふんす、とか鼻息が出たかもしれない。
あ、フェイトちゃんがちょっとヒいた。でも私負けないよ！

「それを毎日伝えに行くの。悔しくて悔しくてすぐに起きちゃうよ」
「・・・そやね」

薄い笑顔。やっぱり無理してる。何とかできないかな・・・。

私でだめならフェイトちゃんと一緒に。それでもだめならアリサちゃんやすずかちゃんもいる。
一人じゃないよ。独りじゃないんだよ。だから一人で溜め込まないで。
あぁ、そうだ。ちょっと遅れちゃったけど丁度クリスマスパーティで皆集まるから、其処で二人にも話をしよう。
魔法の事も話さないと。綾人君、の事も。
それとは別にリンディさんは私の家にも来てくれる。
お父さんやお母さん、お兄ちゃんお姉ちゃんにも説明するには私だけじゃ、って事で。
まずはパーティ。そこでアリサちゃんとすずかちゃんに話す。
まずは最初の一歩から始めよう。

このままアリサちゃん家に行って、パーティをして。二人に魔法のこと、綾人君の事を話す。
ありさちゃんは驚いてた。質問も何度か繰り返して話し合って、判ってもらえた。
すずかちゃんは、何だかあんまり驚いてなかった気がした。
綾人君の事も何だか判ってた様な感じで・・・質問も魔法や綾人君にではなくて私やフェイトちゃんに。
クリスマスから少し遅れた今日。やっと私達はパーティをした。
それでも――――心に何かもやもやしたものを抱えて。
納得のいく終わりを得られなかった今回の事件。
出来れば・・・ちゃんと納得いくように解決したい。一人の力じゃない、みんなの手で。

パーティが終わってからフェイトちゃんに付いて来て貰って、お父さん達にお話をする時間が来た。
家の前で待ってるとリンディさんが来てくれたので「ただいま」と言って中へ。

リンディさんとは顔見知りになっていたので、フェイトちゃんが一緒なのも効いたのか家に上がって貰う。
そこでやっと、リンディさんから詳しい事情の説明が始まった。
私はあんまり詳しくないので、リンディさんに任せっきりの説明になっちゃったけど、私の思いを全部ぶつけた。
もしかしたら初めてかもしれない。真剣に話をしたら解って貰えた。
・・・お兄ちゃんもなんだか魔法に関しては解ってたみたいな顔だった。
ただ、私が関わってるって事には驚いてたけど。
でも最後には理解してくれて、嬉しくて嬉しくてお父さんに抱きついちゃった。

今日はとっても嬉しくて。そして悲しくて。辛くて。
フェイトちゃんに頼んで一緒に今日はお泊りしようってお願いして、リンディさんとお母さんに許可を貰って、今夜はずっとフェイトちゃんとお話してた。

第三十八話　終結（後書き）

サブタイがアレですがまだ続きます。

第三十九話　そして日常へ

フェイトＳｉｄｅ

「お正月に合同で家族旅行？」
「うんっ！」

なのはの家に遊びに来てた私はなのはからそんな事を言われたのです。
なのはの声に私は鸚鵡返ししてしまった。どうやらみんなで旅行に行きたいらしい。

「アリサちゃんちとすずかちゃんち。フェイトちゃんとリンディさんたち。で、私高町家！それとアーチャーさんたちで！」

ぱぁ、と笑顔で言うなのは。どうやら少し前から・・・私達が魔法を使う存在だとカミングアウトしてから考えていたみたい。

「みんなにはもう？」
「うん、電話とメールで。みんな大丈夫だって。今、おとうさんたちが打ち合わせしてくれてる」
「そっか。楽しみだね」
「うんっ！」

凄い良い笑顔です。ごちそうさまです。そういえば向こうで士郎さんたちの気配がする。
多分、道筋とかの準備だろう。何せこれだけの人数なのだから車も数台になる筈。
それならきちんと先に走る道を決めておけば、信号などで離れてし

まっても大丈夫だ。
「冬といえばみかんだよ」なんてなのはが言っているのでコタツでみかんを食べている。
皮を剥いてコタツに突っ伏してるなのはにあーんする。

「なのは、あーん」
「あーん」

むぐむぐ・・・ごっくん。
・・・・・っっ！！！

なん・・という破壊力。

「なのは。私ずっとなのはのこと護るから！」
「え？・・・・う、うん。ありが、と？」

きょと、とするなのは。私は鼻息が荒くなってるのにも気付かずにガッツポーズをとっていた。

なのはＳｉｄｅ

コタツに突っ伏したまま、ごろごろと惰眠を貪っていた。
夜天の書事件の解決により休暇を貰ってフェイトちゃんと家でのんびりしている。
隣側にはフェイトちゃんがみかんをむいてる。まだ慣れてないらしくてちょっと不器用にむいてる。

「お正月に合同で家族旅行？」
「うんっ！」

兼ねてから考えていた案をフェイトちゃんに言ってみた。
きょと、とした顔で私を見るけど大体の意味は理解しているはず。
何よりも皆との親睦を深めたい。魔法に関わってこれだけの人に出会えて。皆仲良くなれればもっといいなって。
お父さんに言ったら「じゃぁ、運転は任せてくれ」って張り切っちゃった。
すずかちゃんちのメイドさんやらと今、旅行の下見と往復の道決めを話し合ってる。
綾人君がまだ起きないけど、一応アーチャーさんに話してみたら行ける面子が居れば行く、って言ってくれたので。
アーチャーさんとはたまにお話してる。セイバーさんとも。綾人君のほうは皆がアースラに残ってリンディさんとお話中。
お正月はアースラのスタッフさんも休暇が取れるって言うので誘ったら二つ返事でＯＫしてくれた。
あぁ、はやく時間経たないかなぁー。楽しみでしょうがないよっ。

「みんなにはもう？」
「うん、電話とメールで。みんな大丈夫だって。今、おとうさんたちが打ち合わせしてくれてる」
「そっか。楽しみだね」
「うんっ！」

フェイトちゃんがむいてくれたみかんを見てたら食べさせてくれた。
おいしい。
むぐむぐ・・・あまい・・・ごっくん。
コタツにはいったまま顎を乗せてむぐむぐしてたらフェイトちゃん

がなんか鼻息荒くしてみてる。

「なのは。私ずっとなのはのこと護るから！」

「え？・・・・う、うん。ありが、と？」

え、ぁ、うん。なんだかしらないけどフェイトちゃんが固い決意を口にした瞬間だった。

アーチャーＳｉｄｅ

アースラのレクリエーションルームで私の対面に座っているのは銀色の騎士セイバー。

私の淹れた紅茶を飲みながら今後の事について話し合い中だ。

リンディ艦長から嘱託魔導師にならないかと誘われた旨を説明する。

結果――――私はこういう結論を出した。

「私は管理局に与する。あぁ、私だけだ。お前たちは今まで通りでいてくれ」

「それが貴方の考えですか」

「私個人で決めた事だよ、セイバー。なによりも――――これから組するにせよ敵対するにせよ相手は理解しておいたほうがいい」

「そうですが・・・マスターがおきてからでもいいのでは、と・・・」

「その前に幾らか情報は掴んでおきたい。私の正義が此処に有るのならそれでもいいが、無ければ――――」

其処までいうとセイバーも私も黙る。

時空管理局に正義があるというならそれでいい。だがないと判断す

ればそれは仕方の無い事。
その際には敵対も有り得る。第一、正義の定義が個人によるものならば齟齬も発生するものだが。

「何も賛同する必要はあるまい。これは私だけでやる。お前たちはマスターの傍にいろ」
「・・・アーチャー」
「なに、問題は無い。お前たちに負担はかけん」

音を立てて席を立つ。少し乱雑すぎたか。セイバーとしてはまだ気懸かりがあるのだろう。
下を向いたままでこちらを見ない。第一汚れ役は己の領分だ。
陽の目を見るセイバーやギルガメッシュには似合わぬ。

「決定事項だ。とはいえ――――暫くは此処に世話になるわけだし別段何処ぞへ行くわけでもない。淋しいとでも思ったのか？」
「っな・・・莫迦をいうんじゃありません！」
「なら重畳だ。なにより。お前たちでは闘う事しか出来ぬだろう。斥候やらは私のスキルのほうが役に立つ」
「ですがっ・・・」
「無理はせんよ。もとより無理というのはできない事をいう。」
「なら無茶はしないように。一応は同じサーヴァント。同じマスターを持つ仲間、という括りですから」
「ふっ。了解した」

等とくつり笑いながら冗談めく。セイバーは顔を真っ赤にして反論しつつも・・・くくっ、こういう挑発にはいつも弱いものだな。
しかし仲間、か。嘗て殺し合いをした間柄の仲間とはな。いつ背中を斬られるのかと気が気ではない。いや・・・あの時もそうか。

「なに、別に遠くに行くわけではない。別段私のほうがここの魔術形式と似通った部分があるからおちうだけで選ばれたに過ぎん。
それに・・・マスターにも何か考えがあるみたいだしな」
「えぇ・・・その時には私達が全力を出して手を貸す限りです」
「その時には私も手伝おう。さて、この話はコレで終わりだ」

くくっ。本当に心配性だな。いや・・・彼女のスキル「直感」が私を危ぶんだか？
それならそれできっと望むものがあるのだろう。
此処で燻っているよりは――――――救える命が此処にも有るなら私はそれを救い続ける。

「では暫く留守にする。マスターが起きる一ヵ月後か。そのくらいには戻ると皆には伝えてくれ」
「了解した。ご武運を」
「ふっ・・・誰に言ってる」

自分の分のカップを片付けに席を離れる。そのまま私はセイバーを置いてレクリエーションルームを後にした。

セイバーＳｉｄｅ

アーチャーと別れてから自室へと戻る。自室と言っても大部屋。しかも私達サーヴァントやマテリアルが所狭しと居る為にプライバシ

ーは無いといえる。
扉を開けて中へ。

「戻りました」

誰にとも無いが挨拶をしてパーソナルスペースへ。この部屋の中で各々必ず自分のスペースを作り出していた。
私はテーブルの中央付近の席。其処に座ってお茶を一つ。各々が好きな事をしている中、さっきの会話を思い出す。
恐らくは何か考えているのだろう。深くは詮索しなかったがあのアーチャーの事だ。
嘗てのマスターの一つの到達点であるアーチャー。斥候として侵入するのなら恐らくアーチャーやアサシンが一番なのだろう。
そしてアサシンが居ない今、可能なのはアーチャー。ランサーは・・・恐らく隠れるという事が苦手だろうし。
それで時空管理局の今を知ることは出来るだろう。マスターが起きるまではアーチャーの先行潜行しか手が無い。
今の眠り続けているマスターの傍からはなれるわけにも行かない。
C．C．の事もそうだ。私は何か任せておけない感がひしひしと感じるわけで。

「私は何もしないぞ？そしてピザもやらん」
「心を読まないで戴きたい！しかしそのピザはほしい！」
「やらん」

隣の一人用ソファに座ったままピザを食べてるC．C．。みにょ～～んとチーズを伸ばしながらピザを食べている。
よく観察すると大体寝てるかピザを食べてるかのどちらかだ。なんという体たらく。

「いや、お前さんも大概だよ？」
「ランサーが裏切りました！」

酷い！ランサーがついに私を裏切りました！
くっ・・・・まさかランサーまでもが。

「お前は俺たちに何を望んでいるんだ」
「別に何も」

私がランサーに求めているものなどありませんよ。と、ギルガメッシュが近づいてきました。超警戒です。

「あまり警戒しないでくれセイバー。流石の我でも凹む」
「なら近づかないでください。汚物」
「相変わらずのセイバーの酷さに我大興奮！」

・・・英雄王が知らない方向に突っ走ってました。同じ英雄、同じ王として情けなくも感じてしまった。
4分程してから英雄王が復活しました。しなくていいのに・・・・。

「そういえば――――贋作者（フェイカー）と話してたのではないか？」
「えぇ、その事ですが。アーチャーは一人で動くそうです」
「ふん。小回りの聞く影薄そうな奴の事だ。此れで失敗したら笑いものだぞ」

ギルガメッシュがアーチャーのことについて聞いてきたので答えます。
きつい事を言いながらも心配はしているようです。こんな我が物顔でも。
話を終えればギルガメッシュも自分のスペースへと離れていきます。

兎も角大所帯になりましたね。少し考え物です。
流石に寝場所などは霊体化すれば必要ないとしても今度部屋を分割させましょう。

はやてＳｉｄｅ

今日は本局にいって守護騎士の皆の検査と面接で付き添いや。ついでに私のことも検査してもろとる。夜天の書も一緒に。
バージョンアップさせる為に技術局に預けてあるから今の私は何もできひんけど。それでも守護騎士の・・・家族の傍に居れる。
検査も終わり今は面接の順番待ち。シグナムから始まってシャマルヴィータザフィーラと順番に消化していく。

「主はやて」
「はやて！」

その声はシグナムとヴィータ。面接が終わって真っ直ぐ来てくれたんか。
車椅子の私はヴィータの抱きつきを抑えつつ頭を撫でて二人に笑みを向ける。

「面接も終わったみたいやね」
「はい。滞りなく。シャマルとザフィーラは技術局に呼ばれて後から合流の予定です」
「そか。今日はこれで終わりやそうやし、久しぶりに地上に下りてなのはちゃんやフェイトちゃんとも会いたいな」
「えぇ。最近あわただしかったですから是非御緩りとしていただけ

れば」

ヴィータが離れてシグナムと目配せをしてからヴィータが車椅子を押してくれる。どちらが押すのかアイコンタクトしたようや。

「はやて、このくらいのスピードで大丈夫？」

「えぇよヴィータ。風がきもちえぇわー」

風切る速度、という程やないけどそよそよと気持ち良い風が当たる。時折擦れ違う職員さんの邪魔にならないように進んでいくと、曲がり角でシャマルとザフィーラが待っとった。

「はやてちゃん。お待たせです」

「お待たせしました、主」

「シャマル、ザフィーラ。技術局のほうはもうえぇの？」

「はい。今日の夜天の書の検査も終わったのでお持ち帰りです」

シャマルの手には闇の書・・・夜天の書があった。金色の剣十字が施されたロストロギア。

「今のところはロストロギア認定はされてても危険は無いようです、って事で主であるはやてちゃんに、って」

「そぉかぁ。よかったなぁ」

シャマルから夜天の書を渡してもらって膝の上へ。四人で本局の廊下を歩く。

「そういえば」

話を切り出したのはザフィーラやった。

「主、ケイタイというものが使えるようになったから、と技術局からの伝言です」
「え、使えるようになったんか。んじゃぁ、早速かけよか」
勿論相手は今一番の親友とも言えるあの二人へ。
「ｔｒｒｒｒｒ・・・・・ｔｒｒｒｒｒｒｒ・・・・・」
何度目かのコールで応答があった。
「はい。もしもし？」
「もしもし？はやてですー」
電話の相手はなのはちゃん。いつも元気な声や。
「あれ？はやてちゃんいまどこから――――」
「今本局！ケータイ通じるようにしてもらったんよー」
あ、あかん。なんか顔がにやけてまうわ。友達と喋るって事がこんなに楽しいなんてなぁ。
ヴォルケンリッターは家族やし、こういう気持ちとはまた別やけど。
「ほんでなー、うちの子たちはこの後まだ時間掛かるんやけど私はそっちに帰れそうやからよかったらお昼どうやろかーって」
「あ、ほんと？じゃぁフェイトちゃんも一緒だ」
「ん、多分一緒やないかと思った。ほんならー・・・・後一時間後にわたしんちでどーや？」
「うん、わかったよ。じゃぁ何か持ってこうか」
「あははー、えぇよそんな気ぃ使わんでも」

他愛のない話。たったそれだけでも楽しい。嬉しい。
でも・・・あの人はおらん。あぁ、ダメや。あかん。顔に出てしまう前に隠さんと。

「よっし。今日はなのはちゃんとフェイトちゃんも一緒や。いっぱい騒いだろー」

パチン、とケイタイを閉じる。

「みんなはこれから第二試験やな。マスターの私は一緒におる事出来ひんけど大丈夫か？」
「大丈夫だよはやて」
「せやけどちょぅ心配や。みんなひとりで大丈夫かー？」

なんやろう。一人で学校に行かせる母親みたいな思い。

「大丈夫だよ。ちゃんと真面目にやるからさ」
「・・・そうなんやけどな・・・・・皆がしたのはちゃんとした罪や。せやから皆でちゃんと背負って償っていかなあかん。
一人の罪はみんなの罪や。私も一緒に背負っていく。迷惑かけた人らに背筋ピンと伸ばしてちゃんと謝ろ」

今までの事全てを背負うのはまだ時間も何もかもが足りないけど。
それでも最後の夜天の王ならその全てを背負うべきや。

「そんでその後はお仕事も一所懸命や。ずぅっとみんなでいられるようにがんばろ」

ぐ、と拳を作って元気だす。その拳にヴォルケンリッターのみんな

が合わせてくる。

「大丈夫だよ。はやてと一緒だから私達はもうまよわねー」

「ヴィータの言うとおりです主はやて。私達は最後にして最高の主に仕える事ができたようです」

「最後の夜天の王の家族に恥じない働きをみせますよ、はやてちゃん」

「主と出会えたからこそ今の我らが居る。心を閉ざし役目の為にしか動けなかった我らを解かしてくれたのは貴方だ」

四者四様。４人ともが順番に私に礼をいってから二次試験へと向かっていった。

姿が見えなくなるまでこの場で見送る・・・てかもう。これは反則やろ。涙が止まらんやんか。

「家族ななんやから当然やろ。みんな護ったるわ――――――」

それは決意や。此れから先に進んでいく時に必要な楔。私の中でずっと生き続ける言葉。

あの子が・・・リィンフォースが居なくなって家族を失う事がどんだけな事か理解した。

父も母もおらん私にとって、ヴォルケンリッター達が私の家族。もう失いたくは無い。

あのひとも・・・綾人くんも私にとってもう家族も当然や。なのはちゃんもフェイトちゃんも。

夜天の剣十字に誓って生涯貫き通そう・・・・大事な人を護り続ける、って。

――――――あぁ、もう。なんやこれ。滅入った気持ちはあかんあかん！私らしくないわ。

気を取り直していかな。この感情のままでなのはちゃんたちと会え

へんわ。
一時間後には来るって約束やからはよ帰って準備したらんと。
転移装置で私は第９７管理外世界・・・現在アースラが常駐している地球へと戻る。
親友たちとの食事を楽しみに。
さぁ、何をつくろか。

第四十話　見学

アリサＳｉｄｅ

今日はなのはとフェイトに誘われて魔法を見せてもらいにアースラ？に来てる。
なんでも今日、ここで模擬戦？をやるんだって。
なんで？なのかはまだ認識の範囲外だもの。ちゃんとこの目で見てから確認なりしないと私は嫌なの。
で、今回はすずかも一緒。なんだかすずかはわかってるような顔で居るけどなんでかしらね。
なのはたちが魔法のことを教えてくれたときもなだかもうわかってるような顔で聞いてたし・・・・。
私の右にすずか。私の左になのは、フェイト、はやて。はやてはフェイトに車椅子を押してもらってる。

「でもいいの？私達がここに来ちゃって」
「うん、リンディさんが是非って言ってくれたから。それにアリサちゃんとすずかちゃんには私達のこと、もっと知ってもらいたい」
なのはがまっすぐな眼で私を見る。あー・・・私この真っ直ぐな目ってほんと弱いのよね。
だってもう曲げない意志っての？まるわかりじゃない。突撃ロケット娘とは私がつけた渾名だけど割かし当たってると思う。

「あー、わかったからそんな眼でみないでよ。だからこうして来てるんじゃないの」
「にゃはは、そだね。ごめん」

ホント敵わないわ。でも見つけたんだ。なのはの――――――やりたいことが。
そうなら応援しないと。でも無茶するところがあるからここは押さえないと心配で仕方ない。
思ったら突撃しちゃう子だからなぁ。出会った時からずっと。

「ねぇ、なのは。見つけたのね――――――やりたいこと」
「・・・うん。これが私のやりたい事、だよ」

なのはが一歩先に抜きん出て両腕を広げてみせる。首飾りの赤い珠が揺れて光った。

「でもなのはちゃんが魔法使いだったなんてびっくりしちゃった」
「すずか、あんたあんまり驚いてる顔じゃないわよ。すごい笑顔だもの」
「うふふ」

そして更に隣のすずかはずっと終始笑顔でいる。この親友もあんまり最近わからないのよね。

「で、すずかは。全然驚いてないし。てか、この機械類を前に眼がキラキラ輝いてるんですけど」
「え？なにかいった？アリサちゃん」
「きいてないしね！いいんだけど！いいんだけど！」

うわぁん。親友が話を聞いてくれないよ！周りの機械に眼が奪われてるよ！

「フェイト！はやて！あんたたちもなんとかしてよ！」

もう助けを呼んじゃうから！
ほら、会話に入ってきなさいよ。折角いるんだからぁ。

「ほんなら私はすずかちゃんにいこうかな」
「じゃぁ私はアリサとなのはだ」

はやてがすずかに。フェイトが私となのはへと分担する。
確かにはやてとすずかは仲がいいから相性もいいだろうし。
で、私とフェイトとなのはも問題ない。同じクラスメイトだし、金髪だし・・・ってそれは関係ないか。
で、まぁこのまま二組で回ろうか、となのはが提案してきたので皆でそれを肯定した。
じゃぁいい場所教えてよ？

リンディＳｉｄｅ

艦内が少し騒がしいわね。ってそういえばなのはさんたちのお友達が来るんだっけ。
あとでクロノに案内をさせてあげましょう。
溜まった仕事を片付けたらあとでご挨拶にいこうかしら。

「クロノ。なのはさんたちは？」
『今、二手に分かれてますよ』

音声通信からクロノの声がする。二手、ねぇ。じゃぁどっちかにいかせましょう。

「クロノ、どっちかいってもらえる？」
「なら、はやてのほうにいきます。ちょっと気になることもあった

ので。艦長はフェイトのほうに行ってはどうですか？」

あらあらこの子ってば。そんな心遣いが出来るようになっちゃって。
何時の間にそんなに成長したのかしら。
これもエイミィのお陰かしら。それじゃぁ、甘えちゃおうかしらね。

「じゃぁ、私はフェイトさんのほうにいくわね。そっちはお願い」
『判りました。では後ほど合流の流れで』

一通り見て回ったら合流すると約束して通信を切る。

「じゃぁ、いきましょうか」

私はブリッジから出て長い廊下を進む。クルーに聞きながらフェイトさんたちのいる場所へ。
途中、クルーに紙媒体のレターを受け取る。どうやら綾人君宛てらしい。差出人は――――――――――

フェイトＳｉｄｅ

今、アリサとなのはと一緒に模擬戦室の前まで来た。

「ここが模擬戦室だね。デバイス・・・魔法を使うときに必要なアイテムの調整とか戦闘の様子を確かめる場所」
「うん、大体名前のイントネーションで理解したわ。じゃぁ、あんたたちも此処でやってるの？」
「うーん、そうなんだけどあんまり此処ではやってないかなぁ」

「ふーん」

アリサが軽い返答を返しながら模擬戦室へと入る。今は誰も使用していないからって事で見学が許可された。

「へぇ、中は結構広いんだ。戦艦っていうからあのサイズでの広さを考えてたんだけど」

「中は少し弄ってるからじゃないかな。詳しい事は私もわからないけど」

詳しい事は本当にわからない。こういう時はリンディ、さんが居てくれればって思う。

「此処はね、すこーしだけ空間を弄ってるの。だから広く見えるのよ」

って、リンディさんの声。振り向いたら入り口に息を切らして立っていた。

旨に手を当てて呼吸を正してる。ほんの少しだけ時間をかけてからニコ、と笑ってこっちを見てくれた。

「あ、リンディさん。こちら友達のアリサちゃんです」

「はい。リンディ＝ハラオウンよ。宜しく、アリサちゃん？」

「アリサ＝バニングスです。今回はお誘い下さりありがとうございます。なのはがまた無茶を言ったんじゃないかと思ってました」

「あらあら」

なのはの紹介にあらあらうふふとリンディさんが笑ってる。

そう、なのはがこの話を持ってきたときには少しだけ無茶があったのだ。

私達という存在を教えるのは構わないらしいが、管理局の技術力を見せてしまうのは如何なものか、と。
そこでなのはが「全責任をとる」と一辺倒。仕方なしに重要な部分への見学以外ならＯＫとリンディさんが許可をくれたのだ。

「で、模擬戦室って事は二人ともするのかしら？」
「あぁ、いえ。アリサちゃんに見てもらいたかったというだけで」
「あら。そぉ？じゃぁ、帰る前に少しだけ見ていったらいいわ。フェイトちゃんもなのはちゃんもはやてちゃんも全員呼んで♪」

あ、集団模擬戦ですねわかります。なら、最後の締めでやろうかな。なのはもやりたそうにうずうずしてるのがわかる。

「じゃぁ、此れから先は私もご一緒してもいいかしら？」
「はい。是非お願いします！」

リンディさんの提案にアリサがお願いして、私達はアースラの中を見て回った。
その中には私達も知らない場所とかどういうものなのかまで教えてくれた。
その後、リンディさん特製のお茶を戴いて・・・・・・うん。あれは。特に言うべき事はない、かな。
少ししたらはやてとすずかが合流してきた。一緒にクロノがいるからリンディさんと話してたんだと思う。

はやてＳｉｄｅ

すずかちゃんに車椅子を押されながらクロノくんと一緒にアースラ

の中を見学して。
で、クロノ君から「艦長が呼んでるからいかないか」というので合流する事に。

「どうやら向こうは模擬戦をやるみたいだけどどうする？」
「ほぉかぁ。すずかちゃんはどうする？魔法みてくか？」
「うん、見せてくれると嬉しいかな？」

ん。そんならや。今日の締めにでも模擬戦したろか。
ヴォルケンリッターも呼んで久しぶりに団体戦がしたなってきたわ。
こっちも声かけとくかな。ヴィータトシグナムあたりは楽しがるやろぉ。
念話で送ったら本局からこっちに時間ギリギリやけど来るって言うんでクロノくんに伝えたら団体戦やろうかって運びに。
こちとら純正ベルカ式はミッド式には負けへん位の心意気やで？
バリアジャケットになれば立てるから、すずかちゃんにも見せたいなぁ。

「時間はどうなん？」
「あぁ、まだ時間に余裕はあるから大丈夫だ。もう少し回ってから向かおうか」
「そやね」
「ですね」

私とすずかちゃんお返事が重なった。うん、時間があるなら間に合いそうやね。
ほんなら色々と作戦考えとくか。チラ、とクロノくんをみたら同じように何か考えとる。
同じ指揮官としてやっぱ作戦なり策を講じとるんやろうな。でも負けへんわ。

「そういえば、この前――――」
「「ん？」」
「本局で魔力数値測ってもろたら、広域ＳＳやっていうとったわ」
軽いジャブ。まぁ、計測値は本当なんやけどまずは手始めに。
「ほう。魔力内包値は高いと思ったがなるほど。それはやばいなぁ。手は抜いてくれても構わないぞ？」
クロノくんもジャブかいな。相手がどんな相手やろぉと負けない意思が見えるわ。さすが執務官、と言っといたるわ。
せやけどうちほど息の合うたのもそうはおらへんと自負がある。
「ふっふっふ」
「ふっふっふ」
私とクロノくんの笑い声がまるで艦内に響き渡るかのよう。
その後ろですずかちゃんも笑ってた。まるで菩薩のように。でも、全部知ってますよって感じやった。
・・・一番怖いのはこの子かもしれへん。
すずかＳｉｄｅ
今、はやてちゃんの車椅子を押しながら移動中。クロノ君も加わって楽しくおしゃべり。
「ふっふっふ」

「ふっふっふ」

うーん。何か考えてるね。きっと大変な事考えてるんだろうな。
綾人君がいうには管理局って結構アレな部分があるって言ってたけど・・・普通に組織って感じ。
でも、魔法を見せてくれるなら楽しみにしていよう。アリサちゃんはきっと驚くだろうなぁ。
前に自宅で綾人君が魔法を見せてくれたからなのか、なのはちゃんやはやてちゃんが魔法使いって言われてもあんまり驚きもしなかったし。
その綾人君がいない。リンクしてる魔力回路からもあんまり反応がない。まるで寝てるみたいな。
折角来てるのに寝てるってありえるかな。ちょっと聞いてみようかな。

「あ、そうだ。綾人君はどこにいるのかな？」

その一言で含み笑みをしてた二人から笑みが消えていく。あれ。私地雷踏んじゃった？

「綾人は今はいない」
「それ嘘だよね。ここにいるってわかるんだよ」

クロノくんが私の言葉で不思議そうな顔から視線がちょっと怖くなった。

「すずか。君は――――」
「ん？すずかか。どうしたこんな所で」

背後から聞こえたのは赤い外套を身に纏う長身痩躯の白髪の男性・・

・アーチャーさんだった。

「アーチャーさん。綾人君はどこでしょう」
「綾人は今、疲労がたまって眠っている。あと半月は起きない」
「アーチャー！君は！」

アーチャーさんの返答にクロノ君が噛み付いた。あー、なんだか私悪者っていうかイタイ人になってきたなぁ・・・。
あとでフォローしないとだめかな。

「問題はなかろう。この娘もマスターの関係者だ」
「そう、なのか？」

疑惑の目でこっちを見ないでください。簡単だけどアーチャーさんが説明もしたのに。
これが管理局なんですか、って誤解しちゃうじゃないですか。
あ、はやてちゃんが驚いてる。

「一応は。綾人君の眷属という扱いにはなってるよ」
「・・・驚いたな。だからか。君が魔法について驚きが薄かったのは」

そう。もう見てたから。とはいえなのはちゃんたちが前に街の中でやってた魔法とは違うものだったけど。

「でも今回の私は見学者ですから。それにパスが繋がってるとはいえ未熟者なので」
「そうか・・・わかった」

クロノ君はそこで諦めてくれた。

「アーチャーさん。これからみんなで模擬戦するんやけどどうですか？」
「私やらが参加したら大変なことになるから今回は辞めておこう。クロノ、私達を参加させたければ誰にも迷惑の掛からない星を用意することだな」
「む・・・・承知した」

はやてちゃんのお誘いをクス、と笑ってアーチャーさんが去っていった。
ていうか、クロノ君はアーチャーさんを誘うつもりなのかな。

「と・・・時間が押し迫ってきたな。そろそろ行くか」
「そやね。すずかちゃんもいこか。綾人くんとのことは今後、ゆっくりと、な？」

ウィンクをして合図してくれるはやてちゃんの車椅子を押しながらクロノ君に案内されて進んでいく。
どうやらはやてちゃんの一言でクロノ君も言及はしないでくれるみたい。
5分くらい移動したら模擬戦室と書いてある部屋に到着。中に入るとなのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、リンディさんがいた。
リンディさんはフェイトちゃんのお母さん代わりだって前に紹介してもらったので覚えてる。

「あら、いらっしゃいすずかちゃん。こんにちは」
「はい。お邪魔してます」

ニコ、と笑みを交わしてご挨拶をする。

少しだけ間が空いたあとに「今度、個人的にいらしてね」なんていわれた。多分綾人くんと魔力の事かな。
少し雑談してるとシグナムさんやシャマルさんが来たのでご挨拶。
そこからまた雑談。準備が出来たらしく、はやてちゃんたちが部屋の中央に向かっていった。

「ほんじゃ、すずかちゃん。そこでみとってなぁ」
「うん。がんばってねはやてちゃん。応援してる！」

グ、と両手を握ってファイト！って声をかける。するとはやてちゃんが一冊の本を持って変身した。
あぁ、あの本は。ずっと一緒にいたあの本なんだ。
変身したはやてちゃんは車椅子から立っていた。

「あ、ごめんなぁ。なんや知らんけどこの姿になったら立てるんよ」

あっけらというはやてちゃんがシグナムさんたちを連れてなのはちゃんたちのところへ。
私はアリサちゃんとリンディさんのところへ。

「アリサちゃんはなのはちゃんたちの応援？」
「えぇそうね。そういうすずかははやての応援でしょう？」
「ふふ、そうなるね」
「ならどっちも頑張れるように応援しないとね」
「応援なら負けないよ？」
「言ってくれるじゃない！私の応援、よく見てなさい！」

そのあと直ぐに模擬戦が始まった。とっても強くて荒くて凄くて。
何時の間にかアリサちゃんと一緒に興奮してた。
結果は両チームダブルノックアウトで引き分け。時間も押してたの

で少しのインターバルを挟んで私達のお見送りをしてもらって今日という日が終わった。
あ、転送の場所は私の家で使ってない部屋につなげても良いかって事でお姉ちゃんに相談しないとって事でリンディさんがくるみたい。
その時に個人的なお話も有るみたいです。

第四十一話　契約

綾人Ｓｉｄｅ

どれくらい寝ているのだろうか。ただずっと眠り続けている。
うん、また白い空間だ。もう懐かしささえ感じる。
てことはどっかに居るのか。『神』が。

「　やぁ。　」

不意に後ろから声が聞こえる。振り返れば奴がいた。

「久しぶりだネェ。全然連絡無かったからどうしたのかと思ってたよ」
「ハッ。よく言うぜ。あんたのほうこそなんなんだよ。なんでＣ．Ｃ．がいる？」
「あ、あれどうだった？面白かったでしょ。何時もの日常にちょっとしたスパイスを、ね？」

えへ♪とかしても可愛くねーよ！・・・・ねー、よ？・・・・・・
うぉぅ。

「まぁ、あのまま居ても（僕が）つまらないからさ。ちょっと遊んでみたんだよ。
何より、君もその姿のわけだし、パートナーならあの子かなーって思ったんだけど」
「いや、姿の事じゃない。じゃぁあの能力はあんたが与えたんだな」
「君がサーヴァントを連れて行ったら対抗できるのなんて同じサーヴァントくらいでしょ」

ずっと思ってた質問を口にする。やっぱりあんたの差し金か。
だが確かにあの規格外相手には同じ存在で無いとダメだろう。

「サーヴァントだけじゃ足りないと思って。だから君にも同じ存在を用意しました♪」
「・・・・それがC．C．か」
「そ！君の女性体としての存在が彼女だ。大切にしてくれよ？自分自身なんだからさー」

なるほど。そういう事か。
この姿がルルーシュ＝ヴィ＝ブリタニアだというならその反対なら当然だ。
何故速くその答えを導かなかったのだろうか。多少の迷いがあったからか？だが・・・。

「道理で俺と同じ能力を使うと思ったよ。あの神剣然り」
「うん、ぶっちゃけ君よりもちょっと性能は高いよ」
「まるで見てたようｎ「見てたよ」だろうね！」

この神様野郎。あの闘いを見てたってわけか。

「何よりも君がこのまま勝ち続けるのもなぁって思ってたんだ。敗北を知ってこそ知ることもある。ってね」
「敗北の味、ね・・・」

やべぇ、思い出しちまった。確かにアレは苦い思い出になる。
だからこそその味を噛み締めて生きて闘っていける。もう二度と味わわないように。

「うん、彼女は君にいい感情を与えてくれたようだね」
「そんなの望んでなかったんだけどな。まぁ、いいさ」
お陰で得られるものもあったしな。
「あぁそれと。最初に言ってたイレギュラーってC．C．なのか？」
「ん？違うよ。イレギュラーはまた別だ。アレは文字通り世界を壊してしまう存在だからね」
なるほど。また違うのか。そいつ（ら？）には負けないようにしないとな。
「じゃぁ、パワーアップさせてみたらどうだい？ほら、彼女たちとか。あと、夜の一族だっけ？彼女たちも」
「なんでもお見通しなんだな」
「まぁね♪」
だって神様だし、とか言われたら納得するしかないじゃないか。
だけどパワーアップか。確かに今回みたいに傍観させっぱなしだとあいつらも心配するしな。
それなら手を出せるくらいにさせておかないといけないか。
「いつ、くるかとかは教えてくれないんだろうな」
「うん。そのほうが楽しめそうでしょ。判ってる未来なんてつまらないよ」
まぁ、確かにそうか。なら急がないと。
「君にはカリスマをつけてあるから、誘えばついてきてくれると思うよ。まぁ、その相手に素質があればの話だけど」

「あの世界ならリンカーコアって事か。一々調べて回るのも面倒だし、少数精鋭って事でいいよ」
「そぉ？それならいいんだけど。まぁ、そろそろ戻るべきかな？肉体の時間はそろそろ一ヶ月が経つ頃だし」
え、そんなに経ってるのか。そりゃちとやばいな・・・・。
特に寝てる間に衰えた筋肉のリハビリとか色々。

「じゃぁ、送るよ。あぁそういえば君の口調が元に戻ってたり今の肉体に影響されてたりするんだけど、肉体が起きれば治るからね！」
そういえば口調がバラバラだ。この神様が言うには今は魂と肉体のバランスが崩れているらしい。
まぁ、起きれば戻るってなら気にする事は無い。

「あぁ、頼む。それとイレギュラーの対処に動く。って事でいいんだよな？」
「うん。がんばってねー」

手をヒラヒラと振って笑顔で見送る神。
俺は光に包まれながらこの白い空間を後にした。

うっすらと視界に光が差し込む。重い瞼を開けると眩しい世界が広がっていた。

周囲に人の気配はない。俺は数回瞬きをしてから上半身を起こす。
周りを見れば治療室のようだ。ベッドで寝ていたらしい。
右手を開閉させて衰えた筋肉のチェック。多少の痺れと違和感を感じた。

「やっぱ多少の衰えがあるな」

身体能力の低下は仕方ない。また鍛えればいい。何よりまだ9歳という体に無理強いは出来ない。
魔力で補うのも今は下手にしないほうがいいな。と、魔力とかの回復はどうなってるんだろうか。
自分の身体チェック開始。

精神面――――正常。
体力面――――筋力の衰えあり。
魔力面――――正常。四本の魔力パス回路増設済み。

・・・なん、だと？なんだこのパス回路の増設は。
俺が寝てる間に何が起きた。
・・・セイバー達に聞けば何かわかるか。俺が起きたのも恐らく回路が繋がってるなら気付いただろう。
そのうち飛んでくるだろうけど、説明するの面倒だな・・・神の事は出来るなら喋りたくないし・・・。

――――よし、逃げよう。

ベッドから降りてまず、スキマを展開して俺は逃げた――――

リィンフォースＳｉｄｅ

この空間に身を潜めて早一ヶ月超。

此処に来る前に来た後に。その間に色々な事があったと思い出す。

闇の書として暴れていた事。優しいマスターに出会えた事。そのマスターの友に見送られた事。

見送られる途中に拉致監禁された事・・・維持か消滅かを迫られた事・・・管制スキルを酷使された事・・・・・・。

後半酷いですね。なんたる事か。ですがこうして維持を続けていられるのもこの空間の主のお陰でもある。

其処は感謝してもしたりない位。此処からは外の世界が見える。サーヴァントと呼ばれる主の使い魔も遊びに来る。

淋しいと感じた事はまだ無い。外の事を教えてくれたりとか、私に名前をつけてくれた優しいマスター・・・八神はやてのことも教えてくれたりと。

何よりも私の闇から生まれたというマテリアルも此処に来る。彼女らは今は仮初めのリンクで繋がって存命維持をしているとの事。

「存外退屈しないな、此処は――――――」

ぽつ、と呟く。声は直ぐに闇の中に消えていく。今は一人。周りに誰もいない。

さっきまでは星光の殲滅者が居た。私と一対一で戦術を学びに来ていたのだ。

そして幾つかの戦術を口にした後に彼女は去っていった。

今はその去っていった空間を見続けていた。何もない、その足場の中で立っていた。

「こうも一人だと――――――孤独を感じてしまうのは　　だめだな　　」

視線が落ちる。何もない。ただ延々と闇が広がっている空間の中で私は今独り。
その空間に新たな来訪者が。私の背後の空間を切り裂いて侵入してきたのは――――――――――――この空間の主だった。

「――――――マスター」
「ん？あぁ、リィンフォースか。邪魔するよ」

そしてこの人はブツブツと魔力構築を開始しました。どうやら誰も入れないようにしたみたいで空間に歪みが発生しました。
私がマスターと呼んだことには苦笑いを浮かべて頬を掻いてます。

「そのマスターってのは・・・仮初めでも言うもんか」
「現在のパスは貴方につながっておりますから」

そっか。と笑って肯定してくださいました。

「・・・リィンフォース。時間をかけたな」
「いえ。存外に時間潰しはさせていただいておりましたから」
「そうか。ならいいんだけど」

夜天の主や私を空に返そうとした管理局のエースたちと同じくらいの歳の少年が目の前にいる。
私は会話しやすいように片膝をついて屈んだ。

「リィンフォース。それじゃダメだ。まるで傅いてるようだからやめてくれ。何よりも眼のやり場に困る」
「　　そう、ですか・・・では」

マスターの顔が真っ赤になって視線を外されました。何があったのでしょう。
仕方ないので両膝をついて座りました。

「まぁ・・・いいか。さっきのより」

ゴホン、と一つ咳払いをしてから私に向き直りました。

「リィンフォース。結局俺は君を利用してしまった」
「いえ　　アレは仕方なかった。　　あぁでもしないときっとまた敗北を喫していただろう」

ぐ、と言い澱む。どうやら敗北という言葉に反応したようだ。プライドが高い。

「まぁ、敗北したとかは後でいい。それよりも問題は君との契約だ」

この空間に呼ばれたときに交わした仮初めの契約。魔力パス回路を繋げてはおくが本契約としては認定されないというモノ。
魔力の流れはあるが、それだけ。私という存在の維持の為だけにつなげられたパス。

「・・・あの時は何時でも良いと言った。だが・・・今の考えを教えてくれないか」
「　　」

あぁ・・・この微温湯のような優しい空間に感染して暫く忘れていた――――。
私という存在の維持がどれだけの事か。それがどんなに嬉しかった

事か。まだこの世に存在していられるという事実が。

「私は・・・この世界で生き続けたい。夜天の主と逢えなくても遠くから見てることはできる。
それならっ・・・私は此処に居たい！」

コク、と。マスターが頷く。マスターの手が私の頬に触れる。なんて暖かいのだろうか。

「リィンフォース。名付け親ははやてだけど、その名前のままお前の居場所を作ってやる。俺と一緒に歩いていこう」

「　　はい　　」

私は小さい声で答えた。まだ終われない。終わる筈が無い。まだやるべき事がある。出来た。
それなら私はこの命を――――この新しい小さな主に捧げよう。

「我、ミラージュ＝ヴィジョンが夜天に願う。我が意思我が力となり我と共に生きよ」

「Ｙｅｓ　Ｙｏｕ' ｒｅ　Ｍａｊｅｓｔｙ」

「今此処に。契約は終了した。我が半身リィンフォース。祝福の風は我と共にあり汝と共に我はある」

頬に触れたマスターの手が熱を持ったように暖かい。暖かくて――――目尻から一筋だけ雫が流れた。
あぁ、これから私は生きていけるのだ。

セイバーＳｉｄｅ

リンディ艦長に申請した所、個室が認められて私の自室が出来ました。
ご飯の後の一杯のお茶を飲んでるところで魔力回路に異変が起きました。
マスターの容態に変化を感じ取ってすぐさま行動開始です。
部屋から出ると既にランサーとギルガメッシュが居ました。どうやらあちらも気付いたようです。

「ランサー！ギルガメッシュ！すぐに用意なさい！」
「！・・・セイバー、こいつぁ」
「ふん。我に命令とはな！高くつくぞセイバー！」

全く。何を言うかと思えばこの英雄王は。ですが今は会話をする時間も勿体無い。マスターのいる部屋へと直ぐに向かいます。
風王結界を自分の足に加護をかけてブーストをかけて一気に駆け抜けます。
ランサーとギルガメッシュは置いていきました。だって遅いんですよ。

「マスタァァッ！！！！！！」

思いっきり勢い良く扉を開ける。自動式なのに無理矢理こじ開けたので立て付けが悪くなったのは言うまでもないです。あとで直してもらいましょう。
しかしそこには蛻の殻となった無人の部屋だけ。そして今まで居たであろうベッドにはシーツが乱れていたのが確認された。

「ふっ・・・ふふふっ・・・・・・・」

折角。折角急いで来てみればもぬけのからですか！起きたなら起きたと伝えてくれればいいものを！
こうなったらとことん見つけてみせましょう！
まずはスキマに・・・・・あれ？む・・・・・スキマに入れない！？

「な、ん・・・だと？」

何時もならこー・・・空中に手を翳して広げればスキマに入れるのになぜか「ひっかかり」が無い！
くっ・・・・まさか中で何かしてるのですか！開けなさい！さもないと宝具を使ってでも！

「待てセイバー！早まるな！」

ランサーが私を止めます。既に約束された勝利の剣の使用体勢に入っていた為、振り返ることは出来ませんでしたが。

「莫迦が。マスターが中に居るのは明白であろう。ならば出てきたときに捕まえればよい」
「ナイスですギルガメッシュ！」
「ふはははは、我は妻にいい助言をするのだ。夫だからな！」
「では一気に行きましょう。ランサー、私に合わせてください」
「しゃぁねぇなぁ」

渋々ランサーが言う事を聞いてくれました。グレイトです。英雄王はシカトのままで大丈夫です。
後で何らかのフォローはしましょう。その内。
なんでしょう・・・悪ノリ感が否めませんが其れも此れもマスター

が隠れるからいけないのですよ。えぇ、そうです。そうに決まっている！
臨戦態勢のまま私達は待機です。ここにアーチャーが居れば言う事無しでしたが・・・。
まぁ、嘱託魔導師になる試験を受けに行っているなら仕方ありませんね。
じっくりとまっていると空間に歪みが発生しました。これはスキマが開かれる前兆ですね。
目の前にスキマが開かれると中から声が。

「其処で臨戦体勢になってないで中に入って来い」

マスターの声がしたので私達はスキマへと入り込んだ。悪ふざけも此処までにしてランサーと共に宝具を仕舞ってスキマに入り込む。
ギルガメッシュはゆっくりと中へと入った。
起きたのなら報告くらいしてほしいものです。全く・・・・・。

第四十二話　これからのこと

ユーノＳｉｄｅ

やぁ、僕の名前はユーノ。ユーノ＝スクライア。
管理局本局にある無限書庫の司書をしているんだ。
今も無限書庫で調べ物を頼まれている。最早腐れ縁になりつつある悪友クロノ＝ハラオウンからの。
そして今も通信が送られてきている。

「二日前に頼んだ依頼の書類全件のデータは出来ているか？」
「あぁ、それならもうまとめてある。必要なものをピックアップしてよ。其処からまた更に絞るから」
「判った。それとまた依頼だ」
「また！？」

どうやら今抱えてる裁判で使うデータがほしいらしく無限書庫に依頼してきたようだ。
それを僕が請け負った。いや決して知り合いだからという事ではないんだけど。なければいいなぁ。
どっち道やらないといけない事だ。だから増やされても大丈夫・・・大丈夫・・・・こんちくしょー！
うぅ・・あんまり此処の人達僕をちゃんと人間としてみてくれないんだよな。一回フェレットモードになったのが悪かった。

「あぁ、所で」
「どぅわぁつ！？」

妄想の途中で行き成り通信があれば誰だって驚くよね！僕は盛大にその場でこけた。

「・・・何をしてるんだ君は」
「いきなりそっちが出てくるからじゃないか・・・」
「何を言ってるのか判らないな――――――其れより追加だ」
なにこの死刑宣告（レベル5デス）。僕に死ねって言うのか！
「ミラージュ＝ヴィジョン及び城戸綾人という名前と人物についてだ。これは優先事項は高いが期限はない」
「個人を調べるとなると大変だけど・・・いいよ。やるよ。僕も気になってたんだ」
あの少年の事はずっと気になっていた。闇の書事件では敵対していたのに最終的には僕らに手を貸してくれた。
何よりもその後も管理局に――――――アースラに尽力してる。闇の書の闇事件では重傷で床に臥せっていると聞いた。
なによりも・・・なのはたちが心配している。それなら僕は僕で出来ることをする。
決してクロノに言われたからじゃないんだからな！？
「さて・・・時間も無いみたいだしちゃっちゃとやっちゃうか」
無限書庫は縦穴的に広い。僕は浮遊魔法を使って更に奥へと入り込む。
目的の書物が見つかるまで――――――
セイバーＳｉｄｅ

スキマの中で私はマスターと向かい合う。まるでこれから戦闘を行うかのような雰囲気。
ピリピリとした空気の中で私の後ろにランサー（右）、ギルガメッシュ（左）。
そしてマスターとリィンフォースが正面に立つ。

「まるで今から噛み付きそうな勢いだな」
「茶化さないで戴きたい。貴方はっ・・・・きっちり一ヶ月で目覚めると聞いてはいましたが何故アースラから逃げるように」
「それは俺があの空間を気に入らないからだ。管理局という職員を管理するシステムに」
「それはっ・・・・」
「それに何故アーチャーが居ないのかの説明にも繋がるんじゃないか？」

・・・・・・。
この人は。なんという読みの深さ。眠りに落ちていながらアーチャーと同じように管理局に対する理念を更に磨いていたというのか。
ですが・・・今は。

「アーチャーは今、嘱託魔導師になるべく本局にて試験中です」
「そうか。あいつらしいな。中から変えるつもりだろうな」
「そう言ってました」
「なら俺が動く必要もないな。お前たちも――――――」

マスターが首を一回傾げてコキリと鳴らす。

「しかし！まだ安静にしていなければっ・・・貴方だけの体、魔力ではないのですよ！」

ランサーＳｉｄｅ

セイバーの嬢ちゃんが目の色変えてマスターに突っかかってるけどいやいや楽しいな。
なんでってそりゃぁなぁ。横を見ればギルガメッシュが悔しそうに見てらぁ。

「しかし！まだ安静にしていなければっ・・・貴方だけの体、魔力ではないのですよ！」

あー、まぁセイバーの言うとおりか。此処でマスターがまた無茶して魔力の枯渇なんて起きたら俺たちの魔力供給が出来なくなる。
あいつは其処まで考えての行動か？いや。只の暴走だろうな。逃げられたっていう。
しょうがねぇ。ちょっと口出すか。

「あー、ちょいいいか、マスター」
「ランサーか。どうした」
「セイバーはよ。勝手に居なくなってとってもとっても心配で仕方ないのさ」
「ランサー！？」
「セイバー、まさかマスターに！？」

やれやれ、鈍感王だな全く。ってギルガメッシュまで釣れてんじゃねぇよ！？
まさか全然気付かなかったのかよ！

「ともあれ、だ。急に居なくなったんでどうしたんだって思ったんだよ」
「説明するのが面倒になった。以上」
「そんな内容で納得するとでも！？」
「いやだってさ。本当に面倒なんだよ」

ぐったりした顔で説明を拒んでやがる。どうやら本当のようだし、俺にとっては別にどうでもいいんだけどな。面白ければ。

「しっかし、マスターもやるねぇ。復活した途端にリィンフォースといちゃいちゃするたぁ」

くっくっく。あぁ、おもしれぇ。そうか恐らくスキマに入れなかったのはセイバーや俺らを入れなくしていただけだろう。
リィンフォースから魔力回路が繋がってるのが見える。多分あれだ。契約したんだろ。だから閉じてたのか。
今のままじゃこの空間から出れなくなってるわけだし、それでも魔力枯渇の道は進んでいたわけだ。出る気はネェだろうけどよ。
それなら正式に契約してリィンフォースを救おうとした、だろうな。真実のところは。
で、あとの問題はセイバーのほう、と。

「やれやれ。なぁセイバー。もう遊びもいいんじゃねぇか？マスターが無事ならそれでよ」

セイバーの頭に手をポンと置いて撫でる。振り向いてきたところでウィンクだ。こいつは決まった。
むす、とした顔のまま正面向いて黙っちまったけど。俺のイケメンスマイルが決まったぜ。

ん？ギルガメッシュがこっちを睨んでる――――って、王の財宝展開するんじゃねぇよ！あぶねぇ！いま頬掠った！

「なぁ、マスター。一応は考えはあるんだろ？そろそろ真実を言っちゃくれねぇか」

「・・・神に逢ってきた。Ｃ．Ｃ．の事もこれからの事も――――イレギュラーの事を」

あぁなるほど。あの時のあの存在にか。

「じゃぁ手はあるのか？」

「イレギュラーが出てくる前に戦力補強を進める。戦術は多いほうが手を打ちやすい」

「手始めに？」

「あいつらのパワーアップだな。あとは戦力の増大」

へぇ。ちゃんと考えてら。なら俺から言う事ぁねぇわ。

「マスター。俺はな。闘えればいい。この誇りを以って戦場に立っていれれば満足だ。それをあんたは見せてくれるといったんだぜ」

「あぁ。約束は護ろうランサー」

んじゃ、俺からの話は終わり。ほい、バトンタッチだ。

ギルガメッシュＳｉｄｅ

我が妻セイバーが血相を変えて飛び出していくのをついてきてみれば何事か。

結局マスターの下に来るのなら我はゆっくりしておきたかったわ。
王は下々の者の会話に無理矢理入り込むなどという下世話な事はせぬ。余裕を持って会話に参加するのが雅。
セイバーを大人しくして駄犬が喋っている。どうやら納得のいくようにはなったらしいな。

「我からはない。須らく向かってくる蟲は塵に返すのみよ」

話を振られたが我からの質問などない。全ては成る様に動くのだ。
マスターの命令に従うのではなく我が思うままに動く。これだ。そしてセイバーの為に動く。

セイバーＳｉｄｅ

むぅ。マスターが心配なので急いで駆けつけたら仲間はずれみたいになってたって凄く嫌じゃないですか。
しかもちゃんと安静にしてないと。だというのにいきなり動いたりするから余計です。
然るべき検査をしてからしていただきたいと私は声を大にして言いたいのですよ。
無茶をよくするマスターは本当に心配です。なんでしょうか、無茶するマスターにしかあたらない気がするのは。

「全く・・・もう怒ってませんから然るべき検査をですね・・・」
「いや、それならもう自己診断した。魔力回路が四本増えてるくらいで問題はないよ」
「ですがっ！」
「心配してくれてありがとうな、セイバー。俺はもう大丈夫だから」

そんな事を言いながら笑顔を向けるなんて卑怯です。もう何も言えないじゃないですか。

「兎に角!戻ってもらいます。今のマスターは何をするにでも最早誰かが見てるんです・・・特にアースラにいるなら」

「監視、か。まぁあれだけの力を見せればそうなるよな」

「そうです。脅威の前に人というのは恐れを抱いてしまうものですから」

「でもその時にはお前たちは俺の傍にいてくれるんだろう?」

このマスターはさも当然の様に言い放ちました。

「確かに。我らは貴方の守護騎士としておりますから」

「だろう?だから――――今の霊体よりも受肉化したほうがきっといいと思うんだ」

マスターから予想だにもしなかった言葉が発せられた。

綾人Ｓｉｄｅ

前々から考えていた事を口にした。あ、やっぱりセイバー達ぽかんとしてる。

「受肉化すれば今よりも魔力霊力は上がる。此れからの事を考えると必要なんだ」

「それはイレギュラーの事でか?」

「あぁ」

ランサーが返答してくるので短くだが答えた。

「しかし・・・それには途轍もない程の魔力が必要になります。まぁマスターの魔力でなら大丈夫でしょうが」

「神さんがいうには恐らくイレギュラーはこの前の比じゃないみたいな感じだった。ならこっちが底上げしておくしかない」

相手の事を何も知らない判らないのなら最初から出来る限りの事をして準備しておく。

・・・そしてなのは達も。出来る限りの事はする。

「時間はある。直ぐに答えを聞くつもりはないよ。さて、今は戻ろうか。セイバーの言うとおり大人しくしていよう」

目覚めたと聞けばなのは達が見舞いにもくるだろう。其処で俺がいないと聞けばアースラ内はきっと大変な事になる。

今こうしてる間もアースラの監視から見えていないんだから状況はきっと大変だろう。

そうなればすぐにでも戻ったほうがいい。

「さ、戻ろうか。リィンフォース、もうちょっとここで我慢しててくれ。お前が外に出てもいいような案を考えておくから」

「了解しましたマスター」

リィンフォースはそのままこの空間にいてもらうとして、俺は俺でスキマを裂いて通常空間へと戻った。

通常空間に戻ると治療室に出た。続いてセイバー、ギルガメッシュ、ランサー。
セイバーの視線が痛いのでそそくさとベッドに入る。監視カメラが僅かに動く音をキャッチしつつも横になる。
恐らく――――クロノ辺りが飛んでくる。鍵結界でも掛けておいてやろうか。

「綾人！いるか！」

ほら。案の定。鍵結界かける前にきちまったよ。

「ようクロノ。静かにしてくれよ。頭が痛いんだ」
「ん、そうか・・・ごめん――――じゃなくて！」

ダンダンと地団太しながら入り口で遊んでるクロノを適当にあしらいながらもここに来た理由を聞いてみる。

「で、何の用？僕まだ眠いんだけど」
「ここでそれか！君はなんて卑怯だ！」

頭を抱えて悶えるクロノを半眼で見つつ。

「クロノ兄さんは少し落ち着いたほうがいいと思います」
「君に言われたくはない！ていうか、なんでその口調なんだ？！」
「・・・・・気分？」

きょと、と首を傾げて答えるとまた暴れだした。

「ランサー。あれちょっと押さえつけるか外に捨ててきてよ」

「了解だマスター。任されろ」

触りたくないのかゲイボルグをわざわざ出して首根っこに引っ掛けて外に放り投げた。

暴れて逃げようとしてたけど結局無理だったらしくてそのまま廊下に投げ出された。

「ふぅ。邪魔者は消えたな」

額の汗を拭うジェスチャーをして陽笑一つ。クロノを放った後ランサーは扉さえ閉めてシャットアウトした。ナイスランサー。

「ともあれ、例の件は内密に。時機を見て行う。それまでに返答を考えててくれ」

例の件――――――受肉化――――――の事をこれで最後という口調で締める。

三人とも無言で頷いてはくれたがどういう答えが出るかはまだ判らない。俺も様々な答えを見つけておく必要があるな。

「よし。じゃぁ検査してとっとと地上に帰ろう。学校休みっぱなしだよ」

そういえば無断欠席になってるんじゃないか？だとしたらまずいよなぁ。誰か報告の連絡とかいれた？

まったく判らないんだけど。まぁ、今更小学校の課程をし直すのも面倒っちゃ面倒だし。

クラスメイトには逢いたいね。数ヶ月程度だけどそれでも友達と呼べるくらいにはなったし。
それにすずかとアリサにもまだ何も言ってない。夜天の書のプログラムが向かってきた時から逢ってない。
俺空の説明も聞きたいんだろう。すずかにもまだ詳細は言ってない。とは言っても神様がどうのっていったらそれこそおかしく思われる。
喋れる範囲で納得のいくようにしないとな。

クロノやアースラのスタッフにも説明をしておかないと。一ヶ月もの治療室の占領をしてきたのだから。

「マスター。更に私達の個室もです」

心読むなよセイバー。もう世話になりっぱなしじゃないか。あんまりリンディには借りを作りたくないんだけどな。
調子が戻ったらまずはリンディに挨拶かな。

第四十三話　アーチャー

アーチャーＳｉｄｅ

管理局の本局という所にきている。地球とは比べ物にならないくらいに科学技術が発達している。
しかも此処では魔法の隠匿はなく、寧ろ魔法社会と言っていい。私から見ればこんな状況に驚くばかりだ。
付き添いにリンディ艦長の知己であるレティ提督という女性についてきてもらった。
どうやら人事部のほうに所属しているらしく、リンディ艦長から連絡が入った、との事。
時空管理局本局・・・地上本部。その中にあるスペース。今其処に居る。第一管理世界ミッドチルダか。
魔法式があるようにここが首都にあたるようだ。地上本局は市街のように広がっている中心に位置するように建てられている。
どうやら外でやるらしく、野外へと連れて行かれる。本局から極近い広場。周囲には人払いをしているのか誰も居ない。
私はマニュアルに眼を落とし読みながら前を歩くレティ提督に声をかける。

「少し。確認していいかな？」
「どうぞ？」
「天候魔法、というが・・・私はそういうものはまるっきり出来ないのだが・・・」
「それはあくまでも標準マニュアルなのよ。その受験者に見合った適正テストを行うから気にしないで」

魔術師が天候を操るなど・・・キャスターじゃあるまいし。

神代魔法でも数ある大魔法にきっと挙げられるほどなのにこの世界の皆はそれが可能というのか。
・・・フェイト＝テスタロッサやシグナムを見れば確かに天候、と言わなくても何かしらの自然エネルギーに変換しているのはわかるのだが。

「やれやれ・・・先が思いやられるな」

出来る事と言えば只一つだけ。それをやるだけだ。
今手元には一振りの剣のみ。魔法らしき魔法など私には無理だろうが・・・出来る事をしろと言うならやるだけだ。

「それがあなたのデバイス？」
「いや、これはただの武器だ。まずかったか？」
「そうね・・・質量武器は使えないわ。デバイスは持ってないのかしら」

デバイスか・・・あれはどうだったかな。

「ふむ・・・ではちょっとまっててくれるか？」

なるほど。質量兵器・・・では、銃等が使用不可とみた。だがデバイスとなると私にはあれしかないな・・・。
レティ提督から見えない場所に行って周囲を見渡す。鷹の目が周囲を警戒して周辺の監視カメラなどを見つけ出す。
私に今向いてるのは――――三つ。その三つをほぼ同時に潰す・・・事ができればどんなにいいか。
とりあえずとして見えない角度で干将・莫耶を取り出す。
マスターとの契約で使った此れならデバイス扱いされるのでは、という淡い望みだが・・・。

夫婦剣を両手に持ってレティ提督の下へ戻る。

「これならいいか？調べてくれ」

夫婦剣をレティ提督に見せる。一瞬困った顔をしながらも剣を受け取り、確認していく。

「これ、アームドデバイスね。珍しいわ、大体はインテリジェンスかストレージなのに」

「武具型のデバイスを持っているのは私の周りに何人かいたが」

主に夜天の守護騎士とかな。サーヴァントは規格外だから別としても、フェイトのバルディッシュも何形態か武具に変わるからそっちだと思っていた。

ひとしきり確認したら干将・莫耶を返してもらった。

「それ、デバイス認証あるわね。それで大丈夫よ」

「そうか。なら安心した。何せ私にはこれしかないのでね」

一応は武具なら使えるが・・・其れでも剣くらいだ。盾やらは一応はできるが・・・魔力消費が激しい。

特にこの二本はずっと使い込んできたものだ。弓兵であろうと、だ。

まぁ、これがデバイスとして認識されたなら問題はないはずだ。

「では、受験番号１番だから――――――がんばってね」

「ふむ。頑張るのはいいが――――――」

「？」

「――――――別に合格してしまっても構わんのだろう？」

「ふふっ、そうね」

クス、と笑われた。む・・・選出した言葉を間違ったか。何故だ。
しかし受験か・・・結局大学にいかずに時計塔にいった私は受験といえば穂群原高校への受験くらいしかしてなかったな。
ふ・・・思い出す必要のない記憶が蘇ったな。気分は切り替えて行かなければ何が起こるかも判らないものだ。

『では受験番号1番の方――――出身と名前を言ってから前へお願いします』

アナウンスが流れる。どうやら出番のようだ。私は一歩前へ出るとまた更にアナウンスが流れた。

「受験番号一番。第97管理外世界出身。アーチャーだ」
「はい。では・・えっと。天候魔法は出来ないという事なので何か得意な魔法を見せてもらえますか?」

出身についてはリンディ艦長から言われたとおりの応えを。
名前についてはこのままでいいとレティ提督に告げた。どうやらそれでもいいらしい。なのでそのままクラス名を名前にした。
聖杯戦争ではそのまま名前として呼称される事の方が多かったので違和感等はない。
寧ろ、真名であるエミヤシロウでのほうが恐らく問題がある。実在するしないに関わらず、あの坊主に迷惑をかけるなど私の誇りが許さない。
それならこのままクラス名で通すだけ。

「さて、得意な魔法、か・・・・魔法、なぁ・・・・」

如何せん魔法というものは魔術の最先端に於けるものという認識にいたのでどうもまだ慣れない。

だが得意なものと言われれば其れは投影と強化の二つだけ。流石にここで投影をするわけにもいかないので強化を見せる事にした。

「では。強化の魔術を」

「・・・・・魔術？」

「同じようなものだと思ってくれて構わない」

今更説明仕様がないので後回しだ。理解してくれる人になら説明してもいいが判らないものに説明して混乱しても後が面倒だ。

何より、ロストロギアだのと言われたら其れこそ面倒だ。

・・・リンディ艦長からロストロギアの認定方法を聞いたがそれには当てはまらないみたいだけども。

失われた技術で作成された物品の総称――――ならば宝具はこれに当てはまるのか、と問い質したら困った顔をしてはぐらかされたものだ。

つまりはそんなに困るようなものではない、と言う事だ。もしそれでも認定などしようものなら恐らく管理局を敵に回す事も辞さない。

「ふっ・・・はは っ」

そんな事を考えているとつい笑いが漏れる。何も困る事などないな。

そのときはそのときだ。そのとき考えればいいだけのこと。

つい『うっかり』でも発動しない限りは――――大丈夫だろう。

「まず強化だが。物質の強化と思ってくれ。其れを今から見せる」

強化くらいなら見られても大丈夫だろう。深く考える様な奴がいなければ。

近くにあった鉄骨を見つけて持ってくる。それを地面に刺して立たせた。

そして懐から一枚の紙切れを取り出す。

「同調（トレース）・開始（オン）」

紙切れの材質から根源を強化していく。ソレを鉄骨に向かって水平に振りぬく。振り抜く途中で紙切れから手を離せば鉄骨の切断途中で紙切れが挟まっている。

ふむ。中々シュールに出来上がったな。強化を解くと紙切れがひらり、と力無く風に揺れた。

鉄骨から生えている紙切れ、という具合にオブジェが完成する。

「ふむ。これでどうかな？」

凡そ予想だにしていなかった事象が起きた事で近くのレティ提督もモニタリングしていたアナウンサーも声が出なかった。

中々のセンスと思わないか？ここまでやるのに何気に魔力使うんだぞ。

だがそのパフォーマンスもどうやら好評だったらしく魔法実技も終了。

『では、最初に申し上げました通り天候魔法は飛ばしますね――――次に実戦を見せてもらいます』

次に行うべく事をアナウンス。目の前に転移魔法で現れたのは武装局員。しかもフル装備ときたか。

着ている制服からして地上部隊か。確かに空を飛ばれたらアウトだしな。此処らへんはリンディ艦長とレティ提督の手腕が見れる。

『武装局員相手に何処までやれるかの見極めですから勝敗が全てでは在りません』

戦闘訓練と言う所か。これで平均的な局員の強さが見出せるかもしれない。
両手に干将・莫耶を携えて思考を戦闘モードへ。イメージするのは何時もと同じ。最強の己。
武装局員も戦闘モードへと移行したようだ。両手をだらりとさげて戦闘準備を終える。

「・・・・構えないのか？」
「これが私の構えだ。気にせず掛かってくるならよし、来ないならこちらから行こう」

安い挑発だ。だがこれで少しは動きやすくなったか。空を飛ぶのに慣れてない分相手が地上部隊と言うのは有り難い。
相手は杖。どうやら杖に魔力を仕込んでの格闘スタイルのようだ。
その様子まるでランサー。
だがゆだんはしない。細心の注意を払いつつも見極める。

「まずは私からいこう。挑戦者なのだから」

このままじれったくなるのも困る。まず先に攻める。一気に距離を詰めて干将を振り上げて軽く振り下ろす。
驚きの顔も束の間、局員はすぐさま防御シールドを展開した。どうやらデバイスが働いているようだ。
ハニカム構造のような視覚のオレンジのシールド。すると此方が不利になるな、などと考えながら次の手を考える。
考えてる途中にビームが来た。いや魔砲か。言いえて妙だな。高町なのはがいい例だ。
脇の下を掠るように砲撃が進んでいく。私にはそんな便利な盾等ない。熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）をだしてもいいがあれも後の説明が面倒だ。

外套・・・聖骸衣が傷つく・・・・ぬ。この衣にダメージをつけるとは中々だな。本当に油断できぬ。
砲撃が消え去り防御展開していない私を見てまた驚きの顔をするが私は気にしないで次の攻撃に移る。
莫耶で返す。斬り上げで迫るもこれもシールド防御されてしまう。どうやらシールド展開もオートでデバイスがやっているようだ。なんという便利。羨ましくはない。羨ましくはない。大事な事だから二回言ったぞ。
ただ斬り付けるだけではどうやら防がれてしまうようだ。厄介だ。
あぁ厄介だとも。
仕方ない。多少魔力を篭めて斬りつけよう。回路を二本分、撃鉄を起こす。干将・莫耶に魔力が通る。眼に見えない力が相棒に伝わっていく。
だが・・・全力ではないにしろその場で受けきったのは少々――――な。

「もう一度いかせてもらおう」

一気に一歩を踏み込んで懐へ。さっきよりも更に近付いての斬撃を振るう。
やはり魔導師の意思とは違うようにオートでシールドを展開されていく様を見ながらその上から干将で斬る。
魔力を帯びた干将はまるで溶けたバターを斬るようにシールドを簡単に切り裂いていく。
魔力の余波で切り裂いた場所から局員へとダメージが通る。実際の傷はなく非殺傷設定故の擬似ダメージ。
そのダメージが大きかったのか後方によろめきながら反撃もなしに倒れていく。

『それまで。戦闘行為を中断してください』

アナウンスが流れる。聞けば防御、耐久力に長けた局員だったらしく、それを簡単に破り更に一撃与えたと言う事での終了となった。

あれでか。正直残念だ。

私の魔力の全力でもない一撃で倒れるとは。

理想を抱いて溺死するがいい。

干将・莫耶を戻す。とはいえ此処で消したら大問題だ。なので刃を下に向けておく。

「これでいいのか？」

「えぇ。問題ないわ。まさか一撃で終わるとは思っても見なかったけど・・・・

あれほどのシールドを抜いたのなら魔力も疲労してるでしょうから休憩はさむ？」

「いや、全く大丈夫だ。続けてもらって構わない」

レティ提督はどうやらあの魔力での攻撃が全力に近いと思ってたようだ。

それも当然。自分で準備した防御力に長けた武装局員を用意しておいて一撃で抜いたとなるならよほどの全力だったのだろうと推測したのだ。

だが・・・私の魔力は十全。ただ魔力を篭めて斬っただけ。ふん・・・これが管理局の武力か？

「レティ提督。彼は・・・・どのくらいの強さを持っていたんだ？」

思った事をストレートに聞く。

「そうね。カレの魔力保持ランクはＡＡ。ほぼ管理局のトップクラスに近いわ。ちなみにオーバーＳにもなると管理局員の数％しかいないわ」

なるほど。あれで平均的なトップクラス。更にオーバーＳという『上』がいるのか。

「あとは貴方の魔力ランクの測定をして終了になるわね。お疲れ様」

「あぁ。色々手を煩わせてすまない」

「何言ってるの。いい男がそんなに謝らないで」

レティ提督が私の肩をポンと叩いてから擦れ違うように本局へと向かう。

私は一人広場に残されるように立ち続ける。

「あれが管理局の武力だというのなら・・・・脅威はない、か？だが・・・窮鼠猫を噛むという言葉もある。用心はしておくべきか――――」

考えを纏めながらも私も本局へと向かっていく。

少しして私の魔力保持ランクがＳＳ認定されたようだ。

あの斬撃での判定らしいが防御シールドを抜いた魔力と運用効率が認められたらしい。嘱託魔導師の資格は当然手に入れた。

第四十四話　高町恭也

綾人Ｓｉｄｅ

学校を三学期に入ってから一ヶ月近く休んでいた俺は先生に呼び出されてその間の説明をしていた。
その際の説明としては「運悪く事故にあってしまった」というもの。
体には生々しく包帯やらが巻きつかれており、なのはやフェイトには話をあわせてもらってある。
ソレを見た先生もすぐに信用して呼び出しも難なくクリアした。
アリサ曰く卑怯者、と罵られたがあの声で罵られたらなんだか変な気分になりかけた。
ともあれそのまま暫くは大人しく目立たない様に学校生活を送る。
とはいえ帰る場所が問題だ。以前クロノ達が使ってたマンションは事件の解決と共に司令室としての役割を終えてフェイトの部屋と化した。
つまりリンディたちは撤退したわけだ。フェイトをこの地球に残して。とはいえ転送ポートで行き来出来るようだが。
俺もそのまま使っていていいと言われたが流石にフェイトと同じ部屋を使うわけにもいかないので丁重に遠慮した。
近所に如何わしい噂でも立てられたら大変だし。
はやての家に、とも誘われたけど守護騎士が睨んできたので断った。
理由はフェイトの家と一緒。
なので今はホテル暮らし。金銭的な問題は別に気にならない。一応管理局から二つの事件での報奨金も出たしね。
それにギルガメッシュがいるから当面っていうか生きていくには充分必要ないくらいには蓄えが出来た。
静かな余生・・・っていうとおかしいか。まだ肉体年齢は９歳なわけだし。精神年齢は高いけど。

学校にいって授業を受けて友達と遊んで喋ってなのは達をからかってアリサにボコられて。すずかはその近くで微笑んで見てて。あの忙しい去年が嘘のように充実した生き様を生きる。

「なんか・・・いいな。こういうのも」

屋上で昼休み。弁当を広げて食事中。もうすぐ三学期も終わりという春の入り口。空を見上げてポツリと呟く。

背中にはフェンス。擦れ合って金属製特有のカシャ、と小さな音を立てる。

「なに悲壮感だしてんのよ。まるでおじーちゃんみたい」

「ん――――――あぁ。老けたかな」

アリサのツッコミに顔をゴシゴシ擦って皺を伸ばしてみる。ないけど。そんなやり取りになのは、フェイトすずかが笑う。

何時もの昼休みだ。ただ、周囲の視線が痛い。特に男たちからの。見れば明らかなのがちらほら。

ふん。これも行動の結果だ。悔しかったら行動するんだな。

「あんたねぇ・・・老けたとか9歳が言う事じゃないわよ。わかってる？」

「すまないアリサ。俺は一足先に大人になってしまったんだよ・・・」

ぽん、と肩に手を置く。すると更に強い視線が刺さる。けど俺は負け組の視線など気にしない。

「あ、あん、あん、あんたねぇ！自分でなに言ってるかわかって「わかってるよアリサ」・・・うぅぅ～～～」

顔を真っ赤にしているのはアリサだけ。すずかは常に笑顔でなのはとフェイトに至ってはなにを言ってるのか理解していない様子。
やれやれ。仕方ないな。

「なにを想像してたのかはこの際突っ込まないが、あんな事経験してたら嫌でも子供って事を忘れさせられるよ」

肩を竦めてもう包帯が取れた腕をピシャンと叩く。見た目的には9歳児の体つき。まだ筋肉がきちんとは見えていない。
この世界に来て半年。この体になって半年。この地球でありえない力を得て半年。
その半年で色々な事を経験してればそりゃあ大人にもなる。元々大人だったし。
こうして小学校に通ってると言う事事態が異例。勉強はそう学校程度のレベルなら問題ない。
今まで得た事の反芻として望んでいるので寧ろ好都合でもあった。

オール

マイティのアリサと俺。

理数系のなのはとフェイト。

実力を隠してるのか平均を常に取り続けるすずか。

・・・・すずかがやってる平均を取り続けるのって意外と難しいんだよな。

考え事をしながら昼休みは過ぎていく。教室に戻れば午後の授業とHRが待っている。

下校時間。だが教室から出た俺はトイレにいくといって四人から離

れた。鞄から出したのはフェイトから渡された一つの手紙。
俺がずっとアースラに行かないもんだからフェイトにお使いとして頼んだらしい。それを読む。
差出人は――――――魔導元帥。キシュア＝ゼルレッチ＝シュバインオーグ。平行世界の旅人。
どうやらこの世界にも手を出しているようだ。手紙には魔術文字。
嘗てゼルレッチ公が考案したと言う魔術師にのみ読める偏光塗料でかかれたものだ。

『管理局に入りなさい。今まで転生者と巡り合って来たがそれが一番の方法じゃ。でないと君の事をバラす。てゆーか能力剥奪？』

・・・何者だあの爺。まさか転生者と邂逅してたとは。他にも転生者がいるって事か。
つか、最後はなんだ。そこまでの権限があるのかよ。

『彼は唯一、人の身で神に近付いた人間だからね。そういう事もあるよ』
「うぉっ！？いきなり喋りかけてくんな！？」
『あはは、ごめんごめん。でも彼が其処にいるなら言う事を聞いたほうがいいよ。君の為にもなる』
「どういう、ことだ？」
『君は魔術を知り得た。更にサーヴァントも。元々聖杯戦争の後見人として彼はいたわけだし適役じゃない？』

いきなり頭の中に響く声は件の神。説明めいた口調も今はなるほど、と納得しながら聞いていく。

「アーチャーが先に管理局に入局してるから後でいくか」
『ん。じゃぁ、元帥には僕から言っておくよ。あの子も中々気苦労

が多いみたいだから少しでも軽くしてあげないと」

・・・・あの子？まぁ・・・・神様に年齢の概念はないだろうからそうなんだろうけど。

『それと今度からは面倒だから携帯に掛けることにするよ。ちゃんとでてよね？』

「ん、わかった」

ピロリーン。電子音が鳴った。

携帯電話を見ると連絡先に「神」という一文字が増えてた。

誰かに見られたときの説明は「じん」さんという事で通そう。

「見られる事、ないだろうけどなぁ」

携帯の電源を消してから俺はトイレをでる。向かうのは恐らく待ってると思う四人のもとへ。

下駄箱まで行くと案の定待ってた。

「悪い、待たせた」

「ううん、大丈夫。ただアリサちゃんがおかんむり」

「はは。すずかは優しいからなぁ。アリサは・・・・・・」

「な、なによ！そんな事言っても何もないんだからね！」

「はいはい、ツンデレ乙」

「むっきー！！！あんたなんか嫌いなんだから！！」

へいへい、と軽く返答して靴を履き替える。

「あそうだ。なのは。あとでお前んちに行くからな」

「ほぇ？」

あ、きょとんとした。ちゃんとした理由じゃないと納得しないかな・・・。

「にーさんに用事があるんだ。あー・・・このまま行くか。もう高校から帰ってきてるだろ」

「うん、この時間から今日はいると思う」

じゃぁそれで。ということで話を終える。なんだろう。こういう素直なのもいい。

恭也に話があるからと伝えるとなんかしょぼんとされた。何故だ。

「あ、私もついていっていいかな」

「ん、フェイトも来るか」

コクコクと頷いてフェイトが賛同する。

「んじゃ、帰るか。すずか、アリサ。また明日な」

「しょうがないわね。また明日ね」

「うん。また明日」

アリサとすずかは迎えが来てるようで校門前に車が止まっていた。手を振って別れると二人は車に乗り込んで走っていく。

「んじゃいくか」

アリサとすずかを見送ったら次は俺たちだ。さっさと帰路につく。

高町家へとやってきた。陽もまだ落ちてない夕方。寄り道もしない優良児なので時間をいつも弄ぶ。
家の中は道場があるためか敷地は広い。俺はそっちに足を向けてから家に入ろうとするなのはを呼び止める。

「なのは。あとでお兄さんを呼んでくれないか？道場で待ってるから一人で来てって。そう言えば判る」
「ほぇ？あ、わかったよ！」

下駄箱でも話したように言われた通りに返事をして家に入っていく。
後は待つだけ。
フェイトも一緒に家に入ろうとしたのを制して道場に連れて行く。

「なのはだけ別行動なんて。どうしたの？」
「ん？なのはに聞かれるとちょっと、な」
「それは私が聞いてもいい事？悪い事？」
「・・・・じつは両方だ。まだ迷ってる」
「・・・そ、か」

言葉を濁してはぐらかす。後でちゃんと説明するからと言う事で今は言及を逃れる。
道場の真ん中に座り、恭也を待つ。俺の隣にはフェイトが座ってる。
十分も掛からなかったが恭也が道場にやってくる。

「待たせたかな？」
「いえ。ほんの数分なら気にもなりません」
「そうか――――」

道場の入り口に向かい直して恭也を見る。優しい笑みを浮かべている。

「なのはは連れて来てないが・・・」

「えぇ。なのはには聞かれたくない話なので。吸血騎から小太刀二刀御神流の使い手へ」

其処まで言うと恭也も表情を変える。妹の友達に向けるものではない、戦士としての顔を。

俺の前に正座する。場の雰囲気を変える程の圧倒的な気合。

あの時もこの雰囲気の中で闘いたかったな。いや、此れから望めば出来る事か。

「貴方達高町家は高町なのはと魔法を受け入れました。間違いはありませんか？」

「あぁ。それがなのはの為になるなら、と。やっとあの子にもやりたいこと、将来のビジョンが見えたんだ。嬉しいよ」

「ですがそれはなのはを追い詰める原因にもなってしまった。家族なら・・・兄ならわかるでしょう」

「・・・あいつの性格はわかってるつもりだ。考え出したら一直線なのも」

あぁ・・・ちゃんと理解してたな。それはとても喜ばしい事だ。

それなら話も早い。只・・・・此処から先は未来改変の恐れもある。

俺がいる時点で既に改変は起きているわけだけど、覚えてる原作知識ではリィンフォースもいない。マテリアルも消滅する。

だが今は俺の手の中。俺が良かれと思う未来に向かっている。皆が幸せになる未来。

だからこそ。アレは起こしてはいけない。

だからこそ。俺はこの人に頼み込む。他に適役はいない。

「貴方に――――――お願いがあります」

恭也Ｓｉｄｅ

今日は自主休校にした。朝からだるい。とはいえ訓練や鍛錬は怠る事無く今日の分は終わらせた。
その分店のほうにも顔を出して手伝いをした。昼過ぎには美由希が帰ってきたので店番を代わる。
自室で自主的に勉強をしていたらなのはが学校から帰ってきて道場で『彼』が呼んでいると告げられて。

「おにいちゃんいる？ちょっといーぃ？」
「なのはか、おかえり。あいてるよ」

ノックの後に声がしたので俺はなのはを迎え入れる。可愛い妹が部屋に入ってきた。

「あのね、綾人君が道場で待ってるから一人で来てって。お話あるからっていうんだけど」
「道場で？なんだろうな」

椅子から立ち上がり部屋を出る。出掛けになのはの頭をポン、と撫でてから笑みを向けるのも忘れない。
俺は良いお兄さんなのだ。可愛い妹に近付く虫を排除するのも俺の

仕事だ――――。
だが彼はどうなんだろうなぁ。彼になら、と少しだけ思ってしまうが・・・月村のつきあいもある。
・・・決めるのは本人同士だ。俺がとやかく言っても仕方ない。

「おにいちゃん、綾人君と戦うの？」
「いやまさか。俺じゃきっと勝てない。まだ――――」

ふと脳裏に浮かぶのは月村の屋敷での戦闘。久しぶりに敗北を喫したあの戦い。
道場で待つ。相手方の敷地に来る事がどういう意味か知らないわけではないだろう。
恐らく――――。

「・・・・ん？」

道場の前まで来ると靴が二つ。この靴はフェイトちゃんか。道場の中を見れば二人で座って待っている。

「待たせたかな？」
「いえ。ほんの数分なら気になりません」
「そうか――――」

座ったままで此方を向く少年（綾人）と少女（フェイト）。少し杞憂だったかな。
薄い笑みがこぼれるのを感じながら俺は道場へと足を踏み入れた。

「なのはは連れて来てないが・・・」
「えぇ。なのはには聞かれたくない話なので。吸血騎から小太刀二刀御神流の使い手へ」

こいつ・・・あぁそうか。つまりはなのはに聞かれたくない相談事か。
闘う者として闘う者へと逢いに来た。なら俺も其れに応じる。家族の友人にではない、武人として。

「貴方達高町家は高町なのはと魔法を受け入れました。間違いはありませんか？」
「あぁ。それがなのはの為になるなら、と。やっとあの子にもやりたいこと、将来のビジョンが見えたんだ。嬉しいよ」
「ですがそれはなのはを追い詰める原因にもなってしまった。家族なら・・・兄ならわかるでしょう」
「・・・あいつの性格はわかってるつもりだ。考え出したら一直線なのも」

驚いた。いや、確かに魔法の関連者ならその切り出し方も最もだ。
そしてそれを容認したうちもうちだ。
小さい頃に手をかけて上げられなかったなのはが自分の意思をまっすぐ伝えに来た年末。
将来を見据えて話をするなのはの眼に迷いはなかった。そしてフェイトちゃんにも。
昔からなのはは聞かん坊なところがある。頑固というか。自分を犠牲にしてでも誰かを助けたいと思うのもそうだ。
この少年はそれを理解した上で俺に向かってこう言ったのだ。

「貴方に――――――お願いがあります」

綾人Ｓｉｄｅ

「貴方に――――――お願いがあります」

切り出しとしては充分。あとはどう伝えるかだ。いや、普通で大丈夫か？深く読んでくれればいいんだが。

「なのはの護衛役として管理局にきませんか？」

「っ！？」

意外な事だったらしく恭也の顔が驚きに染まる。

「此れから先の事ですがなのはは無茶をします。それも命に関わるレベルで。俺はそれを未然に防ぎたいんですよ」

「それが本当だとして・・・その真実は何処から来る？」

「それは言えないんですよ。ですが近いうちに起きると言う事は確かです」

「それも・・・魔法で得たことと感じていいのかな」

「貴方の納得のいくように」

深くは言えない。それこそ歴史改変だ。夜天の書事件の時みたいなものじゃない。一人の人生を変えるほどの改変。

恐らく修正力やらが掛かってくるだろう。だがそれは俺が出来る限り何とかする。

「なのは自身に何かあった場合の保険ですよ。貴方になら・・・御神の剣士にならと思い頼んでいる」

「・・・・・・・・」

考えているのか恭也は黙ってしまった。そりゃそうだ。いきなり妹を護ってくれって言っても信じきれるかどうかだ。

もう一押しするか・・・？

「護衛に関してですが――――出来れば内密に行ってもらいたい。なのはも兄が護衛についてると判ると最大のパフォーマンスが出来ないかもしれない」
「あぁ、それは判る。肉親の視線ってのはいつもそうなる事が多い。だが・・・少しだけ考える時間をくれないか？」
「構いませんよ。出来れば・・・そうですね。夏までには聞かせてもらえれば」
「あぁ判った。これで用件は終わりかな？」
「えぇ」

此方からの用件は伝えた。後は恭也がどう動いてくれるかだ。出来れば士郎さんもこちら側に引き込みたいが・・・。
厭、無い物強請りだな。其処まで強請ってはいけないんだろう。
話が終われば立ち上がる。ソレを見て恭也も立ち上がった。フェイトに手を伸ばして立ち上がらせる。

「じゃぁ俺は此れで。フェイトはなのはのところ？」
「うん。そのつもり」
「そっか。じゃぁ、一応約束。今の話は絶対になのはに言っちゃダメ。いい？」
「う、うん・・・なのはに言っちゃダメ、ってのはきついかもしれないけどがんばる」

グ、と拳を作って気合を入れるフェイト。

「じゃぁ、帰ります。今日はどうもです」

恭也に一礼をして道場を出て行こうとする。すると後ろから声が掛かった。

「君が向かおうとしてるのは何処か――――今度聞かせてくれ」
「・・・・・・・・・・俺が向かうのは皆が幸せになる世界ですよ」
背中越しにそう呟いた。聞こえたかどうかは判らないが――――
ソレを言う事で俺は俺自身に戒めを作ったんだ。

第四十五話　フェイト＝テスタロッサ

フェイトＳｉｄｅ

春もうらら。もうじき終業式というやつが始まる。何時も通りに授業を受けて終業式の準備にかかる。
とはいえ私達は特にやる事もなく参加する側なのでその日を待つだけ。
今日もみんなで帰ろうって事になって。ソレは起きた。

「さ、帰りましょう！今日は見たいＴＶがあるのよー」
「あ、７時からの特番？」
「そうそう！録画はしてるけどやっぱり生で見たいじゃない？」

アリサとなのはがおしゃべりしてる。すずかと綾人は席が隣だから二人でこっちに近付いてきた。

「フェイト。今日暇か？」
「え？うん、今日は特に何もないから暇っていえば暇だけど・・・？」
「そか。んじゃちょっとつきあってくれ」

ふぇ？

「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？！？」」」

なのは、アリサ、私の声が教室に響いた。クラスメイトが一斉にこっちを見て恥ずかしかったけど。
でも今はあ、えっと、その、あれ？なんだかよくわからなくなって

きちゃったよ。

「ちょ、ちょちょちょ！綾人！ア、アンタなに言ってるの！？いきなりフェイトにその・・・」

「フェイト。リンディに土産か何か買って行ったほうがいいか？少し世話になるし」

「え、あの・・・うん。なんでもいいとおもう、よ？」

な、なにをいってるのかな？かな！？リンディ・・・母さんに世話になるって。

それにつきあってくれって。それってあれ、だよね・・・恋人になるって。

うぅ、顔があっついよぅ。まともに真っ直ぐ見れないよ・・・。

「ぅ・・・いぃ、よ？」

か細い声だ。視線が泳いでるのが判る。こんなの初めてだもんね。

私、嬉しいんだ。

「ちょぉっと待つの！綾人君はわたしがもらうの！」

「なのはっ！？それは聞き捨てならないわ！綾人は私の執事にするんだから！」

横からずずいっ、と入ってくるアリサとなのは。え？これどういう状況？

「もう、だめよ？少しは大人しくしてないと・・・私、怒っちゃうよ？」

綾人のすぐ後ろにいたすずかがプレッシャーと一緒に威圧してくる。

くっ・・・これが眷属の力というやつなの！？

「でもっ！でもでもっ！綾人君はわたしがもーらーうーのー！！」

なのはがばたばた腕を振り回して暴れだすのを後ろに回って羽交い絞めにして大人しくさせる。

「お前ら、さっきからなにを言ってるんだ？」

首を傾げる綾人。私達はキョトンとしてしまった。

「アンタがつきあえとかいうからじゃない！」

指をさすアリサ。更に傾げる綾人。

「ん？なに言ってんだアリサ。これから本局に行く用事があるからついてこいって言ってるんだが」

綾人Ｓｉｄｅ

「ん？なに言ってんだアリサ。これから本局に行く用事があるからついてこいって言ってるんだが」

「っ・・・・はぁ、もうっ。判りにくいわよ！」

「何でお前が怒ってるんだ？」

まったくよくわからん。隣のすずかはニコニコ笑ってるだけだし。

時折プレッシャーを感じるけどな。

「まぁいいや。すずか、フォロー頼むな？今度埋め合わせする」
「うん、おまかせ」

アリサとなのははすずかに任せておくとしてフェイトと本局か。まだ本局にはいったことないんだよな。
向こうは向こうでなんだかまだ騒いでる。

「フェイトは本局久しぶりだっけか」
「うん。裁判の時にちょっとだけ行ったかな。ほとんどアースラに居させて貰ってたけど」
「迷子になるなよ？」
「ならないよ！そういう綾人こそ初めてなんでしょ？だいじょうぶかなぁ・・・」

心配そうに見ないでください。そういうフラグは立つんだから。

「向こうに行けばアーチャーがいるから大丈夫だろ」
「そっか。アーチャーさんも嘱託魔導師になったんだっけ」

能力を生かして先兵やら隠密やらをやらされていると伝言がくる。

「転移自体はポートじゃなくて俺の能力使うからな。一瞬だよ」
「あ、あのスキマってやつだね」
「実際には中に入らないで直接空間つなげるからな」

中を見られたら大変だ。特にはやてには内緒にしておかないとリィンフォースのことがバレたらややこしくなる。
今度マテリアルズやC．C．にも口止めしておかないとな。三ヶ月

経ってまだ何も言わないあたりは大丈夫と思いたいが。

「でも綾人。教室で管理局とかいうのはどうかとおもうよ？」

「大丈夫だろ。皆信じないさ。直接的なものを見ない限りは人ってのは信じないようになってるんだよ」

そうなのかな、ってフェイトは首を傾げて考えてるが今は時間も惜しい。

「じゃぁ、なのは。アリサ。すずか。俺たちは先に帰るから。気をつけて帰れよ」

「うん、綾人君も」

「アンタこそフェイトにて出したら許さないんだからっ！」

「どうぞごゆっくり。うふふふふふふ」

・・・すずか。お前が一番怖いぞ。一通り挨拶を終えれば三人とも教室を出て行った。

教室を見渡せば残ってるのは数人くらいか。

「んじゃ、俺たちも帰るか。とりあえずは誰にも見られない場所まで移動だな」

「うん。帰ろう。じゃぁ、私の家なんかどうかな！」

「フェイトの？んー・・・そうだな。そうするか」

転移するポイントはフェイトの家に決定した。帰り道に少しだけ寄り道して土産を買っていく。

地球名物、というか和物が最近は局の中で流行っているようだ。どら焼きを買っていこう。なんとなくこういうのがよさそうな気がする。

箱で何個か買って包んでもらい、両手に持つ。フェイトが片方持つ

と言ったが丁重に断った。
変わりに鞄を持ってもらう。起き勉してるので鞄は体裁の為だけなので殆ど何も入ってない。だって持って帰るの面倒じゃないか。

「悪いな。鞄持たせて」
「ううん、そんな事ないよ。綾人のほうが重いもの持ってるんだしおあいこだよ」

歩道を並んで歩く。それだけなのに何かトクベツなものに感じてしまう。
なんでもない日常がずっと続けばいいのに、と。そう考えてしまう。イレギュラーが出てくる事なくこの生を全うできれば、と。
周りにいる皆と一緒にずっといられたらと思う。でもきっと。それは出来ない。
生まれ変わったときに既に俺の路は決まった。血塗られた路。現実とは違う夢幻の路だ。
この世界に来てまだ数ヶ月だが、こんなに愛しく思うのは・・・・きっとフェイトやなのはたちのお陰なんだろう。
満たされる毎日に。俺は何時しか安寧を望んでいたのか。

「・・・と・・・あ・・・やと？」
「――――――っ？！あぁ・・・・なに？」
「だいじょうぶ？なんだかずっと怖い顔してたよ。考え事？」
「いや、大丈夫。何でもないよ」

怖い顔、か。表情に出てたのはマズったな。心配させないように笑顔を見せるけどフェイトの顔からは不安の色がずっと見えてる。

「少し・・・疲れただけだよ。色々と不安要素がある。これからの事とかな」

「綾人はアレだよ。自分の分のほかにみんなの分も背負い込んじゃうからなんだ。もう少し肩の力を抜いてもいいと思うな」

・・・・この子は見抜く力がある。まさか其処まで見ているとは思わなかった。

みんなが幸せの世界など、そう容易く出来るはずがない。でももう決めたんだ。

「じゃぁ・・・少し持ってくれるか？」

「ぁ・・・うんっ！！」

沈んでた表情が一気に明るく照らし出した。

「ははっ、やっぱフェイトは笑顔のほうがいいな」

「えぇっ！？」

「どんな状況でもその笑顔があればきっと俺は乗り越えられると思う」

「うぅぅぅ・・・・・」

今日何度目かにもなる真っ赤なフェイト。そう遠くない未来にフェイトに・・・いや、なのはとはやてにも話をしよう。

出来るだけ負担は無い様に。表の綺麗な部分は任せよう。その代わり裏の汚い部分は俺達の出番だ。

取り留めのない会話をしながらフェイトの家につく。懐かしいな。

そういえば夜天の書事件からこっち来てなかった。

フェイトの着替えをリビングで待ってから準備する。制服では何かとアレなのでバリアジャケットに着替える。

一瞬にして仮面無しのゼロへと変身。今はまだ身長が追いつかずにミニサイズだがそれも体の成長と共に補えるだろう。

・・・・ん？そういえば俺って真祖の力を持ってる不老不死だよ

な。体の成長ってするのか？
其処の所今度聞いてみるか。もし成長しないというなら幻惑魔法か何かで姿を偽ればいい。
今連絡すると途中でフェイトが来てしまうことを考慮して時間のあるときにと言う事にした。

「おまたせ綾人。行こうか」
「あぁ。行こう」

人一人通れる大きさのスキマを作り出して空間を連結する。アーチャーが向こうで待ってるので気配を辿っていく。
向こうは管理局の本局。人目の無いところにアーチャーがいてくれる事を願う。
まずは俺が咲きに通る。向こうの場所の確認だ。一歩踏み出せばすぐ本局。

「ようアーチャー。久しぶり」
「あぁ、マスター。久しぶりだ」

さて、周囲の確認。周りは――――――誰もいないか。

「そんなに見渡さなくても誰もいないぞマスター。そういう条件ではないと使えないだろう」
「そうだけどな。管理局にはこの能力を知られるのは勿体無いなぁって思うんだよ」
「マスターの・・・いや、私達もそうだ。サーヴァントの力も管理局には絶大的にインフレした兵器と見ていい。そんなものを知られたら恐らくマスターは・・・くっ」

おい・・・何故目頭を押さえて泣いている。

「とにかくフェイトをつれてきたから技術局にいくぞ」
「フ――――心得た」

アーチャーとの会話を早々に終わらせてスキマの向こうに手を伸ばす。掴まれた感覚がしたのでそのまま引っこ抜くように腕を引いたらフェイトが出てきた。

「おまたせ。さぁ行こうか」
「え、あ、うん・・・・え?!」

そういやフェイトはスキマをくぐったのは初めてか。いきなり本局に出ればそりゃびっくりするよな。
その前に驚くって事は信じてなかったのかよ。あれだけアースラで使ってたのに。ちょっとショックだ。

「こんにちはフェイト嬢。此処は本局の技術部近くだ」
「あ、アーチャー。こんにちはっ」

腰を思いっきり曲げて礼をする。

「そんなに硬くならなくてもいい。今日の私は付き添いなのだから」
「そうなん、ですか?」
「そうなんですよ」

アーチャーの柔らかい笑みがフェイトを解かす。

「アーチャー。そろそろ」
「む。情緒が無いなマスターは。挨拶と言うのは必要なものだぞ」

ブツブツいいながらさっさとアーチャーを先頭にして移動を開始する。フェイトへのフォローも忘れない。
少しだけ進むと扉の前でとまる。

「さて。ここが技術局だ。準備はいいか？なにが待ってるか判らない巣窟だ。なにが起きても臆さない気概を持っていけ」
「脅かすなアーチャー。フェイトが怖がる」

案の定だ。フェイトはアーチャーの一言でビビりがはいってしまった。

「別に普通だし大丈夫だから。マッドな奴らがいない限りは――――」
「ピィッ！？」

いかん、俺も驚かしてしまった。もうフェイト涙目ジャンか。

「うぅ・・・怖いよぉ」
「アーチャー。まずお前が入れ。フェイトを泣かした罰だ」
「・・・了解だマスター。理想を抱いて溺死しろ」

プシュン、と扉が開く。すると中から機械音が鳴り響き――――――コードが溢れんばかりにアーチャーを包み込んで――――――喰われた。

「のっ、のわぁあああぁぁぁぁぁああああああ！？」

アーチャーの絶叫が本局に響く。だがしかし助けに来る気配はない。
ここは技術局本部。誰もが避けるマッドな空間。其処に助けに来るヒーローはいない。

さらばセイギノミカタ。お前の事は忘れない――――――。

「いやまて！まだだ！まだわたｓ」

喋ってる途中にコードに完全に覆われて声が届かなくなった。そして――――――コードはゆっくりと部屋に戻っていく。

まるでそこには誰もいなかったかのように静寂だけを残して――――。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人して扉を見続けている。扉は音もなく閉まり、また静寂がやってきた。

隣を見るとフェイトが完全に恐怖に支配されて涙目だ。

「大丈夫だフェイト。俺はお前を残してはいかない」

「・・・・ほん、と？」

くっ！その上目使いは卑怯だ！だが俺は刻の涙を見た！

「もし俺が無事に帰ってこれたら――――――あの日言えなかった言葉を言うよ」

「綾人っ！」

フェイトの伸ばした手が俺に触れることは無かった。既に俺は駆け出していたのだ。あの魔窟への扉を。

そして扉に手をかけた瞬間に扉が開く。

「「っ！？」」

中から出てきたのは一人の若い女性だった。

「あれ？君がアーチャー君の言ってたミラージュ君？待ってたんだよー♪」

「え、あ・・・・はぁ・・・・・」

空気を読まないっぷりはクロノにも勝るとも劣らない。俺の手をとって握手してブンブン振り出すとか。もうナンナンデスカー。

「で、そっちの子が今回のいけｎ・・・ゴホン。依頼の子ね。確かフェイト＝テスタロッサさん」

「はい・・・・」

状況が飲み込めてないフェイトは女性にお辞儀をして挨拶する。

「・・・なんだこの流れ」

半眼でこの流れに追いつけない俺がいた。部屋の奥をチラッと見たらアーチャーが優雅にソファに座って紅茶飲んでたのでスキマから転送させて一撃殴っといた。

フェイトＳｉｄｅ

技術局に吸い込まれていくアーチャーを見送ったあと、綾人が扉に

向かっていった所で中から女性が出てきた。

「で、そっちの子が今回のいけｎ・・・ゴホン。依頼の子ね。確かフェイト＝テスタロッサさん」

「はい・・・・」

うぅ・・なんだろう。あんな部屋から出てくるんだからきっとっ――――――！！！

少し警戒してた方がいいかな。いつでも動けるようにしておいた方がいいかな。だって今いけにえって言おうとしたよ！絶対そうだよ！

「ああ。アーチャーから聞いてたと思うけどフェイトのデバイスの調整をお願いしようと思って」

「うん、聞いてるよ。マリーからもデータは借りてるからすぐにでも動けると思う」

綾人と女性が喋ってる。私はよくわからずに二人の顔を交互に見た。何を話してるのかちょっと良くわかってない。アーチャーは無事なのかとか頭に過ぎる。

バルディッシュの調整？でもこの前定期検査したんだけど遣り残した事でもあったのかな。

「フェイト。この前ナノハの家で恭也に言ったの覚えてるか？」

「うん。なのはの護衛の話だよね」

「お前にも降りかかる可能性がある。それならそうならないように地力をあげるしかない。バルディッシュも。お前も。

今以上に強くならないといけない。でもただ強くなるだけじゃない。強さの意味。力の意味を知って育て」

あぁ・・・綾人は私を心配してくれてるのか。気持ちが落ちないよ

うにこうしてアーチャーと一緒に私を楽しませてくれようとしてたんだ。
友達を護りたいのは誰も一緒だよ。なのはもアリサもすずかも・・・綾人も。
皆を護りたいのは貴方だけじゃないんだよ。皆で一緒に考えられるから強くなれるんだ。

「うん。強くなる。みんなを護れる強さと、皆に頼る力を」

きっとこれは正確な答えはないんだろう。でも綾人は私の答えを聞いて笑ってくれた。
迷ったら頼る。だって私は独りじゃないから。友達も家族もできた。
だから・・・綾人が迷ったら私達を頼ってもいいんだよ。
まだ綾人の事はちゃんと知らないけど・・・これから知っていけたらいいなぁ。

「武器の扱い・・・バルディッシュのザンバーフォームでの戦闘方式はセイバーから習え。あいつが一番適任だ。
あとは魔力の運用とかだが・・・キャスターを呼べれば一番いいんだよな。C.C.に頼むか」

私は綾人についていく。きっとこの人は何かをする人だ。だからそれまで傍にいたいんだ。
初めて会った時からずっと。きっと。この気持ちは変わらなかったんだ。
いつかそれを伝えられる勇気を持てるまで。心に仕舞っておこう。

第四十六話　聖剣伝説

アースラ内で爆発が起きた。一瞬にしてレッドアラートが鳴り響く艦内。
クルーがあわただしく動き回る。

「アラート！アラート！居住ブロック内で爆発を確認！近辺の者は至急確認に急げ！」

メインブリッジで原因究明を急ぎながらエイミィの指示がスピーカーを通して艦内全てに届く。
直ぐに後ろには責任者であるリンディ＝ハラオウンが。
ブリッジの入り口にはクロノ＝ハラオウンが既に武装していつでも動けるように準備完了していた。
コンソールを叩く機械音。アラート音。モニタの映し出される音。どれも最速。
ブリッジメンバーに余裕の顔は無い。最高のポテンシャルでもって此れを対処する。

「動ける者、武装局員は居住ブロックに急いで！非戦闘スタッフは非難を！」

リンディの的確な指示が飛んでいく。ちら、とクロノを見てから一つ頷くとクロノも頷いてからブリッジを出て行く。

「今執務官も向かいました。共同してこの騒動の終息を」

スピーカーに声を乗せて先に向かったクルーやスタッフを鼓舞する。
エイミィはずっとコンソールを叩きながら頭にある事をリンディに

報告する。

「一体何が起きたんでしょう・・・・詳細まではまだ判らないんですけどあそこはセイバーさんたちの部屋に近いですし」

「・・・・原因、だったりして？」

「あはは・・・・・まさか」

強ち否定できない存在だから困ったものだ。二人はサーヴァントと言う存在を詳しくはまだわかってはいない。

科学と言う魔法で培ってきた情報知識では純粋な魔力での理を理解するのはまだ幼い。

そして原因が解明されるのには時間は掛からなかった。

そして時は数刻戻る。

セイバーＳｉｄｅ

マスターが有事でない場合は好きに行動しても構わないと言われたので今はアースラにご厄介になってます。

とはいえ本局のアーチャーとマスターとの橋渡しの役目もありますが。ちなみにランサーは地上でバイト生活です。ギルガメッシュは知りません。

如何せん此処は住み心地が良いのです。特に食事が美味しい。地球の食べ物以外のものが食べれるとなれば黙っていられませんよ。

服装は昔に凛から戴いた服を着てたりします。この服は実に気に入ってます。

そして現況は以前に戴いた個室を住処としてこのアースラの武装隊

員の訓練にも参加しつつ隊員への訓練もしています。
どれだけ魔力があっても其れを揮うだけの体力があるか無いかで変わりますからね。
今日は休憩日という事で自室で聖剣のお手入れをすることにしましょう。
艦内ではわかりませんがきっと地球ではいい天気なのでしょう。これだけ気分がいいとなるときっとそうです。
聖剣を取り出して整備。魔力を通してみたり振ってみたり。

「ふむ。満足です」

ライトに照らし出される一点の曇りも無い聖なる剣がそこにある。
私は満足げに誇らしげに聖剣を眺めてから霊体化させようとした時。

――――――――――それは起こった。

爆発。そう。それは爆発だった。霊体化して仕舞おうと思った矢先に聖剣が爆発したのだ。其れはもう盛大に。

「けほっ・・・な、なんですか一体！」

爆煙の中何がどうなったのか全く判りません。状況が掴めないまま部屋の煙の中で立ち尽くす。
ダクトは動いてはいるようです。ですが煙の量が排出量よりも多い。
キャパシティが多すぎる。
空調の強い音が煙を吸い込んでいく。濃霧のように化していた煙も徐々に薄く晴れ上がっていく。
私の手から離れた聖剣を探そうと周りを見渡すが――――――剣が何処にもない！

「私の剣が・・・霊体化したまま?――――――反応がない。となるとまだここ・・・・に・・・・・・?!」

煙が晴れると其処には――――――『ナニカ』がいた。

顔?が長くてシルクハットを被ったナニカ。

???Ｓｉｄｅ

誰だ私を呼んだのは。私を召喚するとは不届き者極まりない。何せ私の伝説は１２世紀から始まったのだ!

「貴様は誰だ!」

この私のステッキで近くにいた女を指す。どうやらこいつが私を呼んだようだな。

「貴方こそなにｍ「莫迦め!聞いておらんわ!」・・・っく」

「そんな事を聞いているのではない。何故私がここにいるかだ。さぁ、言ってみろ」

「そんな事知りません!だいｔ「私の名前はエクスキャーーーリバーーー!!伝説の聖剣である!」・・・・・・ウザッ!」

ステッキを幾度か回してかかとをつける。これが私が１４世紀に編み出した礼儀作法の一つである。

私の名乗りの後に何か言ったようだが私は心が広いからきにしないのである。

「
」
「ウザッ！というか喋りなさい！」
私の必殺の存在感が少女を包み込む。賛辞の声を上げる少女に私はステッキを向けてこう言い放ったのだ。
「娘。ここはどこだ？」
「・・・・此処はアースラです」
「ばかめ！私の伝説は１２世紀から始まったのだ！」
「話を聞きなさいこの変態動物が！そして私のエクスカリバーを何処にやりましたか！」
「私がっ！エクスキャリバーーーーーーーーーーーーである！」
「認めないっっっっっっ！！！！！！？」
「口調が荒いぞ、娘。娘であるならもう少し協調性を持ってだな」
仕方ない。私がじきじきに説法を施そうではないか。
セイバーＳｉｄｅ
聖剣がなんだかよくわからないものに変身しました。まる。
「一体何が起きたというのですか・・・・これも抑止力とでも言いたいのですか」
目の前でタップダンスをしている奇妙な生物に半眼で睨んでいるのですがこれがまた何も意味を為さないという。
あぁ、もうっ！これからどうしたらいいというんですか。

「セイバーさん？一体なにがあったんですか。開けてください！」

と、扉の向こうからクロノ執務官の声が。

「鍵は開いてるはずです。入ってきてください。緊急事態です」

そうすると扉が開く。残ってた煙は全部廊下に噴き出て部屋の中はクリーンになった。

「邪魔をす・・・・・なんだこれは」

「わかりません」

奇妙な生物を見てクロノ執務官が伺ってきた。そんなの私にもわかりませんよ！なんとかしてくださいよ！

「挨拶が送れたな。私がエクスカリバーである」

クロノ執務官が挿した奇妙な生物は自分がエクスカリバーだとのたまう。信じられません！私の剣がこんな残念な姿になるなんて！

「・・・君の剣はこうなるのか？」

「まさか！ありえません！」

「だが今こうして此処に居るのは・・・・」

否定できない。此処でクロノ執務官に冒頭から説明をすると頭を抱えて黙り込んでしまいました。寧ろ私が頭を抱えたい。頭痛が酷い。

「君の名はエクスカリバーでいいのか？」

「む？何者だ貴様は。その成りで何者のつもりだ？」

「僕はクロｎ「莫迦め！そんな事は聞いておらぬ！」・・・・・っく！」

クロノ執務官が苦み走った顔をしている。あぁ、相当ウザいんだろうなぁ。私もウザいとおもったし。自分の剣だけど。いえ、認めませんけどね。

「見たところ・・・貴様らは魔導師だな？」

「杖を人に向けるな！」

「そうだ。私の歌を聞かせてやろう。光栄に思え」

杖を向けられたクロノ執務官。もう何がなんだか。

「えくすきゃーりヴぁ～～～～えくすきゃーりヴぁ～～～～♪

フロムユナイテッドキング

アイムルッキングフォヒム

アイムゴイングトゥキャリフォルニア～～♪」

「「歌うな！」」

私とクロノ執務官の声が重なる。なんでしょうか、この生物は。人を怒らす天才ですか。

「私を怒りに誘うものとか周りが勝手に言ってはいるがそんなことはない。私ほど人類を喜びに打ち震わす存在はいないというのに。

ところで私の武勇伝が聞きたいか？」

話を飛ばさないで戴きたい。まったく意味不明です。

「よろしい。ではその前に5分間の休憩だ。正座してから逆立ちし

て待っていたまえ」

エクスカリバー（不本意ですが）はくるりと後ろを向いてステッキを振りながらソファに座る。なんでしょう、凄く自然です。これが私の剣だったとはっ・・・私の宝具だったとはっ・・・・。涙で前が見えない。

「セイバーさん、泣かないでください。これはきっと悪い夢・・・・」

クロノ執務官が私の肩を叩いてくれる。慰めなど要りません。

「そうだ！管理局の技術力で私の剣を治してくださいよ！あんなの私の剣じゃない！」

「原因がわからなければ何も手が出せないだろう！君も落ち着け！？」

クロの執務官の肩をがっしと掴んでガックガックと揺さぶる。ほら、これで気持ち悪くなったでしょう！離して欲しかったら首を縦に振りなさい！

「私の伝説を話してやろう。あれは今日と同じ金曜か水曜だった。いや、日曜だったかもしれない。そんな午後の朝焼けが眩しい時間だ。

私が何時ものようにモーニング珈琲を飲みながら夕刊を飲んでいた時。つまりは夕方。そう夕方だ。朝ではなかったかもしれない。何しろ昔の事だ。色も褪せる。

そんな中私のワイフがこう言った。言わなかったかもしれない。どっちでもいい。貴様ら正座はどうした。正座の仕方を忘れたのか？」

ソファに座ってたエクスカリバーが話を始めました。正直ウザいです。なんとかして。

「マスターならなんとかなるかもしれないっ・・・」
「綾人なら今の時間はフェイトと本局だから時間かかるぞ・・・」
「ぐふっ・・・」

神は死んだ！
『死んでないよ！勝手に殺さないでよ！ひどい！うわぁん！』
何か泣き声が聞こえたかもしれないし聞こえなかったかもしれない。
もうこいつの前ではどうでもいい。
ともあれ、今はこのエクスカリバーをどうにかしないといけませんね。どうにかなるんですか？どうしたらいいですか？
プランB、つまりピンチです。

「・・・これが・・円環の理とでもっ・・・！」
「セイバーさん。君は少し落ち着いたほうがいい。さっきからもう支離滅裂だ」

そんなことはありません。フフフ。私は至って普通です。

「なんでしょう。怒りがこみ上げてきますね。あの顔見てると」
「君もか。実は僕もさっきから怒りが沸点を超えてきてる」

なんとも同じ意見とは嬉しいですね。ではこれからアレをなんとかしましょう。えぇ主に物理的な何かで。

「私を使うにして守って貰いたい１０００の項目の中でも5時間に渡る私の朗読会には参加してほしいところだが」

「そんなものは今はどうでもいいです。今は貴方をなんとかするほうが先決です。主に物理的な何かで」
「まだ5分経ってないぞ。正座も知らんのか無知な奴め」
「・・・クロノ執務官。私はもう疲れました。後を頼みます」
「僕に丸投げ！？」

もう寝ます。これは悪い夢。そう夢なんです。だからおきたら何事もなかったように静かな日々が始まるのです。
そそくさとベッドにもぐって布団をかぶってシャットアウト。なんだか声がするけど気にしない。
私は貝になりたい。

クロノＳｉｄｅ

・・・・クロノ＝ハラオウンです。
居住ブロックで騒動が有ったので行ってみたらカオスでした。

「これなんてカオスフル」

発端者のセイバーさんは寝始めるし。でももうすぐご飯の時間だし起きるだろう。そこは心配ない。
心配なのは――――――あの存在だ。

「

」
「ウザッ！」

なんだこいつ。マジでウザすぎる。少しは自重しろよ。

「私が何者なのか、其れが知りたいか」
「教えてもらいたいものだね。君が何処から来た何者なのか」

それがわかれば対処できそうだ。次元漂流者かそれとも召喚されたのか。ユーノの負担が大きくなるけどユーノならどうでもいい。

「私はエクスカーリバーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーである！」
「それはもうわかった。しつこい。ウザイ」

ともあれ、技術部に連れて行くか・・・・綾人もいるだろうしなんとかなるだろう。

「じゃぁ・・・そうだな。いい場所で公演してもらいたいのでついてきてくれるか？」

「いいだろう！ただし！私の三歩後ろを歩くのだぞ」

ステッキでコツコツ叩かれる。うん。軽く殺意が湧くね。これは後で綾人に責任を取らせよう。

セイバーは・・・寝てるからなぁ。寝てる獅子を起こすのも僕に負担が掛かるからそっとしておこう。

このエクスカリバー（仮）はついてきてくれるようだ。公演場所までということでついてくる。

うん。このままあの技術部だな。綾人に先に連絡をしておく。すぐつれてきてくれというので僕はこいつと向かう事になった。

艦長に断りを入れてから本局へ。そして技術部へと向かう。

綾人に渡したら全責任を負わせよう。負わせようったら負わせよう。

綾人Ｓｉｄｅ

クロノから通信があった。今から来るらしい。なんだか切羽詰ったような声だったし他の声が漏れてた。あれ、誰だ。

セイバー関連らしいけど・・・・。

「どうしたの？綾人」

「ん？クロノが来るらしい」

バルディッシュを預けたフェイトが聞きに来る。今までずっと壁に寄りかかっていたのだがほぼ中央でモニタを覗いてる俺に近付いてきたのだ。

あぁ、アーチャーは仕事で技術部から離れていった。今は技術部の主任と俺、フェイトがいる。

「バルディッシュに新機能をつけるのも少し時間が掛かるからな。クロノで遊んでおこう」

「いいのかな・・・」

「クロノだから問題ない」

フェイトも苦笑いを浮かべながらも止めない辺りどうなんだ。

「アースラから直接こっちにだから時間かかるだろ。今のうちに詰めておこうか」

「うん。バルディッシュの性能ＵＰと・・・私の鍛錬だね」

これからのフェイトの進む路を照らし合わせながら自己鍛錬のプログラムを組む。

速度ならランサー。剣術ならセイバーに頼もう。あとはバルディッシュの新しい可能性に賭ける。

お前達なら・・・なのはの親友として一番近くにいたお前なら。きっと止められるだろうと信じてるよ。

「遅くなる前に向こうに戻れよ？俺はもうちょっと本局うろついてくる」

「うん。わかった。きをつけてね」

「ん、わかった局長後を頼みます」

局長に後を任せてからフェイトの頭をポン、と撫でて技術局を出る。
クロノが来る前に場所を変えよう。恐らく――――――とんでもない事になってそうだ。
多少騒いでも平気な場所・・・・訓練ルームか。それなら硬い結界を晴れるのがいるな。場所変更の連絡をしておかないと。
あぁもう。問題が山積みだ。クロノめ。後で覚えてろよ。修繕費とか出たらクロノ宛にしてやろう。

クロノＳｉｄｅ

この珍妙な生物はエクスカリバーというらしい。セイバーさんの持ってる剣と同じ名前だという事は理解した。
つまり、あの剣がコレに変わった、という事だ。意味がわからないよ。

「君が何者なのかはこれからう人物によって判ると思う、けど・・・・」
「心配か？なら私が歌ってやろう」
「遠慮する」

転送する前と後で歌ってただろうお前。あのウザい歌なんとかしてくれ。
本局まで来れば後は技術局まで一直線だ。さっさと押し付けて帰ってしまおう。
と、綾人から落ち合う場所の変更の連絡が入る。訓練ルームに変更、だと？
どうやら多少暴れてもいいようにするらしいので許可を取ってこい

ということらしい。
どうせ執務官ならそのくらいの顕現あるだろうとか好きな事言ってくれやがった。
なので責任は僕が持つが後始末はきちんとしろと伝えおく。
こんなウザいのがずっといてもらっちゃ困る。

その後、訓練ルームで綾人とエクスカリバーの一騎打ちが行われてエクスカリバーは元に戻る事になった。
これでこの事件も終焉。綾人のほうからエクスカリバーは返却しておくという事でこの小さな事件は終息された。

しかしセイバーさんのトラウマはきっちりと刻まれてしまったためか暫くエクスカリバーを出す事はなかったという。

第四十七話　月村すずか

綾人Ｓｉｄｅ

本局でクロノとあった後、エクスカリバーをなんとかした。なんとかしたったらなんとかしたんだ。意外に時間が掛かったのは秘密だけどな。

気付いたら地上の時間に合わせたケータイがかなり夜も更けているのを知らせていた。

別に帰る必要もないんだが戻らないと煩いのがいるので仕方ない。

帰るか・・・・。

「セイバーにエクスカリバーを返していかないとな」

もとの聖剣へと姿を戻した一振りの剣を鞘にいれずに抜き身のまま通路を歩く。

途中何度も職務質問された。なんでだ。流石に抜き身のままはヤバイらしいので布を刀身に巻くということで譲歩してもらう。じゃないと威圧行為になるからとか言われた。

別に王の財宝の中に入れてもいいんだけど、きっと真実を知ったらセイバーは怒り出す。憤怒の形相で。

オルタ化したら大変だしな。主にその場が。なのであんまり怒らせないようにはしないと。

転送ポートに辿り着くとセイバーのいるアースラを経由して地上に降りるルートを選ぶ。

ポートに入り、恙無く転送を開始。体が一瞬だけ宙に浮く不思議な感覚に陥りながらも一瞬にしてアースラの転送ポートへと到着した。

「ん。ついたか」

スキマを使っての空間移動よりも楽だ。今度この技術を応用出来ればいいなぁとか考えたりしながらポートから出た。
転送室の室員に挨拶をしながら部屋を出る。布を巻いた聖剣を方に背負いながらセイバーの居る部屋へとまず向かう。

「リンディの方は後でもいいか」

後回しにした。まずはこの危なっかしいものを返す。おちおちうろつく事も出来ないじゃないか。
風王結界で消してもいいんだけど魔力はあんまり使いたくないんだ。

「セイバー、いるか？」

扉を開けるとベッドで寝てるのを見つけた。もぞもぞと寝返りなんぞうってくれているようだ。
こっちは大変な思いをして戻してきたというのに。本当に・・・・ウザかったんだ。

「セイバー？寝てるのか」

一応声をかける。近付いたら斬られる。くらいの勢いで。と言ってもエクスカリバーは俺の手に在るわけだが。

「エクスカリバー、元に戻してきたぞ」

自分の武器の名にビクン、と身が震えた。其処までトラウマになったのか。
元に戻したと言ってもまだ信じられないのかシーツがもぞもぞと動く。顔さえ出したくないのか。

「いつまでそうやってるんだ。好い加減現実を見ろ。あの旧支配者はもういない」
「本当、ですか？」
ようやっと顔をだす。乱れた金髪が今までを物語っているように。
「ったく・・・ほれ。エクスカリバーだ。もうあんな事にならないようにな」
「うぅ・・・申し訳ありません。まさかあのようなモノが現れるとは・・・不覚でした」
「謝ることじゃないだろ。あれこそイレギュラーだったんじゃないかって思えるくらいだし・・・ほれ」
「そう、ですか。それならいいのですがっと。すみません」
布を捲いた聖剣をセイバーに手渡す。受け取った後は色々と確認しつつ布を取ってはいろんな角度で確認し続ける。
よほどアレが出てこないのか気になるんだろうなぁ。
「さて、じゃぁリンディに逢ってから地上に降りるから。よろしく頼むな」
「あ、はい。問題なく。すみませんでした」
手をヒラ、と返して返礼にする。あとのフォローは後日。まぁそのくらいで潰れるようでは英雄など語れないだろうし。
いざとなったらギルガメッシュにやらせよう。あいつならきっとなんとかするだろう。
部屋から出て通路に躍り出る。後此処でやるべきなのはリンディに逢う事。
何よりもあの手紙の差出人だ。魔導元帥キシュア＝ゼルレッチ＝シ

ュバインオーグ。俺に管理局に入れという内容。
色々と考えて居たがまさか先に手をうたるとは思わなかった。しかもこんな手で。
管理局に入ることは決めた。後々の事・・なのはの撃墜の事。機動六課の事。色々な事がこれから起きる。
それなら近くに居た方がやりやすい。原作知識がある分多少の事には対処も出来るだろうし。
戦略戦術に対しては勉強するしかない。今以上に。幸い時間はたっぷりとある。いや、イレギュラーの事を考えれば少ないのかもしれない。
出来る限りの準備はしておいた方がいい。少なくとも管理局自体の戦闘力の底上げ等を。

「やるべきことは沢山、か」

最良の状況と最悪の状況を考える。色々な搦め手を考えられるだけやっておくべきか。
管理局に入るとして問題はその場所だ。一般的に入るか、キャリアとして入るか。
恐らくなのはたちは将来有望な魔力スペックを持っている。普通にはいかないだろう。
なのはには教導隊から声が掛かっている。フェイトは執務官への道を目指すだろう。はやては捜査官としての道が照らされている。
俺のスペックは管理局には秘匿された状態。つまりは一般入局扱い。なんだ、なら下っ端からじゃないか。
嘱託魔導師になっても道が遅れる。一般入局なら尚更だろう。時間を考えるとどれが一番なのか。

「まぁ、下から行くか。何処まで上れるのかやってみたくもある」

話を纏めてから転送ポートに乗り込む。向かうのはアースラ。
早速転送されてリンディのもとへと向かう。恐らく何時ものブリッジか部屋だろう。
まずはメインブリッジへ。途中クルーに擦れ違って会釈していく。
プシュン、と扉が開きブリッジへ。リンディとエイミィがコンソール前で仕事していた。

「リンディ。ちょっといいか？」

驚かさないように少し遠目から足音を鳴らしながら近付きつつ声をかける。

「あら。本局の用事は終わったの？」
「あぁ。予定外の事も終わった。後でクロノに話があるからと伝えてくれ」
「あんまり責めないで上げてほしいけど、しょうがないわね」

肯定かよ。息子を売るのかよ！前からなんとなく思ってたけど！
じゃぁ後で修理費とか水増ししておくか。そんな事できるくらいの権力もないけど！

「話を戻すぞ」
「どうぞ？」
「入局の件な。進めてほしいんだけど」
「貴方はそれでいいのね？」
「寧ろその路以外はふさがれた感じなんでね。宜しく頼みますリンディ艦長」
「貴方に敬語を使われるのは初めてかしら。なんだかおかしい感じがするわ」
「一応は上司にあたる方になるんで。今まではそういうの無かった

ので。後は敬う相手かどうか？」
「最後の疑問視は聞かないほうがよさそうね・・・わかったわ。人事部と話をしておきます。貴方のこれからと配属場所も含めて後日また話し合いましょう」
「宜しくお願いします。あぁ、その時には名前に問題があるんでその後日の話し合いで
「わかったわ」

頭を下げて礼を。これで入局の話は終わった。あとは地上に降りるだけだ。
リンディに頭を下げて礼をしてからブリッジを出て行く。後はどうなるかは流れに任せる部分はあるとしても。
俺が思う未来へ進められるのかどうかはわからない。それでも行くしかないんだよな。
決意を新たに転送ポートへと向かう。

「よ。また頼むよ」

転送室員に声を変えて地上へのポートを開いてもらう。

「今、地上は何処に繋がってるんだ？」
「現在は地上の協力者の在宅に繋げられております。確か月村、と」

すずかの家か。確かにあの街なら名家だしな。問題もない。何より既に俺という魔法文化と関わったわけだし。
降り立つ先も問題ないので転送してもらう事に。向こう側にもこれから転送しますよ、と伝えねばならないので多少の時間が掛かるとの事。
転送ポートに乗り時間を待つ。瞼を閉じてコレからを考える。
月村の家に行くなら・・・そうだな。明日は週末で休みだしどこ

か行くかな。
なんて考えてたらすぐに時間が来た。転送が開始される。俺はアースラに一旦の別れを告げ地上へと降りた。

すずかＳｉｄｅ

アースラから転送の伝達が来たとお姉ちゃんが教えてくれたので転送に宛がわれた部屋にいく。
既に就寝時間になっていてイブニングドレスに着替えていた私はお姉ちゃんからの伝言に眠気が覚めてしまったのだ。
そう。どうやら綾人君が来るらしいから、って。それはお持て成ししないといけないよね。
上着を羽織り、ファリンさんと一緒に転送室へと向かう。

「あ、もう来ちゃったかな」

転送部屋の扉から光が漏れてる。蛍光灯の灯りじゃない、違う光が扉の隙間から漏れ出てた。
私は急いで扉を開ける。其処には光の中にいる綾人くんがいた。

「ん？あぁすずか。遅い時間だけど邪魔してるよ」
「はい。いらっしゃいです」

ファリンさんは既に部屋の中で転送の後片付けをしている。
私は笑顔で彼を迎え入れる。時計の針は午後１０時を指していた。

「すずか、寝てたのか？」

「え」

綾人君の視線が私に向いてきて一言。あ・・・確かに私の格好が格好だった。

一瞬にして私は顔が真っ赤になっていく。くるぅりと後ろを向いて顔を見られないようにしたけどもう遅い。

クスクスと後ろで笑ってる。恥ずかしくて死にたい。

「時間も時間か。もう遅いもんな。こっちも考えなしだったかもしれない。ごめんなすずか。

で、ファリンさん悪い。すぐ出てくからさ」

え。聞こえた言葉に私はつい振り向いた。真っ赤だった顔がもう戻ってる。

折角来たのに。

「はい・・ですが宜しいのですか?確か――――住む場所はなかったように覚えておりますが」

でかしたファリンさん!ナイス!

「それ、昔の事ですよね。今は住んでるところありますよ。一応・・・多分」

そこでスルーとかわからない。なんでそうなるのかな。かな。

「綾人君はドSだよね」

「言うに事欠いてそれか!」

つい言葉が出た。だって学校で皆と居る時は優しいのに二人になる

と厳しくなるんだから。
とはいえ、判ってる。この血が暴走しないようにと気遣ってくれてるのも。夜の一族としての力を押さえ込む為に傍にいるということも。
私達はそういう契約をしたのだ。夜の一族としての能力を押さえ込むために吸血騎の眷属になる。と。
元々忍お姉ちゃんはその為にずっと訓練していて、恭也さんもそれを知ってる。
私はそういったことが出来ずに未熟なままだったのを綾人君が助けてくれた。それは綾人君が始めてうちに来た日。
恭也さんと闘って、忍お姉ちゃんとも話し合いをして。そして私達がどんな存在なのかを知った時。

『俺がお前の力を抑えてやる。だから俺の傍にいろ』

って。誰にも言えない事だった。普通じゃない事だから。だからアリサちゃんやなのはちゃんにも話していない。
ずっと隠して生きていくのかなって思ってたら先になのはちゃんが魔法使いだって話してくれて。
なのはちゃんたちが教えてくれたときも私だけ先に知ってたから。あんまり驚かなかった。
特別な力を正しく使えるなのはちゃんたちに憧れた、っていうのもある。
アリサちゃんも最初は色々言ってたけど、魔法に関しては肯定してる。クリスマスイヴに海の向こうで見たアレを実際に見た以上は信じるしかないわ、なんて言って。
私のことも。そのうち話さないとね。

「綾人君は今日は泊まっていってね。いいよねファリンさん」
「はい。準備してきますね」

ファリンさんとアイコンタクト。瞬時に私の意志を汲んでくれてすぐさま行動に移る。メイドの鑑ね。

「全く・・・お前の押しの強さには参るよ」
「それについては自重しませんから♪」
「なら速めに部屋に案内してくれ。客室は余ってるんだろ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・フフフ」
「・・・・・怖っ！」

さぁさ案内しましょう。私の部屋へ♪さぁファリンさん！綾人君を私の部屋に連れてってね！
綾人君を引きずるように連れて行くファリンさんの後ろをついていく私。

「色々と話をしてもらいますよ。そりゃもう色々と」
「話すのはいいが方法を考えろっ！」
「ブッブー。申請は却下されました」
「ひでぇ！なにこの独裁！」

だって。そんな事言ったって。
こうやってゆっくり話せるのはもう何ヶ月振りなんだろうってくらいだよ？
だから今日くらいはゆっくりお話したいよ。
綾人君を私の部屋に押し込んでファリンさんは仕事に戻っていった。

「さぁ綾人君！今日はずっとお話だよ！」
「まて！なんでそんなにハイテンションなんだ！」
「・・・・なんとなく？」

お話したいのは本当だから。まど側にあるテーブルに座ると綾人君も対面に座ってくれる。

「学校じゃあんまりお話できない事もあるからね。今の時間はとっても貴重なんだよ」

「まぁ・・・そうか。なのはたちにはまだ言ってないんだな」

「・・・うん。なんだか。怖くって」

さっきも思った事。私を受け入れてくれるのかが怖い。なのはちゃん達の魔法のことは受け入れられたけど。

もしかしたらって過ぎると言い澱む。

「ふぅ・・・何を心配してるのかと思ったら」

「とっとその言い方は酷いと思うんだよ？」

「お前。友達が信じられないのか？」

綾人君のストレートな一言が私を貫いた。そう。そうだよ。私達は友達だから。皆を受け入れられた。なら私を受け入れてくれる、かな？

「まずは相談してみろ。話はそれからだ」

「うん。ありがとう・・・少し楽になれたかな」

「そうか。それは良かった」

いつの間にか視線が落ちていた私が、顔を上げると其処には薄く、笑みを浮かべる綾人君がいた。

その笑顔は卑怯だよ。いくら意識してもそれを真に受けちゃうよ・・・。

「だがそうだな・・・少しは力を押さえつけるように方法は知って

た方がいいかもしれない」
「力を抑える方法？」
「そうだ。丁度良い。明日は休みだしな。ちょっと遠出するぞ。朝には忍に許可を貰っておくから」

遠出。何処に連れていってくれるのかな。あれ？これって・・・・デートになるんじゃない？
うわぁうわぁ。どうしよう！

「そうと決まれば速めに寝るか。どうするんだ？」
「え！？ごめんきいてなかった！」
「ハァ・・・もう寝ろ」

話ちゃんと聞いてなかったよ！舞い上がってた私のばか！しかももう備え付けのソファに横になってるし！
うぅ・・・いいもん。明日思いっきりするから。でも・・・同じ部屋で誰かと寝るのって久しぶりだなぁ。私は私で羽織っていた上着を脱いでベッドに入る。
えへへ。みんなごめんね。もうちょっとだけ独占させてね・・・。

綾人Ｓｉｄｅ

あさおきたらべっどにいた。なにがおきたかまったくわからないがちょうすぴーどってやつをかんじたぜ。
なんだろう。俺は確かにソファで寝たはずだ。夢遊病の気があるわけでもないし不思議すぎる。
隣にはすずかがこっちを向いて静かな寝息を立てて寝てる。わけがわからないよ！暖かい布団だという事は寝ぼけた頭でも判る。

とりあえず・・・状況確認だ。すずかを起こさないように首だけをソファのほうに向ける。一気に視界が広がる。
俺が寝ていた形跡はない。というよりも俺も俺で着替えもしないでそのまま寝てるとか。
時間は・・・朝6時半。カーテンの隙間から差し込む朝陽が眩しくて目を細める。その後一つ欠伸。
すずかを起こさないようにベッドから抜け出る。服とか掴まれてなくてよかったと思える一瞬だった。
超移動したのはもう仕方ないとして今日のことを考える。すずかの夜の一族としての力の制御の為。
恐らくいるはずだ。あの街に。その前にその街があるのかどうかを聞く必要があるな。
静かに部屋を出ると近くにファリンさんがいた。どうやら今回のお世話係りとして忍から拝命されたと教えられた。

「ちょっと聞きたいんだけどさ。――って街があるの知ってる？」
「――、ですか。少し遠くになりますが、あることはありますね」
「そうか。ありがとう。助かった」
「いえ。たいしたことはしておりませんよ。もう少ししたらお嬢様をお起こしになられてから朝食に致しますので」

よし、ビンゴ。平行世界に良くある、あっちにあってこっちにない状況だと困った限りだった。
それならあとは・・・其処に彼らが居ることを望み、信じていくしかない。
不安材料は払拭した。部屋に戻って窓際のテーブル席に座りすずかがおきるのを待つ。
あぁ・・・飲み物を頼んでおけばよかったかな。まぁ・・・後で朝食序に貰おう。

「ん・・・・ぅ」

ベッドのほうを見るとすずかが起きた。上半身だけ起こしてまだ眠たげな目を細めてる。

「おはようすずか」

「うー・・・・おはようあやとくん」

ぼーっとした声と顔で返答してきた。なんだこの萌え生物は！まったくもってけしからん！

「ほら好い加減おきろ。ごはんだぞー」

「うー・・・」

唸ってるとかマジどうしたらいいんですか。誰か答えを教えてくれ！

「じゃぁ、今日は俺はもう帰るから「おきたよ！ぜんりょくでおはようございました！」・・・・・おはよう」

ベッドから飛び降りるような勢いで目覚めたが大丈夫か？

「低血圧なのか？」

「うーん・・・そういう感じじゃないんだけど。朝はいつも起こしてもらったりするから」

なるほど。まぁ気を抜くのは良いけど。

「ちょっと遠くになるから速めに出るぞ。それとファリンさんがもう朝食準備してるからな」

「あ、うん。すぐ支度するからまってて」

そう言ってから部屋から出る。着替えるんだから出るのは当たり前だ。
手持ち無沙汰に壁に寄りかかって待ってると5分くらいしてから扉を開けて部屋から出てきた。
シックな黒のワンピース。ドレープはない。落ち着いた印象を見せる服装は短時間でもきちんと決めていた。

「じゃぁ行くか」
「うん」

二人並んで食堂に歩き出す。食堂についたら既に忍が席に座っており、食事も終わり頃を迎えていた。

「あら。おはようふたりとも」
「おはようおねえちゃん」
「おはよう忍」

今日は出かけるからと伝えて、席に着く。ファリン以下メイドが朝食を運び食事を取る。

「そういえば遠出っていうけどどこまでいくの？」
「ん？あぁ言わなかったか――――三咲って街だ」

第四十八話　遠野志貴

すずかＳｉｄｅ

春先もう暖かくなってきた矢先。週末を利用して遠出という名の旅行デート。と思ってる私。
三咲という地名はあんまり聞いた事がない。とはいえまだ１０年ほどしか生きてない自分にとってだからか。
隣の席に座っている少年は何処まで世界を知っているのだろうか。
瞼を閉じて静かにしているのをしたから覗き込む。
気付かない。いや、気にしていないのか。まるで安心しきったような顔で眠ってる。これから行く場所が私にとって転機になるという。
力の制御の為の小旅行。
小学生二人だけでするようなことじゃない。でも綾人君の押しは凄かった。何よりもその強さを見てるせいか、間違いは起こらないだろう、と姉は言うのだ。
だからこそこうしてたった二人だけでお供もつけずにいる。でも。
それでも。相方が寝てるというのは非常に退屈。
暇つぶしになるものは持ってきていない。最低限の荷物のみだ。一人になるとこうもやる事がないのはどうするべきか、と思う。

「んー・・・・・・」

車窓から見える景色は変わらない。少しだけ。肩に寄り添う。今は誰もいないから。少しだけ、いいよね？
そのまま電車に揺られて数十分。目的地に到着する。寄り添ったまま私もいつの間にかまどろみの中にいたようですっかり眠ってしまったようだ。
綾人君が肩をゆすってくれなければずっと寝ていただろう。

「ん・・ついた？」
「あぁ。ついたよ」

眠い目を擦りながら背伸びをして欠伸を一つ。電車が止まれば立ち上がろうとしたところを綾人君に手を引かれて立ち上がる。たまにこういう所がでるんだよね。紳士的、っていうか。少し混雑してるので引いてもらった手をそのまま握って電車を降りる。ホームから改札を抜けて街に出る。駅前は中々賑わっている。時間を見ればもう昼も過ぎようとしている所だった。

「良い感じに栄えてるんだな、こっちは」
「そうだね。海鳴とは違う賑やかさで楽しそう」
「んじゃ、ちょっと歩くか。多分うろついてれば出会えると思う」

手を引かれて綾人君の後を追うようになって隣に。手を引かれて・・・手を引かれて？
あ。まだ繋いでたんだった。うわぁ気付いたらなんだかとっても恥ずかしいよ！？
綾人君は気付いてないのか普通にしてるし・・・慣れてるのかな。
でももうちょっとだけこのままでもいいかな。

「昼間にいればいいんだけどな・・・他の角度からアタックするか。いやそれよりも・・・」

綾人君は考え事に夢中で私を見てません。出来ればこっちを向いて欲しいな。ちょっとでもいいから。

「あぁ・・・悪いすずか。考え事してた。ごめんな」
「ううん、いいよ。だって私が力を制御しないといけないのに綾人

君に任せちゃってるんだもん」
「そう言うな。何かあったら直ぐに言えば良い。出来る限りは叶える様にするから」

うん。小さく私は頷いた。声には出さなかったけど同じ、視線が合えば判ったよ。
昼も過ぎる時間。昼食、という事でファミリーレストランへと入る。
でも小学生だけで入るようなお店じゃないよね。
でも「ぱぱとままはあとからくるって！」って綾人君がいうのには笑いを隠せなかった。
思わず噴いちゃったもんなぁ。もう・・・私のイメージ狂いまくりだよっ！
やっぱり子供だけというのは不信に思われたのかやんわりと断られるかともったら綾人君がケータイを取り出した。
ケータイを渡すとそこには誰かが向こうにいるようで、店員さんと少し会話をしていた様でもある。
それから店員さんに案内してもらう。どうやら不信感はなくなったよう。よかった。
窓際角の席に案内されて座る。どっちもソファになっており、対面で座るとやっと足がつくくらいだ。

「何か食べておいたほうがいいよ。夜に食べられるかわからない」

座るなりいきなりそんな事を言われた。それって夜は食べれないですよって言ってるようなものじゃない？
それなら少し食べておかないとダメだね。何にしようかな・・・・・。メニューを見ながら考えてると、綾人君はさっきのケータイを弄ってる。

「ごめんすずか。ちょっとだけ電話する」

「うん。別にいいけど・・・」

私の了解を得るとケータイで誰かと喋りだす。凄い気さくに話してるけど誰なのかなぁ。私の知らない人かなぁ。うーん。気になって仕方ないけど、私が知っていい領分じゃないみたいだし、綾人君が言ってくれるまで待とう。

綾人Ｓｉｄｅ

ファミレスで席に座ってからすずかと何を食べるか考える。とその前にさっきの電話の礼を言っておかないとな。

「ごめんすずか。ちょっとだけ電話する」

「うん。別にいいけど・・・」

ちょっとだけ気分が落ちたような気がする。出来ればすずかには笑ってて欲しいものだが。

そこは何とかしよう。朝から疲れてるだろうし、此処で少し休めればいい。ケータイでさっきも繋げた相手に電話する。Ｔｒｒｒｒカチャ

『まだなんかようかい？』

１コール目で出るとか。お前本当は暇だろう。『失礼だなぁ君は』地の文に突っ込むな。

「さっきはありがとな、って礼を言おうと思ってな」

『おや、コレは殊勝だね』
「まぁまだ頼みごとがあるからな。今は下手にでるさ。第一あんたにはでかい借りもあるわけだし」
『うんうん。そういうのは大いにいいね。で、なんだい？』
「これから真祖の姫に会うから世界からの抑止力を止めて欲しいんだけど。出来るか？」
『僕を誰だと思ってるのさ。そうだね。でもあんまり長い時間は無理。出来るのは今夜だけくらいだよ』
「充分だ。サンキュ」
『うんうん。がんばってねー』

通話終了。さてこれで今夜は抑止力が働く事はない。存分にやるだけだ。後の問題はあの二人に出会えるのかどうか。すずかにとっても俺にとっても重要な出会いになる。
食べ終わったら町の中をうろついてみるか。もしかしたら擦れ違うかもしれないしな。そうと決まれば腹ごしらえ。すずかはもう決まったみたいで俺を見ていた。

「わるい。待たせた」
「ううん、大丈夫だから。考え事は終わりかな？」
「ん。７割は」

残りの３割は出会ってから考える。出来るならあいつからがいいんだが。あぁ、いけないな。一回考え出すと止まらないのは悪い癖だ。

「まぁ、注文しようか。俺もう腹減っちまったよ」
「あはは。じゃぁ店員さん呼ぶね」

テーブルに設置されているボタンを押して店員を呼ぶ。注文は俺がハンバーグランチにすずかがオムライス。女子力すげぇ。

待つこと数分でオーダーが運ばれてきた。小振りのハンバーグにオムライスだ。
俺のハンバーグは普通なのだがすずかのオムライスには――――ケチャップで絵が描かれていた。可愛い熊の絵だ。「がおー」とか書いてる。どこのメイド喫茶だよ！
なんだこのサービス極まりないのは。すずかがスプーンを入れられないでいるじゃないか！

「綾人君・・・これ、崩さないと食べれないよね・・・・」

ぽろぽろと涙を流してスプーンを持つ手が震えている。そんなに葛藤してるのか!?

「こ、これはっ・・・かわいそうだよっ！」

こ、これはなんという女子力殺し！くっ・・・俺の目が殺せない！

「じゃぁ、俺のと取り替えるか？まだ手をつけてないから」
「えっ!?」
「今のままだとお前、食べる事無理そうだし」
「うっ・・・じゃぁお願いします」

すごすごとオムライスを押して渡してくる。変わりにハンバーグランチをすずかの前に移動させる。
オーダーを取り替えてからすずかはこっち・・というかオムライスを凝視しながらハンバーグに手をつけた。
俺はその視線を知りながらもケチャップの絵の中心をスプーンで刺して熊を殺した。

「あぁっ！熊さんが！綾人君が殺した！」

「人聞き悪いデスヨっ！？書いた奴に文句いえ！」

ケチャップは平らに卵に塗ってから食べていく。すずかの視線が痛い・・・・。

「食べたら動くぞ。確りと食べておけよ？」

「うん。わかってるよ」

下手すりゃ夜まで探し回る事になる。体力が減るかもしれないならちゃんと補給しておくべきだ。

まぁ、女の子には酷かもしれない。でもやらないと。

「ねぇ。綾人君はさ」

ハンバーグを半分くらい食べた所ですずかが聞いてきた。

「なんで私に其処までしてくれるのかな。眷属になったから、って」

「知りたいか？」

「私の力の根源にありそうな質問だよ。だから――――――知りたい」

真っ直ぐな目で俺を見る。言うべきかどうかは迷ってた。今はまだ早いとか勝手に決め付けてたかもしれないが、まだ知るべきじゃない。そう思ってた。

だが、それは俺の勝手な言い分だったかもしれない。だが・・・この真っ直ぐな瞳に嘘や隠し事をしていいのか？

だったら・・・いやしかしまだ9歳の女の子に背負わせるわけにもいかない・・・と思ってるのも俺だけかもしれない。

事実、この子は強い。精神的に。心の強さ的に。

「わかった・・・話そう」

「うん」

「すずかには俺にとっての抑止力になってほしんだ」

すずかＳｉｄｅ

「すずかには俺にとっての抑止力になってほしんだ」

綾人君が考えた末に出した答え。抑止力・・・ってなんだろう。止める力って事はわかるけど。

「あんまりわからないような顔だな。つまり・・・俺が危なくなったら止められるような存在になってほしい、ってことだよ」

「あ、なるほど」

簡単な説明ありがとう。つまり、綾人君が暴れたら止められるようになれば良いってことだよね。

でもそんなの私にできるかな。いや、出来るかなじゃなくてやらないと。綾人君が信頼してくれるから私を選んだんだろうし。

「俺を止めるにゃちょっとなのはたちじゃ無理なんだ。あくまでも人の域でしかない。

だから、超越した種である夜の一族・・・吸血鬼の末裔に頼むんだよ」

「・・・それで私に？」

「そう。すずかじゃないときっとあの力は得ることが出来ない。適合されないんだ。だってお前の相手は真祖だから」

真祖。確か吸血鬼の親玉。生まれながらにして定められた超越種。その相手をするの？

「これから逢うのがその真祖の姫とその騎士。騎士のほうは俺が相手をするから真祖のほうはすずかに頼もうかと思うんだが・・・」

「ううん、大丈夫。私やるよっ」

だって。綾人君から頼まれたら断れないよ。きっと皆そうなんだ。

「で、その人達にあってどうするの？」

「すずかは鍛えてもらう」

「綾人君は？」

「んー・・・どうなうかわからないな。だってそいつは――――――」

最後のほうが聞き取れない。唇は動いてたのに動いてるのに。まるで脳が聞き取ってはいけないようにその言葉だけシャットダウンした。

私はもうそれ以上聞けなかった。もう何も出来なかった。半分だけ残ったハンバーグも、なんだか味がしなかったよ。

綾人Ｓｉｄｅ

すずかには全てを話した。いや、全部じゃなかった。そう――――

―俺の止め方。
それでもこの穢れ無き魂を汚す事は出来ない。その時まで。そうなれば共に堕ちるのみだ。
それにまずは真祖とその騎士を探す事が最重要だ。それで見つからなければこの土地の管理者に挨拶をすればいい。
この地の管理者――――遠野に。

「すずか」
「　　あ、うん。　　なに？」

こんな話をするんじゃなかったかな。明らかに対応がおかしい。いや、それでも連れてきた時点で遅い。
食べる事を止めてしまったと判断して伝票をもって立ち上がる。

「行こう。気が乗らなくてもこれは互いにやらないといけない事なんだ。真祖に逢うのは夜の一族の力の制御にも繋がる」

遅れてすずかが立つのを見るとレジに向かう。後からついてくるのを見ながら待つ。
一万円で清算してからファミレスを出る。

「さて。どっちからいくか」

右か左か。若しくはうろついてるのを探すか管理者のもとへ行くか。
後者の場合、管理者のもとにいく場合アポをとらないとダメだろうから却下。望みが一番高いのはうろついてるのを探すくらいか。

「街中、ぶらっと散策するか。すずか、買い物とかしとくか？ショッピングデート」
「願ってもないよ！」

「あぁ・・・・じゃぁ行くか」

なんかすげぇ気迫を感じた。俺が一瞬たじろいだ。

そして歩き出す。何のことは無いただの一歩。

その一歩が。

俺を。

悪寒で。

包み込んだ。

擦れ違ったのは一人の男。学生服を着た痩せた男だった。振り返るのも遅い。が、神威が既にプロテクションを張っていた。

しかし男のソレはプロテクションをまるでバターを切るように簡単に斬り裂いた。

そのワンアクションが男にとって致命的。その瞬間にプロテクションを囮（デコイ）にして周囲に結界を張る。

何よりも此処には。隣にすずかがいるのに。俺はすずかと離れるように縮地を使って男の襟を掴んで一気に駆ける。

「はっ！いきなり大当たりかよ！！」

「何だお前・・・そんなに人じゃないみたいな気配で――――――」

こいつ・・・いや、流石だな。俺を人とは違う見方をしたか。ある程度遠く・・・どうやら公園のようだ。

少しばかり広い空間へと出てから勢いを止めた。男も直ぐ近くで体勢を整える。さっさと倒してすずかを迎えに行かないと。

「で・・お前の目に俺はどう『視』えているのかな？」
「――――――どうだっていいだろうそんな事。ただ俺はお前を殺したいだけなんだから」

掌ほどの長さのナイフを一度振ってから向きなおす。こいつを相手に神威じゃ勿体無さ過ぎる。
何せ相手は髪すら殺せる可能性のある男。わざわざ神剣を殺されるわけにも行かない。

「仕方ないな・・・・・」

両手に干将・莫耶を投影。同じ『線』が見えるなら大振りなのよりも短剣が丁度良い。何よりも練成したものならいくらでも殺されてもすぐに産み出せば良い。
どうせ殺されるなら、と本気の練成ではない。強度こそかけたがその歴史も概念もない。中身は空っぽのものすごく硬い剣だ。
意識を視線に合わせて魔眼を発動。どうやら相手も既に魔眼を発動させている。いや、常時発動型だったか？

「さてやろうか。俺が勝ったら言う事聞いてくれよ？」
「出来るなら、な」

声が掻き消えるのと同時に俺たちは動き出した。弾けるように動く俺達。蹴った地面が削ぐ様に土を捲る。
今、サーヴァントの加護は無い。自分の力だけでやるしかない。身体強化はまだ使わない。まずは生身で何処までこの男を相手にやれるのか。
一合
五合

十二合

幾度となく短剣が重なり合う。その度に殺されていく干将・莫耶。
殺される度に高速で練成していく。その速さは段々早くなっていく。
否、あいつのほうが速度が上がっていた。
俺は気付かずに速度を上げさせられていた。くっ、まさかゲームメイクを取られるとは・・・っ！
徐々に練成が追いつかなくなっていく。練成したとしても強度までは作りこめない。俺は一旦下がった。

「なんだ。下がるのかよ」

あいつが言う。くっ・・・俺が。この俺が！下がる事になるとは・・・。
すずかがいなくて良かった。出来れば見せたくないしな。

「あぁ。下がった。やれやれ、お前は化け物だな――――――殺人貴」

目の前にいるのは死を超えた場所に立つ存在。だが、まだ覚醒はまだのようだ。
殺人貴としてまだ目覚めてないのにこの強さかよ。小学生相手にひでぇやつだな。

「なんとなくだけどお前は此処にいちゃいけない気がするんだ。うまく言えないけど・・・俺の神経がピリピリする」
「なるほど。それはあれだよ。兄さん――――――同族嫌悪だ」

互いの魔眼が鋭く光る。とっととおわらせてすずかを迎えに行かないと。一人になった状態でもし真祖の姫に逢ったらどうなるか。

「ちょっとだけ。反則技を使うぜ」

身体強化の魔法を発動。これで俺は小学生の体でありながら殺人貴と対等の身体能力を得る。

「だがこれもまた俺の狙いの一つか」

「何を言ってるんだ！？」

「俺が更に上に行くため。そしてお前と真祖を救う為だ！」

「！！？」

強化した体での縮地は既に人の域を超える。それは英霊の域まで達してその身を殺人貴の視界から消し去った。

「なっ？！」

俺の速度に驚いたのか一言だけ残した。その背後に回って干将を振り上げて斬りつけるが無意識か反応して短剣でガードする。

丁度そこが干将の死の線だったようでバターの様にずるりと斬れた。

「死の線を見ないでも其処に在れば殺せる、か。それがモノを殺すってことか？」

「あぁ。これがモノを殺すってことだ。お前の周りのソレも線が見えるぞ」

！・・・こいつ、魔力にある線も見えるのか。厄介だな。魔力も切られたら死ぬんだろうな。もう再生しなかったりしたら最悪だ。

抑止力が働かないにしても。

死なない程度にやって勝つ。ってのが一番大変なんだぜ。

「なぁ兄さん――――――一つ聴いていいか？」

「なにかな？坊や」

「何故俺を殺そうとした――――――遠野志貴」

志貴Ｓｉｄｅ

「何故俺を殺そうとした」

少年は俺の後ろから問い詰めてきた。それは――――――最近も感じた衝動をこの少年から感じたから。
アルクェイドを殺した時のように。

「生きていてはいけない存在だと。そう感じた」

何よりもこの少年は俺を知っている。俺という存在を。どういうヤツなのかを。そして俺の近くにいるアルクェイドのことも。
更に言えばあの目だ。あの目は俺と同じだ。なのにあいつは何もしないで普通でいられるのか？

「・・・少し、話をしようか」

日和ったか。俺は短剣を仕舞って近くのベンチに座る。殺し合いはいつでも再開できる。
それにこれは俺から仕掛けた分の侘びと言うヤツだ。何よりもこの少年と本気で戦ったら恐らくどちらかが確実に死ぬ。
少年もそれを判っているのか何も言わないでいるが俺についてきてベンチに座った。だがまだ警戒は解いてない。それでいい。

だって俺たちは

相容れない

「前にも俺は同じように衝動に駆られて殺した事がある」
「真祖の姫か」
「何でも知ってるんだな。そう。それで今協力してるんだけどな。吸血鬼を倒す為に」
この少年何でも知ってるな。俺が話すことも無いかもしれない。

綾人Ｓｉｄｅ

遠野志貴が語り出す。だが問題は其処じゃない。俺にとっての問題は今、志貴とアルクェイドの現状。
敵対している相手が何者なのかがわかればこっちの動きも変わる。

「それは・・・その吸血鬼って。どういうやつだ？」
「それは子供に話すようなことじゃないんだけどな・・・君になら言っても大丈夫だろう」
心配してる？いや、巻き込みたくないのか。だけどそれじゃダメだ。
「吸血鬼の正体は獣を沢山従えてるようなやつだったんだ」
「ネロ＝カオスか」

ネロの名前を出すと志貴は顔色を変えた。ビンゴか。となるとまだ事態はまだ動いたばかり。

「志貴。俺はお前達の手助けをしに来たんだ」
「手助けだって？でもお前はまだ子供じゃないか」
「歳とか体とかは関係ない。実際に俺は志貴とやりあえた」

既に状況はクリアーした。この体で志貴の殺人衝動とやりあえたのだから。

「本来ならもっとスマートにいけたんだけどな。殺さずに闘うのも難しい」

死の線を見せたのも同じ境遇がいるというのを知らせる為。自分と同等の存在がいることを知らせる為。

「俺は二人を助けたい。今のままじゃ負けるぜ。この先もな。ピンチに次ぐピンチだ。きっとアルクェイドも本気は出せないでいる」
「何故其処まで知ってる？」
「俺情報だからな。情報は誰も知らないからこそ価値が有るんだ」

なんとなくで話を逸らす。そりゃ未来を知ってるよなんて言ったら大変だ。
なのでそれとなく説明をする。
互いの目の事。これは同じように死の根源を見たからと言っておく。
実際死の向こう側を見たわけだし。
アルクェイドを知ってる事。真祖の姫は有名である。
ネロ＝カオスの事。これも同様。死徒は裏の世界では有名だから。

という事にしておいた。

「自己紹介が遅れたな。俺は城戸・・・じゃない・・・ミラージュ。ミラージュ＝ヴィジョン。ミラって呼んでくれ。別名は吸血騎だ」

自己紹介したら志貴は吸血騎の部分に大層驚いた。

第四十九話　アルクェイド（前書き）

過去最長の約１７０００文字です。長ったらしいですね。

第四十九話　アルクェイド

志貴Ｓｉｄｅ

「自己紹介が遅れたな。俺は城戸・・・じゃない・・・ミラージュ。ミラージュ＝ヴィジョン。ミラって呼んでくれ。別名は吸血騎だ」

少年はそう自己紹介した。何故日本の苗字から横文字の名前に言い換えたのかとかどうでもよかった。
俺が気になったのは最後の言葉。『吸血騎』。
そして何よりもこの三咲で起きていることの状況を知り尽くしてる事も。
今、ネロ＝カオスと相対してる事。エルクェイドが真祖の姫という事も。俺の眼の事も。

「えっと・・・ミラ、でいいのか？」
「あぁ。構わない。俺も志貴って呼ばせてもらいたいし」
「それはいいけどさ。なんでそこまで事情を知ってるんだ？此処最近の事、しかも俺達の事まで」
「そこは企業秘密って事で。あぁ、禁則事項って言ったほうがいいのかな？」

うまくはぐらかしてくる。だけど俺達を邪魔したり止めるって言うなら・・・最悪殺す事も辞さない。
何よりもまだ小学生。聞けばやっと小学４年になったばかりというじゃないか。
そんな子供が死の線を見続けておかしくならないわけがない。
なのに・・・このミラという少年は普通にしている。

「俺はさ、志貴。お前達の事を手助けに来たのさ」
「それは何度も聞いたよ。具体的にどうするんだ」
「まず、その頭痛と立ちくらみ?めまいを治す」

数年間悩まされてきたこの頭痛とめまいを治す?
これは死の線を見続けたからか、脳が焼き付いての事だと昔聞いた。
それが治るというのか?本当に治るとしたらこの少年は一体何者だ・・・。

「それとお前に切られてまだ本気の出せないアルクェイドも治す」
「お前・・・・」

アルクェイドの事もか。でも本気が出せないってなんだ?あいつ俺に嘘ついてるのか?
確かにたまに調子悪いみたいな事するけど。どうする?今此処で・・・?

「あぁ、連れを迎えに行かないと」
「ん。さっきの子か。彼女?」
「あー・・・・・どうだろう?」

これはちゃんとはぐらかされたな。まぁ、大切だというのはわかった。

「じゃぁ、僕も行こう。迷惑かけた事謝らないとな」
「そうしてもらえると。後々アルクェイドにも会わないといけないので」

やれやれ。確りしてるね。

綾人Ｓｉｄｅ

話し合いは終わった。すずかを彼女と間違えられたけどそれはすずかに悪いだろ。
あとはすぐにすずかを迎えにいくだけ。流石に戦闘を見せるわけにもいかなかったし、あの場所で始めたら街人にまで被害が出る。
志貴と一緒に急に別れたファミレスへと向かう。公園からそんなに離れてはいなく、すぐに合流できた。

「ごめん、待たせた」
「急にいなくなるからビックリしちゃったよ」
「うん。ごめんって」

ファミレスの入り口。まさしくその場から動かないでずっと待ってたらしい。
理由は聞いてこない。そこは一歩引いた感じだ。
魔法関連と思ってるのか。あとで説明はしておこう。

「志貴。紹介するよ。俺のいる土地の管理者月村の子だ」
「うん。始めまして。遠野志貴です」
「月村すずかです。はじめまして」

すずかと志貴が握手をする。これで第一目的は達成した。

「志貴。すずかはアルクェイドとは位は違うが同位だ。襲うなよ？」
「わかってるよ！」
「すずか。これから志貴の悩みのタネをとるからちょっと待っててな」

「うん」

焦るなよ志貴。小学生に劣情を催すとかどんだけ、だよ！許さないけどな。

すずかにちょっと時間を貰う。あとで時間とるから、ってフォローもして。

「アルクェイドにこの子を逢わせたいんだ。まだ力の制御が出来てない」

「あぁ、なるほど。だからか」

志貴は直ぐに納得してくれたようだ。

真祖・・・吸血鬼の力を制御するなら上に立つ者の師事を仰げばいい。詰りはそう言う事。

なので俺の考えてる流れはアルクェイドに逢ってすずかを頼む。これだ。

志貴にアルクェイドの居場所を聞いてみる。

「アルクェイドは昼間は寝てるんじゃないかな。夜になれば逢う約束してるけど」

「それで間に合うならいいけどな――――――まずは志貴からか」

「ぅん？」

「その眼の事について。もっと詳しく知りたくないか？」

志貴Ｓｉｄｅ

この眼の事を詳しく、か。昔青子さんに聞いたけど・・・実はあんまり覚えてないし、曖昧な部分が多い。

「志貴の眼はさ。万物の死を捕らえてるんだ。普通は生を見るわけだからそのチャンネルが違う」

少年・・ミラは語り出す。

「通常じゃないものを見るんだ。脳に負担は掛かるのは当然。それが頭痛の元。だからそれを取り除く」

「理由はわかった。けどどうやってやるんだ?」

「最終的には魔眼のオンオフをつけれるように。志貴の場合、常にオン状態だから負担が大きすぎるんだ。

待機電力さえ流れてる状態だと思えばいいさ」

「へぇ。考えてるんだな」

「志貴は自分のことなんだからもっと考えるべきだ。特にその眼は誰にも理解されない。教会や協会が知ったら封印指定ものだ」

教会とか協会ってなんだろう。深くは聞かないけどきっと今関わっている事に関係あるんだろう。

でも・・そうだな。ミラの言うとおりなら俺はきっとアルクェイドを護っていける。

俺はきっとアルクェイドに傷ついて欲しくないんだ。一度殺した相手を護り怠惰なんてどうかしてるのかな。

「で、頭痛を取るんだが。その前に一つ」

「条件か。なに?」

「志貴の眼は常にオーバーパワーになってる状態だ。それを抑えるんだから多少の戦闘力に低下が見られるかもしれない。

今までと同じ用に動けるとは思わないほうがいい・・・杞憂かな?」

「なんであれ死を視ても大丈夫になるのは有り難いよ。慢心するな

ってことだろ？」
「そういうことだ」

俺の閉じた眼にミラの掌が触れる。暖かい感じがする。
触れた箇所から暖かさが広がっていく。脳髄の奥まで染み渡っていくような感覚。
じんわりとした感覚が俺を染めていくような。そんな感覚に満たされていく。

「オンオフの意志は自分で行え。其処までは面倒見切れない。速いとこコツを掴んでくれないと今夜あたり危険だぞ」
「其処までの親切はないってわけか・・・善処はする」

とりあえずはオンの状態でいさせてくれるようだ。
あとはオフに切り替えてオンにしての繰り返し運動を続けろとの事。
ミラの手が離れれば俺は眼を開く。うっすらと光が差し込む。一瞬眩しくて世界が眩んだ。

「さて。これで志貴のほうは終わったな。あとはお前の頑張り次第」
「あぁ。ありがとう。これで狂わないで済むかと思うと気が少し楽になったよ」
「少し、かよ」

くくっ、とミラが笑う。こうして笑ってるのを見てると歳相応なんだけどな。

綾人Ｓｉｄｅ

志貴の眼も治した。後はアルクェイドを治療すれば7割は成功と言っていい。
志貴がいうにはアルクェイドは夜にならないとあえないらしい。
借りてる部屋があるらしいので其処に乗り込むのもいが流石に無粋。
姫の部屋に入り込むほどの度胸は無い。仕方ないので夜まで時間を潰す事にした。
すずかが起きていられるか心配だったがそこは平気らしい。ならその時間まで何をするかだな。

「時間までまだ充分にあるな・・・志貴。組み手やらないか？」
「いいけど・・・大丈夫なのか？ほら・・彼女の相手とか」
「そんなに長くやるつもりもないさ」

結界の中でなら多少暴れても見えないしな。あぁ、アースラに申請しないと駄目だな。後でしておこう。
申請を送ってすずかの相手をしながら待つ。すぐに申請は通った。
いつでもＯＫらしい。
あー・・・結界張ればネロ＝カオスの相手もいけるんじゃね？とか思ったけどそれは辞めておいた。
志貴との特訓と座学。すずかと話す。コレの繰り返しで既に時計は１０時を指そうとしていた。

「あっれー？志貴以外に誰かいる」

女の声がした。特に何も警戒もせずにやってきた金髪の女が近付いてくる。

「アルクェイド」

手を上げて志貴が名を呼ぶ。そうか。彼女が真祖の姫。

「アルクェイド。今日は手伝いがいるんだ。ミラージュくんとすずかさん」
「よろしく」
「よろしくおねがいします」

俺とすずかは頭を下げて一礼を返す。頭を上げた所でアルクェイドの瞳孔が変化してる事に気づく。
すずかはその雰囲気に呑まれたのか黙ってしまった。が、俺は引く訳にはいかない。目的があっての接触なのだから。

「真祖の姫に目通しできるとは思いませんでしたよ。始めまして吸血姫」
「貴方からは同じ臭いがするわ。なぜかしら？」
「俺も同等の力を有してるから、では駄目かな？」
「納得と理解に苦しむわね。説明してくれるの？」
「勿論」

俺が吸血騎であること、真祖である事を伝える。真祖だ、と言うとアルクェイドは一瞬眼を細めるがすぐに戻った。
真祖は昔、姫によって全てを排除された。そういう歴史だ。だから真祖はもうアルクェイドしか残っていない。はずだった。
だが俺が現れた。アルクェイドの心の中はどうなんだろう。何を思い、俺を見るのか。

「で、何か用があってきたの？」
「あぁ。姫が見てこの子どうおもう？」
「ぅん？あー、なるほど。その子も同じかぁ。死徒とは違うみたいだけど」
「まぁそういう事。敵対する気は無いからさ。それと、アンタを治

しにも来てる訳だし？」
「どういうことか説明を」
「志貴に斬られた傷、まだ全快じゃないだろお前」
軽く指をさしてストレートに話を振る。なぜ見破られたのかって顔してるな。まぁ、大体知ってたしなぁ。はぐらかすしかないんだけど。
「魔力が揺らいでる。何よりもなんでお前不死だってのに死の線がそんなにあるんだよ。体力ごと低下してる証拠だろ」
「・・・」
あぁ。めっさ睨まれてる。なんて不都合な事を知ってんのって顔だ。
「そんなんでネロ＝カオスやロアに挑もうってんだから・・・回復と治療する？」
「出来るの？そんなの世界の抑止力がかかるかもしれないのに」
「抑止力なら今は起きない。そういうようにした」
「抑止力を止める打なんて・・・ほんと一体何者なのかしらね」
右手を差し出し握手するように手を広げる。アルクェイドは最初は躊躇していたが俺の手をとる。
渋々だが回復を任せてくれると取る。繋いだ手から回路を繋げる。まさか星の観測者と回路を繋げるとは最初の頃は思いもしなかったな。
掌同士の接続。魔力回路を繋げる。此処らへんはサーヴァントと同じ感覚だな。
回路調査開始。体内でバラバラになっている魔力を繋ぎ合わせていく。吸血衝動のほうはそのままにしておく。
体の接続は出来てるのか。後はそれを固定させる魔力が多い。これ

を俺の魔力で補充しておこう。回復しきったら俺の魔力は消えるようにして、と。
十分にも満たないがそのくらいは回復に勤しんでいた。意外とダメージが大きいんだな。
志貴とすずかは二人で会話中か。徐々に治療も済んでいく。アルクェイドの顔色も回復していくのが視て判る。

「こんなに簡単に回復させるなんて。一体何者なの？」
「まぁ、特別性だというのは確かだよ。吸血姫に憧れているってのもな」

アルクェイドとの回路連結を閉じ、手を離す。

「それに。俺は基本的には自分に関係あることしか行動しないようにしてる。今回はすずかに吸血鬼としての力の制御を姫に頼みに来たんだ」
「あぁ、それでなんだ。うん。いいわよ。体も治してもらったしそのお礼であの子の力の使い方とか教えてあげる」
「ん、助かるよ」
「事が終わったらそっちにいくわ。志貴もつれてね」
「その時には他のオプションもついてくるとか無いように。教会やらと出くわしたら大変だ」

主に教会が。負けるとは思ってないが、技術力などを見られるのはきっと管理局的にはアウトだろう。
確か地球っていうかこの次元世界の魔法レベルは低かったはずだし。

「アルクェイド、でいいかな。真祖の姫。俺たちは今あんたらの仕事とかに対してはイレギュラーだ。ネロと出くわす前に消えるがいいか？」

「あー、そうね。あいつは私がやらないと駄目っぽいし体治してくれたわけだしあんまり無茶も言えないじゃない？てか今名前で呼んだわね」
「はっは、そうだな・・・ん？厭ならやめるが。どう呼べばいいんだ」
「いいわ。アルクェイドで。えっと・・・」
「ミラージュ。ミラージュ＝ヴィジョン」

名乗った後に「でもまぁ気をつけて。」と付け加えてアルクェイドから離れる。体力回復したアルクェイドなら恐らくネロ相手になら負けることは無いだろう。
このまま此処に残ってたらすずかにもお鉢が回る。今の状態ではすずかは非戦闘員だ。闘う事はまだ出来ない。

「すずか。一応俺の傍を離れるなよ」

直ぐ近くまで来れば志貴と入れ違いになるように。近いうちにネロとはやりあうだろう。今日は確約が取れただけでも充分。
被害が出る前にさっさと退散しよう。

「じゃぁ、俺達は帰るよ。二人とも頑張れ」
「お邪魔しました。あの、アルクェイドさん。宜しくお願いしますね」
「あぁ。二人ともきをつけてな」
「じゃっねー。すずかちゃんとはまた逢うからまたね、かな」

二人に挨拶をして帰ろうと踵を返したところで違和感に包まれる。
公園全体を包むような気配がねっとりと絡みつく。
あぁ。出来るなら逢いたくなかったのにな。でも仕方ない。出遭ってしまう以上は。

ぞわりと悪寒が背筋を走り抜ける。明らかな死を纏う気配。すずかは――――――恐怖に震えている。

「すずか。怖い？」

「うん・・・こわいよ。まるで死がそのまま出てきたみたいに」

「そっか・・・」

すずかに向き直って抱き寄せる。恐怖を振り払うように。

「あぇ・・・ぁ！？」

驚きの声があがるけど離さない。ここで離したらきっと恐怖に負けてしまうかもしれないから。

俺や志貴、アルクェイドの持つ殺気よりも直接的な死の香りに心が負けそうになっていた。

「大丈夫。俺がすずかを護る」

抱き寄せた体を肩を掴んだまま離す。薄いけど軟い笑みを浮かべて向けて。

その場に立たせるようにして数歩下がる。

「神威」

右手に神威を呼ぶ。すぐさま神威は三角状の結界をすずかに張った。

俺の魔力を練りこませた特別製。

これで恐らくは無事だろう。志貴の眼で無い限りは破られない自信があるぞ。

「志貴！アルクェイド！」

既に臨戦体勢に入っていた二人の名を叫ぶ。二人の視線は俺には向かずに虚空一点を見続けている。
既に捕らえているのか。

「ここにいて。其の中なら絶対安全だ」

すずかに忠告をしてから盾になるように立つ。あくまでもメインはあの二人。俺はおまけだ。
直死の魔眼を発動して準備を終える。こっちに吹っかけてきたら遠慮なく斬り刻むけどな。

アルクェイドＳｉｄｅ

参ったな。こんな所でもう出会うなんて。準備はしておいたけど式はともかくあの子供たちは・・・・？！
あんなに凄い魔力の濃い結界とかあれなんて魔術。・・・・はは っ、出会ってまだ間もないのにホント。大変なヤツらだわ。

「志貴。少し筋書きと違うけど・・・やれる？」
「それ、拒否権はないよな。もう」

実際二人で何とかする予定だったのだ。この「私」が何を恐れるか。ただ、後ろに護るべき存在が増えただけの事。

「――――――待たせたな・・・真祖の姫君。そして童」

夜の向こう側から奴は現れる。明らかに私だけでなく志貴まで眼中に納めてる。
そう、ソレはいつのまにか其処に存在していた。

志貴Ｓｉｄｅ

アルクェイドの直ぐ近く、隣で俺はこの厭な気配に対して戦闘体勢に入っていた。無意識的に。
何時の間に現れたんだこいつは!?瞬きするような瞬間にこいつは此処に現れた。
気配を捲いてはいたが視認するのは一瞬。俺はメガネを外す。アルクェイドが警戒してくれてるからそのくらいの余裕は出来た。
だから――――――そこでミラが結界を張っていた事にやっと気付いたんだ。

アルクェイドＳｉｄｅ

あっちは気にする事もなさそう。なら今は目の前を対処するだけね。

「ずいぶんと待たされたわ、ネロ＝カオス。それとも・・・フォワブロ＝ロワインと呼んだほうがいいかしら?」
「・・・よもやな。人の身であった頃の名を聞く事になろうとは夢想だにしなかった」

ネロはただ立っているだけ。それだけでも十分な威圧は感じられる。

「流石は我らの処刑人。死徒二十七祖の経歴など知り尽くしているわけか」
「二十七・・・？あなたたちは「蛇」を同胞とは認めていないの？」
おかしい。死徒は全部で二十八のはず。ネロだけにしかない感情の表れ？もうちょっと探るか・・・。
「無論。あれは吸血種である意味を持たぬ吸血種。いわば異端だ。もっとも。他の死徒よりは理解はしておる」
ふん。言うだけ言っておいてそうなるか。否定しておいて実は、なんてありふれた言葉過ぎる。
「異端は孤立ゆえに異端せしめる。分かり合う道理は其処にはない」
「へぇ。案外仲間意識はないのね」
志貴に後ろから隙を突いて斬って貰う手筈だったのがこの手はなくなった。
正攻法でいくしかない、か。今なら志貴も私も全力で屠れる。
「弱った体で相対するのもコレで終わりだな。貴様達は此処で死ぬのだ。そこの童も」
ネロの視線がミラに向く。でもミラの気配がぶれない。ネロの威圧にも耐えてるって事？

志貴Ｓｉｄｅ

アルクェイドがネロ＝カオスと警戒態勢に入りつつある。あいつの威圧的なプレッシャーが俺を潰しにかかってきてる。
だけど・・・恐らく昨日までの俺なら躊躇しただろうな。
もとから考えてたのは俺が意表をついて後ろから襲い掛かるという案。
しかしこうして俺もアルクェイドも前にいる以上はその案は既に却下されてしまった。
だったら――――今の状態で真正面から行ったらどうなる？
死の線を視ても頭痛が来ないなら気も紛れない。いいところまでは行くんじゃないか？
アルクェイドだって。俺が切り刻んだ傷は完治したってミラは言った。
それが本当かどうかはわからない。でも俺の頭痛は取り去ってる。
アルクェイドを動かすわけには行かない。なら俺がアルクェイドの分までっ！！

「ふっ！」

俺は一気にネロとの距離を詰めにいく。通常高校生のものとは思えないような脚力で近付いていく。
びっくりだ。こんなに体が動くなんて思いもしなかった。これも頭痛のせいだったのだろうか。
ネロは目を見開いて俺に向かって一匹の獣を差し向かわせる。形容しがたい獣。犬のようなライオンのような。
飛び掛ってくるように襲ってくる獣。俺は死を見てナイフを横に一閃擦れ違いざまに喰らわせる。

「！？」

ネロの顔色が変わる。だがそれも直ぐに消えた。死んだ獣は足元で横たわり、どろりと溶けた。

「なにっ！？」

溶けた獣が意志を持つかのように俺の体に纏わりついてきた。足を絡めるようにして俺の動きを封じる。

「貴様の使い魔も中々やるな。だが私に奇襲など通用しないのは見ての通りだ」

もう俺を見ていない。ネロの視線はアルクェイドに向けたままだ。でも・・・まだこれにも死の線は見えている。あとはネロの注意が俺から逸れた時がチャンス。
俺は雌伏の様にその時を待つ。

アルクェイドＳｉｄｅ

志貴が吶喊してネロの注意を引いた。その一瞬で私は既にいつでも動けるようになったのだ。
何よりもミラに治してもらった体が軽い。これなら――――――最大級でやれる。

「空想具現化も出来ぬ程衰弱している貴様が私に挑む気か？そこの使い魔のように貴様も捉えた後で喰らってやろう」
「そんなもの――――――いらないわ」

そう。もう必要ないのだから。完全に力を取り戻した私に空想具現化という力は不要。
ただこの腕を足を振り抜くだけで全盛期と同様の力を揮える筈。

「たわけが――――――その身を痴れ。アルクェイド＝ブリュンスタッド」

豹のような獣がネロから生まれる。なるほど。郡体の強みね。いくらでも出せるっていうのは。
猫科特有のしなやかな動きで私に襲い掛かる。中々素早い。視界の隅に捕らえてる志貴はまだ動かないか。
じゃぁしょうがないな――――――私は爪でもって獣を叩き伏せる。

「たかだか死徒相手に。世界と同化するなんて仕方ないじゃない、ネロ＝カオス」

叩き伏せた獣が塵となる。

「あなたには。この爪だけで充分。思い出させてあげるわ。私が死徒を相手になんと呼ばれているのか」

ネロの表情に変わりは無い。だけど。明らかにイラつきが募ってるのが判るわ。
幾つか獣を呼んでは私にだけ向かわせてくる。どうやら志貴やミラは眼中に無いみたいね。
そのほうがやり易い。前の状態ならきっとカバーできなかっただろうし。
志貴も何か考えがあるみたい。眼に光が残ってる。ミラは・・・よくわからない。でも護らないといけないような危うさも無い。
なら私は向かってくるこの脅威を叩き伏せるのみ。この爪で！

「ネロ。貴方が出せる獣全てを私が叩き伏せてみせるわ」
「出来るのならな」

有象無象に湧いてくる獣たち。私の爪で躍らせてあげる。月夜と街灯をバックライトに今宵はダンス。この程度なら爪を出さずとも勝てたかもしれない。
一気に加速してネロノ懐に入り込む。そこはネロも考えていたのか迎撃に鮫に似た獣を出して襲わせて来る。
それすら真っ二つに切り裂いて、同じようにネロすら胸元から二つに分割した。
力なく倒れる死徒。周囲には獣の残骸。

「――――――やるねぇ」
「この程度で終わってくれれば、ね」

ミラが声をかけてくる。爪を閉じて一息。あぁ志貴に纏わりついたのをとらないと。
右手を開いたり閉じたりして力の加減を確認する。疲労感はない。

「クフックカカカカ。衰弱していたのではなかったのか。超回復とでもいうのか。流石は真祖たちが用意した処刑人よ」

半分に分割されたネロが身を起こしてくる。まだ足りなかったか。
そういえば手応えがあんまりなかったっけ。

ネロＳｉｄｅ

「曰く――――「白い吸血姫には関わるな」か。同胞たちの忠告は正しかったようだ」

右半身をなくした私は真祖の姫やられた傷を修復しつつ立つ。まさか此処までやられるとは思わなかったというのは嬉しい誤算。それならそれで対処しようではないか。

「貴方の使い魔が何匹いようと今の私には勝てない。それは判ったんじゃない？」

「貴様の目は節穴になったか。その金色の瞳でよく見てみるがいい。今まで貴様が闘ったのは私自身である。

見えるだろう。我が体内に内包された六百六十六素のケモノ達の慟哭が。混沌が――――」

残念だ。実に。私という存在を見えておきながらその本意を見つけられていなかったなど。

万死に値するわ。実に。実に！愚かしい！

さぁ、この作られた宴も終焉にしよう。真祖の血を以って。

綾人Ｓｉｄｅ

うーん。まだアルクェイドも志貴も力に振り回されてるな。

志貴は仕方ないとしてアルクェイドのほうはまだ戻った力がどのくらいか計りかねてる感じだ。

結界を張ってあるからすずかに危険はないとしてもどうするべきか。

此処で手を出す？それとも傍観に徹するか？

本当に危なくなったら手を出すか。志貴も動きを封じられてはいる

けどまだ諦めてないみたいだし。
神威に大結界を準備させつつ俺はこの戦いを傍観する。

アルクェイドＳｉｄｅ

ネロが仕掛けた罠。一目に見てそう感じた。私を中心とした獣を使った結界。
これがネロの体内だというならこんなに気持ち悪いものは無いわね。

「如何かな。我が体内の混沌は」
「お茶の一つも出ないなんて粗末なものね・・・」
「それは失礼した。だが貴様には必要なかろう」

ふんっ。私の動きを封じたつもりか。志貴もまだ動かないとなると。
全力をだせばきっといけるんだろうけど何処まで出せるのか・・・
何処まで出していいのか考えちゃうわ。

「例え貴様が万全であったとしてもその中より抜け出るのは叶わぬ。
我が分身五百もの結束で創り上げた「創生の土」をな」
「ふん。随分と余裕じゃない。それほどまでこれに自信があるみたいだけど」
「我が力の結束は世に渦巻く混沌の力。容易な力では破壊も出来ぬ」
「ふーん・・・そう」

余程の自信ね。其れ程までに絶対を誇れる結界みたい。空想具現化は使わないって言っちゃったから使えないしなぁ。
どうする？解く程度なら全力でやれば出来そうだけど――――――。

「貴様が現世に受肉されて以来幾人もの同胞が討たれ、幾人もの先達が貴様を葬ろうとしてその逆の運命を打ち出されて。
だがそれも今宵で終末を迎えるのだ。何人も成し遂げられなかった偉業を――――――このネロ＝カオスが成し遂げる」

渦巻く混沌が蠢く。どうやら私を飲み込もうとし始めたよう。抜け出ようともがいてみるとやっぱり抜け出れない。

「ネロ。あなたこの力――――――」
「私は六六六の獣の因子と同数の命の混濁に過ぎない。この形状も命の容れ物に過ぎない」

眼の前のネロが頭を潰すとその身は崩れて消えた。咄嗟背後にネロの気配。混沌からその姿は生まれた。

「半身を失おうが頭を潰そうが意味は無い。もとよりカタチなど持ち合わせてはおらぬ。私は不死の存在なのだ。
私は一全にして六六六。私を倒したければ一瞬に六六六の命を滅ぼすしかないぞ」

あぁ・・・なるほど。命のストック。蘇生魔法の最上位クラス。
だけどそれなら。此方にはまだカードが残ってる。

志貴Ｓｉｄｅ

アルクェイドが捕まった。くそっ！やっぱりまだ本調子じゃないのか。

今俺を抑えてるこいつにも死の線が見える。人だけじゃない物にまで死が見えるなんて。
これが俺の眼の力なのか。だけどそれなら。死が見えるのなら殺してみせる。
ナイフで足に絡まるモノを殺す。いとも簡単に其れは死んだ。
なんだろう。気分が高揚する。まるでアルクェイドやミラと出会った時のように思考がクリアになっていく。
俺の頭の中は一つの事で埋まっていく。どうやってあいつを殺そうかと。
ゆっくりと立つ。まるで空気を抜けるように。悠然と。あぁ。なんだ。世界はこんなにも――――――だ。

「アルクェイドを放せ」

最初のときと同じ。俺は走り出していた。既にアルクェイドは取り込まれる寸前。それをとめるのはもうあいつを。ネロを殺すだけ。
幾つかの獣が俺に向かってくるけどそれら全てを殺していく。うん。今なら頭痛も無い。オーバーヒートもまだ感じられないなら行けるところまで行く！
何度と無く腕を振りナイフで切り刻んでいく。

「私という偶像が郡体に取り込まれる前に貴様を養分として喰らってくれよう」

鳥の獣が空から急降下してくる。それをもんどりうちながら回避する。格好悪さとかそんなの今は関係ない。
回避の立ち上がりでナイフを首に当てて殺す。鳥はそこで沈黙する。

「お前の相手は俺だ。だからアルクェイドを放せ――――――」

「人間（お前）が私の相手をする、だと？」
「そうだ。だからアルクェイドを放せと言ってるんだ」
「其れは思い上がりというものだ人間。興が削がれた。責任をとってもらうぞ」

本来なら人間の俺がかなうはずがない。それはアルクェイドも言ったじゃないか。
俺に殺せないものは無いといった。
ミラも俺は特別だといった。存在するのなら俺は殺す事が出来る、と。
だったらせめて。あいつくらいは助けないと――――――俺が此処にいる意味が――――――
――――――俺がこの眼を持つ意味が――――――無い！！

足に獣が噛み付く。その痛みで意識がはっきりとした。だけどそんな痛みくらいでとまるようなら最初から此処にはいないんだよ！
俺が俺であるために。アルクェイドに協力するといった以上は！
今目の前にいるこいつを倒してアルクェイドを助けるんだ！
獣の大半は首に線を持っている。足に噛み付いた獣の首を刎ねてから出来る限り最短でアルクェイドの元へ。
獣の群れを抜けていく。まともにいったら駄目だ。出来る限り最速最短で――――――。
群れを成す獣を殺しながら俺はアルクェイドに近付く。あと一歩。
手を伸ばせば届く距離まで近付いてそこで体に衝撃が走った。

「っは！？」

鈍い音が耳元に響く。走っていた俺の体は止まり、腹に鹿の角が刺さっていた。
なんだこれ。アルクェイドを包む黒い塊から出てきた鹿が俺の腹を

刺してる。

「契約しよう。貴様は生きたまま租借してゆっくりと溶かすとな」

鹿の角に刺さったまま俺は放り投げだされる。周囲にはまだ無事な獣たち。あぁ、俺此処で死ぬのかな。

「いや、まだだ。まだお前は此処で死ぬ運命じゃないよ志貴」

直ぐ近くでボーイソプラノが響いた。それは混沌の夜に透き通る清浄の声にも聞こえたんだ・・・・。

綾人Ｓｉｄｅ

志貴が刺された時点で俺の脚は動いていた。出来る限りは手を出す事は抑えていたのに。

アルクェイドが取り込まれつつあっても俺は動かなかった。なんだろうな。情が移ったのかもしれない。今日であったばかりなのに。いや、出会った時間なんか関係ないか。

知り合ったなら。其処で俺たちは判りあう。同じ力を持つ、俺にとってのオリジナルの存在を。

「ごめん、すずか。俺行かないと駄目だ」

「うん。此処でいかなかったらきっと私は綾人君を軽蔑したまま生きていくよ」

「はは。それは厭だな。じゃ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

すずかに見送られ、俺は志貴の元へと空間を跳んだ。

志貴Ｓｉｄｅ

体が熱い。傷口があるのがわかる。じんわりと熱を持って血が流れていくのが良くわかる。
あぁ、俺はあいつを助けられなかったのか。でも仕方ない。あとはあいつに・・・ミラに頼む。アルクェイドを救ってくれと。
獣が俺を啄ばむ。殺される。殺されていく。あぁ、また殺されるんだ。一度、殺されたっていうのに。
二度も殺されるなんて稀有だな。

「いや、まだだ。まだお前は此処で死ぬ運命じゃないよ志貴」

近くで声が聞こえる。そうだ。俺はまだ約束を果たしてない。このまま殺されるのはいやだ。
痛いのもいやだ。怖いのもいやだ。生きたまま食われるのも嫌だ。
意識があるのに食われるのも厭だ。
其れでも俺は殺されるのか。コロサレルノカ――――――

「前はまだやるべきことを成し得ていないのに。此処であきらめるか？」

体の感覚はもうない。有るのか無いのかすら判らないのに。その声だけが脳裏に響く。
あぁ、こんなにも世界はこんなものしか見えないのに。全てを殺す線と点しか。

綾人Ｓｉｄｅ

志貴に呼びかける。周囲の獣は俺の威圧で近付かない。近づけない。それがネロにも伝わっているのか不快感の顔を俺に向けてくる。

「貴様、さっきからいたが何者だ」

「俺は吸血騎。吸血鬼を護る騎士で――――――真祖さ。死徒よ。その身で最上位とやりあえる事を誉れと思い、散れ」

もう志貴は大丈夫だ。覚醒は起きた。なら此処にいると巻き込まれる。

志貴から離れてアルクェイドのほうへと直ぐに移動する。

「さぁ、ネロ＝カオス。お前には我らが同胞が死をくれてやる」

「くははは！先ほどの言葉を聴いてなかったのか？私を倒したければ一瞬にして全てを殺さねばならないと！」

「そう。お前は個別じゃ死なない。ある意味不死を持つものだ。だが不老不死だからと言って――――――不滅ではあるまい」

「何が言いたい。小童」

「つまり、お前にとっての死神は目の前にいるってことだ」

ここでネロとの会話を終わらせる。もう語るべき言葉はない。あとは志貴に任せよう。

志貴Ｓｉｄｅ

世界はこんなにも死が溢れている。周囲にいた獣は俺が悉く殺して

見せた。快楽さえ感じる。

コロサレル。

殺される。

きっと間違いなく殺される。

他の誰にでもなく。

他の何にでもなく。

オマエは俺に殺されるんだ。

「貴様っ」

「ククッ・・・俺を殺したいんだよな化け物(吸血鬼)。ならば俺たちは似たもの同士。いいだろう――――」

あぁ。こんなにも気分がいいのは生まれて初めてかもしれない。

こんなにも屍骸の中が心地良く感じるのも。心地いい。

「さぁ、殺しあおう。ネロ＝カオス」

あぁ、こんなにもこんなにも。殺してもいい相手が目の前にいるなんて。

嬉しくて(怖くて)涙が出そうだ。

ネロＳｉｄｅ

あの人間に向かう我が分身たる獣たちが悉くヤツのちっぽけなナイフによって殺されていく。
蘇生が効かぬ。まさに存在を殺す存在。我が獣たちが塵に返されていく。

「貴様・・・何をした」

意味がわからぬ。状況がわからぬ。あいつは今何をしているのだ。
だが一つはっきりとした事がある。

「よかろう。貴様を我が障害として認識するぞ」

私の持てる獣をフル動員させて人間を狩る。しかし奴は其れを意に介さずに突き進んでくる。
何故だ。何故だ。姫君ですら滅する事ができなかった私達が悉く消滅していく。何故だ。何故だ――――――。
一呼吸も与えぬ間に周囲の獣を私に集める。何故だ。何故私がこんなにも密度を高めなければならないのだ！
私がヤツに恐怖しているとでもっ・・・・！！！
姫君を取り込もうとした混沌をも我が体内に内包させて人間を迎える。

「待っていろ。奴をくびり殺したあとで貴様を取り込む」
「期待しないで待ってるわ。でもあの志貴はもう貴方にとって不破の敵よ」
「ふん。口減らずな女よ」

そうだ。我が内にはそれすら凌駕した域が生息している事を知れ。

「殺す！我が内なる系統には貴様ら人を超えた生命があると知れ！」
龍種を影から召喚する。これは我が内でも最上位に位置するもの。
これで一気に殺してくれる！
異形の姿とも言えるこの獣を超えられるなら超えてみろ下等種が！

志貴Ｓｉｄｅ

眼がアツイ。燃え盛るくらいに熱い。頭が体が血流が一秒でも速く
敵を殺せと俺に命令する！
幾つも見える線の収束にある点。それが死を司る点だと一目見ただ
けで把握できた。
フッ、ははは。

「フッハハハハハハハハ！」

高揚した気分が凄い。こんなにも世界は死に満ちているのに。あぁ、
あいつを殺せばもっと気持ちよくなれるのか。
なぁ、吸血鬼。オマエはどんな声で死んでいくんだ？
幾つモノ獣を叩き伏せ切り刻んで近付いていく。獣の原点へと。そ
の死の点へと。
近付けば近づくほど異形の姿が現れる。俺はそれら全てを殺してい
くんだ。それはとっても快楽過ぎて。
そしてついにネロの肩口から出てきた獣を切るついでのように腕を
落とす。

「なんだ・・・なんだなんだなんだ！何故再生しない！アレ

は――――魔術師でも埋葬者でもないというのに！
何故私が斬られただけで滅びなければならない！」

死を理解しないモノを相手にするのは面倒だ。さっさと終わらせてしまおう。
ほら、こんなにも世界は簡単に終わってしまうのだから。
歩を進ませる。するとネロは一歩後ずさる。

「っ・・・後退！？この私が人間に対して後退するだと！？」

もう終わりにしよう。コレ以上は只の雑技。コレ以上時間を使うわけにはいかない。早く家に帰って秋葉に謝らないとな。

「有り得ぬ！有り得ぬ！私を殺すか、人間――――――！！！！」

ネロが内包していた獣を全て纏って特攻してくる。あぁ、もうこんなにつまらない。

「我が名はネロ。朽ちず蠢く吸血種の中においてなお不死身と称された混沌！視は既に超越した！
だが貴様は何だ！何なのだ！何者だ！！」

ネロが爪を鋭くさせてくる。俺は胸に突き刺す。其処は死の集束した点。オマエがいくつもの命を持っていようが関係ない。
俺が殺すのはネロ＝カオスという世界そのもの。その世界を抹消する。
爆発するように死を迎えるネロ。煙が噴出して塵へと帰っていく。

「まさかな――――――おまえが――――――おまえが私の「死」か・・・」

最後にネロが獣の姿から人の姿へと帰る。足元から煙になっていく姿は風に吹かれて消えていく。
全ての緊張が解ける。吸血鬼事件はコレで終わった。俺はへたり込むようにしてその場に座る。
死に染まる世界。今までは死に塗れた酷い世界だったのだがミラのお陰でオンオフのスイッチを創り上げる事ができた。
今、其れができなければきっと俺は脳がパンクするんだろう。頭痛は抑えてもらったからないのは判るけど。
眼を閉じる。とはいえどうやってスイッチをつけるんだ。

「頭の中にスイッチを思い浮かべるんだ。どんな形でもいい」

気付いたらアルクェイドとミラとすずかちゃんが直ぐ傍にいた。ミラは俺の手をとっている。

「思い描いたらあとは俺が誘導する。まず志貴はイメージする事だ。頭の中のスイッチを」

スイッチを思い描く・・・・こうか?俺は頭の中に古めかしいスイッチを思い描く。

「よし。じゃぁそれが今スイッチがオンになってる状態だ。それを逆方向にスイッチをきってみて」

言われるようにスイッチを動かすイメージ。パチン、ときっと音がなっただろうってくらいにイメージできた。

「志貴は魔術師じゃないから魔力回路がない。それでも根源に至って死を認識してしまったからこんな魔眼を手に入れた。

魔力回路があればよかったんだけどそうも言ってられないから直接イメージでオンオフをしないと駄目なんだ」

ミラが説明する。どうやらアルクェイドは理解してるようで時折頷いてる。

「さて。これで志貴はとりあえず魔眼のオンオフを出来るようになったはず。あとは訓練だな。
まぁきっと命の危険になったりしたら勝手にオンになるだろうけど」

そうなのか？でも確かにピンチになっても死が見えなかったらアルクェイドの手伝いもできないな。
でもこうして落ち着いた世界を見れるのはいいものだな。

綾人Ｓｉｄｅ

傷だらけの志貴の手を握って直接意識下の中でスイッチを創り上げる。
これであとは志貴が自分の意志で魔眼を発動できればいいんだが。
少し時間は掛かるだろう。

「ごめん・・・ちょっと疲れた・・」
「志貴、此処で寝たらもう目覚める事はないぞ。それでもいいなら寝てもいいが」
「・・・何気に酷いなキミは」

この傷だ。このまま意識をなくす場合もありえる。

「ねぇミラ。あなた最初のときみたいに傷治せないの？」
「治療魔法はちょっと時間がいる。出来なくもないけど」
実際まだ志貴の手を握ったままで内部から傷の治療を行ってるんだ。
それにミッドの魔法と魔術が浸透した体じゃきっと相容れないと思う。
リンカーコアがあっての魔法だしな。まぁやってみるか。
魔力を溜め込んで志貴に流す。だけど細かい部分までは治しきれなかった。
こうなるならシャマルに教わっておくんだった。暖かい魔法力で志貴を包み回復させていく。
志貴はそこで気を失うが安定した生命力で眠りについた。

「さて。姫様においてはこれでひと段落ですかね」
「そうね。とりあえずは」
「このあとは『蛇』を追いかけないといけない、だろ？」
「どこまで知ってるのやら――――」
「知ってることは知ってるけど知らないことは知らないなぁ」
「言葉遊びは嫌いよ。まぁ、そうね。此処までしてくれたんだから約束も護るケドさ」
「そうしてくれ。こっちはお願いにやってきたわけだし。承知してくれるなら一番いい」
「その子――――すずかちゃんだっけ。能力の制御の訓練に私がつきあえばいいんでしょ？一応此処での事が終わったらになるけど」
「充分だ」

確約はこれで取れた。俺が遥々三咲まで来た意味がこれで成ったわけだ。

「それにすずかちゃんは私も気に入っちゃったしね」
「すずかは俺の眷属だからな。手を出すなら俺を倒してからにしろ」
志貴から離れてあとはアルクェイドに任せる事に。
「それと・・・あの教会の代行者は高みの見物だったようだし。俺らはそろそろ帰るよ」
「ん。気をつけてなんて殊勝かな。まぁきをつけて」
ありがとう、と。礼を返す。帰ると言っても電車がもう動いてない。まずこの時間に帰ったら大変だ。
・・・・・・は。スキマ使えばすぐじゃんか。
「すずか。直ぐに帰るか？」
「え？うーん。電車はもうないよ？」
「俺の能力で直ぐ海鳴に帰れる。どうする？まだ此処に残ってるなら朝までホテルだけど」
「ホテル！？」
「ん――――その反応で決まったな。直ぐ帰ろう。じゃぁ、アルクェイド。志貴に宜しくな」
「はいはい。まったく騒がせ師ね。じゃぁ、また今度ね」
「あぁ。健闘を祈る」
俺はスキマを開く。すずかはびっくりした顔をしてスキマを見てる。アルクェイドも吃驚したのか眼を見開いてるけどすぐにそれが何かを認識したようですぐに笑顔になった。
「じゃぁね吸血騎」
「じゃぁな吸血姫」

別れの挨拶も程々にスキマへと入った。吸血騎と殺人貴と吸血姫との邂逅はこうして終わった。

スキマを通じて海鳴市に帰ってきた俺とすずかは月村の屋敷の庭に転送される。

「あ、ここ私の家の庭だね」
「あぁ。他の場所に出ると大変だしな。元々此処はアースラからの転送室も有るし」
「なるほどね」

海鳴りに戻ってきたとはいえ定住する家がない俺はすずかを送った後にどこか適当な場所で休む気でいたのだがファリンさんに見つかって敢え無く空き室で休むことにした。
一日フルで動き回ったからだは直ぐに眠りの世界へと誘っていく。

第五十話　C．C．（前書き）

プロローグと能力紹介の分があるので正式に、ではないですが５０話目です。

第五十話　C．C．

綾人Ｓｉｄｅ

桜舞い散る４月。俺は小学四年に進級した。進級するに辺り、はやても復学するという事になった。
朝一で校長と話をしてからの顔見せ。後見人はグレアム提督らしい。
俺はまだ逢った事が無いが夜天の書事件の時にいた黒幕。
あの駄猫もグレアム提督の使い魔だとクロノから聞いている。クロノも自分の師匠を売るのはどうかと渋っていたらしい。
どのクラスになるかはわからないけどこれでまた賑やかになるのだろう。

「よーし。みんな席につけ。ＨＲだぞー」

担任が教室に入ってくる。どうやら時間らしい。新しい担任は女性なのに言葉使いが男のようだ。ちなみに独身。
アリサすずかなのはフェイト。皆其々自分の席に移動する。
俺たちは進級してもクラス替えがあっても同じクラスになっている。
少しばかり作為を感じずにはいられない。
そこ等へんはリンディ艦長の計らいなのだろう。しかし此処まで手を出す手来るとは管理局も意外と暇なのか？

「今日は転校生がくるぞ。さ、入っといで」

担任に促されて扉が開く。其処には車椅子で入ってきたはやてがいた。
教壇まできてから車椅子を此方に向けて。その間に担任は名前を書いていた。

「八神はやていいます。やっとこ体の調子もよぅなってきたんで復学することになりました。みなさんよろしくおねがいします」

ペコ、と頭を下げてから笑みを向ける。なるほど。これもまた作為的だ。まったく管理局って奴は！

なのはとフェイト。すずかにアリサが顔を見合わせている。俺は後ろの席なので皆の表情などが良く見える。

俺は少し考えてから念話通信を送る。勿論アースラにいるあの人に。

『リンディ艦長ちょっとお話宜しいか？』

『あら。なにかしら？』

『はやての事で。あんたまたやりました、か・・・？』

『何の事かしらねぇ？おばさんちょっとわからないわー』

『・・・・・・・・・』

『それよりも今日はこっちにきてくれないとそろそろ淋しいわ』

『なんですかソレ。まるで情事の誘いみたいな』

『いやん♪』

はぐらかした。これはもう当たりと思っていいよな。ていうか自分のことおばさんって認めたな。

第一クロノが聞いてたらどうするんだ。

『だめよー、女性の年齢探っちゃ♪』

『・・・・・・・・』

通信回線なのに心を読まれた――――――深追いはやめよう。そう心に念じる。

ともあれ教室中が騒いでる。相変わらず転入生やらには激しいクラスメイトだ。

そしてアリサが仲裁に入るという黄金律。もうこの流れ鉄板だな。
HRが終われば直ぐにもはやての周りに人だかりが出来る。そしてその中心にいるアリサ。
なのはフェイトすずか俺、と窓側の席で其れを見ている。はやても同い年に此処まで囲まれてまんざらでもなさそうな顔だ。
念話で助けを求められるけど俺は野中に入る勇気はない。もう味わいたくない。ごめんはやて。
なのはもフェイトも苦笑いを浮かべてる。まぁ授業が始まれば収まるだろうと念話で伝えておく。

学校の喧騒というのはなんとも言い難い。それは既に学校という組織から抜けた俺がまた此処に戻ってきたから感じている事なのか。
またこうして学校に通い誰かと一緒にいるという事がこんなに普通でいいものなんてな。

今日は一日はやてに話題を持っていかれたな。それとその全てを取り仕切ったアリサの手腕たるや、だ。
放課後になり各々が家路につく。俺たちも帰りの準備だ。

「さ、帰るわよ！」
「おー」
「気が抜けてるわよ！せっかくの春なのに！」
「俺としては春なのに元気なおまえがわからない」
「そんな春の人みたいな言葉遣わないで！そんでもって私を可哀想な人を見る眼でみないで！」

そう。（´・ω・、）て感じの眼だ。
折角の放課後にんなテンションあげても疲れるっつの。

「あー。俺用事あんだ」

「何よ。仕事？」
「まぁ、そうだ」

用事があるのは本当。仕事だというのは嘘。これに関しては今はアリサだけが魔法に関わっていない為に疎外感を与えてしまう。
実際アリサの眼が一瞬だけ寂しさを映す。これは中々にどうしたらいいのか迷う。

「直ぐ帰ってくるさ」
「別に心配なんかしてないわよ！」

顔を真っ赤にして反論するアリサ。うん。こういうのもアリだ。
アリサだけを仲間はずれにするのもなぁ。でも危険な路にこっちから誘うわけにもいかない。
相変わらずの二律背反があるな。

「んじゃ、俺は先に行ってくるわ。すずか。後でな」
「うん。待ってる」
「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

うぉ。なんだか背中にゾクリときたぞ。なんだ・・・この前すずかと三咲に行ってからなんかちょくちょく視線が刺さる。

「なんや・・・すずかちゃんと綾人君、随分仲良ぅなってへん？」
「なんかね・・・春休み前からなんだか雰囲気がおかしいんだよ？」
「なにかな・・・私達には隠し事をしてるようなの。おかしいな？」

俺の背後で鋭い殺気を感じる。この世界に来て最大級の殺気だ。それが今三つも背中に感じている。

振り返ればやつがいｒ・・・・其処には誰もいない・・・いや、いた。なのは・フェイト・はやての三人だ。

「なんだ・・・・どうした」

「どうしたじゃないよ。すずかとどうしたのかな?かな?」

「何もない」

「「「嘘だっ!!」」」

ひぐらしはまだ鳴いてない。だがこの圧倒的なプレッシャーは・・・なんだっ!?

「あかんなぁ。あかんよ。まずはどういうことかちゃんと説明せなあかん」

「そうなの。ちゃんと私達が納得行く説明をしてほしいんだよ」

迫り来る三人。くっ、すずかは既にアリサと教室を出ているだと・・・。

よく見ればもう教室には俺達四人だけ。だったらっ・・・。

「あー・・・落ち着け三人とも。まずはどう・・・」

話の途中で視線をふと後ろへと向ける。すると三人とも釣られて振り向いた。

俺はその一瞬の隙を見逃さない。戦いにおいて一瞬の隙を見逃すのは万死に値する。

背後かに手を伸ばしてスキマを開く。なのはフェイトはやてを置いてスキマの中へと飛び込んだ。

「何もな・・・あぁっ!?」

いち早く気付いたのはフェイト。その声に反応して振り向くなのはとはやて。
しかし手を伸ばしても俺はスキマの中にいるので距離が離れてしまった。

「すまん。今度ちゃんと説明する」

そう言い残して俺はスキマを閉じた。

スキマを遣って教室から移動した俺はアースラの一室。セイバーの個室とは違い、倉庫に近かった。

「説明しないと駄目、だよなぁ」

説明するならちゃんと納得の行くこと言わないときっと駄目だろうな。幾つか考えておくか。
ともあれ、今日の用件をさっさと済ませてしまおう。

C．C．との面会。

あれから4ヶ月が経った。ずっとアースラの一室に引き篭もるように姿を見せないC．C．は食堂からのピザの差し入れのみでしかアクションがなかった。
部屋から出れば其処はC．C．の部屋の近くだったので足を向ける。
途中誰とも擦れ違わずに部屋の前についた。

「C．C．。いるか？」

ノックはせずに声をかける。すると扉が音も無く開いた。中にはピザを食べているC．C．。

「相変わらずだな」

「ふん。おまえか」

チ○ズくんを抱えながらピザを食べている様はなんとも様になっている。流石はピザの魔女。

「私は忙しいんだが」

「ピザ食べるのが忙しいというのは無しだぞ？」

「・・・・チッ」

舌打ちしてるし。なんだこの魔女。本当に俺と同じ存在なのか？

「話があるそうだが・・・・」

「あぁ、その事か。リンディが話したな？」

「あぁ」

俺は短く返事をする。伝えてきたのは確かなのだし。

「なに。簡単な事さ。そろそろ還ろうと思ってな」

魔女の声が静かに響いた。

C．C．Side

此処のピザは中々いいものを作る。レシピがないから出来ないとか最初は言っていたが地上に降りてレシピを得させた。
私が行くわけがない。面倒だ。それにこの部屋から極力出るなというのは管理局からの通告だしな。
なので毎食をピザにしてもらい届けさせる。
色々なトッピングやらを試したりして楽しむ。時折リンディが食べに来たがあれは味覚がおかしい。
自分で食べる分だけ弄れと指示して私は私で味を楽しむ。ポイントも溜まったのでアレを手に入れた。
チ○ズくんは今回も私の元にある。何よりも此れが一番だ。以前は代替品を使った事もあったがな。
そんな折、リンディに話しかけた。用件は「ミラージュ＝ヴィジョンと話がしたい」と。
あの事件以降、関係者との接触を禁じられていた私からの進言にリンディは快諾する。少しの時間でなら、と条件をつけて。
そして数日が経った後に報告はした、と告げられる。あとは向こうから来るのを待つだけだ。
それから数時間もしないうちに転送のゆらぎを感じる。これはスキマの気配。
暫くして扉の向こうから声がする。

「C．C．。いるか？」

ノックはない。声だけかけてくる。もし私が居なかったり寝てたらどうするつもりだったんだろうな。
リモコンで扉を開けてやる。そうすると待ち人幻影の導き手が現れた。

「相変わらずだな」
「ふん。おまえか」

相変わらずとはご挨拶だ。まぁ確かに今の私はピザを食べているが。
そんなに毎回食べているわけではない。わけではない。

「私は忙しいんだが」
「ピザ食べるのが忙しいというのは無しだぞ？」
「・・・・チッ」

軽口も簡単に跳ね除ける。抱いていたチ○ズくんを横に置き、幻影に向きなおす。

「話があるそうだが・・・・」
「あぁ、その事か。リンディが話したな？」
「あぁ」

リンディが伝えたようだな。あれから数日。まぁ速いほうか。
それなら此方も心を決めるべきだな。

「なに。簡単な事さ。そろそろ還ろうと思ってな」

そろそろ此処にいるのもな。おまえの中に戻ってやるよ。

綾人Ｓｉｄｅ

今、Ｃ．Ｃ．は還ると言った。何処へ、等と言う言葉も今は何処かへと行ってしまう。
あいつが還る場所なんて同じ存在の俺の中だけじゃないか。

「本当、か？」
「あぁ。そろそろ私自身も限界に近い。おまえが望むならこの力と魔力回路もおまえにくれてやるよ」
金色の瞳が俺を見据える。その瞳には決意すら感じ取れる。
「だがその前にサーヴァント達と話をさせてくれないか」
「サーヴァントと？何故だ」
「何・・・遺言というわけではないが伝えるべきことがあるのさ」
「なら俺が伝えちゃだめなのか？」
「お前に聞かれるくらいなら私は死を選ぼう」
そこまで毛嫌いされてるとは思わなかった。落とした肩が床につきそうなくらい落ち込むだろその言い方。
「わかった・・・じゃぁ今からサーヴァントを呼ぶから」
納得は行かない。が、きっと何かあるのだろう。本当に必要なら俺にも伝言がくるだろうし。
スキマを開いて各サーヴァントへと繋げる。
アースラの自室に居るセイバー。
地上でバイト中のランサー。
本局で仕事前だったアーチャー。
遊びまわってたギルガメッシュ。
全員を呼び出す。
「おいおい。バイト中に呼び出すたぁ何事だ？」
「ふん。何かあるならこれから調査で飛ばねばならないので手短に頼む」

ランサーとアーチャーが順に不満をぶつけてきた。

「C．C．が話をしたいそうだ。聞いてやってくれ」

「・・・了解しました。マスターがそれでいいなら」

「我はセイバーがいるなら何でもかまわぬぞ」

セイバー、ギルガメッシュ。ありがとうな。

「じゃぁ俺は外に出てる。なんだか俺は聞いちゃいけないらしいんでな」

そう言って部屋を出た。

セイバーSide

マスターにスキマを使用しての召喚の後、同じアースラに厄介になっていたマスター同一体のC．C．からの話。

マスターに呼ばれて私達サーヴァントが全員ここに集まった――――C．C．の部屋に。

なにやらマスターに吐きかれてはいけない話らしく、マスターはすごすごと部屋の外に出て行ってしまった。

「さてC．C．。話とやらを」

「あぁ。手短に話そう。お前たちのことについて。そしてお前たちのマスターが背負ったイレギュラーの話だ」

マスターが神から遣わされた要件。この世界に現れるというイレギュラーの排除。

この魔女はそれを知っているようだ。

「イレギュラーは現れる。それがいつかはまだはっきりとは言えない。だが確実に現れる」

「根拠は?それがなけりゃ口だけになっちまうぞ。でなけりゃ散ってったサーヴァントも報われねぇ」

「無論だ。根拠はヤツ自身。つまり　　だ」

C．C．から簡単に零れた言葉が部屋中を戦慄させる。

歴戦の勇士アーチャーやランサー。果てはギルガメッシュまでもが表情から余裕が消えた。

「それは真実か、女狐」

「あぁ。何時になるかはわからないが確定事項だ」

「そうか・・・・」

ギルガメッシュはどうやら深い部分まで理解したようですね。こういうときに造詣が深いというのは羨ましい。

「ならば・・・そうならないようにすると言うのは可能ですか?」

「現時点ではなんとも言えないな」

私の意見はどうやら難しいらしい。ならば最初の意見を通すしかない。

「では・・・それまで貴方はどうするのです?」

「幻影と同化する。だが完全同化ではなく、意識やらははっきりとやつの中で生きているけどな」

同化、というよりは他意識混合、多重人格という感じですね。

主人格はマスターでその裏側にC．C．がいる、といった感じでしょう。

「同化したあとは幻影が許可しない限りは肉体的表面上に出てくる事はない。意識はあってもな」

「なるほど。しかしその同化をした後に身体的な負担はないのか？」

「ない。それははっきりと言ってやるよ。お前たちにとってもそのほうが安心だろ？」

「まぁ、な」

アーチャーが問いかける。其れをC．C．が答える。

同化した後の心配事のようですね。しかしこれでその心配事も払拭されました。

「あー、俺からは何もねぇや。今まで通りだってんなら文句はネェよ」

「そうか」

「あぁ、只一つ。アンタと同化って事は大聖杯に戻った他の連中はどうなる？」

「問題ない。大聖杯は幻影に移るから其れも幻影の意志で召喚可能になる。但しかなりの量の魔力を消費するが」

「そうか」

ランサーは短い返答。どうやら以前闘ったサーヴァントの事。

彼ら彼女らがどうなるか。そして大聖杯の行方。

今となっては召喚器具として成り代わった大聖杯がどうなるかの確認。

「私から言う事は終わった。あとはお前たちが好きにすればいい」

「我は何も言わぬ。どうせマスターの意志で出てくるかも知れない

のだろう？なら必要ない」
「俺もだ。出来りゃあんたとも戦ってみたかったけどよ」
「私は特にない。言うとなればそうだな。また逢うだろう、かな」
「ふ・・・全くお前たちは。では、な。この先何時会うかわからんないが」

C．C．は動かない。チ○ズくんを抱きながら会話を終わらせた。
この世界から居なくなる、という事におkの魔女は何とも思わないのか。

「さて。では幻影を呼び戻すか」

リモコンを使って扉を開ける。其処にはマスターが立っていた。

「もういいか？秘密の会合」
「あぁ。もう済んだ。中に入って来い」

静かにマスターが部屋の中に入ってきた。さぁ――――――私達が見守る中で同化の秘術が始まる。

綾人Ｓｉｄｅ

部屋を追い出された。しかも完全防音にしてるせいか中の会話も聞こえない。
まぁ聞くような無粋な真似もしないけど。

「・・・・・待つか」

聞くことは恐らくできるだろう。でもそれは卑怯な手。

恐らく俺にも隠さないといけないことを話してるのだろう。
何よりもサーヴァントに関することなら俺が口出しできる事もない。
C．C．も大聖杯としているのだからその会話の中に入れるのも当然。
・・・・・・・・・・。

「これが・・・ぼっちというやつかっ！」

今ふと気付いた事実に心が張り裂けそうだ。
誰か！誰か！俺をそっと抱きしめて！
なんて一人芝居をしてると話が終わったのか扉が開いた。

「もういいか？秘密の会合」
「あぁ。もう済んだ。中に入って来い」

そういうなら中に入ろう。ゆっくりと入れば全員の表情が引き締められている。

「さぁ始めよう。元の一人に戻る為に」
「あぁ。始めよう」

どうやら何かが起きるということは既にリンディに伝達していたらしくアースラスタッフは全くの無関係を貫くそうだ。
C．C．の足元に魔法陣が曼荼羅のように敷き詰められる。
足元だけではない。床も壁も天井も。その魔法陣一つ一つが膨大な魔力量を有している。

「二つ別たれた魂は今此処に。我と汝の肉体は一に。魂は一に。一は全。全は一。永久の流れに身を任せし偶像」
「我らは世界より切り放たれた力。全ては今のために。未来の為に。

散った過去を一つに束ねる」
「今こそ我らは創生される。我と汝が力もて等しく世界の均衡を護り崩さん」

詠唱が続く。部屋の空気は既に重ったるく圧し掛かってくる。
俺とC．C．は部屋の中央に位置する一際大きな曼荼羅魔法陣の中心へと歩を進める。
そこで俺たちは手を合わせ額を合わせ念じる。
互いの存在を我が内に。体が光り輝く。
光の粒子となり量子となった体は重なり合うようになりながら重なっていく。
魔力が膨れる。しかし其れすらも押さえ込んでいく。
サーヴァントの４人は魔力の流れに苦しそうな顔を浮かべているがそれでも眼を逸らす事はない。

「C．C．――――――我が内へ」
「ミラージュ――――――汝が内へ」

光が一層輝く。部屋中に光が凝縮して一気に弾ける。眼が眩む程の光量。
光が部屋を包んだのは一瞬だけの事。光は収束していき、中心へと。
魔力も魔法陣も中央の魔法陣のみを残して収束する。
クルクルと魔法陣が回転する。ミッドともベルカとも取れない魔法陣の形状。四角形を二つ重ねたような八芒星。
魔法陣の色は漆黒。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

小さく声もなく一息つく。周囲にはC．C．の姿はもうない。
同化の秘術は此処に完成した。

俺の中に小さな気配がある。恐らくこれがC．C．。

『私の声が聞こえるか？』

「あぁ。聞こえる」

小さな気配から聞こえる声はC．C．の声だった。頭に響くような感じだ。この感じは念話に近い。

『暫くはこのまま大人しくしててやるよ。何、プライベートまで覗く気はないから安心しろ』

「俺のプライベート筒抜けじゃんか！意味無いじゃん！」

『くくっ、何もお前の遍歴や性癖まで覗く気はないよ。それに・・・女としての視点での意見はこれから先重要に必要になると思う』

「・・・くっ」

反論できない。しかしそんな簡単にこいつが知恵を貸してくれるとは思えないけどな。

『それもどうなるかはお前次第だろ』

「心を読むなっ！？」

『そういうな。駄々漏れなんだから』

「酷い！泣くぞ！！」

ほぼ他人事のように会話を進める。C．C．の声はサーヴァントには届いていないのだ。

「マスター・・・その、大丈夫ですか？」

「待てセイバー！そのドン引きな眼をやめろ！アーチャーもだ！」

「何、私はマスターが望んだのなら口出しは出来ぬからな。存分に楽しんでくれ」

いいつつ視線を外すアーチャー。此処に味方は居ないのか？
ランサーに視線を向ける。直ぐに視線を外すランサー。
ギルガメッシュは――――――セイバーにしか視線がいってない。

「もうやだ！この英雄たち！」

俺泣いちゃうよ。泣いてもいいよね・・・・・。

「マスター。とり合えずですがリンディ提督に報告に行かないといけません」
「セイバー。此処で真面目になられても俺はどういう顔で君を見ればいいかわからない」
「笑えばいいとおもう、よ？」

首を傾げながら言うあたりちゃんと知識がないな。誰だ吹き込んだのは。
あとでそいつを探してお話しないといけないな。

ピザの皿を片してから厨房へと運ぶ。それからブリッジに居るリンディ艦長に事態の報告。
リンディ艦長は其れすらも受け入れて大丈夫と太鼓判を押した。

これでまた一つの案件は終えた。管理局・・・というかリンディ艦長に一抹の不安を感じながら。

こんなんで大丈夫か、管理局。

第五十一話　アリサ＝バニングス

アリサＳｉｄｅ

新学期が始まって約一ヶ月。もう直ぐゴールデンウィーク。
今年は家族で旅行と思ってたんだけど、綾人達からの誘いで向こうの旅行にお邪魔する事に。

「４泊５日の温泉旅行ね。結構ロングスパンじゃない」

既に荷物は出来上がっている。何よりもこういうのが初めてじゃないというのが強みよね。
去年も三家族合同で温泉旅行に行ってるわけだし。

何よりも今回は非常に人数が多いからすずかの家と私の家で車を数台出す事になったわけなのよね。
行き場所としてはいつもの旅館でしょうし道筋の話し合いも明日には大人たちがやってくれる。
こういう時、子供って言うのは何もしないでいいとか楽とか考えるのよね。
逆に甘えてしまっているという気持ちが出ないのかしら。
スーツケースにして一つ。子供としては少し大きいかな？でもまぁ必要なものなんだもの。いいじゃない。
カチリと時計の針の音が鳴る。針は既に１０時を指していた。

「あ、いけない。準備してたらもうこんな時間じゃない」

明日も朝は早い。早く寝ないと起きれない。
ベッドに潜り込む様に入り込んでまどろみに身を任せる。

さぁ、言い夢を見て明日も元気に過ごしましょうか――――――

朝。日差しがカーテンの隙間から入り込む。雀たちの囀りで私は眼が覚めた。

「ん・・・・」

上半身だけ起こして背伸びをする。伸びた背中が気持ちいい。起き抜けのアクビ一つすれば涙が零れる。
ゴシ、と眼を擦って眠気を飛ばす。

「今日もいい天気」

今日はいいことありそうだ。

すずかＳｉｄｅ

朝。何時ものように登校する。途中でアリサちゃんたちと待ち合わせ。
私は何時も先に到着する。合流するまでの間、今日はどうしようとか、どうなるのかなとか考えている。

「よ」
「おはようすずか」
「あ、おはよう」

すぐに合流したのは綾人君とフェイトちゃん。

綾人君はフェイトちゃん達と仲直りしたのかな？
フェイトちゃんの顔をちら、っと覗くと大丈夫みたい。険悪なムードは好きじゃないからそのほうがいいかな。
合流してからしきりに綾人君が周りをキョロキョロしてる。と思ったら溜息一つついてから気配が変わった。

「すずか、フェイト。なのはたちにも一応伝えといて。出来る限り学校の外でひとりにならないように」
「え？わかった・・・けど。どうしたの？」
「良くない気配だ。人の捻じ曲がった負の気配、かな・・・」
「魔法関係者？」
「いや違う。そっちのじゃないからフェイトは魔法使うなよ？」
「わ、わかってるよ」

フェイトちゃんは魔法関係者だと思ったみたい。
でも綾人君は違うから手を出すなって。大丈夫なのかな。

「取り分け危険は無さそうだけどね。まぁ俺がいるときは安全だから安心していいよ」
「あはは、綾人騎士みたいだね」
「ベルカ式じゃないぞ俺は」
「うん。そういう意味じゃなくてだね？」

綾人君の冗談にフェイトちゃんが真面目に受け取ってのいつものやり取り。
其処から少しお話しながら待ってると少ししてからなのはちゃんはやてちゃんとアリサちゃんが合流。６人で学校へと向かう。

綾人Ｓｉｄｅ

登校中にフェイトとすずかと合流したらなんだか気配を感じた。二人・・・いや三人か。離れた場所に同じような気配が一つある。魔力を感じない以上は俺やフェイトを狙ってるわけじゃないようだ。なら狙いは一人、か？すずかを狙うとは命を軽く見てるな。まだ実害がない以上は手を出さない。

「すずか、フェイト。なのはたちにも一応伝えといて。出来る限り学校の外で一人にならないように」

「え？わかった・・・けど。どうしたの？」

「良くない気配だ。人の捻じ曲がった負の気配、かな・・・」

「魔法関係者？」

「いや違う。そっちのじゃないからフェイトは魔法使うなよ？」

「わ、わかってるよっ」

一応忠告。使おうとしてたなフェイト・・・。言っておいてよかった。

警戒はしておいたほうがいい。俺がいる時なら直ぐにでも対処できるが居ない時に来られると遅れそうだ。

周りを警戒しながら他愛もない話をしているとアリサとなのはが合流してきた。

さて、学校だ。

アリサＳｉｄｅ

授業も滞りなく進んでお昼ご飯もお弁当のおかずの取り合いになりつつも恙無く終わり。

時既に放課後。帰り支度をする教室内はガヤついている。

「さぁ帰るわよ！今日はなのはの家でお茶して帰りましょう」
私の提案は賛成されて六人でなのはの家・・・翠屋へと向かう事に。
今日は綾人は逃がさないわ。

「今日は綾人も強制参加よ！逃がさないからね！」
「はいはい・・・わかったよ」

諦めの声になってるけどまぁ・・・いいわ。居ればそれでいいのよ。
早速鞄を持って帰路に。最近の話やら魔法のこととか・・・綾人とすずかの事とか・・・。

此処らへんはじっくりと時間をとって聞くしかないわね。
なのはフェイトはやても同じ意見らしいし。やっぱり同じ事思ってたんだ。
なら翠屋で追求するしかないわね。覚悟なさいよ。

話し込んでたら翠屋の前。なのはは裏から入って着替えてくるという。
五人で店側から入って桃子さんと士郎さんに挨拶して奥の席へと移動する。
はやてもすずかに手伝ってもらいながら車椅子からソファに移って楽な姿勢へ。

ケーキセットを注文して暫く待つ。そういえばなのはがまだ来ない。
そんなに着替えるのに時間が掛かっているのかしら。

少し待ってるとなのはがケーキセットを持ってきた。
話を聞くとどうやらなのはが最後の部分だけでも手を出したみたい。

全部作るとなると時間掛かっちゃうものね。

「にゃはは、おまたせなの」

はにかみながらなのはが照れくさそうにケーキセットを置いていく。
ショートケーキにモンブランにティラミス、ミルフィーユとフォンダンショコラにプリンケーキ。
テーブルには色んなケーキが並んでる。

なのはも席についてみんなで食べ始める。
ケーキが美味しい。手が止まらなくなっちゃうわね。
もうすぐ旅行だってのにお腹が出ちゃうかも・・・はっ、だめだめ！節制をしていかないと・・・駄目よね・・・。
なんておなかの具合を気にしてたら綾人以外全員の視線が下に向いていた。

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

沈黙が過ぎる。チラリと綾人を見たら我関せずといった感じでケーキ食べてるし。

「ねぇ綾人・・・・」

「俺は何も言わないぞ。気になるなら食べなければいい。我慢が出来ないなら食べてその分動け」

冷たい！冷たいわ！此れだから男って奴はっ・・・・！！！
震える怒りを拳に乗せてどうしてやろうかと思ったけど場所が場所だし後にしてあげるわ。

「動けるときに動かないと、ねぇ・・・？」

「そうだね・・・今日は訓練ちょっと増やそうかな」
「あ、フェイトちゃん。私もつきあうわ」
「あ、じゃぁ私もなの！」

四者四様。なのはたち魔法組は訓練があるのね。それでカロリー消せるんだ・・・いいなぁ。

「はぁ。私だけなのよね。魔法に関わってないの」
「あ・・・そうだね」
「あー、別にいいわよ。そういうのはあんたたちに任せるからさ」

手をヒラヒラさせて見せてからまたケーキをぱくつく。こうなったら自力で痩せてやるわ。
たまに綾人がこっちを見てたけどなんなのかしら・・・。

「それよりもさ。すずかと綾人ってどうなの？」

私はカードを切る。恐らく此処にいる全員・・・といっても綾人とすずか以外が気になっていることだろう。
此れについてすずかは表情を変えないで何も言わないでいる。
皆綾人に視線が向かっていく。

綾人Ｓｉｄｅ

すずかと俺の関係について今視線が集まっている。
すずかからは何も言う事はないという感じで黙っている。
まぁこういうのは男のほうから言うべきことだとか思ってるんだろう。

「魔法関連ではないが近いもので魔術というのもがある。そもそもの始まりはすずかの家柄の血筋にもある」

俺は語り出す。すずかの家の事。血の事。夜の一族の事。そして俺も吸血騎であること。

同じ種族として上位になる俺の眷属となることで月村の一族は俺が存命の間は平穏を保てるという事。

皆驚いてる。初めて知る話に驚きを隠せていない。フェイトなんかフォークが手から落ちてるし。

「まぁそういうわけだ。この前二人で行ったのはすずかの力の制御の為に師匠になる人に会いにいってたというわけ」

「でもそんな事教えてくれなかったらわからないよ！」

「話すことでもない。これは完全にプライベートだ。人間ではないモノの」

そう。人間とは違う。本来なら弾圧されるべき種族。だがそれは今此処には関係なかった。

「でもそんなの・・・そんなのって・・・悲しいよ！」

「そういきり立つな。見た目は人と同じだしすずかの場合吸血衝動もない。力が暴走しない為の措置でもあった」

「じゃぁ、大丈夫なんか？」

「あぁ。今の所はな。何かしらのショックが無い限りは安全だ。今はまだ幼いからって感じと思えばいい」

其処まで説明すればすずかも顔を上げて笑みを浮かべてる。この説明でよかったようだ。

「ごめんねみんな。隠すつもりはなかったんだけど」
「いいのよ。そういうことなら仕方ないじゃない」
「うん、ごめんねアリサちゃん」
「だーかーら！謝るんじゃないわよ。それじゃこっちが悪いみたいじゃない・・・」

アリサとすずかも分かり合ったようだ。アリサは一人顔を真っ赤にしてるが。
しかしこれですずかの件は終わりか。なんだか雰囲気がギスギスしてたから直ればいいんだけど。

すずかもそのうち選ぶときが来るだろう。今のまま平穏の中で生きるか、それとも――――――。
そしてアイツも。

「あぁ、悪い。俺は先に帰るぞ」

時計を見れば既に翠屋で1時間以上時間を潰してたようだ。とり合えずこの件は終了したと判断したし。
用事があるから、と皆に伝えるとなんとか了承を得た。
席を立って店の出口へと。背中に刺さる視線はもうちょっといじゃん、という眼差しに違いない。

「あ、桃子さん。持ち帰りようにケーキを２０個ほどお願いします」

出口の横、レジに立っていた桃子さんに土産を注文。数が数なので少し待ってねといわれた。
先に代金だけでも支払う。

少ししてからおくから美由希さんが出てくる。手には大きな箱。

恐らくアレを持ち帰れと。

「はいこれ。お持ち帰り用のケーキ２０個ね。落とさないように気をつけてね」

「はい。ありがとうございます美由希さん」

美由希さんから箱を受け取る。

「しかし２０個も凄いネェ。いつもだけど個人で大口の注文は綾人君くらいだよ」

「ははは、大食らいが居るもので大変です」

嘘は言ってない。セイバーが大半を占める。まずはリィンとマテリアル達に配ってからだが。

礼をしてから翠屋を出る。うん。まだ朝の気配が近くにいる。

今はなれるわけにも行かない。朝の誓いが無くなってしまう。

けど此処は彼の高町家の前。早々可笑しな真似も出来ないだろうと思って気配を感知しながら俺はその場を離れた。

アリサＳｉｄｅ

大きな箱を持って綾人は出て行った。用事ってなんなのかしらね。

未だにアイツのプライベートとか全然見えないんだけど。

すずかも判ってないみたいな顔してるから本当に誰にも言ってないのね。

「さて、私も帰るわ。まだ旅行の準備出来上がってないのよ」

「あ、うん。もうすぐだもんね。私も持っていくものちゃんと決めないとな」
「フェイトは結構軽装なイメージだけど」
「・・・・否定はしない、けど」
フェイトが落ち込みだした。すぐ隣のなのはがあやしてる。なんかもう・・・ごちそうさま。
「じゃぁお先。四人はごゆっくりね」
「またね」
軽く手を振って席から離れる。桃子さんたちに会釈をしてから外へ。
「さて・・・・買い物してから帰ろうかな」
軽く背伸びしてから歩き出す。ちょっと欲しい小物があったから丁度いい機会だし買って帰ろうかな。
大通りに出る為にちょっと足早。
此処からならそう時間も経たないでいける。周りの商店街を見渡しながら大通りへと出た。
出た所で目の前に黒塗りの車が私の横に停車した。
「ちょ・・・あっぶないじゃないの！」
思わず口に出てしまった。足も止まってしまった。
其れがいけなかった。覆面とグラサンの男が数人車から降りてきて私の腕を掴む。
これってまさか――――――

なんて思っているのも束の間。
布で口を押さえられてしまい、体も抑えられれば反抗も出来なくなる。

うん。これはやばい。

気付かなかったのも悪いけどさ。こいつら私をどうするつも、り・・・・。
うっすらと眠くなっていく意識が私を夢の世界へと誘っていく――――

綾人Ｓｉｄｅ

「っ！！」

翠屋の前で感知していた気配がブレた。
こういうときに限って悪い方向に進むんだよな！全く、なんの冗談だ。
可笑しな気配と一緒にいるのはアリサの気配。あぁ、一人で帰ろうとしたのか。
気配を追うとかなりの速度で動いてる。車か。

「神威。行動予測を有現視で俺の視界にフィードバック」

神威が俺の見ている視界にフィルタをかけるようにアリサの乗った

車の行動予測ルートを被せてくる。
逐一更新されていくので見逃す事はない。
恐らく相手は一般人だと推測する。なら魔法の類は使えない。
身体強化で充分か？

民家の屋根から屋根へ。ビルを抜けて車を追う。
行き先の予測まで完璧だ。

「港に向かってる？」

港湾倉庫を推測した神威はそこに印をつける。俺だけにしか見えない印を。
車を確認したときには既に車内には誰も居ない。
しかし近くの倉庫の一つの扉が少しだけ開いていた。

「中か」

扉に近付き人の気配を感じ取る。近くには誰も居ない。なんて無用心だ。
だがそれで少なくとも見張りをつけられるほどの人数での犯行ではないというのがわかる。
恐らく実行犯及び犯行声明の主犯と見張りが一人か二人。
数が少ないなら対処のしようもある。あとはこの犯人を見つけ出してアリサも見つける。

倉庫の中に入る。陽の光すら入ってこないくらいに暗い。

「神威。暗視フィルター」

視界に暗視用のフィルターを被せる。神威マジ便利。

暗闇でも視界が良好だ。物の影に隠れながら先へと進む。此れは中々ミッションオブスネークだ。

「恭也さんあたりに話しかけておけばサバイバれたな」

そう思ってももう後の祭り。どうしようもない。
ならば。今後時間が出来たときにやればいいのだ。
等と違うことを考えながらも意識を飛ばす。左右上下前後斜め。
奥のほうに人の気配が三つ。その一つはアリサだ。まだ無事のよう。
微かに声も聞こえた。近くだ。

まだ、というか無事のレベルが何処を指すかによるけどな。
だがまだ捕まってるだけか。こりゃ身代金誘拐が妥当な線か。
アリサんちってかなり金持ってるし。
俺はタイミングを見計らうように気配を殺して近付く。

アリサＳｉｄｅ

わけわかんないわけわかんないわけわかんない。
眠らされてから起きるまで全く何があったかわからないんだけど！
今は柱に縛られて座ってる。暗いから周りがわからないけど何処よここ・・・。

「フィヒヒヒ。たまんねぇなぁ。悪ぃネェお嬢ちゃん。えっとアリサちゃんだっけ？」
「なによ・・・誰よアンタ！」

暗がりの中から声がする。大人の、男の声。体が動かせないから逃げる事もできない。

「ヒャーハハハ！悪いが人質だ！今おうちに電話かけてるからちょっくら待ってなよぉ・・・あとで楽しませてあげるからさぁ」

ジュルリ、と男が涎を拭う。うぅ・・・嫌悪感が凄く出てる。

キモチワルイ。

そんな感情しか湧いてこない。これからどうなるのかな・・・。

声からして二人、かな。私の近くに居る。このままどうなるのかしら・・・。

死んじゃうのかな。

だとしたら楽に死にたいな。苦しむのはイヤだし。

「フヘヘ、ボスは？」

「今連絡してるところだ」

「ヒャッハー！それじゃもうすぐ俺らも大金持ち！？札束のプールで泳ぎ放題だぜぜはははは」

なんだか一人だけ頭のネジが吹っ飛んでるのがいるわ・・・可哀想。

でも可哀想レベルだったら私も同じくらいよね。

「時間遅いっスねぇ。俺もう我慢できねぇっすよ！」

「莫迦いうんじゃねぇ！手ぇだしたのバレたら俺たちもコンクリ抱かされて海ン中だぞ！」

「バレたらっすよね・・・じゃぁバレなきゃいいんじゃねぇッスか？」

グヒヒとか笑ってるコイツキモイ。モイキーだわ。マジモイキー。
とか言ってる場合じゃないわ！コイツの視線が私を見てるんだけど！
暗闇も目が慣れてきて何とか見えるくらいにはなってきた。顔まで
ははっきりとは見えない。

ていうかもう一人のほうも考えてるふりして私をチラチラみないで
よ！
こっちくんな！

「ちょ、近付いてこないでよ！やめなさいよ！」
「フィヒヒイヒヒ。どんなに声をだしたって外にゃぁ聞こえねぇんだ。残念だったなぁ！」
「い、いやぁーー！！！！！」

私の叫び声が建物の中に響く。それも空しく消えていく。
男たちが近付く。膝をついて私の目の前で笑う。

怖い。
恐い。
コワイ。

知らずに涙を浮かべていた。頬を伝う感覚がはっきりとわかる。でも今はそんなのはどうでも良かった。
何をされるのかもわからないまま私は泣きじゃくってた。

「ウヒヒヒ。ヨウジョを相手にするとか。はちきれる」

なにが！？なにがはちきれるの！？兎に角私このまま死んじゃうっ・・・！！！

「たすけて・・・・たすけて・・・・・あやとぉーーーーー！！！」

つい名前を呼んでいた。泣きじゃくった声で私はアイツの名前を叫んでた。

ここにいるわけないけど。期待なんか出来ない。ここがどこかも判らないんだから。

それでも。名前を叫ぶ。届けとばかりに。

「フヒヒギャッ！？」

目の前に居る男が股間を押さえながら崩れ落ちる。アレ、痛いよね。痛いんだよね。

「怪我はないか、アリサ」

男が沈黙して直ぐに暗がりの中、まるで光を放つかのように笑みを向けてくるアイツがいた。

綾人Ｓｉｄｅ

暗闇に隠れるようにして声が聞こえるくらいまで近付いた。

会話からしてまだあと一人は確定で残ってるな。

と、やばいな。状況確認してる場合じゃないぞ。

「神威。身体強化。そうだな・・・３０％だ」

身体強化魔法をかけて俺は暗闇から一気に飛び出した。
まずはアリサに近い奴の股間を思いっきり蹴り上げる。

「フヒヒギャッ！？」

笑い声と素っ頓狂な声を上げて沈黙した。股間を押さえてるが其れもムダだろう。

「怪我はないか、アリサ」

見えない傷があるかもしれない。其れが心配だ。
顔を見ると泣きじゃくっていた顔が余計に涙で汚れる。

「此れで顔を・・・って縛られてるのかちょっとまってろ。すぐ助けるから」

ハンカチを渡そうとした所で縛られてるのに気付く。此れじゃ渡されても受け取れない。
じゃぁ、とっとと残りの一人を倒してアリサを救ってしまおう。

自然体で立つ。それだけで威圧してしまう。
はっきり言おう。俺は今怒ってる。

「お前のほかに誰がいる。何人いる。答えろ。そうすれば命は助けてやれるかもよ？」
「小僧（ガキ）がっ！何処から迷い込んできたかわからないが不意打ちしたのが本気だと思ったら大間違いだぜ？」
「へぇ。どう間違いなんだ？」

「こういう――――――ことさ！」

男の手には黒光りする鉄が握られていた。既に指が引き金に触れていて何時でも撃てる状態だった。

「フフフ。こいつは使いたくなかったけどな。どうだ、ビビったろ！」

「いや、全然。てか当たらないし。第一な。撃っていいのは撃たれる覚悟のある者だけだ」

よく見たら男の足が震えてる。撃つのはどうやらまだしたことがないみたいだ。覚悟が足りない。

銃口の向きと指の動きだけでタイミングと飛んでくる方向は充分見えるから後は避ければいいだけだけど・・・アレがやりたい。

ずっと立ってると男がついに射撃してきた。

迫り来る弾丸。アリサが咄嗟に叫んだが俺は其れを凝視した。

身体強化をしている以上視力すら強化されているわけだ。止まって見える。

手を差し出して人差し指と中指で挟んで弾丸を摘む。

「なっ！？」

男が驚愕の声を上げる。その手を返して手の甲を見せる。

そのままスナップの要領で弾丸を返す。狙いは銃口。うまくいくかな。

ヒュンッ！

吸い込まれるようにまだ硝煙燻る銃口へと弾丸は返還された。その

衝撃で銃が爆発する。
男の持つ手も只ではすまない。
爆発のショックで両手が焦げてる。肉の焼けた嫌な臭いだ。

「消えろよ。あんたが子供と嘗めた時点でもうアンタの負けだ」

もう男のほうは見ない。戦意消失どころかそれだけでうずくまってるだけだ。
アリサに近付いて縛られていた縄を解く。

「大丈夫か？もう安心だぞ」

自由になった体を確かめてる。其処に頭にポム、と手を置いて撫でた。
涙を浮かべたアリサが俺にしがみつく。

「恐かった・・・こわかったよぉぉ・・・・」

しがみついた体を弱く抱きしめる。
カタカタと肩が震えてるのがわかる。
あぁ、悪いな。こんなに脅えさせたのは俺が離れたからだ――――――

だから、さ――――――

だから――――――

「安心しろ。直ぐ終わらせてくる」

アリサから離れようとするとアリサの手が俺を離さないでいる。恐怖で手が硬直してるようだな。

しょうがない。

『ランサー。聞こえるか？』

『おう。何だマスター。今バイト上がりだから何か買ってくか？』

『「仕事」だ。俺のいる場所がわかるか？』

『あー・・・ちょっと待ってくれ。　　ＯＫ、掴んだぜ』

『英雄にこんな事を頼むのもなんだが・・・掃除だ』

『なんだ？あとでちゃんと説明くれよ？』

『わかってる。やり方は任せる。こっちに来るまでに説明するから』

今一番近くにいる適役は恐らくランサーだろう。

すまないなランサー。汚れ役を頼んじまう。

アリサを抱きしめながらこっちに向かってるランサーに念話で説明。

ランサーにも段々と怒りがこみ上げてきたらしく倉庫に着き次第すぐに主犯を捕らえると言って行動を始めた。

「アリサ・・・落ち着くまでこのままここに居るのもいいけど場所だけは変えないか？こんな暗がりの中じゃ余計に安心もできないだろ」

「ん・・・・」

アリサが立ち上がろうとするけどまだ足腰が抜けてるのか立てそうにない。

「アリサ、ちょっと御免な」

そう言ってからアリサをお姫様抱っこする。顔を真っ赤にしながらも成すがままに抱き抱えられる。

見つからないように逃げるならどっかの壁を壊して進むか。

ちょっと荒っぽいけど最短距離だ。

「ちょっとだけ魔法使う。眼を閉じてて」

それだけで何をするかわかったのかアリサは目を閉じた。
あんまり見られたくないんだよな。既に関わってるヤツか踏み込んでくるヤツ以外には見せたくない。
・・・・もう充分関わってるんだろうな。なぁ、そう思うだろ？

「神威。威力を抑えてこの建物の外に出る分だけの放出。集束砲で」

目の前に漆黒の球体が産み出される。周囲から集めた魔力の塊だ。
大きさとして大体ビー玉くらい。
それを前に打ち出す。壁なんかないと思うくらいに綺麗に構わず突き進んでいく。
幾度となく壁を壊していくのを追いかけていくと急に眩しく感じた。
外の光だ。
暗闇に慣れた眼がいきなり光を感じたので眼を細めた。

「アリサ。このまま家まで送ろうか？」
「　　ふぇ？！　」

驚いた顔が真っ赤に染まってる。

「アリサと話する事もあるっていうか出来たしな」
「え、それって何よ・・・」
「今は秘密だ。時期が来れば話す」
「そ・・・じゃぁ待ってるわ」

恐らく気付いてない。俺だけが気付いた事。

そのうち話そう。必ず。

「今日は何もなかった。翠屋から真っ直ぐ家に帰った。なのはたちにはそう説明したほうがいい。心配がるからな」
「ぅん・・・そうね。そうしとく」
「じゃぁ送っていこう。このまま抱っこしていくのと直ぐ家に着くのとどっちがいい？」
「ちょっ！？なにその究極の選択みたいな！？」

このままで帰ろうと思ったがあんまりにも否定してくるのでスキマで空間を捻じ曲げて帰宅させた。
アリサを家に送ってからランサーとの連絡。仕事は終えたとの事。
命までは取らなかった。あとは地上の人間がどうにかするこった、と次のバイト先に向かっていった。

第五十二話　マテリアルズ

闇統べる王Ｓｉｄｅ

地上に降りての仮住まいをリンディが用意した。
「あぱーと」という建物らしい。２ｋというらしい。
今は其処に我と星光、雷刃がいる。まぁ他にもおるが。

「星光。朝餉を持て」
「了解しました王。しばしお待ちください」

時間は朝。朝だと思う。時計など無い。必要ないからな。
気が向くままに我らは行動している。

特にやるべきことは既に無くなり我らの存在意義すら無くなったのかもしれぬ。
だが我らはまだ此処にいる。

「お待ちどうさまです」

星光が朝餉を持ってきた。焼き魚が美味そうな香りをだしておる。

「槍の騎士が釣って来たものです。新鮮なうちに調理できました」

あの槍の騎士め。早朝からどこぞに往ったかと思えば何をしておるのやら。
同居人その１。我らマテリアルだけでは居住スペースを確保できぬというので保証人とやらで同居しておる。
ほぼバイト戦士であり寝に帰ってくる程度。

しかしこの朝餉は中々。満足げな星光の顔を見つつ我は魚をほぐして一口。
確かにこの魚は美味い。焼き加減などほぼ我の好みにジャストフィットしておる。

「ふむ。腕を上げたな星光」
「先週の。リョコウというものについていって料理を覚えてまいりましたから」

ふむ。あの子烏やらと一緒にいったでかい風呂旅行か。
あれは中々によかった。しかしあぁも幻影相手に子烏共が喚き合うのは見ていてドン引きした。

「近々幻影が伺うとの報告が在りますので王は身支度はきちんとお願いします」
「うむ。王たる我を見せ付けてやるとしよう」

「それと、英雄王が帰ってきません」
「そういえば布団がそのままだったな。何処に往ったやら・・・」

同居人その2。我が唯一我以上の王と認めた王。
自分で英雄の王と名乗っていた。この世界での神話にまでなったという。
その文献を星光に探させたら本当だったのを覚えている。

その王が行方不明だ。まぁ放浪癖があるから別段気にもせぬが。
王たる享受を教えると言っておきながらこの体たらく！
だがそれでも構わぬ。我が王として再び見えるまでの雌伏の時よ。

「星光、おかわりだ」

「はい。お待ちください」

星光が我の茶碗を持って台所へと向かった。
そういえば雷刃の姿が見えない。あいつもまた遊びに出ておるのか。

「雷刃なら――外に遊びに出かけましたよ」

む。台所から戻ってきた星光が教えてきた。
そうか、奴は外か。どうせ泥だらけになって戻ってくるのだろう。

「星光。風呂でも沸かしておけ。どうせ泥だらけで戻ってくるであろう」
「はい。私もそう思います」

星光が風呂場へ湯を溜めに行った。金銭的な面は英雄王が。
食材面では槍の騎士が調達しておる。

故に我らはあんまり切り詰めるという事をしないでいる。
本来ならば何かしらするべきであろうと思っておるが如何せんこの地上ではこの体躯で可能な仕事というのがない。

だからというわけではないが世間体というものも考慮してサーヴァントなる者らとの同居となった。
ここらは幻影からの意見だな。

さて朝餉も終えた。今日は何をするか。モンスターでも狩りに行くか。
・・・・伴の雷刃がおらんではないか。却下。
外に散歩――――昼前に外に出たら駄目って星光に言われた。
寝る――――起きたばかりである。

本当にやることがない。どうしたものか。

「なぁ星光。星光は暇なとき何をしておるのだ」

「私は家事がありますので・・・」

そうであった。星光はほぼ全ての家事をこなしておった。

その点で言えばサーヴァントですら星光頼みな部分がある。

本当、見習って欲しいものである。

我？我を見れば全てが収まるのだ。賽銭等は受け付けておらぬっ！

どこぞの巫女にくれてやれ！

しかし暇だ。部屋にある本は大概読んでしまったので暇潰しになるものが無い。

多少今度買出しにでもいくか。

『ピンポーン』

チャイムが鳴る。槍の騎士や英雄王であれば鳴らさずに入ってくる。

鳴らすような輩が此処に何の用であるか。

「星光、塵芥なら追い返せ」

「了解しました」

スタスタと星光が玄関へと向かった。全く・・・我の素晴らしい一日が台無しではないか。

此れから面白くなるというのに。

折角の気分が急転降下だ。どうしてくれよう。

「星光、新聞などの勧誘なら追い払えよ」

「・・・随分酷いな、此処の主は」

星光が戻ってこないので勧誘に引っかかってると思い救いの手を差し伸べる。
しかし帰ってきたのは意外な声。幻影の声だ。
玄関方面に振り返ってみれば星光の隣に幻影がたっていた。

「随分とまぁ・・・・大丈夫か？」
「問題ない。そういえば星光が言っておったな。来ると」
「あぁ。伝わってたか」

ふん。そのくらい覚えておるわ。

綾人Ｓｉｄｅ

もう直ぐ昼前だ。まだ夏じゃないのに太陽の照りが眩しい。
こういうときは外に出たくないな。

「そうも言ってられないか」

俺は一人とあるアパートの前に来ていた。マテリアルが住んでいる部屋。
やってきた理由は一つ。契約の為だ。魔力回路（レイ・ライン）をきちんと繋げにきたわけなんだな。

玄関前までやってきてからノックする。ゴンゴン、と低い音が鳴る。
安アパートなので防音性はあまりなさそうだ。

暫く待ってると星光が出てきた。

「はい・・・新聞ならいりま　　あ」
「いや、そこで止まるなよ。つか勧誘か何かとおもったのか・・・・元気してたか？」
「はい。滞りなく健康状態は維持しています」
「うん。そうか。元気ならいいんだ。王様いるか？」
「お待ちになられてますのでどうぞ中へ」

星光に促されて部屋に入る。

「星光、新聞などの勧誘なら追い払えよ」
「・・・随分酷いな、此処の主は」

やっぱりお前の入れ知恵か。まったく仕方の無い奴だ。
こっちを向いて溜息なんぞつきやがった。なんだか段々ギルガメッシュに似てきたな、そういう態度。

「随分とまぁ・・・・大丈夫か？」
「問題ない。そういえば星光が言っておったな。来ると」
「あぁ。伝わってたか」

旅行の時に星光に伝えていたんだよ。いたんだよ。
あれから何日が過ぎたかな。数えるのもアレだな。
ギルとランサーはいない、か。バイトに精が出るなランサー。
ギルに至っては好き勝手に街中うろつくだけだけど。

「雷刃はまた外か」
「えぇ。恐らく土遊びです。なので今風呂の準備をしていました」
「そうか星光は偉いなぁ」

偉いなぁ星光は。頭をなでなでしてあげよう。
頭を撫でると猫の様に目を細くして肩を竦めた。

「なぁ、星光もって帰っていいか？」
「だめだ！アホか！」
「にゃ、にゃー」

・・・・・・はっ。俺は一体何をしていた。

「ともあれ。お前たちのマスター権が俺に移ってるのはわかってるよな」
「あぁ、その話で来たのか。全く暇を弄んでおるな」
「速めにしないとお前たちの維持が難しくなる。なるべくなら速めにしておきたくてね」
「・・・何故だ。どうして貴様は我らを生かす。我らの出生の事、知らぬわけでもあるまい」

王様が俺を睨んでくる。はやてに良く似た顔で睨むなよ・・・。

「お前たちが消えると悲しむ奴がいるからな。何よりも俺も寂しいと思ってる」
「・・・フンッ」

視線を外す王。とりあえず星光は小脇に抱えたい。

「契約、というかな。魔力回路を繋げるだけだ。何も難しい事じゃない。
魔力回路（レイ・ライン）さえあれば遠く離れてても魔力の供給は出来るしな。お前達には魔力タンクが必要になるんじゃないか？」

「貴様・・・それだけではあるまい。他にもまだ企んでる顔だ。言え」
「よく判ったな・・・俺と一緒に管理局に入らないか？」
「断る」

即断かよ。まぁわかってたけど。
しかしこいつらも働ける場所というと管理局くらいしかないしな。
俺と一緒なら恐らくすぐにいい位置からいけるはず。

「そうか俺は近々管理局に入る。今の学校を卒業したらそのままミッド行きだ。
そうしたらギルもランサーも向こうだぞ」
「ぐ・・・貴様、我が居城すら駆逐するというのか！？」

実際はしないけどな。だけど今のままで居させるわけにも行かない。
こいつらはC．C．にも繋がっていたと言う事はこの世界の顛末を知ってる存在だ。

「我らは特に何もせぬぞ」
「居るというだけでも十分警戒にはなる」

むすっとした顔の王。まだ納得いかない感じの顔だ。
出来るならこいつらも一緒にミッドチルダ・・・クラナガンだったか向こうの首都は。
管理局の仕事の問題もあるからそっちに移り住みたい。

「さっきも言ったがこっちにはあまり来られない。お前たちのことも見にこれない。
何よりも――――俺が寂しい」

こんな事言わすんじゃない恥ずかしい。
俺は視線をはずして舌打ちする。できれば素直についてきてほしかったがそれも勝手な言い分だったわけだ。

「ふん・・・しかしすぐには退かぬぞ。貴様がわれらのマスターに足るか見極めてからだ」
「あぁそれでいい。かまわない」

やれやれ。譲歩してくれたか。でも助かった。無理矢理連れて行ってもきっとこいつらは・・・いや王は何もしないだろう。
それなら向こうから出した条件を飲むほうが効率もいい。
何よりそれからでも移動するのは遅くない。問題は――――回路の件か。

「なぁ――――」
「くどい」

うーん。これ以上のごり押しは逆に悪手だな。仕方ない。切り替えるか。

「星光はどうする？」
「私はどちらでもかまいませんが」

星光マジ天使。こっちから篭ｒ・・・お願いしていこう。

「じゃぁ、回路つなぐだけつなげておくか。一人でもわかればそこで念話も使えるだろうし」
「了解しました」

隣にいた星光がペコ、と頭を下げる。

俺が両手を差し出すと星光がその手の上に乗せてくる。
早速だが魔力回路の接続を行う。

「目を閉じて意識を手に集中して。俺の魔力を探し当てる感じで」
「・・・・・はい・・・」

触れた掌から熱を感じる。閉じた目の中で微かな光を見出す。
星光は俺の、俺は星光の魔力を感じ取っていく。
光の先に魔力を感じる。お互いの魔力を糸のようにイメージしてそれを繋げていく。

カチ、カチ、カチリ。

ゆっくりとだが確実に回路は繋がっていく。
頭の中で太い回路をつなげ終われば手を離して瞼を開ける。

「よし、これで回路の接続は完了した。どうだ?俺の魔力を感じるか?」
「はい・・・確かに意思が繋がってるような感覚があります。魔力も知覚しました」

よし。これで星光とのリンクは終了だ。
ちら、と王をみるとなんだかふてくされた顔でむすっとしてる。
気付いていながらも星光との会話を進めてみる。

「どうだ。魔力の供給のほうは。流れてるか?」
「えぇ滞り無く。通常値の約2．3倍の魔力量を感じてます」
「そうか。順調だな。魔力が尽きる前に俺の魔力を感知すれば流れていくからな。有事には頼れよ」
「了解しました。マスターの魔力、頼りにします」

順調すぎるくらいに上手くいった。これで星光は消えなくてすむ。
あとは雷刃と追うだけだが・・・もう一押しするか。

「あと星光にはプレゼントがあるんだ」
「プレゼント、ですか？一体なんでしょう」
「あぁ。星光って名前も固有名詞でしかないだろ？それなら俺が名前をつけてやろうと思ってな」
「なっ！？」

ここで思いもよらなかったはずの王がバッチリ引っかかって声を上げてきた。

「そうだな・・・どういう名前にするか・・・・・・」
「ちょ・・・おい・・・・貴様っ！何をいっているのだっ！！？」
「シュテル・・・シュテル＝デストラクターというのはどうだ？」
「シュテル・・・・良い名です。此れはとても嬉しいですね。胸の奥が熱くなります」

固っ苦しいのよりもこっちのほうが似合うし。喜んでくれたみたいで何よりだ。
なのはと同じ姿でこういうのも何気にいい。さて、あとは、と。

「で、どうする？そこの王様は」
「王・・・・」
「フ、フンッ・・・・やってやらないこともないっ・・・・・」

素直じゃないなぁ。でもそこがいいんだがな。
でもはやての姿でツンデレとかマジどうなんですか？

「じゃぁ、手を出して」
「・・・・こうか？」

俺が両手を差し出すと王が手を載せてきた。さっきのシュテルと同じ感じ。
目を瞑り、意識と感覚を繋げる。黒の世界の中に光を見出す。
そこから伸びてくるのは王の魔力。太い糸が向かってくる。さすがは王というだけあって魔力量が大きい。
イメージだけの世界でこれだけ太いのだから容量はとんでもないな。

さらにそこから小枝のように分かれている細いのが幾つか。
そっちも全部繋げる。抜け目のないように。

意識を集中していく。魔力量が大きいので凝縮させておく。
でないと後々になって暴発する恐れがある。
特にまだ生まれたばかりのマテリアルはそういった事象に陥ってないというのは恐ろしいのだ。
何が起きるか判らない。だったら最初から対処しておけばいいのだ。

ガチン、ガチ、ガチン。

シュテルのときとは違い、確りとした音で回路が繋がっていく。
そしてすべての回路を繋げ終われば瞼を開き、手を離す。
回路の確認をしてると王は手をにぎにぎしてる。

「どうした？回路は繋がってるだろう？」
「あ、う、うむ。問題ない。大丈夫だ」

しかしこっちをじっと見てる。なんだというのだ。
王の次の行動を待ってみる。しかし何も起きなかった！

「さて。じゃぁ次は雷刃だな」

気分を切り替えるように俺は雷刃へと狙いを定める。
それが王が手を伸ばそうとするのが見えたが俺は少しだけ玄関に向かっていった。

「あぁ、そうだ。一つ忘れてた」

そこで俺は足を止めて振り返る。すると部屋の中にはおろおろしてるシュテルと半泣き状態になりかけてる王がいた。

「お前にも名前をつけてやらないとな」
「む・・・し、仕方ないな！お前がどうしてもというならつけられてやってもかまわないぞ！」

エヘン、と泣きそうな顔で胸を張る王様。

「元から考えてたのがある。それでいいか？」
「ふむ。どんなのだ？聞かせてもらおう」
「ディアーチェ。ロード＝ディアーチェ」

その名を聞いた時、王・・・ディアーチェは目を見開いたかのように大きな目を見せた。
そして一瞬の間から笑みを浮かべて。

「ふ、ふんっ。他にもっといいのはなかったのか？だがまぁ折角だ。その名をもらってやろうじゃないか」

言う言葉の割りに嬉しそうな表情を見せてきた。シュテルが先に名

前をつけられたことにちょっと焦ったか。
でもこれで満足したのかシュテルと呼び合ってる。あそこまで嬉しがるとこっちも満足だ。

「雷刃はまだ帰ってこないのか。どこまで行ってるんだあいつは」
「そうですね。昼食までには帰ってくるとは思いますよ」
「うむ。ならば時間もあるだろう。ゆっくりしていけ」
「王・・・時間はすでに昼食タイムです。朝ではないのですよ」
「なにぃっ!?我が起きてまだ少ししか経っておらぬぞ!」
「王が起きてくるのが遅かったのです」

相変わらずの漫才だな。この二人、管理局よりもそっちでデビューさせたほうがいいかもしれない。
雷刃がもうすぐ帰ってくるかもしれないというなら少し待たせてもらおう。
玄関口から部屋の中に戻って適当に座る。
向かい側にディアーチェ。右隣にシュテルが座る。

「なぁシュテル。貴様其処に座るとは・・・」
「では王も座ったら如何ですか?丁度左側が空いておりますが」
「くっ・・・むぅ」

王たる矜持が最初は邪魔をしたのか流石に一歩引いての向かい側だったのだろう。
シュテルが俺の隣に座った事で怒り出した。

「なんだ?俺なら別にいいぞ。どこにだって座ればいいんだ」
「き、貴様がそういうのなら座ってやらないこともないぞ!」

向かい側に座ってたディアーチェが俺の左側に座る。

其処にタイミング良く雷刃が帰ってきた。

「たっだいまー！」

防音性など気にしないくらいに大きな声で入ってくる。

「あ、幻影だ。どうしたんだ今日は」

「あぁ。まずはこんにちはだ雷刃。今日は魔力回路の接続をしにきたんだよ」

「こんにちは！へぇ、それはすごいな！」

こいつ判ってないな。まぁ説明はシュテルがしだしたので俺はディアーチェの頭をなでてみたりして手持ち無沙汰を解消している。

「今なら魔力回路を接続するとマスターから名前がもらえます」

「な、なんだってー！それいいな！星光と王様ももらったのかい！？」

「はい。王はロード＝ディアーチェと。私はシュテル＝デストラクターです」

「幻影、ボクも名前がほしーぞ！接続しろ！」

「変な人が聞いたら可笑しく取られるから自重しろ雷刃。回路の接続ならすぐにでもやってやるから」

「やっほーい！」

なにこの無駄なテンション。ディアーチェもシュテルも毎日このテンション相手にしてるのか・・・。

先の二人と同様手を出して雷刃を呼ぶ。

「じゃぁ、俺の前に。で、手を重ねて」

「うんっ」

真正面に座り込んで俺の手に手を重ねる。

「意識を集中しろ。魔力を感じるんだ。イメージ的には光と糸だ」

「うん――――――」

意識を集中しだすと雷刃の魔力を感知する。ディアーチェもシュテルも今は静かにしてくれてる。

荒々しい魔力の猛りの光が暗闇の奥に感じる。これが雷刃の魔力だろう。

其処から糸が伸びるようなイメージ。流石に電撃系魔力変換資質。

糸の周りに帯電（スパーク）が見える。

こっちからも伸びていく魔力の糸を絡ませ繋げていく。

カチリ、カチ、ガチン。

流石に三回目ということもありスムーズにことを進ませる。

接続が終われば目を開けて手を離す。

「さ、これで終わりだ。俺の魔力が感じられるか？」

「お、おぉー・・・すごい！魔力が溢れるみたいだぞ！」

ふむ。一頻りは終了か。

「さぁ！僕の名前をぷっりーっず！！！」

「あぁ、やっぱりその流れか。ていうかお前にはそっちのほうがメインか」

「とーぜんっ！」

「そうだな――――――レヴィ。レヴィ＝ザ＝スラッシャー」

「おぉっ、かっこいいー！ありがとう幻影！」
「雷刃・・・いえ、レヴィ。幻影ではなくマスターと呼んだほうが良いです」
「ん？そうなのか？じゃぁマスター。ありがとうっ」

礼のつもりだろうが真正面目の前に座ってたレヴィが俺に抱きついてきた。
それを見たシュテルとディアーチェも抱きついてきた。なにこのカオス。

「雷刃・・じゃなかったレヴィ！貴様だけずるいぞ！我もしたい！」
「私もしてほしいです」
「なんだこのカオス」

三人に抱きつかれてる状態。マスター権で魔力回路をつなげるとこうなるのか？
最近はあんまりかまってやれなかったことを考えてなすがままにしておく。
それで満足するなら安いものだ。

「今帰ったぞ愚民ども。昼餉の用意を疾くせよ。我は寛大だから出来るまで待ってやろう」

ガチャリと玄関の開く音。今の声、ギルか！この状況を見てどうするどうなる！？
ドタドタと足音が近づく。というか玄関から部屋までは数歩だ。
逃げることも出来ない。俺とギルは遂に出会った。

「・・・・・・・・・・失礼した」
「まて！ギル！その反応はおかしい！まずは俺の話を聞け！」

「いや、みなまで言うな。マスターが変態ロリペディアだとしても今のその肉体年齢からすれば・・・ほれ。
何も可笑しいことなどない。だから安心して手を出すがいい。しかしこれはあの5人に告げておかねばなるまい」
「手前ぇ！そうしたらどうなるかわかってるのか！主に俺が！」
「フゥーハハハハ！！それが目的よ！」
「ヒデェ！この王様ひでぇ！」

三人は離れないし。ギルはギルでこの状況楽しんでるし。
今日は厄日か！？

そしてギルから秘密の念話でなのはフェイトはやてすずかアリサに伝達されていた。
この日の午後に俺は地獄を見たのはまた違う世界線での話。

第五十三話　ミラージュ＝ヴィジョン

綾人Ｓｉｄｅ

今日は学校を休んで管理局本局へ。学校のほうはすずかに頼んである。
付き添いはリンディ艦長。俺の本局入りの試験を行うための保護責任者としてだ。

「綾人君。今日は楽しみにしてるからね」
「楽しみにしてるくらいのものは何も起こりませんよ」
「フフフ」

いやどうなんだその笑み。

「まずは嘱託魔導師試験。それが終わったら執務官候補試験？」
「一応の流れは」
「それと・・・・登録する名前なんだけど」
「あぁ、それですか。偽名よりもいいかなと思ったんですが」
「え？どっちがちゃんとした名前なの？」
「ミラージュのほうがどうやら俺の本当の名前らしいですよ。城戸綾人はあの世界での名前という事でセイバーたちの契約では使えなかったので」

魔法関連についてはミラージュ＝ヴィジョン名義で行っている。
この世界に来た時にセイバーたちのデバイス登録のときに城戸綾人名義では出来なかったのを思い出す。
和名よりも確かにミラージュという名前のほうが管理局では目立たなくていいだろう。

・・・ギリアム提督はイギリスの名前だから違和感もなかったらしいが。

「人事部にも話は通してあるから今日はそのミラージュって名前で通るからよろしくね」

そういってリンディ艦長はいろいろとやることがあると言って離れていった。

一人本局に残される俺。だが向かう場所は理解してるので問題はなかった。

試験の行われる部屋に向かう。まずは筆記。そして実技。

筆記試験の部屋に行くと中央に机が一つだけポツンとおいてあった。

どうやらそこでやれということらしい。

「ただの入局でよかったというのも少しはあるんだよな・・・」

ぶっちゃけ俺はテストが嫌いだ。知識を得るのは楽しいからいいがそれをひけらかすのは俺は嫌う。

ここら辺は魔術師の流れを汲んだ考えになってるようだ。サーヴァントやらと長くいたせいか。

席に座って時間を待つ。指定された時間まであと少し。

時間丁度になると一人の女性が入ってきた。確か人事部のレティ＝ロウラン。役職は本局勤務の提督で人事、艦船運用任務担当らしい。

「待たせてごめんなさい。早速はじめたいけどいいかしら？」

「どうぞ」

短く返答。すぐに試験問題がディスプレイに映し出される。

なるほど紙媒体じゃないからこういった方法での出し方か。

確かにこれならデータ的にも使えるだろうし。

収集も楽だろう。何よりもデータだから邪魔にもならない。

ディスプレイに映し出されたのを見て、開始の言葉をともに俺は問題をクリアしていく。

この日のために俺は皆に隠れて問題集とかをフェイトやクロノに頼んで借りていのだ。

案の定勉強したことがそのまま問題に出てる。

筆・・・はないのでコンソールを軽快に打ち込んでいく。

ほぼノンストップ。その速度は連打に近い。

その速度にレティ提督は驚きの顔で俺を見ていた。

「前に担当したアーチャーさんといいこの子といい・・・・９７管理外世界は何が起きてるのかしら」

呆れた声が漏れる。がそれは俺には届かない。

目の前の問題をどんどんクリアして消していく。

設けられた時間の１／３程で全問題をクリアした。

「速いわね・・・・まさかもう終わるなんて」

「予習が丁度嵌った感じですよ。偶然です」

「それにしても打ち込むのも速いんだけどね」

なんて言われた。元々ブラインドタッチもできるので後は速さと正確さを培っていけば届くレベルだろうと思ったが言わない。

「じゃぁ採点にまわすからね。あとは実技があるから会場に移動してね」

データを持ってレティ提督が部屋を出て行った。
指定された実技の試験会場は訓練場。席を立って部屋を出てから訓練場へと向かう。

デバイス持込という事だが・・・デバイスか。神威でいいか？
きちんとしたデバイス登録もしてないし・・・っていうか全部デバイス登録なんてしてなかったな。
最近はずっと神威でやってきたし・・・いざとなったら財宝の中からだすなり投影でいいだろう。
・・・いや、確かアーチャーは投影をしないで受かったといってたな。
なら投影の類はしないほうがいいか。

訓練場の前。そこで足を止めて神威を呼び出してから聖骸布で包む。
これで安心だ。むき出しの剣を出したままうろつくことも出来ないし。
布を巻いた神威を手に訓練場に入る。何もない殺風景な景色だ。
中にはレティ提督ともう一人、男の武装局員が準備いていた。

「あら。速かったわね。今度は実技試験だけどいけるかしら？」
「問題なく」
「そう？じゃぁ彼と闘ってもらうわね。空も地上もあり。あなたの戦闘力と魔力値を測るものだから全力で」
「あー・・・はい。わかりました」

全力、ねぇ。全力でやったら本局ぶっ壊れるだろ。
適当に力抜いてやるか。相手も対した事無さそうだ。

神威の布を巻き取る。懐に仕舞うようにして聖骸布を財宝の中に仕舞いこんだ。

「アームドデバイスか。しかし剥き出しでくるとは頂けないな」
「すいません。僕のデバイスちょっと特殊なもんで」
局員が言う。確かに現行のミッド式ではインテイジェンスデバイスとストレージくらいしかないだろう。
それくらい珍しい。フェイトのバルディッシュはインテリジェンスデバイス扱いだし。
純粋なアームドデバイスは恐らく数が少ない。知ってるのは知識からか。

「本気でこないと怪我するぜ？」
「そっくりそのままお返しするよ」

さて。どの程度までやるか。まずは相手の力量次第だな。
神威を構える。と言っても右手で持つくらいだが。あっちは・・・インテリジェンスデバイスか。
準備は万端。開始の声を待つ。

「では――――――開始！」

遠めに避難していたレティ提督が開始の声を上げる。
同時に局員が魔法を撃ち出してきた。
回避するまでもなく俺は目の前にプロテクションを張って魔法を防いだ。
プロテクションを貫く事が出来ずに霧散した。

「なにぃっ！？」

意表をついた攻撃だったらしく自信があったようだ。

だがそんな攻撃も俺の前には効かなかった。
プロテクションを解除。六角形の形状穴が空いて消えていく。
今の砲撃ならまだなのはたちの方が上だな。なんだこの程度か。

「今のが全力か？意表をついたつもりだったんだろうけど残念だったな」
「くっ・・・まだだ！」

開幕で放った魔法を連続で撃ち込んでくる。
だがそれを俺は軽くステップで回避する。
当たってもそんなに対した事は無さそうだが当てた回数がどうのといわれる可能性もあると考慮すると当たらない方が無難。
そろそろ此方から攻撃するか。

どのくらいの魔力を籠めておくかで迷うな。
まぁ適当に撃つか。狙いは外す。だけどまぁ避ける位の動作はしてくれよ？

「じゃぁそろそろこっちからいくぞ」

背中に魔方陣を背負い、目の前に魔力をためていく。
野球ボール程の大きさの魔力球が形成されて其処から黒いレーザーのように射出されていく。
一条の光。まさにそうだった。光速で撃ち出された砲撃は局員の右頬を掠って逸れた。

「・・・・・・・っ・・」

砲撃を体感した局員の顔には恐怖に彩られた。
光の速さで射出されればそれを回避するには光よりも速く動かなければならない。
そんなもの管理局の技術力でも不可能に近い。
唯でさえ局員の能力は其処まで高くないのだ。

綾人の年齢的に選ばれただけという不名誉を得た局員にしてはやる気もなかった任務だった。
なので一撃で終わらせるはずだったのだ。卑怯と言われても開幕ですぐに撃ちだせば終わる、と。
しかし現実は違った。局員の一撃は簡単に防がれてしまった上に当たらないのだ。

尚且つ少年の攻撃は郡を抜いていた。
今までに見たことのない位に速い一撃。
心に染まるのは恐怖。

「外したか」

短く俺は呟いた。局員に聞こえる程度の声で。
恐らくこれで激昂してくるなら程度も知れる。
長い間相手にする必要もないならとっとと終わらせよう。

「・・・・くそぅっ！」

局員がバックステップと同時に空に逃げる。今度は空で勝負と言うことか。
回避能力・地上戦・砲撃と見せた。今度は空中戦だ。
浮遊魔法で俺も後を追うように空へ。
瞬動の応用で局員と同じ高さにまであがる。

「さぁ。再開だ」

矢次早。神威を正面に突き出して刃の先に漆黒色の魔法円環陣を敷く。
魔力を剣の形状にして背後に幾つか作り出した。
フェイトの魔法・・・フォトンランサーを模倣してみた。
俺の合図の元に魔力剣が一斉に射出。向かうのは局員の頭上の一点。
さっきの速度を考えていたのか局員は前面に防護フィールドを張ったが無意味に終わる。
しかしすぐにその方向面を頭上に変化させた。

「ソード・レイ」

俺の一言で一点に集まった魔力は収束して魔力の塊となる。
さらに其処から雨のように魔法剣が降り注ぐ。
防護していた局員を激しい雨が降り注ぐ。
まるで防護フィールドを削り取るように荒く強くフィールドを消していった。
ある程度まで削ると魔力を消して降り注ぐ雨を止める。
この程度見せればいいだろう。あまり管理局に見せるわけにもいかないしな。

「そこまで！」

レティ提督の声が聞こえる。地上で終了の旨を伝えている。
どうやら実技試験も終わりのようだ。
まぁそこそこ出来たか。満足はいかないがそれなりにレベルは見せただろう。

局員と一緒に地上へと降りる。
呼んだレティ提督はデータを収集して今の実技試験の採点中だ。

「さて、実技試験の結果だけど――――――」

話を切り出す。

「――――――うん。すばらしいわね。能力値的にはＡＡＡ＋ってところかしら。将来有望ね」

ＡＡＡ＋か。なのはとフェイトと同じだ。
いや待てよ。実技試験と一緒に魔力判定までこなしてたのかこの人。
抜け目無いな。

手を抜いたのはバレてないようだ・・・・いや。違うな。
恐らく気付いてる。

「ミラージュ君はこのままね。まだ他に行う試験があるから訓練場を出て待機していて」
「了解しました、レティ提督」

敬礼をしてから神威を聖骸布で包み、訓練場を後にする。

神威を仕舞う場合、出来るだけ誰にも見られたくない。
なので訓練場でも消さずにおいた。

訓練場を出てから廊下に誰もいない事、監視カメラが無いことを確認してから神威を仕舞う。
さて。レティのあの含みは恐らく俺への対処だろう。
手抜きをして武装局員を圧倒した武力にどうでるかだな――――。

レティＳｉｄｅ

驚いた。
ほぼ全体の感想である。まさか十にも満たない少年が嘱託魔導師試験をここまで完璧にこなすとは。
しかも実技に至っては武装局員を相手に圧倒的な武力。
リンディ、貴方虎を引き入れたわね・・・しかもこれはとても危険な。

「――――リンディ？」

少年を訓練場の外で待たせてリンディに通信を繋げる。
少し待ってから向こうが出た。

「あらレティ。ミラージュ君の試験はどう？」
「そのことなんだけど、少し良いかしら」

思っていた事をリンディに吐き出す。私が担当して危険と判断した事を。

「なるほど。それは確かに危険ね」
「普通実技試験なら余裕も無く全力で皆やるんだけど、明らかに手を抜いていての圧倒的な戦力差よ。
さらに筆記だけどこっちも完璧。貴方、どこでこんな人材拾ってきたのよ」
「うーん。そこは秘密なのよね。そういう約束なの。ごめんね」
「人事部としては許せない所だけどね・・・あぁ貴方との仲だから多めに今回は見るけど。次回はないわよ？」
「わかってるわ。恩にきる。それと例の試験のほうは？」
「そっちはこれから。それもまた驚かされるのかしら。元々９歳で試験を受けるなんて早々ないのよ？」

通信はこれで終わり。会話が終われば此方からカットした。
外で待たせている少年に旨を告げに行かなければ。

あぁ、武装局員君は反省の意味も込めて自主的に訓練に残るそうなので使用許可を与えておいた。

綾人Ｓｉｄｅ

訓練場の扉前で待ってると念話が飛んできた。相手はリンディ提督だ。

『なんですか？まだ試験中ですよ』
『判ってるわよ。連れないわねぇ・・・試験、手抜き？』
『いきなり本題ですか。まぁ、本気だしたら本局壊れますし』
『其処まで脆いわけでもないんだけどね・・・まぁいいわ』
『俺は責任取れませんから』

『それは下がり所を得ていると思っておくわ。試験ももう少しだから頑張ってね♪』

プツッ、と音がして念話が切れた。
同時にレティ提督が訓練場から出てきた。

「お待たせ。次の試験だけどまた筆記なのよ。悪いわね」
「いえ。公的なものなら仕方ないと心得てますから」
「フフ。上にも伝えてはあるんだけどね。中々これがうまくいかなくて」

等と他愛も無い会話をしながらさっきの筆記試験場へと向かう。
筆記試験場に入り、また席に着く。
レティから問題がディスプレイに送られる。

「今回のはちょっと難しいから頑張ってね」

恐らくこれがリンディ提督に伝えておいた試験・・・執務官試験だろう。
無理を承知で言っておいたのが通ったらしい。

問題が繰り出されるのをタイピングしていく。
これは確かに難しいレベルだ。早々と受かるものではないだろう。
クロノに試験問題の予習をしてもらっておいてよかった。

さくさくと問題をクリアしていく。ちらりとレティ提督驚いてる顔が見えた。
俺の解読をリアルタイムで見ているんだろう。どんどんいこう、さくさくだ。

用意された時間を大幅に残して試験を終える。
簡単、とまではいかないがそれなりに難しかった。
これで試験はとりあえず終了したと言うことでレティ提督に会釈をしてから部屋を出る。

「さぁて。リンディ艦長がまってるな」

リンディ艦長には礼も言わなければ。
無理強いだった試験も受けさせてもらえたのだから此れは重畳だ。
菓子折の一つでも持っていくべきだろう。

試験が終わったら待ち合わせてる場所があるので向かうと既にリンディ艦長がいた。
なのは、フェイト、はやても。
三人とも各部署の制服を着込んでいた。

「お待たせしました艦長・・・・って。お前達もいたのか」
「いたのかって・・・ひどいよねその言い方」
「そうなの。心配だったんだよ」
「私は心配してへんかったけどな」
「まぁ、理由はどうあれだ。サンキュ」

笑みで三人を迎え入れる。と言っても俺が迎え入れられてる感じだが。
なのはの教導隊の白い制服。
フェイトの執務官候補生の黒い制服。
はやての特別捜査官用陸士の青い制服。

「なんだ。初めて制服姿見たけど似合ってるじゃないか」
「「「・・・・・／／／／／」」」

三人して照れだした。思ったことは口にしないほうがいいらしい。
そんな俺たちをリンディ艦長が見つめてる。

「リンディ艦長。いろいろありがとうございます。試験も滞りなく受けれました」
「それはよかったわ。レティったら頭が固かったでしょ？」
「そんなこと無かったですけどね」

あれが執務官試験だとは誰も言っていない。違うかもしれないので名称的には避けた。
しかし通常試験の後に行われたことは恐らくいつもとは違うことだったんだろう。
俺がこの試験に対して執務官試験も受けさせてくれとリンディ艦長に伝えたらレティ提督に話してみると言うことだったし。
結果はまだ出ることはなさそうだ。まずは嘱託魔導師試験の終了を祝おう。

「あー、三人とも。ちょっといいか？」

どこかで食事でもしようということになって移動使用とした所でなのは、フェイト、はやてを呼び止める。
これからこれはきっちりとしないといけない事がある。

「どしたん？」
「三人に言わないといけない事があるんで聞いてくれるか？」
「なにかな？大切なこと？」

「俺の名前についてだ。お前たちの知ってる城戸綾人と言う名前は地球でのみの名前になる。

元々俺の名前と言うのが曖昧なものだったんだ。
だから今回嘱託試験ではミラージュ＝ヴィジョンという名前を使った。
学校とかでは今までのように呼んでもいいが本局や任務のときはそっちで呼んでほしいんだ」

「それはいいけど・・・名前を変えるなんてどうしたの？」
「俺は名前を多く持ちすぎててな。この肉体の名前。魔力を持った名前。そしてバリアジャケットのときの偽名、と言った感じで。
さすがに混乱を招きそうなんで統一しようかと思ったところで本局への試験という機会があった」

「そのミラージュって名前が本当の名前？」
「あぁ」

短くも強く返答する。このままだと三人とも混乱するだろうし。

「私は別にえぇよ。なのはちゃんフェイトちゃんは？」
「私も大丈夫かな。しばらくは慣れないから間違えちゃいそうだけど」
「うん。私も。でも慣れるように一杯名前を呼ぶの！」

よかった。理解してくれた。これでまた一つ安心できることが増えた。

「じゃぁ、帰ろうか。俺の試験の結果もすぐには出ないだろうし」
「「「うんっ」」」
「ではリンディ艦長。俺たちはこれで」
「えぇ。お疲れ様ね。私はレティと話をしてからアースラに戻るわ」
「了解です」

仕事に戻るリンディ艦長と別れて俺たちは転送ポートへと向かう。
地上に戻ったら恐らく翠屋で皆呼んでお祝いパーティーだろうな。

第五十四話　高町ヴィヴィオ

ミラージュＳｉｄｅ

夏休みに入った。長期休暇ともあって今はアースラにずっと乗り込んでいる。
やる事と言えばクロノの手伝いとセイバーの手伝い。
クロノの手伝いは主に書類系統。クロノがどうしても手が回らない場合に俺が手を出す感じ。
セイバーに至ってはアースラの武装隊との模擬戦等だ。
元々カリスマが高いからか武装隊はセイバーについていってる。

アースラでの立場も、クロノの副官と言う感じで収まった感じだ。
今は黒い執務官服を着込んでいる。
それも、以前の嘱託魔導師試験のついでに受けた執務官試験が通ってしまったからである。
此方の意見が通ってしまったというのもあるが。おかげでこうして執務官用の制服を着てるわけだ。

なのは達も各々の隊で候補生ながら頑張ってるようだ。時折通信が届いて元気な顔を見せてくる。
特にフェイトはアースラ勤務ともありよく顔を合わせる機会が多い。

「ミラージュ。ここの書類なんだが」
「それならもう出来てますよ。集めたデータがこれです」
「ありがとう」

催促されたデータをデバイスに送る。短い会話でも充分にコミュニケーションは取れている。

まとめたデータはバックアップを取って専用のバンクに入れてある。
ぱっと見乱雑だが俺としては綺麗に整頓してあるのだ。

「しかし君が僕の部下になるとはな。初めて会った時には信じられなかったよ」
「それはこっちだって同じです。だけど身近な執務官が他にいなかったので」
「近ければ誰でも良かったということか？」
「有り大抵にいえばそうなりますか」

ジト目で俺を見てくるが何時もの事なので華麗にスルー。
第一近くにいたからなんて理由だけで決めるわけが無い。
クロノは戦闘力こそＡＡＡだし、雑務やデスクワークも生真面目過ぎる程によくやっている。

この上官の下でなら、と俺は意見したら見事に通った。
最近はよく俺の意見が通るのは気のせいだ。

「まぁいい・・・しかし学校が休みとはいえここまで詰めていいのか？遊びたい年頃だろう」
「息抜きはしてますよ。地上に降りてすずかたちとも海にも行きましたし」
「それならいいが・・・あんまり根を詰めるなよ？」
「そっくりそのままお返ししよう、クロノ執務官」

恐らく俺のいない間もこの上官殿は仕事をしてるだろう。エイミィがこの前嘆いてた。
どこまでワーカーホリックなんだ。

「しかし・・・こうもデスクワークが増えると平和と言うことが身

に染みてくるな」
「全くですね。戦闘はなるべくならしないで解決。というのが一番です」
「・・・・・・・・」
「何か？」
「いや・・・君の敬語はずっと聞いてきたから慣れてきたつもりなんだが・・・なんだろうな。まだ慣れない」
「仕方ないでしょう。上官と部下になったわけですから。そこらへんはきっちりしますよ」

クロノの下について変わったことといえば口調が敬語になった事だ。当然、上官になるのなら今までのような口調は抑えなければならないのは当然である。
最初に敬語を使った時なんかははやてに思いっきり笑われたものである。

「さて、書類も終わったんで本局に行って来ますよ」
「あぁ、そういえば今日はその予定だったっけ」

本局の無限書庫にいるユーノとの会議。
あそこは知識量が豊富なのと、勉強するにはいい環境である。涼しいし。
週一程度で通っていてもう顔馴染みクラスである。

転送ポートに向かいながらすれ違う隊員たちと挨拶をしていく。
時折怪我をしてるのは恐らくセイバーとの模擬戦のせいだろう。
あいつは話を聞かないからなぁ。

『何か今、私の事で考えませんでしたか？』
『何も無いぞ？それより模擬戦ご苦労様だ。また近いうちに顔を出

す』
『そうですか？ならいいのですが・・・・えぇ。お待ちしております』

勘が鋭いぞセイバー・・・さすがは直感A。
別れ道。右に行けば訓練場。左に行けば転送ポート。
今、セイバーに後で行くと伝えたばかりだし。と言うことで左に曲がる。

転送ポートに到着。いつも顔を合わせる隊員が待ってましたとばかりに準備開始した。
・・・まぁ確かに此処に来るなら転送が目的だけどさ。

「本局まで頼むよ」
「了解しました。ゲートに入って少々お待ちくださいね」

言われたとおりにゲートに入って転送を待つ。
手馴れた手付きで転送が開始されていく。
向かうのは本局。無限書庫近くのポートだ。

転送された先から無限書庫へと向かう。本局ももう歩き慣れた感じ。
まっすぐに無限書庫へ。

まっすぐ縦にくりぬかれた感じの筒状の図書館。無限書庫の第一印象はそんな感じだった。
浮遊魔法で書庫の中を浮かんでは移動する。
この本全ての整理を任されつつあるのがユーノ＝スクライア。なのはの魔法の師だ。
入り口から少し上に行った場所で本がたくさん浮いてる。どうやら其処にいるみたいだ。

「ユーノ」

遠目から声をかける。前に集中してたユーノに近づいてから声を掛けたら異様に驚かれたものだ。

「あぁ、綾人じゃなくてミラージュか。ようこそ」

「あぁ。今日も邪魔することになる。それとミラでいいと何度も言ってるのに」

「あはは、そうなんだけどね。まだなんだか慣れなくて」

嘱託試験の後、俺を知ってる魔法関係者にはミラージュの名を説明した。

今では皆ミラージュのほうで呼んではくれてはいるがまだ慣れてないと言うのが実情だ。

まぁ、改名しても浸透しないとな。

「まぁ、今日も頑張ってくれ。そこら辺のスペース借りるから」

「うん。そっちも頑張って」

軽い挨拶も終わり、ユーノから離れる。

あんまり近くにいるとぐるぐる動く本に攻撃されるので近づきたくないのだ。

この前は三連続で頭に喰らったし。

適当なスペースを作り邪魔にならないようにする。

ユーノだけでなく、他にも司書がいるのでそっちにも迷惑をかけないようにしないといけない。

準備が終われば早速勉強の開始だ。この世界のことをもっと知らなくては。

原作知識だけでは多い被せない部分。そこの補完の為に。

ユーノＳｉｄｅ

クロノから頼まれていた彼、ミラージュ＝ヴィジョンについてのデータ集めも同時進行させながら無限書庫の整理を続けている。
それが今の僕の仕事だ。
その彼がこうして週に一回此処へやってきては知識を得て帰っていく。
今日はその日。

クロノに言われてから僕は彼に対してよそよそしくなってはいないだろうか。
どうしても無意識で彼を拒んでいそうな気がする。
何故かは判らない。
彼が来るなら拒まない。そういうスタンスを取り始めた。

決してなのはが彼と仲が良いからってわけじゃない。わけじゃない。

うぅ・・・胃が痛い。最近なぜか胃が痛む。
備えの薬を飲みながら彼に勉強用スペースを貸す。
貸すと言っても僕には其処まで権限がないのでなんとも難しいところではあるけど。

僕の整理してる区画からかなり下のほうで書物を取り出して読み出してる。
これでまた暫く没頭が出来そうだ。

ミラージュＳｉｄｅ

何冊か本を取り出しては歴史などを紐解いていく。
考え様によってはここはアカシックレコードにも似ている。管理局の開闢から管理世界・管理外世界の過去と現在を書き連ねていっている。
それこそまさにリアルタイムで本が増えていくのだ。
これで未来の事象までもが書いてある本が出てきたら正しくアカシックレコードだな。

だが今はそれよりも知識を蓄えておかなければ。
次から次へと本を漁っていく。片付けるのはユーノの仕事だ。気にしない。
幾つか周りの本を読み終えてから次の本へと手を伸ばしたとき、その本が光り輝いた。

「なんっ・・・だっ！？」

突然の光。まるで無限書庫全体を包み込むような強烈な光が手を伸ばした本から発せられた。
強い違和感。何か、予感がする。本を掴んだ手には本ではない、違う感触があった。
徐々に光が収まっていく。その速度、まさに光速。
そして其処にいたのは――――――一人の女の子。

「えぇぇぇぇぇ！？」

？？？Ｓｉｄｅ

あいたたた。トレーニングの途中で魔法訓練も組み込んだら暴発しちゃったよー。
もー。此処どこだろう。なんか腕に感触が――――――えぇぇ！？

「えぇぇぇぇぇ！？」

つい叫んじゃったよ！男の子に手、っていうか！腕掴まれてるし！
あれ、よく見たらここ無限書庫だ。そしてこの男の子誰ー！？

「よし、とりあえず落ち着け。深呼吸だ」

男の子が深呼吸をしようと言ってきたからわたしもそのとおりだと思って深呼吸。

「すーはー、すーはー、すーはー」

三回ほど深呼吸をしたら落ち着いてきた。
その間もまだ腕掴まれてるんですけど。

「と、とりあえず手を離してほしい、かな？」
「あ。悪い。そうだな。ごめん」

男の子に手を離してもらうように懇願。
うん？この男の子、なんか見たことが・・・・・・あぁっ！？
しかも黒い制服。執務官の制服だ。

「もしかして・・・ミラージュ執務官？」

「まだ執務官補佐だ。そういう君は・・・？」

わたしはもしかしたらとんでもないところに来てしまったのかも。
昔、言われたことがあったっけ。困った事が起きたら全てを話して頼れって。
どんな事でも理解するから、って。

「わたしの名前は高町ヴィヴィオです」

ミラージュＳｉｄｅ

「わたしの名前は高町ヴィヴィオです」

女の子はそう名乗った。俺の記憶がまだ確かなら確かにこの容姿はヴィヴィオだ。
だったら何故そのヴィヴィオがこの時代にいるのか。それが問題だ。

「とりあえず。家名のほうは伏せておいたほうがいい」

其れしか言えなかった。しかしヴィヴィオか。何か未来であったか？

「と・・・やばいな。ユーノが不振がってる。とりあえず移動するぞ」
「あ、はい！」

久しぶりのスキマ移動。背後に境界を開いてヴィヴィオの腕を引いて連れて行く。
ユーノ。説明はまた今度だ。

ヴィヴィオSide

うわぁうわぁ。あの幻影ミラージュ提督のちっちゃい頃だよー。
なのはママから写真データを見せてもらったことあったからすぐにわかったけど変わらないなぁ。
なんて思ってたらいきなり手を引かれてなんだか判らないところに!?

「悪いな。此処なら誰にも知られない」
「あ、はい。ありがとうございます」

まるで暗闇。というか宇宙。空には星が煌いてて足の下も空一面に星空。
それでもちゃんと見えない地面がある感じで不思議。

「まずは――――どこから聞こうか」
「えっとですね。じゃぁ――――」

名前は名乗った。なのはママフェイトママ、トレーニングの途中で魔法を使ったら暴発して光に飲み込まれた事。

「なるほど。未来からね」
「信じないでしょーけど本当なんです」
「信じるよ」

軽っ!?そんなに簡単に信じちゃうの!?
普通ならタイムトラベルなんて夢見事なのに。

「俺の周りは不思議だらけだからな」

凄く説得力のある言葉でした。だってこんな世界を見せられたらこっちが信じなきゃいけなくなっちゃうよ。

「元に戻す方法は大体把握してるからそんなに悲観的にならなくていいぞ。

たぶん、そっちの俺が全部任せろとか言ったんだろう」

凄い。本当に驚くことばっかり！

この人は想像を絶する事ばかりだよ。

「それにこっちの世界に来たって事は何かがあってだろうから。存分に楽しんでから帰るがいいさ」

薄くだけど笑顔を見せてくれたミラージュ提督。

皆はきついとか厳しいとかいうけど・・・今じゃそんな所みえないなぁ。

気が楽になることを言ってくれた。戻る方法がちゃんとあるって言うなら楽しんで帰ろう！

ミラージュＳｉｄｅ

しかし未来からねぇ・・・。次元を通り抜けるなら多分久しぶりにあいつの出番だろうな。

後で連絡しておこう。こういう超常的なのはあっちに任せる。

「さてヴィヴィオ。家名は無しでもいいか？何、誰も不振がったりはしない」

「あ、セイバーさんとかアーチャーさんみたいな感じですね。わか

ります」

理解が早くて良いな、この子は。セイバー達のような存在だと言えば納得するだろう。

「じゃぁ早速だが此処から出るか。小さい頃のなのはにも逢いたいだろ？」

「はい！そりゃもうすっごく！」

元気な子だ。これもなのはとフェイトの教育の賜物かな。

「リィンフォース。三人の座標は出せるか？」

「既に座標は確認済みです。いつでも」

頭上から声がする、既にスタンバってたか。

「久しぶりの出番ですから頑張ってます」

『すまん！』

なんか聞こえたが気にするな。とりあえずは順番だな。まずはなのはの所に行くか。

スキマを開いてなのはの座標に繋げる。

なのはの所に出たら教導中だった。主になのはへ。

多分あれは教導隊の偉い人なんだろうな。おっさんだけど。

１０分くらい見学してると休憩になったらしくこっちに降りてきた。

「あれ、ミラ君。珍しいねこっちにくるの・・・・ってその子は？」
「あぁ、紹介するな？ヴィヴィオだ」
「は、はじめまちぇてっ！」

あ、舌噛んだ。すげぇ緊張してるのがわかるぞ。
緊張するのもわかるけどな。なまじ母親が同じ位の年だってんなら尚更。

「休憩か？」
「うん。少しだけね。自主訓練だったから」

他愛も無い話だ。でもヴィヴィオの視線はずっとなのはに向いてる。

「えっと・・・・何かな？」
「あ、い、いえっなんでもないよっ？！」

わたわたとしてるヴィヴィオ。そこまでやったら挙動不審だ。

「まだこいつは外の世界に慣れてなくてな。悪い」
「あ、ううんいいよ。そうなんだ。遅くなったけど私、高町なのはだよ」

自己紹介を終わらせて通常会話モード。魔法とか今の生活の事とかがメイン。

「そっか。ヴィヴィオちゃんも魔法やるんだ。えっと・・・ストライクアーツ？」
「ミッドのほうじゃ格闘技としてのスポーツ扱いだ。こっちの空手やボクシングみたいなもんだと思え」
「そっかぁ。じゃぁ強いんだ」

「いやいやいや、わたしなんてまだそんなに！」
「ミラ君も強いもんね。少し教えてあげたら？」
そう来るか。まぁいいけどな。
「じゃぁどうするか。技でも見てくか？見取り稽古くらいは出来るだろ？」
「はいっ！お願いします！」
どうするかな。適当な技だと戻った後に真似されても恥ずかしいし・・・。
「よし。決めた。二人とも吹き飛ばされないようにしとけよ」
二人から離れるようにして構えを取る。魔力を掌に集めて球体のように。
両手を合わせて目の前に突き出す。魔力と気が混合されていく。
衝撃波が周囲へと弾けて行く。それだけでも充分なくらいの魔力量だ。
「あ。しまった。ちょっと本気だぞ」
目標は何もない空中へ。魔力のチャージがとんでもなく溜まっていく。
衝撃波に飲まれたのかなのはもヴィヴィオも声を出す事が出来てない。
「ネタ技その１４！ビッグバンかめはめ波！！！！！！」
限界まで凝縮された魔力と気が一気に放たれた。

太い黄金の光はなのはのＳＬＢよりも太く早く撃ち出されて空を突き刺して雲を貫き青い空へと消えていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふぅ♪」

額の汗を拭う。この技結構大変だな。もう使わないかも。

「な、なななななな、なにいまの！」

「ん？魔力と気の混合技。その名もビッグバンかめはめ波だ」

なんて陽笑決めてみたけどなのはが怒ってる。何故だ。

ヴィヴィオに至っては腰を抜かしてる。

「危なすぎだよ！あれは危険極まりないの！」

「非殺傷だ（´・ω・、）」

「そんな顔しても！？あぁもう可愛い！」

矛盾しとるぞなのは。そんなこんなでアラームが鳴り響いてなのはの休憩時間が終わる。

すぐ戻らなくてはいけないらしく、挨拶もそこそこに部隊のほうに戻っていった。

「大丈夫か、ヴィヴィオ」

「あ、あははは…・・・び、びっくりしちゃったよ」

「鍛えこめばお前でも使えるだろうな。何せ聖王なんだろ？」

出来ない事はしない主義。ヴィヴィオなら出来ると思ったからこそかめはめ波を見せたわけだし。

コツを教えるとなんとなくだがコツを掴み始めてきたみたいだ。

『おーい。ちょっといいかーい？』
「ん？」
『まいったね。まさかあれを使うとは思っても見なかった。おかげで時間が少し早まっちゃうよ』
「もしかしてヴィヴィオの時間か？」
『そ。これを逃したら多分暫く無理』

頭の中に響く念話。相手は神様。ヴィヴィオを送り返す為の手段として俺が考えてたモノ。

「つか念話じゃなくてケータイにかければいいのに」
『結構急ぐ用だったからね。ごめんごめん』
「まぁいいケド」

独り言を言ってるような目で俺を見るなヴィヴィオ。お兄さんは悲しいぞ。

「ヴィヴィオ。悪いが時間がなくなったみたいだ。すぐに帰る準備するぞ」
「急だね！？」
『境界でしたほうがいっかなー』
「了解した」

周りに誰もいないことを確認してスキマを展開。ヴィヴィオと中へ。

スキマの中で俺とヴィヴィオが並んでる。準備はＯＫ。
ヴィヴィオもあの技をなんとかしてでも使えるようになって見せる

と息巻いてる。

「あの技を使えるようになればアインハルトさんも私にメロメロに・・・うふふふふふ」

怖いよ聖王様。出来るだけ母親と同じように全力全壊にならないように祈る。

「んじゃ、神様。やっとくれー」

『ずいぶん軽く言うもんだ。時間軸の移動は大変なんだぞぅ？』

そう言ってもやってくれる神様マジ神様。姿見せてくれないけど

「じゃぁヴィヴィオ。元気でな。あと俺に関することはしゃべっちゃだめだぞ。死ぬぞ」

「怖いよ！？・・・うん。ミラージュ提督もお元気で！」

『じゃぁいっくよー』

神様の声でヴィヴィオが光り輝いた。光の球体になり時間軸を飛び越える。

数秒の出来事。光が収束して消える。其処にはもう誰もいない。

「無事に帰れたかな」

『とーぜんっ。ボクがやったんだから当たり前さっ』

「ま、今回は助かったよ。サンキュ」

『ボクだからねっ！でもアレはもう使っちゃだめだぞぅ？』

「わぁーったってば」

やることは終わった。スキマから抜け出るようにして俺はアースラへと戻ることにした。

第五十五話　高町なのは

ミラージュＳｉｄｅ

小学校も五年になれば落ち着きもする。
だが相変わらず学校での俺への視線の強さはなんとかならないものだろうか。

常に俺の周りにはなのは・フェイト・はやて・アリサ・すずかの５人のうち誰かがいる。
此処まできてクラスもずっと一緒なのだから尚更だ。

そんな視線が鬱陶しいときはもう学校に行かないでアースラで仕事だ。
あぁ、仕事ラブ。
今もアースラで仕事中だ。

「君はまともに学校にいかないのか」
「あんなもの飾りだ。いなくても卒業できる。何よりも既に大学レベルの知識はある」

俺の隣のデスクで仕事してるクロノが聞いてくる。
知識だけでなく、学校とは集団的な行動理念を学ぶ場所でもある。
だが既に俺はそういうの終わってるんだよ。中身は大人なんだから。

５年に上がると俺は執務官にジョブチェンジした。
なのでいまやクロノとは同僚。部下や上官ではなくなったのだ。
なので口調も元に戻した。クロノ曰く年下なんだからとはよく言われるものだが。

「それでも行く時は行くさ。何もずっといかないわけじゃない」
「その為に君は病弱キャラを得たわけだ」
「言うなよ、照れるじゃないか」
「照れるなよ」

なんて漫才ももうアースラスタッフにとって日常茶飯事。
ツッコミももうない。寂しいな。

「そういえば君の部下になったあのマテリアルの子。シュテルだが。今度のなのはの仕事につけるんだな」
「あー・・・あぁ。まぁなのはなら教導のついでにあいつら鍛えてやれるだろうし」

本音をいえない辛さったらないな。
次のなのはの仕事は遺跡調査。恐らく仕掛けられるのは其処だろう。
新人の教導という名目で護衛にあいつらをつければ回避できるはずだ。
ディアーチェ達にもそこら辺は伝えてある。

夜天の書の暴走プログラムのときのように、俺の魔力を好きに使えとも伝言してあるし。

「アースラ経由だっけか確か」
「あぁ。そのまま調査に入るはずだ」

まぁいざとなったら俺が出張るだけだ。
そうならないようにシュテルをつけたわけだし何とかしてもらわないと。
ほぼ、この時の為に俺はやってきたんだ。

「ヴィータもフェイトと一緒だしな。楽に終わる任務だろ」

面子的には気軽に見える。だが俺の不安感は消えない。すべてが終わるまでは。

調査前に話はしておくべきか。

「そろそろ戻る。次の試験もあるし。お前もフェイトの試験の準備があるんだろ？」

「あぁ、そうだな。次は提督狙いか？どこまで昇る気だ」

「いけるところまで、かな」

会話を終えて、席を立つ。書類を小脇に抱えてからクロノから離れた。

転送ポートで本局へ。小さいながらも執務室を与えられているので自室へ。

執務室に入るとシュテルがいた。

既になのはと同じ調査任務に行く為の準備済みの格好で。

「おっと。もう来てたのか」

「はい。準備を済ませておきたかったので」

張り切るのはいいが既にバリアジャケットを着てるのはどうかと思うんだ。

なのはと同じ形状で黒いバリアジャケット。

ただしその性能は俺が手を加えたので変わっている。

特に防御面に突出させてみた。

「とりあえずバリアジャケットは脱いでおけよ。すぐに出るわけじ

ゃないんだから」
「此処で脱げとはまた言いますね・・・いえマスターが仰るのなら
ば私は一向に構いませんが・・・」
「ちょっとまて!?おかしな受け取り方をするな!」

だから普通にバリアジャケットを脱ごうとするな。
誰かが入ってきたらどうするんだ。まったく・・・。
シュテルのバリアジャケットを直そうと肩を掴む。

「失礼します」

今日のセクハラ現場は此処ですか。
書類データを受け取りにやってきた職員がまさに今、目撃した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・失礼しますた」
「ちょっとまて!コレは違う!シュテルも頬を赤らめるな!」

なにこの公開処刑。どうしてこうなった。
職員にちゃんと言い訳をしてシュテルもちゃんと着替えさせた。

シュテルの準備を確認させてからなのはとフェイトが来るのを待つ。
ヴィータは既に現地入り。なのは達待ちでいるとの報告だ。
もちろんヴィータにも話はしてある。今回の調査でどうなるか。

それを知ってた俺に対しては聞くだけ無駄と理解しているのか追求
はなかった。
ただ、あとで教えろとは言われたので差しさわりの無い部分で教え
はするつもりだ。

「こんにちはー。高町なのは来ました」
「フェイト＝テスタロッサ、参りました」
此方の準備が丁度終わる頃に二人がやってきた。
「学校は終わったようだな。おつかれ」
「にゃはは、ミラ君も学校いかなきゃだめだよぅ？」
「善処はしよう」
他愛も無い会話だ。だがそれがいい。
「じゃぁ準備が終わったら飛んでくれ。もうヴィータが待ってる」
「「了解」」
「あぁ、フェイトはちょっと待ってくれ」
フェイトだけ呼び止める。なのははシュテルと一緒に部屋から出て行く。
「今回の調査任務は特殊だ。遺跡の調査と一緒になのはの護衛。頼むよ」
「うん、任せて。ほとんどこのときのために私は鍛えてきたんだから」
「頼もしいな。任せた」
フェイトの頭に手をポンと置いて撫でる。柔らかい癖っ毛が気持ちいい。
目を細めながら撫でられるのを満喫してからフェイトは離れた。
「戻ったらお前の執務官試験も近い。頑張れよ？」
「うんっ、大丈夫だよ！そっちもまかせて！」

そうしてフェイトも出て行く。部屋には一人残ったわけで。
ボスン、とソファに座り天井を仰ぐ。
このときのためにやってきたのだ。それこそ原作を壊す為に。
なのはを落とさせはしない。その為にやってきたんだ。

時間は足りなかった。もう少し全員を鍛えたかった。
守護騎士の面々も鍛え足りない。

今まではなのは救出のため。そしてこれが終われば次からはイレギュラー対策に当てられる。
下っ端底辺にいたら恐らく手が出せない。管理局の手を借りることになるかもしれないなら上の地位すら貪欲に得るさ。

後は任務の終了報告を聞くまでこの件に手を出すことは出来ない。
４人無事に帰ってくるのを待つだけだ。

ヴィータＳｉｄｅ

今回の任務は管理外世界にある遺跡の調査らしい。
どーやら遺跡の中にロストロギアが眠ってるかもっつー事でそれを見てくる事。
で、実際にロストロギアがあれば回収。其処までが今回の仕事。

私一人でもいいって言ったんだけどな。
なのはのやつがついてきた。更にシュテルとフェイトまでついてき

た。
シュテルとフェイトはこの案件の責任者でもあるミラージュからの増員補強。

「あたし一人でもやれるっつーのによ・・・」

思わず口に出ていた。あたしがここで腐ってもしょーがねーんだけど。
でもなんだか厭な予感がするんだ。
前にミラージュが言ってた悪い予感が本当になるかもしれないという不安が。

だからこそミラージュはフェイトとシュテルを遣した？
まさか。深く勘繰り過ぎだろ。

ちらちらと雪が降ってくる。あんまり雪は嫌いなんだ。あいつ・・・リィンフォースが言ったときと同じ景色。
この世界はずっと寒い環境の世界のようで恐らく体感的にはもっと寒いんだろう。
あたしはプログラムだから・・・寒いとかの感覚をカットできる。
それでも一度でも死んだら終わりなんだけどな。

まぁ今は見えるものだけでもやってやるさ。

「ヴィータちゃん」
「おう、おせーぞなのは」

考え事してたらどうやら時間が経ってたみたいだ。なのはとフェイト、シュテルがこっちに向かってきてた。
目視確認。あと数秒で合流って感じだな。

「おまたせっ」
「待っちゃねーけどな。それよりもさっさと終わらせて帰るぞ」
「「うんっ」」
「了解です」

とっとと調査を終わらせよう。そんではやてとアイス食べるんだ。

よっし。とりあえずはこんなもんか。
遺跡に入って調査を始めてから3時間経った。
あたしとフェイト。なのはとシュテルでの二組に別れての調査となった。

あたしたちのほうは特に何も無く、引き戻ってる最中だ。
問題はさっきからなのはたちのほうから連絡が無いこと。
余程奥まで入り込んで念話が届かなくなってるのならいいんだが。

「向こう心配だね」
「あー、一応言われてる事だからな。なのはを護れってよ。気にはなっちまうわな」

特にフェイトの場合はずっと一緒にいるもんだから心配すぎてる節がある。
あたし達が出会った時からずっと一緒にいるんだもんな。

「さっさと外に出て後衛隊と合流すっぞ。なんかやな感じだ」
「同感。急ごう」
空を行く速度を上げてあたしたちは外へと向かう。

なのはＳｉｄｅ

ヴィータちゃんフェイトちゃんと別れて今はシュテルちゃんと一緒に遺跡の中。
途中から念話が通じなくなったけど大丈夫かな。
「なのは。先行は危険です」
あ、気が逸ってたみたい。シュテルちゃんよりもかなり先に進んでた。
「ごめんね。念話が通じなくてなんだか厭な雰囲気だよ」
「それはわかりますがバディになったなら私の事も信用してください」
「うん。わかってる」
そうだよ。私達は二人で一つ。私とシュテルちゃんは同じなんだから。
遺跡の奥まで来たけど何もなさそう。どうやら管理局の誤認だったみたい。

「なにもなさそうですね。戻りましょう」
「そうだね。特に隠れてるわけでもなさそうだし・・・戻ろっか」

一番奥は広いエントランスみたいな感じだった。
調べても何もなさそうなのでシュテルちゃんと来た道を戻る。
何事も無く空を飛んできた道を戻っていく。

外に出ると雪が積もっていた。真っ白な世界が目に入ってくる。
ヴィータちゃんとフェイトちゃんが後衛隊の皆と話し合いをしてる途中だった。

「なのは！無事だった？」
「にゃはは、大丈夫だよフェイトちゃん。こっちは何もなかったから」
「なのはのほうも？私達のほうも何もなかったんだよ」
「どうやらこの任務は空回りで終わりそうだな」

今回の任務はコレで終わり。私達の帰還を待ってたらしく、後衛隊の人達は既に片付け終わってた。
フェイトちゃんが指示を出しながら撤退の最終準備。
今回の責任者はヴィータちゃんだけどフェイトちゃんがもうすぐ執務官試験だからって実地的に動いてるみたい。

最後の後衛隊の人達が転送されて私達も転送に入る。
筈だった。

でも転送はされなかった。私達４人が残されて周囲に気配の無い気配が集まっていく。

「なのは！ヴィータ！シュテル！」

フェイトちゃんの声が届く。その時には私は既にレイジングハートを構えていた。
同時にヴィータちゃんもシュテルちゃんも臨戦態勢。

「なんだこいつら・・・どっからでてきやがった!?」
「わからない・・・けど此処で放って置いたら此処の世界の人にも被害が!」
「ならすべてを殲滅した後に帰還する、ということでいきましょう」
「ならやることは一つ――――――やろう皆!」

誰との合図とも知れずに四人同時に行動開始。
気配無き気配はまるでゴーストみたいに実体が無い。ううん、魔法生命体なんだ。

次々の砲撃で打ち落とす。ほぼ絨毯爆撃と言っても良い様。
闇色と桃色と金色と紅色の魔光が入り乱れる。
遺跡に傷をつけないようにしながら戦闘続行。

やがて気配もなくなっていけば地上に降りて検分。それでも臨戦態勢は解かない。

「なんだったのかな・・・いまの」
「わからない。でも報告するべきことが増えたのは確実」
「だな。あれの正体を調べるのは後続調査隊の仕事だ。あたしたちじゃねー。戻るぞ」
「「「了解」」」

ヴィータちゃんの撤退の指示で私達は帰ること、に・・・した?
ふ、と。物陰に隠れてるナニカを見つけちゃった。

ヨクワカラナイモノ。そうとしか言えないナニカがいた。
そしてそれはヴィータちゃんに向かって高速で動いていく。

シュテルＳｉｄｅ

まるで機械のような四足のソレは、一息ついたヴィータの背後に迫っていた。

「っ！！！？」

なのはがソレに最初に気付いたのか振り向こうとした所でヴィータの壁になる。
ヴィータの壁になるようになのはが庇う。
が、ソレもなのはには届かない。

一瞬。刹那の瞬間に金色の閃光が瞬いた。
フェイトだった。マスターに鍛えられ既に限界以上の速度を得た彼女は未確認物体に向かって吶喊していた。

間一髪だった。相手の腕につけられた刃がなのはの胸から１ｍｍ先でとまっていた。
微かに動こうとしたがそれも風前の灯。未確認物体はフェイトの一撃で停止した。

「　　っはぁ！っはぁっ・・・・はぁっ・・・」

身体的に限界を引きだしたのかフェイトが息を切らしている。

更に親友の危機という点からも緊張の糸が解かれたようだ。
私はソレを冷静に分析しつつも周囲に同じようなものが無いかサーチを開始する。

「なのはっ！このばかっ！なにやってんだ！」
「よかった。ヴィータちゃん無事だったね」
「よかった、じゃなえぇだろ馬鹿野郎！フェイトがしとめなかったらお前っ・・・！」

歯軋りしてヴィータが苛立ちを顔に出す。あぁ、それだけ悔しいのですね。
護られたという事実。そしてなのはが危険に陥るという予言を知っていた事。

しかしこの機械を調べていると不可思議なことがあった。
魔力反応のある傷はフェイトの痕跡がある。だが、もう一つの『刀傷』はなんだ？
機械の背後につけられた謎の刀傷にシュテルは疑問を持った。

「ヴィータ。今は取り合えず撤退しましょう。此処に残ってればまた次の手が来るかもしれません」
「あ、あぁ。そうだな・・・よし、なのはへの説教は戻ってからだ。全員撤退！」

ヴィータの号令で私、なのは、フェイトが撤退する。最後にヴィータが周囲への索敵をしながら転送を終え、この世界を後にした。

フェイトＳｉｄｅ

本局に戻ってきた途端、ヴィータの説教が始まった。主になのはへ。

「あたしが危ないからって飛び出してんじゃねぇよ、この鉄砲玉が！」

「ヴィータちゃんこそ危ないってのにじっとしてられないでしょ！」

説教なのになのはも噛み付いてる。こういうなのはは始めて見たかもしれない。

シュテルは本局に戻ってからミラージュに報告に行っているのでこの場には三人だけ。

ほとんど言い争いになりつつあるし・・・私は口を挟むことが出来ない。

終わってみれば無事だったんだし。コレから気をつければ良いんじゃないかなぁ。

「やれやれ・・・全く何をしてるのかと思えば」

ヴィータとなのはのいい争いを見てると後ろから声がした。

振り返ればミラージュ。

「フェイト、ご苦労様。ゆっくり休んで試験に臨んでくれ」

「あ、うん。それはそうなんだけど・・・」

「あっちは俺に任せろ」

「うん・・・じゃぁ任せた」

ほんと、お願いだよ。

ミラージュＳｉｄｅ

やれやれ。シュテルに呼ばれたかと思えばなにやってんだこいつら。

「言い争うのはやめろ。無事帰ってくればソレでいい」

「そういう問題じゃねぇだろ！危なっかしいんだよ！」

「私が入らなかったらヴィータちゃんきっとやられてたの！棚上げしないで」

「あー、もう。とりあえずやめろ。ヴィータ先。なのは後。話するぞ」

このままだときりが無いので二人を離す。まずはヴィータと話。

その間になんはのほうはシュテルに任せる。うまくおとなしくさせておいてくれよ。

「ご苦労様だなヴィータ。すまん、俺の我侭でこんなことになっちまうなんて」

「いや、お前は悪くねぇけどさ・・・あいつが危険なことになるのはわかってたんだろ？

その為の布陣だってのも理解してるさ」

「理解が深くて痛み入るよ」

「なのはが襲われるのはもう予言してたな・・・わかってたのか？」

「まぁ、な。どうしてとかのそこら辺は秘密だが」

「お前のおかしな所は理解してるさ。だから何もいわねー」

「・・・サンキュ」

ヴィータは納得してくれた。とはいえ多少は謎に思ってるかもしれ

ないな。
これはいつか話せるときが来るだろうか。くれば話せるのだがな・・・。

さて、次はなのはだ。激昂したままシュテルに宥められてる。

「なのは」

名前を呼ぶ。シュテルにはアイコンタクトでヴィータのほうに行ってもらった。

「ヴィータを助けようとして踏み出したらしいな」
「私は悪くないもん！ヴィータちゃんを助けようとしたんだもん」
「その事については追求はしないさ。護ろうとしたんだろ？」
「・・・・うん」
「でもそれで自分が傷ついたら意味が無い。他人を護って自分も護れ。出来ないならできるように鍛えるんだ。
そうすればほら。誰かを護れて自分も護れる」
「・・・・・うん」

なのはは黙ってしまった。理解はしてくれたようだ。

「でもまぁ。ヴィータもその事で怒ってるわけじゃないんだ。それもわかるだろ？」
「わかる、よ・・・わかってるの。頭では。でも止まらなかったの」
「今は？」
「・・・・悪かったって思う。でもっ・・・私はっ・・・」
「仲間を護るのは勇敢だ。でもさっきも言った様に自分が危険に晒されたら駄目だ。
何の為にお前は教導隊に入ったんだ？そういうのを一人でもなく

す為だろう？
　そしてそれだけの力がお前にはある。お前だけじゃなくて他にもそれを伝えられるはずだ」
「・・・・・・・・・」
俯いてしまった。考えてるんだろう。そうであってほしい。
「さ。それじゃぁヴィータには言うべき言葉があるよな」
「うん・・・そうだね」
顔を上げてからヴィータのほうに行く。ヴィータは腕を組んだままなのはを見てる。
「ヴィータちゃん心配かけてごめんね？」
「いや・・・あたしも頭ごなしに怒鳴って悪かった」
仲直り成立、だな。
「さて。仲直りした二人には特別なものをやろう」
「ん？なんだ？」
「なにかくれるの？」
「報告書と――――――始末書だ。明日までに提出しろよ」
地獄から天国。そして今、二人は地獄に落ちた。

二人して肩を落としてげんなり顔だ。
同時に同じ行動をした二人の視線が合うとどちらからか含み笑みから笑いあいに発展した。

ソレを見ていたフェイトとシュテルは互いに笑いあう。
この二人なら。いいコンビになるだろう、と。

今回の任務では回避自体は出来た。だがまだ続く可能性がある。
シュテル達には今後も護衛代わりについてもらおう。

ヴィータたちが退いた後、すぐに後続調査隊が現地入り。
謎の機械は調査隊によって回収され本局入りした。そこにつけられた傷を見て彼にも声を掛けて置いてよかったと安堵した。
『彼』にも労いの言葉と感謝を伝えなければ。

第五十六話　八神はやて

はやてＳｉｄｅ

もうすぐ5年生の１２月の日曜日。海鳴市にも雪が降り出してきた。
もう速いもんなんやね。わたしが魔法に出会って、かけがえの無い仲間に出会えてもう二年ちょっとや。
なんや雪が降る度に思い出してまう。

守護騎士の皆は本局で仕事。わたしは今日は一人で留守番や。
せやけどあんまり寂しくはない。午後になったらすずかちゃんが遊びに来るし。
今は――――――

「はやて。ご飯は食べておけといっただろう」
「あー、見つかってもーた」

朝食の残りが見つかってもーた。綾人くん改めミラくんに。今日は仕事休みやっつーことで朝から家に来てる。
わたしやなのはちゃんフェイトちゃんには徹底して呼び方を変えるようにと口煩く言うとったからもう慣れてもうたわ。
いまだにフェイトちゃんは綾人って呼ぶときがあるけどなぁ。

時間的にはまだ午前9時。リビングのソファで寝てた私をミラくんが起こしに来る。
朝食の準備もミラくんがやってくれたから私の出番は無うなってしもたけど。

ソファに座ったままミラくんを見続ける。朝食の後片付けをしなが

ら家事しとる。

「本当なら家事はアーチャーにやらせたほうがいい。あいつは執事のサーヴァントだ」

「執事なのにアーチャーってなんでやねん！」

とか恒例の漫才をしてから頭の眠気を吹き飛ばす。

「そういえばマテリアルの子らはどうなん？」

「あぁ。元気だぞ。そのうち逢わせるよ」

「そかぁ。楽しみやねぇ」

闇の書と呼ばれた夜天の書の闇から生まれたプログラム。マテリアル構造体。

その三基。なのはちゃんに似た子。フェイトちゃんに似た子。わたしに似た子。

ミラくんはその存在が消えないようにってマスター権を使ぉて契約したったんやな。

そのうち逢わせてくれるならそのときまでまっとこか。

「はやてのデバイスな。シュベルトクロイツ。もうちょっと弄れそうなんだ。

ピーキーにチューンされそうだからかなり扱いが難しくなりそうだ」

「ん、そうなんや。わたしは別にえぇよ。それで皆を護れるなら」

今、本局技術部に預けてるわたしのデバイス――――――シュベルトクロイツの調整。

それがちょぉっと弄るってミラくんが言うてから一週間。その間は

管理局の方には仕事では顔を出しとらん。
なんだかちょっと心配なんや。今までがあんまり動けとらんかったから動いてないと。

「あんなミラくん。ちょぉ思うんやけど」
「ん？なんだ？」
「シュベルトクロイツだけやのうてもう一つ作ろうか思うねん」
「シュベルトクロイツの中にある蒐集された魔法を管理するためか？」
「そやねん」

あー。流石ミラくんや。皆まで言わんでも判ってくれた。
そやねん。夜天の書が集めた魔法がシュベルトクロイツのデータに入ってる。
それをなんとかしないとこれ以上のデバイスの強化は出来ないそうや。

それはわたしもミラくんも知っとる。
今以上のスペックを求めるなら、それをなんとかせぇへんといけん事も。
それを聞いた日からずっと考えてたこと。

あの子の後継機を作り出すこと。
ずっとひきずっとったらあかん。
リィンフォースも言っとった。名前を継ぐ者を、って。

それなら。わたしは後継機を作ることがあの子へ出来る事や。
その為のプログラム形成も勉強した。
陸士部隊に出向しつつもソレが出来たのは幸い。
いつまで掛かるかわからんけどやったる。

「はやてがそう決めたのなら俺は否定することはないよ」
「うん。そういうと思ったわ。で、な。お願いがあるんやけど・・・」
「デバイス組むの手伝えってか？」
言わなくても伝わる心地よさってあるよね！まさに今そう。
「だめ・・・・？」
「まだ何も言ってないだろ。俺は手伝うだけだ。やるならやるで確り組めよ？」
「・・・・・うんっ！」

ミラージュＳｉｄｅ

前から考えていた。はやてに後継機を作らせようと。
どうしてもシュベルトクロイツだけだとはやての魔法量に限界がある。
模擬戦をしてると良く判る事だった。

夜天の書とシュベルトクロイツは一対。
蒐集した魔法はシュベルトクロイツにも記憶されていたのだ。
ただし魔法はすべてロックされた状態で。
６６６の魔法を蒐集した夜天の書でありながら実際にはほんの１０にも満たない数しかないのだ。

つまり、魔法の管理・制御は書によって成っていた。
今はソレがないため、シュベルトクロイツが夜天の書が行っていた

作業まで手を出している。
はやてはずっと考えていたと言う。
恐らくリィンフォースが旅立った時から。

「だめ・・・・？」
「まだ何も言ってないだろ。俺は手伝うだけだ。やるならやるで確り組めよ？」
「・・・・・うんっ！」

そう告げればはやても満面の笑みで俺に向いてくる。
そうと決まれば今日の留守番もきっと楽しいものになる。
何よりも午後からすずかも来るのだし。

「今日はな。クリスマスパーティの準備の打ち合わせなんよ。ミラくんももちろんでるやろ？」
「仕事が入らなければ参加する方向でお願いするよ」
「了解や」

えへへぇ、と笑みが零れまくってるぞ。そんなに嬉しかったのか。

「ヴィータもなぁ。なのはちゃんと最近仲えぇねん。なんぞぶつかればそうなるもんなん？」
「さてな。俺にはわからない。でもそういう友情もありなんだろ」
「うー。ミラくん意地悪やわ」

満面の笑みからむすっとした顔へ。
家事をしつつもはやてがモニタを出してプログラムを組んでいくのを見る。
時間にしてもうすぐ正午。昼食は何にするか。

すずかＳｉｄｅ

今日ははやてちゃんのお家でクリスマスパーティの打ち合わせ。
籤引きで今年は私とはやてちゃんに決まった。
それで今日はシグナムさん達もいないからっていうのでこの機会に一気に打ち合わせしようと思う。

ダッフルコートで防寒は万全。
もうすぐはやてちゃんの家の前。見えるくらいまで近づくとすごく美味しい匂いが漂ってくる。
この香りはすごく知ってる香り。ミラ君の味付けの香り。

「ここら辺でっていうとはやてちゃん家で作ってるね」

お昼ご飯つくってるんだろうなぁ。すっごく楽しみ♪
はやてちゃん家のチャイムを押して少し待つとミラくんが出てきた。

「いらっしゃいすずか」
「うん、いらっしゃいましたー」

招かれて家の中へ。コートをミラくんに預けてリビングまで来るとはやてちゃんがいる。
コートは廊下のコート掛けにかけてくれた。

「こんにちははやてちゃん」
「こんにちはやすずかちゃん」

私もリビングにいってソファに座る。はやてちゃんの隣。
ミラくんはキッチンにいどうして料理再開みたい。いい匂いが広が

ってくる。
クリスマスパーティーの打ち合わせを始める。
場所、時間、規模。いろいろと話し合っていくと時間を忘れて夢中になっていく。
気付いたらミラくんにご飯だからって呼ばれてた。
そんなに集中してたのかな。

「話し掛けても夢中になるほど熱心なのはいいが腹減ってないか？」

なんていわれたら意識しちゃうよ？
おなかがくうくうなきました。

「それはやめろ！」
「え？なにが？」

ナニヲイッテルノカワタシニハワカラナイヨ？

ダイニングテーブルで昼食。軽めにサンドイッチだけど具材がすごい。
普通にディナー的なくらいに量がある。

「残しても構わないぞ。後でセイバーたちの所に持っていくから」

あっちに渡したら大変だ。勿体無い。
腹八分目くらいまでだけど満足するまで食べておこう。

食べ終わると後片付け。これは三人で。
あと少しで終わりってところでミラくんが仕事と用事があるからって転送されていく。

私がいるから大丈夫だろう、なんていってくれて嬉しかったなぁ。
ミラくんが転送されるのをはやてちゃんがずっと見てたけど。見てたけど。

でも私からは聞くことは無い。
踏み込んでいい部分と悪い部分はちゃんと弁えないと。

「あんな、ミラくんわたしのデバイスのことで用事言うたんやと思う」

ってはやてちゃん。
そうか、デバイスをいじりにいったんだ。

「そっか。はやてちゃんのデバイスかぁ。あの十字杖だけじゃないんだよね」
「ん。本来なら本もセットなんやけどね。今はないんよ」

そうなんだ。そういえばまだ私ってみんなのデバイスって知らないや。
ミラくんのはあの神剣だっていってたけど。
やっぱり秘密なのかな。

はやてＳｉｄｅ

シュベルトクロイツはミラくんに任せておこう。なんとかなるやろ。
しっかしデバイスの話に妙に乗ってくるなぁ今日のすずかちゃんは。

「すずかちゃんは・・・・魔法は使えへんのやね？」

「うん、そうだね。私のは魔術」

魔術？魔法とちがうんか？そういえばミラくんやセイバーさんらがよく言う言葉や。
今度聞いてみよかな。

しかし、すずかちゃんも関係者なんやし、デバイスもって管理局に入ってもおかしくあらへんよなぁ。
やっぱりミラくんが止めてるんかな。

「すずかちゃんは、アレなんか？ミラくんにとめられてるん？」
「んー・・・言っちゃっていいのかな」

あちゃ、悩みだしてもうた。やっぱりこれは言っちゃあかんかったかなぁ。

「内緒だよ？実はね、まだ力の制御ができてないの。お師匠様がいてまだだって言うから。
それまではまだまだだねって」

そうなんか。初めて知ったことがあったけど・・・・。
すずかちゃんお師匠様おったんか。少しだけ聞いたらお月様みたいな人やって。

魔法の事も少しずつ話しながらパーティーの話し合い。

夕方まで話し合ってたらシグナムたちが帰ってきた。
シャマルにすずかちゃんを送ってもらって夜食の準備。
と思ったらミラくんがもう準備しとった。多分お昼ごはんのときや。

準備すげぇとかヴィータが言いながら家族全員でなべをつつく。
出来るなら――――
もう一人。あの子を――――
此処におったらよかったのにな。

ミラージュＳｉｄｅ

本局技術部。はやてのデバイス、シュベルトクロイツを預けてある場所だ。
俺はそこでデータの見直しをしている。
今現在シュベルトクロイツを検査しているのは俺と技術部長のみ。
技術部長もさっき休憩にはいって今は俺一人だ。

夜天の書の対になる十字杖。
魔法のデータが圧縮されて内部コアに入ってるのは確認できてる。

あとは・・・最終的なチェックだがこれは俺達人間には無理だ。
出来得るならすべてを理解している存在の手が必要になる。

「――――――――――」

言えばきっと手を貸してくるだろう。しかしどうする。
リィンフォースはきっと喜んで手を出してくる。そして完成はするだろう。問題はその後だ。

はやてはどんな顔してデバイスを使い続けるのか。

それが頭に引っかかる。既に決別した存在がいる事を告げるか？
いや、それはだめだ。既にはやては前に進んでいってる。
そこに後ろを向かせることは出来ない。

葛藤が続く。どうすればいい。

俺は――――――検査ブロックから離れて久しぶりに開いたスキマの中へと身を放った。

スキマの中は暗闇だった。しかし満天の星空。上も下も。
其処に誰もいない。いや唯一人この空間の住人がいた。

「お悩みのようですねマスター」
「んー・・・・・あぁ」
「主はやては――――――大丈夫ですよ」

まるで知ってたかのように話し掛けてくる。
あぁ、この空間からは外も見れるんだったな。自分の能力なのに忘れてた。

「でもいいのか？お前の手が加わればはやてはきっと気付くぞ」
「追求されたら真実を話しましょう。それが一番よさそうです。何よりも――――――偽って生きるのは辛い」

・・・・リィンフォースが生きていることは内密に。黙ってるわけ

だしな。
機会を見て話すか。その時が来れば、だが。

「じゃぁ、はやてがもしシュベルトクロイツの対を作るってなったら手を貸してくれ。
多分もうプログラムは出来てるはずだから近いうちになると思う」
「了解しました」

不思議な表情だ。憂いともとれるし無表情にもとれるような顔。
その時が来たらきっと荒れるだろうな・・・・。

第五十七話　シグナム

シグナムＳｉｄｅ

アースラの訓練場で模擬戦をしている。最近ずっと申し込んでいてやっと巡ってきた順番だ。
セイバーとの模擬戦。最近では地上本部のほうから剣術指南の声も掛かっているとか。
今日は私の番。地上空中合わせての一騎打ち。

何合とも打ち合う。
地上ではセイバーに分があっても空中戦ならまだ此方が上。
スピードで翻弄しつつも徐々に対処されつつある。

さすが「セイバー」の名を持つだけある。
最初の頃は空中戦ならなんとか出来たのに最近では徐々につめられつつある。

「くっ！」

超高速度での斬りつけにも反応するとは・・・流石だ。
だが此処で負けるようではまだまだだっ・・・！！！！

「ここだっ！！」
「残念、誘いました」

一瞬だけぐらついた隙を私は突こうとしたのだがそれが誘いだった。
既に行動に入っていたので変更は出来ない。
セイバーが振り上げた剣を無慈悲に振り下ろす。

私はその一撃で撃墜された。

セイバーＳｉｄｅ

今日の模擬戦はシグナムと。
二週間に一回くらいのペースで申し込まれてますね。
いやはや強くなろうとするのは殊勝な事です。

地上戦での分はやはり私にあるようですがまだ空中戦に慣れてないのです。
足場が見えないというのはなんとも。
いや、剣を見せてない私が言うのもなんですが。

取分け、高低差に対してはスキルが発動してしまうので空中戦も関係なくなってしまうのですけどね。
しかしシグナムは速い。恐らくランサーといい勝負をしそうです。

ですがそろそろ次があるので終わらせましょう。
一瞬だけ隙を見せるとその隙に向かってくる。
まだまだですね。その攻撃を回避して一撃。撃墜です。

「中々の筋でした。シグナム」
「いや、だがあの隙につられてしまうのはまだまだだな」
「ですが。私は既に本気で撃ち合ってますよ。最初の頃より進歩は凄まじい」

あの時はただ剣を振るのみで対処も出来た。
しかし今は魔力を籠めているのだと伝えると嬉しそうな顔をする。

「ふふ・・そのうちセイバーには勝利することを誓おう」
「えぇ。その時を心待ちにしておりますよ」

私の剣を超えると。実に楽しみです。
地上に降りればシグナムと並んで休憩スペースへ。
汗をかかずにいる私と大汗のシグナム。

「シャワーを浴びてきたらどうですか？その間に片付けておきます」
「ん、そうか。すまんな」

デバイス・・・レヴァンティンを待機モードにしてネックレスにする。
武装隊員も一緒になってシャワー室へ。あ、男女別ですよ、当然ながら。
休憩所で一息つくとマスターがやってきた。

「張り切ってるな」
「マスター。いらっしゃったのですか」
「あぁ。シグナムとの模擬戦も見てた。意外とマジだったじゃないか」
「ふふ。そうですね・・・あと数年もすれば魔力なしの状態に届きそうですよ」

楽しそうだな、なんて。確かに此処での戦いは命の削り合いがない。
だが己がさらに高みへと上れる嬉しさ。
己が鍛えた者が己に近づき打ち倒すのではと言う楽しみ。

此れは中々に味わえるものではない。

「そういうマスターこそ。フェイト達を鍛えているようですが」

「目的があるからな。いや目標か」

言い方は変えましたがマスターの場合同じ意味です。それは。

目的、目標ですか。私も作ってみますか。

ミラージュＳｉｄｅ

模擬戦場のセイバーと合流。丁度シグナムとの試合が終わった時だった。

シャワー室に向かうシグナムの背中が見えたので視線が勝手に向かっていた。

「張り切ってるな」

「マスター。いらっしゃったのですか」

「あぁ。シグナムとの模擬戦も見てた。意外とマジだったじゃないか」

「ふふ。そうですね・・・・あと数年もすれば魔力なしの状態に届きそうですよ」

「楽しそうだな」

思えば俺はサーヴァントに戦いを取り上げてしまったんじゃないかと心配していた。

しかしこうして適度に戦い続けているのなら大丈夫なのかもしれない。

「物足りなくなったら同じサーヴァントや俺が相手になるから」
「ありがとうございます。その時にはお願いします」
「手加減してくれるならな」
「何を仰るのやら」

律儀と言えば律儀なんだがな。言ってきたら相手するか。
セイバーが本気出したら多分俺負けちゃうよ。反則するしかないな。

ともあれ此処に来た理由を話す。シグナム達の強化。これだ。
確かもう薄れてきた原作知識だとそろそろなのはが落ちる。
その為にフェイトも鍛えてきたんだ。

「セイバーも鍛えるか？」
「いえ私は現状維持で。必要になったら頼みます」
「そうか」

セイバーは現状維持、と。
確かに今のままでも敵はいなそうだし。大丈夫か。
アーチャー達もしばらくは自分で鍛えてもらおう。

「ともあれシグナム達を鍛えるのは賛同します。せめて私達が脅威に感じるくらいにはなってもらわねば」

そこまで鍛えるのか。結構きついな。
いや・・・ふむ。幾つか考えが浮かんできた。

「よし。じゃぁシグナムに伝えてくれ。海鳴公園で待ってる、と」
「了解しました。結界用にシャマルも呼んでおきましょうか」
「すまないな」

結界は俺が張ろうと思ったんだがシャマルが張ってくれるなら問題ないだろう。
話は決まった。俺は一足先に地上へと降りる準備へと向かった。

シグナムＳｉｄｅ

シャワーを浴びてから武装隊の制服に着替えてからセイバーの手伝いをしようと思って訓練場へ。
とおもたら既に片付け終わってた。

「速いな。手伝おうと思ったのだが」
「いえ、もう終わりましたから」
「そのようだ」

まったく。剣も強くて気も利くとなると普通なら放ってはおかないだろうな。
実際アースラの艦内にはセイバーの非公認ファンクラブがあるほどだ。
これは恐らくセイバーも気付いていなかろう。

「そういえば。マスターが呼んでいました。海鳴公園にて待つ、と」
「ミラージュが？何の用だか・・・口で直接言えば・・・・・なるほど」
「結界要員にシャマルをつれてくるようにとのことです」

恐らく。これは挑戦状。シャマルを結界要員にというならば尚更その線が濃い。

ふふ・・・・そういえばまだ一度しか相対していなかったな。
これはやばい。胸の高鳴りが早い。まるでずっと我慢してた玩具を買ってくれた子供のような気持ちだ。

「シグナム。貴方もやはり闘う者だ。その顔が全てを語ってる」
「む・・・・」
「ご武運を。マスターは私よりも更に上にいらっしゃいます」

セイバーをしてここまで言わせる武力。
何よりも。暴走プログラムの時やC．C．との闘いも見てきた私にとっては恐らく強大な壁になる存在。
是非剣を合わせたかった。

「ここは私に任せてどうぞ待ち合わせ場所へ。シャマルには私から伝えましょう」
「すまない。痛み入る」

私の足は地上への転送ポートへと向かって駆け出していた。

セイバーＳｉｄｅ

シグナムを見送ってからシャマルに連絡。どうやら地上にいたようですね。
用件を手短に伝えるとすぐに向かうとのことでした。いいことです。
さて、私は次の模擬戦の準備でもしておきましょう。

ミラージュＳｉｄｅ

一人海鳴公園の高台の上にいる。
時間的に昼過ぎ。人の影も今は疎ら。

俺はケータイを片手に連絡をしている。

『はぁーい、もっしもぉーし』
「オレオレ、オレだよ」
『今時オレオレ詐欺!?古いよ!』
「ちっ・・・・」
『その舌打ちは何かな?!』
「まぁいい。それよりも話がある」

通話の相手は神。頻繁に連絡取れる神様ってなんかいやだ。

「シグナムにあれを渡そうと思うんだが・・・」
『うん。いいんじゃないかな。結局君の武器は神剣になったわけだし。
何よりも火炎系だっていうなら使えるはずだよ』
「そっか。ソレを聞けて安心したよ。だめなんていわれたらどうするか迷ってたんだ」
『此処までお膳立てしておいて駄目って言うほど僕も鬼じゃーないよ。神様だけど』
「・・・・・・・・・・・・・・・」
『無言はやめてっ!!』

とりあえず。取り合えずだ。
これで言質は取った。あとはシグナムが耐えられるかだな。
話は終わったので通話をきる。

丁度其処に向かってくる人影が二つ。シグナムとシャマルだ。
セイバーから伝達は通ったようだな。

「シグナム。シャマル」

二人の名前を呼ぶ。この二人とはもう3年くらいの仲だ。
だが二人はなぜか臨戦態勢だ。
セイバーからの話はどうやら戦う方向に向いてたようだ。
まぁ、話の流れからそうだろうな。

「ミラージュ。用件はなんだ?」
「ちょっとした用さ。シャマルと一緒にな」

もう手を伸ばせば触れるくらいの距離。

「シグナムに新しい力を、って思ってな。で、その為にシャマルの結界が必要になる」
「私に新しい力、だと?」
「炎熱系魔力変換資質を持ってるシグナムになら多分扱える、はずだ」

あの力はシグナムにだけ要素があってもだめだ。

「まぁ、あとはあっちがお前を認めるかどうかだが」
「ほう?力のほうが私を確かめると言うのか。面白い」

その力自体のことは何も言わないでいるが言った所で何も変わらない。

「その力があれば――――――私はどのくらいまで強くなれる？」
「そうだな・・・・」
顎に手を当てて考える。今のシグナムのレベルでだとどこら辺まで強くなれるのか。
「全部使いこなせば多分、ランサーくらいなら翻弄させられる」
「・・・・・・そうか」
そこでセイバーの名前が出なかったことに内心がっかりしてるのが見て判った。
だって肩が落ちてるんだ。見てすぐわかるくらいに。
「まぁ、実際に逢ってみろ。実質問題で扱えるのかどうかはまだわからない」
「いいだろう。その力がどんなものかは結局言わないつもりだろう。なら見せるがいい。その力を」
「焦るな。シャマル、結界を。八重に」
「八重、ですか。結構張りますね・・・・・」
シャマルが結界を8枚重ねがけする。これで外界との遮断が成功した。
更に此処でおきたことは結界を消した後には感化されない。
「よしじゃぁ――――――はじめるぞ」
「来いっ――――――――！！！！」
俺の右手が揺らぐ。炎による蜃気楼のように揺らいでる。
その手をシグナムの胸に突き刺す。まるで手刀で突き刺したような感じ。

しかし其処には血も流れない。

「この力は凶悪だぞ。まずはどういうものか体感してこい」

すぐにシグナムの胸から手を抜く。揺らいでいた手は今はもうなんとも無い。

「っ！？く、くぅぅあああああああああ！！？」

途端に苦しみだすシグナム。あぁ、あいつら暴れだしたな。
元々は俺の中に巣食っていた奴らだしな。模擬戦で使ってやろうかと思ったけどやめたんだ。
宿主さえ居ればあいつらもおとなしくなるだろう。
頑張れシグナム。おうえんくらいはしてやるよ。

シグナムＳｉｄｅ

体が熱い。燃える様な突き刺す痛みも伴っている。
これが・・・これがミラージュが体感しろといった力なのか？！
この力はこの体を痛ませる程までにすさまじいと言うことなのか。

痛みに耐えて目を見開く。此処は一つでもミラージュに文句でも言ってやろうと思った。
が、そこには誰も居なかった。
ただ、砂漠の世界が広がっている。

「なんだ・・ここは」

「ここは貴方の世界だ」

男の声が後ろからした。振り向き腰に手を添える。
レヴァンティンは腰にある。
そして視線の先には男女が立っていた。

「元の宿主は我らを使ってはくれなかったからな。君はどうだ？」
「貴方は私達を従えられる器？もし力がほしいならソレを見せてくれる？」

どうやら・・・推測だが。
この男女が力の主。なら・・・。

「つまり、貴方達二人を納得させればいい。と言うことだな」
「まぁ、大体当たりだね。じゃぁ君の力を見せてもらおうか」

当たりだな。ならば見せてくれる。古代ベルカ・夜天の王が従えし守護騎士の力を！

「夜天の守護騎士シグナム。推して参る」
「我が名は砕羽！我が炎は全てを切り裂くぞ！」

まず向かってきたのは男のほう。砕羽と名乗ったか。
手刀の先から炎の剣を作り出した。
成る程、炎の形状をそう変える訳か。

何度と無くレヴァンティンと炎剣がかち合う。
幾合と交差する刃。足場の砂が時折バランスを奪っていく。
しかしそれは相手も一緒のようだ。その際にはお互いアドバンテージをとって攻撃する。

「中々の太刀筋。更にその剣も特別製と見た！」
「我が剣レヴァンティン。炎の魔剣とも呼ばれた一物よ！」

何度も幾度も何合も。互いに責めあぐねている。
決定的な一撃が出ないままもう何時間も打ち合っている感覚に陥る。

やがて、砕羽が剣を納める。

「ふむ。中々の御仁だな。一合毎に心がわかった」
「砕羽がそういうのならきっと良い御仁なのでしょう」
「では・・・」
「あぁ。我が力を貸そう」

幾度と剣を交わした相手だからこそわかる。この男の実力はまだ上にある、と。

「これで私の力が本当にあがったのか・・？」
「使いどころと使いようね。砕刃の炎は使いやすさなら私達の中でも一番でしょうから」
「私、「達」・・・？」

そこで引っかかった。この力はあの男のものだけではないのか、と。
そう考えていると女が話し掛けて来た。

「私の名は崩。私の炎は全てを砕くわよ?見極められるかしら?」
「ふ・・・なるほど。一対の炎か。ならばお前の炎も認めさせてもらおうか！」
「一対・・・貴方はまだ勘違いをしている」
「・・・・？」

何を、言ってるんだ?男女の一対の炎の力ではないのか?
思考が高速で巡る。しかしそれは目の前の炎にかき消されるようだった。
炎の弾が幾重も現れる。まるで小さな太陽のように燃え盛っている。
「私達八の炎。八の竜に認めてもらいたければ――――――倒れちゃだめよ?」

ミラージュＳｉｄｅ

蹲ったまま動かないシグナムを広い空間に連れて行く。
ずっとシャマルは心配したままだ。

「シグナムは・・いったいどうしたんですか?」
「今、シグナムの内面世界――――――心の中で俺が渡した力との試練をやってる。
シャマルの結界はもしもの時の為だ」

もう蹲ってから数分。恐らくも始まっているだろう。
この入れんが駄目なら恐らく内面から焼かれてしまうだろう。その為の対処としてシャマルを呼んでいたのだ。
そうならないことを祈るだけだが・・・あいつら容赦しなさそうだしな。

試練がどういうものなのかをシャマルには伝えておく。

試練が終わればシグナムも目覚めるとも。
八竜との契約。それが試練。最初から全員と契約が出来るとは思っては居ない。
３つも契約できればいいほうか。
八竜全てを一気に契約することは恐らく不可能。
とはいえ八竜はずっとシグナムに巣食って滞在する予定だ。
その反動と抑制のためのアイテムも準備してある。
さて、どこまで持つかな。

シグナムＳｉｄｅ

砕刃、崩と契約は完了した。
今目の前にいるのは弁髪のような髪の男。
自由自在に動き回る鞭のような炎に苦戦している。

「ほれどうした！それでは意味が無いぞ」

男は焔群と名乗った。あの鞭の炎が近づくのを遮る。もうずっとこの調子だ。
近づかなければ斬れない。ジレンマが生まれる。

『情けないな。それでも我らと契約したものか？』
「しかしだな。近づけぬのはっ・・・」
『新しい我らの力、そして元よりある貴方の力。コレを掛け合わせれば――――――』

砕刃と崩が語りかけてくる。念話とは違う頭に直接話しかけてくる感じだ。
炎の剣。炎の弾。使えるというなら――――私はっ！！！

レヴァンティンをシュランゲフォルムへ変換する。
鞭のように連なる刃の連結。蛇腹剣とミラージュには言われた。
いつもならそのままであるのだが、炎を伴っている。
刃の部分に炎を纏わせて炎の鞭を相殺させて消し飛ばす。

「なるほど。そういう使い方か」
「この力は崩か・・・」

崩の炎、火球が刃に纏わりついている感じ。

「これが私の力なのか・・・・」
「使いこなせよ。我らの力」

どうやら焔群も今ので試練は終了らしい。
ここで私は集中力や精神力が限界に来てることに気付く。

「どうやら今回は此処までのようだな。続きは前の宿主に言えば機会をくれるだろう」

焔群が言うとおりもう私は立つ力すらなかったようだ。
その場に座り込むように膝をつく。

「どうやらそのようだ・・・コレから頼む。砕羽、崩、焔群」
『『『承知した、我が宿主よ』』』

焔群も炎の光になって私の中へと消えていく。

焔群を取り込んだ後、私は急激な疲労と眠気に襲われて意識を手放した。

ミラージュＳｉｄｅ

シグナムの傍らで試練の終了を待つ。
それがどのくらい長くなるかはわからないが、時間が長ければ長いほどシャマルの結界の効果が増す。
シグナムを鍛えつつシャマルの結界を鍛える手筈。
当のシャマルは気付いてないがな。

「シャマル。結界が薄くなってる。集中しろ」
「判ってはいるんですけどっ・・・流石に八重はきつい、かな？」
「泣き言言っても助けないぞ。お前の結界の強化も含まれてるんだから」

シャマルが「え？そうなの！？」って顔で俺を見る。判ってなかったんか。
シャマルが結界を維持してるとシグナムが気がついた。

「シグナム。帰ってきたか」
「む・・・ぅ。ここ、は・・・」

まだ意識がはっきりしていないらしい。頭を振って覚醒させようとしている。

「どうだった？」
「とりあえずは三人だ砕羽と崩。それと焔群を認めさせた」

予想通り三つの炎を手に入れたか。それでこの疲弊なら暫くは出来そうにない。

「シャマル。もう大丈夫だ。結界を解いて」

シャマルに結界を解いてもらう。既に夕方近くというか陽が沈んでいる。

「シグナム、続きは回復したらだ。シャマルは家に帰って夕食の準備だろ」

「了解した・・・・」

「あ、そうですね。遅くなっちゃうのはやてちゃんに伝えておかないと」

おろおろとケータイで連絡を取る。二人して買い物をして帰るそうだ。

俺とシグナムシャマルは公園で別れて別の道を通って帰る。

これでシグナムは今よりも上にいけるだろう。新しい技も開発できるはずだ。

もし八竜全てを召喚出来るようになったら恐らくこの世界ではほぼ無敵になりそうだな・・・。

第五十八話　これから

ミラージュＳｉｄｅ

もうじき卒業式のシーズン。
桜が咲き始めた校庭。

「卒業式の後にバーベキュー参加するんはよっといでー！！」

教室内に響くはやての声。腕を上げて一番星状態だ。
なんだか顔が（＞▽＜）ノとかなってるが気にしないでおく。

はやての周りにわらわらと集まっていくクラスメイト達。
どうやら発案者はアリサとはやてのようだ。

「ほんなら卒業式の後に会場に移動っちゅーことで！参加する人は後ろに紙貼っとくんで名前かいといてーな」

よく見れば教室の後ろですずかが紙を貼っている。
・・・どうやらいつもの面子が仕掛け人らしい。
はやてが、ってことは当然ながら――――。

「お前たちも仕掛け人か？」
「にゃはは、そうなるかな」
「ミラも参加しようよ。楽しいよバーベキュー」

丁度近くに居たなのはとフェイトに声を掛けると案の定だった。

「ちなみにミラ君も仕掛け人の一人に入ってるの」

「なん・・・だと?!」

そんなことは俺は一言も聞いてないぞ。バーベキューだって今始めて聞いたんだ。
なにこの公開処刑。

「はやてがね、ミラには教えたら面白くないっていうから・・・直前まで皆で内緒にしてたんだ・・・。
私はどうかなーっておもったんだけど、ね?」
「あ、フェイトちゃんずるーい。わたしだってミラ君に言った方がいいんじゃないかなーって思ったんだから」

そんな事を笑いをこらえて言わないでくださいフェイトさん。
思ううだけでなく言ってくださいなのはさん。

「ともあれ卒業式後のことだろ?まだ先じゃないか」
「これはね、ミラ君が卒業したらミッドに移るから、引越し祝いと海鳴からお別れも兼ねてるんだよ」
「なるほど・・・それを知ったあいつらが考えたってことか」

よく考えるもんだな。
だがまぁそうやってやってくれるのは嬉しいと心から思う。
やりすぎなければ。

この面子が集まって何も起こらないはずがない。
大人しく終わってくれればいいんだが。
ともあれ、卒業式後だ。今は

数日して卒業式が行われた。
あれだけ大丈夫といっていたフェイトは手と足が同時に出たりして緊張していた。
今は最後の小学校の下校途中だ。校門前で写真を撮ったり色々。

ちなみに俺の制服のボタンはない。４つあるうち４つ全て。
なのはフェイトはやてアリサに奪われてしまった。
すずかはボタンはいらないからジャケットをくれというのであとで渡す予定だ。
ちゃっかりしてる。

「で、これからどうするんだ？バーベキューするんだろ？」
「もう準備は出来てるから時間までは何もないよ」

準備万端。いいことだ。
今、時間は３時すぎ。バーベキューは５時半から。
会場はアリサの家。まぁたしかにここら辺ではすずかの家と同じ大きな屋敷だから庭くらいは使えるだろう。
なのはもフェイトも家の連中を呼んでいるらしい。
だったらシュテルたちを呼んでおこうか。

「アリサ。シュテルたちを呼んでもいいか？」
「いいわよ。どーんと呼びなさい！家族参加もＯＫなんだから！」

実行委員長と化したアリサに許可を取る。

『シュテル。今いいか？』
『マスターですか。どうしました？』
『アリサの家に５時半前に集合。ディアーチェもレヴィも連れてこ

いな』
『了解しました・・・ちなみに英雄王とランサーは仕事のようです』
『そうか。わかった。じゃぁ後で』

ギルもランサーも仕事か。なら仕方ない。あとはセイバーとアーチャーか。
セイバー、か・・・・・バーベキューに呼んだらとんでもないことになりそうだな。
だが節制というか節操は考えてくれるだろ。

『セイバー。アーチャー。聞こえるか？』
『む、マスターですか。念話とはどうしました』
『５時半からアリサの家でバーベキューやｒ『いきます！』・・・・判った』
『私は・・・そうだな。今の仕事が終わってから伺おう。丁度開始の時間には間に合う筈だ』
『わかった。気をつけてな』

セイバーもアーチャーも来る、と。この事もアリサに伝えておく。
連絡するべく相手にはもうしたわけだしあとは時間まで暇つぶしだな。

「ミラ、は・・・もうこっちの学校はいかないんだよね」
「あぁ。管理局の仕事優先になるからな」
「中学校、いけばいいのに」
「実際学力は大学卒業程度にはあるからな。もうコミュニケーションを取る為の空間には用はない。
　実際局で働いてる方がコミュニケーションの取得は出来るわけだし」
「うーん・・・そうなんだけど」

フェイトが心配そうに俺を見る。
そう、俺は聖祥付属小学校を卒業した後、留学という話になっている。
卒業祝いと俺の留学祝いも兼ねているわけだ。
真実を知るのは魔法関係者の5人だけ。

ということでクラスメイトみんなからお祝いの言葉と称して声を掛けられたりもした。
これ、あれじゃないか?休日に地上に降りたらバレるとかそういう流れ?

時間が段々と押し迫ってきて会場に移動。
会場になるアリサの屋敷では既に従事員が準備を終了させていてあとは面々の到着を待つのみとなっていた。
門の手前に父兄が並んで待っている。
俺たちを待っていたと言う事で一緒に中へと入ることになった。

庭の一角をパーティ会場として使用しているようでいくつものバーベキューコンロが設置されている。
その周囲にテーブル等。キャンプ場のもっと広くて大きい版といった感じか。

「さて。はじめましょうか。卒業式終了パーティーよ!」

アリサの本当に短い言葉が庭に通る。その言葉を皮切りにバーベキューパーティーが開始された。
仲の良いグループ同士でまずは固まるようだ。
案の定俺の周囲には魔法関係者が集まってきている。
周囲の父兄達から溜息が漏れる。桃子さんやリンディ艦長に対して

だが。

「あら、おいしい。これはいいお肉ねぇ」
「キャンプでこんなに美味い肉が食えるなんて・・・・・」
「恭ちゃん泣くほどうれしいんだっ！？」

各々が食べて飲んでる。
主賓となるはずの俺が焼きながら振舞ってたりもする。
何よりもセイバーが・・・セイバーが・・・・・。
隣のコンロではアーチャーが鍋将軍ならぬコンロ将軍となって焼いている。
そのアーチャーの周りにディアーチェ達がいる。

「おとーさん、追加のお肉もって来たよ」
「サンキュすずか。其処に置いといてくれ」

アメリカナイズされたツッコミも華麗にスルーしてやる。
どうせアメリカコメディーとかで父親が焼いてるのを見たんだろう。
やり取りを聞いたフェイトがなぜか顔を真っ赤にしてたが。

「お、おとーさん私もおにくほしいっ！」
「なんだいおかーさんはくいしんぼうだなぁ」
「っ！？？！？！？」

と思ったら早速今度はフェイトか。こういうボケは流行ってるのか？
と思ったら顔が真っ赤なフェイトが鼻血出して倒れたぞっ！？
しかも幸福そうな顔だ！何がどうなった！？

「ふぇ、フェイトちゃーーん！？メディック・・・めでぃーーーーっくっ！！！」

鼻血出して満足げなフェイトを抱き抱えてるはやてが何だかの映画のように叫んでる。
救護班が呼ばれてフェイトははやてに添えられ運ばれていった。

「ミラ君は迂闊に喋ったら危険な存在なの」
「なんだその存在がメルトダウン」

ともあれなんとか無事に再開しはじめる。
しかしまぁこうして皆で囲むのもあんまりないから楽しいな。
そうか・・・こういうことで結束を生むことも出来るんだな。

なのはＳｉｄｅ

お父さんお母さんお兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に楽しくバーベキュー。
企画してくれたありさちゃんとはやてちゃんにはとっても感謝だね。
何よりもミラ君と一緒っていうのがナイスだよっ！

家族だけじゃない、こんなに一杯の皆で食べる食事。
凄い。すごい。
って、フェイトちゃんが倒れたー！？
はやてちゃんが付き添いでついていった・・・大丈夫かな。

「ミラ君は迂闊に喋ったら危険な存在なの」
「なんだその存在がメルトダウン」

理由を聞けばミラ君が何か言ったって。

もう・・・本当に無自覚なんだから。
でもそんなミラ君が皆大好きなんだよね。

ミラージュＳｉｄｅ

はやてに付き添われてフェイトが運ばれていった。
ちょっと悪ふざけが過ぎたか？

「クロノ。ちょっと変われ」
「断る。僕もフェイトの見舞いに行きたい」
「じゃぁユーノだ。延々と焼き続けろ」
「ボクだってことｗ「却下」ひどい！？」

ユーノにコンロを任せて離れる。フェイトの運ばれた所に行こうとしたら途中で恭也さんに呼び止められた。

「綾人。ちょっといいかな」
「あぁ、恭也さん。こっちも貴方に話があったんだ」

足を止めて恭也と話す。フェイトのほうはクロノに任せよう。

「期限を貰っておいてこんなに時間が空いてしまったが」
「いや、こっちこそ。あの時は助けてもらいましたから」

なのはが墜ちると検知した時、俺は二重の策を仕掛けていた。
フェイトとシュテルを直衛にしておいて更に影から護衛してもらっていた。

「文面だけでしか礼は言えなかったですし。ありがとうございます」
「俺も妹を守れればいいさ」

しかし、ＡＭＦ相手とはいえ通常斬撃でダメージを負わせるとは御神流恐るべしだが。

「その御神流相手に圧勝したのはどこの誰だ」

そんな時代もありました。てかもう４年も前のことじゃないか。

「で、今更だが返事をしようとおもって」

なのは護衛の為の入局のことか。理由が理由だし無理かと諦めてた。

「こっちの仕事が片付いたらそっちに行く事にしたよ。忍もつれていく」
「おや・・・夫婦揃って来るのか」
「まだ、だ――――――」
「訂正はしないんですねー」

恭也と忍か。すずかも中学出たらこっちに来るし先んじる感じでいいのか。

「ミッドにきたら住居の心配はしないでいいから。こっちでいい物件用意しておきますよ」
「そうか。ソレは楽しみだな」

用件もそこそこに恭也さんと離れる。其処でフェイトがはやてとクロノと戻ってきた。

「フェイト。大丈夫か？」
「うん、もう大丈夫だよ・・・」
「にしてはまだ顔が赤いけど」

手をパタパタさせながら大丈夫だからと言い残して走っていってしまった。
見送るような形になってしまった。
徐々にパーティも終息に向かっていっている感じだ。
最後の部分では俺の挨拶があるということだ。そんなことも聞いてなかったから準備もしていない。
アリサに呼ばれて裏側へ。スピーチの準備開始。こういうのは苦手なんだけどな。
まぁさくっと終わらせよう。長ったらしくするのは俺も厭だし。

ということでスピーチが終わる。お別れに寄せ書きの色紙とか貰った。
一時間くらいのパーティも終焉。お開きとなり皆が帰路に着く。

片付けはアリサの家の人がやってくれると言う事で俺達はアリサの家の中へ。
高町家は店がまだあるからということで帰宅した。
今は部屋の中で今後の話し合いなどを。

「で、ミラージュ君はこれからミッドに？」
「えぇ。そうなりますね。もう物件も押さえてありますし」
「確かクラナガンがったな」

「あぁ。地上本部の近くだな。もうディアーチェたちはそっちに住んでる」

既に物件は確保してるんだ。すぐに行ける様にディアーチェたちには先に住んでもらってることを話す。

「ミラ君先にミッド行きかー。私も中学でたら行こうかな」

「あ、じゃぁ私も！」

「わたしも！」

なのは、フェイト、はやてが賛同してきた。

まぁ義務教育は出ておいたほうがいいしな。仕事優先でいくとどうしても学校が疎かになるだろうし。

そこは三人の判断に任せよう。

「すずかはどうするんだ？」

「師匠からは許可が出てるよ」

「そうか。わかった」

アルクェイドがそう判断したならそろそろ制御もできるようになってきたのか。

だとしたら・・・・。

「じゃぁすずかも入局する方向でいいんだな？」

「うん。その為の制御訓練だったわけだし」

これですずかが俺の部隊に入る手筈が出来た。

すずかが言うにはアルクェイドと志貴は千年城に向かったそうでもういない。

すずかも中学を出てからミッドに来るようだ。

「これから道が交わったり別れたりしていく。今ここにいるのは恐らくずっと一緒にいるんだと俺は思う」
「私は魔法とか知ってるってだけで関係者とは違うわよ？」
「アリサにも素養はある。リンディさんにそこは任せてあるから」

昔、アリサが誘拐されそうになった事件のときに気付いたのだ。アリサにも魔法の素養があることを。
機会を見て言おうとしてたのだが今まで流れてしまっていた。

「アリサはリンディさんから話を聞いてくれ。こっち側に来るならなんとかしてみせる」
「まぁ・・・そうね。考えてはみる」

なのはたちが中学までこっちにいるわけだし、話を聞きつつ考えればいいか。
アリサの件はリンディさんに。すずか達は中学卒業後に来ると。

「しかしこうしてみると皆入局の流れか。管理局も懐が広いな」

戦力的には凄まじいな。唯でさえ強力なエース三人の他にサーヴァントがいる訳だし。
イレギュラー対策には充分な戦力に成り得るだろ。

リンディさんがいうには戦力過多にならないようにちゃんと分配される、との事。
しかしサーヴァントは守護騎士扱いになるので俺とサーヴァントで1という扱いになってるらしい。
更にディアーチェたちの扱いはどうなってるんだろうか。今度レティ提督に聞いてみるか。

此処までは下地の設立だった。地力をあげておかないとどれだけの強さを持ってるか判らない相手だ。
準備は万全にしておかなければ。
まだ誰にもいえない。管理局にかかわることなのか、俺個人へなのかもわからない。
神は其処までは教えてくれない。余計な心配はさせたくない。

話し合いは夜遅くまで続いた。リンディさんやクロノは艦に戻る。
なのはやフェイトはこのままアリサの家に泊まる事になったようだ。
既に家族には伝えてあるとの事。

俺はギルやディアーチェ、シュテルの部屋に今日は泊まることにした。
明日からはミッドだ。本格的に管理局の仕事を始めないとな。
惜しむらくは中学校の制服姿のなのはたちをあまり見られないという事だ。なんとも勿体無い。

第五十九話　始まり

ミラージュＳｉｄｅ

小学校を卒業して二年。１４になり俺は提督へと昇進した。
既に身長は１８０ｃｍ近くまで伸び、顔までもがルルーシュまんまになってきている。

そして旗艦津名魅。それが俺が提督になって管理局から得た戦艦だ。
名前で気付いた通り、アレだ。見た目もアレだ。
流石にサイズはアースラ級だが。

「艦長、地上より入電です。モニタにまわします」

オペレーターが地上からの通信入電をモニタに映す。
其処には一人の青年が映っていた。

「艦長、地上部隊は制圧したッス」
「了解した。現状維持で待機」
「了解ッス」

今現在いるのは最近発見された管理外世界。その世界の調査が今回の任務。
そして地上偵察部隊には新人の執務官候補生をリーダーにして選出した。
旗艦のクルーもまだ新人扱い。試験艦といえばそうとしか言えない。
新人教育という面から見ても出来れば教導隊が一人でも来てくれればよかったんだがな。

なのは達は別任務だしな・・・まぁ仕方がない。まだ学校もあるし。こっちに出ずっぱりになるわけにもいかないだろう。

「さて、俺も前線にでるぞ。あとは任せたセイバー」
「了解です。お気をつけて」
「定刻で戻ってこなかったら指揮を執れ。俺のことはほうっておいて構わん」
「了解しました。ご武運を」

俺の補佐としてアースラからこっちに引き抜いた。というよりも元から俺の指示でいたわけだし。
リンディさんはアースラの戦力増加が止まってしまうからって名残惜しそうだった。
そのリンディさんも今は総務統括官か。今じゃクロノが後を継いでアースラの艦長だ。

セイバーには指揮権限を渡しておく。戻らなくなったら現状を維持しつつ任務を続行しろとも。
余程のことがない限りは俺が撃墜されることもない。そういう信頼関係があるからこそだ。

艦から地上へと降り立つ。艦の下部にいた地上偵察部隊と合流。

「艦長自ら前線に来られるなんて」
「問題ない。後ろでのうのうと座ってるのは性に合わなくてな」

先行偵察報告を受け取りながら部隊と二、三会話。
この世界の内情の調査が主な任務だ。
人の有無。そして居住可能か。魔法レベル。文化レベル。それら全ての調査に当たる。

まずはこの場所の調査、は既に先行部隊が行っており、安全と認可された。

周囲は山間部のようで艦を隠すには丁度良い。
まずは集落を探す。此方の素性を隠しながら情報収集と伝達。
四方に分かれて調査を開始した。

「艦長。俺は？」
「君は俺と別行動だ。バディシステムできるよな」
「了解ッス」

先行部隊のリーダーに任命した執務官候補生。
執務官になるなら俺の後をついてたほうが勉強になるだろうという上からの声もあり、出来るだけ行動を共にすることを伝える。
バディシステムは二人一組の言い方を変化させたもの。お互いが相棒として引き合っていく。

「俺と一緒だと緊張するか？」
「いえ、大丈夫ッスよ！」
「何かあれば言ってくれ。善処はする」
「うぃ、了解ッス」

素直なのはいいんだがなぁ。あとは行動で示してもらおう。
艦内で先に不穏に思ってたポイントがある。其処に移動する。

「艦長、ここは・・・」
「この世界に来て最初に感じたポイントだ。足元に判らない部分があるのは厭だろ？」
「まぁ確かにそうッスけど」

艦から見える距離。山の隙間にある崖の下に向かう。
すると徐々に人の手が入ったような道に変わっていく。
道を進んでいくと見えてくるのは明らかに自然では出来上がらないような門。

「艦長・・・これおかしいッスよね。まだ未踏の世界じゃないッスか」
「それを調査するのが俺達の仕事だろ」

俺は足を止める事無く門へと進む。その大きさが段々目についてくる。
高さにして約１０Ｍ程。巨人の世界か何かなのか？
門の意匠はかなり精密で精巧。この門を作った存在の技術力はかなりのものだろう。

「俺はもう少し調べるから記録しておいてくれ」
「アイ、サー」

門を遠目から写真に撮ったり、周辺の地形や土壌を調べ始める。
そのデータをデバイスに保存させていく。

「よし、今度は中を調べるぞ。方々に向かったメンバーが帰ってくる前に終わらせてしまおう」
「了解ッスよ。さくっと終わらせちまいましょう」

二人してバリアジャケットに変化させてから門をくぐって内部へと入り込む。
中は真っ暗闇に支配されていて視界を奪う。

「ライトがほしいな」

まだ入り口からの光が届いている所でポツリと呟く。
こうなるなら松明かライトを持ってくるんだったな。

「俺のデバイスなら光が出るッスよ」

銃型のデバイスを取り出して銃身の先に光を灯らせる。
暗闇に光が生まれる。奥は照らされた光でもまだ見えない。
壁はレンガ調。定期的に詰まれた感じが見える。

明らかにおかしい建造物。管理局の未開の地でこれだけの技術力があるのはおかしい。
広域次元犯罪者の可能性もある。それなら可及的速やかな検挙をしなければ。
光を持つ候補生を前にして俺は後方陣取り。
暗闇の中を進んでいく。

「何かいそうな雰囲気ッスよね」
「明らかに何かいるだろ。もしくは居た、か。どっちにしろ形跡があるなら調べておかないと」

誰かが居るか居たかは調査で判明する。それなら此処を調べ上げれば少なくとも何かがわかるはずだ。
少し進んでいくと曲がり角。何度か曲がっていくと急に光が消えた。
同時に何か結界に入ったような違和感。

「艦長っ！」
「判ってる落ち着け。魔法は使えるか？」
「やってみます！」

俺も魔法を試してみる。ミッド式を試してみるが結合しない。魔方陣すら形成されない。
次にベルカ式だ。こっちもやはり無駄に終わった。

「魔法が結合しない？くそっ、いったい何が起きたんだ！？」
『落ち着いて声を静めるんだ。もし罠なら相手に場所を教えてることになる』

暗闇の中にいるのだから相手が「もし」居るのなら対応しているだろう。
それならまだ暗闇に対処していない俺達は狙いやすすぎるということだ。
ので、念話に切り替える。

最近本局で話題にあがっている魔力を無力化する力場を確認したという報告を見たことがある。
恐らくそれに近いか、そのもの。
ＡＭＦ。アンチマギリンクフィールド。だがそれは構築された魔力文字式が対応なのだろう。
その話を聞いてから考えていたことを今、試す。

「光よ！」

俺の声を発端として魔術が完成する。右手から光が放たれる。
魔術なら魔力結合を旨としないものだから恐らく通じるだろうと机上の空論をしていたが案の定通じた。

生み出した光は消滅せずに漂っている。
これで先に進める。

「すげぇ、流石艦長ッスね」

俺一人なら無茶をしてでもいけるんだが相方がいる以上は無理は出来ない。
どちらかが無茶をすればそれは相手に火の粉がかかってしまう。
更に今は研修という事もあるので余計なことも出来ない。

光を漂わせつつ俺の近くで浮遊させておく。
そしてデバイスとして正式に登録した神剣・神威を取り出す。
待機モードでは右腕、手首に填めたブレスレット状態。

周囲に警戒しながら道を進んでいく。進んでいくと少しだけ広い空間に出た。
光が空間を照らす。どうやら何かの部屋のようだ。
いくつもの机の上に書類データが散乱している。

「何かの部屋、か？」

幾つか書類を手にしては読み上げていく。何かの研究施設のようだ。
だがあれだけの巨大な入り口に綿密に積み上げられた壁やらがあったのにこの部屋の有様はなんだ。
扉すらない。

「ずいぶん辺鄙な部屋だな。これじゃ秘匿性もないだろうに・・・」
「艦長、こっちに来てくださいッス」

呼ばれた先に向かうとごっそりと書類が山のように積まれていた。

「これ全部一通り目を通してみたッスけどどうやら一括して同じ項目だったッス」

「どういうのかわかるか？」
「いや、サッパリッス」

ふむ・・・まぁ確かに専門じゃなければわからないな。
なら情報をデバイスに収めておくか。後で艦に戻ってから専門家に見てもらおう。

必要最低量だけを今は持ち運ぶ。部屋の片隅に今来た道とは違う通路を発見するとそちらにも気を向かせておく。
後でにするか今にするかは書類をまとめながら考えよう。
とりあえず経過を報告するか。

「艦と連絡取るか」

デバイスを経由して艦に連絡を取る。無線よろしく回線をつなげる。
・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・。

繋がらない。余程奥に入り込んでるのか？

「繋がらないんスか？」
「みたいだな」
「じゃぁ俺がやってみるッス」
「お前のデバイスは魔力結合できなくなってるんだろ。なら連絡も取れないはずだ」
「う・・・確かに」

俺特製の回線でも駄目となるとさっき魔力結合が出来なくなったなら使えなそうだ。

恐らくこれはさっき感じた違和感とあわせると――――――ＡＭＦの研究施設。

だとしたらこれを広範囲にしたら外の津名魅も落とされる可能性がある。

それならこのまま先に進んでいってＡＭＦの大本を潰すしかない。

まさか現地調査でこんな大それた物が見つかるなんてな。

調査任務も馬鹿には出来ない。

「・・・先に進むぞ。この先が何でアレ恐らく脅威に成り得る」

「あ、了解ッス」

俺が声を駆けると丁度作業が一段落したのか近づいてくる。

指し示すのは先へと進む通路。どうやら気付いていたらしく、どうするのか悩んでいたという。

部屋を照らしていた光を呼んで通路へと足を踏み入れる。

此処まで来た通路よりも濃い闇が広がっている。

同時に厭な雰囲気と湿気が漂っている。ぬめっと肌にまとわりついてくる。

じんわりと汗が滲む。執務官服が異様に暑く感じる。

なんとも厭な感じだ。せめて涼しくなるような魔法を考えておくべきだったかもしれない。

『あっついスねぇ・・・・』

念話でボヤいてくるが、相手にもしていられないので華麗なスルー。

幾度となく曲がり道を抜けて、階段を下る。

どうやら下に向かうようだ。落とし穴がなくてよかった。

長い、長い階段。先のほうが点になるほどに先が長い。
空を飛べば人っとびだろうが、生憎相方が陸戦魔導師。その手は使えない。
背負っていってもいいが恐らく何かあった場合対処が遅れるので却下だ。

一段ずつ階段を降りていく。だがそのサイズが異様。
徐々に階段のサイズが大きくなっていくのだ。
それこそ入り口の門の大きさに比例するような。

大きい段差が段々体に響いてくる。
つかこれだけでかい階段を使うサイズの存在ってなんなんだ。
これだけでかいのが襲ってくるとか。昔の夜天の書の暴走プログラム並だぞ、きっと。

『大丈夫か？』
『なんとか・・・・頑張るッスよ」

身体強化は魔術方面なので飛び降りてもぜんぜん平気だが、相方はそうもいかないらしい。
しかしこればっかりはどうしようもないので何も声をかけることはない。
置いていく訳にも行かないので降りては待つの繰り返し。

何時間とかかってやっと終わりが見えてきた。
恐らく方々にとんだメンバーはもう帰っているだろうか。だとしたらセイバーが指揮を執ってるだろう。
外は安心していいだろう。何せ一国の王が指揮を執るのだから。

「もうすぐこの階段地獄も終わりだ。頑張れ」

「うッス。頑張るッスよ」

あと数十段下れば下につく。光を分割させて先行させる。
どうやらまた広い空間のようだ。
とはいえ・・・ここからみるだけでも一番最後の段差はひどそうだ。
時間を掛けて一番最後の段差まで来る。
二人して下を見下ろす。既にそれが壁かと思えるくらいの段差がある。

『降りれるか？』
『無理ッス！♪』

仕方ない。身体強化してから一緒に降りる。着地は俺がなんとかする。
着地するとそこはコンクリートのように打ちっぱなしの部屋だった。
光を飛ばす。かなり飛ばしても端まで届かない。

「何がおきるかわからない。気を抜くなよ」
「わかってるッスよ。任せてくださいッス！」

暗闇の中で男二人。光を飛ばせば見えなくなるのは当然だ。
ふと振り上げられた気配が闇の中に感じた。
これは危険だ。一瞬にして脳裏を駆ける。

「ティーダ！」

俺の隣にいた執務官候補生――――――ティーダは謎の存在の一撃で吹き飛ばされる。

吹き飛ばされると壁にぶつかり、クレーターを作ってずるりと落ちた。
暗闇の中、微かな光が照らし出す。

「その鎧姿・・・・何処ぞの騎士か！」
「騎士ではない。我は毀士。全てを屠る為に世に生み出し存在」

その場に雄雄しく存在を主張する鎧騎士・・・毀士が立っていた。

第六十話　光鷹翼

ミラージュＳｉｄｅ

暗闇の中何かが襲ってきた。
風を切る音がする。途端に横に居たティーダが吹き飛んだ。
攻撃された？何に？誰が？思考回路は音速を超えていく。

振り返ると闇の中に鎧姿がうっすらと見えた。
セイバーなどとは違う、フルアーマータイプ。ギルガメッシュのに似た感じだ。
俺よりも一回り・・・いや身長的に言えば倍くらいの背丈だ。

「その鎧姿・・・何処ぞの騎士か！」
「騎士ではない。我は毀士。全てを屠る為に世に生み出し存在」

言い直した？いや、別の文字と判断するべきか。
次の行動に移らない？なんだ・・・こいつは。
神威を構える。まだ相手の獲物はぼんやりと闇に溶け込んで見えない。
どれだけのリーチ？大きさは？重さは？計り知れない情報が頭を抜けていく。

何よりも気がかりはティーダだ。思いっきり壁に打ち付けられた。
光がティーダのところにあるからその姿は認識できる。だが、今は俺の背後。
気に掛けられても視認は難しい。
こいつが・・目の前の存在がどういう存在なのか。それが問題だ。

「時空管理局だ。武器を捨てて投降しろ。そして此方の指示に従え」
「ソレは却下だ管理局。ここは貴様達を屠る為に建造されたモノ。従う義理はない」
「そうか。ソレは残念だ。なら――――――ヤるか？」
「フ・・・面白い」

勧告は終わった。これからは武力行使に移る。

「アームドデバイスか。管理局はいつからベルカ式を使うようになったのか・・・」

アームドデバイスを知っている？しかもベルカ式までだと？
こいつの知識はどこまであるというのだ・・・。

「我を倒せたならばいうかも知れぬぞ？」
「なるほど・・・なら勝たねばならないようだな」

この世界に来てからこう言うことが多すぎな気がする。運が悪いのか？
もう運命なのかね。しかしどういう動きをするかわからない相手を前に迂闊に動けない。

ティーダを庇う様な位置取りで立ち、鎧と向き合う。
のそりと動く鎧は武器を前にする。其処で理解できた。やつの武器がどんなものなのかが。
凡そ人の背丈よりも大きく長い刀身を持つ大剣。
まるで一振りで人を〇せそうな剣だ。

「時空管理局執務官ミラージュ＝ヴィジョンだ」
「ほう・・貴様があの・・・・クハハハッ！面白い、実に面白い！」

俺を知ってる？いや、最近の任務的に名が出るのは仕方無いからか。
今は深く考えない。まずはこいつを沈黙させてティーダを助けるか、
ティーダを守りつつ他の手を考えるか。
だが今は迂闊に手を出せない以上、ティーダには自力で起きて貰わ
ないといけない。

「管理局の幻影を相手にできるとはな。此処に居て当たりだったと
いうわけだ」
「俺を知ってるとはな・・・光栄だ」
「貴様はもう少し自分の影響力を気にしたほうが良い」

会話は其処で終わった。思いっきり踏み込んで疾駆してくる。
ソレを見てから身体強化の魔術を使用する。
体重を乗せた一撃が頭上から振り下ろされた。恐らくティーダを吹
き飛ばしたのと同じ。

神威を頭上で横にして防御。衝撃が体を突き抜けて地面に降り注ぐ。
衝撃は逃げることが出来ずに足元にクレーターを作り出していく。
一つ目。二つ目。三つ目。
三段階のクレーターを創り出して其処でやっと勢いが止まった。

「今のを止めるか」
「今のが全力か？」

互いの武器を見据える。あれだけの大きな武器を受けておきながら
神威は無傷だ。

「アレを受けて無傷とは・・・恐ろしい剣だな」
「神様の加護がかかってるんでな。早々傷はつかないんだよ」

「神、か・・・ならば此方も神造武器を出すしかあるまい」

なん・・・だと?こいつも神の力を有する武器を持ってるというのか?

鎧毀士の武器・・・刀身がゴトリと落ちる。

それだけで重量サイズだったのが判るほどだ。

刀身を無くした大剣は柄と鞘だけの状態に変わる。

毀士が魔力を籠めると周囲のＡＭＦが反応して集束した。

「魔力拡散力場を刀身に変えた我が武器だ。魔力を通じたものはこれで無力化できるのだ!」

魔力を無効化、ねぇ・・・・。

「なるほど。それは並の魔導師なら驚異的だろうな」

「貴様にとってもだ管理局の魔導師。我が叡智の粋を見届けろ!」

暗闇にも反映しない光が刀身を象る。

まるで光の剣だな。それが神造兵器だというなら見せてみろよ。

毀士Ｓｉｄｅ

時空管理局のミラージュ＝ヴィジョンか。よく耳にするのは幻影の如き掴み所の無い奴と。

しかしその実態は実力を誰も推し量れぬという。

そんな相手が目の前に居る。ならばこの私が推し量ってやろう。

所詮は有象無象しか相手にしてこなかった小僧だったとここで証明してくれるわ。

しかし・・・なんだ？
このＡＭＦの中で魔法を使っていられるとは。
その真偽も確かめてやろう。

幾度と打ち込むがまるで綿でも打ち込んでいるかのような感触。
奴の剣に何度打ち込もうと傷が入ることが無い。
まるで幻影・・・・そうか、成る程。こうして勘違いをしていくのだな。
ならばそれを打ち破って見せようではないか。

ティーダＳｉｄｅ

う・・・体中が痛いッス。
背中にジンジンと痛みが走ってる感じ。
それと・・・腕？あぁ・・・・俺吹っ飛ばされたんスよね。
道理で体が痛いわけだ。

――――――――――っ！？
艦長はどうしたッスか！？まさかやられた！？
徐々に俺の意識がはっきりとしてきて周りの状況が目に入ってくる。

暗闇の中で火花・・・いや、魔力光ッスか。火花のように飛び散ってるのが見えるッス。
あれって艦長とでっかい鎧が闘ってるんスか！？
ＡＭＦっていったらＡＡＡクラスの魔法防御。そんな中で魔法を使

う艦長って一体何者ッスか。
しかも俺の見た目だと圧してるじゃないッスか。

ゆっくりと身を起こすと体の痛みが伝達される。
体に走る電気信号が危険と判断したらしい。
こいつぁ・・・やべぇッス。

「ティーダ！おきたな！」

戦闘中にもかかわらずこっちまで気が向いてるスか、この艦長。

「は、はい！俺は大丈夫ッス！今加勢するッスよ！」
「いや、お前はこの先に進んでＡＭＦを発生させてる原因を突き止めて破壊してこい」

魔法防御のＡＭＦを発生させてる原因の究明と破壊。
それが新たに化せられた任務。こいつは重大な任務ッスよ！

「了解ッス！いってきます！」

よろめきながらも体を起こす。痛みは無視だ。あとで痛がればいい。
ソレよりも今やるべきことを優先しろ、ティーダ＝ランスター！

「おおおおおおおお！！！！！！」

痛む体を無視して走りだす。ランスターの弾丸は直進したら凄いって事を見せてやるッス！
走り出せば光がついてくる。艦長のところはもう真っ暗闇。大丈夫かなんて考える前に任務を遂げる。
それが俺に課せられた仕事ッスから。

ミラージュＳｉｄｅ

ティーダが走っていったので光源もティーダについていった。
だがそれでいい。生半可な視界は必要ない。

「暗闇になったな。これでお前は五感のうち視覚を失ったも当然だ」
「そう思うならかかってくるが良い」

気配は掴んでいる。風の流れも読める。なら見えるかどうかは必要ない。
何よりも――――――真正面から俺に勝てるのは恐らくそうそういない。
いても恐らく俺の周りにいるからなぁ。

神威を右手に持ち、だらりと下げる。見た目的には防御を捨てた感じに見えるだろう。
だがそれでいい。誘い隙を明らかだが見せつける。

「誘っているのか？」
「乗ってくれるなら・・・・な」

互いに構える。向こうも一撃必殺の構えだ。
風が揺らぐ。どちらが先に動いたかは判らないが俺達は動き出した。
もちろん隙を作っておいた左側に向かって斬撃が振り下ろされる。

しかしその攻撃は回避した。はずだった。
光の剣はその刀身を揺らがせて俺の体、腹を貫通させてから斬った。

ＡＭＦを基軸にしている分、魔力拡散が出来ない。
刺さった刀身は不気味に青く光っている。

腹から血が流れる。思えばこんな怪我をしたのはいつ振りだろう。
油断した。油断した。油断した。
ふつふつと怒りが沸いてくる。あいつに？いや、俺自身に。

ならやることは一つだ。この魔力が使いにくい中でやってやるさ。

「いいぜ、これもハンデだ。魔力も使わないでやってやるよ」

斬られた傷は既に回復している。吸血騎の力様様だな。

「超速再生か・・・厄介だな。全身をバラバラにしても再生するのかね？」
「あぁ。するぜ。実証済みだ」
「・・・・・・・・・・」

自信があったのだろう。そこまでの回復力もないと高をくくったのだろう。
だがしかし。俺の回復力は並じゃなかった。死を滅する方法でなければ俺は永遠延々と回復し続ける。

「さぁ、ハンデだ。魔力は使わずに闘おうじゃないか」

俺はもう一度宣言する。

ティーダＳｉｄｅ

はっ・・・はっ・・・・・
光に照らされた暗闇の中を走る。奔る。駆ける。もう艦長の姿は見えない。
どれだけ走ったか判らないが、少なくとも数ｋｍは走ったと思う。

こっちの走る速度にあわせて光が追いついてくる。まるでペットのようッスね。
奔り続けてると壁にぶち当たる。元々壁に沿って奔っていたので曲がり角の様にまた走り出す。
壁に沿って手を当て走る。すると、小さい隠し通路が足元にみえた。

「これ、先に行く道ッスかね・・・」

調べれば人一人通れる位の細い穴。そこに光を照らせば奥は階段になっていた。

「・・・行くしかないッスよね！」

意を決して中へと飛び込む。俺・・・っていうか人間サイズに作られた階段。
そこを一気に駆け下りる。途中転びそうになるけどバランスをデバイスに任せて立ち直る。

一番下までいくと上とは明らかに違う部屋。そう、部屋なのだ。
今までは石畳などの石造建造物だったのがいきなり近代的な景観へと変貌していた。
５つほどある培養ポッドみたいなのが横に綺麗に並んでいる。
まるでつい最近まで何か、誰かの手が入っていたかのような。

「まるで研究所ッス」

ぽつりと俺はつい口に出ていたッス。これがＡＭＦの発生装置？
なわけないッスよね。だって普通のポッドだし。
目的のものならきっと違う、もっとメカメカしいものだと思うんスよ。スーパー俺的直感ニズムで行くと。

というわけでポッドはデバイスに写真で記録。あとで艦長に見て貰おう。
そして！目標を探すッスよ！

魔力探知が使えれば楽なんスけどね。それが出来ない状況。
面倒ッスよね、これ。手当たり次第に・・・・いや、それは駄目ッスよね。

部屋の中を探してたらなんだか丸っぽい機械がヴンヴン唸ってるのを発見。
青っぽい光が所々の窓から漏れてるんスけど危険・・・・？

「でもなんだか魔力が濃いッスね・・ここらへんは」

ずっと魔力の結合が出来ていない。とりあえず調べようと手を差し出した瞬間、デバイスが緊急強制停止した。

「え、このっ・・・ちょ！？」

いきなりデバイスが待機状態に戻るとか何の冗談っすか！
いったい何が起きて・・・・ＡＭＦ？
魔法結合が出来ないでいてデバイスが戻るほどの・・・・という事

は。
こいつがＡＭＦ発生装置？
「いや。いやいやいや。こんなに簡単に見つかっていいんスか？！」
でも確かに目の前にあるのは装置であるといえる。
なら壊すしかない。それが任務だから。
でもどうやって壊す？デバイスが待機状態から動かない以上、魔法・・・はＡＭＦで使えない。
あれ？詰んだ？
「うあー！どうしたら良いッス、か・・・？」
ふ、と。思いついた。壊せばいいなら毀れてもいい、ということッスよ！
つまり――――――他の何かが壊れても問題ない！
「そんな考えで大丈夫か？大丈夫だ問題ない」
俺の中の天使と悪魔がささやいている！
今こそやるべき時だと！
「命を燃やせ！怒りを燃やせ！今がその時だ！」
なんだか俺の魂に刻まれた歌を口ずさみながらそこら辺にあった大きめの機械を担ぎ上げる。
同じ機械だ。耐久力は多分、同じ。
担ぎ上げた機械をそのまま重力に任せるままに――――――投げ捨てた。

ゴグンッ！

スパーク音と一緒に機械同士が激突する音が部屋に響き渡る。
一瞬だけの音はすぐに消え去るが、その惨状は消えることは無い。
煙を噴いてスパークが起きている。なんだかやばそうな感じでもる。

「・・・・・・もう後には退けない。さぁやってやるッス！」

機械の行く末を見届ける。それはもう唯の煙を上げる機械でしかない。
このＡＭＦ発生装置（仮）を壊すのに使った機械が何の機械かは俺にはわからないッスけど。
とりあえず、これで大丈夫ッスかね。

と思えば急激にずっと感じていた脱力感から開放されて魔力反応を感じられるようになる。
どうやら正解だったみたいッス！艦長、俺やりました！なので壊した機械の弁償とか御免無理ッス！
これで任務完了ッス！今戻りますよ！

ミラージュＳｉｄｅ

鎧毀士との戦闘中、一瞬だが魔力反応を感じた。
これは・・・ティーダか。どうやらＡＭＦを解除できたようだな。

「まさかＡＭＦを解除するとはな」
「いいだろう?俺の部下だ」
「すぐに貴様と同じようにしてくれる」

向こうも魔力結合ができるようになったのだろう。
今までが魔力なしでの身体能力のみでの打ち合いから一気に魔力戦へと変わる。
光の剣に魔力が集束していく。集束砲の原理を使ってるのか。

「我が魔力とＡＭＦという相反する力を集束したこの一撃。喰らうが良い！」

こいつと戦っていて判ったことがいくつかある。
鎧、そして「キシ」。どうやらミッド系の砲撃魔導師ではなく、ベルカ式に近い近接系魔導師のようだ。
鎧の方はおそらく専門のほうに見てもらわないとわからないだろう。

そして、そんな近接系魔導師だからこそ、その一撃は己の武器に載せるというのも理解できる。
目の前に集束されていく魔力は恐らくニアＳクラスはあるだろう。
俺に生半可な攻撃は通じないと悟っているはず。
それでもこの攻撃を仕掛けて来たと言う事はそれだけの威力を有するということだ。

その一撃を。全力を持って振り上げ、そして両手で一気に振り下ろす。
が、それは途中で停止した。
「停止」したのだ。空中で。何も無い空間に光の剣は止められた。

「なんだ・・・これはっ！！！！」

鎧の声が闇に溶ける。
そしてその停止した場所に光の盾のようなものが出現した。

「ふぅ・・・どうやらこのくらいはいけるようだな」
「貴様っ・・・それはなんだっ！！！」
「お前に答えるものはないっ！」

光の盾の端を握るとソレは歪な剣へと変わる。
まるで剣とは呼べないような形状。
左手に収まるソレは神々しさすらあった。

「光の翼・・・光翼真剣さ」

ＡＭＦの感覚がなくなっていた。恐らくティーダがやってくれたんだろう。
お陰で津名魅とのリンクが繋がった。光鷹翼展開もそのお陰だ。
光鷹翼一枚を物質変換。光翼真剣へと変換する。

「っ！？貴様・・・物質を変換したのか！量子レベルで！」

あ、そうか。確かにこのレベルってかなり凄いんだよな。
まぁやってしまったのは仕方無い。得意のもみ消しだ。

「これを見たお前はもう陽の目を見ることはない」
「その剣がどの程度の威力を持つかわからぬが我が鎧は生半可なものでは斬れぬ！」

やってみなきゃわからない。そうだろ？
だから俺はこの剣を真円を描くように振るだけだ。

音も無く振られる剣。それは闇を両断する。
毀士も同時に闇とともに「ずれ」る。
声は無い。その一刀で絶命した。

ずるりと身をずらしながら倒れる毀士。鎧が剥がれる。
鎧の下は老いた魔導師だった。だがいまやその身は二つに割れている。

光翼真剣を解除。霧散させる。
鎧のデータを神威にインプットさせておく。鎧の形状や意匠で何かわかるかもしれない。
無限書庫に問い合わせてみるか。実況見分は一人で充分。必要なデータはそんなになさそうだ。
奥まで行ったティーダが持ってくるデータに期待だな。

ＡＭＦを解除したティーダが戻ってきてから情報を交換。
・・・壊したというのは仕方無い。なんとかする。
その奥の培養ポッドのほうは調べる価値がありそうだな。

「さて、戻るか」
「・・・あのでかい階段、今度は登るんスよね・・・・・はぁ」

そうか。面倒だな・・・俺は飛べるからいいがティーダは陸戦だ。
飛翔系は使えない。
だとするとこの一段目すら上がれないか。

「仕方無い。ティーダ、目を瞑れ」
「は、はいっ！？」

ティーダをにらむとビクッ！と体を震わせて目を閉じた。

あんまり普通の局員にはみせたくないんだよな。
空中を掴んでスキマを開く。入り口は此処。出口は門前。直接繋げる。
スキマから漏れる外の光が闇に慣れた目にまぶしい。
ティーダの腕を掴んでスキマに放る。

「ぇ――――――ぐぇっ！？」

放った勢いでティーダが地面にキスをした。
ティーダが起きる前に俺もすぐにくぐってスキマを閉じる。

「さぁ、ティーダ。艦に戻るぞ」
「え？あれ！？もう外！？どうなってるッスか？！」

今一理解してないティーダをおいて俺は先に津名魅に戻った。

セイバーＳｉｄｅ

マスターから任命されて指示をだしてますが・・・困りました。
派遣した部隊の話ではどうやら街がいくつかあってその全ての調査は完了したというのに。

マスターと行動をともにしているティーダ候補生との連絡つかず・・・。
このままマスターの帰還を待ちますか・・・・。

と、マスター達の魔力反応をキャッチしました。
お二人を艦に収納後、この世界の調査を終了させます。

色々と問題を抱えて帰ってきたようです。とくにティーダ候補生はもう少し鍛えるべきであると進言しておきましょう・・・・。

第六十一話　聖王教会

ミラージュＳｉｄｅ

調査した世界で発見した遺跡のデータを無限書庫に送って今は解析待ち。
津名魅の中、メインブリッジで報告を待つ。
一見木造に見える内部もハイテクノロジーが使われており、浮遊ブロック一つ一つにオペレーター等が配置されている。

ティーダも今はメインブリッジにいる。端のほうで報告書と格闘中だ。
なまじ、機械を壊してる事から報告書と始末書が３：７の割合なのは仕方無いだろう。
ご愁傷様だ。これも良い経験だと誰も手伝うことは無いが。

俺はといえばセイバーに怒られている。
罪状は光鷹翼の使用について。
ついカッとなってやった。後悔した。

「まったく・・・・マスターの力は唯でさえ強すぎるのですから自重してください」
「そうッスよ。艦長の魔力とかマジありえないんスから」

聞こえてたのかティーダまでが参戦してきた。
一睨みだけですぐに始末書に取り掛かる。

「・・・マスター？」
「はい。すいません」

少しだけよそ見しただけなのに・・・・セイバーが怖い。これがカリスマか・・・・。
説教タイムなんて久しぶりだ・・・・。

「艦長、無限書庫から連絡が入ってます」
「よし、今すぐまわせ。ということだセイバー。また後でな」
「・・・わかりました。またあとでみっちりと」

なにこのフラグ。

「あぁ、やっと繋がった・・・・どうした？やけに疲れてる顔してるけど」
「いや、気にしないでくれ。それよりどうだ？」
「うん。まずはっきり言ってかなり古い時代のものだね。聖王時代と思う。
これについての確証は強くいえないけど意匠が聖王時代のものに酷似してる。
それと研究データはこっちじゃなくて技術部に回したらどうだい？」
「聖王時代か。ずいぶんと古い時代が出てきたな」
「そこら辺は詳しいのが居ると思うよ。はやてに聞いてもいいだろうし、最近はやての友達になったって言う聖王教会の人もいるしね」
「聖王教会か・・・・」

かつて存在した聖王を信仰崇拝する組織か。
本局でも発言権があるんだよな。確かそこの偉いやつの名前が――
――カリム＝グラシア。

「助かった、ユーノ。あとで依頼料振り込んでおく」

「ボクとしては友達のよしみでやったんだけどね。でも貰えるものは貰っておくよ」

正式な依頼として受理されるからこのくらいはなんともない。経費から落とされるし。

早々にユーノとの通話を終わらせて今後の行動を考える。

「聖王時代なら古代ベルカあたりに詳しい人物に聞いたほうが速いか」

「ですね。歴史家なりの専門家がいれば一番いいですが」

じゃぁ決まりだな。まずは本局で調べていなければ聖王教会行きだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

結局本局で調べても詳しい人物はそんなに居なかった。

教わったのは精々勉強に必要な程度の事で詳細までは関係なかった。

セイバーもティーダも同じだったようだ。

本局の廊下で合流して情報を持ち寄る。

しかしこれ以上の本局での調査は無理と判断。次の手に移る。

「聖王教会にいきましょう」

セイバーの意見を通し、聖王教会へのアポを取りに一旦艦へと戻ることにした。

途中知り合いとすれ違い挨拶。

お偉い人にはティーダを紹介しておいてみたりする。
そのたびに畏まってペコペコする姿とか。うん、どうでもよかった。

艦に戻ればオペレーターに聖王教会へのアポを取るように打診。
返答は暫く掛かると言うことでメインスタッフは各自休憩をとらせた。
ティーダは残ってる始末書の整理をさせつつ自室へと戻る。

部屋に戻ればクローゼットを漁る。
一応礼装と正装を準備してスキマに放り込んでおく。
あとはセイバーの礼装もだ。セイバーは良いと言ってたが

ついこの前は使ってしまったが・・・あんまりこの能力は使うものじゃないと最近常々思う。
空間を捻じ曲げつなげるこの能力は魔力を消費しない。
つまりは卑怯だ。転送魔法よりも個人転送が可能という点でも管理局としては体裁が無い。
ので、未公式な場合や止むを得ない場合位でないと使わないようにしている。

「艦長。聖王教会からのアポ取れました。三日後の現地時間１０時に、との事です」
「了解だ。そっちも休んでくれ」
「了解しました。以後、津名魅オートモードに入ります」

さて、それじゃぁ時間までゆっくりするか。

カリムＳｉｄｅ

本局の執務官から会合のアポイントメント問い合わせが来た。
なんでも聖王時代の情報がほしいと。
噂の執務官。最年少で提督になったその手腕は耳に届いてる。
今は管理外世界の未踏調査任務とも伺っている。

私は彼に対して興味があった。
最年少記録を塗り替えていく若き執務官に。

「一番速くても三日後ね・・・それでお願い」

シスターシャッハに言い告げ、執務室へとこもる。
仕事は捗る事は無いが、それでも楽しみのために頑張ることにしましょう。

―――――――――――――――――――

本局から連絡があって三日が経った。
今日は例の執務官が午前中に伺う予定。
シャッハにも失礼の無いように協会騎士として振舞うように、と言ってある。
私もいつものように礼服を着込んでギリギリまで仕事をしながら時を待つ。

約束した時間は１０時。その3分前に扉がノックされる。

「騎士カリム。本局からのお客様です」
「お通しして」

静かに扉が開かれる。見えたのは黒い執務官服を基調に礼装という格好。
あら・・意外と顔はいいのね。

「本局執務官のミラージュ＝ヴィジョンです。本日はお時間を割いて頂き有難う御座います」
「補佐のセイバーと申します。よろしく」

部屋に入るなり深々と礼をする少年。どうやらこの子が噂の執務官。
そしてその後ろに護衛のようにピッタリとついている女性・・・セイバー？それが名前なのかしら。
本局のほうのことは実はあんまり疎いのよね。

礼も早々に終わらせてソファへと座ってもらう。ミラージュ執務官はソファに座るけどセイバーさんはその後ろに立っているだけ。
席を促したら「あくまで護衛なので」とやんわり断られた。

「今回の訪問は聖王時代のことで聴きたいことがあるとお伺いしましたが」
「未踏世界の調査任務で発見した遺跡の意匠が聖王時代のものと判明しまして。一番詳しい専門家に、と思いました」

データを見せてもらえば確かにこれは一般的な聖王時代の意匠。
データに映された門構えには明らかにみてわかるものがある。

「確かにこれは聖王時代に見られる特徴がありますね。一般的な意匠かと」

「なるほど」

確認が取れればそれでもう追求は無かった。確証がほしかった？
少し考えてる風な表情が見える。

「聖王時代に巨人なり、サイズの大きな存在が居たとかはありますか？」

「巨人、ですか・・・聞いたことはないですね」

巨人とは。また大きく出ましたね。
ですがそんな存在がいたことは私も聞いたことが無い。
なぜそんなことを？と聞くと、この遺跡は奥に入るとサイズが大きくなっていったという。特に階段が。

そういうのは話にも聞いたことが無い。この場所にある歴史書にも書かれてない事。
興味がわいた。聖王教会の知らないこと・・・いや、私の知らないことが実在している事に。
本局に報告する分とは別に聖王時代の情報は此方にも回してもらうように頼んでみる。
すると快諾してくれた。

なんとも嬉しい誤算。本局の堅物ならきっと断ると思っていた。
そしてこの少年も執務官という役職にこだわるのなら断るのではないかと内心思っていたのだ。
しかし少年はこれを快諾してくれた。寧ろ本局に報告する前に此方に報告してくれるとさえ言うのだ。

見返りすら要求しない。その姿勢は大したものだ。
だから私はこう続ける。

「聖王教会は今後貴方の手助けをしたい」

と。

何よりも私が気に入ってしまったのだこの少年を。

無償で力になりたいとすら思った。

「そうですね・・・・では契約を交わしましょうか」

「契約、ですか」

契約。といってもどうするのだろうか。

「これから先、俺の願いを3つだけ適えてください。それだけでいいです。

そうすればコレから先も末永い関係を続けていきたいものです」

願いを三つ。もし大それたことなら出来る筈もない。

私は返答を少し待たせる。どうするべきか高速思考で導き出す。

「出来る範囲でよろしければ・・・此方からお願いします。ミラージュ執務官」

「心ある返答嬉しいです騎士カリム」

右手を差し出してくる少年。私はその手を確りと握り返した。

ミラージュＳｉｄｅ

騎士カリム。聖王教会に属しながら本局にも籍を置く女傑。将官で

もあるという話。
古代ベルカの希少能力（レアスキル）持ち。それくらいはわかっていた。
実際逢ってみればなんと言うことはない。一般的に綺麗な女性だといえるだろう。
話し易く、それでいて会話の動かし方をわかってる。
こうして話合うことで判ることもある。
仕事の事もそうだが人柄も。実際に見なければ判らないことのほうが多い。

「今日は実に未のある会合でした。またお会い出来ればいいですね」
「そうですね。その時には美味しいお茶をお淹れしましょう」

これで会合は終了した。知り得た事は多い。
但し、あの鎧の事は騎士カリムも知らないらしく全く判らなかった。
あの鎧が何であるか。その鎧の特徴は聖王時代のものだと言う事くらいか。
其処はまた調査に行くしか無い。これはなんとも骨の折れる仕事だ。
状況を知ってるティーダをリーダーにして調査班を出すか。
等と考えながら騎士カリムの部屋を出る。シスターシャッハに連れられ大外口まで見送られる。
騎士カリムは未だ仕事が残っているからと部屋の前で別れた。

「では貴重な時間を割いて頂きありがとうございました。騎士カリムにも宜しくお伝えください」
「判りました。伝えておきます。お気をつけてお帰り下さいませ」

シスターシャッハに礼をされて聖王教会を後にする。
すぐ後ろにセイバーが付いてくる。

「マスター。よろしかったのですか？」
「何がだ、セイバー」
「もしあの遺跡が聖王時代のものであれば聖王教会に任せるべきかと思ったのですが」
「それだと任務も碌に出来ない子供だと思われる。まだこの肉体年齢であるうちはちゃんと任務をこなしていくさ」

なるほど、とセイバーが納得する。
どうしても見た目がまだ１４才の少年だ。背は高くなったが。
どうしても年齢的に役職も後ろについてる以上きちんとやらないと俺を見る目がきつくなる。
出来れば大事にしたくは無い。

「あの遺跡だけでなく他にもあるかもしれない。それを調べてからでも遅くは無いさ」

あの遺跡一つだけで決めるには早計過ぎる。
あの毀士という存在。その奥に在ったという研究所の事。
調べるには充分だ。

教会の近くの停船所（ベイ）に津名魅がドッキングされている。
メインブリッジまで一直線。オペレーターや操舵士は既に準備済み。
どうやら外で俺とセイバーが向かってくるのを見たらしい。

「本局に戻るぞ。その後例の世界に行く」
「了解。進路時空管理局本局。後に未踏管理外世界へ」

津名魅の発進を管理室に伝達。その後停船所から切り離す。
無音のままに発進する戦艦。空高く舞い上がり静かにこの世界を後にした。

カリムＳｉｄｅ

行ってしまった。元々仕事で来た訳なのだから時間も短いのは理解していた。
だが、なんだろうか。この虚無感。
彼が去った後からずっと胸に突き刺さったままの感覚。

「彼は・・・ミラージュさんは。また来てくれるかしら」

窓の外から彼の旗艦だという戦艦「津名魅」を見上げ、見送る。
彼は聖王時代の遺跡を調査するという事で此処に来ただけ。
仕事で来ただけなのに私はどうしてこんなにも胸が張り裂けそうになっているのか。

もっと話せばよかった。持ち得た知識を全て洗い浚い述べれば良かった。
なんでそうしなかったのかという後悔の念が募る。
そこでシスターシャッハが執務室へ入ってきた。

「ミラージュ執務官を見送りしして参りました」
「ご苦労様、シスターシャッハ。彼は無事旅立ったようですね」

窓の外、無音で消え去る戦艦を見続けながら私は呟く。

「また・・・あえるかしら」

第六十二話　ティーダ＝ランスター（前書き）

ティーダに関して謝罪があります。
かなり間違えて進ませてました。

陸士と思ってたのが空士。しかも一等空尉。

ですがこの小説内ではこのまま突っ切ります。
でないと前半の訂正がかなり大きくなり、話がずれてしまう可能性が出てきてしまうかもしれないのです。

この小説でのティーダはこうなんだ、とご理解ください。

第六十二話　ティーダ＝ランスター

ティーダＳｉｄｅ

俺たちはまた管理外世界の調査でこの前に来た世界へとやってきた。
目的は一つ。この前の遺跡ッス。
聖王教会で聞いたのはこの遺跡が聖王時代のものであるという確定情報。
今回はそれを更に確定させるための踏破調査という事みたいッスね。

今度はちゃんとした装備を持っていく。
捜索隊を組み上げて艦長を主軸に遺跡の中へともぐっていくッス。
もちろん俺も参加してるッスよ。

マッパーが探知魔法で遺跡の中をマッピングしていく。
３Ｄで見れるのは嬉しいッスね。
前に来た時は暗闇の中のライトだけということだったので曲がり角は実は別れ道だった事に気付く。
別れ道に来ると何人かが先に進む事になり、その場で待機。
お互いのサーチングが使える以上は見失う事はないッスけど、何かしらの状況に出くわしたらって事ですぐに動けるように。

で、今はその待機中だったりするッス。

「ぶっちゃけ退屈ッスよね。待機って」
「ぶっちゃけすぎだティーダ」
「いやでもですねセイバーさん」

愚痴でも言わなきゃやってられないッスよ。

壁に寄り掛かってしゃがんでると艦長がやってきた。

「別れ道待機中か。ご苦労様」

艦長が来ても敬礼はしない。必要以上の敬礼はしないのがこの艦のポリシーらしいッス。
現状報告をしながら待機。

「艦長、この遺跡なんスけど調査が終わったらどうするんスか？」
「まずは安全の有無を確認してからだ。残してて安全なら残すが危険と判断すれば潰す」

まぁ妥当っちゃ妥当ッスけどね、その考え。
でもあんなでかい階段とかあったら調査でも大変なんスよ。

「帰ってきたか」

艦長の声で別れ道の先に行っていた調査隊が戻ってきた。

「駄目ですね。こっちは行き止まりです。特に何もありませんでした」
「そうか。ならこっちに行こう。疲れがあるなら休憩するか？」
「いえ大丈夫です。いきましょう」

選抜調査隊を労いながら先に進む。今度は艦長が先頭。
ライティング班が周囲を照らしてる。
壁にはこの前には気付かなかったけど何か幾何学模様が施されている。
一つ一つ見逃さずに全部模様を撮っていく。

別れ道に来ればまた選抜して調査隊を出しては待機の繰り返し。
セイバーさんや艦長の場合、誰かが居たほうが危険になる事があるので一人行動が主軸ッス。

で、今は別れ道二つを同時に艦長とセイバーさんが二手に別れて調査中。俺らは待機中。
・・・今、あの時の鎧が襲ってきたら危険じゃないッスか？

なんて杞憂も無駄に終わり、まずはセイバーさんが戻ってきた。

「二手に別れてる道がありました。後で要調査ですね」

セイバーさんが戻ってきてから指示を出していく。
自分の見つけてきた分岐点のほうを調べるのだと。

「艦長の方はいいんですか？」
「あの人のほうは一人で充分すぎるでしょう」

艦長は艦長で一人で何とかするでしょう。ってことで皆でセイバーさんの調査した道を行く。
一人も残って無くても大丈夫なのかと聞いたら既に念話で話していたらしいッス。

艦長も艦長で。一人の方が動きやすいからって皆をセイバーさんの方に預けるって事で。
今の指揮権はセイバーさん。その補佐で俺。曲がり角と別れ道を何度も捜索し続ける。

「まさかこんなに別れ道があるとは思いませんでした。ティーダ、この先は？」

「石の部屋があると思います。そこに色々な研究データが転がってたッス」

今居る道をまっすぐ行くと全てが石で出来た部屋に出る。
少しばかり広い部屋。調査班全員が広がっても充分な位。
そこにはまだ書類データが積み上げられては杜撰に置いてある。

「まずはこの部屋の調査ですね」

セイバーさんの号令の下、調査班は一斉にこの部屋を調べだす。
もちろん俺もッスよ。
部屋の調査の途中、俺はセイバーさんにこの先へと続く隠し通路を申告しておく。

先に進むかどうか話し合ってると先に進もう、という意見が多くなったので進むことに。
勿論その先の大きな階段を下る事になるッス。

空戦資格持ちは陸戦を抱えて降下。すぐさま最下階へとたどり着いた。

「俺、最初に来た時あんなにガンバったッスよ・・・・・」

到着した途端に―――「――●ポーズに陥ったのは言うまでもなく。
調査班もセイバーさんも俺のこと放置して仕事に専念してるし。
ユメもキボーもない！

「ほら、さっさと先に進みますよ」

セイバーさんが実に夢も希望も無い。もう少し打ちひしがれさせて

くれてもいいじゃないッスか。
この部屋・・・俺が吹っ飛ばされた場所ッス。
着地した場所のすぐ近くに壁が減り込んでるんスけどそこを丹念に調査するのはやめて下さいッス。
何この公開処刑。まぁ俺って言わないッスけどね。

つーか、よく見ると戦闘の痕跡が凄いッスね。
地面に刀傷が凄まじいんスけど。これでＡＭＦ下での戦闘だって言うんだから信じられない！

戦闘痕跡とか調べつつ部屋の中を・・・・・・つかこれ、通路ッスね。
そういややけに走ったもんスけど・・・随分と先に向こうの壁があるのが見えた。
ただしずっと先の方に。セイバーさんはもっと見えるとか言ってるし。
・・・知り合いはもっと見えるとか。数ｋｍ先のボルトの数まで数えられるとかどんだけッスか！

「特に此処は見た目以上のものはなさそうですね」
「んじゃ、次に行くッスか」
「そうですね。ティーダ、案内をお願いします」

調査班を引き連れて向こうの壁まで移動する事に。
今回の調査で一番の問題はＡＭＦ発生装置があった研究施設っぽい所。

空戦の方々にお願いして早々に距離をつめていく。
あの時数十分かかったのが数分で到着した。空戦すげぇ。
実際計測したら２ｋｍほど直線の通路だったことが判明。幅的には

５０ｍくらい。

反対側の壁・・・っていっても階段ッスけどもう遠くに見える。
こっちはこっちで小さい入り口があるので其処に一人ずつ中に入っていく。
先頭セイバーさんで次が俺。

「ティーダ、この先に研究施設が？」
「はい。確かにあったッスよ」

少し潜っていくと広い場所に出る。研究施設だ。
明らかに今までとは違う異質な空間。石オンリーだった場所からメカメカしい場所に出たから。

「なんと・・・・此処は」

セイバーさんが驚嘆する。次々と到着する調査班に指示を出して周囲の機械を調べさせていく。
全員に指示を出した後、俺はセイバーさんを連れて例の機会の前まで行く。

「これがＡＭＦの発生装置ですか。壊れてますね」
「はい、止め方わからなかったんで壊しちゃいました」
「時間が掛かるよりはいい手でしょう。もう一つの機械が何なのかまでわかれば満点でしたが」

うぐっ！？ソレを言われると辛いッス。
確かにどんな機械か確認しないでやっちゃったのは俺ッスけどね。

「まぁいいでしょう。今はこの機械の解明が先です。大変なような

ら本局に運ばなければ」
「了解ッス！」

調査班でのメカニック担当が機械を調査開始する。
こうなると俺やセイバーさんは手が出せない。
特にこの部屋は機械類がメインなので手を出すことが少ないというか、無い。

手持ち無沙汰で作業を見つめるセイバーさんと俺。

「ティーダ、私はマスターを迎えに行ってきます」
「了解ッス」

暇だから・・・逃げたッスね。まぁいいんスけど。
だからといって俺にも何かやることがあるかといえば無い。

セイバーさんが離れた後、調査班が更に道を発見する。
他に指示を出せるのがいない以上、俺に指揮権がある感じに。雰囲気的に。

「とりあえず、俺が行くか」

他に戦闘要員はいないわけで。艦長やセイバーさんが居ない以上、この場の安全がなくなるわけだけど。
念話で話してみるかな。

『セイバーさん』
『ティーダですか。どうしました？』
『新しい道を発見したんスけど行ってもいいッスか？』

出来るなら調査班の護衛をしてもらえればなーなんて淡い希望を籠めてみた。
そっちは私が行くとか言って戻ってきたッス。うん、やっぱこーなるッスよね。

「ではいってきます」

冷静に向かっていったッスよー?!俺このまま護衛で終わるんスね。
そうなんスね?
先に続く道へと進むセイバーさんを見送って俺は護衛を続ける事に。

ミラージュＳｉｄｅ

調査班と別れた俺は一人で道を進んでいる。前回のようにＡＭＦで衰えさせられた状態じゃないから気分がいい。
右手には神威を持ち歩み続ける。
光は全開。かなり先まで照らされている。

「向こうはセイバーがいるからな。こっちはこっちで突っ切るか」

幾つかの曲がり角と別れ道を虱潰しに神威に覚えさせていく。
あとでマッパーにマッピングさせる為に。

しかしこの遺跡は下に伸びていると思ったら斜め下に伸びてる感じだ。
時折神威にマップを出してもらいながら進んでいく。しかし一人なので何をするにも虚しくなる。
だがだからといって誰か居ればきっと大変だ。

同じくらいに動けるやつが居れば話は別なんだろうけどな。

通路を進むと竪穴が足元に見える。
下は見えない。深そうだ。まぁ他の道は潰したわけだし降りるしかないな。
ステップ一つしてから空に浮かび光を伴い直滑降。スカイダイビングの要領で下に降って行く。

下っていると途中に蟲の巣やらが見えた。かなりの年代ものだし居るのも当然か。
やがて地面が見えてきて着地。光も同時に。
光が周囲を照らせば其処は異臭の漂う牢獄だった。

「酷いな」

出来る限り呼吸をしないようにする。魔力を身の回りに纏わせて臭気をカット。
地面を照らせば色々な骨が転がっていた。
壁は鉄の牢がいくつも部屋になっている。
どうやらここは実験体の保存場所だったようだ。
神威に写真で保存していく。
ここの調査をしてから向こうに戻ろう。

セイバーＳｉｄｅ

先に進む道をティーダが見つけたので一人で進むことにしました。
調査班の護衛はティーダに任せておいて大丈夫でしょう。
指揮権も渡しておきましたし。実は。

マスターも後で合流するといってましたし大丈夫でしょう。
ということで突き進みます。なんだかマスターも同じような行動をしているような気もしますが。
突き進めばそこは完全に回廊状態。狭い通路が延々と続く。
そしてその先には――――

「いい加減姿を出したらどうですか？」
「ほう。我が存在に気付くとは中々な魔導師よ」
「魔導師？否、我は騎士。剣を扱うに秀でし雄。セイバー」
「貴様もキシか。我も名乗ろう、毀士であると」

本局の制服から一転、青い鎧姿へと変わる。目の前には黒い毀士と名乗る者。
声からして男。明らかに私よりもふた周りほど大きい体躯。
ですがバーサーカーよりは大きくない。となれば対処も出来る。
エクスカリバーを取り出して構える。

「マスターとティーダが出会ったという毀士ですか・・・それにしては報告にあった姿とは違いますね」
「ほう。どうやらもう一人とであったようだな。だがやつは所詮能力に溺れた愚か者よ」
「くだらない話なら一蹴に伏します。今此処で斬り伏せましょう」

魔力を体中に帯びさせて一気に踏み込んで斬り付ける。
私のスキル「魔力放出」でもって魔力を剣にも帯びさせての斬撃。
どこまでダメージが通るか判りませんがとにかく一撃目は全力全開です。

「っ！！！」

鎧・・・毀士もその切れ味に驚いたのか見えぬ顔の奥に光る目が見開いた感覚を感じる。
一気に振り下ろせば直撃さえ行かなかったものの毀士の鎧の肩を半分切り取るに至りました。
本当なら一撃で沈めたかったのですが。

切れた肩を抑えながら後ずさる毀士。最初の威勢はどこに言ったのでしょう。
というか、この毀士はまだ武器をもてなかったではありませんか。

「フフ・・・すばらしいな。この魔力の猛りはそう出会えぬ」
「ならば早々と退くがいい。この遺跡の詳細を言ってから」

剣を向け私は吼える。闘わぬのなら早々と情報を伝えて下がれと。
だが毀士は下がることは無かった。私の目の前で毀士は魔方陣を創り出したのだ。
そう――――三角形の魔方陣。ベルカ式の魔方陣を。

ティーダＳｉｄｅ

セイバーさんを見送ってから数分。
今は調査班の護衛でいる。手にはデバイスの銃を持って。

「ティーダ一尉、この部屋の調査は終わりました」
「おし、じゃぁ皆は帰還するように。俺は艦長とセイバーさんを此処で待つッスから」
「了解。ご武運を」

敬礼をして調査班が下がっていく。
俺は部屋に残って一人で待機。

今、艦長は居ない。セイバーさんも奥に行ったっきりだ。
今、ここは誰も居ない。

だったら俺は何も隠す必要が無いんだ。
右手のデバイスが熱い。いや、俺の手が熱いんだ。

「艦長はきっと平気だろう。まず今から行くにしても遠いしな。ならセイバーさんの後を追おう」

俺はセイバーさんの向かった通路をへと入り込み駆け出した。
長い通路を走る走る走る。まるで細長い回廊のようだ。

やがてその先に激しい激突音を鳴らしているのが耳に届いてきた。
セイバーさんと・・・鎧が打ち合っている音だ。
少し進めばシルエットがはっきりと色を持ち出す。

「セイバーさん！」

俺は思わずセイバーさんを呼んでいた。
やばい。これで気が散ってしまったら。
そう思って一瞬終わった、と頭によぎってしまった。
だがセイバーさんは動じることなく見えない剣を一振りして鎧を遠ざけた。

「ティーダ。調査班の護衛はどうしたのです」
「調査は終了しました。調査班は皆帰還させました。あとはセイバ

ーさんと艦長だけです」

危険を察知して遠めから報告。
鎧はすぐに声――――俺を察知した。

「増援・・・新手か。しかし一人増えた所で何も変わらん」
「そうでしょうか？たった一人でも幾千もの強者を屠る者も居ると言う事を貴公はまだ知らぬようだ」

セイバーさん達から見て後衛的なポジション。
右手の銃を構える。左手は添えるだけ。

「援護するッス！」

一対一の決闘は今此処に必要ない。特に相手が良く判らないような相手なら尚更。
この相手は凶悪犯かもしれないなら――――今此処で止めるしかないんだ。

魔力弾を一度に三撃放つ。狙いは鎧に守られていない目、右肩、そして左手。
精密射撃の腕はこれでも管理局ではトップクラス。伊達にエリートじゃない！
綺麗に狙い通りに魔力弾は直撃する。噴煙を噴きながら魔力弾は消滅した。

「っぐ！？貴様っ・・・猪口才なっ！！」
「はあああ！！！！」

俺の射撃の隙を突いてセイバーさんが突撃。一気に鎧に斬り付けた。

鎧の上半身が二つに割れるも肉体はまだ健在。とはいえかなりの傷を負ってはいるが。

「セイバーさん！」

「あわせます！打ち込みなさい！」

セイバーさんの号令で俺は魔力弾をかき集める。

艦長から習ったのは魔力の集束。そして精密さ。

銃身の先に魔力が集まっていく。超精密を求められる連弾よりもこいつは撃ち放つだけ。だけど気は抜けない。

俺の胴よりも太く大きい魔力の塊が出来上がる。

「いくぞ、鎧の毀士！」

俺はそいつを全力で打ち出した。

セイバーＳｉｄｅ

毀士、と名乗りましたか。

ならば私もまた騎士なれば。この猛る魔力にてお相手しましょう。

魔力を剣に伝えればそれだけで空気が震える。魔力伝達が凄いですね此処は。

閉塞的な場所だからでしょうか。

「いきますよ」

「フッ、その華奢な体躯を踏み折らせよう」

いいでしょう。ならば全力でお相手するのみだ。
毀士の武器は無手でしょうか。そう言えば数えるほどしか無手相手と闘った覚えがない。
ただ、マスターとは別ですが。

「はあああ！！！！」

斬り付ければ掌の魔力で防御するという。
何と言う事だ、まさかそんな方法で私の剣を止めるとは。
左手で防御。右手にも魔力がためられている。ということは――――

「フハハハハ！いくぞいくぞいくぞっ！！」

右手に溜めてた魔力を私の胴目掛けて放出する。
しかしそれは読んでいた。身を回転させて回避する。

「なるほど。そういう戦闘スタイルですか」
「無手と思って侮ったか女。我が魔闘術はこれで終わりではないぞ」

両手を合わせると魔力が刀身の形状を創り出した。

「これぞ魔力具現化！放射するしか脳のないミッド式よりもハイブリッド！」

声高々に。そして雄雄しく己の武器を振り上げる。
あの刀身、魔力で出来ているというならその形状も千差万別でしょう。
油断すれば此方の身も危なくなりそうです。

「みよ、このＡＡＡクラスの魔力にて編みこまれた刀身！すばらしいだろう！恐怖するがいい！」
「・・・・ＡＡＡクラス、だと？」

今、この毀士は何と言ったか。ＡＡＡクラス？
ならば。私の敵ではない。

身に纏う魔力を対魔力に回す。振り分け的には攻撃：6 防御：4。
さぁはじめましょうか。
毀士の放出系魔法も刀身に変化した魔法も私の一振りではじき返す。
それでも隙を狙っての攻撃に私の対魔力スキルが発動して貫通さえ困難に。

何度も打ち合っていると後ろから近づいてくる気配。これはティーダですか。

「セイバーさん！」

私を呼ぶ声が回廊に響く。

「増援・・・新手か。しかし一人増えた所で何も変わらん」
「そうでしょうか？たった一人でも幾千もの強者を屠る者も居ると言う事を貴公はまだ知らぬようだ」

毀士もティーダに気付きましたか。
ですがティーダを甘く見てると痛い目を見る事になるでしょう。

「援護するッス！」

ティーダの射撃が三つ光条になって毀士へと向かっていく。
目、右肩、左手と精密機械のように狙うとは。流石の腕ですね。

よろめいたところに私は隙を見つけ出す。
一気に唐竹で切りつければ鎧が切れる。
鎧の強度も魔力に順ずるならばこのくらいの強度でしょう。

ガランッ、と音を立てて上半身の部分が落ちる。
斬り付けた体も傷を残して赤い一線を残していた。

「セイバーさん！」
「あわせます！打ち込みなさい！」

ここでティーダが更に追い討ちを掛けようとする気配を感じる。
ならば私はソレに合わせて一撃を打ち込む。魔力の対比を一気に全部攻撃に回す。
マスターが教え込んだ集束魔法を撃ち出す。

巨大な魔弾が形成されていく。私はタイミングを見計らいながら時を待つ。
毀士が向かってくるなら其れを迎撃する態勢にも変えていく。

「いくぞ、鎧の毀士！」

ティーダが魔弾を撃つ。
この狭い回廊では回避も出来ないくらいに巨大な魔弾。

あれ？二人の間に居る私にも直撃しますよね。これ。
回避、というよりも対魔力で防御。するりと抜けていく。
そのまま魔弾は毀士へと向かい真正面から直撃した。

鈍い衝撃が走り抜けていく。

「ぎ、ぐごおおおおおおおおおお！？」

真正面から魔弾を受けた毀士はそれを両手の魔力で押さえつけようと躍起だ。

だがそれを私は見逃さない。今なら無防備で攻撃できる。

「まだだっ！この先にはっ・・・・この先にはいかせんぞ！！」

卑怯とか。そういうのは今はない。闘いの中に誇りを求めるのは決闘者（デュエリスト）だけでいい。

少なくともＡＭＦを所持していたという議案のある者に対して等。

魔弾をかいくぐり、足元から一気に切り上げる。毀士の正中線を薙ぐ。

体ごと真っ二つになった毀士は抵抗もなく魔弾に飲み込まれる。

魔弾の中で爆発しながら霧散していく毀士の体と鎧。

魔弾が消えた時にはその姿は一片も残っては居なかった。

「ふぅ・・・・」

一息ついてから剣を納める。鎧姿から本局制服へと戻す。

「ティーダ、助かりました」

「いえいえ、俺も一杯一杯ッスから」

「以前マスターとティーダで相手をしたという鎧・・毀士と関連性がありそうですね」

「えぇ。同じ毀士と名乗る以上はあるでしょうね。其処も調べる対象でしょう」

調査班も帰ったということですし。この後はどうしましょうか。マスターに念話で指示を貰ってみますか。
と・・・ティーダがやってきた通路の奥から何か音がしますね・・・
何かを引きずってるような。

ティーダＳｉｄｅ

毀士を倒してから一息ついた俺とセイバーさん。
此れからのことを話し合っているとなんだか通路の奥・・・俺の来た方から何か音が。
大きなものを引きずってるようなそんな音。

「セイバーさんっ・・・」
「大丈夫ですよ」

セイバーさんは何も警戒もなかった。光を向ければ其処には――――

「なんだ。眩しいな。ティーダ光を降ろせ」
「艦長！無事だったんスね」
「その言い方は俺が危なかったんじゃないかというわけだな」
「いえそんな！？」

光を遮るように顔を隠した艦長が近づいてくる。だからセイバーさんは警戒してなかったのか。
そういえば艦長がなにか大きなものを左手に持って引きずってるッス。

「艦長、それは？」
「ん？あぁ、襲ってきた毀士だ。生け捕りにした」
よく見たら鎧を着た毀士だった。意識は刈り取ってあるようで身動きしない。
詳細を聞く為に連れてきたら調査班が見当たらないというので此処まで来た、と。
調査班はメインのＡＭＦ周辺の探査が終わったので帰還させたことを伝える。
「よし、ならこいつが起きるまで三人で奥まで探査だな」
艦長の提案を受けて俺達は更に奥へと進む。
俺達が戦った毀士が漏らしたのを聞き取っていればこの先にはまだ何かがあるらしい。
この遺跡の奥に何があるのか。俺はまだ何も知らないでいた。

第六十三話　黄金劇場

セイバーＳｉｄｅ

遺跡の最奥へと向かう道中です。メンバーはマスターとティーダの三人。
捕縛した毀士は情報だけ抜き取って津名魅へと送還しました。

「で。この奥に祭壇？があるのか」
「みたいッスね」

マスターとティーダが先導きって進んでいるのを私は後ろでついていく。
長い回廊が延々と続く。
得た情報ではこの奥に祭壇があるという。
研究スペースの奥に祭壇、か。まるでキャスターの神殿のようだ。

水の音がする。水の流れるせせらぎが聞こえてきた。
壁の幾何学模様も徐々になくなっていく。

「この先、なにかあります」
「セイバー、頼めるか」
「了解しました」

マスターに言われこの先の状況を調べにいく。
魔力を開放。私は制服から鎧姿へとチェンジしていく。
先にあるのは我々が持ってきた光源とは違う光。

祭壇に出る。かなりの広さを持った空間。円を描くようにいくつも

の水路が中央の祭壇を囲んでいる。
渡れるような橋はない。祭壇の上には棺が一つ。
唯の遺跡というわけではなさそうだな。

周囲を見渡す。罠がないかの確認。
周囲は一言で言うなら豪奢。まるで貴族の神殿や城ではと見間違える程の絢爛。
まるでその中央の棺を守るように出来ているように見える円を描く水路も一番内側は幅がある。

それ以外は特に何もなさそうだ。回廊に向き直り、マスターとティーダを呼ぶ。

「これは・・・中々見れない程の細工だな」
「すっげぇ・・・マジスッゲェ・・・」

空間の説明を簡単に済ませて私は周囲の探索にでる。
マスターもティーダも同様に動き出す。

壁が光を放っている。魔力検知をすれば壁自体が魔力を持って光ってるようだ。
こういう使い方もあるのだな。

ティーダＳｉｄｅ

セイバーさんが先に向こうの調査。安全を確認したのか艦長と俺を呼ぶッスよ。
回廊を抜ければ其処は水路のある祭壇だったッス。

しかも壁やら天井はまるで本当に昔の造りのまま残ってる感じッスね。
なんスかこの遺跡。石場だったり機械じみてたり祭壇だったり。

「これは・・・中々見れない程の細工だな」
「すっげぇ・・・マジスッゲェ・・・」

艦長も驚嘆の声を上げてるあたりやっぱり凄いものなんだと実感。
セイバーさんに簡単な説明を受けてから辺りの探索を開始。
・・・先に艦長が動いてるけどそれはまぁ。

跳躍で水路を飛び越えていく。床は石畳。
しっかりしたつくりで少しくらいの衝撃ではびくともしない。
きっとこの遺跡を作った人は確りしてたんだろう。

「あの祭壇・・・棺？なんのためのものなんだろう・・・」

見れば艦長が既に棺の周辺を調べてる。
一番怪しいと思ったのだろう。

一応、何かあればすぐに動けるようにはしておく。
出来ればそういうのがなければいいんだけど。

ミラージュＳｉｄｅ

祭壇の中の棺の周りを調べる。他の場所はティーダとセイバーに任せておいても問題はないだろう。
何よりも凄く気になるのだ。コレ(棺)が。長方形の棺が。

棺を調べて判った事がある。
まず、蓋がない。無理矢理はがされた感じの傷がある。
棺の所々に其れを結びつかせる破損が見れる。
内部は布が敷かれていてまるで高貴な者を封じていたようだ。
棺を固定する為なのか判らないが鎖が周囲に散らばってる。
封をしてた鍵すら風化したようにボロボロだ。

「何かが入っていた・・・？」

そう考えるのが妥当。先入観に捕らわれなければ何か中のものが出てきた、とう解釈が出来る。
封印していた魔力も微かに残ってる。
それがミッド式なのかベルカ式なのかはもう判らないが。

「こりゃまた調査班に来てもらうか」

棺から離れようとしたとき、何か違和感を感じた。
魔力が、少しだけ動いた感じがした。棺の裏から。

「・・・・？」

あっちには何もなかったはずだ。
棺の周りは何もない。今調べた。
だが魔力が検知された。神威が反応したのだ。

「セイバー。ティーダ。一応其処で第一種戦闘待機」
「「了解」」

二人に戦闘待機を命じてもう一度調べなおす。
丹念に調べているとティーダが声を上げたのが聞こえた。

「っ・・・艦長！セイバーさんっ！！」

ふと顔を上げると円の水路の水が踊りだしていた。
気付けば祭壇の中の残存魔力が狂ったように蠢いている。

「セイバー！」

セイバーに場所の特定をさせる。
直感スキルでならその場所を特定できるかもしれないと読んだ。
魔力を探るセイバー。

「ティーダ。何があっても退がるなよ」
「了解！」

水路で隔てられた通路に立つティーダが銃を構える。
あいつはパニックにならなければ大丈夫だろう。
鬼が出るか蛇が出るか。

神威を呼び出す。俺も戦闘待機のままで場の流れを見続ける。
魔力が濃く溜まっていく。水も踊り続けてる。
何かが起きる。それはもう確定の事象だ。

溜まった魔力が徐々に固定されていき、ソレは現れた。
今まで闘ってきた毀士に酷似したシルエットと風体。
古代ベルカにはきっといたのではと錯覚してしまうほどの威圧感と存在感。
ただ、今回はサイズが巨大すぎる。
バーサーカーよりも二回り以上大きい。

「で、でかっ！」

思わずティーダが叫ぶ。だが叫ぶのも無理はない。
祭壇の奥へと静かにその身を降ろす。

「いったい何者だ・・・」

こんなのは原作知識にはない。いや、もうソレは払拭しないといけないな。
戦闘態勢。俺とセイバーが前衛に。ティーダを後衛に持っていく。

「時空管理局だ。まずは話し合おうか」

無駄と頭では分かっていても聞いてみる。
明らかに魔力反応が戦闘型だ。仕掛けてくるかもしれない。
なのでまずはこちらが何なのか知らせる義務がある。

呼びかけには反応がない。
だが、此方から攻撃は出来ない。
したらそれは白い悪魔と同じになってしまう。それだけは避けたい。
・・・・・身震いがした。何故だ。
・・・ともあれ。あれが何なのかも調査対象にいれておこう。

「　　時空管理局、だと　　」

静かな声が祭壇に響き渡る。まるでバリトンボイスのような渋い声。

「我は毀士王。全てを毀そう。全てを屠ろう」
「つまり、相容れないって事だな」
「相違ない」

なるほど。ならもう手は一つだ。念話で話す以前に既に雰囲気が語っている。
「総攻撃」と。

頭によぎった瞬間、ティーダがすでに連弾を撃ち込んでいた。
周囲にスフィアを形成させて銃身だけでなく、スフィアからも連弾を打ち込む。

セイバーもティーダの連弾を掻い潜って懐へと潜り込んだ。
魔力を帯びたエクスカリバーならいけそうだな。
連弾の雨の中でもセイバーは怯まずに剣戟を打ち込んでいる。
まるで意に介してないみたいだ。

「セイバー。俺の魔力もって行けよ！」
「もう貰ってます、よっ！」

がっつりと俺の魔力を持っていくセイバー。
おいおい・・・そこまでの相手ってのかよ。

ティーダには援護射撃を続けてもらいながら周囲に魔力を散布しておく。
俺の魔力と、あいつの魔力。

「毀士王、ね。セイバー。本当の騎士王の力、見せてやれ！」
「同じ名を持つ者が相手な以上、抜かりはありません。全力でお相手します！」

セイバーはこれでよし。あとは・・・。

「ティーダ、危なくなったら退避。それまでは自己判断で動け」
「了解ッス」」

丁度真ん中の位置に陣取りながら指揮を出す。
まだ手を出すことはない。状況を掴み、そして隙を見て最大級の攻撃で一気に下す。
ティーダの連弾も止まらない。連続で散弾のように打ち出してるのにその精密な狙いはズレることはない。

こっちの攻撃を無視するように毀士王は徐々に実体化を進めていく。
魔法無力化、だと・・・セイバーの攻撃すら無力化させるとはなんて威力だ。

「セイバー！全力！」
「わかっています！ですが何か・・・おかしい感じが！」

攻めあぐねているのは見て判る。明らかにセイバーの斬撃が通じていない。
ティーダの連弾も涼しい顔だ。

「こいつもっ・・・チートの仲間かよ」

左手に魔法を集束させて手を翳す。

「実戦でコレを使うようになるとはな・・・予想ではいけるはず、だが」

黒く歪んだ物質が手に出来上がっていく。
周囲の意匠や水が物質に吸い込まれていくようなほどに重い力。
擬似ブラックホールはすぐに完成した。静かにそれを毀士王に向か

って放つ。
ゆっくりとした速度。だが明らかに進んでいるソレはまっすぐ周囲の空気すら吸い込んで進んでいく。

「セイバー！回避！」
「！」

毀士王の近くにいるセイバーが巻き添えを喰らわない様に声を掛ける。
セイバーもすぐに気付いてブラックホールを見ればすぐに退いた。
増そう兎、胸元に直撃。だが毀士王は動くこともなく、ブラックホールを体の中に飲み込んだ。

「なん・・・だと？」

その光景に俺達は驚愕すら覚えた。
ブラックホールすら無力化、だと？自然を飲み込むとはなんてやつだ・・・。
何かやつに有効なものはないのか？向こうが攻撃に移る前になんとかしないと。

セイバーＳｉｄｅ

まさかマスターの攻撃すら無力化するとは思いもよりませんでした。
しかもあの超重力であるブラックホールを擬似的にでも創り出したというのに。
よく見れば私達の攻撃エネルギーを吸収してる感じもあります・・・。

「マスター。可能性の話ですが」

祭壇の台の上にいるマスターへと話しかける。

毀士王はまだ動いてこない。

「毀士王は私達の攻撃エネルギーを吸収してる節があります」

ソレは私が直接この手で攻撃していたからこそわかった事。

魔力を帯びさせたエクスカリバーで斬り付けても無力化・・・いや、

その魔力を吸い取っていた。

しかも気付かない位にこっそりと微量だけを。

それが数をこなせば塵も積もればである。

「それが真実なら攻撃するだけあいつに力を蓄えさせてるようなものじゃないか」

そう、それなら。攻撃するだけ無駄になる。

マスターはティーダに攻撃をやめるように支持を出しています。

ティーダもすぐに理解して連弾を停止させましたか。

この後、どう攻めるかの思案に入る。

だが、もう一つの可能性も私の中にはあった。

「やつがどの位まで攻撃エネルギーを吸収できるかわかりませんがそれ以上のエネルギーを食わせてやればパンクすると思います」

「このまま手をとめているよりはましか・・・」

マスターが決断する。オール総攻撃を以ってやつを駆逐すると。

「ふはははは。愚かしい魔導師どもよ。己の身の程を知れ」

「どうかな。此処にはお前の思ってるような魔導師は一人も居ない！」

本気で打ち込む。つまりそれは宝具の使用を指す。
マスターからは使用許可が出た。つまりはそれだけの相手だということ。
魔力を増大させる。エクスカリバーを振り上げて構える。

ミラージュＳｉｄｅ

どうやらセイバーの案でいくしかないようだ。
全力での攻撃で奴の吸収能力の上をいってダメージを負わせる。
俺個人での攻撃方法で宝具級の攻撃ってのは実はない。
魔力を籠めて思いっきり振り回す程度しか今までやってこなかったのが今になって裏目に出た。

神威も今はデバイスとして扱われているがそれこそ神造の武器。
魔法に取って代わるような能力はない。いったん待機モードへと戻す。
なら・・・これしかない。俺の持つ力で最強の力を持つモノ。

俺は背後から、円錐状の剣を取り出す。金の柄、紅の三つの円錐。
凡そそれを剣と呼ぶには無骨すぎた。

「力を借りるぞ、ギルガメッシュ・・・」

嘗て世界を天と地に分けた宇宙開闢の剣。
其処にあるだけで存在感を醸す剣。

「さぁ、行こうか。ティーダ、おまえの持てる力全てを振り出せよ！」

「了解！任せてください！」

ティーダには教えていた魔法がある。集束魔法の最上級。（エクストラ・スキル）

セイバーはエクスカリバーか。

「さぁ、行くぞ毀士王。エネルギーの吸収は充分か？」

三人それぞれ最強の一撃を構える。魔力が高まる。

この祭壇の間の魔力量が著しく高まっていく。

それだけで空気が振動して細かい細工の部分は崩れ落ちていく。

水も波紋を浮かばせながら波立っていく。

「クフハハハハハ！！いいぞ、我の復活にふさわしいエネルギーだ！さぁ、その力を我に遣すがいい！」

上等だ。此処で次元震起こしても辞さない覚悟が出来た。

「いや、そこは自重しましょう」

図に乗ってたらセイバーに諭された。

ともあれ一気に打ち込む。

念話で合図をして一斉に同時に。

「天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）！！」

「約束された勝利の剣（エクスカリバー）！！」

「必滅せし巨星の魔弾（メテオザッパー）！！」

三人の全力攻撃が放たれる。
三条のエネルギーが毀士王に向かっていく。
激しい激突音。同時に爆発が起こり、爆煙が吹き上がる。
毀士王の姿は爆煙で隠されていく。確認はとれない。
だが――――その気配というか魔力は感じ取れた。
それはセイバーもティーダも同じだ。

俺達の全力を受けておいて無事なわけがない。そう思っていた。
何よりも・・・サーヴァントと俺の一撃を混ぜているんだ。
これで砕けないならどこまでこいつは強いんだ。

「クフハハハハハハ！！！！良い！実に良い！心地良いぞこの魔力！」

毀士王の声と、ヴゥン、とまるで羽音のように音が聞こえる。爆煙の中から。
それは音を振動させて発せられるようなそんな音。

やがて爆煙が腫れていく。其処には無傷の毀士王が立っていた。

「まさか・・・そんなっ・・・」

ティーダが声を漏らす。
そりゃそうだ。全力で打ち込んだのにピンピンしてりゃぁ。
俺だってセイバーだって驚いてるんだ。宝具でも傷がつかない相手なんてな。

「セイバー。どうする？」
「そうですね。向こうはまだ手を出してませんからなんとも実力を測るのは早計ですが・・・

防御力に関しては世界随一かと思います。宝具を耐えるなんて私の自信も打ち砕かれそうですよ」

サーヴァントの宝具はその英霊の人生の全てを掲げて創り出したものだ。
それを無傷でいるなんざ自信消失も頷けるか。

「セイバー」

俺は一つの賭けに出る。此処数年やっていない技術を。

「セイバー、アレをやるぞ」
「あれ？」
「決まってるだろ。合体（ユニゾン）だ！」

此処で駄目ならあわせて喰らわす。
コレで駄目なら後は一旦退いて殲滅部隊を組んでくるしかない。

「ユニゾン・・・なんスかそりゃ！」
「セイバーはユニゾンデバイスでもある。だからと言ってちゃんと管理局員でもあるがな」

ティーダが驚いてる。あぁ、そういえば何も言ってなかったっけ。
セイバーが俺の傍へと来る。

「あの事件以来ですね。マスターがユニゾンを決意するとは」
「いつまでも引きずっていられない、だろ？」

手を繋ぎ、意識を共有する。

「シンクロ率１００％。いつでも」
「よし――――」

『ユニゾン・イン！！』

繋いだ手を中心に光の渦が起こる。光は祭壇を明るく照らして昼を創り出した。

「グッ、この光はっ・・・・貴様もベルカの者か！」
「いいや、違うぜ・・・こいつは似ちゃいるが別モンだ・・・・」

光が収束していく。其処には赤い男装の麗人が大きな刃を持って立っていた。

セイバーＳｉｄｅ

ユニゾンは成功した。そして今の「余」の感情は昂ぶっておる。

「セイバー。エクストラモード起動じゃ。さぁ、余の舞台の開幕と行こうか」

モード・エクストラ。
ユニゾンモードの一つ。雄々しき刃を持ちて舞台で踊る。

「さぁ行こうか無頼。余がリードしてやろう。せいぜい励むが良いぞ」
「クフハハハハハ。それがお前のユニゾンか！魔導師どもは良く考える！」
「貴様もその魔導師ではないのか」
「我は魔導師に非ず。魔導師に仇なす技術者よ！」

ほう。つまりは魔導師に使われるよりも己が使った方が優秀であると踏んだ技術者達か。
それはそれで一極した使い手よな。だがそれでも余よりも目立とうとするのが気に食わん。

「さぁ、いくぞ。毀士の王。その技術とやら余に見せて献上せよ」

余はとても心が躍っておる。
何せこのような技術が余の手に入るのだから。

奏者の魔力が流れ込んでくる。余の魔力と絡み合って一つになっていくぞ。
さぁ、其処の者。王と名乗る勿れ。余こそがこの世全ての王であり皇帝である。

「余に出来ぬものは無い。さぁ、全てを手に入れよう」

余が一歩踏み出せば其処は花散る舞台。

「天幕よ、墜ちよ――――――花散る天幕（ロサ・イクトゥス）！」

我が剣を振るえばまるで花が散るようなほど華麗に毀士の王を穿つ。

「グッ・・・・」

ダメージが通った。否、あれは周囲にある膜が削られたのだ。
余には見えるぞ。その身に纏いしものが何なのか。
まずはソレを削ってやろう。

ぐらつく毀士王。ほうらもっといくぞ。余が飽きるまで相手をせよ。
幾度も幾度も打ち込んでいく。面白いように6撃が当たる。
しかし思った。こやつ、先ほどからと言うか最初から攻撃してこなんだ。
こうも一方的だと逆に飽きてくる。

「そろそろ飽いた。消えよ雑多」

魔力を溜める。それだけで空気が震え上がり地鳴りを起こす。

「燃え盛る聖者の泉（トレ・フォンターネ・アーデント）」

所持スキルによって余の筋力が上がる。
何よりも素体のセイバーの分から上乗せだ。この一撃、とくと味わえ。

「一方的な苛めも之で終わり――――――喝采は剣戟の如く（グラデサヌス・ブラウセルン）！！！」

余の一撃が毀士王を襲う。これで――――――終わりだっ！！！
絶好の一撃が脳天から決まる。

と思っていた。そのままの力で振りお揃うとした瞬間である。
余の剣は――――――左手一本で止められていた。

「馬鹿なっ・・・余の剣を止めるだとっ・・・・！？」
「良い剣戟である。だがまだこの毀士王倒れる程ではない」
左手を払うと余の剣も払われ遠ざかる。
棺の上に上手く乗り体勢を整える。
「クフハハハハ。そろそろ我も動こうか。貴公らのお陰で魔力が溜まった故な」
ゆらり、と動く毀士王。狙いは余ではなくティーダか！
振り向けば既にティーダの目の前。なんというすばやい。だが目で追えぬ程の速度ではない。
対処も出来よう。
余が加速して更に後ろから一撃を喰らわせる。周囲の膜を切り取って削っていく。
ぐらつくからだ。どうやらまずはこの膜をなんとかせねばならないようだ。なんと骨の折れる。
「奏者よ、更に魔力を貰うぞ」
魔力のブーストアップ。一撃に籠める。
ティーダがバックステップで距離をとる。それだけでも充分よな。
さぁ、まだ余の舞台は続いているぞ。疾くと励めよ。
毀士王が背後に居た余に振り返る。
其処には持っていなかった剣を持っておるではないか。
「我が剣。無銘だがよき剣よ。魔力を吸い上げて命を喰らう」
「ふん。そのようなモノこけおどしにすぎぬ」

「魔力も充分に得た。この世界を聖王を壊すには丁度良い」
「やはり、聖王に縁の者か」
「如何にも。聖王こそ我が倒すべき者」

ティーダがこの記録を撮っているならば、後で聖王教会にでも持って行けばよい。余は知らん。

「毀士と名乗る者が数名此処にいた。貴公の配下か？」
「如何にも。我が復活の儀を示した技術者。我が力にて自身の力を得た我が配下よ」

なるほど。この遺跡を調べた技術者に自分の力を分け与えたか。

「ならばもう交わす言葉は無い。我が最高の一撃にて貴公を屠ってやろう」
「それは此方の台詞だ騎士。我が一撃を受けて憎しみの底に震えて死ぬが良い」

互いに魔力が猛る。燃え滾る。
これこそ我が生涯にて作り上げた最高の舞台。
さぁ。ご覧在れ。これが余の人生だ。

「招き蕩う黄金劇場（アエストゥス・ドムス・アウレア）！！！」
「コード・オブ・ザ・サンズ！！」

余の宝具。招き蕩う黄金劇場（アエストゥス・ドムス・アウレア）が発動する。

「さぁ、いくぞ。この黄金の劇場で！」

余の宝具が発動した。固有結界が生み出される。

その場は生涯を掛けて作り上げた劇場の舞台。さぁ、踊り狂え。
此処は祭壇の間だった。だが今は我が劇場へと変貌した。

「なんだここは・・・・これも魔法なのか！？」

この世界ではありえない固有結界。
始めてみる事象に毀士王もティーダも驚きを隠しきれない。
それもそうだ。この世界は我が心の反転。さぁ、覚悟せよ。

舞台で踊るのは主役たる余。そして雑多の役割は主ら。
ダンスを踊るように我が一撃を見舞いしよう。

「この剣。奏者に捧げよう」

先刻から言った通り文字通り一撃だった。
毀士王の膜を全て削り取り、その身にさえ届いた。

「ぐぅぅぉぉおおおおおおおお！！？まさか。まさかぁ！！この身が朽ちる！？

呻く毀士王。魔法の膜は無くなり、その身にすら赤き筋を作り出している。
余の魔力も尽きかけてきた。ゆっくりと世界が崩れて元の祭壇の間へともどっていった。

「この毀士王が！全てを毀す王たる我が！このような小娘に！終わるのか！我が野望が！聖王を崩すという我が野望が！」

祭壇の上。其処にいる毀士王が最後の気力を振り絞る。
その身になろうとも尽きぬ想い、立派んものよ。だが――――――そ

れも終わる。

「ティーダ！最後はお前がやるのだ！」
「お、俺が！？」
「余はもう魔力がつきかけてきておる。ここで討たねば奴はまた繰り返し目覚めるぞ！」

ティーダＳｉｄｅ

セイバーさんが赤くなったのも驚いたがあの周囲の景色すら変貌させたあの魔法は一体なんだったんだろうか。
その一撃を食らわせてからセイバーさんが片膝をつく。
どうやらもう魔力も残り少ないらしい。

俺に止めを撃てという。
確かに今艦長とセイバーさんは一緒になってて魔力がないなら俺しか居ない。

「くそっ！やってやる！」

俺だっていつまでも見物で終わるわけには行かないんだ。
だったらここで！見せてやるさ！

「ランスターの弾丸は全てを貫くって！」

構えた銃身は毀士王の胸元を狙う。
そこは人間ならあるというリンカーコアの場所。
其処を狙い打つ！

全魔力を集中して集束していく。
セイバーさんが。毀士王が撒き散らした魔力を集めていく。

「俺の弾丸は――――――」

集束が終わる。いつでも撃てる。タイミングを見計らう。
狙いを定める。外す訳には行かない。

「全てを貫くんだぁぁぁぁぁ！！！！！！」

俺の叫びと発射が重なる。打ち出されたのは巨大な隕石のような一発。
艦長がずっと教えてくれた集束砲のオリジナル。
さっきも撃った射撃の全魔力を籠めた一撃だ。

之で駄目ならもう俺に手はないッスよ。

「必滅せし巨星の魔弾（メテオザッパー）！！！！」

毀士王へ向かっていく俺の弾丸。ランスターの弾丸。
魔力を吸収する膜は既にない。回避も防御も出来ぬ毀士王には直撃以外の道は無い。
胸元へと吸い込まれていく弾丸は狙い通りにリンカーコアを破壊してその体を貫いた。

「ぐ、グ、ゴゴゴゴ・・・・・・・・」

唸る毀士王。リンカーコアが破壊されて魔力体に近い体は足元から崩れて消えていく。

「これで終わり、だ。余の舞台でよく踊った」

セイバーさんが見送る。俺も打ち出した体勢のまま見送る。

「このような魔導師がいたとはな・・・中々侮れん。だが次に復活せし時には必ずっ・・・・」

「眠れ、破壊の王。永久に」

セイバーさんのその言葉で霧のように消えていく。

完全に消滅すれば静寂が蘇る。

「おわった、か・・・・」

艦長とセイバーさんがユニゾンを解く。

かなりの疲労状態だ。魔力もあんまり感じられない。

「ティーダ、この場の記録をしておけ。俺達の事は後でいい」

「でもっ・・・いや、了解ッス」

きっと艦長達なら大丈夫なのだろう。

状況と戦闘記録をデバイスに入力しつつ調査しているとガクン！と祭壇の間が、揺れた。

「ゆれた？」

「なんかいやな予感がする。ティーダ、早々に終わらせて帰るぞ」

「了解ッス！埋没だけは勘弁してほしいッスよ。妹育てなきゃいけないのに！」

「あぁ、そういえば妹がいたんだっけな・・・」

可愛い妹。ティアナが大きくなるまでは死んでも死にきれないッスよ。
調査も早々に切り上げて艦長のもとへ。
どうやら以前この遺跡に潜った時に使った方法で帰るらしい。

「よし。ティーダは目を瞑っておけ。目がつぶれるぞ」
「こわっ！？やめてくださいよ！？」

目を瞑れば手を引かれる。お、この手はセイバーさんかな。

「よし、いいぞ」

目を開ければ光が見える。見覚えのあるその場所は遺跡の入り口の門の中。
空間転移？だとしても魔力を感じなかったっていうか歩いてたんスけどね。
それは教えてくれなかったッス。

「さて。とりあえず後処理だな。これからまだ大変だぞ」
「そッスね。でも一応ひと段落ッスかねぇ」
「始末書と報告書の嵐だけどな」
「うーわ！そうでした！」

俺がこの任務から解放されるのはまだ当分先になりそうッス。

第六十四話　それから

ミラージュＳｉｄｅ

遺跡調査から一週間が経過した。
今は津名魅のメインブリッジで情報の解析とデータの洗い出し。
そして毀士たちの過去の洗い出し。聖王教会に報告する分もあわせて作成している。
作業面子は主に俺、セイバー。そしてティーダ。

突出して書く事は特に無いが、いうなれば毀士のこと。
一体何をしたかったのか。いや、聖王に向けての悔恨の念か。
俺が捕らえた毀士は鎧を脱がすと記憶が無いように振舞っている。

鎧に籠められた念魔法・・・とでもいうのか。
以前に調査した現地の技術チームらしい。全部で４名。
調査途中に鎧を見つけ、其処から記憶が無いらしい。

「まるで付喪神だな・・・」

作業を一旦とめて一息。手元の紅茶を一口。

「ツクモガミ・・・って何スか？」
「あぁ、こっちでは無いんだよな。何かしらの物をずっと長期間使ってると魂を宿すって話だ。
　これは俺の世界での土着信仰でもある」
「へぇそんなものがあるんスね。でもそれなら便利なんじゃないんですか？」
「そうでもない。一般的には付喪神は神と付いているがいいものば

かりじゃない」

妖怪とかそういうものを説明しても多分理解は難しいと思って端折る。

付喪神のことはどうでもいい。

ある程度報告書が出来上がったら席を立つ。

「あれ？艦長休憩ッスか？」

「あぁ。ちょっと本局まで行く用事が出来た。後頼む」

「うぃ、了解ッス」

席を立ってからメインブリッジを出る。

本局の方の部屋のデータも使わないとまとめるのは無理そうだ。

無限書庫に頼もうにも今は忙しい時期だと言っていたし他人に任せるのもな。

聖王教会からは何も言ってこないのは信用しているからなのかな。

本局に報告書を上げる前に教会の方に、という約束だしな。

後で行ってみるか。途中だけど。

足りない部分は口頭で説明しながら作ればいいし。

津名魅から本局へと転送。すぐに俺の部屋に向かう。

すると前から見慣れた頭が歩いてた。

「なのは」

白い教導隊の制服を着込んで書類に目を通していたなのはがいた。

声を掛ければすぐに気付き、こっちへと向かって走ってくる。

「ミラ君、お疲れ様。任務中だったって聞いたけど」

「あぁ。今から最後の詰めだ・・・っても書類整理だけどな」
「そっか。頑張ってるなぁ」
「何いってる。なのはだって今じゃ二等空尉扱いだろ。出世してるな」
「にゃはは・・私のは結果がついてきたってだけだよ。それに私達の中じゃミラ君が一番出世してるじゃない」
「はやてもキャリアに乗ってきてるしな。左官二人に尉官が三人か。すずかは元気にしてるか？」
「うん、今日は学校だよ。アリサちゃんと一緒」

すずかは嘱託魔導師扱いでアースラ勤務だ。
なのはもフェイトもはやても基本は違う部署だがアースラからの仕事になる。

「お前はこれから仕事か」
「うん。武装隊にちょっとね」
「武装隊乙」
「ちょ！？」

・・・・染まったななのは。

「あ、ごめんね。時間ないんだった」
「無い時間割く位なら速くいってやれ。俺とはいつでもあえるが向こうは時間がないんだから」
「あ・・うんっ！頑張ってくる！」

なのはが小走りで仕事に戻る。
恐らくこの後武装隊は地獄を見るのか・・・・。
そういえばヴィータとシグナムも武装隊だったな。そういう伝か。

フェイトは外か。はやても陸士部隊の出張で居ない、と。
すずかもアリサも学校、と。静かだな。

「さて。とっとと仕事終わらせるか」

自分の部屋に行き、必要なデータを神威に持たせてから再度転送室へ。
向かう途中に人事部によっておく。レティ提督が居たので少し話し込んでから今度こそ転送室へ。
向かうのは聖王教会方面。

転送されれば其処は既に聖王のお膝元。巡礼者達が教会への道を歩んでいく。
巡礼者と一緒に教会へと向かう。周りから見れば一人だけ服が違うから目だって仕方が無い。
巡礼用の外套の中、管理局の執務官制服。
前回のときのように直接用件があったからというわけにはいかない。
今回の訪問はアポがない。今更になってやってしまった感が出てきた。

「・・・・・・なんとかなるかなぁ」

とりあえず行くだけ行くか。
巡礼者と一緒に教会に入り、周囲を見渡す。
すると明らかに違う雰囲気のシスターを発見した。
前回案内をしてくれた・・・確かシスターシャッハ。

向こうが気が付くと会釈をしてくる。
此方も伺うように会釈で返す。

『こんにちは。今日は巡礼者の方々とご一緒ですか』
『アポがないんでね。時間つぶしさ』
『貴方ならアポ無しでも構わないでしょう・・・ちょっとお待ちください』

念話で話し掛けて来た。
なんだかアポ無しでいいとか

ともあれシスターシャッハに頼んでアポの取り付け。っていうかカリムの時間割き。
暫くは協会のベンチに座って巡礼者との会話に精を出すか。

ティーダＳｉｄｅ

津名魅のメインブリッジの自分の机で報告書とか始末書とか。
そういう書類整理が未だに終わらないッス。どうなってるんスか。

「セイバーさ～～～ん」
「泣き言ですか。それでも執務官候補ですか」

うっ・・・ソレを言われると辛い。
でもこんなに仕事があるなんて聞いてないッスよ。
今思えば全く関係ない仕事までやってたこともあったような気がするッス。

「副艦長。本局人事部より入電です」
「きましたか」

本局人事部から？なんなんッスかね。
まぁ俺には関係なさそうだしさっさと書類を――――――

「ティーダ。今すぐ本局へ行きなさい」
「りょうか・・・・え？」
「聞こえませんでしたか？今している仕事は一旦中断して本局に向かいなさいと言ったのです」

この仕事置いておいていいんスか。
本局行きって俺何かしたッスかね・・・・。

「ティーダ＝ランスター。唯今より本局に向かいます」
「了解。仕事の引継ぎは不要。直ちに向かうように」
「了解」

なんなんスか。
まったく理解できてないままに話が進んでるような気がする！
と、とりあえず本局に向かえばいいんスよね！？よね！？
荷物そのままに津名魅の転送ルームへと向かった。

セイバーＳｉｄｅ

ティーダを見送った後、静かになったメインブリッジ。

「騒がしい所をお見せしました」
『いいえ。元気があっていいわ。あのくらいの元気がないとやって

られなくなるもの』
「痛み入ります」
『では彼のことはこのまま私達人事部が請け負います。今までご苦労様でした。ミラージュ艦長にも伝えてもらえる？』
「了解しました。レティ提督」

そこで通信が切れる。
今までずっとこの艦で預かっていたティーダを本局に返す時が来たのだ。

執務官候補生だった彼が執務官の資格を持つマスターと行動を共にする事で得られる知識や経験は半端無い。
故に人事部は此処に預けたのだ。

「さて・・・之から静かになりますね」

オペレーターとの他愛無い会話も何処吹く風。
補佐を宛がえればいいのですが。

ミラージュＳｉｄｅ

教会の入り口のベンチで巡礼者達と会話してるとカリムが直接来た。
視線が合うと目をパチパチとしながら俺を見ている。

「何をしてらっしゃるんですか」
「巡礼者の人たちと憩いの会話をだな？」
「ソレは見て判ります」
「じゃぁ聞くなよ」

判りきったことを、なんていえば半眼で俺をにらんでくる。
俺がなんかしたか？

「兎に角。私に逢いに来たのでしたらまっすぐこられても構いませんのに」
「そうは行かないでしょう。プライバシーを損害する気はありません」

此処じゃなんなので。ってことで前に行ったカリムの執務室へと移動する事に。
大まかな話をしながら執務室に入り、仕事モードへ。

「さて何処から話すかな」
「大雑把ですね」
「よく言われる」

ソファに座ればその正面にカリムが座る。シスターシャッハはカリムの背後。

「例の遺跡だけどな。やっぱり聖王時代のものと見て間違いないな」
「その心は？」
「中に居たのは恐らく現地の調査チームだろう。それが鎧にとり憑かれてた。
最奥と思われる場所には祭壇があったからそこが臭いな。とはいえ多少毀れてたがな」

遺跡内のデータ画像を見せる。其処には遺跡の中で出会った鎧、毀士の姿が映っていた。
しかも捕らえた側の毀士を捕縛した映像つきで。

「・・・推測する魔力量からしてＡＡＡ＋からニアＳクラスと見えますが・・・」
「まぁそんなもんだろ。たいしたことは無いレベルだな」
「・・・エリート、というか時空管理局でオーバーＳは全体の数％程度しかいないというのに」
シャッハが口を割ってきたが構わず俺は話を進める。
次に映しだされたのはセイバーとティーダが戦闘した毀士だ。
「この毀士、ですか。自らＡＡＡクラスと言ってるからそうなのでしょう・・・」
「だがセイバーとティーダが倒した。持った力は凄いんだろうがソレを振舞えるような知識と経験が無かったんだ」
映像を見るからに確かにただ力を振るってるだけにしか過ぎない。
そんな相手にセイバーが苦戦するものか。
ティーダだって俺がずっと鍛え上げたんだ。そんな程度で負けてもらっちゃ困る。
「この後だ。この奥に祭壇の間があった」
画像は切り替わる。あの祭壇の間に。
周囲の意匠と雰囲気。そして中央の棺。全てが高解像度で映し出される。
「この棺は恐らく先人が埋葬されていたんだろう。強い念が・・・・・っと。出てきたな」
映像が更に切り替わっていく。
其処には毀士王と名乗る存在が現れていた。

案の定、というのも何だが攻撃をあまりしてこない。

「攻撃しないのも気になりますね」

「力を持ってるのはわかっているがソレを振るうやり方を知らない。玩具を与えても使い方の判らない子供と同じだ」

俺たち三人での個々の攻撃に耐え得る防護壁。更に聖王への悔恨を聞き、カリムもシャッハも画像を睨み込んでいた。

「あの防護壁は中々厄介だった。まさか俺の一撃すら防ぐとはな」

「あの防護壁は推定ニアＳＳＳほどの強度を持つと見ました」

「そのくらいだろう。俺も本気を出せばよかった」

「「・・・・・・・・・」」

おや？会話がなくなったぞ？まぁいい。次だ。

セイバーとのユニゾンは・・・まぁぼかしてある。シャッハに至ってはこれじゃわからないと激昂していたが。

人には触れられたくないこともあると言ったらカリムは納得してくれた。

何かカリムにもそういうことがあるのだろう。

「で、毀士王は倒した。まぁ、最後はティーダに花を持たせたがな。これも経験値だ」

「随分と買ってらっしゃるのですね」

「そうでもないさ。俺が育てたってのに未熟者ってんじゃ割が合わない」

肩を竦めば二人はクスクスと口を隠して笑う。

「で、まぁ。一応この遺跡に巣食ってるのは取り外しておいた。あとはあんたらが調査を引き継ぐんだろ・・・？カリム＝グラシア少将」
「・・・ご存知だったとは」
「俺も一応左官でな。将官のことくらいは調べておくさ」
「人が悪い。ミラージュ＝ヴィジョン一等空佐」

腹の探りあいなんかしたくはない。だが仕方無い。

「ま、以上だ。本局に上げる前にこっちに報告って言う約束もあったしな」
「いえ、ありがとうございます。貴重な情報でした」

深々と礼をしてくるカリム。そんなになるほどの物を持ってきたわけじゃないんだがな。

「少しお時間はありますか？よろしければお茶でも飲んでいかれます？」
「そうだな・・・少しご馳走になるか」

その言葉にすぐに反応したのがシャッハだった。すぐさま行動し始めてお茶を淹れに行く。

「あぁ、それと。普通に喋ってくれ。敬語はなんだか背中がむず痒い」
「癖なんですよね。わかりました・・・慣れるまではまってください」
「それがカリムの味なんだろうけどな。まぁ期待しておくよ」

視線があうと、二人して噴くように笑い合う。

丁度其処に戻ってきたシャッハが首を傾げているのだった。

ティーダＳｉｄｅ

津名魅のメインブリッジに居た。本局から呼び出された。転送されたら人事部の人が目の前に居た↑いまココ。

「え？なに？何ッスか？左遷ッスか？！サーセン！？」
「落ち着きなさいティーダ一等空尉。何も取って食べるわけではないわ」

転送された俺を待っていたのは人事部のレティ＝ロウラン提督。
人事部の中でも有数のやり手と評判。

「そのぉ・・・俺なんかしたッスか？」
「そうね。やったといえばやったのでしょうね」

やっぱり！？俺の知らないところで何かがおきてるッス！

「ミラージュ＝ヴィジョン執務官よりティーダ＝ランスター執務官候補へ通達があります」

へ？艦長から？

「執務官候補として旗艦津名魅への異動に伴い勤めること2年。
現時刻を以ってミラージュ＝ヴィジョン庇護下から離脱。今後は執務官として行動するに大いに期待できる、と」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「エエエエエッエエエエエエエエエエエエエ！？！！？？」

転送室に俺の叫び声が響く。そりゃ驚くッショ！？

「取り合えず人事部で話ましょう。此処では邪魔になるわ」

「あ、は、はいっ！お願いしますッス！」

レティ提督が先に歩いていく。俺はその後をおぼつかない足取りでついていった。

セイバーＳｉｄｅ

ティーダの残した作業を片付けながら今頃何をしてるか、等と耽ってみる。

マスターは聖王教会に行ったまま戻ってこない。

ティーダは人事部から今頃執務官としての講義に入っているだろう。

「皆何かしらで動いているのだな」

そういえば他のサーヴァントはどうしてるだろうか。

アーチャーは嘱託から陸士部隊に配属されたらしい。

ランサーは特殊行動部隊か。らしいと言えばらしい場所だ。

ギルガメッシュは・・・あいつは良く判らん。

ディアーチェもシュテルもレヴィも。ミッドの家を拠点として三人ともおとなしく仕事をしているとの事。

もうすぐ。もうすぐだ。マスターが描く部隊も直に完成する。

その時には――――――また地球に、海鳴に帰るのだろうな。

ティーダＳｉｄｅ

人事部の、っていうかレティ提督からありがたいお言葉を貰う。
俺が執務官として此れからやっていくにしての心構えとか。

「さて、そろそろいいかしらね。それでは頑張ってね、新しい執務官殿？」
「はい！了解です！」

レティ提督が俺の肩を軽くたたいてくれる。
それに答えるように力一杯敬礼をした。

「貴方の妹さんにも報告しに行かなくちゃね？確か訓練校に入る前よね」
「其処まで調べてるんスか」
「まぁ一応は把握しておかないとね。それとその口調も直した方がいいわよ。これからは上に立つのだろうし」
「う・・・頑張りまッス」

口調、かぁ。もう癖ついてるから直そうにも大変だ。
でも直さなきゃいけなさそうだし、頑張らないと。
レティ提督はティアナの事まで知ってたみたいで、報告に行けと。
暫く任務で飛んでばっかだったし久しぶりに兄弟水入らずで会いに行くッスかね。

第六十五話　ファントム

ミラージュＳｉｄｅ

聖王遺跡の事件から一年。なのはたちはそろそろ中学校を卒業したという時。
俺、すずか、アリサ、マテリアルズ、サーヴァント、そしてティーダがクラナガンの俺の家にいた。

「こうして揃うと圧巻だな」

リビングに１０人も揃うと流石に迫力があるというものだ。
かなり広めの家を用意しておいてよかった。執務官の給料ってすげぇ。

「よく集まってくれた。っていうか、ティーダとすずか、アリサくらいだが」

サーヴァントはうちを拠点にしてるし、マテリアルズはそもそも住んでいる。
すずか、アリサ、ティーダを呼んだのは他でもない。話があるからだ。

「まぁ、話があるんだ」
「なのはたちが居ないけどいいの？」
「あいつらは今はやての研修先の温泉に行ってるのは知ってるだろう。三人だけで。三人だけで」
「二回言わなくても」

まぁそういうわけだ。はやての研修先の温泉になのはとフェイトだけが誘われた。
ぶっちゃけハブられた俺達は俺たちでよろしくしようかなという・・・ごめん、うそだ。
多分ここであの空港事故とか起きるんだろう。原作知識がまだあるのは助かるものだ。

「ちゃんと理由はある。それともう一人来るんだ。遅刻か」

皆不思議な顔をしている。知っているのはやはりサーヴァントとマテリアルのみ。

「まぁ、待つか。その間はリラックスしててくれ」

はい解散、と手をパンとたたいてから各々好きに行動させる。
うちのリビングで我が家ばりにくつろぐのもいるし色々な調度品とか見ては触るやつもいる。
こめかみがピクピクしてるうちにティーダが近づいてきた。

「艦長、ちょっといいですか？」
「ん？どうした。てか口癖直したのか」
「艦長のお陰で執務官になれましたから。下がついてくるなら口調やめたほうがいいってレティ提督から」

あの人らしい。俺は気にならなかったけど。
でも上に立つならやはりちゃんとしたほうがいい。

「執務官になれたの、本当に艦長のお陰です。ありがとうございます」

深々と礼をするのを静止させる。そういうのは俺は好きじゃないんだ。
そういうことをさせるためにティーダを受け持ったわけじゃないしな。

「やめろ。今はそういうことをするような場面じゃない。それに此れからお前の身の回りで忙しくなるんだぞ」
「え、あー・・・・はい。判りました」

もう一回、今度は浅く礼をしてから離れていった。
一呼吸。なんだかこうも騒がしいのは久しぶりだ。
迂闊にも微かに笑みが零れる。
それを見逃さないのがすずか。

「綾人くん・・・じゃなかった、ミラージュくんか。なんかまだ慣れないけど。今笑ったでしょ」
「すずか・・・なんで俺が笑ったと？」
「だって、私は何でもわかるんだよ。ミラージュくんと私は眷属の繋がりがあるんだから」
「そう、だったな」

俺はクス、とまた笑い。

「この風景がさ。いつまでも続けばいいのになぁ、って。そう思うよ」
「前から言ってたイレギュラーってやつ？」
「あぁ」

すずかには話してあったのだ。というか、昔問い詰められてつい話してしまった。

それでも真剣に話を聞き、一緒に考えたりもした。
今回は此処にいる全員に話さないといけない。

「それがこの集まりなんだね。待ってる人ってもしかして恭也おにいちゃん？」
「そうだ。もうこっちで住んでるはずなんだがな」
「迷ってるのかな。お姉ちゃんが言うには朝には出たって言ってたけど」

お姉ちゃん、忍か。恭也さんと一緒に住んでるんだよな。もうミッドにきて二年くらいか。
戸籍は大丈夫らしかったし、今は婚姻届も提出してるという話だし。

まぁ、暫く待つか。それまで何をするか。

「ティーダ、アリサ」

ティーダとアリサを呼ぶ。恐らくイレギュラーの事をこの中で知らないのはこの二人だけだ。
なら説明しておくべきだろう。この二人には。
この世界にイレギュラーという存在が来る事。それが世界を壊そうとするだろうということ。
その為に俺が居ると言う事。イレギュラーに関する事はほぼ話す。
神様だの俺が転生者だと言う事は伏せておく。

ティーダ、アリサに説明していると恭也が登場。迷子になってたと言う事だ。
それならそれで先に連絡くれれば誰かしら遣わせたのに。
此処で恭也にも同じ説明をする。先の二人には復習のつもりで再度聞いてもらう。

話が終わったところで全員を呼び戻す。

「さて。これで全員が揃ったわけだが」

全員を見渡す。話を知り得た全員共、真剣な顔になった。

「此処に集まってもらった皆には既に話したとおりイレギュラーに対する力を集結させたものだ。

他にも本局の方からも有志が来るだろう。クロノ提督とかな。

だが恐らくこれは俺の考えなんだが今現在の管理局の力では勝てない。そう思う。

実際セイバーがずっとアースラで武装局員相手に教授してたくらいだし。

だったらソレに対応対抗できる集団を作り上げる事。それが狙いだ」

皆黙って俺の話を聞いてくれている。

「つまりだ。その対抗できる集団と言うのがここにいる皆ということだ」

「それって俺も？」

「ここにいるのが何よりも証拠になる」

ティーダの質問に答える。

俺がずっとこの世界で生きてきてこいつなら、と思った奴しか選んでない。

「そんなのに私も入るんだ・・・・大丈夫かな」

「アリサの場合、俺がマンツーマンで鍛えるから大丈夫。問題ない」

「う・・・わかった。でも危なくなったら助けてよ？」

「判ってるさ。何度でも護るよ」

アリサは此処最近になってリンカーコアが見つかったと言うくらい不安定な出力を持っている。
何よりも測定したときにシグナムと同じ炎熱系変換資質を持ってるのも判った。
此れから先、俺が資質を伸ばしながら戦闘スタイルを決めていく。
恐らくサーヴァントやマテリアル達なら戦闘スタイルの確立後の手伝いにもなるだろう。

「わたしや恭也さんは？」
「すずかは吸血姫から闘い方も教えてもらったろ。恭也さんに至っては御神流がある」

本当はあと士郎さんも入れておきたかったけど翠屋の方が大変になるからって事で辞退。
今も海鳴市で桃子さんと美由希さんとで店を切り盛りしているそうだ。
すずかはアルクェイドから力の制御と一緒に同じ戦闘方法を教えてもらっている。
劣化だが空想具現化すら可能にしたのは才能ゆえか。
恭也さんは小太刀二刀の御神流。その強さは実際に刃を交わしたからこそわかる。
何より、なのはの護衛がメイン。

「で、集団。っていうからにはどうしたらいいの？何かあるの？」

イレギュラーの存在については秘密事項だ。ここにいる面子以外には知らない事。
だからこそずっと考えていた事を実行するのだ。イレギュラー対策

用実行部隊を。

「俺達は一つの部隊として管理局に登録される。申し訳無いが俺を中心とした私設部隊と言う事で監査部には通してある。
幻影騎士団・・・イルジオンリッターという名でな」

それがずっと考えていた部隊の名前だ。厨二病とかツッコミは受け付けないぞ。

「流石に全員が同じというわけにも行かないんでな。幾つか小隊にして分ける事にした」

まずはサーヴァント編成の小隊。
そしてマテリアルズ編成の小隊。
最後にティーダ・恭也さん・すずか・アリサの小隊。

俺はマテリアルの小隊に入るので四人編成で完成する。

「サーヴァント隊はグレイル隊のコードで。誰が小隊長かはそっちで決めてくれ」
「了解しました」
「ティーダの所はレグルス隊のコード。小隊長は本局の中を知ってるティーダに任せる」
「了解！」
「で、俺の所はファントム隊な。ディアーチェ、シュテル、レヴィ。これからも頼む」
「任せるがいい。我がマスターを守護してやるのだからな！」

口は悪いが実力はある。何よりも三人のエースを素体としてるんだしな。

さて、それぞれディスカッションさせるか。コミュニケーションを取り合っていかないとな。

「さて、それじゃぁ好きにしてくれ」

俺のリビングが一気に作戦室へと変わった。ファントム隊としてはやる事がなくなったので料理でも作ろうか。

「シュテル、手伝ってくれ」
「了解しました」
「まて！我も手伝うぞ！」
「ディアーチェは其処でバナナを食べててくれ。レヴィと一緒に」
「あっはっは！王様ハブられた！」
「貴様も同じではないか！」

ディアーチェとレヴィの言い合いを無視してキッチンへと入る。シュテルも後についてくる。

「さて、何を作るか。セイバーが居るから量は作らないとな」
「満漢全席・・・・」

このとき俺に衝撃走る。まさかシュテルから満漢全席なんて出てくるとは。

「材料足りるかな・・・・まぁ足りなければ調達するか」

よし。じゃぁ始めるか。

アリサＳｉｄｅ

ミラージュの家に行ったら大変な事に巻き込まれた。
イレギュラーが世界を破壊するから手伝ってくれって言われても・・
・ちんぷんかんぷんよ。
でもまぁ・・・仕方無いわね。ミラージュからの頼みなら聞かない
わけないじゃない。

「ミラージュと個人レッスンかぁ・・・」
「うん、でも個人じゃないから残念！」
「すずか？！」

いきなり背後にすずかが居た。ていうか、個人レッスンじゃないって。
さっきアイツ言ってたじゃない。マンツーマンって。

「うーん・・・教えるのはマンツーマン。でも二人っきりじゃない。
ってことなのかな」
「・・・・・はぁ」

生返事が出た。すずかは心を読むのが上手い。だから隠してもすぐにバレてしまう。
わたしが昔誘拐された時だって。すずかはすぐに気付いた。

「アリサちゃんはミラージュ君が好きなんだよね」
「なっ？！なにをいってっ・・・ば、ばかいってんじゃないわよっ
！！」
「うん、じゃぁそういうことでいいよ。でもね、早くしないと遅れ
ちゃうよ？」

うっ・・・なんでこうすずかは。
私の心を読むのが上手いかな。

「そのうち、ね・・・・」
「うん。後悔しちゃだめだよ」

まったく・・・あの子は優しすぎるんだから。
そういう自分はどうなのよってのよ。
自分を犠牲にしてでも他人の幸せなんて選ばせないからね。

恭也Ｓｉｄｅ

遅刻してきたので話が見えないと思ったら適切丁寧な説明を受けられた。
俺としてはなのはが危険な目にあわなければいいんだが・・・その友達が傷つくのも厭だ。
何よりもすずかちゃんの事もあるし。忍によく言われてるからな。
今はすずかちゃんとアリサちゃん。それと時空管理局の人と一緒にいるわけだ。

「あ、俺はティーダ＝ランスターです。よろしくお願いします」
「俺は高町恭也。こっちの世界はまだ判らない事が多すぎるので此方こそよろしく」
「高町・・・・高町教導官のご血縁ッスか？」
「まぁ・・・・そうだな。その兄だ」

なんだか妹の事をこうまで言われるとむずむずする。
しかし高町教導官、ね。しっかりやってるんだな、あいつは。
やりたい事があるって言って。それに向かって突き進んでるのか。
だからといって昔みたいな危ない事は許せないんだけどな。

「艦長が言うには俺が小隊長ってことらしいんですけど」
「あぁ、いいんじゃないか？俺は上に立つのは苦手だし」
「私は構わないわよ。第一不満言えるほどの立場も此処じゃないみたいだし」
「わたしはミラージュくんが決めた事ならいいよ」

あいつの人柄が良く見えた気がする。
しかしイレギュラー、か。どのくらい強いんだろうな、そいつは。
父さんよりも強いのかな・・・。
もし俺が負けたら父さんになんていえばいいんだろう。

セイバーＳｉｄｅ

なんでギルガメッシュまで入ってるんですか。
アーチャーやランサーならまだ良いとしましょう。
なんだかんだ言ってあの二人は実害がありません。寧ろ三騎士の括りにいるのですからきっと助けにもなるでしょう。

「だがギルガメッシュ。お前は駄目だ」
「行き成りの絶縁宣言ｋｔｋｒ＼（・▽・）／」

なんですかそれは。私としては同じ空気を吸うのすらおぞましいと言うのに。

「とりあえず其処で大豆を右の皿から左の皿に移した後に右の皿に戻す作業をしてなさい」
「地味すぎる！我にとって地味！ていうかその作業凄く無駄！」
全く。
「さて、マスターが作った小隊ですが」
「あぁ。まぁ好きにしたらいいさ。俺は闘えればそれでいい。そういう面では管理局ってのは天職かもしれねぇ」
「私も別段どうでも構わない」
「ではそうですね・・・やはり一国を率いていた私が立候補します！」
「「じゃぁそれで」」
グレイル隊はこうして決定しました。
ギルガメッシュＳｉｄｅ
誰がギルガメッシュナイトだ。違う、Ｓｉｄｅだ。Ｎｉｇｈｔではない。
等とそんな些事はどうでも良い。
セイバーと一緒の部隊でハッピータンなう。
「我はセイバーと一緒なら何だっていいぞ」
とりあえずいっておいた。

シュテルＳｉｄｅ

マスターの料理の手伝いをするべく包丁を振るう。
いつもと同じ場所で料理をします。
とはいえマスターがメインなので私は補助でしかありませんが。
満漢全席を作ってます。材料はマスターの能力で無尽蔵に出てきます。

「マスター、魚は私が」
「ん。じゃぁ肉は俺がやろうか」

分担作業、楽しいです。

ミラージュＳｉｄｅ

料理ができて今は全員で食事中。
リビングでの食事と、庭を使ってのバーベキュー。

「さぁ、皆食べてくれ。部隊設立の祝い代わりだ」

満漢全席はリビングにおいてある。
セイバーはもう動かない。ギルガメッシュもリビングだ。
他の面子は全員外でバーベキューという。

これから先のことを考えればこうした息抜きを提供するのは義務だと思う。

本来の・・・薄れた原作知識ではアリサやすずか。恭也さんだってここにはいない。
ティーダだってそうだ。

この部隊の面子全員が実際この世界の歴史には居なかったはずなのに。
俺はみんなの歴史を捻じ曲げてまで行う価値があるのか・・・？
少なくとも俺の知ってる奴の笑顔くらいは守ってやりたいな。

あとは――――――レグルス隊が何処まで強くなるかだ。
グレイル隊とファントム隊で一気に経験値を上げる手もある。

時間があるのかどうかわからないのはなんともどかしいな。

とりあえずこの部隊「イルジオンリッター」の存在は知られないようにしておかないとな。
特になのはたちには。
恭也さんとかなんでこっちにいるのってなるし。

第六十六話　潜入開始

ミラージュＳｉｄｅ

本格的に部隊が動き出して一年。その間に色々とあった。
はやての研修先でおきた空港火災。
そこでスバルとギンガを救出した事。
キャロが本局に見学に来たこと。
エリオがアルフとアースラに見学に行ったこと。

目まぐるしく時間は進んでいく。そんな中初任務が下された。
本局の執務官室に居た俺は辞令を受け取る事になる。
ソレを持ってきたのがレティ提督なのはまだいい。
だがその辞令の差し出し先がなんとも俺の顔を顰めさせる。

「レジアス中将からの辞令、ねぇ・・・・」

レティ提督から辞令を受け取るとまず誰からのものか確認した。
すると書名の欄にレジアス＝ゲイズと書いてあった。

陸の英雄が俺に辞令を出すなんて、な。
陸の連中は陸は陸で、っていう考えが多いんだが。
ソレこそ俺を疎く感じているはずでもあるのに。

「ミラージュ執務官の場合、陸・海・空関係なくオールラウンダーだからでしょ。
　中将自らの辞令なんだしそれだけの特級任務なんじゃないかしら？」

なんて言うし。
胸の俺の階級章に触れて、「頑張って下さいね、ミラージュ少将」
そう言い残してレティ提督は執務官室を出て行った。
この数年で俺は少将にまで上り詰めていた。
上手い事キャリア試験に合格したりで昇級したり、任務の功績が評価されたりと身のある仕事が多かったのだ。
しかし15・16で少将まで上るとか管理局の昇級システムどうなってんの？とか思う。

辞令を見れば管理外世界で活動してる反管理局組織の調査。必要があればその組織の壊滅。
調査はわかるが壊滅とはな。しかも陸からの直接的な依頼だ。

「まぁやるだけはやるけどさ」

ガタ、と席を立つ。直接通信を遣って呼び出す。
今はグレイル隊が反管理局組織の殲滅に向かっている。
ファントム隊も現地調査とロストロギアの捕獲。
レグルス隊が現状待機でいる。
常に1部隊が待機している状態で小隊を回しているわけだ。

「ティーダ＝ランスター入ります」

ティーダが執務官室に入ってくる。
黒い執務官服を着込んでいる。

「陸から任務が出た。今回は特例でレグルス隊を動かすぞ。俺も随伴だ」

「了解ッス」

ティーダがすぐに部屋から出て行く。隊員に知らせに行ったのだ。

「さて、俺も準備するかな」

また留守にする事になる。この執務官室はどうもあまり長居する事がないな。

デバイスを右手首に装着してから外に出る。向かうのは津名魅のドッグ。

津名魅に乗り込むと既にレグルス隊が揃っていた。

「また任務か。忍に連絡しておかないとな」

「恭也兄さんは亭主関白には程遠いですもんね」

「言うな！悲しくなる・・・・」

「もう少し忍さんを大切にしないと・・・・・ネー？」

・・・いつも通りのやり取りだ。微笑ましい。

「まて！俺で遊ぶんじゃない！」

「なんだ？いつも通りだろう？」

スタスタとメインブリッジに向かって歩いていく。

今の津名魅には副艦長というのがいないので俺の指示でしか動かせない。

メインブリッジに行けば既にクルーが準備万端で俺達を待っていた。

「待たせたな。さぁ準備はいいか？」

俺の声一つでクルーが反応する。

「陸のおっさんからの直接任務だ。最近多い反管理局組織の調査がまず先。その後、危険と特定したならその壊滅。
久しぶりに俺も前線に出る事になる。みんな宜しく頼む」

艦内に俺の声を通らせる。さぁ、行こうか。
津名魅を発進させる。一切のGも起こさずに艦は動きだした。
どんな結末が待っていようと俺が手を出す以上はすぐに終わらせてやるさ。

向かうのは第１６６６管理外世界。
１０００番以降の管理外世界は討ち捨てられた意味合いを持つナンバリングでもある。

今回はその世界へと旅立つ。レグルス隊にはソレも全て伝えてある。
超空間移動すれば目的地までは一瞬だ。

１６６６管理外世界。
ほぼ地球と酷似した環境の世界。
世界といっても惑星が一つあるだけ。

海と大地と雲が織り成す世界。地球と違うのは海と大地の比率が５：５だと言う事くらいか。
取り敢えずの処置で地上へと津名魅をおろしていく。
無音、無衝撃で地面へと着陸。次いで地上までの道を作る。

気圧テスト、対空圧テスト。空気上の微生物の有無、危険検知。
様々なテストを行ってからやっと調査班が地上へと降りる。

まずは艦の周囲を調べる。
そこでやっと安全と判断してから俺達前線の出番。

レグルス隊と俺は地上に降りる。
確りと地面を踏めばまるで地球の土によく似た感触の上に立つ。

「まるで地球と一緒だな。土壌が確りしてる」

恭也がしゃがみ込んで土を触っては掘って、さらさらと落とす。
放射能など悪影響を起こさせる要因は何もない。
寧ろ空気が澄んでいる。

「汚染する物がないから綺麗なままなんだろう。それでも管理外世界に設定する理由は他にもあるって事だろうし」

文化レベルが低かったり魔法レベル云々。
まだ魔法と関わるほどのレベル水準に至ってなければまだ管理外とつけられる。
しかし１０００番台のナンバーならもっと理由があるはずだ。
反勢力がいるからってだけではそうはならないはずだし。

「ともあれ調査開始だ。ばらけて行うぞ」

「「「了解」」」

５人で居るときは指揮権限は小隊長のティーダではなく俺になる。
一人ずつの各方位調査に向かわせる。
あとは津名魅をどうするかだな。

「ブリッジ。聞こえるか？」

「はい。艦長」

「光鷹翼を不可視展開しておけ。全方位。１０枚全部使って構わん」
「了解。光鷹翼全方位不可視展開」

ヴゥンッ。鈍い音と共に光鷹翼が展開された。
不可視の翼は艦を守護するようになる。
これで艦のほうは安全だな。
そう簡単に光鷹翼が破られるわけがないという自負がある。
安全面は確保した。あとは俺の動きだな。

レグルス隊はこの一年で俺が直接手が空いたらずっと鍛えていたわけだし。
三等空佐のティーダは勿論、恭也とアリサ、すずかも空戦ランクを取得させた。
飛行魔法をまず第一に覚えさせる。それだけでも充分戦闘の幅が広がる。

次に鍛えたのは直接戦闘。魔力運用は飛行魔法と一緒に覚えさせたから今度は身体能力の向上だった。
各々得意な分野で伸びたからこれも満足した。

だからこそだ。一人でいてもまず簡単に負けることはないだろうというこれも自負。

恐らく時間が掛かる。ならこの真裏の調査は自分がやろう。
『能力』を使って俺は移動する。

すずかＳｉｄｅ

ミラージュくんに教わった飛行魔法を使って私は東側を調査。
空を飛ぶって感覚がまだ少し慣れないかな。
近代ベルカ式と判断された私の魔法。デバイスは装着型の両腕の紅色の手甲。
なのはちゃんたちみたいな杖タイプでは私のスタイルじゃ邪魔になっちゃうからってミラージュくんが組み上げてくれた。

名前は『ラファエル』。

アルクェイドさんに習った戦闘方法が邪魔にならないように装着型。
一回、模擬戦をアリサちゃんとやったら管理局でもそこそこ名前が売れちゃったんだよね。
アリサちゃんもバリアジャケットからして女侍。って感じでかっこよかった。
ソードマスターなんて言われてるけどセイバーさんたちにはまだ勝てない。
私たちで一番伸び代あったのはアリサちゃんだしね。

暫くはふらつく飛行魔法で空を飛ぶ。
とはいえそれはイルジオンリッターの中での話。
管理局の中でなら中の中。
実際の体力とか運動神経なら自信あるんだけどな。
体力と魔法は違うみたい。

「もうちょっと練習しないとだめだね」

なのはちゃんたちみたいに綺麗に飛べない。
フェイトちゃんなんかは飛べるだけでも凄いっていってくれるけど。

それでもミラージュくんたちから見ればまだまだなんだよね。
いつでも横に立っていたいから、頑張らないと。

アリサＳｉｄｅ

南側担当アリサ＝バニングスは現在旗艦から４０ｋｍはなれた場所、
砂漠の上を飛行中。っと。
ある程度の距離が離れる度に報告通信しないといけないのも面倒よ
ね。

他の方向に向かった皆は大丈夫かしら。
ううん、他の心配よりも私の心配だわ。
この部隊が出来てから一年弱、初の単独任務じゃない？
・・・それだけミラージュが信頼してくれてるって事、かな・・・？
うん、なんかそう思うだけで頑張れそう。

速度を上げて風を斬る。
バリアジャケットの裾がバサバサとはためく。
地面に視線を向けて怪しいものがないか調べていく。

恭也Ｓｉｄｅ

津名魅から降りて北上。飛行魔法は使ってはいるが低空飛行。
あんまり高く飛ぶと俺の戦闘スタイルが激減するためだ。

ほぼ地面擦れ擦れに飛ぶ。こっちは森が多い。樹の合間を擦り抜けるよう。

時折邪魔な枝を切って進んでいく。

「なんだか段々深くに入ってきた感じだな・・・・」

通信連絡を取ろうとしたがさっきから通じない。
恐らく樹海みたいにおかしい場所なんだろう。
かなり奥まで入り込んだせいか日差しも木陰で入ってこない。

大体隠れるならこう言う場所。っていう根本的な場所だ。
実際に隠れてるならビンゴだが。
もう少し調べて見る必要がありそうだな。

ティーダＳｉｄｅ

西側を担当して空を飛ぶ。
獣や飛龍と時折すれ違う。
だが今はソレに構っている場合じゃない。
課せられた任務は反管理局組織の調査だ。

つまりはその組織のいる場所等を見つけ出す事。
暫くは空からの探索になるだろうか。

ミラージュＳｉｄｅ

津名魅の居る場所から真裏側の地表。
今はかなり上空から地面を見下ろしている。
この高さなら肉眼でも見つかる事はそうそうないだろう。

眼下にはとある街並み。いや、あの規模はもう国と言っても過言ではないだろう。
中央に聳え立つ城と、ソレを守護する城壁。そして城下町。そして其れを守る外壁。
明らかに国として発展している。１０００番台管理外世界で国があるというのはあんまり聞いた事がない。

調査対象の一つとしてリストアップ。
方々に散ったレグルス隊にも報告の念話を飛ばす。
すると皆近くまで来ていたらしく、一度合流の進みになった。
時間はそう掛からないようなので暫く待つことに。

城の領土から少し離れた森の中に降り立ち、皆を待つ。
ティーダ、アリサ、すずか、恭也の順で合流。
各自であったデータを見合わせて報告に入る。

突出した情報もないまま情報見合わせは終わる。
あとは目の前の城下町等の調査をする為の打ち合わせ。

「全員で行くわけにも行かないな。伝令で半分残ってもらうが」
「ミラージュくんは？」
「俺は中に行く」
「じゃぁ私もいくよ」
「すずか決定な。あとはじゃぁ・・・・恭也さん。護衛でついてき

てもらえますか」
「了解した」
「ティーダとアリサは此処で津名魅との伝令役で待機」
「「了解」」

中に入っての調査は俺とすずか。その護衛に恭也さん。
ティーダとアリサで伝令役としてこの場で待機。
念話は常に届くようにしておく。部隊専用チャンネルも教えあってあるので緊急でも使えるはずだ。

問題はあの中に入るのに何か必要になるのでは?という不安。
手形とかパスポート的な通行許可証が必要なら入る前に手詰まりだ。
まぁ・・・手はあるんだけどな。

「暗くなる前に行くか。じゃぁ行ってくる」

さぁ作戦開始だ。作戦と言ってもたいしたことはないけどな。
まずは内部調査だ。この世界の国?街がどのくらいの文化レベルなのかとか色々調べる余地がある。
すずかを伴い、外壁の空いている一角・・・大門まで歩く。
少し離れて恭也さんが着いてきている。これは気配と魔力感知で判る。

大門まで行くと門兵が立っている。意識を向けながら足は普通に門をくぐろうとしたが何も言われなかった。
普通に門をくぐってしまった。街の中へと入る。なんだろうな。

中は所謂ファンタジー系統の街並みだった。
石畳に石煉瓦。建物の高さも三階建てが精々がんばったほうみたいな感じだ。

剣の形の看板や盾の看板。宿施設などが並ぶ。

「思ったよりは栄えてるのかね」

「うーん。之だけで判断するにはちょっと物足りない感じ？」

文化レベルはそこそこ。地球でも大都市ほどのレベルではない。

色々と店に入ってみるが店員の対応もソコソコ。

ただ、機械がない異常はある程度の水準には届いていないようだ。

宿に部屋を取ってから街の中を散策する。

分かれて探す、という案はすずかの「一人で動くよりもカップルに偽装したほうがいいよ！絶対！」と押し切られたのでそうなった。

今は大通りを腕を組んで歩いてる。

文化レベルはソコソコにあるものの、魔法文化が取り分けて高すぎるのが目に付いた。

街灯の明かりも魔法だしよくよく見たら建物の壁などは補強魔法で立てられている。

となるとあの聳え立つ城も補強されて立っているのか。でないとあの高さを維持は出来ないだろう。

「あの城も調べたいけどさせてはくれないだろうな」

調べられたらいいんだけど。まぁその前に町の方を調べるか。

そこら辺を歩く人に色々聞いてみる。すると此処が国であること、

「エネミア」という名前があること。

国王がいて政治を行っていると言う事。

魔導を研究していると言う事。

魔導、ね・・・其処が引っかかった。

どうやら研究するための施設があるようだ。すずかもそこが怪しいと判ったようだ。
調査に時間が掛かってしまった。陽も落ちてきた。
宿に戻り明日の行動を決める。
すると窓から恭也さんが入ってきた。

「其処は窓だ。次からはドアから入って来い」

恭也さんが混じって話し合う。どうやら俺達を後から付回してた奴らがいたらしい。
今日はまだ偶然と言う事もあるので見逃したらしい。
明日もいるならその時は対処すると言う事。

明日は研究施設のほうを中心に調べると言う事でお開き。今居る部屋はすずか専用にして隣の部屋に俺と恭也さんでとってある。
・・・流石に一緒にはもうねないぞ。

あとは外の待機組にも報告しておこう。
ティーダはそのまま待機させて・・・アリサも街に呼んでおく。
アリサとすずかと一緒の部屋。

さて・・・明日も動くから今日は静かに寝よう。
ティーダ?森の中で一人で野宿してる。

第六十七話　セイギノアカ

恭也Ｓｉｄｅ

空がまだ白く変わる前。俺は一足先に魔導研究施設という場所への潜入を試みていた。
これだけ早い時間ならそんなに人も居ないだろうと見て、だ。
思惑通りに大通りなどに人は居なかった。

朝の店の仕込みすら始まっていない時間。
黒を貴重とした暗部用に作られた服の俺は屋根から屋根へと静かに渡り飛ぶ。

「こういう任務ばかりだな、俺は――――」

昔からそうだった。闇に隠れ陰に潜み相手を殺すだけの武術。
それが小太刀二刀御神流。だが俺と美由希は違った。
純粋に技を鍛えて心身を鍛えるため。
だがそれは違った。結局はこういうことの為なのか？

否。

家族を守るために得た力だ。
なのはを助ける為にと言う事で力を貸している。
あの少年はそういって俺を欲した。

あれからどうだ？なのはは傷ついているか？
あのときだけだというなら何故俺はこうして今も闘いの中に居る？

「　　フフッ」

不意に笑みがこぼれる。
あぁ、そうか俺はそうやって正当性を求めていたんだ。
この刀を振るう名目がほしかったのか？
ただ強くなり続けたいから。闘いの中に身をおくことで己を磨き続けると言う。

それなら俺が今いる場所は最適の場所だな。
だが家族も守るさ。それが御神流だし。

施設の中にもぐりこむ。表立って動くのも危険なのでダクトの中を移動。
気配を出来る限り殺して進む。時折聞こえるのは下の通路にいる衛兵の声。
どうやらこの先に何かがあるらしい。
この施設がなんなのかよくよく調べていかないとな。

すずかＳｉｄｅ

朝も過ぎて空が明るい。夜があったんだし朝もあるよね。
この辺りは地球とかと同じなんだ。ミッドもそういえば同じだったね。時間とかどうなんだろう。
隣のベッドに寝てるアリサちゃんはまだ寝てる。
そういえばこうやって
時計がないから今がどのくらいかはわからないけどでも結構経ってそう。

おなかが・・・・・。

「うん、お腹空いたね」

ベッドから出て髪を梳く。青み掛かった黒髪は真っ直ぐに朝陽を撥ね返す。
まだ気持ちよさそうに寝ているアリサちゃんを起こさないように部屋を出ればミラージュくんがいた。

「よ」
「よ」

手を上げて同じ返事を返す私。

「恭也さんはもう出た」
「あ、そうなんだ。あの施設？」

と告げられると今日の動きを伝えられた。
『街の中を調査しつつえらそうな奴を見つけ出せ』

アリサちゃんがまだ寝てると伝えると後で伝えるからと言う事で私は朝食を取りにいく。
この世界で私が食べられるものがありますように。

ティーダＳｉｄｅ

森の中いまだ睡眠中。

「うひっ・・・・ふへへへへ」

夢の中までは見ない。

（＊この小説は健全です！）

ミラージュＳｉｄｅ

すずかに指令を伝えてから俺は外に出る。今日は街の散策を予定。

宿を出ればもう日差しが暑い。宿の主人に頼んだこの国での服を借りる。

着込めばこれで奇異な目で見られることはない。

「さて、まずは何処に行くか」

大通りに出てから俺は歩き出す。とりあえず適当に歩けば何かあるだろう。

暫く歩いてると屋台が出てる。どうやら市のようだ。

軽食や串ものとか。地球とあまり変わらない。

まぁ・・・見た目はグロいが。

「賑わいはあるんだな」

一つ一つ屋台を見ていく。イカみたいの串とか〇〇串とか。

・・・おでんモドキもあるとか。どんだけー。

通りを変える。少し薄暗い通り。裏通りへ。こっちは本屋やらがある。

露天提示してる本を見る限りではこの国の文字を読むには時間が掛かりそうだ。
本屋を抜けて更に裏通りを歩く。
すると、段々雰囲気がじめじめとした感じになってきた。
大通りからは予想も出来なかった位の荒れ放題な通り。

周囲を見渡せば腐敗臭の元も見つかったりと様々。
それでも俺は足を止めずに進む。之くらいは何度も見てきた。
まぁこう言う通りを歩けば出てくるよな。
前の方から歩いてくる三人の男。明らかな格好をしているあたり、どの世界でも同じと言う事だ。

「へっへっへ。兄ちゃん此処何処だかわかってんの？」
「ひぇっひぇっひぇ。この先は通行止めでーす」
「ヒャッハー！汚物は消毒だぁー！！」

鼻ピ、出っ歯、モヒカンが俺の進む道の邪魔をする。
約一名世界が違うとか思っても口にはしないが。

「へっへっへ。此処通りたきゃ金だしな！この通路の通行料はチトたかいぜぇ！！！」

腰からナイフを取り出す鼻ピ。刃物の長さは約２０ｃｍほど。それなりに殺傷力はありそうだ。

俺以外には。

進めなくなってしまったので足を止めた俺を囲むように三人が回り

こむ。

すずかＳｉｄｅ

ミラージュくんに言われたとおりに街の中を歩きながらお城のほうを目指す。
大通りを歩いていれば大きな市場に出る。
市場には特産品が多く売られ、賑わいを見せてる。
大通りの先には昨日見た城が聳えている。

えらそうな奴と言えばお城だよね。安直過ぎるかな。
第一行っても逢えるわけない、よねぇ？

「ふぅ・・・結構歩いたけど遠いね。そして大きい」

まだ通りの真ん中ら辺だというのに城は大きく見える。
一体どの位の高さなのかまったく目測が出来ない。
よくよく見ると大きな岩の上に立ってる感じ。
窓のように穴があって事は刳り貫いてるのかな。

うん。このまま街の中をぐるりと回ってから城の方に行ってみよう。
何かあれば報告する情報が増えるしね。

アリサＳｉｄｅ

うーん・・・眩しい。
意識が覚醒すると瞼の外から入り込んでくる光で目が覚めた事を自覚する。

「すずか・・・・？」

一緒に寝てたはずのすずかがいない。
何処に行ったんだろう。明るくなっているなら朝。
なら朝食でも取りに行ったのかな？

「私も何かたべよ」

ベッドから降りると見慣れない部屋の光景。
あぁ・・・私今違う場所にいるんだっけ。

まだはっきり起きてないなぁ。寝ぼけてるのかなぁ。
こんなに朝弱かったっけ。
でもまぁ、仕方無い。寝巻きから制服に着替えると部屋を出て朝食を貰いにいく。

ティーダＳｉｄｅ

流石におきていた。起きてるッスよ。

「でも流石に何か食べたいッスね」

おなかがくうくうなりました。

ミラージュＳｉｄｅ

裏通りで三人の男に絶賛絡まれている。
ここ数年で体験していない事を今体験中だ。
これはこれで貴重だな。

「大人しく金置いてった方が身のためだぜ坊主」
「ひぇっひぇっひぇ、怖くて動けないか？」
「ヒャッハー！汚物は消毒だぜぇー！！！」

在り来たりな台詞回しでうんざりする。
どうしてこの手の奴らはどの世界でも同じ事しかいわないのか。
今度研究してみるか。

「悪いが金は持ち合わせてない」
「ぁあ！？んだと手前ぇ。金持ってねぇんだったらぶっ殺すぞ！？」

鼻ピがナイフをブンブン振り回す。チッ、この低脳め。
そろそろ鬱陶しいな。消すか・・・・？

「待てぇい！！」
「な、なんだっ！？」
「どこだっ！」
「あ、あそこだっ！！」

いきなり聞こえた声に俺を含めた全員が見上げる。

その視線の先には陽の光を逆光に背負うシルエット。

「裏通りに巣食う悪の種。俺はそれを許さない！トウッ！」

・・・・・・・・。

シルエットが降りてきた。赤いマフラーに赤いスーツ。いや、全身タイツ。

そして赤いメット。

「いたいけな少年を襲う悪漢どもめ！このビリージャーがお前達をゆるさない！」

名乗りとポーズ。そしてあの格好。

何で此処にヒーローがいる。

「な、なんでこいつがこんな所にいるんだよ！？裏通りまで来るなんて聞いてねぇぞ！？」

「悪が蔓延る場所に私は常に現れるのだ！さぁ少年よ。ここは私に任せて逃げるんだ！」

なんかショーが始まった。これ、見てないといけないのか？

本気の殺陣が始まる。明らかに一方的だけど。え？ここってそういう国？

しかしこのヒーローから魔力を感じる。身体強化魔法（フィジカル）と物理攻撃防御（プロテクション）。

数分したら三人はノされて逃げ出す。お決まりの文句もある辺りどうみても三文芝居にしか見えない。

「無事か、少年。此処は危ない場所だから少年みたいなのが来てはダメだぞ？」

「魔力を使ってまで追い払うほどの相手とは思えなかったけどな。だがまぁ礼は言っておくよ」
「ふむ。これに気付いたか。ならば君はファーベルに連なる者なのかな？」
なんだ？魔力系統の話はどうやら統制してるのがいるみたいな言い方だ。
「ファーベルというのはなんだ？教えてはくれないか？」
「本当に知らなそうな顔だな。ファーベルというのはこのエネミアにある魔導研究施設の名前だ。
魔導を遣うなら其処に顔を出さねばならないはずなのだが・・・・君も魔導を持つ者のようだね」
あの施設の名前か。ファーベルね・・・。
「施設の名前はわかった。顔を出すと言うのは？」
「うむ。魔導に関わるのならばまずファーベルに行って登録しなければならないのだ。
所謂登録認可制だな。それでやっと魔導使用の資格が与えられる」
つまり、あの施設は魔法を使うための役所みたいなものか。
しかし「研究」とつくなら魔法の研究をしてるっぽいな。
まだ今の状況と情報では邪推に終わりそうだ。
「で、あんたは？」
「私の名はビリージャー。正義を愛する者だ」
赤いマフラーを翻す。だがさっきの殺陣の間ずっと身体強化魔法がかかっていた。

あれならチンピラ程度なら充分だろう。

「この国と魔法・・・魔導か？詳しく話を聞かせてくれないか？」

「今日は平和な朝だ。時間が許す限り正義を説こう」

何かこいつは知っている。そう直感が走り抜けた。

恭也Ｓｉｄｅ

施設の恐らく中程。かなりの奥まで来た感じがする。

とはいえダクトの中だから正確な距離とかはわからないが。

今いる場所の下は誰もいない部屋。此処から入るか。

網格子になってる部分を綺麗に静かに外す。

格子をずらしてから部屋に下りる。

装備の確認をしつつ部屋の中も確認する。

巨大な箱がたくさんおいてあるだけの部屋。

恐らく倉庫なのだろう。

誰もいない部屋の中を探索してもあるのは雑多な雑貨ばかり。

此処には何も無い事を確認してから気配遮断魔法を使ってから部屋を出る。

出来れば変装用に服がおいてあればよかったんだけどな。

そうすれば余計に気配も無くなる。

通路を抜けながら奥へ。奥、と言っても本当に奥なのかは不明だ。

時たま出会う白衣は恐らく研究員。気殺しながら近づいて延髄に一撃。

命まではとらない。気を失わせてから先に進む。

「何かしら研究してるのは間違いないな。あとは何を、って所か」

白衣なんぞ着てやってることなんか限られる。技術職だし。

だったらそれを調べるのも必要だ。一応任務は任務。

連絡はあとでいいか。之ならまとめておいたほうが良さそうだ。

周囲には誰もいない。通路を進もうとした一歩目。

「貴様、何者だ。その格好からして研究員ではないな?」

急に後ろから声を掛けられる。向けられた声は無機質。だが咄嗟に

小太刀二刀を抜いていた。

後ろを向くと其処には小柄な白衣を着た黒尽くめの女が立っていた。

第六十八話　序動

恭也Ｓｉｄｅ

声を掛けられた。周りには誰もいなかった筈だ。気配感知も動いてた筈だ。
其れなのに。何故この女は俺の背後にいる？

「もう一度聞くぞ貴様。何処から入ってきた。そして何者かを説明しろ」

無機質みたいに冷たい声。黒尽くめの服の上に白衣を着た女が問い掛けて来る。
背中に汗が垂れるのを細かく感じる。
無意識に俺は小太刀を抜いて構えていた。

「間者か。よく此処まで入り込めたものだな。この研究所の中に入り込むとは大胆不敵よな」

女の口角が上がる。笑っているのか。
俺には女から発するプレッシャーで押し潰されそうだと言うのに。
背は俺より低い。それでも俺を上から見下ろすような感覚。

「何もいわぬか。それなら頭に直接聞く事になるぞ。痛いぞ？」

笑みを絶やさぬ女が左手を方の高さまで上げる。
ざわ・・・と魔力を感知する。

「クッ・・・御神、不破！」

小太刀二刀に仕込んだデバイスを起動させる。魔力を徹す。
そうだ、此処は魔導を研究する場所という前情報があったのに。

「ほう・・・面白い玩具を使うな。なんじゃそれは」

デバイスを知らない？そういえば此処は管理外世界か。なら管理局の情報が無いのも頷ける。

「さてな。知りたければ俺を倒せばいい」
「至極簡単で当然の答えじゃな。良いぞ、ならばその望みを叶えてやろう」

魔方陣が通路全体に広がる。その中でも５つが女の周囲で回転するように身に纏う。
いろんな色の魔法陣が広がっている。魔力も膨れてきてる。

「さぁ、貴様はどんな声で啼くのかの？」

背中に何かが見える。魔力で作り上げたナニカだと思うが・・・・
あれはなんだ？
まるで放熱板。それが１０枚。

「まるでアレと同じだな・・・」

此処まで来た戦艦津名魅に搭載された光鷹翼。あれも１０枚展開だったはず。
まだ実際に見たことはないけどな。
そんな事よりも今頭にあるのは一つの事だけ。

「あぁ・・・俺ピンチだな」

逃げる場所も無い。だが俺は薄く笑みを浮かべていた。

すずかＳｉｄｅ

少し陽が動いてから私はお城の下まで辿り着いた。
此処まで歩くの大変だよ。帰る時はナニカ乗り物か何かあればいいな。
飛ぶのはダメだってミラージュくんに言われてるからなぁ・・・。
帰る時は帰る時に考えよう。今はお仕事、だね。
城門みたいな所の前で中を覗いてみる。
門番さんがこっちを睨むように見てるのが怖いな・・・。
本当のこと言って見せてくれればいいんだけど。
中を覗いていると少し先の広い場所にいた女の人が声を掛けてきた。

「どうしたおねえさん。中に何か用？」
「え、あ、いいえ。特にはっ・・・」

急な事だったから驚いちゃったよ。目があったらすぐに話しかけるんだもんなぁ。
パッと見、細身なんだけど筋肉が凄い。格闘家の人みたい。

「そうか？まぁならいいけどナ。あんまり城の中覗いてると捕まっちまうぞ」

ケラケラと笑いながら物騒な事を言ってくる。
まるで私が不審者・・・・なのか。覗いてるだけでも。

「ありがとうございます。では私はお暇しますね」

恭しく礼をする。ここはお師匠様である吸血姫から教わっている。
無礼は死と同義である事も。文化も何もかもが違うこの世界で通じるかどうかは判らないけど。

「へぇ。ちゃんと礼は知ってるんだナ。うん、中に入りたいのかい？」

そりゃ中に入りたいけど。仕事っていうか言われたのはえらそうな人を調べろって事だし。
お城の中なら偉そうな人っていうか偉い人ばかりだよね。
でもこのお誘いは受けても大丈夫なのかな。

「別に捕って食いやしねぇから安心せぇや」

う。心の中を読まれた感じだ。之で否定したら流石に悪い。

「じゃ、じゃぁお願いしてもいいですか？」
「あぁ。入っといで」

手招きされるままに城門をくぐる。見上げるのは城の高さ。

「なんだイ。お上りさんかい。珍しいね」
「そうなん、ですか？」
「そりゃぁネ。この国しかないからね今は。あとは集落程度さ」

タオルで汗を拭いてから私を見る。
何気に教えてくれた事が重要すぎるんですけど。
ラファエル、今の音声データ取れた？
指輪状態で待機モードのデバイス、ラファエルが振動で答えてくれる。
声が出たらばれちゃうかもしれないしね。

「ほら、どーした。くるのかこねーのか」
「あ、はい。行きます」

こうして私はお城の中に入る事が出来た。

ミラージュＳｉｄｅ

突如現れたヒーロー、ビリージャーの話を聞く為に大通りに移動した。
誘われたのは酒場。昼前からやってるとか凄いなこの国。
適当な席に座る。窓際の席だ。

「で、少年は何が聞きたいのかな」
「この国について全てを」

いきなりの切り出し。
しかしもしかしたらその中に目的の組織がいるかもしれない。
だとしたら此処で話を聞くのも必要だ。

「全てといわれてもな。そうだな・・・何処から話せばいいか」

赤い男――――全身タイツからして男の体型――――は椅子に深く腰掛ける。

「まず此処は魔導の本拠地といってもいい。魔導があってこその生活基準だ。
何をするにも魔導が必要になる。だからこそそれを正確に扱えるように魔導使用資格がある」

資格、ね。管理局と同じ要素が見えるな。

「勿論資格を持ってなければ魔導を遣う事は禁止されている。更に限られた人間しか攻撃系魔導は遣えないってのもな」

「・・・あんたのそれは身体強化と物理防御だろ？それはどっちなんだ？」

「私のは戦闘型だが攻撃系にも加わるな。少年の睨んだ通り私も限られた人間というわけだ」

すんなり認めてきたぞ。

「だがこれも全て政府が管理している。俺達の魔導の使用痕跡などはファーベルで履歴が蓄積されていく」

なるほど。つまりは遣えば遣っただけデータが残ってるわけか。

「私の場合、正義の行いをする事が魔導使用の契約でもあるのだ。
つまり正義のヒーローであり続けることが魔導を遣い続ける証でもある」

魔法の使用の制限か。そうでもしないといけないほどに過去に悪用

でもするのがいたのか？

「あぁ私から言えるのは之くらいだな。短い内容だが其れくらいまでしか言えないんだ」

「いや、話が出来ただけでも充分さ。ありがとう」

なんでこの世界でこんなのがいるのかは調べない方がよさそうだ。

兎に角彼とはここで別れる事に。

充分な情報は得た。今はこれだけでも豊富だ。

酒場といっても何も注文してなかったのでそのまま店を出た。

そういえばあいつらは今何してるんだろうか。

アリサＳｉｄｅ

やる事がないので街の中を散策しにいく。

そういえばティーダ隊長はまだ外にいるのかしら。ご愁傷様。

宿のおっちゃんにこの町のスタンダードな服装を借りる事にした。

でもこのままだとなんかダサイからオリジナルテイストを出して改造。

うん。やっぱり自分の手で改良した方が着心地がいいわ。

で、街の中を歩いてるんだけど。

なんというか、ヨーロッパテイスト？石畳がいい雰囲気だしてるわよね。

入り口があっちで、あっちにお城。でっかいわよねぇ。

どっか軽くぶらつくかなぁ、って事で。

通りの方を歩いてみようかな。軽めのウインドウショッピング。
とはいえまだこの世界の通貨を持ってないから買い物は出来ないけどね。
宿屋の支払いはミラージュが何とかするっていうから大丈夫でしょ。
でも少しくらいは持っていたいわよねぇー。
あとで顔見たら言ってみよう。

大通りの市場を見て回るとなんとも活気に溢れている。
鼻歌交じりに出店を覗いたりするとおっちゃんが景気よくりんごを一個とかくれる。

シャリ、と一口食べながら散策。
別に人目を気にしないでいいと思ったらなんでもやれるもんね。
こうして食べ歩くなんて小学校以来かも。

こう言うのも楽しいわね。任務中だけどさ。
たまには生き抜きしないと。
すずかも恭也さんも動いてるし私はその後。いつでもみんなのバックアップで動けるようにしておかないと。

「・・・・と？」

視線が周りに向いてたから正面から来た女の子に気付けなかった。
ぽすん、と私の懐に入り込んだその子はぶつかった事でやっと私に気付いたよう。

「あ・・・ご、ごめんなさい！」
「あぁ、うん。別にいいんだけど。大丈夫？」
「は、はいっ。私は大丈夫です！すいません、ごめんなさい！」

綺麗な長い銀髪が流れて靡く。擦れ違うように去っていく女の子は急いでるのか小走りで市場を通り抜けていった。

「なんだったのかしら・・・」

少ししてからいかつい顔の連中が市場を通り抜けていった。

恭也Ｓｉｄｅ

緊張感の中俺は女と対峙している。
少しでも動くとヤバいことは本能がシグナルを出している。
顔に汗が伝う。顎から垂れる幾つもの汗は地面をぬらしていく。

熱い。暑い。

神経が研ぎ澄まされて尚、疲労していくのがわかる。
空気の流れが肌で感じ取れる。
鋭利な刃物のような集中力で女を見ている。

女は不適な笑みを浮かべたまま周囲の魔法陣を展開しつつまるで獲物を狙う捕食者のように俺を見ている。
此処までの重圧も久しく受けた事がなかったな・・・。
あぁ、そうだ。今俺は――――――満たされている。

そう感じ取った瞬間、俺は口元が緩んで笑みを浮かべているのが判った。

「あら。貴方も笑うのね。この状況で笑えるなんて」

「褒めても何もでやしないぞ」

幾度も頭の中でシミュレートする。
剣と魔法でどうやって勝てと言うのか。
・・・・・フ。面白い。

「何をこんなに畏まってたんだろうな。俺は結局剣(これ)しかないというのに」

吹っ切れた。なんか頭の中で何かのスイッチが入った感じ。
どうせ逃げれないなら今の俺が何処まで出来るか試すのも一興、だろ?
御神と不破を握りなおす。さぁ、此処からが本番だ。

「行くぞ。我が神速を知れ」

御神流独特の特殊な歩法で動き出す。それはまるで陽炎のように揺らめく。
さぁ、始めよう。さぁ此処からだ。

「死を覚悟でもした?なら慰安すぐに殺してあげましょう。そして私の研究の礎となるがいい」

展開していた魔法陣がさらに回転を上げる。
赤・蒼・黄・翠・橙の色の魔法陣其々から光の帯が射出された。

砲撃?集束砲?しかしこんなせまい空間で打ち出すなんてな!
光の帯一本は細い。俺の腕ほど位しかないが速度が速い。
それが所狭しと俺に向かってくる。
女に向かって一直線に向かう所でスキマを埋めるように中心へと寄

ってくる。
回避が出来ないなら俺はっ・・・・！！
光の帯をギリギリで抜ける。頬を脇腹を肩を掠めていく。
一本は左肩を貫通するように抜けていった。ちっ、全弾回避は無理だったか。
光を抜ければあとは女のみ。
背中にまだ残ってる放熱板はまだ動かないのが怖いけどな。
だがやるしかないんだよなっ・・・。

「おおおおっ！！！！」

左腕は貫通された肩のせいで動かない。右腕で以って斬撃を浴びせる。
が、それも障壁で防がれた。均衡する剣と障壁。光の帯は徐々に消えていく。射出した魔法陣も。

「ほう。まさか真っ向から向かってくるとは思わなんだ。そういう闘い方もあるのだな」
「まるでこういう闘い方を知らないようだな。だったらレクチャーしてやろうか？」
「フ。良くも吼える」
「な・・・うっ！？」

障壁が消える。その衝撃は弾ける様に俺に襲い掛かってきた。
服を裂く衝撃で折角近づいたのにまた離された。

「貴様の闘い方は興味がでたぞ。魔導を放たずに闘うなどまだデータが少ないからな。実にいいモルモットになろう」
「やってみるがいいさ。その時には喉元を切り裂いてやるけどな・・

・」

「戯言、よな」

また魔法陣が形成される。さらにスフィアと放熱板までもが動き出した。

ハッ、徐々に実力を出すってタイプか。

「その身、骨まで残さずに散るがいい。このデータは私が使ってやる」

一斉射出。なんという弾幕。だが避けれないわけじゃない。針の穴のような隙を見つけるために俺は回避する。

全てを回避できるわけは無く、幾度も喰らっては動きを止められる。

その度に集中攻撃をくらいそうになるが紙一重でなんとか直撃を避けた。

ここまで魔法に対して動けるようになったのもこの一年の修行のお陰か。

「なぜだ。何故当たらぬ！えぇい、止まるがいい！」

何度も回避していればタイミングが掴めてくるものだ。

射出のタイミングと純場さえわかればあとは回避も出来てくる。

「甘いわ。何度同じ行動したと思うておる」

俺の足元に魔法陣――――――じゃらり、と魔力の鎖が足を絡め取る。

「バイントかっ！！？」

意識が向いてしまった俺に向かって幾筋もの光の帯が向かってきた。

直撃必至。ここで終わるのか？なのはの手助けもできないまま。なのはにうちあけもできないで。

家族を置いて俺は先に散るのか。これが御神の剣士の行く末だというのか。

脳裏をフラッシュバックする記憶。

迫ってくる光は回避出来ないほどに視界を埋めていた。

やがて俺は巨大な音と共に光に飲み込まれる――――――――――――

はずだった。

向かってくると思った光の奔流は俺を襲うことなく掻き消えてきた。
周囲の魔力反応も薄い。
状況を把握しようと耳がガラガラと瓦礫の音を捕らえる。

「何事だ！」

女が叫ぶ。女にとってもこの状況はつかめていないイレギュラーらしい。
だったら。何が起きたんだ。埃煙が立ち込める中、俺は一人の男を見つけ出す。

「大丈夫か、恭也」

埃煙が納まる中で黒い執務官服を着て銃を構えた男が瓦礫の上で立っていた。

「ティーダ小隊長・・・」

第六十九話　流転

ティーダＳｉｄｅ

外壁の外でずっと魔力反応を追いかけながらチームの動向を見ていた。
だから今、恭也さんが危機だと言う事も認識できた。
魔力反応のある場所は仰々しい建物。ただし二階はなく広い建物。
その上で魔弾を放って天井をぶち開けて下の通路に降りる。
瓦礫が邪魔をするけど今はそれ所じゃない。
下に下りれば見慣れた顔と見慣れない顔。
見慣れない顔にはとりあえず銃口を向けておいた。

「何者じゃ！痴れ者が！！」
「名乗るほどのモンじゃないッスよ」

実際そんなに名が売れてるわけじゃないし。

『恭也さん、今俺が空けた穴から外へ。すぐ外に通じてますからそうしたら城の見える方向と逆に飛んでください』
『っ・・・了解した。すまない』

念話で恭也さんに逃げ道を指示。こうも狭閉所だと彼の戦闘スタイルでは１００％のパフォーマンスは見込めない。
銃を向けて牽制しつつ恭也さんの行動時間を創り出す。
すると恭也さんが動き出した瞬間に向こうがスフィアから一発打ち出してきた。

「っ！」

銃口が打ち出した魔弾を狙って射出する。相殺させて魔弾同士は消滅した。

同じ威力であるなら相殺は可能。つまりはこっちの魔法と同義の存在。

此処にきて更にデータを得る。

「そんな手はさせないッスよ」

「チッ・・・邪魔をするなら貴様もバラしてやろうか」

「それは出来ないッスねぇ。出来る事を吐いた方がいいッスよ」

牽制の会話の間にも恭也さんが上の穴から出て行った。

じゃぁそろそろ俺も退散としますかね。

「じゃぁそろそろ消えさせてもらおう。また逢うかもしれないけど」

「その制服は管理局の・・・執務官だな。その黒い制服は知っているぞ」

「・・・・・・」

管理外世界の住人が何故管理局の事を知っている？

しかもこの制服が執務官だと。

以前に執務官が此処に立ち寄った？予想は結局予想に過ぎないか。

「答えない。だがそれが答えでもない」

そう言い残して牽制したまま俺は上の穴へと身を躍らせた。

外に出れば既に恭也さんはいない。魔力反応を見ればもう外壁の外に出ているようだ。

俺もそれを追うように外壁の向こうへと飛び出した。

ミラージュＳｉｄｅ

赤いヒーローと別れた俺はもう一度大通りを歩いていた。
すると前の方から人の列を掻き分けるように向かってくる気配。
この通りに似合わない速度で動いてるのが全部で――――４か。
そのうちの一つは一番前を動いてる。

垣根を抜けるようにして俺の前に出てくる。
小さい体。銀髪。女の子か。なんて考えてたら避けるのを忘れてた。
俺の胸にぶつかるようにしてその突進は止まった。

「ふぇっ！？」

ぶつかれば変な声をだして一歩後ずさった。

「大丈夫か？」
「あ、はい！すいませんでした！ごめんなさい！」
「いやいいんだけどな」
「おい！その男、離れろ！死にたいのか！」

後ろから追いかけてた三人がおいついた。見るからに用心棒っていうか。護衛っていうか。

「ひどい言い方だな。俺はぶつかっただけなのに」

ビクッ、とおびえながら俺の背中に隠れる。

「どうやらこの子は行きたくないようだが？」
「うるせぇ！やっちまうぞ！俺達を誰だと思ってやがるんだ！」
「くふふふふ。俺達は攻撃系魔導使用資格持ちなんだぜぇ？お前みたいなひょろいのがかなうわけねぇーんだよ！」

・・・なんだろうな。
この如何にもな捨て台詞と。そして絡まれるのは3人というのはこの国ではよくある事なのか？

この三人が攻撃系の資格を持ってると聞こえると市場の中が騒然とした。
それだけ攻撃系魔導が危険だという事か。
屋台に群がっていた店主やら客が一斉に俺達から離れて距離をとっていく。

「あの・・・あの三人の攻撃魔導凄いんです！貴方も逃げ・・・ふみゃ？！」

背中で俺を逃がそうとしてくれるのはいいがね。
まだこの国の魔導ってやつを味わってないんだよな。
何処までのものか試しておきたい。
こういう三下でどの程度のものなのか。

「いいぜ。こいよ。俺を倒したらこの子を渡してやる」
「ハッ！お前聞いてなかったのか？俺達は攻撃系魔導の使い手なんだぜ？
俺達に勝てるやつなんざ政府の奴らくれぇよ！！」

よし。良く言った。その政府ってやつには興味が出たがあとでなんとかしよう。

魔力値があがっていく。肌で感じるほどにビリビリと。
だがそれは空気を振動させるくらいでたいしたことないな。
まぁ三下だししょうがないか。

「へッへッへ。どうだ！これだけの魔導はそういねぇ！」

三人の中の真ん中が誇らしげに胸を張る。
どうやら放出系のようだが・・・見掛け倒し？

「・・・・其れで終わり？」

呆気に取られながら聞いてしまった。
やれやれ・・・放置してもいいかもしれない。

「えっと・・・お嬢さん？」
「は、はいっ！？」

後ろの子に話しかける。俺が話しかけるたびにビクつくのやめてくれるかな・・・・自信なくすから。

「あれ、追っ払ってもいいんだよな？」
「で、でも強いですよ！」
「あー。そうなのか。どうするかな」
「にげましょう！」
「そーしましょ」

女の子の手を掴んで後ろに向かって走り出す。
女の子も引っ張られるままに走り出すと突っ掛けてしまって上手く走れない。
途中腕を引っ張って抱えるようにして走りだす。

勿論後ろに三人ついてきた。

「面倒だな。口閉じてろよ。舌噛むぞ」

「ふぇっ！？」

想いっきり踏み込んで跳躍する。屋根と同じくらいの高さで飛べばそのまま停滞する。

不可視の魔法陣をだしておけば管理局とはバレないだろう。

「な、なんだ！？空をとんだぞ！？」

「馬鹿な！空を飛ぶ魔導なんてそれこそ最新魔導じゃねぇか！」

女の子は小脇に抱えたまま空中を歩いて大通りの空を散歩しながら宿に戻る事にした。

すずかＳｉｄｅ

運よくお城の中に入れた私は今、城門で知り合った人と一緒に城内を歩いている。

「しかしまぁなんでまたこんな場所に来たってんダ？この国の城なんて見るもんねぇのに」

「それはまぁ・・・これだけ大きなお城ですし。興味っていうか」

「まぁ気にしちゃないけどナ！どーんといりゃ平気だ」

なんというか。豪快さんです。

その後ろをついていくと食堂っぽい所に連れてってもらえた。

「そういやまだ名乗ってなかったあか。私の名前はチェリア。チェリア＝カノウ」
「月村すずかです」
自己紹介もそこそこに席を促されるままに座る。
チェリアさんはキッチンと話し込んでから二つのプレートを持ってきた。
「ほいよ。まずは腹ごしらえからだ」
そういえばこの世界に着てからは準備していた固形食しか食べてなかった。
目の前に置かれたのは食事プレート。
見たことのないものが並んでるけどこれ食べられるの・・・？
「どした。食わんの？」
じ、と見つめてくるんだけど・・・その視線は食べづらいよ。
でも折角の好意だから一口食べてみる。
「どうダ？うまかロ？」
あ。美味しい。不思議な味。なんていうか地球にはない味。
表情に出てたのか私の顔を見たチェリアさんは嬉しそうに笑みを向けてきた。
「此処の飯はサイッコーにうまいんだゼ。何気に誰も知らないんだ」
「うん、美味しいですね。こういう味も初めてです」

見た目はアレだけど。でも味は下手な地球のものよりも美味しい。
箸・・・じゃなくてスプーンが進む。色とか形にとらわれなければいけるね。
あとで皆にも教えよう。
ここの世界のご飯も中々いける、って。

見た目通りに豪快に食べ続けてるチェリアさん。
私は私のスピードでご飯を片付けていく。

「でもこんな場所で食べてて怒られませんか？」
「ん？心配性だなスズカは。だーいじょうぶだってノ」

其処まで言う位に安全？ってことかな。

「此処は私の好きな場所でナ。いっつも此処にいるんダ」
「主さんでしたか。それならなるほどです」
「まぁ、私にとやかく言うのはそんなにいねぇからサ。堂々としてナ。あと、町とかで何かあれば私の名前をだせば大抵の事は何とかなる」

女の直感が冴え渡る。此処までいうならきっと其れなりの地位がある人に違いない。
ミラージュくんが言ってた偉そうな人に逢えたのかもしれない。

ミラージュＳｉｄｅ

女の子を小脇に抱えたまま窓から宿に入る。
部屋に入れば其処で女の子をおろしてから窓際にある椅子に座る。

「あぁ、此方からは特に何もする事は無いから。追われてたのを助けたって形になった訳だしその理由を聞かせてほしいね。
そうすればすぐに解放するよ」

部屋の中央でたったままの女の子。窓際の椅子に座ってる俺。

「逃げるなら逃げるで構わないよ。鍵も掛かってないからすぐに出られる」
「・・・・・・・・・・・・」

女の子は黙る。うん。これは誰かに見られたら間違いなく誤解される。
その部屋の向こう側。廊下を歩く気配。これは――――――

「帰ったわー」

ガチャ、と扉をあけて入ってくるアリサ。
目が合う女の子。
俺と女の子を交互に見るアリサ。

「なにしてるの・・・・・ハッ!?まさか!!!?」
「待て!違うぞ!考えてるのとは違う!」

慌てて弁解しようとするがアリサは話を聞いてくれない。聞けよ!

「じゃぁなんだというの!?こんな女の、子を・・・・・あれ?」
「追われてるのを助けたんだよ・・・どうかしたか?」
「いやぁ・・・さっきぶつかったのよ。そうそうこんな銀色の綺麗な髪の毛だから覚えてたわ」

ちら、と女の子を見るとコクコクとうなづいていた。
アリサのいうことに対してなのか俺の言い訳に対してなのか両方なのかはわからないけど。

「お名前は？」
「あ・・・サリュアです。サリュア＝アシュクレヴィオスといいます」

頭を下げればパサ、と動く銀髪。

「アリサ＝バニングスよ」
「ミラージュ＝ヴィジョンだ」

互いに名を名乗りあう。

「俺よりもアリサに頼むか。この子を頼む」
「ん。そうね。女の子同士話も弾むかも。任せて」
「あぁ。それと、デバイスの待機状態くらい持って歩け。心配でしょうがない」
「ふぅーん？心配なんだ？私のこと」
「・・・いいからいけ。ほら」
「はいはーい」

アリサが隣の部屋にサリュアを連れて行く。
これからどうなるんだ。一体。

『隊長。ちょっといいスか』
『ティーダか。どうした？』
『恭也さんが敵との戦闘に入ってたんですが分が悪いんで助けちゃ

いました』
『恭也さんを圧すほどの相手がいたってのか』
『魔導、というか魔法に酷似してましたね、今思うと。あと俺の制服を見て管理局とはっきり。執務官だとも』
『管理外世界で管理局を理解してるというのか?あとで話に行く。今は外壁の外にいるのか?』
『はい。ビバーグ地点で今恭也さんと一緒ッス』
『判った。時間を取ってそっちに行く。その時はこっちから連絡する』
『了解』

ティーダからの念話。どうやら恭也さんが圧されるほどの相手がいるのか。
しかも管理局を知っているだと?
詳細はあとでディスカッションだな。

すずか以外は把握した。ソロ任務もあいつなら問題ないだろう。充分信頼できる。
しかし・・・まだ全容が見えない任務も珍しいな。

反管理局組織というのも多分恭也さんが突っ込んだ施設に間違いはなさそうだ。
なら後はその施設を調べていけばいい。
この規模でならレグルス隊だけで賄えそうだ。
グレイル隊やファントム隊を動かすほどにはならないだろうな。

やる事はたくさんだがほとんどが情報収集。
今ある情報をまとめておくか。

すずかＳｉｄｅ

「チェリアさんは・・・なんだか偉そうな人ですね」

私はカマをかけてみる。この返答次第では私の選択が変わるんだ。

「んー？そう思ウか？」

はぐらかす気ですか。それでも私はあきらめないですよ。

「でなきゃこんな無関係の私をお城の中に入れたりこんなに食堂で堂々と食事を勧めたりも出来ませんよ。

　これが下っ端なら上司に怒られて左遷です」

「アッハッハッハ！いいねぇ、その洞察力。それとそんな状況でも物怖じしない性格！気に入ったヨ！」

豪快に笑い飛ばすようにチェリアさんが膝を叩いて笑う。

「あぁ。その判断は正しいヨ。確かに私は偉いっちゃ偉い立場なんだろうな。

　一応この国の戦闘訓練を任されてたりもすっかんな」

あ、やっぱり。最初に見たとき確かにやってた。

汗拭いてたりしたのも訓練後だったからかな。

「で、訓練後の食事、ですか」

「ま、そんなとこだネ。あぁ、スズカ。そんな言葉使いじゃなくて普通に喋っていいぜ？」

「あ、はい。じゃぁ普通に」

チェリアさんが年上だったらどうしようって思って敬語使ってたんだけどな。
遣わなくていいっていうなら使わないでおこう。

「そんな人と知り合いになれて嬉しいですよ」
「まぁすぐには直らんか。いいけどナ。あぁ、知り合いだな。それにこっちからも思ってたんだ――――スズカ、結構強いだろ」

ドクン、と一瞬だけドキッとした。
まさか私の事がバレた？でも探査魔法とかも感じない。

「これは私の直感だガ。スズカは力を隠しているね。それも結構強い」
「いやそんな。私なんかまだまだ」
「わかるんだよ。強い奴の事は。匂いが違う。私には判る」

血の力の事、見破られた？隠してたんだけどな。まだ隠し切れないのか。制御が上手くいってないのかな。

「だからサ。そのうち遣り合えればいい。そう思って声を掛けた。それにそんな力の奴を勝手に街にうろつかれるよりは認識してたほうがいい」

いつのまにかチェリアさんも私も食事の手が止まっていた。
チェリアさんがいうには一度認識すれば気配でわかるそうだ。

「出来れば此処にいてほしいけどね。力のある奴は大歓迎だ。きっと王も喜ぶだろ」
「王様、か」

お城だもんね。王様だっているよね。
きっと逢う事はないけどイメージが昔見た絵本の王様になっちゃったよ。

「今は姫様もおられるし。弟王様もいらっしゃる。不自由は無いぜ」
「いいお誘いなんだけど・・・連れがいるので」
「なんだ。男か？」
「・・・・・・・・・どうなの、かな」
「ハッハッハ！煮え切らない答えだネ。男の方がはっきりしないのかね」
「・・・・・あはははは」

言われてるよミラージュくん。
でもそろそろはっきり言ってほしいってのもあるかな。
誰よりも先に言ってほしいってのはあるけど。

でも今はそれよりも。

「連れに話をしてみますね」
「ン。強い奴なら連れでも大歓迎サ。いつでもおいで。門はあけとくよ」

食事もそこそこに私はチェリアさんと別れて城を出た。

アリサＳｉｄｅ

借りている宿の部屋の一室を使ってサリュアと一緒にいる。互いに椅子に座ってリラックスムードに。

「気を楽にしてね。別にとって食べやしないから」

「・・・はい。大丈夫です。ごめんなさい」

なんか・・・やりにくいなんて思っちゃったけどダメね。

「答えたくなかったら言わなくてもいいわ。なんで追われてたの？」

「あの・・・私、家から飛び出してきちゃって。それで多分連れ戻しに来た人たちからあの人が・・・」

追われてぶつかったのをミラージュが助けた。って感じかしら。聞いてみたらそうだって答えてくれた。そのくらいは教えてくれるんだ。

あとは・・・・。

「家から飛び出すって・・・どうかしたの？」

「あの・・・笑わずに真剣に聞いてくれますかっ・・・！」

凄く真剣な瞳が真っ直ぐ私を貫いた。こう言う目は本気だ。

だから私も腹を割ってちゃんと聞く姿勢。

「うん。ちゃんと聞くよ。だから聞かせて？」

「実は――――あたしの家はあのお城なんです」

第七十話　エネミア（前書き）

短いですよ。

第七十話　エネミア

チェリアＳｉｄｅ

スズカが帰った後、まだ私は食堂で休んでいた。
あれだけの素材をみすみすなくすのも勿体無いよなぁ、なんて思ってるとアストが帰ってきやがる。
いつも通りの黒服に白衣。悪趣味でしかねぇ。

「お、これはこれはアスト様であらせられル。こんな時間に城に来るとは何がおありですかな」
「・・・ふん、貴様かチェリア。拳帝がのんびりとしていられる時間も今までよ」

ぅん？随分いつもよりも機嫌が悪いな。いつもの黒色が映えてねぇ。第一のんびりってな。随分なことといってくれるじゃねぇか。死にてぇのか。

「どうかしたのカ？」
「昔話した事のある組織がやってきたぞ。時空管理局がな」
「――――――へぇ」

時空管理局か。確かアストが魔女から得た知識にいた奴らだな。
魔導の監視者とか言う奴らだ。椅子から立ち上がりアスト様の後ろについていく。
なんでもかなりのつえぇ奴がそろってるっていうが本当かね。

「んじゃァ、向かうのは王への謁見かい？」
「お兄様に直接お耳に入れなければならぬ事じゃ。当然であろう」

そりゃそうだ。この国に来たって事は何かしら起こす気なんだろ。だったらテッペンに言っておかないといけないもんな。

「へぇへぇ。賢帝アスト様の王への献身は見習うものがありますナ、っと」

「随分と今日は食い掛かって来るのぅ。何ぞ楽しい事でもあったかぇ？」

「ん？わかるかい？へへ・・・久しぶりに強そうな奴に出会えたんダ。そいつとやりあうのが楽しみでな」

スズカが本気を出せばきっと楽しめる。こうも楽しく嬉しい気分になったのはいつ振りだ？

「闘う力をくれたあんたには感謝してるヨ？今じゃこうして修練に費やせてる」

「脳筋馬鹿にさせた覚えはないわ。精々足元掬われぬ様にすることじゃな」

言ってくれる。そのうちお前も喰ってやるさ。私の牙は常に餓えてるんだ。

アストの後ろをついて城の中を移動する。最上階にある王の間へは移動用魔導機での移動となる。

それ以外での王の間へは外から飛んでいくしかないが空を飛ぶなんてことは王や私ら以外出来ない以上、たった一つの方法だ。

移動した後、王の間の前には既に二人立っていた。

「遅いぞ。いつまで待たせるのだ。王は既にお待ちになられている」

「なら先に入っておればよかろう。待っていろ等優しいことを言っ

た覚えは無い」
「静かにしろ。謁見する前に吼えあってどうする」
「ハ！流石に剣帝様も王の前では形無しだナ、オイ」

銀髪の背の高い騎士と外套姿の男・・・爺。そしてアストと私が揃ってやっと王の間の扉が開きだす。
中は豪奢。まぁ当然だ。
高く先へと続く階段の先には玉座に座る王がいる。
私たち４人は片膝をついて一礼する。

「五帝が揃って顔を見せるとは何事か」
「お耳に入れておきたきことがございます。時空管理局が介入してきた節がございます」

アストが代表して報告する。

「管理局か。魔女の言うとおりになったな。邪魔になるなら排除しろ。全力でな」

報告に乗り気じゃないのか頬杖を突いたまま気だるそうな王。

「それで終わりか？」
「それと・・・姫様がまたお逃げになられました」
「些事だな。任せる」

騎士・・・セイザー殿との短めの対応。
これが兄弟の会話とは誰も思うまいよ。
兄王と弟王。しかも弟殿は兄の騎士か。

「以上か。ならさっさと余の前から消えよ」

謁見はこれで終了した。王の間を出る。
合流した場所に戻れば私たち４人が残る形。

「ではどうするか決めるか」
「簡単じゃの。だがシンプルでいい」
「私がいく。研究所を毀されたのだから私がやる」
「賢帝アスト様はカンカンに怒ってらっしゃるからナ。セイザー殿やフェイク殿がでしゃばる必要はねぇってこっタ」
「チェリア。君はやらないのか？」
「いい誘いだけどな剣帝セイザー殿。私は直接関わらない限りはやらねぇヨ。あの馬鹿を抑えないといけないしナ？」

赤を貴重とした攻撃魔導を持つあの男を抑えない限りは私にゃ休息はねぇし。
ま、私は勝手にやらせてもらわーな。後詰めってのは好きくねぇんだわ。

アストＳｉｄｅ

兄上へのご報告が終わった。兄上も王としての執務がある以上お手を煩わすわけにもいかぬ。
細部は我々が補助していかなければならぬ。
それが兄上への献身となる。兄上のためならばこの身が滅びようと構わぬ。

「邪魔者はさっさと消し去るが一番よの」

我らの計画を邪魔するのであれば消し去るのみ。
しかも時空管理局とは。折角此処まで築いたものが崩れ去ってしまってはダメだ・・・。
奴らを消しつつも計画を進めるのだ。あの魔女に悟られぬようにな。

他の三人を置いて私は謁見の間を後にする。
さっさと城を出て行き、研究所へ戻る。

セイザーＳｉｄｅ

謁見が終わればアストが帰った。やる気を見せていたがその手腕見せてもらおう。

「さてではアストに任せて我々はどうするかだが」
「フフ、儂はあの小娘が何処までやるか見せてもらおう」

フェイク翁は動くのが面倒と。チェリアも同じか。
ならば後詰めに我が騎士団が動けるようにしておくか。

「おい、剣帝さんよ。あんたの騎士団動かすのはいいけど私らの邪魔スンナよ？」
「ほう。では君の傭兵団が動くというのかね？」
「ハッ！時がきたら動いてやるよ。そのジクーなんちゃらを抑えてやる」
「時空管理局か。情報は何もないが言葉の響きからして大層なものと考えられる」
「怖気付いたならサッサと消えるんだナ？」

更にチェリアがこの場を去っていった。

「フェイク翁。貴方は？」

「小娘共が言うたろう。時が来たらじゃよ。フェッフェッフェ。この遣帝は体こそ老いが来てるのでな。早々と動けぬ」

「では同じく待機と」

「そうなるの。王自ら動くのならまた違うのじゃろうが。そうなるとまた滅ぶものが増えるだけよ」

この老人もまた老獪だ。取り入るように中枢まで入り込んできたわけだしな。

ふん。だがこの国を脅かすならこの俺が黙ってはいない。

それはお前達もだ。同じ五帝という立場からのうのうとしていられるのも今のうちだ。

兄王自ら動けばきっとすぐに終わるのだろう。だがそれはいけない。

王に縋ってばかりでは国は繁栄しないのだ。

だからこそここで我らの忠義を見せるときである。

「それでは儂もいくとするかの。精々兄を守るが良い」

「無論。問題無く須らく、だ」

翁もそこで踵を返して間を抜けて帰る。

一人になったこの場で俺は考える。

内部から国を破壊しようというなら俺が立つのみだ。兄王の前には誰も立たせぬ。

其れが俺の忠義。

我が剣の前に敵は無く、全ては我が剣に平伏すのみ。

アストＳｉｄｅ

研究室に戻ってきた私は次の手を考える。この国の中にいるなら燻り出しても良い。
民などいくらでも増えるのだから。
それならそうじゃ。適した魔導を使えるのを作ればよい。

開けられた穴は研究員に埋めさせておいたから問題は無くなった。
あとはその報復じゃ。
あの管理局の執務官め・・・・今度であったらただではおかぬ。

「あらあら・・・随分と大変みたいね」
「貴様か。輪廻の魔女」

通路を歩いてくる女が一人。いけ好かない笑みを浮かべた女は私に話しかけてくる。

「管理局の事、吐いてもらうぞ」
「いいわよ?あとで私の部屋にいらっしゃいな」

カツコツとヒールの音を鳴らして通路を歩いていく。
本当に私はあの女が嫌いだな。すれ違うだけで憎悪だ。
知識を渡してくるのはいいが其れに見合ったものを出さねばならぬという。
等価交換とはよく言う。じゃが奴の知識は確かなもの。

「フン・・・もう暫くは奴に依存せねばならぬとはな・・・・」

いつかはあの魔女を失脚させてやろう。
今回の騒動の合間に載せてやっても良い。ククク、楽しみじゃのう。
今は道化を扮してやるがその首、この牙で掻っ切ってやろう。

楽しみじゃのう。その為の魔導も準備しておるのじゃ。ククク、あぁ
早くその時が来ればいいのに。
じゃが今は其れよりも先にやらねばならぬ事。まずは鼠のあぶり出
し。
さぁ、どうやって楽しんでやろうか。

フェイクＳｉｄｅ

フフフ・・・いいぞ。事態は流転を繰り返す。
こんな姿になってまで待ち構えていただけの事はある。
あとはあっちの魔女がどう動いてくれるかだ。
それまではもう暫くは静かにしていよう。

チェリアＳｉｄｅ

城門前の広場で傭兵団を率いておく。

「よーし。並んだナ」

傭兵団を綺麗に列にして満足した。

「これからお前らに特別任務だ。この国で見かけない奴を此処に連れて来い。騎士団に遅れをとるんじゃねぇーゾ！」

拳を上げて鼓舞。それだけで血の気の多いこの連中は猛る。

ハッハ、どうだよ私がずっと鍛えたこいつら。

攻撃魔導一辺倒のこいつらなら信用できるってもんだ。

「よし、行け！今日中に連れてこいヨ！」

傭兵団を散開させる。すぐさまバラケて街へと向かう。

行動力がある。判断力もつけた。間違えなければあとは待ってるだけでいい。

フッフッフ。他の連中の手前でああも言ったが騎士団や研究所なんかよりも先に手柄をとってやる。

奴らの悔しがる顔を見て思い出し酒と洒落込むぜ。

第七十一話　急転

サリュアＳｉｄｅ

「実は――――――私の家はあのお城なんです」

うん、嘘は言ってない。だってそれがあたしのお家だから。
追われてたのもお城を抜け出たから連れ戻しに来た傭兵団の人たちだし。
でもここまで逃げたのは初めてかもしれない。
心臓がどきどきしてる。

「お城が貴方のお家？どういうことか説明できる？」

金髪の・・・アリサさんが聞いてくる。
あんまり隠し事も出来そうにないし。それにこの人達はこの国の人じゃなさそう。
だったら言っても大丈夫かな。

「あたしは・・・この国の第一位王位継承者。現国王の娘です」

自分でこんなこと言っちゃう辺りどうなんですか。
でも他に言い方わからないし。

「あの・・・信じられないかもしれないですが本当です」

付け足してみる。恐る恐る視線を上げる。あたしよりも少しだけ背の高いアリサさん。
顔を見るには少し見上げないと無理。

見上げたアリサさんの顔は優しい笑みを浮かべてた。

「そんなこと。貴方が姫様だからって助けたわけでもないでしょう。貴方は貴方でしょ。気にする事じゃないわよ」

あぁ、そう言ってくれるのか、この人は。
それでも甘えてはいけない。王家の人間は他人に甘えてはいけない。
そう躾けられてきたのだ。父上が知ったらきっと叱咤するだろう。

「すぐお暇しますね。どうもありがとうございました」

そう言って頭をさげる。返事は無い。きっと呆れてるんだ。
恩を仇で返すようなものだ。幻滅しただろう。でもそれでないといけない。
王家に連なるならば利用はしてもされるな。そういう言葉もある。

「ちょっとまって。このまま帰ってもいいの？
貴方、何でお城を出てきたの？何かあったじゃないの？」

「・・・・・・・・・」

この人は優しい。だからきっとこうなるのも判ってたんだ。それであたしは逃げれなかった。
黙ってしまうのは答えようが無かったから。
どうせ言っても信じてはくれないから。

「悪いようにはしないわ。私たちはね、この世界に巣食う悪を倒しにきたのよ」
「悪、を・・・・？」

この人は、この人たちはなんなんだろう。

あたしの事なんて他人だろうに。なんでこんなに親身になってくれるのか。

「そ。この世界に隠れてる悪の組織を倒しにきたのよ」

そんな物語みたいな。でもアリサさんは至極まじめな顔で言っている。目が、真実を語っている。

そんな人の前でいつまでもはぐらかすことはきっと恥だ。

「・・・この国の事、話します。聞いてくれますか？多分、関わりがあると思うから・・・」

初めてちゃんと聞いてくれそうな人に出会えた。

心に溜めていたものを一気に吐き出そう。きっとこの人は受け止めてくれるはずだから。

ミラージュＳｉｄｅ

宿を出て目の前の通りを歩く。すると反対方向からすずかが帰ってきた。

「あ、ただいま」

「ん、おかえり」

軽く挨拶。

「ティーダと恭也さんは外壁の向こうに避難した。敵勢力との交戦

があったんだ」
「え、そうなんだ。大丈夫なのかな」
心配そうな表情を浮かべるすずか。同じ隊なのだから心配も当然か。
「怪我はないみたいだ。交戦といっても一方的に逃げたって言ってたし」
「そっか。ならよかったよ」
ほ、と安堵の顔を見せる。
「それと迷子というか誘拐犯に追われてる女の子を一人確保してる。今はアリサが対応してる」
「誘拐犯？」
「市場で追われてたんだ。んで助けたんだが此処まで連れてきちまった」
一番手元においておいた方が安心するしな。あのままにしていたら寝覚めが悪い。
「うん、なるほどね。じゃぁ今もいるんだ」
何度か頷いて理解していくすずか。こう言うときのすずかの思考能力は高い。
「あ、そうそう。私のほうはお城で偉そうな人と会ったよ」
あぁ、個別任務の方か。確かに偉そうな人に出会って情報を聞き出せといった。

「スカウトされたけどね。断ってきた。私の強さを見抜かれた感じだったね」
「・・・・へぇ。だとしたら少してこずるかもな？」

まだ陸上本部から来た任務の方の組織は見つけられてないが。
それでも大体のアタリはつけた。恭也たちが乗り込んだ施設がソレ。
そしてその施設を運営してるのを黙認してる城＝政府。
確証はまだないがそこはなんとか情報を集めて繋げるしかない。

「すずかはまだリミッターつけたままだよな」
「うん。その状態での強さを測ったみたい」

すずかのリミッターはデバイスではなく体につけられたものだ。
それでも2ランク下がるくらいだからたいした差は無い。
それでも強いとみせたすずかの底力は恐れ入る。

「じゃぁ、アリサと合流してくれ。俺は俺で当てがある奴に会ってくる」
「うん。了解だよ」

すずかと別れる。宿の中に入るのを見送ると通りを進んでいく。
あいつとまたあえればいいんだけどな。
期待せずにうろつくか。

あの赤い奴にまた逢えればいいんだけどな。そうすれば話も聞ける。
前とは違って今なら聞く事も明確に決まってる。

魔導について。どの程度の事が出来るのか。
魔導の研究施設について。これはそこに働いてる人物も含めて。
政府側について。魔導についてどう考えてるのか。

この国の魔導と呼ばれる魔法はミッド式やベルカ式とは違う体系を持っている。
砲撃系のミッド。近接のベルカ。
どっちにも含まれてどっちにも属さない。そんな曖昧な魔法だ。
陸上本部は中々面倒な任務を持ってきたもんだ。
これなら無限書庫でデータを取ってからくればよかった。

「腐っても仕方無いか。なるようになれ」

いっそ襲い掛かってきてくれれば一番判りやすいんだがなぁ。
前も襲い掛かられて出てきたわけだし。
通りから外れてみるか。

ふらっと狭い路地に入る。それだけで大通りとは違う静けさがある。
何よりもひっそりとして喧騒が無い。

建物の影になる路地はひんやりと冷たい雰囲気。
まるで人の気配がないくらいに。
だが今はそんな事はなかった。数人の足音が走り抜ける。それが何度も。
まるで何かを探してるかのように動き回る気配があちこちに感じ取れる。

「・・・あれだな。この国は慌しい」

素直な感想を吐く。なんとも必ず騒ぎの前にはこうして走り回ったりするのだ。
走るのが好きなのか、この国は。

まぁなんだかんだでこっちに向かってくるんだけどさ。
此処までワンパターンかよ。

「む、貴様止まれ！」

俺を見つけた一人が俺を止めに声を掛けてきた。
見た限りでは純正な兵士ではない。傭兵といった感じか。
ここで無視するのもなんだし一応足を止める。さぁどうなるかな。

「貴様、この国では見かけない顔だな。何処から来た！」
「さぁ？何処から来ても別にいいんじゃないか？」
「馬鹿が！既にこの世界には我らがエネミアしか人の住む場所などないわ！怪しい奴だな、ちょっと来い！」

ぅん？今なんて言ったこいつ。この世界には他に人がいないだと？
俺は直接スキマで移動したからなぁ。他の地表で町とか村とか集落を見たという報告は確かになかった。
これもまた聞くべき要素の一つだな。

「ほら、こっちへ来い！」
「断ったら？」
「生殺与奪はこっちにあるんだぜ？あんまり嘗めない方がいいぞ小僧」
「殺されるのは勘弁してもらいたいな。死ぬのは嫌いだ」

人生で二度死ぬのはいただけないよな。しかし随分と強気じゃないか。
見た目、魔力がBランク程度なのに。

「さっさと来いってんだよ。この国で見知らぬ顔は連れてくるよう

に言われてるんだ」
「だから断るって言ってるじゃないか。聞こえなかったか？」
「っ・・・手前ぇ！！」

体に魔法陣をひっつけて身体強化魔法を使いだした。やる気か、こいつ。
両足と両腕に小さな魔法陣を展開させて走ってくる。
強化してる分速いな。あっというまに俺の懐まで入り込んで来たぞ。
右拳を握りこんで俺の脇腹めがけて振り抜いてくる。俺は動かずにその動きを目で追っていた。

「もらった！内臓ぶちまけろぉ！！！」

ガァァァン！！！！！甲高い音が響く。まるで肉体に打ち込んだような音ではない位に甲高い音だった。
右拳に魔法陣を展開させた傭兵はさも骨の折れた感触を感じるはずだった。
だが実際には無詠唱でのプロテクションが張られて打撃を吸収していた。

「流石神威だな。助かったよ」

右腕のブレスレット状態だったデバイス「神威」を起動させる。
打ち込んできた傭兵は意味が判らずそのままのポーズで意識を刈り取られた。

「安心しろ。峰打ちだ」

両刃だけどな。ドサリと墜ちる傭兵をそのままに周囲の気配を探る。
あぁ、やっぱり。段々増えて来てる。こいつを倒したからかそれと

も既に動いてたからかは判らないが。

それと一つその中に混じって大きい気配が一つあるな。
ザコじゃなさそうだ。こいつは・・・ビンゴかもな。
路地に入って正解だったようだ。

暫くその場でじっと待つ。気配は俺を中心として取り囲むようにしながらぐるぐると回りつつ距離を詰めてくる。
慣れた動きだ。恐らくこの大きな気配が指示を出しているんだろう。
余程の手錬。
まるで猛獣が獲物を刈る様な動き。神威は既に展開してるからいつでも対処は可能だ。
あとはタイミングを待つのみ。

ガサッ！とモノの擦れる音が背後から。振り向こうにも遅れて前からも姿が見えた。
交差するように前後から襲い掛かってくる人影。一瞬で服装などから足元で倒れている傭兵と同類と判断する。
襲い掛かってくる以上は迎撃も辞さない。

「当方に迎撃用意あり！！」

後ろから来る傭兵には神威を突きたて、前からの傭兵には左手で攻撃を受け止める。
これで俺は両手が塞がれた。
これ見よがしに体の開いた状態で向かってくるのは大きな気配を持ったアイツ。

「貰ったゼ！！」

右手に魔力球を掴んでる。あれだけでも並の集束砲くらいの魔力が籠められてる。
身体防御は不可能か。

「神威」
「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」

目の前に八芒星の魔法陣を形成して面防御結界を引き出す。

「そんなもん、打ち砕クだけだ！！！」

よく見たらこいつ女か。それにしては異様な筋肉のつきだ。純粋な・・・そう、闘士のソレだ。
俺のプロテクションを抜こうと魔力球を押し当ててくる。
衝撃のせいか魔法陣と魔力球の間でブルブルと震えている。
相手の腕も其れに併せて振動している。

「かっ・・・てぇナ！さっさと毀れちまえよ！！」
「其処から押し込めないのはお前の技量だ。諦めろ」

魔法陣の向こうは衝撃波が漏れている。だが俺はなんともなく立っている。
両手側の傭兵を難無く打ち倒す。大丈夫、峰打ちだ。鎬で打ったからな。
これであとは目の前の女だけ。

「いきなり仕掛けてくるとは物騒だな。それとも俺に何か用か？」
「ハッ！見慣れない奴が居たら仕掛けるもんだロ！？お前もファーベルに入り込んだ奴の仲間だろうヨ！」

いいね。こういう展開。向こうからやってくるのは実に楽だ。
あっちから仕掛けてくるのは何かしら隠してるというのが相場だ。

「話を――――聞かせてもらおうか」
「話すこたァねぇよ！！」

押し込むのをやめて距離を取る。魔力球はまだ右手に持ったままだ。

「お前が時空管理局ってやつカ」
「・・・・あたり、だな」

二つの意味で当たり。向こうの問い掛けへの正解と。
こっちの任務に対して反管理局組織であるという事の事実上正解。
これで動きやすくなったというものだ。

「手前ぇらとっ捕まえて王の御前に突き出してやんヨ！！」

偉く好戦的だ。しかし感じ取れる力はビリージャーと同等かそれよりも上か。
逃げるのも性にはあわないな。だったらやるしかないか。

「いいぜ。俺に勝ったらどこにでも連れて行くがいいさ」

俺は神威を構えて切先を女に向ける。

「時空管理局執務官。旗艦津名魅提督。ミラージュ＝ヴィジョン――――推して参る」

アリサＳｉｄｅ

この国の現状をサリュアから聞いている。
魔導という力によってこの国が栄えだした事。
その力を持って現国王が反旗を翻して王座に座った事。
魔導で以って他近隣諸国に攻め入り滅ぼしつくした事。
ファーベルという魔導の研究施設が魔導の全ての実権を握っている事。
五帝と言う5人が国の政治を動かしている事。
権帝・剣帝・賢帝・遣帝・拳帝。この五人のケンテイで五帝。

「・・・でもまぁ聞いてると細かい事まで知ってるのね」
「一応、姫という立場上は知っておくべきだと叔母が教えてくれたのです」

その叔母が賢帝と呼ばれる存在。王様の腹違いの妹、らしい。
その人は何を考えているのかわからないけど其処まで知らせておくなんて何かありそうとか考えちゃうわね。

「で、貴方はどうしたいの？」
「どう、とは・・・・」
「其処まで国を知っておきながらどうしたいのか。って事よ」

其処まで知っててこの子は家を飛び出した。
なら・・・この国を変えたいという気持ちがあるはず。
私は其れを聞きたい。

「私は・・・変えたい。もとの皆が優しく暮らしていた国に」
「うん。それが聞きたかった」

うん。それならもうやることは決まったね。私は笑顔でサリュアに向かい合ってから視線を廊下への扉へと向ける。
サリュアもつられて視線が動いていく。
私の視線に気付いたのか会話が終わるのを待ってたのか扉が開いてすずかが入ってくる。

「すずか。朝から何処にいってたの」
「うん、ミラージュくんに言われてたお仕事をね。もう終わったよ」
「あの・・・・？」
「あぁ、紹介するわね。私達の仲間で親友の月村すずかよ」
「月村すずかです。よろしくね」
「あ、サリュア＝アシュクレヴィオスです。よろしくお願いしまびゅっ！？」

あ、噛んだ。腰を折り曲げての深い礼。
そこまでしなくてもいいんだけど其処はやっぱりお姫様なのかしら。

「ミラージュからの仕事？」
「うん。ちょっとお城まで」
「あぁ、あのでかいお城ね」

そっか。私が寝てる間にそんな仕事をしてたのね・・・いいけど別に！

「偉そうな人にあって話が聞ければいいって事だったんだけど。偉そうな人にも逢えたしね。チェリアさんっていう」
「ふぅーん。いいじゃない。順調に仕事が出来たなら」

「うん。そうだね。朝から歩き続けて疲れちゃったけど」

すずかと話してるとサリュアが考え出したように塞ぎこんでる。

何か考えてるような、そんな顔だからすぐにわかった。

「どうしたの、サリュア」

「あ、いえ・・・通常城内には誰も入れないのです。其処にチェリアがいるなら余計に」

視線が挙動不審。言っていいのかどうか迷ってるような。

「チェリアは城門を守る傭兵団の団長です。さっきも言いました拳帝でもあります。

ですから本来誰かを通すような事は致しません」

「でもすずかは現に通ったらしいじゃない？」

「そうです。だからおかしいんです。本当に気に入った人しか気に入らない、って人ですから」

それが本当ならすずかはそのチェリアって人に余程気に入られたって事ね。

『アリサ、すずか。そっちは無事か？』

『ミラージュ？』

不意にミラージュから念話が飛んできた。すずかも聞こえてるみたい。

『今からティーダと合流してくれ。向こうが動き出した。其処もいつ包囲されるかわからない』

『了解。ティーダ隊長と合流すればいいのね。場所は？』

『今マップをデバイスに送る。ポイントに向かってくれ』
『『了解』』

念話は短めできれた。急いでる感じの声だった。すずかもそれには気付いていたみたい。

「アリサちゃん」
「うん。急ごう」

あ、と。サリュアも連れて行ったほうがいいのかな。

「サリュア。私たちこれから移動しないといけないの。あなたはどうする？此処にいるかそれとも私たちと来るか」
「・・・・・一緒に行きます。此処にいても私はきっと何も出来ないままだから」
「ん」

私は笑顔を見せてサリュアに手を伸ばす。
サリュアも答えて笑顔で私の手を掴んだ。

「さぁいきましょう。私のデバイスもやっと出番よ」

指貫のグローブ型デバイス『ガラティーン』を展開させる。視界に指定されたポイントがフィルタになって映し出される。
廊下から出たら時間が掛かるわね。だったら窓からいくしかない。
窓の桟に足をかけてサリュアを引っ張る。小さい体のサリュアは簡単に引き寄せられる。

「ちょっとの間我慢しててね」

お姫様をお姫様抱っこする。え、何このシチュエーション。私がしてほしいわ!!ミラージュに!

「じゃぁいくわよ」
「ちょっとまってアリサちゃん」
「っちょ!?」

折角行こうと思った矢先に出鼻をくじかれたわ・・・。

「なに?」

すずかが窓から出て行く私を止めるのを短く聞き返す。

「ミラージュくん、さっき余裕なさそうだったよね。あの声の感じ」
「まぁ・・・そうね」
「私、手助けにいってきてもいいかな」

まったく・・・優しいんだからこの子は。だからこそ皆慕ってくるんでしょうけど。

「いいわ。こっちは任せて。その代わりあの馬鹿助けてきてよ?」
「うん。任せて。アリサちゃんも隊長との合流気をつけて」

互いに笑みを見せ合いながら拳を併せる。ここら辺、なんかなのはたちに染まってきたかも。
すずかを宿に残してサリュアを抱きかかえて私は空に出る。空戦ＡＡは伊達じゃない!

「う、わあわっ・・・ふあっ?!」

空を飛ぶ事にびっくりしてるのかサリュアが変な声をあげる。

「空を飛ぶの、初めて？」

「あ、はいっ・・・空を飛ぶ魔導なんて五帝くらいしか遣えませんから・・・」

「五帝、ね。聞いた限りじゃかなり凄そうだわ・・・」

サリュアが墜ちないように確り抱えて私は合流ポイントへと急ぐ。

チェリアＳｉｄｅ

傭兵団にまかせっきりだと信用できねぇ。

だったら自分で動くしかねぇよな。

通りの路地まで足を伸ばす。するといるじゃねぇか。トビッキリの鼠がよぅ。

しかもこいつ、見たことのねぇ顔だ。しかも肌で感じるくらいに強い。

面白ぇ。まずはこいつに仕掛けるとすっか。

周りにいた傭兵は三人。挟撃を指示して回り込ませる。

まずは正面からの攻撃。魔導展開もしてねぇやつに傭兵の力見せ付けてやれ！

と思ったが簡単にあの男はノーモーションで防御魔導を展開した？

なら次だ。前後から挟んでの攻撃も簡単に押さえ込まれた。

その攻防の間もあいつは一歩も動いてねぇ。なんだよあいつ。やるじゃねぇか。

いいな、こいつ。こいつならきっと楽しい戦いが出来る。

さぁ、それじゃぁ次は私と踊ってもらおうかい！
右手を何回か開閉させると其処に魔力球が出来上がる。魔導によって作られた渾身の力だ。
そいつを――――一気にぶつけにいくぜ！！

一気に近づいていってぶつけようと思ったら八芒星の魔法陣、だと？
しかもこの野郎、防御魔導をいつのまにか展開してやがる。
魔法陣の向こうで涼しい顔してやがって。むかつくんだよその面！
押しつぶそうとしても衝撃が走ってきやがる、向こうにはないのかよ。
上等だ、この魔法陣ごと叩き潰す！

「いきなり仕掛けてくるとは物騒だな。それとも俺に何か用か？」
「ハッ！見慣れない奴が居たら仕掛けるもんだロ！？お前もファーベルに入り込んだ奴の仲間だろうヨ！」

アストが言ってた管理局の連中の一人なんだろう。いいぜこの強さ。
さぁ楽しませてくれよぉ！！！

いくら押し込んでも無理みたいだな。だったら離れてまたやり直すだけだ。

「お前が時空管理局ってやつカ」
「・・・・あたり、だな」

やっぱり！だったら余計に逃がさねぇよ。

「手前ぇらとっ捕まえて王の御前に突き出してやんヨ！！」

魔力球をかき消してから両拳を併せて打つ。
楽しい戦いをしようじゃないか。そんでもって王の前に突き出してやんヨ。

「いいぜ。俺に勝ったらどこにでも連れて行くがいいさ」

騎士みたく剣を持ちやがって。切先を向けるってこたいいんだよなやっちまってもよ！

「時空管理局執務官。旗艦津名魅提督。ミラージュ＝ヴィジョン――――推して参る」
「エネミア親衛傭兵団団長チェリア＝カノウだ。ぶっ潰ス！」

幾合と。打ち合う。時には剣で。時には拳で。蹴りで。頭突きで。
まるでこっちの攻撃を相殺するかのように同じ力で繰り返してくる。
ナンダヨこいつかなりやるじゃねぇか。

「はっ！やるねェ小僧」
「そっちもな。此処に来てからは一番だよお前」

少し荒れた息を整える。あっちは息も切らしてねぇのかよ。ひでぇな。
他の地域にいた傭兵どもから連絡が入る。見慣れないやつらが宿にいるので囲んだ、と。

「フフッ。お前、宿にいたのカ？仲間も一緒だな」
「・・・・。」
「お前のした宿は既に囲んだぞ。逃げるとすれば死体になってからだナ！」

宿は包囲完了した。あとは飛ぶか死ぬかでしか無理だ！
飛べねぇやつがいきがったってなぁ。そう上手くはいかねぇんだよ！！

「・・・・・・・・・・・・」
「おい何黙ってやがル」
「あぁすまん。お前のことを忘れてたよ」

耳に手を当ててなにやってんだ？しかも私が聞いたらしれっとんな事いってんじゃねぇよ！

「上等だ！死んでわびろヤ！」

両手を交差させて魔導を集中する。みろ、この魔導の芸術！
体内の魔導力を目の前に集めていく。手に持った時の魔力球よりも明らかにでかい魔力の塊が出来上がる。

「集束砲撃か。ここまで創り出すとはトンでもない馬鹿だな」

あいつの剣が消える。なんだ、ブレスレットに変わった？
右手を一振りすると今度は黒い短剣を握ってやがる、どうなってんだ？

「いいぜ。そいつを打ってこいよ。『殺して』やるから」

ブチン。私の頭の中で何かが切れた。もう止まらない。止められないぞ。
さぁ、死ねよ！肉片だけで王の前でひれ伏せ！
両手を開いて一気に塊を打ち出す。ゆっくりと。非常にゆっくりと

進みだす。

「ギャハハハハハ！死ね！消えろ！毀れろ！」

打ち出された魔力はあいつに向かっていく。もう止まる事もねぇ！

すずかＳｉｄｅ

アリサちゃんと別れた私はミラージュくんを探しに宿を出た。
出た途端にいかつい人たちに囲まれた。

「・・・何か用ですか？」
「見慣れぬ顔だ。連行する」
「断れば？」
「死」

傭兵さんたちが構える。
あぁ、私今命を狙われてるのか。

あは。

あははは。

「ラファエル」

私はデバイスの名前を一言だけ口にする。
その口元は口角は薄くつりあがっていたのに気付かないほどに薄い

笑みを浮かべていたという。
紅の手甲が装備される。あぁもう。早くミラージュくんのところに行かないといけないのに。
なんで邪魔するかな。こんなに私の進む道の邪魔をして許さないんだから。
ほぅら。たった一回腕を振るだけで吹っ飛ぶくらいなんだから。
だから其処を退いて。じゃないと抑えきれなくなっちゃうからさ。
逃がさないよ。逃げられないよ?そっちから仕掛けてきたんだからね?
逃げるなんて酷いよ。ほら、仲間がどんどん減っていくよ?
うふふふふ。あはははは。私の手、こんなに血で染まっていっちゃうよ。
お師匠様。私、ちゃんと闘えてますか?うふふふふ。

高揚した気分が徐々に収まっていく。手は服は血に染まり真っ赤。
地面も宿の壁も紅に染まっている。

「早くいかないと。ミラージュくんに会いに行かないといけないのになぁ」

パシャ、と血の溜まりを踏んでいく。周りにいる人はどんどんと離れていく。
あぁ、別にいいんだよ。どうせこの世界に留まるつもりも無いし。
部隊の皆は私の事、知ってるしね。
さぁ、行こう。任務が待ってるよ――――――――――――

第七十二話　ファーベル

すずかＳｉｄｅ

血に染まったままの格好で通りを歩く。ミラージュくんの気配はこっちからする。
どうも「死」という言葉には異様な反応しちゃうな。ダメって判ってるのに。
どうしてこうなっちゃうかな。気をつけないと。

路地の方に入ると傭兵が三人倒れてた。その近くにミラージュくんと・・・・チェリアさんがいた。
二人とも既に何度も闘った痕跡がまわりにあった。
壁や地面がボロボロになってて今にも崩れ落ちそうなくらい。

「すずかか」

ミラージュくんは私の事を遠くからでも認識できるから。
近づいてきてたのはもう気付いてたんだね。
でもチェリアさんのほうは私は此処に居るのに吃驚した顔で見てる。

「スズカ？なんでここニ。ここは危ねぇんだぞ、そいつから離れるんダ！」

焦った顔で私に危険を教えてくれる。

「すずか、何で此処にきた。アリサと一緒に合流しろといったはずだが」
「宿は包囲されてたからね。それを退かさないといけなかったし。

ミラージュくんが心配だったからに決まってるじゃない」
「俺が心配、ね。ありがとうすずか。幾分か気が楽になったよ」
笑顔を向けてくれればそれだけでいいの。それだけで充分だから。
それだけで私は頑張れるんだよ。

「その返り血はそのときのか」
「あ、そうだね。いつのまについたんだろう」

気付かなかった。見れば服まで真っ赤に染まってる。
手も腕もデバイスも。紅に染まってる。
あぁ、宿の前で遣り合った時かな。少ししかおぼえてないけど。

「すずか・・・お前、制御できてるか？」
「制御？出来てるよ」

暴走しないように制御は常にしているはずだけど。

「すずか」

う・・・ミラージュくんの視線がきついよ。
チェリアさんはなんだか置いてけぼりな感じでいるし。

「ごめんなさい」
「後でお仕置きだからな。反省したならここは任せたいが」
「うん。任せて」

ミラージュくんが神威を待機モードに戻す。

「おい！まだ終わってねぇだロ！」

「いや、もう終わりだ。あとはすずかが相手する」
「・・・・マジかよ」

チェリアさんと闘うの？私が？

「ティーダと恭也さんが向かった施設が怪しいと踏んだらしいからな。アリサと三人で向こうは大丈夫だろ」
「ミラージュくんは？」
「俺は一旦艦に戻る」
「いかせるかヨ！」

チェリアさんが突っ掛かろうとしたらミラージュくんのほうが先に動いて壁に突き放した。

「すずか。後任せる。好きに闘っていいぞ」
「ん。了解だよ」

チェリアさんと闘うのはいいんだけどいいのかな。ていうか、ふっとんだままなんだけど。

恭也Ｓｉｄｅ

外壁の上に俺とティーダ隊長が居る。
ミラージュからの通達だとあの施設は本気で調べる価値があるそうだ。
地上本部からの任務にある反管理局組織である可能性が高い、と。

早朝に潜り込んだあの施設だ。あれから時間が経っている以上は警備が敷かれているだろう。
そういう場合に俺が役に立つ。

「御神、不破。セットアップ」

バリアジャケットを着込む。黒を貴重とした忍者服もどき。
しかし陽の出てる今はこの姿も少し浮いて見えるだろう。

「じゃぁ俺が先に行って衛兵が居たら倒しておくので後から来てください。何かあれば念話します」
「了解。あとで合流しましょう。潜入の手は好きに任せますよ」
「了解だ」

先にゆらりと外壁から飛び降りるようになりながら飛行魔法を使う。
落下が急激に停止。其処から脚力を遣うように空中を疾駆する。
弾けたパチンコ玉のように俺は空を切り裂くようにあの施設目掛けて飛んでいく。

正規の入り口、門の前に着地すれば衛兵を無音で小太刀を振るって薙ぎ倒す。
ゆら、と立ち上がり体勢を直してから門を切り壊す。
門が重々しい音が鳴り響きながら倒れる。それだけで警報が鳴り響くのは当然だ。

けたたましい警報音が流れる中俺は足を進めていく。
研究員とは違う衛兵ばかりが進むのを邪魔をする。

『恭也さん。最奥にある部屋までお願いします。多分其処が目的地です』

『了解した。最短距離で進むからマッピング頼みます』

デバイスから有視界フィルタに進路が表示される。
進行距離、方向が表示されるままに進んでいけば邪魔が入るので切り伏せる。
順調に進んでいる。これがなんとも厭な予感が過ぎる。
衛兵が出てくるのは早朝の騒動からして当然だろう。充分な時間もあったわけだし。

っと。結構奥まで来たな。もう少し奥か。
目的地の手前に大きな気配が一つある。
この感じは――――朝に会ったあの女か！

『恭也さん、今度はフォロー出来ませんからね』
『よく言う。何とかするさ』
『相性悪いって言ってるんですよ。相手は完全射撃型と睨んでるんで僕がいくッスよ』

確かに朝は負けっぱなしだった。逃げたといっても可笑しくなかった。
それでも俺は・・・・もう逃げたくないんだ。

『これから僕が其処に行きますから待機しててくださいね』

この念話通信から1分後。天井に穴を開けてティーダ隊長が現れた。

「天井から出てくるの好きですね」
「なんとなくやらないといけないと思った。後悔はしていない」

銃デバイスを構えながら奥の通路を見る。

「此処まで進んで来てくれれば周りがいないから集中できる。助かりましたよ恭也さん」
「いや、それはいいんだ。それが御神の剣士の本来の姿だし。護衛に回れば敵は居ない」

確かに俺はまだ魔法戦技の経験が足りない。今此処であの女の相手はきついだろう。
これは仕事で任務だ。遊びでやってるわけじゃない。
経験値をあげたいなら後でも充分出来るほどの面子は部隊に揃っている。
焦るな、俺。此処じゃこれが最良の手なんだ・・・・悔しいけどな。

背中にティーダ隊長をつけながら先に進む。
あの女が居るのはティーダ隊長もわかっているようだ。
なので無駄な力は使わずに温存して進む事にした。
俺が周りを倒して先に進む。

奥に進むと大きな扉の前に女が立っていた。

「よう。またきたぜ」
「何故、また来たか」

不思議な顔をしてこっちを見てる。
そりゃそうだ。痛手を負って逃げたように見えてるんだろうな。実際そうだし。

「また負けにきたのか？殊勝じゃの」
「今回は俺が相手になりにきた。彼は護衛だよ」

ティーダ隊長が間に割って入る。
いつもの飄々とした雰囲気はなくてまるで鋭利な刃物のような雰囲気を出していた。

ティーダＳｉｄｅ

「今回は俺が相手になりに来た。彼は護衛だよ」

俺は恭也さんとあの女の間に割って入って銃を向ける。
これはミラージュ隊長の受け売りだが――――――上が動かないと下はついてこない。
第一俺は隊員を危険にあわせなたくない。

「レグルス2。これからファントム1と合流して事態の報告。指示を仰げ」

恭也さんに指示をだす。恭也さんも其処は組織の一員らしく理解してくれて頷いてくれた。
この場は多分俺のほうが戦いやすい。
何よりもこういう手錬との戦い方は俺のほうが経験がある。
恭也さんに経験を積ませたいのはやまやまだけどそこは隊の中でやればいい。

「私はどちらでも良いぞ。あとで追いかけて殺せばよいだけじゃ」

「追いかけられねぇよお前」
銃に意識を繋げていく。俺のデバイスが光り輝く。
「レグルス2、いけ！」
俺の声と射撃と同時に恭也さんが後方に走る。
魔弾が射出されて女に向かう。
が、女の目の前に出現した魔法陣によってかき消された。
「いきなり打ち出すとはこれが時空管理局のやり方か？」
「礼儀が要らない相手にはこれで充分だろ？反管理局組織めが」
「その反組織とやらが我らだと？」
「秩序を持って魔法は執り行われる。世界の管理は我々がする。というのが管理局の名目だ」
「ならお前もその名目のために動くのか」
「いや、俺は・・俺たちはその名目には興味がなくなってるんだ。今は狗として動き回る為にな」
何処まで喋ってるんだろうな俺は。だけど構わない。
「おしゃべりもここまでにしようぜいい女」
「ふ・・・理解しておるようじゃの色男」
互いに構える。俺は銃を。あいつは腕の一振りで魔法陣を展開して。
「時空管理局執務官ティーダ＝ランスターだ。お前を公務執行妨害で逮捕する」
「貴様の名など覚える気もないが此方も名乗ろう。ファーベル研究施設長、アスト＝スプリガンじゃ。お前を殺(バラ)して解剖してやろう」

アスト、ね。良い名前じゃないか。言ってる事は物騒だけど。
だがそれくらいで怖気づく俺じゃない。
恭也さんが行った以上誰も居ないならいいよな。

「本気、出させてもらうぜ」
「なんじゃ、手を抜いて私に勝てると思っておったのか。図々しい男じゃ」

アストも魔法陣をいくつも展開して既に臨戦態勢。
俺も対抗してスフィアを創り出す。その数３５。

「まずはこれでいくか」

無属性の魔弾を全スフィアから打ち出す。途端にこの空間は魔弾によって占拠される。
だが向こうも負けずと魔法陣から射撃魔導を打ち出していた。全弾がこれによってお互い相殺する事に。

だったらもっと打ち込んでやる。
魔連弾でスフィアの限界近くまで引き上げて打ち出していく。
アストのほうもそれに併せて連射を繰り出す。なんだよ、あの汎用性。
こっちの動きとレースされてるんじゃないのか？ってくらい相殺してくるな。

「中々やるね――――――」
「フン。この程度の真似事、私には造作もない」

よく言う。だったら次の手だ。

「『七曜』。起きろ――――――」

デバイスの名前を口にする。俺がミラージュ隊長の下についてからずっと持ってきたデバイスだ。
普段は銃型のデバイス。だがこいつは其処から7つの姿へと変える。

「タイプ・エクスカリバー」

デバイスを更なる姿へと変更させる。ハンドガンタイプからワンハンドライフルタイプへと。

アストＳｉｄｅ

こやつも私と同じ射撃型の魔導を扱うのか。
だがそれは相性が良いのか悪いのか。
数％の勝率をこやつは捨てておったのだ。

「そのデバイスとやら――――――調べたいのう。私にくれんか」
「勝てばくれてやるよ。出来るならな」
「大層な自信じゃ」

そういうなら見事勝って手にしてくれよう。
魔法陣を組み上げて周囲に纏わせる。
奴が本気で来るならそれに答えよう。

「ほうれ今度は私の番だ」

私はこの国の魔導を管理する者。多少の手を加えれば何でも出来るのだ。

右手を振れば壁から床から天井から魔法陣が現れる。その数大小合わせて実に７２！

その魔法陣全てから魔導の流れを打ち出す。蜂の巣になって消滅するがいい！

あぁ、そのデバイスとやらは置いていけよ？

「ふん――――――」

魔連弾が衝突したせいで煙が立ち込めたか。

奴の姿が認識で絹ではないか。全く弱いくせにいきがるからだ。

「――――――死んだか」

管理局の執務官とやらも対したことはないな。

この分だと奴の仲間もたいしたことはなかろう。

だったら急ぐ事もあるまい。他の五帝には後で報告だけしておいてやろう。

兄上にも報告せねばならないしな。

ゆっくりと爆煙が消えていく。どれ、奴の死体でも拝むとするか。

「――――――――――――っ・・・・！？」

爆煙が消えていく。そこには無傷のまま立っているあいつがいた。

「ふぅ・・・・プロテクションはあんまり得意じゃないんだ。出来るなら回避したかったけど」
「何故――――――何故生きている！あの連弾の中で！」
「何故って・・・全部防御したよ」
「馬鹿なっ・・・・そんな事が！」

よく見たら円形の魔法陣が周囲に張り巡らされている。
あれで防いだのか。私の砲撃を！

「中々やるけど。それでも前に闘った奴の方が強かったよ。あいつは俺の攻撃なんか効かなかったくらいだからな」

男の銃口が私を狙う。
ふふ・・・面白い。

「なら！私も本気を出さねばなるまい」

魔導力を強く放つ。それが反応して周囲の魔法陣が集まってくる。

「さぁ！見せてやろう。私の砲撃を！」
「だったら俺も見せてやるさ。ミッドの砲撃ってやつをな」

男の目の前に一際大きな魔法陣が現れた。まるで奴の魔力と比例しているかのように。

「そんな虚仮脅しに臆する私ではない！！」

縦に連立する魔法陣が目の前に並んでいく。
手元の魔法陣に魔導を籠めればすぐに撃ち放った。
魔法陣を超える度に威力が加算されていく。

威力だけでなく更に速度まで加算された魔弾は長く尾を引くようになっていく。

「ふはは、これこそ人を屠るに足る魔導よ！」

「えげつないね・・・・まったく！」

バックステップで男が下がる。ライフル型の武器を構えて私に、いや魔弾に向けている。

「この距離で撃つのも心配だけどな――――――いけっ！！」

やつの周りに魔力が集まっていく。あれは・・・・なんだ？

あれが管理局の力とでもいうのか。全くあんな情報は貰ってないぞ！

「必滅せし巨星の魔弾（メテオザッパー）！！！！」

銃口から放たれた魔弾は私の魔弾と衝突しあう。

押し切れない。何てことだ。私の魔弾が押し返せないだと・・・・・・。

「確かにあんたの魔法は凄いよ。此処までよく研究したと思う」

男が何かいっておる。微かに聞こえぬ・・・・。

「だけど――――――俺たちは負ける事は出来ないんだ――――――ごめん」

均衡していた魔弾が互いの魔弾を吸収して一つの巨大な塊になっていく。

これがもしここで破裂したら奥の部屋にまで影響が出るかもしれぬ・・・・。
だとしたら私の研究がまた一からやり直しになる可能性が・・・・・。

「させぬわ！この無礼者めが！！」

徐々に押されてきている。このままでは押し負けてしまう。
新しく展開した魔法陣を使った魔導でもって魔弾を押し上げる。

魔弾の下に敷くようにして魔弾を跳ね上げさせる。それだけで天井を突き破り空中へと飛んでいく。
空中に上がった魔弾は花火のように弾けて爆散した。

「くっ・・・・・」

凄まじい衝撃が施設の上から押し潰す様に降り注いだ。
お陰で施設が色々と破壊されてしまった。
一日で天井に穴を三つも開けられた。厄日かのう。

ティーダＳｉｄｅ

必滅せし巨星の魔弾（メテオザッパー）すら弾いたのか。あの魔法陣は利便性が高いな。
だからこそ野放しは危険だ。管理局が、じゃなくて俺たちで管理したいとか思うくらいの高性能。
アストに当てるにはあの魔法陣の障壁を超えないといけないみたいだしなぁ。
何よりもいくらでも出てくる辺り終わりが見えない。

「そろそろ終わらせて他の救援に行きたいところだね」
「それは私も同じじゃ。貴様の仲間がこの国に来ているというなら同じようになっておるのじゃろう」
「国に用はないさ。俺たちは管理局に反旗を翻すという組織にしか行かない。その組織なりがある国までは攻める事はない」
「ほう・・・じゃがどうする？この施設は政府公認じゃぞ。そのお陰でこの国がある。尚且つそれを統治するのが王だ」
「だったら――――この国ごと滅べばいい」

国全てが共謀してるならそれを止めるのも俺達の仕事だ。

「そうやって・・・魔導だっけか？お前達はその力で近隣諸国に攻めて行ったということか」
「王がいれば！兄上がいれば！この世界などなんとでもなるわ！そして時空管理局など簡単に捻り潰してみせる！」
「言質がとれたな。それはさせない。俺たちが――――その妄執をぶち壊す！！」

そう言った瞬間、極小の魔弾が幾百もマシンガンのように打ち出されたのを見た。
これでこのまま此処にいたら巻き込まれる。流石にあれを防御しきる硬さは自信がない。

「くっ・・・・」

幾つか打ち落としながらも何個か打ち返してアストを狙う。
そのまま俺はバレルロールで天井に空いた穴から外へと出た。

一瞬だけ周囲に視線を向けると爆煙が立ち上がる建物。

どうやら周囲にも被害が出てるようでその火消しが動いてるようだ。
すぐに下に視線を戻すと爆煙の中から魔弾が射たれる。

「まったくしつこいこって！」

だがここは通路のように狭い空間じゃない。空中なら最大のパフォーマンスも出来る。
多少大振りな感じになったが距離を取れば回避できないものじゃない。
全てを回避しきると明日とが穴から出てきた。
どうやらあっちも飛行はできるらしい。

「空を飛ぶとは中々やるな・・・・管理局」
「空戦魔導師だったら飛行魔法は必須だぜ。おたくらじゃあんまり空を飛べるのはいなさそうだな」
「よく言うわ。我ら五帝が出来ればあとはいらぬ問題じゃ！」

同じ高さまで上ってくれば向こうも漆黒の杖を持っている。
俺もデバイスを構えれば夕日が沈むのが光で見える。

「仕切り直しといこうか。アスト＝スプリガン」
「そしてこれで最後になる。貴様の名前は覚えておこう、ティーダ＝ランスター」

夕陽が沈みかかる逢魔が刻。第二回戦の始まりだ。

第七十三話　幻獣大戦

ミラージュＳｉｄｅ

路地から人目につかない場所に移動してスキマを使って街の外に出ていた。
通信を遣って津名魅に連絡を取る。
内容は『光鷹翼を展開させたまま規定のポイントで待機』というもの。
規定のポイントはこの国の真上空。

光鷹翼さえ展開していれば被害が出る事はまずないだろう。
なにせあれは始まりの船である『津名魅』そのものの力を有してるんだし。
津名魅を破壊したければ惑星を一瞬で壊せるほどの威力を持ってないと無理だ。

一度、国の概観を見る。
離れて見れば。何も知らずに見ればきっと美しい国なんだろう。
だがここは反管理局組織の潜む場所だ。ティーダと恭也さんがもぐった施設がそれだと。まだ確信はないけど。
という名目で来たわけだし、地上本部の言いなりに動くのも仕方がない。
今はあまり目くじらを立てずにいるほうが居心地がいい。

何よりもイレギュラー相手にするならきっと管理局の力は必要になるだろう。
だったら発言力のある場所まで上っておかねばならない。
あの武力を私利私欲で使うようなものだ。文句のないようにするに

はそれくらいしか手はないだろう。

「さて、行くか」

考え事をしていたら時間が経っていた。
空には津名魅が雲を切り分けて陽の光を浴びながら姿を現す。
勿論不可視の光鷹翼を展開している。
船体自体も不可視にしてるので見られることはない。
見えるのは高魔力を所持した者にだけ。

あれがいればどうしようもない時にも対処が出来る。

さて――――――俺も動こうか。

アリサＳｉｄｅ

ミラージュに言われたように所定のポイントまで移動しているところ。
最初は手を引いてたサリュアも今は抱えてる感じ。
手を繋いでるだけでもいいのだけど空気抵抗が邪魔をするのよね。

「大丈夫？」
「はい！私の事は気にしないでください！」

こう言う状況（飛行中）でも臆さないわね。

慣れてるのかしら・・・？

「私に構わずスピード出してもいいですよ」
「え、いいの？」

無意識に庇っていたかもしれない。
それを彼女は気付いた。だから構うなと。
一国の姫というからには箱入りなのかとさえ思った。
しかしこうして抜け出たりして行動力はある。胆力もある。

胸に抱えるようにして空気抵抗を出来るだけ外し空を飛ぶ。
まるで子供を抱く母親のようね。
指定のポイントまでもう少し。其処で高速で飛ぶ私達の前に人影が見えた。

「っ！！！！」

急激な減速。Gが体に掛かる。それでもサリュアを離さない様に確りと抱きしめる。
人影まで約３０Ｍ。そこで私たちは止まる。

「いきなり進行通路に出てくるなんてね。自殺志願者かただの馬鹿かしら？」
「ファファ、まだ死ぬわけにはいかんの。我が望みはまだ達成しておらぬのでな」
「・・・その声、フェイク翁ですか」
「知ってる人？」

というかその質問はベタだったわ。この状況で出てくるのはサリュアを取り戻しにでも来たんでしょうけど。

「フェイク＝ヌァ。死霊術士（ネクロマンサー）です。五帝の一人で遣帝と呼ばれています」

サリュアが五帝について教えてくれた。国王を中心とした五人の称号らしい。
この国の魔導にも関わっているとか。

「さぁ姫様。王がお待ちじゃから帰ろうかの？」
「厭です！私はこの国の・・・魔導の行く末が怖いのです。まるで破滅に向かっているようで」
「そんな事はない。この力はこの世界を豊かにする。全ての頂点に立つ力なのですぞ」
「・・・選ばれた者しか使えない力が頂点になど立てるものですか！」
「選ばれた力だからこそ全てを統べるのです！我々エネミアが全ての世界の頂点に立つのですぞ」

サリュアと目の前の・・・爺というからにはおじいさんなんでしょ。
なんだか物騒な話なんだけど・・・あんまり話についていけない。
つまり？この国が世界を牛耳ろうとしてるのをサリュアがしって逃げた？そんな感じ？

「私はっ・・・この国のやり方を否定します！」
「姫といえどもたった一人の小娘が何を言っても覆ることはないですぞ」
「そうとは限らないわよ？」

思いついたことがあるので口を挟む。

「貴方達がもし悪い事をしようとしているのなら、その証拠を押さえてしまえば覆るんじゃない？」
「もしそれが可能としても実行は不可能じゃぞ、小娘。我らを甘く見るでないわ」
「貴方も私たちを甘く見ないほうがいいわよ？」
て言ったけどまだ良く判ってないのよね。
「貴方達の目的、目標は何？」
「ファファファ。其れをいうと思うたか、小娘！」
「そうよね！そうだと思ったわ！」
聞いて答えてくれるほどよく出来てるなら悪役なんてやらないわよね！
聞いて損した！はずかしいったらないわ！
「ならば小娘的にはどうするかね？」
「サリュアを連れてかれるのはこっちでも問題なのよ。特に私の体裁的に」
「フォフォ、姫を連れて行ってどうするのかね？其方には関係なさそうじゃが」
「そうね。今まではね。だけど――――――この手は。一度掴んじゃったんだもの。もう手放せないわ」
「アリサさん・・・・」
「ごめんねサリュア。私、貴方を渡せなくなったわ」
「いいえ。それならこの言葉を言わせてください・・・・助けてください、と」
「ＯＫよサリュア。私達は貴方を助けるわ」

掴んだ手が一層力がこもる。実質的にじゃない。心の中までも繋がった感じ。

「そういうことよおじいさん。手を引いて帰ってくれると助かるんだけど？」

「そういうわけにも行かぬのはしっておるじゃろう？なので手を出させてもらおうかの」

おじいさんとやるのはどうも気が引けるわね・・・・。

でもそうも言ってられないくらいの力があるんでしょ。だって五帝の一人だっていうなら。

私もデバイスに力を注ぐ。やってやれないことなんてないものね。手の甲にある核が鈍く光る。私と反応してくれてる。

「サリュア。この手を離さないでね」

「はい。確りと握ってます！」

グ、と握られた私の左手とサリュアの右手。私たちは二人で相手になるというおじいさんを見る。

「ファーファファファ！いいぞ、ならばお相手しよう。このフェイクが！じきじきに！」

おじいさん・・・フェイク翁がやる気を出す。魔力が高まっていくのが肌で感じ取れる。

やるしかない、か。私まだ直接戦闘とか苦手なのに。

周囲の魔力が怪しく漂う。まるで其処だけ腐臭がしてくるような怪しい雰囲気。

そういえば死霊術士（ネクロマンサー）なんて言ってたっけ。

だったら死体・・ゾンビとか使うのかしら。でも空に浮いててゾンビ？

「儂の力を見せてやろう小娘」

ぞわ、ぞわぞわ。其処に居るだけで悪寒が背中を走り抜ける。
持っていた杖を一振り。うん、あれはデバイスとかじゃないみたい。
それくらいはわかる。

「さて。では始めようかの」

魔法陣が形成される。フェイク翁の足元と右側に二つ。
足元にはまるで蝙蝠みたいな獣。
右側には恐竜・・・プテラノドンみたいな姿の獣。
蝙蝠みたいな獣に乗ってプテラノドンを前にだす。

――――――この感覚。わかる。知っている。

「召喚・・・・」
「ほう。気付いたか小娘。そう、この技術は召喚術よ」

召喚士が相手なんて。全くよくやるじゃない。アイツも。

フェイクＳｉｄｅ

若き騎士には行かぬといったが少し手を出させてもらおうかね。

足場と迎撃用に獣魔を出してみたがこれからどうするかの。
姫を連れ戻しに来たはいいが邪魔者がついてきておる。
この地の魔導とは違う匂いがするなら管理局の魔導師か。
どういうタイプなのかはわからんが相手にとって不足はないのぅ。

「さて、やろうかの、管理局の魔導師」
「この世界には管理局の情報なんてなかったはずだけど・・・？」
「何、情報などいくらでも漏れるものよ。お主等とてこうしてやってきたわけだしの」

とはいえ管理局の情報は得ておった。
輪廻の魔女とこの世界に来て正解だったかもしれぬ。

その輪廻の魔女はまだ姿をだしておらぬようだな。
仕込がまだ足りておらぬのか。ならば儂は儂でやるべきことを仕込んでおこう。

「さて、管理局の魔導師よ。やりあおうか」
「えぇ。そうしましょうか翁」

右の手の甲を見せるようなポーズを取る小娘。
左手で姫を掴んでおるのか。飛行魔導もない姫を浮かせていられるとは管理局の技術も侮れぬわ。
ならばあの手を狙うかの。小娘がナニカする前に先手を取らせてもらおう。

「獣魂召喚！」

手の甲から光を出してそれが獣の形になる。なるほど。奴もまた召喚士。

「珍しい獣じゃな」
「私の世界で獣の王って言われてる獅子よ」
ほう。獣の王とな。それは興味深い。
「その獣の王の力を引き出せるのかの？」
光の獅子とやらは鬣を振って今にも襲い掛かってきそうじゃ。
大きさとしては距離があって正確にはわからぬが小娘よりは多少大きいか。
対する儂の獣魔は飛龍種でもオリジナルに手を加えた獣魔じゃ。
こやつの力を好きに振舞うのも面白そうじゃ。
足元のは足場でしかない奴じゃし。
「では互いの力を比べようかの？」
飛龍を飛ばす。翼が風を切って進んでいく。
風斬り音を鳴らしながら近づきながら大きな顎を開き噛み付きにいく。
しかし獅子も負けておらずに咆哮を一つ鳴いてから真正面から向かってきた。
フォフォ、面白い。飛龍に無って来るとはあの獣の王とやらの知能も程度がしれるかも知れぬな。無論呼び出した本人も。
獣の王は儂の飛龍を噛み砕こうと顎を開けてくる。
だが儂の飛龍も同じように広げておる。互いに噛み付く場所は違えど同じタイミングで噛み付いた。
閉じる音が大きく響くかという位な音が周りに響く。

閉じたのは儂の飛龍の顎のみだった。

獅子と呼ばれたその獣の体は見た目通りに光で出来ており実体がなかった。

故に飛龍の牙は獅子の体に刺さる事は無く閉じられた。

逆に獅子の牙は飛龍の左翼の付け根に牙を突きたてていた。

なるほど。任意の場所を実体化するとでもいうのか。

「幻影の獣か。興味深いものを使役しておるの」

「お褒めに預かり光栄ね」

飛龍の噛んだ体の光は揺らめくのみで幻影のようだ。

幻楼のようなものか。

飛龍は噛み付かれた翼の痛みにもがいておる。

このまま塵に帰したほうがよさそうじゃの。

杖を向けて魔導を籠めると飛龍は文字通り塵となって消え去った。

ふむ。死霊の癖に痛がるとは無様な龍じゃ。

「次、いくぞぃ」

杖の先端で円を描いて魔法陣を描く。

大きな円を描けば其処から現れるのは巨大な赤龍の死体。

所々の皮膚や鱗は剥げ落ちているが立派な体躯。

「さぁ、いこうかの？」

今度はこれで勝負じゃ。その光の獣ごと消し去ってくれるわ。

アリサＳｉｄｅ

あぁ、もう。何あの精神力。あぁも召喚し続けてくるなんてどれだけ凄いのよ。

「フェイク翁の帝位は遣帝。全てを遣える者の意味でもあります」
「それって他のにもついてるの？」
「はい。五人全員に」

大仰ね。全てを～なんて。そんなもの最後の一人になるまで判らないじゃない。
そんなのが相手になってるのね。
目の前の私のライオンが龍？に齧られそうになったけど光だから傷つく事は無いのよね。
何より攻撃するときだけその場所が実体化するとかミラージュから貰ったこの能力半端ないわ。

とはいえ持続力がないのよねこのライオン。
短時間でならいいけど長時間は持たないのがネック。
鍛えようがないらしいからあとは使い方の応用を勉強ね。

と言ってる傍から光のライオンはうっすらと消えていく。

「ほう・・・消すか。いや消えたか。持続できぬようじゃな」
「元々長時間は召喚してられないのよ。残念だけど」

肩を竦めておどけてみせる。しかしフェイク翁は笑うそぶりも無く私を見てる。

「さて小娘。次の手はあるのかの？」
「えぇ。ちなみに私は小娘じゃなくてアリサ＝バニングスという名前があるからよろしく？」
「フン、小娘など小娘で充分よ」

そういえば名乗ってなかった。名乗らないのは礼儀に反するとか何とか言ってたっけ。
名乗りとは違うけどこれでいいかな。
だけどこれからが本番。サリュアを守りつつミラージュのところに言って説明しないとね。
その為にはフェイク翁を倒さないといけないわけか。

「私が先に進むための壁みたいね。貴方は」
「そして儂にとって小娘が壁、か」

互いに進む道に立ちはだかる壁なんだ、と認識すればあとはやる事は一つ。
リンカーコアがあっても私自身に闘う力は無かった。だからミラージュは私に闘う術を教えてくれた。

召喚術。

ミラージュがくれた子達と、私が契約した子達。その全ての力を出して見せるわ。

「目の前の壁は越えられる壁。だったら越えてみせる」
「儂という壁を越えられると。随分と低く見られたものよ！」

同時に召喚を行う。
私は炎の巨人を。あっちは鎖に繋がれた女の人を。

空中から鎖が出てる。まるで封印でもされているかのような。
目も左腕も。布で覆われて動かせそうにない。

「この勝負を終わらす為に幻楼が一鬼を出す事になるとはな。小娘、多少は評価してやろう」
「評価を貰う前に貴方を捕縛しますから安心してください」

ただ闘うだけではない。この任務での重要参考人か首謀者。
だったら逃がすわけには行かない。話をするまでは。

「いって！イーフリート！」

炎の巨人に指示を出す。熱く猛る炎を身に纏っていく。火の粉が街に降るけどその前に消えていった。
流石に街に影響だしちゃだめよね。

イーフリートは炎の道を作って空中を走っていく。まるで某映画の車が走った後みたいなアレで。
炎の筋を残して急速で吶喊する。けどフェイク翁の口元がまだ笑ってる？

『我は――――幻楼が一鬼なり』

フェイク翁が呼び出した女の人の右腕がぼんやり光ってる。

『我が右腕に問う――――応えよ』

『我は――――全てを燃やす金剛炎なり』

反応する詠唱魔法！？

「あぶない！あれはフェイクの持つ魔導でもかなりのものです！」

え。それってじゃぁ危ないじゃない。
それも念話でイーフリートに伝えて対処させる。
女の人の右腕に炎が纏わり付いてそのままイーフリートに殴りつけた。
炎と炎がぶつかりあって更に炎を巻き上げる。まるで地獄絵図のように燃え盛る空中。
街のほうに影響でなければいいけど。

炎が拮抗しながらも燻っていく。空気が焼ける。
肺の中まで焼けそうな位の熱気が空を包んでいく。

視界の端の方に弾幕戦してるのが見える。あれは多分ティーダ隊長かしら。
だったら負けてられない。元々向こうに合流する筈だったんだから。

ぶつかり合う炎と炎は相殺するように消える。
炎が無くなれば女の人もイーフリートも霞む様に消えていった。

「儂と同等の力・・・召喚術を持っておるとはな。驚いたぞ小娘・・・いや、アリサ＝バニングスか」
「お褒めに預かり光栄・・・ってさっきも言ったかしらね。フェイク翁」

サリュアを守りつつこの人を倒して・・・隊長と合流か。
激むずモードだけどやらなきゃね。
そんでミラージュに褒めてもらうんだ。

「私は先に進まないといけないの。此処で止まってるわけにはいかない！」

それに私たちはまだやらないといけないことがあるんだ。
私だけここで止まってたらダメなのよ。

「だから――――速いけど次で決めるわ！」

魔力を開放させてデバイスに集めていく。
大きなものを呼び出す以上、ちょっと大変だけど。

「サリュア。何が出てきても驚かないでね」
「は、はいっ！」

ミラージュから貰った召喚術の中で飛び切りのものをだして・・・・
この目の前の壁を突き抜けるから！

「龍魂召喚！！！」

第七十四話　鬼の牙

すずかＳｉｄｅ

チェリアさんと対峙中だけど・・・どうしようかな。

「あの・・・やめませんか？出来ればお話聞かせてもらえればいいですけど」

「ここまでやっといて一方的に話して終わり、なんて終わると思ってんのカ？」

埋まっていた壁からガラガラと瓦礫を纏わせながら出てくるチェリアさん。

出来ればやりたくないんだけどなぁ。

「どうしてもやらないとダメですか？」

「此処まで来て引き下がれるわけもねぇだロ」

チェリアさんの体に魔力が通っていく。身体強化をし始めたね。

でも今まで感じたのよりもとてつもなく大きい。

既にやる気満載ですか。もう回避は出来無そう。

「じゃぁ、一つだけ約束してください。私が勝ったらなんでも言う事聞いてくださいね」

「私に勝つ気でいやがるのがなんとも憎たらしくってシャーねぇよなァ！いいぜ万一にもねぇケド！」

右手指をゴキゴキ鳴らしながら承諾してくれた。

これで私が勝ったらお話聞かせてくれそう。

「セットアップ」

バリアジャケットに身を変える。月の姫。白きドレス。
それは朱き月の姫が纏うドレス。

お師匠様に許可は貰ってるからね。
ただこのバリアジャケット、胸元が・・・。
お師匠様みたいにスタイル良くないと似合わないんだよね。

白いドレスに赤い手甲を装着した姿はミスマッチながら綺麗。自分で言うのもなんだけど。
バリアジャケットの概念がないこの世界じゃ珍しいみたい。チェリアさんがじ、と見てる。

「なんだ？変身した？アイツみたいなことしやがるナ」
「アイツ、っていうのが良く判らないけどそれも込みで聞かせてもらいます」

右五指をゴキリと鳴らす。互いに準備は整った。
あとは始めるだけ。

チェリアＳｉｄｅ

なんだかスズカが変身した。
城の奴等にも負けないくらいのドレスに身を包んだ姿になった。

あぁも変身するのはアイツ・・・ビリージャーくらいだと思ってた。
私達じゃ必要ないというかいらないだろ。

ビリージャーがいうには雰囲気と正義の心次第らしいがな。
それと同じか？まぁいい。虚仮脅しじゃないってんならそれを見せてもらおうかい！

まず先手を貰う！初手から疾駆、最高速に乗っかって突っ込む！

「ふっ！」

呼気一閃。縦に振られた左腕が地面から一気に跳ね上がる。
狙いはスズカの顔面。
顔面殴って吃驚させれば大人しくなんだろ。

一気に突き上げてしまえば泣いて謝る。そう思ってた。
だが実際には拳に手ごたえが一切無かった。
空を切る拳。隙を晒してしまう。脇腹がぽっかりと開いてしまう。
狙われるとしたら此処だ。身体強化で体を硬化させる。小さい魔法陣が一つ、脇腹に生まれた。

が、一向に追撃が来ない。スズカを見るとバックステップしてもう此処にいなかった。
攻められるのに攻めないとかどんだけチキンだよ！
私なら一気に畳み込むっての。

「手前ぇ。嘗めてんのか！」
「まさか。余裕がないだけだよ。それに――――――まだどれだけ力を出せばいいか判らないし」

なんだそれ。なんだそれ。なんだそれ。

「ふざけてんのか！！！」

思わず私は声を上げていた。路地裏に私の声が重く響く。
余裕が無いから本気が出せない？何言ってんだこいつは。
だったら――――本気を出せるくらいまで追い込んでやンよ！
もう一回体勢を直してから睨むようにスズカを見る。
スズカは右手の甲を見せているようなポーズのまま動かない。

「そっちから動く気が無い、ってことかヨ！」

身体強化した分、疾駆も早い。一気に懐まで入り込む。
杖を動かせば肘が当たるくらい密接してる。
瞬間的に巻き込むような左フックと右の突きを繰り出す。

後ろに下がるなら左のフックが逃げ場をなくす。
そうでなくとも右の突きが狙いを定めている。
これで回避出来ないはずだ。獲った！

「逃げ場がなければ受け止めればいいだけなんですよ、チェリアさん」

身体強化されて高速の攻撃をスズカは難無く受け止めた。
完全に私の腕をホールドして動けないようにする。
此処までスズカがやるとは・・・思っても見なかった。
精々私よりも下だと思ってたのにな。

「それで勝ったと・・・・・思うなヨ！！」

右足で蹴ろうと思ったら捕まれてる両腕を引き寄せられて倒される。
まるで前かがみにさせられた感じだ。
それだけで蹴りは出せない。体の構造を理解しているようなそんなやり方だ。

蹴り足はだせなくなったのでそのまま前に踏み込むだけに終わった。
なんてことだ。この私が。拳帝と称されるこの私が。
こんな小娘一人に翻弄されているだと？

「そんな馬鹿な事あってたまるかヨ！」
「この意味が判らないですか。チェリアさん」

何言ってんだ。何言ってんだよスズカ。
何でこんなに力の差があるんだよ。
ほとんど全力で身体強化してるのにこの差は何なんだよ。

「貴方は確かに人としては高みにいるでしょう。だけど――――――
それだけじゃだめなんです」

「私は人より高位の存在。人為らざる者。所謂――――――化け物ですから」

「あぁでも。化け物といえばまだ他にもいますけどね」

矢次早にスズカが喋りだす。化け物？何を言って・・・・。
途端スズカの魔力が膨れ上がる。まるでそれは寓話の鬼のような・・・・。

「私は吸血姫を師に持ち吸血騎の眷属となった吸血鬼。夜の一族の末席」

それが本当なら本当に寓話の存在そのものじゃないか。
スズカは本当に人じゃないってのかよ。

身がブルッと震える。恐怖と歓喜で寝かしてたアレも起きてくる。
ハハッ、いいねぇやっぱりスズカは最高だ。
始めて見た時に感じた感じは嘘じゃなかった。

「だったら・・・・だったらよ。第二ラウンド開始といこうじゃないか。
　化け物と人の戦いのサ！！！」

すずかＳｉｄｅ

闘いの中に居ると感情が昂ぶる。
ミラージュくんとの連結があるから？
夜の一族の血がそうさせるから？

でもいいや。ミラージュくんが喜んでくれるなら頑張るんだもん。
チェリアさんは本気出せっていうけどそう簡単に本気が出せないから本気っていうんだよ。
余程の事がない限りはお師匠様からも本気を出すなって言われてるし。

「チェリアさんもまだ本気じゃないよね。まだ隠してるはずだよ」

身体強化だけで上り詰められるはずが無い。まだ隠してるはず。

それを見せてくれたら私も本気を出すかもしれないね。

右腕の振りだけで地面を穿って衝撃波を飛ばしていく。余波が周囲に飛び散っていくけどもう構わないよね。
衝撃波がチェリアさんに直撃すると弾ける様に衝撃波が散らばる。
それだけで鎌鼬現象を起こしてチェリアさんを刻んでいく。

両腕を交差させて防御してるけどその体へのダメージは見て取れる。
服や肌が斬れてるけどあんまり深くなさそう。
身体強化を防御に回したのかな。さっきも私からの攻撃があると思って魔法陣展開してたし。

でも私が見たいのはそれじゃないんだよ。
その位じゃまだ本気になれないんだよ。
うっすらと瞳の色が変わっていく。瞳孔も縦に細くなっていく。
ほら早くしないとチェリアさん。
私――――貴方を――――殺してしまいそうですよ。

何度も腕を振っては真空だったり衝撃波だったりと飛ばし続ける。
其の都度チェリアさんがもんどりうって回避する。
一回腕を振るう毎に今度は指の数だけ飛ばすものを増やす。

「ほらどうしたんですか?望んでた通り段々本気になってますよ」

衝撃波が段々強くなってきた。気分で威力が変わるってのも逆に考えてしまえば考え物。
滅入った気分で振れば威力は激減するわけだし。

でも今みたいな気分でならソコソコ強くなるんじゃないかな。
実際後ろの建物とか破壊されてきてるし。

これ、後で賠償とかならないよね?正当防衛中だもん。
建物の破壊は凄まじいけど賠償来たら経費で落とそう。

「く、っソ!!」

チェリアさんが避ける。避ける。当たる。避ける。当たる。当たる。
当たる。
被弾率が段々上がってきてる。其の度に足が止まって次の攻撃に当たる感じ。

私はまだ一歩も動いてない。いや、最初だけ動いたかな?
でももういいや。このままつまらなく終わるならいっそ今すぐ終わらせよう。

右手に籠められる魔力を増大させる。それだけで今までで最大の威力を有する。

「ふふ。ふはは。あはははははははは」

最大級の魔力を籠めて腕を振る。それだけで魔力は衝撃波を創り出して目の前に五本の牙を剥く。
最初はゆっくりと。しかし徐々に加速していく。
周囲の建物よりも大きな衝撃波の牙が出来上がる。
うん、これならきっと満足かな?

「本気ってわけじゃないけどその一端だよ」

路地裏を一気に駆け抜ける牙。それは路地裏だけでなく街の一角すら破壊しうる威力。
空中戦を行っている者すらその牙は確認できたという。

その衝撃波の牙の中、チェリアさんはずっと防御してた。
それでも最初に立ってた場所からかなり後方に下げられてる。

「うーん。いまだとこんなかな」

満足はいかないけどまぁこんなものだろう。
ただ、粉塵と爆煙で周りが見えないのが難点だね。
チェリアさんの姿も見失っちゃいそうだよ。
って言ってる傍から姿が見えなくなっちゃった。

まぁでももう終わりかな。ここまでやればもういいでしょ。
私は飛行魔法でふわりと空へと飛ぼうとした瞬間、魔力が集まっていくのを感じた。
周囲の魔力を集める集束系魔法。なのはちゃんと同じ周囲の魔力を集束した魔法。

一瞬だけ。一瞬だけだけどゾクッとした。
刹那、ソレは私に襲い掛かる。長い髪先を擦れるように脇を掠っていく。
今のは確かに集束魔法だった。現に周囲の魔素が減っている。
つまりは彼女は・・・周囲の魔力を集めたのか。

私を越えていく集束魔法は遥か後ろの方まで直進して消失した。
運が良いのか悪いのか集束砲は帯を作ることなく短い軌跡を残して消えていったのが幸いなのか。

「いまの・・・チェリアさん?」

まだ粉塵漂う中に声を向ける。

未だに姿の見えないチェリアさんのいるだろう場所をじ、とみる。

粉塵の中でシルエットが見える。
右腕を突き出したポーズが徐々に見えてくる。
やはりそうか。チェリアさんは集束魔法を使ったんだ。
身体強化だけではない、今の集束魔法と併せて今の地位に上り詰めたんだろう。

「それが貴方の力というわけですか」
「あぁ。体中の魔導を圧縮させて打ち放つ。私のとっておきダ」

体中って。それだけでないの気付いてないのかな。
まぁ言わないでおこう。

「じゃぁまだやれるよね」
「当然ダ！」

やる気ＭＡＸってやつですね。じゃぁあれをまた打たれる前に至近距離戦でもしましょうか。
今度は私からチェリアさんに近づいていく。ほぼ一歩で至近距離へ。

「っ！？」

吃驚してるね。当然か。あっちが疾駆で近づくのに対して私は一歩で近づいたわけだし。
これが縮地ってやつだね。特別な歩法だから訓練が必要だけど。

頬と頬が触れ合うくらいに近づいた所で右腕を振るう。チェリアさんの懐に衝撃波を創り出す。
防御も出来ないままに巻き込まれながらも右手に作っていた砲撃を

私に打ち込む。
攻撃は最大の防御なり？そんな感じなのか。
それでも互いに退かない攻防はずっと繰り広げられる。
続く限りは周りに被害が出続ける。
路地裏のあるこの一角は最早災害の通った後のように悲惨な有様。
移動しながら付かず離れずを文字通り実行していけば瓦礫の山が出来上がるだけ。

「あー・・・ここまでやるつもりじゃなかったんだけどなぁ」

ガラガラと瓦礫の山の上で粉塵をバックに一人ごちる私。
いやいや私もここまでやるとは思わなかったよ？

「何処いったかな」

瓦礫の山の上にはチェリアさんの姿はない。
気配はある。魔力も感じる。だけど正確な場所がわからない。
こんな事ならちゃんとサーチ魔法覚えておくんだったな。
まぁ、こうなったらもう続きもやれないかな。お互い怪我もひどいし。
私も私でバリアジャケットがボロボロ。あとで治療魔法かけてもらわないと。

「あーぁ。折角お師匠様と同じようなドレス風にしたのになぁ」

一度だけ見せてもらったお師匠様のドレス姿にあこがれて同じようなものを作った。

ただしスタイル的にあれだけのモノはなかったけれど。
でもこれからだよ！まだ私だって成長期だもん！

粉塵やら爆煙やらが収まってきた。チェリアさんはまだ顔を出さないから今回はこれで終わりかな。
結局相手の力を見たいからって実力を出し渋った成果、って所だろうね。
続きは受け付けるからいつでも来てね。

ふわ、と飛行魔法で空へと私は躍り出る。
他のメンバーの戦闘がまだ続いてるのがわかる。
念話したいけど邪魔になるから今は抑えておこう。

そういえば津名魅が来てる。だったら治療魔法を受けにいっておこう。
皆、私は一旦下がるけど頑張ってね。治療魔法終わったらすぐに戻ってくるから。

第七十五話　不屈の刃

恭也Ｓｉｄｅ

ティーダ隊長と別れた俺は屋根の上を渡るように飛び跳ねて移動していた。
別に飛ぶ事は可能だがまだ飛行中の体勢とかに自信がない。
元々は俺があの女と決着を付けたかったが愛称が激悪い。

飛び道具相手には無傷で勝利する事は恐らく今の俺では無理だ。
直接攻撃や至近戦闘でなら敵は居ないんだがそれは管理局としては本当に稀だ。
もっと魔法戦技になれないといけないな・・・。

ファントム隊とやりあえばいいか、等と考えながら城へと近づく。

『恭也さん。今何処ですか』
『ミラージュか』

ミラージュから念話が来た。が、足を止めずに行き先を捉えていく。

『今、城に向かってる。ティーダ隊長からの指示だ』
『了解しました。じゃぁそのままお願いします』

短いやり取りの後、念話は切れた。
位置確認ならデバイスのポジションで把握できるだろう。
恐らく何か言う事があったみたいだがこっちの事を優先するような事だったんだろう。
だったら今与えられた指示をこなすのみだ。

しかし・・・他の奴らは派手にやってるな。あっちじゃアリサと召喚対決か。イーフリートまで出すとはな。
遠くの方・・・あっちは確か裏路地の方だ。あの攻撃方法は見覚えというか、喰らい覚えがある。すずかだ。
あとは俺の背後の方でティーダ隊長とあの女の魔弾対決。中々皆手の内を出してるもんだ。
隠密行動の多い俺は手の内を見せることなんて出来ないけど、少し羨ましいもんだ。

おっと。すずかの衝撃波の余波が飛んできた。
だいぶ先のほうから衝撃波の牙が飛んでくるのを視認してから充分な距離をとって回避。
一直線に抜けていく牙が建物を破壊していく。

「えげつねぇな、あの子も・・・」

忍よりも潜在能力あるんじゃないか？まったく。本人にはいえないけどな！けどな！

もう少しで城に到着する。それから内部の調査も開始だ。ティーダ隊長によれば此処も怪しいとのことだし。
城門らしきものが見えた。もう少しだ。
そう、もう少しだったのに。視界の端から流れ星の様に降ってきた人影が俺を遮った。

セイザーＳｉｄｅ

城の上部にある自室の窓から先ほどから始まった戦禍を見続けてる。
フェイク殿もアストもチェリアも本分を忘れて楽しんではいないか？
余程のことがなければこの国に侵攻する等と言う蛮族は居ないはずだ。
だとすればこれもあの輪廻の魔女の言う管理局という存在か。

そして今、遥か下で建物の上を伝いながら城に近づくあの隠密もその一味と見た。
面白い。他にいない様だしここは私が出るべきだろう。

壁にかけられていた一振りの剣を手にし、その下部に鎮座していた珠を腰のバックルに填め込んで行く。

「我が宝剣よ。フェイタルブレイバーよ。今こそ我らの力示す時ぞ」

我は剣を使いし剣帝。さぁ、行こう。我が剣戟のお披露目である。
窓から身を乗り出してそのまま急降下。剣の重みと鎧の重みで更に効果速度は上がる。
急激な急降下を得てから私はその男の前へと静かに降り立った。

「だ、だれだ！」

未だ粉塵の最中に男が私に問いかける。

「私の名はセイザー。セイザー＝アシュクレヴィオス」

名乗りを上げてから剣を構える。既に剣気は纏い済み。
目の前の男からも剣気が感じ取れる。
彼もまた剣士なのだろう。ならば剣で語るのみ。

武具強化の魔導をかけておく。次いで、身体強化。
これで彼がどれだけの剣士であろうと私に敗北はなくなった。

「これより先、城に立ち入る事を禁ず。私こそが城壁であると知るがいい」

宝剣を一振りすれば蒼き魔導の輝きが散らばる。

「貴公も剣士であるならばその刃にて応えるがいい」

向かってくるのが其方のやり方ならば我らは其れに応えて護るのみ。
異世界の剣というものがどういうものかも興味がある。
しかもあの服装からして隠密。フフ、少しは楽しませてくれるかな。

「・・・・・・・」

「隠密であるならば名乗る道理は無い、という事か。確かにそれで充分だ」

名を捨てたりと隠密であるならば理由もあろう。
それなら深く追従もしない。
アストの施設から出てきたのは確認しているからな。
恐らくはアレを調べにきたのだろうが城に向かってきたのは失敗だった。
私が守護する以上は絶対不破を貫くまで。

「では参ろうか」

せめて一撃で終わらぬようにな。

恭也Ｓｉｄｅ

「では参ろうか」

大男が剣を振るう。両手剣に見えるそれを片手で振るう様はなんとも圧巻だった。
刃渡りが長い。２Ｍはあろうかというくらいの大剣だ。
しかし男との体格さを見ればそれが丁度いい長さなんだろう。

剣を振るう度に蒼白い魔力光を放つ剣。
恐らくマジックアイテムの類。アームドデバイスと同じ感じだ。
純粋なデバイスではない分、恐らく付け入るなら其処か。

「しかし・・・絶対不破、ね・・・・」

御神の剣士の前に不破、だと？俺を前に不破、と？
ざわ、と空気が変わる。俺はとても心を静かにしていく。
まるで静かな湖面に染み渡る波紋のように。
そして早朝のような静謐な感じ。

「御神、不破。モード『トライアングル』」
『Ｙｅｒ』

俺のデバイス、右の御神と左の不破が呼応する。
モード『トライアングル』。完全隠密性。
小太刀を逆手に持ち替えて気配を限界まで消していく。

目の前にいながら霞に掛かったかの様になるほどの気配の希薄。

「む・・・気配遮断か」

あっちが気付いた頃には既に俺の気配は揺らめく蜃気楼のように薄っすらと消えかかっていた。

其処から特別な歩法で以って近づく。気配を悟られずに静かに。そして鋭敏に。

背後からの攻撃。忍者であるならこの攻撃は正当だ。騎士ならばそれを理解できようか。

頚動脈を狙うように御神を振り切る。

しかし其処に騎士の首は無く、文字と折り空を斬るのみに終わった。

騎士・・・セイザーは前に数歩出ただけで俺の斬撃を回避していた。

「危ない危ない。もう少しでやられる所だったな」

強い眼光が俺を射抜く。いや、俺の居場所を見抜いてるわけが無いが確かに俺を射抜いた。

周囲に向かってのことだろうがそれでも俺を一瞬でも萎縮させるには充分だった。

「何故・・・避けれた」

居場所を悟られぬように幾つかの残響を遣って声を出す。

「ふむ・・・・・勘、かな」

勘、だと?俺の気配遮断からの斬撃を勘で避けたというのかこいつは!

全く・・・魔法世界というのは何処まで御神の剣士を見下ろすのか。
アイツ然り・・・・。

だが今の会話だけでも充分に体勢を直す事は出来た。
今度は弐連。御神と不破での不連続多段攻撃。タイミングをわざとずらしての斬撃だ。
これに対しては流石に焦ったのか余裕も無く回避していた。それでも回避するんだな。

だがそれで止まる俺じゃない。此処でとまるから今までの俺はダメだったんだ。
だったら止まらずに仕掛ければいいんだ。

参連。四連。五連。六連。
速度と重さの乗った斬撃を何度も斬りつける。
向こうもあの大剣でこっちの速度についてきてる。
既に気配遮断は停止している。場を変え立ち居地を変え剣の持ち方を変え。

互いに押し込める事も出来ずにやきもきしながら互いの剣戟をいなしては払い、打ち落としては薙ぐ。
しかしそれなりの腕を持つ者ならきっと気付いただろう。
大剣を振るう騎士を相手に小太刀二振りで対応しつつも退かないこの隠密の力量を。

「中々――――――やるじゃないか」
「そりゃどーも・・・」

斬撃の中での短い会話。互いの間合いの少し外側。構えは最初のときと同じだ。

ただ――――俺のほうが小太刀であろうと間合いが広い。
そろそろ決めるか・・・・・。

「その短剣で私を此処まで渡り合うとはな。我が騎士団に迎え入れたいくらいだが・・・きっといい返事はしてくれないだろうね」
「当然だ」

俺が此処にいる理由は一つだけ。妹を護る力を得るためだ。
他に何も無い。だからこそ俺はどんな汚い事でも目的の為になら手を汚す事だって辞さない。

「だがこのままでは延々長引いてしまう」

ゴソ、とセイザーが腰の袋から何かを取り出した。
・・・珠？色取り取りの珠だ。

「我が宝剣フェイタルブレイバーの真骨頂だ。是非見て行ってくれ」

ガ、コン。と珠の一つを大剣の鍔の穴に填め込んだ。
それだけで。それだけで。場の魔力を支配したかのような感覚に陥りながらも軽く一振りした。

「さぁ、第二ラウンドを始めようか」
「出来れば・・・手短にしてもらいたいね」

たらりと汗が額を伝うのを感じながら俺は覚悟を決めた。

セイザーＳｉｄｅ

「さぁ、第二ラウンドを始めようか」

宝剣フェイタルブレイバーの真骨頂である属性変化。
鍔にある台座に宝玉を填め込む事によって其々の属性を扱う事ができる。
今填めたのは赤い意志。火属性だ。刀身が赤く燃える様に熱を帯びる。

しかし・・・彼の間合いは広いな。これでもギリギリの間合いで立っているのに彼の懐が広すぎる。
余程の手錬。あの腕が騎士団に居てくれればきっと・・・・。
いや、何を考えてる。今は彼は敵なのだ。この国を討ちに来た蛮族。
ならば此処で討ち取るしかない。

「勇猛な腕を屠るのは如何ともし難いが・・・・すまないな」
「謝る必要は無い。互いの道に交差した以上は」
「ふ。言うな。隠密が」

フフ。隠密のくせに生意気な事を言う。だが心地良いな。
では行こうか。剣舞の再開だ。

一合、五合、十合と。熱を帯びた宝剣で斬りつけても彼の短剣は折れる所か渡り合っている。
そんなに彼の剣は特別製なのか。

「その短剣は特別な何かで出来ているとかなのか？」
「・・・これは小太刀という俺の世界の剣だ。別にどうってことはない。うちの総隊長サンが作り上げてくれたモンでね」

なるほど。その総隊長というのが作ったのか。
では彼は振るう職人という事だ。此処まで鋭利に美しく振るう剣を見たのは初めてだ。
だがその美麗な剣技に私も答えよう。

「我が宝剣フェイタルブレイバーにて。貴公を倒す事を誓おう」
「小太刀二刀御神流――――高町恭也。推して参る」

それが貴公の名か。名乗りをしたからには其れ相応にて対応するまで。
宝玉を火から風にチェンジ。熱を帯びた刀身が冷えていく。
鍔から微細な風が吹く。刀身と腕を伝って体に纏わりつく。
身体強化が更に強化されていく。

「さぁ、いくぞ」

追加強化によって速度を上げた私は彼の背後に回りこむ。右肩に背負いながら一気に振り下ろす。
しかし彼はそれを短剣を交差させて防御した。

「・・・っ！？」

あんな細くて短い剣で私の剣を受け止めるというのか！
受け流すならまだしも・・・！
押しつぶそうともまるで硬い岩でも相手にしているかのような感覚。

「それが風の特性か・・・？」

風の宝玉の特性をもう掴んだというのか！？

彼の審美眼の深さは何処までっ・・・・！

微かに彼の顔が見える角度になったときに見えたあれは・・・笑み？

「今のは御神流「心」。音と気配によって相手の居場所を知る技だ――――そして」

交差していた互いの剣が弾かれる。私のほぼ全力での切り下ろしだったのにも関わらず。

「俺に速度で挑むというのがどんなに意味のないことか――――教えないとダメのようだな」

ゆら、と身をこちらに向ける。なんという自然体。まるでただ立っているだけのようなのに隙が全く無い。

ステップというわけではない。足の裏だけで動き、膝が動かない歩法か。

「今度は俺が言おう。さぁ――――――第三ラウンドだ」

恭也Ｓｉｄｅ

「今度は俺が言おう。さぁ――――――第三ラウンドだ」

三度目の仕切りなおし。今度は俺の番。
柳のように揺れる、御神流ではない俺独特の歩法。
正中線を防御するようにして両腕を交差させて小太刀を構える。

ふら、と身が大きく一回揺らめく。それが合図。
戻ろうとした体が一気に不安定な角度から加速する。
一瞬４合。小太刀での連続斬撃を浴びせるがセイザーには全て防がれてしまった。
だがその顔には焦りが翳っているのははっきりと見えた。
対応が間に合っていない。

「御神流・裏　花菱」

息をつく暇も無く俺は次の動作に入る。
御神を空中に放り上げ、右手を彼の胸へと押し当てる。

「御神流　徹」

衝撃を表面ではなく内側に打ち通す打撃。衝撃は簡単に体を貫通して背中から抜けていく。
セイザーが蹈鞴を踏んで下がっていく。其れを確認してすぐさま御神を右手で掴んで回収。
俺はその隙を逃さない。
離れた分を更に踏み込んで懐に入る。間合い？既に間合い内だ。
迎え撃とうとセイザーが大剣を振るってくる。

「御神流奥義之六――――――薙旋」

右の抜刀からの四連撃。しかも魔法で身体強化してる分通常よりも

3割増だ。
一撃目で大剣を払い、弐撃目を背後近くから撃ちこむ。3、4撃目を全く予想しない無意識下での別軌道で放つ。

「くっ・・・・!?」

騎士の焦りの声が耳に届いた。しかし俺は止めない。畳み掛けるなら今だ。
更に一歩踏み込んだ所で――――俺は足を止めた。
目の前1cm先には騎士の大剣が寸分狂わずに震えずに俺の頭(眉間)を串刺しにしようと待ち構えていた。

「・・・・いやはやまさか此処までとは。風を纏ってもこの速度の差か」
「速度というわけじゃない。極限的に突き詰めた歩法の一つさ」

御神流には更なる歩法もあるけどな。
其れを今見せる気もないし必要性がない。
チャキ、と音を鳴らしながら大剣を引くのを見てから俺も体勢を直す。

「まだ本気は見せてない。そんな顔だな」
「わかるか?」
「わかるさ」

二人して笑みが見える。あいつもまだ余裕を、いや奥の手を隠してる。
あぁ、そうだ。お互いにまだ必殺の技を残しているんだ。

「何よりも貴公の技はまだ軽いからな。きっとまだ隠してると思っ

た」

「軽い、だと・・・・？」

俺の技が。御神の剣が軽い？俺だけじゃなくて御神の歴史すらこいつは否定したのか？

「く・・・・くくく。だったら――――――見せてやるさ。剣のみで上り詰め、魔法と出会い更なる道を踏み込んだ俺だけの御神の技を」

魔法と出会い、組み合わせ組み込んで俺が築き上げた魔剣技。

「ベルカ式小太刀二刀御神流。俺の！俺だけの！不破の剣だ！！」

組み込んでいたカートリッジを御神と不破がリロードしていく。

蓄えていた魔力が更に膨れ上がる。いや、余剰の魔力が背中から排出されていく。

その姿はまるで片翼を背負う剣士。

「さぁいくぞ剣帝とやら。準備は万端か？」

ただ立つ。それだけで雄々しく其処にいる。

身長差は明らかに違うのに。この目の前の騎士の剣気を押し返す。

大剣と小太刀。二つの剣戟の極致が此処に始まる。

第七十六話　王と幻影

ミラージュＳｉｄｅ

街の外からスキマを遣って直接城内に侵入。王座の間のように煌びやかな部屋だ。
豪奢といえば聞こえはいいが趣味が悪い。

所々に古代ベルカの意匠が施されている。
・・・・これは昔を思い出すな。
過去、毀士王と名乗る亡霊がいたあの遺跡に。

赤い絨毯が敷き詰められたこの部屋は外の喧騒が嘘のように静かだ。
なんというか・・・・この雰囲気はなんとも知っているというか。

「なんだろうな。この感覚」

得も言えぬ感覚に陥りながらも周囲を探索する。
誰もいない。気配が全く無い。玉座に向かうが其処にも誰もいない。
蛻の殻だ。

「誰もいない、か」

当てが外れた。というかいきなり王に会うというのも問題か？

「余にあってどうするか？」
「っ！？」

玉座を背にして降りようとしたところに声を掛けられた。

いや、其処に誰もいなかった筈だ。
振り向くと玉座に座る男が一人。

「中々貴様は楽しかったぞ。余を認識しないでいる無様な姿がな」
「・・・これはこれは。道化を演じたかな？」

玉座に座ってるのに巨躯なのがわかる。唯座ってるだけなのになんという威圧感。
俺が――――――圧される程の威圧感なんか今まで生きてきた中で一度も・・・・一度だけあった。
C．C．。彼女が俺に向かってきた時以来の威圧感。

「どうした――――――まるで生まれたての小鳥のようだぞ？」
「っ・・・・・」

俺は無意識に神威を起動させていた。いつのまにか右手に神威を握っていたんだ。

「ほう。それは神威か。なるほどお前はソレを選んだのか」
「っ！？・・・・なんで神威を知ってる」

今始めて見たはずだ。いや、街の中でも何度か出したな。
それを見ることができるのなら知ってても可能か・・・。

「神威を知ってて不思議か？ミラージュ＝ヴィジョン。いや、城戸綾人か？その神剣は中々のものだな」

なん、で・・・俺の名前までわかるんだ、こいつは！
不気味に笑みを浮かべているだけなのに――――――俺が攻撃に移れない。

「それとも、もっと昔の名で呼ぼうか。なぁ――――――」
「！！！！！！！」

其処でやっと俺は動けた。まるで何かに弾かれたような勢いで神威を振り上げて両手で一気に振り下ろす。
狙いなんか定めてない。剣筋も出鱈目だ。ただ力任せに。ただ感情的に。ただ振り下ろす。
剣先が体に触れる。その瞬間は確かに感じた。感じたはずだった。

だけど斬れる感触は手に全然無かった。
寧ろ何かに弾かれたかのような感触。
視線が、顔がふ、と上がる。其処にあるのは――――――

――――神威を人差し指一本で止めている姿だった。

「なっ・・・・・」
「何故だ、と。何故斬れない、と。そう思ったな」

俺が全力で振り下ろした神威の一撃が指一本で押さえられるとかこいつは一体・・・・何者だ。

シャックスＳｉｄｅ

気配遮断で玉座に座っていたら向こうから姿を現してきおったか。
余が直々に出向く必要もない。向こうからこうして来るのだからな。

立ち去る間際に声を掛けると面白いように反応しおったわ。

「っ！？」

驚いた顔で振り向く。あぁ、その顔も愉快そのものだ。此処最近そういう顔は見た例がない。

あぁ、この男がそうか。管理局の幻影と呼ばれるいる存在。

「神威を知ってて不思議か？ミラージュ＝ヴィジョン。いや、城戸綾人か？その神剣は中々のものだな」

神威を取り出したのを確認してから問いただす。どうやら無意識に出したようだが。

意図的な無意識か、本能からの無意識かで意味合いも変わるがな。

さてどちらかな。

名は知っていた。いや、教えられていた。この存在の事は。

いずれ余と相対するべく運命付けられた存在。

まさか今の時期で来るとは思わなかったがな。

だがまぁ少しくらいは遊んでやろう。

本当に無意識で動くなこの小僧は。神威を振り上げて斬りつけてくるとは。

身体強化の魔導を引き出す。指先に集めて神威の一撃を押さえ込む。

流石に神威で斬られると痛い。余でも痛みはあるのだ。

神剣で斬られたらそりゃもう痛い。

「なっ・・・・・」

「何故だ、と。何故斬れない、と。そう思ったな」

不思議そうな顔をして余を見ているが答えをいう気は無い。

「余の正体がわからないか？」

「貴様はっ・・・・何者だ！」

くつり、笑みがこぼれる。此処までこの幻影を翻弄できるとは思いもよらなんだ。

あいつから聞いていたのとはとても違う。違うのだ。

「知りたければ聞き出すがいい。得意だろう？」

安い挑発。だが今はそれでもノってくるだろう。余としてもこいつがどこまでやるのか見てみたい。

高い魔力。それに見合った身体能力。それにそれだけではないのだろう。

見せてもらおうか。「神」から貰ったその力を、な。

人差し指で押さえていた神威を圧し戻して距離を取らせる。

それからゆっくりと玉座から立ち上がる。

余の身の丈が３Ｍほど。小僧は高く見ても１８０ｃｍ程度か。小さいな。

いや、余が大きいのか。

身体能力の強化などをしているとこうなってしまったのだがな。

元の身体的な要素もあったのだが。まぁ、それは今はいい。

「余の戦闘方法は恐らく貴様らとは違うのでな。だがそれに併せる必要もないぞ」

一応の忠告。というか警告である。どんな状況になるかは知らぬが先にいっておいた方が対処もできよう。
身に宿る神力魔導を起動させる。神の力を宿し、それを魔導として放つ。
現物（オリジナル）とは掛け離れてしまったが余は気に入っている。

「ではいくぞ」

周囲に複合魔導陣を形成させつつ腕に力を籠める。
右腕を軽く振りぬくだけで音速の壁を突き抜ける。ソニックブームを起こして音速の刃を生み出す。
音速の刃は魔導によってコーティングされより強化されて威力を増す。
まさに音速。鋭い刃が一瞬にして小僧に襲い掛かる。その数3。
神威で打ち落とすがそれで終わり。反撃の兆しはない。
打ち落とすだけでどうやら精一杯のようだな。

「どうした？それで終わりか？もっとみせてくれないか？」

余が手を翳すと複合魔導陣の幾つかから魔導の光がレーザーとなって突き進む。
音速を超えた光速。小僧の太ももを貫通させる。
が、その傷が一瞬で修復されていく。

「超速再生か。厄介だなその能力」
「欲しくてもやれないな、こいつだけは」
「いや、いらぬ。余もその能力は持ち合わせておる」

超速再生は利便性がいい。故に余もよく遣う技能だ。

最近はその能力すら片鱗を見せる事無く終わってしまうが・・・。

「貴様は余に傷を付けられるかな？」

「言ってくれる・・・っ！！！」

激昂したか。怒りでは余は倒せぬというのにな。

だがその猛りを見せてもらおうか。

「では踊ろうか。遊ぼうか」

右手を返して掌を上に。それだけで衝撃波が生まれる。

楕円の輪が幾重にも連なり小僧に向かっていく。

防御する暇も無く楕円の輪は小僧を包み込み破裂した。

「くっ・・・・・はっ！？」

外側から肌を切り裂き、内側から内臓を破裂させていく。喀血が見えた。内臓の何処かがやられたか。

だがそれで止まらない。お前はそれでも再生するのだろう？

「まだ行くぞ。お前はソレ如きで終わるわけではないだろう？」

追加して更に追撃を重ねておく。

ミラージュＳｉｄｅ

こいつはっ・・・・一体何なんだ！！

俺を傷つけるほどの攻撃力を持っている程の逸材・・・いや、存在。
更には俺という存在を知っているかのような・・・そんな奴。

「くっ・・・・・はっ！？」

襲い掛かる衝撃波が体を壊す。超速再生が時折間に合わない。
内臓の修復は時間が掛かる。目に見える皮膚の傷ならイメージするだけですぐに回復するんだが。
如何せんあんまりみたことのない内臓というのは・・・・イメージが沸き難い。
喀血する。口の端から血が垂れる。
拭う暇も無く追撃が襲い掛かる。

超速再生が体を直した瞬間に次の傷が生まれる。
徐々に追いつかなくなっていく。傷が開いたまま次の傷。
黒尽くめの執務官の制服は赤く染まってく。

「反撃も出来ないってのかよ・・・・！」

さっきから近づこうとしてるけど威圧されてか近づけない。
寧ろ奴の攻撃が直接襲い掛かってくるから余計に近づけない。
叩き落す事もできないことも出てきたぞ。

「このっ・・・・・・っ！！！！」

神威を横薙ぎ一閃。向かってきた衝撃波を切り裂く。
斬った衝撃波は周囲に散らばるようにして豪奢な部屋を傷つけていく。

「おおおお！！！」

返す刀身。そこから一歩踏み込んで懐へ。巨躯な分、懐に入りやすい。
衝撃波の壁がなくなればこれほど脆いとはな。

「ぉぉぉぉぉおおおおおおおおお！！！！！！」

神威を振りぬき、突きの体勢へ移行。そのまま一気に突き刺す。

――――――が。が、だ。
神威の剣先は奴の鍛え上げた腹筋によって防がれていた。

「なん、だと・・・？」
「愚かしい。実に愚かしいぞ。幻影よ。お前はまだ神威の真の力を出し切っていない」
「何をいってる・・・・」
「それが本当に神威なら何故その程度の力しかない。まるで半減しているかのようだ」

こいつは・・・・何処まで知っているんだ。
いや、今までのこいつの言動と行動を結び合わせると厭な答えしか出てこない。
まさか・・・こいつは・・・・・・。

「お前も――――――転生したのか」

シャックスＳｉｄｅ

「お前も――――――転生したのか」

ふむ。やっと到達したか。だがその答えが出るまでに随分と時間が掛かったな。

「まさか転生したのが貴様だけ、とは思うまい」

「厭な予感しかなかったよ。だが確かに可笑しい事は多かった」

小僧は突き刺した神威を引いた。段差のあるこの玉座の間で空に浮かび目線を合わせる。

「確かに余は転生者だ。この世界に舞い降りた、な。そして神から様々な力を拝領した」

思い出すのはこの世界に放り投げられた最初の記憶。

そして与えられた知恵と力でこの世界を今の状態にまで築き上げた。

「そして聞いた。余を倒すべく同じ境遇の男がやってくると。その者は余を倒すと」

「・・・・・・それが俺か」

「如何にも。だがそのまま素直に受け入れるほど余も甘くはない。倒しに来るのであれば逆に倒せば良い。そう達した」

余を倒すなど。余は許せん。

「まさかこの世界が管理局がいる世界などとは全く気付かなかった。だがある日一人の魔女が現れた」
「魔女・・・？」
「その魔女は自分のことを輪廻の魔女と呼べといってきた。今この国にある魔導の礎を築いた存在よ」
「その魔女は今は？」
「さては。気紛れで現れては知識を与えて去っていくだけ。此方としても詮索はしなんだ」

その魔女から管理局のことを聞いたときは一瞬だがうろたえた。だがそれを逆手に取り、管理局の技術すらこの国に取り込んだ。今や管理局の技術以上のものが組み込まれている部分も少なくはない。

「今は・・・・・輪廻の魔女や転生の話をしている場合ではないだろう？」
「・・・どうしもやるのか？」
「貴様に足りないものを教え、そして屠ろう。それを管理局への反旗の狼煙としてな！」

余ですらソレに気付いたのは遅かった。だから教えてやろう。貴様に足りないものをな。

「どうしてもやらないといけないのか・・・同じ転生者同士で」
「だからこそだ。転生者――――余が貴様の求めていたものかもしれないぞ？」

何かしら理由があっての転生であるなら。この言葉で変わるはず。

「お前が・・・・・・お前が・・・・・・・」

・・・ほう。此処まで如実に変わるとは思わなんだが。

正解を引いたか。

「お前がっ・・・イレギュラーか！！！！」

「その問いには答えられんな！聞きたければ倒すがいい！この余を！シャックス＝アシュクレヴィオスを！！」

背後の魔導陣から魔導光を射出する。まるで針の筵のような程の超繊細な射撃。

それだけでは飽き足らず、光は玉座の間の壁や天井、床にまでその牙痕を残していく。

壁は薄くはないはずなのに、まるで重機の音を立てて破壊していく。

丁度西日が差し込む。沈みかかった夕陽が部屋を照らす。

「お前が・・・転生者であろうと、イレギュラーであろうと・・・・俺が倒すべき相手みたいだ。

だったら――――――やってやるしかないだろう！！！」

小僧から魔導の奔流が溢れていく。玉座の間が奔流に耐え切れずに強度の弱い部分が破壊されていく。

余の光と同様の事をするというのか・・・・・・。

いや、この小僧の魔力量・・・・・・っ。まさかこれほどとはっ・・・・・。

この魔力をもって何故神威は半減した力しか揮えていないのか気に掛かってしまう。

玉座の間は徐々に崩壊を始めていた。やがてこの部屋もよと小僧の力によって原型を留める事無く破壊されるだろう。

ならばその前にこの玉座の間を廃棄するまで。

「むぅぅぅん！！！！」

衝撃波を周囲に撒き散らす。とはいってもかなりの力で衝撃波を作り上げた。

並の建造物でならこれで跡形もなくなるだろう。

案の定この玉座の間から上は衝撃波で吹き飛び、塵となり風にのって消えていった。

超高度の建造物故に吹き荒ぶ風が強い。

ゆっくりと余は空へと身を任せる。小僧も同じように空へと上がる。

城の周囲では余の他の五帝が闘っている。管理局相手に押され押しつつだが。

それでも。余に付き従う者がいる限り。この国がある限り。

小僧なんぞには負けん。

「余に勝ったら応えると言ったな」

「あぁ・・・」

「一つ訂正しよう。余にあってお前に足りないものは今教えてやろう。ソレは――――――」

両手を広げると其処には複雑に組み込まれた魔導陣が敷かれる。

その数――――――５００。

十字を描くように魔導陣が形成されていく。

「――――――真に護るべく対象があるかないかだ」

空を蹂躙する音の雨。魔導の光はおよそ５００の光の針となり小僧

を突き刺す。
光と音の雨が降り注ぐ中、光に包まれていく小僧。
「貴様と余では背負うものが違うのだ　　光の雨（ヒカリアレ）
　」
ほんの数瞬のみの出来事。光の雨は町へと降り注いだが被害は極小であった。
「ふむ。いかんな。余の国が傷ついてしまった」
さようなら幻影。もう逢う事もあるまい。
収まる光の中、それでも浮かんでいる姿を見たとき、余は想像を絶した。
まさか――――――あの光の雨の中でまだ意識を保っていられるとは。
「何故だ――――――何故まだ動く。動こうとする」
「そりゃ決まってるだろ・・・・俺にも譲れないくらい大事なもんを背負ってるからだ」
超速再生が追いついていない。ずたぼろの執務官服と出血の酷い体は見るに耐えない。
「何故・・・・だ」
ミラージュＳｉｄｅ

光の雨を喰らってもうあんまり動けない。流石にプロテクションでも全方位を完全防御は出来なかった。
7割耐えたけど3割くらいは抜けられた。
超速再生も間に合っていない。

「・・・・何故って・・・・」

そんな当たり前のこと聞くなよ。そんなもん答えは決まってる。

「俺にだって譲れないくらい背負ってるものがある。誰かの思いを運んでるんだ」

「それはな。俺一人じゃないんだよ」

「俺何か一人じゃこんな場所に立っていられないんだよ」

「あぁそうか――――――やっとわかった」

ありがとう。気付かせてくれて。

「俺は・・・・・・一人で何でもやろうとしてた。でもそれは間違いだったんだ」

「一人で出来ると思い込んでた。でも実際は違ったんだ」

「だから今なら言える――――――俺は俺だけじゃお前にはきっと勝てないんだ。権帝シャックス＝アシュクレヴィオス」

「全ての権限を持ちし者。権帝。だからなんだ。だったら俺はただ

の俺だ」

「一人で勝てないなら――――――――――助けを呼ぶだけだ」

左手が空を掴む。其処には無い何かを掴む。

「なぁ、皆。力を貸してくれ――――――」

スキマを展開する。一気に開いた其処から現れたのは１０人の人影。

「全く。遅すぎですマスター」

「すまん、セイバー。待たせた」

「全くだ。こんなマスターではずっと傍にいて護らねばならないな」

「言うなよ、アーチャー。俺の背を任せられるのはお前くらいだ」

「へっ！俺をないがしろにしてたら後ろから刺しちまうぞ？」

「ランサー。俺の前の道を切り開く勇猛な騎士。俺と共に道を作ってくれ」

「喜べマスター。この我があの踏ん反り返った虚飾の王を屠ってくれよう」

「ギルガメッシュ。英雄の中の王。俺と共に歩んでくれ」

「マスター。我らはマスターの為にあるのだ。あのような塵芥など一網打尽にしてくれよう」

「マスターの為に我らマテリアルは居ります。なんなりとご命令を」

「僕が来たからには全部任せてもらってかまわない！」

「そうだな、ディアーチェ。シュテル。レヴィ。お前達の力を貸してくれ」

スキマを経て現れたのはサーヴァントとマテリアル。そして――――

「なのは。フェイト。はやて」

「ミラ君。凄い怪我してる」

「ミラ、いくら怪我がすぐ治るからって無茶しすぎだよ」

「ミラくん、シャマルがおらんから治癒はできひんけどきっと下がる気はないんやろ？せやったら一緒におるだけでもえぇかな」

「「「そ・れ・に！」」」

三人が口を合わせる。シャックスとは違う威圧感を感じたのは秘密だ。

「これはミラくんの仕事だろうけど。それでも私たちは手伝いたい。そう思うこの気持ちは・・・迷惑かな」

「いや、充分だなのは。ありがとう。嬉しいよ」

「ミラの仕事はいつも大変だって聞いてたけど・・・ここまで凄かったんだね」

「あぁ。でもフェイトのほうだってきつかったりするだろ。おあいこだよ」

「あんなぁ。ミラくん」

「ん？なんだはやて」

「もし、ミラくんが辛かったりしたらいつでも言ってえぇんよ。わたしたちはそれをいつでも受け止められるから」

「あぁ・・・ありがとうはやて」

三人に笑みを向ける。
なんだ。こんなに俺は背負って背負われていたんじゃないか。
やっと気付けた。なぁ、これでどうだ？

「なぁ――――――シャックス」

「ふむ・・・・・・小僧もまた背負いし者だったか」

此処からが分水領。天下分け目ってやつだ。

「じゃぁ再開しようか。シャックス＝アシュクレヴィオス」
「あぁ、そうしよう。ミラージュ＝ヴィジョン」

互いの闘気が魔力が。弾ける様に呼応した。

第七十七話　終わりへ進む路

ミラージュＳｉｄｅ

結局俺は一人で全部やろうと思ってたんだ。
それでもできる範囲なんて限られる。
なんでもやれるって勝手に思い込んでただけだ。
いくら神から力を貰おうと。

「俺だけじゃきっとこうはならなかったかもな」

俺の周りにいるのは心配してきてくれた仲間がいる。

「さぁ、ご命令をマスター。我らはマスターの指示通りに動きましょう」

金紗の髪の騎士がいう。恐らく俺が最も信頼している騎士だ。

「・・・これは願いだ。命令じゃない。だけど聞いてくれ」

俺の言葉に皆が静かに頷く。

「マテリアルズはあそこ・・・アリサが今闘ってる所に救援に行ってくれ。必要ないかもしれないが手を貸してくれ」
「了解した。任せろマスター。有象無象の塵芥など我らが蹴散らしてくれるわ」

ディアーチェ、シュテル、レヴィがすぐに行動に移る。指定されたポイントへと高速移動で飛んでいく。

「セイバー。アーチャー。二人は城の下部で戦ってる恭也さんの救援。恐らく剣士同士の戦いだ。頼む」
「了解しました。我が剣は貴方と共に」
「了解した。だがマスターよ――――」
「・・・・ん？」
「別に我らが倒してしまっても構わんのだろう？」

アーチャーめ。最後にソレを言っていくかよ。返答も待たないまま城の下へと降りていく。

「ランサーはすずかの方に行ってくれ。お前の力が必要だ」
「了解だぜ。俺の槍で全てを切り開く！」

「ギル。お前は俺の前にいてくれ。」
「いいだろう。マスターを護るのも我の務め。須らく全ての事象から護ってやろう」

ランサーならあのバトルマニアとも相性がいいだろう。
すずかの攻撃に巻き込まれないように、と注意しておく。
ギルはおれの虎の子だ。傍にいるというだけで勇気に変わる。

「なのは。フェイト。はやて」
「「「うん」」」

三人に向き直れば三人ともが返事してくる。
その顔は既に歴戦のエースの顔に変わってる。

「三人は力を合わせてあっちの――――ティーダのいる方へ。砲撃がかなり飛び交ってるから恐らくお前達の方がいいだろう」

「了解だよ。まかせて！」

代表してなのはが応えた。うん、安心して任せられるってのはいいな。

「俺の後ろはなのはフェイトはやてに任せた」

そういて指定されたポイントへ向かう三人を見送った。

さて・・・それじゃあ次だ。

「待たせたかな？」

「いや、実にいい茶番を見せ付けられた。中々良い芝居だったぞ」

軽めの拍手をシャックスが送ってくる。嫌味にも似た行動だろうがもう俺には通じない。

今此処にいるのはギルと俺だけだ。少し離れた場所にシャックスがいる。

「ギル。あいつも――――――転生者だ」

「ほう、マスターと同じ者か。それは面白いな。マスターに手を出す事は出来ぬから転生者というのがどの程度のものか測らずにいた所よ」

そんな事考えてたのか、こいつ。

だが今、こいつほど信頼出来て背中を任せられるのは居ない。

セイバーも行かせちまったしな。

「ギル。そいつに勝ったらセイバーとの仲、仲介してもいい」

「よぉーし、そこの雑種よ！我とセイバーの為に疾く死ぬがいい！！！！！」

ギル、超やる気発動。お前、凄いよ。偉いよ。

アリサＳｉｄｅ

フェイク翁と召喚合戦。それでも私は負けられないのよね。
リオン（あ、光のライオンの名前ね）がいなくなってから私を護るのがいなくなった。
私だけじゃなくてサリュアも護らないといけないわけだし。

早く他のメンバーと合流するためにも、サリュアを護るためにも早急な戦闘終了が望まれる。
だったら。私の持ってるちからの奥の手を出すしかない。

魔力をデバイス（ガラティーン）に通して集中する。
召喚中は向こうも召喚を行うためか詠唱カットはないのが助かるわ。

「龍魂召喚！！」

私が召喚できる最強のパートナー。
幻想龍種最強の存在。
私の背後に巨大な召喚陣が形成される。其処から現れるのは――――
――金色の体躯をした幻獣の神（バハムート）。

「むぅっ・・・・その巨大な龍種はっ」

フェイク翁も流石に驚いてるみたい。
無理もない。かなりの大きさで呼んじゃったわけだし。
しかし機械的な体してるわね・・・・私、バハムート呼んだはずなんだけど。
若しかしたら・・・・バハムート烈呼んじゃった？

「いくよ、バハムート・・・・・・烈！！」
「クェエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

一際大きな嘶きをあげるバハムート烈。
私の守護龍。私だけじゃなくてサリュアも護ってもらわないとね。

「なんと・・・神竜を呼び出すとは・・・・この小娘の潜在能力はどれほどだというのじゃ！」

フェイク翁はバハムートのこと知ってるのかな。神竜なんて呼び方、知らないとわからないのに。
フェイク翁も負けじと同じサイズの龍種を召喚してる。やっぱりアンデッドだけど。
蒼龍の亜種。勉強したから種類くらいはわかるわよ。
でもバハムートと同じサイズなんて良く出すわよね。これって怪獣大決戦になっちゃうんじゃないの？

バハムートと蒼龍が威嚇しながら距離を取っていると、ミラージュのほうで魔力の気配が揺れた。
え、あれってなのは達じゃない。しかもセイバーさんとかディアーチェもいるし。

「む・・・・王め、遊びおって。だからつけ込まれるのじゃ」

フェイク翁も同じようにあっちを見てる。
その言いようからすればミラージュの近くにいるでかい男の人が王様なのね。
すると幾つかに別れて分隊されていく。他のレグルス隊のほうにも向かっていって、私のほうにも向かってきた。

私の所に来たのはディアーチェ達ファントム隊の三人。

「マスターの指示だ。手伝うぞアリサ」
「ミラージュの指示？」
「はい。須らく殲滅せよとのことです」

物騒な命令受けてきてるのね。

「でも私の戦場よここは。任せてもらいたいんだけど」
「私事でしかモノを考えられぬならそこまでだぞ」

あぁ、言い返せない。確かに一人でやりたいなんてのは勝手な我侭。仕事なら的確に迅速に尚且つ優雅に。それが私達のモットーとして作られた。
だったら・・・言い返せるわけ無いじゃない。

「じゃぁ手伝ってくれる？」
「無論だ。其処の老害塵芥如き我らに掛かれば一ひねりよ」
「随分といってくれるのう。小娘が。たかが数匹増えた所で何も変わらぬぞ」
「言うな、塵芥。我らの力に気付かぬ程の小蝿如きがぬかしおるわ」

口の悪い二人の言い争いね。

でも嫌いじゃないわ。さぁ、とっとと片付けましょう。

「ふん。この世界を軸として他の世界に渡る計画が台無しじゃわ」
「だったらその計画叩き潰そうじゃない。何よ。反管理局組織っぽいじゃないの」
「つまり、蹴散らしても全く構わないという事だろう？」
「そういう事ね」
「だったら僕達が全部片付けちゃえばいいんだ。跡形もなく、ね」

やる気満々のマテリアルたち。でもこれならサリュアを護る事に専念できそう。

「サリュア。バハムートの後ろにいきましょう。多分、大変なコトがおきるわ」
「あ、はい。わかりました」

サリュアの私を掴む手が強くなる。バハムート烈の後ろにいれば余波も防げるはず。

「残念だけどおじいさん。これで私とは終わりね。頑張ってその子達の相手をして頂戴」
「逃げるか小娘。それだけの能力をもっておいて」
「私も結局は組織の人間なのよ。これで終息に向かうならいくらでも手を引くわ」

むぅ、と唸った後フェイク翁は渋々ディアーチェ達の相手をすることに決めたらしい。

「よかろう。ならば魔導の子らよ。儂を止めてみるがいい。でなければ他の世界にも手を出すであろうよ」

「よかろう、塵芥の癖に良く吼えた。疾くその命おいていくがいいぞ！」

最近ディアーチェがギルガメッシュさんに口調が似てきた。いや、最初から良く似てたけど。

「ふはははは！シュテル！レヴィ！我らの楔は解き放たれておる！好き勝手に暴れて構わぬぞ！」

「了解。ルシフェリオン第一次開放開始します」

「ハァーッハハッハハ！！僕のかっこよさに惚れるなよぅ、おじーちゃん！」

バハムートの前方で三人ともがフルスペックで魔力を放出し始める。あの子達、あんなに強かったんだ・・・。

「フフン。早速だが一瞬で終わらせる。此方もまだ任務の途中でな。任務を放ってまでマスターの元に馳せ参じる我らの忠義に驚き叫べ！！」

ディアーチェ、シュテル、レヴィが其々散らばっていく。

「強くて凄くてかっこいい！そう、やっぱり僕サイキョー！雷神！封殺！ばくめつけぇーん！！！」

「っ・・・むぅ！？」

レヴィが水色の魔力光を輝かせながら周囲に発生させた雷のバインドでフェイク翁を押さえ込む。

「どちらが強いのか決めましょうか――――――真・ルシフェリオン・ブレイカー！！！！！」

シュテルがデバイス・・・ルシフェリオンを開放する。
燃え盛る魔力光が猛る。
バインドで動けなくなったフェイク翁をシュテルがバレルオープンして周囲の魔力ごと空間を固定させる。

「無敵！！無限！！我こそが王よ！！！！！出でよ巨獣！！ジャガーノートォ！！！！」

白い魔力光の古代ベルカ式魔法陣が出来上がる。
黒い本を片手に持って剣十字のデバイス杖を振りかざす。
本のページがバラバラと開いてあるページを指す。

中央の巨大な円陣の周囲に四つの魔法陣。
其処から射出されるのは滅びの闇。黒き魔砲。
蒼龍すらその奔流に飲み込みフェイク翁を包んでいく。

「お・・・おぉ、おおおおおおぉぉぉぉ――――――――――――」

魔法の奔流によって蒼龍は消滅してしまう。召喚された竜はいい所を見せずに塵へと帰った。
フェイク翁も光の中で消滅したように見えた。

「フゥーハハハハハ！！！我が闇の魔法にかなうものなし、だ！」

高笑いするディアーチェにシュテルとレヴィが集まっていく。

「ほれ、アリサ。終わったぞ。さぁ、マスターの下へいくがいい。我らはまだやる事があるのでな」
「ん。判ったわ。でも気をつけてね」

「誰に向かって言っておるのだ」
「フフ、そうね。じゃぁ後で」

バハムートの背中にサリュアを乗せてからバハムートと一緒に城の上部へと向かう。
フェイク翁の思案した計画を伝えるために。
それにサリュアから言うべき事もある筈。其の為なら行かなければならない。あの場所へ。

恭也Ｓｉｄｅ

セイザーとの戦いは熾烈を極めたといってもいい。
周囲の壁や地面は刀傷で埋め尽くされ、無傷の場所が無いくらいだ。

「まさか御神の速度についてくるとはな・・・・」
「宝剣をフルに遣わざるを得ない状況だ。誇ってもいいのだぞ」

よく言う。恐らくあの宝剣の真の力って奴はまだ出してないだろう。
恐らくあの宝玉自体が一つでの発動媒体ではないはず。
恐らくは全ての宝玉を使ってのフル発動が真の姿といった所か。

「その短剣でよくも互角以上に渡り合えるものだ・・・・」
「俺よりも上位の剣士が近くにいるんでね。怠けていられないのさ」
「ほう・・・それは是非とも逢いたいものだ」

できるならな。きっとセイバーさん達に出会えば歓喜するだろう。
だが同時に畏怖すら感じるはずだ。
あれは人の身で辿り着く境地ではないからだ。
英雄として人に崇められ、英霊となってその知識と技術を鍛え上げたサーヴァントに。
俺はおろか、この騎士すら届かないだろう。

「・・・・・・っ」

俺とセイザーが同時に空を向く。
互いに死合う者同士が対面斬ってるのに視線を動かすほどのモノが空中に感じ取る。

城の上部では爆破された瓦礫やらが降り注いでくるが、ソレよりも気になるのは二つの人影。

「兄上・・・・王があれまで戦場に立つとは・・・・・っ」

あれが王か。しかもこいつ今何て言った。兄上、だと？

「お前、王の弟なのか」
「・・・聞かれたか。如何にも私はエネミア国王シャックス＝アシュクレヴィオスの弟だ」

なるほど。だからこその騎士団だののトップというわけか。縁故就職、というわけでもなさそうだけど。
だけど今はそんな事実よりも先決される事がある。
あそこにいるのがミラージュなら勝てるはずだ・・・。
だがなんだあの薄い気配は。まるで勝つ気がない気がするぞ。

ふらつくのが地上からでも良く見える。其処で広げたのは左腕。
そして空にスキマを創り出して呼び出される１０の影。

「なんだ？いきなり人が現れたぞ」
「あぁ、あれがうちの総隊長さんの力でな。空間を繋いだりとかできる、らしい」
「らしい、とはあいまいだな。他にもできるのか？」
「さぁな。あの力は特別製でね。しか謎が多いんだ」

喋りながら空を見上げていると、二つの影がこっちに降りてくる。
あぁ、あの影は。あの二人か。

蒼と赤の騎士が降り立つ。
唯それだけでこの場の空気を一変させた。

「恭也。良く頑張りましたね。この場の雰囲気を見ればどれだけ死地を越えたか良く判ります」
「セイバーさん・・・」
「しかしこれから先は騎士道だのといっている余裕は無いのです。故に手を出しますので容赦して頂きたい」
「それは構いませんよ。寧ろ、セイバーさんとアーチャーさんが来てくれただけでも充分です」
「私は特に何もしないがな」

アーチャーさんはセイバーさんの後ろに下がる。というか、俺の隣まで下がってきた。

「セイバーがやる気でな。私は邪魔者扱いだ」

なんて肩を竦めながらアーチャーさん。

「本来ならすぐに上に言ってマスターの手伝いに言ってほしい所だが・・・なに、すぐ終わる」
「ですね・・・・了解です」

セイバーさんが本気というなら。きっと時間も掛からないだろう。

「何を言うかと思えば。このようなうら若き女性を闘わせると？気が触れたか」
「黙りなさい。貴公も騎士であるのならば互いの剣で語るべきです。違いますか？」
「・・・・・なるほど。そうであったな。確かに貴公は騎士道を持っている」

セイザーの表情が変わる。セイバーもそれにあわせて剣気を纏う。

「貴公も武器を取るがいい。その剣気からしてかなりの腕であろう」
「武器なら既に。この手にある」

セイバーさんの風王結界がかかっているあの剣は普通では見れない。俺もあの剣をまともに見たことは無い。

「戯言を・・・武器を持たずして闘うというならいいだろう。武器を持たぬことを恥いて敗北を味わえ！」
「愚かな・・・すでにこの手にあるといったぞ！」

風王結界を強く放出する。セイバーさんの魔力放出はかなりのものだ。
いまだに管理局でセイバーさんに魔力でダメージを与えたものはいない位だ。

「セイザー＝アシュクレヴィオス。参る」
「時空管理局が末席セイバー。推して参る」

画して。セイバーさんとセイザーの一騎うちが始まった。
だが明らかな実力差が人目でわかる。
風王結界で見えないとはいえその剣は確かなものだ。
宝剣といえどもソレに勝てる道理は無かった。

一撃の下にセイザーが吹き飛ばされる。
身体強化してるセイザーよりも膂力すら上回るのか。
追撃が入る。それでもセイザーには回避の選択肢が無いくらいに直撃する。

追撃を一回した所でセイバーさんの動きが止まる。
セイザーが起き上がるのを待ってる感じだ。

「セイバーめ。とっとと止めを刺せばいいものを」
「アーチャーさん？」
「あいつは相手を全力にさせてからじゃないと倒さない、という変な癖をつけてしまったんだよ」
「なんでそんな難儀な」
「模擬戦の癖がそのままついたんだよ」

だからか。セイザーが立つのを待ってまで一撃を待っているのは。
ゆっくりとだが確りと立ち上がったセイザーに剣を向けるセイバーさん。

なんだかセイバーとセイザーで混乱しそうだ。

「立ちましたか。ですが全力を出さずに倒れるのも不本意でしょう。さぁ、かかってくるがいい」
「ふは・・・全く。管理局というのは化け物揃いか」
「それは否定します。まるで私が化け物だとでも言うのですか」
「まさか。だがこれだけの強さを持つ者と対峙したのは兄上以外にいないのも確かだ・・・」

構えを取る両者。

「全力、といったな。ならこの一撃を受けてくれるか」
「いいでしょう。私もまた、全力を以って答えよう」

セイザーが宝剣に宝玉を加えていく。その数１０。

「全ての宝玉を組み込んでの一撃だ。属性も無い。此処までの一撃など過去に3度もない」
「それは僥倖。では私も全力の一撃をお見せしよう」

セイバーさんが風王結界を解除する。其処には一振りの眩しい輝きをもつ剣が握られていた。

「それが貴公の剣か」
「如何にも。我が剣エクスカリバー。星が鍛えあげた聖剣だ」
「フフ・・・星、か。随分と大きく出たものだ。この宝剣出すら人の造ったものだというのに」

セイザーが笑みを浮かべながら振り上げる。
セイバーさんも同じように聖剣を振り上げる。

奇しくも同じ構え。両手剣と大剣。大きさに違いはあれどその存在

は超一級。

「行くぞ、女騎士」
「来い、騎士」

先に動いたのはセイザー。斬り下ろしと同時に魔力光を伴う斬撃が繰り出される。
それを見てセイバーさんは動かない。

「危ないっ！！」

俺はつい叫んでいた。身を乗り出しそうにもなった。
だがそれをアーチャーさんが腕一本で制止していた。

「大丈夫だ。セイバーが動かないのも理解の上だ」
「っ・・・・」

アーチャーさんからセイバーさんへと視線を変える。
既に振り下ろされた斬撃は目の前にまで来ていた。
だが、その魔力は愚か、斬撃すらセイバーさんには当たらずに地面へとおちた。

「中々の斬撃でした。あと三分の一魔力が高ければ私の防護を超えたでしょう――――」

瞬きすらしない。その斬撃を完全に見切ったセイバーさんは魔力の大きさすら計算して回避をしなかった。

「今のセイバーに魔力ダメージを与えられるのは恐らくいまい」

アーチャーさん説明どもです。つまりあれですか。
その言い方だと管理局でもいない感じなんですが。

「見よ、騎士の子よ。これが星が鍛えた一振りが放つ輝き。神へと繋がる神造兵器」

「闇をも切り裂くこの刃にて――――――上を知りなさい」

溜め込まれた魔力は聖剣に宿る。その輝きは星々の煌き。
魔力放出スキルで更にこの一撃は最強の一撃となる。

「約束された――――――勝利の剣！！！！」

聖剣が降ろされる。まるでこの部隊の幕を下ろすかのように。
光の奔流が目の前のセイザーを貫き後ろの城に直撃し、更に貫通していく。
街は更に破壊の道を辿った。

「残念――――――近すぎてダメージが薄すぎました」

体勢を直したセイバーさんの前にセイザーが膝をついたままでいる。

「フフ・・・恐怖を通り越してしまった気がするよ」

セイザーは静かにポツリポツリと喋りだした。

「君達なら兄上を止められるかもしれないな・・・後を頼む」
「兄と呼ぶのならソレを止めるのが弟の、家族の役目です。私達はただ闘うのみしかできないのだから」
セイバーさんが背を向けこっちに来る。
「終わりました。さぁ、行きましょうか」
「他も終わっていそうだしな。上に戻るか」
「結局俺の出番とか取られまくりなんですけどね・・・まぁいいですけど」
ふわ、と飛行魔法で空を飛ぶ。セイバーさんとアーチャーさんの後に続いて俺も追いかけるように空へ。
「不思議な騎士たちだ・・・だが、そうだな。家族を止められるのは家族だけ、か・・・」
俺はこの騎士の風に乗ってしまった呟きを聞くことはできなかった。

すずかＳｉｄｅ

路地裏でもう戦闘を終了させた私は瓦礫の上に座って状況分析を始めていた。
空から津名魅のデータバンクにアクセスしてからまた地上に戻って周囲の索敵とか。
幾つかウィンドウを開いて周囲を見てたりするとランサーさんがやってきた。

「あー・・・随分派手にやったなぁ」
「建物が脆いんだもん」
「ハッ、すずかに言われちゃこの世界の材質もなっちゃいねぇな」

いつも通りの青いタイツ姿。真紅の槍を肩にして腕を組んでる。

「手伝いにいけって言われて来たんだけど・・・こりゃ必要なかったか」
「うん。もう終わっちゃったし。今は周りの索敵してる感じだしね」

瓦礫から立ち上がる。ランサーさんは瓦礫の下側なのでどうしても見下ろしてしまった。

「ハハッ、まだ余力がありそうだな。目が反転してるぜ」
「ん・・・まだ興奮してるのかも。でもすぐになおるよ」
「だといいがな。とばっちり喰らうのは勘弁してくれよ？」

手をひらひらさせながらランサーさんが飄々と喋る。
なんというか、ランサーさんはどうもこう言うときのほうが私は好きなんだよね。

真正面から見てくれうっていうか。

「いや、恋愛感情は無いよ？」
「何言ってんだいきなり？！」
「なんでもないＹＯ！」

ツッコミでつい衝撃波を出してしまったがランサーさんだし大丈夫だろう。

「イタタタ・・・全く加減してくれてっからいいけどよ。マジならこっちもマジになるだけだしな・・・
それよりも。マスターが呼んでるんだ。とっとと行こうぜ」
「あ、そうなんだ。じゃぁ速く行かないとね」

未だにバリアジャケット（ドレス）のままの私はスカートを翻して空へとあがる。
チェリアさんは後で回収するべきかな。それともあっちの組織さんでやってくれるかな。

ティーダＳｉｄｅ

市街地上空で俺はアスト＝スプリガンと射撃魔法の撃ち合いをしていた。

そんな中、遠くで魔力の流れが淀んだのが肌に感じた。
城の方で爆発が起きた。その後に出てきたのは隊長と・・・もう一人同じ魔力を持った誰か。

「お兄様！なんで・・・っ！！」

お兄様、ね。今まで撃ちあってたのにすっかり気が削がれてるじゃないか。
だけど其処で緊張が崩れるんじゃまだまだだ。
これは模擬戦じゃない、本気の戦いなんだよ。

デバイスから射撃魔法を一発。頭部直撃コースで放つ。
全く予想もしてなかったのか気付いたのは撃った後。
視線が魔弾に気付いた後でも魔法陣が魔弾を防いだ。

「なんという・・・卑怯な手を使うのだな、管理局というのは」
「おいおい。マジで闘ってんだぞ。よそ見してるお前が悪いんじゃねぇの？」

命の張り合いやってる最中に余所見とか。
余程その防護魔法陣を信用してるのか？

「ふん・・・悪態つきおって。これだから小僧は・・・」
「その小僧に押され気味なのは何処のどいつだよ」
「腹立たしい！私が喋れば必ず言い返しおって！この卑怯者めが！」

卑怯者？そうですがなにか。
ていうか生き死にのやりあいなんだからソレくらいは当然だろうと思うんだけど。

威嚇弾を撃った後は俺に意識を向かせてる。
でなきゃ面白くないね。と言っても打ち合いすぎて魔力がもうすぐなくなるって言うのが本音。
枯渇する前に何とか手を打たない、と・・・？

城のほうから飛んでも無い魔力反応が三つ、向かってくる。
これは・・・・。

「なんじゃこの魔導反応は！化け物、か！？」
「いいや違うぜアスト＝スプリガン。こいつは俺ら管理局が自慢するトライアングルエースのご登場だよ！」

金色と桃色と白の魔力光を帯びさせて向かってくる反応。
どうやら隊長が呼んだみたいだね。

「お疲れ様ッスねー」

姿が見えて声も届くくらいの距離になった所で挨拶をする。

「ティーダ一尉！」
「高町二尉！それに八神三佐にテスタロッサ執務官まで。お疲れ様ッス」
「状況はミラくんから聞いとるよ。此処は任せてもろてもえぇですか？」
「了解ッス八神三佐。あと官位は其方の方が上なので普通に接してくださいッス」

敬礼をしてから簡単に説明。その間にもアストさんお待ちですよ。

「時空管理局です。貴方達の魔法運営は危険レベルが高いと判断されましたので逮捕します」
「もし、自首するのなら少しは軽くなります。腕のいい弁護士をつけることも可能です」
「せやけど抵抗するなら――――――わかるやろ？」
三人してポジション取りながら威圧してるとか。
「くっ・・・折角毀士のデータやらと解析終了してこれからと言う時に邪魔しおって・・・・！」
アストが後ずさりながらも魔法陣を展開させていく。
「それ以上の魔法陣展開は抵抗の意思とみなします。くれぐれも注意ください！」
高町二尉が警告を促す。なんだる。俺よりも確りしてるよねこの子達。
なんか俺必要なくね？って感じに空気なんスけど。
まぁその後案の定アストは三人にボコられたわけで。大人しく逮捕という流れになりましたとさ。
え？簡略化しすぎ？気のせいだよ。
取り敢えずは研究データやらを調査するからと言う事で施設にエースズが連れて行った。
俺も其処に同伴と言う形でついていく。
研究所にいくと全身赤タイツのヒーローがいたので事情聴取ッスね。

第七十七・五話　エネミア設定

敵勢力説明

第１０００番代管理外世界

管理局が管理する世界のほかに不必要として打ち切られた世界。
それが１０００番台の管理外世界である。
そういった世界に限ってよく氾濫組織などが蔓延っているケースが多い。

エネミア（国名）

第１６６６管理外世界に存在する国の名前。
この世界・・・惑星には現在この国しか人の住める場所は存在していない。
魔導によって街の治安は維持されている。文化レベルとしては中世程度の建築力。
但し、城の造りに関してはその文化レベルを逸している。
国は城壁に囲まれており、その中央に城が聳える。
城と一概に言っても崖のような丘陵の上に立っている為、一般人が城することは難しい。

また、市民は魔導を遣うものと使えないものとで分けられている。
一般的に魔導を遣うものは裕福層に当てはまる。

城門から壁門までの大通りがメインストリートになっている。
其処から路地裏に入れば一般下層の貧民が連なって生きている。

ファーベル（施設）

エネミアにある魔導を統括し、安全に行使できるようにと日々研究している施設の名称。
適合者に魔導を与えたり、市街地などの街灯も魔導によるものである。
研究主任はアスト＝スプリガン。国税から費用が捻出されており、唯一の国家機関としても国内では有名。
魔導を扱う資格を配布しているのもこのファーベルである。

アスト＝スプリガン（人名）

賢帝。全ての知識を得たものの意味。
ファーベルの総研究主任。現国王の腹違いの妹。
魔導の扱いに関しては右に出るものはいないくらいに精通している。
射撃系魔導の使い手。体中に魔導陣を作り出して身体強化を行ったりもする。
魔導式放熱飛空板という兵器を作ったはいいが、重量があるので使用にはまだ改良の余地があるようだ。

魔導（名称）

エネミアに存在する魔法の総称。
基本的にはミッド式と同じだが、魔法陣の形状としてはミッド式ともベルカ式とも違う。
二重円陣に梵字に似たタイプの文字が羅列しており、ミッド式などのように展開後に回転などはしない。

主に身体強化と射出系。特殊な例としては物質強化系があげられる。
また、希少系に飛行系統が存在するが使用者は限られているようだ。

騎士団（集団名）

主に城内に設置されている。騎士団長はセイザー＝アシュクレヴィオス。
構成人数は３０００名を超える。

セイザー＝アシュクレヴィオス（人名）

剣帝。武具の担い手、特に剣に突出した使い手の意味。
国王に仕える騎士団の団長にして現国王の実弟。
金髪。かなりの長身で２Ｍ９０ｃｍある。当然鎧も特注である。
エネミア国に伝わる宝剣フェイタルブレイバーの所持者でもある。

宝剣フェイタルブレイバー（物品）

国宝。エネミアに代々伝わる宝剣。現所持者は騎士団長セイザー。
宝玉を柄の凹みに填める事で様々な属性を扱う事ができる。
真の姿は十個ある宝玉全てを填め込むことで現れる。
大剣ほどの大きさがあり、刃も幅広。耐久力はかなり高い。

フェイク＝ヌァ（人名）

遣帝。使役するものの意味。
過去が全く不明の老人。いつの間にかエネミアにいた。
死霊術士（ネクロマンサー）である。死した動物や幻想種すら使役していると専らの噂。
飄々とした以下にも翁、という外見。顎鬚を伸ばしている。
老獪な杖を一本所持。

チェリア＝カノウ（人名）

拳帝。武術を極めしものの意味。
国連傭兵団の団長。騎士団とは仲が悪い。
語尾がどうしても可笑しいイントネーションになってしまう。
バトルマニア。戦略知識はかなりも高さを有している。

五帝（名称）

エネミアのトップに君臨する五人の名称。
全てがケンテイという名前で統一されている。

権帝――シャックス＝アシュクレヴィオス――全ての権限を持ちし者
賢帝――アスト＝スプリガン――全ての知識を有する者
拳帝――チェリア＝カノウ――武術を極めし者
遣帝――フェイク＝ヌァ――使役する者
剣帝――セイザー＝アシュクレヴィオス――武具の担い手

サリュア＝アシュクレヴィオス（人名）

現国王の娘で第一位王位継承者。姫。
今の国の現状を嘆き、変えたいと思っている。
良く城を抜け出しては捕まっている。

現在は新国家の女王として座。今までの政治を払拭する内政能力を発揮している。

ビリージャー（人名）

ファーベルによって魔導素質を見抜かれてその手を取った。
全身赤タイツにフルフェイスメットのようなものを被っており、何処からどう見ても赤いヒーロー。
身体強化がずばぬけており、自分の中にある正義を執行する。
主に路地裏に生息。アウトローな存在を懲らしめている。

新国家になってもそのスタイルは変わらない。

シャックス＝アシュクレヴィオス（人名）

エネミアの現国王。自ら転生者と名乗り上げる。身長３Ｍの巨躯。
所持している能力は身体強化魔導強化飛行思考高速化。魔力だけなら管理局ランクではＳＳＳに相当する。
元々は転生者の為に定住した場所を持っておらず、その力で以って今の位置まで上り詰めた。
様々な国や集落があったこの世界で徐々に吸収しては消していき、ついにはこのエネミアだけにした。
絶対的な力で国を支配している。
同じ転生者であるミラージュとは何かしら縁があるようである。

＊転生時に得た能力としては魔界の大魔王と同じ能力。
ただし左右逆になっており、右から火の鳥・左から斬撃を繰り出す。
体の周囲に薄い魔力の膜を張り、直接攻撃魔力攻撃全てを大幅カットさせる。

反管理局組織の長として管理局に逮捕。衛星上拘置所に拘留中。

第七十八話　一人じゃない

ミラージュＳｉｄｅ

スキマで呼んだ仲間が無双してる。いや違うな。すずかの所は何も無く終わってた。
それと状況が終わって俺のところに向かって来る仲間達。
ていうか、アリサバハムート呼んでるとか何やってんの。

「バハムート呼ぼうとしたら烈が来ちゃった。てへぺろ♪」

あぁ、もう。
それも才能なのか？どうなんだ。
アリサはもう、すぐ近くにいて会話できる距離。
バハムートの背中に誰かいるな。

「サリュア。大丈夫？」
「はい・・・だいじょうぶです」

サリュアがバハムートの上でアリサと会話。
そういえばサリュアとシャックスは似てるな。
少しだけ高さをあわせるようにして会話に加わる。

「サリュア。もしかしてあのシャックスとは」
「はい・・・父です」

うつむくようにして声を絞るようにして応えてくれた。
やはりな。似てる部分が多すぎる。
視線をシャックスに移すと何を見るでもなくただ其処に立っていた。

特に何も感情もなく其処に立っているだけ。
視線をこっちに向けることも無く、唯其処にいた。
サリュアの視線は向けられてるのに。
気付いてない・・・？いや、あれはわかる。知っているぞ。

誰もその世界に居ない。
あの男の世界には誰も存在していない。

「アリサ。とりえずあのバカぶんなぐってサリュアと話させるから任せた」
「あ、うん・・・気をつけてね」
「誰にいってんだ？後ろで思ってくれてるだけで俺は誰よりも強くなれるんだぜ？」

片目を瞑って合図。
また俺は上がった分だけ高さを下げる。

「後ろで、か・・それでも私はまだ横には立てないんだね・・・・・」

そんなアリサの呟きは俺には聞こえなかったんだ。

神威を再展開させて右手に持つ。セイバーやディアーチェたちが俺の魔力を遣ってまで暴れてるのが感じ取れる。
てか派手にやりすぎだろう・・・余波が見えるぞ。
あの光はジャガーノートに約束された勝利の剣か。

それとアレはトリプルブレイカーが発動したか？
相手になった奴は大変だな。塵でも残ってれば僥倖だ。

「さて。そろそろ始めようか」
「・・・・・・・・・・」
「おい？」

視線をシャックスに戻して話しかける。が、反応がない。なんだ？
そんなにショックなことが起きたのか？

「・・・あぁ、すまんな。少し考え事をしていた」

そこでやっと目に光が宿る。視線を俺に向ける。
それだけで威圧されそうだ。流石に王とだけはある。

「どうやったらお前達を絶望に落とせるかどうか――――をな」

気と魔力が合同に練り上げられていく。
足元に魔法陣が出来上がる。ただし管理局の理解する魔法陣ではない。
この国独特の魔法陣。

それならば。と。
こっちも足元に魔法陣を展開。漆黒の魔力光の魔法陣を形成する。
体内で練り上げて組み上げた魔力を神威に徹す。
内包しきれない魔力があふれ出ていく。
まるで台風やハリケーンが完成したかのような嵐が生まれる。

「絶望には墜ちない。たとえ墜ちても一人じゃなければまた這い上がれるんだぜ」

仲間がいるなら。護りたい人がいるなら。
それだけで人は強くなれる。

それを体現したかのような事が今、起きているんだ。

「だったら――――――見せてみよ。余の与える絶望から足掻いてみせよ」
「当然っ――――――やってやるさ!!」

渦巻く雲。互いの魔力がぶつかり合う。それだけで上空に磁気嵐を呼び出す。
津名魅が上空にいるが磁気嵐にはびくともしない。

俺は神威を。シャックスは無手。何を合図にも無く、同時に跳ねる。
速度は同じ。お互いの中央で実際にぶつかり合った。

それだけで衝撃波が駆け抜ける。国中を突き抜け、空を切り、大地を割る。
ソレはまるで神話の再生。
割れた大地は裂けていき、切り開かれた空は嵐を呼ぶ。雷鳴が轟く。

「自然を揺るがすか」
「このくらいの力は貰ってるんだろう？お前も」

神威を素手で防御とか何て奴だよ。魔力の膜を張って防護してるのか。
だったらその魔力の膜ごと斬り伏せてやるさ。

シャックスＳｉｄｅ

流石は神移、と言った所か。防護膜を張ってないと触れただけで切り落とされそうな勢いよ。
だが一日の長を持つ余が負けるわけにはいかぬのだ。

「余が勝利した暁には貴様を配下として迎え入れよう」
「なら俺が勝ったらお前の力の出所を聞かせてもらおうか」

ふん。欲の無い。その程度の事など些事でしかないと言うのに。
どうせ出所など同じ場所よ。ゼルレッチが保護していたという過去も忘れたか。

「余は負けぬ。この国がある限り！」

気と魔力を噴出す。それだけでまるでオーラのように体中からあふれ出ていくのが目で見えるほどだ。
ココまで高揚するのも久方ぶりよ。さぁ、途中で落ちるでないぞ？
転生者同士の闘い等そう出来る物ではないのだからな。

強く、強く、強く。超圧縮した魔力弾を右手から高速で放つ。
幻影はそれを回避できずに左肩に直撃する。次いで弐撃目。同じ魔力弾。
今度は脇腹にヒット。バリアジャケットのマントを引き剥がす。

「ほうら、避けなければ次から次へと当たっていくぞ」

回避行動をするも幻影よりも早くよの攻撃が当たる。
もはや連続的な射出になってきた。アストの研究が良く実ったもの

だ。

徐々に魔弾の数を増やしながら周囲に散らばせて行く。
やがて全方位に魔弾が集まる。流れていく事はなく、一定の距離を保って停止している。

「さぁ――――――」

余の合図と共に魔弾が一斉に幻影を包み込むように射出された。

「どうだ――――――この攻撃は避けれまい」

全方位からの射撃に回避する場所などない。ないはずだった。
だがなんだ。この気配の希薄さは。爆煙の中にある幻影の気配が薄い。薄すぎる。いや、無い。

やがて爆煙が消えていくと其処には幻影の姿は無かった。まるで本当の幻影のように。
ふ、と。気配が肌に触れる。背後――――――

「おおおおおおおおおおお!!!!!!!!」

叫びながらと配置を教えているようなものではないか。愚か者め。
振り返り様に左手の手刀を予想軌道位置に振り下ろす。
空を切り裂き空気を削る手刀。
しかし文字通り空を斬るのみで終わった。

「むっ・・・・!?」

気配ははっきりとあった。だがこうしてみると何処にもいない。

まだ能力を隠していたのか。だとしたらこれは――――――。

「っ！！！」

一瞬で鳥肌が立つ。危険を知らせる本能が沸き立つ。上を向くと其処には神威を振り上げている幻影がいた。
しかも直前。刹那、神威が余の脳天に触れる。いきなりすぎて魔力の膜すら薄い状態だ。
だがそれでも余の膜は穴があくことはないのだ。

「残念だったなぁ」

神威を握ったままの幻影に右手を差し出す。火を灯しながら右掌が触れる。
それだけで炎の渦が螺旋に細く歪に螺子のように変化する。
触れたのは左の脇腹。さっき魔弾が直撃した場所だ。
其処に貫通するように炎の螺子が脇腹を刺していく。
炎の螺子は天空を貫く。そして掌から順に掻き消えていく。

幻影は超速再生をするが傷ついた内臓の血を吐きながら後方へと距離を取る。
だが余はそれを同じ距離でずっと追いかける。
早々と超速再生の時間等与えてやるものか。

周囲の魔力を結合、集束して掌に集めて前に差し出す。
完全固定砲台として小さい、と言っても３０ｃｍほどだが魔法陣を作り出す。
魔法陣は全部で２００。横に連立するように乱雑に並んでいく。
そして射撃。全ての魔法陣から超圧縮された魔素を撃ち出していく。

幻影はその全てを直撃される。だが落ちない。その程度は許容範囲。
でなければこんな手加減した攻撃で落ちるはずも無い。
さぁ。一方的なこの私刑もいつまで続くのかな？

ミラージュＳｉｄｅ

くっ・・・まさかココまで地力が違うとは。
今までの俺が能力の上に胡坐をかいてただけとしか感じられないじゃないか。
あいつは十全に持ってる能力を使いこなしてる。
俺はあそこまで使いこなしてたか？

第一なんで俺はこいつと戦ってる？同じ転生者だからか？
最初はなんでだった？反管理局組織の摘発じゃなかったのか。
なんで・・・ここで闘ってるんだ。
俺はなんで闘っているんだ・・・・。

シャックスの魔素集束砲が俺を貫いていく。その都度超速再生が俺を治していく。
体が爆散してもすぐに無傷の状態に持っていく。

追撃は来ない。待っているのか？
ゆらりと空で揺らめきながらシャックスを見る。
なんという余裕の表情だ。あぁ、上等だ。その顔は・・・・きっと今までの俺にもあったんだろうな。

「認めるよ。俺は一人じゃ無理だ。なによりも何をしても勝てる気

がしない」

それは真実だろう。俺一人じゃ神威を遣ってブーストして攻撃するくらいしか実は手がない。

乖離剣を遣ってもいいがきっと「俺では」防がれる。

「なんだ。泣き言かマスター。さっきから後ろで見ていればなんだその体たらくは」

声のする後ろ。振り向くと金色の鎧の英雄が機嫌悪い顔で俺を見ていた。

「我のマスターであるならばそんな泣き言など許さんぞ。我が認めたマスターであるなら最後まで足掻け、この戯けが！！」

「まったく・・・お前はいつもそうやって無茶を言うな・・・」

「無茶は言うが無理は言わん。できる事をしないでいるのもイラつくから疾くさっさとやれ」

全く。無茶をいうサーヴァントだ。だが目が覚めたかもな。

「腑抜けなマスターの変わりに我がやろう。早く退け」

空をすべるようにしてギルガメッシュが前に出る。

「手は抜かない。慢心は今はいらぬ。奴が王なら我もまた、王よ」

「来たか、英雄王。余も貴様とは遣り合ってみたかった」

「戯言だ、人の王。我の神性は自己を嫌う故にランクが落ちていたが今はそれはない。完全な半神半人の我に勝てると思うな」

「その言質、現か嘘かすぐにわかる」

「抜かせ。疾く始めるぞ。マスターは今のうちに腑抜けを治しておお

け。見ていて虫唾が走る」
「厳しい事言うな・・・・」

ギルガメッシュとポジションを入れ替わる。
ギルガメッシュがシャックスと相対しながら戦いを始める。
ソレを俺はただ見ているだけ。

使い魔。サーヴァント。頼るべき仲間。それが周りにいる。目の前にいる。
叱咤して俺を待っている。ハッ。何やってたんだ、俺は。
こんなにも――――――

こんなにも――――――

恵まれてたんじゃないか。

『全ては――――貴方の心のままにあるのです』
「・・・その声」
『私はずっと貴方を見ていた。貴方のことを知る者以外から遠ざかるようにように・・・・ココで』

『サーヴァントがいます。マテリアルがいます。レグルス隊もエースもいます』

『何より、私を救った貴方がこうしているのを見てるのが――――

―私は辛いのですよ』

『単体で勝てないならそれを払拭する手が貴方にはある。私を呼んでください。そうすれば――――』

まったく。俺の周りは心配しいが一杯だな。
でもそれが心地イイんだ。

「手を・・・貸してくれ。俺にはお前達が必要だ」
『はい・・・我が力、我が心、全ては貴方の思いのままに』

「ぐっ!・・・・・っのおぉぉ!!!」
「中々粘るではないか英雄王!王というのも聊か間違ってはいない!」
「仮初の王が吼えるでない!我は全てを引きつれ守護する王ぞ!それはマスターも例外ではない!護ってみせるわ!!」

ギルが乖離剣を引き出す。それだけで雰囲気が変わる。

「聖杯よ!我に力を寄越せ!その汚泥すら飲み込んでくれる!」

俺の中の大聖杯がギルの呼びかけに呼応する。
俺の魔力と聖杯の魔力が互いにギルの元へと引っ張られていく。

「マスターを護るのはサーヴァントの基本だ。あのような子供で甘ちゃんなマスターでもマスターなのでな」
「ならばその矜持ごと吹き消そう、さらばだ英雄王」
キャスターよろしく大魔法陣が幾つも何層にも展開される。
乖離剣は与えられた魔力によって起動を始めた。
天が呻き、地が叫ぶ。地鳴りと雷鳴。神話の再現。
「呪式弾道魔弾。余の切り札の一つだ」
「そうか。ならば此方も切り札で対抗しようではないか」
再現された神話が崩れる。まるで其処は形成された世界。
打ち出されるのは互いの全力。切迫した力は互いにぶつかり合いそして――――――弾けた。
上部が崩れた城は完全に根元まで崩れ、市街地もボロボロだ。
無事な者が避難を誘導しながら生き残った命を助けていく。
今ココにいる管理局の・・・いや、皆が助け合う。
バハムートに乗ったアリサとサリュアは高い上空、津名魅の保護領域下で難を逃れる。
息を切らしながらもまだ互いの『武器』を構える王二人。
そこは王たる矜持が見えていた。

「ギル。ありがとうな。今、俺の背中を圧してくれたのは間違いなくお前だよ」
「フン。やっと起きたか。寝坊は厳禁だといつも言っていたであろう」
「あぁ、全く。耳が痛いくらいにな」
互いに笑みがこぼれる。この状況で。
「もういいか？我は疲れたので休む。宝具と打ち合って無事。しかも切り札の一つとかいっていたな。まだ手があるのなら我には手が少なすぎるわ」
「あぁ。充分だ。約束も叶えるよ」
「当然だ！セイバーとの仲、是非とも頼む！」
ギルが下がる。今度は俺が前に出る。
「やっと貴様の出番か？」
「あぁ。待たせたな」
今、手には神威はない。右手首にブレスレット状態で待機している。そうだ。一つに感けて全体を見ない、ただ力を振り回してた俺が変わる。
「俺一人じゃ勝てないんでな。手助を呼ぶことにしたよ」
「いいだろう。それもまたお前の力の一つだ」
「あぁ・・・・だから、来い――――――」

「――――――――――リィンフォース」

第七十九話　幻影と大魔王

「俺一人じゃ勝てないんでな。手助を呼ぶことにしたよ」
「いいだろう。それもまたお前の力の一つだ」
「あぁ・・・・だから、来い――――――」
「――――――――――――リィンフォース」
黒い羽が羽ばたく。幾つか羽根が舞う。
空にできたスキマから現れたのは黒翼の天使――――――否、堕天使。
長い銀髪を翻し、其処に在る。
「マスターの呼びかけにより参上仕りました」
「すまない、リィンフォース。さぁ、共に行こうか」
「はい。我がマスター」

「「ユニゾン・イン！」」

手を触れ合うと互いの言葉が重なる。
同時に体が一つになる感覚。

黒い、ゼロ。仮面とマントを着た一つの存在が在る。黒い大きな翼を６つ生やしている。

「それが。幻影の力か」
「いや、これが俺達の力だ」
「そうか・・・ならば見せてみろ。使い魔ですらその真価を見せたぞ」
「言われずとも！」

周囲に魔法陣を展開。その数大小あわせて５。

『処理演算はお任せを』
「あぁ。そっちは任せた」

さぁ、おわりをはじめようか。

はやてＳｉｄｅ

なんや・・・なんかおかしな感覚や。
ずっと昔に感じた、懐かしくって寂しい、暖かい気持ち。

それが心の中に渦巻いた。

「なんや・・・なんやろ、この感覚」
「はやてちゃん？」
「あ、ごめんななのはちゃん。避難続けよ」

でも気になる・・・。
それにミラくんはまだ上で戦っとるのに。
視線を上げれば爆煙の中で闘ってるミラくんたちが見えた。
近くにいる龍は・・・後で言及やな。

でも――――そう、でも、や。
見上げた其処にいるのは昔別れを告げたはずのあの子。

「・・・なんでおるん・・・・・・」

ミラージュＳｉｄｅ

リィンフォースとのユニゾンは何年ぶりだろう。
Ｃ．Ｃ．との時以来だと思う。
だとしたら足掛け・・・６、７年くらいぶりか。
ソレくらい久しぶりなのにしっくりとくる融合感。

『お好きに動いてもらって構いません。私はココでバックアップします』
「嬉しい事言うな。久しぶりだってのに」
『出番が来ただけでも私は嬉しいのです』

すまん。しかしそれだけ奥の手で切り札だと思ってくれ。

「最後の切り札（ワイルドカード）だ。高くつくぜ」

「言葉は軽くなる。実行してソレを証明しろ、幻影」

まったくだ。だったらやるしかないよな。

指をさして小さな魔法陣から針のように細い魔弾を打ち出す。

狙いは顔。シャックスはそれを首から上で避けるが頬を掠めていく。

切れた頬は赤い筋を作り出して雫を垂らす。

連射。連弾。魔弾の射手。

小さい魔法陣から幾重にも射撃される魔砲は小さく鋭く細いながらも確実にシャックスを捕らえていく。

俺はただ魔力を打ち出すだけ。

制御方面は全部リィンフォースがやってくれる。

尽きない俺の魔力は永続的に打ち続けられるがそれではリィンフォースに負担が大きく回ってしまう。

魔連弾を続けていると回避行動しながらシャックスが右手を向けてくる。

まさかこの状況から反撃、だと？

掌に魔力が籠められる。左手には気。同等の量を掌に集めてあわせる。

感卦法かよ！まさかそれがくるとは思わなかったぞ。

気と魔力を体内に取り込んでから溢れる気と魔力を放出する。それだけで空気がブレる。

空が震える。悲鳴をあげる。

「さぁ、今度はこっちからだ」

両手を合わせて鳥の翼のように広げる。
其処から魔力のこもった炎が出現。大きな火の鳥のような形状を作る。
掌から解き放たれた火の鳥は俺に向かって飛んできた。
細かくピンポイントしか攻撃できない魔連弾では消す事ができない。

「リィン！！」
『了解。極細弾から変更。連弾・星砕へ』

名前を言うだけで細かった魔弾が極太のレーザーみたいに変更された。
てか一気に太さがＳＬＢみたいになったんだけど大丈夫か？

『マスターの魔力ならＳＬＢを連射しても疲弊する事はありません』

それはそれでとっても大変なことなんだけどね？
太くなった魔弾は火の鳥を貫通して消し去る、が。
やはり其処は火。散っても形状を戻してくる。形状記憶炎。そんな感じだ。

なんて余裕持ってる場合じゃない。
回避しながらブーストで空を飛び回る。
その後を追うように火の鳥が追いかけてくる。
自動追尾つきとは中々高性能だな。それともシャックスが操ってるのか？

ちら、とシャックスを見たら次の動作に入ってる。左手の手刀が振り上げられている。

あれはまずい。俺の防護壁すら簡単に切り裂いてくる。

「アレが来たら防護壁集中だ。後ろは自力で我慢する」

『了解。防護に７０％回します』

７０％か。それで大丈夫と判断したなら任せよう。

案の定シャックスが左手を振り下ろした。

かなりの距離があるのに行動に移したって事は――――――やぱり届くんだよな。

しかも火の鳥を巻き込んでまで斬ってきた。

この闘い方・・・・・ハッ。

「面白ぇ！いいぜ、ノってやるよ！」

大体つかめてきた。アイツがどういう存在なのか。

そりゃただの人間一人じゃかなわないよな。

でもな。一人じゃなければ勝てるって事を見せてやる。

振り下ろされた左手は真空の壁のような衝撃波を作り出して迫ってくる。

防護は任せてる。だったら俺は次の攻撃の準備に回るだけだ。

巻き込まれた火の鳥は衝撃波によって掻き消える。

火の鳥はあいつの攻撃の一つでしかない。どうせまた後でもできるからだろ。

あぁ、あいつはアレだ。ああいう存在だ。

だったら――――――。

「逃げてばかりか？余を楽しませろよ」

動き回ると羽が魔力余波として散っていく。とはいえそれはイメージでしかないが。
迫る衝撃波が防護壁に衝突する。流石にこれは飛来物とは違うから
熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）では防御できない。

「逃げるだけと思ったら大間違い！」

眼前にどでかい漆黒の魔法陣を形成する。

「星々よ、彼方を駆け抜ける光となれ！」

防御しつつ俺の左拳が魔法陣の中心点を叩く。いや、殴る。
それだけでスターライトブレイカーが繰り出される。

嘗てリィンフォースが蒐集した魔法。オリジナルが十分だとしたら
俺は十全。
バレル展開すらせずに魔力のみがシャックスを襲う。

だがシャックスは回避する事もなくその真正面に立つ。
一度振り下ろした左腕を今度は振り上げる。勿論手刀で。

スターライトブレイカーをまっぷたつにする。
って、普通ありえないだろ！俺と同じ魔眼も持ってるってのか？
だがそんな気配は全くなかった。自力で斬ったってのかよ。
こんなのなのはが見たら卒倒するな・・・・いや、きっと見てるな。
だとしたら・・・・。

「ふふ、余の左腕は全てを切り裂く。そう、魔法などもな」

・・・なるほどね。綻びを見つけて殺す直死の魔眼とは違う理論だ。
あぁ、そうだよ。忘れてたよ。俺も――――――できることがまだあるって事をさ！！

「リィン、魔眼発動」
『了承。防護後に展開。直死の魔眼覚醒』

衝撃波の防護が終わるとすぐに世界が変わる。綻びのある不安定で脆い世界。
魔眼すら魔力制御に任せないといけないくらいにまかせっきりだ。
それは空気すら死を孕む世界。そして――――――あの王にも綻びがある。

「まさかその目をも持っているとはな。最初から出していれば戦局も換わっていたかも知れぬのに」
「勿体無くて遣うのを憚っただけさ。安心しろよ、もう出し惜しみしないから」
「楽しみな言葉だな」

なのはＳｉｄｅ

なんだいまのは。魔力がざわついた。
空を見上げれば其処には友達が・・・とっても大切で大事な友達が闘ってる。
黒尽くめの友は闘ってる。地上からでもわかる。大きな翼を６つもはためかせているから。

そんな友が。巨大な魔法陣から自分の魔法を使うとは思わなかった。
星々を砕く光。ただし、漆黒に染まった光。夜よりも暗い闇。
自分が、私が打つのよりも強大で凶悪で劣悪な魔法。魔砲。
そんなものが頭上で放たれた。

内心、喜んでいたんだろう。だって好きな人が・・・・友達が私の
魔法を選んで遣ってくれたのだから。
それで負けないはずがない。私にとっても必勝の魔法なんだから。
だけど・・・それはかなわぬ夢だった。

相手取るのはこの国の王たる存在。
それがただの手刀で。唯腕を振るうだけで。魔法を切り裂いたのだ
から。

「・・・うそ・・・・・・・・・」

信じられない。まるで幻想話を聞いてみているかのような夢物語が
空で起きていた。

シャックスＳｉｄｅ

大体の知恵は回ったか。余のベース体を見越したか。
まぁ闘い方でバレぬほうがおかしいか。転生者であるならば。

しかしあの魔眼を持っているとはな。それだけでも脅威だ。
不老不死で魔眼持ちだと?まったく・・・何処まで欲深いのだ。
・・・余もいえぬか。フフ・・・・・。

「まさか今のが取って置きとはいうまいな」
「まさか・・・それこそまさかだ」
「なら見せよ。そろそろ飽いた。余もまた本気で打ち込もう」

長いこの戦いに決着を。幻影の死を以って終了とする。
さぁ、来るがいい。ココからが始まりで、終わりだ。

ミラージュＳｉｄｅ

あの男の力は強大だ。恐らく人のままじゃ勝てないだろうな。英雄すら勝つのは難しい・・・。
だとしたら人為らざる者でなら・・・・！

「リィンフォース、今から枷を外す・・・あれがもしイレギュラー扱いならここでやらないといけない」
『了解しました・・・ですが時間を設けます。宜しいですか?』
「構わない。その時間以内に決めてみせるさ」

さぁ・・・終わらせよう。この喜劇を。
リミッターを外す。自分自身につけていた・・・いや違う。
自分で抑え込んでいた枷を今、取り外す。

あれが想像通りの存在ならきっと。こうでもしないときっと勝つことはできない。

尚且つ、あの転生者シャックス＝シュクレヴィオスがイレギュラーであるなら。
俺はココで勝つしかないのだ。

『魔力反転。理性反転。制御レベル危険区域に突入――――――制御完了』

リィンフォースの声が聞こえる。頑張ってくれ。お前の力が今はなくちゃココまでやりきれない。

『後で見返りは出しましょう。帰ったら、になりますが』
「ハハ、できる範囲にしてくれよ？」
『勿論です。そしてそれは貴方にしかできないことなのです』

何を言われるのか判らないが。だけど約束だ。生きて帰ろう。皆で。
だからあの――――――大魔王を今は倒す。

リミッターが無くなった今、押さえつけるものは何もない。
肉体限界以上の性質を以って行動する。
瞬間。シャックスの目の前に立っていた。瞬間移動とは違う、完全な瞬間行動。
魔力の膜を張っていようと今の俺になら・・・・。

ほら、そこだ。膜の綻びを見つけ出す。
それを触れるようにズブリと指を入れる。なぞる。点を突く。
放射線状に巻くが消える。否、殺す。
膜の中の肉体にはほころびが薄くしかない。こいつもまた不死の力を持つのか。厄介だな。

お互いの多重障壁魔法陣が連立する。それが触れると超音波のよう

な音を立てて魔法陣を消滅させていく。

「さぁ――――――終わらせようか仮面の幻影」
「あぁ――――――終わりにしよう魔界の大魔王。お前に似合う技で終わらせてやるよ」

互いが同じ行動に移る。両手を組んで指を開く。
ソレはまるで竜の顎が開かれるようなモーションに酷似していた。

「大魔王があの騎士の技を遣うか」
「だから、よ。余が得意とする技の一つぞ？」

フハハッ！いいぜだったらどっちが強いのか試そうか。

「「ドル――――――――――――」」

互いの魔力が高まる。世界が歪む。次元震すらもう何度も起きていそうだ。

「「――――――――――――オーラ！！！！！」」

竜神が遣わす騎士が遣う技の一つ。竜魔人でしかなしえない技が同時に放たれた。
超至近距離。零距離射撃。回避する事も出来ない。否、しない二人。
指が触れるかもしれないほどの近距離でのドルオーラは開かれた互いの掌の間で燻るように逃げ場が無いまま停滞していた。
少しでも退いたら終わる。それが互いの脳裏にある。

だったら。下がらなければいい。勝てばいいだけのことだ。

「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！」
「ぬうううううううううううう！！！！！！！！！！！」

リミッターを外してるとはいえこの状態で同等の力か。流石に地金は違うな。
リィンフォースが制御してくれてるからこの状態も持つわけだしな。
しかしタイムリミットがある。其処に関してはこっちのほうが不利だ。
時間制限のない向こうが粘ったら俺が終わる。
それならそれ以上を出せばいい。

「リィン。更に奥の手だ」
『・・・・本来ならお勧めはしません。ですがきっとマスターは聞いてくれないでしょうから了承します。残念ですが』

ごめんな。これも俺の我侭だ。

『制御率更新。全力の９６％まで上昇可能。更に『右腕』と乖離剣。左腕と聖剣の練成を行います』

『練成開始まで後3・・・2・・・・1・・・・0。練成開始』

俺の脇腹からもう二本の両腕と乖離剣と聖剣が生まれる。

「この化け物め。この状況からそのような手を出すとはな」
「文字通り手を出したわけだけど、な――――――結構きついから本当の終わりだ」

互いの宝具が真名を起動する。ドルオーラによって燻っていた中心点を巻き込みながら――――互いの両腕を巻き込みながら――――光は訪れる。
宝具二つによる超至近零距離射撃。
光が俺とシャックスを包み込む。練成した両腕と宝具は耐圧に負けて弾ける様に霧散した。
「ふ、ふはははははは！！！！幻影よ！流石と褒め称えてやろう！ココまで余を苦しめたのは楽しませたのは誰一人としていなかった」
「それだけアンタが凄かったってことだ・・・奥の手の奥の手。思いついて実行できたからこそなしえた奇跡だよ」
溢れる光の中で笑い声が聞こえる。まだ余裕あるのかよ。俺はもう手は無い。これでまだ続けるって言うなら終わるかもしれない。ココまでやっておいて。
「少しだけ昔話をしてやろう。余に勝った褒美と思え。余がこの世界に転生したときの事だお前にも実のある話だ」
「昔、持てる力全てをある男の模倣の力を得て転生した。そしてそれは成った」
「魔界に君臨する大魔王の力を従えて余はこの世界を革命した」
「世界を統べればあとは何をする事もなくただ安穏な毎日だった」
「其処に二人の魔導師が現れた。一人は配下に。一人は協力者として余に仕えた」
「それがこの世界に魔導を広めた元凶。輪廻の魔女は恐らくこれか

らお前の進む路に絡んでこよう」
「それと・・・余はお前の言うべきイレギュラーではない。壁だ。今ならわかる」
「転生してまでこうして運命付けられていたとはな・・・ククッ、あの神め。次にあったら覚えているがいい・・・」

徐々に光が収縮して消えていく。それにあわせて会話も消えた。
リィンフォースが言うには光は一瞬の出来事だったらしい。あの会話も誰にも聞かれていないらしい。
事象世界、とでもいうのか。一つの固有結界のようなものらしい。

「終わりだ。幻影」
「あぁ。さようなら大魔王」

光が消えれば其処には鳩尾から下が吹き飛んだ体が浮いていた。
ゆら、と。揺らいで力なく、風に吹かれるように落下していった。
真下は城門。セイバーと恭也さんが闘っていた場所。落下地点を見れば一人の騎士が見上げている。
なら向こうは向こうに任せよう。こっちはこっちでやるべきことをするだけだ。

市街地の避難やらはなのはたちがやってくれたようだ。流石に手が早いな。
ティーダ達はまだ市街地・・・ファーベルとか言う施設の調査か。
すずかとランサーは・・・・・いた。まだ路地裏にいるのか。逃げ遅れた？
恭也さんセイバーアーチャーは津名魅に戻っている。あとで話もあるだろう。

「サンキュリィンフォース。助かった・・・」

『いえ・・・それよりもきっと大事な事があります』
「さっき言ってた見返りか？」
『違いますよ。ただ・・・主はやては見てました。私の姿を』

・・・そうか。そりゃそうだよな。
同じ空間にいてみてないなんて在り得ないか。
何よりも気付かなきゃいけないはやてだ。

「・・・なんとかするさ。いいほうにな」
『そうなる事を切に願います。泣かしたら許しませんよ』
「あぁ。大丈夫だ。大事な相手だからさ。泣かせはしないよ」
『それならいいのですけどね。ユニゾンを解除します。解除後、反動が来ますがお気をつけください』

呪いの言葉をかけてユニゾンを解除する。
すぐさまスキマを開くとリィンフォースが中へ入り込んだ。
ユニゾン中のフィードバックがゆっくりと襲ってくる。やばい。これは落ちそうだ。俺も落ちるのか。
ちら、とアリサを見る。まだ津名魅の下、庇護下にいたバハムートの背にいるアリサ。
アイコンタクトで何も言わずに理解してくれる。
バハムートが一声あげて羽ばたき、俺の落下よりも早く下に潜り込んで背中に乗せた。

「無茶しぃさんよね。まったく・・・・」
「否定はしない。てか出来ないわ」

ククッ、と苦笑い。大の字になって横たわる俺に膝枕してくれるアリサ。
あぁ、気持ち良いな。

「・・・サリュア。ごめんな。お前の父さん強かったからさ。手加減も出来なかった。
　寧ろあの人はさ。全力を出さないと勝てなかった。半ば反則染みた手だったけどな」
「いえ、いいのです。王とはいつか世に倒れる宿命であると父から教わってます」

そんなアンタでもちゃんと娘は教育してたんだな。
サリュアは涙を堪えてる。

「これからどうするんだ？」
「この国をもう一度一から作り直します。今度は私が。より良い国に仕上げます」
「そうか・・・だったら父親は反面教師だ。悪い所は悪いと見習って頑張りなよ」
「はい・・・・私がんばりますよ」

ぐ、と握り拳でガッツポーズなんぞとってみせる。空元気、といえばそれだ。

「じゃぁサリュアを城門に降ろして俺達は俺達で事後処理だ」
「あんた動けないんだから動ける私達でやるわ。サリュアはここで一旦バイバイね」
「はい。その・・・たいしてお役には立てませんでしたがお世話になりました！」

座ったままお辞儀をして礼をするサリュア。
うん。この子ならきとなんとかなるだろうって思える。勘だけど。

バハムートがゆっくりと地上に降りる。城門付近にはシャックスを抱かかえる騎士がいた。

「セイザー！父様は！」

「姫様！ご無事でしたか。兄王は心配無用です。まだ生きておられる」

「そうですか・・・よかった」

バハムートから飛び降りるようにして騎士・・・セイザーと呼んだか。

その目の前に降り立った。

流石父親がアレなだけあって身体能力高いじゃないか・・・。

あとはそっちはそっちに任せて俺達は俺達の仕事に戻ろう。

バハムートが羽ばたくと空に上がる。避難を終わらせたなのは、フェイト、はやて達とも合流して津名魅に戻る。

さぁ、これから情報を集めてまとめなければな。

まだ散っている仲間を集めて津名魅のブリーフィングルームに集合だ。

バハムートから降りた俺とアリサは二人でブリーフィングルームに向かう。

途中、なのは、フェイト、はやてと合流した。

「ミラくん、ちょっとえぇかな」

・・・ナイスフラグだ。やっぱり来たというか、速すぎじゃないか？とか思うけどそれだけ切迫してるんだろう。

「アリサ、先に行っててくれ。はやてと二人で重要な話がある」
「ん・・・了解。なのは、フェイト。行くわよ」
「あ、うん。じゃぁはやてちゃん」

俺とはやてを残して三人は先に行く。
二人きりになった途端、沈黙。いかん、理由はわかってるがこの雰囲気はまずい。危険だ。
だからと言ってこっちから切り出していいものでもないから待つ。
数分してからやっとはやてから切り出した。

「あんな・・・さっき、リィンフォースがおった気がしたんや」

やっぱり気付いてたか。

第八十話　夜天の路

ミラージュＳｉｄｅ

ブリーフィングルームに向かおうとした所ではやてに捕まった。
なんとなく予感はしてたから驚く事はなかったが速かったな。
少しの時間の沈黙、二人っきりで黙られると間が持たんぞはやてさん。

「あんな・・・さっき、リィンフォースがおった気がしたんや」

静かに沈黙を切り裂いたのははやての呟き。
核心を突くような一言は全てを語る。

どうするかな。ココで端折ったりするのも問題か。
リィンフォースにも泣かすな、って言われてるしな。
しょうがない。っていうのも変か。そろそろちゃんと伝えるべきか。

「はやて。それは気のせいじゃない。あいつはいるよ。俺達の心の中に」

あれ？ちゃんと言おうとしたらのらりくらりとしちまった。

「はぐらかさんといて。実はな、闘ってるとき見たんや。ミラくんが・・・ユニゾンしてるの」
「ユニゾンならセイバーたちともしてるの見てるじゃないか」
「ちゃうよ。それは違う。さっきのは違う。明らかにセイバーさん達とのユニゾンとは違かってん」

あー・・・一人で真相突き止めたか。
強ち間違ってないから困ったもんだ。でも言うしかないだろ。

「・・・・・リィンフォースはあの雪の日に逝った。そうだよな」
「・・・・・うん」
「だがあの時、俺はあのまま逝かせる訳にはいかなかった。だから俺はその途中にあいつを捕まえた」
「・・・・・・・ぇ？」

あ、突拍子もない事だったみたいで処理が追いついてない顔してるぞ。

「あのままじゃお前とのリンクも切ってたし、放っておいたら消えるのを待つだけなんでな。
とある場所に連れてって匿ってた。そこで新しく俺と契約してリンクを繋げたんだ」
「・・・・・・」
「あの時のはやてだとまだリィンフォースを十全にリンクを繋げたままでいられるほど魔力もリンカーコアも安定してなかったからな。
緊急措置でやってたんだがそのままになってた」

間違った事は言ってない、筈だ。実際事実だったし。

「それにリィンフォースからの願いでもあった。はやてが一度吹っ切って新しい路を一歩踏み出すには、な・・・」
「ほぉか・・・・」

リィンフォースの優しい心は祝福の風となって確かに吹いていた。
それがはやてにも気付けたんだ。

他にもリィンフォースとのユニゾンが二回目である事。
今までの事、これからの事とかを話す。
それだけでもはやてには満足なのか何度も首を縦に振って頷いていた。

具体的には、既にはやてにはツヴァイがいる。リィンフォースを基軸基盤にした新ユニゾンデバイス。
だからリィンフォースには幸せな路を歩んでほしいそうだ。後で伝えて置くようにといわれた。

静かに話を聴いてるはやてを良く見るとうっすらを涙を目尻に蓄えていた。
やっぱりこの話は鬼門だったか・・・でも話をしないといけないことでもあったしなぁ。
はやての肩に手を置いて少しだけ身を寄せる。

「・・ぁ・・・」

はやてが小さく声を上げる。意表を付かれた感じで予想もしてなかった事だろう。
正直俺もなんでやったかわからない。近くのはやてもわけもわからずに見上げているだけだ。

「あんまり悲観的になるな。あいつはお前を泣かすようなら許さないって俺に言ってたよ」

「それにまだお前の事を呼ぶときは『主はやて』って呼んでる。別にはやてを嫌いになったわけじゃないんだ」

この7年の遅すぎたフォロー。何処までできるか判らないけどな。

何気に回りを気にする――――――よし、誰もいないな。人払いの結界をはる。
結界確認。流石に津名魅の中とはいえクルーやブリーフィングルームから見ようとする奴の対策はしないといけない。
べ、別にいかがわしいことするわけじゃないからなっ！
はやての肩に乗せてた手を引き寄せる。
それだけではやてを抱きしめる感じになる。完全に俺の胸の中に入る感じ。
「ふぇ！？・・・ふぅぇえええええ！？」
一瞬理解してなかったみたいだがすぐに何が起きたか理解した。
耳まで真っ赤にしてそのまま硬直した。
「ごめんなはやて。これはきっと俺の我侭だ。リィンフォースをお前から奪った形になったもんな」
ゆるく。厭ならすぐにでも離れられる位の力。
「はやてに対して俺は許し難い事をしたと思うよ。だからさ・・・ごめん」
「謝るんはだめや・・・謝るくらいなら最初からせんほうがえぇわ。ミラくんは何か考えがあってリィンフォースを助けたんやろ？
それに今は私の傍にリィンもおる。名前を継いだ祝福の風が吹いとる。せやから私はそれについては何も言わん」
抱きよせたはやてはちょっと涙目で見上げる。
ぽんぽん、と頭を撫でてから今度は抱きしめる。今度は強く。

「っ・・・！？ミラくん！？」

流石にこれは吃驚したようだ。でもそのくらいはしてもいいだろ。泣かすよりは出来るなら笑わせていたい。悲しみを吹き飛ばせればと思う。

「はやて。俺の我侭につきあわせちまったな。悪いと思ってる・・・でもその理由もそのうちちゃんと話すから」

「ん・・・・ほんなら言う事聞いてもらいたいことがあったりする」

「・・・・・俺にできることなら」

・・・・なんだ。こう言うときのお願いは断ることができない魔力が。

「あんな、近いうちに部隊を造ろうと思うんよ。そこにミラくんも参加してほしいなーって・・・」

「正式な書類書いて提出したら考えてやる」

そのくらいなら何とかなるだろ。正式な書類で出向扱いなら動く事もできるし。

「それとその・・・・もう少しこのままでいてほしいなぁ、なんて・・・」

その言葉に俺ははやてをギュッと抱き締める。

するとはやても手を回してきた。

恥ずかしいのか顔を上げないでいる。耳まで真っ赤のままだ。

そして静かな中――――――互いの影が重なった。

ブリーフィングルームにはやてと二人で入る。
まぁ話をするってのはあの場にいたのなら知ってるわけだしそこから聞けば判る事。
なので時間をずらす事もなく一緒に部屋に入る。

「皆揃ってるな」

見渡せばイルジオンリッターの面々となのは、フェイト。
俺が呼んだ面々が揃ってる。

「レグルス隊以外の面子に限っては行き成りの召集で申し訳ない」

まずは謝罪だ。無理矢理俺の都合で呼んでしまったんだしそのくらいはな。

「何を言いますか。マスターの危機に現れてこそ我らです」
「サンキュセイバー」

セイバの言葉に皆が頷く。が。

「ディアーチェ。レヴィ。シュテル。お前ら任務は？まだ途中だろ」

「何を言うか。マスターの為に任務を放ってきたというのに」
「すぐ戻る事をお勧めするがね・・・まぁもう少しここにいてくれ」
「了解しました」

返答したのはシュテル。しゅてるんはえらいなぁ。

「で、だ。早速・・・なんだ？」

すげー勢いで睨まれてる。特にアリサとすずかとなのはとフェイト。

「結構時間かかってたけど何話してたのかな？かな？」
「これは言及しないとダメよねぇ」
「わ、わたしはきにはしないけどっ・・・きになる、かな・・・」
「キリキリ吐いた方が得だと思うな♪」

なにこの状況。でも結界はってたから中でのことは見えないはずだ。むすっとした四人。そしてそれを見てるだけの使い魔さん達。

「アリサとすずかは判ってるだろ。なのはとフェイトにはこれから話す」
「あ・・・そっか」「あの子、出てきちゃったもんね・・・」

アリサとすずかはすぐに納得した。なんていうか場の雰囲気壊しすぎだ。

「リィンフォースは生きている。お前達が空に還した途中に俺の能力で助けた」
「え・・・・ほんと？」
「あぁ。リィンフォースとユニゾンして今回は勝てた」

「そっか・・・だからあの時はやてちゃん空を見上げたんだね」
「ん・・・リィンフォースの感覚を感じたんよ。やからやね」
なのはとフェイトにもはやてにした話をした。
とはいってもとりわけのない部分だけだけど。
納得のいった所で今回のあらましと現状、これからのことを話し合う。
報告書を作成しつつこの世界のこれから。
反管理局組織はファーベルという名前の組織。施設。そしてそれを操っていたこの国の政府。
これに対して管理局は介入を試みて組織を制圧。
殲滅との指令であったが、この国でのこの施設の壊滅は国の滅退を促すものでり、必要最低限の施設を残す事とする。
政府に対しては新政府を発動し、これの対応にあてる。
国王シャックス＝アシュクレヴィオスおよびアスト＝スプリガンはその責任能力の問題上、管理局詰めである衛星上拘置所にて裁判待ち。
新国王として全国王の娘であるサリュア＝アシュクレヴィオスを置き、新体制を施す事。
此れについては信用の置ける人材を観測者として数ヶ月間滞在する事。
管理局少将ミラージュ＝ヴィジョンの名において観測者をアリサ＝バニングスに任命。新国王の手助けをすることを拝命する。
また、この国の「魔導」の運用性が管理局にとってどう動くのかはこれからの会議次第。
ということになった。

あとは報告書と始末書を作り終わったら地上本部に持っていかないとな。

「さて。それじゃぁ帰るか。もう疲れた」

今になってユニゾンの反動がきたんじゃないかってくらい疲労がどっと出た。

もう帰ろう。ミッドに帰って休みたい。

地上本部への報告書

ミラージュ＝ヴィジョン著
第１６６６管理外世界における任務報告書

海と大地の割合が５：５の惑星にて唯一の国＜エネミア＞が存在。
魔導と呼ばれる独自の魔法体系を形成しており、主に身体強化・射撃系に分けられる。
建築物にもその技術が応用されており、文化レベルは水準より少し上か。

政府の膝元にて研究施設が在り、望んだものであれば「魔導」を手にすることが出来る。
その場合、魔導を使う者と使えない者とで確執が起こっており、貧富の層を作っていた形跡が見られる。
また、独裁的な政治を行っておりながら民は平穏を得ているのは個人的に不可解。

施設はファーベルと名乗っており、創設者は匿名。責任者の名はアスト＝スプリガン。前国王の異母妹。
魔導の研究の中には管理局の大系とも言えるミッド式・近代ベルカ式の両式における対処まで出来上がっていた事が判明。
此れにより、地上本部より通達のあった反管理局組織として認識。
ティーダ＝ランスター一尉以下数名でもってこれを制圧。研究データは大半が消去されていたが残っていたデータは保存。管理局本部へと移送。

独自の守護団体である騎士団と傭兵団が存在。
互いの仲は悪く、事在る毎に反発していた模様。

互いの長は政府最高幹部であるセイザー＝アシュクレヴィオスとチェリア＝カノウ。
セイザー＝アシュクレヴィオスは前国王の弟に当たる。
チェリア＝カノウは制圧戦にて行方不明。セイザー＝アシュクレヴィオスは管理局からの観測者の監視の下、一から新政府に尽力をつくすと明言。

フェイク＝ヌァと名乗る老人は制圧戦にて死亡確認。
協力者の話ではこの存在とファーベルの創設者が元凶であると言及している。

フェイク＝ヌァ死亡のため、残された匿名を捜索中。

前国王であるシャックス＝アシュクレヴィオスは一命を取りとめ、現在はアスト＝スプリガンと共に衛星上拘置所にて拘留中。
管理局反逆罪による罪の追及のほか、余罪を捜査中である。

エネミアは新政府発足として前国王の娘に当たるサリュア＝アシュクレヴィオスを新国王として拝命。新たな国づくりに管理局員に誠意をみせた。

以上、ミラージュ＝ヴィジョンより地上本部中将レジアス＝ゲイズ殿へ。

第八十一話　夜と幻（前書き）

上白糖１０ｋｇ持ってきても足りないかもしれません。

足りるかもしれません。

第八十一話　夜と幻

ミラージュＳｉｄｅ

あの事件から一年が経った。
当時任務途中だった皆はそれぞれに戻っていった。
そんで俺はといえば執務官室でいつものように事後処理の報告書の作成と始末書の仕事中だ。

「うーん・・・・・・」

仕事をしながら唸る。いつものワークスピードに対して今日は遅い。
ずっと頭にあるのは過去の事件での事。
いくらリィンフォースのことが切欠とはいえ・・・・あぁもう！
なんでこんなにずるずるひきずってんの俺ってば！

こんなときに限って誰もいない。
なのはは陸士学校に行ってるしフェイトは執務官として世界を飛んでいる。
はやては――――――――――

「なぁ、ミラくん。お茶菓子もろてえぇ？」

部屋中央のソファに座ってお茶と菓子をバリバリ食っていた。
執務官補佐としてアーチャーを迎えようと思ったら特別捜査官になってやがった。
なにやってんの、って聞いたら俺への嫌がらせでなったらしい。別にいいんだけどさ。

なのでランサーに補佐になってもらった。バイトしてるならそれもいいってことで納得した。
そのランサーのお茶とセイバー用のお茶菓子を食べてる狸。
あ、ランサーは呼んだら出てくる感じで霊体化して見えないようになってる。
それに今は気配もないからどっかに行ったんだろう。

「セイバーに見つかるなよ」

ため息混じりに言うと遠慮なく菓子を食べ始める。

「そういえばはやて。今は１０８陸士部隊じゃないのか？」
「今日はオフや。せやからどこにおってもおかしくはないんよ」

ナカジマ三佐も大変だなぁ。こんな狸を教育し続けてたんだから。

「それにほら。やる事あるねんで」
「あぁ・・・前に言ってた部隊の話か。どうなったんだ？」
「超順調や。色々な方面から最高のスタッフやら集めてな。最高の部隊にしたろ思てん」

仕込みは順調、か。それならそれでいいけどな。

「それにミラくんも出向予定や。正規の書類で送るからまっとってな」
「そういう約束だからな。それは別にいい」

基本ははやての部隊なんだし、俺達が口や手を出す事は極力ないようにする、と告げる。
はやてもそれでいいと快諾。やはり俺の階級が問題らしい。

管理局少将。二佐の創設した部隊に将官が前線にいるというのも問題があるのだそうだ。

「手伝うって言った以上は手伝うさ。ただ、俺らから動く事はないと思ってくれ。何かしら敵対勢力に対する抑制くらいで」

「それでえぇよ。いてくれるだけで私は強くなれそうやから」

えっへ、と笑いかける。あの事件以来はやてが俺を見る目が変わった気がする。

それで機動六課の設立が遅くならなければいいけどな。一応釘刺してみておくか。

「あんまりそうやってぼけっとしてて仕事が遅れたら手伝わないぞ？」

「大丈夫や！大体はシャマルに任せとる！」

だめじゃん！そしてシャマル南無。

最近守護騎士見えないと思ったらそんな裏で動いてたのか。

後で挨拶くらいには行っておくか。

「で、当のお前さんはココで何やってんだ？」

「ミラくんの顔見に来たんよ？（´・ω・`）」

なにその顔。当然じゃん？って言うような顔すんな。

「それにな。ミラくん成分が枯渇しそうなんで補充に」

「俺ってナニカの栄養分なのか？！」

吃驚した！俺って栄養剤だったのか。

「それに、な・・・・私のファーストキス奪ったんやから責任はとってもらわんと」
「今それを言うか!?はやて・・・恐ろしい子!!!」
「乙女のファーストキスやで?ミラくんはそうでもないやろうけども」
「いやまて。なんだその言い方」

まるで俺がキスしまくってるような言い方ですよ!

「ちゃうん?」
「ちゃうわ!すずかともまだしとらんのに・・・ていうか、あれからすずかが怖くてまともに会話もしてません」

もう一年経つのにね。近づいたら怖いオーラ出すんだよ。
話したいのに。超こえーの。

「すずかちゃんはなんともあらへんけどなぁ。普通に喋るけども」
「あれ?俺だけ?なんで!?」

おかしいですよ!カテ◯ナさん!今度ちゃんと話しよう。

「でも私は皆と比べて一歩リードした感じでえぇんやろ?」
「まぁ・・・そうだな」

なんだ。なんだ、この会話は。不穏すぎる。
まるでチーズを持った子供がやしの木の周りを虎に追われてグルグル回るような・・・そんな感覚だ。

「あんな。これって女の子から言うのもアレなんやけど」

ふ、とまじめな顔ではやてが俺に向き直ってくる。
俺もそれに対してはちゃんと向いて話を聞くことにする。

「私はミラくんが好きや。多分、なのはちゃんもフェイトちゃんもアリサちゃんもすずかちゃんも。
でも言葉に出来ひんのはミラくんが凄く曖昧な存在やから」

「せやから誰も言えへんのやと思う。それでも私はちゃんと伝えました。答えは聞いてない！
返事はせぇへんでえぇ。私は私の思いを伝えたかっただけやから」

はやての心が伝わってくる。あぁ、そうだよな。俺はちゃんと見てこなかったんだろう。
すずかからも何も言ってこないが雰囲気や態度でもうそれっぽいときもあるけど。
アリサもアリサでプライドが負けた時とかは傍にいることが多かったりする。
なのはとフェイトは・・・まだ一線置いてる感じだな。

「はやて」
「ん」

はやての座ってるソファに近づく。

「俺は・・・きっとみんなの想いに応えることはできない。一人を選ぶ事が出来ない。
それは俺の我侭だ。嫌ってくれてもいい」
「・・・えぇよそれでも。私は別に選ばれたくて今告白したわけやあらへんもん」
「・・・ごめんな」

「謝らんで。謝ってほしいわけやないんよ？」
「・・・・・・」

これ以上何か言っても言い訳になっちまう。
一人なんか、もう選べないだろ。だったら全員平等に接するだけだ。
でも伝えられないなそんな事。
そしてココにランサーがいなくて良かった。

「別に恋人になりたいとかやあらへんのよ。伝えたかっただけやし」
「気持ちは嬉しいよはやて。出来る限りのことくらいしか出来ないけど、頼ってくれ」
「・・・それは仲間として？」
「バカ。幼馴染としてだ。何も遠慮する事もねぇだろ」
「ハハ、そうやね。そうやったわ」

はやてＳｉｄｅ

言ってもうた。言ってもうた。
好きって言ってもうたー！
でもきっとすずかちゃんやアリサちゃんあたりは言ってると思ったんやけどなぁ。
なんやあんまりそういうのは言われてないらしい。

つまり私が一番目っちゅーことや。
ファーストキスも・・・・したったしなぁ。
こ、こんなんだれもおらへんから言えるんや。他に誰かおってみぃ。
言われへんわ！

でも返答を待つわけやないから断ってもうた。今日来た本当の理由はこれがメインやから。
あれから一年や。へたれなりにまっとったし、行こうともしたんやけどダメやった。
シグナムたちに相談したら「たたっ斬る！」「ぶん殴る！」「内臓をぶちまけます♪」とか不穏なのおさえるんに一杯一杯やってん。
襲撃に行くかもしれへんようなテンションになったから任務にいかせたけどな。

「別に恋人になりたいわけやあらへんねん」

これは、うそ。ほんとうは、なりたい。
でもそれはだめ。独り占めはあかん。
・・・・出来ればしたいのはやまやまなんやけどー！うー！あー！
これもミラくんがはっきりせぇへんから悪いんや！

でもいつか振り向かせてみせるけど。
そのときにはすずかちゃんやアリサちゃんと勝負せなあかんかもしれへな。
今はみんなのミラくんでえぇ。
でもみんなよりも先に想いを言えたのはちょっぴり優越感があるかも。

ここで何か言い訳でもしようもんならきっと引っ叩いてたかもしれんからそこはミラくん譲歩したってな。

「んじゃ、私はこれでかえろかな」
「ん・・・そっか。んじゃ送ろうか」
「いや、えぇよー。どうせ本局ん中やし」

立ち上がったところでそんな事言われた。
それに今そんな事されたら折角の決意がゆれそうや。
せやから――――――

「　　あ」
「　　ん？」

ふと視線を横に向ける。それだけでミラくんが横を向く。
その隙をついてソファ越しの向こうにいるミラくんに近づいて頬にちゅーする。

「！？っ！？！！？！？」
「あっはははは！無用心すぎるわ」

ずざざっ！と後ずさるミラくんを見て笑ってもぉた。
それでもやっぱりいつかちゃんと振り向かせたろ。
それまではみんなのミラくんでおってね。

「ほんじゃ帰るわー。実は忙しいんよねー」
「ちょ・・・はやて！」

引き止めようとする声も振り切って私は執務官室を出て行く。
次に逢うのは向こうでかな。

ミラージュＳｉｄｅ

まさかあんな手に引っかかるとは・・・・。
誰も見てなくてよかった。見られてたらアウトだった。

「しかしあんな手を使うなんてな」

恐るべきははやてなのかもしれない。
直接的なのはすずかだけど。

「呼んだ？」

プシュン、と扉が行き成り開いた。
そこにはすずかが立っていた。
圧倒的な雰囲気と影を背負っている。

「す、すずか！？どどうしたんだなにかよようか？」
「どもってるよ。大丈夫？」
「あ、あぁ。大丈夫だ・・・・・」

静かに深呼吸をする。すずかに気取られないように。

「今ね、はやてちゃんとすれ違ったんだけどね」
「ぶふぅあぁっ！？」

その一言に深呼吸が破裂した。
思いっきり挙動不審なのは既に感づいているだろう。

「なんかはやてちゃんすごく嬉しそうでね。聞いちゃった♪」

声は普通になってるけど目が。目が笑ってないですよすずかさん。

「そしたら何て言ったと思う？「負けへんで」だって。ねぇ。なんなのかな。なんなのかな」

すっげぇプレッシャーがのしかかってきた！
はやて・・・軽く地雷を置いていくなんて・・・・恐ろしい子！
兎に角今はすずかに弁明するべきだ。
素直に。そうクールに。そしてスタイリッシュに。

「さっきまではやてがいたんだよ。告白された」
「あぁ・・・だから。で？返事は？」
「しなくていいって言われたからな。してない。それに言った所でみんなの関係がこじれるがいやだ」
「・・・・バカ！そんなのいいの。せっかくはやてちゃんが勇気出していったのになにやってんの！このへたれ！！」
「ちょっとまて！爪を伸ばすな！武装するな！」

素直に言ったら怒られた！ナニコレ。折角の俺の語りが！
まぁ確かに酷いとは思ったけども。

「シャックス＝アシュクレヴィオスはイレギュラーじゃなかった。つまりはまだ来るって事でしょう？
そこなのよね、ミラージュくんが引っかかってるのは」

俺の変わりに代弁してくれた。
イレギュラーが来る限りはこの世界にいる。いれる。
だけどその後は？この世界に居られるかなんかわからない。

「悩んで迷うのもいいけどさ。それで相手の気持ちまで崩しちゃダメだよ。ちゃんと受け止めなきゃ。
私やアリサちゃんはそれを承知で判ってて傍にいるんだよ？」

部屋の中に入ってぐいぐいと俺を外においやっていく。
まさに追いかけろと言わんばかりに。

「未来はまだわからない！とっとと追いかけて返事してきなさい！後の事は後考える！このとうへんぼく！」
「――――――あぁ。わかったよ」

これ見よがしに好きな事言われた気がする。けど今は後回しだ。
はやてを追いかけに走り出す。部屋から出るときに扉の隅に肩をぶつけたけど気にしないでおく。
すずかが背中を押してくれた。将来のない俺でも良い、って。

いや、違うだろ。未来がないなら造れば良い。未来なんかわからないって。
本局の中を局員とぶつからないようにしながら走る。
とはいえ速度が出せないので小走りになってしまう。

そういえば俺この世界に来た時、最初にはやてに逢いにいったんだよな。
伝えることは多い。
曲がって上がって下って曲がって。また下がって。
そのすぐ向こうまで行くとはやてがいた。

「はやて」

小走りしたけど息は切れてない。声を掛けると吃驚したか、肩を震わせてから振り向いた。
顔が赤い。

「え？ミラくん・・・追いかけてきたんか？」
「あぁ。心配になってな」

ゆっくりと近づく。その距離３Ｍ程。

「なにしにきたん？」
「用がなけりゃ追いかけちゃだめか？」
「うーん。どうやろ」
「本当のこと言うと返事しにきた」
「返事はせぇへんでえぇゆーたやん」

向かい合うように立つ。運がいいの悪いのか周りには誰もいない。
俺、運悪かったはずだよね。

「色々とはやてに言ってないことがある。それこそ本当に誰にも言ってないことだってな。
でも聞いてほしいことがある」
「・・・・」

「俺は未来がわからない。ここにいるかどうかもわからない。そんな俺の傍にいたらはやてを悲しませちまうかもしれない、ってさ。そう思ったんだ」

「でも、それって間違いだよな。俺の一方的な事しか考えてなかったんだ。本当ははやての事考えてここに来たのにな」

ちゃんと真っ直ぐ目を見て話す。恥ずかしいけど今はそれが最良。
はやても黙って聞いてくれてる。

「ちゃんと時期がきたら詳細は話す。これも約束だ」

「・・・うん」
「これから言う事は俺の本心。却下なし。いいな」
「うん・・・わかっとるよ」

「俺ははやての事が好きだ。初めて会う前からずっと・・・な」

ほろり、と。俺の告白を聞いてはやての目尻から涙が流れる。
真正面を向いていたはやてと俺はそれを見て感じ取って顔が笑ってしまった。

「うん・・・うん・・・」

小さくコクコクと頷くのを頬に手を伸ばす。
それだけで手のぬくもりを感じようと添えてくる。
そのまま弱く抱きしめる。

「ごめんな。あんまり上手く言えなくて。でも本当なんだぜ？」
「ん・・・・信じとく」
指ではやての涙を拭う。
「あ、あはは、化粧ずれてまうわ」
抱きしめてたのを離れて顔を背けた。
「はやて」
「・・・ん」

「きっとこれから大変な事になるけどさ。それでも俺についてきてくれ・・・・恋人になってくれ」

「当然や。いつでも私はミラくんの力になるよ」

こうして俺とはやては恋人になった。

第八十二話　鈍感認識

ミラージュＳｉｄｅ

はやてとの告白合戦から次の日の朝、いつの間にか守護騎士にばれて即効捕まった。
雰囲気がやばかったので逃げようとしたら搦め手まで全て塞がれていて逃げ道が無かった。

なんというか・・・久しぶりに恐怖を感じた。
特にシグナム。怒りに任せて八竜全召喚を果たすとか何やってんの。
と、まぁあっちもあっちで順調に育ってるようだ。

刹那が目を合わせなくても燃やせるとかチートくさくなってた。
お陰で俺は燃焼→消し炭→再生→燃焼のフルコンボを味わう事になった。
いや、死なないってだけで痛みとか普通にあるから！
ヴィータも勇気度が高まってアイゼンが金色に光ったりとか。
ザフィーラがついに空牙を放つまでに至るとか。
シャマルが旅の扉でリンカーコア摘出しては戻して摘出しては戻して摘出しては戻して・・・・。
もうなんなの。

そんな感じで続いてた粛清の途中ではやてが来てくれて助けてくれた。
守護騎士の忠誠心マジ半端ネェ。

「ごめんなぁ、ミラくん。うちの子がついぞ・・・・」
「いや、いいんだけどな。このくらいならすぐに回復するし」

はやてが俯いたまま俺の服の汚れを掃って取ってくれた。

「しかし情報が速いな、あいつら。何処から漏れた・・・・っ！？」

「・・・・・・えへへ」

ま、まさかっ・・・・・・。

「私がつい言ってもーた。うれしくって」

「あぁ・・・・なるほどね」

否定するわけじゃないんだ。そういう繋がりや絆があるのは判ってたし。

「私、これから１０８部隊にいかなあかんねん。シグナムたちはこのまま連れてくから安心してな」

「ん。これ以上殺されるのはきつい」

死なないけど痛みとかあるんです。あるんです。

さっきも言ったけどな。

ともあれ、部隊に戻るって事で見送る事に。

「あんな、今度の休み、どっかいかへん？」

「なんだ、どっか行きたい場所でもあるのか？」

途中道すがらの会話。

俺ははやてと出かけることを約束した。

はやてを見送った後自室に戻る。と言っても執務室だが。
其処には相変わらずすずかとアリサがソファでくつろいでいた。

「あ、おかえりー」
「おかえりなさい。食事にする？それともお風呂にする？それとも・・・・キャッ」

ソファに横になりつつ煎餅を食べてる二人の光景に目頭がうるっと来た。
なんでこう・・・・っ！！しかもすずか最後のはなんだ。

「お前ら任務はどうした・・・」
「私はほら。報告書昨日置いてったでしょ？見た？これで最後になるものね」
「私はー・・・・・うん。待機中だね」

アリサの報告書は昨日読んだ。エネミアも随分と変わったみたいだな。
サリュアもアリサになついてたから観測者で向かわせておいて良かった。

すずかは・・・まだ待機中だったな。昨日も居たし。

「じゃぁ仕事をやろう。半年くらいかかるやつ」
「「職権乱用！？」」
「そんなこと言うなよ。俺も心が痛いんだぜ。愛する部下を死地に送るなんて」

「「嘘だっ！！」」

ものっそいるきるきで任務のデータを起こす。しかし見事なくらい綺麗に声がハモったな。

と、そろそろ本題に入るか。

「全く・・・本当はそんな事する気でいたわけじゃないだろ」

「うん。まぁそうだね」

「私はすずかから聞いた話だからちゃんとはわかってないけどね。それでも理解はしてるわよ」

そりゃそうか。すずかに背中を押してもらったわけだしな。

それを報告書提出に来たときにアリサが聞いたってなら納得がいく。

「で？」

すごいよすずかさん！

その一言で全てを語ってる。

「まぁ・・・うん。つきあうことになった・・・・？」

オレハナゼキチントホウコクシテイルンダ？

何故か報告義務が発生している。なぜだ。

「そっか。ちゃんと言ってきたんだ？」

「ん。それはな」

歯切れ悪いのはどういったらいいのか迷ってる。

「あ、ミラージュくんの気持ちはわかってるから謝るとかしないで

ね？」
「そうそう。ミラージュのことだから悪いなぁって思ってるだろうけどね」
見抜かれてた。
そうだよな、本当のことまで知ってるのに。
「あのね、ミラージュくん。別に問い詰めようってわけじゃないの。はやてちゃんになら任せてもいいかなって思う自分もいるから」
「ミラージュは少し気を張りすぎ。イレギュラーのこともそうだけどね。そんなに肩肘張ってたら疲れちゃうわよ。
だからこそ、はやてに止まり木になってもらおうっていうのが私達二人の意見です」
「それに・・・きっと私達だけじゃないかもしれないし、ね？ディアーチェちゃんとかシュテルちゃん」
ファントム隊か。でもあいつらの場合、恋愛感情とかじゃないんだよな。
「そう思ってるのはミラージュくんだけだから！」
「なん・・・だと？」
真正面切ってそういうのは聞けないもんだ。だからそういう話題は放置してたのが仇になったか。
「レヴィちゃんはどうだか見ててわからないけど、ディアーチェちゃんもシュテルちゃんもミラージュくんのこと好きだと思うよ」
そういえば訓練のときとかよくひっついてきてたな。
ディアーチェはあんまりそういうの見せないからなぁ。

シュテルはいつのまにか傍にいて手伝ってくれたりしてたけども。

「ミラージュくんが鈍感なのはわかってたけどここまでとはね・・・」

ちょっとまて。俺が鈍感というのは間違いだ！

「「いや、鈍感だから」」

「くっ・・・・」

二人のオーラが半端ネェ！言い返せない雰囲気が怖い！！

「第一、鈍感じゃなかったら私たちの事も判ってるだろーっつーの」

はい、すいませんアリサさん。

すずかは眷属の絆で繋がってる。それはもう周知の事実。

だからこそ何も言わなくても伝わってる感が周りでも判ってるほどだ。

アリサもこの世界に入ってからそういう雰囲気はわかってたつもりだ。

だけど、だ。今までずっとイレギュラーを追いかけて闘ってきた俺にはそれを返すことができなかった。今までは。

だけど一年前に俺は一人じゃ何も出来ないって事を痛感されてからは変わった・・・筈だ。

「そう、だな・・・すまん」

「だから謝らないでって言ったじゃない」

「すま・・・・くっ・・」

何か言おうとすればつい謝ってしまう。もう末期か？
兎に角話を進めよう。
停滞したままだと恐らく自滅する。

「私達は別に一人に絞れっていってるんじゃないよ。あと責めてもないからね」
「まぁ、どういう手を出すかはミラージュ次第よ。あと責めてる訳じゃないから」

つまり、責めてるんですよね。責められてるんですね俺。
流石に本妻とか愛人とかいうレベルはやばいので黙秘したけど。
いや、しないよ？

「ただ・・・なのはちゃんとフェイトちゃんがね・・・」
「あぁ・・・あの二人か。厄介ね・・・」
「すっげぇ意味深ｋｔｋｒ」

なのはとフェイトがどう動くかがとっても怖い！

「あの二人にもちゃんと説明しないといけないな」
「そうだね。そのときには結界とか張ったほうがいいと思う、よ？」
「不穏な助言どうもありがとう！」

すずかさん、もう俺泣いちゃうよそれ以上責められると！
アリサはアリサで楽しんでるしな！

とりあえずはファントム隊ともなのフェイとも任務から帰ってきてからの話だな。

「私達は今のままでいいって思ってるから、そっちを優先してね」

「はい、度々すいません」

あぁ、この二人にはもう頭が上がらないんだろうな。

数日してなのはとフェイトが執務室に来たので説明。

二人は喜んで祝福してくれた。少し残念そうな顔をして。

フェイトが勢いあまって告白して、なのはも序とばかりにきたが保留と言う事にしておいた。

ファントム隊は素体との関係上素直には喜んではいないみたいだが、これからの関係上ではそれもいいんじゃないかとの事。

それでも今まで通りに過ごすという。シュテルが一瞬ヤンデレったけどフォローした。

流石にＮｉｃｅ　Ｂｏａｔは怖い。怖すぎる。

はやてが部隊を造るのにあと一年弱か。

そのときには正式に出向届けも来るんだろう。

それまでに俺は自己の鍛錬。あまり能力を使わないで何処まで強くなれるかを模索する。

簡単に言えばスキマの使用停止。（ただし、リィンフォースとの対

話の場合は使用可）
神威以外の武具禁止。練成禁止。全魔眼禁止。
取り敢えずの自己制約。部隊が始まって少しするまでは使わずに鍛え上げよう。

第八十三話　星と雷

なのはＳｉｄｅ

なんだか良く判らない状況になっている。
任務が終わってからはやてちゃんのところに遊びに行ったらとんでもない事を報告された。
ので、ミラ君に追求しに行った。執務室で仕事してたので問い詰めた↑今ココ。

いや、私達ずっとその想いはあったのはわかってるけどさ。
まさか先に動くとは思わなかったよはやてちゃん。
どうせなら私が一番目になりたかった！

と言う事で今私はミラ君の部屋で机を挟んで向かい合っている。
隣にはフェイトちゃんもいる。けど、オーバーヒートしててお人形さんみたいに動かない。

「で？もう一回いってくれるかな？かな？」

私は頭が理解しきれないみたいでもう一回聴くことにした。
ちゃんとミラ君の口から聞きたいことだよね、此れ。
隣のフェイトちゃんはもう頭が完全にカットされたみたいで動いてないよ。

「はやてちゃんから先に聞いたけどね。でもミラ君の口から直接聞きたいな？」
「はやてと付き合うことになった。てかいつまで引っ張るんだ、この話」

そんな事は知りません。ミラ君がはっきりと口にするとフェイトちゃんが後ろに倒れた。

「フェ、フェイトちゃあああああん!!!メディーック!メディーック!!」

「ソファに寝かしておけ。起きるまで横にさせてやれ」

ミラ君が指を鳴らすとランサーさんがドコゾからまるで空気のように現れた。

フェイトちゃんが倒れる寸前にランサーさんが抱え込んでソファに寝かせてくれた。ランサーさんマジグッジョブ。

手馴れた手付きで介抱してるのを見て安心した私はもう一度追及する。

「なんでわたしじゃないの!?」

「結局お前もそこか!」

デスクをバンバン叩きながら猛抗議する私に怒鳴り返すミラ君。

「デスクをバンバン叩くな!お前はどこぞの筆頭政務官を責める側か!」

「わけがわからないよ!」

デスクをバンバン叩くのを私は止めない!

「理解はしても納得いかないよ!」

「すずかとアリサは納得してくれたぞ。現状維持でいいってな。そこにお前らが・・・お前がこうして問題起こすと大変なんだよ」

「それでも!私が一番ミラ君のことすきなのに!」

「わ、私も好きだよ！」

あ。勢い余って言っちゃった。ってフェイトちゃんも来た！？
あー、でもフェイトちゃんはもう昔から気にしてたもん。
上半身だけ起こして脊髄反応しちゃってるあたり、本気なんだろうね。

「私はっ！二番目でも構わないよ！ミラがいいっていうなら！」
「うん。ちょっと落ち着こうかフェイトちゃん」

若干暴走気味になってるフェイトちゃんを落ち着かせようとランサーさんに頼む。
本当に手慣れてるなぁ・・・・・。

「でも、うん。そっか。ミラ君が選んだんならきっとはやてちゃんは幸せになれるね」
「なんだよいきなり変わって・・・・」
「ん？そうかな？結局はけ口がほしかったのかもね」
「そっか・・・・」
「そ。だからあんまりしんみりするのは駄目。折角なんだから明るくいこうよ」

心から、ってのはまだ出来ないかもしれない、けど。
デスクから離れてくるりと反転。背中をむいた。
うん、ちゃんと祝福してあげるよ。でもね――――――

「私達、ずっとミラ君の事好きだったんだよ」

さっきも言っちゃったけどこのくらいはいいよね。

フェイトＳｉｄｅ

なのはと一緒に任務から帰ってきてはやての所に顔を出したら衝撃的事実を打ち明けられた。

「あんな、ミラ君に告白してん。ＯＫもろてん」

とか。え？あれ？私の耳がおかしくなったかな。
なのはと顔を見合わせてから驚いたけどどうやら本当らしい。
えー・・・どうなの？

なのはがミラのところにいくって言うから私もついていく。これは追求しないといけないレベルだ。
そしてなのはが追求してる間、私はふら、と意識が一瞬遠のいた。
倒れる直前に青い影が私を支えてソファに寝かせてくれた。
うっすらと耳に入るのは・・・ランサーさんの名前。

あぁ、ランサーさんが助けてくれたんだ。後でお礼言わないといけないね。

「私達、ずっとミラ君の事好きだったんだよ」

なのはの声が聞こえる。まるで代弁してくれたみたい。
うっすらと見える視界の中になのはが見えた。なのははにっこりと笑ってくれてる。

「私は・・・最初は憧れだったんだと思う。初めて会ったときは敵同士だったけど。それでもこんなに凄い人がいるんだって」

ぽつ、ぽつと私も思いの丈を口にする。
うん、恥ずかしいけど今なら言えそうだよ。

「そのままずっと押し込めてたけど・・・私はやっぱりミラが好きなんだ」

ずっと溜めてた想いを解き放つ。駄目で元々だよね。
はやてを選んだ以上、私を見てくれることは、ないのかなぁ・・・・・。

ＡｔｈｅｒＳｉｄｅ

「二人の気持ちはとても嬉しいよ」

ミラージュはデスク席に座ったまま返答する。
良く、考えた末での返答。それは纏っている雰囲気というか表情でわかる。
なのはもフェイトもその雰囲気は理解している。

「元々俺は誰か一人なんて選ぶ事はなかったんだ。本当は。
だけど、俺がこの世界に関わろうと決めたのは・・・・・・はやてがいたからなんだよ」

ミラージュの告げる言葉はなのはとフェイトには残酷に胸に刺さる言葉だった。
魔法の世界に関わる切欠になった事実を打ち明けられて二人は何も言えなく・・・言わなくなった。
続くミラージュの言葉を待つ。

「だからこそ俺は最初お前達と敵対までしていた。まぁ・・・あの時は色々あったしな」

ギシ、とミラージュの椅子が鳴る。ランサーはフェイトから離れて壁に寄り掛かってる。
なのは、フェイト共に真剣な面持ちで話を聞いている。

「二人の気持ちもわかってた。だけど俺はそれに応える事が出来ないでいた。
でも人は一人じゃ何も出来ないってわかってからそれは変わった。
すずかもアリサも俺の後ろについてくると言ってくれたしな。はやてはどうかはまだわからんが・・・」
「だったら。私達も隣や後ろにいるよ。ミラ君の傍にいたいんだよ」
「あいつらはあいつらの役目があるんだ。ソレに併せてお前達にもお前達の役目がある。はやてと同じ、な」

少しまだ判ってないような顔をするなのは、フェイト。
ミラージュは両手を組んで更に話を進める。

「俺はある事をするためにココにいる。この地位まで上った。その時には・・・手伝ってほしい」
「それが私達の役目？」
「そうだな。そうなる」

「ん。じゃぁわかったよ。その時には声掛けてくれれば飛んでいくから！」
「私もミラが声を掛けてくれればすぐに来るから！」
「あぁ、嬉しいね。こんなに助けてくれる人がいるんだから。俺は幸せ者だよ」

静かに椅子が鳴る。満足げな顔をしながら瞼を閉じる。
なのはもフェイトもその瞳には決意の炎が宿ってた。

第八十四話　Ｎｅｘｔ　ｔｏ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　？

はやてＳｉｄｅ

苦節数年。ついにここまで来た。
季節はまだ肌寒い3月。とはいえミッドの気候は地球のとは違うから幾分か過ごしやすい。
肩でコートを羽織って海風の中立つ。
すぐ後ろには参謀としてずっと傍におってくれたシャマル。

「なんやこーして隊舎を見てるといよいよやなーって気になるよなー」
「そうですね、はやてちゃん――――――いえ、八神部隊長」

丁度、部隊の新設と相俟って良い場所に隊舎があってよかった。
これもシャマルが尽力してくれたからやとおもう。
スポンサーに料理を振舞ったとかいう噂もあったけど気にせんでおこう。

「でも良い場所にあってよかったですね」
「交通の便がちょぉ悪いけどな。でもヘリとか出しやすいし機動六課にはちょうどええぇ隊舎やろー」

遠くの海で鳥が飛んでいる。
雰囲気も何もかもが海鳴に似ているこの場所はきっと運がいい。

とは言えまだ隊舎の中は配備されたものはまだ全然足りてないし時間もかかる。
何よりも・・・まだヘリが来てないのが痛い。

整備班の話によると早くても今日の夕方。明日には必ずちぅ話やからなんとか間に合わせへんと。
でもココまで早くできたんもあの人のおかげかなぁ。
方々への出向届けも出し終えた。あとは挨拶回りが残るだけやな。

シグナムＳｉｄｅ

機動六課隊舎ヘリポート。内部の確認作業で今ここにいる。

「ヘリの実機はまだ来てないのか」
「今日の夕方到着予定っす」

私のすぐ後ろにいるのはヴァイスグランセニック軍曹。ヘリパイ要員での起用人員だ。
数年の顔見知りの一人。この起動六課には他にも顔見知りが数人いたりする。

「へへっ、届くのは武装隊でも最新型！パンフ見たときから乗りたくってしょうがなかったやつなんですよ！」
「私はそういう拘りがないから良く判らないが、いいものだというのは聞いてる」

なにせ主はやてが頑張って引っ張り出したものだ。悪いはずがない。

「お前の腕では少し物足りないかもしれないが一年宜しく頼む」

「えぇ。任せてくださいよ。ヘリパイとしては操縦桿握れるだけでも大満足なんですから」

好きなものを、趣味を仕事に実用できるのはいい事だな。
私には・・・趣味というものが剣しかない。
そういうの、私も持った方がいいかもなぁ。

「シグナム副隊長～、ヴァイス陸曹～」

格納庫の入り口から呼ぶ声。顔見知りの一人、アルト＝クラエッタ二等陸士だ。

「アルト＝クラエッタ二等陸士ただいま到着ですっ！」

予定時間より多少速いな。あぁそういえばこいつもヘリが好きだったな。

「あのＪＦ７０４式が配備って聞いて飛んできました！飛行魔法使えませんけど！」
「まだだよ。夕方だよ」

目が生き生きしてる。まっすぐ路を見ているのは違うな。

「相変わらずだな、アルト。通信士研修は終わったのか？」
「はい！シグナム副隊長」

ロングアーチ所属になるなら通信士の資格は必要だ。半年かけて研修で取得してきたという意気込みがいつも凄いと感じる。

「人員配置の都合で整備士や通信スタッフは新人が多い。もう新人

気分じゃいられないぞ？」
「まっかせてください！」

うん。芯はあるし根性もある。決して折れない心を持つからこそココに来たわけだしな。
信頼できるスタッフだというのはもうこの数年でよく理解している。
ヴァイスと良いコンビにもなりそうだ。

「あのー・・・こんにちはー。失礼します。アルト＝クラエッタ二等陸士はこちらに・・・」
「あ、ルキノさん！おつかれさまです！」

また一人増えた。

「あ、紹介しますね。通信士研修で一緒だったルキノさんです」
「本日より機動六課ロングアーチ情報処理のたんとうになりましたルキノ＝リリエ二等陸士です！」

敬礼して挨拶と自己紹介をするルキノ。はきはきとしたいい印象だ。

「前所属は次元航行部隊で旗艦アースラの事務員だそうで」
「ほう。アースラには昔幾度か大変な世話になったことがある。艦長のクロノ殿はご健勝か？」
「はいっ！今はアースラを降りてＸＶ級新造艦の艦長をされてます」

ふむ。あの少年も今じゃ二児の父だものな。いい昇進をしているじゃないか。
しかし懐かしい名前が出た。アースラか。思い出すな・・・あの冬の日を。

二人に上司になる人物の事を話して励ます。
これから一年、大変だがよろしく頼む。

「じゃぁ私達は隊舎の中見てきますー。ヴァイス陸曹ヘリが来たら」
「あー、通信で呼んでやるよ」

アルトとルキノを見送る。

「大丈夫なんすかねぇ。あんなガキんちょどもで」
「入隊したてのお前を見て私はまったく同じ感想を持ったものだよ。なぁ8年目？」
「ぐっ・・・シグナム姐さんそれはいわねー約束で」

少なくともこの面子が揃っていれば退屈はしなさそうだ。

アルトＳｉｄｅ

隊舎の中を見学中。これから一年この隊舎で仕事をするのだから何処に何があるかを確り覚えておかないと。
それにしも・・・この隊舎広い～！
少し古い物件だったらしいけどそれでもちゃんと機能してるってのが凄い。

・・・・？

ルキノさんがなんかどこだか見てる。

「ルキノさん？どーしたの？」

ルキノさんが見てるほうに視線を向けると其処には小さな小さな隊服を着た人（？）がいました。
見た目１０歳くらいの使い魔？周りの隊員さんも普通に挨拶してるあたり六課に関わりのある人なんだ。

「「か、かわいい～～～」」

ルキノさんと声がダブった。それほどにキュート！

「なになにあの子！誰かの使い魔とか！？」
「そうかも！あんなにちっちゃい子始めてみるけど！」

なんて話してるとその子が近づいてきた。

「あー、おつかれさまですー。クラエッタ二等陸士とリリエ二等陸士ですね」
「え、あ、はい」

あれ？私達の名前知ってる？
つい生返事しちゃった。

「二人の事はシグナムやフェイトさんから伺ってるですよー。
はじめまして、機動六課部隊長補佐及びロングアーチスタッフ、リィンフォース？空曹長です」

空曹長！空！曹！長！
えぇっ！？

「「し、失礼しました！」」
「あー、いいですよー。私のほうが年下ではありますし。ロングアーチスタッフ同士仲良くやれたら嬉しいです」
ふわ、っと私の手に乗ってくるちっちゃい上司。
「アルトのことはシグナムから良く聞いてたですがシグナムから私の事は聞いてないですか？」
「ご家族に「リィン」という小さな末っ子がいると言うのは伺ってましたが・・・まさかこんなに小さい方とは」
「シグナムらしい説明不足で抜かりはなかったです！！」
このまま私達はリィン空曹長と一緒に隊舎の中を動くことにしました。
それとルキノさんがリィンさんを甚く気にいったようです。

エリオＳｉｄｅ

「モンディアルさん。エリオ＝モンディアルさん」
本局の隊員交付受付に僕はいる。
今日から晴れて正規の管理局員としてのＩＤカードの交付の為に来てるわけで。
で、その受付から名前が呼ばれた。

「ＩＤカードの更新ですね。更新事項は武装局員資格と魔導師ランク陸戦Ｂ。役職はリク試験修正改め三等陸士。お間違いないですか？」
「はいっ！大丈夫です！」
「ではこちら正規の管理局員としての新しいＩＤカードです」
「ありがとうございます！」

受付のおねえさんからＩＤカードを受け取る。これで僕も正規の管理局の武装局員だ。

「エーリオー」

廊下のほうで僕を呼ぶ声がした。
視線を動かすとシャーリーさんが待っていた。

「シャーリーさん！」
「更新終わった？」
「はい！」
「ふっふっふ・・・それじゃぁ――――」

シャーリーさんが思わせぶりに言いよどむ。

「フェイトさんからお祝いメッセージ～～♪」
「エリオ！正規採用おめでとう」
「フェイトさん♪」
「あたしもいるぞー」
「アルフまで！」

通信ウィンドウにはフェイトさんとアルフが映っていた。
僕を保護してくれた優しい人。僕とずっと一緒に遊んでくれた優し

い友達も一緒だ。

「フェイトさん今仕事中じゃ？」
「いま食事休憩中だよ。だから少し時間あるの」
「あたしはちょっとおつかいだけどなー」
「エリオの事だから大丈夫とは思ったけどやっぱり心配だったんだ。でも試験も研修も無事終わってよかった」

まるでおかあさんのように暖かい愛情をくれる。少しでも此れに応えたい。
恩返しをしたい。だからこうして同じ場所に立てるようにココまで来た。
いつか同じところで護りたい。そう思う。

「出会った頃はあんなに小さかったエリオが正規の管理局員だなんて・・・感慨深いやら寂しいやらで」
「すみません、フェイトさん・・でも僕はやってみたいんです。自分の力が何処までなのか」
「うん。エリオが決めたなら私は何も言わないよ。だから待ってるよ」

僕の思いは多分わかってるんだと思う。それを知っての事だろうし。
だから僕は強くありたい。

「わたしとの約束も。護ってね？」
「友達や仲間を大切にする事。闘う事や魔法の力の怖さと危険を忘れない事。どんな所からでも絶対元気で戻ってくること！」
「うん。よろしい♪六かでは私と同じ分隊だから来月から一緒に頑張ろうね」

「ハイッ！！」

うん。頑張ろう。来月から新しい職場だ。
何よりも僕にとっては始めての職場になる。

一年という短い期間だけど精一杯頑張っていこう。

キャロＳｉｄｅ

管理世界６１番「スプールス」自然保護区。
私はココに居た。
力を制御できない私がいれた場所。
ううん。力とかは別。

今までお世話になった人たちとの一時のお別れ。

「じゃぁね、キャロ。忘れ物ないね」
「はい！本当にお世話になりました」

見送りしてくれたのはミラさんとタントさん。この保護区で一緒に働いてた先輩。
この世界でずっと親身になって接してくれた優しい人たち。

「いざいっちゃうとなると寂しいもんだねぇー。キャロにはずっといてほしかったけど」

「ミラさん・・・」
「そういうなよ。向こうにはキャロの保護者もいる部隊に行くんだし。こんな山奥の世界から本局への栄転でもあるんだ。
華々しい門出として見送らないと」
「それはわかってるけどぅ」
「タントさん・・・」

本当にこの二人は優しい人たち。
二人の思いに私は答えられるだろうか・・・・。

「あのっ、わたし保護隊でお世話になっておしごとさせてもらって・・・」

本当に嬉しかった。そう言おうとしたらさえぎられた。

「わたしもうれしかったよ。キャロはまだ小さいけどさ。一人前の魔導師になれるように、いつか大好きなフェイトさんのこと助けてあげられるようにって。
ずっと頑張ってきた事、私達はずっと見てきてっ知ってるんだからね。
キャロはもう保護隊員としては一人前なんだから。今度は陸士も魔導師もきっとしっかりやっていける。だから――――――がんばっておいで」
「っ・・・・・はいっ!!」

あ。視界がかすむ。目頭が熱くなる。
うる、と涙が一筋を作ってこぼれた。

「あ、もうっ!ほら泣かない泣かない。折角の旅立ちだってのに」

ミラさんが私の涙を拭いてくれた。

「今生の別れってわけじゃないんだから。いつでもまた逢える。寂しくなったらまた戻っておいで。
いつでも待ってるからさ」

「・・・はい」

私の今までの居場所。いて良い場所。
それはずっと変わらないんだ。だから・・・。

またココに戻ってくるために。さよならじゃなくて。

「　いってきます。　」

まだ少し涙が出るけど。今できる最高の笑顔で私は旅だとう。
少しでも心配を消すように。

なのはＳｉｄｅ

ミッドチルダ南部。陸士３８６部隊本部隊舎。
はやてちゃん・・・八神部隊長の指令でこの部隊へ。

理由は勿論、若手の人材絞り。
といってももう目当てはあるみたいだけど。
そこら辺はもう話を通してあるみたいで楽。
付き添いのヴィータちゃんも気軽な任務だからって言ってくれてる

しね。

「その二人ですがうちの突入隊のエースです。新人ながら良い働きをしますよ」

パーソナルデータを見せてもらいつつ配置課の人との対話。
こういう事務的な仕事も必要なのだ。

「二年間で実績も確り積んできています。いずれそれぞれ希望転属先に推薦しようとした所に本局からのお声がかりでしょう？
　此方としては誇らしいこと極まりないですよ」

パーソナルデータを見て思った事がある。
二人とも――――――初見ではなかった。
念話でヴィータちゃんにそれを話したらはやてちゃんもそれを知ってたみたい。

「スバル＝ナカジマ二等陸士。うちのフォワードトップになりますね。武装隊流で行けばフロントアタッカーですね。
　とにかく頑丈で頼もしいですよ。一回5日連続で動いてたこともあります。本人の希望先は特別救助隊です」

スバル＝ナカジマ。懐かしいな。１０８部隊のギンガの妹にあたる。
更に１０８部隊長ゲンヤ＝ナジカジマ三佐の娘さん。
でもって・・・４年前の空港事故で私が救助した女の子。
こんなに頼もしくなってきたなんて。嬉しいものだね。

「二人目ですが、シューター。放水担当ですね。ティアナ＝ランスター二等陸士」

彼女は直接的なつながりはない。間接的な繋がり。
ティーダ＝ランスターという兄がいる。確か今は三等空佐で執務官。
名前を聞いてピンときた。

「武装隊向きの射撃型な上、本人もいずれは空戦希望でして。飲み込みも速ければ覚悟も思い切りもいい。
頭もキレますから臨機応変に物事を捉えて事象に立ち向かいます」

データを見ると両利き、二丁拳銃という所まで兄に似ている。

「二人とも現在はランクCですが来月には魔導師Bランク試験を受ける予定になってます」
「両利き（ツーハンド）ですね。デバイスは自作ですか？」
「えぇ。訓練校からの持込になりますね。3年になりますか。このコンビもそのくらいになります」

3ねんか。結構長いね。あれからすぐに訓練校に入ったってことかな。

「あぁいや。航空教官のヴィータ三尉や、高町教導官から見ればまだまだ穴のあるヒヨっこでしょうけど」
「いえ、それでも目を見張るものはありますよ」
「そういってくださると助かります」

引き抜き、と言うとちょっと悪い印象だけど。それでも必要になるなら引き入れたい。
この二人を育てていくのはちょっと楽しそうだね。

第八十五話　Ｎｅｘｔ　ｔｏ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　？

ミラージュＳｉｄｅ

昨日、聖王教会でカリムとクロノとリンディさんがはやてと会議して機動六課の方向方針の確認を行っていた。
其処に俺がいなかったのは何故だろう。俺も機動六課のスポンサー的な存在なのに。

という事でもう来週には機動六課が機動する。
既に俺の執務室には出向願い届けが来ている。
はやてから・・・機動六課部隊長からの要請。
とりあえず、というか。もう受ける気でいるからいいんだけど。

「来週まで時間があるな。どうするか」

実際仕事がもうない。執務官としての仕事と提督としての仕事も今は落ち着かせてあるのであまり書類仕事もない。
とはいえ仕事が全部なくなってるわけじゃない。
自分とこの部隊の報告書やら色々。損害書とか。特にギル辺りが周囲考えずに事件終息させるからその損害報告書が多い。
ファントム隊とグレイル隊とレグルス隊で見ると圧倒的にグレイル隊の損害が突出してる。
まぁ、サーヴァントの力だと抑えようがないんだよな。

他にもいろいろと案件もある。
津名魅のほうも色々あるし。上層部、特に三提督の方から派手に動くなとお達しも受けたしな。
エネミアで流石に派手に動きすぎたか。

でも三提督なんて始めてあったな。
今の管理局の礎を作り上げた伝説の三人か。
「これからもよろしく」なんて言われたけどどうすりゃいいんだか。
自分の執務室を出て廊下を歩いていると前からフェイトが歩いてきた。

「よぅフェイト。仕事は終わったのか？」
「うん。あとははやての所に行く準備だよ」
「そうか。あ、ちょっといいか？」

フェイトを連れて津名魅に向かう。
特に連れていく意味はないけど一人よりはいいかな、って思っただけ。
フェイトも嬉しそうについてくるし。フェイトが笑顔になるのはいい。
すぐ後ろをぴったりついてくるフェイト。なんだか落ち着かない。

「なんで後ろにいるんだ？隣でいいじゃないか」
「だって隣はっ・・・はやての場所だもん」

あぁ、なるほど。そういう事か。

「はやてが両方占拠できるわけないだろ。片方空いてるんだから構わんぞ」

ちょいちょいと隣に呼ぶ。それだけでフェイトの表情が一気に明るくなった。

俺の左側に立って一緒に歩く。それだけで本当に嬉しそうな顔をする。
少し歩けばすぐにドックに辿り着く。特別なドックであり、俺の執務室からすぐの場所にある。
津名魅のサイズ的に専用のドックが創設されたわけだが自腹で支払わされたのはいい思い出だ。

津名魅の中に入ればメインブリッジに向かう。
その途中でフェイトから質問が飛んできた。

「そういえば、なんではやてを選んだの？」
「今、その質問か」
「今じゃないと駄目な気がして。なのはもはやてもいないから」

自分ひとりだけのときじゃないと聞くのが難しいと踏んだか。
いや、恥ずかしい、か？

「そうだな。切欠はリィンフォースだ。前にあいつとユニゾンしたのを見られた」
「リィンフォースって・・・ツヴァイじゃなくて？」
「お前もその場にいただろうが・・・見てないのか。それならちゃんと説明するよ」

あの雪の日にリィンフォースが旅立った日の事。その後に俺と契約した事。
過去二回のユニゾンをしている事。それをはやてに見られて追求された事。
思いつく事は全て話したと思う。

「元々、な。俺ははやてを助けようとしてたんだよ。ほら。夜天の

書事件だと俺達敵同士だっただろ？」
「あ、そういえばそうだね」
「あのままだとはやては夜天の書に喰われてた。それを阻止するために俺は――――――」
と此処で話を止めた。うっかり真髄まで言う所だった。
フェイトはそれが不思議に思ったのか顔を覗いてくる。
言葉にはしないが視線で訴えかけている。
「いや、なんでもない。そのうちちゃんと話すから待っててくれ」
「うん。わかった。でもちゃんと話してよね？」
「あぁ、約束だ」
「ん」
そこで沈黙が落ちる。通路を歩く靴音だけが静かに響く。
ちら、とフェイトを見るとやはり気にしてるようで視線がおよいでる。
「こう言うことをフェイトに言うのは間違ってると思うけどな」
「ん、いいよ、大丈夫。なにかな・・・・？」
「はやてを選んだ以上こう言うことをいうのは駄目なんだろうケド、フェイトの事も大切に思ってるよ」
「・・・・・・・・ぅん」
「お前も俺の護る対象だ。いつでも頼れ」
落ち着かなかった雰囲気がすぐに晴れた。
でもこれだってちゃんとした俺の意思。伝えるべきだと思ったからこそだ。
「そんなわけで。これからも頼むよ。きっとフェイトに頼るときが

来る」
「うん。まかせて！頑張るから・・・・私頑張るから」
フェイトもずっとつかず離れずで傍にいてくれたんだよな。なのはもだけど・・・あいつとは同僚のイメージの方が強い。
「ミラの第二婦人になれるまで頑張るからっ！あ、なってからも頑張るからね！！」
なんか間違ってますよフェイトさん？
訂正しても脳内変換がかかってる状態のフェイトを正す事は今は無理とあきらめた。
また今度訂正させよう・・・・遅くならないうちに。
メインブリッジでの仕事を手伝ってもらいながら機動六課への出向準備をしながら今日が過ぎていく。

第八十六話　Ｎｅｘｔ　ｔｏ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　？

ギルＳｉｄｅ

マスターからの進言で今、仕事をしている。相方は贋作者（フェイカー）。
この男は気に入らないが、こと戦闘にのみについては我と同等の能力を持つというのは理解している。

いや、信用か。
我があの友以外にこのような感情を持つとは思わなんだが。
人真似で強くなるなどつまらぬ男だ。だがその奥底の芯は信用できる。
同じサーヴァント。英霊。ただしヤツは反英霊に近い。

それでもやつはあの忌々しい小僧の一つの到着点。
人の身で在りながら英雄の王を倒したという経歴の英霊。

「それでも我は貴様が嫌いだ！」
「いきなり何を言うのかと思えばなんだ、英雄王」

互いに我らは背を預けている。
何気に戦場の真っ只中、いや、その中心地。
マスターからの進言はこうだ。

『魔法を使って戦争をしてるからそれを止めて来い』

と言うもの。そんな事に我を遣わすとは。しかも贋作者と。
殲滅戦でいうならば確かにこの面子なら問題はないがな。

「喜ぶが良い。王の財宝の一部、貴様らにも見せてやろう」
「ソードバレル・フルオープンだ。死角無き剣林弾雨を抜けてくるがいい」

我らを囲んだ兵士達は我らが始めてこの地に降り立った時に無い方魔力を感じ取ったのだろう。
とはいえ抑えていたから管理局のシステム的にはC～Bランク程度。
それを全力と判断したのか襲い掛かってきた。両軍が。

「痴れ者よ。疾く己の罪業を味わいながら逝け」
「英雄王、あまりやりすぎるなよ。この中に将軍クラスがいたら後が大変だ」
「フン。その程度で死ぬ将軍など役立たずも当然ではないか！」
「まぁそれもそうだな」

１０年。１０年だ。こうしてサーヴァントがずっと現界して現世にいるというのはある意味異常。
だがそれを可能にしているのはマスターの魔力と、その内にある大聖杯。
楽しみもある分、こいつらと共にするというのはなんとも、な気がする。
まぁセイバーがいるだけでよしとしよう。

我以外は三騎士と呼ばれる程のサーヴァント。
ならば我を護る騎士としていればいい。セイバーは我の嫁だが。
確かマスターの知己に守護騎士を連れてるのがいたな。八神はやてとかいう。
ならば三騎士もまた王たる我を護る守護騎士というわけだ。
セイバー除く。

「何を考えてるか知りたくも無いが集中したらどうだ?」
「ハッ!何をいうか!こんな雑草相手に集中だと?慢心せずしてなにが王か!」

我らの空中には幾百幾千幾万幾億の宝具の群れ。
これを異形と感じ取れるものが居れば引き下がるだろうが、下がらぬ輩の方が多い。
まぁ構わぬがな。

「疾く散れ。塵芥共。その身、細胞の一片すら残さずに我が前から消え去るが良い」

打ち込む先は千の軍勢。
そういえば過去に軍勢を引き従えたのが居たな。名は忘れたが確かあ奴も王だった。
蟻の子を散らすように朽ちていく兵士。我が前に立つ以上は覚悟してから来い。

贋作者も贋作者で背後の軍を相手にしている。我ほどではないがまぁまぁの手際よ。

アーチャーＳｉｄｅ

最初は断った仕事だ。
戦争屋・・・いや、戦争を止める為に闘っていた私にとっては本業といっても良かった。
だが、既に答えを得た私には気乗りしなかった。

何よりもパートナーとして選ばれたのが・・・英雄王。
何の因果だこれは。

『フン。贋作者は贋作者らしく割れの後ろにてガタガタ震えているだけで構わんぞ。我が一人で片付けるからな』

等と言う。
慢心はいつまでたっても消えないものだ。
確かに今、サーヴァントの中では最強だろう。
だが、闘う方法や立地などを差し引いていけば勝てる要素もある。
自分のスタンスさえ維持できれば誰もが勝てる。誰でも勝者になる。
そのくらいの実力の差だ。セイバーもランサーも自分の場であれば勝利する事も出来る。

単純な攻撃力や防御力が高くても行使する方法次第。

自分勝手にやるか、と思ったらマスターもそれでいいとの判断。
何よりも殲滅戦としてらしいのでこのメンバーらしい。

「クッ。よくもまぁ選んでくれたものだ。確かに全方位殲滅となるとこの方法が一番いい」
「フン。良く吼える鼠だな。黙って屠らんか贋作者」
「お前こそな、英雄王」

言ってくれた物だ。こっちだってこの１０年黙っていたわけじゃない。
特別捜査官として様々な戦場を渡ってきたのだからな。
練成魔術はこの１０年で更なる進化と錬度を上げた。

更に様々な世界を渡ってロストロギアやらアームドデバイスを見てきた私にはその構造などを視て識ることも出来た。
練成する本数も増えた。マスターからの魔力供給も安定している。
だからこそのソードバレル。

「さぁ――――――終わらせようか。こっちも用があるのでな」

これより戦場を終息させる。

ランサーＳｉｄｅ

マスターの秘書的な。執務官補として今は仕事中だ。
制服もちっと窮屈だけどまぁ仕方ネェ。
青い色ってのはまぁ気に入ったが。

「とはいえ、こう言うのはアーチャーの仕事に近いよな」

秘書。といいつつも執事やらの仕事も多い。
まぁそれも実務の割合的には少ない方なので満足してるけどよ。
実際荒事の方が多い現状、体を動かせるのは助かる。

まぁ・・・宝具の開放が出来ないってのはフラストレーション溜まるが。
だけどまぁ適度に暴れられる場所を提供してくれるのは嬉しいもの

がある。
俺達サーヴァントは結局戦う宿命。そういう伝説やらが集まって出来た英雄だ。
大人しめの顔をしてるセイバーですら心に獅子がいる。

ギルガメッシュとアーチャーは今殲滅戦の仕事に行ってるしな。
セイバーは本局武装隊で戦闘訓練か。教導隊に入るとかあいつのカリスマ性やら実力なら頷けるけどよ。
俺はどうすりゃいいんだ？
とりあえず皆の分どうにかすりゃいいんだろ？

あんまり大暴れしたのももう随分と昔の事ったなぁ。

また暴れられる場所だといいんだけどネェ、次の仕事場。

セイバーＳｉｄｅ

武装隊第１９６支部隊。今は其処で教導の毎日です。
とはいえ基礎演習のみですが。
嘗てブリテンを率いていたときの延長と思えば意外と楽なものです。

アースラの武装隊を鍛えていた折、なのはからの推薦で教導隊に入ったはいいですが・・・。
此処１０年私に魔力ダメージを負わせたのはエースの三名のみというのはいただけない。

せめて私にダメージを負わせられるくらいには育ってほしいものですね。
教導隊の方針も加えてるのでかなりきついと思いますけど。

「準備運動ラスト一名は次の演習を倍にしますから頑張ってください」

いつもの鎧姿の私の言葉で武装隊の目に炎が灯る。倍と言うとかなりの練習量になるのです。
恐らくかなりのきつさです。
ですが武装隊で私の教習は有名で人気があるようです。

教習を受けた部隊は受ける前の１．３倍の実力を持って変えるという話を聞きましたし。
その話を真実にするために私は頑張りましょう。
次の出向先でも私はがんばって生きます。マスターの為に。

第八十七話　Ｎｅｘｔ　ｔｏ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　？

ディアーチェＳｉｄｅ

小烏改め烏が設立した機動六課の始動がついに明日になる。
我らにも出向届けが来ている。

「フン。つまらん」

武装隊の制服を着てマスターの部屋にいる。
武装隊制服と言えど我らの見た目がアレなので改造制服である。
そういえばランサーがおらぬが何処におるのやら。
ヤツも出向届けがきているはずだが。

「サーヴァントの放蕩癖等今に始まった事ではない、な」

ランサーの事は早々に考えるのを止めて現状に思考を移す。
これから先の事。アーチャーに聞いたマスターのこと。
どうやらサーヴァントはそのためにいたようだ。
我らもまたマスターの使い魔としてどういう身の振りをするかと問われた事がある。

シュテルは即答した。
レヴィは良く考えておらんが本能ではわかっている様子だ。
我は――――――どうする？

奴等の考えている事が成すべき事だとしたら――――――烏どもはどうする。

「・・・・・・杞憂か」

・・・そんな事我が考える事ではない。
マスターが考える事だろう。我らはついていくだけなのだしな。

それまでは力を付けておく事にしよう。
我らは闇に生まれ生きてきた。マスターは其処から引っ張り出した。
いや、正確にはヤツではなくC．C．か。
だが同位存在というなら同じか。

あぁ、任せるがいいさ。望むべく未来とやらにしてやるとも。
我がいるのだからそんな事は当然だがな？

レヴィＳｉｄｅ

今僕がいるのはアースラのドック。
もうじきお役ごめんになるっていうから見に来たんだ。

だってあのアースラには僕らの思い出も乗ってるしね。
僕らが生きてきた半分はあの艦と一緒だったんだし、やっぱ愛情って
ての？あるんだよね。
窓から見えるアースラの先端を見ながら思い出す。

此処に来た時のこととか。うん。面白かった。

「皆と遊べて楽しかったなぁ。また遊びたいなぁ」

そういえば。ゴソ、とポケットを探ると一枚の紙。
新設部隊への出向願い。夜天の主の名前があるけど、僕はカンジがよめない。
それに今の管理局で紙媒体でなんて珍しいなぁなんて思ってポケットに丸めておいたんだっけ。

「今度の部隊は楽しめる所かなぁ、バルニフィカス」

愛用のデバイスからの返答がない。まぁ無口だからなぁ、僕のデバイス。
それにわからなかったらいけばいいんじゃん。
そうだよ。楽しめなかったら楽しめるように変えちゃえばいいんだし。

「うん。楽しめるようにしちゃえばいいんだ。また皆で遊べるように、ね」

良い事思いついたぞ！
よし、これでまた明日から頑張れる！
はやく明日になーれ！

シュテルＳｉｄｅ

局の中にも自室があるのです。実は。王もレヴィも使いませんけどね。
自室を使うくらいなら家に帰った方が楽ですし。

「という事で今家にいます」

と、誰にではないですが言ってみました。
特にやる事もないんです。
マスターと一緒に居住している私達の家。英霊も（と言ってもランサーとギルガメッシュだけですが）一緒に住んでます。

「・・・明日から行くという部隊への準備をしておきますか」

何せ自分一人分をやればいいわけではないです。
王とレヴィの分まで私がやらねばならないという状況なので。
あの二人は私に任せっきりですから。

「向こうに寮があるとは聞いてますが何処まで入るやら・・・」

なんというか、荷物が多いです。
必要ないものまで持っていく必要が見当たりません。

レヴィのゲームやら王の本やら。
なんでこう・・・・多いんですか。
全く。不健全です。いらないものは処分していきましょう。
勿論私判断です。王にはそろそろ我慢を覚えてもらわねば。
レヴィは・・・・・もう諦めてますけどね。

まぁ私も鬼ではありません。私のオリジナルは鬼ですが。
適度に遊べるものを用意しましょう。

何にしましょうか。花札とトランプでいいですね。
携帯ゲーム機ですか。まぁ、一本だけ入れておきましょう。ＢＯＡ。
いいゲームです。

「あとは着替えと・・・」

大きな旅行カバンに小旅行に行くんじゃないかってくらいに詰め込みます。
量にしてカバン５個。完成です。

「さて・・・・・・」

まだ私の仕事は終わりません。まだやるべきことが残っているのです。

英霊達の荷物です。
帰ってこない英霊など知ったこっちゃありませんが仕方無いです。
適当に、本当に適当に荷物を整理してカバンに突っ込みました。
全く。私はお母さんではないというのに！

「・・・・・・荒ぶりました」

いけないいけない。落ち着きが私の信条。熱くなる必要はありません。まだ。
ランサーの荷物は着替えくらいでいいでしょう。
ギルガメッシュのはどうしたらいいんでしょうね。
とりあえず着替えと何か適当にぶっこんどきましょう。

さて、これで準備は終わりましたね。

あとは帰ってくるまで待っていましょう。
帰りを待つ間、ご飯を作っておきましょうか。
・・・・帰ってくるか判りませんが作っておかないと後が面倒です。
帰ってくればいいんですけどね。このまま待ってたら遅れそうです・
・・・。

第八十八話　新しき翼

ミラージュＳｉｄｅ
新しく新設されたロストロギアを専門に扱う機動六課前。庁舎の前に立つ。さやさやと吹く海風が頬を撫でる。

「此処が今度の出向先か」

私服に帽子。まずいたって普通の変装という所。その後ろには白髪の赤い服を着た大男。
海に面した場所に立つ隊舎は海鳴に良く似てる。

「全く・・・呼ばれて直ぐに行けばいいものを。時間をかけるからこうなるのだ」
「久々にあったと思えば皮肉かよ。しょうがないだろ仕事が終わらなかったんだ」

この男とは数ヶ月ぶりに顔を合わせる事になる。俺と同じように今日から六課に出向となる。
同じ日に出向というのにこの言い方は何なんだ。

「グレイル隊とレグルス隊は今日の午後には合流する予定だ」
「ファントム隊は夜間に到着、か。俺達が一番速いのか」
「速いと言っても既に部隊運用から一週間が過ぎてるがな」

ねちっこい赤い男の報告を聞きながら広い道路を進む。男も俺の直ぐ後ろについてくる。

「しかし・・・あの娘も大きくなったものだ。いまや二等陸佐。更

に部隊長だぞ」
「あぁ。感慨深いな。まさか昔言ってた事をこんなに早く本当に成し遂げるとは思っても見なかった。しかも本当に呼ぶなんて」
雑談。そう、とりとめもない会話だ。
まるで日常会話の様に喋りながら庁舎の前まで来ると丁度青い髪の・・・恐らく隊員だろう。
丁度庁舎から出てくるところだったのを声を掛ける。
「あぁ、もし。今の時間は八神部隊長はいるかな？」
「え？部隊長ですか？いると思いますけど・・・面会ですか？」
「まぁそういう所かな。ちなみにアポはあるけどないということで話を進めよう。とりつないでくれないか？」
「アポがないんじゃもう一回出直したほうがいいんじゃないですか？多分門前払いですよ？」
いつでも来いというからアポはあると思うんだ。どう思う？
「大丈夫だ、問題ない」
「・・・もう風化しましたね」
・・・もう古いだと！？俺が前線に出ている間に情勢は何処まで変化したのだ！
「ともあれ・・・通してはくれないかな」
「アポはあるんですか？」
「どっちだかわからないので通してく「無茶ですよー。なのはさんに怒られちゃいますって」・・・なのは、さん？」
「はい！高町なのは教導官です。でもなのはさんって呼んでます！」

なのはさん、ねぇ。あぁ、ふむ。なるほど。あいつもあいつで部下がいるんだもんな。
でもなのはさんか・・・へぇ。慕われてるもんだな。

「なのはに怒られるのか？」
「はい。怖いんですよーなのはさん。って、呼び捨てですか。怖いですよ！？」
「問題ない。なのはが怖くて執務官やってられっか」
「え。執務官の人だったんですか！失礼しました！」

蒼い髪の子はすぐに敬礼を向ける。

「あぁ、そういうのはなし。此処じゃあんまり階級とか気にしないやつが多いだろ？部隊長が部隊長だからな」
「随分と知ってるような感じですね・・・」
「まぁ、ちょっとな」

ここで知られるのもつまらないけどな。さてどうするか。もうちょっとからかっておくか？
しかしこの子は前に見た事があるような気がするんだよな。

「なぁ。この子ひょっとして・・・」
「あぁ。そうだろうな。姉に良く似ているからそうだろう」

俺と後ろの男が何か納得したように会話する。するとこの青い髪の子はキョトン、とした顔で俺たちを見始めた。

「遅くなりましたけど、身分証明とか・・・あ、でも私に其処までの権限とかないんだった！どうしよう！」
「じゃぁ、悪いんだが受付まで案内してくれるか？それで充分だ」

「あ、ハイ！了解しました！」

元気がいい。うん、こんな子がいるなら毎日が楽しそうだ。
受付まで案内されると、実は急いでいたと告げられて庁舎の中へ去っていった。また逢えそうな気がする。

「八神部隊長との面会という事で宜しいですか？」
「あぁ。これ、身分証明ね。あ、内密にお願いするよ」

俺は自分の身分証明書を定時すると受付が驚いた顔をした所で静かに、とジェスチャーした。
すると受付嬢はコクコクと頷いてから映像通信をつなげる。俺が来たことを知らせるとあわただしい音と声が通信から聞こえた。

「では確認が取れましたのでどうぞです。後でサインください！」
「あぁありがとう。サインはあとで」

受付から離れて案内データを貰ってから部隊長室へと向かう。

「そういえばさっきから黙ってるな」
「何、騒ぐのは後でも構わないと思ってな。それに今のうちに静かな時間を満喫しておきたいのだ」
「あぁー・・・騒がしくなるな」

ゆっくりと向かいながら庁舎を見て。数分かけて部隊長室の扉前へ。
ノックしないでいきなり開ける。

「はやて。入るぞ――――――」

はやてＳｉｄｅ

機動六課。私が立ち上げた、ずっと前から考えてた事を実行できるかもしれへん部隊。
出来る限り最高のメンバーを集めたつもりや。これでダメならもう知らんわ！
で、今いるメンバー以上に力を篭めて引き抜いた人材や。そろそろ時期的に来るはずなんやけど。
とか考えとったら受付から来客って伝達が来た。

「なんやー。いま忙しいっちゅーねん。後にせぃ後に」
「はやてちゃんは今お暇なので大丈夫です！」
「リィン！？私を売ったんか？！」

リィンが来客を通すように伝えとる。あれ？私部隊長やよね？
むぅ、でも来客なんてこんな今になって誰やろうか。しかも誰だか聞く前に通信きれとるし。
リダイヤったろうか？いやえぇわ。顔見たらわかるやろ。

「リィン。一応防護結界はっといてな。陸のオッサン絡みかもしれへんし」
「了解ですともはやてちゃん！」

ビシッ！と敬礼をして魔法構築に入る。流石は私の子やね。

「はやてちゃん・・・・恐るべしです！」
「どしたん、リィン」
「なんと・・・・５重結界に成功したです！これで誰もはいっては

来れません！今、ここには私とはやてちゃんだけです！ウヘヘ」

ムダにガチガチに硬めよったな。つか、それやと私らも出られへんのやないか？

「ガチンッ！」

いきなり扉が開かれる。しかし扉には5重防護結界が張られているので通常入ってこれるわけがない。

のだが――――――――――――――――――

ミラージュSide

扉を開けようとしたら結界が張られていたので素手で壊して入りました。まる。

結界と一緒に扉まで壊れたけど気にしない。「いや気にして！」むぅ。細かい狸だな。あとで直すよ

「この結界の張り方はツヴァイだな。まだ甘い。隙がありすぎる。もう少し練り込め」

大体誰が張ったかなんてのは癖が出る。そしてこれはツヴァイの悪い癖だ。

入ってきた俺をまず出迎えたのは吃驚した顔のはやてと嬉しそうな顔のリィンフォースツヴァイ。

ふわふわと飛んできて俺の顔の周りを飛んでる。

「ミラくん!?つか来客ってミラくんやったんか」
「あぁ。名は伏せるように言ったからな。だからだろう」
「最初から言ってくれればこっちから案内寄越したんに」
「部隊設立からまだ間もないんだ。其処まで人材を割くな」
「せやけど・・・あ～～～わかったわ。じゃぁそういうことでええぇんやな」
「実際アーチャーと二人でこれたしな。充分だ」

俺の後ろにいるアーチャーは肩をすくめるのみ。

「ともあれだ。今から機動六課に出向する。よろしくな」
「はい。これからよろしゅうおねがいします。アーチャーさんも。お久しぶりです」
「あぁ。アーチャー特別捜査官、現時刻を以って機動六課に出向した。以後一年間宜しく頼む」
「・・・それはまともにしなかった俺へのあてつけか?」
「まさか。そんな事はない。私はいつもマスターのためにと動いているだけに過ぎない。今だってマスターの言葉足らずを私が代弁したに過ぎないのだからなハッハッハ」

アーチャー。後で泣かす。

「・・・ミラージュ＝ヴィジョン本局執務官。現時刻を以って機動六課に出向だ」

形式になりかけている敬礼をする。でも私服なんであんまり場の雰囲気にそぐわない。
アーチャーも同時だ。それに対してはやても敬礼で返してきた。

「機動六課部隊長の八神はやてです。今後とも宜しゅうお願いしま

す。と、これで堅苦しいのは終わりや。楽にしたって」
「ん。まぁ適当に気を抜くよ」
「あと、ミラくんには分隊を一つ任せようかと。隊員は三人まで好きに選んでえぇよ」

楽な体勢になりつつ話を聞く。ってちょっとまて。分隊だと?

「俺に分隊を任せるのか」
「あかん?」
「いやいいけど」
「えぇんかい」

と、ここに通過儀礼は終了した。はやての砕けた行動も今の俺たちには心地良い。

「はやて。なのはたちは元気か?」
「うん。皆元気や。あとで呼ぼか?」
「いや必要ない。こっちから向かおう。確かフォワードの鍛錬中だろう?早朝訓練か。飽きずによくやるもんだ」
「なら私は此処に残るとしよう。他の面子が来る時用に」
「あぁ。悪いなアーチャー」
「何。マスターの不始末は私の仕事だ。気にする事もない。さぁ、行くがいい」
「いきづれぇよ!」
「・・・仲えぇなぁ」
「「どこが!!」」

同時にはやてに振り向いたアーチャーと声が揃ってしまった。仲がいいのかどうかは全く以って判らない。俺はエミヤシロウではないのだから。

気付いたら殆どの仕事で一緒になる。その度にこのサーヴァント様は己の正義に沿って動くもんだから・・・もう！

「ファントム隊、グレイル隊、レグルス隊。それと非戦闘員の一名は全員今日中に出向するはずだ。宜しく頼む」
「ん。了解や・・・アインにもよろしゅうな」
「あぁ。非戦闘員は目に見えない場所で全力待機だからどうなんだ？ってかんじだけどな」

壊した扉をあとで直すと約束してから庁舎の中を移動。

「スキマを使えば楽だろうけどなぁ」

あんまり多用しないと自分で決めた以上は余程の事が無い限り使わない。
自分の足で訓練施設まで向かう事に。最近歩くのがきつい。面倒だ。

フォワードのやってる訓練施設は海に突き出した特殊なフィールドの中で行われている。
その入り口とも言える場所にシャリオ＝フィニーノは立っていた。
コンソールを打ち込みながら。

「シャリオ」
「え、あ！ミラージュ執務官じゃないですか！」

シャリオ＝フィニーノ執務官補。フェイトの副官だ。

声をかけ向こうが気付けば笑顔を向けてきてくれる。俺は手をヒラリと振って挨拶に代える。

「どうだ？ヒヨコの調子は」

「えぇいい感じですよ。今はなのはさんに扱かれてますね」

コンソールのボタンを押すと空中にモニタが映し出される。

画面は一つだが、丁度真ん中に斜めに寸断するように違う風景を映しだした。

其処には新人フォワード四人の姿と、その空中になのはの姿が映し出される。

「なのはの教導が間違える事は早々無いと思うが・・・ちっと詰めすぎじゃないか？」

まだ六課が出来て一週間。それからすぐとしてもちょっとやりすぎ感が俺にも見えた。

明らかなオーバーワーク。なんだあいつ。焦ってんのか？

「ミラージュ執務官から見たらそう見えますか？」

「そう見えるから言ったんだよ」

仕方無い。少し手を出すか。

「シャリオ。俺のデータも取っておいてくれ。どうせあのヒヨコのデータも取ってるんだろ？」

「了解でっす」

さて、それじゃ行くか。

なのはＳｉｄｅ

フォワードメンバーの特訓を始めてから一週間。
なんとか最低限の基礎はできてきたかな。
あとはもうちょっと詰められたらいいんだけど。
と、あれ？シャーリーからプライベートチャンネル？

『はいはーい。どうしたの？』
『訓練中すいません。参加したいって言う人が・・・』
『あー、なのは？俺だ。俺も参加するぞー』
『ミラ君！？』

プライベートチャンネルに入り込まないでよ！？
ていうか、なんでいるの？

『俺も六課に出向なんだが』

少し遅刻したけどって少しどころじゃないよね。
でもうん。来てくれるっていうなら嬉しいかな。

『まぁ手を出すぞ。と言う事でなのは脱退』
『ちょ！？』
『今パッと見ただけでも穴がありすぎる。お前それ埋めてないだろ。
それに何焦ってんのお前』
『ぅ・・・』
『ちらっと姿見せてお前撃墜するフリするからそのままどっか隠れ

てろ』
『納得はいかないけど了解だよ。手加減してよね』
『それってどっちにだ？おまえか？卵か？』
『・・・・わたしに？』
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺傷設定で行くわ』

ひどい！ひどいよミラ君！
訂正も出来ずにプライベートチャンネルを切られてからフォワード陣に向き直る。
ミラ君が入ってくるなら考えてる事の少しでもやっておかないと。

ミラージュＳｉｄｅ

さて。なのはの許可も取ったし乱入するか。

「お気をつけて、って言うのもへんですかね」
「いや、嬉しいもんだよ。じゃ、いってくるわ」

バリアジャケットに身を包む。いつもの黒い格好。マントに仮面。
シャーリーに見送られマントを翻して訓練場に降り立つ。
気配を消しながら訓練してるフィールドに近づいていくと砂埃が舞い上がってすぐに見つけた。

縮地の応用の歩法を使って一気に近づく。
フォワード陣の真後ろに。

最初に気付いたのは一番後ろに居たピンクの髪の毛。近くに小竜が

いるってことは竜召喚士か何かかね。
彼女が振り向いたときには既に俺の左人差し指がなのはを指していた。

「！！！？」

ピンクの声にならない声が漏れた。それに対して少年が注意力を散漫させてこっちを見た。
少し遠い所で空中に道路を作っていた少女・・・あぁ、あの子はさっきの子じゃないか。見た目と雰囲気からしてギンガの妹かな。
道路の少女がなのはをぶん殴ろうとしていた。

一番冷静にものを見ていたのはツンテールの少女か。
二丁拳銃型のデバイスか。珍しい。まるでティーダっぽいな。
一丁をなのはに向けたまま一丁を俺に向けなおす。

だがその一瞬の行動の中で俺は既にアクションを起こす。
人差し指の先から撃たれるのは魔力弾。ただし非殺傷設定。
だけど傍から見ればかなりの高密度に見えるだろう。わざわざそう見えるように造った。

超高速で真っ直ぐなのはに向かっていく魔弾が一気に直撃して弾けた。
その衝撃で近くに居た道路の少女は後退し、なのはは最初の約束通りに撃墜の流れ。
仮想ビルの陰に隠れるようになった。

それを見たフォワード陣が驚きの顔で俺を見る。
とは言え仮面で顔を隠してるから誰かは判らない。
・・・俺のバリアジャケットの画像情報が公開されていなければ・

・・だが。

「だ、だれですかっ！？」

「くっ！！」

なのはがいなくなった以上、ピンクの髪の毛を護るように少年が俺とピンクの髪の毛との間に割って入ってきた。

槍型のアームドデバイスか。視界の端に捕らえたギンガの妹（仮）はなのはから後退した場所から動かない。

正体がばれないように闘うのって面倒だな。選ぶ武器にも神経使う。

デバイスを使ってるようにみせないと後の追及が本当に面倒なんです。

そうだな・・・アレでいくか。

左手に剣を召喚する。神剣・神威。

俺の相棒。ずっと苦楽を共にした相方だ。ただし、オリジナルの鞘を作って仕舞ってあるのでわからないはず。

神威を後ろにして右手を差し出す。

「あのデバイス、で・・・こない！？」

少年よ、まだ甘い。まともにやりあう事しか頭に無いと苦労するぞ。

どうやら基本に忠実らしいがな。

ツイテールと道路少女はまだその場から動いてない。成る程、俺を値踏みしてる所か。

恐らく念話で話し合ってるんだろう。

すぐに少年の表情が変わる。どうやら念話はフォワード陣に流れたようだ。

だったらまずは穴を埋めていこう。

このまま知らずに育ったら致命的な穴だ。

「加速――――――倍加――――――」

まずは――――――少年に狙いをつける。
神威を正面にして水平に向ける。右手は誘うように招く。
挑発としては最低級。動きもぎこちない。だがそれでいい。
もしこれで突っ掛かってくるなら深くまで読みきれなかった事だ。

「っ！　　エリオ！」

案の定、少年・・・エリオと呼ばれた少年は槍を向けてくる。そのまま攻撃に転じられるのか。
槍術と剣術でまずはわからせるか。

「ふっ！」

呼気一閃。吐いた息と同時に槍を突き出してくる。
中々いい。基本に忠実。
だが、それだけ。基本過ぎて応用がまだ出来てない。
そこはなのはもまだ教えられなかったかな。

向かってくる槍を神威で払って打ち落とす。
払われた槍はそのままの勢いで地面に打ち落とされた。

向きを変えようとした所で槍を踏み台にして神威を使ってエリオの上を取る。
そのまま神威を振ってなのはの撃墜された場所に吹き飛ばす。
少しばかり勢いが良すぎたのかビルを破壊した。
さて、次は誰にしようかな。

ティアナＳｉｄｅ

なのはさんとの早朝訓練の途中でトンだイレギュラーが発生しました。
謎の乱入者が私達の最後尾から出てきたんです。仮面にマント・・・・怪しすぎる。
気付いたときには既に左手から射撃魔弾を打ち出して――――――なのはさんに直撃。
って、なのはさん撃墜!?周りに散った衝撃も凄まじいんですけど!?

『スバルッ!なのはさんは!?』
『だめ!サーチできない!』

直撃したなのはさんと連絡が取れない・・・でも・・・・。
今の状況でやるべきなのはこの乱入者を捕まえる事。

『スバル!エリオ!キャロ!私達でこの乱入者、捕まえるわよ!』
『『『え!?』』』
『どっち道なのはさんがいない以上、私達でどうにかするしかないでしょう?』

私達で何処まで出来るかわからないけど・・・・何も出来ないままでいるほうがよっぽど嫌だわ。

だったらっ・・・やれる所までやるしかないでしょうよ！

『エリオ、前に出てキャロの援護。スバルは其処で待機。エリオが翻弄してるうちに一撃を』

『『了解！』』

『キャロはまだブーストいける？』

『2分くだされればなんとかしますです』

『じゃぁそれで。エリオ、なんとか2分もたせて！そうしたらキャロがブーストする』

『『了解！』』

取り敢えずの動きはこんなもの。あとはどう動くかだけど・・・。

エリオが牽制で一撃を繰り出す。だけどそれは乱入者の棒で簡単に弾かれた。

「！？」

予想だにしなかった。まさかそんなに力の差があるっていうの！？

私から見ても今のエリオの一撃は良かったと見える。

そんな一撃すら簡単に払われて・・・ぁ。

棒高跳びの要領で後ろに回りこまれてエリオに一撃。

わずかな魔力反応を感じ取れたけど、その代償でエリオがなのはさんが落ちたポイントに吹き飛ばされた。

「エリオ！」

体は前を向いたまま、視界の端に吹き飛んだ場所を抑える。

目の前の敵に集中しないとこっちがやられる。手を・・・なんとかしてでも考えないと。

ミラージュＳｉｄｅ

エリオとの攻防、と言ってもあれじゃワンサイドだな。
だがまぁあとの三人の欠点も見えた。あとで通告しよう。
このくらいでもういいか？でもあのギンガの妹（仮）が向かってきそうだな。

「ここまで、だな」

仮面によって声が変わっている。なので俺と断定できる要素がない。
と言ってもこの面子じゃ俺とばれても問題はない、はずだ。

『なのは、もういいぞ』
『了解。エリオくらいであとは大人しいね』
『男ならそのくらいはしてもらわんと』

念話を通じてなのはに連絡。取り敢えずの仕事は果たした。
あとはこいつらに欠点を伝えてそれを補う方法を鍛えるだけだ。

『ミラ君も大変だね、フォワード陣の育成にも手を出すなんて』
『何言ってんだ。教育方面はお前の仕事だろうが高町教導官』

なんて念話をしてるとなのはとエリオがやってきた。
エリオの傷は軽傷程度で済んでいたようで、なのはが治療したらし

い。
至って無事なのを見るとあとの三人が呆けてしまった。
「ま、なんだ。いわゆる襲撃時における訓練、てヤツだ」
仮面を外して一息つく。
「お疲れ様だね、ミラ君」
「全くだ。おいお前ら。あとでみっちり勉強会だからな」
神威を仕舞って颯爽と立つ。
そしてまだまだ甘いヒヨコ・・・いや、タマゴの育成が始まる。
「俺は厳しいぞ、タマゴども」

第八十八話　新しき翼（後書き）

今日で投稿一年が経過しました。

この日に併せて更新を止めておりました。

ですが手首はまだゴキゴキ鳴り続けてますけど。

一年経ってまだ続けられている事を皆様へ感謝を籠めて。

まだまだがんばります。

第八十九話　ヒヨコじゃなくてタマゴ

ミラージュＳｉｄｅ

さて。まずは全員を集める。早朝訓練を切り上げてからシャーリーのいる場所まで移動する。
その間にバリアジャケットを解除して私服の状態に戻った。

「もう、ミラ君酷いよ。行き成り通信で参加させろって」
「突発的な襲撃に対する対処が見たかった。それだけだ」
「言い方はまともだけど実際酷い理由だよねそれって！」

なのはがいきり立ってくるけど俺は気にしないのゼ！

「まぁとりあえずタマゴのレベルじゃあのくらいがベストか」

ちら、と視線をフォワード陣に向ける。全く理解してないような顔の４人の視線が俺に向いてくる。
その視線は全てを物語る。「こいつ一体誰だ」ってな。

「まったく・・・まだ教えないといけないこともたくさんあるのに・・・」
「ブツブツいうな。その分密度濃くすればいいだろうが。俺も手を出すことになってるんだからな」
「順番ってものがあるんだよ、一応。まだまだ教え込まないといけない事があるんだから」
「其処を何とかするのがお前の仕事だろうが高町教導官」

まぁでも手を出すってもまだ先のことだけど。

なのはに対して普通に接してるのを見てフォワード陣が面食らってる。
じゃぁそろそろ説明に入るか。

「よし。じゃぁえーっと。栄えある機動六課のフォワード陣に任命された若人達よ。君らの疑問に応えよう」

話を振られたフォワード陣は一斉に並んで敬礼した。

「ん？そんなに硬くならんでもいいぞ？」
「いえ、先程は失礼をいたしまひっ・・ひゃ、噛んだ」

ギンガの妹（仮）が敬礼して喋りだす。

「あぁ、あの時の。こっちとしては案内してもらったからな。それでいいんじゃないか？」

あっけらとものをいう。まぁ、こっちとしてはわかっててやってた部分もあったしな。
それを畏まれても困ったもんだ。

「自己紹介したほうがいいかな？」
「しないとだめだとおもうよ？」
「サーセン」

後ろのなのはから痛いツッコミくらいました。

「とある本局局員だ。まぁ、適当に呼んでくれ」
「うん。ちゃんとやろうね」

レイジングハートの先端が俺の後ろ首に宛がわれた。同時にカートリッジが4発きこえる。
ディバインバスターゼロでも打つ気かこいつ。怖いからやめろ。

「えっと、俺が誰かわかる人いるか？」
「執務官というのはわかりました」
「正解（エサクタ）。それはさっき俺から漏れた情報だな。あとは？」
「ミラ、というのが名前に入っていると思われます」
「それも正解（エサクタ）。他にわかることはないか？」

其処までいうとフォワード陣は黙ってしまった。
もうちょっと出てほしかたんだがなぁ。まぁ仕方無いか。

「お前達が今後前線に出た場合、相手は未確認だ。ファーストブレイクの場合、お前達が情報を見つけ出して周囲に報告しなければならない。
　此れは全員に言える事だが初見から相手の情報を盗み出す癖を身に着けろ」
「「「「ハイッ！」」」」

お？素直に返事したな。その素直さは評価が高いぞ。

「その素直さに評して名乗ろうか。俺はミラージュ＝ヴィジョン。本来なら一週間前に出向してた筈だ」
「「「「えええええええええええええええええええ！？」」」」

俺が名乗るのと同時に驚きの声があがった。
俺もなのはもシャーリーも咄嗟に耳を塞いで難を逃れた。
それでもまだ耳の置くがキーンとする。どんだけ高音波発したんだ

よ。

「み、ミラージュ＝ヴィジョンってあのっ・・・・・幻影の!?」
「最年少執務官にして最年少提督に上り詰めて最年少で少将になったあの!?」
「そ。そのミラージュ＝ヴィジョンだ。名前長かったら気軽にミラージュ＝ヴィジョン様って呼んでくれていいぞ♪」
「余計長くなってるよミラ君」
「なのは、ちょっと黙れ」

驚いたままのフォワード陣をなんとか宥めた後、座学の開始。
とはいえさっきの戦闘の駄目出しだけどな。

「よし、さっきの戦闘についてだがな」

飄々としていた表情から真面目な顔になるとフォワード陣もまじめに話を聞く体勢になった。

「まずはエリオって言ったか。槍のデバイス持ち」
「はい！エリオ＝モンディアル三等陸士です！」
「槍については基本に忠実だな。だが忠実すぎる。だから簡単に弾かれてあの様だ」
「・・・はい」
「だが、筋はいい。その年齢や体つきで基本に忠実にやれるのは将来楽しみだな。今度槍についていい先生をつけてやる。
それと魔力運用についてもな。仲間を庇って前に立つのは勇気がなければ出来ない。ただし、勇気と無謀は違うことを忘れるな」
「・・・・はいっ！！」

鞭と飴。評価を落としておいてきちんとフォローする。

一旦落ち込んだ顔がすぐに晴れた。

「次。ピンクちゃん」

「キャロ＝ル＝ルシエ三等陸士であります！」

「キャロな。状況が把握できないのはまだ経験が浅いからだな？まずは其処から考えていくか。

魔力運用の効率化。それと召喚に対する心構えの変化だ。やっぱりいい先生を紹介しよう」

「はい・・・あれ？でもなんで私が召喚士って」

「そこの竜はキャロの友達だろ。それに魔力の癖と魔力回路の絆（パス）が見えたからな」

「すごい・・・そこまで・・・・がんばります！」

やっぱりしょぼんとした顔から精一杯頑張る！って顔になった。

よし。次だ。

「次。ギンガの妹もどき」

「ひどっ！？スバル＝ナカジマ二等陸士です！」

「最初、飛び出さなかったのはいい判断だった。あそこで出てきたらエリオとぶつかっていただろう。

とはいえあの道は諸刃だな。自分の向かう方向を敵にも教えてるようなもんだ。要改良ってとこかな」

「ぅ・・・その通りです」

「あとはストライクアーツだったか。それについても教えてやれそうだな」

あの道は便利な分、デメリットが強い。それを直せば上を目指せる。

あとは直接攻撃系統を伸ばせられれば言う事ない。

「よし。最後。ティアナ＝ランスター」

「はい！・・・・って、私まだ名乗ってませんけど」
「ティーダ＝ランスターの妹。兄の傍にいたいという理由で管理局入り、執務(兄の隣)官候補に(ぃ)なりたい。極度のブラk「もういいです！」・・・・ふむ」

ティアナが顔を真っ赤にして制しに来たのでやめた。

「なんで兄さんの事をしってるんですか」
「なんでって俺はあいつの上司だからな。聞いてないか？お前の兄貴の所属部隊はどこだ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！？」

あ、忘れてたな。今思い出したって顔だ。
まぁいいけどな。あとでティーダに話しておこう。くっくっく。

「で、ティアナはまだ戦略と戦術を軽視してる。ので、これからはそっち方面を延ばすこと。
　射撃についてはまだ伸びそうだからそれも教えてやれそうだな。ここはなのはと同時にやっていくか」
「はい！」
「戦略云々、頭のほうは俺が直々に教えてやるよ。暇があったら俺のところに来るといい」
「ありがとうございます！」

よし。これで大体は終わりかな。後はなのはにまかせておくか。

「んじゃ、なのは。後は任せた」
「うん。了解だよ・・・ところで何でタマゴって言ってたの？」
「ヒヨコにもまだ満たないだろ。だからタマゴ」

タマゴの説明にフォワード陣がむすっとした顔になったが、ついさっきの戦闘を思い出してすぐにしゅんとなる。
百面相四人。これが第一印象だ。
さて、これでココでの仕事も終わったな。次は何処に行くか。
そういえばまだ朝なんだよな。飯食いにいくか。
食堂が確かあったはずだ。ここから隊舎まで歩いて移動するのか。
あぁ面倒だ。
スキマ使えばすぐなのになぁ。まぁ仕方無いか。

徒歩でとぼとぼ帰る。隊舎についてからすぐに食堂が何処にあるかわかった。
俺を誘う芳しい香りが漂っている。
香りのする方へと行くと食堂が鎮座していた。

「さてと。ついたはいいが何を食べるかな」

キョロ、と周囲を見渡す。するとすでにはやてが席に着いているのが見えた。
ツヴァイも一緒か。まずは席の捕獲だ。はやての所へ。

「はやて」
「お、ミラくん来たんか。どうやった？」
「まだ駄目だな。ヒヨコどころかまだタマゴだ」
「ミラおとーさんからみたら誰でもそうなってしまいますですよー」

辛辣でも思った事を率直に。
ていうか、ツヴァイ今なんつった。

「ツヴァイ。今なんつった」

「なにがですかー？」
「今、俺を呼んだときの、だ」
「あー。ミラおとーさんですか」
「そ　れ　だ」
「おとーさんじゃないんですか？」
「・・・・・・まぁ別にいいが」

何故だ。何故折れた。
だが、あの無垢な瞳で見られてみろっ・・・・・。
どうにもできまい。いや、出来ない。
なので呼び方についてはそれでいいということにした。
どうやらはやての恋人な以上、そういう見方らしい。
創ったはやてが母親みたいだから、という・・・うん。判ってたよ。

「ミラくん、食事ならここ使えばえぇよ」

深慮に入った俺をはやてが隣の席を勧めてくる。今から違う席を探すのも面倒だしということで甘える事に。
席を確保した後、食券を買ってＡセットを注文する・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・アーチャー？」
「なんだマスター。食事か？」
「何故其処にいる」
「簡単な事だ。私が作ったら褒められた。つまりは私がやるべき仕事を見つけたということだ？」

食堂のおばちゃんらは裏で楽してる。それでいいのか？
まぁ、いいんだろう。深くは追求しないで置く。特別捜査官は食堂のおっさんにかわりました。

「じゃぁアーチャーの定位置決定な」
「よかろう。見せてやろう・・・・別に全て料理してしまっても構わんのだろう？」

其処でそのフラグ立てるのか。
でもそんなのいいからさっさとＡセットくれよ。

「マスターはせっかちだな」

ささっとＡセットを作ってもらい、はやての席に戻る。

「アーチャーさんな、ココの食事を見てやらせてくれいうてきたんよ。なんで、早速入ってもろた」
「にしも随分と手馴れてたな。というかもう本職だろう、あいつ」

俺の秘書にもならなかったのにな。ならなかったのにな！
はやての隣に座るとフォワード陣となのは、シャーリーが戻ってきた。
アレからすぐに切り上げてきたんだろう。

こっちに気付くと全員こっちに集まってきた。

「なのはちゃんお疲れさんやな」
「はやてちゃんもお疲れ様だよ、早朝から」

全員が周りに座る。円卓になってるから別段邪魔になることはないが・・・・。

「スバルとエリオ、その量はどうかと思うんだ」

ちなみに俺はあんまり食べない。一日2食で量も少なめだ。
だが今目の前にあるのは・・・・・・。
マウンテン。ドコゾの喫茶店の盛り付け以上のパスタがおいてある。

「え？これで一人分ですよ」
「あ、スバルさん僕にも少しください。ぶっちゃけ言うと半分くらい」
「うん、いいよー」

なんか違う。なんだこの空間。俺がさっき訓練場で感じてた雰囲気と違う。
そんなやり取りの中食事を終わらせる。
そそくさと食器を下げようと立ち上がる。

「あ、ミラくん。部屋割りなんやけどな」
「ん？あぁそうか。寮生活になるんだっけな。どこだ？」
「後で案内したるわー」
「ん。了解だ」

それだけ交わして食堂を後にする。仕事が終わったら部隊長室に行くか。
あとは俺のデスクワーク現場を探そう。仕事場を探してるとすぐに見つかった。意外と狭いな。
外から見ると広い感じだけど。あぁ、本局と比べてるのかな俺。

デスクに座って執務室から持ってきた仕事を片付ける。
ついでにフォワード陣の訓練のほうも考える。とはいえ、なのはの訓練の合間になるからなのはとも話し合わないといけない。
午前はまた付きっ切りで訓練だろうからあとでメールで連絡してお

こう。

普通に仕事を終わらせる。気がついたらもう昼か。どれだけ集中してたんだ。
良く見たら周りにヴィータがいた。

「ヴィータ、いたのか」
「お前が入ってきた時からずっといたよ。おまえ気付かなかったのか」

すまん・・・仕事に集中してた。

「まぁいいけどよ。それ、向こうでやってた仕事か？」
「あぁ。それももうすぐ終わるからな。途中途中でタマゴ達の訓練考えたりな」
「あぁ、あいつらのか。あたしはまだ手をださねーけどな。まぁがんばれ」
「なんだ冷たいな。お前と俺の仲なのに」
「バッ!?な、なにいってんだおめーはっ!!!」

ふふん。ヴィータをいじるのは此れくらいでいいだろう。この前のお返しだ。

「まぁ、見てくれるか？」
「ん？訓練データか。こんなのあたしじゃなくてなのはとかに見せたほうがいいんじゃねーのか？」
「中期くらいからお前も参加するんだろ？だったら意見も聞きたいんだよ」

「まぁそういう予定だけどな・・・・・どれどれ」

ヴィータに午前中仕事の傍らに作った訓練データを見せる。
その肩口後ろから覗く様にしてデータを見る。

「うーん。これなのはに見せたのか？」
「いや、まだだ。これから意見を聞くところだ」
「あたしは別に此れでもいいと思うけどな。でもまだアイツの事だからまだ早いとかいうだろ」
「だよな。まぁ片手間暇な時間にでもってことで話してみるよ」
「まぁあたしはいいとおもうぜ」

ヴィータさんからお言葉いただきました。
あとはなのはを納得させればいいだけか。

「ティアナの面だけやたらと詳しく書いてたけど」
「ん？そうだったか？」
「気のせいならべつにいいけどよ」
「・・・多分当たりだ。あいつの場合、恐らく目に見えない力だからな。きっとそれで焦れる」
「んー・・・まぁそこを抑えるのもあたし達の仕事だ。それにこれはお前がやるんだろ？」

ガタ、と椅子を鳴らして立ち上がる。
振り向いてみあげる視線が俺を見る。

「まぁ、あたしは応援しとくわ。お前の育て方ってのも気になってる。お前んとこの騎士がその良い例だしな？」

あぁ、なるほど？つまりはすずかやアリサみたいな教育を考えてる

わけか。
あいつらも短期間で思いっきり成長したわけだしな。

「期待に応えられるようにはしたいね」

肩を竦めて部屋を出て行く。ヴィータはもうちょっと仕事を詰めてから食事にするそうだ。
じゃぁまぁ、とりあえずは・・・食堂に行けば誰かいるだろ。
足先を食堂に向けて歩く。もう迷う事無く目的地にいける・・・・
自分の部屋以外。
だってまだ説明されてないんだぜ?そりゃわからない以上迷うさ。

「と、考えながらついたわけだが」

今度は端のほうに面々が揃ってる。今度はフェイトもいるな。

「よ」
「あ、ミラ君」

まずこっちをずっと見てたなのはが反応。まぁ席の向き的に当たり前か。

「ミラ、久しぶりだね。元気だった?」
「あぁ。見ての通りだよ。そっちも元気そうだなフェイト」

なのは、フェイト。そして朝のはやて。
そのやり取りを見てフォワード陣が疑問がっている。そこに切り込んできたのはティアナだ。

「八神部隊長やなのはさんフェイトさんとミラージュ隊長って仲良

いですね」
「幼馴染だからな。１０年一緒にいて、同じ職場にいればそりゃ仲良くもなるさ」

何も注文せずに席に座る。流石に人数が多いので隣のテーブルだ。
なんというか・・・朝あれだけ食っておいて昼もそんなに食うのかよ。って量が乗ってる。
アーチャーも興が乗って楽しんでる。

「ミラくんどこにいってたん？」
「ずっとデスクワークだったが？ヴィータと一緒にな」

俺は気付いてなかったけどな。

「ほほう・・・ヴィータと一緒かぁ」
「ずっと本局から持ってきた書類片付けただけだから何もねぇよ。寧ろひねり潰されるわ」

少し前の事を考えると何をされるかわからないからな。
だからといって誰も気付かないでおいてくれると助かる。的な視線を送る。

「ところでなんでミラは私服のままなの？」
「・・・・・・・・・・おぉ」

気付かなかった。後で着替えよう。っていうか俺の制服どこにあるんだ。
寮、と言うか部屋においてあるらしい。それまでは持ってきた執務官服でいる事を許諾してもらった。後で着替えよう。

「ところでなのは、訓練の合間に俺の考えたプランを練りこみたいんだが」
「だめだよ。まだ基礎が途中だし」
「俺からしてみればオーバーワークに見えるがな」
「・・・・ミラ君は何が言いたいの」
「そうだな・・・・代表一人立ててどっちが育てられるか競ってみるか?そうすりゃ俺の訓練とお前の教導がどう違うのかわかるだろ」
「ふ、ふふん。受けてたつの!」

計画通り!

第九十話　戦略と戦術

ミラージュＳｉｄｅ

執務官服に着替えた俺は今、六課の廊下を歩いてる・・・。
すぐ後ろにはティアナがついてきている。

「あ、あのっ・・・」
「ん？どうした？」
「いいんですか？こんな事になっちゃって・・・」
「あぁいいんだよ。たまにはなのはにきついお灸を据えないといけないしな」

ティアナはまだ理解していない顔で相打ちを打った。

「これから一週間、お前をヒヨコに変えてやる」
「ヒヨコ、ですか」
「俺からしてみれば一週間でタマゴからヒヨコになるんだから充分だと思うがね」

此れに対してもまだむすっとした顔だ。本当にコロコロ変わるな。
第一、一週間でってなるとアリサたち以上に厳しい事になるぞ。

「一緒に訓練できなくて寂しいか？」
「あ、いえ！ミラージュ隊長の訓練を直々に受けれるのはそんなにいらっしゃらないと聞いてますから。光栄です」
「それが真実ならいいけどな。嬉しい事を言ってくれたのは胸に響くもんだな」

六課隊舎内の娯楽室。その前で足を止める。すると後ろのティアナも足を止めた。

「よし、ついた。ここが三日間お前のトレーニングルームだ」
「ここって・・・娯楽室ですよ」
「そうだよ（´・ω・、）」
「なんですかその顔」
「駄目か？（´・ω・、）」
「駄目ですよ。可愛くないです」
「お前、結構口きついね」

お兄さんはちょっと凹んじゃったよ。

「まぁ中に入ろうか。それから理由を話そう」
「はい」

娯楽室に入る俺とティアナ。二人っきりの訓練が始まる。

が、その前にどうしてこうなったかの説明をしておこう。

一時間前。食堂で。

「私の教導が駄目っていうの？」
「そうじゃない。いつまでも反芻する必要がないってだけだ」
「今は基本を体にしみ込ませないと後で怪我しちゃうかもしれないんだよ」
「それはわかる。だけどそれはこいつらの注意次第の話だ。第一その先を示したか？
ただこれをやってねってだけじゃついてくるかバカ。ちゃんと進む先を見せてやれってんだ」
「私そうしてるよねぇ！？」

なのはがフォワード陣に向き直る。が、自分の訓練がどういうもので何処を目指してるのか判らないフォワード陣には答えられなかった。
ただ視線をはずされるだけという。

「酷い！？」
「それを判らせるためにもお前と俺のやりかたと照らし合わせる必要があるんだよ。具体的には選抜した代表を決めてやらせる」
「つまり？」
「なのはが選んだ誰かと俺の選んだ誰かを戦わせる」
「フフン！受けてたつの！」

どどんっ！とか効果音が聞こえたかもしれないようなくらいに胸を張るなのは。

しかし簡単に引っかかったな。いいけど。

「じゃぁ、ミラ君は誰を選ぶのかな？先に選ばせてあげるの！」
「ほう、いいのか？後になって残念がるなよ？」
「構わないよ。私のほうがただしいんだから！」
「じゃぁ、ティアナ。悪いが一週間俺と訓練だ」
「え！？私ですか！？」

行き成り選ばれたティアナが驚いた顔した。うん。その顔も百面相だな。

「じゃぁ、私はスバルでいくの！」
「わ、わたしですか！？」
「つまり、スバルとティアナで闘えと言う事か」
「スバルは私についてくるよね！よね！」
「うっ・・・その笑顔は最高にずるいですなのはさんっ・・・・・・一生ついていきます！」

なのはい抱きつくスバル。こうしてスバルは陥落された。

「まぁ、あっちはあっちで。ティアナ、俺についてきてくれないか。少なくとも、お前の今持ってるものの答えは出してやれるぞ」
「っ・・・・・・わかりました」

ふむ。こっちもこれで完了だな。

「じゃぁ、ミラ君。一週間後だね。お互い、スバルとティアナが何処まで出来るようになるか、見せてもらうの」
「まぁ・・・楽しみにしてるといいさ」

なんはに喧嘩を売ったような感じになったな。あとで謝っておくか。
フェイトが凄く心配そうな顔で見てるし。

『すまん、フェイト。なのはのほうのフォローを頼む。なんだか喧嘩腰になっちまったから俺から言いにくい』
『あ、うん。了解だよ。でもちゃんと終わったらカバーするんだよ？』
『ハハ、わかってるよ』

フォローはこれでいい。フェイトがなんとかしてくれる。充分頼もしい同僚じゃないか。
いや、はやて非公式で非公認の第二婦人か。

「じゃぁ、いくぞティアナ」
「あ、はい！」

ティアナを連れて食堂を後にする。
エリオとキャロはもう何がなんだかわかってないような顔だった。
お前達にも後でちゃんと鍛えてやるからな。

――――――――そして時は戻る。

娯楽室には様々な遊具が置いてある。
主にボードゲームの類が。
地球、というか海鳴から持ってきたゲームが大半。ここら辺はこの部隊のトップ辺りが持ってきたと良く見える。

「あの・・・ココで何をすれば」
「ん。なに、ちょっとしたゲームをな」

一つだけボードゲームを準備しておいた。いつ、とかは言わないでおく。
まぁ、チェスなんだけどな。はやてに此れは入れておいてくれと前もって頼んでおいたんだ。

「俺やはやて、なのはたちの故郷のゲームだ。ルールは今教える」

駒の一つ一つの動きやルールを事細かに説明していく。
それをティアナは水を得たスポンジのように吸収していく。
やっぱりこっちの能力が高いな。

「さて。じゃぁやってみるか」
「はい。お願いします」

何の疑問もなくゲーム開始。
ティアナもこれが訓練なんだと理解はしてくれてるようだ。納得はいかないだろうケドな。

「何で此れが訓練なんだ、と。そういいたい顔だな」
「そんな事ありませんよ。あ、と・・・」
「マルチタスクをしろってわけじゃない。集中するのはいいことだけどな」
「すみません・・・」
「謝るなら俺に勝ってみろ」

手加減はしないけどな。ここで手加減をするわけにはいかないんだ。

本気でぶつかって壁にぶちあたらない限りわからないこともある。
それと、本気の相手だからこそ学び取れる事もある。

といいつつ速攻で一勝目。まぁ、まだ慣れてない分があるからな。
仕方無い、と思ってるんだろう。

だ　が　あ　ま　い。

次もその次も本気で負かす。あれ？俺鬼畜？
ちょっとティアナが涙目になってるんですけどー！
仕方無い。少しフォロー出すか。

「なぁ、ティアナ。なんでこのゲームをさせてるかわかるか？」
「・・・・いえ・・・・・・・・・・」
「このチェスというのはな。一種の戦いだ。この盤が戦場で駒が兵士だ」
「だから駒の名前がそういう感じなんですね」
「どう動けば敵が動いてどう動いていけばいいかを常に先を読んで動け。そうすれば勝てる」
「先を・・・・・」

ティアナが長考に入る。今ので少し掴んできたか？

「ちなみにミラージュ隊長は何手先まで見てるんですか？」
「そうだな・・・ざっと１００通りで５００手先までかな」
「其処までいくともう驚きもないですね」

うん、良く判るよ。それでも負けることがあるんだから世の中嫌になる。
ともあれ、このままティアナとチェスを続けよう。

「このチェスというゲームって奥が深いですね」
「ほう？」
「私に足りない戦術戦略がココにある、と。そういうことですよね」
なんだ。俺が全部言う前に気付いたか。
今朝俺が言った足りないものをちゃんと覚えてたみたいだ。
もうティアナの目が光ってきてる。このゲームのコツをつかんできたようだな。
「だったらいうべきことはないな。とりあえずどんな状況でも考えうる戦術戦略が出来るようになれればいいが」
最初の３日は此れオンリー。後の４日で実技を仕込む方向。
ティアナもソレに同意した。

スバルＳｉｄｅ

ミラージュ隊長がティアを連れていっちゃいました・・・。
なのはさんは憤慨してるようでフェイト隊長が落ち着かせてくれてます。
大丈夫かなぁ・・・・。

「スバル！午後の教練はスバル主体でやるの！エリオとキャロも若干ソレに併せるから覚悟するといいの！」

何気に飛んでもないこと口走ってますよなのはさーーん！！！

あたしに併せられるなんてエリオもキャロもとばっちりだ。あとで謝っておこう。

でもティア大丈夫かな。ミラージュ隊長の教練ってかなり凄いって噂だし。

うん、戻ってきたら教えてもらおう。

そんでもってそれまでに同じ場所にいれるようにあたしも頑張らないと！

ティアナＳｉｄｅ

うーん。このチェスって本当に奥が深いわ。

戦術や戦略の簡略的な模擬行動を詰め込んでる感じ。

これ、ずっとやってたらかなりの戦闘の幅が出来そう。

ミラージュ隊長達の出身世界って面白いっていうか、合理的なの多いわね。

「ティアナ。それとな。これから一週間は魔力負荷をかけて生活してもらうぞ」

「魔力負荷、ですか？」

聞き慣れない単語。でもすぐに理解できた。

「魔力自体に負荷を掛けて更なる成長を、ってな。お前の場合、年齢的にもそろそろ伸び代がやばいんで応急措置的だが」

「いえ、それでもお願いします」

「ちなみにこれ、なのはが9歳の頃にやってた方法だぞ。まぁ、これからやるのはその4倍程度だが」

「ちょっ!?」

「なんだ?9歳と同じに対応してほしいでちゅか?ティアナたんは」

「くっ・・・・やりますとも!」

なんだか上手く乗せられた気がする。思えば此れも戦略の一つだったのかな。

でも4倍って。やりすぎなんじゃ?って言ったら年齢的に伸び代きついって今言ってたっけ。

「更に言うとティーダも同じ事してるぞ。今もな。魔力運用や効率を考えると負荷が掛かってる方が使う魔力もコストダウンに繋がる」

「なるほど・・・・」

負荷を掛けて余計な魔力放出を避けるため。という事か。

「とりあえずその負荷の状態を飯と寝るとき以外は常にしておく事。あぁ、緊急事態では外していいぞ」

其処まで説明が終わるとミラージュ隊長が私の待機モードのデバイスにデータを送ってくれた。

「それと、なるべくスバルたちの前では外すな。負荷が掛かってる

状態がお前の全力と見せておけ」
「緊急事態で外せって言ったり大体の理解は出来ましたが一応理由を聞いていいですか？」

「――――――其の方が面白いだろ？」

あぁ。そういう性格の人なんだ。
大体把握してきた。この人がどういう人なのか。
これから一週間、いや一週間後か。
この隊長の評価がどう変わっていくんだろう。凄く楽しみで凄く不安だ。

ミラージュＳｉｄｅ

夜になって食堂に行ったらはやてがいた。いつ仕事してるんだ、この狸は。

「今、なんか考えたやろ」
「なんのことだかさっぱり？」

何と言う鋭い。理由を聞いたら「女の勘や」と。

食券を買ってアーチャーに渡す。
すぐに料理が出てきてはやての所へ。

「そういや、あんな？ミラくんの部屋なんやけど」
「あぁ、そうだ。どこになるんだ？」
「わたしと同じ部屋や」

・・・・・・は？
いやいや待て。それはちょっとまて。

「・・・・・今なんと？」
「せやからわたしと同じ部屋やっちゅーねん。部隊長命令でっす♪」

・・・・・ありえねぇ。ていうか、良く許されたな。

「・・・マジ？」
「うん、マジ」

本局の上層部は何を考えてるんだ。
というか、クロノもリンディもおかしいと思わなかったのか！！

「えぇやん。どうせ恋人同士やし」
「・・・・ほかにどうせ選択肢は無さそうだしな・・・まぁいい」

なのはとフェイトが一緒の部屋というのは聞いてる。
だが・・男女でか・・・・・。
カーテンで仕切るか。それしかないな。てか倫理どこ行った。

「これで私の魅力にメロメロやろ！」
「いや、ねぇから。常識的に考えて職場でとかありえん」

「じゃぁ職場じゃなかったらえぇんね？」

・・・ダメだ。口論で勝てる気がしない。

もう此れは仕方無い。

「はぁ・・・わかった。それについてはもう追求しない」

「んじゃ、そういうこって。部屋に六課の制服も用意しておくんでな」

まぁいつまでも私服のままじゃダメだしな。

「そういや、あいつらは？」

「あぁ、ファントム隊もグレイル隊もレグルス隊も無事到着や。皆寮に向かわせたわ」

そうか。無事に到着したんだな。挨拶も無かったけどまぁいい。別に寂しいわけじゃない。

部下が挨拶に来ないからって俺は別に大丈夫だ。大丈夫なんだ・・・

・―――-―●

「それと早速やけど任務与えといたんで♪」

「はえぇーよ！早速なにやってんの」

「（´・ω・）？」

ちょくちょくその顔やめろ。んでいきなり任務に就いたとか。

まぁあいつらの事だ。卒なくクリアするだろ。

聞けば湧いたガジェット潰しに行ったらしい。なら安全だ。寧ろガジェットの安全を心配するべきだ。

破壊に関しては恐らく管理局随一。

サーヴァントが出ればすぐに終わる。何このガジェットに対して酷

い仕打ち。
ちょっと可哀想になってきた。
じゃぁ戻ってきたらこれからのことでも話するか。

「あ、でもアーチャーさんとは挨拶しとったよ」
「あああああああああああああああちゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺はそのとき血の涙を流していたという。

第九十一話　ファーストアラートその後

ミラージュＳｉｄｅ

あれから一週間が経過した。
なのはと約束した一週間。何事もなく過ぎ去っていったわけだが。
普段は普通になのはの教導に加わりながら俺とのチェスを休憩中や仕事終わりに誘いに来るわけだ。
更に後半は直々にシューティングの訓練。

魔力負荷を掛けているからか、ティアナの魔力はめきめきと育っていった。
まだ育つものは育つんだな。
俺の言いつけ通りに負荷をかけたままでなのはの教導を受けてるとか何やってんのってたんだが。
意外とこなしてたな。その分疲労感も凄いけどな。

途中新しいデバイスをフォワード陣に分け与えられた。
マリーと俺。それと本局技術スタッフが本気で組んだデバイスだ。

と。長話もソコソコに。
今はスバルとティアナが向かい合ってる。

「じゃぁ、早速始めるか」
「そうだね。今日こそミラ君をぎゃふんといわせてやるの！」

なんか趣旨が変わってるぞなのは。
それにつきあわされるあの二人が可哀想だ。

「・・・始めるぞ」
【ヴィィーー！！ヴィィーーーー！！ヴィィーーーー！！】
俺の開始の言葉と同時に警報音が鳴る。
「何事だ」
「緊急事態だね。すぐにロングアーチから通信くるよ」
いつの間にか準備を終えているなのはがいる。いつのまに。
「皆、ちょおえぇか？」
通信ではやての声が届いた。
「とある列車に詰まれた荷物にロストロギアの反応があったんや。で、そのロストロギアなんやけど未確認物体に襲撃中。
それを無事に護ってこっちまで移送してほしいんよ」
はやてが説明をする。うん、ちゃんと部隊長してるな。
「で、フォワード陣には其処にこれから向かってもらいます。高町分隊長とテスタロッサ分隊長にも」
「俺は？」
「ミラージュ分隊長は隊舎で待機」
「そか（´・ω・`）」
ちっ。まぁ仕方無いか。フォワード陣の経験値をあげるにゃ丁度いい。
何よりもティアナが何処まで出来るか見れるチャンスだ。訓練よりも実地だな。

「了解。じゃぁフォワードは準備してね。ヘリポートで合流」
「「「「はいっ！！！」」」」
なのはが指示。まぁ此処じゃなのはの方がいいだろ。
んじゃ、俺はロングアーチで待機しておくか。
イルジオンリッターも他の任務で離れてるしな。俺しか居ないのが悔やまれるか。

「はやて、俺は何処で待機してればいい？隊舎っても広いぞ」
「んじゃ、ロングアーチに来る？ミラくんの意見も聞きたいしな」
「了解した。八神部隊長」

仕事はきっちり。使い分けてないと下に示しがつかない。
ロングアーチに行く前にヘリポートに寄ってみるか。

ヘリポートだ。あれから数分が経ってる。ヘリとヴァイスが待っていた。

「へへ、旦那。やっとこいつの出番ですぜ」
「お前の腕は信頼してるからな。特に何もいわないよ」
「ははっ、そりゃどうもッス」

ヴァイス。お前の方が年上だろう。階級無視していいのに。
機動六課の理念は「きっちりするべき所はきっちりと。あとは仲良く」だからな。

階級もたまに無視の時がある。一尉相手に陸士がさん付けとかな。
まぁいいんだけどさ。

なんて思ってるうちにぞろぞろと集まる。
なのはとフェイト。そんでもってフォワード達。

「あれ？ミラ君まだここにいたの？」
「あぁ。一言言って行こうと思ってな」

なのはが手痛い一言を向けてからフォワードに向かい歩く。

「ティアナは言う事はないな。言うならもう先に言ってあるし」
「はい。大丈夫です」

力強い言葉だね。まぁミスったら後でお仕置きだけども。

「さて、スバル」
「あ、はいっ！」

呼ばれると思ってなかったのか気が抜けてるぞ。後でお仕置きコースか？

「お前の突進力は確かに強い。後ろに居るヤツにゃ充分に頼れるだろうがあんまり先に突き進むな。自分の出来る範囲で構わないから焦らずに確り確実にな」
「あ・・・はいっ！！！」

うん。強い返事だ。素直に聞いてくれるのは嬉しいね。

「次。エリオ」

「はい！」
「お前の場合は周りを助けられる優しい心を常に持て。あと周囲を見渡すだけの観察眼も忘れるな」
「はい！了解です！」

さて。次はキャロか。

「キャロ」
「はい！」
「・・・力が怖いか？」

この言葉にキャロが体を一瞬だけ震わせる。
周囲の空気も張り詰めた。それだけの意味を持つ。それでも俺は続ける。

「今まで此処に来て訓練して逃げたいと思ったか？」
「い、いえっ、そんな事ないです！」
「此処で得た訓練は自分から逃げない勇気を培ってきたはずだ。それと自分だけじゃなくて周りの仲間もいる。助けて助けられて人は生きていく。
お前は一人じゃないさ。だから誰かに頼ってもいいんだぜ？」
「・・・はい」

少しトーンダウンした声が出た。失敗したか？もう少しフォローするか。

「フリードはずっとキャロについてきた友達で仲間だ。でも此処には他にも頼れる仲間と先輩がいる。
なんでも一人でやらなくてもいいんだ。その背負ったものを誰かと一緒に背負ってもいいんだ」

此処まで言うとキャロの瞳にうっすらと涙が浮かんできた。

「私は・・・頼ってもいいんでしょうか」

「当然だ。人は誰かと一緒じゃないと生きていけないんだから」

ちら、とスバル、ティアナ、エリオを見る。キャロもその視線に併せて動かす。

すると三人とも笑顔でキャロを見ていた。それを見てキャロもそれに気付いて素の笑顔を作る。

こんなもんか。

「フリード。キャロの気持ちに応えてくれるか？」

「キュクルー♪」

翼をはためかせて返事してくれた。いいパートナーを持ったな。

「じゃぁ俺からはこれくらいだ。あとは高町隊長に任せる」

「了解。ミラージュ隊長より承ります」

俺達は敬礼をして仕事を受け渡す。いくら仲違いしようが仕事は仕事。

そんでもって幼馴染。ぶつかってこそ判る事もある。口にしないとわからないこともある。

俺達の仲はこれでいい。あとでまた話せば分かり合える。

ヘリに６人が乗り込んで発進した。

ヘリポートに一人だけ残ったのでロングアーチへと向かった。

ロングアーチの居る司令室に入るとメンバーが揃っていた。
はやて、ツヴァイ、グリフィス他多数。
軽めの挨拶をしてから入り口のすぐ横の壁に寄り掛かって正面のメインモニタを見ている。
モニタにはなのはとフェイトが既に交戦状態に入っていた。

空戦型のガジェットドローンを相手に次々と潰していく。
あの二人なら別に問題は無い。何よりもなのはの無茶はフェイトと一緒だからこそ抑えられている。
昔の撃墜未遂もなくなったからなのはの魔力は元気だ。
常にヴィータとフェイトが気付いて休ませているしな。

「さて、なのはちゃんが鍛えたフォワード陣。何処までやってくれるか見ものやね」
「ティアナ以外はちゃんとみてやれなかったからな。なのはの教導の度合いを測らせてもらおうか」
「厳しい意見やね」
「そうか？ティアナはちゃんと指示したとおりにやってくれたからな。水を吸い込むように知識を得ていったのは見てて楽しいぞ」
「そういうもんなんか」

互いに視線を合わせずにモニタを見続けて会話。別に合わせなくてもわかるからな。
と、其処でティアナとスバルがヘリから降下した。バリアジャケットに着替えて列車に飛び乗る。

スバルはウィングロードで。ティアナはクロスミラージュからのウィンチで。
今度降下訓練させるか。

少し遅れてからエリオとキャロが降下した。
エリオはストラーダの性能を生かして滑空する。
キャロは・・・まだ迷ってたのか。力を発揮するのに戸惑った。
だが、エリオの言葉が引き金になって竜召喚を実現させた。

「キュクルー！！！」

一際フリードが嘶く。巨大化、というよりも本当の姿に戻ったフリードがキャロとエリオを乗せて列車に向かった。
あのフルパフォーマンスはギリギリだったな。キャロがもう少し遅かったら終わってたかもしれない。
これもあとで教えないといけないか。

列車に移ったフォワード陣はスターズとライトニングに別れて二方向で突き進む。
エリオはキャロのブーストを受けながら降り立った後方のガジェットを潰しに。全部終わったら前方への援護。
スバルとティアナは前方にあると推測されたロストロギアの確保に。
これをティアナが即断した。念話で常に交信しつつも状況を把握して駒を動かす。

「なんや。ティアナの指揮力凄く上がってへん？」
「当然だ。俺が仕込んでるんだからな。だがまだ手が甘い。俺ならもっとスマートにやるが今は其処まで望めないな」

まだ初心者に毛が生えた程度の指揮じゃ此処までだろ。でもいい手

だった。最良に近い形だろう。
あとはこれを実行できるかどうかだ。

エリオは最後方にいたガジェットの三型を変換資質を見せ付けて撃破。
途中百足のようなアームに苦戦したがなんとか勝利を得た。
スバルも途中危なっかしかったがアームを掻い潜ってディバインバスターで勝利。
ティアナもちゃんと援護してたしな。
あのデバイスを使っておいて無様な戦闘したら説教だけどな。

「はやて。この案件はロストロギアの回収だけでいいのか？」
「そやね。あとは列車会社の方に色々話するくらいやろ」
「そっちは俺がいく。あいつらの事後処理頼む」
「ん。了解や」
「あと、フォワード共には説教があるからと伝えといてくれ」
「・・・・・・・・・・・・了解や」

はやてさん。そんなに溜めんでも。
と、此処でロングアーチから離れるように司令室を出る。
まず行き先は今回の損害が出た列車会社か。

あー・・・俺の秘書さん何処いったんだ。

「ホサカーン。どこだー？」

廊下を歩きながら呼んでみる。そういえばうちの部隊全員別任務だったっけ。
グレイル隊とファントム隊。レグルス隊は六課に出向後に他の方面でのガジェット対応と対策、撃破を続けてる。

つまり俺の補佐であるランサーは今此処にいない。

「・・・・つまり俺一人で行くわけか。つい言ってしまったが面倒だ」

仕方無い。行くか・・・・・。

という事でフォワード陣達が戻ってくる前に俺は仕事に向かった。

ヴィータSide

フォワードどもの初出動から数日。

ガジェット潰しの任務から帰ってきたあたしはフォワードどもの訓練を見ることになった。

まぁ此処ははやてやなのはにもいわれてた事だしな。別にいーけどさ。

で、目の前にはくったくたに疲労したフォワードどもがへたり込んでいた。

ティアナは立ってんな。いきなりこのメニューについてくるたぁ中々根性あんじゃねぇか。

「おいおい、この程度でへたばってんじゃねぇぞ。まだ準備運動の途中じゃねぇか」

「そうはいいますがヴィータ副隊長・・・・これは尋常じゃないですわ・・・」

「そうか?まだ序の口だけどな」

ティアナが言ってきたがまだ準備運動の途中なんだよな。
てかこのなのはの訓練メニューはあたしがみてもきついと思うわ。

「ん?どしたよ?もう疲れてんのか?」
「あたしとしてはあんたのほうがおかしいと思うけどな」

青い全身タイツに身を包んだランサーが体を動かしながら言ってきた。
ていうか、まだやる気なのか。っていうか、どんだけ体力有り余ってんだ。

「このくらいの運動ならよくしてたからな。てか戦場じゃ走り回らないと死ぬし。体力は必要だぜ?副隊長さん」
「わぁってんよそんなこと!てか!お前らおかしすぎだろ!」
「ワーキャー騒いでないでさっさと続き始めましょうよ。温まった体が冷えちゃうわ」

ランサーはまだわかる。だがなんだ。確かアリサはまだ魔法世界で数年程度だろ。
・・・・・なんでこの訓練についてきてんだ。

「え?だってミラージュの特殊訓練の方がきついわよ。そのうちやると思うわよ?」
「呼んだか?」
「うぉっ!?あたしの背後に立つんじゃねぇー!!」

無音で近づくな!そんでもって行き成り声をかけるな!あとはやてに近づくな!!

「最後のは向こうから来てるんだ。ていうか、一緒の部屋な以上それは無理だ」

そうだ！こいつはやてと一緒の部屋とかなにやってんだ。シグナムはなんで黙ってんだよ・・・。

ミラージュが来て場の雰囲気が変わる。

「で？もう疲れてるのか？」

「まだっ・・・やれます！」

お、スバルが立った。根性はいいんだけどな。体がまだ追いついてねー。

生まれたてのヤギみたいに足がプルプルしてんぞ。

スバルが立つとエリオも立った。まぁ男ならそのくらい見せてもらわねーと。

「うちの訓練は生易しくないからな。まだこいつらには無理だろ」

どんな訓練してきてんだよお前ら。

て、知りたくねぇけど。

「お前らも参加するんだぞ、そのとき」

「げ」

厭な顔しかでてこネェ。そのときあたしはどうなるんだろうな。

「さて、んじゃ続きやんぞ。まだ当分はなのはのメニューだから安心しろ」

といってもなのはのメニューも尋常じゃないけどな。

一番へばってたキャロも立ち上がった。んじゃ此れで全員か。

「じゃ、続けっぞー」

準備運動を終わらせてから個々の訓練に移る。
スバルはあたしとミラージュで防御と攻撃の基礎。
ティアナはなのはがシューティング。
エリオはランサーが槍術の基礎。
キャロはアリサが召喚術を。

全員のフォローでフェイトがつく。
なのはの教導の流れを汲みながらのメニューをこなす。
てか・・・なんでランサーとアリサはあんなに元気なんだよ。おかしいだろ！

・・・・ミラージュの部隊ってこんななのか。
あたしはぜってぇアイツの教導受けねぇわ。

はやてＳｉｄｅ

わたしはいま、陸上１０８部隊の部隊長室に居る。
この部隊の部隊長、ゲンヤ＝ナカジマ三佐に用事があって来たわけで。

「んで、嬢ちゃん。今日は何の用だ？恋人できてふらふらしてんじ

ゃねぇぞ？」
「んー。ナカジマ三佐もわかってるくせにイケズやんなぁ――――――わかっとるくせに」
飄々とした態度からわたしは本気の目でナカジマ三佐を見る。
「へぇ・・・その目は久しぶりに見たな。本気の目だ」
「どぉも。まぁそういう状況なもんで」
「前置きはいい」
「どぉも」

わたしが信頼できる上司の一人。まぁ階級は抜いてもぉたけどな。
それでもえぇおじさんや。
スバルのお父さんでもあるし、スバルの栄転には喜んでもらえた。

「実は結構後手に回ってしまった前回のアラートで思い知ったことがあるんです。
　情報のやり取りと協力体勢の強化がしたい思いまして」
「つまりうちと協力してレリック捜査手伝えってか。自分とこの部隊じゃ飽き足らず」
「そういうことになります」

表も裏も無く全てを吐き出せる人や。そういう雰囲気にさせてくれる人。
おとーさんってこんなカンジなんやろぉか。よくわからへんけど。

「そういうだろうと思ってもう準備はしてた。ギンガがもうすぐ来るは「失礼します」・・・・な？」
「お茶をお持ちしま・・・あれ？」

ナカジマ三佐の会話をさえぎってギンガが部隊長室に入ってきた。
二人の視線が集まってる事にキョトンとした顔でパチクリさせた。

「あぁなんでもあらへんよ。ギンガ久しぶりやな」
「はい。八神捜査官・・・じゃありませんね。八神部隊長もお元気そうで何よりです」
「おうギンガ。嬢ちゃんとこに近いうちいってやれ」
「了解しました」

お茶を置いてから敬礼する。ここは親子でもきちんとせなあかん。
一定期間の間だけのギンガの借り出し。ここにきた理由の半分がこれで叶った。

「まだあるんだろ？」
「えぇ実は」
「けっ、この狸め。いいから言ってみろ。いうだけなら無料（タダ）だ」
「んじゃ・・・」

ここでわたしはレリック捜索の為の正式な協力要請と密輸物のルート調査の依頼をする。
ナカジマ三佐に快諾してもろてこれで搦め手はできてきた。
あとはわたし一人じゃ出来ひん事ばかり。これは皆で分散担当やな。

少しばかり三人で話をした後に１０８部隊を後にする。
六課に戻れるのは明日の昼前。あぁ、ミラくんに会いたいわぁ・・・・。

フェイトＳｉｄｅ

機動六課のファーストアラートから数日。
レリックを調査していた私とシャーリーはこの事件の黒幕を探していた。
誰が。何故。何のために。その理由を突き詰める。
そして一つの痕跡を見つけ出した。

「フェイトさん。此れって・・・」
「うん。間違いないね・・・・ジュエルシードに・・・・ジェイル＝スカリエッティ」

レリックの残骸の動力部の端にある場所に刻まれた文字。そして其処から照らしあわされるデータ。
私が長年追い続けていた人が居る。・・・この人は。この人だけは。許せないんだ。
だから罪を贖ってほしいから。

次元犯罪者。広域指名手配中の研究者。ジェイル＝スカリエッティ。
彼だけは私が進む道の先にある突き破らなければならない大きな壁だ。

「シャーリー。これは本局に通達するからデータお願い」
「はい。任せてください」

うん、流石私の補佐。仕事が速くて助かるよ。
今度食事を奢ろう。

第九十二話　無限の欲望と輪廻の魔女

???Ｓｉｄｅ

黒服。といえばしっかりとした服装を連想するだろうが僕はちょっと違うのだ。
黒をベースにした体のラインがはっきりとわかる露出ぎりぎりの服。
とはいえちゃんと服の機能は残ってる。
でもスカートはふんわりと大きく広がってるのだ。

コツコツとヒールの音が響く。キャットウォークでコツコツと。
機械的な構造をしているこの廊下を歩くのはもう何度目だろうか。
好い加減飽きもするだろうが不思議とそんなことはなかった。

「ふふ～～ん、ふんふふ～ん♪」

何せ僕は機嫌がいい。まるで晴天の中で星を見つけたくらいに機嫌が良い。
だってあの子を見つけたんだもん。
あぁ、早く会いたい。
壊したい。
崩したい。
あぁ、早く会いたいなぁ。

「うふふふ。あはははは」

コツコツと規則正しい足音はやがて快活に鳴り出す。
まるでダンスのステップのようにくるくると。
くるくる。くるくる。くーるくる。

スカートの裾がふわりと舞う。それを自転を止めて静止。スカートもふんわりと元に戻る。
目の前にはウィンドウに目を向けている男がいた。
この施設の責任者。という体(てい)。藍色の髪をした白衣の男。

「はろ～、ジェイル。元気?」
「あぁ、君か。元気も何もさっきも逢っただろう」

そう、僕はジェイルとさっき別れてまたこうして出会ったのさ。
これって必然じゃない?

「この狭い施設の中では出会う確率が半端ないんだが・・・・」
「あっはっは、そんな細かいこと考えてちゃだめだよジェイルぅ。
もっと人生楽しまなきゃ♪アハハハハハ」

この施設にこもって一年かな?前の遊び場も壊れちゃったし。
てか壊されたしね。別にどーでもいいんだけど。あんな国のことなんて。
とっとと滅びればいいんだけどね、エネミア。

「君とであってもう一年か」
「あれ?もうそんなかー。結構経ったねぇもう充分?」
「あぁ。君の齎した知識はどれも魅力的だったよ。そう、君を解剖してしまいたいくらいにね」
「それはアウトだなー。僕は誰にも汚されないのさ。純潔は守ってるんだよ?」

両腕を組んで自分を抱くようなポーズ。ジェイルは呆れている。
まぁそんなジェイルも可愛いのさ。

「・・・で、どうしたんだい？君がこうしてるって事は何かあったんだろう？」
「そう！そうなんだよ！」

ジェイルが聞いてきたので私はこれを利用する。

「僕の探してたモノが見つかったんだよ。ずっと探してたものがね」
「ほう・・・興味深いな。君が目をつけるものって言うのが」
「あれあれぇ？互いに不可侵だったはずだよー？」
「そうだった」

ジェイルが肩を竦ませておどける。なんていうか、子供みたいでかわいいやつだ。

「共謀者、というなら一緒だけどね。でも君と僕では違うから。君の欲望を満足させるだけのものはここにはなかったかな」
「あぁ。だが充分な調整は済んだ。君のお陰でもあるからね」
「あははっ、そう言ってもらえて何よりだね。で、どうするのかな？」

もちろんこれから、という意味で。彼は何をしようとしてるのか、ほんのすこーしだけ興味が出来た。

「管理局に最近機動六課というのが出来てね。そこに面白そうなのがいた」
「へぇ！へえええええええ！！あそこに目をつけたんだ！面白い！ジェイル、君は本当に面白いよ！」

まさかあそこに目をつけるなんて！これはもう運命だよ！

だけど彼は僕のもの。他はあげるけど彼だけは駄目だからね？

「君も行くのか。あの場所へ」

「うん。定住は難しいかな」

「そうか。ではここでお別れになる。君の進む路がすばらしい路であることを祈ろう」

「うん。ジェイルも自分のことわかればいいね」

けら、と笑う僕。苦笑いを浮かべるジェイル。うん、いいんだ。こういう関係って面白いじゃない？

「では、帰路はエスコートしよう。トーレ。トーレ」

彼の娘。戦闘機人の一人が壁の影から出てきた。

長身の短髪。すらっとした体躯。かっこいい。それがまず彼女に出会ってから感じた第一印象だった。

男装の麗人。一言で言えばそれ。僕が選んだ服を最後に見せてくれるなんて気前がいいね。

「トーレ。ちゃんと僕の言った服を着てくれたんだね」

「はい。貴女をエスコートするならば、と」

「うん、関心関心。女性の扱いに慣れてきたね」

って言うとなんだかなんともいえない顔をされた。なんで？

「とりあえず外まで。あとは好きに動くから」

「畏まりました」

「じゃぁね。無限の欲望（アンミリテッド・デザイアー）」

「ではな。輪廻（リンカネーション）の魔女」

挨拶もそこそこに。僕はジェイルと別れた。
この縁はこれで終わる。次があるかは・・・そうだね。彼次第かな。
今は六課にいるっていう幻影に。

トーレを連れて施設の外へと歩いていく。
なんか、デートみたいだな。たった十数分だけのデート。

なんてね！僕には縁遠いものだったよ。
さぁ、遊ぼう。この世界が。宇宙が。僕の遊び場なんだから。

ジェイルＳｉｄｅ

彼女と出会ったのは一年前。
ふらっと立ち寄った次元世界での事だ。まぁ、今いるこの世界なのだが。

何の警戒もなく近づいてきて私の戦闘機人を一人で薙ぎ倒した・・・。
そしてその真ん中に立ち、彼女はこう言った。

「ねぇ、このコたちさ。まだ未調整なら僕に任せてみないかい？」

などと言う。聞いてみれば私がまだ手をつけてない欠点まで言い当てた。
さらにはその欠点の補助対策まで言って来るという。

彼女との対話は実に興味深かった。
まだ私の知らない技術や知識を持っていた。
知識をくれてやるから当分の居場所を提供しろとふてぶてしくも言って来たのだ。
だが私もこの次元世界にきて間もなかったので簡略的な施設しか作れなかった。

それでもいいというので彼女と共に娘の調整を行う。
なんともすばらしい知識と技術だっただろうか。
当時の私は目を丸くして彼女の手腕に驚かされ続けた。

お陰で娘たちは完璧に近い状態で１２人全員をロールアウトできたわけだ。
そのことに関しては感謝している。
出来ればもう少し技術提供もしてほしかったが。

「ウーノ」
「はい。ここに」

最初の娘。ウーノは私の背後ですでにスタンバイしていた。

「彼女のデータは？」
「申し訳ありません・・・最後の最後まで粘ったのですが・・・」
「そうか。まぁいいさ。それもまた縁というんだろう」
「よろしい・・・のですか？」
「あぁ。私はそこまで執着はしない。それに彼女も言っていただろう？縁があればまた、とね」

縁、か。研究者の口から出る言葉ではないね。

だが少しは信じてみたくなった。
さぁ・・・今までの研究の積み重ねを管理局の皆に披露しようじゃないか。

「だが二番煎じになるのはいただけないな」

顎に手を当てて考える。何かいい手はないかな。

「そうだ。ドゥーエは今何処だい？」
「聖王協会に潜入しておりますが」
「あそこで得られるものはもうないだろう。彼女もいるんだ。連絡して向かう場所を変更してくれ」
「了解しました。それで場所のほうは？」
「ふむ――――機動六課だ」

私の二番目の娘。ドゥーエ。彼女なら潜入工作もやってくれるだろう。
情報を得られればそれだけで充分だ。対処しようがある。

「さぁ――――宴の始まりだ」

私の奥底にインプットされたこの感情が作りものであろうと。
この感情を制御してさらに支配しよう。

無限にあふれ出る欲望を曝け出して抑える事無く全てを晒す。
くくふふふはははははははははは！！

「面白い！実に面白くなってきた！」

さもうすぐだ。時間はもうすぐ終わりを告げるのだ。

終末の声を聞かせてやろう、時空管理局よ。

第九十三話　ホテル・アグスタ

はやてＳｉｄｅ

１０８部隊のほうから来た情報によると、とあるホテルのオークションでロストロギアが出品されるらしい。
ホテルの名前は「ホテル・アグスタ」。

ということでロストロギアっちゅー事でうちにお鉢が回ってきたわけで。
フォワード陣にはいい経験になるやろうし連れて行くか。
護衛の意味もあるし。この前のアラート以来の外やからな。
なのはちゃんの教導も何処までいったのか見てみたいしなぁ。

「ふぅ・・・・」
「はやてちゃん、お疲れ様なのですよー」

部隊長室で仕事をこなしつつデータの照らし合わせ。
出品されるロストロギアのチェック。部隊の配置。いろいろ考えるべき事はある。
でも甘えられへんわ。わたしがやるべき仕事なんやから。

するとリィンが肩にとまって揉んでくれた。
いつの間に来たんや。

「なのはさんに言われてはやてちゃんを呼びに来たですよーえへへー♪」

うん、なにこの癒し系。リィン産んでマジ良かった。

心の底から感謝する。何に？神様に！

『いや、僕に言われても』

ん？今なんか入った？気のせいかな。

「リィンたんマジ天使ー」

「はい？なにがです？」

はっ！？つい口に出してしゃべってもーた！

あかんわ。この癒し融合騎。なんというわたしに対してのみの殺傷能力なんや。

これはすごいものを作ってしまったようやな・・・・・。

「もう準備は出来てるですよ。なのはさんにフェイトさん。フォワードの皆さんとセイバーさんとすずかさん、アリサさん。ヴィータちゃんです」

「ん。わたしもすぐいくからって伝えてくれるか？」

「了解でっす」

ふわふわと浮いて部隊長室を出て行くリィン。なんて愛らしい。

は、それ所やない。さっさと準備してヘリポート向かわんと。

椅子に掛けてた上着を羽織って着込む。たったこれだけでも全然気の入り方がちゃう。

さて、やったろーやないか。

なのはＳｉｄｅ

準備万端でヘリポートに向かったら六課の女性スタッフがそろってた。

「すずかちゃん。アリサちゃん」

「「なのは（ちゃん）」」

そいえば全員顔を合わせるのって中学校卒業以来かな。懐かしいな。

フェイトちゃんは私の後ろでエリオとキャロの世話をしてる。

はやてちゃんはまだ来ない。リィンを伝言にいかせたんだけどな。

あとはスバルとティアナか。フォワード四人とも制服を着てる。

「皆、向こうでも指示は出るけど今回はとりあえず雰囲気だけでもつかんでね」

「「「「はいっ！！」」」」

うん、いい返事。

「ティアナは指示実践訓練もしてみようか」

「え・・・・・」

「返事は？」

「はいっ！」

ミラ君からの言伝もあったからね。もうティアナは一人だけレベルが違うんだよ。

シューティングの命中率だって半端ないし。どの魔弾で、っていう咄嗟の判断力がすごいついてる。

それに・・・・魔力が引き伸ばされてるね。あれって魔力負荷かな。

よくやるなぁ。

「ミラ君から伝言。気負わずにいつも通りにやれ。って」
「あ・・・はい。ありがとうございます！」
「スバルも。気負わないでいつも通りのことをやれば大丈夫だから」
「はい！がんばります！」

エリオとキャロのほうはフェイトちゃんがいるから大丈夫かな。
じゃあ後は乗り込んじゃう？

アリサちゃんとすずかちゃんと。遅れてやってきたはやてちゃんと。
そばにいつもいるフェイトちゃん。幼馴染がそろって昔話をしつつ
今回の作戦の話も。

なんでかミラ君もいた。ヴィータちゃんと話し合いしてる。たぶん
現地のセッティングだろうかな。

「で、ミラ君なんでいるの？」
「最近なのはが一言多いんです」

あ。ヘリの隅っこで泣いてる。
ていうか、六課始まってからなんだかずっとこんな感じ。やだなぁ。
本当はもっと仲良くしたいんだけど。

はっ！？これはもしかして好きな人に意地悪しちゃうっていうアレ
！？
ここでそんなものが発動するの？ていうかフェイトちゃん。意味深
な笑顔やめて。

「バックアップしかしないよ。手を出して１割程度だ。それに部隊

長が動く以上その補佐が必要だ」
「私は要らない子なんです！？」
「ツヴァイはいるだろ。癒し系で」

ミラ君とリィンがしゃべってる。でもなんでリィンのことツヴァイって呼んでるんだろう。
今度聞けたら聞いてみようかな。でもそれって夜天の書関連ならちょっと入りにくいよね。

ヘリは空を飛んでいく。
目的地までもうすぐだ。

キャロＳｉｄｅ

ヘリコプターってフリードに乗ってるのと乗ってる感が違う。
なんだか慣れなくてドキドキしちゃうね。
落ち着かなくてそわそわ。
でもそんな私をエリオ君が手をギュって握ってくれた。

エリオ君と手を握ってると段々落ち着いてきた。
前にもお風呂に一緒に入った時だってそばにいると落ち着く。
一緒に居たいなぁって思う。
これってやっぱり同じようにフェイトさんがそばにいるからかな。

心が落ち着いたところで中をキョロキョロと見てみる。
いろいろとはじめて見るものがいっぱい。
設備とかはたぶん触っちゃだめだよね。

でもそんな中でひとつだけ一際目立つ場違いなものがあった。
きれいな箱。何か大事にしまってるみたいな。

「シャマル先生。その箱って・・・」
「これ？これはねぇ、隊長たちのお仕事着よ」

お仕事着、ですか。このとき私はまだこの意味がわかってませんでした。

ミラージュＳｉｄｅ

今俺達はホテル・アグスタへと向かっている。
ヴァイスの運転は揺らさないで飛ぶということで有名だ。だから誘われたんだろうけど。

「ティアナ。あれはずしていいぞ」
「え、いいんですか？」
「あぁ」

ティアナは最初の頃につけさせてた魔力負荷をまだ続けていた。
なので魔力だけで言えば既に陸士どころのレベルじゃなく、尉官レベルにまで達しようとしてる程だ。

「ティア、そんなのつけてたの？」
「えぇ。ミラ隊長に言われてね。寝るとき以外はずっと」
「それってなのはさんの訓練のときも？」

「まぁ、そうなるわね」

スバルとティアナが話し出した。まぁ少し距離もあるしかまわんだろ。

俺はヴィータと現地の状況の話し合いに戻る。

「でな。あたしは外にこいつらを設置してみようと思う」

「いいんじゃないか？経験値上げるならどんどん実戦に出したほうがいい」

六課でなら実戦なんかいくらでも体験できるだろう。

それこそ経験値をあげるには丁度良い現場といえる。

「んじゃそうだな。もし襲撃があればバックアップ。フォローはお前ら守護騎士がやれ。シグナムとザフィーラがいないからシャマルが指揮」

「「了解」」

「おまえは手を出さないのか？」

「あぁ。俺はその更に後方で待機してる。だからって手を抜くなよ」

「わぁってるよ！」

これで申し送りは終了。あとは各々好きな時間だ。

キャロがシャマルに質問してる。たぶんアレだな。

さて。そろそろ到着か。何もなけりゃ一番だがな。なければ帰ってから模擬戦でもするか。

ティアナＳｉｄｅ

ホテル・アグスタ。今日の仕事先。
ここでオークションがあってその中の物品にロストロギアが含まれてるらしい。
で、それを狙ってくる犯罪者がいるかもしれないからって言うのでその警護を私たちがやる。

とはいっても中には入れずに外の警備になるけど。
ホテルの上のほうでシャマル先生が全体を見渡しながら指揮。
私も一緒に指揮の勉強ということで同行している。

私からシャマル先生にお願いしたらもうミラ隊長から伝わってたみたい。
丁度いい機会だからって事で。

「ティアナもミラくんが教えてるだけあって指揮力は高いのよね。
そのうち司令官クラスまでいくんじゃないかしら」
「なに言ってるんですか、そんなことないですよ！」

シャマル先生何言ってるんですか。
戦略と戦術は確かに習ってはいるけど・・・・・。
でもそれだけなんです。スバル達みたいに目に見えるものじゃないから焦るんですよ。

・・・・・なんて言える訳がない。
みんな何かしらの能力や才能を買われて機動六課に来た。
私は・・・・？兄の威光だけでここにいるんじゃないの？って思ってしまう。
そんな時、後ろから大きな手で頭を撫でられた。

「何考えてるんだ？」
「あ・・・ミラ隊長」
頭を撫でたのはミラ隊長だった。
「なんでも・・・ないです」
うそ。だけどこの人には心配掛けられない。
今でさえ貴重な時間を私に割いてくれてるんだから。
「お前、今。自分が何でここにいるんだろうって思ってたろ」
「っ・・・・・」
視界に入るのはシャマル先生だけ。でも背中を向けているからわからないし距離もある。
聞こえてないかな？
「確かに六課に集まってるのはその道のエリートとかだ。で、其処に呼ばれたお前は何だ？誰かのおまけか？お荷物か？」
「違います・・・・・違うと思いたい、です・・・・」
「当然だ。何かしら人ってのは一人じゃ生きられない。だから誰かに依存して生きていくんだ」
この人の言ってることはまるで実体験のようだ。
「前にも言ったろ。お前の力は見えない力だ。見える力のやつと一緒にいたら焦ることになるぞ、って」
「其処まで言ってませんよ」
「・・・そうだったか？」
「そうです」

・・・でも。判りますよ言いたいこと。
私も負けません。

「相談事あったら聞いてくれますか？」
「俺でよければな」

また迷ったら聞いてください。今はまだ押さえてますけど。

「ティーダもいるんだからあいつも相談ｎ「兄さんはだめです！」・・・そうか」

兄さんに聞かれたら大変ですよ！何考えてるんですか。
兎に角、この気持ちはきっとわからない。

「ミラ隊長。私ってここにいてもいいんですか？」
「当然だ」

その言葉だけでも充分です。

「それにな。俺はただお前の中にある才能を伸ばしてるだけだぞ。その手伝いをしてるだけだ。基から無い才能は伸びない。
でも指揮系統や戦術戦略はお前の中にもともと在ったものなんだから」

あ・・・・私の心にずっと引っかかってるものを的確に当ててきた。
これも多分予測範囲内なのかな。
でも気が晴れた。

「ありがとうございました。少し気が晴れました」
「ん。ならよし」
話が終わるとシャマル先生のほうに歩いていった。

第九十四話　襲撃

フェイトＳｉｄｅ

更衣室でシャマル先生が持ってきたドレスに着替える。
ほかにも六課の女性陣が揃ってるのはなんとも見栄えがいい。
あ、シャマル先生とヴィータ副隊長は外だっけ。

「フェイトちゃん、後ろお願い」
「あ、うん。ここだよね」

なのはの着替えを手伝いつつ自分もなのはに頼む。

「なによ。いつもながら見せ付けてくれるわね」
「まぁまぁアリサちゃん。なのはちゃんとフェイトちゃんだもん」
「そうね・・・それで片付けられるってのが凄いわ・・・」

アリサとすずかが交互に話しかけてきた。いやそんな事いわれてもわからないよ。
ずっと一緒にいたからなんだかずれてるのかな。

「これって普通なんじゃないの？」
「「違うから」」

なのはの言葉に二人からのツッコミ。
困った顔でも止める気のないなのはもなのはだけど。

「しっかしあんたらいつもそう・・・・」
「あはは、仕方ないよアリサちゃん。なのはちゃんとフェイトちゃ

んだもん」

着替えを手伝ってるとアリサとすずかがしゃべってるのが聞こえた。
なんかおかしかったかな？もしかして変な着方してる？

「にゃははは、もういつものことだから慣れちゃったよ」
「はいはい。同じ部屋ですものね」

アリサは肩を竦めながらやれやれといった表情で見てる。
部屋のことを言ったらアリサとすずかだって同室なのになぁ。

「っと。これでよし。かな？」

なのはの着替えを終わらせて自分も終わらせる。

「ほんならさくっと移動しよか。わたしとフェイトちゃんなのはちゃんはホールの中。アリサちゃんすずかちゃんはホール外をお願いするわ」
「「「了解」」」
「セイバーさんは何かきいとる？」
「いえ。マスターからははやてに従えと」
「ほぉか。ほんならそうやな。物品が入ってくる地下駐車場の警護にまわってもろてえぇ？」
「了解しました。地下駐車場ですね」

はやてが指示を出していく。私はホール内部の警護だね。
指示を出されれば各々行動を開始する。

セイバー隊長はドレスじゃなくて黒のスーツ。シックに決まってる。
きれいな長い髪は一本にまとめている。

着慣れてる感がすごい感じる。まるで前にも着てたような・・・・
そんな感じだ。

アリサたちと別れた後、なのはとはやてで会場となるホールへと向かう。
はやてに入り口を任せて中へ。
向かう途中に前から歩いてくる淫J・・・・・ユーノがいた。
隣に緑の髪の毛をしたイケメンがいる。

「なのは！」

ユーノが声を掛けてくる。

「ユーノ君。久しぶりだねぇ。どうしたのこんなところで。お仕事サボっちゃだめだよ？私から無限書庫に謝ってあげようか？」
「いや違うよ！？て言うか酷い！？」
「まぁまぁ、ユーノ博士。時間がないよ」
「あ、そうか。ごめん。また後で」

ユーノはすぐに話を切り上げて去っていった。

「なんだったのかな？」

なんてなのはが見送ってから、私たちも会場へ急いだ。

なのはＳｉｄｅ

オークションの会場になるというホールに向かって三人で向かってると前から見慣れた顔が歩いてきた。
ユーノ君だ。あれ？でも無限書庫に居るはずなのにどうしてここに居るんだろう？

「ユーノ君。久しぶりだねぇ。どうしたのこんなところで。お仕事サボっちゃだめだよ？私から無限書庫に謝ってあげようか？」
「いや違うよ！？て言うか酷い！？」
「まぁまぁ、ユーノ博士。時間がないよ」
「あ、そうか。ごめん。また後で」

話も早々に切り上げられた。なんだろう。なんだか・・・もやっとした。
まぁいいや。後で無限書庫に問い詰めてみよう。
隣に居た人も気になるしね。

「ロッサ、ユーノ君と何しとったんやろ」
「はやてちゃん、今の人知ってるの？」
「覚えてないかな？カリムん所に行った時におったとおもうんやけど。一応教会騎士で監査部の人や。名前はロッサ」

ふぅん。ロッサって言うんだ。フェイトちゃんと似てるね。テスタロッサだし。
なんか・・・お似合いだったな。ユーノ君と。一緒に並んでるとなんだかこう・・・・うん。イイ。
二人の邪魔もしちゃ悪いかな。でも監査部が付いてるって事は・・・・つまり。

「ユーノ君もついに監査部に御用かぁ。差し入れは何が良いかな」
「何でもいいと思うよ。なのはの顔が見れればいいと思うし」
「ん、そっか」

フェイトちゃんのアドバイスで心は決まった。じゃぁ後で話を聞いてみよう。
と喋っていたら会場についたので中へと入る。
熱気が充満してる。凄いなぁ。私たちは邪魔にならないように壁際で物品や要護衛対象に目を光らせる。

さぁ――――――オークション開始だ。

ルーテシアＳｉｄｅ

ドクターに言われたものが集まるって言う場所が見える丘の上。ざっと全体が見晴らしよく見える。
早速ガリューに向かわせながら状況を見てる。
といっても。指示は後ろのゼスト。

「ねぇ。さっさと、おわらせよう」
「そうだな。あいつの力には少しでもならないほうがいいが・・・・っ？！」

語尾がおかしかったのでゼストを見上げると冷や汗かいてる。
どうしたのかな。

「なぁ・・・今あの屋上にいる男・・・見えるか？」

ゼストがウィンドウをだす。其処に移ってるのは黒尽くめの男。
ほかに女の人が二人。緑と、橙。黒い人は後方に下がっていく。

「こいつが・・・なに？」
「いや・・・一瞬だけだったのだがな。俺を見て笑ったんだ。気のせいかもしれないが・・・」

そんな馬鹿なことはない。あの場所からここまで有に５ｋｍは離れてる。

「きっと。きのせい」
「ならいいがな・・・もし気づいてるならこの仕事は厄介だぞ」
「かまわない。ガリューがまけるはず・・・ない」

誰よりも信じてるガリューだから。誰にも負けない。
それよりもそろそろ動く？召還魔法はもう準備できてる。
手を差し出して、魔法を起動する。ドクターのおもちゃ、ガジェットを召還してく。
いくつもいくつもいくつも。

「　さあ　あそびましょう？　」

ティアナ

シャマル先生のウィンドウに物質が突如検知される。
シャマル先生はすぐに対応しようとするが――――

「ティアナ。フォワードの指揮は任せるわ」
「あ、はい！お願いします！」

シャマル先生はヴィータ副隊長とザフィーラに指示をしてるみたい。
時折聞こえる単語が物騒なんですけど。
でも任された以上はやってやろうじゃない。

『スバル。エリオ。キャロ。聞こえる？』
『聞こえるよ。指示を頂戴』
『こっちも聞こえてます。シャマル先生からティアナさんから指示をもらうようにっていわれました！』
『よろしくおねがいします！』

あんたら・・・まったく早いじゃないのよ。

『いい？ヴィータ副隊長とザフィーラが前線に出てくれてる。私たちは後方で戦闘待機。決して気を抜かないで。
前線から抜けてきたのだけを的確に打ち抜いて！』
『『了解！！』』

さぁ――――――見せてやろうじゃない。幻影仕込みの指揮ってやつを！

『キャロはブーストを掛けておいて。エリオに加速と・・・そうね。二人に強化って所で』
『了解です！』

よし。準備は整った、かな？あとは状況に応じて臨機応変に。
さぁ、腕の見せ所よ！

セイバーＳｉｄｅ

はやてにいわれたとおりに地下駐車場へとやってきました。
ここでは物品の収納ですか。次々とトラックが入ってきては荷物を降ろしていきますね。
作業を見つつ外へつながる通路を見て警備をしましょう。

「こうした任務もまた久しいですね。戦場を駆けるのとはまた違う

緊張感が心地良い」

ピリ、とした張り詰めた空気が周囲に漂う。
この雰囲気はとても気持ちよく感じ取れるものだ。

と、少し日和りそうなのを押さえるように遠くで魔力反応を感じ取る。
すぐに私は戦闘態勢をとって剣を握る。
通路の上。外と中を隔てる場所にソレはいた。
異形。人の形をしておきながら外見は違う存在。
まるで甲虫のような姿。

「まるでバーサーカーのような鎧ですね。いや、あれはまだ人でした」

チャキ、と剣が鳴る。迎撃態勢は万全だ。
視線ははずさずに運送業者を避難させる。怪我をさせるわけにはいきません。

「問おう。この遠くに感じ取れる魔力反応の一派であるか？」

返答など出来るかどうかわからないが一応だ。もしかしたらということもある。
だがやはり返答は帰ってこない。

ならばやることは一つ。向こうも同じことを考えていたようだ。
腕から伸びるのはアームソードのようなもの。
ただし、鎌のように鋭く、曲がっている。

「お相手しよう」

地下迎撃戦はこれより始まる――――――

第九十五話　迎撃

セイバーＳｉｄｅ

地下駐車場の入り口に立つ異形。まるで飛蝗（バッタ）か何か。仮面・・・・か？
視線はまっすぐ私を見ている。気がする。
あの目はどこを見ているのかわからないので視線というものがどこを向いてるのか理解できない。

だが――――そうだ。
アレは私を見ている。ここまで来るのにフォワード陣を突き抜けてきたのか？
それとも気づかれずにここまで来たのか？

「どっちにしろここから先にはいかせません」

剣を構える。といっても風王結界で不可視にしているのですが。
向こうは何を考えてるかわからないような雰囲気だ。

少し様子を見てると微かに体が動く。
一気に距離をつめてくる。だが速度的にはまだ捕らえられる程度だ。
初速でこれならもう少し早くなりそうですね。

「フッ！！！」

剣を一振り。それだけで風が巻き起こる。
とはいえ吹き飛ばすほどではないにしろ、足を止めさせるには充分。
異形もまさかこんな事象が起きるとは思わなかったのか疾駆が止ま

る。
警戒したのかそれ以上は突っ込んでは来ない。
「　　」
アレからの声はない。やはりそういう機能を削がれた存在か。
さぁ続きをしよう。久方振りの戦いに身を落とす。

ティアナ

地下駐車場からセイバー隊長からの通信が入ってきてる。
その場の映像と一緒に。
ていうか・・・なんなのあの強さ。
単純な攻撃だけでアレだけ凌駕してるなんて。

「さすがセイバー隊長ね。圧倒的に敵を威圧してるわ」

あれでですかシャマル先生。この後セイバー隊長とも模擬戦あるんですけどどうなるんですか。
・・・・よし。考えるの止そう！今は今のことだけ考える！

「ヴィータ副隊長、なんか色が変わってませんか？２Ｐカラー？」
「あれはリィン曹長との融合ね。２Ｐカラーとか言っちゃだめよ？」

あ、やっぱり禁句なんだ。でもやっぱりそう見えますよ。
で、色だけでなくて戦闘もちゃんと見てますってば。
こっちもこっちで圧倒的な殲滅戦。ザフィーラの攻撃力が高すぎてる。
私たちでもあのＡＭＦを抜くのに苦労するのに一撃で複数体撃破するなんて。

「ヴィータ副隊長もあれでリミッターつきだからね？」
「わかってますよ」

いわれずとも。そうしないと部隊のレベルがおかしくなるって話は聞いた。
デバイスと、自分自身に。

たまに撃ち漏らしたガジェットドローンが森から抜けて出てくる。
それを撃墜するように指示しつつ状況を把握。

「これって・・・召還術？だとしたら・・・」

なじみのない魔力反応と肌に感じるものは召還術なんだろう。
キャロが同じものを持ってるからすぐに気づけた。

「キャロ。其処からあなた以外に召還術を使ってる気配とか感じ取れない？」
「え？召還術ですか？・・・・・やってみます！」
「おねがい」

わかったら教えて、と伝えてから通信を終えて次の指示。
エリオとスバルは前線に出て森から出てきたのをつぶす役割へ。

ザフィーラもヴィータ副隊長もシャマル先生の指揮下。
マルチタスクを使ってシャマル先生の指揮を盗み聞きする。
なんていうか・・・すごい理詰めなのに感覚で分かり合えてるのが凄いわ。
私もいつかそうなれるのかな。

セイバーＳｉｄｅ

風王結界の風で吹き飛ばした飛蝗の異形を追いかけて入り口から外へと躍り出る。
其処には仁王立ちで待っている異形。

「ほう。待ち構えていましたか。その意気たるや賞賛しましょう」

剣を携えて構えを取る。
向こうもやる気だ。広い場所でなら、ということか。
格闘型のような構え。腕のアームソードは出たままだ。武装隊にもそういう構えのは居なかった。
皆武器を・・・デバイスを持っていたから。ミッド式の魔導師は杖が主流ですし。

こうして武器と武器を合わせる戦いはあの世界以来ですか・・・・
懐かしい。
さて、これからのことを考えて勘を取り戻すとしましょうか。

「シャマル。聞こえますか？」

通信回線をわざとオープンで開いてシャマルと交信する。

「あ、はい。セイバー隊長。どうしました？」

「はやてから地下駐車場の警護の命を受けていた所で敵と交戦中です。他に変わりはありませんか？」

「了解です。現在は前線にヴィータ副隊長とザフィーラがガジェットの駆逐中。取りこぼしをフォワード陣が潰してる最中よ」

「そうですか。ではこのまま回線は開いておきます。映像も見えてますか？」

「えぇ。映像クリア。確認したわ」

ふむ。これでこちらの敵の詳細は指揮官にも確認できると。

さて。ではやりましょうか。

「お待たせした。さぁ、尋常に勝負」

剣を正中線に構えてから右に振る。それだけでも十分な威圧。

当然である。我が手にあるは我が名を冠たる星造兵器。

勘を取り戻す前に落ちてくれるなよ。

シャマルＳｉｄｅ

久しぶりの出番です！シャマルです！

前線の指揮とフォワードの行動。ティアナの指揮のバックアップをしているとセイバー隊長から通信が来る。
正体不明との交戦中。通信は映像化されて戦闘を流すという。

でもあの映像に映ってる正体不明・・・いったい何なのかしら。
あれも召還術で呼んだの？だとしても何かおかしい。
自然とは違う・・・そう、作られた雰囲気。

状況を部隊長のはやてちゃんに伝えながら指揮。どうやらホテルの中は中で離れることが出来ないらしい。
なのではやて部隊長、高町隊長、テスタロッサ隊長、アリサちゃん、すずかちゃんは動かせない。
今、外にいるメンバーで乗り切るしかない、というわけね。

「バカスバル！前に出すぎ！ヴィータ副隊長と範囲かぶるわよ！」

うん、ティアナはちゃんと指示を出せてるみたい。

『どう？ヴィータ副隊長としては？』
『ぁん？まだまだヒヨッコだろっつーの。いちいち通信してくんな。おわり！』

うふふ、ヴィータちゃんってば照れちゃって。
素直じゃないんだから。でも・・・ミラージュ隊長の下で勉強してるだけあって中々の指揮能力ね。
当の本人は後ろで腕組んで黙ってるだけだけど。
向こうも素直じゃないんだから、ねぇ？

さて、こっちはこっちで仕上げちゃいましょうか。

「ヴィータちゃん、ザフィーラ。仕上げに入っちゃいましょうか。
セイバー隊長のほうも終わりそう」
『おう。了解』
『心得た』
あ。ザフィーラ久しぶりに声出した。

セイバーＳｉｄｅ

幾合と刃を重ね合わせてわかったことがある。

「本気、でやってないな？何か考えてでもいるのか？」

問いかけには答えない。やはり声がないのか？
だとしても少しくらい動作があるはずと思ったのだが。
こちらの問い掛けには一切反応しない。
どうやって躾けられているのか？

「無言、か。だがそれを通すなら結構。私も仕事を遂行するまでだ」

戦闘は苛烈。しかし相手も然る事、受け流すのが得意なようだ。
私の剣を４回に一回は受け流している。

しかし何度かの受け流しの後、後方にステップして距離をとる。

大技を使う気か？腰を低く構えさせて対応に動く。
だがやつはソレから動かない。空を見上げてどこかを見ている。
空から視線を私に移すとヤツは私を指差してきた。
まるで名指しにしているような。そんな感じ。
腕を下ろすと背中に生えた羽を広げて空へと飛んでいく。

「シャマル！」

この映像を見ているであろうシャマルに映像ウィンドウから呼びかける。
すぐにシャマルも察知してくれたみたいで動きがあるのがわかった。
だがヤツの飛行速度がハンパなく速かった。こっちからも見えた速度はそう・・・ランサーに近いくらいだ。
まぁ、見えないほどではないのですけどね。

やれやれ・・・ヤツも行ってしまったことですし不完全燃焼ですが仕方ありませんね。
剣を納めて自然体へ。そういえばスーツも少し破けてしまいましたか。
せっかくシャマルが準備してくれたというのに。後で謝っておきましょう。

前線のほうも終わりに近づいてるようですね。私が出る番はなさそうです。
それでは、シャマルたちと合流しましょうか。

ミラＳｉｄｅ

事後処理なう。
とりあえず破損申告書類がどっさりくるだろうと予測しながらバックアップだ。

ティアナも及第点はやれるか。あとは上手い事駒を動かせるようになればいい。
フォワード陣の穴も少し見えたしな。其処を後でなのはに教えてやろう。
きっと穴を塞いでくれるだろ。
外のことはきっちり中に伝えておくか。

今回の襲撃で損害が結構あったので（前線の戦闘被害が森や山の自然破壊に連なってるからとかで保護団体からの苦情が多く来てる）俺の給料が減っていった。

機動六課

機動六課

部隊長：八神はやて

分隊

スターズ０１：高町なのは
スターズ０２：ヴィータ
スターズ０３：スバル＝ナカジマ
スターズ０４：ティアナ＝ランスター

ライトニング０１：フェイト＝Ｔ＝テスタロッサ
ライトニング０２：シグナム
ライトニング０３：エリオ＝モンディアル
ライトニング０４：キャロ＝ル＝ルシエ

ファントム０１：ミラージュ＝ヴィジョン
ファントム０２：ロード＝ディアーチェ
ファントム０３：レヴィ＝ザ＝スラッシャー
ファントム０４：シュテル＝ディストラクター

レグルス０１：ティーダ＝ランスター
レグルス０２：高町恭也
レグルス０３：アリサ＝バニングス
レグルス０４：月村すずか

グレイル０１：セイバー
グレイル０２：ギルガメッシュ
グレイル０３：ランサー
グレイル０４：アーチャー

敬称略。階級略。

内、ファントム・レグルス・グレイルは純粋な機動六課での部隊ではなく援助的な出向である。
各個分隊はミラージュ隊長指揮下の基で六課の指揮以外に独自に行動が許可されている。
また、部隊に対するリミッターもなし。

部隊長・分隊隊長に酷似した隊員がいるという噂が隊舎の中で囁かれている。

表立って動くのはスターズとライトニングの二分隊。
補助としてファントム・レグルス・グレイルの中からその案件での的確なメンバーが補佐する。
これら三分隊全体が同時に行動することは極めて難しい。
その為、三提督全員の許可及び提督に就いている者三名以上の許諾がない限りは行動不可能。

第九十六話　休日・午前

ミラＳｉｄｅ

ホテル・アグスタから数日経った。
あれから訓練は更に上へとステップアップした。
通常訓練と一緒に模擬戦を組み込んだり一対一での訓練。
さて、そろそろ俺が手を出す時期かね。

早朝訓練が終わり、反省会の時に俺が参加することを告げる。
すると、ティアナだけがげんなりとした顔をしてきた。
他の三人はまだ俺個人の訓練がどんなものなのかを知らないから軽い顔だ。

「ティアナ以外の三人はそろそろアレだな？」
「うん。そろそろだね」

なのはが答える。
充分な訓練を得たフォワード陣にはそろそろデバイスリミッターの第一段階目を解除する事。
ティアナは既に俺の権限で第一リミッターを解除していた。

「解除祝いに俺が手ずから鍛えてやるからな」
「「「はいっ！ありがとうございます！！」」」

良い返事のティアナ以外の三人。うん、じゃぁついでだ。

「なのは」
「うん。じゃぁ第一リミッター解除のお祝いに私から」

目をあわせてからなのはが口を開く。

「私からのお祝いは今日一日四人の完全休暇です♪」

「ということで俺の訓練は明日からだ。充分体休めておけよ?」

ということで解散。明日の早朝までの休暇だ。

「ま、たまにはゆっくり羽を伸ばして来い。ずっと気が張ってる状態じゃいつかパンクするぞ」

「はい。では休みをもらいます、けど・・・まだ途中の仕事とかあったんですが」

「構わんよ。明日やれ。今日は仕事したら怒るからな」

ティアナめ。デスクワークのことを気にしたか。

でも今日はなのはが言ったとおり仕事しちゃだめ。

フォワード陣を解散させて隊舎に一旦帰させる。

この場に残ったのはなのはと俺だけ。

「ミラ君も休んでね?ずっと仕事してるでしょ」

「ん?俺は仕事してないぞ。実際口を出すかティアナとチェスしてるかだしなぁ。お前が思ってるほど仕事してないぞ」

「えー・・・だって少将さんでしょ?」

「今は六課の分隊長だ」

階級はここじゃ意味を成さないしな。特に俺は発言力が欲しくて昇級したわけだし。出来ればもう少し上に行きたかったが。

「それにお前も階級なんか気にしないだろ。前線で教導が出来ればいい性質だろ」

「うん。それは否定しないね」

まったく。ヴィータやフェイトが見張ってないと休まないからなこいつ。

あれから・・・撃墜未遂からもうかなり経過した。

なのはが無茶ばかりするのと休息を取らないのは代名詞になりつつある。

その都度ヴィータとフェイトに怒られては休暇を取らせている。

「体の調子はどうだ？」

「うん。いい感じだよ。シャマル先生もね。大丈夫だって言ってくれてるし」

「そうか・・・がんばれ、って言ってももう頑張ってるもんな。ただちょっと酷いだけで」

「酷い言い方だよ！？」

ん？そうか？まぁいいだろ。

そんな訳でなのはは無事に魔力も減退しないでいる。

実際こいつが何処まで減退するのか分からなかったからソレを防いで・・・・。

「まぁ、お前たちも休めよ。今日はうちの部隊で全部カバーするから」

「そんな！悪いよ！」

「休めるときに休む。昔から口酸っぱく言ってきた筈なんだがな・・・」

「う・・・・了解」

うん。たまには素直もいい。菜の葉の頭を軽く撫でてから離れる。

「基本、うちの部隊はスターズやライトニングの補助で来てる訳だ。頼って当然なんだぞ」
「・・・わかってますよ」
「じゃぁ、フェイトたちにも伝えてくるからな。朝食食べたら其処から休暇だ。明日の朝食終わるまで自己訓練も禁止だ」
「ひどい!?私の生きがいが奪われたよ!?」

どんだけワーカーホリックだよお前・・・。

「どれだけ強くなるつもりだよ・・・」
「え?ミラ君の隣に立てるまでだよ。当然っ!」
「んじゃ期待してるわ。無茶さえしなければいつでもたてるようにしといてやる」

クス、と俺は笑ってから訓練場を後にした。

朝食を食べた後は主流メンバーに休暇の言伝。
はやても渋ったが今日一日デートすると言う事で休暇を取らせた。
ツヴァイ付きだけど。
ヴィータもシグナムも休暇を与えたがどうしてもはずせない問うことで半日休暇。

スターズの代返はグレイル隊が。
ライトニングの代返はレグルス隊が。

はやての変わりにディアーチェに頼んだらシュテルとレヴィがついてきたのでなのはとフェイトの変わりとしても頼んだ。

「じゃぁ何かあれば連絡してくれ。といってもお前達で何とかできるだろ」

「了解ッス。任せてくださいッスよ！」

「ティーダが指揮を執るならまぁいいだろ」

何せ俺直伝の指揮能力だ。なんだこの兄妹。戦術戦略のエキスパートだな。

「はやくいくですよ、おとーさん！」

「せかすなリィン。はやてのところに行ってろって」

「はやてちゃんから逃がさないように監視しろっていう命令です！」

「はやてめ・・・・」

逃げるとか・・・そうか。逃げればよかったのか？

そうしたら休暇にならないじゃないか。本気で逃げたら誰も追いつけないぞ。

スキマの中はイルジオンリッターしか入れないようにしたからな。

だがはやての考えはすぐにわかる。逃げずにいくか・・・・。

朝食を取ってから休暇組は出かけていく。

スバルとティアナは街へと繰り出すらしい。

エリオとキャロも遅れて街へと向かうらしい。Wデートか。鉢合わせするかもな。ん？なんかおかしい感じがする。

なのはとフェイトでどこかへいくと言っていた。

行き先を言わないあたりやつららしい。

シグナムとヴィータは寮で休むという。これははやて情報だな。

んで、はやては今俺の隣にいる。

「で。どこに行きますか？」

「そやなぁ。皆が見えへん所でもいこか？」

「はやてちゃんダイタンですぅ！」

はやての返答にツヴァイがキャーキャー喚く。耳元でなければよかった・・・。

「はやて冗談は「冗談やあらへんよ。せやないと逢えへんのやろ・・・初代に」・・・・・・」

・・・・・あぁ。

はやてが俺とのデートにツヴァイをつれてきたのはそういうことか。

「アインスがおるなら話がしたい。ただそれだけや」

「・・・・・ちょっとまってろ」

いきなり行っても向こうがビックリする。左耳に手を当てて念話を飛ばす。

『アインス。ちょっといいか』

『はい、マスター。なんでしょう』

『はやてが逢いたいというんだが・・・』

『用件次第です』

『はやては話がしたいだけと言ってる』

『・・・・・』

沈黙が流れる。やはりだめか。

『主はやてとは私も話したい。ですが・・・今顔を見てしまうときっと私は私でなくなってしまう』
『夜天のプログラムが反応する、と？』
『プログラムからは切り離されてますから私自身が反応することはないでしょうけど・・・逢うと私はきっと崩れてしまう』
『そうか。まぁ無理はさせられないさ。今回はパスだな』
『申し訳ありません』

感情がある分厄介だなこれは。
少し時間をかけるしかないかもしれないな。
はやては納得してくれればいいけど。

「ふぅ・・・・」
「どやった？」
「駄目だ。でも時間をかければいけるかもしれないぞ？」
「そうなん？ほんならあきらめへんよ。話したいことは沢山あるんや」
「実際顔見て言葉が詰まるフラグですねわかります」
「やめぇ！？」

と、こんな感じでメインとなっていた件は終了した。
数分で終わってしまったので後の時間は街にあるアミューズメントスポットに向かうことにする。

「む・・・それならちゃんと着替えてくるわ」
「そうか。んじゃ俺もそれに合わせるように着替えるか」
「へへぇ・・・なんかえぇねこういうん」
「そうか？はやてにあわせたつもりだがな」
「それがうれしいゆーんよ」

満面の笑みを向けてうれしそうな顔をするはやて。
うん、この笑顔を消さないようにしないとな。
他にも部隊のみんなも。
過去に痛みを持つのが多いこの機動六課だ。
できるなら笑顔で運用を終わらせたい。

それには・・・俺が力を振るうしかない。

「守るさ。皆、な・・・」
「・・・なんかゆーた？」
「・・・いや。なんでもない。さ、一旦戻ろうぜ」

はやての背中を押して寮へと戻る。

ギンガＳｉｄｅ

陸士１０８部隊。私が働いてる現場。
そしてお父さんの部隊。部隊長補佐として今はがんばっている。
そんなおと・・・部隊長から呼び出し。
なんでも少しばかり緊急らしい。

「ギンガ＝ナカジマ、参りました」
「おう、まぁ楽にしろ」

お父さんことゲンヤ＝ナカジマ三佐はデスクに座ったまま書類を見てる。
少ししてからちら、と私に視線を向けてくる。

「八神の嬢ちゃんからの協力要請にあった案件でな。ちっと面倒が起こりそうだ。ギンガ、お前見て来い」
「了解しました。直ちに現場に向かいます」
「おう。詳細はデバイスに送っとくからよ」

ピロン、とブリッツキャリバーから音。詳細を受け取った音だ。
街中に遺失物の反応あり。地下通路をゆっくり移動中、か。

「もし何かあれば向こうさんにも連絡しとくからな。無茶すんじゃねぇぞ」
「はい。わかってますよ」

うふふ。こういう心配する時は父親って顔してるんだよなぁ。

第九十七話　休日・昼

ギンガＳｉｄｅ

市街地区へくると地下通路トンネルへと調査に入る。
そこにはトラックが横転して荷物が散乱している事故現場。
何かが入っていたような生体培養ポッドが破壊されている。

「これは・・・何かを入れていた?それを運んでいたというの?」

未だに推測の域を出ない考えは邪推に終わるかもしれない。
もっと調査して真実を見極めなければ。
そうして私はさらに奥へと続く通路へと足を踏み入れた。

フェイトＳｉｄｅ

「ハンカチ持った?ティッシュは?あ、お金足りないといけないから私の分も渡しておこうか?」

エリオとキャロが街に行くの隊舎の入り口までお見送り。
うん、すごく心配だ。

「大丈夫ですよ。僕たちもお給料もらってますから!」
「そうですよ。大丈夫でっす」

うぅ、そう言われたらなんとも言えなくなるじゃない。
でも怪我とかしないかなとか心配で心配で仕方ない。

「たぶん、訓練の時のほうが怪我しますし・・・本当に大丈夫ですから」
「そう？ならいいんだけど・・・気をつけてね？」

二人はどんどん大人になっていく。
私の手を離れるのももうすぐかもしれない。
エリオもキャロも護ってあげたいのに・・・。
それが逆に重荷になることもあるのかな。

「じゃぁ行ってきます！」
「行ってきます」
「うん。いってらっしゃい」

二人が手を繋いで歩いていく。なんだろう。この喪失感。
母親ってこんななのかな。プレシア母さんもこんな気持ちになっていたのだろうか。

「フェイトちゃん。お見送りすんだ？」
「あ、なのは。うん。今ちょうど」

後ろから話しかけてきたのはなのは。
これから一緒に出かける予定だった。

「スバルとティアナもバイクで街に行ったって。作業部のほうから伝言があったよ」
「うん、みんな休暇を楽しめればいいね」
「そだねぇ。私たちも、ね？」

よく見ればなのはは出かける準備万端だ。
私はまだ制服のまま。

「フェイトちゃんより先に着替えてきちゃった。ミラ君にも言われたけど今日はちょっと本気で遊んじゃおうかなって」

ミラ、ナイス！
なのはのこのやる気を無駄にしてはいけない。一分一秒でもっ・・・・！！

「うん、じゃぁすぐに着替えてくるからなのはは待っててね！」
「にゃはは、そんなに急がなくてもいいよ？」

私も着替えに寮へと戻る。恐らく着替えるタイムを競う競技があるならベストタイムを叩き出していただろう。
すぐに隊舎入り口に行くとなのははずっと待ってくれていた。

「おまたせなのはっ」
「ううん、ぜんぜん待ってないよ。ていうかフェイトちゃん早すぎ。ほらまだここが。それに髪も」

そういいながら私の襟を直してくれた。

「さ、行こっかフェイトちゃん」
「うん、今日はちゃんとエスコートするからね」
「にゃは、それは楽しみなの」

昔に戻ったように。笑顔で繰り出す。
まるでそう、二度目の再開の頃の様に。

???Ｓｉｄｅ

チャリ、と鉄の音が鳴る。
静かな空間に鳴った音は静かに透き通って響いた。
誰もいない空間にただ、空しく。虚しく。

「　　ぁ　あ　　」

疲れきって声もでない。ふらふらによろめく足が恨めしい。
壁に伝いながら何処かもわからない出口を求める。
繋がる鎖の先には重い思い箱が取り付けられて。
厳重に封印された箱はただ引き摺られて行くだけ。

何処に繋がっているかも判らない路の先へと――――

今はまだ暗闇の路。

光明を見つけ出す日は――――――――――

ティアナＳｉｄｅ

今日は一日オフということでスバルと一緒に街に出ている。
本当は兄さんと来たかったけどスバルの誘いを断るわけにも行かなかった。

「本当はティアってばお兄さんと一緒に来たかったんだろうけどごめんね」
「謝るくらいならしない。それにあんたと私の仲でしょうよ。たまにはいいわよ」
「えへー。ティアのそういうトコ好きー♪」

まったく・・・いつも調子を狂わせるんだから。
でもそうよね。そういう所に何度も助けられてきたんだわ。

「そういえば・・・ミラージュ隊長の訓練ってきついの？」
「そうでもないわよ。駒取りゲームを延々とするくらいだし。あぁ、でも魔力負荷は慣れないときついかも」

実はこんな今でさえ魔力負荷をかけている。
なんでもミラージュ隊長が言うには本来ならデバイスリミッターの第二段階からの事だと言う。
それを先んじて私はやらされてたってわけ。

恐らく明日からスバルやチビッコ達も魔力負荷をするんだろう。
チビッコ達には丁度良い頃合。魔力は幼年期からのほうが育つらしい。
スバルや私はどうなんだろうか。確かに魔力自体は育ってる気がするけど、どの位育ってるのか見当もつかない。
今度隊長に聞いてみよう。

「うん。それよりも今日を楽しもー。あ、ティアティア。アイスがあるよ！」
「楽しむのは賛成、って。あんたあんまり食べ過ぎないようにしなさいよ？」
「わかってまーす♪」

アイスの屋台を見つけるとスバルがすっ飛んでいく。
このアイスお化けめ・・・。って、他にもアイスがすきなのがいたっけ。
私たちスターズの副隊長、ヴィータ副隊長。
あの人もまたアイス好きだということが最近判明した。

ていうか！スバルのやつなんてもん注文してるのよ！
1、2，3・・・・・・・え、10段ッスカ？

「まったくもう・・・食べ切れるんでしょうねそれ」
「あ、ティア。これすごいよねー。乗せられるだけ乗せられるんだよー？」
「だからってつみすぎでしょ、ソレ。落とさないでよ？あ、私はダブルでスプレーかけてください」

スバルのアイスは異常なバランスを見せている。なんでこれ落ちないのかしら・・・。
そんなアイスを見ながら私もアイスを注文。
さすがにまだ暑くない気候なのでダブルでもちょっと多いかも。
あとスプレーをかけるのはちょっとした好み。

近くのベンチに座ってアイスを食べる。
スバルは・・・一口でひとつか。相変わらずね・・・。

「う〜〜ん、おいひぃ〜〜〜♪」
「いつもながらにあんたのその食べ方はすごいと思うわ・・・・」
「えへぇ、ほめられりた〜♪」

げんなりした顔で食べてるのを見てると道の向こうにエリオとキャロを見つける。

「あれ、そういえばチビッコ達も街に来てるんだっけ」
「あ、ほんとだ。呼んじゃう？」
「やめましょ。向こうも向こうで楽しんでるでしょうし。私たちは私たちで、でしょ？」
「うん、そうだねー。じゃぁこのままアイス食べたらゲーセンいこうよ！」
「はいはい。まったくおこちゃまなんだから」

エリオとキャロなら・・・まず間違いは起きないでしょ。
だったらそのままでもかまわない。こっちはこっちで遊びましょ。
スバルの提案のゲーセンで暇つぶしにいこう。

キャロＳｉｄｅ

エリオくんとでーとっ。エリオくんとでーとっ。
手を繋いで道すがらずっとお互いのことをずっと話してた。
今まで結構話してきたけどまだ知らないことがいっぱいだった。

判らなかった事を知るのはうれしい。たのしい。
フェイトさんを保護者として同じ様に路を選んだ者同志、とても気が合った。
話が弾む中、そんな街通りを歩いているとエリオ君が狭い路地のほうに気を向けた。

「どうしたの？」

私はわからなくて聞いてしまった。

「あそこ。誰かいる」

繋いでいた手を離してエリオ君が行ってしまったので私もその後を追いかける。
暗い路地にいたのは小さな女の子。私たちよりも若干幼いかな。
エリオ君がバイタルチェックしたりしてる。
私はすぐに本部・・・六課に通信を入れる。
するとすぐにシャマル先生が来てくれるそうだ。それまでこの子を保護してるように、と。

よく見たらこの子は擦り傷ばかりだ。さらに手足に繋がってる鎖の先に黒い、箱・・・？
あけてみようと思ったけど開かなかったので六課に帰ってから考えよう。

連絡して数分でスバルさんとティアナさんが到着した。
なんでもすぐ近くにいて私たちのことも見つけてたらしい。
なんで話しかけてこなかったんですか。

「多分この子、そこの地下通路の入り口から出てきたみたいですね。

箱を引き摺った跡があります」
「なら其処を調査すべきね。ロングアチには連絡は？」
「通信済みです。内部は通信が届かないかもしれないのですぐに連絡しました」
「ん。すばやい対応ね」

ティアナさんが言うにはすぐに調べに行きたいらしい。
でもこの子のことがあるので引き渡すまではいるべきだという。

「でもまぁこれで休暇はなしね。隊長たちにも話はいってるんでしょ？」
「みたいですね。すぐに連絡取れるようにはなってたみたいですし。ヴィータ副隊長とシグナム副隊長は寮で待機してたみたいです」

ゆっくりとした休暇はこれで終わり。突発的だけど実践的な状況がやってきた。
私も、がんばらないと。

スバルＳｉｄｅ

なのはさんとフェイトさんはシャマル先生と合流したという情報がきた。
ヴァイスさんのヘリでこっちに向かってきてるらしい。
この女の子を保護したらすぐに六課で治療しないといけないね。

「さて。ヘリが来るまでこの子を保護するわよ」
「「了解」」

周辺の警備と守護。やがてシャマル先生がやってきた。
女の子の衰弱様から見て早急な診断をしてからヘリに乗せた。
ただ、シャマル先生が言うには箱はもう一個あるらしい。
よく見たら鎖は二本。そのうち一本は箱が繋がっている。
そういえばきれた鎖の先は何もない。

女の子はシャマル先生に任せるとして。
もしも、の時のために地下の捜査を行うことにした。
いつもの様にフォワード陣形。
バリアジャケットを着込んで暗闇の中へと身を踊りだす。

はやてＳｉｄｅ

ミラくんとのデートの途中で引き戻されてロングアーチへ。

「遅れてごめんなぁ状況は？」
「フォワード陣が身元不明の女の子を保護。シャマル保護司がヘリで向かってます。途中高町隊長とテスタロッサ隊長と合流」
「ん。ありがと」

簡略的な説明を受けてから更なる指示を出すために頭と気持ちを切り替える。

「はやて。うちの部隊は何時でも動けるぞ」
「ありがとな。できる限り負担はかけへんようにはするけどいざとなったらお願いや」
「気軽に声をかけてくれ」

ミラくんは一番後ろの壁に寄りかかって状況を見てる。

「ディアーチェもありがとな」
「ふん。我がこのまま座していてもよかったがな。その椅子は窮屈だから烏のほうが似合っている」

むす、とした顔でディアーチェが席を譲ってくれた。
煩そうな言葉をついてもちゃんと仕事してくれたんは嬉しく思うとるよ。
シュテルもレヴィもちゃんと仕事してくれたみたいやし。

「保護対象と接触。これより六課へ帰還します」
「了解や。きをつけるように伝えて」
「了解」

さて。どうなるんかな。身元不明の子ってどんな子やろ。
と、フォワード陣が地下通路の探査に入ったんか。シャマルからの通信やとレリックが、あるやと？
フェイトちゃんはこれを知って・・・・・るんやろぉなぁ。

「ヘリの進行方向に未確認物体多数！」
「っ！・・・来おったか」

画面に映し出されるのは飛行型のガジェットドローン。
しかもかなりの数が召還されてる。

「あれはわたしが落とす。リィン、来(き)ぃや」
「はいです、はやてちゃん！」
「ディアーチェ、もう少しここ、頼むわ」
「ふん。我らが居るとなるとここはもう不屈の要塞よ。気にせずに飛べ、烏」
「頼むわ」

ロングアーチは力強い仲間が護ってくれる。
私の黒い翼は力強く羽ばたいた。

空に上がると遥か足元に雲。
ずいぶんと高高度まであがってきたものだ。
せやけど子の高さでないとわたしの魔法が危ない。

「認証・・・八神はやてのリミッター解除要請」

ピピ、と電子音の後にクロノ提督の顔と一緒に「了承」の文字が浮かびあがる。
魔力負荷のような倦怠感から解放される。

「リィン、ユニゾンや」
「了解です！」

ユニゾン・イン！！！

黒から灰へと。変貌していくのが感じ取れる。

「いくでリィン。演算はよろしゅうな」
「任せるですよ！」

『フレースベルグ！！』

五つの魔法陣から鋭い魔法が射出されていく。
そしてその魔法はガジェットドローンに直撃すると反応を起こして爆縮を起こす。

ミリッターをはずしたわたしは幾度もフレースベルグを射出していく。
そしてそれが触れるたびに爆縮を引き起こす。

ミラージュＳｉｄｅ

画面にははやてが大暴れしてる映像が流れている。
確かにあの数ではリミッターをはずしてもかまわないだろうけど、ちと尚早すぎるきもする。
いや、違うな。これは・・・・嫌な気がする。

「ディアーチェ。俺も動く準備をしておくからな」
「む、マスターもか。了解だ。精々手加減してくるがいい」
「できるなら、な」

視線は画面から動かない。その時が来るまで俺はじっと動くのを待つだけ。

???Ｓｉｄｅ

市街地ビルの上で状況を見る。

「なぁんかぁー。あれってどうおもう?ディエチちゃん?」

「クア姉、あんまり見つかるようなことしちゃだめだともうな・・・・」

なぁんのことだかわからないわ。ただこうしてビルの上に居るだけなのにね?

「でも、ま。このままじゃ面白くないからすこーしだけ。遊んじゃいましょうか」

ぴ、ぽ、ぱ、と。キーボードを打ち込んでいく。

うふふ。これでまた楽しくなるわよぉ?

まずは部隊長さんには幻影で遊んでいてもらいましょうかぁ。

ギンガＳｉｄｅ

地下通路から水路に移動。足場は水が走って悪い。
なんともコンディションが悪い場所なんだろう。
ブリッツキャリバーもたまに滑ってしまうくらいにぬるぬる。

ウィングロードを使えばいいんだろうけど無駄に魔力を使いたくはない。
途中壁が塞がってたけどこれは仕方ないよね。

「せーのっ！！」

左のナックルで壁を突き破る。粉塵と瓦礫が舞い上がって前が見えない。
これはマズったかな・・・？
と、ここで壁の向こうから魔力反応！？敵！？

「・・・・・・・・っ」

沈黙のままに粉塵の中で構える。数は・・・４つ。やばい、かな？
粉塵が消えたら一気に仕掛けようか。
と、だんだん粉塵が消えていく。
すると向こうには見知った顔が二つあった。

「ギン姉！」
「あ・・・久しぶりね、スバル」

あぁ。魔力反応は子の子たちだったのか。
六課のフォワードメンバー。
スバルの親友のティアナに六課の子が二人。

「陸士部隊からの助っ人ってギンガさんだったんですね」
「うん。そうなるのかな。みんなは此処には？」
「レリックが紛失されたらしいのでその捜査に」
「レリック・・・もしかしたら私が追ってるのと同じものかも」

あの生体ポットからでてきたのが持っていったとしたら、って考えると辻褄があいそう。

「私も一緒にいくわ」
「はい。心強いです」
「「ありがとうございます！」」

あら。意外と小さい子達は礼儀がなってるわね。
スバルも見習ってほしいかも。

「ギン姉、今なんか考えたでしょ」
「え。なにも？」

こういうときのスバルって鋭敏なのよね。

「エリオ＝モンディアルです！」
「キャロ＝ル＝ルシエであります！」
「ギンガ＝ナカジマです。よろしくね」
「「はい！」」

うふふ。子供は元気があっていいわね。

「じゃぁ指揮はティアナ？」
「はい。いいですか？」
「もちろんよ」

さて、ティアナの指揮力がどのくらいか見せてもらおうかな。

合流した後は特に何もなく奥までやってきた。
一番奥と思われる場所は意外と広かった。
なんというか、完全に部屋。
その中央に小さな黒い箱がある。

「あ、あれって！」

スバルが声をあげる。どうやら見知ってるみたい。
彼女たちの目的物かな。

「すぐに確保しなくちゃ！」

一番機動力のあるスバルが動く。箱までもうすぐのところでスバルの目の前で小さな花火が上がる。
いや、あれは小さな火花。一瞬のことで十分に虚をつくには充分。
やられた。

「おいおいおい！そいつはアタシたちがいただいていくぜ！」

声が響く。何処からかということを知らせないようなやり口。
奥の柱から姿を現したのは――――小さな女の子と外骨格の召還魔。そして小さな使い魔だった。

「それ・・・わたしてもらう」
「だめだよ。これはとっても危ないんだから」
「・・・・・ガリュー」

外骨格の名前なんだろう。名前を呼ばれると外骨格が突進してきてスバルを突き飛ばした。
結構規格外の力じゃないの。人の妹吹き飛ばすなんてね。

「あんたたち一体何者・・・？」

「特に名乗る気はないけれど・・・・」

「アタシは名乗るぜ！アタシが烈火の剣精、アギト様だ！」

名乗った剣精は３０ｃｍ程の使い魔でした。

第九十八話　休日・午後

ギンガＳｉｄｅ

あれは・・・古代ベルカ式の融合騎？
炎熱系変換資質も持ってるとかどれだけ詰め込んでるのよ。

パチパチと火花が箱の周囲で撒き散らしてる。
どうやらあっちの新手と同じみたいね。

「ティアナ」
「はい。わかってます」

すぐに念話で指揮を出してるみたい。こっちにも飛んできた。

『ギンガさんは機動力で撹乱してください。その間に私とエリオでつぶします。キャロからのブーストを受けて下さい』

うん、なるほどね。こう広いなら私の技能が活かせる。で、キャロからブーストの魔法を受ける。
スバルも同じことを言われたらしい。アイコンタクトしてくる。
なら、ここでやってみせましょう。姉妹の技を！

「ブリッツキャリバー！」
「マッハキャリバー！」

スバルと同時にウィングロードを展開する。水色のスバルの道と藍色の私の道。交互に重なって螺旋を描いて離れて。
水路の中を縦横無尽に展開された道は隙間なく走り抜ける。

あれ、なんだかスバルのウィングロードが昔と違う。まるで何処に向かっているのかが見えない。

『ギン姉、これね、ミラ隊長の教導成果だよ！』

あぁ、そういえばあの人は今六課にいるんだった。つまりはスバルを見ていてもおかしくない。

だったらこれも頷ける。

向こうの小さい子と外骨格、そして使い魔。戦力がどの位なのかがまだわからないけどそれはこれから測ればよし！

「いくよ、スバル！」

「うん、ギン姉！」

ウィングロードに乗り走り出す。更に其処に幻術がプラスされた。

『ティアナ？』

『はい。差し出がましいですけど更に幻惑させる気です』

へぇ。随分と考えるようになったじゃない。ならそれに乗ろう。幻術の私達とで召還師の子と外骨格を翻弄する。

融合騎のほうは直接戦闘力がないと踏んでの行動。

案の定翻弄されてる。道が一本じゃないから余計だ。

何処から来て何処に行くのかが判らない以上、先読みをさせないようにする。

その隙にエリオが一気に突進。あのデバイスの突進力、半端ないわね。

一気に箱を奪取する。その周囲にはティアナの援護弾が浮遊してる。

幻術と更に援護弾なんてティアナも成長してるじゃない。

「せーのっ！！！」

スバルが先に近づいて先制攻撃。ナックルでの直接攻撃が外骨格に炸裂した。

外骨格は召還師を護るように立ってスバルの攻撃を受けた。

更に其処に私が畳み掛ける。

「もういっかいっ！！！！」

私の行動を見据えてスバルが移動する。それまで外骨格の視界の邪魔になるような動き。

いつもと動きが違うのはブーストがかかってるからかも。いい調子。

左のナックルで一気に顔面に叩き込む。外骨格が錐揉みながら後ろに吹っ飛ぶ。

「ガリュー！」

融合騎が叫ぶ。あぁ、あの外骨格の名前はガリューっていうのか。

さぁ、油断はしない。まだ続くわよ。

アギトＳｉｄｅ

おいおい！ガリュー吹っ飛んじまったぞ！？

なんだってんだあいつら！ドクターの言ってた雑魚じゃないのかよ！

この前の傷がまだ回復しきってねぇんだぜ・・・？

「ルールルー！」
「わかってる・・・っ！」

ルールルーは今の重大さを認識してる。こいつらはやばい。ドクターのデータ以上じゃないか！
なんだってんだよ。特にあのオレンジ頭のやつの魔力がずば抜けてる。
でもここにはこのアギト様がいるんだぜ！

「このアギト様が居る限り好きにゃさせねぇよ！！」

炎爆を起こしながら殴ってきた二人の目の前で爆ぜさせる。
それだけで充分。あとはルールルーがやってくれるってばよ！
その間にガリューを助け出しとくぜ。

ルーテシアＳｉｄｅ

わたしの邪魔をするのはだめ。
ドクターは約束してくれたの。
お母さんを助けてくれるって。

「だから・・・邪魔しないで」

強い意志力がデバイスに集まるのがわかる。
わたしの友達をここに呼ぶ。
一気にみんなつぶれちゃえばいい。
ガリューとアギト以外みんなつぶれちゃえばいいんだ。

「きて・・・地雷王」

この場所で呼べるのといえば彼。
さぁはじめましょう。

「壊して、地雷王」

召還されたコはとても大きくて黒光りしていて硬くて反り立っている。
わたしの自慢の子の一人。

今居る水路を完全に包み込むほどの巨体を震わせて地震を発生させる。
これでこの水路を完全に封鎖してしまおう。
地雷王、お願いね。

「ガリュー」

小さく名前を呼ぶ。ガリューも無事みたい。アギトが見てくれてる。
だったらここにはあれを奪い返せばいいだけ。
ガリューは動けない。あいつらみんな地雷王が埋めた後に掘り返せばいい。

「おおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああ！！！！！！！！！」

天井をぶち破る咆哮。これはわたしの召還じゃない。
見上げれば真紅の何かが降ってきた。

「無事か、ガキんちょ共！」
「ヴィータ副隊長！？どうしてここに！？」

「ファントム分隊長からの進言であたしはここに来るように言われただけだよ。それよりもあぶねぇな此処」

キョロ、と辺りを見てる。

「また、増えた・・・」

なんだろう。胸の奥でイライラが止まらない。あぁ、そうか。みんな潰しちゃえばいいんだ。

ヴィータＳｉｄｅ

ミラージュから緊急の伝言を受けたあたしは隊舎から一気に市街地へと飛んだ。
他にもなのはにはその場待機だの指示をとばしてた。
はやてが空に上がってる以上、地上はあたしたちがまもらねーとな。
ミラージュも何か考えがあるみたいだし。
ちなみにシグナムはこの上で警護になってる。

「お前ら、レリックはどうした？」
「ここに」

エリオが小脇に抱えてるのは黒い箱。

「少しばかり中身見ちゃいましたけどね」
「お前な・・・物騒なモンだって理解してるか？」
「だからこそ、ですよ。」

ティアナが進言してきた。なるほど、何か策があるってんだな。
だったらそれにノってやる。隙は見せるなよ？

「こっちのことは無視？いきなりやってきて・・・」
「ハッ、忘れちゃいねぇーよ！」

後ろを振り返れば召還師の匂いをしたやつが立っていた。
随分と小さいな。エリオやキャロとおなじか少し上くらいか。

「てめぇーは誰だ！」
「・・・・名乗らない。その箱の中身、渡してくれるならすぐに退く・・・」
「エリオ！その箱しっかり持っとけよ！」
「はい！」
「ティアナ、指示！」
「あ、はい！了解です！」

恐らく此処は最初から居たティアナのほうが指示を出しやすい。だったら任せたほうがよさそうだ。
何よりもこいつの成長ぶりは目を見張るものがあるし。
さて、この場面どう乗り切る？

なのはＳｉｄｅ

身元不明の子を収容したヘリに乗ったまま待機していたらミラ君から通信が入った。

『なのは、今すぐバリアジャケットに着替えて左側の警護に出ろフェイトも其処にいるなら右側の警護を伝えてくれ』

通信の内容をフェイトちゃんに話すとすぐにバリアジャケットに着替える。

「シャマル先生、わたしたちは外に出ますので後をお願いしますね」
「はい。二人とも気をつけてね」
「「了解です」」

敬礼を交わして互いに外へと。
フェイトちゃんが右側。私が左側に躍り出て周囲の検索と警護。
ミラ君は何かあるっぽいような感じで言ってたけど本当に何かあるのなら護らないとね。
はやてちゃんも上空でガジェットの相手してるみたいだし。

「ロングアーチは今誰が指揮を出してるの？ミラ君？」
『なんだ。シュテルのオリジナル。話しかけるでないわ』
「え、ディアーチェちゃんだったの！？」
『お主等オリジナルの変わり身を我らがしてるのだ。光栄に思いつつマスターの指示に従っておけ』

「う、うん。わかったよ」

独り言いったんだけど聞かれてたみたいでビックリ。
でもそっか。だから休暇ができたんだもんね。あとでありがとうをいわなくちゃ。

・・・・さて。気持ちを仕事に切り替えよう。
このヘリは落とさせない。わたしたちがいる限りは。

クアットロＳｉｄｅ

ふっふ～～ん。あの白いのと黒いのヘリを護ろうとしてるみたいねぇ？
でもざぁ～～んねん。
たった二人じゃ何もできないの。

でも、その素体は返してもらわないといけないのよねぇ。

「ディエチちゃん、狙える？」
「あの距離なら問題はないよ」

ガシュン、とディエチちゃんの持つ固有武装を発動させる。

「あっはぁ、有能な妹をもってお姉さんはとっても感激です♪」

砲撃の先端がヘリを狙う。砲撃の直前まではわたしのＩＳ「シルバ

ーカーテン」で完全迷彩で透明化してるからばれないわよぉ。
と、その前にルーお嬢様のほうがピンチねぇ。

「ディエチちゃん先にルーお嬢様のほうを片付けちゃうわね。準備はしておいてねん」
「うん。了解だよクア姉」

さてさて、通信をしましょうか。

ルーテシアＳｉｄｅ

戦況は五分。こっちはガリューと地雷王しかいないけど。
アギトはわたしの護衛についてきてくれてる。ちなみに最後方。

「ちっ、埒があかねぇ！」

あっちの赤いのがなんだか言ってる。でもこっちもそろそろ逃げないといけないんだけど。
天井、地雷王が暴れると崩れちゃうし。
誰かさんが穴を開けたし。

「ガリュー・・・行って」

ガリューはわたしの声に反応して前線へと躍り出る。
この前の青い剣士が出てこなければ勝てる。
前線で赤いのとガリューが戦ってその赤いのの援護で向こうはずっと忙しそう。

「アギト。今ならいける？」
「やってやれないこともないけどサイズがアタシにゃでっかいよルールー」

そうか。アギトかわいいもんね。
じゃぁガリューに隙を突いてもらおうかな。

『ルーお嬢様、クアットロですわぁ』
『なに？いまいそがしい』
『えぇ。見えてますとも。実はすぐ近くにいるのですよ。お手伝い、させてくださいな』
『いいけど・・・だいじょうぶ？』
『セインを向かわせましたからすぐに到着しますよぉ』

セイン。そうか、それならいけるかも。

『クアットロ』
『はい、なんでしょう？』
『セインに此処まできたら姿を出さずにあっちの箱を奪うように言っておいて・・・』
『はいはーい。了解ですよぉ。ルーお嬢様のためならなんでもしちゃいますからっ♪』

ここで通信が切れた。ガリューにもアギトにも念話通信で通しておいた。

そうすればすぐに行動するべきことが出来上がってくる。
セインが到着次第に行動開始。箱を奪ったら逃げよう。

少しばかりこう着状態が続いていたところに地面からセインが現れる。
意表を付かれたのか向こうは一瞬動き画と待った。その隙にセインが箱を奪取。
そのタイミングでわたしたちも上に逃げる。
戻ってきたガリューに捕まって天井の穴から上に出る。地雷王お疲れ様。もう戻って良いよ。
アギトはわたしの懐にいて掴まってる。

外に出ると眩しい光りが入ってくる。目を細めて周りを見ると朽ちた高速道路みたい。
地上におりるようにガリューに言うとそこにおろしてくれた。
出てきた穴から数十メートルくらい離れた場所。

するとすぐ後ろにさっきの赤いのたちがいた。

「おい、もうおとなしく捕まれ！」
「・・・・・・」

あぁ、どうしようか。またガリューに頼むのも負担が大きい。

『お困りですねルーお嬢様』
『クアットロ』
『お助けしますわ。私の言葉をそっくりそのまま言えばＯＫですわ』

いいタイミングで通信がきた。さっきよりクリアに聞こえるのは地下だから？

『捕まるのはいいけど――――また、大切なものをまもれないかも、ね？』
「捕まるのはいいけど――――また、大切なものをまもれないかも、ね？」

クアットロの通信の言葉をそっくりそのまま口にすると赤いのの表情が見る見る青く変わっていく。
何か意味があったのだろう。向こうの動きが緩慢。

今のうちに逃げよう。と思ったらセインが一気に私達を地中に引きずり込んだ。
これで終わり。今日は痛みわけ。それでもレリックはこっちにあるから勝ち、かな？

クアットロＳｉｄｅ

うっふっふー。ルーお嬢様のほうはこれで完了ねぇ。
セインちゃんに任せておけばいいでしょう。

「じゃぁディエチちゃん。やっちゃいましょうか～」
「ＯＫ、クア姉。じゃぁやっちゃうよ」
「あぁん、どんどんやっちゃってぇ～ん♪」

ディエチちゃんのイノーメスカノンがチャージされていく。
チャージが終われば何の躊躇いも無く打ち出される魔力砲。

打ち出される瞬間まで私のシルバーケープで見えないようにしてたのだから認識してから動くのも遅いのよぉー。

ほぅら。さっさと落ちちゃいなさいな～。

なのはＳｉｄｅ

レイジングハートが急に魔力反応を感知した。
ヘリの左側からの砲撃魔法。まさか本当にくるなんて思っても見なかった。

「なのはっ！！！」
「フェイトちゃん！球形防護障壁！」
「了解！」

球形の防御魔法を展開してヘリとわたし達と防護する。
展開の演算はフェイトちゃんとバルディッシュが手伝ってくれる。

直撃寸前にやっと展開を終了する。
爆炎と衝撃が轟く。耳を劈く程の音が響き渡った。
防護壁を本気で展開させる。これを割らせるわけには行かない。

「この威力、ディバインバスターくらいかな」
『同程度のダメージ数値を記録しました』
「うん、やっぱりね。自分であたったことが無いからわからなかったけど凄いね」

『マスターの魔力は更に上昇してますから』

レイジングハートが分析してくれた。ディバインバスターと同クラスの砲撃なんて早々無いよね。

いや・・・ミラ君の部隊ならこれも牽制くらいの威力なんだっけ。

いつかあのレベルまでいきたいな。

徐々に衝撃や爆煙が収まっていく。其処にはまた静寂が鎮座した。

「狙った場所、わかる？」

『すいません。ロストしました――――――しかし、『幻影』がすでに行動しているようです』

「ミラ君が？」

そうか。あの砲撃の一瞬を見抜いたのかな。

だったらこっちはこのまま警護し続けよう。

「フェイトちゃん。お疲れ様。でもまだ気を抜かないで警護していこう」

「うん、なのはもお疲れ。このまま六課に帰還しよう」

「じゃぁ、ヴァイス君。お願いね」

ヘリを警護しつつ。六課へと戻る。砲撃したほうはミラ君に任せておけばいい。後でお話聞かせてもらえばいいしね。

ミラSide

さて。ヘリが砲撃されたんだが。
その一瞬を狙って俺はその場所をサーチ。すぐに捉える。
あぁ、あれか。全く・・・・馬鹿な真似をするもんだ。

「行くぞ」

短く声だけを残して俺は六課に出向されてから一度も使ってなかったスキマを使う。
ロングアーチに居た面子は一瞬の事で理解できてなかったみたいだが、その場に居たディアーチェだけが一瞥で見送ってくれた。
スキマの中に居るアインスに一瞥してからスキマを抜ける。
そうすれば其処はすでに外。更に言えばビルの上。
そして眼下には二人の女。

片方は眼鏡。もう片方はカノンを・・・射砲を持っている。

「うん、じゃぁディエチちゃん、さっさと帰――――――っ!?」

行き成り現れた俺の気配を察知したか。中々の感知能力だな。サポート系か？
眼鏡はすぐに振り返れば屋上へ出る小部屋の上に立つ俺を見つけ出して睨んだ。
次いでホンの数瞬だけ遅れて砲手も向いた。

「どなた、かしらね？こんなところで」
「いや、別に。特にお前らに用はない。が、な――――――」

ここで気配を通常に戻す。考えてたのは少しだけ様子を見てからと

思ったのだけどな。バレたなら仕方ない。
ただし、少しばかり威圧的に。

「なに、前たちはいました事など特に気にもしない。だけどな――――うちの連れ達にちょっかいを出したのは頂けないな」

ただただ威圧。こいつら確かなんだったっけか。もう記憶が曖昧だ。だけどこのイラつきを撒き散らすには丁度良いかもしれない。

「用はないのなら邪魔しないでくださるぅ？わたし達はもう帰りますからぁ～」

なんだろうな。このイラつき。更に増したぞ。この眼鏡の喋り方は癪に障るというか・・・。
あぁ、そうか。うん。仕方ないな。

「取りあえずあれだ。お前ら二人――――――『平伏（ヒレフ）せ』。」

重き言葉を載せて眼下の二人の膝をつけさせる。
ここに来て新しい能力を使うとは思わなかったがまぁいい。使って楽なものはいつでも使うのだ。

「俺の前で何を頭を上げるか。身の程を知れ。中途半端な存在め」
「なっ！？」

行き成り何が起こったのかわかってない二人。説明などしてやるものか。

「俺の知り合い・・・以上の存在を狙っておいて無事に帰れると思ったのか、この人形ども」

なのはとフェイト。シャマルとヴァイス。更に身元不明の子を狙うとはな。
どれを狙ったのかは後で聞くとしてまず灸を据える必要があると見た。

「くっ・・・ハッ！残念だけど帰りますわ！」

ん？不可視の魔法か？姿が見えなくなってきたな。
だけど其処にまだいるんだろう？転移ってわけじゃなさそうだ。
適当な剣を練成で取り出して今まで居た場所に投げつける。
狙いなんか適当。あたればよし。

大半は床に刺さるが数本はどうやら体に当たったようで姿を見せる。
なんだ？その程度でしかないのか？
集中力に順ずる能力なら削っていけば逃げられないか。

「腹いせはこれで終わりにしてやるよ。お前らどうせ兵隊だろ？ボスによろしくな」
「くっ・・・・・」

一瞥睨んでから眼鏡が不可視を展開して完全に気配を消した。
追う事は無く、はるか遠くにいるヘリを見てから六課に帰還する。

フォワード陣が確保した箱は奪われはしたものの、中身はキャロが所持していたようでレリックは無事六課へと運ばれた。
身元不明の子は一番安全な場所――――聖王教会の病院へと移送された。
シャマルが付き添ってるし大丈夫だろう。
なのはもシグナムも今の仕事が終わり次第向かうという事だし。

こっちは後片付けをするだけだ。
はやてには今度の休暇にデートの続きをすると約束させられた。
ソレを聞いたフェイトもその次にデートをすると言ってきたのでそっちも後が怖いので約束した。

クアットロＳｉｄｅ

何とかホームに戻ってきた私とディエチちゃんは体を震わせながら中へと帰ってきた。
妹達に心配されながらもウーノ姉さまに報告。
あの男はやばい。何者かはわからないがとにかくあの男は本能が危険と判断した。
頭の中で警鐘が鳴り響いている。今も。

「話はわかったわ。ドクターにも話しておくから今は休みなさい」
「わかりました・・・・」

しかしあの男は許せない。
私の体に傷を負わせたあの男は絶対に無残に無慙に惨たらしく酷く殺そう。
あぁ、その方法を考えるだけで達してしまいそう。
生体ポッドの中でいい夢が見れそうよ。
うふ・・・うふふふ。

ཀཀཀ

第九十九話　新たな出会い

フェイトＳｉｄｅ

六課の休暇と称した事件から一日が明けた。
私達は昨日の事件の纏めを読んでいる。
主にフォワード・・・ティアナ達からの報告書とレリックの事。

「レリック・・・まさかこんな所にまで出てくるなんて・・・・」

体を休めるように椅子に凭れ掛かる。ギシ、と背凭れが軋んだ。
レリック関連の事件は集まってきてる。
これもこの機動六課という存在の性質なんだろう。

そういえばあの身元不明の子は聖王教会の直轄の病院で様子を見るようだ。
はやてから騎士カリムへと何かしらの話が通ったというのは耳に挟んだ。

カリム＝グラシア。
聖王教会の騎士。管理局少将。肩書きはかなりのもの。
教会でも円卓に座する事も有るとか無いとか。
この機動六課のバックにいる一人――――――。
そして・・・はやてと同じ古代ベルカの希少能力（レアスキル）持ち。

随分と背景が凄い人だな。しかもそんな人から呼び出しがかかるなんて。
そう、私となのは、はやては騎士カリムに呼び出しをうけているのだ。

重要な話がある、と。
なのははすでに咲きに病院であの子の様子を見に聖王教会の領地に行っている。
シグナムも其処に同行している。あちらのシスター・シャッハに挨拶があるという。

私もすぐに向かう事だろう。今は先にやらなければならない事を済ます。
でなければ、安心していけるわけが無い。

「そうもいうがよ。まぁ気にせずにいってくれてもいいんだぜ？」
「ヴィータ」

後ろから声をかけてきたのはヴィータだった。
手には大量のデータディスクを抱えてる。

「うちの隊長とおまえんとこの副隊長に見せなきゃいけない案件も混ざってる。もってってくんねぇかな」
「うん。かまわないよ」

データディスクを受け取ると半分がソレだった。

「その丁度半分が二人分だ。確かに渡したかんな」
「了解だよヴィータ副隊長」

データディスクはバッグにいれた。これで忘れないはずだ。
ヴィータは用件はそれだけだ、と告げて自分の席に戻っていった。
はやてももうすぐ聖王教会に行くんだろう。其処に同行させてもらおうかな。

ヴィータＳｉｄｅ

昨日の戦闘から一日明けた。
その事後処理みてーなもんで殆どが六課から離れるとなってその対処に忙しい。
フォワード陣には自習と銘打って自主訓練させておいた。まぁミラージュが見てるから大丈夫だろ。
それに昨日の出動後だし軽く流す程度だと信じたい。
何人かいなくなる以上、あたしがちゃんと見てないといけねーしな。
主にミラージュの幻影式の抑制とか。

それに影武者みたいな感じではやてがディアーチェをおいていくのはいいけどなんか調子狂うんだよなあいつ。
夜天の書の闇から生み出されてミラージュの魔力で生きてるあいつら。
はやての魔力で生きているあたしら。
何もかわらねぇ。

本当なら接するのも普通にやれるはずなんだけどな。
どうしても・・・心の奥で何か引っかかる。本当は違いなんてねぇのに。
あとでシャマルに相談にいくか。

シャマルＳｉｄｅ

ヘリで運ばれた少女はなんとか応急処置を終えた。
そこではやてちゃん・・・八神部隊長が用意してくれていた病院へと運ばれていった。
バイタルはかなり低下していた。まるで・・・・そう。
実験後のような疲労も見えた。

何よりも。そう、何よりも、よ。

あの鎖は外せなかった。六課の武装隊の力ではまったく歯が立たなかった。
諦めるしかない、と思っていた矢先にミラージュ分隊長がやってきて、鎖を外した。

誰が何をしても外せなかった鎖をただの串揚げの串で撫でただけで簡単にパキンと割れるように外れた。
その場にいた武装隊はまったく気づいていなかったけど・・・あれは異様ね。
まるで外れた鎖が全然その場に無かったような感覚だったんだもの。
アレはいったい何なのかしら・・・・１０年も一緒にいてもまだ彼のことはわからない。

いつかわかるときが来るんだろうか。

そしてそんな彼にはやてちゃんを任せられるのか・・・・。

わたし達ヴォルケンリッターがそれを調べるわけにはいかない。
はやてちゃんから静止の命令があるから・・・・。

そういえばクロノ提督がユーノ司書長に無限書庫で彼を調べてくれという任務を与えたって言ってたっけ。
今はそっちの調査次第ね。

ミラージュＳｉｄｅ

「よーし。んじゃ、まずは軽く流すか」

早朝の訓練時間からすでに数時間。食事時間は取ったし昼間では軽く流すか。
でもこいつら昨日の時点でファーストリミッター外してるんだよな？
んじゃ、適当にレベル上げておくか。

「昨日の時点でファーストリミッターを外したわけだが、それを昨日は感じれたか？」
「と、言うとどんな感じなんですか？」
「今までやってた訓練ではデバイスの力をかなり抑え込んでたわけだ。で、それを解除したんだから多少は昨日の戦闘に影響が出たはずだが」
「・・・そういえば魔力出力がいつもより安定してました」
「あ、それ私もだよ。なんていうか、凄く魔力運用がスムーズにいけたっていうか」
「あ、スバルさんもですか？僕も同じなんです。特に咄嗟の判断とかが」

「つまり、デバイスが私たち自身にもリミッターをかけていたって事ですか？」

ティアナは中々直観力があるな。
直感で動く前衛と理論で動かないといけなくなる後衛か。
いいバランスだな。ここにあとはもう一人くらい増やせそうだ。

「まぁ、昨日の反省を生かして今日はやっていくぞ。なのはとは違うように組んでるから体がついてこないかもしれないがまぁがんばれ」

なのはと同じように組んでも面白くない。体が無為しいに動けるようになった所で違う動きを覚えさせる。
意地悪じゃないぞ。どんな状況でも動けるように臨機応変、咄嗟の判断力だ。
その点はエリオが一歩リードしてるな。

よく見れば何かしら突出してるな。

頭脳。理論。戦術。戦略のティアナ。
これはもう俺の下にいる以上は最低でも一年後の部隊運用期間終了までには執務官と同レベルの指揮官能力を得てもらう。

機動力。瞬間の機転。破砕力。勇気のスバル。
俺の持つ格闘術を混ぜて覚えさせるか。基本はストライクアーツだしな。恐らく十分地金にはなる筈だ。

判断力。突進力。意思の強さのエリオ。
槍捌きは十分なものになってきた。あとはそれをデバイスとしてではなく、いっぱしの武器として扱うようになれるように。

慈愛。守護。補佐。どんな事にも負けない心の強さを持っているキャロ。
まずは・・・守護竜との対話から始めさせるか。心は十分育ったはずだし自分の力にも向き合ってもらわないと。

ま、ここらへんからはじめるかね。
その為に俺だけじゃなくてティーダとランサーとアリサに来てもらってるわけだし。

ティーダはティアナに。
俺はスバルに。
ランサーはエリオに。
アリサはキャロに。

それぞれの一日が進んでいく。

???Ｓｉｄｅ

ここはどこだろう。真っ白な部屋でベッドに寝ている。
近くに人形がある。ただ、これが人魚なのかはわからない。何を模した物かもわからない。
でもコレはとっても優しい気持ちになる。そばにいたいと思えた。
そんな気持ちになったのははじめてかもしれない。

暗い奥底で痛いことの繰り返しの毎日が嫌だったから。

逃げた。でも体に繋がったアレはとても重くて。
何処までいけたのかわからない。
もしかしたら連れ戻されてるのかも知れないけど。
それでもここはそんなに寒くない。
むしろ暖かい。日差しもこんなに感じるのは初めてかもしれない。
眩しい。

それでも・・・ここにいるのはだめ。もう痛いことも怖い事もいやだから。
だから――――――私はまた逃げた。

なのはＳｉｄｅ

あの金髪の少女が病院から姿を消した、とシスター・シャッハから連絡を受けた私は病院の敷地内を探す。
シグナム副隊長にも病院の中を探してもらうように頼んでみたら快く受けてくれた。
緑の多い庭を探す。
すると其処に・・・・少し前に茶色掛かった金髪の女の子がいた。

「あは、見つけた」

前のほうを歩いている後ろ姿を見つけた。うん、確かにあの子だね。

「みーつけた。なにしてるのかな?」

すこーしだけ遠くから声をかける。

怖がらせてはいけない。だから遠くから声をかけて自分をアピールする。

すると女の子は私の声に気づいて振り向いた。

左右の違う色の瞳を向けてくる。

綺麗。

第一印象はこれだ。緑と真紅のオッドアイ。

綺麗な色彩が光を反射している。

「ママ・・・どこ」

「ママをさがしてたのか。じゃぁおねーちゃんがママをさがしてあげよっか?」

「・・・ほんと?!」

「うんうん」

私の言葉に女の子は警戒を解いていく――――――はずだった。

「なのはさん!あぶなぁーーーーーーい!!!!!」

行き成り病院から声が聞こえた。声、というか絶叫に近かった。

視線が、視界が捕らえると其処にはバリアジャケットに武装したシスター・シャッハが飛んできた。

文字通り飛来してきた。

そして私と女の子の間に入って立ち塞がる。

手にはトンファーを。彼女の主武器であるデバイスを構えて。

「大丈夫ですか、なのはさん！」

「シャッハさん・・・・少し――――――お話しましょうか？」

ぽん、とシスター・シャッハの肩に私は手を置いた。

それだけで。たったそれだけでシスター・シャッハは驚愕と恐怖を入り混じらせた顔を見せたのだ。

なんということでしょう。

十数秒後。

煙を立てて茂みに横たわるシスターと熱を排出してるレイジングハートを手に持つ私がいた。

「おなまえ、いえるかな？」

そんな事は何も無かったかのように振舞う。うん、普通だよ？

「ヴィヴィオ・・・・」

「ヴィヴィオか。いい名前だね」

ヴィヴィオか。この子の家族を探してあげないといけないね。

でもまずはついてきてくれるかな？それは心配だな。

いざとなったらフェイトちゃん直伝の技を出すしかないけどっ・・・・！

「ママ、さがしてあげるからね。ちょっとだけ我慢できる？」

「・・・できる」
「うん。じゃぁ、すこーしだけ我慢しててね。きっとおねーちゃんがさがしだしてみせるから」
「・・・・・・うん」
「じゃ、約束」

ヴィヴィオが近づいてくる。するとギュ、と私のスカートの裾をつかんで少し、泣いた。
ヴィヴィオをギュ、と軽く抱きしめて、この子の親を見つけ出すまで私は頑張ろう。

この後、はやてちゃん、フェイトちゃんと合流して騎士カリムと歓談。
騎士カリムの能力を持って予言を聞く。
其処には六課の設立理由と、これからの混沌についての助言を承った。

更に負けられなくなった。でも引くわけには行かないね。
ヴィヴィオとも約束したし。

第百話　姉妹模擬戦

はやてＳｉｄｅ

身元不明の子・・・あとでなのはちゃんからヴィヴィオという名前という事を聞く。
そのヴィヴィオが聖王教会直属の病院で検査やら何やらでお世話になっとる間にカリムが話があるっちゅーんでカリムの部屋に集合した。
わたしを中央になのはちゃんとフェイトちゃん。
その対面にカリムが座っとる。

カリムの持つ希少能力「預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）」によると何か大きなことが起きるゆーこと。
その為に機動六課を立ち上げさせたとかそのバックについたとか。

故にその警戒を怠らぬように頑張ってくれ、という激励。
なぜかクロノ提督もおったけど。まぁバックアップの面々が一同に、っちゅうんもな。
つーことで三提督はおらん。まぁ当然やな。お忙しい方達やし。
もう一人のバックアップもまだ顔も名前も通達が来ぃひんけどなー。
誰やろぉか。

難しい話もコレで切り上げ。あとは和やかなお茶会へ。
・・・・・・しかしカリム。その預言者の著書が一年に一枚やとしたらあんた、いったい何歳やねん。

なのはＳｉｄｅ

騎士カリムとの話が終わってから聖王教会に行ってヴィヴィオの保護観察者として身元を引き受けた。
恐らくこの子は親がいない。探しても無理なんだろう。
フェイトちゃんが言うには人造魔導師・・・プロジェクトＦ．ａ．ｔ．ｅの源流。
その実験成果による成功例・・・。フェイトちゃんはもうその犯人に目星がついてるみたいだけど教えてくれなかった。

だったら。

この子を育ててくれる親を探そう。忙しいけどそれはしたい。
ヴィヴィオがいつしか強く立って歩んでいけるように。私は全てを送ろうと思う。
まずは機動六課で預かる事になる。
ヴィヴィオも私やフェイトちゃんになついてくれた。
あとは六課のメンバーとも仲良くなれたらいいね。

それから数日が経過する。
既にヴィヴィオは六課の人たちに溶け込んでいる。
お兄ちゃんに一番なついてるんだけど・・・なんでだろう。
まぁ今は今までの仕事をこなしていきつつ探す。の方向で。フェイトちゃんたちも手伝ってくれるっていうしね。

さて、今日は早朝訓練からギンガが合流する事になってる。
もうギンガも挨拶を済ませて私の横に立っている。
フォワード陣とはあの事件以来かな。それとミラ君もいたりする。

「ギンガは今日から出向扱いだけど・・・・ミラ君は？」
「おいおい。弟子が来るなら俺も来るだろ」

あぁ。そういえばギンガにもストライクアーツの先端を教えてたっけ。交殺法を。

「じゃぁまずはギンガも交えて早朝訓練しようか。ギンガはフォワードについていく感じでお願いね」
「はい、なのはさん！」

返事とともにブリッツキャリバーを装着する。うん、いい判断力だなぁ。
早速ティアナ達のほうに行って訓練の凡そを聞いている。
そういえば私はギンガの実力ってわからないな。
スバルと模擬戦やらせてみよう。それでこれからを判断してみればいいや。

「ギンガ。スバルと模擬戦しない？」
「私はかまいませんけど・・・」
「ギン姉と模擬戦かー。楽しみだね」
「うん、そうね。じゃぁやろうか」

二つ返事で決まった。だったら後は任せよう。

「スバル。どの位強くなったか見せてもらうわよ？」

「へへぇ、びっくりして腰抜かしちゃうよギン姉」

戦闘データを確り取っておこう。これからのことにも使える。

何を伸ばせばいいか今から楽しみだ。

ミラＳｉｄｅ

なのはの焚きつけでギンガとスバルの模擬戦か。

どっちも弟子という時点でどの位伸びたか楽しみだな。

「ギンガ」

名前を呼んで手招き。気付いたギンガもこっちによってくる。

「はい、師匠」

「スバルとの模擬戦な、本気出すなよ？」

「というと」

「交殺法の使用は禁止。第一スバルもまだファーストリミッターの状態だ。お前が本気出したらそれなりに大変だ」

「はぁ・・・・・」

「生返事するなよ。お前の場合、リミッターがないんだからな。純

粋にストライクアーツだけで戦ってみろ。それで勝ったら次のステップにいかせてやるから」
「絶対ですよ！約束ですからね！」

わかったわかった、と軽く返事してギンガと離れる。

「何はなしてたの？」
「ん？まぁ色々とな。弟子に向ける師匠の言葉ってやつだ」
「ふぅん。まぁいいけどね」

スバルにも技を教えてはいるがギンガのほうがその期間は長い。
基本しか教えていないスバルとある程度まで鍛え上げたギンガ。
それならどちらが勝つかは地力といったところか。
まぁ、高見の見物だな。

スバルとギンガの模擬戦が始まった。
ウィングロードでの戦場構築。
数百本の道が展開されていくのは見ていて壮観ではある。
今までは一本だけでしか展開されなかったのが欠点でもあったウィングロードを改良したのはギンガも同じ事だ。
だからこそスバルにも的確に指示が出来たわけだしな。

なんて考えてると激突音が響き渡る。
空を突き抜けていく衝撃は体を振るわせるのに充分な程。
エリオもキャロも吃驚してるな。
でもあのくらいまではなってもらわないと困るんだよな。
ランサーたちにもう少し詰めてもらうか。

幾度かぶつかりあいながら徐々に詰めていくギンガ。
スバルもそのペースに乗せられて調子が狂ってそうだな。
アレは今度の課題だな。
ギンガのペースに乗ったらあとはもう一網打尽だ。
最終的にスバルの頭部への寸止めで模擬戦は終了した。

評価は及第点。お互い交殺法使わなかったな。まぁ姉妹で殺しあう業を使うわけもないか。
後で二人に話をしておこう。

「んじゃ、なのは。早朝訓練任せた」
「うん。じゃぁみんな集合ー」

後の事はなのはに任せて俺は端っこのほうで休憩を取る。
最近あんまり寝てないんだよな。リィンが煩くて。

リィンＳｉｄｅ

「――――――――――っ！？」

何かしらの電波を受け取ったですよ！？
リィンは何も悪くないのに！

なのはＳｉｄｅ

じゃぁ早朝訓練だね。
もう各々個別訓練だからなぁ。しかも私が見るのってあんまり無いんじゃないかな。
チームワーク戦とかで手を出すくらいしかもうないんだもんなぁ。
ミラ君の部隊が手を出してるから何ともいえないけど。
口出しできないんだよね。ランサーさんとか・・・・。

アリサちゃんもなんか口が出せない。キャロとか育てたいのに！
フェイトちゃんと凄く仲いいんだよね。なんだかユルセナイ。

「・・・・はっ！？」

わ、私ってば何考えてるんだろう。親友なんだから信じないと。

と、訓練が終わった。なんだか時間の進みが早い気がする。
考え事してるとやっぱり早いものだね。

「なのはままー」

遠くから天使の声が聞こえた。違う、ヴィヴィオだ。
後ろにザフィーラがいる。
小走りで近づいてくるのを見てる。

「・・・・・・・・・ぁっ」

小走りに近づいてくるところでこけた。
顔を上げてうるうると泣きそうだ。

フォワード陣もギンガもミラ君もランサーさんもアリサちゃんも見てる。けど誰も動かない。

「ヴィヴィオー。おきてごらん。ヴィヴィオならできるよね？」

「うぅー・・・・」

ぐす、と泣きそうになりながらも何とか起き上がる。袖で涙を拭いてからくしゃくしゃになった顔で近づいてきた。

多分フェイトちゃんがいたら助けに行っちゃうんだろうなぁ。

なんて思ったらクス、と笑みが漏れた。

ヴィヴィオが足元にしがみつく。

丁度良いからこのまま六課に戻ろう。

「じゃぁ、早朝訓練はここまで。ゆっくり休んで午前の業務だね」

「「「「「はい！」」」」」

各自解散。ヴィヴィオを抱き上げてザフィーラと一緒に隊舎に戻る。

次はどうしよう、なんて思いながらヴィヴィオの涙を拭いたりして。

第百一話　その日、機動六課（前）

ヴィータＳｉｄｅ

地上本部が公開意見陳述会を開く。
といってもレジアスのおっさんの独壇場になりかねない。
これにはミラージュも出席するらしい。
まぁあいつも少将だしな。立場的には出席しないといけない身分様、ってか。
ミラージュは先に行ってる。セイバーとアーチャーが一緒だって言うからまぁ、問題ないだろ。
管理局のトップに立つ武力の三人が並ぶってどんな状況だよ。

んじゃ、こっちはこっちで家族でいくさ。
何もミラージュが自分とこの部隊で固めてるからってんじゃねぇけど。
近くを飛んでいた末っ子のリィンが肩に乗ってくる。

「よし、リィン。今回はあたしと一緒だ。頑張ろうぜ」
「はいですヴィータちゃん！頑張るですよぉぉぉぉぉぉぉ」

なんだえらく気合入ってんな。
んじゃあたしも気合いれてかねーとな。気分かえていかねーと。
少しでもうちの隊長さんにゃ楽してもらわねーとよ。
また撃墜なんてされたらかなわねー。

シフト的にあいつらは中か。はやてもいるし、中は大丈夫かな。問題は外か。
フォワード陣が待機する事になってる。あたしはその上になる。

ティアナは問題ないとして残りの三人はまだムラがあるからな。
まぁ次点でエリオか。あいつの伸びしろ半端ネェ。

流石はランサー、ってか。あいつの教え方マジすげぇんだよ、これが。
まるで戦場を渡り歩いてきたかって言うくらいに理知的で尚且つ合理的。
ここまで使い物になるとは最初は思わなかったが。

「ま、アレコレ考えててもしょーがねぇか」
「そうです。ヴィータちゃんは体動かしてたほうが得策です」
「あんだそれ。まるであたしがのーきん見たいじゃねぇか」
「違うですか？」
「ちげぇーよ！！」

ちゃんとあたしだって考えてる事あんだぞ・・・・。まったくこの末っ子ってば。

「まぁ、いいや。行こうぜリィン。とっとと仕事終わらせて戻るぞ」
「はいですよ！」

ヴィヴィオＳｉｄｅ

「う～～～・・・・・」

なのはママがおしごとにいっちゃう。もっといっしょにいたいのに。ずっといっしょにいたいのに。すこし、なんだかこわい。

「ごめんねヴィヴィオ。朝には帰ってくるから。アイナさんが今夜は一緒にいてくれるよ」

アイナさんはりょーぼさん。ヴィヴィオとあそんでくれるおねーさん。

とってもいいひとー。えへへ。

「じゃぁやくそく。はやくかえっていますよーにっ」

ゆびきりをする。これはなのはママにおしえてもらった。かならずやくそくをまもるっていみ。えへへ。

「なのはさん。そろそろいいですか？」

「あ、ギルくん。すぐいくの」

「あとは僕らが見てますから安心してください。ランサーも六課詰めですし。何があっても僕らのそばが一番安全ですよ」

「・・・その言い方は何か起きるような言い方なの」

「・・・・・・・・まさか」

こえはとおく。なのはママむこうにいっちゃった。

きょうはやくそくしたからアイナさんといっしょにねよう。

「ヴィヴィオのこと、お願いね」

「えぇ。マスターからもきつく言われてますからね。言ったでしょう？今言ったでしょ。僕らのそばが一番安全だって」

笑顔の金髪の少年。そしてなのはもそれに答えるように笑み。

カツン、と靴音を鳴らして仕事モードに変更。高町なのはは歩む。

ヴァイスＳｉｄｅ

公開意見陳述会の現場近くにヘリを下ろして今は休憩中。

あ、もう主要面子は移送した後だぜ。

ヘリに寄り掛かって紙コップにコーヒー入れて一服。

あー。このいっぱいのために生きてる。って感じだぜ。

フォワードの面々とヴィータ副隊長は近くでシフト回しか。

全く体力あるっつーか。バイタリティ豊富っつーか。

と？二人ずつに分かれて警戒任務って感じか？凸凹コンビで組んだ感じだな。

残ったのはスバルとエリオの坊主か。ティアナの嬢ちゃんとキャロっちがこっちに来る。

「おう。交代シフトに切り替えかい？」

「あ、ヴァイスさん」

俺と視線があえば会釈をしていく。キャロっちは先に向かったがティアナが足を止めた。
主に俺の目の前で。やや顔を見上げてくる。上目遣いだ。あぁちくしょう。親友の妹じゃなかったいいのに。

「あの、ヴァイスさんって兄とコンビを組んでたって」
「ん？ティーダから聞いたのか？あぁ、本当だよ」
「射撃では凄い腕だったって。兄が言ってました。いいライバルだって」
「へぇアイツがネェ」

なんだよ。影で俺の事持ち上げやがって。目の前で言えっつーの。
しかし「だって」か。「だった」じゃなくて。まだオレをライバルとしてみてくれてるのか、アイツは。
でもなんだかくすぐってぇな。親友の妹からこんな話されるのって。
しっかしいきなりこんな話ってなんだ？

「ヴァイスさんが前線から退いた話も聞きました・・・」
「あー。アレか。まぁしゃーねぇだろ。あん時は調子に乗ってた頃だしな。ティーダとも別れてソロってた時だし」

実際何がおきたかって言えば・・・・・・ずっと言わずにいたわけだしな。
思い出さずに入れればいいが、それでも――――思い出しちまうんだ。

「オレはな。一回だけ。たった一回だけミスってそれから撃てなくなったんだよ」
「一回のミス、で・・・・」
「あぁ。何、そんな珍しい事じゃない。俺達射撃系にゃ良くあるこ

とだ――――――。
　立て篭もり犯がな、人質をとった事件が昔あった。それだけならいくらでも起きてる事だしよ。
　でもそん時はな。ちょっと具合が違ってたんだ」
「・・・・・・・」
ティアナは黙って俺の話を聞いてくれてる。
「妹をな。人質に取られてたんだよ。それをスコープ越しに見ちまった」
手元にあったスコープを覗いてティアナを見る。
至近距離だからかその像はぼやけて見える。
「んでもって俺は身内がいるって事で気が動転。手元が狂って妹の――――――目に直撃したんだ」
思い出す。あの時の事を。感情が。繰り返される。嗚咽感すら戻ってくる程に。
それでも妹は。ラグナはオレを責めなかった。逆にオレにはそれが。責めないという行為がオレを責め立てた。
部隊からは中傷の嵐。左遷。新たな道としてヘリパイへと異動になった事。
色々な事があった。
「それでもこうして前線にいるのはきっとまだヴァイスさんは立ち上がれると信じてくれてるんじゃないですか？」
「・・・・・・」
「兄はずっと待っていますよ。ヴァイスさんがまた隣に立つことを」

それだけ言うとティアナはキャロっちのほうへと歩いていった。
待っている、か・・・・同じ職場になるのも何年ぶりだ？
そういや一切顔を合わせないのはまだ怒ってるのかよティーダ・・・・。
口で言わなきゃ判らない。悟ってくれだなんてそんなもん虫がよすぎらぁな。

「へっ・・・あんなガキに説教食らわされるたぁまだまだだな、オレも」

頭をガリガリ掻きながらドッグタグのデバイスに問いかける。

「まだやり直せるのかね・・・・ストームレイダー」

「　　」

オレの問いにデバイスは答えてくれなかった。

ティーダＳｉｄｅ

ヴァイス達のいるヘリの裏側。そこに俺はいた。
気配を消して会話を聞いている。出歯亀？ドンと来い！

ティアナのやつ・・・・・。
オレが言おうとした事の半分くらいは言ってるから出るに出れない

じゃないか。

「ま・・・いつまでも待ってるさ。ティアナの言った事は真実ッスよ・・・・親友（ヴァイス）」

ゆっくりと。気配を消して俺は配置場所へと戻った。

またいつかコンビを組めればいいと願いながら。

ミラＳｉｄｅ

公開意見陳述会に出席する為に予定されていたホテルにいる。

面倒くさいがオレの意見もほしいらしい。

地上本部、レジアス＝ゲイズ中将か。強硬派のトップ。

アインヘリアルを実施化させたい人物。

なんていうか、いい意味で正義を貫こうとしてるのは判るが・・・。

魔導師の力に頼らない力で制圧を。とか言ってる時点で武力派の影がちらほら見えてる。

まぁ別段何をしようがいいんだがな。オレの邪魔にならなければそれで。

地上本部の代表がレジアス中将。

航空機動隊の代表で俺。

「海」の連中は誰が来るのかは情報をギリギリまで隠してるらしく

て誰が来るのかは誰も判っていない。
あとは三提督まで来る予定だったが姿は見えてない。

「この会議も何か不穏な雰囲気がしますね」
「そう思うか？」

すぐ後ろに立っていたセイバーがポツリと口をもらす。
どうやら直感スキルが働いているようだ。仕切りに周囲をキョロキョロしだす。
反対にアーチャーはその逆側で目を瞑ったまま動かない。喋らない。

「アーチャーは外の感覚を得ていますから。邪魔しないようにしましょうか」

なるほど。千里眼の応用か。なんだかサーヴァントも最近若干チートになってきたと思う。

「で、どうしますか？」
「現行維持だ。このまま傍にいてくれ。いざとなったらはやてたちの守護に」
「了解した」

セイバーが頷く。アーチャーも目を瞑ったままで手を軽くあげて応対してくれた。
六課に残してきたランサーとギルはどうしてるだろうか。おとなしくしてるだろうか。
特にギルは少年モードにしてヴィヴィオの相手を頼んでるから大丈夫だと思うが・・・。

「そういえばすずかはどうしてる？」

「すずかは今日の午後には六課に帰還する予定ですからそのままヴィヴィオ護衛の任務に移るそうです」

他に動けるのはいたかな・・・。レグルス隊は分断してるしなぁ。
ティーダしかこっちに来てないし。
ファントム隊はロングアーチに常駐させてきた。

「なお、地上本部の虎の子であるアインヘリアル周辺にはファントム隊が既に詰めてますよ」

聞くとセイバーの判断で行ったそうだ。あれ、俺聞いてないぞ？
ロングアーチにいたんじゃないのかよ！

「私の独断で向かってもらいました。今、あのアンヘリアルを落とされるのは拙い」
「・・・・・・・・一言、言ってほしかったな」
「早急でしたので」

神様。最近セイバーがきついです。泣きそう！
ちょちょぎれる涙を拭いてから遠めにはやて達を視認した。
なのはとフェイト、シグナムもいる。
ここにいるって事は外でデバイスを預けてきたんだろう。
中にいる以上あいつらは戦力として数えられない。

「セイバー。アーチャー。何かあったらすぐに動けるように」
「言われずとも、だ。たまには鍋以外のものを振らないと勘を忘れてしまう。干将・莫耶もそろそろ出番がほしいと言ってるし」

アーチャーが答える。干将・莫耶まで出番がほしいとか言い出してるのか。

だがそこらへんはいつかあるだろ。確か記憶の中では何か起きるはずだ・・・。
今はこの公開意見陳述会を終わらせるために頑張るしかないな・・・・・・。
と、ここでレジアス中将のアインヘリアルの重要性を説明される。
純粋魔導師以外の武装隊のための兵器。
その説明が終わろうとしたときに――――――事が起こった。

「やぁ、はじめまして。管理局の諸君」

其処にいたのは優男。研究者然とした風体の男がメインモニタに映っていた。

「はじめましてだね、諸君。私の名はジェイル＝スカリエッティ。名前は知ってるのではないかね？」
「ジェイル・・・・スカリエッティ！！」

ざわざわと騒ぎ出す声。そりゃそうだ広域次元犯罪者がここにアクセスしてきたことは異例中の異例だ。
恐らくハッキングか何かしてきたんだろう。

「地上本部の諸君はご苦労様だね。だがあれは実に無粋だ。という事でわれわれのほうでアレは廃品回収に出させてもらおうと思う」

メインモニタにワイプウィンドウが現れてアインヘリアルが破壊されていくのが見えた。

「わ、わしの叡智が！アインヘリアルが！地上本部の夢が！」

レジアスは頭を抱えて破壊されていくアインヘリアルを見ている。
見ているだけしか出来ない。
ありゃもうどうにも出来ないな。確か向こうはファントム隊がいたはずだ。

いるはずのあいつら何やってんだ？

ナンバーズＳｉｄｅ

ほほほほほ。クアットロですわ。
今、地上本部が造ったって言うアインヘリアルちゃんをメッタメタのバッキバキに破壊してる途中よぉ。
ぶっちゃけ前回のストレス発散なわけだけども。システムの無効化なんて地味～～～な仕事ですわー。

あぁでも思い出しただけでも虫唾がはしるったらありゃしない！
あの黒尽くめ、見つけたら思いっきり悲惨な拷問で生きてるのがいやなくらいにしてやるわ・・・・！！

「ほらほらディエチちゃん。とっととぶっ壊してねぇ～ん♪ここの人員の削減も仕事のうちよぉん」

「はいはい。クア姉ってばもう・・・・」

ドガンドガンとディエチちゃんの砲撃が乱れ飛ぶ。
この場所を警備していた連中はとっとと死んだり逃げたりで散り散りになっていったわ。
そんな中、空中から視線を感じて見上げると、三人ほど浮かんでた。

「あっらぁ～～？魔導師がこんなところにどうしたのかしらねぇ？」
「フン。塵屑如きが我に話し掛けるでないわ。その汚い口をとっとと閉じろ。醜悪である」

な、なぁんですってぇ～～～。
あの黒いヤツもむかついて仕方ないですわね！

「じゃぁディエチちゃん。やぁっちゃいなさぁ～～～～い！！！」
「はぁ・・・やれやれだね」

イノーメスカノンを構えて砲撃を打ち出す。その射線上にはアインヘリアルがあるのよん。
避けても避けなくても結局まずはぶち壊れるんだけど。

「あっはぁ、いいわよディエチちゃん！もっと！もっと！おねーさまを興奮させてぇ！！」
「なんかやだ、この姉・・・・（、Д、）」

なんだかぐったりしてるけど大丈夫？ディエチちゃん。狙いの計算演算はまかせて頂戴♪
あは♪死にさらせ小虫ども！！！！！！！！

カノンが向かう先、三人は避けないでいる。なに？もう命諦めたの

かしら？
だったらそのまま焼け死ぬといいわ！！！

「レヴィ。たたっ斬れ」
「りょぉーーーかい！！！きょっ、こー、けぇぇぇん！」

水色の髪をしたのが前に出てきて馬鹿にでかい件を作り出して――
――カノンを斬った。
斬った？斬ったですって！？物理的に！破壊的に！
正面からカノンを。魔法を。砲撃を。真っ二つに切り裂くなんて！

「いやったぁー！魔法断裂究極斬！かぁんせいっ！！！」
「えぇい、その厨二くさい名づけをやめんか。聞いてるこっちが恥ずかしいわ！」
「そうですか？私は可愛いと思いますけど・・・」
「お前達は何かずれておる！」

なによ・・・上で喧嘩とかやめてよ。こっちを無視して流れを作ってんじゃねぇよ、このくそ馬鹿ビッチが！！！

「ディエチちゃん、最大集束砲撃であいつらを塵にしてやって！ドクターが待ってるから速く帰らないといけないんだから！」
「わかってるよクア姉。今度は手加減しない」

カノンのチャージがさっきとは違うほどに魔力が収束されて溜まっていく。

「うん、充填１２４％。いけるよ、クア姉」
「あの上空のくそビッチどもを消し去っておしまい！！」

右手を一度上げてから指をさす。その方向にはマテリアルズ。
口角が上がるほどに笑みを浮かべてディエチちゃんに私は指示を出す。
さぁ、撃っちゃって！！

「カノン――――――射出！！」

その声と同時に砲撃は撃ちだされた。

妹のセインと一緒にビルの下、地下での破壊活動。こういう手は私のほうが動きやすい。

「チンク姉、こっちはＯＫ」
「うむ。こっちも終わった。後は時間を待って合図待ちだ」

わたし達の周囲には夥しいほどの武装隊の亡骸が転がっている。
ここで警備していた武装隊だ。どれもまだ若い。こんな道でなければまだ生きられたものを。
目標はタイプゼロ。ここに誘導されてくるかもしれないという情報があるので、戦闘待機。

「セイン。気を抜くなよ」
「わかってるさ。ノーヴェもこっちに来るんでしょ？」
「あぁ。その手筈になっている」
「へへ、じゃぁ面白くなりそうだね」

血の臭いと魔力の濃い中で二人で待機していく。
周囲、大きな範囲でガジェットを配置してＡＭＦを発生させる予定でもある。
ＡＭＦの中でも私達は自由に動ける。だが、管理局の魔導師たちは動けない。
魔力を保つ事が困難になる故といっていたが本当に詳しい事はウーノ姉様かクアットロ姉様くらいしか理解していないだろう。
私でも完璧に把握しているわけではないし、な。
それでも充分な程の知識は回ってきている。共有意識による知識の共有。
これで誰かが得た知識はみなに回るというネットワークだ。

これで何処で誰が何をしてるかの把握も簡単になる。
さて。ドクターから声がかかるのを待ちつつ、待ち人も待つか。
結局私達は待機専用なのだな・・・・。

ヴィータＳｉｄｅ

公開意見陳述会の外で待機してたらなんか一気にキナ臭くなってきやがった。
他の部隊がざわついてる。こっちに情報がまだ届いてこないから何が起きてるのかわからねー。

「ヴィータ福隊長」

「あぁ。おまえらもいつでも動けるようにしとけよ」

ティアナが指示を仰いできた。あいつもこの雰囲気に察したようだな。

指示を出せばチアナはスバル、エリオ、キャロにも指示を出していく。

指揮官としちゃいい決断の早さだ。ミラージュの鍛え方もまんざらじゃないな。

「リィン、あたしらは上に上がるぞ」

「はいです！」

「ティアナ、こっちは任せたからな。お前が指揮しろ。出来るな？できないとはいわさねーぞ」

「はい！了解です！」

いい返事だ。だったら意識は向けてフォローくらいはできるようにしておくか。

直接手は出さないとしても見てやる事くらいはしてやらないと。

「ヴィータちゃんは意外なところで細かい性格です」

「うっせ。とにかくいくぞ」

リィンが色々言ってきたけど軽くつついてから空へと上がる。

この建物の中にははやてたちがいる。しかもデバイスなしで。

でも、ま――――ミラージュとセイバー、アーチャーがいるんだから心配しねぇぞ？

通信が届かなくったってあたしはなんの心配もなくいけるんだ。

なんだかんだいって・・・結局は信頼してるんだ。あいつの事を。

はやてを絶対護れよ、ミラージュ・・・・・！

空に上がって周回運動。別段何のおかしさもない。
だがなんだ。この胸騒ぎは。
少しばかり遠めに、範囲を広げてみる。
すると其処には遠めに人影。

「リィン。見えるか？」
「ちょっと待ってくださいですよ・・・・・・遠方ズーム出ますです」

リィンが索敵に成功すると顔の左にウィンドウを広げる。其処には巨躯の男が槍を持ってこっちに向かってきていた。
なんだ？ここを狙ってきている？だとしたらこの胸騒ぎと雰囲気は――――――。

一瞬で理解した。既に攻撃を受けているんだ、と。
つまりは。襲撃中なんだ、と。

モニタに映る巨躯は段々と近づいてくる。
ソレはやがて完全に視認できた。
かなりの巨躯だ。あたしの倍以上はあると見える。
・・・・あたし自体あんまおっきくねーけどな。

「だいじょうぶです！リィンはヴィータちゃんくらいがおっけーですよ！」
「あぁありがとうよ！うれしくて涙が出るわ！」

泣いていいか？泣いていいか！？
でもシャマルがいうにゃあたしたち守護騎士プログラムも成長しだしてるっていうし・・・。
あちはこっちに気付いてない。というか無視かよ。

何かが起きてるってんならきっと何か関係者だ。
だったら追いかけて話を聞いてやる。

「いくぞ、リィン！」
「はいですよー！」

リィンがあたしの肩に捕まる。そのまま一気に加速して空を飛ぶ。
にがさねーぞ。六課式の「お話」をしてやるからちっと待ってやがれ。

ルーテシアＳｉｄｅ

ドクターが今管理局の偉い人たちを抑えてるって連絡があった。
いまのうちに私は言われたことをするの。
機動六課で聖王の器を取り戻す事。
そうすればおかあさんは・・・・・・。
ガリューは既に私の横にいる。今回も・・・地雷王も呼ぶかもしれない。
他にもトーレやセッテがついてきてくれたから頼ってもいい、かな？
私は――――おかあさんのために。頑張るんだ。

「ガリュー」

私は名前を呼んだ。それだけで私の従者は、使い魔は、行動に移った。
早い。速い。あっという間に地上に降りて――――。

「目的は聖王の器、だよね」
「そうですルーお嬢様。ソレさえ手に入ればあとは破壊してもかまいません」
「そ、ぅ・・・・・」

トーレが教えてくれた。あの子はこれから必要なんだって。
だからドクターが必要してるから・・・・・ついてきてもらうの。
さぁ――――――探そう。これからのために。

第百二話　その日、機動六課（後）

ヴィータＳｉｄｅ

ビルの空中。もうすぐ接敵する。目標となった巨躯の男の後ろに迫る。
手にしているのは大きな槍、か？そういやエリオのストラーダとランサーの赤い槍しか見たことがねぇんだった。
それはリィンも同じ。寧ろ何百年も生きてきたあたしに比べてリィンはまだ数年そこそこ。
それじゃあリィンのデータに残せるように頑張らないとな。

「止まれ！時空管理局だ！」

あたしは後ろから声を投げつける。結構本気で飛ばしてるのに追いつく気配がねぇ。
寧ろ一定の距離を保った感じだ。もう少ししたら到着しちまう。その前になんとかしたいのに。
リィンも、あっちの融合騎も肩に捕まってる。飛ばされないように必死にしがみついてる。

「おい！止まれってんだこのやろう！」

語気を荒げて声を出す。すると向こうが速度を落としてきた。
一旦振り向いてから停止する。こっちも距離を置いて停止した。
へっ・・・なんだよ。こいつもエース級の雰囲気持ってやがる。

「リィン、あいつをデータベースで調べてくれ」
「はいです！」

リィンに管理局のデータベースにアクセスさせてあいつの詳細を調べさせる。
エース級の雰囲気なら何かしらデータがあるだろうと思う。なければ――――これから調べれば良いだけの事だ。

「さっきも言ったが時空管理局だ。此処は立ち入り禁止区域なんだがな。用件はなんだ？」
「お前に用はない、が・・・邪魔をするなら」

おいおい、おいおいおいおい！いきなり臨戦態勢かよ。ビンゴどころじゃねぇな！
アイゼンを振ってデバイス化させる。こっちも応戦態勢に入る。

「旦那・・・」
「問題ない。少しならば」
「・・・うん、わかったよ」

なんだか会話が聞き取れなかった。なんだか言ってたような気がする。風がこんな時に邪魔をした。
槍を向けてくるのに対してアイゼンを振りかぶる。それだけで戦う意思が両方にあるのを見せる。
あいつは目的地に背を向けている。いざとなったらいけるはずなのに。
受けてくれた、と見ていいんだろうな。

「ゼスト＝グランカイツ。参る」
「時空管理局機動六課スターズ分隊０２、ヴィータだ。いくぜ！！」

さぁ、始めるぜ。

ゼストＳｉｄｅ

目的地である公開意見陳述会という場所へ向かっていると声をかけられた。ので速度を落としてそちらを向くと小柄な赤い娘がいた。

「時空管理局だ。いかせねぇーよ」

若年齢化のある管理局でもこんなに子供までもが前線に出てくるのか。

これもレジアスの考えた事なのか？いや、あいつは非血統魔導師、地上本部にいるはずだ。そして今、あの場所にいる。

あいつに聞かなければならないことがある。ソレを聞くまでは俺はっ・・・・・。

「ゼスト＝グランガイツ。参る」

「時空管理局機動六課スターズ分隊０２、ヴィータだ」

名乗れば向こうも名乗る。なるほど、騎士道は持っているようだ。

何よりアレには古代ベルカの匂いもする。

構えれば構える。名乗れば名乗る。これがこうした出会いでなければ研磨していけただろう。

もう叶わない願い。ならばこの槍でもって答えるのみ。

「旦那・・・無茶すんなよ？」

「わかってる。だから・・・力を借りる」

「・・・・頼むよ、旦那」

一緒に連れ立っていたアギトとユニゾンをする。
それだけで体に負担が掛かる。元々相性がいいわけではなかった。
それでもアギトは俺とユニゾンしてくれる。
俺はそれに答えるように応えるように戦うのみだ。

ティアナＳｉｄｅ

襲撃。既に直感で悟った私はスバルやエリオキャロに指示を出す。
個人戦術と衆人戦略。
なのはさん達には個々の意思で動いていいって許可もある。だったら今持ってる力を見せてやろうじゃない。

「スバル。あんたはギンガさんのところに。連絡が取れないから最後に消えたマーカー見て動いて」
「了解！」
「エリオとキャロはフリードで周囲の伝達。エリオ、キャロの騎士だって言うなら護りきってみなさい」
「「了解！」」

よし、それと私はなのさんたちにデバイスを届けにいかないと。
憲兵さんに許可を得て建物の中へと入る。状況はどうやら憲兵さんにも届いてるみたい。
その状況は少しだけしかきていないらしくて、六課のメンバーだって教えたら教えてくれた。
どうやら何かに襲撃を食らっている様子、という事。

それなら早く届けないといけない。でもデバイスの携行はダメっていうので・・・・こっそり入り込んだ。
多分お兄ちゃんの名前とかでなら入れただろうけどそれはプライドが許さなかった。
私一人でも出来ればいいんだけど、今はダメだった。

なのでこっそり窓から侵入。ごめんなさい。
上に上がる階段を見つけて駆け上がる。こういう時体力つけておいてよかったと思うわ。
スバルほどじゃないけど体力ついたと思う。一気に7階くらい駆け上がっても息が切れてない。
なのはさんＧＪです！

一気に場面となっているホール前にたどり着く。扉は閉まったままで衛兵が護っていた。
事情を話せば扉を開けてくれた。どうやら中から外に出るのはダメでも外から入るのはいいらしい。
あれ？それだと私外に出られないんじゃない？

「ティアナ！」

なのはさんの声がした。私を見つけてくれたらしい。八神司令もフェイトさんも一緒だった。
近づいていって外の状況を知らせる。外も襲撃を食らっているのに対して此処での出来事も聞く。

「ほんなら外はティアナに任せるわ。で気品でも責任はこっちが取ったるから好きにせぇ。ヴィータも外やろ？」
「はい。副隊長は今接敵して交戦に入ったって通信が入ってます」
「うん。それにミラくんが鍛えたっちゅー戦術戦略も見たいしな」

私が試される時が来たのかもしれない。これはいいステップアップだ。
ノらない手はない。

「外は任せてください。って言いたいんですけど出れますかね・・・ここから」
「あぁ、それなら問題ないやろ。ミラくーん」

中に入るのは大丈夫でも。外に出るのは困難。そんな中でミラージュ隊長が呼ばれて近づいてきた。
あの、今話してたのって将官クラスの方々ですよね。いいんですか！？

「なんだはやて。今大事な話してたんだが」
「ティアナが外に出たい言うねんけど出したって」
「お前・・・そんな事で俺を呼ぶなよ・・・・」

はぁ、と重いため息をついてから私に視線を向ける。

「こっちは今忙しい。今後の対策とかあるからな。フェイトとなのはをつけるから抑えて来い」

と、徐(おもむろ)に左腕を横に伸ばした。
ぐいっとその手を引き寄せると空間に穴が開いた。ていうか、亀裂が走った。
え？え・・・・・・ぇ・・・？

「ほら、とっとと終わらせて来い」

なのはさんとフェイトさん。そして全然良くわかってない私はその空間の亀裂に放り投げだささされた。
正確には放り出されたのは私だけでなのはさんもフェイトさんも普通に飛び込んでた。
このとき思ったのはミラージュ隊長はとんでもない人なんだと言う事だった。

トーレＳｉｄｅ

六課に襲撃に向かっていると共有通信が入る。

『トーレ姉様、セッテちゃん。今、そっちに邪魔者が・・・・いえ、ターゲットの一人が向かいそうなんでそっちにいっていただけますか？』
『かまわないが・・・お前のところは大丈夫なのか？』
『小うるさいのがいましたけどねぇん。私、ＩＳで逃げちゃいましたわん。あんまり構ってる暇もありませんでしたしぃ？』

まぁそれならいいか、と。ひとつ下の妹がいうならそれに従おう。
我々の頭脳担当だしな。ウーノ姉様は動けないわけだし。
それにターゲットの一人というと・・・我らの基盤になった姉上、プロジェクトＦの寵児。
フェイト＝テスタロッサのことだろう。ならばそっちのほうが面白そうだ。

『クアットロ。私とセッテでフェイトお嬢様のほうへ向かう。後進

はすぐ出来るな？』
『もっちろんですわぁ。オットー、ディードを向かわせますから安心してくださいな』

あの双子なら問題ないだろう。ルーお嬢様のバックアップも出来るだろうし。
よし。なら安心して交代（後退）していける。

「セッテ。今の通りだ。我らは一旦戻るぞ」
「了解」

無駄な部分を削ぎ落としたからか完全に近い機人型になったな・・・セッテ。
しかしそれもまたひとつの到達だ。問題は何もない。
何よりも輪廻の魔女殿の手助けもあったからこそ完成した部分も多い。
後進が来る前にルーお嬢様に連絡しておかなければ。ソレが終わったら後から来る部隊の対処をしよう。

ルーテシアＳｉｄｅ

トーレとセッテが帰るって。それで代わりにオットーとディードの双子が来てくれた。
ガリューがいるからさびしくないけどね。

「ガリュー。あの建物、壊しちゃおう」

友達にあの機動六課という建物を壊すように頼んだ。
ガリューは神速ともいえる速度で突進していく。砂埃を舞わせて突っ込んでいく。
あっという間に姿が見えなくなった。それを確認してからガリューの代わりにデータバグを召喚。
双子が来るまであコレで充分、だよね。

「ヴィヴィオって子を。ドクターの所に連れて行けばいい」

暫くしてオットーとディードが来た。

「お待たせしましたルーお嬢様」
「大丈夫・・・そんなにまってない、よ」

双子は好き。いつも遊んでくれるし気にかけてくれるから。

「お嬢様は僕が護ります。ディードは露払いを」
「了解です。ＩＳツインブレード」

ディードが光剣を出して前に立つ。

「では、エスコートします。ガリューは既に？」
「うん。ガリューにはあの建物壊すように言ったよ」
「そうですか。ではガリューの邪魔にならないようにしないといけませんね」

ガリューがあげた砂埃がまだ舞ってる。その中をディードが突き進んでいく。
その後ろを追うようにオットーと二人で走っていく。

「聖王の器を奪取するのが今回の我らの仕事です。あとはついでにここも破壊していきましょう」

聖王の器。ヴィヴィオって子。彼女を連れて行けばお仕事オワリ。お母さんも戻ってくる。だから――――頑張る！

ガリューが六課の建物に攻撃を仕掛けてる。どんどん破壊していく。その速度が半端ないほどに速い。

「待て！其処から先は通さん！」

声がするほうを見ると其処には――――青白い大きな犬がいた。

ザフィーラＳｉｄｅ

主はやての護るべき、帰るべき場所を託された俺とシャマルで今、襲撃に来ているやつらを迎え撃つ。

最前線に出ると其処には子供が三人隊舎に向かって走っているのを見つけた。

「待て！其処から先は通さん！」

俺の後ろにはシャマルがバリアジャケットで立っている。

いつでも動けるように指輪、クラールヴィントも起動している。

「時空管理局の管轄内です。これは明らかに破壊活動ですよ」
「理解している、と言っておこう。管理局の犬。いや、犬か。すまない。犬なのに」
「犬ではない！ベルカの誇り高き守護獣だ！」

俺は犬ではない。狼だ。それだけははっきり言っておく。狼だ。

「ザフィーラ。だから人型になったほうが良かったのに。戦闘力だって違うんだから・・・」
「否。これは矜持。援護部隊が来るまで頑張ればいい」
「やれやれ。じゃぁ、見せないといけないね。二人だけで僕らに向かってくるという蛮勇を。ＩＳレイストーム発動」

見れば男のほうが全身から魔力を帯びた光を作り出す。光は厄介だ。光速で設定されていると回避のし様がない。

「シャマル。解析を頼む。俺は俺の仕事をするだけだ」
「判ったわ。でも無理しないで。はやてちゃんが悲しむわ」
「主はやてを悲しませることは決してしない。ソレが守護獣だ」

にやり、と犬歯を見せてきらつかせる。決まった。今俺カッコいい。
さぁ、やりあおうか。

ギルＳｉｄｅ

おやおや。そろそろ出たほうがいいかな。でももうちょっと頑張ってほしかったね。
マスターからは手を出すなって言われてるけどこれ以上はちょっと見てらんないし。

「ランサーさん。僕そろそろ動きますね。あっちのバッタ、なんとかしてください」
「お？やっと出番か？でもあのヴィヴィオってガキンちょはどうすんだよ」
「ほしければ渡してもいいですよ。あとでまた奪い返すだけです」
「ガキの姿でその言い振りは関心しねぇけどな・・・でも了解だ」

ランサーさんが青い光を帯びて移動していった。あの隊舎を壊して回ったバッタを見つけたんだろう。
だったらそっちは任せておいても問題ない。あとはこの隊舎をこれ以上壊すわけには行かないですよね。
そろそろ茶番も終わらせましょうか。後々長引くのも面倒なんで。

「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」

ゲートを開いて僕の宝物を引き出す。範囲としては隊舎を包み隠すくらいの範囲。
うん、これならキャスターさんの神式魔術結界でもよかったかな。
でも大聖杯はマスターのところだしなぁ。

「聞こえてるかい？六課のメンバーは負傷者を助けて隊舎に避難。それ以外はぷちっと死んじゃっていいよ」

声を通す。念話でもないのに全体に響くほどのボーイソプラノを震

わせる。
治療員が負傷者を隊舎に引き込んでいくのが見える。
少し遠くのほうでランサーさんとバッタが遣り合ってるのが見える。
派手だなぁ。アーチャーさんと遣り合ってたときみたいだ。

「じゃぁそろそろいいかな」

避難が終わった頃合を見て宝具を射出する。それだけで魔力が迸る。
神代の武器から概念武装と神格武装までを一挙に射出していく。
終わりのない雨。嘗てあのバーサーカーですら死に追いやった武装雨。
これで生きてるなら運がいい。あとはヴィヴィオちゃんを見つけて保護するだけだ。
あ、巻き込まれてたら大変だな。実は見失っちゃったんだよね。魔力が薄いから探しづらいし。後で探さないと。

スバルＳｉｄｅ

ギン姉からのマーカーが消えたのは地下。前にも再会下のが地下通路だったりと何気に地下に縁があるんだなぁ。

地下好きギン姉。

なんちゃって。遊んでる場合じゃなかった。
地下を進んでいると人の気配がした。でもなんだか違う。「普通」の気配じゃない。
まるで・・・・そう。ギン姉や私みたいな。

明るく、少し開けた場所に着く。其処で見たのは――――――――――トランクに詰め込まれようとしているギン姉の姿だった。

「ん・・・？あれはタイプゼロ・セカンドか。あれも捕獲対象だったな」

眼帯の銀髪が私を見る。あれ？ギン姉が倒れてる。
ギン姉が血を出してる。ぐったりしてる。なんだ、あれは。
なんだあれは。なんだあれはなんだあれはナンダアレハ。

「ァ・・・・・ああ・・・・・・・あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

何かが変わった気がする。そう、お父さんの言葉で言うと、堪忍袋の緒が切れた。それがしっくり来る。
自然と涙が流れてきた。怒りが憎しみが沸いてくる。

「む・・・あれはやばいな。ウェンディ、運搬は任せる」
「はいー。任せるッスよ」

ギン姉を積んだトランクをホバーにくくりつけて走り出す。
それを私は許さない。許さない許さない許さない。

「させるかよ！」

マッハキャリバーで走り出すと同じ様に走って近づいてくる赤い髪。
それを右の蹴りで叩き落そうとするが、同じ様に蹴りで潰される。

早くしないとギン姉がいってしまう。焦りが募る。
ここで止まってる暇なんてないのに！相手にしてる暇はないのに！

「いかせねぇーよ！！此処でお前もボロボロにして連れてってやる」
「ギン姉を・・・・返せ・・・・・」

蹴りの反動で相手のキャリバーを破壊する事には成功した。
これで機動力は封じた。ギン姉を追いかけないといけない、のにっ・・・・。

「まだだ！」
「邪魔をするなぁっ！！！！」

本能で動く。突進する。マッハキャリバーが悲鳴をあげてるけど聞こえない。聞こえてこない。
飛来する短刀が向かってくるけどキニシナイ。ギン姉はもっと悲惨に痛みを得ていたはずだ。
だったら私がコレで泣いてる場合じゃない。
眼帯の銀髪に向かって右拳を振りぬく。防護壁が発動されるけどそれを表面として「震わせ」る。
振動が連動して浸透して行く。殺傷設定で。一気に振り抜いた。

爆発が起こる。防護壁が砕かれて振動が衝撃になって部屋を駆け抜けた。
私も何がなんだか訳がわからないで余波を回避できないで直撃してしまった。
傷が酷い。でもまだ動けるんだ。前に。前に一歩。一歩。また一歩。
なんだろう。とても心がざわざわする。
ずる、と魔に行こうとするけど体が動かない。あれ？おかしいな。
右腕もあがらないよ・・・・痛みがないから大丈夫のはずなのに。

ゴト、と音が鳴るのが耳に入る。視線は落とさないけど右腕の感覚がなくなった。

「ギン姉を・・・・返せよぉぉぉぉぉ！！！！！！」

魔力が抑えきれない。膨れ上がる魔力が体の中から溢れていく。
溢れすぎて放出していく。
銀髪は私に恐怖の目で見てるしかないみたい。
ふふ・・・ギン姉を返さないから悪いんだ。

「ここでセインちゃん登場っ！！」
「セインっ！」
「チンク姉っ、助けに来たよ！」
「ノーヴェも拾って帰るぞ！もう此処に用はない！」
「あいよぅっ！！」

地面から出てきた水色に銀髪と赤い髪がもぐっていった。
追いかけられない。ただ見てるしか出来なかった。
ギン姉にもう手が届かない。助けられなかった。あんなに怪我してたのに。
勝てなかった。逃げられた。こんなに・・・こんなにっ・・・・・・！！！！！！

膝から落ちる。絶望が染め上げていく感じだ。
もう何も感じられない。
左腕がショートしてる。あぁ、隠さないといけないのに・・・・。

ティアナＳｉｄｅ

なのはさんに運ばれながらスバルのマーカーを追いかける。
ギンガさんが反応なくなった場所から全然動いてない。話しかけても反応がない。
でも其処にいるのはわかる。

だから迎えに行くわよ。あんたが何者だろうとさ。だって、いつもあんなに強くて。
その強さに憧れてるんだから。

地下の広い空間に出ると其処に一人膝をついて泣いてるスバルがいた。

「スバル！」
「っ！！・・・・・ギン姉が・・・・つれてかれちゃったよぉ・・・・・ティアぁ・・・・・」

くしゃくしゃの泣き顔でこっちを見てくる。なのはさんはすぐにおろしてくれたのですぐにスバルの所へと駆け寄った。

「この馬鹿っ！無茶ばっかりしてっ・・・・」

私はスバルを抱きしめる。まだ泣いたままのスバルは嗚咽を繰り返しながら懺悔にも似た言葉を発していた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・」

周りを見れば何があったのか大体把握できた。この子は多分ギンガ

さんを護ろうとして・・・・こんなに傷を負った。

「なのはさん」

「うん。大丈夫。他に誰もいないよ」

「スバルは私が見てますから――――お願いします」

「ありがとティアナ。でも気をつけてね？」

「はい。了解です」

なのはさんは来た道を引き返して飛んでいった。

私はスバルが落ち着くまでこのまま抱きしめていた。

ギルＳｉｄｅ

隊舎の上。眼下には戦場が広がっている。

子供の姿のままに見下ろした其処は大変な場所だった。

「ランサーさん。僕達は手を出してはいけないのは判ってるよね」

「あぁ。胸糞悪ぃがしょうがねぇだろ。そういう契約（ゲッシュ）なんだし」

聞き分けのいい人で僕は嬉しいですよ。

じゃぁ、あとは流れのままに任せましょう。ただ、あんまり隊舎を弄ると僕もちょっとイラっとしますけどね。

「そろそろ終わらせちゃいましょうか」

「ぁ、んだ？結局手を出すのかよ、舌の根も乾いてねーぞ」

「いいんですよ。僕ですから」

クスクスと笑いながら僕は王の財宝を展開する。その大きさ的に隊

舎を覆い包むほど。

「さて。愚鈍な諸君。そろそろ終わりにしないか？じゃないと僕もそろそろ怒っちゃうよ・・・・？」

その宝具数、約数千。空に浮かぶ武具葉全てがロストロギアに認定されるのではないかと言うほどに強烈で凶悪だったりする。
ゲートが開いてる以上、隊舎には誰も近づけないし触れることも出来なくなってしまった。
でも僕って頭がいいから既に治療員とかは隊舎の中に入れてあるんだよね。

「だから、今外にいるのは怪我をしてもいい人だけだ」

極論だ。でも正解でもある。だからこそ僕は宝具を一気に射出した。
戦場に武具の雨が降り注ぐ。そのひとつひとつが宝具であるため、強大な魔力を帯びた純粋な武具が牙を剥く。
ただし、一箇所だけぽっかりと範囲をあけた場所を作っていた。
それをランサーさんは見逃さない。抜かりはないなぁ。

「あそこ、あの敵の嬢ちゃんらがいるとこだろ。どうしたよ」
「僕は面白ければそれでいいんです。恐らくあの子がそっちに言ったほうが楽しめそうなんですよね。主に僕が――――――いや、我が」

ヴィヴィオちゃんは恐らく今回のキーパーソン。だったらここで護りきるよりもきっと楽しいんじゃないか？
僕の中の何かが、誰かが言う。楽しければそれでいい。楽しませろ。と。
だから武具の雨が降り終わった後にヴィヴィオちゃんをその場所に

転送させる。
ヴィヴィオちゃんは気を失っていてぐったりと横たわっている。侵入者の目の前３Ｍくらいの場所だ。

「さぁ、連れて行くといいよ。これはマスターも知っている事だし。君達がその子を連れて行くなら僕はこれ以上のことはしない。
けど――――――よく考えてね。嘘や約束を破ったら。死を以って謝罪しろ、雑種」

語尾に大人モードの覇気を帯びさせて侵攻してきた敵に向けた。たじろぐのが見える。ならこれで退かないならあとは死ぬだけだ。
あぁ、死ぬだけ。

「君達の目的はコレで完了したはずだよ。それでもまだやるっていうなら・・・命をおいてく事になる」

ランサーさんに合図して前に出てもらう。ランサーさんは槍を向けて挑発する。

「死にたければそのまま残れ。死にたくなければ逃げろ。宣告はしたぞ」

少し考えてたのか念話で話してたのかわからないけど、少ししたらヴィヴィオちゃんを連れて行った。

「いっちゃいましたね、ランサーさん」
「あぁ行ったな」

さて、これは誰が責任取るのかな。あれ？もしかして僕？じゃぁ大人の僕に代わっておこう。

はやてＳｉｄｅ

六課襲撃から暫くして。わたしはなのはちゃんと帰ってきた。
ヘリから降りてその一歩目・・・・・・その惨劇を目の当たりにするんや。
ヘリの中で聞いていた報告――――口頭や文章でしか確認できひんかった六課の変わり果てた姿を目の当たりにするまでは信じられへんかった。
その殆どはギルガメッシュの仕業というのも聞いていたので吃驚せぇへんで。せぇへんで。

ヴィータはゼスト、という既に死亡した魔導騎士と戦った。
炎熱系の使い手らしかったがシグナムほどではなかったとの事。

スバルは――――ギンガを救おうとして「全損」。今は集中行きやな。

フェイトちゃんは向こうの戦闘機人と出会って何か会話をしただけで終わったらしい。何回か切り結んだらしいけど。

あとはヴィヴィオが・・・・・連れ去られた事。
これは後でギルガメッシュに問い詰めなあかんな。

「しかし・・・・・なんや・・・これは・・・・・・」

瓦礫の残骸が散らばってる。武装隊の倒れてる姿まで見える。
その近くには――――――ザフィーラとシャマルが倒れていた。

「シャマル！ザフィーラ！！！」

ミラくんが鍛えたザフィーラまで倒されるやなんて・・・・あいつら、なんなんやねん！
ジェイル＝スカリエッティ・・・フェイトちゃんが追いかけてる広域次元犯罪者。
その手足になった戦闘機人が全部で十二人。そのうちの１１人を確認した。

その数人がここにいた。
なのはちゃんもフェイトちゃんもここに来るのを邪魔された。
ヴィヴィオを護るため。ヴィヴィオを攫う為。

もう手が多すぎる。ヴィヴィオの子守しとったギルくんとランサーさんはどないしたんや。姿所か魔力も感じひん。
ミラくんの部隊はこうやってたまに判らなくなるんがあるからなぁ。
後でミラくんに聞いてみんと。

「ヴィヴィオ・・・ヴィヴィオッ！！！！」

一緒に帰ってきたなのはちゃんが六課のほうに走っていく。
それをわたしは背中を見つめる事しかできひんかった。
何が絶対守護の部隊を作るや。悲しませないように、誰もさびしい思いをせん様にするための部隊や。

「それが・・・・この有様や。なんやねん。全部無駄か」

これはわたしのやりたかった事やない。ここからまだ立ち上がれる。シャマルに近づき、傷を見る。シャマルを先に看れば治療手として一人増える。

なんとか多少は動けるくらいには傷は浅い。よかった。意識も戻った。

あとはザフィーラの傷。こっちは結構な程に酷い。

「シャマル！」

「ザフィーラは・・・私やヴィヴィオちゃんの盾になってくれて・・・その分怪我も酷いんです。応急手当や私の魔法では時間がかかりすぎてしまう。

本局お抱えの病院でならきっとっ・・・・！」

まだ生存していた武装隊や非戦闘員、治療員に二人を任せる。

「シャマル、後でまだ大仕事がひとつだけ残っとる。頼むな・・・・？」

「はい。任せてください。湖の騎士は王の下に」

頭を下げて一礼に伏す。治療員にあとは預けてわたしは六課の中へと向かった。

「まだや・・・・まだ終わっとらん・・・・・・」

第百三話　不沈艦、再び

フェイトＳｉｄｅ

夜になった。生暖かい風が吹く中、まだ瓦礫の撤去作業は続いている。
フォワード陣もミラの部隊も手伝いに出ている。
何よりも――――――隊舎が破壊しつくされているのには私も気が落ちたものだ。
でもエリオやキャロが見ているから私は気丈に振舞う。

だって――――――私が折れたら私を見てる人はきっともっと折れてしまうから。
だったら私は。強く前を見続ける。それが。ミラの横に立てる条件なんだろう。
ソレを言えばはやてはきっと横に立てるだけの物を持っている。
セイバーさんやアーチャーさんとは違う、横に立つ資格があるのだろう。
まだ私にはないソレが。

「まだまだなんだなぁ、私も」

ふとポツリと口から漏れた。それは小さく小さく誰にも聞こえないくらいの小声。
風に邪魔されて自分でも聞き逃すほどの呟きは夜の闇に溶けて行く。

「ヴィヴィオも。連れて行かれたんだよね」

ギルガメッシュが面倒を見るからと言っていたのだが結局はつれて

かれてしまった。
今ははやてが問い詰めているところだが、最近のギルガメッシュは少年モードが多いので逆に丸め込まれそうだ。
あの笑顔で迫られたら多分、私は負ける。これは確定事項だ。

他にもメンバーで治療を受けているものは多い。

スバルは完全治療の為に入院。ティアナが今は面倒を見ている。こらへんはバディらしいね。
隣の部屋にエリオとキャロもいる。エリオもキャロも最後まで戦ってくれていたっていう。誇れる位に嬉しいよ。

シャマル先生は軽傷だったらしいが、シャマル先生を庇っていたザフィーラが入院。
ミラに稽古をつけてもらっていたザフィーラでさえ重傷になるような相手だったと言うのか。
シャマル先生やヴィヴィオの盾になったって聞いてるけど・・・今はスバルたちと同じ病院。

ヴァイスさんも何気に入院してた。ティーダ隊長がお見舞いに行ってる。

私は――――――戦闘機人二人と対峙してのうのうとココに居る。
私はいていいのかな。たまに思う。それでも――――――名前を呼んでくれた親友の為なら私は何でも出来ると思うから。

なのはＳｉｄｅ

六課の隊舎が見える少し高い場所。そこに私は一人だけ。
街灯もない。星空だけが私を照らしてる。
多分今は照らされたら大変な事になる。この暗さは私の心。ヴィヴィオがいない。それだけなのに。
ううん、違う。ヴィヴィオが居ないから。だから私はこんなにも。

「ヴィヴィオに満たされてたんだろうね・・・・」

小さくつぶやく。どうせ誰も居ないのに憚ってしまうのは悪い癖かな。
空を見上げれば目尻りから雫が流れる。あ、これやばいな。

「　　なのは？」

その時に私を呼ぶ声がした。ずっと、聞いてきた、飽きない親友の声。

「・・・・フェイトちゃん」

ゆっくりと振り向く。しかし視線が向けられない。けど、頑張って視線を向けた。
其処には強い意志を持った瞳で私を見るフェイトちゃんがいた。

「なのは・・・・」

フェイトちゃんが近づく。あ、やばい。泣いてるのがバレちゃう。

「ヴィヴィオ。絶対助けようね」

その一言がストライク。判ってますよて顔でいうんだもん。フェイトちゃん卑怯すぎるよ。
そんなんだから私だって泣くのをとめられなくなっちゃうじゃない。
フェイトちゃんは何も言わずに近づいてきた。私より少しだけ背の高いフェイトちゃんは私を抱きしめてくれた。

「う・・・・・ぅぅ・・・・」
「誰も見てないよ。だから・・・・今は思いっきり泣いていいんだ」
「うぁ・・・・あああああああああ、うわあああああああああああ――――――――――――」

泣いた。

はやてＳｉｄｅ

目の前には金髪の少年。それと青い地上本部の制服を来た男性。
わたしはこめかみに青筋をたてるのを我慢しとる。

「こんなに怒っとるん、わかるか？」
「さて？なんでですか？」

少年がきょとんとした顔で聞き返しよった。

「ヴィヴィオを護るゆーたよなぁ？なんで攫われとんねん」

「いやぁ、意外でした。僕の目を盗むなんてやりますよね」

「全くだ。俺たちの目を欺くなんざ中々できねえぜ。誇っていいかもな」

「あー。そうですね。多分アーチャーさんの鷹の目でも無理だったと思いますよ」

なんて言いよった！言質は取れてんねん！

「まぁ、えぇ・・・ミラくんに責任負ってもらおか」

まだココに帰ってきていないミラくんに責任を負わせてから次の行動を考えよう。

どないしたらえぇかは――――――これから決める。

大体の流れ、っちゅーか。どうするべきか、道動くかは頭に入っとるからそれを後は実現させればえぇだけや。

「んじゃ、ギルくんとらんさーさんはミラくんの到着次第やな」

「えぇマスターの所に僕らも行かないといけないんですよね。その代わりファントム隊がロングアーチに随伴するという事ですので」

「あ、ほぉなん？確かにディアーチェたちがおったら楽やけど。グレイル隊はどないするん？」

「俺たちゃマスターのところに一旦集合だ。レグルス隊はこのまま隊舎に待機らしいしな。動けるのばらけさせたらそうなったわけだ」

む・・・アリサちゃんたちはココに待機なんか。戦力的にはほしかったけどな。

でもしゃーないか。一応、あたって砕けろや。後で言いにいったろ。

すずかＳｉｄｅ

しかし派手に壊されたものだね。
ココまで壊すのにこんなに時間が掛かるものならやめてしまえばいい。

「・・・・おっと」

スマートな破壊の方法とか、そういうのばかり教わったからなんだか破壊衝動が血を超えて出てくるなぁ。
近くのアリサちゃんは召喚獣を使って瓦礫を運んでるけど私に気付いてないのか気にしてないのか。

長い間一緒だから互いに居るのが当然。だからこそ相手の事もそれでいいんだ、と容認してる部分があるよ。
だって、出会った頃に思わないよ。ドラゴン呼び出すなんて。
そんなこと言ったら私も多分思われてるなぁ。

「すずかー。ココらへんちょっとふっとばしてもらっていいー？」

アリサちゃんに呼ばれていくと、大きな瓦礫が鎮座していた。
これは流石に壊してバラバラにしてから運んだほうがよさそう。
だから私が呼ばれたのか。まぁいいけどさ。

「んじゃ、そうだなぁ・・・爪で十分かな」

右手の指が固形化して爪に代わる。それで思いっきり振れば瓦礫はすぐに破壊されて小さな瓦礫に変化した。

「サンキュ、すずか。これ壊すとなると大きめの呼ばないといけなかったからさ」

「ううん、いいよこのくらいなら。問題なしなし」

笑顔で応対するアリサちゃんと私。

後で回りの隊員さんに聞いたら怖いって言われた。

なんで？

アリサＳｉｄｅ

隊舎の瓦礫撤去作業にわたし達は追われていた。

レグルス隊は全員撤去作業。のはずなんだけど・・・・一人だけ見当たらないんですけど。

なのはのお兄さんで高町恭也副隊長。そういえば六課が出来てからまだ顔を合わせてないかも。

なのははは”おにいちゃんらしい”っていってたけど大丈夫なのそれ？

あ、ティーダ隊長はヴァイスさんのお見舞いで居ないから、実質はすずかと私だけになる。

すずかは相変わらず力任せの撤去してるなぁ。ああいう直接攻撃だ

と楽だったのに。
あ、召喚獣たちがダメってわけじゃないんだけどね。
体格的に大きなのばっかだから。細かい作業が苦手っていうか。
タイタンはこういう作業は鉄板だから召喚してるけど。あとは・・・
・オーディンね。斬鉄剣で瓦礫を切り裂いて小さくしてもらったり
とか。
・・・・バハムートやリヴァイアサンは不向きなのよねぇ。壊す
事はできても。規模がでかいし。

そういえば。検査入院してるキャロは元気かな。
結局最後の最後で怖がって竜召喚はしなかったみたいだけど。
あの子の才能的にいえばバハムート零式までなら召喚が出来そうな
くらいの才能を眠らせている。
それを今まで起こそうとしたんだけど・・・・・もう少しでおき
そうなんだけどな。地道に頑張るしかないて思ってたんだけど。
もう、そんな余裕もない。ギンガが連れて行かれたと言う報告はわ
たし達も受けている。だったらもうだらだらしてるわけにも行かな
いわよね。

「・・・・・・む」

考え事してたら一際大きな瓦礫が出てきた。ほとんど埋まってるっ
て言うか空から降ってきた感じ。
タイタンでもきつそうだなぁ。すずかに頼もう。

「すずかー。ココらへんちょっとふっとばしてもらっていいー？」

近くに居たすずかを呼び込む。すずかは今してる仕事を後回しにし
てでもすぐに来てくれた。
で、すずかに瓦礫を吹き飛ばしてもらう。この威力、凄いわよね。

エネミアで幹部相手に無双したっていうし。
私たちの中で直接攻撃が一番高いのは多分、すずか。汎用性も速度も威力も多分、トッププクラスだろう。
そして目の前で簡単に『爪』で瓦礫を吹っ飛ばすすずかを見て私は思う。
本当に友達で、親友でよかった。と。

「サンキュ、すずか。これ壊すとなると大きめの呼ばないといけなかったからさ」
「ううん、いいよこのくらいなら。問題なしなし」

笑顔ですずかが戻っていく。まぁ、ココまで砕いてくれたのは助かるわ。

「タイタン。じゃぁ運んじゃいましょうか。コレが終わったらご飯にしましょ。あっち側のシヴァたちにも伝えておいてね」

タイタンが頷いた。無言なのは体系言語が違うからって言ってた。
ババハムートやリヴァイアサンは幻獣王や幻獣神だからっていうんでわたし達の言語も話せるらしい。

瓦礫の撤去が終わったらねぎらってあげないとね。

スバルＳｉｄｅ

今朝になって意識が正常に戻った、みたい。
まだちゃんと記憶がはっきりしていない。ティアが言うには私は戦闘機人モードになって蹲っていたって。
なのはさんもソレを見たって。データでは知ってたみたいだけど、ちょっとショック。
今はティアが傍にいてくれてる。

「ごめんね、ティア。迷惑かけちゃった」
「そんなのいつもじゃない。今更言っても仕方ないでしょ。ほら、リンゴ剥けたわよ」

ティアがリンゴの乗った皿を突き出してきた。

「えへー。ツンデレティアー」
「そういうコトいうならもうあげないわよ・・・？」
「あ、ごめんごめん！もうしないから！そのリンゴをあーんしてください！」

ティアがリンゴを私の口にねじ込んできた。コークスクリューでリンゴ入れてくるとか難易度高いよてぃあああああああ！！！！！

「全く・・・あとでチビッコにも謝っておきなさいよ？心配してたんだからね？」
「うん。そうだね。ということで入ってきなよ。エリオ。キャロ」

部屋の外で二つ人の気配がじっと動かなかったのを感じていた私はそのよく感じ知れた気配に向かって入ってくるように促す。
するとエリオとキャロがおずおずと入ってきて、

「スバルさん、もう大丈夫なんですか？」

「あの、怪我が酷いって聞いてっ・・・」

二人とも本当に優しいなあ。あは、泣いちゃうかも。

「うん。もう大丈夫。それに・・・話しておかないといけない事、あるからね」

二人の視線は私の体・・・いや、右腕に集中した。
まだ剥き出しのコードやらが包帯からはみ出てる。

戦闘機人の事。過去の事。ギン姉の事。お母さんの事。多分全部話したと思う。
忘れてる事もあるだろうけどソレはまた思い出したら隠さないで話すって約束した。
エリオもキャロも正面から向いてくれた。だからこそいえたのかもしれない。
ティアも最初言った時は受け止めてくれたし。
うん。やっぱり隠し事はダメだ。言ってわかることは言わないと。

「じゃあ、スバルの体が治り次第六課に戻るわよ。チビッコはもう戻れるの？」
「はい。検査入院ってだけですから明日には」
「ん。じゃぁスバル。私達は先に戻るけど・・・あせっちゃだめよ。本局できっちり治してきなさい」
「うん。ありがとう皆。しっかり治してくるから」

そうして私達は一旦別れた。きっちり治して、あせらずにギン姉を助けに行く。それが今の最重要事項だ。
待っててギン姉。必ず助けに行くから――――――――――――

はやてＳｉｄｅ

クロノ提督やリンディ統括官、騎士カリムと話し合って、アレを用意してもらえた。
過去幾度もお世話になったなつかしのアレに。

たった一回だけの運行。既に廃艦になりつつあるソレは取り壊し作業に入る手前だった。
無理やりでも後一回。飛べるようになるのに最速で４日。
ソレまでには準備を終わらせないとあかん。

「リィン、シグナム。各方面に照らし合わせよろしくな」
「了解です」
「ヴィータは内面お願いしよか。必要な人材はどんどん引っ張って構わへんから」
「了解！」

簡易会議室を使わせてもらいながら指示を飛ばしていく。
この場に居ないのはシャマルとザフィーラ、ヴァイスくん。
それにミラくんたちイルジオンリッターの皆。

なのはちゃんとスバルが何か話してたり、フェイトちゃんとエリオキャロの家族もこれからのことを話しとる。
わたしも話したいけど指示だしてもーたからな。寂しいならちゃん

と言うからえぇ。
その前にやる事はやらなあかんし。ほめてもらうのは全てが終わってからや。
ミラくんに頭なでなでしてもらうまでは死んでたまるかっちゅーねん。

ドックに立ち、ソレを見上げる。懐かしのアースラを。
簡易的ながら機動六課の部署を転移しておく。書類も出来上がっとる。
あとは時間を待つだけ。
さぁ――――――もう一度空を飛ぶ雄姿を見せてもらおか。

第百四話　幻影の路、聖王の揺り籠

ミラＳｉｄｅ

公開意見陳述会から数日。俺たちは津名魅のメインブリッジに集まっていた。
現状、アリサとすずかが六課の敷地の瓦礫撤去作業に出張ってる為にフルメンバーではないが、それ以外は全員をそろえた。

「さて。これからのことなんだが」

話すのはこれからの俺達の身の振り方。六課と一緒になってスカリエッティを追ってもいいがそれだとあいつらが成長しない。
なのでまずは一切の接触をしない事を通達する。

「それでいいのか？」
「あぁ。俺たちは最初は傍観者だ。それでも最後の最後には手を出すけどな。まずはあいつらの成長を促さないと」
「我は出番があるだけでいい。あとの雑事はお前らが間引け」

ギルガメッシュめ。いつの間にか大人モードに戻ってたか。

「ヴィヴィオを渡した理由を教えてください」
「まぁそういう意見は出るよな。ヴィヴィオの覚醒も今後の問題点だ。恐らく揺り籠の中で強制覚醒させられる。
そこになのはをぶつける予定だ」

ティーダの意見に応える。ヴィヴィオの正史でならそれが一番だ。
本来なら俺たちが手を出す事はなく全てが終わる。

でもそんなのココまで関わったら出来やしない。だったらあいつらのフォローで動く。それだけだ。

「危なそうな所からフォローしていく感じで動いてくれ。決して穴を作らないように。

それとサーヴァントは少し自重な。本気を出す事を禁じるぞ」

「む、何故だマスター」

「ランサー。俺達の力は最早戦局を簡単に左右できるほどだ。それだとあいつらの成長が促せない。ソレほどまでに俺たちは突出しちまったんだ」

一番簡単で。一番楽な方法は俺たちだけで一気に攻めてしまえばいい。物の３０分もしないで制圧が可能だろう。

でもそれでは機動六課の設立理由、カリムの”著書の予言”の事、その後の身の振り等と問題が沢山だ。

それらに感化されずに俺たちが動かなければならないという。

「ミラージュ隊長」

プシュ、という音と一緒に扉を開けてブリッジに入ってきたのは恭也さんだった。

気配的に揺らいでるとなると気殺を使ってたようだ。

「侵入者だ。津名魅まで入られるとは思ってもなかった」

恭也さんの視線の先には一人の女性がいた。地上本部の制服を着た大人しめの印象が見える。

「動きにスバルと同じ機械音がしたんで忍んだら案の定だ。気配も先の襲撃者によく似てる」

「名は？」

恭也さんの説明の後に俺は名前を聞いた。だが女性は何も応えない。何も言わない。ただ立っているだけだった。

この中で沈黙を続けられる豪胆なのもいいが面倒になる前になんとかしないといけなくなる。主に命的な意味で。

「応えないなら別にいいがその首が飛ぶぞ」

俺の言葉が終わると同時にサーヴァント四人が動く。

セイバーがエクスカリバーを抜いて首に宛がい、ランサーの槍が胸の前に停止し、アーチャーの剣製が周囲を包み、ギルガメッシュが鎖で体の自由を奪う。

「っ！？」

行き成りの事で女性は理解するのに時間が掛かったみたいだ。視線が驚いていた。徐々に自分の身に起きた事を理解していくと顔色が変わっていった。

少し女性に近づく。目の前はランサーが陣取ってるのでその横。今は女性のほうが下になってるので見下ろす感じだ。

「名前くらいは言う気になったかな。本来はこんな手は使いたくないんだけど」

「・・・・・・フン。だったら直接聞いてみればいいのでは？幻影さん？」

「・・・・・・・・・まぁ、大方スカリエッティのトコのだろ。

今の状況を見て忍び込んだ以上はその手が一番可能性が高い。

ヤツの駒を削るのも手だ、好きにしろ」

そう言うとセイバーとランサーは武器を引いた。剣製と鎖はそのままだが。
ココらへんはサーヴァントの性格が出てるな。騎士たるセイバーとランサーはこの手はあまり好まないしなぁ。やるなら真正面からって性質だ。
アーチャーは・・・まぁ半英霊らしい。エミヤの感情が出てるかもしれないけどそっとしておこう。

「我が聞き出そうか。手っ取り早く財宝の中から拷問に使えるのを見繕って試してみたい」『何処までやっていい？』
「・・・好きにしろ」『無茶はするなよ？あと殺すな。大事な駒だ、何かに使えるかもしれない』
「承知した。言質が出たぞ雑種」『了解した。傷はつけんよ。マスターが好きにしたらいい。手篭めにしても構わんしな』『んなコトするかよ』

クックッ、と含み笑みを浮かべて鎖を引いて女性を連れてギルガメッシュは消えた。
受肉化してるのに霊体化するとかドンだけお前もチートなんだよ。

「少し逸れたが。恭也さんも話に入ってください。これからのことを話してますので」
「了解した」

ギルガメッシュが離れて恭也さんが加入した。ギルには後で説明すればいい。ヤツの出番は判りやすいしな。
今後の動きとしては、

・取りあえず傍観を決める。
・機動六課の動きやすいように周囲のフォローを固めていく。

・アースラが動くのでその軌道の確保（これは津名魅による牽制攻撃になる）
・メンバーの戦闘が起きた場合のフォロー。
・メンバーの戦闘後のフォロー。主に治療等。

こんな感じか。状況がやばい時には臨機応変でと伝える。
あとは誰に誰がつくかを決めていく。ぶっちゃけて言えばこっちのほうが向こうよりも人数は多い。一対一であれば必勝は確実だ。
ただ、それでもやはり成長を見るという建前がある以上は先に手を出すのは出来ない。
ココからは戦術がものをいう。ティアナの考えを先読みして動かないとこっちが後手になりそうな雰囲気だ。
ロングアーチにははやてもいる。トライアングルエースが計略を鍛えたリィンもいる。
まぁ、リィンははやてについていくだろうけどな。だったらそのカバーも行かないと行けないか。

「治療組は？」
「ザフィーラはまだ万全に動けませんね。ヴァイス陸曹は恐らく吹っ切れば何とかなるかと。腐ってもエース候補です」
「なら二人の前線投下を優先事項に。シャマルにも出てもらおう」

直接回線でシャマルに繋ぐ。これは俺からのプライベートチャンネル。誰も盗聴できない、はずだ。

「シャマル。ザフィーラとヴァイスを治すから手伝え。手が足りない」
「え、ぇふぇ！？」
「何素っ頓狂な声だしてんだ。はやての手駒にするなら多いほうがいいだろうが」

「あ、それはそうですけど・・・わかりました。どうすればいいですか？」
「入院してる病院に俺が直接向かう。今は何処だ？」
「本局の治療センターです。２０分もあれば到着します」
「了解した。病院で逢おう」

会話を終わらせ回線を切る。ウィンドウは消えてまたポン、と現れる。
表示されているのはアースラの運行予定表。少将と言う立場を利用した悪手。バレなきゃいーのさ。
羅列している文字に目を通していく。

「恭也さん、また忍んでくれますか？」
「場合と状況によるが・・・」
「なのはを護ってください。また無茶しそうで」
「なのはか。まったくあの妹ときたら・・・わかった。すぐにでもいく」

瞬身。靴音が一瞬だけ鳴ったと思ったら姿が消えていた。
忍者らしい動きだな。暗殺者でもあるけど。今戦ったら多分、いい勝負できそうだ。

「ディアーチェ。レヴィ、シュテルと一緒にロングアーチに移動。また影武者になるが頼む」
「マスターの頼みなら仕方ない」
「ですね。マスターのお願いですからしょうがないです」
「マスターの言う事だからしょうがないね！」

なんだこの流れ。まぁでも実際手を出さないわけだし決めた事に反してるわけじゃない。

寧ろこれはフォローだ。そう、言い聞かせる。

「まぁ、頼む。これはお前達にしか出来ない仕事だ。いざとなったら独自の行動権を与える」

「フン。そんなものなくても我らは勝手に動くさ。何よりも烏が落ちたら我らも甘く見られるでな。

やつらが動きやすいようにはしてやる」

「逐一の報告を忘れずにな」

「わかっておる！頭を撫でるな！」

ディアーチェの頭を撫でてやる。言葉こそ反抗するものの撫でられる手を払おうとはしない。

シュテル、レヴィにも頭を撫でてやる。

「こうしてみると、俺のほうが背が高くなっちまったな。出会った頃は同じ位だったのに」

「それだけ月日が経っているのです。そしてこんなわたし達でも成長してきました。体だけでなく、心まで。それはマスターがいたからです」

「シュテル！恥ずかしいから言うでない！」

「王様照れてる？」

「照れてにゃい！！」

マテリアル。闇の書と呼ばれた夜天の書の闇の部分が結合して産まれた存在。

本来ならば消えていくべき存在だったのを俺の魔力で繋ぎとめた。

素材となったなのは、フェイト、はやての姿をして俺に仕えてくれている。

「ありがとうな」

ただ一言。しかし心のこもった最大の言葉。これが俺の贈る言葉。
三人は照れた顔をしてそれぞれの配置場所に戻る。話し合いが終わればまた暫くは逢えなくなる。
見送る事はない。またすぐに逢えるんだから。

「ティーダ」
「はいッス」
「アースラとゆりかごに近づくヤツを超長距離からの射撃援護。出来るよな」
「不可能を可能に。実行してみせますッスよ！」
「それはつまりアレを使えってコトか」
「情けないッスけどお願いします」

了承だ、と一言返す。それだけでティーダは笑った。かなりの難度の仕事を与えてしまったかもしれない。
でも、

「俺は無理な事はさせないんだぜ」
「わかってるッスよ」

皆まで言わなくても。なんていわれた。何だよ俺の心筒抜けか？

「隊長はどーんと構えてたほうがいいッスよ。その分下が動くんです」
「言うようになったな、ティーダ」
「上司がきつい人ッスからね。このくらいにはなるッスよ」
「よく言う」

笑みと笑みで向かい合う。拳を合わせてからティーダが離れる。

「少し、人員割かせてもらうッスよ」
「好きなだけ持っていけ。バレないくらいならいくらでも」
其処からティーダは人員確保のモニタウィンドウを広げて入力を開始した。
どれだけ持っていくかはわからないが、任せても大丈夫な人材だ。
でなけりゃ執務官なんてやってない。

「ティーダ、後で一人回すからな。空けとけよ」
「うぃっす」

ティーダへの指示も終わった。後はサーヴァントへ。
サーヴァント達はさっき荒ぶった場所で待機していた。

「マスター。さぁ、ご指示を」
「セイバーは俺の傍に。俺の剣を預ける」
「了解しました。汝が剣は我が剣に。我が真名に賭けて守護します」

セイバーは俺の傍で護衛。というよりも恐らく突進した時の俺の一番の剣に成り得る。
最優のサーヴァントの名は伊達じゃない。

「アーチャー。アーチャーはスカリエッティのアジトで独自行動。行動規約はお前に任せる。広域特別捜査官、頼むぞ」
「ふ。任された。しかしマスターひとつ聞いていいか？」
「・・・・・」
「別に――――――捕まえてしまってもいいのだろう？」

ククッ、お前ってヤツは昔からそうだよ。ここ一番でソレだ。何時

も通りだからこそ笑みも出るってもんだ。

「ランサー」

「おうよ」

「エリオたちのバックアップ。でも決して手を出すな。口出しはいいけど」

「なんか不完全燃焼だな。だけどまぁやってやる」

「不慮の事故にあったらソレは仕方のないことだよ、ランサー」

「あぁ――――――成程。そりゃ仕方ねぇ」

ランサーもクツリと笑った。俺の含みに気付いたか。手をひらっと返して応えてくれた。

あとはココに居ないギルガメッシュか。アイツには後で伝えておこう。

「さぁ。始まるぞ。長い間種を撒いた苗が育つ瞬間だ」

コレを乗り切ればきっと。イレギュラーにも勝てる。そう俺は確信を感じていた。

ヴィヴィオＳｉｄｅ

痛いよ。

辛いよ。

怖いよ。

助けて。

なんで？

今いる場所はよくわからない。
でも何か懐かしくて怖くて逃げ出したいくらいにイヤで。
でも動けない。椅子に座らされて身動きが取れない。

「ほぅ～ら、聖王サマぁ？どんどぉん感情を出しちゃってくださいねぇ？でないとこの揺り籠は動かないのですよぉ」
「う、うぁ、うあああぁぁぁぁあぁぁあ、あああああああああああああああああああ――――――――――――」

叫び声が響く。部屋に？ううん、頭に。痛みが走る。激痛。
それでも。眠る事を許されないくらいに痛みが襲ってくる。

もういやだ。

泣いても。

誰も助けてくれない。

こんな世界――――――もう、イヤになりそう。

たすけて・・・・

たすけてよ・・・・・・・・

なのはママ――――――――――

第百五話　無限の欲望

都市部からかなり離れた山間部。そこでアレは起き上がった。
金色の艦。魔導の結晶。聖王のゆりかごと言う名の戦艦が。
地鳴りは空まで届き、ゆりかごは空へと上がる――――――

それは、誰もが見知り聞くことの出来た事象だった。
もちろん、ココにも――――――

ミラＳｉｄｅ

「ついに動いたか」

遠隔モニタに映し出されるのは巨大な戦艦の浮上シーン。
強襲型の形状をした金色の戦艦は徐々に空へと上がっていく。

「ゆりかごは動き出した。はやてたちも動き出した。事態は終息へ向かう」

俺はモニタを切る。これ以上見ている必要性はないと判断したからだ。
俺の傍にはセイバーがいる。俺の剣。いつも傍にいてくれる存在だ。

「よろしいのですか？」
「あぁ。俺が手を出せるのは恐らく――――――まだだ」

だから。その時まで俺は雌伏の時。
他のモニタにはガジェットが大量に転送されて市街地を襲う様子が次々と映し出された。
形振り構わない無差別行動。まさにそう感じ取れる。

「地上本部が動いたか」

沸いて出てきたガジェットを地上本部の精鋭が抑えようと出撃した。
しかし無限に出てくるがジェットを相手に絶対数の限られた地上本部の精鋭たちではその波状攻撃に全面対処はできていなかった。

「あれだけの数で波状攻撃となると中々対処も出来なくなるでしょうね」

モニタを見ていたセイバーが言う。セイバーには地上本部の精鋭を鍛えたと言う実績がある。
つまりは間接的には教導した弟子となる。しかしその精鋭も今は押されているのが現実。歯痒いだろう。本来なら助けに行きたいだろう。
それでも身を抑えてココに居る。
俺はセイバーを押さえつけているのかも知れないという思いを抑えながら次の手を考える。

「六課は――――――どう動くかな」

ココまでの動きだ。既に理解はしているだろう。
津名魅にデータが来ているのだからアースラにだって情報は入っているはずだ。

ティアナＳｉｄｅ

ロングアーチから出された作戦は3グループに別れての個別突撃。
空、陸、地下。
私達フォワードは陸を任された。

「多分、一番激化するのは陸だろうね。でも、皆なら大丈夫だって私は信じてる」

なのはさんだ。見送りに来てくれて一言くれた。
これだけでも違う。思われてる想いは何よりも強い。この機動六課に来てそれは強く思い知らされた。
だからこそ。この言葉は重みがある強さを孕んだ。

「オマエらが今まで鍛えてきたのは今のためと思えよ。ココで出し切れなかったらもう後はねぇ。厳しい事言ってると思うけど正念場だ。キバってけ！」

「はい！」

わたし達の声が重なる。

「出来れば手伝いたいけどね。ここはわたし達も行かないといけないから」
「ミラージュたちとの連絡もつかねぇ。あたしたちでやるっきゃねぇーんだ」

そう。公開意見陳述会から剥こう、ミラージュ隊長達との連絡がつかない状態が続いている。
ロングアーチに緊張が走っている。何よりもはち切れそうなのは八神部隊長だ。
それまでに心配なんだ――――――恋仲、か。いいなぁ。

少しは羨ましいとは思う。そりゃまだ１６だし。恋もしてみたい気もある。
でも今は仕事に専念。恋は後からついてくるもんよ。

「それじゃいくわよ、皆」

スバルが。エリオが。キャロが。返答する。さぁ行こう。今まで鍛えたものを今出さなきゃいつ出すってのよ。

なのはＳｉｄｅ

フォワード陣を見送ってからヴィータちゃんとロングアーチへと戻る。
とはいってもメインブリッジだけど。もう見慣れた場所。行きなれた場所。
其処に入るとはやてちゃんとフェイトちゃんが話し合っていた。

「お、なのはちゃん。ティアナ達はもぉいったんか」
「うん。見送ってきたよ。きっとやってくれる。なんかそう感じち

ゃったよ」
「ほぉか。そりゃ重畳重畳」
うんうん、とほくほく顔で頷くはやてちゃん。それでもその陰には不安が漂ってる。
ミラ君とはまだ連絡取れてないみたいだね。
「はやてはな。ずっとミラージュに連絡いれてんだ。でも場所も掴めない。あいつの旗艦、津名魅にもつながらねぇ」
ボソッとヴィータちゃんが教えてくれた。
そっか・・・どうしたんだろう。
「でもまぁ、大丈夫だ。あたしたちがいっからな」
と。一番絆の深いヴィータちゃんらしいね。だったら杞憂だったかな。
「あ、そうやなのはちゃん。今カリムに連絡しといたから、すぐにでもリミッター、解除されるよ」
「リミッター解除か・・・それほどなんだよね、もう」
つまり、私達も本気で行かないと行けないわけだ。
本気も久しぶりだな・・・・。
「なのは、ブラスターは4までだからね？」
「判ってるよフェイトちゃん。それ以上は私が墜ちる。そうだよね」
「・・・・・・・・」
心配そうな顔しないでよ。分かってる。フェイトちゃんはずっと私

を見てくれてたから。
魔法に出会ってからずっと。本気で戦って本気で護って本気で背中を預けて本気で語れる親友だから。
だから――――――もう心配させないよ。

「フェイトちゃんこそ。スカリエッティのアジト行きでしょ？」
「うん、そこは監査部の人と一緒だから。えっと、ロッサ監察官」
「カリムの義弟や。わたしと同じ古代ベルカ式の希少能力持ち。信頼できるよ」

そっか。だったら平気。

「じゃぁ、私は空に」
「わたしは地下のアジトだね」
「あたしはなのはのフォローで空行きだ。足ひっぱんなよ？」
「あ、誰に向かって言ってるのかなー、副隊長さんはー」
「けっ、おまえが階級ふりかざすなんざ明日は雨じゃねぇーのか？」
「あー、はいはい。喧嘩は帰ってからな。明日になったら雨が降るか槍が降るか確認できるんやし」

はやてちゃんが抑えてくれた。ロングアーチにいつもの和気が訪れる。
これから決戦だというのにいつもの雰囲気。でもこれは必要な事。
緊張からフルパフォーマンスは期待できない。
少しでも常時の状態でいるのがベスト。いつもと同じ事をするだけ。

「じゃぁ行こうかな。フォワードに先こされるのは隊長として面目がつぶれちゃいます」
「それも少しは嬉しいくせにな」

聞こえたよヴィータちゃん。でもそうだね。否定は出来ないよ。
だって自分が育てたのが活躍したら嬉しいじゃない。

「と、そろそろ時間や。いこか」
「え・・・・はやてちゃんも？」
「わたしもや♪」

え・・・・ココはどうするのさ。はやてちゃんがいなかったら誰が総指揮するの。

「それなら問題あらへん。ちなみになのはちゃんもフェイトちゃんも平気やからね」
「あ・・・・」

そういうことか。つまり、

「そういうことだ塵芥！烏の出番まで我が奪ってもよかったのだがな！」

偉そうな気配がきちゃった！連絡取れてなかったはずなのに！

「マスターからの伝令を聞け、屑ども！思うままにいけ！責任は俺が取る。以上だ！」

どーん！とか効果音が聞こえそうな位に偉そうなディアーチェちゃんが入り口にいた。
あぁ、だからはやてちゃんは。

「せやからわたしも前線にでて指示を出すんよ。ここはディアーチェに任せてな」

「そっか。ミラ君は元気？」
「うむ。マスターは極力手が出せぬ状況だ。だが心配するな。常に見ておるし、手も出している。我らのようにな」
「スターズ分隊長の代わりに私が。ライトニング分隊長の代わりにレヴィもいますから。安心してください」

シュテルちゃんもいたんだ。黒いバリアジャケットにもう着替えてる。
私に瓜二つの姿。ただ、イクシードモードなんだよね。

「イクシードモードか。シュテルちゃんも本気だね」
「オリジナルに負けません。いつか喰ってやりましょう」

こわいよ！？まだ私と遣り合おうとしてるのやめて！？

「ほらほらちゃっちゃといきなよ！僕が進めるなんてよっぽどだよ！」

レヴィちゃんに言われて時間を気にした。あ、もうやばい。作戦時間ももうすぐだ。

「じゃぁ今度こそ行こう」

皆で。出撃をする。シュテルちゃんは私に。レヴィちゃんはフェイトちゃんについていく。
はやてちゃんは――――――独自行動するらしい。

さぁ、始まる。

スカリエッティＳｉｄｅ

ふふ、ふはははははは。
始まった。始まったぞ。私の欲望を、心のスキマを埋めるための作戦が。

「ウーノ！宜しく頼むよ！」
「お任せくださいドクター。私の手に掛かればこの作戦も成功します。えぇ。そりゃもう１００％で」

少しずれた感じだがまぁいい。コレもあの輪廻の魔女の手によるものか？
それでもスペックは高くなったのだ。それに――――――奥の手もある。

「最高評議会のほうはどうしてるかな？」
「あちらはあちらで。手は打ってあります。恐らく自分の手で動かしてる感覚に墜ちてるでしょう」
「そうか。それは実にいいネ。彼らには楽しんでもらわないといけない。そう、その権利がある。ククククハッハハハハハハ！！！！」

ふぅ。久しぶりに腹の底から笑った気がする。これもセインが宴会

芸をしたとき以来だ。

「娘達はどうしてる？」

「順調に攻めてますね。タイプゼロ・ファーストの洗脳も完璧です」

「そうか！実に順調だ！面白くなってきたね」

いい。いいね。

「ただ・・・・」

ウーノが含みを持った言葉を投げてくる。何か言いづらそうだ。

「どうしたんだい？」

「機動六課の動きは把握できてますが・・・もうひとつの目的対象の動きが読めてません。コレに限っては少々不安要素が残ってます」

「ふむ・・・ドゥーエはどうしてる？」

「作戦実行中。問題はありません。あの場所から動いておりませんし」

「ならよしだ」

ドゥーエには二つの策を与えておいた。それと特殊な能力をひとつ追加して。

これで勝てる。

「さぁ。私の欲を満たしてくれ。幻影よ！！」

ふはははははは！面白い！今日はなんて面白いんだ！

未来永劫、今日と言う日は忘れないだろう！

???Side

暗闇の空間。

「ふぅん。スカリエッティも動いたね。僕はまだまだかなー」

暗闇に浮かぶモニタ。光りを発しているがそれは暗闇に溶けるように周囲にだけしか点されていない。
状況は全てここに集まっている。

「ねぇ。面白いよね。歴史が自分の手で動くのって」

すぐ後ろに話し掛けるが何も帰ってこない。
寧ろ、機械的な音が響く。更にはヒンヤリ冷たい空気も足元に流れている。
ココはドコカ。本来なら誰も知りえるはずのない場所。

「スカリエッティに資本を出していたのが君達とはね。いやいやまさかだったよ。僕にはとても想像できなかったよ？」

くるぅり。モニタに背を向けて半回転。其処には割れたカプセルと

流れた髄液。
そして腐った脳があった。
何も動く事はない。この場で動いてるのは自分だけだった。

「あは。１００年以上生きたくせに簡単に死んじゃうのはどう？悔しい？ねぇ悔しい？」

口角が上がる笑みを浮かべて脳に話し掛ける。けど反論はない。だってもう死んじゃってるから。

「輪廻から外れた存在はもう椅子がない。だからもうそこでオワリなんだ。君達が次に行く事はない。ココで停止だよ」

冷たい声。感情も何もない。
定められた仕事をこなしただけの事。

「最高評議会もこれまで。あぁ、代わりは僕がやっておいてあげるよ。といってもそんなに長くはやるつもりはないけどねー」

くるくると。スカートの裾を回してふわふわと遊ばせながら。
気分がいいよ。だってやっと直接遊べるんだから。

ねぇ――――――幻影クン？

神様からもらったっていうその力、オモシロイヨネ？

第百六話　決戦開始

ミラＳｉｄｅ

状況は千変万化。過ぎていく季節のように変貌していく。
今回の戦闘全てのデータが津名魅に集積されていく。

副官達はデータを解析して要るものと要らないものを仕分けていく。
そして選出されたデータが俺の前に並んでいく。
主に六課のメンバーの戦闘が映し出される。
それとナンバーズだ。ついでにスカリエッティのアジトの動向も捉える。
フェイトの周辺に設置しているサーチャーで状況は掴める。
映し出されているのは次の通り。

・なのはとヴィータ、シュテルがゆりかごに潜入。
・地上防衛ラインに合流しようとしているフォワード陣。
・スカリエッティのアジトに潜入しようとしているフェイトとロッサ。シスターシャッハ。
・独自行動をとるはやて。

以上の４つだ。目の前に四つのモニタを映し出す。
その中でもワイプするであろうのはフォワード陣のモニタ。
更に画面を増やす事になりそうだ。

「ゆりかごに入ったなのはたちの援護射撃したのはティーダ分隊長ですね」

「だな。あの超長距離を決められるのはあいつ”ら”だけだ」

決められた仕事をきっちりこなしている。流石と言うしかない。
しかしまぁあの超長距離での援護射撃なんて普通できないだがな。
其処は魔法による補足か。
でもあの距離は本当に砲撃クラスだ。

「もし敵に回ったら恐ろしいですね」
「そういうことというなよ。フラグは立てなくないぞ」

そういうこと言うとフラグが立ってしまうからやめてくれセイバー。
他にも動きがありそうな場所があるから見ておくか。

そうだな――――――――――

ヴィータＳｉｄｅ

ゆりかごには簡単に入れた。なんだか誘われてるような気もしたがなのはがずんずんと入っていったのでしょうがないからついてきた。

「オリジナルは大胆不敵ですから」
「いやまぁわかってるけどな」

そりゃこいつとは付き合い長いからわかってっけどよ。
同じ姿で半眼で言われるってのはなんか調子が狂う。まぁ色が違うけどな。
白いなのはと黒いシュテル。

みわけはつくけどなー・・・まだなんだか慣れねぇや。
あたしが元々夜天の書のプログラムだからかシュテルにはなんだか近親感があるし。
なのはは・・護らないといけない約束だしな。それに・・・目の前で墜ちそうになったのはまだ覚えてる。
あの時は助かったけど、あたしのいねートコで墜ちんじゃねぇぞ。

「鉄槌の騎士は心配性ですね」
「っ!?うっせぇーよ!心の中読むな!」
「素直じゃない鉄槌の騎士萌えーですね。わかります」
なんだこいつ!?前に一緒に任務やったときとちげーよ!?

「マスターからの影響が多々あります。つまり、マスターは鉄槌の騎士を――――」
「ちょっと待てえええええええええええ!?」

つまりあれか?ミラージュがあたしを!?
超ねぇよ!ありえねぇだろ!?どうしてそうなった!?
はやてじゃねぇのかよ!節操なしめ!あぁもうちくしょう!!

「ヴィータちゃんもシュテルちゃんも何やってるのかな」
う・・・先に進んでたなのはに注意された。あいつにだけは聞かせらんねぇな。

「問題ありません。全て録音しておりました」
「やめろよ!絶対やめろよ!?」
「第97管理外世界における芸人のフリと認識しました。正式には

上島理論と」
「おい！？」

そういうんじゃないから！もうあたしで弄るのやめてくれ！

「遊んでないで先いくよー」
「おい待てなのはっ！こいつつれてけ！」
「こいつとはまだ心外な。過度の緊張を和らげようと言う私の考えを無碍にする気ですか」
「ちげーから！オマエのその考えがちげーから！」
「シュテルちゃん、私と一緒に行こうか。火力アップだね」
「そっちに行った方が危険だ！？」

失敗した。そうだ。姿も同じなら魔力も一緒なんだよな。
ただ、シュテルのほうがなのはよりもぶっ放つんだった・・・。

「でも。言っちまったもんはしょうがねぇ。お前ら二人で行動な。あたしはここの中枢を叩きにいってくらぁ」
「中枢って言うと機動炉だね。大丈夫？」
「心配か？オマエのすぐ下の部下はそんなヤワなんか？」
「そうじゃないけどね。あー・・・やっぱ心配、なの」
「ハッ！鉄槌の騎士サマはそんなヤワじゃねぇーよ。オマエはよくわかってんだろが」

そうだ。そうだったね。となのはが納得した。シュテルもそれでいいって言ってるし。
それに――――なのはを護る方にいるならあたし一人のほうが動きやすい。

ぶっ叩いて壊すのは慣れてんだ。だから、

「とっととヴィヴィオを助けて帰ってこいよ。で、とっとと隊舎直そうぜ」
「うん。そだね。じゃぁ行ってくるよ」
「行って参ります」

なのはとシュテルが魔力光を帯びて飛んでいく。
アタシはそれを見届ける。見えなくなるまで。

「よし。んじゃあたしは機動炉だ。つっても何処だかはっきりわかんねぇから・・・・ぶっ叩きながら進む！アイゼン！！」

アイゼンを起動させてあたしは通路の前に立つ。
ふん。こんな通路の壁なんざあたしの前じゃ意味がねぇ。

聖王、ね。あたしは誰だ？夜天の王の守護騎士、鉄槌の騎士ヴィータ様だ。
同じ古代ベルカだってんなら覚えとけ。あたしという騎士がいることを。
そして後悔しろ。あたしという存在が。あたしという騎士がこの時代にいた事を。

ティアナＳｉｄｅ

廃墟になった都市部。その高速道路帯を走る。
エリオはキャロと一緒にフリードに乗っている。
スバルはウィングロードで走ってる。

「なんていうか・・・ティアナさん凄すぎです」
「うん。びっくりだよティアー」
なにを言ってるのやら。このくらいは出来るでしょうが。
「フリードやスバルさんの速度に合わせて走っていられるティアナさんが凄すぎです」
さいですか。でも今の私の魔力でならこのくらいは充分出来る芸当になってしまった。
足を強化して走るのはアーチャーさんが教えてくれた。
飛べない鳥がいるなら、ほかの事で機動力を上げればいい、ってね。
だったら。この手段を選んだわけだし。
「私もまさか同じくらいの速度で走れるとは思っても見なかったわ」
風を切る。まさにその表現が一番しっくりする。
そんなにおかしいかな。空を飛べないから走ってるだけなんだけどね・・・・？
『前方に敵影』
クロスミラージュが敵影を捕捉する。その数1。
たった一人で待っているというの？おそらく戦闘機人ね。
「聞いた？敵は一人で待ってるそうよ」
「みんなで掛かっちゃいましょう。時間が惜しいです！」
「ちょっと卑怯だけどその手が一番ね。じゃぁ時間短縮で――――」

そこまで言うと敵影が誰だか見えてきた。
戦闘機人のボディスーツに身を包んだギンガさんを。
このままいくと私とエンカウントね。だったらやるしかないって、ねぇ!?

「ティア、私がやる」
「スバル!?でもアンタ・・・」
「私がやらないとだめだよ。だってギン姉だもん」
「・・・・この先、防衛ラインで待ってるわ」
「うん。気をつけて」
「それは私の台詞でしょうに」

スバルが一本だけウィングロードを伸ばしてくれた。
何本も出せるように特訓したウィングロードが遥か先まで伸びていった。
防衛ラインまで伸びているとスバルが言う。
スバルと立ち位置を交換する。スバルが本流。私は側流に。

「エリオ、キャろ。突っ切るわよ!」
「はい!」「了解です!!フリード!!!」「キュクルー!!!」

フリードが嘶いた。それでもギンガさんは視線を反らさずに目の前のスバルだけを見ていた。
すれ違いざま、明らかに雰囲気の違うギンガさんを横目に抜けていく。
バカスバル・・・なんとかして来なさいよ?

スバルＳｉｄｅ

ティアたちと別れた私は今、足を止めている。
少し離れた目の前に立っているのはギン姉。私の最愛の姉。護れなかった姉。変わり果てた姉。
声をかけても反応は無かった。多分、マインドコントロールされてる。
まずはそれを解かなきゃ。

「・・・ねぇマッハキャリバー」
『何でしょう』
「勝てる、かな」
『勝てます。私の相棒（ｂｕｄｙ）なら勝つまで諦めない不屈の心を持っているはずですから』
「そうだね。だって教えられたのはあの不屈のエースにだもん。だから――――」

リボルバーナックルをギン姉に向けて。

「勝つよ、ギン姉。今日、今。この時が。私がギン姉から初めての勝利を掴み取る！！！」

開いた右手は遠めのギン姉をつかむようにして、拳を作る。
諦めない力がある。助けたい人がいる。伝えたい人がいる。目の前に。
ココで引いたら笑われる。いや、怒られるね。

『相棒（buddy）ならやれます。一緒にココまで来たんですから』
「相棒・・・おまえ、凄くいいやつだよね」
『フ・・・今更です』

ギン姉が構える。一撃必倒の構えだ。
こっちも構える。だけどギン姉とは違う構え。
ミラージュ隊長から教わった格闘術。一騎当千の交殺法。

「いくよ、ギン姉」

この拳、届かせる！！！！

ティアナＳｉｄｅ

スバルが伸ばしてくれたウィングロードをひたすら走る。
そのすぐ横で随走してるのは一匹の白龍。

「あんたたちも目的があるんでしょう？」
「はい。伝え切れなかった子がいます。その子は良い様に口車で乗せられてる可能性がありますから」
「だったら二人とも。強い気持ちでぶつかりなさい。負けない気持ちはこっちが上よ！」
「「はい！」」

いい返事。全くこの子達の成長速度といったら驚かされる連続だったわ。

魔力増幅の法を使ってる私よりも伸びてんじゃないの？そのうち魔力負荷の道に進む事になりそうね。

「負けないけどね！」

「「？？」」

つい口に出ちゃったじゃない。二人とも〝わけがわからないよ〟ってなってるし！

「気にしないで！恥ずかしいから！」

「わかりました！でも大丈夫です！僕たちも気にしないですから！どーんとしてください！」

「その気持ちがいらんわ！！」

ありがた迷惑ってわけじゃないけどなんかこー・・・こっ恥ずかしいじゃないの。

羞恥プレイよね、もう・・・。

ちびっこはわかってなさそうな感じだけど。

「もうチビッコじゃないわね。エリオ、キャロ。もし誰かに何かあってもきっちり防衛ラインまでいきなさい。いいわね？」

「わかりました！」

返事はいいんだけどね。気後れしないのもいいことか。

と・・・？ウィングロードが消えてる？スバルの魔力なら防衛ラインまでは伸びる計算のはずだけど。

「様子見のショット。クロスミラージュ！！」

『Ｙｅｓ』

銃口から魔力弾が発射される。ウィングロードに沿って射出された弾は掻き消えてる場所で消滅した。
つまり、何かしらあるってわけよね。結界とか。だったらそうね――――待ってるのは敵でしょう。
ならこのまま速度を落とすのもナンセンスよね。

「エリオ、キャロ。先に行きなさい。私はここで食い止める」

それだけで。なにがあるのか理解した顔になる。本当に成長したわね。
私をおいて超加速で飛ぶフリード。羽ばたきひとつで音速を超えたみたい。
何気にフリードも凄い成長してたんだ・・・びっくりした。
音速の壁を突き破っていくフリードを見送って私はそのまま走りながら弾の掻き消えた世界へと踏み入れる。

キャロＳｉｄｅ

はい、私です！キャロです！
今フリードに乗ってエリオ君と防衛ラインに向かってます。

スバルさんはギンガさんと。ティアナさんは結界の中に飛び込んでいきました。
ティアナさんが本当に飛び込んだかはその前に別れてしまったので判りませんが、あの勢いは行ったと思います。

これからは独自の判断で動かないといけない、ですよね。

「エリオ君。あの子を探そう」

「・・・そうだね。それが目的のひとつでもあるし」

エリオ君が迎合してくれた。嬉しいな。あの黒い召喚師の子。きっと脅されてる。予感だけど。

だったら。ちゃんとお話しないとわからないよね。何か出来る事、あるかもしれないし。

フリードが道路帯からオフィス郡へと抜けた。防衛ラインまでもう少し。

でも、そこでフリードが速度を緩めた。

建物にぶつからないように高度飛行してる中、なにがと思って下を見る。

其処には――――――あの召喚師と使い魔がビルの上に立っていた。

「フリード」

名前を呼んであのビルに行ってもらう。エリオ君も同じ気持ちみたい。

お話しよう。何も判らないままで戦うのはイヤだよ。だからまずは歩み寄ろうよ。

フェイトSide

スカリエッティのアジトは山間部の洞窟の中に隠されていた。
その入り口で合流したのは聖王教会から派遣されてきた二人。
一人は顔見知りのシスターシャッハ。もう一人は初見の顔。確か、
ロッサ、とか。

「はじめましてテスタロッサ執務官。偶然とはいえ似た名前に運命すら感じるよ。僕の名前はヴェロ「はいはい。ロッサは黙っててください。フェイトさん。此処が――――目的地です」
「・・・ヴェロさん？」
「違う！ヴェロッサ＝アコーズ。ロッサと呼んでくれたまえ」
軽めのポーズをとってから薔薇を銜える。あぁ、こういう人なんだ。
シスターシャッハが洞窟内部を指差す。軽く無視されたロッサはポーズを取ったまま硬直している。

「腐れ縁なんてこんなもんです。放っておいていいですよ。さぁいきましょう」

シスターシャッハはロッサをおいててくてくと先に歩いていってしまう。
ちら、とロッサを見てから、

「いきましょう」
「お供しましょう」

と声をかける。するとすぐにポーズを解除してついてきた。

うん。なんか不安だな。
中に入ってから教われないだろうか。私は早めに歩いてシスターシャッハと合流した。
ロッサはそれを見てショックを受けていたそうなのは後になってからシャッハに教えてもらった。

はやてＳｉｄｅ

独自行動なんて久しぶりやな。いや、こうして前線に出る事のほうが最近は珍しいわ。

「いつ以来やろ。あぁ、あの空港火災からや。そういえばあれからやったな」

あの空港火災を体験して救助に回ってからや。こないな被害を出さんようにって頑張ってきたんは。
そんで機動六課を立ち上げた。今はあの空港火災に関わった・・・・被害者が数人。とゆーてもスバルくらいか。ギンガはまだ陸士部隊に席があるし。
あかん、緊張してまうな。前線での指揮も久しぶりや。上手く出来るか？

「いや、あかんな。弱気になっとる。うん・・・・やっぱ心細いねんな」

今、傍にはミラくんはおらへん。それよりも連絡もつかへん。
アリサちゃんとすずかちゃんは気にしないでも大丈夫ゆーてくれたけどな。
何か大事な案件中らしい。いまわたしらが向かってる事よりも、かな。
せやけど立場がちゃう。向こうは少将や。将官には将官の何かがあるんやろう。
レジアス中将あたりが関わってそうやけどな。

「そういや、レジアス中将は地上本部で指揮とってるんやっけ」

それと、リィンが前にデータ抽出した相手・・・・ゼスト＝グランカイツ。
その人は既に故人のはずなんやけど、あの陳述会に向かっていた。
レジアス中将と因縁のある人や。そしてあの場にはレジアス中将がおった。
深読みするならいくらでも出てきてまうなー。あかん、悪い癖や。

「きちんと情報は裏づけせんとあかん。なぁ――――――リィン？」

視線をお腹辺りに向けるともそもそと胸元からリィンが出てきた。
苦しそうに息を整えるリィン。

「さすがはやてちゃんです！バレちゃいました！」
「当然や。わたしはリィンのおかーさんやで？」
「さすがはやてちゃんです！」

黙ってついてきたんは別にえぇけどな。どうせリィンの力が必要になるんやろぉし。

「で、これからどこに行くですか？」
「ん、一番酷そうなんはゆりかごの方やね。あっちの指揮系統に割り込んだろうかと思うとる」
「はやてちゃん腹黒狸全開です！」
「はっはっは。そんなこと言う口はどれかなー？」
「ひたっ！？ひはひでふほっ！？」

リィンの顔を指でうにうにさせつつ向かう場所は決まった。
ゆりかごへ――――――

あの場にはヴィータがおる。なのはちゃんがおる。シュテルも向かった。
それに勝てる要素が仲間のわたしでも見つからん。
さぁ。この馬鹿げた祭りを終わらせよう。

ヴィータＳｉｄｅ

機動炉に向かう途中。
新しいガジェットと交戦しながら突き進む。

「ココに来て新型かよ・・・・」

遠くに見えるシルエットは機械的なもの。このゆりかごの中でそれといったらガジェットしかない。

「やってやんよ。あたしをそう簡単に潰せると思うな・・・・・？」

其処にいたシルエットは昔に見たことがある。

記憶が蘇る。あの雪の日になのはを狙ったあのシルエット。

「あぁ・・・・あれはお前らだったのかよ。いい感じに怒りがこみ上げてきたぜ」

アイゼンを一振りして肩に担ぐ。

さぁ、潰してやろう。あの時の溜飲を今、下げさせてもらう。

「いくぞ――――――――――――――――――――？」

ぞぶり、と体の中で音がした。

「ぁ・・・・・？」

下を見ると其処には――――――あたしの腹から刃が生えていた。

第百七話　傷Ｔｏ傷

クアットロＳｉｄｅ

んふーふーん。

「ディエチちゃん、そろそろ出番よぉ」

「うん、じゃぁいってくるよ」

外套とカノンを背負ってディエチちゃんは規定のポイントへと移動する。

「と・・・その前に」

「どぉしたの？」

ディエチちゃんが足を止めた。

「今回の作戦、やけに派手すぎて・・・なんか怖くてさ。本当にコレでいいのかな、って。

ドクターは何処に向かってるんだろうって・・・・考えちゃうんだ」

「ディエチちゃん――――――」

何を言ってるのかしらこの子は。ドクターの言うことが今まで間違ってたことなんてないでしょうが。

ここにきて調整失敗かしらねぇ。これだからローナンバーは・・・。

「ディエチちゃん？すべてはドクターのためなのよ。そしてドクターが向かうところが私達の向かう場所。

それを理解しなさぁい？」

何を言うかと思えばそんなこと。そんなもの溝に棄ててきちゃいなさい。
これからがいいところなのに何を気を削ぐことというのかしら！
そんなんだからそんなんだから。
ドクターの意思を継いでるのはウーノ姉様から私まで。他の妹達は汎用でしかないのに。

「ほら、戻ってきたら話を聞いてあげますから。今は行きなさいな」
「うん・・・わかった」

ディエチちゃん。その考えはだめよぉ。それはは・め・つ・の言葉。考えちゃだめ。この作戦が終わったらディエチちゃんは調整槽行き、っと。
コンソールを叩いてディエチちゃんの今後を設定する。

「その間にわたしはぁ～、聖王サマをきちんとしておかないとねぇー」

玉座に座る聖王の器。今はあんまり泣くから意識を強制的にカットさせた。
だってピーピー煩いんですもの。もう少しで完成するわ。聖王の鎧を纏った本来の聖王の姿が。

「ドクターの願う世界を作ってその世界で楽しく遊ぶのが私の目的。楽しく楽しく駒を使って遊ぶのよぉん♪」

その為に礎になってねぇん、聖王サマ？

???Ｓｉｄｅ

聖王協会直属病院。
そこには機動六課に所属するメンバーが多数入院している。
その一室にいる患者もまた、そのはずだった。
看護士による検診。今日もまた静かに終わるはずだった。

しかし、病室にいるはずの二人はいなかった。
既にいなくなっていたのか布団すら綺麗に畳んである。

「え・・・・あれ？」

看護士は一瞬だけ理解できてなかった。
入り口にある患者名を確認。確かにこの部屋のはずだ。
なのに、二人ともいないという現象は看護士に数瞬の時間を与えていた。

「先生！この病室の患者さんがいません！」

看護士は医師に通達する。すぐに捜索されたが二人は病院内にはいなかった――――

ヴァイス＝グランセニック。
ザフィーラ。

二人の姿は――――――――――――

ティーダＳｉｄｅ

防衛ラインの超後方。此処から狙い定めるのは俺と相棒の二人。

「まったく。此処から狙えってのも無茶があると思わないか？」

「そういうなよ。出来るポジションだから配置されてるんだろ」

全くだ。隣の男は言う。膝をついて構えるのはライフル型のデバイス。

もう一人――――――俺は二丁の拳銃型だ。

「超長距離狙撃だってのにそのタイプで挑むお前さんのほうが俺から見りゃどうかしてるっての」

そりゃそうだ。此処から防衛ラインまで凡そ１０ｋｍ以上はなれた場所だ。

それだけ離れた場所を狂いなく撃ち貫く。

魔法で調整しつつも誤差数ｃｍで撃つのは多分俺と相棒だけだ。

「ハッ、仮にも執務官でエースなんだろ？そのくらいできるんじゃねぇの？砲撃魔導師ならよ。ランスターの弾丸は不可能はない。って妹まで真似してる位だし」

「お前な・・・結構しんどいんだぜこれでも」
「よく言うぜ。その癖俺より精度高いじゃねぇかよ」
「なんだ？怪我のせいにでもするか？ほら、もうすぐ俺は１０００だ」
「なんだとう！？こっちゃまだ８８０だってのに！」
「喋ってる余裕があったら撃て」

ライフルが火を噴いていく。俺も射撃を更に加速させていく。
こうして俺の仕事は続いていくのだ。防衛ラインの連中の援護として。

相棒の裾や襟からは包帯が覗いている。
いまだ全快というわけではない体でこの男は。
この射撃手は俺と同等の狙撃をしている。

「ティーダも中々じゃないか」
「ヴァイスこそ」

俺たちは。
今此処で撃つ。

スカリエッティＳｉｄｅ

「ウーノ。例のあれを用意したまえ」
「了解。トーレ、出番よ」
「了解した。既に準備は整っている」

ふむ。早いね。いや、先読みしていたかな。流石はトーレだね。

「輪廻の魔女からもらったデータは役に立ってるかな？」
「はい。ほぼ解析済みです。未解析部分約２％は問題想定内です」
ふむ、と私は声に出す。輪廻の魔女も中々いいものを置いていってくれたものだ。
今このアジトに入ってきてるのは執務官と監察官。聖王教会の騎士。なんとまぁバラバラな面子なんだろうか。
「だが貴重な検体がやってきたんだからうれしがらないとね」
グローブ型のデバイスを装着する。名はつけてない。
何度か握ったりして感触を確かめる。フム。違和感はなし。いい感じだ。
「トーレ。私の護衛を。迎え撃つ」
「は！」
暗闇から声がした。長身の私の娘。トーレ。私の因子を継ぐ一人。
ウーノには此処で待機しつつ手を出すようにと指示をして私は行く。

エリオＳｉｄｅ

ビルの屋上。そこで僕とキャロは対峙していた。
ルーテシアと、ガリュー。そしてその使い魔たる蟲たちと。
「君はっ・・・・なんで加担してるんだ！」

「あなたたちには・・・関係ないこと」
「話してくれてもいい！もしかしたら手伝えることがあるかもしれないじゃないか！」
「・・・・・・・・・・・・」

くっ、無言を貫くか。
キャロは同じ召喚師として思ってるようだけど。
手を出そうにもガリューがいるから迂闊に動けない。
速度も力もまだ足りない。今のままじゃ・・・僕らに勝ち目はない。

「いや・・・そもそも何を言ってるんだ」

勝ち目とか。戦う気なのか僕は。あの子と。
この槍を向けるのか・・・・？
勝ち負けはどうでもいい。思いを伝える。それだけでいい。それは奇跡じゃない。

「ルーテシア。僕は、君とは戦わないよ」
「そう・・・なら勝手にすれば」
「違う。そうじゃないんだ。僕はっ・・・・ただ話がしたいだけなんだよ！」

平行線だ。抗うルーテシアと話がしたいという僕。
キャロは後ろで待っていてくれてる。何かあれば動けるように。

「話をすることはない。お母さんが待ってるから・・・・私はいかないといけないの・・・」
「それが。君の願いかルーテシア」
「っ・・・・！！」

ルーテシアが目を見開く。どうやら今のは失言だったみたいだ。
それが君の願いだというなら――――

「僕ら個人じゃ力にならないかもしれない。でも他の人に頼ることも出来るんだ。僕らは一人じゃ弱いから」
「そうだよ。一人じゃ出来ない事も皆となら出来るかもしれないんだよ」

キャロがノってきた。いいタイミングだ。

「うるさいっ・・・・・うるさいうるさいうるさいっ!!!!」

頭を抑えて振るルーテシア。
それを感知したガリューが僕に向かってくる。
結局はっ・・・・それしかないのかよ!!

「僕らが勝ったら言うことを聞いてもらうよ!」
「出来るなら・・・・・やってみるがいい」
「キャロ!!!」

相棒の、家族の名を叫ぶ。既に準備していたのかキャロはブーストを掛けてくれた。これで多少はやれるはずだ。

「ガリュー!君も!本当は悲しいはずだ!主が感情が出せないというなら行動で見せてみろよ!!」

迷いのないガリューの一撃をストラーダで弾きながら一撃を繰り出す。
電気魔力変換気質を最大まであげる。スパークが周囲に散らばる。
それでもキャロやルーテシアにはあたらないように遠隔操作だ。こ

のくらいは・・・できる。

ガリューと一緒にこの場を離れる。幾度と槍とブレードをあわせながら。

寸前で回避する僕とガリュー。離れてしまったけどルーテシアとキャロは大丈夫だろうか。

心配だけど今は目の前に集中しないと僕がやられる・・・！！

「言ったよね。勝ち負けじゃないって。だから僕は僕の思いをガリュー、君に届ける！」

「　　」

無言で帰ってくる返答。元から返答なんて望んでないんだ。

君を止めることで僕は答えるよ。

キャロＳｉｄｅ

エリオ君がガリューと飛んでいった。

今いるのはルーテシアさんと一緒に二人っきり。

「ルーテシアさん・・・」

「あなたも・・・同じ。力によって左右される」

「っ・・・」

「その力で何をされてきたの・・・？」

あぁ・・・この子は私の過去を見てるんだ。故郷から突き出された私を知っている。

それでも――――――私は。

「そうだよ。強力な力は恐怖に変わる。故郷の皆は私の力を恐れて・・・追放した」

思い出す過去は怖い。一人っきり・・・ううん、フリードもいたよね。

二人で歩んだ道は平坦ではなかったけど。今になったらそれは必然だったんだって思える。

「でもね。手を差し伸べてくれた人がいる。力の制御を教えてくれた人がいる。

過去の縛りを解き放ってくれた人がいる。その人たちに答えるためにも、私は立ち止まれないの」

「そんなのまやかし・・・・・下らない」

そう。これは実感した人じゃないときっとわからないよ。

「だから、ね。同じように私は。私たちは。手を差し伸べてるんだよ。ルー・・・・ちゃん」

「――――――――――――――――」

揺らいだ。確かに今心が揺らいだ。

もう少し、畳み掛ければ。

「・・・・・・・・・・・でも、だめ。私は、私の、やる、事が、ある」

揺らいだ心は少しの間をおいて立ち直る。

誰かが入ってきた?いったい誰だろう。

「だったら・・・言うこと聞いてもらうもん！！！」

フリードが成龍になって吼える。

ルーちゃんも。あれは前に地下通路で見た召喚獣。確か地雷王。

「みんな、潰れちゃえばいいんだ！！！！」

フェイトＳｉｄｅ

アジトに入ってから三人でそれぞれ分かれて行動していた。

多分、此処が一番のあたりだったんだろう。

いや、違うね。きっと私にあわせに来たんだ。目的は私の捕縛、だね・・・。

「やぁ、プロジェクトＦの寵児。フェイト＝テスタロッサ。いや、まさかその名になるとはね」

「スカリエッティ・・・・！！！！」

目の前にはスカリエッティがいる。その脇には機動六課が襲撃されてる時に出会った戦闘機人。

「プロジェクトＦ．Ａ．Ｔ．Ｅ．。その名に相応しい名前をプレシア女史はつけたと思わないかね！！！」

「母さんを・・・侮辱するか！」

「違うよ！これは尊敬だ。プロジェクトの名前を娘につけるとは思

わない！たとえそれが仮初の命、体だとしても！」

両腕を広げて演劇者のように振舞うスカリエッティに私は怒りすら覚える。

「君を捕らえてプロジェクトの再発を掲げよう。きっとそれはプレシア女史も喜ぶと思わないかね。

仮とはいえ娘が殉じてくれるのだからねぇ！！！」

「スカリエッティ！！！！！！！！」

私は思わず飛び出していた。バルディッシュは既にハーケンモードで起動済み。

一気に振り下ろそうとした所で戦闘機人が割って入って私の攻撃を止めた。

「ドクターに手を出すことは許しません、フェイトお姉様」

「私を――――――姉と――――――呼ぶなぁ！！！！」

魔力が爆散する。電気変換が周囲に散らばる。

それでも戦闘機人はおろかスカリエッティも下がることはなかった。

「ふむ。トーレ、少しばかり痛い目にあわないとわからないようだ。やってしまえ」

「了解」

両腕のブレードが振動する。バルディッシュが軋む。すぐに離れて体勢を整える。

おそらくあの超振動で斬るんだろう。だったら触れた瞬間でもやばい。

バルディッシュをザンバーモードにして対処。魔力刃なら振動が触

れても大丈夫だろうと予測。

「広域次元犯罪者ジェイル＝スカリエッティと戦闘機人は此処で捕縛します」

「出来るならどうぞ」

「やらいでか！！」

瞬間行動。一気に間をつめようとする。

しかし、こっちの一歩が向こうの数歩になっていた。

一気に目の前まで詰められた。目の前には戦闘機人の顔。

一瞬の笑み。ブレードが私を裂こうと向かってきた。

「っく！！」

とっさにザンバーの刃を向けて防御。しかし超振動でザンバーの刃が削り取られて切り裂かれた。

蹈鞴を踏んで後方に。その間にも魔力で刃を再構築する。

「ナンバー3．トーレです。フェイトお姉様」

「そう・・・・」

名乗られても向こうは知ってるから名乗らないで短く答えた。

きっとアレは・・トーレは。私よりも早い。

「ふふ。さっきまでの威勢はどうしたのかな？私の娘に勝てないなら私を捕縛もできないねぇ」

あれはデバイス？スカリエッティの手にはグローブ型のデバイスがつけられていた。

注意力が足りない。今頃気づくなんて。

目の前に立つトーレはスカリエッティへの道を塞いでいる。隙はない。
まずはトーレを倒さないと無理ってことか。
隙を、作ってみるか。

「行こうか」

一息ついてから加速。トーレもついてくる。幾度もザンバーが消されては再構築の連続。
あっちのブレードは消えないね。そういうものなんだ。
幾度と何合もあわせているうちにスカリエッティの近くに着地する。
トーレとスカリエッティに挟まれてる感じ。

今だ！！

今が契機とばかりに振り向いてスカリエッティにザンバーを振る。
あたり場所は考えてない。だけど人体程の大きさならどこかにあたるはずだ。
一気に加速した斬撃はスカリエッティに届く――――――――――――はずだった。

「どうしたね？まるで嘘でも見てるかのような顔だよ？あぁ、心拍数が上がってるね」

ブレードを左手でつかんでいる。魔力で編み上げた刃を左手だけで。
軽く握ればザンバーは砕かれた。完全に。脆く。刃は破壊された。
支えがなくなった私は地に伏せるように落ちる。そこにすかさず赤いレーザー檻（ケイジ）に閉じ込められた。

「ふふふ。甘かったねぇ。もしかしたらと思ったかい？それこそが

罠だったんだよ。
　トーレ、囮役ご苦労様だねぇ」
「いえ、この程度なら。それに・・・恐らくこの場所も味方したのでしょう。
　フェイトお姉様はまだ本気お出されてませんでしたから」
そう。この狭い通路で神速はだせない。だから速度を抑えないといけなかった。
それが・・・・私の敗因だ。

「さぁ。どうしてくれようかね。執務官殿？」

スカリエッティの見下すにんやりと笑った笑みが気持ち悪かった。

なのはＳｉｄｅ

何度も何度も行く手を阻むがジェットを打ち砕いていく。

速度は十分。アクセルシューターで充分な威力を以ってつぶしていく。

目的地はこの先。さぁ。待っててね。

ヴィヴィオ。

いま、ママがいくからね。

第百八話　星、瞬く時

なのはＳｉｄｅ

長い通路を飛んでいる。時折出てくるガジェットが鬱陶しい。
その全てをアクセルシューターで撃ち落としていく。
瓦礫が山になって通路に落ちていく。もう気分はシューティングゲームだよ。
もう何度目になるだろうか。ガジェットを落としたところで通路の奥の奥から魔力反応を感知した。

「レイジングハート」
『ＹＥＳ』

レイジングハートも同じ考えか。流石だね。
まぁこの中にいる高い魔力反応なんて戦闘機人以外いない。はず。
なら待ち伏せ。そしてこの距離でもいけるというなら私と同じ砲撃系。
いいね。そういうの。私も好きだよ。お互いの力をぶつけあうのは――――大好物だよ。

「レイジングハート、ブラスター２で」
『ＹＥＳ．ＭＹ，ＭＡＳＴＥＲ』

レイジングハートの先端を通路の先へと向ける。その間出てくるがジェットすら巻き込むように。
私は後退はしない。ヴィヴィオの居る所まで一直線。最短最速で辿り着いてみせる。

「ディバイイイイイイイイン」

チャージ。チャージ。チャージ。ブラスター2になったことで魔力ブーストが掛かる。

更にはリミッターすら今はない。なら思いっきり全力全壊いっきにぶっ放すだけなの。

『砲撃時間設定。射撃に27秒』

「うん、レイジングハート。今ならそれでも破格だよ」

レイジングハートが平行計算してくれた。ディバインバスターの砲撃可能時間は27秒。それまでに終わらせて見せるよ。

徐々にチャージが終了していく。さぁ、もうすぐ撃てるよ。

『3(three)・・・2(two)・・・・1(one)・・・・』

カウントダウン。あぁ、向こうも同じだ。多分、同時に向こうからも砲撃が来る。魔力が集まってるのを感じる。

楽しみだ。どれだけの砲撃がくるんだろう。

久しぶりに本気だ。さぁ――――――やろうか。

「バスタあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

私の掛け声が引き金になって砲撃が撃ち出された。

バスターの反動で後ろに下がるのも推力で打ち消す。

突き進む力も足してバスターを押し込んでいく。

向こうからの砲撃が来る。それでも私のバスターは負けられないの。

先端が直撃すると一気にそこから押し込んでいく。

「ヴィヴィオに会うまでは・・・・負けられないの！！！！」

精神は魔力に通じる、なんて誰が言ったっけ。誰も言ってなかったかな。まぁいいや。

想いの力は確実に。今私の力になっている。

そういえばミラ君が昔ぽろっと言ってた事を思い出した。

『強い思いは力になる。誰かを守る気持ちは不破の力になる。誰かを想う気持ちは絶対に折れることはない』って。

うん、そのとおりだよ。今実感してるよ。

「うん、負けないよ。誰にも。だから、この私の想い、心、願いは絶対不屈！それが私の魔法！！」

『Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ』

レイジングハートが3発。そう、三発カートリッジをイジェクションする。

バスターが一気に押し込んでいった。相手の砲撃すら飲み込んで。

まさに高速（光）。

一瞬でバスターが飛んでいく。いや、多少の溜めがあった。杖の先端で押し留めた力が堰を切ったように。

さぁ、行こう。この先へ。愛しいあの子が待っている。邪魔するものなど全てを蹴散らそう。

ディエチＳｉｄｅ

ゆりかごからのデータ共有で今、此処に向かってきてるのはあの管理局のエース・オブ・エースみたい。
大通路を直進してきてる。ガジェットの遊撃もあんまり効果はないみたい。
だけどそれをとめるのが私の役目なんだ。

「ヘヴィバレルフルオープン――――イノーメスカノン」

橙色の魔力光が身を包む。この無反動砲ならあの突進をとめられるはずだ。
高速物理破壊設定をした直射砲。これで少しでも削って・・・ううん、停止だ。
アレをとめないとだめだ。だから私はカノンを放った。

絶対勝利が必要、なんだ。
この作戦がどういうものであれ。
カノンが一直線に伸びていく。向こうからも桃色の光が飛んできた。
やはり砲撃型、エース・オブ・エースは伊達じゃないね。
同じタイプなら押し切った方が勝つ。

「負けられないんだ。私たちだって！」

誰もが持ってるでしょ？負けられない理由。ドクターの為に私たちはいるんだよ。

だからっ――――――？！

桃色の光が私のカノンと接触した瞬間に一気に飲み込んできた。
爆発する魔力。あぁ、そうか。彼のデバイスはカートリッジシステムを積んでいたんだった。
ミッド式でありながらカートリッジシステムを積んだ二機のうちの一騎。
飛躍した魔力の前に私とカノンは――――――飲み込まれる。
飲み込まれる前に私は掻き消える声でこう言った。

「――――――管理局の化け物め」

なのはＳｉｄｅ

魔力の奔流が消えていく。きっちり２７秒だ。そこには跡形もなく吹き飛んだ形跡があった。
壁の突起は全て溶け崩れ、電子系統がショートしていた。
その先には倒れている戦闘機人が一人。そういえば砲撃の途中に何か聞こえてたっけ。

「人の悪口はだめ、なの」

バインドで戦闘機人をロック。あとから来る武装隊に身柄を受け渡そう。
ていうか持ってってもらわないと。私は之からまだまだ先に行く。

このまま放置する事になるから硬めにバインドしておかないとね。

「ごめんね。それでも私たちは止めないといけないの」

そしてヴィヴィオに安寧の将来をあげたいの。

だから私は行く。この先、ヴィヴィオの待ってるはずの場所へ。

只管飛んだ。どのくらい飛んだかはわからないけど。

大きな扉の前に出た。閉じている。開くかな。

浮いたままで扉に手を掛けて押してみる。

するとその大きさ重厚さを裏切るように簡単に開いていった。

かなり広いホール。ううん、王の間。そして玉座に拘束されて意識のないヴィヴィオ。

その隣に立つ戦闘機人。さっきの戦闘機人と同じ格好だし・・・そうだよね?

「やぁっときましたか、エース・オブ・エース」

「貴女は・・・?」

「あぁん、私のことなんてどうでもいいんじゃありませんの?あなたから見ればただの犯罪者ですものねぇ?」

「そうだね。なら逮捕します」

レイジングハートを向ける。いつでも攻撃できるように。

「んー。でもぉ。そのまえにこぉんなお話はいかがですかぁ?」

にやにやしながら眼鏡が言う。

「この子の正体。人造魔導師ってのは判ってると思いますけどぉ。更にあるんですよねぇ、隠してたこと。知りたいですかぁ？ねぇ、ママ、と呼ばれてたなら」

「何がいいたいのかな・・・？遠回しな言い方は嫌いなんだけど」

「あはぁ、そんな顔してもだめですよぉ。この子はレリックを媒体としたレリックウェポン。そして嘗て存在した聖王のＤＮＡから採取したクローン体。

　このゆりかごを動かす鍵であり器。そしてこの場所、玉座を護る生体兵器。ただの攫われた子供でも想ったのかしらねぇ？」

口角があがるほどの強い笑み。

あぁ、この女は。この戦闘機人は私を怒らせたのか。

湧き上がる怒りは表面には出てこない。ただ、心の奥底でグツグツと煮え滾るような。そんな感覚だ。

多分、私が１９年生きてきた中で始めてだろう。此処までの怒りを覚えたのは。

「もう、いいよ。黙ってくれるかな。それとも、黙らせてほしい？」

「うっふっふ～ん。そんな脅しになんて屈しませんわよぉ。だぁって。だって。私は此処にはいないんですもの――――――」

ザザ、と。ノイズが走るように戦闘機人の姿が揺らいだ。

あぁ、これは幻覚か。なるほど知能系の後衛型。確かにやることがそういう感じだ。

だからこそ。あぁだからこそ。こんなにも心に角が立つ。

「それじゃぁ、そうですねぇ。貴女とこの子で潰し合って貰っちゃいましょうか――――――さぁ目覚めなさい聖王」

「う・・・あぁぁぁ・・・・・あああああああああああああああ

！！！！！！！！！！！！！」

戦闘機人が声を掛けると意識のないヴィヴィオが苦しがる。玉座に座ってるだけで悲鳴を上げるヴィヴィオ。

魔力の流れがおかしい。ゆりかごにむかって流れ出ていくのがわかる。これが聖王の鍵・・・・・？

それを聞いていられるはずもない。速攻でのアクセルシューター一発。戦闘機人に撃った。

だけどシューターはその姿を突き抜けて背後の壁に直撃した。

やっぱり幻覚。本体はどこか遠くにいるんだ。だったら――――

「それじゃ私はこれで。聖王サマを倒せばゆりかごは止まるかもしれませんねぇ。そう、命を止めれば」

くすくすと笑い声を残して映像となって消える。苦しがるヴィヴィオをおいて。

ティアナＳｉｄｅ

ビルの中に結界で閉じ込められてから十数分が経過した。

戦闘機人が三人。私を待ち構えていた。こいつら私の幻術看破用のシステムまで丁寧においてるじゃない。

私をピンポイントで狙っての行動よね。

それと会話から聞き取って名前を得る。ノーヴェ、ディード、オッ

トー、ウィンディ。
ただ、オットーってのは姿が見えないから結界を維持してる、って感じかしらね。

「実質４対１。やりきれないわね」
「それでも確実にお前たちを削れるなら問題なしだ。お前はドクターからは要注意って聞いてるからな」
「そうね。でもその相手に４人掛かりで向かっていって負けた、となると顔も向けられないんじゃないの？それとも４人じゃないと勝てない？」
「確実な勝利のためなら何でもするさ」

赤い髪、ノーヴェが向けてきた挑発に挑発で返す。うん、流石にノってはこないか。
でもまぁ、ちょっと苦しいかな。もうちょっと体力つけてくるんだったな。
多少は動きを読まれてる。しかもどうやら向こうは向こうで情報を共有してるっぽいし。

「これなんて公開処刑」

なんてぽつりと口に出た。建物の中で遮蔽物が多いからガンナーにとっては相性が悪い。
迂闊に柱に当たって崩れでもしたら大変だ。主に私が。

「そんな力で勝てるとでも思ってんのか。だとしたらずいぶんあたしら嘗められてんな」
「どうかしら。やってみないとわからないんじゃないの？」

何度か魔弾を撃っては回避させられる。ギリギリのところをよけら

れるからストレスたまる。
速度、弾道を読んでる？・・・いや、計算してる？
そのくせ向こうの攻撃は当たるっていうね。さっきも足斬られたし。
大事にはなってないけど。まだ動ける。
ただ、息が切れる。うーん・・・これは頭脳系の性（サガ）かも。

「この程度の力だってんならもう付き合う必要もなさそうだな。一気に片をつけてやるよ！」

障害物の向こうから声がする。一番攻撃性の高いのがあの赤い髪みたいね。
ボードで浮いてるのと斬撃系魔法の使い手。囮のようにボードが来て、その影から斬撃が来る感じのコンビネーション。
足の怪我も砲撃を回避したところにあわせられて斬られたんだけど。
あれ？そういえばまだ私ってリミッター掛けてたんだっけ。

「クロスミラージュ・・・」
「了解。魔力負荷解除。オールＯＫ」

名前を呼べば意図を理解してくれて魔力負荷を解いてくれた。ありがとう、クロスミラージュ。
負荷がなくなれば後は魔力が押さえ込まれてた分放出される。
瞬間。刹那。あふれ出す魔力がビルを震わせる。大気が震える。魔力が震える。体が震える。

「・・・ふぅ。あぁ・・・やっぱり負荷がない普通の状態が一番いいわね。肩が凝っちゃってしょうがないわ」

コキコキと半眼で肩をならす。いや、肩を回して首を鳴らす。

そういえばこの間ずっと無防備なんだけど襲ってこなかったな。私の魔力の中にある異物。誰かの魔力を検知。
４人分全部把握した。最後の一人は屋上だったか。

「なんだよ！・・何なんだよ！！その魔力！聞いてねぇ聞いてないぞ！！」
「何よ。ただの訓練じゃない。魔力に負荷を掛けて鍛えるなんてこの歳でやってるの知られたら恥ずかしいじゃないの」

戦闘機人は打ち震えていた。いや、恐怖してた？誰も動かないでじっとしている。

「で、さぁ。まだやる？私としては時間もないからさっさと先に進みたいんだけど」
「それで”はいそうですか”って行かせると思うッスか？」
「そうね。想わないわよね。普通なら――――――でも」

クロスミラージュで瞬転。３発。高速誘導弾（光）で３人の体を掠めさせる。
撃った音はひとつ。ただし音は後から。そうしたら沈黙が訪れた。

「大人しく捕まってくれるとうれしいんだけどね」
「・・・・・・まさか」
「よねぇ。それでもいいんだけど、さ。あんまり派手にやれないのよね。こういうの隠してる身だから」

魔力負荷は六課でも限られた人しか知らない。メインで前線に出る戦闘職の人くらい。
あぁ、アイナさんは知ってる。相談に乗ってもらったりするんでその延長上。

話が逸れた。でも私の勧告に声が震えてるのは理解した。

「あたしたちに負けはねぇ！だからやるっきゃねぇだろ！ウィンディ！ディード！！」

「ハイな！行くッスよー！！」

「切り伏せてご覧に見せましょう」

やっぱりやるんだよね。でもね。

「チェックメイト、ね」

既に盤上は私の世界。仕込んでいたものは今、動き出す。

「星の魔弾（メテオ）」

ビルの中でオレンジ色の、私の魔力光が輝く。幻術で隠しておいたスフィアを展開。

幾重にも走る光が幾条にも走り抜けて結界の中を埋め尽くす。

兄さんが使う必滅せし巨星の魔弾（メテオザッパー）の私版。

「ランスターの弾丸は誰にも負けない。それを証明して見せるわ」

抜ける光に戦闘機人が貫かれて倒れていく。

すると外の結界も消えた。あ、屋上のほうまでいったんだ。

結界が消えて数瞬。戦闘機人に捕縛用魔法がかけられた。この魔法は・・・・シャマル先生。

案の定通信が入った。

「ティアナ、お疲れ様。怪我は？」

「ちょっと足を斬られた程度です。すぐに魔力も抑えますね。クロ

スミラージュ、魔力負荷再開」

あんまり負荷をはずしてると放出しっぱなしなのできつくなる。
それに周りにも影響出るしね。

「無事で何よりね。怪我を見るからこっちにこれる？戦闘機人は武装隊に任せておくとして」
「お願いします」

ビルから出ればシャマル先生が待っていた。武装隊も後続に見える。
あの武装隊に預けることになるだろう。
治療魔方陣を展開してもらって足の傷を診てもらう。見た目の割に深くは無かった。

「でもすごいわね。たった一人で４人も相手して勝っちゃうなんて」
「一人じゃないですよ」
「え？」
「皆がくれた力があったから、です」

待機状態にしたクロスミラージュを握って胸に当てる。この力は――――そう。
ミラージュ隊長にもらった力。知力と技術。魔力。

「もう、すっかりストライカーじゃなくなったわね」
「え？・・・それって」

どういう意味？って聞こうとしたら先に言われた。

「もう、エース候補ね」

って。執務官候補じゃないんですね。なのはさんには悪いですけど残念です。

スバルＳｉｄｅ

目の前にいるのは助けようとしている人。目の前で助けられなかった人。大事な人。たった一人の姉。大事な家族。

「ギン姉」

名前を呼ぶ。いつもの様に。でも逸れは届かない。直感。それだ。他にいいようが無い。

戦闘機人と同じ格好をしてる。首に見える数字は１３。

「ギン姉」

もう一度呼ぶ。でも返答どころか反応がない。

「体、治ったんだね。よかったよ。最後に見たのボロボロだったからさ。心配したんだ」

返答無くたって。それでも続けるよ。返答がほしくて言ってるんじゃないんだ。

私は、私の自己満足で今喋ってる。それでいいんだ。

「それにね、なのはさんや皆に励まされて。やっぱり私の中にも同

じ血が流れてて・・・・・同じ体で」

私の体だって戦闘機人だ。それはもう覆せない。だから。

「だから。一緒に生きていくんだ。皆と一緒に」

構える。六課式の前線用構え。ギン姉も一緒に構える。向こうは向こうで違う構えだけど。

こういうのには応えるんだね。それでもいいよ。ギン姉が私を見てくれるなら。

それを直そう。それしか出来ないなら。言葉で通じ得ないなら拳で語るまで。

「その皆の中にギン姉も――――――――――――いるんだよ」

誰も無くせない未来。将来。そこに誰一人欠けてちゃ嫌なんだ。

声を上げるよ。高らかに。

「だからギン姉。帰ってきてよ！」

マッハキャリバーが加速する。瞬間的に最高速に乗るけどこの体はそんな無茶も押し通せるんだ。

同時にギン姉も加速しだした。ブリッツキャリバー。君も変わってしまったね。

向かってくるギン姉と拳。ギン姉は左のナックルだ。

「行くよ、マッハキャリバー！」

『ＯＫ，Ｂｕｄｙ』

って応えてくれる。一緒にギン姉を取り戻すんだ。

ナックルとナックルがぶつかり合う。お母さんがつけていた二つのナックルが火花を上げて悲鳴を上げる。
お互いに腕が外側にブレる。カバーのもう片方の拳がギン姉を。そして私を殴りつけた。
全く同じ動き。同じ箇所狙い。
ブレたナックルが二発カートリッジを激発する。排莢されたカートリッジが地面に落ちる。

ギン姉。皆がね。此処までつれてきてくれたんだ。
今此処にいるのは皆が背中を押してくれたんだよ。
だからさ。帰ろう。
お父さんも心配してるから――――――

私もギン姉もウィングロードを展開していく。幾条もの道が走り抜ける。
球状の結界のように展開されたウィングロードは誰もが入れない不可侵の領域へと化す。

この領域の中でギン姉と二人で戦う。勝てる、かな。
そういえばギン姉に勝ったのって一回もないや。でもやらなきゃ。

「今日は、私が勝つよ。ギン姉」

返答はない。それは判りきっていた。でも言いたかった。
覚悟は出来てる。いや、出来てるんじゃない。今、出来たんだ。
何度もぶつかり合って交差して拳と蹴りが行き交う。
肉が鳴り血が飛沫をあげ骨が軋む。
やっぱストライクアーツじゃ勝てないかな。

「やっぱこのままじゃきついなぁ・・・ギン姉強すぎだよ」

クス、と微かに笑みが生まれたのに気づく。あれ？私今笑ってる？
こんな命を賭けた、負けられない作戦の中で私は笑っていられるのか。
楽しんでるんだ。本気のギン姉と戦える事に。
だから、私は本気で応える。全力全開。師であるエース・オブ・エースに教えてもらったのは常に全力全開。
全てをこめてぶつかれば分かり合える。そういうことだ。

そして数少ない好機。ギン姉のナックルが飛んでくるのをステップで回避。こめかみを掠っていく。
でも左の脇腹が一瞬空いた。私はそれを見逃さない。神速で右拳を叩き込む。

「ついでに持ってけぇっ！！！」

渾身の魔力を篭めたディバインバスターを打ち放つ。私の持つ現状扱いきれる最大の攻撃。
一瞬の光。そして魔力は一条の光線となって飛び放たれる。
ウィングロードの結界から突き抜けるように魔砲が突き抜けた。
しかしギン姉は腰を捻らせて怪異していた。魔法による焦げが腹部にある程度でダメージはない。
マズった。此処で大きめの一撃なんか出すんじゃなかった。
誘い隙だったのかも。あぁ、悔しいなぁ。もうよっぽどじゃないとあたらないぞ。

「あ・・・・・」

それを私は見てしまった。ギン姉のナックルの影から右の拳が迫ってきているのを。

ディバインバスターの硬直がある。回避は出来ない。右の裸の拳が私の顎を掠るように――――直撃した。
それだけで。たったそれだけで私の脳は揺れた。一瞬だけ意識を刈り取られる。
意識が戻る前に左ナックルでのアッパーが炸裂した。痛みは飛んでる。何も感じない。

「・・・・っぐ！？」

アッパーで意識を取り戻した私は体が吹っ飛ぶ感覚で元に戻る。吹き飛ばされる――――はずだった。
吹っ飛ぶ私の足を掴んで勢いを殺す。更に一連の動作のように投げるように地面にたたきつけた。

喀血する。口の中に鉄の味がした。
ぬる、と舌の感覚が気持ち悪い。吐き出したい。でも今は先にやるべきことがある。

ギン姉の掴んでる手を腕を蹴って離させる。手が離れれば倒立のようにしてその場から離れる。
と思わせて一気に近づく。一撃。離れる。くっつく。一撃。喰らう。一撃。離れる。繰り返す。

徐々にギン姉の攻撃のほうが当たるようになってきた。ウィングロードを通って何度もすれ違う。
ダメージが蓄積されていってるせいかギン姉の攻撃がよく当たっていく。やっぱり勝てないのかな・・・・。

『ｈｅｙ！ｂｕｄｙ！』

急にマッハキャリバーが話しかけてきた。

『私は貴女と一緒に成長してきました。私の知るあなたは不屈の心をあの方から分けてもらえたでしょう。

私は知っています。まだ貴女には眠った力があることを』

「マッハキャリバー・・・・うん。そうだ。まだ、アレがある」

不甲斐ない相棒だった。ごめんねマッハキャリバー。

だから力を貸して。アレは私たちが合わさらないと無理だから。

ある一定の距離をとって私たちは止まる。構えはただのダッシュだ。

「いくよ、マッハキャリバー。二人の力、見せてやろうじゃん！」

「『A・C・S発動。モード”エクセリオン”』っ！！！！」

私とマッハキャリバーの声が重なる。

マッハキャリバーに魔力の羽が生えた。私の魔力光と同じ色だ。

なのはさんから託された力。皆の支えがあってスバル＝ナカジマはがんばれます！

「いくよギン姉！」

掛け声と一緒に加速する。最初からクライマックス――――――最高速へ。

なのはさんがくれたA・C・Sとの同時稼動になるミラージュ隊長が教えてくれた移動術。

クルダ流交殺法最源流『神移（カムイ）』。

全てのサーチャーからその姿を消す。ギン姉も多分戦闘機人のサーチで私を探してるんだろうけどこれは見つかるものではない。

不可視になる程の速度での超高速移動術。気配や音、全てをその場

に置いてけぼりにして私は駆けた。

ギン姉が周囲をキョロキョロ見てる。私を探してる。
でもこの神移、足の負担が尋常じゃないよ。私でもミシミシ足が啼いてる。
マッハキャリバー、もうちょっとがんばって。

そして。そう。私はギン姉の目の前に現れる。文字通り。
瞬間的に気付いたギン姉が左のナックルを合わせようとしたけど私の右手は既にギン姉の胸に添えられていた。

随分前だ。
ミラージュ隊長とザフィーラ（人型）が訓練していたのを見たことがある。
その時に使った技を一個だけ見ていた。
多分、私には無理な技だろう。そう。以前の私なら。
でも今なら。戦闘機人の力に目覚めた私なら使える、と思う。私のＩＳ『振動破砕』と合わせれば。

さっきから併せたものばかりだけど。それでもいい。それも私の力だ。
添えた指から振動を真空に乗せる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

技の名前なんてわからない。ただ、見様見真似、自分なりのアレンジを加えた。
衝撃が突き抜ける。技の反動で腕が軋む。骨が軋む。筋肉が切れる。
あぁ、こんなに凄まじいなんて。ギン姉大丈夫かな。

ギン姉を突き抜けた衝撃は空に牙痕を残していく。牙痕はウィングロードの結界を突き破り、消失させた。
周囲の、いや、防衛ラインやゆりかご周辺の武装隊でも視認出来たほどの牙だった。
その衝撃はギン姉の体にある何かを壊すのに充分だった。

かなり離れた場所ギン姉が吹っ飛んで倒れる。私もその場に膝をついて倒れこむ。
もう終わり。終わった。動けない。マッハキャリバーはどうかな？まだ動ける？

『駆動可能率２１％。戦闘行為は不可能』

うん。でもまだやれることはあるよね。
チラ、とギン姉を見る。動きはない。倒れたままだ。
そこで。後方から駆けつけたシャマル先生とザフィーラがやってきた。

「空に牙痕ができたからなんだと思ったら・・・・無茶をする」
「ザフィーラ・・・さん」
「さん付けはいい。いつものように呼んでくれ」
「うん・・・・」
「無茶をするわね・・・全く。あとでお説教です」

プンプン、とか言っちゃうシャマル先生かわいいすぎです！
治療陣を展開させて私の治療を始める。見た目以上にやばいらしいので応急処置で動けるくらいには回復させてくれるとのこと。
ギン姉も治療班が向かってきてるのでヘリに載せて治療してくれるらしい。

「傷が治ったらどうする？」
「防衛ラインに行かなきゃいけません。ティアとも約束してますから」
「そうね。ティアナもそういうと思ったらしくてもう防衛ラインに向かってるわ。ギンガのほうは任せて、ね？」
「ありがとうございます！」

シャマル先生が治療してくれてる間、ザフィーラは遠くを見ていた。

「シャマル急げ。此処の布陣が落ちたからかガジェットが向かってきてるぞ」
「そういってもあせったら治療が杜撰になっちゃうわ」
「なら・・・・・仕方ないな」

これから向かうはずだった方向をみてザフィーラが立つ。

「少し掃除する。下がっていろ」
「動けませんから下がれません」
「・・・・・・・・・むぅ」

余裕ですね・・・敵が来てるって言うのに。

「スバル。さっきの技だが」
「あ、はい！」
「悪くはない。ただ、アレでは未完成でな」
「え、あれでですか」

私が見たのと同じようなものを再現できたと思う。それでも未完成だというのか。

「あの技は空牙という。恐らくミラージュとの訓練で見たのを真似たんだろうが・・・あれこそが未完成の形なのだ」

ザフィーラは言う。

「だから――――その技を撃てるほどに成長したお前に見せよう。この技の真の姿を」

空牙。くうが。そういう名前なんだ。ストライクアーツとかにはない、独特の技だ。

「基本技はできているお前になら・・・きっと扱える筈だ」

右手を後方に振り停止させる。五指は開き筋肉の鳴動がミキミキと聞こえる。

前からは砂埃を立てて迫ってくるガジェットドローンの集団が見えた。

それでもザフィーラは動かないで待っている。

徐々に近づくガジェット達。ザフィーラは微動だにしない。

シャマル先生も安心しきって私の治療を続けている。

「一応、防護膜張っておくわね。多分、衝撃が飛んでくるから」

「そんなになんですか」

シャマル先生がそんなになんですよ、と言ってきた。それほどの技なのか。

ガジェットドローンがもうすぐ近くまで近づいた所でいっせいに襲い掛かってくる。

その中で一番最初に接近したがジェットに瞬速で右手を振って指を添えた。

「クルダ流交殺法陰流口伝絶命技――――――空牙」

撃ち放たれた。
それは大きな爪・・・いや、牙だった。五本の牙が地を駆けて抜けていく。
巻き込まれたがジェットは全てといっていいほどに全滅を喫した。
目の前には綺麗になった大地が広がっている。

「やりすぎた、か・・・・？」
「「やりすぎです！！」」

シャマル先生と私の声が綺麗にハモった。

なのはＳｉｄｅ

大きな音と一緒に私は壁に吹き飛ばされた。
広間の壁にめり込む程の威力で私は壁に埋まってしまう。
まさかこんなに強くなるなんて、ね・・・・。

「
」

玉座に立っているのは一人の少女。
私と同じサイドポニーテールでオッドアイの女の子。
虹色の魔力光を持った――――――愛しい子。

その子に私は吹き飛ばされた。

「おまえなんかママじゃない・・・・ママを返せぇっ！！！！」
「ヴィヴィオ・・・・・」

心が　　痛かったよ。

第百九話　電光輝く

ゼストＳｉｄｅ

嘗て管理局に所属していた俺はレジアスを部隊長としてその分隊の隊長をしていた。
戦闘機人計画。レジアスはそこに加担していた。
そして俺「達」はある組織のアジトへと潜入した。
互いに正義を、将来を語り、夢を追いかけた。互いに認め合って生きていたのに。
そこにいたのは戦闘機人。俺「達」はそこで潰えた。
何故だ――――――

何故――――――

何故、レジアスが進めていたはずの戦闘機人が此処にいて。俺たちを襲った。
その理由も判らないままに俺たちは倒れていく。
メガーヌが。クィントが。そして俺が倒れた時。微か遠くから聞こえる笑い声。
そして俺は意識を手放した。

そして今、俺は此処にこうして立って、生きている。
何度もそのときの理由を聞きにいこうとしたが邪魔が入って頓挫した。
今度こそ。俺はレジアスに会いに行く。あの時聞けなかった答えを聞きに。

「旦那。私もいくぜ」

アギト。以前古代ベルカの遺跡にあった研究所から救出した古代ベルカの融合騎。
炎熱系の力を持つ融合騎だ。ずっと俺とルーテシアについてきてくれた。

「ルーテシアのほうはいいのか？」
「ルールーにゃガリューがいるし。私が行ったら旦那が寂しいだろ」

満面の笑みを向けてくるアギト。何度この笑顔に助けられたか判らない。

「なら、行くか？向かうのは大変な場所だぞ。何せ――――――時空管理局の地上本部だ。それに・・・俺の命ももう残り少ない」
「だから！私の作った薬さえ飲んでくれればいいのに・・・・・レリックウェポンになっちまった旦那には・・・・・もうっ・・・・・」

同僚、部下とともに俺は命を落とした筈だった。だが俺は生かされた。
ジェイル＝スカリエッティによって。レリックを媒体として限りある命を与えられ。
その手足となって動き続けた。

だがそれも此処まで。

今は。

目の前に。

レジアスがいる。
地上本部中将部屋。そこにいるレジアスのところまで俺はやってきた。
やっとだ。長かった。８年掛かった。

「久しいな・・・レジアス」
「貴様・・・ゼスト・・・何故だ。何故此処に来た！お前は・・・・死んだはずだ。あの任務の中で」
「だが俺は生きている。こうしてお前の前に立っている。他に誰もいない、俺とお前だけのこの部屋で」
「お前はっ――――――戦闘機人に殺されたはずではなかったのかっ！！！そう、上から通達が来たのだぞ！！」
「・・・・そう、か。そういうことにしてもみ消したか」

レジアスはまだ理解を完全に成してはいなかった。
だから俺は数枚の写真をレジアスの机にばら撒く。
その写真を見ればレジアスは頭を抱えるようにして呻り出す。

「あの時の任務のこと。教えてもらうぞ。何があったのか。そして何が起きたのか」
「あれは・・・・・・

言い渋る。そんなに言えない事なのか。
だが俺はそれを聞きに来たのだ。聞かずして引き下がれないのだ。

「レジアス。あの時語ったお前の夢は。正義はそんな程度のものか！！！」
「！！！！！！！！！！！」
「誰も邪魔させない。さぁ、言え。何がお前をこうさせた！！言え、

レジアス！！！」

レジアスはゆっくりと口を開いた。

キャロSide

私は。私には。ルーちゃんの悲しみが針が刺さるように理解できた。母親をなくした悲しみ。それを訴えている。家族がいない悲しみが。

「ルーちゃん・・・・」

「あなたたちに。なにがわかると・・・・」

ううん。わかるよ。だって。悲しみとか寂しさって伝わるんだよ。だから・・・・

「その悲しみを解き放って。ねぇ？教えて。ルーちゃんのこと。私も教えるから。昔のこと。今のこと。だから――――」

「うるさい・・・・うるさい、うるさいうるさいうるさいっ！！！！」

もう、だめなのかな。私の声はもう届かないの？ルーちゃん・・・・。

「あきらめるな！キャロ！もっと声をかけるんだ！！！ルーテシア

を救えるのはキャロ。同じ君だけだ！！」
「エリオ君・・・・・」
遠くでガリューと戦ってる。それでも私を心配してくれてるんだ。
でも大丈夫だよエリオ君。私だって・・・・。
「私だって機動六課のフォワードフルバック！やってみせます！」
グッ、と力を篭めてルーちゃんと向き合う。体だけじゃない。心から。
さぁ・・・・語り合おうよ。

エリオＳｉｄｅ

ガリューと何度も戦ってきたけどここまで強かったなんて。
速さは上。力も上。背も上。何もかもが上。そんな相手だ。
でも――――――負けられない。後ろには家族が。キャロがいるから。
ここで僕が負けたら・・・・誰がキャロを護るんだ！！！
僕達はフェイトさんに助けられた境遇の同志。だからこそ判ることもある。何よりも家族だ。
「だから・・・僕は負けない！キャロが諦めない限り僕はキャロを護り続ける！！！」
ストラーダがガリューのブレードを弾く。ガリューがその勢いに負けて後ろにブレた。

その隙を突いてストラーダでガリューの胸を突く。
が、瞬間的に避けられた。くそ、やっぱり速い。

「だったら。ストラーダ、フォルムドライッ！！！」
『ｊａ　Ｄｉｅ　Ｚｕｓｔｉｍｍｕｎｇ』

ストラーダのリミッターをはずしてフォルムドライへと変化させる。
さぁ、まだ此処からだ。

「ガリュー！君の速度を超える！！！」

独特のフォルム。推進力を前提にした形状だ。今の僕で扱えるかわからないけど・・・・。

『自分の獲物ならしっかり手綱を捕まえろ。きっちり自分が上だって事を示して抑え付けろ』

え・・・？今の声って。まさか・・・いや、今はそれを追及する暇はない。
ガリューは既に体勢を直して向かってこようとしている。

「ストラーダ、僕と君は一心同体だ。だけど・・・僕に力を貸してくれなんて事は言わない」

望むのは――――

「僕に力を寄越せ！！ストラーダあああああ！！！！！！！！！！」

吼えた。咆哮だ。まるで獣のように僕はストラーダを。槍を立ててガリューと向かい合う。

向かってくるガリューにあわせて僕も疾駆する。
推進力によって加速された僕はガリューよりも速く懐へと入り込む。

「おおおおおおおお！！！！」

雄叫びを上げた。それだけの勢い。一気に槍を突く。ガリューの胸へと吸い込まれるように神速の槍はガリューを突き刺す。
血飛沫が上がる。その血飛沫の中の世界に僕はいる。
ガリューを傷つけてしまった事は僕の中で生きる。後悔として。

「ごめんよガリュー。でも、ルーテシアを救いたいのは僕たちも一緒なんだ」
「　　」
「だから、さ。僕達にも手伝わせてよ。それに見合う力も見せるから。君たちの力になりたいんだ」

ストラーダを引き抜く。するとその傷からは更に血が流れる。
でもガリューは止まらない。一定の距離を取るようにバックステップした。
そんな傷で動き回るとあとがきついぞ、ガリュー・・・・！！

「ガリュー・・・・」

まだ、構えを取るガリュー。そうか。まだなんだね。それなら僕も見せるよ。全力を。

「いくよ、ガリュー。これから放つのは僕の全力の一撃だ」

構える。深く深く腰を落としてまるで獲物を狙う獣のよう。
師匠が教えてくれた最速で最強の一撃を放つための構え。

捕食動物が――――――狩る為の構えだ。

「いくぞ――――――ガリュー！！！！！」

僕の声と同時にガリューと僕は飛び出した。

キャロSide

エリオ君とガリューが戦ってる。それを視界の端に捕らえながら目の前にいるルーちゃんと話をしている。

「ルーちゃんの教えて。ガリューのことも」

すぐ近くでは戦闘が起きている。だから気は抜けないけど。でもルーちゃんを放ってはおけない。助けたい。

だって・・・・・・

「自分の意思で今までやってたの？」

「違う・・・ドクターが頼んできたから・・・・」

「ドクター？」

「ジェイル・・・スカリエッティ。お母さんを治してくれるお医者さん・・・」

そっか・・・・・・ん？ジェイル？

スカリエッティって確かフェイトさんが追いかけてる犯罪者じゃなかたっけ。

「今その人はどこにいるの？」
「今は・・・アジトにいるとおもう、けど・・・」
「お母さんと一緒に？」
「うん。調整槽の中にいれば安全だからって」

多分、あたりだ。私の考えはこう。
スカリエッティはルーちゃんのお母さんを人質にしてる。その情報を使ってルーちゃんを使ってる。

「でも・・・もういい。あなたたちを倒せばドクターはお母さんを戻してくれるって約束したから。約束は護るものだから」
「それはっ・・・・本当に！？」
「ドクターはやさしい。嘘は一回もきいたことはない、よ・・・・」

今の私にそれを確かめる手はない。
それでも、これから確認することだってできるけど・・・・。
あ、でも確かフェイトさんがスカリエッティのアジトに向かってるはず。だったら何とかなるかもしれない。

「ドクターが言うことは正しいから・・・おまえなんか・・・・・お前なんか・・・・・」
「っ！？――――ルーちゃん！？」

って。ルーちゃんがなんだかおかしくなってきた。あれ？様子がおかしいよ。
魔力の暴走？ううん、これは・・・・・・・・魔力の他者遠隔操作？誰かがルーちゃんを操ってる・・・？

「ルーちゃん！正気に戻って！」
「おまえなんか・・・・・消えちゃえええええええええええ！！！

！！！！！」

押さえ込まれた魔力が暴発した。眩しい光。咄嗟に腕で顔をガードした。光が目に入らないように。
でも私はその奔流に飲み込まれてしまった。

エリオＳｉｄｅ

ガリューから離れた僕は血塗れになった姿で立っていた。
腰溜めにストラーダを構えてる。

魔導師の場合、デバイスは魔力補助でしかない。それは魔導騎士でも同じ部分がある。
あくまでも補助。なので、その武器の形状をしてもそれをメインで戦うことはあまりない。
だけど。そう、だけど。

僕の師匠はそれを勿体無いと一蹴して闘い方を教えてくれた。
一対一での勝利の仕方。槍という武器による勝利を。

「いくぞ！」

と、そこでキャロのほうから光が走りぬけた。
何事かと思って視線が向いた。ガリューも同じだったらしい。首から上が向いていた。
ルーテシアが光ってる。あれは魔力が暴発？いや暴走か。魔力の流れが酷く歪だ。

それはガリューも判ってるらしい。すぐに僕に視線を向け直してから低く体勢を取る。
どうやら次の一撃で決める気らしい。

「うん。向こうが気になるもんね。だから次が最後だ。ガリュー！」
「　　」

声のない声が返事をした。気がした。でもこれは通じているんだろう。
さぁ、いこう。これが僕の全力全開だ。

構えたストラーダの先から魔力をだす。でもまだ全開じゃない。ゆら、と揺らめくほどだ。
瞬間。僕とガリューは消えた。

いや、高速の領域に踏み込んだ。そこは通常なら辿り着けない領域。
一瞬で数撃を打ち込む神速の攻防。
足を止めてもまだ上半身は止まらない。腕は何度も突いて引いて。
斬って返して。何度も繰り返した。
その都度全てを防御され、弾き返されるけどそれでも僕は止まらない。止まれない。

「勝つ！そしてキャロとルーテシアを救う！救ってみせる！」

その言葉にガリューが一瞬だけ反応した。だけどこの神速の世界ではその一瞬が命取りだよガリュー！
さっきつけた傷に二度目の刺突。
その勢いは止まらなかった。床が抜けてビルが少し瓦解する。
瓦解する瓦礫の中でガリューは反撃をしようとしてきたけど、僕はまだ手を止めていない。

師匠は言ったよ。手を止めるのは勝利したときだけだって。
まだ僕は勝利していない。だからまだ手は止めないよ！

「紫電――――――一閃！！！！！！」

シグナム副隊長から教わった電撃系変換気質の得意技。というかシグナム副隊長の得意技のひとつ。
槍の師匠であるランサーさんに教わった技術と、シグナム副隊長の技を併せ撃つ。

僕の手からストラーダに伝わり先端から電撃が走る。
電撃はガリューの体を通じて一瞬で抜けていった。

ビクン！と動かなくなるガリュー。ストラーダを抜くとそのまま瓦礫の上に落ちていった。
ストラーダの推進力で屋上に上がるとそこには――――――怪獣大決戦が行われていた。

クアットロＳｉｄｅ

んふぅ。ルーテシアお嬢ちゃまもまだまだ子供ねぇ。母親の面影をちらちらさせておけばなんでも言うこと聞くんですもの。
こんなに面白いことってないわぁ。ということでもうちょっといじっちゃいましょう。
あ、それ。ほれ。ちょいな。

ルーテシアお嬢ちゃま・・・・ルーテシアを遠隔で魔力暴走させてみる。

「うぅ～～～ん♪楽しいったらないわ！そんでもってあのエースのほうも面白そうねぇ」

モニタをいくつか浮かばせて作戦現状を見ていく。あらあらぁ。ちょっとこれは面白そうねぇ。

ドクターも人が悪いわぁ。私もそっちに行きたかったですわ。こんなおもちゃの方じゃなくて。

フェイトＳｉｄｅ

スカリエッティに捕らわれた私は捕縛結界の中で呻く。

「ふふふ。どうかね居心地は」

「最低ですね・・・・」

「その威勢も今だけだよ。他の場所を見せてあげよう」

スカリエッティが私にも見えるようにモニタを映し出させる。

そこにはギンガと戦ってるスバルが。

戦闘機人四人と戦ってるティアナが。

小さな召喚師と戦ってるキャロが。

その使い魔と戦ってるエリオが。

そして・・・・・戦ってるなのはが。

皆が映っていた。どれも苦戦している。今すぐ助けに行きたいくらいに。

「でも残念だね。君は此処で私の研究材料行きだ。実に残念だ。手を差し伸べたくても叶わないなんてね！」

「くっ・・・・・」

なんという屈辱だ。これほどまでに悔しいと思ったのはそうそうない。

「君の仲間は私の娘たちの手によって落ちる。勝てると思うのがおかしいと思わないかね？まずそもあのゆりかごを落とせると？

あれが衛星軌道に乗ったらもう止める術はないと思うが」

「いいや・・・・まだある」

此処に来る前にクロノには話しておいた。ゆりかごの危険性を。だから・・・近いうちすぐにでも戦艦数隻を用意してくるはず。それまでの時間稼ぎでもいい。そうすればゆりかごの方は安心できる。

「君は今こう思っているね。ゆりかごの方を何とかすれば刺し違えてでも私を何とかしようと」

心を読まれた？いや、推測論か。ペテンな心理療法士が使う手だ。

「もし他の場所が勝てたとしても。此処には君よりも速いトーレがいる。剣術も上のセッテがいる。二人を倒したとて私を捕まえたとしよう。

だが１２人のうちの誰かが残っていれば私の因子を受け継ぐ娘た

ちがいる以上、すぐに私は復活できるのだ。記憶と知識を持ってね」
「貴様・・・・」
「そんな格好で睨んだ所で面白みがないな。もっと憎しみの目で蔑んでくれ給えよ。できるのならねぇ？」
スカリエッティが見下す。
「それに君は帰れるかもしれないのだよ？あの世界へ。母親のいる場所に行きたいとは思わないのかい？きっと今も目覚めぬ君の姉と一緒に朽ちた世界で一人っきりでいる母親に。
大魔導師プレシア＝テスタロッサのもとへ帰りたいと思わないかね？」
「できるはずがない！そんなことっ・・・！」
「できる。と言ったら？まぁ、それは私の技術ではなく、他人の助けがいるがね」
「なん・・・・だと？」
まさか。だって母さんは・・・・プレシア母さんは虚数空間に落ちていったんだ。
私の目の前で・・・なのはもクロノもリンディ母さんも助けてくれたあの事件のときに・・・・。
「できる、と言ったよ私はね。だがその為には準備もいるけどね」
「・・・・・・・・」
一瞬だけ迷いが出た。まさか・・・・私は望んでいるの？プレシア母さんに会うのを・・・・。
「試験管の中で生まれた、アリシア＝テスタロッサのコピークローン。プロジェクトFの遺児、フェイト＝テスタロッサ。君は何を望

む？ん？」
「わた、しは・・・・・・」
目の前に捕まえなければいけない犯罪者を前に。
私と同じ、エリオたちみたいな被害者を出さないためにって決めた道なのに。
私は心を折られそうにまでなった。
まだどこかにプレシア母さんを追ってる自分が居た事に私は認識した。
人目でも逢えるなら。そう思ってしまった。
「違う！そんなのはまやかしだ！！」
「！！！」
心が完全に折れそうになった時。声が聞こえた。
「フェイトさんはそんな心は弱くない！甘言を使うな！ルーテシアももとに戻せ！」
「ほう。もう一人の遺児か。これはこれは此処を特定できたとはね・・・・あぁ、この娘に座標を当てたからか」
「フェイトさんは私たちに生きる希望を、道をくれた。前に向かう勇気をくれた。もうダメだって諦めていた私やエリオ君や他の子供たちに手を差し伸べてくれた！
そんなフェイトさんが、あなたなんかに負けるわけがない！」
「しかしこうして君たちの保護者は膝をついて負けそうだよ？ん？どうだい？」
「僕達の知るフェイトさんならがんばれる！僕達に一歩前に出る勇気を与えてくれた人が――――――おまえになんか負けるわけがない！！！！」
「よく吼えた少年！だが！」

「・・・・・・・・・・」

エリオ・・・・キャロ・・・・・。

まだ自分たちの戦いがあるっていうのにありがとう・・・・。

「ありがとう、ね・・・・エリオ。キャロ」

頬を伝う暖かい雫。涙が一筋流れた。

「そう、だよね。過去は過去なんだ。もう戻れないやり直せない過去。だから――――前に進むしかないんだよ」

「立ち直ったか。だがそれからどうする気だ？」

私の周りにトーレとセッテが立つ。スカリエッティはその後ろに下がる。

「二度とやり直せないから人は経験してもうそうならないようにがんばるんだ。だから私はたった一歩でも前に進む。一人じゃなくて皆で」

『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｒｅｍｏｖｅ』

バルディッシュが結界の解析を終わらせていた。そうだよね。バルディッシュも諦めてなかったんだ。

リニスが創り上げてくれた私の相棒が諦めていないのに。私が諦めてどうする。

結界を壊した後は立ち上がりバルディッシュを抱える。

「うん・・・大丈夫だよ。私は前にいける。だって――――一緒だから」

『ＳＯＮＩＣ　ＦＯＲＭ』

１０年掛けて築き上げた私の本気。見せてあげるよ。ジェイル＝スカリエッティ。

「それが君の本気か。実にいいね！さぁみせてくれたまえ！！」

戦闘機人が戦闘体勢に入る。装甲を薄く薄く限界まで薄くしたバリアジャケットに変換した私は。

ザンバーフォームも変換させる。

「バルディッシュ――――ツインブレード」

『Ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ』

「ジェイル＝スカリエッティとその一味。此処で逮捕します！」

第百十話　ファイナル・リミット

なのはＳｉｄｅ

玉座の間でヴィヴィオと戦ってる。闘いたくないのに。なんでこうなっちゃったのかな。

「ヴィヴィオ、話を聞いて！」

「うるさい！おまえなんか知らない！」

なんていう言葉使い。ヴィヴィオが育ったらこうなっちゃうのかな？アクセルシューター同士がぶつかる。うん、闘い方は私と似てる。ただ、魔力の質が違う。

私よりもかなり濃いし圧縮率も違う。それもそうか。

ヴィヴィオの闘い方は格闘を混ぜた魔法攻撃。スバルにちょっと似てる？

「ヴィヴィオ！」

「私を呼ぶな！」

何を言っても聞かないってわけ？だからってドンパチやるのもダメだし・・・。

どうすればいい、かな。瓦礫の影に隠れて次の手を考える。これがミラ君ならいろいろと手を考えて来るんだろうけど。

体で覚えて動くのが私だからなぁ。相手の深い所まで読んで動くのはミラ君やティアナ、はやてちゃんの仕事だし。

「こうしてみると私って頭使ってないなぁ。一撃必殺ズバンとドカン？」

『ｍａｓｔｅｒらしい答えで安心しました』
「レイジングハート・・・」
最近きついよね。どうしたのかな。まだ調整行き？この事件が終わったらちょっと技術部に相談してみよう。
『ｍａｓｔｅｒらしく行けばよいかと。ｍａｓｔｅｒに他の手は似合いません』
「うん・・・そうなんだけど、ねっ」
隠れてた瓦礫を吹き飛ばされて私の姿が露呈された。すぐに移動して体制を整える。
「ヴィヴィオ・・・・」
「ママはどこ・・・・ママに会いたい・・・・」
あの子は体が成長してもアレは変身魔法と同じ。精神はまだ子供のまま。
いきなり手に入れた力に振り回されてる感じ、かな。
「ちょっときついかな・・・・」
明らかにあっちはオーバースペック。振り回されてると言ってもそれを少しずつ逆に振り回す感じに力を使いこなし始めてる。
「あっちは魔法をバカスカ使える状態でこっちは抑えていかないとダメ、かぁ。派手にやるとヴィヴィオに傷つけちゃうかもしれないし。なんとも八方塞がり？」
『かなり詰んでますね』
「にゃはは、中々の状態で――――楽しめそうだよ」

レイジングハートがこの戦闘の勝率を計算してる。

『勝率――――――７％』

レイジングハートが演算した勝率は７％。うん。０じゃないなら。諦めるわけには行かないよね。

「不屈の心はこの胸に――――――高町なのは、いっきます！！！」

もう何度目かのアクセルシューターになるだろうか。徐々に速度と数と硬さを増やしていく。

一瞬にして４５の魔弾を生成して一気にぶっ放す！

轟音で唸りながら突き進む。ただ飛ぶだけじゃない。横回転を篭めた魔弾がヴィヴィオに向かっていく。

「こん、なものぉ！！」

ヴィヴィオに直撃する寸前にフィールドに弾かれた感触がした。あれは――――――

『んふふふー。きこえますぅ～～？』

これは・・・さっきの戦闘機人の声。念話で直接話しかけてくるなんて。

『よく私に念話できるね』

『調律すればこのくらいは朝飯前ですわん。それよりも聖王サマに利かない理由をお教えしましょうか。あれは”聖王の鎧”。生半可な魔法じゃ利きませんのよぉ～？」

よくもまぁ。敵対してる私に情報をベラベラといってくれるね。
それだけ自慢で自信があるって事かな。

『ｍａｓｔｅｒ――――』
「うん、わかってる。だったらそれ以上のダメージを与えるしかないよね」
『ＹＥＳ』

瓦礫のある床から空にあがる。ヴィヴィオも空戦よろしく浮遊魔法か。うーん・・・・・。

「指導したい・・・」
『ｍａｓｔｅｒ、今は――――』
「わ、わかってるよっ！？」

私の呟きまで返答してこないでいいからね！？でも・・・うん。危なっかしいんだよね。だからかな。教導っぽくなってるのは。
どうしても相手の全力を出し切らせないと私の気が済まない。

圧され気味だけど・・・・がんばるよ。

「ヴィヴィオ・・・今助けるからね」

エリオＳｉｄｅ

ガリューを倒してからビルの上に。今はフリードの上にキャロといる。

「あれは・・・・」

白い、大きな召喚獣。前に一回見たキャロのヴォルテールくらいの大きさだ。

その周囲には小さい召喚獣がわらわらと沸いてきてる。そこには大きめの召喚陣。そこからだ。

「あの召喚陣から出てきてる・・・？しかもアレ、オートっぽいね。ルーテシアが魔力暴走してるせいかな」

「多分、そうだと思う・・・召喚の扉が開きっぱなしになってるからどんどん出てきちゃうの・・・。

それでも魔力は疲弊していくから、無限ってわけじゃない。ルーちゃんの魔力がなくなるまではあのまま出続けるよ」

「それなら何とかしないとダメだね」

僕はフリードから飛び降りて地面へと移動した。着地のショックはストラーダに任せたので高低差のダメージはない。

着地ざまに周囲の召喚獣を突き刺して爆散させる。

「流石にこれはいい気がしないね・・・・」

爆風に身を躍らせながら次の召喚陣へと向かう。

電気変換資質によって身体性能を上げていく。怪我もあるのに速度は変わらない変えられない。
師匠であるランサーさんからは最速の手を教えられた。手数を増やして更に速度も上げる。
魔力を篭めた武器は強く速く鋭く。ストラーダもそれに応えていった。
いくつかの召喚陣をつぶしたところで別の場所から爆発が起きた。

「っ!?なんだ?!」

他の場所の爆発を見ると其処には青いボディスーツの男が深紅の槍を持って立っていた。

「本当は手を出すなって言われたんだけどな。楽しませろよ。なぁ？」

槍でポンポンと肩を叩きながら悠然とガジェットの中で立つ男。ぼくのししょう、ランサーさんが其処にいた。

「ランサー、さん・・・？どうしてここに!?連絡も取れないって部隊長が言ってたんですけど」
「師匠と呼べよ。折角なんだから。連絡の件はあー・・・あれだ。マスターに聞け」

面倒そうに答えてくれたけどちゃんと答えてくれるのは嬉しいですよ。

「おいエリオ。オレはあんまり手は出さねぇぞ。手はな？」
「はい。じゃぁ口は出してもらえますね。嬉しいです！」

手は出さない。だったら足や口は出してくるってことでいいんですよね？

「まぁ、そういうこった。で、ああいうでかいやつはキャロとかに任せておけばいい。お前はお前の戦いをしたんだろう？見てたぜ――――」

「師匠とシグナム副隊長のおかげで勝てました。ありがとうございます！」

「礼はいいが今は戦いに集中しろ。こいつら雑魚を片付けるのも仕事だ。花形のメインを張るのもいいが、そういうやつを闘いやすくさせる縁の下の力持ちってのをしてやらねぇとな」

空にいるキャロとフリードを見上げる師匠。あっちはあっちで心配だけど・・・・。

「心配か？空が」

「え、あ、はい。そりゃぁ・・・・」

「心配すんな。あっちはあっちでちゃんと居るからよ――――――お前に俺がついたのと同じように、な」

あ。そういうことか。キャロにとっての師匠はあの人だから。

きっと来てるんだ。

アリサＳｉｄｅ

機動六課の瓦礫撤去が終わってからすずかが六課の防衛に回るからっていうんで私は前線へ。
バハムートの背中に乗って雲と同じ高さで飛んでいる。
この高さから一気に前線へと向かう。途中ミラージュから通信が入った。

『アリサ。前線に向かってるのか？』
「あら。やっと通信送ってくるなんて遅いわね。もうすぐ前線に到着するわ。何か指示はある？」
『その近くにキャロたちがいるはずだ。そっちの援護に頼む。ランサーもいるからポイントはすぐに探せるはずだ』
「了解。どこまでやっていいのかしら？」
『メインはキャロに取らせてくれ。そろそろシメに入るから』
「ん。わかった」

そっか。キャロたちも前線に出てるんだ。ティアナもスバルも状況を教えてもらう。
津那魅に情報が飛んでる？随分と後方待機みたいだけど。
まぁ情報戦は私の範疇じゃないからいいけどね。

バハムートで前線に向かって飛んでるとすぐに見つかった。
白くて大きな・・・反応が召喚魔法ね。あれも召喚獣なのね。
その近くにキャロとフリードが旋回軌道で飛んでるのが見えた。
それと足元にランサーとエリオね。

「バハムート、お願い」

一声掛けるとバハムートが勢いよく降下していく。
すぐに向こうも気付いたみたい。ってバハムートくらい大きかったらすぐ目視できるわよね。

「アリサさん！」
「はぁい、キャロ。がんばってる？」

同じくらいの高さにまで降りる。となるとバハムートじゃ地面に足がついちゃうわね。

「ＯＫよバハムート。羽を休めてて」

バハムートの背中から近くのビルに降りる。なんだか周りに戦闘痕があるけど。

「で、えっと。状況説明。簡単に」
「スカリエッティに操られた召喚師の魔力暴走で召喚陣がバンバン！」
「判りやすいけど言葉は選んだほうがいいわよ？」
「あぅ・・・」

まぁ、あれもその暴走の影響でしょうね。よく吼えてるわ。
でも・・・キャロが躊躇するのもわかるけどね。

「キャロ、これをどうにかする手があるけど聞く？」
「ぜひ！」

打破したい気はあったのね。ただ自信がなかったのかな。
まだまだ少しばかり背中を押さないとダメかな。

「全力であれを倒しなさい。召喚陣に押し返して返却するのよ」
「・・・わかりました！！」
「具体的には守護竜を呼ばないと勝てないわよ？」
「・・・・・・」

守護竜・ヴォルテールのことを言えばまだ自信がないのね。でも六課襲撃戦の時には出てたって聞いたけどね。
切欠が欲しいのね。
迷ってると答えてくれないわよ・・・・。

「キャロ。迷ってちゃ皆が迷ってしまうわ。大丈夫。貴女にはちゃんと制御できる力がついてるのよ。自分を信じなさい。あなたを鍛えた私を信じなさい。自分を信じる自分を信じなさい」
「信じ、る・・・・・」
「迷いは召喚に影響が反映される。迷ったまま召喚されたらそれは何も特性の持たない獣しか呼べない。”あんたを呼んだ私を信じない”って気持ちでいなさい」

私は更に畳み掛ける。

「負けないイメージを作りなさい。自分の呼んだ存在を最強と信じなさい。その最強の存在を呼んだ自分は無敵だと信じなさい」
「イメージ・・・・強く、無敵で・・・・」
「さぁ、呼びなさい。あなたの最強のイメージで最強の存在を」
「・・・・お願い、来て――――――――――――」

キャロの体が光る。魔力が溢れるほどに蓄積された光は周囲を照らすほどに。

「ヴォルテーーーーーーーーーーール！！！！！！！！！」

キャロの呼びかけに召喚陣から呼ばれたのは黒い巨竜。
私はバハムートに視線を向けるとグルル、と返してきた。まぁこれなら大丈夫ね。あとはキャロの信じる心が相手よりも上になれば。

「ランサー、下の方はお願いね」
「おう。任せとけ。ってやるのはエリオだけだけどなー」
「ちょ！？」

エリオがびっくりしてる。とことんランサーは手を出さないつもりね。
結果的な話だけど白い召喚獣をヴォルテールが倒した。それを切欠にして召喚師も意識を手放したみたいね。
別れてしまったスバルとティアナに伝言を預かってから傍に居てあげて、って言って私とランサーは前線へと向かう。

フェイトＳｉｄｅ

信じる心は何よりも強いんだ。それをまさかあの子たちから教わるなんて。

成長したんだね。嬉しいよ。だから今はそれに応える為に、私が頑張る番だ。

「ん？少しやる気になったようだね。だけどその前に立ち塞がらせて貰うよ」

スカリエッティの前にトーレが立つ。私と同じ位の速度を持つ戦闘機人。多分、オーバーSくらいの力はある。
その後ろにセッテ、という名前の戦闘機人。今の私と同じ双剣の使い手。

「少しばかり頑張らないとダメっぽいね」
「少し、で足りるというその思い上がりを消して見せましょう、フェイトお姉様」

トーレが最速で突っ込んでくる。私も回避と同時に最速に乗って所狭しと動き出す。
セッテの方も気にしながら闘うとなると集中力がもたなそうだ。

「余所見してると打ち落としますよ」

風に乗った声が届いた。背中を打たれて軌道を狂わされて地面に落ちる。まだ速度が足りないというの？

「集中がきれれば見えます。フェイトお姉様の動きは手に取るように判別可能ですよ」
「まだ・・・遅い、か」

たまに動くセッテのフェイントが私を狂わす。その奥のスカリエッティはほくそ笑んで私を見ている。

「やれやれ――――手を出す気はなかったんだがな」

ふ、と。場に男性の声が響いた。この声は・・・・・。

「え・・・この声――――」

「君の悪い癖だな。なんでも一人で片付けようとする。だからあの子らも心配で通信を送ってくるんだ」

「・・・・そうやって皮肉を言ってくるのも悪い癖ですね――――」

私の後方から姿を現す人。赤い戦闘服に身を包み、黒と白の短剣を持った人。

「――――アーチャーさん」

アーチャーＳｉｄｅ

「マスターからはこっちに口出ししろということだったのでね。少々見てられなくなった」

「やさしいんですね・・・・出すのは口だけですか？」

「君が望むなら」

「フフ・・・お願いします。あちらを」

フェイトは双剣の使い手を私に任せてきた。確かに相性としてはまぁまぁだが。

「さて。其処の男に問う。ジェイル＝スカリエッティで間違いないな？」

「あぁ。そうとも。私がその名で間違いないよ。未来の英雄」

「・・・・・何のことだかわからないが、それも加えて後で聞く案件だな」

「フ・・・そうだね。さぁセッテ。そいつを倒してしまえ。それだけの力はあるはずだ」

セッテ、か。目の前の戦闘機人はそういう名前なのだな。

機人というだけあって感情が見えない。機械的な雰囲気しか見えない。これもまたひとつの到達点なんだろうな。

だが、それと実力が比例してるかといえばどうなんだかな。確かめてみる価値はありそうだ。

「さて、セッテとやら。私の相手をするにあたり君の実力が私に合うかどうか確かめさせてもらおうか」

両手はだらりとたらしたままの何時もの構え。

「それで構えたつもりですか。ふざけてますね――――――」

「そういうつもりではないんだがな――――――」

魔力を目に通して千里眼を発動させる。どんな魔力の流れだろうとどんな速度であろうとこの鷹の目からは逃げられん。

頭上から一気に二本のブレードを重ね合わせて振り下ろして来る。

それを左手を上げて莫耶のみでブレードを受け止める。衝撃が周り

に走り抜ける。
受けた体が沈む。床が凹み、穿かれていく。輝も入って脆く砕かれていく。

だが。だがそれまでだった。
一定の場所で止まった体はそのまま動きを停止した。

「押し込め・・・・ないっ!?」
「・・・・・・・・・それが全力か?」

頭上から来たセッテを上目で睨む様に見据える。殺気を篭めた視線を向けると一瞬だけたじろいだ。

「この程度で――――――全力だと?嘗めるのもいい加減にしろ。残念だ――――――実に残念だ」

この程度で英霊を相手にしようなんて思ったのか?だとしたらとんだ思い上がりだ。
下らない。英霊に近しい力を持つものは中々居ないのか・・・・。

「さて。君はどうする?このまま下がってもらえるかな?それともまだやるか?」
「まだまだっ・・・・嘗めてもらっては困りますね」
「そうか。なら君はもう撤退だ」

右手の干将でセッテの腹を横に薙ぐ。魔力ブーストした速度で一瞬で掻き斬る。
0コンマの世界だ。セッテも気付かない程の。一瞬の出来事でセッテは何が起きたかわかってないようだ。

「終わりだ。残念だが私は人の命を奪う事に疑念すら持たないよ。あぁ、君たちは人ですらない半端だったな。ならこんな感情も生まれないか」

冷たい視線を投げながら崩れ落ちるセッテを見続ける。

「それと、傷は浅いぞ。ただし行動系の筋は断ったのでね。立てても闘うことは難しい。そのまま寝ていたまえ。楽になるぞ」

「くっ・・・・」

横たわったまま私を見上げるセッテをバインドで捕縛する。さて、あっちはフェイトに任せるとして。

「ジェイル＝スカリエッティ。君は逃げるかな？」

「トーレが勝てば逃げる必要がなさそうだけどね？」

「それもそうだ。だが念には念を入れさせてもらおうか」

莫耶を消して左手をスカリエッティに向ける。その背後に魔力を集める。

剣郡が鉄格子のように出現して後方への逃げ道を塞ぐ。その反対側も同様だ。

「さて。これで逃げれないな。ちなみに私たちも動けないがな」

後はフェイトに任せよう。壁に寄りかかり腕を組んで目を閉じる。

「君は参加しないのかい？」

「私はあまり手を出すなといわれていてね。まぁ命令違反をしたわけで自重してるのさ」

フェイトＳｉｄｅ

アーチャーがセッテの方い言ってくれたから集中してトーレとやりあえる。

「セッテはあちらに取られましたがそれでもお姉様の速度よりは私の方が上です」

「うん。そうだろうね。今のままなら」

「なんと・・・なんという嘘でしょうか」

「嘘じゃないよ。セッテがどう動くのか気にしながらだったから気になって仕方なかったけどアーチャーが相対してくれたのなら私は気にしないで闘える」

つまりは、

「私は全速力を出せる。って事だよ」

「戯言ですね。それが本当だというなら見せてもらいたい」

またトーレからの先行。一気に速度を上げて見えなくなるくらいだ。

光の筋が走る。

私もほぼ同時に同じ速度域に突入する。前方が淡く光に包まれてる。

逆に後ろは暗く遅い。
音速よりも速い域に入ると行動制限すら起こる。たいしたことない動きでも音速の壁をぶち破るのだ。
クッションを殴ったような柔らかい感触を突き抜ける。それだけで音速の波を引き起こす。衝撃波が走る。

途中でアーチャーが剣を作り出して通路を塞いだ。これには私もトーレも驚いた。
いきなり路が狭まったのだから。でもそれでも。その空間の中で私は動き続ける。トーレも動く。
交差するたびにブレード同士がぶつかり合って遅れて音を鳴らしていく。
幾度となく繰り返されていく。ただでさえ薄いバリアジャケットが斬られて行く。そして斬って行く。

「私は――――――負けられないんだ」

背負うのはエリオやキャロ、なのはやはやて達の思いと一緒に。勝てなくてもその後に続く誰かの道標になれるように。
次に闘う誰かの為に。少しでもダメージを残しておかなければ。

「負けられない――――――」

思いは強くなっていく。それは生息速度域を超えていく。
更なる速度に入っていく。亜音速から超音速へ。なのはを護るために手に入れた力のひとつ。私には速度しかないから。

電光（ライトニング）の名前は伊達じゃないっ！！！！

徐々にトーレを捕らえてダメージを当てていく。

「くっ・・・・!?まさかあそこから更に速度を上げていくとはっ!?」

追いつけなくなってきたトーレに渾身の一撃で吹き飛ばす。壁にぶつかったトーレはそのまま動かなくなった。
どうやら速度的なダメージも重なったんだろう。

「あとはっ・・・・!!!」

速度をそのままにスカリエッティに向かっていく。後ろに剣の牢がある以上逃げれないが。
逃げることもなく私に向かって笑みを浮かべたままだ。
その笑みを消すっ・・・!!

広域次元犯罪者ジェイル＝スカリエッティ――――――――――」

ツインブレードフォルムからザンバーフォルムへ変換して。

「貴方を逮捕します!!」
「っ!!!!!!」

そのままブレードの鍔で叩き振り抜いた。スカリエッティもまさか叩かれるとは思っていなかったらしく綺麗に吹き飛んだ。
そこへすかさずバインド。簡単に解けないように6重に重ねた特性のバインド。

これで。なんとか任務は終わった、かな?
あとはこのアジトをなんとかするだけだ。あとは・・・・。

「ありがとうございますアーチャー。貴方の牽制で助かりました」
「いやなに。手を出すなといわれていたのに手を出してしまったからな。内密に頼むよ」

アーチャーの大きな手が私の頭を撫でる。むぅ、子ども扱いですね。昔から。

「他の場所も何とかなったみたいだしな。さっさと撤退しようか」
「あ、その前に」

やるべきことはある。内部通信で来ていたエリオとキャロからの通達。今相手してる召喚師の親が此処にいると言う事。
それと、この実験で捕まってしまった人たちの保護もある。

「アーチャー、もう少し手伝ってくれますか」
「私は高いぞ？」
「ツケでお願いしますね」
「ククッ、本当によく育ったものだ。私を使うとは」

肩でアーチャーが笑って壁から離れた。

「さて。ではどうすればいい？この三名は外のヴェロッサに任せればいい。やつの猟犬はこのアジト全域に広がりつつある。此処を見つけるのも時間の問題だ」
「はい。ではヴェロッサ監察官が到達してから奥に行きましょう」

アーチャーが剣郡を消して通路を広げる。あとは保護だけ。

ロッサＳｉｄｅ

テスタロッサ執務官とシャッハと分かれた僕は単独行動で動いている。と言っても入り口にいるだけだけどね。
でもそれでも魔力は減っていくんだけど。

「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）。僕の技能なら僕自身がいなくても充分に働けるのさ」

古代ベルカの希少技能。姉の騎士カリムやはやてと同じ古代ベルカ式のスキルだ。さぁ突き止めるよ最奥にいる存在を。
分かれ道があれば増殖して分かれ別れて行く。いくらでも無限に現れる僕の力。
その名の通り猟犬の姿をした魔法。そのスペックも猟犬さながらだ。

ほら――――――見つけた。

気配はないけど魔力探知でなら見つけられちゃうんだけどね。其処が欠点といえば欠点だけど。通常の犯罪者程度ならこれで充分さ。
今はそれどころじゃないくらいの相手だけどね。

静かに気配を消して近づく。伏したままで近づくソレはまるで捕食者の様。
ある程度まで近づく。恐らく此処らへんが相手の絶対守護領域だ。
だけどその距離は僕の距離でもある。速攻魔法でバインドを仕掛ける。

「なっ！？」

いきなり後方からバインドで縛られる戦闘機人はキーボードから手を離した。

これでしばらくは何もできないだろう。後は場所を通知して捕らえに行くだけ。

それはシャッハに任せようかな。あとで見れるような工夫をしてシャッハに伝えておこう。

これで少しは向こうの作戦の邪魔が出来たかな。

ヴィータＳｉｄｅ

ゆりかごの駆動炉のある部屋までやってきた。

歩いてきた道の後ろには流れた血が点々とたれてつながっている。

何処からたれていたのかすらもうわかんねぇ。後ろももう向きたくねぇし。

「一体何体のガジェットドローンをぶっ壊してきたかももう数えてねぇや」

へへ、と笑う。あたしにゃ壊す事しかできねぇから。はやての為に邪魔なやつをぶっ壊すだけだ。

今までだってそうやって来たじゃねぇか。

「何も変わらねぇや。やることはひとつだ。なぁ、アイゼン。そう思うだろお前も」

『Ｊａ，』

アイゼンが返答する。全く短い返答だな。なのはやフェイトのみたく会話できれば今ならどう言うんだろうな。

「まぁいいや。最後の仕事だ。アイゼン。やってくれよ？これではやてに顔向けできらぁ」

目の前には大きな駆動炉だ。アレを壊せばゆりかごは止まる、はずだ。

壊す事が専門だからこそ。なのはと分かれてこっちに来たんだ。あいつはあいつでやることあったしな。

「そういえばヴィヴィオと逢えたかな。逢えてたらいいな」

家族ってのは今までわからなかったけどさ。はやてに逢えて家族の暖かさってのを教えてもらったよ。

だからなのは。ヴィヴィオを救え。救ってくれ。

「通信もダメ。騎士甲冑もボロボロ。帰れるかな」

魔力もあんまり残ってねぇ。だから振り絞っての一撃しかもう残ってねぇな。

「この一撃でダメなら・・・・・いや、違うだろ。あたしならやれるんだ」

そう信じる力だ。自分を信じなきゃ何もできねぇだろ。

「アイゼン！！リミットブレイクフォルムでかたぁつけんぞ！！！」

『Ｊａ，』

力を振り絞って空を飛んでアイゼンを振りかざす。これが最後の一撃にする為に。本気の全力だ。

「轟天爆砕！！！！！」

デバイスのリミットを外した全力の一撃を一気に駆動炉に振り下ろす。派手な音を鳴らしながら衝撃とダメージが突き抜けていく。きっとゆりかご全体に響いたに違いない。そのくらい大きな音だった。そう思わずに入られないくらいの大きさだ。

だけど。目の前の駆動炉はまだ動きを止めなかった。

目をこらえてよく見る。うっすらと。防護膜が張られている事に今やっと気付いた。

「くそっ・・・・！こんなことで終わるのか・・・・・・いや、おわらねぇ。終わらせたくねぇ。そうだよ、そうだろ、なぁアイゼン！」

あたしは諦めない。何度でもこいつを壊すまで全力を出し切ってやる。

クアットロＳｉｄｅ

んふー。流石のエース・オブ・エースでも聖王には敵わないみたいねぇん。

クローン体とはいえその聖骸布から得た血を採取したＤＮＡで創り上げた人造魔導師。

つまり、細胞レベルでは聖王と同じなんですもの。

「んふーふー。勝てるとしたらそれは古代ベルカの王クラスですわ。高町なのは。此処に墜つ、ですわ」

あぁ笑いが止まらない。そういえばアジトの方で動きがあったみたいですけどぉ。これから面白くなるのに何やってんですかもう。

なのはＳｉｄｅ

「ブラスターモード！レベル３！！！」

レイジングハートがリミッターを外していく。序にマガジンリロード。マガジンボックス型に変更して一気に連続排莢していく。

一気に魔力をブーストする。この魔力を維持するのはきつい、ね。

「でもヴィヴィオ。ママはね。なのはママはね。ヴィヴィオを大切に思ってたんだよ」

「嘘だ！だったらなんでいつも助けてくれなかったの！転んだときも！」
「ヴィヴィオに強くなってほしかったからだよ。一人で出来るようにって私は手を出さなかった」
「私は手を出して欲しかったのに！」
「うん。ごめんね」

会話をしながら魔法が乱れ飛ぶ。まさかブラスター3で拮抗するくらいの魔力を秘めてるなんてね。
末恐ろしい子だわ。でも此処で判らせないと。

「嫌いなピーマンも食べたくなかったよ。苦いから！」
「栄養いっぱいあるんだから好き嫌いはダメだよ。ちゃんと食べないと大きくなれないよ――――いまみたいに」

ただ単に魔力を固めて放つだけのヴィヴィオだったのに。
いつの間にか魔力構築をし始めて。
いつの間にか魔力演算をし始めて。
いつの間にかちゃんと魔法を使ってて。

「成長したね、ヴィヴィオ」

私との戦いで成長したんだね。ちゃんと計算して演算して。デバイスがないのに一人で此処まで成長できたんだね。

「ちゃんと、子供扱いしないで闘わないとダメだね」
「・・・そうだよ。もう子供じゃない！私はっ・・・なのはママっ！！」

うん。うんうん。わかったよ。だから、何も言わなくていいんだ。

「今、助けてあげるから。待ってて。ママが手を差し伸べるよ」
「うん・・・・待ってるよ。だから――――――手を差し伸べて」

ヴィータＳｉｄｅ

駆動炉の上を飛びながら幾度も叩き続けた。いろんな角度でアイゼンを叩き込んだ。
それでもまだあいつは壊れない。

「くそっ・・・あたしの力はこれまでなのかよ!!!!!!!!!」

ふらふらになりながらも渾身の一撃を打ち込む。
大きく息を吐く。もう力は残ってねぇや。やっぱ、ダメなのかな・・・。

「ごめん、はやて・・・・あたしだめだった・・・ごめん――――――」

グラ、と。足元のベルカ式魔法陣が点滅して、消滅した。
意識を失いそうな中、落下していく体を感じながら忌まわしい駆動炉を見続けた。

「ちくしょう・・・約束だったのに。はやてと約束したのに・・・・」

悔しい。悔しい。悔しい。
何が悔しいって鉄槌の騎士と名乗っておいて破壊が出来なかった事に。自分が悔しい。恨めしい。情けない。カッコ悪い。

そんな気持ちがぐるぐると渦巻きながら墜ちる。落ちる。

そんな体がガクン、と停止した。なんだ・・・？何が起きたか判らない。
うっすらと力なく目を明けると、そこには愛しい姿が、顔があった。

「はや、て・・・？なんでここに」
「イヤやなぁ。ヴィータのいるところにわたしはおるよ。ずと一緒におるよ。約束したやろ。ずっとずぅっと一緒におるって」

よくよく見ればはやてに抱きかかえられてた。しかもはやての姿はユニゾンした姿だった。
リィンも一緒か。末娘にゃ情けないところを見られたな。

「ごめん、はやて・・・あたし、出来なかった・・・」
「何言うとるん。ヴィータ一生懸命頑張ったやないか」

でも。駆動炉は壊せなかったよ。

「よく見ぃ。最後の夜天の王の守護騎士が。鉄槌の騎士が。わたしを守護してくれる騎士が。その攻撃で――――――壊せんものは何もない」

はやてが指差す。そこには燁を入れながら壊れていく駆動炉があった。
ちゃんと攻撃は通って痛んだ。蓄積されたダメージがやっと通り始めたんだとあやては言ってくれた。
嬉しいよ。だって――――――はやてとの約束を護れたんだから。

「さぁ急ごうか。此処におったら巻き添え食ってまうわ」
「うん・・・でもあたし動きづらいよ？」
「ほんならこうや！」

はやてがあたしを背負ってきた。温かい背中が顔の前に広がる。暖かい背中。

「はやての背中、あったかいな・・・」
「ふふ。当然や。その背中は今はヴィータ専用やからな」

嬉しい。うれしいよ。だからあたしは――――――誇りに思う。
この最後の夜天の王の守護騎士でいられる事を誇りに思う。

ヴィヴィオSide

なのはママ。本当のママを奪った人。そう記憶にある。
でもなんでだろう。よくわからない。本当のって、なんなんだろう。
それにあんなに必死になって私に向かってくるなんて。

「ヴィヴィオ！」

何度も私の名前を呼んでくる。魔法を絡めながら。
私には魔力があった。魔法が使えた。だから撃った。ただ撃った。
でもあっちは。なのはママは。いろんな魔法を見せてきた。だから
真似して構築して演算してオリジナルで魔法を作って撃ち返した。
それが。なんだか嬉しくて。

「なんだか教えてもらってるみたいだ・・・・」

なんて思った。なのはママの魔法は優しい魔法だ。傷つけてしまう
かもしれない魔法でも優しい気持ちがいっぱい、いっぱい詰まって
た。
パワーアップした魔法をどんどん打ち込んでくる。段々打ち消せな
くなってきた。
なのはママも本気なんだね。

「どうして・・・こんなことになったんだろう」

思う。ふ、と思う。でもその答えは出てこない。記憶にない。ただ
目の前の敵を倒せとしかわからなかった。
でも目の前にいるのはなのはママじゃないか。なのはママを倒せと
いうのか。

「でもっ・・・わたしはっ・・・・・・」

何度目とも判らないくらいの打ち合いの中で私は魔法の軌道をずらす。

その隙をついてなのはママが私をバインドした。

「！！！？」

「ヴィヴィオ。ちょっと待っててね。すぐに、助けるから――――」

なのはＳｉｄｅ

ヴィヴィオが隙を作ってくれた。偶然？でもそれでもいい。一気にバインドで身柄を拘束する。

「ママ・・・なのはママ。私ね、待ってる、よ・・・・？」

「うん。待っててね。今、ヴィヴィオにいたずらしてる人をお仕置きするから」

ヴィヴィオと戦ってる間にサーチャーを飛ばしていた。

そのサーチャーに通信が入ったのが数瞬前。お兄ちゃんからだ。

『なのは、聞こえるか？この無鉄砲妹め。お兄ちゃんは心配で心配で仕方ないぞ』
『お兄ちゃん、今はソレよりもやらないといけないことが！』
『判ってる。大体の現状は把握してる。オレの位置を確認しろ』
『うん――――――――――キャッチ！！』
『其処がオレのいる場所。そしてお前の目的に敵がいる場所だ。俺が足止めさせるからお前は――――――わかってるな？』
『うん。任せて！』

そこで通信が切れた。もちろん会話の間にお兄ちゃんの位置を感知してる。
其処にいるのか。眼鏡の戦闘機人め。

「ママのお兄ちゃんがね。悪いヒトを見つけたから。お仕置きしてくるね」
「うん・・・いってらっしゃい」

ヴィヴィオを拘束してるバインドも長くは持たない。意識の外で体を動かしてる”聖王”がバインドを砕く前に。
全てを終わらせる。

恭也Ｓｉｄｅ

なのはのいる場所から下側に何層かいった場所。なのはのサーチャーも感じ取れたので念話で通信を終えた。
後はこっちを何とかするだけだ。

ジリジリと気配を完全に消していく。魔法に頼り切ったやつらには完全な対術である気殺は専門外だ。
魔力を感知するしか出来ないタイプならこれで充分近づける。
案の定、オレの事に気付いてないな。

「このまま背後に回りこむ・・・・・！」

暗殺者よろしく静かに近づく。そしてすぐ後ろにまで来てから気配を現す。
戦闘機人はそれですぐに気付いたがすぐ背後ということに驚きの顔を隠せない。

「なっ！？なんでこんなにすぐ背後にいるんですのっ！？」
「それはな――――――魔力にしか頼りきってたお前たちの敗因だよ！」

右の短刀で袈裟懸けに切り込み、その勢いのままに右足を刺して固定させる。

「う、うぎゃあああああああああああ！！！！！！！！！！」

凡そ見た目女性というような叫び声ではなかった。醜い。聞きたくもない。

『なのは、準備ＯＫだ！！』
『うん、了解だよ！！』

短刀は勿体無いがそのまま戦闘機人に刺したまま離れる。このまま此処にいたらなのはの魔砲の巻き添えだ。

「じゃぁな、戦闘機人。いい夢見ろよ」

それだけ言い残して俺は高速移動でその場を離れた。出来るだけ遠くまで。影響のない場所へ。

なのはＳｉｄｅ

お兄ちゃんから念話が来た。動きを捉えたよ。

「見せてあげる。ブラスターモードのバリエーション！！！」

やや斜め下。お兄ちゃんの居た反応の場所へと。
ひとつは動かない。もうひとつは離れていった。多分離れたのはお兄ちゃんだろう。すごい速さで動いてる。

ブラスターモード４へ移行。マガジンベルトに変更されたカートリッジシステムはジャラジャラとその弾丸をリロードしていく。
その数２５５発分。恐らく私の魔力の限界。完全にリミッターを外して限界突破したらもっとだせるってミラ君は言ってたけどヴィヴィオとの戦いがあったから今は無理だ。

「ブラスターモード４――――ディバイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイン」

チャージ。チャージ。充電。充填。周囲の魔力を掻き集める。

収束系魔導師の真骨頂。自分の体内を通さずに周囲の魔力を掻き集めて扱う最上級技能(エクストラスキル)。

凝縮。圧縮。超圧縮。溜め込んだ魔力をレイジングハートの先端に集めていく。

「いくよ、レイジングハート」

『Ｙｅｓ．Ｍｙ，Ｍａｓｔｅｒ』

私とレイジングハートの思いが重なる。そして――――

「バスタあああ！！」

桃色の光が一直線に壁に向かっていく。一気に押し出された魔砲は

壁を突き破りそして逃げられないクアットロを包み込み、ゆりかごを貫通して外へと出て行った。
地面へと突き刺さるバスターは地面を削り取って陸地を変化させていく。

――――――それは外で戦う武装隊に一抹の恐怖を与えたのは別の話――――――

魔力を一気に放ったせいで拾うが一気に襲ってきた。
レイジングハートを文字通り杖代わりにしながらヴィヴィオの元へ。

「ヴィヴィオ・・・おまたせ」

視線を向けるともうバインドは残り少なくなっていた。
此処までバインドを解くなんて。もう時間がない。

ヴィヴィオを操っていた戦闘機人は倒した。あとはヴィヴィオを元に戻すだけ。
方法は・・・・どうするべきか。

『ｍａｓｔｅｒ。魔力ダメージによる回復方法があります。だっもとでもやってみてはいかがでしょう』
「うん・・・そうだね、やらないよりもやって後悔だ」

あの時やっておけば、なんていうやらずに後悔するよりもまだいい。
行動してダメだったならまだ諦めがつく。
諦め・・・・・？諦めるの？
違うよ。ヴィヴィオを救うんだ。この命に代えても。

「ヴィヴィオ。ちょっと痛いけど我慢してね」

「うん。大丈夫だよ。だてなのはママだもん」
「あは。いい子だね」

簡単にだけどヴィヴィオに説明。魔力ダメージで周りの魔力を打ち消すんだ、って。
伝えた一瞬だけ不安な顔をしたけどまっすぐ私の目を見る。覚悟を決めた目だ。

さぁ、これが最後の一撃だ。

「いくよ――――ヴィヴィオ」

ティアナＳｉｄｅ

シャマル先生の治療が終わってからアースラに移動した私とスバル。
スバルの方はザフィーラが助けに来たみたい。あの地面を走る牙はすごかったわね。
今はもうゆりかごの中の戦闘のみになってきてる。空戦武装隊が周囲を飛びながらガジェットをつぶしてくれてる。
その指示は――――――ファントム隊？

アースラの中腹を展開させてゆりかごの横につける。
此処から一気に突っ込んで内部へ侵入する。
そういえばさっき多分なのはさんの魔砲が出てきたんですけど。大丈夫ですか？

「ティア、ウィングロードでゆりかごにつなげるからまっすぐバイクで突っ込んで！」
「おっけー了解！やってやろうじゃない！」

アースラの中腹にある倉庫の扉を開けるとゆりかごが見えた。
其処にまっすぐ行けば突っ込める。あとはゆりかごの壁に穴を開けるだけ。

でもどうやってあけるんだろう。

「準備は出来たか？」

すぐ後ろから声がしたのは聞き知った声。兄であるティーダの声。

「にい、さん？」
「あぁ、そうだよ。お前の兄さんだよ」

兄さんは黒い執務官の服を着て立っていた。その脇には青い制服の――――ヴァイスさん？

「ヴァイスさん！？なんでここに！？怪我はもういいんですか！？」

「おうよ。ミラージュの旦那とシャマル先生が治してくれてな。もうピンピンだ」

ヴァイスさんの肩にはアサルトライフル型のデバイスがあった。

「さて、んじゃぁ若モンの進む道を開けるためにいっちょ頑張るか、ティーダ」

「無理スンナよ？おまえさっきの撃墜数で負けただろ？」

「だー！ありゃ前線が進んでいったから届かなかったんだよ！第一おまえなんでハンドガンで２５ｋｍ以上離れた敵にヘッドショットできるんだよ！！」

「んー・・・・実力？」

「あーもう！きにくわねぇ！後で酒おごれ！」

なんだろう。すごく仲が良い。

「兄さん。ヴァイスさんって・・・・」

「ん。昔の相棒だよ。俺が執務官候補になる前の」

「そういうこった。現ヘリパイだけどな。昔は射撃系エースっていやぁオレのことだったんだぜ。今は高町隊長にエースの座は明け渡しちまったが」

なんとう過去の話だ。そんなの聞いたことなかったわ。

「まぁ話も後だ。今は仕事を片付けようか」

ティーダ兄さんがそういった後に言葉が終わった直後に二人が外に向かって射撃した。
綺麗に空戦ガジェットにヘッドショットを決めた。なんだこの精度。

「回りは気にすんな。俺たちが全部落とすからおまえたちは高町隊長たちを助けに行って来い」
「「――――――はい！！」」

スバルがウィングロードを展開する。アースラからゆりかごまでの橋が出来上がる。
それを消しにガジェット達が群がる。其処にヘッドショット。繰り返し。

「いくわよ、しっかりつかまってなさい！」

バイクをフルスロットルでふかして発進する。ゆりかごの壁にはまだ穴はない。
真ん中まで来た所でゆりかごの壁に爆風と後に穴があいた。後ろからの射撃による攻撃。
その穴目掛けて私は走り出す。

ゆりかごに入ればあとは走るだけ。大きな通路まで出て走る。

「なんだかガジェットの残骸が転がってるね」
「多分、中に入った潜入組がやったんでしょ。さ、もっと奥までいくわよ」

なのはＳｉｄｅ

くぼみの中でヴィヴィオがバインドされている。

「ヴィヴィオ・・・今助けるからね」

「うん。大丈夫だよ。なのはママ・・・私ね、なのはママのこと、好きだから・・・」

「嬉しいな。絶対助けるからね。約束だ」

約束は護る。だからこそ。

「ブラスタービット！展開！」

４つのブラスタービットを展開させて周囲に飛ばす。そしてレイジングハートをヴィヴィオに向ける。

自分をママと呼ぶ子供にデバイスを向けないといけないなんて、ね。

なんとも悪いことだ。

「レイジングハート、非殺傷設定。全力全開」

『Ｙｅｓ』

大きく息を吸って。吐いた。深呼吸してから。

「いくよ。ブラスター４。スターライト――――――――――――――――

――――――――――――――――ブレイカー！！！！！！！！！！！！！！」

レイジングハートから。そしてブラスタービットから。周囲の魔力を集めた星の光が一点に降り注ぐ。
それは星を砕く一撃。桃色の光が玉座の間を包み込んだ。

徐々に光は終息していく。星の光が降り注いだ一点には小さな子供が倒れていた。

「ヴィヴィオ・・・・・」

構えは解かない。まだレイジングハートを向けたままだ。
ゆっくりと。ヴィヴィオは動く。動いた。
非殺傷設定とはいえ魔力ダメージだけを徹したわけだ。完全にダメージがないわけではない。

「だいじょうぶ、だよ・・・・ママ・・・・わたし、一人で立てる、よ・・・・」

ふらふらになってるけど。何とか立ち上がる。私は無意識に駆け下りて、ヴィヴィオを抱きしめた。

「ごめんね。ごめんねヴィヴィオ。悪いママでごめんね・・・」
「ううん・・・なのはママはいいママだよ。だって・・・ヴィヴィオを助けてくれたもん」

私たちは二人、泣いていた。暖かい涙が頬を伝うのを感じた。

「なのはちゃん！」
「はやてちゃん！？」

あれ？はやてちゃんなんか独自に動くって言ってたのってこういうこと？
ヴィータちゃんも背負ってるし。

「そっちは何とかなったみたいやね」
「ん。なんとかね」
「途中どっかんどっかんゆりかごゆれてたんはなのはちゃんやろぉ思たけどあたりみたいやな」

周りを見てはやてちゃんが言う。なんだかなー。やるせない。
泣いたままヴィヴィオが気絶してる。急激な体の変化と魔力使用で疲れたみたいだね。

「んじゃ、あとはこのまま脱出やな。いける？」
「うん。飛んで帰るくらいの魔力はまだあるよ」

周りの魔力を集めればなんとかなるかな。はやてちゃんもヴィータちゃんを背負ってるからあんまり早く飛べないかもだけど。

『聖王の器の確認が不可能。聖王の器の確認が不可能。これよりスリープモードに入りオートパイロットモード併用に入ります。所定の位置で待機ＡＭＦ起動開始』

「なんなん！？なんや！？」
「ＡＭＦが起動した？聖王の反応がなくなったから？！」

ヴィヴィオが聖王でなくなったからゆりかごが自動モードに入っちゃったのかも。だとしたら大変だ。

「ＡＭＦが起動したなら――――――って」

ＡＭＦが起動した証明としてバリアジャケットが消滅した。ＡＭＦ内の魔力構築は全て解除される。

これで空も飛べないか。

「あかんな。結構中枢におるから走ってもかなりの時間がかかる。外にはクロノ君たちが艦船率いてまっとる。

ゆりかごが衛星圏までいくまえにアルカンシェルでドカン、てのが作戦内容なんよ」

「だったらその前に出なきゃだね」

「諦めへんわ。まだ、な」

「とーぜん！」

だって不屈のエースだもんね！絶対諦めないよ。何があっても。

スバルＳｉｄｅ

大通路を走ってると目の前に大きな扉を見つけた。

「スバル！」

となりでバイクで走るティアが心配な声を向けてきた。

うん、大丈夫だよ。こういうときの為にギン姉から預かってるのがあるんだ。

「大丈夫、突っ切るよ！」

「ＡＭＦが発生してるからきをつけなさい！」

「大丈夫だってば。戦闘機人モードでならやれる！」

通常の、近代ベルカ式ならきっとダメだろうけど。このゆりかごの中でなら戦闘機人モードで動けるはず。

「ギン姉から借り受けたブリッツキャリバー。力を貸して。母さんみたいに。この一瞬だけでもっ！！」

左手で握るのはギン姉の愛用しているブリッツキャリバーの待機モードデバイス。

ブリッツは私の心に答えてくれるように左手に装着してくれた。

それを両拳あわせるとリボルバーナックルに変化した。

「いくよ、ＩＳ振動破砕！！！」

私のＩＳで振動した両拳が扉を砕いた。

扉の向こうは玉座の間だった。奥の方に立派ないすがあった。そして激しい戦闘の形跡。

その中央になのはさんと八神部隊長がいた。背中にはヴィータ副隊長とヴィヴィオを背負って。

「救助に来ました！すぐ脱出します！！」

なのはさんと八神部隊長。あと、下層にいるという戦闘機人を連れて脱出した。

内部に入っていた潜入隊はＡＭＦが発動する前に脱出していたようだ。

ミラＳｉｄｅ

「脱出したか」

短く俺はつぶやいた。

「そのようですね。こちらも片付きました」

「すまないな。雑務だった」

「いえ。マスターを護るのはサーヴァントの第一使命でもありますから」

セイバーが微笑んで答えた。周囲にはガジェットの残骸が積み上げられている。

いくつかモニタウィンドウを開いている。様々な戦闘場所の映像が映し出されていた。

「ゆりかごはオートモードに入った。このまま大気圏を越えれば手

が出しにくいな」
「ですね。クロノ提督たちはアルカンシェルの一斉砲撃を唱えてますが」
「それでいいなら別にいいけどな。俺の出番がなかったわけだが」
「それはそれでいいのではないでしょうか。無駄な力です」
それもそうだ。だけど、これで終わらない気がする。
「まぁ、安全策をとるか」
モニタのひとつを引っ張ってくる。其処にはクロノが映し出される。
「クロノ提督。ミラージュだ」
「あぁ、久しいな。君もこの戦場にいるのか？」
「あぁ、いる。だから、オレの一撃を当てて無理なら実行してくれないか。お前達の策を」
「おまえ・・・まだやるつもりか」
「多分、これで終わる。終わらなかったらゆりかごにとどめをさしてくれ」
申告はした。
「とりあえず半径１００ｋｍほど離れててくれ」
「随分と離れるな。アルカンシェルですら半径５０ｋｍだぞ」
「本気で潰すからな。そのくらいは安全圏でとっただけだよ」
溜息の後にクロノは渋々承諾してくれた。本当にありがたいね元上司で同僚は。
「じゃぁセイバー。まだ頼む。俺を守っててくれ。我が剣よ」

「承知しました。汝が剣は我が手に」

クロノの率いた艦船が離脱していく。ちゃんと言う事聞いてくれたんだな。あれだけのことで信用してくれるのかおまえは。

「クロノの信用のためにも落とさないとな」

右手を空へと向ける。そこに魔力を篭めていく。ほぼ全力の魔力だ。

「俺にはオリジナルの攻撃がなかった。全てがあの神にもらった力だけを駆使して生きてきた」

だから俺は。

「俺専用のオリジナルを持たないコピーでしかなかった。それが転生者の欠点だった」

だけど気付いた。

「もう一人の転生者、シャックスに出会い俺は気付いた。オリジナルの魔法を作ればいい、と」

魔力は充分集まった。

「だから、これからが俺の本当の始まりだ。コピーじゃない、オリジナルとしての」

左手を右手首に添える。

「いくぞ、ゆりかご。お前を今、還す――――――――――――」

「――――――――神音（カノン）――――――――」

祝詞と共に魔力は撃ち放たれる。それは漆黒。黒い魔力がゆりかごを包み込んでしまうほどの太さで。
魔力に包まれたゆりかごは一瞬で空へと消えていく。

――――空には。幾筋もの次元震が生み出されては消えていった。

リンネＳｉｄｅ

「あっはっはっは。やっぱりすごいね幻影くん！いやミラージュ！君の力、実に面白いね！！」

時空管理局最奥部。評議会のいるもっと奥。

そこに僕は一人だけで大きなモニターに映し出される一人の男を見ていた。
空に消える黒い砲撃を見て僕は大歓喜だよ。

「幻影、か。その名前の通り、幻になっちゃいそうなくらいに儚いね君は。その力が神に与えられたものだって事を認識したのなら――――」

「その力すら君には過ぎた玩具だよ」

第百十一話　約束を――――

ミラＳｉｄｅ

機動六課に来る前に自己の能力を封印して鍛え上げた技。
カミナルオト。神音。想像は出来ていたけどまさかここまで成るとは思わなかった。
今までずっと借りた力だった分、オリジナルで編み出そうとした結果出来上がった技。

初めて使ってみたがスターライトブレイカーよりも凶悪になってしまった。
うん、これは使わないようにしよう。ゆりかごが一瞬で蒸発消滅とかやりすぎた。
中に誰もいなかったのが幸運だったな。

「マスターの魔力からすればあのくらいは出来ると思ってましたが実際見るととんでもないですね」
「だなぁ。俺もびっくりしたわ」

周囲の状況を見つつ調べているとアースラのはやてと、艦隊のクロノから同時に通信が入る。

「こらぁー！！！危なかったやんけ！ちょっとアースラの先っちょ掠った！掠った！」
「危ないな君は！何を考えてるんだ！ていうか歴史的財産を消滅とか何してるんだ！」

よく見たらアースラの先端が掠ってたのかちょっとだけ壊れてた。

あと、衝撃が艦隊の方にも流れてたようで足並みが狂ってるのが見える。
よく落ちなかったなぁ。

「マスター。ガジェットの動きが止まりました」
「あぁ、ゆりかごを落とせば操ってるのがいなくなるんだからそりゃそうだろうなぁ。多分、あの戦闘機人の誰かが指令役だったとおもうが」
「ゆりかごから連れ出してきた二名の戦闘機人ですね。内部調査班の話では茶髪のほうではなく眼鏡の方らしいですね」

遠くの方でバインドに掛けられて捕縛されてるクアットロとディエチがいるのが見えた。
多分、通常の視力では無理だろう。魔力で千里眼を使ってるのでギリギリ見える程度だ。
アーチャーならきっともっと鮮明に見えるんだろうけど。

「ゆりかごは撃墜しました。エリオとキャロの方も終了ですね。ティアナとスバルも前線アースラに収容されてます。ディアーチェらは指揮系統ロングアーチにて。
高町八神両名もゆりかごから帰還。スターズ０２、ヴィータ副隊長が負傷との事です」
「フェイトの方も終わったミタイダシナ。スカリエッティを逮捕したと通達が来てる。アーチャーも一緒にいるらしい。あとは教会の方の監察官とシスターだ」

大体こんなもんか。あとは・・・・・・。

「マスター。シグナム副隊長を忘れてます」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あぁっ！？」

あの働いたら負けでござる侍め、何処で何やってんだ!?

「何処だ!?何処にいる!?シグナあああああああああああっム!!!!!!!!!!」」

コンソールウィンドウを開いて探し出す。次々に乱立して現れてはすぐに消していく。

「いた!いたぞ!地上本部だ」

シグナムの姿を捕まえたウィンドウがポイントを表示する。

地上本部内。其処にいる。

「仕事してないと思ったらちゃんと仕事してるじゃないか」

「貴方はシグナムを何だと思ってたんですか」

「・・・・働いたら負けでござる侍?」

「後で報告しておきましょう。録音完了です」

「ちょ!?」

最近セイバーがなんか冷たいです。あれか。たまにギルガメッシュと仕事組ませてたからか。

「そういうわけではありませんが同じ剣士として気にかけていただけですし」

「出会い頭早々に叩き潰した記憶があるが」

「あれは貴方とのユニゾンによるものですからノーカンです」

モード・リリィのユニゾン。モード変化のユニゾンの練習台、といったらあいつの誇りに傷をつけてしまうんだろうけどな。

だがシグナムはあの戦いで更なる上を目指せることを知った。それはいいことだと思ってる。

「フェイト執務官からも通信が来てますが」
「まわしてくれ」

目の前に大きなウィンドウが表示された。

「ミラ！無事？」
「あぁ。セイバーが傍に居るからな。それにこっちはもう片付いたぞ。そっちはどうだ？」
「今、エリオとキャロがこっちに向かってきてるよ。スカリエッティも逮捕した。その参謀と見える戦闘機人と戦闘型三名も」

なんだ。結構ハードじゃないか。スカリエッティ本人と戦闘機人４名の捕縛。

「エリオとキャロも頑張ってたからな。最愛の家族のために。ちゃんと労えよ？」
「うん。わかってるよ。そっちも無理しないでね」
「わかってるよ。アーチャー、警護は頼むぞ」
「了解した。大船に乗った気持ちでいたまえ」

あとはシグナムのフォローを出すだけか。

「クロノ。事後は任せていいか？俺はまだ動かないといけないんだが」
「ん？まだ何かあるのか。全く君は何時も何かしら動いてるな。じゃぁ此処はあとは僕らがやっておくよ。はやてたちもいるからね」

クロノがこっちに降りてくるのを待ってからこの場の引継ぎを開始。
ヴィータやなのはは治療しつつの同時作業になる。
はやては――――

「わたしもついてくよ」
「特に何もないぞ？シグナムのところに良くだけだし」
「シグナムは私の大事な家族や。それ以外に理由が必要か？」
「いや・・・・ないな。ならついてきてくれ」

にへら、と笑うはやてが傍についてくる。セイバーが一歩下がって場所を空ける。
そんなセイバーに軽く会釈してから腕にしがみつく。

「なんだ・・・・？」
「いやぁ、前ならついてこい！とか言うたやん？でも今はついてきてくれ、やなんてなぁ？やっぱ変わったなぁ、って」
「・・・・そんなに変わったかな？」
「変わったよ。昔よりもなんかこう・・・・棘がないっちゅーか」
「よくわかんねぇ」
「体裁で喋るんやなくて普通に喋ってるところとか。自然体でおるなぁって見える。なんでやろぉねぇ？」
「ん・・・・」

横目でチラリとはやてを見てから歩を進める。

「ほら、いくぞ。レジアス中将のところにいくからな。却下なしだ」
「あのゴウツク親父のトコかー。シグナムも大変なところにおるなぁ」
「ちなみに一番激化するかもしれない場所だ」
「なら早くいかんと」

スキマは使えない。なら飛んでいくしかないか。

「マスター。津名魅でならすぐ到着できるかと」

「あぁ、そうか。津名魅の航行だったら地上本部まで跳べるな」

津名魅は次元を跳べる。だからこその次元世界航行旗艦なわけだし。

元々次元航行部隊の戦艦だしな。珍しくもないだろ。

恭也さんに連絡して津名魅で集合ということで津名魅へと向かう。

フェイトＳｉｄｅ

アーチャーが警護についてくれるというのでこのアジトの奥にあるという実験体にされている被害者たちの保護に向かう。

其処には恐らくスバルやギンガのお母さんも安置されてるはず。それとキャロとエリオの闘ったっていう召喚師の母親も。

奥まで進むと研究所があった。ヴェロッサの希少技能、無限の猟犬が数匹残ってた。
猟犬が奥へと誘う。アーチャーさんと顔を見合わせると行こう、って事になって猟犬の後ろをついていく。

『フェイトさん。聞こえるかい？』
「あ、ヴェロッサ、だよね。このワンちゃんたちは」
『うん。さっきそこで戦闘機人を一人捕縛してね。その奥を調査してたんだがいくつかポッドを見つけたよ。其処にはまだ生きてる検体が数名残ってる。
で、僕の無限の猟犬ではそのポッドを運ぶ事が出来ない』
「じゃぁ私とアーチャーで運ぶよ。道案内お願いできるかな」
『ソレは任せてくれ。ほぼこのアジト内は掌握してるよ。ただ、崩落してる部分があるから気をつけて』
「ん、了解だよ」

念話通信はヴェロッサからだった。それはアーチャーも聞こえていたらしい。
あくまでも裏方なんですね。

「カレは君に声をかけていたからね。私にも聞こえるようにオープンにしてはいたが」
「照れ屋なんですね。ヴェロッサも、アーチャーも」

研究スペースの奥に行くと生体ポッドがいくつか並んでいた。其処にはまだ生体反応のあるものがいくつかあった。
その・・・うん。生まれたままの姿で、だね。

「フェイト。私は他の場所を調べてくるから此処を頼む」
「あ、うん。わかったよ」

あ・・・アーチャーってば気を利かせたのかな。うっすらと姿を消していったけど。
ま、まぁいいや。とにかく今は此処からだそう。それと着替えだね。

アーチャーＳｉｄｅ

ふむ。私もまだまだだな。だがまぁ仕方ないだろう。あとはフェイトの方が終わったあたりで出て行けばいい。
ソレまでは独自で動かせてもらおう。

「ふむ・・・研究者然としていたみたいだな。私には全くかかわりのないものばかりだ」

せめて剣とか武具があれば面白いんだがな。そういう場所じゃないか。
今度色々な次元世界の王国とかに行って見せてもらおうか。

所々に猟犬がいるのはなんともシュールだな。何があるか監査官は気になるところか。

「さて・・・そろそろかね」

フェイトのほうへ戻ろうとした時、内部が激しく揺れだした。

「何事だっ！」
『どうやら主がいなくなった為の手段のようだね。自爆する感じに』
「冷静な分析だな。私は別に大丈夫だがフェイトの方が気になる」

一足飛びでフェイトの元へと戻ると検体の救出は既に終わっていたようだ。

「あ、アーチャー。今呼びに行こうと思ったら」
「あぁ。どうやら監査官が言うには自爆するらしい。さっさと此処を出るぞ」
「自爆っ!?う、うんっ!!」
「案内しろ猟犬」
『言わずもがなだね。あぁ、フェイト執務官のお子さんは保護してるよ』

エリオとキャロが到着したか。だったら無事に連れ出さないといけないな。

「でもけんた・・・この人たちは」
「私が担ぐ。一人頼む。いけるか?」
「ん・・・・・なんとかっ」

今言いなおしたな。恐らく検体と言おうとしたんだろうが、同じ境遇が口を噤んだな。
だがそんな事はどうでもいい。フェイトが一人を背負って動けるか確認してから頷いた。
私は肩に二人。小脇に一人抱えてから走り出す。

研究スペースを抜けていく。先頭は猟犬だ。
中々の速度だ。だが・・・なんだ。少しばかり面倒だ。

「止まれ。猟犬、外までどのくらいだ?」
『そうだね。今までの速度で言うなら10分位ってところかな。何

せ今いる場所はかなりの最奥だ』
「もし、だ。仮に仮定の話だとしてだ」
『うん？』
「一直線に道があったらどのくらい短縮できる？」

揺れが続く中で私は一つの手を浮かばせた。嘗て私よりも幼い彼女がやった事だ。
ならば私に出来ないはずがない。

『そうだね・・・2分だ』
「2分の短縮か？」
『いや――――外まで2分だ』
「それが聞ければ充分だ。大体の場所はわかるな？一直線上に重ならないようにしておけ」
『まさか君は・・・いや、君もあの幻影の仲間だっけね。わかった。角度はこれだ。演算を出したから参考にしてくれ』
「助かる。では下がっていてくれ」

猟犬から演算された角度が出された。そしてその厚さも。
いくらなんでも壁だけが硬いだけ。ソレを抜ければ山間部を切り抜いた場所など造作もない。
担いでいた被害者を一旦おろしてから前に出る。

「フェイト。下がっててくれ。少々手荒な手を使う」
「あ・・・まさか壁抜き？」
「まぁそんなところだ」

左手に弓を投影。ずっと使ってきた愛用の弓だ。黒く厳ついソレは弦がない。それはフェイトにも見えたようだ。
だが口には出さずに見守っている。

「では・・・これだな。穿つにはこれほど似合うものはない」

右手に投影されるのは一本の剣。だがそれは歪に曲がっていた。

「――――我が骨子は捩れ狂う――――」

祝詞の後に剣、刃は捩れてドリルのように変化した。更に強化をつける。

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）――――――！！！」

限界まで引き絞られた偽・螺旋剣は私の手を離れると勢いよく飛び出していく。

理想の角度と射線を描いて飛んで行く。

壁にぶつかればそのまま回転して突き進んでいく。

「まだだ。それだけで終わるわけがない。さぁ――――いくぞ。――Ｉａｍｔｈｅｂｏｒｎｏｆｍｙｓｏｗｒｄ《体は剣で出来ている》」

強い言葉が紡がれる。偽・螺旋剣のえぐっていった道はヒトが通れるほどの穴を開けた。

ふむ。まぁいいだろう。もう少し開けたかったがね。

「さて。崩れる前に行こうか。全力で走るか飛べば2分を切れると思う」

「はい！」

おろしていた被害者をまた担いで私は走り出す。フェイトは・・・

飛んでるな。飛行は難しいんだ。出来るけど。
進んでいくとまだ偽・螺旋剣がえぐっている最中だった。

「フェイト。目を塞げ」
「え？」
「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

フェイトが目を閉じたのを確認してから射出した剣郡を爆散させる。
次々に巻き起こる爆風が身を押していくのを堪えながら更に進む。

「巻き込まれたらおいていくぞ」
「ついていきますよ。どこまでもね。とりあえずはその強さの背中を追いかけてますから」

ふん。よく言う。だったら追いついてくるがいい。
どんどん射出していく速度を上げていくとやがて光が注してきた。
一際大きな音をだして外へと飛び出した。

「フェイトさん！！」

声変わりのしていない少年の声が聞こえる。どうやら無事に帰ってきたようだ。
声の主はエリオで、ずっと心配で此処にいたという。

ともあれ、無事にこっちの任務は終了した。戦闘機人三名とジェイル＝スカリエッティ本人の捕縛。恐らく此処が一番ではなかったかと思われる。
何せ私が手を出したのだから。
フェイトに後を引き継がせて私はマスターに報告の連絡を入れる。
丁度マスターの方もゆりかご撃墜を成したようだ。

これで終わりか？

シグナムＳｉｄｅ

管理局地上本部。何故此処に居るのかと言えば説明が長くなる。
地上本部警護の任務についていた私は迫り来る気配に対して戦闘体勢を取っていた。
リィンフォースとのユニゾンで万全で望んだのだがそれも敵わずに押し通されてしまった。

その敵の名はゼスト。ゼスト＝グランカイツ。
嘗て時空管理局でエースの名を持っていた傑だ。
ゼストは私の剣を抜けて本部へと降りてしまった。
恐らく向かう先はレジアス中将の部屋か。

案の定、途中にゼストの連れていた融合騎が立ちはだかっている。
結界まで張って準備のいいことだ。

「ちょっとだけ・・・もうちょっとだけ時間をくれよ。やっと旦那

はたどりつけたんだ。自分を追いやってしまったっていう過ちを聞くために閉ざされた道を」
「其処をどけ。私たちは何も必倒するために此処に来たのではない。まずは話しあおう。私達のすれ違いの思いを正すために」

リィンが手を差し伸べる。あちらの融合騎も戸惑いながらも躊躇しているのがわかる。あぁ、表情でわかるぞ。

「リィンはリィンフォースツヴァイといいますです。貴方は・・・・？」
「あたしはアギト・・・烈火の剣精だ」
「アギト・・・私たちは同じ融合騎です。きっと分かり合えるですよ。話し合って分かり合わなければ何も判らないままです」
「・・・・・・・・・・」

アギトは黙ったままだ。なにかまだ彼女の中にはあるのかもしれない。

「アギト。まずはリィンと話をするといい。同じ仲間なのだからきっと・・・・・」
「本当に・・・分かり合える、のか？」
「話し合う。まずはそれからですよ」

リィンはずっと手を差し伸べたままだ。その手を引くことはない。アギトは――――その手を戸惑いながら触れた。

「結界を解いてくれ。ゼスト氏には聞かなければならないことがある、何、荒事はしない。約束しよう」
「本当、だな？」
「約束、といった」

「・・・・・わかったよ。旦那をよろしく頼む」

ガラスのような結界を外してもらい、私は先に進む。此処はリィンに任せたほうがいいだろう。

「リィン、任せた」

「はいですよ！」

向かうはレジアス中将の部屋。一気にブーストで駆け飛ぶ。

リィンＳｉｄｅ

目の前にいるのは同じ融合騎。リィンと同じ作られた存在です？

「さぁ話をしましょうですよ」

「何を・・・話せばいいんだ？」

「そうですね。まずは――――」

ゆっくりと。お互いのことを話していきましょうです。

シグナムＳｉｄｅ

アギトに通行規制をかけられた場所からレジアス中将の部屋はすぐそこだった。
扉は開いていて、中から話し声が聞こえる。

「儂が・・・悪いんだ。全て押し通してしまおうとしてしまったばかりに・・・お前の隊には・・・・・・・」
「それがお前の正義か、レジアス！！！！」

ゼストの声が響いた。

「中、か・・・二人だけ、なのか？」

静かに中を覗くと二人の男が話し合っていた。

「お前は俺を売ったのか」
「違う！儂は・・・・っ！！」
「ならば答えろレジアス！何故――――――俺たちをあの男に売ったのだ！！！」
「・・・・・・あのときの儂は・・・それが正義だと思っていた。戦闘機人を使えば人員も割ける。危険な任務もこなせる。しかし、色々と面倒があったのだ。素体となるべきモノが」
「それを俺たちに選んだのか」
「儂は・・・ずっと反対していたんだ！ゼスト隊を手放すことなど、出来るわけがなかった！だが・・・・評議会は儂を通さずに強制的にお前たちに指令を出した・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」

入り口の影。其処に隠れるように立っている。今は割り込むべきで

はない。

「儂が気付いた時には既に任務に出ていたよ。止めたかった。後悔が残った。だから・・・・」

「――――アインヘリアル。あんな玩具に手を出したのか？」

「あれがあれば純粋魔導師の手を煩わすこともなくなる。より安全な道が開けると信じていたのだ」

「だが、あれは意味のないものとなった」

話を聞いているとリィンとアギトがきた。話は終わったようだ。中の会話を聞くように、と口に指を当てて静寂を促す。そうすれば二人ともソレを理解してコクリと頷いた。

「儂は後悔していたよ。お前がいなくなって、クィントやメガーヌまでが死んだ。儂の信じた正義はきえたのだ」

「クィントもメガーヌも生きているぞレジアス。俺はそのためにスカリエッティに加担していた。存命、延命の処置のために。やつでなければ死んでいた。そして、奴でなければ手を出せない

ようなこともされている。だから俺は敵対するしかなかったのだ」

其処まで聞くとアギトに視線を向ける。アギトはコク、と頷くだけだ。どうやらアギトにもそれは伝わっているようだ。

「ソレが聞けて安心した。お前は俺たちを売ったのではない、と。そう今理解した」

「ゼスト！儂はっ・・・・取り返しのつかないことを・・・・」

「もういい。真意は得た。ならお前はこれからどう生きるか考えろ。そしてこのテロも抑えてみせろ。俺の分まで――――」

「・・・・・ゼストッ！？」

レジアス中将の叫びの後、私は飛び出した。状況を知りたい故に。
アギトも同時に飛び出していた。いや、アギトは更に進んでいた。

「旦那ぁっ！！！もうっ・・・もうダメだよ！もう体が持たない！
無理しちゃダメだ！！！」
「アギト・・・すまないな。お前を近い席から連れ出したのにこん
なところでお別れだ」
「旦那・・・いいよ。いいよ、だって・・・・こんなに広い世界を
見せてくれた旦那が私は大好きだ」

アギトの頭をなでるゼスト。ゼストの胸に抱かれて泣きじゃくるア
ギト。
見れば足元から少しずつ炭化しているのか。うっすらと粒子のよう
にその身が消えていく。

「む・・・お前は」
「機動六課ライトニング分隊０２、シグナム二等空尉であります。
ゼスト＝グランカイツ氏を追い、此処へ参りました」
「そうか・・・だが・・・」
「はい。私は何も見ておりません。此処には誰もおりませんでした」
「すまないな。手間をかける」
「いえ・・・」

私の方に視線を向けてきたので頭を下げ、一礼をする。

「アギト。もう俺の体は長くない。お前のロードともなると俺とは
相性が悪かったな・・・」
「そんなことねぇよ！旦那が一番だったよ！」
「そう言うな。きっとお前の相性に合うのがいるはずだ・・・そこ

の騎士とかな」
「え・・・・・・」
視線が私に向いてきた。
「すまないが後を頼めるか」
「鋭意頑張ります」
クス、と笑った気がした。目礼で返すことになってしまったが仕方ない。
「レジアス。後を頼む。きっといい世界になることを信じてる」
「あぁ。そのうち逢いに行く。そのときの土産話を楽しみにしておれ」
「ふっ・・・すぐにくるもんじゃないぞ」
既にゼストの体は半分以上が粒子に変わっている。
「レリックウェポンの反動だ。かなり無茶をしてきたからな。これもスカリエッティの手の内なのだろう。だが後悔はない。もう、済んだからな」
「旦那！いやだよ！旦那ぁあああ！！！！」
「――――――――――――――――――――」
声にならない声が残ってゼストは消えた。

部屋に残ったアギト、レジアス中将、リィンと私はゼストの消えた場所をずっと見ていた。

「・・・・シグナム二尉。此処はもう構わんからあの娘・・・・八神はやてのところへ戻るといい。少しばかり・・・考えたい」
「・・・・了解しました」
「其処の融合騎も連れて行け。儂には必要ないのでな」
「・・・了解です」

アギトはまだその場で消えたゼストのために涙を流している。

「アギト・・・・」
「お前は嫌いだ。でもっ・・・旦那が夢見た世界をお前は見せてくれるのか？」
「あぁ・・・約束しよう。誰もが笑って暮らせる世界を私たちは作っていく、と」
「私はそれを見なくちゃいけない。もう見れない旦那の代わりにソレを見届けなくちゃいけない。だから――――――お前とロード契約をしてやる」
「いいのか？私で」
「あぁ・・・お前だから、いいんだ」

右手を差し出す。そうすればアギトも右手を出してくる。
それだけで全て理解できた。そして――――――

――――――――――――私は永遠の番を得た。

地上本部を出た私は空にいた。
地上本部を狙ってきたガジェットの残党が向かってきている事を知らされた私はアギトとの初ユニゾンをしている。
背中からは紫の炎の翼が三対六枚。

「何故かな・・・少しばかり、心が昂ぶっている」
「なんでだろうな・・私もだ」
「これから先、共に歩む私達の門出になる。準備はいいか?答えは聞いてない」
「なんかひでぇ!?こんな性格だったのかよ!?」

心外な。私は何も変わってないというのに。

「しかし・・・なんだお前の中。なんだか私以外に棲家にしてるのがいるんだが」
「あぁ・・・それは八竜だ。火炎系の幻獣とおもって良いぞ。ただし、手は出すなよ。凶暴なのがいるからな」

「ぅ・・・わかった。んじゃぁ、まずは景気づけの一撃だ。アレ、片付けるんだろ？」
「あぁ。手を、貸してくれ」
「ふん！べ、別にお前のためにやるんじゃねぇーよ！」
なんだこのアギト。ツンデレか？ツンデレなのか？
「向かってきてるのは空戦型ガジェットが５００。その程度なら訳ないな」
「おいおい・・・・豪気だねぇ。５００ってかなりだぜ？」
「私にはたいしたことない。何せ、一人じゃないのでな？」
「ぬっ・・・・くるぜ！！」
レヴァンティンを構える。それだけで炎熱系変換が起きた。融合騎たるアギトの力らしい。
「細かい演算はこっちでやるから、思いっきりやってくれ」
「ありがたい」
だったら。こっちは思いっきり振りぬくのみだ。
腰溜めにレヴァンティンを置いて一気に抜刀の軌道で振り抜く。
「――――紫龍一閃っっっ！！！！！！！！」
まだ遠くに居たガジェットが雲と一緒に真っ二つに割れていくのが見える。
その威力に私もアギトも驚きの顔しか出せなかった。
「こんなに威力が上がるのか・・・？」
「え・・・なんだよあの威力！？」

お互いに計算以上だったらしい。演算したのに驚くとかなんなんだ。まぁいいんだが。

「おいおい・・・なんだよ今の」

「随分とイメチェンしましたねシグナム」

振り抜いた一撃の余韻に浸っていると後ろから声がした。ミラージュとセイバーだ。

「お前達か・・・・」

「他の場所は全部終わってな。その通達と様子見に来たんだが。やるもんだな。ユニゾンしてるのはツヴァイじゃないな」

「む・・・見通されたか。先ほど契約したアギトだ。ゼストのところにいた・・・」

「あぁ。古代遺跡の融合騎か。話は聞いてるっていうかルーテシア方面のほうから通達が来てるからな。名前は知ってたよ」

『ルールーは無事なのか？』

「その声がアギトか。よろしくな。あぁ。今は魔力暴走の疲れで眠ってるだけだ。すぐおきるはずだよ」

『そっか・・・よかった』

全て終わった、と。他の場所のリザルトを聞きながらこっちの経緯を口頭説明する。

「そうか。ゼストは逝ったか」

「誇り高き騎士だった。その牙と魂は私の心に刻まれたと思う。プログラムでしかない、が」

「おい」

「・・・・ん？」

いきなりミラージュが怒った顔でこっちを睨んできた。

「プログラムなんていうんじゃねぇよ。お前は今此処に生きている。シャマルからも聞いてるんだろう?もう切り離された、って。今度もう一回言ってみろ。はやてが泣くぞ」

「・・・そう、だな。すまない」

「俺に謝るな。他にいるだろうが」

「あぁ・・・そうだな」

ふん。まさかこいつに言われるとはな。いつのまにか背も抜かれたし。全く・・・主はやても見る目が高い。

「事後処理したら帰るぞ。機動六課に。もう皆帰路についてるからな。アースラももうお役ごめんだ」

「あぁ、そういえば。出てきてるんだったな」

臨時的な司令室としてアースラを使っているんだったっけか。私はその前に任務で飛んだから見てないんだよな。

「アギトの今後も考えないとな」

『え・・・?』

「一応、今までの罪は消えないからな。なぁに、たいしたことはない。更生施設で数ヶ月のプログラムをこなすだけだ。他にもいるから安心しろ」

『そっか・・・うん。そうだな。罪は・・・償わないとだめだ』

「素直な性格で助かるよ」

そうだな。今までの罪は消えない。だからこそ償い続けるんだ。

？？？Ｓｉｄｅ

ＪＳ事件と称されたこの事件の終了後すぐに機動六課は再開された。
隊舎も同じ場所で元通りに戻されて。
臨時司令室とされたアースラはこの後数週をかけて解体。安全なパーツは新造艦に回され次世代を生きていくことになる。
負傷した局員も戻ってきた。主要だった面子も六課預かりになる。
聖王のＤＮＡを持つ人造魔導師ヴィヴィオ。彼女は高町なのはの養子として生きていく事を選ぶ。
５番以下のナンバーズ。ルーテシア。アギト。彼女らは臨海厚生施設にてカリキュラムを実施。数ヶ月も経てば出てこれるという。
スカリエッティ・ウーノ・ドゥーエ・トーレ・クアットロ・セッテは衛星上拘留所にて拘置。
レジアス＝ゲイズは柔和にＪＳ事件の事後処理に追われている。時折手伝いにミラージュ少将が顔を出しているらしい。

そして――――

静かな朝には訓練所から悲鳴が聞こえ。
陽光照らす昼には訓練所から悲鳴が聞こえ。
夜の帳下りた訓練所からは悲鳴が聞こえた。

概ね順調に入隊時に新人と呼ばれたストライカーは実力を伸ばしていく。
突出した能力を持つ存在を師に従え、突出した力を得ていく。

そして運用期間である一年を終え、其々の道を歩いていく。
リミッターを完全に外され開放された隊長陣とフォワード陣、更にイルジオンリッターの混成模擬戦が行われたりもした。

ティアナ＝ランスター二等陸士（入隊時）→執務官
幻術と砲撃系射撃系の腕を伸ばして更に執務官試験に満点合格。戦術戦略による殲滅戦を得意とし、指揮官としての実力も備えて現場を飛び回る。
その横には執務官補として共に歩んだフェイト＝T＝ハラオウン執務官、ティーダ＝ランスター執務官も立っていることがあるらしい。

スバル＝ナカジマ二等陸士（入隊時）→一等陸士
兼ねてより希望していた特別救助隊への推薦が決定。内面迷っていたが背中を押してくれた相棒が居たらしく、銀服を着ることを決意。
災害担当、突撃隊として前線で活躍しているところを時折雑誌に取り上げられている。

エリオ＝モンディアル三等陸士（入隊時）
キャロ＝ル＝ルシエ三等陸士（入隊時）
機動六課解体後、行き場所がなくなりかけたエリオをキャロが嘗て居た動物保護団体にスカウト。

ギンガ＝ナカジマ陸曹↓准尉
陸上警備隊第１０８部隊へと戻る。父である部隊長と共に現場を駆け回りつつ捜査官としても行動中。
時間のあるときは出来る限り厚生施設でナンバーズのカリキュラムを組んでいたり授業を行っている。

ヴァイス＝グランセニック陸曹長（入隊時）
射撃系魔導師として出戻り。その道のエースとしてティーダ執務官とコンビを組んでいる。
また、階級も陸曹長から機動六課終了時には三等陸尉にあげている。

フェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官
次元航行部隊に戻り、子供が関わる事件を中心に動き回りながら順調に養子を増やしている。
ミラージュに逢えないのが残念でならないらしい。

高町なのは教導官
古巣教導隊に戻り、他の部隊を教育中。昇進の声があったが辞退。
ヴィータを教導隊に誘ったりヴィヴィオを引き取ったり。

八神はやて二等陸佐
機動六課を解体してからは特に何処の部隊につくというわけでもなくミラージュの部屋にいたりする。
動く気はまだわいてこないらしいが、何かあればすぐに動く、との声。

ミラージュ＝ヴィジョン少将

ＪＳ事件でのことで昇進があったが多くの声で昇進は消失した。メインは執務官として行動を開始する。
また、個人部隊であるイルジオンリッターも通常運行で任務についている様子。

第百十二話　全てはこの時の為に

神Ｓｉｄｅ

ミラージュも中々の手腕を見せてくれるよね。イレギュラー対策はコレで万全になるのかな。
あんまり関与できないのが痛いけど。
だけど信用してるから彼のやるままに世界を、歴史を動かしてきたわけだし。
イレギュラー退治は今の彼の命題でもあるわけなんだよねぇ。とはいえ、イレギュラーってのが・・・・ねぇ。

「そう、うまくいくのかねぇ？」

僕だけのいつもの白い空間。誰もここにはこれないはず。
僕が選んだ存在でない限り。其処に声がしたのだ。気のせいか、と思いつつも周囲を見渡す。
誰も何もない。白い空間がずっと広がってるだけだ。

「おかしいかい？この空間に僕がいることが」

声からして女。僕っ子か。僕もまだあと数万年若ければグラっときたかな。

「おや。多少は脈アリだったみたいだね。その数万年が悔やまれるよ」
「さっきから心を読んでるみたいだよね。君は誰だい？」
「僕かい？僕はそうだね。輪廻の魔女と呼ばれていたよ。リンカ＝ネーション。それがこの体の真実の名前さ」

リンカ、と自分を呼んだ存在はふわふわと浮かんでいる。まるで僕のように。
白い空間に相反するような黒い服。そして磁器のように白い肌。

「そんでもってね。僕と君は――――――――――」

聞き取れなかった。この空間で。

僕は彼女に――――――

久しく得た事のない意識が消えていく中で――――――――――

――――――――――三日月のような笑みを浮かべる黒尽くめの女を見た。

ミラＳｉｄｅ

機動六課の運行期間が終了して一週間が経とうとしている。
六課最後の日の模擬戦からもう一週間。
最初に出会ったフォワード陣はヒヨコ以上にタマゴだった身が既に一人前として一人一人がストライカーにまで成長した。そのうち一人はエース候補だ。
嬉しいものだ。成長を見続け、見届けて。

しかしスカリエッティが自供した協力者の名前は聞けず仕舞いだった。
共謀者はまだいる。半年かけてもその足取りすら見つけられなかった。

何よりも今の管理局は混乱は少ないもののまだ続いている。
トップであった評議会の露呈。存在の暴露。そしてその遺失。

今は三提督がその椅子に座って指示を出している。
安定した状態になったら引退して後進に譲ると公言した。
過去の働きやらを鑑みて純粋魔導師一名。非血統魔導師から一名。
執務官から一名を選出するという事。
年齢やキャリアなどを見ずに全ての局員に好機を与えた判断だった。

そして今俺は本局の自分の執務室で仕事に追われている。
六課の時も思ったが、かなりの量の仕事をしているようだ。
何度かはやてにも心配されたっけな・・・。

「こうしてこの部屋で仕事をするのも久しぶりだな・・・・・」

椅子に凭れ背伸びをする。それだけで背筋が伸びて気持ちいい。
本気で仕事をしてると猫背になってるらしく、コレはシグナムにチェックされた。
戦闘系魔導師であるなら姿勢は大切だと念を押されたものだ。

部屋には一人だ。グレイル隊以外の他の部隊は既に任務に向かってたりする。
荒事専用だったり戦闘地域に行ってその制圧など。ＪＳ事件に関わった面子という事で臨時出向先では重宝されているようだ。

少しずつ元の生活に戻ってきている。
このとき俺は――――――イレギュラーのことをすっかり忘れていたんだ。

リンカＳｉｄｅ

今の僕は管理局の奥にある評議会の座にいる。
今の僕になら何処でも移動できる。だって全ての世界は僕の世界だから。

「さぁはじめよう。楽しいゲームのオワリを締めくくるハジマリを」

黒い服。黒いヒール。黒い外套。黒尽くめだ。
僕は黒が好き。混沌にも似た色だ。
何よりも――――輪廻の最中の色でもある。
それなら。この色しか僕には似合わない。あぁ、彼も黒尽くめだったね。実にいい色だと思うよ。

――――さぁ、始めよう。全ては此処に集結する。

「時空管理局”最高”評議会より告げる。評議会はここに終了した。三提督の老害どもよ、ご苦労であった。公言通り引退したまえよ」

全管理局。全局員へと強制通信されたその言葉は実に宜しく混沌を生み出した。
消失したはずの最高評議会が復活したというのだから。
皆、その座に就こうと躍起になっていたのに。
人の努力を踏みにじるのは実に面白いよね！

「僕が最高評議会の座に就いたリンカ＝ネーションだ。君達を正しく導こうと思う。まずはそうだね――――」

拡声器みたいなのを持って通信する。形は重要じゃない。性能が重要なのさ。
目的はささっとやってしまおう。だったらまずはあの幻影君にいってみようか。

「ミラージュ＝ヴィジョン少将を捕縛、拘束。逆らうなら全力で対処許可。全職員に告げる。これは最重要機構だよ。繰り返す――――」

彼を最初に見つけたのはスカリエッティの仮説研究所で。あの力は神の力だ。そして僕のよく知ってる神の力。
転生者独特の、シャックス＝アシュクレヴィオスにもあった雰囲気だ。
死を合間見た者の雰囲気。それがあった。
この世界にはありえないパワーバランスブレイカー。そんなものは突然変異か転生者くらいだ。
案の定。彼には見知った神の力があったわけだしね。
だからかな。まずは彼を無力化しよう。僕の目の前に来れば一気に吸収してしまおう。

「だって、彼。強いじゃない？あの強さはロストロギア認定だよ」
「魔力判定を見たかい？ＳＳＳの上、ＥＸの中で更にスペシャル。ＥＸＳだ」
「だから彼には封印されてもらわないと」
「じゃないといつ僕達の身に向けられるかわからないよ？」
「みんなも見たろ？ＪＳ事件で彼のした事、彼の力を」
「あんな力で狙われたら大変だね？」
「力を向けられる前に彼を捕まえちゃえば皆安泰に働けるかもよ？」
「彼をつれてきたらその局員には望みの席を用意しよう。何人でも」

「誰にも文句の言われない席だよ」
「そう、有能無能関係なく文句を言えない席だね」

畳み掛けるような言葉のマシンガンだ。さぁ、これで彼と。幻影と逢える。長かった。長かったよ。
特に意味はないけど僕の遊び場やらをなくしたお礼はしないとね？

そう、全てはこの時の為に。

はやてＳｉｄｅ

なんや今の通信は。最重要機構で回ってきたんがミラくんの捕縛、拘束て。
一緒におる守護騎士にもきとる。

「なんやこの指令。アホかっちゅーねん！」

通信記録を見てからデスクを強く叩く。リィンがビクッ！と身を震わせてるのを見てごめんなぁ、って謝る。

「しかし・・・ミラージュを拘束しないといけない理由など・・・・・」
「まぁ・・・揺り籠止めるんにちょぉ力使ってもぉたしな・・・・・・アースラの先端削りよったし」
「あれはっ・・・仕方ネーだろ！でないとみんなやられてた！」
「何か考えがあってのことかもしれませんけど・・・胡散臭いです

ね」
「この最高評議会というのが曲者だ。声からして女性、しかも一人」
皆の推測が飛ぶ。うん、大体は判ってきた。
ミラくんを落としいれようとしている罠か、それとも実際に本当にミラくんを封印しようとしている強硬派の仕業。
どっちにしろミラくんが危ない・・・・危ない？
あの力でなら大丈夫やろうと思ったけどソレが原因。
ならどうしたらいい？考えろ考えろ考えろ。
この最高評議会を騙ってるヤツに直接聞けばえぇ。
あとはミラくんにも話を聞いておけばえぇやろ。
「まずはミラくんに会う。で、話をしてからこの最高評議会とやらに会いに行く」
「了解」
守護騎士の声が重なる。不安にさせたらあかん。夜天の王ならどんと構えて不安を取り除く。
大丈夫やろ・・・なぁ、ミラくん。

ミラＳｉｄｅ

なんだこれは。
急な強制通信が流れたと思ったら俺の捕縛命令だと・・・！？

しかも”最高”評議会だとは・・・・。
評議会として機能し始めた三提督はどうするってんだよ・・・！

「くそっ・・・・何がどうなってる」

巡るめく思考は行ったり来たり。きちんとした情報がないからか判断つけにくい。
部屋にこもってるとはやてから速攻で通信が飛んできた。

『ミラくん無事か?!』

ぶつんっ。通信を強制的に切る。恐らく通信会話だと盗聴される可能性が高い。
だったら迂闊な事を言う前に切らないと。

「・・・・別に俺が悪いわけじゃないんだけどな」
「マスター。早速だが第一陣だ。どうすんだ?」
「適当にあしらっとけ。怪我はさせるなよ」
「戦闘はさせねぇでこういうときだけ俺かよ・・・たくやるせねぇよな」

なんていいながらランサーは部屋の外へと出て行った。
入り口で門番よろしく頼んでおく。

「恐らく俺の行動は見られてるな。だとしたら――――――」

と。うかつに喋るのも危険か?だとしたら・・・・何かしらで伝えるべきか。
霊体になれるサーヴァントに伝令してもらうか。

「アーチャー」

名前だけを口にして霊体で呼び出す。契約した俺にしか多分見えてない。

『・・・・・・』

『無言こえぇよ!兎も角はやてに伝言頼む。気にするなって』

『・・・・・了解した。フェイトのほうはいいのか?』

『あの子はきっと心配で他に相談してしまうことの可能性が高いからな。言わないでおく』

『・・・・・・マスターがそういうなら何も言うまいよ』

アーチャーの気配が消えた。伝令に行ってくれたようだな。

よし。これではやてのほうはいい。ツヴァイもいるんだ。俺に近しいからって言う杞憂があるが大丈夫だろう。

あとはどう転ぶかだな。

あの最高評議会ってやつに会ってみるのもいいかもしれないが・・・かなり危険な手だ。

いざとなったらスキマで逃げればいいだろうけど・・・・・なんだこの違和感と胸騒ぎは。

これからどうするか。それが問題だな。大人しくいくのも面倒が起こりそうだ。

全く・・・これならゆりかごを落とすんじゃなかったか。

はやてＳｉｄｅ

あかん。通信切りよった。何度かけても繋がらへん。強制切断か・・・。

「はやて・・・・」
「ん・・・大丈夫や。ミラくんならきっと大丈夫や。こんなん何かの間違いやろぉし」
「そうじゃなくてさ。はやての事だよ。顔色悪いよ。休んだほうがいいよ」
「ん・・・・・ありがとな。ヴィータは優しいなぁ」

ヴィータが不安そうな顔で覗いてきたんで頭を撫でてやる。擽ったそうに目を細めてるのがなんとも可愛ぇなぁ。

「しかし・・・色々と考える事があります。何故このタイミングでミラージュを捕縛しないといけないのか」
「そうね。あのゆりかごの事を考えたらすぐにでも判断が出そうなんだけど。まるでこの時期を待っていたかのようにも思えるわ」
「なんだよ。じゃぁミラージュを狙ってるのが最高評議会だってのかよ!」
「ヴィータ。あんまりうかつに物事言ったらあかんよ。まずは情報処理からや。シャマル、データを洗ってもらえるか?」
「はい。了解です」

シャマルが少し離れたコンソールに向かって打ち込みを始める。

「なんやあかんあぁ・・・・ミラくんのことになると余裕が出てきぃひんよ」
「それは仕方ないかと。何せ主はやての想い人なのですし。心を奪われる、というのはそういうことなのでしょう」
「改めてシグナムにそう言われると恥ずかしいなぁ。うん、その通

りなんやけど」

しかし、や。

「しかしシグナムにそう言われたんはなんかちょっとショックや。シグナムもそういうんが出来たんか？」

「なっ？！わ、わたしはっ・・・そんなのおりませんから！」

せやけどヴァイス曹長といい仲なのはわかっとるんよ？まぁ今はせっつく暇はあらへんからな。

「ん。とりあえず逢いにいこか。誰かついてきてくれへん？」

「んじゃ、あたしがいくよ！」

『その必要はない。あぁ、反応はしないでくれたまえ。恐らく監視がついているから』

いきなり念話でアーチャーさんから連絡が来た。なんなんや一体。

『マスターからの伝言だ。気にしないでいてくれ。今の接触は極力控えたい。だそうだ』

『ん・・・納得はせぇへんけど理解はした。多分、わたしがミラくんに逢ったらだめ、なんやね？』

『理解が速くて助かる。恐らくあの最高評議会とやらの通達はマスターを陥れる為の罠だ。それに付き合う必要はない。それよりも他の手を考えるといい』

他の手かぁ。何があるんやろ。でも此処でわたしの指揮官能力が試されるわけやな。

アーチャーさんからの念話はいつの間にかもう終わってた。

しかしミラくんを陥れるなんて何考えてんのかさっぱりわからんな、

最高評議会も。
でも上の言うことやし大人しく従う振りして見極めようか。

「はやて、はやく」
「ん。やっぱミラくんとこにはいかん。此処でみんな待機な？わたしは最高評議会に行ってみる」
「はやて！？危ないよ！！今皆殺気立ってミラージュを探してる。って言っても執務室にいるだろうけど。そんな中にはやてだけいかせられないよ」
「ありがとなヴィータ。でも大丈夫や。機動六課を経て私たちは一つずつ乗り越えてきた。せやから一人でも大丈夫。だって、心は繋がっとるやろ？」
「・・・・・・・はやてぇ・・」
「あまり主はやてを困らせるなヴィータ。主はやて、お気をつけて。一応は何があるか判らない状況になってるようですし」
「シグナムもありがとな。何かあれば連絡するよ」
「はい」

シグナムたちには待機していてもらう。すぐに連絡の取れるようにせなあかんな。
マズは知己の動きを観察しておこうか。

なのはＳｉｄｅ

「え・・・・・・なにこれ」

教導隊の訓練中。新兵器の開発チームに加わったり、部隊訓練に出たりしてた中で伝わってきた連絡に私は目を丸くする。

「ミラ君を捕縛するって、なんなのこれ」

『なのは！』

「フェイトちゃん！？」

次元航行部隊戻ったフェイトちゃんから通信がきた。フェイトちゃんも通信を見たらしい。それもそうか。

「全体通信だからね。フェイトちゃんも見てたかぁ」

『そんなに落ち着いて大丈夫なの！？』

「フェイトちゃんは心配性だからなぁ。きっと大丈夫だよ。はやてちゃんも動いてるだろうし・・・ほら」

『なのはちゃん、ちょぉえぇ？』

ほらね。ミラ君の事ではやてちゃんが動かないわけがない。同時通信にしてフェイトちゃんも加わる。

『あ、フェイトちゃんも通信中やったか。丁度えぇな』

『うん。ミラは？』

『通信切られてもぉた。けどちょい色々面倒でな。今は接触は極力避けておく。それが決定事項や』

「それでいいの？」

『仕方ない。ミラくんがそう選らんだんや。せやからわたしはわたしで動くことにした。まずは最高評議会に会いに行こうと思う』

「いきなり行って逢えるかな？向こうもなんだかんだで関係者って事は警戒するんじゃないかなって思うの」

『其処が問題なんよ。なんで色々手を回してみようとおもてな。これから聖王教会に行ってくる』

あぁ。聖王教会の方から根回しするんだ。

「さすがはやてちゃん。手が汚い流石」

『それは褒められてるん！？』

なんだかショックを受けてるような顔じゃないんだけど今はスルーするよ。それどころじゃないから。

『うーん・・・私も何かできればいいんだけど、次元世界渡航中だからなぁ。戻ることが出来ないよ』

「いいよ。無理しないでフェイトちゃん。フェイトちゃんの変わりに私が動いておくから。戻ってきたら一緒にがんばろ？」

『なのは・・・うん、待ってて。すぐ仕事終わらせてくるから！いくよティアナ、シャーリー。まずはあの幻想を壊そう』

フェイトちゃんは何と闘いにいったんだろう。気になる。

「二人とも無茶しないでね？」

『『なのは（ちゃん）に言われてもなー』』

え。そんなに私無茶してないよ？そりゃ、ブラスター４はきつかったけど。あれでヴィヴィオとも仲良しになれたんだし。万々歳だよね？

『全力全壊、ここに極まる・・・』

「ともあれ、其々動こう。何かあれば連絡し合おう」

『せやね。んじゃ、わたしはいくわー』

『私もそろそろ降りる準備だからいくね。なのは、本当に無茶しないでよ？』

「にゃはは。もう大丈夫だよ。護るべきものがあるんだし」

それならいいけどね、って通信が切れた。
でも・・・なんだろう。なんでミラ君なんだろう。そりゃあの力はとんでもなく脅威になるけど。
ミラ君が使い方や使う向きを間違えるわけないと思うんだけどね。

「でも、そう思われちゃうんだね。知らない人には」

はぁ、と一人溜息をつく。うん、なんかダメだねこの雰囲気。払拭しないと。
何回かほっぺたを叩いて気合を入れる。

「さぁ、続きを始めようか。少しハイペースでいくよー――――」

気にはなるけどだからと言って手は抜けない。確りと訓練して怪我をしないように教えていかないとね。

ミラＳｉｄｅ

一人。

今はたった一人で管理局の廊下を進んでいる。歩く速度はゆったりと。散歩でもするかのように。

周囲には誰もいない。捕縛しようとする者も護衛に就く者もいない。

ただ悠然と歩き続ける。

「向かう場所・・・最高評議会は管理局の最奥か。中々いい場所に陣取ったものだな。様子を見に行った津名魅ですら封印指定にしておくとは」

まるで罪人。逃げられないように搦め手を固められているような想いだ。

今までの逆。仕掛ける側から仕掛けられる側へのチェンジ。

一応護衛でセイバーに霊体化してもらっている。

「この手際の良さには感服するな。ここまで手を回すとは恐れ入る」

『ですがマスター。その分相手側の知略が強い可能性もあります。もしかしたらの事もありますのでご注意を』

「わかってるさ。心配性だな、セイバーも。フェイトによく似てきた。いや、似てるんじゃないか」

同じなんだ、と。付け加えてから俺は扉の前に立つ。

一人で此処に来る事の意味と共に扉を開けると其処には黒尽くめの女が立っていた。

「やぁ。一人で来るとは中々剛毅だねえ。流石の僕もびっくりだよ」

黒い髪の毛。黒い服。黒いヒール。見たことのない女が其処に立っていた。

「始めましてだね、ミラージュ＝ヴィジョン。僕が最高評議会だ」

そいつは冷ややかに言い放った。

「僕は君から全てを奪うものだ」

第百十三話　幻影堕つる

「はじめましてだね、ミラージュ＝ヴィジョン。僕が最高評議会だ」

そいつは冷ややかに言い放った。

「僕は君から全てを奪うものだ」

ミラＳｉｄｅ

最高評議会。それはたった一人の女によるものだった。

全身を黒で統一させた格好の女。口元には笑みを浮かべている。

しかもなんだ。俺から全てを奪うだと？

「何を言ってるのかさっぱりだな」

「本当にそう思ってるのかい？だとしたらとんでもなく愚考でしかないよ。ミラージュ＝ヴィジョン。いや幻影君と呼ぼうか。長いし」

「・・・・・」

コツコツとヒールを音を鳴らして歩き近づいてくる。

「楽しかったかい？仮初の世界で無双なんてやるのは」

「誰も君に勝てなかっただろう？」

「どんな状況だろうと君は一人じゃなく皆の力で勝利してきた」

「素晴らしいね。君のためにみぃんなが手伝ってくれるんだから」

「それとも、一人じゃ何も出来ないと開き直るかい？」

矢次早に言葉攻めをしてくる女。にやにやと絶えず哂いながら近づいてくる。

「後ろのサーヴァントを出してもいいけど、無駄と思うよー？」

足を止めて唇に指を当てる。

『マスター。その女性は私の間合いのギリギリを見極めてます。危険な香りがします・・・』

『セイバーがそこまでいうのか』

『第一、霊体化したサーヴァントを見るなど不可能です。ソレこそ聖杯戦争のマスターですら・・・』

「それが何故見えてる！」

「知りたいかい？いいよ教えても」

以外な答えを聞いた。まさか言うとでもいうのか。

「いいよ。言ってあげるよ。僕が何故サーヴァントの事が見えてて尚且つ君の力を知ってるのか」

「よければご享受願いたいね・・・」

「いいよ。僕はね――――――君に力を挙げたのアレに近い存在さ」

「残念ながら今はこの体でいるんでたいしたことはないけどね」

「それでも今の君に勝つことも可能だよ」

「あぁ、無理はしないほうがいいよ。だって君――――――――――――――――」

「――――――――――――――――弱いんだもん――――――――――――――――」

口角のあがるほどの笑みを向けられた。

これはもうふざけているとしか感じ取れない。

「だったらやってもいいよな！たとえお前が神に近い存在だろうが最高評議会だろうが――――」

俺に力を与えた存在に近しいというなら、神に等しいとでも言いたげだなその口は。

だったら見せてみろよ、その力って奴を！

「君の力は既に見てるよ。エネミアでも。ＪＳ事件でも。その前にあった闇の残滓事件でも闇の書事件でも！」

なんだ・・・なんなんだ。こいつは一体何者だ！？

「お前は一体っ・・・・」

「僕は自分で輪廻の魔女って呼んでるよ。かっこいいと思わないかい？」

「それとも運命の女神とでも呼んでくれてもいいよ？」

「総じて僕の名前はリンカ。この体の名前だね。気軽にそう呼んでくれよ」

徐々に女からの・・・リンカからの威圧的な気配が大きくなって行く。

おいおい・・・俺が飲み込まれるほどの気配なのかよ・・・・っ？

たらり、と額に汗が流れる。乾いた喉が唾液を潤す音が耳元で煩い。

ここまでプレッシャーをかけられたのは久しくない。

「だからね。じっとしていたまえ騎士王。なに、命まではとらないからさ――――」

リンカの右手が掲げられ、指が開いた。まるで、何かを掴もうとしてるような。そんな形で。

「でもまぁ――――――結果死ぬかも知れないけどねぇ？」

リンカが呟いながら俺の胸に右手を差し込んだ。

「その力、君には過ぎた力だから。僕が代わりにもらってあげるよぉ！！」

近くにいたなら音が聞こえただろう。引き抜く音が耳を劈くほどに聞こえた。気がした。

「あは。あはははははは。あはははははははははははははははははは」

ぐらり、と俺の視界が歪む。いや、違うな。俺の体が倒れていっているんだ。

ものすごくスロー再生をかけたようなそんな景色を見ている。

高らかな笑い声が部屋に響く。なんだよ・・煩いな・・・・。

「マスター！！！！」

セイバーの声が遠くに聞こえる。なんだよ。もう疲れて眠いから寝かせてくれよ。

セイバーＳｉｄｅ

マスターの胸に手を突っ込まれたとき、私は無意識に飛び出していた。
彼女の発する巨大な意識の中に飲み込まれていたのかもしれません。
それを吹っ切って一足で一気に踏み込む。その一速の間にエクスカリバーを手に携えて。

「おやおや騎士王も中々気が短いねぇ。でもだめだよそれではー」

リンカが左手を差し出してエクスカリバーの刃に触れる。それだけで私の剣戟の勢いを殺した!?

「くっ・・・・!?」
「まだまだ踏み込みが甘いね。あともう半歩前なら圧されてたかもしれないよ?精進したまえ」

涼しい顔で刀身を握ってエクスカリバーごと私を投げた。なんだこの規格外はっ・・・。
今はこのまま闘う手もあるが、マスターの身が心配だ。意識を向けつつマスターを見る。

「早くしないと助からないよー。ほぅらどうする?どうする?」
「安い挑発ですね・・・・その手には乗りません」
「なんだそうなの?じゃぁしないよ」

残念そうな顔で此方を見てくる。それでもその視線は伺う視線。此方の出方を、動きを見ている視線だ。
全く・・・・やりにくい相手ですね。

リンカＳｉｄｅ

うーん。幻影君から力を取ったは良いけどこの後どうするかな。騎士王（セイバー）はやる気だしねぇ。
実際手を出すのは面倒なんだよ？

「メイン出やることは既に達成したからね。連れて行って良いよ。あぁ、それでも牢獄行きだけど。他の場所が良いって言うなら遠くまで逃げたえよー」

あれだけの気合をかぶせておいて掛かってきたら無様だけど。
どうする騎士王サンは。

「ここは・・・退きますが。必ずまた相対します」
「彼のことを思うならソレが一番だろうね」
「・・・・・・」
「もう少し言ってあげるよ。さっき奪ったのは彼の力の源。魔法の源。魔術の源。彼がこの１０年で使ってきた全ての源泉」
「っ・・・それは」
「そう。もう気付いたね。今の彼には何もない。一般人でしかない」

神様から貰った力は全部僕の右手の中にある。この輝く光球が彼の、幻影の力の全てなんだ。

「残念。そういう運命だったのさ。さぁもう何処へとなりと行くが良いさ。僕はずっと此処にいるけど」

そういうとセイバーが幻影君を担いで扉の向こうまで一気に駆け出していった。
魔力放出スキルが高いとああいうこともできるんだねぇ。便利そう

で実にいいよ。

「さて。この力は封印させてもらおうか。何せ危ないからねぇ。危険物取り扱いだよ」

床から浮き出てきたクリスタルに光球を押し当てると静かに吸収するように光を吸い込んだ。

僕は実に満足げに笑みを浮かべる。あぁ、面白い。日とってこんなにあっけないんだね。

「これでよし。彼らの一撃でも壊れないくらいに強度をつけたから壊れる心配はないね」

さぁ、あとは管理局員に伝えるだけだよ。なんて言おうか。

「管理局員の諸君。今、ミラージュ少将は力が使えない。取り押さえるなら今だけど、セイバーが一緒にいるからがんばってくれたまえ」

うん。パーペキ。

セイバーＳｉｄｅ

最高評議会のある部屋から最高速のダッシュで廊下を走り抜けていく。
途中管理局員が襲ってくるが私の速度に追いつけるわけもなく、振り払っていく。

「まずはアーチャーたちに報告ですね・・・・」

これからの身の振り。そして、マスターの全ての力を奪われたというなら・・・あんまり魔力を使えない。
それに気付いた私は速度を下げてギリギリの魔力運用で突き進む。
やがて辿り着くのはマスターの執務室。そこに鍵をかけて楼上に持ち込む。

「これでっ・・・少しは時間が稼げますか。しかし、危険ですね・・・」
「セイバー。マスターのことで説明しろ」
「アーチャー」
「俺もいるぜ」

よかった。部屋にはアーチャーとランサーがいましたか。

「ギルガメッシュなら雑魚の掃除に出てるぜ。ガキンちょモードで」
「そうですか。何れにせよこの世界に来て恐らく最大の危機です」
「詳しく話せ」

私はさっきの出来事を細かく説明する。マスターの力を奪われたこと。私の一撃を簡単に防いだこと。
相手の姿やや何まで全て。

「ふむ・・・・だとしたらかなり厄介だな」
「どうしてだよ」
「マスターの力の全てを奪われたのだろう？なら魔力も奪われたはずだ。我々は肉体化出気宇とはいえ、その維持には魔力が必要だ」
「あぁ・・・・そっか。つまりその維持する魔力すらないって事かよ」
「その通りだ。いずれ私たちは消えていく運命になった、ということだ」
「しかし・・・マスターが私たちを選んでくれた以上、彼が私達のマスターです。最後の最後まで私は抗います」
「セイバー。あのな」

アーチャーがもったいぶって言葉を溜める。

「俺たちも同じ考えだ。だからこそこの状況の打破するべき作戦を練るべきだと。提案するがどうか？」

同じ考え、ですか。まったく素直じゃありませんね。

「しかし困窮だな。魔力がもう使えないとなると」
「全くです。それはギルガメッシュは知ってるのでしょうか」
「知らないだろうな。そして魔力を使うんだろう」

だ、だめすぎる。あの英雄王はやく何とかしないと。

『ギルダメッシュ！』

『ギルガメッシュですよセイバーさん。あと、ちゃんと念話で聞こえてますから大丈夫です。魔術士殺ししか使ってないですから』

ソレはソレで問題があると思いますが聞こえてるなら問題はない。

「英雄王の方はなんとかなったみたいだな」

「えぇ。聞こえてるようですので。ではどうしますか？これから」

「消えるまで抗うのはスマートじゃねぇ。それが戦いの中でならってんなら別だけどよ」

「成すべき事をしないで消えるのは私も承服しかねるな。いくら単独行動のスキルをもっているとしても」

サーヴァント同士で話し合いをしながらマスターの事はイルジオンリッターにも通告をしておく。

そしてマスターの魔力しだいで私たちも消えるということも伝えた。

「まぁ、考えても仕方ありませんね。まずはあの奪われたマスターの力を取り戻さねば我らに明日はない。むしろ、夜まで持つかどうか」

「そんなトコか。んじゃやる事ぁ決まったな」

「単純、な事ではないですけどね。やらねばならないことです」

サーヴァントの維持ができるほどの代用魔導師がいるなら別ですが・・・・・・・・・・・・。

「あのよ。一ついいか？」

「どうしましたランサー。折角これから一歩踏み出そうって時に」
「代用できるやつがいりゃいいんだよな。つまりよ。マスターに匹敵するくらいの」
「そんな魔導師が今の管理局にいるとでも？私の記憶ではそれだけの魔力を有してるのは覚えがないです。八神はやてすら私たちの誰かの維持だけで一杯一杯でしょう」

SSランクでも維持だけで魔力はきついと思われます。それだけの魔力を消費するのです。
外から取るのも可能ですがそんな手は使いたくありませんし。ソレを知ったマスターがなんというか。

「まぁ、俺にいい考えがあるんだ。お前ら忘れてねぇか？マスターの中にゃもう一人いるのを」

あ。そうか。そうだった。大聖杯を持つ同一存在。あれがまだ消えていなければ可能かもしれない。

「ランサー！貴方という人はなんということを考えたのですか！」

ステキです！流石ランサーですね。褒めて遣わしましょう。

「なんか遠回しにけなされた気がするぜ・・・」
「気にするな。私などしょっちゅうだ」

ランサーとアーチャーが結託して何か話してますが気にしません。
C．C．。まだいるでしょうか。あのリンネという存在に一緒に吸われてなければいいのですが。

「・・・・・・・・・・・・・・・。」

「なんですかアーチャー」
「一つ、思ったことがある。口にするのも恐ろしいが」
「もったいぶらずに言ったらどうですか」
「では――――――――――どうやって呼び出すのだ？」

し、しまった！それを忘れていました！
助かる術を知っても其処に至る経過が見えない！

「くっ・・・結局ダメですかっ」

手は尽くした。もう手に負えない。

「他の手を考えるか」

あとは何をすればいいのでしょう。ぶっちゃけ考えるのは苦手です。

「諦めるなセイバー。多少は脳みそ使え」
「まるで私が脳筋みたいな発言はやめていただきたい！！」

ランサーに言われたくありません。えぇ。せめてキャスターがいれば打破できるでしょうけど。

「全く。本体が何をしてるのかと思って見てみれば揃って頭を抱えて。何をしてるんだか」

腕を組んで考えだしたとき、背後から声がした。

其処にいたのは緑色の髪の毛を持った魔女が欠伸をしながらマスターの椅子に座っていた。
ギィ、と背凭れを鳴らして妖艶に笑みを見せた。

「どれ。私に話してみろ。如何にか出来るかもしれないぞ？」

無表情のままで魔女は告げる。

第百十四話　トライアングルエースと輪廻の魔女

高町なのは一等空尉の思案

いきなりの通達に私は驚いていた。
教導の手を多少間違えるくらいには落ち着きがなかった。これは後で一緒になった教導官に言われた。
なんと言ってもただの連行というわけではなくて捕縛、である。

「何で捕縛なのかな。連れてこいってだけじゃないの？」

そもそもなんで捕縛なんかするの？ゆりかごを落としたあの力・・・神音だっけ。あれが原因？

「ゆりかごをおとしたあの力は確かに向けられれば脅威ではあるけど。ミラ君の場合、ソレに限ったことじゃないよね」

ギルガメッシュさんと同じ王の財宝を持ってて。
セイバーさんとユニゾンしたり。
アーチャーさんと一緒に戦場を駆け回って。
ランサーさんと自己鍛錬してたり。

であってすぐにあの人たちの事聞いたけど、地球の英雄たちだよ？特にアーサー王とかクーフーリンとか超有名。
そんな英雄と肩を並べてしかも同等の力を持ってたり、単体で次元震起こしたりとか。規格外にも程があるよ。

あ、今は教導が終わって帰りの支度。シャワーを浴びて着替えも終わったところ。

あの通達から大体3時間くらいが経過していた。
管理局本局から少し遠いここでも騒ぎになっている。

「回線、混乱してる？」

回線がパンクしそうなくらいに遅延してる。うん。これほどの影響が出てるんだね。飛び交う情報の8割がミラ君情報だし。
情報カットしたらすごくスムーズだよ。
最高評議会っていうならこういう事にも目を向けてほしいかな。円滑な仕事を望みます。
どちらにしろ本局にいかないと何もわからなそうだなぁ。

「ねぇレイジングハート。どう思う？」
『答えに困ります』
「そりゃそうだね。ごめんね」

結局行ってみないと判らない。はやてちゃんにまずは会ってみようか。
フェイトちゃんも来るはずだろう。だったら行動あるのみだね。

それに――――ミラ君が逃げたっていう情報も出てきた。
まさかミラ君逃げるはずがない。逃げるほどの戦場は今までなかったはず。

「本局で逃げないといけないくらいの戦場になってるとか・・・・ないよねぇ？」
『本局はあわただしく動いてますが戦場になってる形跡はありません』

でも・・・ううん、信じる。信じないと。

とりあえずは皆と合流して詳しい情報を得ないとダメだね。
キャロとエリオは自然保護隊に出向してるしスバルはトッキューの新人教習中か。
機動六課のメンバーからは情報は得られなそうだね。

「やっぱり直接逢えるのが一番なんだけどね。レイジングハート？ミラ君の行動パターンから推測したデータだせないかなぁ？」
『Ｙｅｓ』
「え？だせるの？だったらもっと早く――――――」

もー！レイジングハートのいけずぅ。やれるんならもっと早くやってほしかったよ！
フェイトちゃんも仕事が終わったらこっちに戻ってくるって言うし。
はやてちゃんをまずは見つけるところから始めよう。

フェイト＝Ｔ＝ハラオウン執務官の推測

最高評議会からの通達があったのは既に次の事件の為の移動中でした。
シャーリーと、新たに加わった執務官補であるティアナと一緒に次元世界を渡り歩く途中。
飛び込んできたのは一方的な一通の通告。

『ミラージュ＝ヴィジョンの捕縛』

私は自分の目を疑った。シャーリーとティアナにも確認をお願いした。間違いなかった。
何故?どうして?何の為に?疑問は尽きない。
どうしてミラが捕まらなければいけないのか。わけがわからないよ。

「フェイトさん・・・まずは仕事を終わらせましょう。今は考えてもどうにも出来ません」
「うん・・・そうだねごめん。大丈夫だから」

シャーリーが傍で助けてくれる。私の代わりにティアナが考えてくれる。
ぐるぐる思考が回ってよくわからない。すぐに帰って傍に居たいよ。
でもシャーリーの言うとおり本局に戻らないと何も判らないんだよね。
次々にミラの情報が本局から流れてくる。信憑性の高いのから低いのまで。
その中からミラらしい動きを見つけ出す。

「・・・どれもミラっぽい動きじゃないね。でもこれなんかセイバーらしい動きだけど」

ミラノ動きは熟知してる。これも愛の成せる業だろう。
ただ、この敗走してるっていう動きはセイバーみたいな癖がある。

「何かがあった?ミラじゃなくてセイバーが動かないといけないくらいに・・・?」

悪い予想だ。これはだめだ。悪いほうに考えるとどうしてもあたってしまうことの方が多い。

いや、杞憂だったり偶然だったりするんだけど。

「フェイトさんの悪い予感は大体当たりますからね・・・」
「え。そうなんですか？」
「えぇ。潜伏先でそういうのが出るともう大変ですよ」

二人とも酷い事いってるの自覚しようね？私は凹んじゃうよ？
これから向かう仕事は広域次元犯罪。でもＪＳ事件ほどじゃないからすぐに終わらせられそう。
まってて・・・すぐ戻るからね。

八神はやて二等陸佐の考え

本局の中の宛がわれた部屋。
といえば聞こえは良いが、実際のところはほぼ監視の為の軟禁場所である。
そこに私と守護騎士の６人でいる。

「・・・・・・・・・・・・」

誰もが無言。判ってることは口にしなくても分かり合えてるので合えて口にしないだけ。
そんな中で苛立ちを隠せなのが二人ほど。烈火の将と鉄槌の騎士の

二人。

「・・・・ちっ」

「落ち着けヴィータ。今になってどうしようもないのはわかってるだろう」

「だけどよ、シグナム。これじゃまるで籠の中の鳥みてぇだよ！」

そう。今はこの部屋に閉じ込められてる状態。

部屋の扉の向こうには警備がおって――――見張られてる。

更に言えば通信手段も規制されている状態で何処にも誰とも連絡が取れない。

「・・・・・・困ったわねぇ」

「シャマル。どうにかならないのか？」

「部屋全体に防護結界を張られてて出るのは難しいわ。そうね・・・・数時間もあればなんとか解析は終わるでしょうけど」

それならやったらどうだ、と。促すザフィーラ。

「でもねぇ。これ時間が経つと結界の数値を変換してるのよ。だから今の結界の解析が終わるころにはもう次の結界に切り替わってるっていう寸法ね。

是が非でも私たちを外に出す気はないみたい」

「・・・私がミラくんとつながりが一番大きいから、やろか」

何せ公然と恋人であると公言している以上はその関わりは多少なりともある筈。

そう考えるのが一番妥当。

「考えとるね・・・いや、これは中々流石やわ」

椅子に座ったままでデスクを指でトントンと叩き続ける。何かいい案はないものか。

「流石に壊すわけにもいかへんしなぁ」

「それは犯罪になります」

「せやな」

破壊して突っ切っても結局ソレは後で咎になる。今になってまた罪を背負うわけにもいかへんな。

「考えましょう。何か手がある筈です」

「シャマル参謀に任せた。なんでもやるから必ず脱出できる手を考えてくれ」

「任せて頂戴。ミラージュ君の影に隠れてたけど、私の本領は治癒とサポート。このくらい出来ないでどうするってのよ」

おぉ、シャマルが本気だした。なんでもっと先に本気ださへんかったんや。

「本気を打せばよかった。今は後悔している」

「シャマルは後でお仕置きな」

「えええええええええええ！？」

うん・・・とりあえずは此処から出てからやな。全部それからや。

輪廻の魔女の邪推

うーん？あれぇ？

「足りない？少ない？」

クリスタルに封印した幻影君の力がなんだか少し足りない気がする。
あくまでも気のせいだけど。

「なんだろうねぇ？どうだろうねぇ？でもまぁあれなら暫くは放置でもよさそうだね」

僕から手を出すことはないかな。
だから周りから攻めよう。

「八神はやて。彼女には人身御供になってもらおう」

彼女の、八神はやての部屋に監視員をつけて部屋からの外出を禁止にした。
接触されると困るからねぇ。それでもＳＳランクだし。面倒だ。

「まぁ、僕のところに来るという予想は覆らない。だて彼の力が此処にある以上、取り返しに位くるだろう」

それでこなければそれまでの存在だったというわけだ。
神の力を持つに値しなかっただけ。これは返品という事だよ。

「扱えない人間に神の力を与えても仕方ないじゃないか。

ねぇ――――――？　」

わざわざ高い場所に設置させた玉座に座って来るのを待つ。
あとは細かい指示をだしてちょっかいを出していこうかな。

「あぁ。とあっちのほうも色々と手が出せないようにしておこうか」

何個かモニターを開いて指示を飛ばす。これで暫くは楽していられそうだ。
まぁ、たまには手を出させてもらおうかな？

第百十五話　幻影の魔女

Ｃ．Ｃ．Ｓｉｄｅ

久しぶりに外に出てみれば騒がしい中にいつもいるな。
座ってる椅子を回せば座ったままでサーヴァントと対峙する形になる。
白い全体を覆う動きやすい服で。

「まったく。お前らは少しは静かに出来ないのか？」
「そういう問題じゃありません。今は死活問題です」
「なら説明してみせろ」
「くっ・・・・なんて偉そうな」

セイバーが私を睨んでくるが知った事じゃないな。フン。

「まぁ大体は見ていたよ。お前たちが消えそうだというのも知っている。それで？私にまたマスター権限を移して存命したいと？」
「マスターを助けたいのです。これはマスターだからというわけではなく、１０年共に歩んだ戦友としての判断です。どうか・・・・お願いします」
「・・・・・・・・・・」

全く。私に大聖杯があるからといってこいつらは・・・・。
いや、アーチャーとランサーは同意していなそうだな。結果は同じでもその過程が違う。

「所で、そこの”私”はどうするんだ？そのまま放置か？」
「別の体じゃないんですか？」

「まぁそうだけども」

其処の男と私は今は別の体になってる以上は別の存在なんだろうな。
同一時間軸存在。平行世界の自分自身。
床に寝転んで気を失ってる男など私はどうでも良いんだがな。

「まぁ、一応そいつとは共犯者に当たるからな。お前たちの言うことくらい聞いてやるよ」
「では！」
「そういきり立つな。判ってるから」

セイバーが詰め寄るのを制してから大聖杯に接続（アクセス）する。私側にしかない大聖杯システムを起動する為に認識させる。
魔力リンクが大聖杯から伸びていくイメージ。それがセイバー、アーチャー、ランサーに伸びていくイメージ。

「まずはお前達三人の魔力回路の接続だ。ふむ――――――問題ないな」

何の問題もなく接続完了。魔力を通す。

「どうだ？魔力が通っているはずだが。不備とかあったら言え」
「私は問題ない。順調な魔力の流れを確認した」
「あぁ、俺もだ。しかし、マスター以上の魔力だな。これも大聖杯の恩恵か？」
「でしょうね・・・しかし暴走もない悪の泥のない大聖杯とはこれ程までに凄まじかったのですね・・・・」

本来大聖杯には取り込まれない限りは恩恵はない。そういうシステムだ。

一定の魔力数値に達しない限り聖杯戦争で倒れたサーヴァントを吸収していく願望装置。
だが今はソレをオミットして単なる増幅装置として使用している。
嘗てバーサーカー、キャスター、アサシン、ライダーを吸収している分、三人の維持など簡単だった。

「後はギルガメッシュか。急いで接続しないと魔力を枯渇させるまで使い切るぞ」
「そうですね。すぐに連絡します」

ギルガメッシュの方はセイバーに任せる。セイバーの言うことなら聞くだろう。

「あとはこの体たらくを作り上げた馬鹿をどうにかするかだな。本当にどうしてやろうか」

神から与えられた力を封じられた。それも見ていた事だ。
自己封印ではなく、奪われたのだから性質が悪い。

「今は力を奪われたショックで気を失ってるだけだが気付けば後は足手まといにしかならないぞ」
「わかっている。だが護らねばならない。それが当初に交わした契約なのでな」
「それによ。俺たちはこうして肉体を得ているが・・・あぁ、霊体化も出来るけどよ。結局ユニゾンデバイスの域からは出てねぇんだよな。
英霊を使い魔として使うのと同じようなもんだしよ」

アーチャーもランサーも今置かれてる状況は理解しているらしい。
そして魔力回路の繋がりの無くなったこの男を護ると。

「何がそうさせる？」

理解も納得も出来ている。が、其処までのつながりが私にはわからない。

「何って。そりゃぁ――――――」

「絆、だろうな」

「そうですね。ずっと共に来たのですし・・・・・少々我々は卑怯な部分がありましたけど」

「・・・・・・ん？」

ランサー、アーチャー、セイバーの順に話してくる。

しかし其処に引っかかる部分があった。

「私達はこの状況になるのを聞いていました。詳細まではわかりませんでしたが――――――マスターがイレギュラーであるというのは聞かされていましたから」

セイバーの言葉にアーチャーとランサーが頷いた。

「この世界にとってマスターはいない存在でした。つまり、いない場所、世界に強制的に其処に割り込んだ。彼がイレギュラーとしてこの世界に入り込んだのです」

「イレギュラー退治はお前たちの仕事だろう。特に其処の男の」

「はい。つまりは――――――自分自身を探していたのです。貴女と最初に相対したときも貴女をイレギュラーだと思ってましたから」

イレギュラーを探してたつもりが自分がイレギュラーだったって事か。

何処まで愚かなんだ、私の分身は。

「良い様に踊らされていたというわけだな・・・」
「すみません・・・本人には言わないようにという制約があったのです」
「私に謝るなよ。謝るなら其処の馬鹿にだろ?私は私でそいつじゃぁない」

椅子から立ち上がる私はギルガメッシュとの接続も完了させて準備を完了させる。

「まずはどこかに逃げましょう。此処は相手の腹の中です。獅子身中の虫、というわけではありませんし」
「だが何処にいく?何処も手が回っていそうだぞ」
「それが判れば苦労はしません。津名魅も抑えられてましたし」

動きを制されたな。さて、どうする?

「道はある――――――」

予想してなかった方向から声がした。
声の主は――――――寝転がってる馬鹿だった。

ミラＳｉｄｅ

意識を戻したら何か話してると思ったら・・・。

「何を話してると思えば・・・・」
「マスターっ・・・・聞いていたのですか」
「あぁ、聞いてたよ。とはいえ後ろの方だけだけどな」

聞こえてたのはイレギュラーの話のみ。
俺がイレギュラーだったってわけだ。

「道化を演じてたってことか。つまり。イレギュラーを探して倒すといっておいて俺がイレギュラーだったってわけなら」
「そういうことだろう?あぁ、お前にもう力はないからなあ。何も出来ないぞ」

C．C．の言葉に俺は意識を無くす前の事を思い出す。
最高評議会に突っ込んでいって力を・・・全てを奪われた。

「あ・・・・そうか。俺、あいつに」
「だが悲観するな。お前に力がなくても関係ない」

C．C．の言葉に俺とサーヴァントの顔が向く。

「どういう、ことだよ」
「お前の力は”奪われた”んだ。つまり取り戻せる。それとな――お前が無力で馬鹿で只のガキでも」

C．C．は続ける。

「お前と同一存在である私の力は奪われてない。つまり、どういうことかわかるか?」
「・・・・・・・・・・・・・・・?」

「力を奪われたお前の変わりに力を奪われる前の自分自身が此処にいると言う事だ」

C．C．は背後に手を伸ばして空間を開いた。スキマだ。もう一年近く開いてなかった場所。何も代わらない空間が其処に見えた。

「お前が鍛えた力もそのまま私にある。つまりはまだ闘う力があるということ。どうする？此処を抜けたら立派な反逆者だ」

「ふん・・・・そんなもん最高評議会に向かったときに覚悟してる」

「いいなその言葉。だったら――――――此処が分水領。此処を抜けたらもう戻れないが」

「結局、さ。俺の行く道なんだよ。これって。イレギュラーを倒すのも俺の仕事なら、それをやりきるだけの力が必要になる。

その力をまずは奪い返す。全てはこれからだ」

何をするにも力が要る。今の俺には――――――魔力が無い。何も感じ取れない。

セイバーやランサー達とのつながりも感じられない。

「一般人になった俺が何処までできるかわからないけどな。それでもやれるところまでやるさ」

決めた。そう決めた。だから俺は俺の道を行く。幻影と呼ばれた俺

はこの泡沫の路を進むだけだ。

「なら進め。私も一緒に行くさ。私はお前でお前は私だからな。だから――――」

「我々もお供します。えぇ。肉体は違えども、同じ存在ならマスターなのです」

「かてぇよセイバー。気に入ってんだからいいじゃねぇか。このマスターにずっとついていくって決めたろうが」

「そういうなランサー。セイバーはそういう堅い所が味なのだ」

「はっ、そういうもんかね」

一旦サーヴァントに顔を向けると笑って返してくる。

「ありがとうな。みんな」

その一言を残して俺はスキマへと身を投げた。

第百十六話　従者は王に傅く

ミラＳｉｄｅ

スキマに移動した俺達は円を描くように立っている。

「この空間の維持も今は私だな。アインスも其処にいたか。お前もリンクも私に繋げ直すぞ」

「はい。ずっと此処に――――――？」

アインスは深く理解できていないようだ。

「アインス。ちょっと色々あってな。Ｃ．Ｃ．と魔力回路をつなげてくれ」

「ソレは構いませんが・・・・先ほどマスターからのリンクが切れたのでどうしようかと思ってました」

あぁ・・・やっぱりこっちにも影響が出てたか。

「あとはマテリアルとも繋げ直しだな。あいつらは何処にいる？」

「今は他の世界に仕事で出てる。連絡は出来るかもしれないが」

ふむ、とＣ．Ｃ．が唸る。それから右耳に手を当てて通信を開始した。

念話なんだろう。今の俺には何もわからないが。時折目の輝きとか頷く仕草が入る。

「Ｃ．Ｃ．が色々やってる間に情報の整理とこれからについて話そう」

サーヴァントを集めて会議を始める。ギルガメッシュがいないが仕方ない。後で話すことにしよう。

「まて。我を置いて話を進めるな」

「ギルガメッシュ」

ギルガメッシュが移動してきた。勝手にスキマに入り込んでくるのももう慣れたけどな。

「我を差し置いて話を進めるとはな。それなりに言い分はあるのだろうな。所でマスターよ。お前からの魔力供給が切れたので戻ってきたぞ」

ギルガメッシュにも現状を報告する。すると一瞬だけ表情を変えたがすぐに戻した。

「ふん・・・その最高評議会とやらは随分と偉そうだな。いや、実際に偉いのか。許せんな」

「だからこれからの動きを決めようかって話をするところだった。ギルガメッシュがいてくれるだけでも充分だけどな」

其処まで言うとギルガメッシュはだま手しまった。まずは討論、と。そう言いたげ。

「さて、じゃぁ情報を整理するぞ」

1・俺の力はリンカ＝ネーションという最高評議会を名乗る女に奪われた。

2・奪われた力は神の力。そして俺ミラージュ＝ヴィジョンの力の全て。一般人に戻った。

3・魔力もなくなったのでサーヴァントやマテリアルの維持が不可能に。代わりとしてC．C．がマスターに任命。

4・俺を捕縛しようと管理局員全員が狙っている。力がなくなったのも知っている。それでも過去の実績からか恐れられているので捕縛しておく方向で動いている。

5・はやて、なのは、フェイトの動向は現在わからず。

「こんなもんか」

「大まかにはそのくらいかと。細かいところまであげれば切りがありませんし」

そうだな。イルジオンリッターの動向も気になる。あいつらがどう動くかだし。

「しかし、流石だな管理局。これだから組織ってのは嫌いだ」

「その組織のトップクラスに昇ったのは誰ですかね」

「上にいれば発言力も高い。本来ならイレギュラー相手に部隊を編成できるだけの地位が必要だった」

今じゃソレも意味を成さないがな。

「外の情報も得たぜ。マスターに賞金が掛けられた。聞いて驚け。ミッド通貨で８０００万だ」

「おいおい・・・・」

スカリエッティですらそんなになかったぞ。ソレ程までに俺を見るか。

どうする?どうする?

「まずは幻影の騎士を探しましょう。ティーダやアリサ、すずかなら・・・」

「そうだな。まずはこっちの人材を何とかしないと」

C．C．とサーヴァント。アインスだけという現状。マテリアル達もどっちに立つかわからない。

何よりもなのはと繋がりのある恭也さんやアリサ、すずかはどう動くのかも気になる。

「レグルス隊には俺が行くぜ。だからよ。命令してくれよマスター。いつものように。マスター権は移ってもあんたがマスターなんだぜ。だってよ――――――あんたら同一存在なんだろ?ならあんたにもマスター権がある。残ってる――――――さぁ」

ランサーは俺の指示を待っている。アーチャーもセイバーも俺の言葉を待っている雰囲気だ。

「すまない・・・俺は」

「マスター。私達はこの１０年共に歩んできた。その絆は薄っぺらく弱くその程度のものだったのか?」

「アーチャー・・・しかし」

「マスター。私は貴方をマスターとして今ここにいます。ですから――――――ご命令を。我が剣は常に貴方と共にある」

セイバー・・・・アーチャー・・・ランサー。

「我はどうでも良い。マスターがやらなければ好きに動くだけだ。だがな。これだけは覚えておけ」

「我に指図できるのはマスターだけだ」

フン、と視線を外すギルガメッシュ。ソレを見て彼のサーヴァントもクス、と笑ってる。

セイバーＳｉｄｅ

ギルガメッシュも素直じゃありませんね。ですがそういう性格ですから仕方ありません。

「我々三騎士で話し合った結果ですが、代わらず貴方をマスターとして誓うことを改めて契約します」

「我ら剣・弓・槍の騎士、変わらぬ忠誠を此処に」

「我らが牙は何時の基に。汝が牙は我等が牙」

マスターの前で跪く我ら。ギルガメッシュはたったままだ。

「我らサーヴァントはミラージュ＝ヴィジョンをマスターとして引き続き契約を執行します」

「お前ら・・・・」

マスターは声を殺して私たちを見ていた。

「すまないな。俺には何も無い。だけどこんな俺についてきてくれるのならそれ相応の見返りを。俺は絶対お前たちを裏切らない。これは誓約。

必ず俺は――――」

「何も言いますまい。マスターの行く末が我らの良く路。共にいければそれでいいのです」

それに、

「私も嘗ては王の身でしたが、それ以上に貴方を我らの王としたいのです。どうか・・・・」

嘗ての王であろうと、今は騎士。騎士は王に従じるもの。マスターに従う騎士たる我らの上に立つならば。

マスターこそが王なのです。

ギルガメッシュＳｉｄｅ

セイバーも贋作者も狗も頭を垂れおって。
セイバーなど王であるにも関わらず、だ。

これだから騎士というものは。殉じるのを正とするか。王たる我には判らぬものだ。
だが・・・・・。

「マスターよ。我の手助けが必要か？」
「ギルガメッシュ・・・・」
「我は王だ。人類最古にして英雄の王。そんな我がマスターを相手でも傅くわけにはいかぬ。それはわかるな？」
「あぁ・・・わかるよ、英雄王」
「だから、だ。我は対等の場から力を貸す。そこな騎士とは違う、対等の立場としてだ」

王と対等の立場というには王以外にはない。つまり、だ。

「貴様を王として認めてやる。そこのセイバーや、嘗て居た征服王と同じ。そして貴様の恋仲である夜天の王と同等の、だ」

ミラＳｉｄｅ

ギルガメッシュ・・・・。口が悪いがそれでも俺を認めてくれてるんだよな。

「ありがとう・・・皆」

力を無くしても俺についてきてくれるなんて、な。

「がんばるよ、俺」

力を取り戻す。そしてそれからは――――――俺の仕事なんだ。
イレギュラーを倒すという盟約があるから。イレギュラーを倒す為の力を。そして――――――

――――――イレギュラーをこの世界から消そう。

そのために。あの輪廻の魔女を消しに行く。

「行く、か」
「この頭数でか？」

C．C．が出鼻をくじいた。だがそういうのも確かだ。
俺とC．C．。アインス。サーヴァント。これだけしか今はいない。

「マテリアルは仕事を放って来るそうだ。任務よりもお前の事が心配なのだと。この果報者め」
「茶化すなC．C．。だがここに入れないだろう？」
「だからいい場所を指定しておいた。外から入れないなら中に直接入ればいい」
「・・・・？」

C．C．のもったいぶりは多分、俺と同じなんだろう。

「津名魅だよ。中に入れないなら直接このスキマで行けばいい。これは空間を捻じ曲げるからな」

そうか。その手があったか。スキマも使わないから忘れてた。

「マテリアルには無理やり外から入ってもらうことになるが大丈夫だろうさ。あいつらなら問題ないだろ」

「邪魔が入ったら？あいつらは良いように使われてるだけだ」

「ハ。情が移ったか？所詮管理局だぞ？」

出来るだけ怪我を負わせないように伝えてくれと伝言を頼む。

「しかし・・・これで津名魅強奪となるともう戻れないな」

「もとよりイレギュラーを倒せばこの世界から消える予定だったはずだろ？」

「そりゃそうだ」

ランサーが全て終わった後の事を提示してきた。そう、もう戻ることは無い。戻っても居場所はなくなるだろう。

だったら――――もう好き勝手にやるだけだ。

「まずは津名魅に行こう。話の続きはそれからだ」

第百十七話　無力・・・・・

C．C．Side

スキマを出ると其処は津名魅のブリッジだった。艦内は木造をイメージして造られている。勿論このブリッジもだ。
其処に水が多少流れているという景観。なるほど、いい場所だな。
ミラージュの中で見るのと実際に見るのとでは違う。
所で・・・スキマを出るのはいいさ。ミラージュの力だったわけだし。
ただ、勝手にされるのはいただけないよな。しかもさも当然な顔をしてサーヴァントは抜けてきている。
更にもう一人も。

「何故いる」
「ずっとあの空間にいるのも飽きましたので」

それで出てくるのか？全くいい身分だな！それで祝福の風を吹かすのか。

「それに、マスターの非常時でもありますので」
「フン。それはあいつが悪いだけだ。みすみす奪われただけのな」

私は悪くないぞ？腑抜けた方が悪いんだ。
そこにミラージュが振り向いてきて、

「どうした、C．C．」
「あぁ。なんでもない。ただお前の身勝手に辟易していたところだよ」

ほらみろ。判ってない顔をしてこっちを見てるじゃないか。判ってないって顔が一番イラつくんだ。何でか。
髪を梳き上げてメインブリッジの中を歩く。特にすることはないが居場所を考えてみる。
ほら、何処に立てばいいかの確認だな。別にどこでもいいんだけど。

「C．C．、俺の傍にいてくれないか？」
「ん？お前の傍か。私は高いぞ？童貞ボーヤ？いや、もう童貞じゃないか？フフン」
「おまえはいったいなにをいっているんだ」

まぁ其処の言及はしないで置いてやる。そこらへんはキャラじゃないからな。
ミラージュが艦長席に座るとその横に立つ。

「ところで気になったんだが」

私の声がブリッジに響く。周りには私やサーヴァントくらいしか人はいない。

「私たちだけで動くのか？この船は」
「問題ない。そのための津名魅だ。名前と姿だけ模したわけじゃないんだぜ？」

ミラージュがコンソールを叩く。その速度はかなりの速さ。アイツよりも速いか同等だな。
サーヴァントもそのままみている。

「元々津名魅は独立行動を可能にさせて造ったんだ。誰も操舵手が

いなくても動かせるようにな。第一、サイズも違う。能力も違う。
メインになる主人格がいない」

ミラージュのターン。語り続ける。

「本当の姿を出すのはもっと先だと思ってたけどな。今のこの状況なら仕方ないだろ。ということでおきろ、『津名魅』」

『声紋確認。網膜認証シグナルパターンオールグリーン。幻影”ミラージュ”と認識しました。おはようございます』

メインブリッジの先端。メインウィンドウの前に艦の主人格が現れた。

薄い水色の長い髪の毛を持つ女性型。首の後ろで二つに結わき、足元まで流れる綺麗な髪の毛だ。

これは・・・あれだな。ブリッジのウィンドウから見える映像を見て核心を持つ。こいつ。此処までやりきるとは面白いな。

「なるほど・・・津名魅、始まりの舟か。確かにこれなら光鷹翼も造れるはずだ」

艦の周りには自己防御として光鷹翼が張られているのがブリッジから見える。何枚かのウィンドウに船体の行く箇所もの場所が映し出されていた。

これなら確かに誰にも手は出せないな。

「これで無敵の防御力というわけか。だがどうする?私ははっきりと見てないが最高評議会とやらは上回っているんだろう?色々と」

「分かってる。だからこそ津名魅を今起こした。津名魅、発進だ。行き先は聖王教会」

「了解です。では向かいますね」

津名魅が勝手に動き出す。そう管理局は思うはずだ。動けないようにアンカーをつなげているはずだから。
だがそれは実際にはつながっておらず、光鷹翼で全てつながる寸前で外されていた。
身勝手な傷を嫌うからしい。其処まで意識を持っているのか。

それぞれ好きな場所に着く。
セイバーは真ん中らへんに。
ランサーは後方側の席に。
アーチャーは一番後ろで壁に寄りかかっている。
ギルガメッシュは先頭でメインウィンドウをじ、と見つめている。

「・・・・・リィンフォースの魔力リンクも繋げ直さないとな」

そういえばまだリィンフォースのリンクは繋ぎ直してなかったのを思い出す。
マテリアルズのリンクも繋げ直さないといけないと思うと肩を落とすしかなかった。
私の仕事はまだ続きそうだ。

ミラＳｉｄｅ

津名魅を起動させて艦の維持と操舵を任せる。向かうのは聖王教会。
途中でマテリアルズを拾っていく予定だ。
強い衝撃を伴う揺れが一回、二回と起こる。アンカーを完全に外す

衝撃。

『津名魅！誰か乗っているのか！？』

管制室から通信が来る。だが音声限定に津名魅がしたのでこちらの映像は向こうには届かない。

こちらの声を向こうへと届かせる。もうっこまできたら引き返せない。

だからなんだ。既に不退転だろう。ならやれるところまでやるだけだ。皆はついてきてくれるといったのだから。

「管制室。此方はミラージュ＝ヴィジョンだ。我が艦船をどう仕様と俺の勝手ではないのかね？」

『そっ、それは重大な違反です！ただでさえ貴方には莫大な賞金が最高評議会より掛けられております！

直ちに艦から降りてください！』

焦りの声。いきなり艦船が動き出せば当然だ。だが俺は構わず続けるように指示。

「通告する。今の管理局とは袂を分かつ。俺を止められるものならとめてみるがいい。出来るのならな！」

『貴方には・・・力はもうないという通達も来ています！それでもできるとお思いか！？』

「私には絶大で信頼できる部下がいるのだよ。何者にも勝る部下がな！フハハハハハハハハ！！！！！！！」

『くっ・・・これは重罪だ！わかっているのか！！？』

「重罪？何を言うか。王となった俺が罪を受けるとは笑わせる。そんなものはお前たちが受けていれば良い」

今の俺は無力だ。管制室から言われてる通りに力を奪われたのだし。
しかし、それすらも公言して流布しているのか。
だからこそ。ここで弱みを見せてはいけない。だったらどちらが上か見せ付ける必要がある。

「・・・・・では、出立の声をお願いします艦長」
「よし――――――出発だ。目指すは聖王教会。あちらに話をつけてみる」

ガクン、とより一層の衝撃を起こしてから津名魅は動き出す。

「・・・・・・いいんだな？」
「何を今更・・・・」

C．C．が聞いてくる。行動は既に取ってしまった。ならそれを通して正当化すればいい。無理矢理にでも。強引にでも。

「八神はやてのことはいいのか？」
「・・・・・っ・・・」

そっちか。通信を強制遮断してから連絡は無い。むしろ無い様にさせてしまったのだ。
連絡があるほうがおかしい。

「恐らく、お前に一番近しいものとして隔離されているだろうな。どうする？」
「ふん。そんなもの――――――取り戻すに決まっている」
「相手の考えも聞かないでか？」
「そのときにはそのときの事を考えるさ」

はやてが俺を裏切る？いや、違う。俺に賛同しなければ？

「どうだってんだ・・・・そんなもん」

タイミングが悪かったな。出来れば少しだけ話しておければよかったが・・・・。

しかしあのときは時間も何もかもが無かった。迂闊な事も出来ない状況だし。

「しかしマスター。八神はやての事だが時期早々だったのでは？私がフォローしておいたが」

「お前がフォローしたんならいいさ。信じるよ」

アーチャーのこういう時のフォローは助かる。人生経験豊富だしな。何せ一度は人生を全うしてる英雄たちの一人だし。

「戴した人生は送ってないがな。だがまぁマスターよりは人生経験豊富なのは認めようククク」

「後ろの台詞で台無しだよチクショウ」

津名魅がドックを離れる。下では管制室が騒いでいる。武装隊も出てきそうな雰囲気だ。

「武装隊、確認」

案の定出てきたな。こっちはどうしようもないってのに。

「指示を出せマスター。我がいく」

「ギルガメッシュ」

まさかギルガメッシュが言い出してくるとは思わなかった。出来れば奥の手として取っておきたかったけど。

「魔力がきれそうなさっきとは違って今は有り溢れている。我が有象無象を間引いてくれよう」

「出来れば奥の手で取っておきたかったけどな・・・・すまない。頼む」

「フン。いつもらしくないな。もっと堂々としておればいい。すぐ終わらせてやる。ついでに天上も開けてやろう」

霊体化してギルガメッシュが移動する。C．C．とのリンクで今は魔力が有り溢れているのはわかっていた。

津名魅の外にギルガメッシュの姿が見える。すっかり浮遊魔法を自分のものにしてるな。

この世界の記憶と経験を英霊の座に持ってったら聖杯戦争に呼ばれたら大変なことになりそうだな。

「ですがそれは私たちにも当てはまります。私達は終わってしまった人生を経て更に通常なら得られない経験を得た。

私たちが相対しない鍵いは聖杯を手に入れるのは確実でしょう・・・・あの冬木の聖杯でなければ」

冬木の聖杯は汚泥でしかなかった。だからこそ第四次第五次と破壊されたんだっけな。

武装隊とギルガメッシュが戦い始めた。別段心配するようなこともない圧倒的なワンサイドゲーム。

ギルガメッシュは一歩も動かずに王の財宝で駆逐していく。

「ギルガメッシュ。殺すなよ?諫言に唆されてるだけなんだからな」

『判っている。その程度。我を誰だと思っているのだ。全ての財と

富と快楽を手に入れた王たる王だぞ！ほれ、其処にいると邪魔で仕方ない。さっさと行け』

「すまない――――――先に行く」

津名魅に指示。ギルガメッシュを殿にして戦艦は浮かび上がる。

『津名魅、浮上開始します。転送準備開始』

ギルガメッシュＳｉｄｅ

馬鹿め。本当に呆れた奴らよ。

之から進む先に何があるのかわかっているのか？それは自分を殺す路だ。

「だからこそ我も乗ったわけだがな。単なる馬鹿なら我も従わぬつもりだったが」

全く、と息をつき、

「単なる大馬鹿なら話は別よ。ほれ、路は我が作ってやる。これが王の中の王の仕事だ。民を救うのは我の仕事だからな」

王の財宝を開き、天上を穿つ。ついでに武装隊も巻き込んでおくか。マスターからは殺すなと言われているが――――

「死なぬ程度に痛めつけるのは構わんよな？だから――――――死んだほうがましと思うくらいには痛めつけてくれようぞ雑種ども！」

天上に宝具を放ちながら地上より沸いて出てくる武装隊を相手に宝具を打ち込む。

その背を津名魅が浮かび上がっていく。ドックの中の空気を振動させながら大きな音を立てて飛び上がる。

「それ、路を締めそう。貴様たちの進む先に何があるか――――――疾く見せるがいい。その雄々しい姿をみせつけろ。腑抜けた管理局に」

宝具の嵐がドック内に巻き起こる。既に向こう側が見えないほどに降り注がせる。

武装隊の体を貫きながらも天上を開ける。其処には次元世界の空が見えた。

「ふ。あのような空もまた美しい。あれもまた我のものにしたいものだな」

あぁ、そういえば。過去に征服王が言っていたな。我が王国はこの大地。空は屋根。故に全てが我が家だ。と。

今になればそれもまた確かなものだ。征服王は空も征服したというのだろう。

「征服王め。我なら更にその全てを我が物にしよう。座よりみているか？見えているか？我の財を！」

津名魅が通れそうなほどの大穴を作り出せば津名魅がその穴を通って外へと脱出した。
これで我の此処での仕事も終わりだ。些事であった。だが充分だ。
路を作るのは王の役目。民を導くものだ。

「行け、マスター。お前の信じる道を歩け」

その場に止まったまま見上げる。見えるのは津名魅の腹部。もう今から向かっても届かないだろう。霊体化したとしても。
ならこのまま残り、間引くのも役目の一つではないか？

「ふ・・・我も甘くなったかもしれぬな」

宝具の嵐の中で一人薄ら笑う。返ってくるのは何も無い。だがそれもいい。
行き先は知っている。だからこそだ。後で向かえばいいだけの事。
そこに光条一閃。我を光の一閃が貫いた。

「っ！？――――――っが、はっ！？」

一瞬だ。まさに光速。その光は貫いた後に消えたが明らかに高位の一撃だった。
何が起きたのか一瞬理解できない。だが体中に痛みが走った。そこでやっと理解する。撃たれた。

「この王に一撃を当てるとはっ・・・何者だ！」
『やだなぁ。英雄王。邪魔しないでよ？』

一言か。モニタに映し出された黒衣の女の顔が表示されて一言だけ

我に言い放ってから消えた。我が体も肉体化が困難になったのか霊体化していく。
馬鹿め・・・顔は覚えたぞ。その首かっ切りに行ってくれる――――
――

待っていろ。我が宝具で貴様を切り刻んでくれる。

ミラＳｉｄｅ

ギルガメッシュが宝具で天上を開けてくれた。段々と大きく穴が開いていく。
津名魅はその穴に目掛けて突っ込んでいく。

『衝撃来ます。対ショックに備えてください。３・・・・２・・・・１・・・・』

津名魅がカウントを開始する。そして０になったときに天上を抜ける衝撃が襲ってきた。
管理局ドックを抜けると其処は次元世界の空。

「ギルガメッシュはどうした！？」

ギルガメッシュからの応答がない。いや、通信が届いていない。

「すれ違いざまに光が走ったのを見ました」
「セイバー。見えたのか？」
「一瞬でしたが。雷鳴にも似た速度ですのではっきりとはわかりませんが運よくギルガメッシュを見ていたので」
詳しくはよく判らない、と。ただ、普通の光ではなかった感じがしたといわれる。
と言うことは魔力を帯びてる？としても魔力を持つサーヴァントたちがわからないというのもおかしい。
「あの黒いヤツだな。ギルガメッシュは墜ちたと考えていい」
「Ｃ．Ｃ．・・・・・」
隣のＣ．Ｃ．が予測を立てる。それもそうだ。現状ギルガメッシュを落とせるやつは管理局にはいないはずだ。
だとしたらあとは消去法で残るのは一人だけ。リンカ＝ネーションただ一人。
「全く良くやってくれる。これでこっちの戦力に大きな穴が開いたぞ。どうするんだ？幻影」
「・・・このまま進む。ギルガメッシュが簡単に朽ちるはずが無い。俺は信じるさ」
「そういうと思ったよ。津名魅、最大船速で離脱しろ」
『了解。最大船速で本局を離脱します。行き先は聖王教会真上。移動します』
津名魅に指示をだす。俺の同一存在だからかＣ．Ｃ．も津名魅に指示を出せている。
それについては何も言うことは無い。自分に嫉妬しても仕方ない。

しかしギルガメッシュが・・・生きていろよ。お前はそんな簡単に死ぬような英雄じゃないだろう・・・・？

自分を信じてついてきてくれる仲間を護れないくらいに・・・俺は無力だ。地kらがあれば直ぐにでも出て行って助けたいのに。

「・・・あいつがそれを許さないか」

助けたなんて事実は英雄王にはきっと屈辱でしかないのかもしれない。でも――――――

「誰も失いたくないって思うのは――――――贅沢なのかな」

第百十八話　吸血姫、来る

セイバーＳｉｄｅ

ギルガメッシュとは念話も通じない。しかしこれも私達サーヴァントにとっては誇るべきことなのです。
マスターの為に殉じるのは誇りでもある。ギルガメッシュとは相容れない部分もありましたが根底は誇りを持っていました。
だからこそ、でしょうか。ギルガメッシュとの連絡がなくなった今も有る意味羨ましいと思ってしまうのは。

「セイバー。ギルガメッシュは生きている。英雄王がそう簡単に死ぬような存在だと思うか？聖杯の汚泥を浴びて尚、存命したヤツを」
「そう、ですね・・・杞憂でしょう。すいませんアーチャー」
「〝俺〟の知ってるセイバーはその程度で落ち込むような弱い心を持ってはいなかったがな」
「意地悪いですね・・・」

アーチャー。英霊エミヤ。衛宮士郎の理想を追い求めて成り果てた反英霊。
嘗ての、私のマスター。四次戦争ではその養父切嗣がマスターでもあった。
因果は濃い。そう思う。

「そんなに私を見透かさないでもらいたい。今は同じ英霊だとしても」
「だと言うならお前のそれは英雄王に向けて失礼だとは思わんかね？」
「・・・・・・」

そうだ。同じ英霊、同じサーヴァントであるなら私があの場で残っていたら同じようにしていただろう。
あの場では彼が残ったほうが生き延びる確率が高かったのだ。だからこその彼。

「また逢うさ。あいつのしつこさは並じゃない」
「そうですね・・・」

10年。共に生きてきた仲です。そのくらいは信じてあげましょう。

ランサーSide

ヤツとは第五次からの腐れ縁でもあった。同じマスターを持ったこともある。それでもだ。
やつの生き様は羨ましいとさえ思ってしまった自分がいる。
契約のせいで動きを封じられた部分はあれど、武人である。
戦いの中で果てれるのは武人此処に極まれりだがな。

「だけどよ。まだそんなもんじゃねぇんだろ?またひょっこりでてくるんだろう・・・・」

セイバーとアーチャーの話してる近く。
ブリッジにある椅子に座り、槍を抱えたままでメインモニタを見続ける。

・・・・お前がいない分は俺が埋めてやんよ。それが望まないことでもな。

ミラＳｉｄｅ

津名魅は順調に次元世界を渡り歩いて聖王教会本部へと向かっている。
となりにずっと立っているＣ．Ｃ．が時折話しかけてくる。

「しかし、聖王教会にも手が回ってるかもしれないな」
「だとしたらどうする？また逃げるか？」
「選択肢の可能性としては入ってるけどな。話し合って分かり合えるのが一番だが」
「話し合えるのか？賞金首なんだろう？」
「管理局とはまた違う流れを汲む組織だ。それに騎士カリムに会えれば少しは変わるはず」

目的は聖王教会の騎士カリムだ。機動六課設立の際にも尽力くれた人材である。
元、とはいえ同じ少将同士。話は出来るはず。

「高町なのはの養子に聖王のクローンがついたのだろう？なら高町

なのは次第でお前を追う組織に早変わりだな」
「そうならない為の根回しだよ。先に手を打っておきたい。輪廻の魔女よりも先に」
聖王教会をバックにつければ動きやすくなるはずだ。そうすればヤツよりも有利に動かせる。
「何より、向こうはリンネ一人。動かすにも無理が生じるはずだ。だからこっちはそれ以上に人材を集めればいい」
「・・・うまくいけばいいな」
C．C．は其処で黙ってしまった。何か知ってるのか？まだ隠してることがあるとでもいうのだろうか
「私はお前でお前は私だ。お前に不利になることはしないさ。そうだろう？共犯者」
「フン。お前こそ魔女だよ」
「幻影の魔女とでも名乗るかね。お前の通り名を取って」
フン。と無表情のまま鼻を鳴らして黙る。何も出来ない俺の傍に居てくれるだけでも充分魔女だよ、お前は――――。
『あと１５分程で聖王教会領地へ到着します』
津名魅から通達。目的地への到達時間を教えてくれた。
「よし。到着次第騎士カリムと会う。無理矢理でもだ」
アポなんぞ今更取っていられない。それなら強制的にいくしかない。立場は悪くなるが話を聞いてもらうには時間が許してくれないのだ。

それと――――――

「津名魅。例のアレは用意できてるのか？」

『メインブリッジ後部壁部にて準備済みです。今すぐにでも着れますが』

「そうか。すまないな。こんなことまで」

津名魅に促されて後部壁へと向かう。皆が俺の行動を見ている。

「流石にこのまま動くのもな。ということでバリアジャケットを実際に布で作っただけだよ」

壁が扉のように開かれると其処にはバリアジャケットそのままの服装が掛けられていた。

――――――ゼロの服が。ゼロの仮面が。

ハンガーに掛けられた服を手にして着替える。其処には遜色ないゼロの姿が其処にあった。

「フン。馬子にも衣装だな」

「そういうな。この顔ならこれだろ？それにな。お願いしに行くんだからこのくらいきちんとしないとな」

それで。C．C．にも用意してある服に着替えてもらう。

「これは・・・」

「そういう、ことだよ。俺のやりたいこと、わかっただろ？」

「フ・・・全くお前は楽しませてくれるよ」

クス、と笑いあう俺たち。これは同一だから通じる何かなのか。

C．C．は服を受け取ると着替えてくる、と言ってブリッジを出て行く。

『聖王教会到着。上空に出ます』

津名魅の声が通る。すると眼下に聖王教会が映し出された。

さぁ、此処からが本番だ。なんとか管理局に対する手を打てればいいんだが。

「最悪でも関わる事のないようにする、か。良ければ手を貸してもらえれば、だけどな」

「管理局の賞金首に手を貸してくれるか？教会ってのは相手が話が悪いかも知れねぇぞ？」

「それでもだよ。やるしかない。手を貸してくれるなら管理局の雑多を相手に当てれば良いしな。身を隠せれば尚いい」

メインどころでなんか考えてない。要は聖王教会がどう動くかで俺たちの今後も変わる。

「いくぞ。皆ついてきてくれ」

「C．C．は？」

「あいつにはあいつの役割があってな。後からだ」

あいつには念話で話してある。だからこそのあの服だ。

「今の俺に従ってくれるか判らないが・・・信用はしないといけないよな」

メインブリッジから俺達は降りようとした所で聖王教会から通信が入る。

『聖王教会暫定代表カリム＝グラシアです。その艦船に乗っているのはミラージュ＝ヴィジョン少将で間違いありませんか？』

騎士カリムから通信だ。暫定代表として送ってくるとはな。もしかして手を先に打たれたか？

いや、あれからまだ数時間も経っていない。だとしたらリンカの手が早すぎる。

何よりも聖王教会に対して其処までの発言権があるというのか？

『我々は貴方が管理局で行ったことは既に周知しております。それを知った上で我々聖王教会は全ての施設、所属員に対して一切の関わりを貫く事を管理局との話し合いで決定しました』

ちっ！！やはりそうきたか！リンカめ、手が早いぞ！！

『そのまま降りてくるなら捕縛し、管理局に連行する心算であることを留めてもらいたい。これは聖王教会全ての総意であります』

くっ・・・いい所でカードを切ってくるな。俺の力がなくなってることも知っていそうな流れだ。

「どうすんだよ。やっちまうか？」

「いや、向こうは言われただけで動いてるだけだ。向こうに不備はない」

だったらここは引き下がるべきか？だがそれは逃げることに・・・・・くっ、選択肢がないじゃないか。

カリムＳｉｄｅ

管理局から通達が来たのには驚いた。お互い不干渉の部分があるのでこういった連絡事項はないと思っていた。
だがそれはいきなり訪れた。

『管理局少将ミラージュ＝ヴィジョンの捕縛。連行』

私は驚きのあまり目を丸くしてしまった。機動六課では手を尽くしてくれた彼の捕縛なんて。
一体本局で何をしたのだろうか。
同じ少将の階級を持つ彼の話しも聞きたかったがもし関わりを持てば最高評議会は聖王教会に対して不干渉を解除すると言ってきた。

つまり――――事実上の反旗。いえ、潰し合いね。いつでも出来るという力すら見せた。
だから聖王教会の脇にある巡礼地である山間部の一帯が消し飛ばされたのには更なる驚きがあった。
あれがもし教会に落とされたらと思うとゾッとする。

それなら・・・ミラージュ少将とは不干渉を通すしかない。私達はその一瞬で巡礼者や信者たちを人質に取られたのだ。

「・・・ごめんなさい」

誰にも聞こえない声でつぶやく。
円卓からは管理局とも繋がりの濃い私が暫定代表としてミラージュ少将との話し合いに付けという。

故に。連絡係としてこうして通信を行っている。

『もし、降りてくるならこちらは全力を以って対処します。貴方の事は最高評議会より聞いてます。力を失っている、と』

降りてこなければいい。そうすればもう関わらずにいられる。

上空に停滞している艦船・・・確か津名魅と言った筈。通信は返ってこない。

「考えている？これからの対処・・・？」

数分が長く感じる。いやな時間。もっと速く終われば良いのに。

出来るなら、もうこの世界にはきてほしくない。こんな形になるのなら。

「すっかり仲間意識が出来ちゃったわね・・・ねぇシスターシャッハ」

「それも仕方ありません。彼は――――――私たちには優しかったですし」

「それでも討たなければならない。これも聖王教会の安寧の為に・・・」

「騎士カリム」

後方で待機しているシスターシャッハに振り向き、指示をだす。

「もし、降りてくるようだったらシャッハが指示をだして。私はここから彼らに示威します」

「了解しました。では行って参ります」

シャッハが部屋から出て行く。私は・・・・・きっと嫌な女ね。

「出来れば手を貸したかったけど・・・そうもいかなくなっちゃったわね」

ごめんなさい。心の中で何度も謝る。その時だ。

轟音を上げて外から突然教会が切り裂かれた。

すずかＳｉｄｅ

うん。此処にいれば来ると思ってたよ。
だからこそ一旦地球に戻って助っ人を連れてきたんだもん。
白いドレス型のバリアジャケットを着込んで教会を見下ろせる大地に立つ。目の前には聖王教会。
教会？そんなのミラージュくんの邪魔になるならいらなくない？

「これも愛だよね」
「歪んでるねぇ。でもそういうの好きだけどさぁ」

伸ばした爪で聖王教会に一撃を与えた私の後ろに立つ二人。

白いドレスに金髪。赤い瞳の女性と、眼鏡をかけた黒衣の男性。二人が総じて持っているものなど男性の小型のナイフくらいだ。だがそれが脅威。小回りの聞くナイフの方が男性にとっては最強の武器なのだ。

「しっかし、あのときの子供が危機だって言うから来てみたけど。本当にピンチなのね」

「だけど、助けてくれた恩があるなら助けないと」

「まぁ――――そうだけどね」

女性の伸ばした爪が下から上へと振られる。たったそれだけで聖王教会は多大なダメージを受けていく。

「はい。あの時の、というわけじゃないんですが。助けてくれたらと思います」

「あのね、すずかちゃん。ここに来た時点でもう助けてるの。だって私たちが――――」

「吸血姫とその騎士が――――――――――――――負けるはずがないだろう？」

眼鏡を外した男性と女性の声が重なる。それはとても――――――強くて優しかった。

第百十九話　吸血騎

アルクＳｉｄｅ

すずかに連れられてきてみればなんなのこの世界。
あの時の坊やが危ないから助けてくれって言うから二つ返事で来たはいいけど。
魔力が満ち溢れてる。こんなの普通じゃないわ。

「でもまぁ、あの戦艦に坊や・・・ミラージュがいるって？」
「はい、師匠。絶賛ピンチ中です」

弟子の言うには魔力とか力を奪われたっていうけど。

「まぁあの力なら奪われるのは当然っていうか。魅力的だもんね。あの時の子供であんな力はないわーって思ったけど」

若干９歳にしてあの時の圧倒的な力は凄まじい。あれから１０年。どれだけ力をつけたのか。
楽しみではあったんだけど。まぁ仕方ない。ないものをねだるような歳でもないし。

「アルクェイド。歳を考えてる場合か？」
「もー、煩いなー志貴は。乙女の純情くらい察してくれてもイージャない」

横に立つ男が、志貴がツッコミをいれてくる。あ、これって夫婦漫才ってやつだよね。勉強したよ。

「しかし、千年城に君がやってきたのには驚いたな。あれは普通じゃ見えないし入れないはずなのに」
「といいつつ自分は入れましたみたいな事いうのはちょっと・・・・ドン引きです志貴兄さん」
まったくこの子ってば面白くなっちゃって。これもあの子の影響なのかしら。
「で？これからどうするの？」
「あの戦艦に行きましょう。ミラージュくんがいるはずですし」
「あっちは？なんかやる気みたいだけど」
「放っておいてもいいんですけどね。掃除しちゃってもいいかもしれませんが・・・ちょっと聞いてみますね」
すずかは念話を開始した。その間私たちは暇でしょうがないので視線で一人ずつ殺してみた。精神的に。
すずかＳｉｄｅ
『すずかです。ミラージュくーん？』
あれ？念話が届かない。なんでかな。着拒？だとしたら許せないなー。
『おーい。きこえてるー？』

おかしい。返事がないよ？しょうがない。あとは誰がいるかな。セイバーさんならいるかも。セイバーさんに念話してみよう。

『もしもーし。セイバーさん聞こえます？』

『すずか？どうしました？というか下にいますね。さっきの攻撃もすずかでしたか』

『あ、正確には私ともう一人です。師匠連れてきてまして。ミラージュくんに今念話したんですけど届かなくて』

『マスターなら念話も出来ない程に一般人ですから。念話は届いてるけど聞こえないのでしょう。私でよければ伝えますが』

『お願いします。下のこの・・・教会の人たちどうします？って聞いてください』

『了解しました。少しお待ちを』

そうか。完全に一般人化しちゃったのか。じゃぁしょうがないね。セイバーさんからの連絡待ちなのを伝えると手持ち無沙汰になった。だからと言って攻撃を再開するのも問題だろうし。

「俺たちが力をつけてきたらあいつは力を無くしてるってのも皮肉だな」

「しょうがないんじゃない？あっちはどうやら正攻法なヤツじゃなさそうだし」

正確な情報を得てないのでなんともいえないのがつらいところ。でもさ。合流すれば多少は情報得られそうだよね。

『すずか。今大丈夫ですか？』

『あ、セイバーさん。うん、大丈夫』

『マスターからはすずかはそのまま待機でお願いしたいと言うこと

です』
『待機？何かこっちですることがあるのかな？あと師匠たちは？』
『えぇ。話し合いの後、もしうまくいかないから武力行使も止むを得ないと。真祖とその騎士は津名魅にきていただくことになります』
そうなんだ。まずは話し合いからか。でも私だけ残るのか。
『それだけ信頼しているのでしょう』
セイバーさんからフォローきたよ！うん。そうだよね。じゃぁ私はこのまま待機。
「師匠と志貴さんは今転送されますね。上の津名魅に向かいます。多分、直接逢えるはずですよ」
「そっかー。あの子とはもう１０年もあってないからなー。懐かしいね志貴」
「今はそういうアルクェイドの明るさも必要なんだろうな。ある意味羨ましく思うよ」
「なんだかそれって志貴が差別してる感じに見えるんだけど？」
なんて会話してると上から転送ポートが降りてきた。
「これに乗れば上まで直通でいけます。私はこのまま残って待機だそうなので」
「そっか。じゃぁ後でね。待ってるよん」
「はい。お気をつけて」
転送ポートに送られていく姿を見送る。さて、私はどうしようかな。
「一人で突っ立ってるのもアレだし。ちょっと降りてみようか」

待機？なにそれ。私は好きに動いちゃうよ？

「ということでしゅっぱーつ。何か屋台とか出てたらいいなー♪」

念話回線は開いておこう。いつでも聞けるようにね。
管理局の制服だとちょっとやばいかな。このままバリアジャケットのドレスでいいか。

ミラＳｉｄｅ

セイバーがすずかと念話をした後、津名魅に頼んで転送ポートを開けてもらう。
まさかな。すずかが真祖を連れてくるとは思わなかった。
何故来たのかは聞いてもよさそう、だが・・・問題はその後だ。

「転送ポートをこちらに回してくれ」
『了解。ポート接続。ブリッジ横に設定します』

ブリッジ横のゲートに二つの人影が出てくる。金髪と黒髪。存在しているだけで威圧しそうな存在感。今の俺にはきついな。

「久しぶりだな。ネロ＝カオス以来か」
「そうね。貴方と直接会うのはそのくらいかも。しっかし、本当に弱くなったのね。うすっぺらいわ」
「そういうな。苦労してるんだ」
「アルクェイドも落ち着け。慣れない世界に来てるからってそう尖

るなよ」

「そんなことないもん。志貴は私の事ぜんぜん理解してくれない！」

あれ？こいつらこんなだったか？

「ともあれ、ミラージュ。俺たちは君の味方として来た訳だが。情報がぜんぜん足りない。教えてくれないか。今の状況を」

志貴。直死の魔眼の持ち主。昔は死を見る度に頭痛を起こしてたが。どうやらここ１０年でそれは取り去ったようだ。アルクェイドの千年城も見つけ出してアルクェイドと一緒にいることを決めたらしい。

そして俺は持てる情報を教えた。

リンカの事。神の力の事。今の管理局との情勢の事。

流石に転生の事まではいえなかった。Ｃ．Ｃ．に口止めされてたからな。

「ふぅん・・・なんだかすごいことになってるな。そのリンカってやつをなんとかすればいいんだろ？」

「それが出来れば一番いい。それから俺の力を取り戻す」

「――――その後は？」

志貴がまっすぐ俺を見てきた。そうだ。その後の事はまだ言ってない。だから、俺はこの言葉に決めた。

「俺の仕事はイレギュラーの排除。俺がイレギュラーだっていうなら俺はイレギュラーを排除するだけさ」

軽く肩を竦める。其処にはもう沈黙しかなかった。

つまりは「俺を殺す為に俺の力を取り戻したいから力を貸してくれ」と言ってるようなもんだし。

「それで貴方は納得するの？この世界に見切りをつけられる？本当に？後悔も何もなく去れる？」

アルクェイドの鋭い指摘が来た。そうだ。今のままだと俺はキット後悔して消えていくだろう。

だからこそ。後悔しないように生きて生き抜いてやる。

「生きる気があるならいいわ。手伝ってあげる。ただし、自分から命を投げるようなことあったら私があなたを殺すわ」

「そうしてくれ。今の俺は前みたいに色々出来るわけじゃない。だから出来る範囲で１００％の事をするだけだ。それを見極めてくれ」

アルクェイドは俺の言葉に頷いた。これで味方が増えてきた。他にも連絡の取れないイルジオンリッターもいるが・・・。

「あとはどう動く？これから下にいくのか？」

「教会の方でかくまってもらおうと思ったがそれはダメのようだ。補給が出来ればよかったんだがそれも断られた。

あとは体勢を立て直してから本局に特攻かな」

これだけの人数で全管理局員を相手にするというのも無謀だけどな。だが・・・俺が考えうる全員を揃えられればいけるはずだ。

「ファントム隊、レグルス隊。何よりもアルクェイドと志貴が来てくれたのは大きな誤算だ」

真祖とその騎士。これは大きな転機になる。

「本当はもう一人つれてこようと思ったんだけどね。体よく向こうの騎士さんに断られた。多分、可能性は低いよ」

そいつは俺よりも強いから、なんて志貴が言う。

「向こうの魔眼は俺よりも完成されてる状態だから。きっと君にとってもいいことだと思ったんだけどね」

「式、か・・・」

「あぁ。あいにくと俺とアイツは相容れないけど。でも状況を考えると今はそういうところじゃない」

式と志貴。同じ直死の魔眼を持つモノ。生まれて直ぐに持つ死の線を見ることの出来る異端者。

死の構造を理解して、具象すら殺すことの出来るバロールの目。

「高望みしたら多分ダメってことなんだろうな。それに二人が来てくれた事に感謝するべきだと思うよ」

「そうか？ならいいんだが」

無力の俺が管理局を突き抜けてリンカのところに行くにはみんなの手助けがないと無理だ。

それなら少しでも戦力を蓄えたほうがいい。

セイバーＳｉｄｅ

マスターの知己らしいお方と聞いていた。しかしあの女性の方は真祖の姫ではないか。
アーチャーも険しい顔をしてみていますね。それを真祖の姫は笑って受け流してる。ここら辺は技量がものをいっているようです。
しかし・・・直死の魔眼。真祖の姫。此処にきてとんでもないカードを引いたようです。
ギルガメッシュと連絡が取れない以上、この戦力は助かりますが・・・。

「アーチャー。ランサー」
「わかっている。皆まで言うな。こっちから手はださん」

わかっているならいいのです。余計なことはしないほうがいい。

志貴Ｓｉｄｅ

「両儀の事はおいといて・・・少し君に話があるんだけどいいか？」
「なんだ？」

俺はずっと思ってたことを口にする。ほとんどこれのために来た様なもんだ。
アルクェイドを護る力。真祖の騎士という意味合いから真祖を護る騎士という意味合いへと変えようと。
力を無くしたミラージュにはこの称号を背負う事はない。
それなら。俺が有効活用してやる。

「君は目も、真祖の力も封じられたみたいだけど。俺がその目の変わりになるよ。だから――――その通り名を俺にくれないか？吸血姫を守護する吸血騎の名を」

真祖の力は俺は持てないけどさ。目の代わりは出来る。
あれからずっとこの目の使い方を鍛えてきたんだ。今じゃもう死を見ても頭痛もない。

秋葉に言わせればそれはもう壊れてしまったのではないかと。そうかもしれないけどさ。
先輩は・・・何も言わずに笑って抱きしめてくれた。自分を大事に、と言わんばかりに。

誰かを護る為に得た力は揮わなければ護れない。力で力を抑えることになるけどそれで世界がよくなるのなら俺は悪にでもなる。

「吸血騎、か・・・あぁ。もう俺は名乗れないものだからな。いいよ、吸血騎」

少し考えたのかミラージュは少しの溜めの後に了承した。
ただの了承確認。それだけなんだけど。でも確認は取れた。これで名乗れる。
もとの世界に戻ったら広めよう。死徒になった俺なら――――きっとこれでちょっかいを出すやつも減るだろう。

ミラＳｉｄｅ

もう俺の体は不死じゃないし真祖の力もない。だったら友好に使えるやつに渡してもいいと思った。
称号は記号。受け取ったやつがどう受け取るかによって変わる。
だからだ。志貴に吸血騎の称号を渡してもいいと思った。

「大事に使ってくれよ」
「わかってるさ。先代」

志貴が離れていく。どうやら用件はそれで終わりらしい。
アルクェイドのところに行って様子見の為にモニタを見ている。
そのアルクェイドは津名魅と話していて色々とこっちの世界の事を聞いているようだ。

こっちの事はこれで終わったみたいだし、話を続けよう。
まずは聖王教会と話し合う。降りるのがダメならせめて不干渉を貫くように話す。
出来るだけ穏便に。

「暫定代表騎士カリムに連絡。モニタを回せ」

津名魅が回線をつなげる。モニタには騎士カリムの顔が映っていた。

「聖王教会暫定代表騎士カリム。管理局少将。その君と今後につい

て話し合いがしたい」

第百二十話　夜天の王　英雄の王

はやてＳｉｄｅ

何か外がドンパチやかましい。とはいえ窓もないような部屋で外が見えないから何が起きてるか全く判らへん。

「外やかましいな。シグナム、ちょっと静かにさせてきて」

「そのためには外に出なければなりません・・・」

あぁ・・・もう面倒やー。部屋から出られへんようになって数時間。軟禁状態なんもどうしたらえぇねん。

ミラくんに一番近いからってこれはないやろ。

『やぁ。八神はやて二佐。こうやって顔を合わせるのははじめましてかな？』

壁にモニタが開いて一人の女性の顔を映し出した。

なんや数時間前に聞いたことある声な記憶があるけど。

「だれやあんた」

『最高評議会に就いたリンカ＝ネーションだよ。あぁ、僕の事は気軽にリンカと呼び捨てて構わないよ』

「その最高評議会のお偉い方がわたしに何の用や？こない軟禁状態にしたんもあんたやろ」

『あー、そうか。やっぱり気付いてるみたいだね。そう、君を其処に閉じ込めたのは僕だよ。だが信じてほしい。君を傷つけたくないだけさ』

『だってそうだろう？君の恋仲でもあるミラージュ元少将が謀反を

起こしてしまって賞金首・・・次元犯罪者になってしまっただから当然の処置なんだ』

『君に被害が出ないようにするための必要最低限の処置だって事はわかってもらいたいね』

矢次早の言葉攻め。フン、何が被害が出ないように、や。こいつはわかっててやってるな・・・・。

せやったらこっちだってやったるわ。

「最高評議会ともあろうお方にご心配お掛けしまして心苦しいところですね。所でその元少将ですが一体何をしての罪状でしょうか」

『本来なら君は知らなくていい事だけどまぁ、特別だよ？彼の力は人以上の力、ロストロギア認定になったんだ。なので封印指定をしようとしたんだけどね』

『彼は逃げた。まぁ力自体は封印したから害はなくなったけどまた起こるかもしれないじゃない？』

『だから出来れば目の届くところで見ていたかったんだけど逃げられてしまってね』

『之から追いかけに行こうとしてるんだけど中々出願者が出てこなくってねぇ・・・？？』

当然やろ。力がなくなったなんて誰が信じるねん。第一、過去の実績が既に根付いとる。馬鹿正直に受けるやつがおるかい。

『出来れば君に行ってもらおうと思ったんだけど』

「あっはっは。ノーサンキューですわ。お断りします」

『となると、其処から出られなくなるけどいいのかい？』

「構いませんよ。なんならここでじっとしとりますわ」

そうかい？と言ってモニタが消える。

多分、いや、ミラくんを陥れた張本人。そんでもってここにわたしらを閉じ込めた本人なのは今の会話でわかった。
しかもミラくんに充てようとしとったな。アホめ。んなことするわけないやろ。

「とにかく此処からどうするかを考えんとな。シャマルもまだモニタに向かったままやし」
「しかし主はやて。どのように?ただこのまま待つのみというのは」
「せやね。まぁいざとなったらミラくんと同じ道でもいいかなーって思うんやけどどうやろ?」
「あたしらは元々管理局と敵対してたかんなぁ。別に昔に戻るだけだけど・・・はやてはそれでいいの?」
「・・・過去の罪は消えへん。そしてもしそうなったらこの罪も背負うことになる。今度はキャリアを剥奪されて投獄されるかもしれへんなぁ」

でも第一、今の管理局にゃ何もしてやる事が出来ひん。というのも多分あの最高評議会の女がネックなんやろう。
あの頭をぶったたけば元に戻るかもしれへんねぇ。

なのは

教導から帰ってきた私は本局に入った途端に目を疑った。
混雑した局内はまるで戦場のように慌しく、殺気立っている。

「これ・・・局員全員が動いてるっぽい?仕事放って何やってんの・

・・」

重要な仕事で動けない局員以外は動いてそうだなぁ。そんなにミラ君捕まえるのに躍起になってるって事？
よくよく見たら同じ教導隊員までちらほらみえてるよ・・・・。

「全く・・・少しどうなってるのか知りたいんだけどなぁ。情報が全く来ないんだけど」

もしかして私ハブられてる？情報操作されてるんじゃない？
そう思ってもいいくらいに良くわかってないんだけど。

「はやてちゃんはもう聖王教会に行ったのかな。フェイトちゃんはまだ帰ってくる事はないと思うけど・・・」

はやてちゃんは最初の時にした連絡で聖王教会に行くって言ってた。
順調に向かってるならもう着いた頃かな。
連絡してみようか。もしかしたら新しい情報が手に入るかも。

「レイジングハート。はやてちゃんにお願い」
『ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ・・・・・・・・・』

レイジングハートが回線接続をしてる間に私は移動を始める。いつまでも入り口にいるわけにも行かないしね。
少し歩けばいくつかの部屋の前に衛兵が立ってるのがあるけどなんだろう。物々しいね。

『ｍａｓｔｅｒ、つながりません』
「え？どこか遠くにいっちゃってるのかな。聖王教会エリアだとそんなに離れてる？」

『私のサーチャーならエリアはカバー範囲内です。ですが、届かないというよりは見つからないのです』

え。じゃぁ何処にいるんだろう。

『ｍａｓｔｅｒ、通信が入ってます。どうしますか？』

「通信？誰から？」

『最高評議会。リンカ＝ネーション様からです』

最高評議会。今噂の存在だ。何よりもミラ君を現状に落としたであろう人物の所属する組織。管理局のトップ。

そのトップが私に何の用だろう。

「いいよレイジングハート。繋いでくれる？」

『了解しました』

レイジングハートが了承すると直ぐに小型モニタに顔が映し出された。黒い髪。黒い瞳。黒い服。

ぱっと見、私やはやてちゃんのような地球出身の人みたいな印象。

『やぁ。やっと繋いでくれたね。えっと・・・エース・オブ・エース？』

「いえ、申し訳ありません。少々立て込んでおりましたので。思考評議会ともなると管理局のトップ。そんなお方が私に何か御用でしょうか」

『やだなぁ。なんだか警戒してないかい？僕はそんなに噛み付くほど凶暴じゃないよ？』

屈託のない笑みだ。だがそれには裏がある。そう見える。仮面を被ってる様にしか見えない笑みだ。

『いやなに。ほら、つい先刻に広域次元犯罪者として登録されたミラージュ＝ヴィジョン。彼とは昔からの知り合いだって言うじゃない？』
『だからどんな顔なのかなぁって思ってね』
『勿論他意はないよ？だって僕達同性同士じゃないか』
『そういうのはもう間に合っているんだろう？』
『でもそういう話をしたくて回線を繋げてる訳じゃないよ？』

この人はこういう話し方をするのだろう。最初に語りだした時もそうだった。

「失礼ですが、そろそろ本題に入ってもらえるとうれしいのですが・・・」
『あぁ、失礼したね。そうだね、本題というのは他でもないよ。ミラージュ元少将を捕縛してきてほしいんだよね。君に。直々に』

やっぱり。私は心の中で確信を持つ。大体そうだ。こういう知り合い同士の状況を利用するのはよくいる。
今回もそうなんだろう。でもそれで向こうに着くって事も有り得るんだよね。
私がミラ君の所に行ったらまず向こうの仲間になると思うんだ。

『行ってもらう代わりに僕が子守をすることにしたよ。ヴィヴィオ、だっけ？かわいいね彼女』
「　　っ・・・・・・・・・」

まさか・・・あれ？そんなまさかだよね。チラッと今モニタの隅っこに見えた髪の毛って・・・・。
だって今は学校に行ってるはず、だよ？

『聖王教会も今は危ないからね。こっちで保護させてもらったよ。何せ彼は今聖王教会の真上にいるんだから』

こんなに手を先に打たれるなんて。もう私は断ることが出来ないじゃない。

『可愛い養子がどうなっても――――――いいのかなぁ？』

「・・・・何がお望みですか」

悔しいなぁ。こうもあっさりとやられちゃうなんて。大事な、護るべきものがこんなにあっさりと。奪われちゃうなんて。

『さっきも言ったよねぇ。ミラージュを捕縛してきてくれればそれでいいよ。ヴィヴィオもちぁゃんと返してあげるよ』

「その言葉、本当ですね・・・・？」

『もっちろんだとも。僕は冗談は好きだけど嘘は嫌いでね』

「わかりました・・・・その指示を受けます」

『うん。うん。物分りが良くて助かるよ。序でにフェイト＝ハラオウン執務官だっけ？彼女にも伝えといてね。それじゃっ』

そこで回線はブツリと切れた。私の心の中にどす黒くもやもやしたものが生まれては感情が爆発しそうだ。

なんなんだろうこの気持ち。すごく・・・なんだか嫌だ。

「しかもフェイトちゃんを巻き込めって・・・何考えてるの。そんなことできるわけないじゃない」

でも。実際に相手側にヴィヴィオがいる以上は手が出せない。更に下手な動きも出来なくなった。

エース・オブ・エースなんて呼ばれても結局は人の子なんだよ。

『ｍａｓｔｅｒ・・・・』

「うん・・・大丈夫だよ。私は私でうまくやるから」

きっと。うん。ミラ君もこういう感じでやられたのかもね。

ギルＳｉｄｅ

津名魅専用ドックの片隅に我は潜んでいる。よもや王たる我が隠れているなどとはな。

黄金の鎧を身に着けながら荒い息を整える。胸には小さな穴。そして其処から流れる血。

「しかし、この傷収まらぬ。血も止まらぬし。英霊以上の存在の一撃だったということか・・・？」

胸に空いた一つの穴。胸から背中にかけて貫通している。痛みはない。ただ、血が流れているだけ。

空から飛来した一条の光の矢が我を貫いた。意識は一瞬だけ飛んだが直ぐに立て直したのだ。我△。

「くっ・・・しかしマスターも酷だな。局員を殺さずに何とかしろとは・・・・」

確かにこやつらに罪はない。あのリンカとかいうやつのいいように操られてるだけだというし。

王は民に優しいからな。手をかけるのは情けである。

だがどうするべきか。之から此処にただ只管隠れているか？この英雄王が。

だからこそ我は立ち上がるべきなのだ。そう、今まさに。

「フン。どうせ隠れていた所で我の高貴な気配が見逃さぬ。民よ、我なら此処にいるぞ」

「見つけたぞ！ギルガメッシュがいたぞー！！！」

「む、何故此処とわかったのだ！！？」

拳を上げて立ち上がったところに局員に見つかった。この馬鹿どもめ。我を名指しで呼ぶなど！

むぅ、血が止まらぬ。仕方ない。どこか救護の場所があるか探しにいこう。

「さらばだ諸君。王たる我にこれ以上関わるでない！」

我は一気に加速してドックを出て行く。そうすれば本局内をうろつくことになるのだが・・・如何せん鎧姿というのは走るのには適しておらぬ。

「これだけの傷を負っておいてまだ聖杯に帰らぬとなると・・・・どういう状態であるか。まだ我は現世にいられるということか」

本局をうろついているとあれは確か高町とかいう、恭也の妹か。何

か回線を開いて会話してるな。
ならば向こうにはいかずに反対方向に行こう。

少し歩いているだけで血の痕跡がたらたらと垂れている。これでは我の居場所を教えているようなものではないか。

「フン。我の居場所すら既に隠し通せる事の出来ぬほどに高潔であると見よ！」

よし。すっきりした。しばらくこのまま進もう。たまに武装隊やら魔導師が掛かってくるがそんなもの王の財宝を開けば虫けらも当然よなぁ。
そのまま進んでいると物々しく衛兵が数人立っている部屋があった。

「貴様たち、そこで何をしてるのか我に言ってもよい」

我と話が出来るだけでも立派なものだぞ塵芥。さぁ、疾く答えるがいい。

「な、何だ貴様！？というか貴様はギルガメッシュではないか！？お尋ね者ミラージュ＝ヴィジョンの腹心、ここで討ち取る！」

ほう？我に歯向かうか。いいだろう。その命を以って授業料として支払うがいい。
と、命はダメか。

「気が変わった。命半分と首置いてけ」
「貴様が置いていくんだなぁっ！？」

衛兵が向かってこようとしたのでゲートを開く。一本一本がロスト

ロギア級の宝具が頭を見せる。
それを見た衛兵は驚きの表情をあげた。どうやらこの宝具の噂くらいは聞いたことがあるようだ。中々見所のあるやつではないか。

「さぁ雑多。須らく向かってくるがいい」

宝具をいくつか打ち出せば衛兵たちが声を漏らす前に倒れていた。
しかし衛兵が護るほどの部屋か。何があるのか誰がいるのか。少しばかり気にはなるものよ。
扉に向かって一つばかり宝具を射出する。派手な爆発音と共に扉が破壊された。

「さぁ。その中身を我に見せろ」

もうもうと立ち込める埃の先に見えたのは――――――我と同じ王の名を持つ夜天の王とその守護騎士の姿だった。

はやてＳｉｄｅ

これからどうしようと考えていたら突然扉が爆散した。
なんやろ、このデジャブ・・・。

「な、なんやのー！？」

いきなり扉が破壊されるのを見たのは機動六課開始日から一週間後のミラくんが来たとき以来やな・・・・。
なんて思っとったら埃の向こうから金ピカが見えた。

「ギルガメッシュ？」

わたしの知ってる中で、管理局の中で金ピカなのはギルガメッシュしかおらん。
なので直ぐに名前が口に乗って出てきた。

「ふむ。その声は夜天の王か。こんな場所で何をしている」

埃が完全に消えていくと其処には予想通りにギルガメッシュが立っていた。
シグナムたちがざわつくけどそれを制して、

「いやぁ、最高評議会に一杯喰らわされてもぉてな。閉じ込められとったんよ」
「なるほど。で、此処でただ待っていたということでいいか？それとも之から抜け出す算段でもしていたか？」
「後者やね。ここで閉じ込められたまま夜天の王は終わらんわ。ミラくんの所にいかないけへんし」
「マスターか。あやつなら聖王教会に向かったが」

あぁ。聖王教会に言ったというなら多分カリムのところやろ。
それなら話はわかる。

「ほんならわたしらも向かったほうがえぇね。わたしが行けばあっちならカリムとも話がつけられそうやし」

「だがそうも言っていられなくなっている。マスターの魔力・・・いや、力の全てがない状態が知られていてな。更には広域次元犯罪者の烙印つきだ。
　我がマスターながらなんとも珍妙な人生だと思わないか？」

ギルガメッシュはミラくんの事とは対等に考えてるみたいやね。主従ってそういう感じなんか？うちとことは違うな。

「我はもうマスターのところに向かうが・・・貴様はどうする？もしついてくるのであればついてくるがいい。
　お前には選択肢を与えてやる。此処に残って管理局の狗となり余生を送るか、愛するものの元に向かい、共に覇道を進むか、だ」

ギルガメッシュはわたしに未来を選べといってきている。
このまま管理局に残って今までの道を進むか、それともミラくんと一緒に歩き続けるか。
選択肢を迫られる。

「さぁ選べ。もしマスターを選ぶのなら我が確実に送り届けてやる」
「わたしはミラくんのところにいきたい。此処でくすぶってるつもりはあらへん」
「よく選んだな。そっちの守護騎士。貴様らはどういう考えだ？」

シグナムたちに視線を向けるギルガメッシュ。わたしの我侭で辛い思いさせてまうかもしれへんけど堪忍な。

「主が選んだことなら従うまで」
「だぁな。はやての選んだことに間違いはなかったしな」
「そう、ですね。それが一番なのかもしれません」
「主の決定に従うまでだ」

・・・まったく。皆バカやね。わたしも、皆も。

「ギルガメッシュ。わたしたちの意見はこうや。さぁ、これからどうするんや？」

「津名魅に乗せるはずだった脱出艇が専用ドックに残っている。それが動けば直ぐにでも津名魅に連れて行く」

「了解や。んじゃ、その脱出艇のあるところまでいこか」

既に開け放たれた部屋を出てギルガメッシュに道案内を頼み従う。ミラくんの旗艦でもある津名魅専用のドックにそれはあるという。

ギルガメッシュが路を切り開くのを後ろで見ながら追いかける。あの王の財宝とかいうのは、間近で見ると本当に酷い力やなぁ。そういえばミラくんも同じの使っとったような？

「マスターの力は酷い話が寄せ集めの力だからな。だから我の財宝もエアも使える」

ギルガメッシュの説明が入った。心を読まんでほしいなぁ。でも説明はありがたい。

「ほぉかぁ。んじゃ、他にも使えるんはあったん？」

「そうだな。贋作者の投影も使っていたぞ。あとはまぁ色々だ。今説明してもお前たちには理解が出来ん」

む。そういわれるとなんだか腹が立ってしゃーない。

「詳しくは本人から聞くといい。簡単には口を割りそうにないがな。それもまたこのつまらぬ世の中の楽しみ方でもある」

「・・・ギルガメッシュは今の世の中がつまらないと思うとるん？」
「当然だ。この世界には愛でるべき財がない。有るとすればそれはロストロギアと呼ばれるものたちだ。そのようなもの、大抵が破壊衝動の宝物であったりとはずれが多かったがな」

そもそも財の意味合いが人によって違うという。
この人の場合は琴線に触れるかどうかという意味合いらしい。

「だが財はモノだけではないということはマスターからは見て取れた。マスターの貴様に対するものは財あるものといえよう」

う・・・なんや照れるなぁ。まさかギルガメッシュがこないなこと言うて来るやなんて。

ギルガメッシュを先頭にわたし、シグナム、ヴィータシャマルザフィーラと続く。
少しばかり走ってると専用ドックに到着した。

「あの角にある小さいのが脱出艇だ。さっさと乗り込め」
「ギルガメッシュはどうするん？」
「実際に動くだけならいいがハッチを空けるには外から動かさないといけないのでな。少々貴様たちに恩を売ってやろう」

ギルガメッシュに恩かぁ。高く付きそうやな。
一旦離れてわたしたちは脱出艇に乗り込む。それをギルガメッシュが援護してくれて無事に乗り込めた。
ギルガメッシュはそのままドックに立ち、ハッチの方へと向かっていった。
天上には津名魅が開けたんかわからんけど大きな穴が開いた形跡があった。今はもう閉じてるけど。

「あれは津名魅があけた穴だ。今はそれはどうでもいいことだが。ほれ、開けるぞ」

ギルガメッシュがハッチを開けてくれる。それをじっと脱出艇の運転席に座って待つ。

ハッチの前に立って色々と弄ってる。

「開けるぞ。すぐに飛び出せ。あとは勝手に津名魅まで行くはずだ」

「ギルガメッシュはどうするんや？このままやと残ってまうやん」

「言ったはずだ。此処に残っていないとそれは出せない。だから我が残る。それだけよ」

あんた・・・そんなの嬉しいとでも思うとるんか。

「民を護るのが王の務め。貴様が王であろうと我の民に間違いはない。ならば民を安全に生(行)かせるのも王の務めよ」

「ギルガメッシュ・・・・」

あんたホンモンの王様や。わたしは夜天の王としてその言葉を忘れんようにするわ。

「さぁ、行け。それまでにここらの有象無象は掃除しておいてやる。マスターには言うでないぞ？」」

ハッチが開く。其処には外には――――――――――――見慣れた白い若き英雄が魔導師の杖を向けて飛んでいた。

その雄雄しき姿にわたしは笑みすら浮かんだ。なんていうかっこよさなんや。なぁ・・・・・

「あぁ。そうやな・・・・やっぱりそうなるんやな。なぁ――――――なのはちゃん」

第百二十一話　白魔導師の迷走

なのはＳｉｄｅ

早速だけど任務が来た。内容は反逆者の捕縛。ミラ君とは違う誰からしい。それが誰かまでは教えてくれなかった。
ミラ君の使ってた旗艦のドックから出て行こうとしてるらしいので外で待ち構えて捕縛せよ、と。

「随分と詳細まで事細かくきてたね。其処までわかってるなら直ぐ捕縛すればいいのにねぇ・・・？」
『そうならざるを得ない状況なのでしょう。我々は従うしかありませんので・・・』
「うん・・・そうだね。仕方ない。仕方ないんだよ」

そう思わないとやってられなくなる。仕事に忠実に。そうでないとわたしには歯向かう事すら、その牙すら抜かれたのだから。
そして今、わたしはその専用ドックの外。他にも武装隊の人たちが私の後ろで待機してくれている。
与えられた任務を忠実にこなすだけの人形になっちゃいそうだよ。

『しかしヴィヴィオはまだ最高評議会の元にいます。ここは大人しくしていなければならない場面です』
「うん・・・そうだね。絶対に助け出すまでは諦めないよ。ＪＳ事件でもそうだったんだからね」

レイジングハートがヴン、と淡い光で答えてくれる。そんな中で状況は一変する。

「ん、ハッチが開きそうだね。いくよ、レイジングハート」
『ＡＬＬ　ｒｉｇｈｔ』
ハッチが開くと其処には小型艇が動き出そうとしていた。あれが捕獲目標だね。小型艇っていうか、脱出艇みたいな感じだけど。
レイジングハートを向けて射出準備に入る。
「レイジングハート、射出シークエンス！ブラスター１！非殺傷設定で！」
『ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ』
まだ撃ちはしない。だけど変な動きを見せれば直ぐにでも撃つ。という意識を向ける。
しかし、ハッチが開いた其処にいたのは――――――私の視界に入ってきたのは。
「ギルガメッシュ――――――」
そして。小型艇に乗っていたのは。その窓から見える顔は。
「はやてちゃんまで・・・・なんなの。なんなの！これはっ！」
声を荒げて私は叫んだ。何故・・・この人たちが此処にいるの。
「高町教導官。捕獲対象です。反逆者ギルガメッシュと八神はやて元二佐。最高評議会からは第一級危険判定を受けております。
また、八神元二佐の部下であるシグナム元二尉達にも嫌疑が掛けられております」
私の後ろについている、今回からの任務についた部下が私に言って

くる。
何を言ってるのかな。だってはやてちゃんだよ?それにミラ君の腹心じゃない、ギルガメッシュさんって。

「高町教導官。行動しない場合は貴方にも反逆罪が掛けられます。それをお忘れなきよう。あぁ、念話も出来ませんので悪しからず」
「わかっています――――――――――」

もう、引き戻せないんだね。しかも念話も封じられた。これで話し合いをすることはもう無理だ。

「八神二佐。それとギルガメッシュに告げます。投降の意思はありますか?」
「我をついでのように言うとはなんたる愚か者か!」

はやてちゃんに言ってるつもりがギルガメッシュさんが喰らいついてきた。

「しかも其処な女。我を呼び捨てにしていたな。命を捨てる覚悟は出来ていような・・・・・?」

う・・・やっぱすごいな。私たちの世界の英雄は。ただの言葉だけでこんなに気圧されるなんて。
後ろの武装隊もこの気には負けてるね・・・。少しは奮い立ってもらわないときついんだけど。

「私は――――――貴方たちを捕縛する任務にあります。抵抗及び歯向かうのであれば容赦なく撃墜することを宣言します」

言った。いってしまった。ごめんねはやてちゃん。私を恨んでいい

よ。だから――――ここでおしまいにしてしまおう。始まる前に。
ギルガメッシュさんはもう表情で怒ってるのがわかる。でも仕方ないんだよ。

「悔んでくれていいよ。私もじきにそっちに行くからさ――――」

やるしかない。だったら。

「レイジングハート。いくよ・・・・」

『・・・・・ＡＬＬ　ＲＩＧＨＴ』

冷たい声が響く。耳に残る。決意してしまった心にはまだ不屈の炎は灯っているのかな。
だとしたらどんな色に燃えてるんだろう。

「ごめんねはやてちゃん。大丈夫。痛いと思う前に終わるからさ――――ねぇ？」

魔力が高まる。そしてレイジングハートを通して射出される。既にブラスター1としてセットしていた魔法は簡単に引き金を引いた。
打ち出される桃色の魔力光。向かうのは幼馴染へと。ごめんねはやてちゃん。

目を瞑り、もう何度目かになる謝罪を心の中でしながら私は終わりを待つ。
だがその終わりの音はやってこなかった。

其処にいたのは真正面から私の砲撃をかき消したギルガメッシュさんだった。

「うそ・・・だって私のディバインバスターだよ？しかもブラスター1とはいえ・・・非殺傷とはいえ・・・」
「フン。賢しいな。その程度の魔力で我とその民草を屠れるとでも思うたか・・・・・・・・・・・・この愚か者めっ！！！！！」
激しい咆哮にも似たギルガメッシュさんの雄叫びがドックに響く。
その声で武装隊にも喝が入ったらしくて動きを取り戻してきた。

「愚かな魔導師よな。操られているのかわからんが我に牙を剥いたことを逆に後悔させてやろう。そして貴様達は夜天の王の旅立ちを傍観しておれ」

ギルガメッシュさんがそういうと小型艇が動き出す。徐々に。少しずつ。ゆっくりと。
だけど私は砲撃を打ち出した直後。視線は向いても。意識は剥いても。レイジングハートまでは向けられない。
小型艇一つをとめることが。なんて難しいことだろうか。

「足掻け。そして知れ。到底届かぬ頂に今、挑んでいることを、なぁ！」

ギルガメッシュＳｉｄｅ

この愚か者の魔導師め！マスターが多少目に掛けていたことも忘れて敵対するとはな！

だがこのギルガメッシュ。それもまた民の過ちとして王たる我は許そう。

「その過ちも我は許そう。そして更に大きな心で我は貴様を断罪する」

「なんだかその言い方はおかしいようなっ！？」

「問題ない。我だからな！」

我が大丈夫といえば全てが大丈夫なのだ。

「さて。夜天の王は送り出さねばならんのでな。元々こうなると読んでの我が外！貴様ら雑多を相手になど大した事も無い！」

我が背後にあるは生前に集めに集めた宝具達。
その中には魔術士殺しの概念を持つモノもある。

「ほれ。特に其処な魔導師には我が直接手を下してやろう。この短剣でな」

「短剣で私とやろうと・・・？随分嘗めてない？ギルガメッシュさん」

「心配するな。これは魔術士殺しの原点だ。これで斬られた者はその力を奪われて魔術士としての生命を無くす。人であれ、モノであれ、な」

ルールブレイカーの原点を出そうと思ったがこっちでもよかろう。
名も無き宝具だが役には立つだろう。

「ほれ。こちらは準備が出来たぞ？それともそっちはチャージが必要か？では待っててやろう。ほれ、疾く準備するがいい」

小型艇の前で腕を組んで待つ。その間にも脱出艇は空に向かって進んでいく。
高町は動かずにいる。

「隊長が動かないのでしたら我々が動くのみ！」

ほう？取り巻きが動き出したか。だが甘い。脱出艇を狙うのはいいが我を相手にしていると理解せよ雑種ども。
宝具を打ち出して脱出艇の盾にする。更にその宝具の半分を取り巻きに向けて撃ち出した。
これだけで充分。取り巻きの砲撃は宝具によって防御され、更に撃った本人も宝具で沈黙させられる。

「ふん。取り巻き風情が図に乗るなよ？我の目が黒いうちは手を出させぬわ！！」

脱出艇は宝具の盾の向こう側で空に向かって飛んでいく。それを視界の端に捕らえながら見送った後に残ったのは我と高町、その取り巻きのみ。

「さて。邪魔者はいなくなった。続きをするか？それとも尻尾を巻いて逃げるか？」
「捕獲対象は貴方もです。ですけど多分一対一じゃ勝てないでしょうね・・・」
「判っているではないか。ではどうするかな？そっちの動き次第では行動を許さんが」
「・・・・逃げますよ。少なくとも今の状況じゃ貴方に勝てないなら勝てる要素を持ってからにします」
「では・・・逃げるがいい。そしてまた一度我の前に立て。そう言い切ったのなら我に勝てる要素を持ってくるのだな。興が乗ったか

ら暫くは此処にいてやる」

面白い。実に面白いぞ。つまりは我に勝てる要素があればいいと言うのだから。

既に脱出艇を追う事も無くなった為か高町は杖を下ろした。

「また、いずれ。近いうちに」

「うむ。貴様は有象無象の中でも中々なものだというのは１０年前から見ていたが。楽しみよな。貴様の行く道が」

高町が頭を下げてから転送された。何処に行ったかは知らん。高町の取り巻きも消えていった。

これでこのドックには我一人きりとなったわけだ。

「ふん。静かなものだな。こうも静かだと落ち着かん・・・」

胸の傷もまだ塞がらん。サーヴァントなら自然治癒能力も高いというのにな。仕方ない。ここは霊体化して誰かが来たら対処するようにするか。

「夜天の王に騎士王。闇の王と更に幻影の王、か・・・我以外の王よ。せめて王たる気質を忘れるな――――」

第百二十一・五話　現在状況

現在の流れの状況

ミラージュ
最高評議会に座ったリンカ＝ネーションの手により神から与えられた力を『全て』奪われて水晶に封印される。
その後セイバーによって救助されるが気を失う。
最高評議会名義で第一級広域次元犯罪者にされてしまう。

旗艦・津名魅を奪取して現在聖王教会エリア上空にて待機中。

サーヴァント達
セイバー・アーチャー・ランサーはミラージュと共に津名魅に搭乗している。
ギルガメッシュは津名魅を発艦させる際にドックの破壊のために別行動に出る。
ドック内で戦闘の折、空から光の槍が飛来し、胸を貫通。傷は未だに回復しておらず。
その後、八神はやてと合流し、津名魅へと送り出すが高町なのはと遭遇し戦闘寸前に陥るが、戦闘は回避される。

八神はやて
最高評議会からミラージュに近しい者として危険視されて本局のと

ある部屋にて守護騎士と共に軟禁状態に。
そこにギルガメッシュが現れ、自分の進むべき未来を覚悟して津名魅へと向かうことに。

高町なのは
ことの全てを最高評議会に聞きに行こうとした所でリンカから通信が入り、ヴィヴィオが人質に取られてると認識させられる。
これによりギルガメッシュ討伐の任務に着く（部下を数人従えている）が、はやてを逃がしてしまう。

聖王教会
管理局の少将でもあるカリムには既に管理局内でのやりとりは通信で送られていた。
ミラージュの指名手配も知りえており、聖王教会エリアまで逃げてきたミラージュに完全不干渉を告げる。
現在ミラージュとの会合をするかどうかについて円卓協議中。

月村すずか
管理局内で最高評議会からの通信を受けた後、単身地球に降り立つ。
嘗ての自分の師である吸血姫に助けを求め、そして戻ってきた。

アルクェイド・志貴組

千年城でゆるゆると生きていたところに嘗ての弟子が現れる。手を貸してほしいと。

そしてその相手は過去に自分たちに手を貸してくれた恩があると快諾し、魔法の世界へと足を踏み入れた。

嬉々とする吸血姫。その傍に佇む騎士は今はもう動けなくなった吸血騎にその字名を貰い受け、二代目吸血騎が誕生した。

第百二十二話　円卓の意思

ミラＳｉｄｅ

「聖王教会暫定代表騎士カリム。管理局少将。その君と今後について話し合いがしたい」

再度の通信を試みる。管理局のほかに聖王教会が組むとすればそれは脅威になる。
それは避けておきたい。

「来ますかね」
「来て貰わなければ困る。こちらとしても動けないからな。最悪何も出来ないなら補給を――――それも無理ならこのまま回頭して管理局に向かうだけだ」

どう出るかはわからない。だからこそ、だ。向こうもこちらが下手に動けないことは理解しているはずだ。

「それにこのまま上に居続けるのもプレッシャーだろう？」
「酷いな。あぁ。流石我がマスター。やり方が汚い」
「ほめるなよアーチャー。まだ序の口だ」

ヒトの嫌がることは大好きなんだよ。自分でやられて嫌なことをするのもな。

「で？このまま相手の通信を待ってるだけか？」
「幾つか先の事を考えてるよ。聖王教会の答え次第で俺たちの進む路が変わる。聖王教会と共闘するか、このまま聖王教会にも拒絶さ

れて流浪になるか、直接管理局に乗り込むか」
「ふむ。可能性としては聖王教会の答えに左右されると言うことか」
「そうなるな。そのときにはお前たちにまた前線に出てもらうことになるが・・・」
フ、とアーチャーは軽く笑う。それが当然という風な顔で、
「我々は元々闘う者だ。前線に出ることは別に苦でもない。むしろランサーあたりはそろそろ一番槍を与えてやってくれないか」
よく見ると既にやる気のランサーがゲイボルグを素振りをしながら立っていた。
「最近出番が無いからな。仕方ない」
そういうものか。まぁ、考えておこう。
どうせ管理局とぶつかる予定だ。でなければ最高評議会のところまではいけないだろうしな。
「大まかな作戦はどうなっているんだ？」
「出来れば聖王教会を味方につけて同時侵攻をやりたい。こっちは明らかな量不足だからな。質が高すぎるけど」
「ふむ。では任せよう。一般に戻ってしまったマスター唯一の取り得である知識に期待するとしようか」
「言ってろアーチャー。それでも俺はお前たちを駒にするしかないんだからな」
話は終わり、と言う様にアーチャーが離れていく。彼は納得したのだろうか。
しかし長い。カリム自身よりも協会側として連絡がきそうな長さだ。

「津名魅。一応何があっても大丈夫なようにはしておいてくれ」
『了解しました。尚、艦の補給自体は必要ではありませんので艦長らの食事やらの補給は済ませておいたほうがよろしいかと』
「だとすると此処を断られたらほかの世界に行って直接買い付けるしかなさそうだな」
「私としては食事をおろそかにする気は有りませんので」
「わかってるよセイバー」

セイバーがマジ顔で懇願してきた。そんなに必要か。

「必要でしょう。何を言ってるんですか。ありえません」
「わ、わかった・・・」

津名魅に近しい世界の座標を出してもらい、買い付け班を設定するように考える。誰にしようかと考えていたら、

『艦長。聖王教会より入電です』
「まわしてくれ」

津名魅が座標を探索してるところで聖王教会から通信が入ってきた。やっと返事か。

『遅くなって申し訳ありません。こちらの意見が合致しましたのでご報告しますね』
「いや、構わない。で、意見とは」

モニタにはカリムの顔が映っている。その後方にはシャッハの姿も見えた。
辛辣な面持ち。視線を下げては上げたりと忙しい。

『我々聖王教会は管理局とのより良い未来のために手を出すことはありません。両方、共に不可侵としていただきます』
「なるほど。まぁそれが妥当であろうな。だがもし手を出されたらどうするつもりだ？」
『その際には全力を以って対峙するまでのことです。既に聖王騎士団は有事と判断して行動しております』
「中々すばやい対応だな。私が反逆者として全管理局関係へと通告が出てから数時間しか経っていないのに。まるでもう起こるのがわかっていたようだが」
『それが私の力ですので・・・・これが”聖王教会の総意”です』
含みがあるな。あくまでも団体の意思として報告してきたみたいな口調だ。
ならまだ隠してることがありそうだな。

『それと先程の先制攻撃については不問とします。ので、直ちに帰ってはくださいませんか？こちらとしてはいつまでも居座られても困るのです』
「随分とはっきりとモノを言ったな。そういわれて「はいそうですか」と素直に聞くやつがいると思うかこの箱入りバカめ」
『・・・・今此処で貴方を討って管理局に渡しても良い。とも言えるのですよ？』
「我々の戦力を侮っているのかね？少なくとも君たちの盾である聖王騎士団も我々の前では霞むほどだ。第一セイバーにダメージを与えられるものがまずいるのか？」
『・・・・・・・・・・・』
黙ってしまった。というかなんだこの流れは。まるで喧嘩を売ってるみたいじゃないか。

「沈黙は肯定と受け取らせてもらう。君らの中にも本局でセイバーに鍛え上げられたものもいるだろう。だがそのときでもセイバーにダメージを負わせられた者がいたかね？」

『いま、せんね。セイバーさんは未だに訓練や模擬戦ではダメージ０という記録がありますから』

セイバーの対魔力は半端じゃなく高かった。それこそなのはの全力ＳＬＢくらいの魔法でなければ無理だろう。

そんな戦力が揃っているんだから生半可なものでは通じないはずだ。

「先に言っておくがこの旗艦にも絶対守護防壁がある」

名前は言わないけど光鷹翼の事は示唆しておく。これで更ににらみ合いは続くだろう。

カリムＳｉｄｅ

円卓の決定は不可侵。管理局にもこの反逆者たちにも手を貸さずに傍観するというのが決定事項。

私は体の良い広告塔でしかないから最終的な決定権は無かった。
まず、この円卓会議だが往年の騎士たちが役職についている。
それこそ保身やらしか考えていないような者もいたり。

「ダメね・・・」
「騎士カリム。それでも動かない限りは何も始まりません。まずは上空に報告をしなければ」
「わかっているわ。でもね・・・私は個人的には協力したいのよ。出来る限りはね」

でも立場がそれを邪魔してくる。これなら管理局少将なんてなければよかったと今になって最大の後悔をすることになる。
シャッハは後ろ。私の顔はみえてないはず。不安な顔は見せられない。

「では。通告をします」

上空に滞空している津名魅へと通信を飛ばす。そして円卓会議で決定したことを告げる。
あれ？なんだか私言い負けてる感じがするんだけど・・・？
だってセイバーさんにダメージ負わせるとかまず無理なんですが。

「・・・ミラージュ少将。いえ、元、ですか」
『どちらでも構いませんよ。古代ベルカ式の使い手、聖王教会の騎士、管理局少将のカリム＝グラシア』

う・・・嫌味よね。これ嫌味よね。でも負けない。此処で巻けたら聖王教会の未来もない。
今は大人しく雌伏の時を決めなければ。

「聖王教会は確かに不可侵としましたが・・・・個人的には手を貸したい所存です。ですが、管理局の方にも義理というか・・・」
『ふむ。大体の理由は判った。だがそうだな・・・・管理局に与さえしなければそれでいい。それだけでも予定は動く』
「そうですか・・・助かります。何せ学校から一人の女の子を連れて行かれてしまっているので・・・・」
『――――ヴィヴィオか』

聡い。この人の頭の回転の速さはなんともすごいものがある。
敵対している相手の中でこの聖王教会に連なる者。更にその学校というキーワードで一人に絞って特定してしまうのだから。

「判ってください。一人の女の子を護れなかった私たちに責はありますが・・・・」
『となるとなのはも敵対するか・・・・・・なるほど。あぁ、有益な情報だったよ。ありがとう』
「いえ・・・・・」

これは私の個人的な漏洩だ。しかし少しの情報でこの人は何処まで理解を有していけるのだろう。
そんな人が管理局に追われる理由なんて・・・・・。

「聖王教会は不可侵と言いましたが、個人的にはお手伝いしたい限りなのです・・・ですが立場が邪魔をしてしまって・・・」
『構わないさ。言いたい事はわかってる。俺に構ってるとそっちもお尋ね者になりかねないからな』
「・・・・まさかぁ」

え、冗談ですよね。つまりこうしてプライベートチャンネルで話してるのもやばいですか？

「ともあれ・・・広域次元犯罪者という肩書きは現在外せませんでしょうし・・・何よりも最高評議会という存在がネックでしょうね・・・」

『それはいいが、其処まで喋っていいのか？』

・・・・・・・・・・・・・・・はっ！？

そういえば不可侵だというのに何をのんびり喋ってるんでしょうか私は。

「ともあれ、私からは以上です。何も出来ませんけど。むしろ何もしません。としか」

『いや、問題ないさ。それで充分だ。補給とかは他の場所でやることにする。それとはやてのことを頼むよ。

あいつはきっと俺に一番近い存在だしな。何かしらアクションがあったかもしれない』

「判りました。大丈夫ですよ。義妹の事は任せてください」

改めて頼む、と言い残して通信が途絶えた。私は深く溜息をついてからシャッハに振り向いた。

「この会話は記録しないでおいてね？流石に円卓に知られるときついし」

「大丈夫です。何も有りませんでしたから」

ありがとう、と。愛する側近に感謝を述べた。

「しかし、次元犯罪者ですか。元、少将・・・というべきでしょうか。彼はそれほどの存在なのですか？」

「彼の持つ力は一般的には脅威に映る物よ。それは良くわかるわ・・

・・」

「古代ベルカ式の希少技能持ちというレアケースからの視点ですか」

「違うわ――――――」

「――――嫉妬よ。人には到底届かぬ力を有していれば妬みは必ずついてくる。そしてその具現化が彼」

だから。最高評議会は彼の力を奪ったと？

ＪＳ事件での彼の力の片鱗は凄まじかった。あれだけの大きなゆりかごを一瞬で消し去ったのだから。

「そりゃ脅威に見えるわよね・・・」

ポツリと呟くとシャッハが首を傾げた。

「彼は力の象徴だった。まさしくその文字通りにね。だからこそ管理局はここ数年で大きく変貌を遂げていた。

彼がいるからこそ、勝利があるというくらいに。古代ベルカの遺跡を見つけたときもそう。あれは・・・人ではない力がなければ無理だったでしょうね」

C．C．Ｓｉｄｅ

ふん。なるほど。中々の堅物じゃないかこの聖王教会というのは。関わり合いたくないから一切の関わりを絶つという感じだな。

「だがあれでは坊やが一方的だな。内心は泣き叫びたい位に動揺しているだろうに。一般人ではこの程度が妥当か」

あてがわれた個室は中々の広さだ。随分と余裕があるじゃないか。

「ではどうするんだ？お前がきっとこの世界では適任なんだろうけどさ」

「私が手を出すほどの状況であるなら手をお貸ししましょう。ですが・・・・」

「判ってるさ。皆があいつのこまならお前は私の駒だ。誰にも言わないよ」

「それならいいのですけどね」

会話の相手はゆら、とした気配の後に消えた。

「あいつの力は必要だろう。近接命のサーヴァントの中で遠距離を得意とするのはあいつだけだしな」

出番がいつになるかは勝手に見定めろ。お前にだって指揮能力はあるだろう。だったら勝手に動いてくれ。

ミラＳｉｄｅ

カリムと通信を終えてから深く椅子に腰掛ける。張り詰めた空気がゆっくりとほぐれていく。

「日和った感じだがいいんじゃないか？だがこれからどうするかを話していない」

「・・・・・・はっ！？」

「私のマスターはどうしてこういつもうっかりなところがあるんだろうか・・・・」

「待て！俺はあんなにうっかりしてない！今回はそう・・・・・ついうっかり、だ！」

「「同じだ」」

「サーヴァントの視線が痛いよ！？」

やめろ！そんな目で俺を見るんじゃない！

「だけど実際にどうするんだ？此処から出て行くしかなさそうだが。聖王教会の協力は得られないのなら此処にいる意味も無いだろう」

「まぁそうだけどな。津名魅、直ぐ動けるか？」

『再起動まで後３０分程掛かりますがその後なら補給する為の次の指定世界までなら何とか飛べそうです』

だ、そうだ。ならそれまで待機だな。

「んじゃそれまで待機。と言っても舵やらは全部津名魅任せだからな。俺たちは次の準備をするってことで」

俺の指示が出たところで各々が準備に取り掛かる。とはいえ特にやる事は無い。

椅子に座ったままの俺の所にセイバーがやってきた。

「マスター」

「ん？どうしたセイバー」

「今一度確認したいのですが、どうしてもやる気ですか？これは貴方が自滅する為の道です」

「今になっちゃ必要ないことなんだろう。でもな、俺はもうこの道を歩き出してしまったから。だから俺は自分で自分を閉じる為に進むよ」

「・・・・・揺るぎは」

「ない」

最後の確認、とセイバーがよってきた。そして最終的な覚悟を聞いてきた。

そりゃそうだよな。普通自分を殺す為にその力を取り返しに行くなんて通常ありえない。正気じゃない。

「セイバー。俺はな。別に無駄死にをしようとしてるわけじゃない。そりゃ最初はイレギュラーを倒せばいいとしか思ってなかったけど。

でもこの世界でたくさん触れ合って俺は気付いたんだ。この世界に俺はいる場所は無いってさ」

「それを――――――はやての前でいえますか？」

セイバーの問い掛けに俺は言葉をなくしてしまった。はやてを前にして俺は同じように言葉を吐けるのか？
だがこれは俺がやらないといけないこと俺しか出来ないこと。俺という存在がなくなることでこの世界が良くなるのなら・・・・・。

「俺はきっと同じようにいうんだろうよ。何も言わずに消えるとおもうよ」
「それで・・・いいのですか？貴方は望みさえすれば我々が全力でっ・・・・！！」
「いや、いいんだ。ほら、俺はアレだよ。アレ・・・この平行世界で暴れてさ。ずっとこの世界に居続けるのはきっと無理なんだよ。
本当は今ほど思わずにいるうちに行こうと思ったんだけどな・・・・？」

本当に俺がやりたいこと、やらないといけないこと。
それは多分だが・・・・・・。

「俺はあいつを。リンカをこの世界から排除しないといけない。でないと俺はこの世界から消えることが出来ない様な気がするんだ。
はやてには・・・そのうち言うよ」

そのうち、か。来るのかなそんな時が。でも、そうだ。俺は決めないといけない。

「進むか留まるか。決めなければ、な・・・・」

それは確かに決めなければならないこと。覚悟と決意だ。
やるさ。もう俺は後ろを見れない所まで進んできたんだ。この路を進んでいくしかない。

はやてＳｉｄｅ

ギルガメッシュに送られてこの脱出艇に乗ってからまた時間が経った。
ドックを出てから一体どれだけの時間が経っただろう。
それでも時間を忘れるくらいに思わせてくれるのは４人のわたしの家族がいるからだろうか。

「はやて、疲れてないか？座っててよ」
「ん、大丈夫やよヴィータ。それよりヴィータこそゆっくり休んでてな？」
「へへ、あたしはへーきだ。充分休んだかんな」

おさげの妹的存在、ヴィータはずっと傍にいてわたしを気遣ってくれる。
シグナムもシャマルもザフィーラも。代わる代わるでわたしに話しかけてくる。

「じっとしとるんはちょっときついけど、このまま乗ってればミラくんに逢えるんやしまっとこ。な？」
「はい・・・それはそうなんですが」

しかしまぁ退屈っちゃ退屈やけどな。現状がこないに悪化してるっちゅーのにのんびりもないか。

「しかし・・・本当に管理局に反逆してしまいましたね」

「しかたねーだろ。あのままいたらどうなるかわかったもんじゃねぇよ」

「そういうんはよしとき。今、こうして動けるだけでも儲けもんや」

シグナムとヴィータを諌めてからシャマルのところへ。シャマルはまだずっとモニタに向かって調査を続けている。

「あ、はやてちゃん・・・もうちょっとだけ待っててください。そうすればいい手が出来るかもしれないんです」

「ん。無理はせんでね？シャマルもたまには息抜きしたって。シャマルが倒れたら誰が看るねん」

「そう、ですね・・・すいませんはやてちゃん」

シャマルもだいぶ参っとるな。あとでケアせぇへんと駄目かもしれん。

「津名魅が見えてきましたよ」

シャマルの声で脱出艇の進む先を見るとアースラよりも一回り大きな戦艦が見えた。

一見木造っぽいその戦艦・津名魅がミラくんのいる場所。ミラくんの専用戦艦。

「あそこに・・・ミラくんがおる・・・」

今、逢ったら何を言ってくるだろうか。管理局のキャリアを捨てて

まで逢いに来たことを。
もうすぐ逢える。どんな顔で出迎えてくれるんやろか。

第百二十三話　夜天の決めた路

ミラＳｉｄｅ

聖王教会上空から次の世界に飛ぼうとしたところで津名魅から報告が入る。

『遠方から一機接近中の小型艇を発見しました。以前積載予定だった脱出艇です』

「ん？誰が乗ってるんだ？」

『接続します』

津名魅が小型艇に向けて通信を接続する。

あれは機動六課前にいつか積もうと思ってそのまま放置してたやつだが動いたのか。というか誰が乗ってるんだ？

「ギルガメッシュが乗ってるかもしれないな。津名魅、映像出せるなら出してくれ」

『了解しました』

津名魅が向こうに集中しだす。

「しかしあれの存在を知ってるやつがいたとはな・・・ギルガメッシュなら知ってるだろうから判るが・・・もし管理局の奴らだとしたらこのまま来るな」

だが誰だ？管理局の追っ手として来るのならきっと俺を知っているという前提で俺を捕縛できるやつか。

『艦長』

津名魅が呼んで来た。どうやら相手が誰かわかったらしい。
誰だ？と聞くと自分で確認しろとか言われた。なんだよ一体。

「あー。誰が乗ってる？」
『お、その声はミラくんやろ。なんや懐かしいきがするんは気のせいかな』

まだ表示されないモニタから音声だけが先に出てきた。
其処からはまぁ懐かしい声が聞こえてくる。

『ミラくん？そこにおるねんな？まだおるな？』
「はやて。そんなにあせらないでも大丈夫だ。しかしどうしてそれで来た」

脱出艇で近づいてきたのははやてだった。その後ろで守護騎士の声がしたので一緒なんだろう。
しかしなんで此処にいるんだ。

「管理局の追っ手としてきたか？」
『ミラくんがわたしのことをどう思っとるのかよぉーっくわかったわ。せっかく逃げてきたんになー。ギルガメッシュにも顔向けできんわ』
「ギルガメッシュ、だと・・・？連絡が取れないようになったあいつが何かあったのか？」
『ギルガメッシュに逃げさせてもろうたんよ。これに乗ってミラくんとこにいけって』

はやてはきちんと対応してきた。あとはそれが本当だという事実が

あればいいんだが誰もそれを証明することが出来ない。
もしかしたら管理局の差し金できてるかもしれないという可能性はゼロじゃないわけだし。

「すまないはやて。そこで艦を停止してくれ。こちらから送迎を出させる」
『ん・・・そうやね。まっとる』

はやてに通信を終わらせると向こうは小型艇を停止させる。
今、このブリッジにいるのはセイバーたちサーヴァントと真祖達。

「さて・・・疑いたいわけじゃないがどうするか」
「私ははやての性格からして疑う余地などなさそうですけどね」
「どうなの?そういうことするような子なの?」
「アルクェイドはまだ知らないか。知り合いだよ。管理局のキャリアだ」
「そしてマスターの恋人、だろう?何故其処まで説明しないんだ」
「ばか!はずかしいだろ!」

そんな歳か、とアーチャーにツッコミをいれられつつアルクェイドも志貴も納得してくれた。

「で、どうするんだ?あの子を連れてくるのかい?」
「ん。まだわからない。もしかしたら管理局の方から言われてきたのかも知れないしな」
「だったらどうするんだ?あのままにする気かい?恋人を」
「・・・・まぁいいですけどね。確証が得られればいいんですけど」

俺だって疑いたくないけどさ。それでも追われてる身としてはやっ

ぱり躊躇するんだよ。

「まぁ、追われてるならわかるけどさ。ちゃんと話をしてみれば？向こうも待ってると思うよ」

「志貴さんがそう言うなら・・・・」

津名魅に伝えて再度通信を開いてもらう。メインモニタにははやての顔が映し出された。

「はやて。状況はわかってるか？」

『めちゃ短い返答やな。でもわかっとるよ。広域次元犯罪者。第一級の賞金首。それがミラくんや。そんっでもってその一番近しいと思われとるわたしも幽閉されるという、ね！』

「・・・そう、なのか？」

それは知らなかった事だ。第一最高評議会から逃げてそのまま津名魅に逃げたんだから本局の中がどうなってるのかわかるわけが無い。でもそんな事があったなんてな・・・。

『でもそこでギルガメッシュが逃がしてくれたんよ。このまま管理局に残って狗に成り下がるか――――ミラくんと一緒に歩くか。

んで、わたしは選んだんよ。ミラくんと一緒に歩く路を。そんでギルガメッシュがこれに乗せて逃がしてくれた。なのはちゃんから、な・・・・』

なのはか・・・やはり本局側についたか。どういう理由で向こうについたかまでは判らないが強敵だな・・・。

何しろ、小さい頃の撃墜がない分、順調に魔力を蓄えてるわけだし。

「しかし、イレギュラー対策で鍛えた力がイレギュラーに向けられ

るのだから本望ではないのか？」
「言うなよ。計画は大事に変更せざるを得ないわけだしな」
小声でアーチャーが話しかけてくるのを返す。はやてには聞こえてないらしいがアーチャーの姿を見て笑みが見えた。
「本当にそれでいいのか？お前は・・・こっちは大変だぞ？しかも未来はあんまり無い」
『えぇよ。ミラくんと一緒ならどこでもえぇんや。だったわたしがそう決めたんやから』
にひひ、と笑みを見せる。そうだな。何を構えてたんだろう。ここまで信じてくれてるのに俺ってやつは。
「わかった。今ナビを出すからそれに従ってこっちに来てくれ」
『ん。了解や』
ここで通信を切るように津名魅に指示。すぐに通信は切られてもとのブリッジへと戻った。
「いいのか？あれだけ疑っていたのに」
「あぁ。何かあればお前たちが護ってくれると信じてるしな」
「期待はしないでもらいたいな。今の契約者はC．C．のほうなんだし」
「俺たちの絆って随分弱いな！？」
アーチャーがそれだけ言って離れていく。と言ってもきちんと対応できる距離だ。
他にもランサーはブリッジ入り口の壁に寄りかかり、アルクェイドと志貴は適当な距離を取って立っている。

セイバーには直ぐ横にいてもらい、対処してもらうことにした。

「此処までするとまだ信じてないような布陣だが・・・形式のみだ。一応はな」

「しつこいくらいだけどな。まぁいいんじゃねぇの？俺としてはあの鉄槌の騎士とはやりあってみてぇしな」

「ランサー・・・一応は味方になるのですから」

「俺はお前らともやりあいたいんだがなぁ・・・？」

おいおい・・・此処に来てサーヴァント分裂とかやめてくれよ？そういえばさっきからずっといなかった存在に気付いた。

「リィンフォースはどこだ？」

「彼女ならファントム隊の招集に向かいました。居場所はわかっていましたから行くのも簡単だそうで」

あぁ、そうか。マテリアルも何とかしないといけないわけだしなぁ。きっと今頃魔力がきれてるんじゃないか？無事ならいいが。

外では津名魅が指示ライトを出して脱出艇をナビしつつ収容する。ドックからは津名魅が移動して案内するそうだ。転送ポートでドックへと移動する。

直接此処にくるんじゃなくて少し手前に出てから来ると伝えられた。数分するとブリッジの扉が開く。先頭を津名魅としたはやてたちの姿がブリッジに入ってくる。

「守護騎士も一緒か。まぁ当然だな」

「そうやね。わたしらは家族やし。いつでも一緒や」

「それはいいことだな。離れてしまうほどいやなものは無いし・・・・」

シグナムたちは喋らないでいる。どうやら全ての決定権をはやてに任せているようだ。

「・・・ミラくん、わたしたちじゃ役不足なん？」

「何をいって・・・」

「そんなら何で一緒に誘ってくれへんの。わたしはミラくんのためなら何でも出来るゆうんに！」

「お前、こっちに来ても何もいいこと無いぞ。少なくともなのはとは撃ち合う事になった。友達を打つ覚悟がお前にあるのか？」

「・・・それはあんま自信ないなぁ」

「今の俺たちは反逆者で、あっちが正規の存在だ。何せ次元世界を統括する時空管理局だしな。そこのキャリアエリートだったお前が道を踏み外すな」

「それはっ・・・わたしたちはっ・・・」

「それはいいとして守護騎士たちはどうなんだ？本当にそれでいいのか？」

視線をシグナムに合わせる。

「我々は主はやてに従うまで。元々管理局とは敵対していたわけだしな。問題ない。過去に何回も、最近では２０年前も敵対していたわけだしな」

「あれは・・・」

クロノの父親、クライド＝ハラオウンの事だろう。

あれはもう俺たちの中では過ぎたこととして認識しているから誰も口にしないけどもな。

「ギルガメッシュが言っとったよ。ミラくんの進むのは覇道やって。

んでもってわたしはもう決めた。ミラくんの隣に立ってずっと歩いていくって、あのときに決めたんや。
　せやから誰にも隣は渡さへんよ。フェイトちゃんにも。セイバーさんにも。誰にも」

まっすぐとはやての視線が俺を貫いていく感じ。此処まで覚悟を決めていたのか。

「ギルガメッシュも酷な事を・・・まったく」

はぁ、と深く一回だけ息を吐く。こうと決めたら頑固なのは誰のせいだか・・・。

「後悔はするなよ？この先はきっと大変な道だからな」
「えぇよ。もう決めたから。それに一人じゃきっと駄目やったと思う。家族がいたからこそわたしはこうしてたっていられるんやで」
「全く・・・守護騎士の奴らが羨ましいな」
「何を言うか・・・主はやての寵愛だぞ。どうして喜ばないのか不思議だ」

何言っちゃってるのこのシグナム。そんなもんいえるわけないだろう！
しかし最後に確認しないといけないことがある。しつこいけど。

「最後に確認だ。管理局と敵対して本当にいいんだな？」
「ん。そのつもりで此処に来たわけやし。来た時点で恐らく管理局には何か思われとるやろ」

そりゃそうだ。恐らくはやてにも犯罪者のレッテルが貼られているだろう。

そしてそれはもう剥がせない事実だ。
夜天の罪の他にまた罪を背負うことになるとはな・・・・。

「わかった。歓迎するよ夜天の王。これからよろしくな」
「うん、まかせといてな！」
「シグナム。ヴィータ。シャマル。ザフィーラ。皆もよろしく頼む。
俺は見たとおり魔力が無い一般人になってるから何も出来ない状態だしな」

無言だが、静かに頷いてくれた。これは肯定と見ていいんだろう。
ブリッジ内の緊張感は少しずつほぐれていく。

「ところでギルガメッシュは？」

セイバーの言葉でほぐれかかった空気がまた張り詰めた。

はやてＳｉｄｅ

あー。やっぱりミラくん警戒しとるな。こういう質問くるんはわかっとったけど実際きついわ。
でもしゃーない。追われてるなら警戒するのは当然や。
特にこちら側は力があるのに対してミラくん一人だけ対抗できる力がないわけやし。

でも受け入れてくれたんは嬉しかったな。

シグナムにもヴィータにも手を出さないようにと諫めておく。
せやないとバトルジャンキーはきっと手を出してしまうやろう。

「ところでギルガメッシュは？」

と、いきなりやなセイバーさん。これも報告せなあかんことやったの忘れとったわ。

「ギルガメッシュはわたしらを逃がす為に囮になってくれたんよ。映像データあるで」

えっと・・・津名魅さん？わたしらを此処まで案内してくれた人に映像データを渡すとメインモニタに表示された。
なんやこれ。アースラよりも大きいやんけ。

そこにはギルガメッシュがドックでわたしらを逃がす動作をしてくれてるのがはっきりと映ってた。
そして敵対するなのはちゃんも。その会話もクリアに。

「あの馬鹿・・・戻ってきたらちょっと叱らないと駄目だな」
「そうですね。実にお仕置きをしなければいけません」

モニタを見てるミラくんとセイバーさんが呟いてた。うっすらとしか聞こえんかったけど。
でも・・そうやね。助かっていたならえぇなって思う。
胸の傷もあったし。
それはミラくんたちにもわかってたらしい。あの傷はミラくんたちを逃がそうとしたときにつけられたってのも聞いた。

「誇りある王様やな。王は民の為に動く、か・・・」

ギルガメッシュが言ってた言葉を思い出す。
その言葉はわたしの胸に深く刻みつけられた。

「ギルガメッシュとの合流は難しそうだ。なら俺たちはまず体勢を整えてから管理局本局に突撃を掛けてリンカを倒す。あの手は説得でどうにかなる相手じゃない。
力さえ戻ればなんとかなるはずだ」

「それは――――――――――――どうかな」

ブリッジに知らない声が響いた。わたしらもえっと・・・金髪の初見の人も驚いてたけどミラくんとランサーさんたちは全然驚いて無かった。
でも空中から人がいきなり出てきたらびっくりするわ。

金髪の美少年。第一印象はそれや。でも疲弊した感じでミラくんの上に落ちる。文字通り落ちる。
それを抱え抑えるとミラくんはそこでやっと表情を変えた。

「なんであんたが・・・・・」
「へへ。ちょっと失敗しちゃって。大変なことになってるようだしね。僕は君に言わなくちゃいけないことがあるんだ・・・・」

金髪の少年は語りだす。

第百二十四話　嘗て闇の書と呼ばれたものたち

リィンフォースＳｉｄｅ

津名魅から出た私はマテリアルズを探して世界を渡る。
元々世界を渡る方法は私の中にあったので苦でもなかった。
魔力もある。魔法もある。本も無事だ。ただ、あのときのような破壊衝動は、もうない。

「・・・私も日和ったものだな。闇の書とまで呼ばれていた私が人のために動くなんて」

今のマスターのために私はこの命を使おう。その為ならこの命尽きても構わないとさえ。
祝福をくれた主も、マテリアルズも同じ気持ちだ。今の私を同じ感情をもちえている。
マスターに特別な感情を持っているのは理解している。

「この感情にいち早く素直になったのは・・・主はやてだったな」

これも人の成せる技なのか。プログラムされた私や守護騎士では理解するまでが通そうだが。

「烈火の将がこの感情に中てられた姿を見てみたくもあるが――――それもまた並行の姿なんだろう」

きっとこの世界では見れないものだろう。だからこそマスターたちの言う平行世界での姿もあることを知る。
様々な枝分かれした世界がある平行世界。其処には平和に暮らして

いる私たちもいるのだろう。
マスターはその平行世界から来たということは嘗て聞いたことがある。

「あの力は確かに未知のものが多すぎるからな・・・それを聞けば納得するというものだ」

少しだけ。自分に笑ってしまう。そんなことを考えるのも実に久しぶりなのだ。
こうした考えをすることが既に希有。昔は此処まで余裕は無かった。

「破壊の象徴が守護する為に動くとは・・・まったく変わるものだ」

さぁ、もうすぐ世界を渡る。あやつらはどんな世界で任務についているのやら。

色とりどりの次元の狭間を抜ける。するとそこは主はやての故郷と同じ青い星が目の前にあった。

「綺麗な星だな。だがここに任務できてるということは争いは絶えず生まれていると言う事か」

管理局が介入するほどの争いがこの星でも生まれては消えていく。
それだけ犠牲者もまた増えているのだ。

「フフ・・・こんな考えも昔はなかった」

微かに口元が綻びるのが自分でもわかった。
こんな考えを持つようになったのはいつ振りだろうか。今のマスタ

ー・・・はC．C．か。その同じ存在であるミラージュ＝ヴィジョンについてからだ。

「考えても埒が上がらん。今は――――――」

今はマテリアルズを探さなければ。そしてマスターのところに連れて行って契約接続を。

我々は元々は同じ存在なのだ。これはマスターとC．C．と同じような事か。

「なら。場所もわかろうというもの」

空・・・というか。宇宙だな此処は。大気圏外。成層圏から星を見下ろす。時折オーロラが私を虹色に照らす。

ふ・・・こんな時に余裕か私は。だが何故だろう。心は落ち着いている。

「こんな気分もまた久しい・・・・」

瞼を閉じれば魔力を感知する為に感覚を鋭敏に広げていく。広がる感覚は意識の集合体となって星を覆っていく。

とはいえその範囲は限られているが。

周辺５０ｋｍを範囲として中心点に私。これ以上の広範囲はまた移動してから広げて、の繰り返しになる。

まず最初の範囲――――――――――――いない。

次に移動してまた範囲を広げる――――――――――――いない。

ディアーチェ、シュテル、レヴィの誰か一人でも引っかかればいいのだがな。

駄目元で通信を開いてみたが応答はない。

「ふむ・・・着拒というわけでもないだろうし・・・だとしたら嫌だな・・・」

そうだとしたら泣くな。きっと。私だって泣くのだ。さめざめと泣くことにしよう。

何度目かの探査で魔力反応が引っかかる。三人のうち誰の魔力かまではわからない。

・・・・・私でもわからないことくらいある。

特にマテリアルズは闇の力をメインにしてマスターの供給で更に魔力を変化させているので余計に判りにくいのだ。

「だが誰かでもいいから見つけたぞ。後はたどれば直ぐに見つかるはず」

成層圏から地上へと一気に降りる。下降の速度は音速の壁を突き破る。

この体の耐久力がマスターの加護も掛かってると思うと助かるものだな。

地上すれすれまで一気に降りてくればそこはやはり地球と同じような自然があった。

人の手が全く入っていない自然が其処にある。

「人はいない・・・・？」

地上に降りて違和感を感じた。人の気配というか、手の入った感覚が無い。

とはいえ獣の感じでもない。まるで生物を感じられない。だからこそ魔力を感じたのだろうか。

それとも他の何かが？

「とりあえず周辺を調べてみるか・・・この周辺で反応があったはずだから近くにいるだろう」

私は周辺を探す。地上から。空から。なるべく自然に手をつけないように。
後になって現地で何かしらがおきても手が出せないなら触らぬほうがいい。

さて、まずは誰と出会うのやら、だな・・・。
私の魔力に気付いて向こうから来てくれてもいいんだが。そのほうが楽でいい。
微弱な魔力が数個あるのにも気になるが今は気にしていられない。

「通信の反応はなし、か・・・・まったく。何をしてるんだか・・・」

全く。魔力リンクが切れてるのくらいわかってるだろうに。

「私が探してるんだから応答くらいしろというのだ・・・まったく！」

通信用モニタを力いっぱい殴るとザザザ、というノイズの後に画面が表示される。
そこには見慣れた青い髪の後頭部があった。

『だからさぁ。僕達は別にそんなのいらないって言ってるジャンか。でもやりあうなら相手になってもいいよ？死ぬ覚悟が出来たら掛かってきなよ』

『――――――――――――』
『まぁったく無言で嫌いなんだよね。ガジェットってさぁ。いくら残党狩りっていってもＡＭＦの中での戦闘じゃこれじゃつまらないよ』

ＡＭＦ下にいるのか。なら通信が届かないのもわかる。微弱な反応だったりするのもフィールドに入ったり出たりでだったんだろう。

「　雷刃の。　」
『なに？今邪魔しないでよ。それともそっちも死ぬ？』
「いや・・・すまん・・・じゃなくてだな。あんまり魔力を使うな。お前たちの存在が消えるかも知れんぞ」
『え？何言ってんの・・・て。なんだ管制プログラムじゃんか。どうしたのさこんなところで』
「お前たちを探しに忌憚だ。魔力リンクが切れてるのに気付いてないのか・・・？」
『んー？あー・・・・・あ、ほんとだ？！』

今頃気付いたのか！？鈍感にも程がある！

レヴィＳｉｄｅ

おうさまとシュテルと仕事に世界を飛んでるわけなんだけど。ＪＳ事件で撒き散らされたガジェットドローンの駆除だね。ふほんいだけどしょうがないから仕事してるのさ。

で、この星に結構な数があるっていうんで殲滅の方向で。
で、きりが無いんで各個別撃破っていう提案をシュテルがしたから一気に殲滅してるんだ。
でもたまにＡＭＦを張られるのが面倒なんだよね。

「で、今も囲まれてるわけなんだけどー。いい加減にしてほしーよね、バルニフィカス」

バルニフィカスを肩に乗せてやれやれと溜息をついた。こうなると結構力使うんだよ？
で、今ガジェットが僕に向かって砲撃をしようとしてるんだよね？マスターからの魔力があるから無駄だって言うのに。なんでかマスターの魔力で編んだ防護壁ってすごく硬いンだよ。

「だからさぁ。僕達は別にそんなのいらないって言ってるジャンか。でもやりあうなら相手になってもいいいよ？死ぬ覚悟が出来たら掛かってきなよ」

どうせそんな知能も無いだろうけどサ。

『　　雷刃の　　』

ん？今なんか聞こえた？まぁいいや。ていうか、なんか後ろにモニタが出てきてるんだけど。
ちら、と見るとなんだかよく見た銀色の髪のねーさんが映ってる。

「なに？今邪魔しないでよ。それともそっちも死ぬ？」

僕はどっちでもいいんだよ？邪魔するなら。ていうか、マスター独

り占め計画（今おもいついた。僕ってかっこいい）の為にもまずは管制プログラムをなんとかしないと・・・！

『いや・・・すまん・・・じゃなくてだな。あんまり魔力を使うな。お前たちの存在が消えるかも知れんぞ』

「え？何言ってんの・・・て。なんだ管制プログラムじゃんか。どうしたのさこんなところで」

『お前たちを探しに忌憚だ。魔力リンクが切れてるのに気付いてないのか・・・？』

「んー？あー・・・・・・あ、ほんとだ？！」

なんかマスターとのリンクを手繰ってみると途中で切れてた。なんで？あれ？じゃぁ魔力供給もないじゃん！？

「なんでー！？」

『それを説明しに来た。というか、帰るぞ。この任務も放置していいから』

「え？いいの？でもおうさま怒るよ？怖いよ？あしたのおやつがなくなっちゃうよ？」

『私の方から説明するから問題ない。だからついてきてくれ・・・・というか、今何処にいる』

「んー。ちょっとまってね。片付けちゃうから」

管制プログラムの言ってることがちっともよくわからない。だからシュテルかおうさまにあわせよう。それがいい。

そうと決まればこの状況をなんとかしないといけないよね。

「バルニフィカス。とりあえず潰しておこうよ」

『Ｙｅｓ』

バルニフィカスの鎌の刃が唸りをあげて震えだす。空気を切り裂いて振動が空を伝播する。

「ふふふふ。僕が何もしていないと思ったらおーまちがいだっ！！！」

バルニフィカスを思いっきり振り回すと刃から魔力刃が打ち出されてガジェットを切り裂いていく。ついでに後ろの森の木も一緒だ。うん、気持ちいいね！ちなみに新技で名前はまだないよ！何にしようかな・・・・。

『終わったか？』

「あ。ごめんごめん。忘れてた」

通信からの声を忘れてたよ。そういえばいたんだっけ。ガジェットを倒したのでＡＭＦも解除されて少し森の中の遠くの方で管制プログラムの魔力が感じ取れた。

「あ、近くにいたんだ。んじゃ、空で逢おうよ」

『あぁ。了解した。そのまま上に上がろうか』

僕が頷くと向こうも頷いて通信が切れた。んじゃ、空ね・・・・よいせーっっと！！！

思いっきり垂直飛びの要領で空に飛ぶ。空は澄んだ青と、白い雲があった。それと銀色と黒の女が一人浮いてる。あ、管制プログラムか。

滑るように空を移動して管制プログラムの方に飛んでいく。

「やぁ久しぶりだね。でも君ってスキマから出られないんじゃなかった？マスターがよく許したね」

「緊急事態でな。説明はちゃんと後でしてやる。他の二人はどうした？というか連絡は取れるか？」
「ぅん？まぁいいけど。おうさまはさっきから応答ないねー。でも居場所はわかるよ。動かないから。シュテルとは連絡とれるよー」
なら、シュテルと連絡取ってくれって。あれ？僕良い様に使われてない？これは怒るべきかな。

「マスターが襲われてな。お前たちの魔力リンクも外されている。だから魔力がきれたらお前達消えるぞ」
「いきなり酷いこと言われた気がする！？」
え？なに？だってあのマスターだよ？ミラージュだったら大丈夫なんじゃないの？

「え？だって。君いたんじゃないの？」
「私は・・・スキマから出るにはマスター権限がないと無理だ。今はそれで外にいるに過ぎない。あとお前たちの保護とテイクアウトがメイン」
「ジャンクフードみたいな扱いよして！？」

速くしろっていわれたんでシュテルト連絡を取る。なんだよ、もうちょっと遊んでくれてもいいのに。

「シュテル？今大丈夫かい？」
『――どうしました？何か問題発生ですか？まったく・・・あれほど注意するようにといったじゃないですか』
「いや、まず理由を聞こうよ！？」
『では言い訳タイム開始です』

この理のマテリアル最悪だよ！？

『ではどのような？あんまり意味の無い通信は遠慮しなさいと何時も言ってるでしょう・・・・おや？』

やっと僕の後ろに気付いたか。管制プログラムの姿を見たらシュテルが頭を下げた。

『これはこれは・・・リィンフォース、と呼びましょうか。しかしあの空間の外で出会うのは数年ぶりですか』

「あぁ。すまないな急に。これも訳があるんだが聞いてほしい」

あれ。僕空気になりそうだぞ、っと。

リィンフォースＳｉｄｅ

雷刃のモニタを通じて殲滅者とのアクセスを得る。

映し出された画面にはエース・オブ・エースと瓜二つの顔があった。

「急にすまないな・・・・少しばかり早急の用件で迎えに来た」

『ほう・・・どうぞ話してみてください。早急かどうかは大体の検討はついてますが』

「話がはやいな。お前たちの魔力リンクについてだ」

『やはりそれですか。いつのまにかきれていたので不良品をつかま

されたのかと。いや、これも仕様なら仕方ないかと諦めていたところです』

エース・オブ・エースの顔で毒舌されるとなんだか変な感じだ。
だが大体の見当はついてるというなら話が早い。

「その魔力リンクを繋げる為に一旦戻ってきてほしい。あぁ、管理局に戻る必要もない。恐らくしたらお前たちにとってもいいことになるかもしれんぞ」
『その口ぶり、実に含んでますね。いいでしょう。王に進捗してみます』
「出来れば直接話がしたい。どうにかできないものか」
『居留地点にはいるはずです。色々と考えておられましたから。ポイントを送りますが恐らく私と合流して行ったほうが話しも早いかと」

向こうからこの星の地図と一箇所印のついた小さな地図が送られてきた。
かなり遠い場所についているな。

『私とは近いのですが少々手が放せない状態でして。魔力的な問題上手伝ってくださると助かるのですが』
「あぁ。それは問題ない。なら今から向かう。雷刃と一緒だな」
「レヴィ。そう呼んでくれないと怒るぞ。マスターがくれた名前なんだからな！」
「あぁ。わかったよ――――――レヴィ」

なら、私もシュテル、と。そう呼べと言われたので了解した。私の方もリィンフォースで通すらしい。
妹と混同になるかもしれないが。

そういえばまだ妹にも挨拶はしていないな。まぁ会うことがあるのかどうかも微妙だが。
漆黒の羽を広げる。羽ばたかせれば羽を撒いて浮かび上がる。風を纏い、無音で高度まで上がっていく。

シュテルの設定した居場所まではそう遠くない距離。一っ飛び程度の距離だ。
直ぐ後ろにレヴィがついてくる。

「飛ばすぞ？・・・ついてこいよ？」
「何言ってるのさ。僕の速度を知らないの？青い稲妻と呼ばれている僕についてこれるのかい？」
「それはいいが先に言って迷子になっても知らんぞ・・・？」
「ぬぐぐぐぐぐ」

レヴィの手を引いて私は飛び出す。速度もそれなりに出てはいるはずだ。音速を超えているのだし。
円状の音速の壁を突き抜けて更に加速する。ここら辺はマスターの魔力の恩恵だろうな。
だとしたらあんまりレヴィにも魔力を使わせて移動させないほうがいいのかもしれない。

シュテルＳｉｄｅ

リィンフォースとの連絡は終了しました。じきに此方にくるでしょう。
その前に私もここら周囲の掃除をしておかねばなりませんが――
――

「魔力を使わずに、というのは少々得意ではありませんのでどうしたものでしょうね」

ガジェットドローンの残党を複数相手に対峙してる状態。
それでも通信中は手を出さずに居たあたり、なんて空気の読める奴らでしょうか。

「少しレヴィも見習ってほしいところですね」

溜息をつくとそれを開始の合図として待ってましたとガジェットが襲い掛かってくる。
ルシフェリオンは既に起動終了している。私の左手の杖は鈍く光を放つ。
カウントダウンが始まる。

「明けの明星は明るい空でも見えるほどに輝き放つ。さぁ――――――集え星よ」

仕方が無い。リィンフォースの話が本当ならばほんらいは魔力を使うわけにはいかないのだが。

緊急事態だ。そう、仕方ない。だから私は砲撃を放つのだ。

「ルシフェリオン――――――」

呼応に反応してアクセルシューターが私の周囲にスフィアとして生まれだす。その数７２。

生まれた瞬間それは攻撃反応を感知して射撃に変わる。

光速の動き、直線ではなく、曲線を描き、螺旋を描き、不規則性を持ってガジェットへと打ち込まれていく。

打ち込まれても止まらない程の貫通力を持ったアクセルシューターはガジェットの後方まで飛んでいった。

貫通されたがジェットはなすすべもなく慣性の法則に従い勢い余って地面に滑り落ちる。

「ふむ・・・この程度ならまだいけますか。ですが・・・・・そう乱発もできないようですね」

自分の中の魔力を感知して状況を把握する。魔力運用は私たち三人の仲では高いほうなのですが・・・どうにもまだ無駄がある感じがします。

此処はもう少し詰めるべき問題がありそうです。

とはいえ、実はあんまり魔力がない状態だったりしますが・・・・。

魔力も回復できない以上あとは合流を待つだけですね。この残骸はこのまま放置でもいいでしょう。特に問題はありません。

復活できないくらいに核を破壊しましたし。

大きな魔力と小さな魔力が二つ。遠くの空から近づいてきますね。

片方はレヴィですか。ならもう一つはリィンフォースですね。

全開時のリィンフォースがこれほど強大だとは思いませんでしたが・・・なるほど。流石に我々の大本になっただけあります。
足元に羽を生やして空へと上がり、迎えに行きましょうか。
あとは王のところに戻るだけです。

「じっとしていればいいんですけどね・・・・・」

リィンフォースＳｉｄｅ

指定されたポイントに向かうと空に上がっているシュテルを発見した。よく見ればバリアジャケットもかなりの損傷を受けている。
回復が出来ない程に魔力が衰退しているのか。近づけばそれが良く見て取れた。

「随分と酷い格好だな」
「言ってくれますね。ですがマスターとの距離は私たちの方が上です」
「フン。マスターと心を共に出来る融合騎たる私と張り合うと？」

このマテリアル、言ってくれるじゃないか。
体どころか心まで融合できる私には向かうとは良い度胸だ。後で覚えていろ。
魔力がなくなりかけてふらふらになってるシュテルを小脇に抱えて

無駄な魔力の放出を減衰させてやる。

「リィンフォース。何の真似ですかこれは」
「飛んでいるだけでも無駄に魔力を使うだろう？魔力運用のスキルが高いからって

「それよりさー。これからどうすんのさー。おうさまのとこにいくの？」
「あ、あぁ。そうだな。言い争いは惨めになるだけだ・・・ディアーチェは何処にいる？」

レヴィ、シュテルと呼び名を変えたのだから闇の王も呼び名を変えるべきだろう。

「先程から応答がありません。恐らく現地の獣か何かに負けたり・・・・・・・・・・・はありえませんね。あの王に限って」
「だね。あのおうさまに限って負けるってないわー。負けたら僕がおうさまになるけど」

酷いいわれようだな・・・これで王なのか。英雄王や騎士王、主はやてとは偉い違いだ・・・主はやてが素体なのに。
まぁ、こうして合流できたのだ。すぐにでも合流できるだろう。

「先程も通信で言いましたが王は今、居留地点で任務の指示系統の見直しやらを行ってるはずです。そこで状況の説明をしてもらいましょう」
「向こうに連絡はとれないんだったな」
「えぇ。なので直接会いに行くしかありません。一人で大丈夫でしょうか・・・」

やたらと心配してるな。やはりマテリアルの王というところか。このカリスマは。

「用意していたおやつとか一気に食べてないでしょうか。心配です・・・」

そっちか。そんなに食い意地の貼ったやつだったか？
小脇に抱えたシュテルが半目で語ってきた。いいけど。

「とりあえず今、管理局に起きてることは全て報告しよう。だが私もそんなに知ってるわけじゃないからそこはマスターの元に返ってから更に詳細を詰めようか」
「了解しました」
「ＯＫだよ」

私の言葉に二人が了承してくれた。細かい状況までは私は把握できてないのが痛いな。
だが私たちにとっては窮地に立たされたも当然の状況だ。戦力としてはこれ以上無い位の仲間になる。

「さて。では移動しようか・・・レヴィは魔力は大丈夫か？」
「うん。僕はあんまり魔力使ってないから」
「苦しくなったらいうといい。小脇に抱えてやる」
「シュテルと同じかー・・・・それは遠慮してほしいな」
「レヴィ・・・私と同じ屈辱をくらいなさい」

シュテルが呪いの言葉を吐き出してるが無視して進むぞ。喋ってる暇があったらすぐにでも帰りたいんだ。
シュテルが示してくれた地図とポイントに向けて私たちは向かいだす。

ディアーチェＳｉｄｅ

まったくシュテルもレヴィも仕事くらいちゃんとやってもらわんと困るものだ。
食事も喉を通らんわ。

「あ、この菓子はうまいな。後でミッドで探してみよう」
「何やってるのですか王。仕事はどうしたのです」
「どぅわ?!な。なんじゃシュテル!?レヴィまで!?あとそこのでかい銀髪とか!?」

何がどうなっているんだ!?せっかくの我のお菓子タイムを邪魔するでないわ!
しかもなんだその状態は。管制プログラムの両脇に抱えられおって。

「私たちは必死こいて魔力が無くなっていく中きちんと殲滅してたのに。王は指示系統の見直しといってましたよね・・・何やってるんです?」
「ちょっと待てシュテル!その笑顔怖い!怖い!」

笑顔でシュテルが迫ってくるのが怖い！というかなんで我が怒られてるのか納得いかーん！！

「リィンフォースが危険を知らせに来てくれたんです。王もマスターからの魔力供給が切れてるはずですが」

「なに？そんなことは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当だ」

あれ？そんなことがあったのか？まさかあのマスター、我らを見限って契約を破棄したというのか？

「それについては私から説明しよう。闇の王。いや、ディアーチェ」

「ふむ？我を名で呼ぶとはな。まぁいい許可しよう。で？」

「マスターが魔力を奪われて一般人化したんだ。それの影響で契約していた我々全員の魔力リンクが途切れたわけだ」

「どういうことか詳しく説明せい」

管制プログラム・・・いや、リィンフォースか。こやつめ。きちんと説明をせんか。

すると次々と今得ている情報を吐いていきおった。

マスターの魔力が奪われたこと。

それが最高評議会と名乗る管理局のトップに据えた女がやった事。

魔力が無くなったことにより、魔力回路やらがなくなって我らのリンクがなくなったこと。

C．C．が復活して暫定マスター権で魔力リンクを繋ぎなおしていること。

津名魅を強奪して・・・元々持ち主はマスターだったのだから問題ない・・・聖王教会エリアに移動したこと。

烏が――――管理局を離反したこと。
我らがこの任務についてる間に色々起きてるな。

「ふむ。大体は理解したぞ。ご苦労だったな」
「いや・・・なに。マスターはお前たちの事を大変心配していた。この任務は放置して構わないからかえって来いという伝言もある」
「それはマスターからか？」
「あぁ。出来れば直ぐにでも戦力を集めておきたいみたいだな」

任務を放置、か。まぁそれは問題ないが。いつもの事だし。

「昔もマスターのピンチのときに任務を放置して助けに行ったことがあるが・・・貴様が迎えにくるほどなのか？」
「現状は聖王教会エリアから動けないでいるが、直ぐにでも動く予定もある。幻影の騎士を総動員させてでの作戦らしい」
「ほう・・・あやつらがな。今の戦力はどうなっておる？」
「すずかは既に到着していたが他はまだだな。恐らく恭也は敵対する可能性がある」
「ほう・・・・」

あやつは妹スキーでシスコンだからな。まぁ全く問題もない。だがまぁ戦力としては確かなものだ。すずかさえ居れば大丈夫と思うのだがな。まぁ良い。

「判った。戻ろうではないか。ギルガメッシュとも逢いたいしの」
「・・・・・・・・・・・・」

ん？なんだ急に黙りだして。ギルガメッシュがどうかしたのか？

「ギルガメシュとは現在連絡がとれていないのだ。津名魅を逃がすときに別行動をとってからずっと、だ・・・・・」
「・・・・・・・っ！！！」
我はつい、怒りに任せてリィンフォースの襟首を掴みかかったのをすんでのところで抑えた。
あの・・・あのギルガメシュだぞ。王の中の王。英雄王が！連絡も取れないなんぞ・・・・っ！！
「理由もわからんのか・・・・？」
「一切、だ・・・」
目を閉じて深呼吸してから少し考える。それなら。もうやる事は決めた。
「直ぐに戻るぞ。準備などない。この身一つ出来たのだしな。さぁ、案内しろリィンフォース。お前の祝福の風を我らにも吹かせて見せろ」
「それは助かるがどういう風の吹き回しだか・・・では行こうか。直接津名魅へは無理なので近くの場所になる」
リィンフォースが転送魔法を起動させる。足元には三角形のベルカ式魔法陣が現れた。
元々一人用だったのを大魔法化させて吹く数人の転送を可能としたらしい。これも暫定マスターのC．C．の力らしいが。
ギルガメッシュ・・・我は信じぬぞ。貴様は無事なはずだ。まだ我に王たる矜持を全て教えてもらっておらぬのだ・・・・・。
転送魔法が起動する。周囲の、といってもシュテルもレヴィも小脇に抱えられているので我くらいだが。

光に包まれて我等はこの世界から消失した。いざ、津名魅へと。

「さぁ・・・どういうことか詳細を話して貰うぞ、ミラージュ！」

第百二十五話　無限書庫の導き

ユーノＳｉｄｅ

ずっと無限書庫にこもっていてわかったことがある。個人情報すら無限書庫にはあるということだ。
なんという怖い場所なんだっ・・・・無限書庫！

此処最近はＪＳ事件が終わった後もずっと此処に篭ってるわけなんだけど・・・そろそろ陽の光が浴びたい。
ひょろひょろモヤシ司書長なんて呼ばれてるくらいだからね！
あぁ、でも勿論遺跡調査とかにも出てるけどね。夜とか。

「あぁー、フィールドワークは楽しいなぁ！いろんなことが見つかって楽しいなぁ！」

うっすらと涙の見える目は眼鏡の奥で他の司書が見る事はない。
一人でずっと篭って仕事するのも楽しいなぁ！

昔、クロノから言われた調査がもう直ぐ終わりそうだ。

「でも、このデータも最近になってから見つかりだしたのも何か意味があるのかな・・・」

１０年前に。クロノ執務官（当時）に言われた調査依頼。

ミラージュ＝ヴィジョンの調査。

これがもうすぐ終わりそうなのである。ただ、色々と思うところが

ある。

「でもおかしいね。ここ数日になっていきなりデータがあつまりだすなんて。しかもあの通告の後にいきなりだ」

何か裏がある？それも調べるか？でも彼が反逆者として賞金首になって更に次元犯罪者として追われる身になるなんて出会った時には思いもしなかったけど。

なのははどうしてるんだろう。最近連絡取ってないなぁ。同じ本局に居るんだから逢えそうなんだけど。

いつもフェイトがいるから話しかけるのも気まずい。

「いや、別にキニシナイでもいいんだけど！」

でもたまに司書の女の子たちの視線がイタいんだ。これってなんなのかな。最近それがキモチイイ。

２０超えてまだってのも問題かな。いや、それは関係ない！そう思いたいぞ！

と、とにかく。あの通告の後にミラージュのデータがわんさかと出てくるようになったわけなんだよね。

クロノにも連絡してあるからもうすぐ連絡が来るだろう。

それまでにデータをまとめておかないとなぁ。

『ユーノ』

あ、いきなり通信きたな。話題にしてると来るとか狙ってるんだろうか。それとも見られてるんだろうか。気になる。

「うん。昔に言われてたミラージュ少将のデータだけどね。あ、元、

か。ここら辺キニシナイと駄目なんだよね。
　で、だね。最近になってどんどん出てきたんだよ。まるで今のタイミングを見計らったように」
『いや、そんな都合の良いタイミングなんて・・・いや、でも。可能性はゼロとはいえないか』

何事も必然に物事は動いていく。だからこそ、このデータが出て来たんだと思う。
データが出てきた件についてはクロノも考えだしたみたいだ。やはり何か関連性があると踏んだようだけど。
これについてはお互いで調べていこうということで決着した。

「色々と出てきたけどまとめてみたのがあるから送るよ。参考にして。それと、其処からピックアップしてくれれば更に詳細を送る」
『あぁ、頼む。こっちも色々とあの件で動いてるから。中々連絡が取れないかもしれないけど目は通しておく』

そうしてくれるとこっちも集めた甲斐があるってもんだよ。
さてこれで他の仕事にも手が出せる。あとはクロノの指示を待つだけだし。

「でも本当に彼が離反っていうか、反逆罪になるようなことをするのかな？」
「それを調べる上でもこの資料が必要になる。あとは本人に聞ければ一番いいんだが」

それもそうだ。だったらこの資料を最大限に有効活用してほしい。
用件も終わったのでこれで、ということで通信を切る。
やっと長い仕事から解放されると思うと気が楽になってきたぞ。

「よし。少し寝よう」

背伸びをしてこれからを決める。あとはおきてから考えよう。
そういやずっと徹夜だったからなぁ。たまにはぐっすり寝かせてもらおう――――――――――

クロノＳｉｄｅ

まさかあのミラージュが次元犯罪者になるとは。確かにあいつの力はロストロギア認定クラスとは思ったが・・・。

「なんとも、だな。出会ったときに感じたことが今正に裏目に出てる感じだ」

あの力は通常、人の持ちえる力じゃない。だからといってあいつの周りに居る奴らの力もそうだけど。
だからこそ管理局を嫌っていて入局を渋っていたはずなのに、いつの間にか執務官になって、提督になって、少将まで昇って。

「役職、階級だけならいつのまにか僕を超えていたんだな。まったく・・・キャリアは怖い」

僕だって多少はキャリアの端くれだと思ってる。執務官からＸＶ級戦艦の艦長にまで登ったんだから。
前線に立ち続けることを選んだら此処が一番いいんだろう。
ＪＳ事件でもゆりかごを止めるために艦隊を率いたくらいだし。

だがあいつはそれ以上に功績を挙げていたわけだし。数々の難事件、世界の危機を救ってきている。

いや、そんな僕の事は良い。今はミラージュの事だ。

最高評議会からの通達では捕縛。逮捕。封印指定らしいが・・・・。

さらには今は力を失っているという。どういう経過でそうなったのかは判らないが力がなくなったのなら誰でも捕まえることが出来そうだ。

それが真実なら。

更に。そう、更にだ。

捕縛内容は「ミラージュがロストロギア認定を嫌い、逃亡した故の捕縛」となっている。

いくらなんでも今、この状況でその認定とは。いや・・・・だが思い当たる節は確かにある。

ＪＳ事件でのゆりかごの件。あいつは一撃でゆりかごを一瞬で消滅させた魔法を持っている・・・・今は魔力がないからあった、といったほうがいいのか？

ソレを鑑みれば確かに認定されるだけの事はあるが・・・・。

「あいつ・・・・今頃何してるのかな」

戦艦のブリッジの椅子。深く座ったソレはふかふかに体を包みこむ。

部下で同僚で上司で。あっという間に駆け上って行ったな。

何処までいくのか見ていたかったけどもうソレも無理だろう。

考えてるだけじゃ何もわからないし。なら会いに行くしかない。敵同士になろうとも。僕があいつを止める。もう、決めた。

「本艦はこれよりミラージュ＝ヴィジョン捕縛の任にあたる。反抗した場合は戦闘許可」

この戦艦全てに通達をする。すまないミラージュ・・・・僕はやはり組織の人間なんだ。

ユーノの送ってきたデータを見ながら君の対処をすることにするよ。

苦し紛れ、あまり宛にもしていなかったデータ収集だけど此処まで個人情報が揃うのも無限書庫の恐ろしさだな。

だが良い仕事をしてくれた。後で食事に位は誘ってやろう。どうせフェレットだしそんなに食べないだろう。

「・・・・フェレットってドッグフードとキャットフードどっち食べるんだろうな」

第百二十六話　輪廻の魔女のやり口（前書き）

訂正部分：更新後すぐに直しましたが簡易プロットが残ってる状態で更新させてしまってました。
お見苦しいものをおみせしてしまい申し訳ありません。

第百二十六話　輪廻の魔女のやり口

リンカＳｉｄｅ

うーん。色々な方面に指示を出した後は待つだけだから面白くないなぁ。
意外とする事がなくてつまんないねー。

『リンカ様、よろしいでしょうか』
「いいよー。なんだい？」
『例の案件についてなんですが・・・』
「うんそれについては君の上司に話がついてあるから聞いてごらん。全部任せてあるからね。好きにしていいよ。責任は僕がとるから安心していいよ」
『は。了解であります。お手数お掛けしました！』

とまぁ。さっきからこんな感じで通信が来るんだよね。
その都度ちゃんと指示を出してあるから特には問題ないんだけどさ。
僕が全責任を負うから大丈夫。っていうと大抵通るから面白いっちゃ面白い。

まぁ、ミラージュが此処に来るなら来るで待ってるけどさぁ。
でも本当に来るかな。なんだか向こうも色々やってるみたいだし。

「嘗ての仲間に追われるのはどういう気分かな？かな？」

このまま追い詰めたらどんな顔をするのかな。ソレが見れないのが残念で仕方が無いよ。
折角嘗ての仲間達で仲間割れを起こさせているっていうのに。

「もう少しスパイスをふりかけてみようか。そうだね。まずは――――」

デスクをトントン、と指で叩いてから基板になっているボードに目を落とす。

其処にはミラージュの仲間達の顔写真が貼られていて。その一人に指差した。

「彼女にはもうちょっと苦しんでもらおうか。そうだね、」

白い魔導師の顔写真をさしたまま、薄ら笑いを浮かべて。

なのはＳｉｄｅ

本局の津名魅専用ドックの外から中に入ると私に負かされた部隊の人たちは各々の部署に帰っていく。

どうやらいろんなところから集めた面々みたいだね。

入り口に立ちすくんじゃったからちょっと邪魔にならないように移動しよう。

いつもの自販機の近くのスペースに行ってみよう。誰か居るといいけど。

で、スペースまで移動すると誰もいない。流石にこの状況で休むのもいないか。

「なにより、面子が此処にいないもんね・・・・」

なんだか疲れた。精神的にどっと疲れた気がする。友達に杖を向けるなんて思わなかったな・・・。

「まさかはやてたんやギルガメッシュさんに向けるとは思わなかったよー・・・・」

あ、やばい。私ぐったりしてる。自分でそれがわかる。これって結構精神的にクるね。なんとかして保たないとなぁ。後で救護室にいってみようか。

「シャマル先生・・・・はそうか・・・いないんだっけ」

駄目だ。もう感覚が慣れている。はやてちゃんたちがいる事に。フェイトちゃんたちがいる事に。

――――――――――――ミラくんたちがいる事に。

「私、こんなに寂しがりだったんだ・・・？」

自販機スペースのベンチに座って一人息をつく。こんなの誰にも見せられないね。

「そうだね。ちょっと恥ずかしいかな？」

「てきゃっ？！あれ！？いつのまにいたの！？ていうかえええええ！？」

「なのはママ、おどろきすぎー」

あれ？ヴィヴィオ、と・・・・その顔は今ちょくちょくモニタで出

てくる顔だから忘れようが無い。

「貴方は・・・・最高評議会の」

「そう。僕が最高評議会に居座っているリンカ＝ネーション。リンカって気軽に呼んでくれていいからね」

黒髪の少女が軽く微笑んできた。あれ、こんなに幼女だったんだ・・・。

モニタの見た目的には同じかちょっと上?位だと思ってたんだけど、ヴィヴィオと並んでると同じくらいに見えるよ。

「今、失礼なことを考えなかったかい？」

「ひゃいっ?!そ、そんなことななないですよ?!」

あああ、どもっちゃったよー！

「そんなにどもらなくてもいいよ。何を驚いてるのさ」

「いきなり出てきたらそりゃ驚きます！」

「まぁほら。いつまでも預かってるわけにもいかないから返しにきたよ」

リンカ、さんの手にはヴィヴィオが手を繋いでいた。

「え・・・だって」

「何を言ってるんだい？僕は危なくなりそうな聖王教会エリアから彼女を保護しただけなのに」

「・・・ありがとう、ございます」

あれ。なんで泣いてるんだろう私。なんだか涙が止まらないよ。

「なのはママ、泣いてる」
「ううん、違うの。大丈夫だから。うん・・・ごめんね」
「なのはママ、いいこいいこ。泣いちゃだめ」

駄目だよヴィヴィオ！そんなことしたら余計ママ泣いちゃうから！！

「ともあれ、返したからね。あぁ、もうすぐ君の親友も帰ってくるよ。あと数分たらずで」
「え、フェイトちゃんが？」
「どうやら君の事が心配だったみたいだね。補佐官一人に任せて帰ってきてたよ」

そっかフェイトちゃん仕事から帰ってきてるんだ。でも任せるってちょっとどうかと思うんだよ！
でもそれならすぐに連絡は取れそうかな。

「あ、此処に来るから連絡はとらなくていいんじゃないかな？」
「え」

心を透かされた感じに考えてることに返答されたよ！一体何者！？

「僕は僕だよ。僕以外の誰でもないよー」
「あぁ、また！また心を読まれたよ！もういいよ！」
「じゃぁ僕は帰るよ。あぁ、その前にハラオウン執務官とも話をしてから帰るけど」

そんな報告いりませんから帰ってください。本当に。手を振りながら黒尽くめの女性、リンカさんは廊下をスキップで歩いていく。
ヴィヴィオはずっと私の横に。気付かなかったけどずっと手を繋いでいた。

あれ？さっきはリンカさんと繋いでたよね？

「ヴィヴィオ。大丈夫だった？」
「うん、リンカおねーちゃんやさしかったよ！」
「そか。じゃぁまた遊んでもらえたらいいね」
「うん！」

ヴィヴィオは懐いてるからあんまり強くいえないけど、ね。仕方ない。
でも無事に帰ってきてくれて本当によかった。出来ればもう危ないことにはあわせたくないな。

「なのはママの部屋にいこっか。フェイトママも来るって言うし」
「うん！フェイトママ待ってる！」

ヴィヴィオと手を繋いで私は本局にある自室へと歩いていく。フェイトちゃんなら後でも連絡取れるしね。

フェイトＳｉｄｅ

シャーリーに仕事を任せて（押し付けて）本局に帰ってきたよ！ティアナも気に掛かってたからついてきた。

うんと、なのはの部屋にいけばいいのかな？

「まずは報告に行きましょうよ・・・」

「うん、それはほら。じゃぁティアナに任せようか。これから必要になるかも知れないしね。覚えておくのもいいことだよ」

「それって体よく私に仕事をなすりつけようとしてますよね！？」

「そんな馬鹿な」

そんなことはないよ。決してなのはにすぐ逢いたいってわけじゃないんだけどね。

「フェイトさんのなのはさんスキーは一年以上一緒に居るんですしわかりますって。じゃぁ私は報告書を出してきますから先に行ってきてください」

「うん、ごめんねティアナ。ちゃんと穴埋めはするから」

「大丈夫ですよ、そんなに気にしなくても」

そう言ってティアナが報告書を出しに離れていく。じゃぁ私もなのはに会いに行こう。

本局の中を歩いてると人が多くてすれ違うのも大変だ。なんだか武装してる局員が多い気もするけど。

こでもミラの事での動きなのかな。そういえばはやてはどうしたんだろう。無事に聖王教会にいったのだろうか。

「そこらへんの情報が全くないね。少しでも判ればいいけど」

「うん、そうだよね。じゃぁ情報はいかがかな？」

「え――――――？」

いきなり後ろから声を掛けられた。黒い服を着込んだ女の子。満面の笑みを浮かべてこっちを見ている。

距離にして二、三歩後ろ。振り返れば其処にいた。

「やぁ。君がハラオウン執務官かな？クロノ＝ハラオウン提督の養妹。仕事はもういいのかな？」

「あ、はぁ・・・・一応は？」

あれ？誰かな。私の事知ってるっぽいい言い方なんだけど記憶にないよ。

「まぁ僕の事は気にしないでもいいよ。それよりも高町教導官が会いたがってたよ」

「あ、すいませんありがとうございます・・・・あれ？なのは・・・高町教導官と知り合いなんですか？」

「うん。さっきね。少し話したくらいだけどね。あぁ、ヴィヴィオちゃんだっけ？彼女は可愛いねぇ？」

ヴィヴィオの事まで知ってるんだ。確か今は学校に行ってる筈だけど。

「本局に来てるよ。これから危険で大変な時期になりそうだから保護という感じでね」

「あ、そうなんだ。ソレは安心だね・・・・ええっと――――」

「あ、僕はリンカ。リンカ＝ネーションだよ。この時空管理局の最高評議会に座った者だよ」

あ。そうか。なんだか聞いたことのある声だと思ったらそれか。表明の時とミラの捕縛指令出したときの声が一緒だ。

最高評議会

「ミラの状況が知りたいんだけど・・・・ですけど」

「言い直したから許してあげよう。じゃぁ説明してあげるよ」

私は彼女、リンカから状況を聞きだすことに成功した。
ミラの状況、その討伐部隊になのはがついたこと。
はやてが離反したこと。色々聞いた。

「喜美はどう動くのかな。いや、どっちにつくの？」

じ、と私を覗き込むように見てくる。管理局のトップにこんなに見られたら答えづらいよ・・・・。
でも・・・はやてともなのはともどっちかの敵になるってことだよね。
しかもどっちか選べって言ってるし。え、これって今選ばないとダメ？

「出来れば今選んでほしいけどね。じゃぁ選ぶ基準を一つ教えてあげちゃおうかな」
「お願いします」

ソレを基準として出来るなら是非とも欲しい所だ。いったいどんなことなんだろう。気になる。

「高町教導官はさっきまで一人でした。ヴィヴィオちゃんは可愛いね。まあ、さっき返してあげたけどね」

其処まで言って私は理解した。この人はっ・・・・・・

「ヴィヴィオを人質にとったのかな・・・・・？」
「人質なんて酷い言い方だね。保護って言ってほしいよ」
「保護はいいとしても・・・」

「ただ、どうかな。それで高町教導官は言うこと聞いてくれてたんだけど普通に返しただけじゃもう終わっちゃうよね」

・・・・・・この人は。何を言ってるんだ。何を言ってるんだ！

「だからね。彼女がまだ言うこと聞いてくれるようにしたんだ。ヴィヴィオちゃん。かわいいね。だからちょっと悪戯しちゃったよ」

「何を・・・・言って・・・・・・・」

「クス。本当にまだちゃんと理解できてないみたいだね。いや、それとも理解しようとしたくないのかな」

「何を言ってるんだ・・・・」

「だって。ヴィヴィオちゃんには――――――爆弾が

「貴方って人はあああああああああああああああああ！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

私はつい声を荒げてしまった。周囲の事なんて構わずに。

怒りで身の毛が震え上がりそうだ。こんな気持ちは・・・・久しく忘れてた。

「ただまぁ。これを高町教導官に伝えてもいいんだけど・・・・・・

君はきっと許さないよね」

「とうっ・・・ぜんだ！こんなの許されるはずがっ・・・・！！！！！

！」

「だったらどうする？もう外せない。はずせないんだ。だから君が取る選択肢は二つ。彼女に伝えて一緒に朽ちるか、何も言わずに代わりに手駒に落ちるかだね」

私は。このリンカという人物を甘く見ていたのか？

それとも私自身が甘かったんだろうか。

とにかく、どうしたらいいんだ。

「なのはに・・・言ったらダメなんだよね」

「うん。そうだね。それじゃ意味がない。二人してきっと敵対するから。ヴィヴィオちゃんのどこにどんな爆弾を仕掛けたかは僕しか知らないよ」

つまり、取り外すことは出来ない。出来たとしてもそれを探してるうちにリンカに知られるだろう。

遠隔操作が出来るタイプだったら終わりだ。つまりは――――

「――――――――――わかった。何が望み？」

「話が早くて助かるよ。つまりは――――」

「彼女の代わりに闘ってくれないか？」

私はその問いかけに首を縦に振るしかなかった。

リンカＳｉｄｅ

ハラオウン執務官を見送るよ。
これで仕込みは終わりかなー。やっとセカイに降りてきたんだから
このくらいは遊ばせてほしいよね。
あの人だってたまにやってたことだし。でも単身で遊びに来るのは
珍しいことなんだよっ。

「僕単身でも遊べるくらいは仕込ませてほしいよね」

だからこそのミラージュ。彼は神の一柱から得た力で転生をした人
物。
僕にだって昔は転生させたニンゲンくらいはいる。だからこそ、だ。
転生者で遊べるのは僕達の特権。

「ねぇ？そう思うだろ？君もさ。どうせ降臨してるんだろうから聞
こえているんだと思わせておくれよ」

ソレが僕達神たる権限（顕現）なんだから。

第百二十七話　弾丸兄妹

ティアナＳｉｄｅ

フェイトさんに言われたとおりに報告書を提示に本局内を移動中です。
機動六課が終わってから執務官補佐という形でフェイトさんのサブについたんですけど。
フェイトさんはなのはさんの事になると前が見えなくなって直線特攻思考なのでそれを抑える役目もあります。

「報告書くらいは別に提出にいってもさしあたりないからいいんだけどね・・・・と。ここか」

提出場所まで来ると私は書類データを渡して仕事を完遂させる。
この程度なら別になんともないからいいんだけど。

「本局の中があわただしい・・・多分ミラ隊長の事なんだろうけど」

今の私には関わる事の無い事。そう思っていた時期が私にもありました。
フェイトさんへの辞令。しかもこの印は――――――

「最高評議会からの直接辞令なんて・・・・・やるなぁフェイトさん」

いつか私もこうして上に認められて仕事がしたいな。
その為にもちゃんと執務官にならないと。

「いつか、兄さんの隣で立っていられるように・・・・・いつかっ」
「呼んだかい？ティア」
「ってえええええええあああああああああああ！？」

いきなり目の前にティーダ兄さんが立っていた。どうやら私はボーっと歩いていたらしく、ぶつかりそうになっていた。
直ぐ前にティーダ兄さんがたっているので数歩下がって会釈する。
一応は執務官と執務官補佐という役職上ちゃんとしないとね。

「ティアナ＝ランスター執務官補佐。君はフェイト執務官の補佐だ。俺にそんな会釈は必要ないよ」
「いえ、しかし執務官ですから」
「それに兄妹だし」
「いえ、執務官ですから」

ここの線引きはちゃんとしないといけない。甘えが出てしまうと私はきっと負けてしまうから。
ミラ隊長にも教わった。時には冷静に物事を考えるべきと。
そして目の前に居る兄はそのミラ隊長の補佐でもあったわけだし。

「艦長の教えは利いてるみたいだね。じゃぁ俺は行くか。ヴァイスも待ってるし」
「あ・・・・その」
「ん？どうした？」

ティーダ兄さんが歩き出してすれ違いざまに声を掛ける。

「兄さんはミラ隊長の・・・・」
「どうかな。俺は純粋なこちら側だからな。それにお前の事も心配だよティアナ」

それは反則です兄さん。あと私のほんの一言で全部を理解する癖はどうしたものかと思うんですが。
そんなに判りやすいのかな・・・・。

「それにな。向こうには多分戦力が大きく分断されて持ってかれてる。人数が少なくても管理局の戦力の多い割合で向こう側だ。
　となると管理局自体には勝ち目は薄い。だったらその分こちら側についていないといけないわけだ」

それは判りますよ。向こうはセイバーさん達がいるわけですし。教導隊の絶対不破の壁。ダメージを与えたものは居ないとさえ言えるんだし。
・・・・でもそれってつまり、

「今までの仲間同士で闘うって事ですよ。もしかしたら命のやりとりも・・・・」
「それは間違いなくあるだろう。第一相手は人ならざるものの方が多いんだ。人でしかない俺たちはその力のご相伴に預かってただけだから。
　その力に対抗できるのもその力を受けたヤツくらいだってことだろ。ティア。お前もその一人なんだからな」

ティーダ兄さんはたまに難しいことをさらっというよね。ソレは判ってるけど言えなかった事なんですよ。
私はミラ隊長に知識を貰った。戦術と戦略。今もあのチェスは暇さえあれば一人で組んでいる。

「八神部隊長が離反した以上、指揮や指示系統は出来るやつに振り分けられるだろう。そうなれば恐らくお前にも声は掛かってくるよ」

「そうでしょうか・・・」
「あぁ。お前の指揮系能力はＪＳ事件で充分発揮されていた。実績がある以上は使われるよ」
それもミラ隊長を捕縛する為に使われるというのはなんともしがたいですね。
「ミラ隊長は・・・何をしたいんでしょう」
「うーん。それはきっと本人じゃないといえない答えだろ。俺でもあんまり言えないからな」
「その言い方だと知ってるような口ぶりに聞こえますよ兄さん」
「うん？そうかな。まぁ肩肘張らずに多少は力を抜いていけって言う兄からの助言だよ。ティアは少し意固地になると変に我侭になるから」
それは言い返せない！言い返せないよ！？
それだけ言い残してティーダ兄さんは歩いていってしまった。
私は一人廊下に残されてしまって、これからの事を考える。
「指示系統に召集、か。でもそれがどうなるかはわからないものね」
第一、まだ執務官補佐でしかない私が呼ばれることなんてそんなに無いだろう。
もっと優秀な方もいるわけだし。だとしたら私がでしゃばる必要は無いんだ。
「まずは・・・出来る事。フェイトさんに辞令を渡しに行こう」
フェイトさんはなのはさんのところかな。だとしたら近道を使っていこう。

ティーダＳｉｄｅ

本局の廊下でばったりとティアと出会った。六課以来あんまりあってなかったし、機動六課でもあんまり接点がなかったな。
少しばかり話をしてから分かれることになったけど。

「ごめんなティア。兄さんはまた嘘をついたよ」

艦長のやろうとしてることは大体わかってる。イレギュラーの対策なんだろう。
ここら辺はうっすらとだけどアーチャーさんに話を聞いていた。

「艦長がイレギュラーとして対処されるのは聞いてたけど。このタイミングか」

いや、違うな。このタイミングこそが、というべきなんだろう。だとしたら俺はどうする？
俺や恭也さんはこのまま本局に残ることに決めたけど。

「つまりは艦長とやりあうのか。あの力を失ってるって言う情報もあるけどあの壁を突破するのは酷だなぁ・・・」

サーヴァント、グレイル隊の鉄壁はきっと打ち破るのに大変だ。
それとファントム隊もいるわけだし。

「そう考えるとレグルス隊は分裂か。アリサちゃんやすずかちゃんは向こうだな」

こっちには俺と恭也さんだけか。あ、これは戦力分散できてないぞ。やばいんじゃないか？

「でも、ま。離れられないよな」

恭也さんは高町教導官のところにいくだろうし。俺もティアがこっちに居る以上艦長の方にはいけない。

ともに妹離れしてないんだなぁ。ヴァイスもそうだろうし。

「・・・・ははっ、結局妹に振り回されるのは兄の役目、ってか」

だったら。それならいっそのこと振り回され続けよう。妹の為にこの命を使おう。

ティアを護る為なら俺はきっと艦長にすら銃口を向ける。その覚悟はきっと――――――――――――

第百二十八話　幻影と幼き神

ミラＳｉｄｅ

津名魅ブリッジに突然現れた存在に全員の視線が向いた。
自然では生まれない蒼く長い髪。少年とも少女とも取れるような中世的な顔。それに伴った背丈。
そしてその存在には強く見覚えがあった。

「あんたは・・・・」
「うん。久しぶりだねミラージュ。ううん、綾人」

俺をその名前で今も呼ぶのはあんたしかいないよ。なぁ――――――

「・・・・神」

俺のポツリと出た一言にサーヴァント以外の雰囲気がどよめいた。
サーヴァントは顔見知りだけどアルクェイドと志貴、はやてたちとは初対面だしな。津名魅はまぁ・・・・何時も通りだけど。

「ごめんね。色々あってイレギュラー討伐の事で君にこんな困難な道にさせてしまった・・・・ごめん」
「謝るなよ。べつに謝ってほしいわけじゃない」

神が俺の近くで頭を下げている。俺はソレを制して、

「神が簡単に頭を下げるな。堂々としていろよ」
「本当なら君の死の変わりに楽しめるようにって思ったんだけど・・・・どうやら改竄が行われたようなんだ」

「それがヤツか」
「うん。もう実際にあっているよね。彼女がそうだ」
やっぱりか。こいつから受け取った力は神の力なんだし、それをどうにかできるのは神か同等の存在だけ。
「あいつも神か」
「うん。どこの一柱だかはわからないけど、多分、僕に近い存在だと思う」
となるとやっぱりきついな。そんなヤツに挑もうって言うんだから。他にも手が必要だな。
「そういえばギルガメッシュが帰ってこないのもそれに関係があるのかもな」
「あ。ギルがいないのか・・・・ちょっときつい？」
「まぁそれでもなんとかするさ。いつもあいつは一番最後においしいところを持っていく役割だったしな」
少し考えてるとはやてのほうから声があがった。
「あの、ミラくん？ちょぉえぇか？紹介してほしいんやけど・・・・？」
「うん？なんだはやて」
「いや、その子・・・・今なんて？」
「あぁ。神様だよ」
「嘘や！」
「いやいや、とんでもねぇ。あたしゃカミサマだよ」
「どこの志〇けんだ！！？」

なんだこのやりとり。

はやてＳｉｄｅ

○村か！カミサマってどんだけお笑いやねん！！

ミラＳｉｄｅ

恐らくわかってないのははやてたちとアルクェイドたちか。説明するしかない、よな。信じてくれるかどうかは別で。
あぁ、そうか。そうすると俺の事も言わないといけないのか・・・・。

「いいか？」
「うん？僕は別にいいと思うよ」

視線を向けて神に聞くとフランクな返事が来た。ので、少し深呼吸をして己を落ち着かせる。
どこからどうやって説明するか・・・・。

「はやて。守護騎士も。それと吸血姫。これから話すことは真実だ。だけどそれを信じるかどうかもお前達次第だ」

俺は、やっと過去を口にし始めた。多分、誰にも言ってないこと。最初から居たサーヴァント以外には・・・あぁ、イルジオンリッター（幻影騎士）がいたな。

でも、ここまでは話してないんだよ。この契機に喋ってしまおう。

「俺は一度死んだ人間だ。そしてこの時空間世界の人間じゃない」

第一声から衝撃を与えるには充分な言葉だな。何か言ってきそうなのを制して俺は更に続ける。

「そしてそこであったのがこの神様だ。俺を生き返らせてくれるって言う事だが、元の世界にはもう肉体がなくなってたんでな。この世界に来た。

で、俺は蘇生のときに力を貰った。誰にも負けない位に強い力を。そういう事をしてあの力を得たんだよ。

海鳴に降りた俺はまず時系列を調べた。そしたら丁度お前達夜天の書が封印から解かれたときだった。これから何が起きるのかもわかってたから」

「なるほど。それで私たちに接触してきたのか」

シグナムが合間に入る。

「そうだ。そして俺ははやてと接触してはやての未来を変えた。本来なら長く続く麻痺も無視して魔力を溜め込ませて、な。

夜天の書は通常の予定より遥か早くに蒐集を終えて覚醒を始めた」

「あの時管理局が入ってきたのは？」

「勿論事前に知っていた。だから俺は管理局と敵対しただろ？最初

だけだけど」

シャマルがなるほどそれで、と呟いた。他に何もいってこないので話を進める。

「サーヴァントはカミサマから俺に貰ったデバイス、というポジションでいてくれていたんだがいつのまにか受肉化してたな。霊体化も出来るみたいだけど」

「それはマスターの魔力が高かったからです。それだけ濃い魔力だったのでしょう。途中から聖杯の恩恵もありましたし」

「その聖杯の持ち主も俺自信だったんだろう？」

「うん。君の・・・綾人のもう一つの人格っていうかね。君と同じ相似的存在。ただ性別は逆だったけど」

C．C．。俺の同位存在。この格好だからと言う事であの姿で出てきたらしい。ここら辺はこの神の趣味だといってたが。

「そのC．C．とも闘ったがな。あとはまぁ、記録にあるとおりだ」

「・・・・・・・・・」

沈黙が落ちる。そりゃそうだな。

だがそれを破ったのがいた。はやてだ。

「なら、イルジオンリッターを作ったんはなんでや？」

「本来、イレギュラーというものがやって来るんだと俺は思ってた。だからそれに対抗する為の組織を作ろうとしたのさ。

それと管理局の力も必要に駆られたんで嫌々入局もした。本当は嫌だったけどな。でも発言力を得る為には上に上らないといけない。

その為に力を揮ってまで一気にあがったんだ」

「管理局がいやって・・・・」

「管理局は年齢制限がない。まだ深い理由まで判ってないような子供まで入局させて管理教育をしていく組織だぞ。俺はソレを知ったときは苛立ちしかなかったが」
「ぅ・・・・・」
そこではやてが黙ってしまう。どうやらはやても多少は思ってたことだったんだろう。
聞けばそこも正す為にキャリアになって上にいこうとしていたらしい。
俺とおんなじ考えだったみたいだな。

「これからどうするんだ？此処にきたってことは何かあるんだろ？」
「うん・・・しばらくは力を蓄えないといけないんだけど、あのままずっと上にいるわけにもいかなくなっちゃったからね。
だから君と一緒にいる事にしたよ。あぁ、邪魔はしないよ。寧ろまだ多少は力は残ってるからね」
「そっか。それならいいけど。俺は護れないぞ？知ってる通り力がないからな」
「そこはC．C．に頼むよ。もう一度君に力を戻すことは多分無理だからさ。ごめんね」
「いや、いい」
其処まで望むわけにもいかない。

「いま、こんなに力があるんだ・・・・・いや、まだ、の部分があるな――――――はやて」
名前を呼ぶとはやての体が震えた。
「此処まで聞いてどうするか、決めてくれ。管理局側に戻るなら戻

れるだけの事はしよう」
「どういう、ことや」
「お前になら捕まえられてもいい」

その後、逃げればいいんだしな。出来るなら、だけど。まぁ其処はそのとき考えるか。

「やめぇや。私はギルガメッシュとも約束したんや。ミラくんの隣におるって決めた。覚悟も決めた。せや、から管理局に今、戻る気はあらへん」

はやてがまっすぐこっちを向いてくる。

「後悔するかもしれないぞ？」
「えぇよ。ミラくんとなら」
「守護騎士。お前たちもいいんだな？」
「須らく。王が決めた道なら私たちは共に」

守護騎士の決意も固いみたいだ。ならもう多くは言わない。

「なら、俺と一緒に来てくれ。いや、はやてを護ってくれ」
「フ・・・お前に言われずとも主はやては我らが護る」
「おうよ。当然だぜ」
「少しまだ考えることはありますけどね。でもアナタをずっと見てきた身からすれば信じられますよ」
「俺は師匠を疑う気もない」

夜天の騎士は俺を受け入れてくれた、のかな。嬉しいね。

「よろしく頼むぜ。なにせ何かあっても俺じゃはやては護れないか

らな。直接的な力が無い以上、誰かに頼らないと無理だし」
「その為にお前にはこれだけの仲間がいるんだろう？」

そうだ。サーヴァントは俺との絆で。
すずかも答えられなかったけど愛を向けてくれている。
アルクェイドも盟約、なんだろうな。志貴もソレに付き合ってくれるって言うし。
はやても夜天の騎士も。神も。津名魅も。

「みんなありがとうな」

ぽろりと言葉が口から漏れた。

「俺は何もできねぇ。だけど此処にいる。ここにいられるのはみんなのおかげなんだ。だから――――俺の望む場所までみんなの力を貸してくれ」

みんなの力があれば何でも出来そうだ。今まで一人の力でしかなかった俺が。
やっと進める。この一歩は大きい。

「んじゃぁ取り返しに行こうか。俺の力を。そして終わらせよう。俺という存在を」

神Ｓｉｄｅ

彼の行く路を僕も一緒についていくことにした。
彼を転生させてこの世界に送り込んだ責任と。
彼女を放置していた僕の責任と。

「僕も決めなくちゃいけないね。進む路を。そして――――――過去との決別を。ねぇ・・・・・・・・」

第二十九話　これから・・・

はやてＳｉｄｅ

ミラくんの言葉が耳について離れない。
一度死んだ?それに転生?一緒におるんが神様やって?

「なんやねん・・・」

頭の中でぐるぐる回っとる。けど、結局は受け入れるんよ。
だって、なぁ。

「好きな人の事は何でもＯＫなんやもん」

たとえ死んだ人であろうミラくんはミラくんや。それ以外の何もんでもない。
せやからわたしは何も変わらんでいくよ。
そういう約束やもん。何も疑わずに信じていくってな。

「恋する乙女は超強いんやで」

シグナムやシャマルが心配そうに見とるけど大丈夫や。わたしはこんなんで負けへんよ。
なのはちゃんやフェイトちゃんとは一歩どころかかなりリードやもんな。
こんな話はきっとあの二人も知らん筈やし。
それならそれでわたしはミラくんを受け入れたいんや。

「キャリアとか、そういうんはダメになってもうたな」

ポツリと呟いてしまっていたことにわたしは気付かなかった。いや、気付けなかった。

シャマルが。ヴィータが。わたしを包んで抱きしめてくれるまで。

そこでわたしは呟いていたことを気付かされたんや。

「ん。大丈夫や。皆には心配させへんよ」

ミラＳｉｄｅ

過去の告白から少しの時間が経過する。

津名魅のブリッジはただ沈黙がおりていた。だがこれも拭い去るしかないんだ。

「みんな、降りるなら今のうちだ。これから俺が起こすのは――――――悪いことだからな」

全員を見渡す。しかし誰も降りようとするものはいない。
寧ろ皆やる気を見せていた。あ、一応全員揃っているんだ。ギルガメッシュ以外は。

「これから俺たちは時空管理局本局に突撃を掛ける。目的地は――――最奥、最高評議会室！」

ブリッジの中央に立ち、これからの道程を示す。
そう、これは正義を翳す時空管理局への武力介入。

「やつらが正義だというのならそれに対する俺たちは悪なのだろう。それを甘んじて受けよう。悪である、と。
そして今の腐った体制を崩して新しく作り変える。それが表向きの目的だ」
「表向きの？」
「そうだ。実際の理由なんぞ掲げても誰も動かないだろ？それに俺は管理局に賞金をつけられた悪者だからな」

クク、と低く笑う。そう、正義を振りかざすのが空いてなら此方は悪になるしかない。

「一度でも悪となったならあとは何をしても罪があるだけだ。一度塗られた罪は消えることは無い。
ならば。俺はその罪を喜んで背負おう。これは――――――必要悪である」

このブリッジにしかいない聴衆。だが俺は休まない。
津名魅に目配せをして映像通信を送る。相手は聖王教会だ。其処を介して管理局へとつながるはずだ。
今の俺はゼロの姿で仮面。素顔は知ってるものしかいないが、それ

でも充分なパフォーマンスだ。
周囲にはサーヴァント。そして吸血姫と吸血騎。はやて達は映像に映らない様な場所で立っている。

「聞け。管理局に属する者よ。我等は時空管理局に仇なす者。これより時空管理局最高評議会に向けて――――――突撃する」

そして始める。恐らく聞いているだろう、カリム＝グラシア。お前はこれを管理局に流さざるをえないよな。
管理局に向けての宣戦布告だ。上層部も動かざるを得ない。レジアス＝ゲイズ。お前もだ。もう一度表舞台に立ちに来い。
クロノ＝ハラオウン。貴様も俺を止めに来い。俺の上司で同僚だったなら。俺の前に来い。

「我らは時空管理局（正義）に仇なす悪。幻影騎士団と名乗り、行動に移る」

イルジオンリッターから漢字表記にしただけだけどな。インパクトは充分だろう。
津名魅が聖王教会から通信がきてるというが無視させる。どうせ言いたい事はわかってる。だから言ってやる。

「我らは腐った管理局の体制を崩す。今の管理局は腐敗した！ならばこれを剪定して元に戻すのだ！
その役目を私は負う。これより！我ら幻影騎士団は本局に向けて侵攻を開始する！！！」

此処で通信を切らせる。映像通信は無事に送れたようで何よりだ。
俺は仮面をつけたままで次の指示を考える。

「すずか。アルクェイドと志貴を連れて地上本部に行ってくれ。好

きにやっていいから」
「ほんと？いいの？！」

すずか・・・目をキラキラさせるな。そんなに破壊したいのかお前。

「まぁ折角だし、楽しませてもらうけどさ。いいの？これで」
「あぁ。全部終わったら無事に必ず地球に帰れるようにするよ。千年城でまだ眠りにつかないといけないだろ？」
「志貴がいるから眠るわけにも、ねぇ」
「熱い！熱すぎる！この志貴め！果報者め！」

末永く爆発しろ。

「アルクェイドがいくなら俺も本気でいかないとダメかな。相手の力がどのくらいかわからないし」
「七夜の力はどうしたんだよ」
「なんだよ、そこまで知ってるのか。最近だよ、ちゃんと使えるようになったのは」

七夜。志貴の家系にある暗殺者の名。其処から来たのだ、彼の目は。
そしてその体術も。

「三人で充分だな。寧ろ戦力過多か」

吸血姫と吸血騎。その弟子。
これで落ちないわけがない。そう思う。

「敵に回らないでくれて助かったよ。本当に」

本音が出た。だけど心の其処から思った本音。だからこそ。こうし

て仲間にいてくれる事の心強さ。

「フフフ。おだてても何も出ないわよ？あ、死人が出るかな」
「まぁ、仕方ない。俺たちは悪だからな」

今いるものには覚悟を決めてもらった。人殺しという罪からはもう逃げられない。
闘うってことはそういうことだ。

「引き際は考えてくれよ？完全に潰したら後が機能しなくなる」
「わかってるよ。生かさず殺さずだよね」

すずかさんはいつからこんな性格になったんでしょうか。激しく知りたいです。

「まぁいいわ。今すぐいく？」
「あぁ。速攻がいい。ある程度やったら帰還してくれ。ナビは出す」
「ん。じゃぁいこうかすずかちゃん」
「はい！腕が鳴りますね！」

すずか、アルクェイド、志貴が転送ポートに移動する。其処から淡い水色の光が足元から照らされて転送していった。
地上本部なら恐らく純粋魔導師もいないはずだから近接攻撃のメッカだろう。ならあいつらが負けるはずがない。

「マスター。我らは？」
「サーヴァントは引き続き俺の警護。あとは津名魅は光鷹翼を常時展開可能にしておいてくれ」
『「了解」』

あとははやて達か。あの映像に出さなかった分なんとかしてやりたいが・・・。

「ミラくん、わたしらは？」

「取り立てて大きな役目はない。恐らく管理局本陣とあたったときの戦力として出てもらうことになるが・・・大丈夫か？」

「そのつもりで此処におるよ。そこはもう何度も言うたけど覚悟はもうできた」

「ん・・・すまないな」

出来ればあんまり出てほしくないんだがな・・・。

でもそんなことはいえないだろ。此処まで言うならそれを否定することは出来ない。

「出番のときは声を掛ける。あ、あとシグナム」

「なんだ？私に用か？」

「八竜の力はまだ出せるか？」

「あぁ・・・たまに虚空殿が出てはっちゃけてるが出せる。お前から貰った力はまだ機能してるぞ」

「そうか・・・俺があの時持っていた力が奪われたって事で、分裂した力は対象外って事か・・・」

「あぁ、そうか。だとすると八竜も消えているはずだな」

そういうことだ。どうやら奪われた力はあの時に持っていた分だけということだ。

それの確認が出来ただけでも充分だ。

「ソレが判れば充分。今後の策も練れる。ありがとう」

「いや、あぁ。どういたしまして・・・？」

シグナムが首を傾げてる間に津名魅に進行方向の指示。目指すは管理局本局だ。最速一直線で突き進むように伝える。

『了解。しかし途中で本局より出撃した迎撃艦艦隊と接敵する可能性があります』

「そのときはそのときだ。出来る限り有人可能世界で頼む」

『難しいところですが了解しました』

艦隊戦になりうる、か？そうしたら数で攻めてくるだろう。空戦魔導師や武装隊か・・・。

「なのはとフェイトも来るかもしれないな。手は打っておくか」

あいつらならきっと来るだろ。俺を止めに。それとリンカがそういう風に仕組むはずだ。俺ならそういう手を作る。

その対処法も考えておかないといけないな。あいつらを相手にするのか・・・できるならしたくはないけど回避の方も考えておくか。

クロノＳｉｄｅ

ＸＶ級艦船のブリッジ。既に発進準備は整っている。

上層部からの指示は管理局に向けて宣戦布告を聖王教会経由でしてきた幻影騎士団の排斥。

「まさかあいつが管理局に宣戦布告なんてな。昔から管理局を嫌がってはいたがやはりというべきか・・・」

元から入る気も無かったのを無理やり入局させたようなもんだしな。それはわかるが・・・やりすぎだ。

何よりも犯罪者となって更にこんなことをしてしまたらもう何も助けることが出来ないぞ。

「馬鹿が・・・早まった真似を・・・」

無意識に僕は歯軋りをしていた。本当に彼を捕縛出来るか、と。

だけどやるしかない。無限書庫から出てきたデータ通りなら・・・・。

「その為には君達にも出てもらうことになるよ。汚れ役だが・・・頼む」

「うん。しょうがないよね。やるしかないんだ」

「そう、だね。やるしかないんだよね。やらないと、ダメなんだ・・・」

僕の座席の後ろに立つ二人のエースに声を掛ける。

茶髪と金髪の二人は――――なのはとフェイトは請け負ってくれたんだ。嘗ての仲間を討つという罪を。

「だが君達の罪は僕が背負う。だから存分にやってくれ」

これが。こうして仲間を戦わせるのが僕の罪だ。なら僕は背負う。
そして管理局の為に殉じるんだ・・・・

第百三十話　白い葛藤　金色の覚悟

フェイトＳｉｄｅ

あれからなのはと少しだけ話をした。
ヴィヴィオをさっきまで人質にとられていたらしい。そしてミラの討伐部隊の指揮を執ることになって――――
そのヴィヴィオは帰ってきたけど。そこでリンカに聞いた話をなのはにすると青ざめた顔をしてしまった。
できればするんじゃなかったと今になって後悔している。

「ヴィヴィオは・・・私が助けるよ。そんな爆弾なんかなんかする。だからそれまでは・・・・仕方ないんだよ」

なのははそういっていた。けど私は忘れない。その肩が小さく震えていたことに。
伝えてしまった後悔と、これからの覚悟。私たちは二人でそれを確認したんだ。
ティアナにはそれとなく伝えた。ヴィヴィオのことは言っていない。それでもティアナにも辞令が出ていたんだ。ミラ討伐の指揮を取れ、と。

あのリンカという人物はどこまで私たちを引っ掻き回すんだろう。
まるで機動六課の・・・・いや、違う。

「まるでミラの周りにいた人を狙って・・・・る？」

そんなまさか。そこまでしてのことなのか？そこまで彼に何があるんだろう。

力を奪ったという。そんなことが可能なのか？もし本当ならなんという脅威だ。
誰の力でも奪えるんだろうか。だとしたら彼女はどれだけの権限があって人から力を奪うというのか。
考えても何もわからない。何よりも情報が少なすぎる。だからといってリンカに聞くわけにもいかない。

「ドン詰まり、だね・・・」

思考は停止せざるを得ない。だって何もわからないことだらけなんだから。
なんだかおいていかれた感じだ。なんはは討伐部隊の隊長になって、はやては離反してミラの所に行ってしまった。
私といえば残された感じ。後の祭、ってやつだね。昔小さい頃になのはから教わった諺。

私にも辞令が届く。なのはの隣に立ち、討伐部隊に参加せよということだ。
最高評議会の名前で飾られたソレを力いっぱいに握り締めて投げ捨てる。

「いいよ。わかったよ。そっちがそうやって私たちをかき混ぜるなら――――私はそれをせき止めてみせるから」

決めた。これが私の覚悟だ。もう誰も。悲しい思いなんてさせない。させたくない。したくない。
だから私は向かうんだ。親友の隣に立ち、親友の前に立ち、想い人の前に立つ。

「行くよ、バルディッシュ」

「Ｙｅｓ．ｓｉｒ」

愛機とともに私はいく。誰もが傷つかない優しい世界を目指すんだ。

なのはＳｉｄｅ

最高評議会から無事にヴィヴィオを帰してもらってから部屋で休んでいたところにフェイトちゃんがやってきた。

仕事も終わらせてきたらしく、息を切らせてきたのにはちょっとびっくりしちゃったかな。

でもそうだなぁ。目が血走ってたのはちょっと怖かったよ？

「なのは・・・ヴィヴィオは？」

フェイトちゃんはヴィヴィオを気遣ってくれた。すぐに最高評議会からこっちに戻ってきたことを知った、と。そこまで知ってるんだね。

ヴィヴィオは話し疲れと遊び疲れでぐったりと寝扱けている。私の膝の上で。だから私はここから動けない。

「にゃはは、ごめんねフェイトちゃん。ドア開けてもよかったんだけど」

とはいえ自動ドアだし。こっちからあける必要はないんだよね。うーん、ここら辺まだ地球の癖が抜けてないね。

「そっか・・・ヴィヴィオは無事か・・・・」

ポツリとフェイトちゃんが呟くのを私は聞き逃さないでいた。え？
何を言ってるのかな。
ヴィヴィオが無事？どういう、ことなの？

「フェイトちゃん・・・ちゃんと説明して」
「うん・・・実はね。さっきリンカって人と出会ったんだ」

ドクン、と。大きく私の中で何かが揺れた。心臓の鼓動が早まる。
血流が早くなるのがわかる。
それでも平然を装いながら私は聞き返す。

「うん・・・それで？」

寝ているヴィヴィオの髪の毛を優しく指で梳きながら聞く。視線はフェイトちゃんには向けられない。

「あ、あんまり手櫛はやめておいたほうがいいよ。髪の毛が痛むから」
「あ、うん。わかったよ」
「・・・・じゃなくて！あのね、なのは。凄く言い難いんだけど・・・大体話を聞いてきたよ」

あ、そっか。なるほど。そういうことか。つまりは――――聞いてしまったんだ。
私がはやてちゃんに魔法を向けようとしたことを。
そしてギルガメッシュさんのことも。

「なのは・・・なんでいつも一人で背負っちゃうの?私もいるんだよ。傍にいるんだよ。友達でしょ?」
「フェイトちゃんは優しすぎるからね・・・きっとそういうと思ってたよ」
私じゃないけどきっと
「背負えるものは全部背負おうとしてしまうから。そんな悲しい顔でアナタ(キミ)はすべてを背負うんだよ」
二人の声が重なった。一言一句違えずに。
それに私たちは顔を合わせて噴出して笑ってしまった。
「フェイトちゃん笑いすぎだよ」
「なのはこそ。まったく。私がいないとなのははいっつも無茶ばっかりするんだから」
「そんなことないよ!?フェイトちゃんだって無茶ばっかりするじゃない!」
いつのまにか私たちは笑ってた。すぐ傍にフェイトちゃんがいて。
ヴィヴィオが膝で寝ていて。
ただ、足りない。足りないよ。
「なのは・・・」
「・・・・・え?」
フェイトちゃんの声で私は泣いていたのに気づいた。無意識に涙が流れてた。
なんていうか・・・うかつだった。まさかフェイトちゃんの前で泣くなんて。

「はやてちゃんとミラ君がいないのは寂しいね」
「うん・・・だからさ。ちゃんと話を聞きにいこう。あと・・・ヴィヴィオを助けないと」
「え・・・・なん、で？」

なんで其処でヴィヴィオが出るの？だって帰ってきたよ？こんなにも元気に寝てるじゃない。

「・・・・なのは。落ち着いて聞いて」

フェイトちゃんがまじめな顔でまっすぐ私を見る。こういう時のフェイトちゃんは本気で考えてる時だ。
だから私もちゃんと向く。

「ヴィヴィオには・・・・たぶんだけど、爆薬とか爆弾が仕掛けれらてるかもしれない」

私の視界はこの時真っ白になった。

え？何を言ってるのフェイトちゃん。だって・・・だって。

「私も聞いた話だからなんともいえないよ。でも、ね。リンカは言ってた。ヴィヴィオに仕掛けたって。その爆弾すら私の目の前で・・・局員一人が同じものを仕掛けたということで――」

――」

そこまで聞いて私は耳をふさいだ。だって・・・保護してくれたって。そりゃ確かにはやてちゃんを相手にした時は向こうにいたけど。でもそれってないよ！

「だから、さ。それも諸々込みで全部解決しよう。全部解決すれば全部終わる。ね？」

「うん・・・そうだけどさ・・・・」

そうだけど。でも。

「ヴィヴィオのことを思うなら今動かないとだめだよなのは」

「ぅ・・・・うん・・・」

フェイトちゃんの強気押しで私は考えるのをやめる。流れはもう止められないなら私はこの流れに乗っていくしかない。

「・・・・じゃぁ、行こう。ミラ君にも聞きたいことがあるもん。はやてちゃんも」

「うん。私も一緒に行くよ。だから、一人じゃないんだ。話をするだけでもぜんぜん違う」

そうだよ。話し合えば分かり合えるんだから。だから行くよミラ君。私は私の道を行く。

貴方を――――止めてみせる。

フェイトＳｉｄｅ

そして今。クロノに頼んで私たちは部隊を率いてクロノの艦に乗っている。目指すのはミラのいる場所。
いや、違う。ミラが向かってくる上で予想できるコースだ。
管理局に宣戦布告をした以上、もうあっちも戻れないだろう。それにその宣戦布告の映像にははやてがいなかった。
まだはやても戻れるチャンスがあるってことだ。

「やるしかないんだ。止めるしか」

全力で止めるよ。だから――――答えてくれるよね。

「しかしあっちの戦力は異常過多だ。君達の力で左右されるかもしれないってのを覚えておいてくれ」

目の前の座席に座っている義兄、クロノが話しかけてくる。

「わかってるよクロノ。私たちがまず出るから。戦えそうな世界を選んでおいて」
「あぁ、了解だ。なのはもそれでいいな？」
「うん。了解だよ」

今、なのはに動揺の顔色はない。ヴィヴィオも連れてきている。あっちの好きな様にはさせない為の苦肉の策だけど。
戦艦は有人可能世界で停止する。ここで迎撃するという考えだ。

「君達の部隊と――――――彼女の指揮でなんとかあいつをここで止める。そして捕縛ができればいいんだがな」
「やります。やってみせます。クロノ提督」

私の補佐。執務官補になったティアナがブリッジの先にたっている。青い制服に身を包んだ彼女は強い決意の眼差しでこっちを一瞥してからまた正面に向きなおす。

「ティアナ。私たちの背中は任せたよ」
「はい。がんばります！ミラ隊長の戦闘思考癖はたぶん私が一番理解できてると思いますし」

ミラがずっと機動六課の運行中に戦術と戦略を仕込んだ人材。だからこそこのポジションなのか。
その頭角はもう六課のときからぬきんでていた。魔力も今はニアSランクを取得申請中だし。

「うかうかしてられないね」
「うん。後輩に抜かれたらかっこ悪いね」

なんてなのはと話しながらいると目の前から大きな戦艦が見えた。
空を捻じ曲げて空間を歪曲させて現れる見た目木造の戦艦。しかしその実最強の艦。

「きたぞ・・・お出ましだ」

一定の距離を置いて向こうも停止する。一触即発の距離だ。

「どうするの？これから」
「さて、指揮官殿はどう見る？」
「通信をしてみましょう。まだ説得する範囲内です」
「了解だ。通信を向こうに繋げ」

通信士が早速仕事しだす。さすが仕事が速いね。

「つながったらこちらからの呼び出しをつける。現状では戦闘の意思はないということも忘れずに付け加えておけ」
「え？」
「・・・いきなり戦闘しますってんじゃ向こうも警戒するだろ」
「あ、そっか」

クロノとなのはの掛け合いを聞きながら私は正面に映った戦艦を見ている。
ミラの旗艦、津名魅。一度だけ乗ったことのあるあの戦艦はとてつもない力を持っていた。

「くれぐれも刺激するなよ？あっちの防護壁は貫通できないからな。展開されたら何もできなくなる」

そう。確か名前を光鷹翼。花びらっていうか、羽のような形のソレは淡い光の壁だった。
それを突破するのはおそらくなのはと二人でもできるかどうか。

「映像来ます」

通信士の言葉がブリッジの中に緊張を走らせる。

正面のモニタに映し出されるのは懐かしい黒い仮面。

「久しいな。実に。腐敗した組織の者よ」

ミラが。素顔を隠した仮面を被ってそこに映っていた。

第百三十一話　開戦

ミラＳｉｄｅ

俺たちが世界を渡り飛んでいく間に何事もなく渡航していると、クロノの乗る戦艦が現れた。
いや、正確には向こうの視界に俺たちが、津名魅が現れたのか。

『あれは・・・・クロノ提督のＸＶ級戦艦ですね。その後方に幾隻かの戦艦も視認しました。向こうは艦隊で待っていたようですね』

津名魅の報告がブリッジに響く。俺はずっと座ったままでモニタに映し出された戦艦を見続ける。

『如何なさいましょう。久しぶりの出会いの挨拶で撃ちますか？』
「それだと俺が破綻者みたいじゃないか。そうだな。少し様子を見るか」
『つまり私が破綻者だとそう言いたいのですね。了解しました。ただいまより津名魅は戦艦名を破綻者と名称を変更します。手続きお願いします』
「いや待て！？気が早すぎるだろ？！」

流石に何回も渡航を繰り返してるだけある。つまり津名魅は今――――機嫌が悪い。

「あのな、津名魅。次元世界を渡り歩くのはお前にしかできない役割なんだ。だから期限直してくれ」
『えぇ。問題はありません。その役割というもので何度世界を跳躍したことでしょう。そしてそこにきてクロノ提督の邪魔です。正直

言って今すぐぶち放ちたい気分です』
「いやおかしいだろ!?撃つなよ?絶対撃つなよ!?」
『ウエシマ方式により砲撃準備開始します』
「おおおおおおおおおおおおい!?」

誰か!誰かこの戦艦止めてー!もう一回調整してー!

「何をやってるんですか・・・」
「セイバー・・・あいつを止めてくれ。砲撃すると聞かないんだ」
『適正処理です。問題ありません』
「だそうですが・・・それよりも。クロノの気配を感知しました。あそこにいるのでは?」
「あぁ・・・津名魅は現状維持で待機。クロノはあそこにいるはずだ。あいつのカラーリング戦艦だしな」

ＸＶ級戦艦には各々のパーソナルカラーリングが施されている。その旗艦になってる艦にはクロノのオリジナルカラーだ。

「津名魅、向こうに通信を送ってくれ。退いて貰う様にお願いしてみよう」
『お願い、ですか?聞きますかね・・・』
「聞かせてみせるさ。それが仕事だからな。だから――――――第一種戦闘配置」

ブリッジにいる全員に告げてから俺は座席に座る。ブリッジ中央に位置するこの場所で俺は待つ。
仮面をつけているから素顔は見えない。表情は見せない。もう、誰にも。

『通信、画面きます』

津名魅の報告と同時にモニタにクロノの顔が映し出された。

「久しいな。実に。腐敗した組織の者よ」

「いきなり手痛い言葉痛み入る。ミラージュ・ヴィジョン元少将。君を捕縛に来た」

「残念だがそれには応じられないな。私はこれから時空管理局本局に赴き、その最奥に位置する最高評議会本部まで突き進むと決めたのだから」

「そんなことが許されると、可能だと思っているのか？」

「フ、クロノ。お前は無理だと言い張る側の人間か？」

「統計的推測を述べたまでだ。第一、全管理局職員が一丸となってお前を止める！そこにお前の未来はない！」

「では聞くが。我が配下に傷をつけられる者がいると？セイバーにいたってはこの１０年間無傷で教導をこなして来た実績があるのに」

「そうやって君はいつも誰かの影にいる！たまには自分から出てくるとかしないのか！？」

クロノＳｉｄｅ

何を、言ってるんだこいつは！君は・・・そこまで変わってしまったというのか。

もう戻れないのか？あのときのように。昔に・・・・。

「何を・・・考えてるんだ彼はっ・・・・・！！！」

心の中で思ってたことが声になっていた。が、向こうには聞こえていないようだ。
歯軋りした顔でモニタに映った黒い仮面を睨む。
もう、決めたという声だな。顔が見えないから声で判断するしかない。
はやても・・・そこにいるんだろう。後ろの二人からもそういう気配がある。
だけど今はまだ通信中だ。弱みを見せるわけにはいかない。

ミラＳｉｄｅ

クロノの声が荒ぶってくる。当然だ。今俺は誰かの影にいる。だからどうした。恥も外聞も気にしていられるか。
幻影という名のとおり、俺は影になり続けることに決めたのだ。

「それこそ愚問だな。私が見ているのはいつも結果だ。最高評議会本部へと辿り着く結果だけが私を突き動かす」
「それは出来ない・・・ここで僕が君を止めるからだ」
「出来るのならやれば良い。話はこれで終わりだ。あぁ・・・全力で来るといい。きっとそのつもりだろう？」

通信を其処できらせる。相手を煽る意味では成功したかもしれない。
これでもう俺とクロノは回避できない存在になった。あっちも動かざるを得ない筈だ。

「セイバー。前方中央にて待機。ランサーは左翼。アーチャーは右翼を守備。右翼上方にてシグナム待機。左翼上方でヴィータ待機。
シャマルは中央後方でバックアップ待機。ザフィーラははやての警護。以上だ」
「ミラくんわたしは？」
「はやてはここで待機。出来るだけお前は動かさない」
「・・・なんで？足手まといやからか？」
「違う。まだお前の出るような場面じゃないからだ」
「・・・・・・・・・・・・・」

各員に指示を出すとはやてが聞いてきた。答えれば短いながらも沈黙が流れる。
出来ればはやてには出てほしくないというのが本音だが、そんなことは言えない。
守護毀士を使ってるのにその主を隠すなんてな・・・・。

「ミラージュ、主はやてを戦線にださないのならそれでもいがそうするならそうするできちんと貫き通せ」
「わかってる。心配性め」

シグナムは俺を一瞥すると背を向けてブリッジを出て行く。外に向かいに行ったんだろう。
ヴィータもシャマルも揃ってブリッジを出て行った。何も言わずに。

「恐らくすべてを将に任せているのだろう。それだけ忠誠度が高いということだよマスター」
「お前たちの忠誠度はどのくらいなんだろうな」
「さて。それはこれから見れるんじゃないかね」

そこまで言うとアーチャーが消える。

「ま、そういうこった。俺としては戦える場所をくれるってだけで十分だけどな」

ランサーが消える。

「我が王。騎士王たる私が必ず道を作りましょう」

そしてセイバーが消えた。

「恐らく、ここが最初の難関。これを超えられないようじゃ俺に次はない」

「よくわかってるじゃないか、ボウヤ」

「戻ってきたのか」

「あぁ。今守護騎士とすれ違ったがな」

C．C．が入れ替わりでブリッジに入ってきた。俺と同じ格好をして。

「少しばかり手ごまを増やしておいたぞ。中央上方だ。後で確認しておけ。今の状態では十分すぎるほどの駒だ」

「人を駒だ駒だと。何を言ってるんだ？人をそんな風に言ってはいけないな」

「クク、お前が何を言っても薄く感じるよ。幻影。その名のとおりにな」

「ミラージュは幻影。そして蜃気楼。お似合いだと思わないか？」

互いに目を合わせない。だがその意思は疎通されている。

「俺はここから指示を出す。C．C．――――」
「わかってるさ。だからこそ、だろう？」
カツンッ、と大きな靴音を鳴らしてC．C．は動き出す。
その顔に同じ仮面を被って。誰が見ても俺としかわからない姿。外套を翻して進んでいく。
「津名魅、私を前に飛ばせ。少し脅かしてくる」
『了解しました。転送ポートへ』
ブリッジ横の転送ポートに乗り込み、C．C．は転送されていった。
その数瞬後には外に各々が出撃していた。
モニタが一人ひとりの顔を順番に映していく。そしてモニタが分裂して全員の顔が見れた。
「さて、ここが踏ん張り所だ。全員の戦いに期待する」
こちらから仕掛けるわけにも行かないからな。こうして戦力差を見せることからまずは始めよう。
戦闘意思を見せれば向こうも動くだろう。動かないなら動くように仕向けるだけだ。
クロノＳｉｄｅ

ミラージュの方から戦闘を展開してきた。やるだけの意思はあるってことか。
本当は・・・・話し合いで解決したかったけど。
仕方ない。ここでとめないと管理局はきっと被害が甚大になる。

「ティアナ＝ランスター。期待してるよ」
「はい。がんばります！」

ブリッジ前列側にいるティアナに話しかけて、指揮系統を委譲する。
これで彼女はこの艦隊の指揮権を得た。

「君たちはどうする？出るかい？」
「いえ・・・まずは向こうの様子を見てから動こうかと」
「そうか・・・手遅れにはならないでおくれよ？そうしたらこっちが勝てる要素が減ってしまうからね」
「大丈夫です！私がなんとかします！」

ティアナ。彼女は機動六課でずいぶんと鍛えられたようだ。それも厳しい教導官と執務官のおかげかな。
チラ、と視線を向けると二人が微笑んでいた。いい後輩を得たようだな。

「ティアナ。僕も君の指揮下に入る。好きなようにやりたまえ。責任はすべて僕が取る」
「――――――はい！」

ティアナＳｉｄｅ

フェイトさんについてきてクロノ提督の艦に乗せてもらい、今、ここにいる。
艦隊を指揮してミラ隊長を停止させ、捕縛するという大役だ。

「艦隊の皆さんに報告します。これより先の指揮はティアナ＝ランスターが執ります。どうぞよろしくお願いします」

いくらなんでも直接戦闘は危険すぎる。だからこそ、この艦隊を使って一気に圧そうという考え。
向こうが一人で一騎当千だといっても流石にこの武力差では・・・・。
そういう考えでこの艦隊戦を仕掛けるのだ。一気に殲滅が出来ればいいけど、相手は「あの」津名魅なのだ。
時空管理局最強の艦。絶対不破と噂されるあの艦。
私はあれを相手にどこまでいけるのか。最強を相手にどこまで出来るかそれを見せなければ私の将来はないと思う。

「そこまでの相手なのよね。きっと」

覚悟と決意。ミラ隊長があそこにいるなら話がしたい。何故こんなことになってしまったのか聞きたい。だから。

「私の今を見てもらいます。師匠」

もうこれから先、アナタを捕縛するまでは師と思わない。捕縛対象

として貴方をずっと追いかけて捕まえます。

それが私のやり方と思ってください。

第百三十二話　師弟

ティアナＳｉｄｅ

ミラージュ隊長の載っている津名魅は通常次元航行戦艦よりも多大にサイズが違う。
だから囲むとするとそれだけの艦隊数が必要になる。
それに問題はいくつも目の前に立ちふさがっている。

「アレを展開される前に手を打たないとだめ、ですよね・・・・」

津名魅の持つ不可視の絶対保護障壁「光鷹翼」。あれはまずい。
光鷹翼があるからこそ津名魅が最強たる所以（謂れ）だから。
それを打ち破らないと私の考えてる第一段階の突破はない。

「どうする・・・こんなときどうする・・・考えろ・・・考えろ・・・」

一人で呟きながら思考を走らせる。いくつものプランを作ってはソレが悉くつぶされていく。
あれ？私ってイメージ能力弱い？

「光鷹翼を突破すれば多少は手が打てるはずなんですけどね・・・・。中々そこまでさせてはくれませんか」

イメージの中のミラージュ隊長は手加減をしてくれませんから。
それでも私が勝つ方法を考えて、実行するしかない。
六課にいた時だって、全敗してたわけじゃないんだし。やれる、はず！

そこで私は後ろに座っているクロノ提督に向き直る。

「まずは向こうの戦力を削ぎます。艦隊は見たとおりに一隻。ならあとは白兵戦闘能力差になると思いますので。
それから各個戦力に　全力で対処していく方法を取ります」

でもこれにはまだ足りない。手が圧倒的に足りないんだ。だから私は、

「出来れば高町教導官とフェイト執務官。さらにクロノ提督にも出てもらわねばならないくある可能性があります」

「それが・・・君の考えか」

クロノ提督から向けられた言葉は冷静、といえば良い言い方だろう。ソレに対して大きく首を縦に振る私。いくつか浮かんだ手の中で実効性の高いものはこれだ。
それに・・・・・ほかにも手が増えてた。

「それと、ティーダ＝ランスター執務官とヴァイス曹長の力も必要ですね・・・まるでオールスターですよこれ」

もともとはあちら側の陣営にいたあの人なら渡り合える筈。兄とか、妹とかはこの現状では関係ないのだ。
元々この手段には兄からも了解を得ているわけだし。

「しかし僕も前線に出るなんてね。まだ腕が鈍ってなければいいけど」

「クロノ、たまに訓練室で鍛錬してるよね。あれってやっぱり今みたいな時のため・・・？」

「そういうわけじゃない。と、思ってはいるんだけどなぁ。ただ、

やっぱりトップが前に出ないと下はついてこないものなんだよ。
だから前に出ても大丈夫なように訓練してるってだけだよ」
「フェイトちゃんはいつもクロノ君のことを心配してるもんね？」
「なのは！？ご、誤解だよ！？」
「兄なのに・・・誤解なのか・・・心配してくれると思ってたのにな・・・やっぱり義理だからか・・・なぁ、エイミィ。僕どうしたらいいんだ」

なんだかクロノ提督が懐から写真データ取り出して泣きながら報告してる！？
あれ・・・なんかキｍ（ｒｙ

「キモいとかいうな！」
「まだ言ってませんよ！思っても途中までです！」

それはそれでどうなんだろう。とか思いつつも指示を出していく。
まずは向こうの航行を停止させないとだめだ。

既に話し合いは無駄に終わった。あとは全力で仕掛けてくるだろう。
ここからは神速。一気に先手を取っていかないと。後手に回ると恐らく手も出せないくらいに圧倒的に負けるだろう。

「なのはさん、フェイトさん、クロノ提督。私に――――――命を預けてもらえますか」

正面のモニタを見ながら津名魅の動向を確認しながら振り向かずに私は言い放つ。
上司の命を左右させてしまうほどの立場が今、私の肩にある。
だからこそ。私は一人の犠牲もださずにこの争いを止めて見せたいんだ。

背後からの返答はない。迷ってる?待ってる?何を?私を?言葉を?
不安になって振り向く。ゆっくりと。恐る恐る。

そこには満面の笑みで私の緊張を解してくれた三人が立っていた。

「ティアナ、強くなったねぇ。六課に来た時に比べたらもう雲泥の差だよ。また鍛えたいなぁ」
「フフ、なのは。私の補佐ですからね」
「余程気に入ったみたいだな。ティアナ＝ランスター。君はこの信頼を背負って望むんだ。そして僕の信頼も一緒にね」

あぁ。なんだかもうぐちゃぐちゃだ。私の感情は緊張の糸が解けたように涙目になっていて、頬を流れた。

ミラSｉｄｅ

この状況に対していくつか問題点が発生している。
例えば、

1・C・C・は俺の姿で出る。つまり、通信はC・C・へ向けられる。俺じゃない。
これについてはC・C・の仮面に細工をしておくしかない。若しくは通信をダイレクトに此処へ繋げるか、音声だけでも引っ張れれば良い。

そうすればC．C．の場所で画面を開いても俺が聞こえれば対処も出来るはず。
迂闊にあいつが喋ったらばれるんじゃないか？

2・C．C．の言っていた駒の一つが誰なのか不明のまま。
中央上に陣取ってるって言うけどな。C．C．が用意したって言うなら聖杯からなのかもしれない。
だとしたらサーヴァントか？

3・向こうの戦力。恐らくクロノがいるがあいつは出てくることはないだろう。
今目の前にいる戦力がどの程度の戦力でやってきたのか。ソレによって対処の方法が変わってくる。
なのはとフェイトがいるなら最大限で頭を動かさないといけないな。

何よりもティーダが向こうか。恭也さんもなのはが向こうにいる以上、こちらに来ることはないか。
だとすると内部構造を知ってる二人が突撃してきたらアウトだよなぁ。

「どう思う？本体を守護する生体ユニット、思考能力を持った艦としては」
『腹部内で暴れないようにお願いします』
まぁ、そうだよな。それが当然だよなぁ。

「まぁ、現状こっち側とわかるやつだけしか侵入禁止しておいてく

れよ?暗殺者が来たら対処できん。きちんと対侵入者用のデータはあるんだろ?」

『問題なく現在稼働中です。なんなら艦長を相手に起動しても可能です』

いやいや待て。こっちは生体ユニットと一般人と力が弱い神様だけなんだから。

しかしこれで内部侵入を許したらデッドエンド一直線だな。

『つまり、袋小路――――――』

「わかっているなら言わなくて良い」

考えうる最悪のケースを考えておく。それは人知れず俺が討たれるケースだ。

それは避けねばならない。なら誰か一人でも置いておけばよかったのではないだろうか。

しかしそれではこの先を進むことは出来ない。

「ここで力の差を見せておかなければ対する勢力は調子づいて何度でもやってくるからな」

だからここで一気に叩き潰して進むのだ。立ち向かうことの無意味さを見せ付けて。

・・・・・ククククククク。どうやら本当に悪になってきたようだな。

『艦長、顔が気持ち悪いです』

「言うに事欠いてそれかよ!」

まったく人が浸ってるところにこいつは・・・・。

ともあれ戦局は動く。動かさないとな。

『全員所定位置に配置完了を確認――――』

「よし。ではこれより威圧行為で向こうの戦力を削ぐ」

こちらから仕掛けることはしない。悪でもここら辺は守らないとな。

痺れを切らして向こうが動いたらいいんだが。

『C．C．様の言ってらした助っ人の感覚も捕らえてます。現在ステルス状態にて津名魅上方前面にて待機中です』

多分、俺の予想が当たってればこの戦局で十分な戦力が控えている。

何分津名魅にステルスをかけて見破れないというなら恐らくあいつだ。

「上のやつには支持派いらないだろ。自分で動くだろうしな。その旨を伝達で飛ばしておいてくれ」

『了解――――自己判断で動くように伝達を飛ばしておきます』

これで上は大丈夫、と。あとは会戦を待つだけだ。

「いけると思うか？」

『それが運命でしたら』

「『津名魅』らしくないな、それは」

『流石にそこまでの機能は持ち合わせておりませんので』

三女神の名を冠してるのにそういうか。もしかしたら俺がまだ引き出せてなかったのかも知れないな。

ほかの二人も配置しておきたかったが・・・高望みだな。

『おい、ミラージュ。向こうの回線が私に来たらお前に回すぞ』
「あぁ。C．C．は動きをあわせてくれるだけでいい。あとは任せる」
『憎たらしいがな。了解だよボーヤ』

C．C．からの通信がそこで切れた。
同時にモニタには向こう・・・管理局のほうが動き出してきてるのが映し出されてる。
こっちの配置を待ってたかのように動き出す武装隊達。それと戦艦がいくつか動き出だした。

「ＸＶ級が何機か動いたな。艦隊戦を望むのか」

だとしたらどう動くのか。頭の中でシミュレートしつつ指示をだす。

「津名魅。光鷹翼は？」
『現在７６％。完全展開まで後８分』

それまで持たせればいいわけだ。

「聞こえたか？８分耐え切れば後はこっちが何とかする。まずは目の前を切り崩せ」

津名魅の通信機能を使って指示を飛ばしていく。今前線に出てるのは十分な力を持った一騎当千の騎士たち。

円卓の騎士王が。

紅槍の騎士が。

錬鉄の英雄が。

烈火の騎士が。

鉄槌の騎士が。

黒き仮面の騎士が。

そして上空漂う魔力の源の主が。

通信を受け取るのと同時に迎撃体勢に入る。

「さぁ。はじめよう。第一幕の開始だ。クロノ、お前は――――――

どういう手を打つのかな？」

第百三十三話　英雄たち

ティアナＳｉｄｅ

「対抗戦力一人に対して各戦艦は三隻以上で当ってください」

普通に考えたら余剰すぎるほどの戦力をぶつける予定で考える。

出なければ恐らく相手には通じないだろうと踏んだから。

「・・・現在の管理局の最高戦力のトップが離反してる状態でいくとなると・・・これでも足りないかもしれない」

私はポツリと呟いた。

すると後ろからクロノ提督が声をかけてくる。

「ティアナ。もし戦力が足りないなら僕の権限でもっと持ってくることは可能だ。僕が責任を取るから好きにやってかまわないよ」

「ですがそれではクロノ提督が大変では」

「彼を捕縛するのが今の管理局の大儀。ならそのための戦力は此処で使うべきだろうと僕なら考えるが」

確かに・・・それも一つの手だ。だがそこまでするメリットがまだない。

「わかりました。では私の一存で足りないと判断した場合、お力を貸してください」

「心得た」

クロノ提督から了承を得た。これで戦力増強が確約された。それで

もまだ心配なのはどうなんだろう。
それだけあっちの力を怖がってる？

「ともあれ。各戦艦は全力であたってください」

指示を飛ばせば通信士が全戦艦へと指示を飛ばしてくれる。

「いくらなんでも戦艦相手に一人の人間が戦えるとは思えないし・・・いけるはず・・・」

ミラージュ隊長はＪＳ事件でゆりかごを一人で撃墜させたけど。
流石にあんな力はみんな持ってるわけがないと思う。それにミラージュ隊長は今、力を失ってるという話だし。

「・・・時空管理局は世界の乱れを抑制する組織。だから・・・こういうこともするんですね」
「――――――そうだ。だから僕らのような人間がやらなければいけないこともある」

私は――――――師と仰ぐ人に対してこんなことをしてるんです。
捕縛しないと、いけないんですよね。少し心が迷うけど・・・しなければいけないのならするしかないんだ。

「此処で全員捕縛して終わらせます！！」

それが私に出来ることならば全力でそれをやる。六課で教わったのはそういう、事だから。

『緊急！右方戦艦郡第二、第三撃沈！更に左方戦艦郡第一撃沈！！』

感傷に浸ってると通信士の声が轟いた。それは耳を疑うような報告。

「右方に位置するのは――――――ランサー執務官補です！左方にはアーチャー特務捜査官が陣取ってます！！！」

モニターに映し出されるのは青い光を帯びて高速移動する獣の姿だった。

戦艦を前にしても退かずに真紅の槍を持って笑みを浮かべるその姿はまさに獣だった。

そして左方にいる赤い騎士はその身よりもはるかに大きな刀を振り回していた。

・・・戦艦すら相手にして退かないと言うんですか、貴方たちは。

ランサーＳｉｄｅ

へへ、来たぜ来たぜ?でっかい船がわんさかとよ。だがそんなもんにびびっちゃいねぇわけよ。

「んじゃ、ボチボチ仕掛けるとすっかね」

あぁやって向かってくるってこたやりあうってことでいいんだよな?覚悟が出来たならくりゃ良い。向かってくるなら俺は容赦しねぇし。

ゲイボルグを構えてから俺は一気に加速する。

青い光を引いて俺は移動する。向かうのはまず一番目の前にある戦艦だ。

「まずは一発。威嚇だけどなぁ！！」

そのままの速度を乗せてゲイボルグを向けて貫く。
すると簡単に戦艦を貫通して突き抜けちまった。

「ぁん？なんだよ意外に脆いな」

何層もの魔力障壁と隔壁を経て「向こう側」に抜けた俺は自分で空けた穴を見て成果を確認する。
まぁこんなもんだろ。むしろ此処まで簡単に抜けたことにびっくりだぜ。
煙を上げていく戦艦を横目にほかの戦場を見つつ次の獲物を見つける。

「どうやら俺が一番槍のようだな」

良い響きだぜ一番槍。まずは俺が戦いの火蓋を切ったってやつだな。
しっかしアーチャーの野郎なんだありゃ。あのでかい剣はよぉ。

「まぁ負けてらんねぇわな！」

次の戦艦からは魔導師がゾロゾロと出てきた。今度は数で勝負ってか。その考えは普通なら通じるだろうよ。

「でも俺は幾多の戦場を渡り歩いてきた英雄だぜ？この程度の数で俺を抑えられると――――――」

体を弓なりにして槍を引く。まるで弓を番うようにして筋肉がミチミチと唸りを上げる。
その間にも最初に貫いた戦艦は煙を吹きながら墜落していくのが見えた。

「いくぜ？全力の投擲だ――――――！！！！！！！！！！！！！！」

ゲイボルグに魔力をこめてから空気を切り裂く音を残して槍が一直線に飛んでいく。
何もかもを置いてけぼりにする位の勢いを乗せた全力の投擲だ。
それが音速の壁を突き抜けて魔導師たちのいる場所でゲイボルグに乗せた魔力が爆散した。

「よっし、ストライク！」

中心地で爆散した魔力を食らった魔導師は散り散りになっていく。
俺はその隙を見逃さずに更に畳み掛ける。
大きな青い光になって小さな真紅の光を灯して空を翔る。
しかしいつになってもこの空を飛ぶ感覚ってのは慣れねぇな。

「あと何隻つぶせばいいんだ？消耗戦になったらキリがねぇぞ？」

旗艦をベースにその後ろで転送魔法で後から沸いて出てくる戦艦を見て俺はちっとばかしげんなりしちまったわけだ。
しょうがねぇから出てくる以上は全部つぶすぜ？管理局がどこまで持ってるかわからねぇが出てくる以上は全部敵だ。

アーチャーＳｉｄｅ

隣を見れば派手に暴れてる騎士がいる。ランサーめ、一番槍を名前の如く通したか。

「負けてられないな。こっちもやらねばならんか」

向かってくるのは戦艦が五隻。まさか英霊になって戦艦を相手にする時が来るとは思いもしなかったが。

前2、後ろ3。後ろの三隻は全砲門を開く音が聞こえた。

明らかに過剰戦力。普通に考えれば人単体に対して戦艦が数隻も向かって来る事など異常でしかない。

「だが・・我々はそれに対する手もあるということだな。そしてそうでもしないと対処できないという管理局の惰弱な戦力だ」

つまりはこの過剰戦力でなければ我々を止める事が出来ないという管理局の自信の無さ。

右手を虚空に上げて開く。そして握られるのは一振りの大きな柄。

「マスターから生み出された我等はマスターの知識も有する。つまりはマスターの記憶の中にある武器すら――――」

「――――練成可能だ！！！」

練成されるのは巨大な一振りの剣。通常の人間サイズの剣ではない。明らかにある特化されたモノに対しての剣。

「一騎斬艦刀。まさに今、これ以上似合う剣もあるまいよ」

筋力が悲鳴を上げている。元々私のクラスでは筋力が少ない。まぁ元々もないのだが。

腕すら練成して魔力を通して更に聖杯の恩恵を得る。それでやっとこの刀が持てる。

水平に持ち変え、向かってくる戦艦一隻に対して切っ先を向ける。

「さて。切り崩されたくなければ停止したまえ。そして覚悟が出来たなら斬られに来るといい」

だが私の制止を聞かずに戦艦は向かって来るだけに終わる。

私の声が聞こえてるのだろうか。それとも無視してるのか。それとも――――出来ぬと判断したのか？

「だとしたら――――途轍もなく愚か者だな。貴様らは。私は無駄な命を散らせる必要は無いと思っていたのにな」

はぁ、と一つため息をついてから一番手前の戦艦をまず、叩っ斬る。

真っ二つに切り取ると駆動部が火花を散らしてる。恐らく放って置けば爆発してしまうだろう。
だが今は救助している暇も何もない。ただ墜ちていくのを見ているだけだ。

「やれやれ・・・あんまり此処までやると気が引けるな」

まぁ助けはしないが。管理局のほうで助けが来るだろう。それどころじゃないんだ。
斬り裂いた戦艦の中央を抜けていくとその後ろに更に戦艦が待っている。既にやる気は十分な程に向けられている。
訪問がすべて私に向いているわけだし、私も保険の為に負けるわけにはいかないのだ。

「だから此処は罷り通る――――――!!」

通り抜ける戦艦には悲鳴と怒号が入り乱れて聞こえてくる。だが私は耳に入れないようにして突き進むのだ。
斬艦刀が抜けるともう一度振りかぶって一気に振り下ろす。
だがそれは途中で停止した。戦艦に搭載されていた防護結界が斬艦刀をとめていた。

「まさかこれを止める事が出来るとはな――――――いや、一隻だけではないか。先に斬った戦艦を踏まえて後の四隻が供託したようだな」

後方の戦艦が砲門を開いているのと同時に防護結界を目の前の戦艦に繋げていた。
なるほど四隻全ての防護結界を前方に回したわけだ。それなら斬艦刀が止められたのも納得がいく。

だが――――――それで止まる私ではない。

そう、これから始まるのだ。その口火を切っただけに過ぎない。
此処を突破する為にも現状の戦艦は邪魔するなら全て叩き伏すのみ。

セイバーＳｉｄｅ

ランサーもアーチャーも派手にやってますね・・・。
私のところには一隻だけしかこないんですが。

「おや、シグナムのほうにも数隻ですね。私のところにはこれで十分と言うことですか・・・・？」

随分と嘗められたものですね。その怠慢を叩きなおさないといけないようです。
ですが今は目の前の道を切り開くだけです。アーチャーもランサーもそういう感じでいるでしょう。
目の前の戦艦からは武装隊が何隊も現れては排出されてくる。
しかし私にダメージを与えられないと無意味だと言うことが理解出来てないのでしょうか。

「いや、過信しているわけではないのですが・・・」

過信、というよりも慢心ですかね。いよいよギルガメッシュが感染

してしまいましたか。
ですが今はいない分がんばらないといけませんね。

「いいでしょう・・・お相手仕る――――――っ！？」

エクスカリバーを構えると上から魔術砲撃が降り注いでくる。
それは神代の頃の魔術大系。よく見知った魔術の名残。

「これは・・・・」

魔術砲撃は武装隊を蹴散らして蒸発させた。あぁ・・・何も消滅させるほどのことは無いでしょうに。
視線を上に向けてにらむ。恐らくいるのだろう。稀代の魔女が。

シグナムＳｉｄｅ

まさかこうして管理局に相対することになるとはな。
主はやてのもとに現れてから１０年。今までの罪滅ぼしとして尽くしてきたのに。

だが今はそんな事を言ってはいられない。これでいいのだ。また昔に戻っただけ。
ただ、主はやての行く末がどうなるのか、これは見届けたいものだ。

「物事を考えるのは今はこの窮地を切り抜けてからだな」

目の前には数隻の戦艦が迫っている。以前の私ならきっと怯んだだろう。
だが守るべき主が。そして守れるべき力を有したから。
だからこそ私は此処に立っている。

「アギト。きっと今の私を見たらお前は怒るだろうな。嘗てのお前と同じ、反逆者として」

瞳を閉じる。一瞬の思考の後にまぶたを開くと背後から八匹の火炎の竜が召還される。

「やれやれだの、宿主。お前さんらの道はどうやら波乱に満ちとるの」
「虚空翁。私はただ、主の道を切り開くのみです」
「ならそれを見せてもらおうか。儂らの力を使っての。裂神殿も力を貸してくれるらしいからのぅ」
「裂神殿が・・・・？ならば頑張らねばなるまい」

心が猛る。恐らくこれは烈火系の騎士の感情の昂ぶりなのか。それとも八竜の影響なのか。
どちらでもいい。私は戦うのみだ。この――――――力で。

ヴィータＳｉｄｅ

なんだか今、目の前に起きてるのは地獄絵図なんじゃねーかと思う。
サーヴァントの力は良くわかっていたけどなんだこりゃ。

高速で動くランサーと戦艦を叩っ斬るアーチャー。それとセイバーのあの魔力がとんでもなく膨れ上がってるな。

それにシグナムのあの力・・・・！
火炎の竜がシグナムの背後にいやがる。前にもチラッと見た事あるけどあの力凄まじいな・・・！

「なんだか解説役に回ってるけどあたしもやらねーとな。はやてが悲しむのはだめだ」

アイゼンを振って肩に背負ってから目の前の敵をにらむ。敵っていっても管理局の武装隊だけど。
こうしてると昔を思い出すな。１０年・・・いや、２０年前か。はやての前の主の時もこうして前に立っていたっけ。

「ま、あたしも暴れるっきゃねぇよな。戻るにしろ戻らないにしろ区切りは必要だろ」

向こうにはなのはもいる。フェイトもいる。たぶん出てくるだろう。
あっちの戦艦に載ってるんだったらきっとすぐにでも顔を向け合うことになる。
そのときには――――――あたしは手加減しないで全力でいけるのかな・・・・。

1952

第百三十四話　暗殺者、二人

すずかＳｉｄｅ

地上本部襲撃という任務を請け負った私たちは地上本部を眼下に見下ろせる高台にいた。

「あれが地上本部でいいわけ？なんかあんまり硬そうに見えないけど」

師匠である吸血姫、アルクェイドが下を覗きながら簡単に言う。

確かに私達の力でなら建物程度なら簡単に破壊出来るだろうけど。

「ミラージュ君からは此処から増援が出せないくらいにすればいいって事だからあんまり破壊しちゃうと。全部終わった後の事もありますし」

「んじゃ、どうしちゃう？私達四人で一気に無双！とか」

「ふむ。だがあまり薦められないな。相手は何も知らぬわけだし」

「じゃぁどうするってのよ」

ザフィーラさんのフォローがでたよ。師匠も少し踏みとどまってくれた。

確かに地上本部の本隊を相手にするには四人じゃ心許ない。後二人くらい同じくらいの戦力がいればよかったけど。

「まぁいないものはしょうがないね。この人数でやれるところまでやるしかないんだ」

「すずか、成長したわね。お姉さんはうれしいわ」

べ、別に私は何も考えて無いんですよ！？
ただ、ミラージュ君の言うとおりにしてるだけですとも。
あとは衝動に刈られて破壊してるくらいしか。

「さて。じゃぁいくか？そろそろ時間も惜しいだろうし」

そういって志貴兄さんが眼鏡を外す。外した眼鏡は胸ポケットに仕舞い、

「志貴、その目使うの？」
「うん。最初は無理だと思うけど見えてくればあっちの・・・魔法？も殺せると思う。根拠はまだないけどね。試す価値はある」

目が慣れればだけど、と付け加えてる。この人は気配やらの空気なんかも切れるのか。とんでもない。
なんというか、常識の外にいる人たちだなぁ、とつくづく思う。
志貴兄さんは一度死んだっていうし。蘇生されたって事かな。

「とにかくあの地上本部を壊滅させればいんだろ？」
「増援がだせない程度に、って付け加えられてますけどね。後の事を考えると機能しないって状態は避けたいようです」

全てが終わった後、此処が前線となる。そう聞いている。詳しい事なんて聞かない。
ミラージュ君がいうならそうなんだろう。今までそうしてきたんだし。

「じゃぁ時間も時間だ」

ミラージュ君のほうでも動きがあるだろう。向こうが管理局の本局

に着く前に此処を制圧しないといけない。
だったら早急に此処を制圧する。

「俺と・・・えっと、ザフィーラさんだっけ。二人でまずは行くから二人は後から来てくれ」
「了解よ。気をつけてね志貴」
「わかってる」

師匠と志貴兄さんが見つめあう。あっつい！あっついよ！！

「じゃ、いってくる」

高台を一気に降りていく志貴兄さんとザフィーラさん。私たちは後続で詰める事になった。
降りていく背中を見送りながら私たちは出番を待つ。

ザフィーラＳｉｄｅ

志貴と呼ばれた男を高台を降りる。どうやらこの男も突出した戦闘力の持ち主らしい。
高台から伸びる坂を滑り降りるとそこには地上本部の入り口が近くに見える。
そこに立つのは衛兵が５人。視認できる距離だ。
物資等の物陰に隠れながら入り口に近づく。向こうはまだこっちに気づいていない。

「一度にどのくらいいける?」
「二人なら確実だな」
「じゃあ俺が三人だ。あっちに回ってから合図するからそれで頼む」
「了解した。だが合図はどういうのをするつもりだ?」
志貴は少し考えてから、
「小石を衛兵の前に投げる。それが合図だ」
合図を決めた後、志貴が反対側に向かっていく。俺は合図を待つために気配を限りなく小さく留めて待つ。
志貴は気配を一切遮断して行動する。どうやら恭也と同じタイプのようだ。
「暗殺者、か・・・」
などとポツリと呟くと早速合図が来た。正面から小石が衛兵に向かって放物線を描いて飛んでくる。
衛兵5人の気が小石に向かった一瞬を狙って俺と志貴が横から飛び出す。
物資の箱の陰から一気に飛び出すと体制を崩されている衛兵は俺たちを気にした時には既に遅く、目の前にまで接近を許していた。
一瞬の交差。それだけで衛兵が黙るのは充分だった。
俺が抜き手で二人。志貴がナイフで三人。あっという間に衛兵は崩れ落ちた。
扉は大きく二面開閉型だ。横を見ればカードキータイプのものと判別できた。

「カードキーか。面倒だな」
「問題ないさ。扉も殺せばいい」
「・・・・？」

殺す、だと？扉を殺すと言ったか。そう言った志貴はナイフを無造作に振り回して扉を切る。
すると簡単に扉はいくつモノ破片となって地面に落ちた。

「さ、行くぞ。あぁ、助けはしないから。自分の身は自分で守ってくれよ？俺もたぶん――――――余裕はなくなるから」

当然、か。俺たちは今日始めてあったのだ。それをいきなり背中を任せることなど。

「当然だな。それでいい」

崩れた扉を跨いで俺たちは地上本部の中へと侵攻をはじめる。
一歩目。そこでサイレンが鳴り響く。これが会戦の合図だ。扉を壊した時点で鳴らなかったのには少しばかり疑う部分もあるが。

すずかＳｉｄｅ

志貴兄さんとザフィーラさんが降りていって。遠めに見えるのは入り口での戦闘。
いやあれを戦闘と言っていいものだろうか。圧倒的なパワーゲーム

だった。

「私たちはゆっくりしていきましょうか。ねぇすずか？」
「はい。多分巻き込まれたりとか巻き込んだりするでしょうから。私たちは外部の破壊がメインで動きましょうか」
「了解ね。でもまずはコレをどうにかするべきかしら？」

既に私たちは戦闘態勢に入っていた。何故なら――――

「ずっと後ろにいて隠れてて。姿を見せたらどう？それとも姿を出せないような卑怯者？恥かしがりやってわけでもないでしょう？」

師匠が後ろに声を向ける。そう、背後に気配がずっとあったのだ。それでも志貴兄さんとザフィーラは信じて行ってくれた。師匠と私が同時に振り向く。其処には、見慣れた姿が二つあった。

「やれやれだな。呼ばれたから来たのに卑怯者呼ばわりとか。まぁ否定はしないけど」
「まぁ仕方ないでしょう。試す形になったわけだし」

１０メートルほど離れた場所に立っていたのは志貴兄さんに似た、目に包帯を巻いた人と、師匠にそっくりの人がいた。

「別に分身とかドッペルゲンガーってわけじゃない。俺たちは聖杯の寄る辺に従って召還されたのさ。大聖杯の持ち主にさ」
「手伝えって言われてきたの。此処はきっと激戦区だからってね」

話を聞けばＣ．Ｃ．さんが呼び出したらしい。私たちの戦力増強として。

「俺はアサシン。そう呼んでくれ。真名は言えないんだ。で、彼女は」
「私はバーサーカーね。同じく真名は内緒」

自己紹介が終わる。どうやら向こうは私たちを知ってるようだったので私たちの自己紹介は抜いた。
明らかに内蔵魔力が違う。名前からしてサーヴァント。クラス名なのは恐らくセイバーさんたちと同じなんだろう。
しかしこれがサーヴァントなのか。近くにいるだけで気圧されるような感覚はなんだか怖い。
私が恐怖を感じるのは師匠と志貴兄さん、ミラージュ君以外には初めてかもしれない。

「で、力は貸すけど俺たちは俺たちで独自に動きたい。恐らく、あっちの志貴にはきついかもしれないからな」
「・・・・・？」

あっちの？って志貴兄さんの事も知ってるんだ。

「さっきまで一緒にいたのを見てるからね。俺は中に入ろうか。バーサーカーはどうする？」
「私は彼女たちと行くわ。そのほうがよさそう」
「じゃぁ決まりだな」

そういって自己完結した感じにアサシンさんが消えた。いや、気配が消えただけなのに視界から完全に消えたのだ。
これがアサシンのクラス・・・。

「あっちはあっちで楽しむだろうから私たちは私たちでやろうか。で、どうするの？」

残ったバーサーカーさんにこれからの事を話す。外部破壊を伝えるとにんまりと笑って見せた。

「面白い展開ね。だってそうでしょう?私のクラスは狂戦士。暴れるのがメインなの。それでいてやる事が破壊なんてね」

バーサーカーさんは楽しそうだ。破壊衝動のままに動くらしい。

「そういえば。貴方たちも英霊化したらバーサーカーの素質ありよね」

・・・・・・・・・・物騒なことも言われました。

志貴Ｓｉｄｅ

内部に侵入した俺たちはわんさかと出てくる武装隊を相手にしていた。
どうやら地上本部というとおりに空を飛ぶやつらはいないようだ。
それは少し安心した。
ザフィーラが言うには地上には地上の、空には空の誇りがあるから交わる事は無いらしい。
なのでほぼ接近戦だ。まぁ、たまに砲撃が飛んでくるがそれでもザフィーラの盾の魔法で防御充分だった。

「雑兵相手じゃどうにもテンションが載らない」
「そういってる場合でもなさそうだがな」

ザフィーラが通路の奥を指すとまだ武装隊の群れが向かってきてるのが見える。
やれやれ。アレを相手にしていくのは中々面倒だな。

「なんとかならないか？」
「なんとかしよう」

お。意外と通じるじゃないか。ザフィーラが一歩前に出ると右腕を後ろに弓なりに引いた。
体をしならせて五指を広げて構える。闘気が揺らめく。此処まで凄まじい闘気を実際に目にするのは初めてだ。
目に見えない筈の闘気を思念化するほどの闘気だ。恐らく魔力も篭ってるか。

「後ろにいてくれ。抜けてきたやつを頼む」
「了解だ」

恐らくそんな奴はいるかどうかわからないけど。まぁ徒手空拳でどこまでの力なのか見るのもいい。

「魔法使い相手に徒手空拳がどこまでやれるのか、見せてもらおう」
「あんまりいいデータは取れないぞ？」

そういいつつもザフィーラは五指に真空の束を集める。風系の魔法か？

「真空をまとい、一直線に放つ。それだけだ。単純ながらもその威力は絶大。空を駆ける牙は全てを斬る」

ザフィーラの言葉の後に彼の右腕は振られた。空気の壁を圧し抜けて真空の牙が通路を切り刻んで突き進む。

一言。この技は恐ろしい。これが魔法なのか。いや、俺たちでいう魔術のような魔力は感じ取れなかった。

系列が違うから違う魔力という理由で判別出来ないからなのか。兎に角今の技に魔力を感じ取れない。

牙で傷つけられた通路はズタボロで見る影も無い。

「こんなところか。密閉空間だから威力はかなり落ちたが」

「あれで威力が落ちてるのか」

この状況を見ると雑兵が抜けてくるかもと言う考えはなくなった。

コレを抜けてくるのがいればソレはきっと化け物だ。

きっとそいつは・・・・・・俺たちと同じ、存在だ。

ゾクリ、と腕に寒気を感じて鳥肌が立つ。まだ爆煙の立ち上がる通路の「向こう側」に、何かがいる。

それはザフィーラも理解したようだ。視線は奥を見たまま離せないでいる。

「ザフィーラ・・・・」

「どうやら、あたりか。いや、はずれかもしれない。あれは俺にはどう使用も出来ない存在なんだが・・・出来るか？」

「さっきと逆だな。それでアンタは示してくれたんだから今度は俺が示す番、だろ？」

ザフィーラの前に立つ。それだけで殺気が体に突き刺さる。それだけで何度死んだだろうか。
そんなイメージが頭に直接入り込んでくる。こいつは危険だ。
だが、面白い。こういう生死を賭けた闘いってのは久しぶりだ。
死徒を相手にしているのと同じようなものだ。きっと先輩もこんな中で戦っていたんだろうな。

「出てこいよ。それとも恥かしがりやか？」
「　　」
無言のままに気配の存在が近づいてくるのがわかる。
爆煙が消えてくると奥のほうが見える。派手に破壊された通路の奥、歩いてくる一人の男。
希薄な気配の男は二本の短刀を持って其処に立っていた。

「名乗る程の存在でなさそうだな。まぁ名前なんかどうでもいいか」
「そうだな。どうせ此処で死ぬんだから」
「そういう声かよ」

初めて聞いた男の声に背筋に悪寒が走った。こいつは俺以上に暗殺者だ。

「妹がこっちに残ったんでね。総隊長とは袂を分かつことになったよ」
「その、ようだな・・・・」

ザフィーラが緊張している。あれだけの攻撃力を持っている彼でも其処までか。
多大な攻撃力を持っていてもあたらなければ意味が無い。そういう相手。

「いいぜ。だったら俺が相手だ暗殺者。悪いが俺も――――――暗殺には長けている」

「二十七死徒が一人、遠野志貴」

「イルジオンリッター・レグルス隊副隊長、高町恭也」

互いに俺たちは無意識に名乗り、飛び出した

1965

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0436o/

魔法少女リリカルなのは外典　- 幻影の進む路 -

2012年1月10日20時16分発行